

PL Shin gunsho ruiju
755
 .35
S5
v.1

East Asia

V.7 40 *copy*

新群書類從

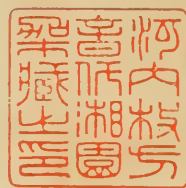
SHIN GUNSHO RUIJU

圖書刊行會

HOKUSHO KANKO-KAI

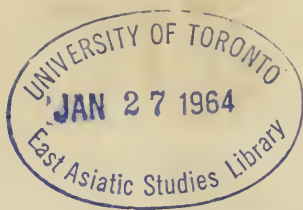
K.B.S. vol 1
p. 89.



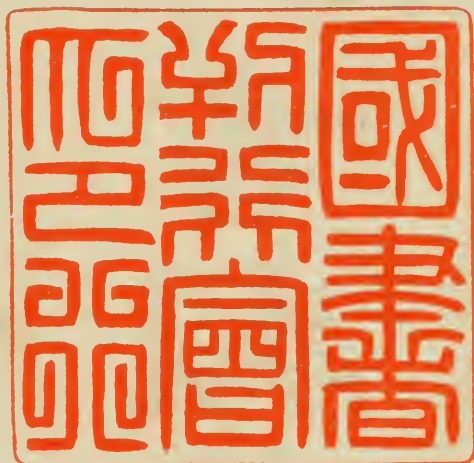


新
群
書
類
從

第一



PL
755
-35
S5
v. 1



新群書類從

例言

一本編採録するところの書は、すべて徳川氏の世の撰著編述にか
かるもの、ならびに徳川氏の世の文藝風俗に緊密の關係ある其
前後の撰著編述にかゝり、未だ世に刊行せざるもの、若くは漸く
湮滅せんとするものを收めたり。これ新群書類從の特色として、
本會の尤も苦心したるところなり。

一古書を新刊する、増訂校正して之を公にするを利益ありとすべ
きものあり。また舊に依りて改めず、純ら古色を存して、影本に等
しきものを刊行するを趣味ありとすべきものあり。本編採録す
るところの書、或は大に新訂し、或は殆ど覆刻して、必ずしも畫一
ならずと雖も、要するに皆觀者をして不利益無趣味の歎を發せ

ざらしむるを期す。其新訂を歴たると、舊様に依れるとは、一々其書の卷端に就て之を知るべし。

一本編凡て十二冊を以て成る。本會は其第一冊より第六冊迄を水谷不倒氏に、第七冊より第十二冊迄を幸田露伴氏に託して各嚴密精細なる原稿の編纂校訂を経たり、されば其原稿の蒐集に於ても、其編輯の方針に於ても終始兩氏の親切叮嚀なる周旋教導を煩したる事少からず、爰に之を附記して本會の兩氏に對する謝意を表す。

明治三十九年四月

國書刊行會 識

緒言

我が邦の叢書、塙氏の群書類従を以て其の魁とす。而して塙氏の期するところ、古を存し舊を徵するにあるを以て、其の收むるところの書、故を採り新を摺く、續群書類従に至つては、料理物語尤の草紙等の近古の書を收むと雖も、猶連歌を收めて俳諧を收めず、管絃を收めて演劇を收めず、其の採録の遠きに厚くして近きに薄きや知る可きなり。燕石十種出づるに及びて、始めて専ら近古俚俗の書を集む。採録多からずと雖も、然も後の學者其の惠を荷ふこと少からず。蓋し徳川氏府を江戸に開きし以來、世運祥寧民庶和樂、足利氏末造大亂の後を受けたるの故を以て天地一新し、文藝もまた朝紳桑門の手を脱して、市民野人の手に移り、嶄然として面目を前代に異にし、煥乎として文華を一時に發す。今よりして之を論ずれば、徳川氏の世の文藝は、寧ろ前代に比して、其の重んずべきを見て、輕んず

べきを見ず、卑近を以て之を鄙むが如きは、實に學者古を尙び近きを侮るの弊のみ。新群書類従は主として徳川氏の世の書冊の、或は傳ふること稀にして覲ること罕なるもの、或は未だ刊せずして泯ぶに垂たるもの、或は叢脞斷片漸く將に塵散灰滅せんとするものを集め刊して、之を今に頒ち後に貽らんとす。これ強ひて近きに厚くし遠きに薄くするに似たりと謂ふべし。然りと雖も新といひ、古といふ、齊しく皆假稱なり。今にして徳川氏の前後を論ずるや、おのづから新の名あり古の名あり、今より後にして徳川氏の前後を論ずるや、今の所謂古はもとより古にして、今の所謂新もまた同じく古ならずんばあらじ。然らば則ち古も猶新の如く、新も猶古の如きなり。新群書類従を編する所以の意は、即ち是塙氏が群書類従を編する所以の意ならんのみ。

明治丙午初夏

幸田露伴識

例言

一本卷及び次卷に收むる所の西澤叢書は歌舞妓淨瑠璃の故實を知るには、他に多く類例を見ず、劇道の寶典と稱せられし書なれども、傳本極めて稀にして、容易に手に入るゝことを得ず、たまにこれあるも、『傳奇作書』『皇都午睡』中の一二編に止り、全本を所有する人殆どなく、中には書目のみを知れど、傳本の有無さへ確むる能はざるものありて、頗る遺憾としたるところなるが、大阪市に於ては、去る三十四年より、市史編纂に著手し、文學士幸田成友氏主任となりて、専ら史料蒐集中、同所の發達には殊に關係深き本書の散佚を惜み、各藏書家に就て其の在本を尋ね、多年苦心の結果、『傳奇作書』の初編より六編まで十八卷、『脚色餘錄』『皇都午睡』の全部合せて十八卷、『讚佛乘』の全部六卷、通計四十二卷を同編纂係に藏することを得、こゝに久しく散亂したる西澤文

庫の主要部は、同所に蒐集せらるゝの運に際會したり。今其の原本と藏書家諸氏の姓名とを舉ぐれば左の如し。

傳奇作書初編

言狂作書

三卷

東京饗庭篁村氏及び大阪

鹿田靜七氏異本二種

同

拾遺

三卷

大阪小栗仁平氏

同

殘編

三卷

同 殿村平右衛門氏

同

續編

三卷

同 平瀨龜之輔氏

同

附錄

三卷

饗庭篁村氏

同

後集

三卷

皇都午睡

全

九卷

脚色餘錄

全

九卷

平瀨龜之輔氏

讚佛乘

全

六卷

以上の如く、東西五氏の文庫を漁り、漸く此の書の完備に近づきたるを見ても、いかに西澤文庫の稀本なるかを知るに足らん。唯『傳奇作書』追加の一編のみ未だ發見せられず、然れども西澤文庫中、類纂にかゝる書を除き、劇道の六韜三略と稱せられたる隨筆の殆ど全部が網羅されたるは、誠に慶ぶべし。刊行會に於ては、去歲大阪市及び同市史編纂係の承諾を得、且各原本所有諸氏の承諾をも經て、其の全部を謄寫せしめ、今回これを刊行するに至りたり。

一本書の著者西澤氏は、書肆より出て狂言作者となりたる人なれば、文才はあれども深く學問の素養あるにあらず。殊に狂言作者の常として、理に反したる事あれば狂言綺語と遁れ、外題等を定むるには濫りに新字を作り、登場人名には假名を用ゆる等、殆ど習慣となり、正史傳記の區別立ず、破格、無文法、誤字、當字、假名違ひ、

てにはの誤り等若し文章の上の瑕疵を數ふれば枚舉に遑あらず、又地方訛りあり、樂屋通言あり、普通の讀者には頗る難解の箇所も少からず、殊に傳へくゝて誤寫を生じ、義理の通ぜざる所もなきにあらず。原本には幸田氏が一々附箋して疑を存し訂正に便せられたるを、校訂者は更に考查し、其の全く誤謬の判明したるものはこれを訂正し、未だ決せざるものは、なほ疑を存し、義理明快ならざる所には傍らに「本ノマ、」と斷り、缺字には□を以て補へり。されど原文の保存を主とし、當字、假名違ひの稍不穩當なるも、讀下に差支なき限り敢て改訂を施さず。

一 本書のうち『傳奇作書』の初編(言狂作書)のみは、編纂係の藏本に據らず、直ちに鹿田氏の藏本を謄寫し、これを原本として、更に饗庭氏の藏本に據りて校訂を了したり。然るに此の二書異同甚しく、雙方に増減あり、長きは十數行に亘れる脱文あり、到底傳寫の

誤りと見做すべからざるものあり。蓋し『言狂作書』は西澤文庫中最も世に流布したるものなれば、人々により増補省略を敢てし、こゝに至りたるものか頗る疑はし。若し一々是等二書の相違を記入する時は、毎頁挿註を以て埋めらるゝの奇觀を呈すべし。依て二書の意義には何等障りなく、文の長短、詞形のみに相違あるもの、又傳寫の誤りと思はるゝものは、其宜しきに從ひ訂正を加へ、義理全く反するもの、若しくは事實の原本に缺けたるものは、饗庭氏の藏本に據りてこれを補ひ、異本として本文中に挿入せり。

一 本書原本には諸所に挿繪あり。其の繪は概ね板行にありしものを、著者が素人筆に寫しゝもの、傳寫毎に少しづゝ誤りを生じ、後には殆ど原形を失ひしもあり。唯形を示すのみのものは差支なきも、原本の繪を見せしめんとするには用に立たざるあり。又殆

ど無意味なる挿繪もあり。是等は已む事を得ず省くことしたり。例へば『傳奇作書』中にある作者の畫像の如き、肖像にもあらず、原圖あるにもあらず、殆ど意義をなさざるものゝ如き、雨夜の三盃機嫌の役者繪の如き、原圖を寫すにあらざれば趣味なきもの等なり。

一本書には又所々に重複の事實あり。例へば「謠曲作者目錄」の如き『傳奇作書』附錄にもあれば『讃佛乘』の初編にもあり。寶曆漂流談の如き亦然り。是等は其の一を存して他は削れり。但し同じき事實にても、其の間多少異なる消息を傳ふるものは、重複を厭はず存し置けり。又本書はもと筐中の秘書たりし性質上、時としては猥褻に亘るものなきにあらず、例へば『傳奇作書』拾遺中「奈河龜助が戲編」の如き、『皇都午睡』初編中「好色合戦」の如き、『讃佛乘』二編中「新道成寺縁起」の如きは刊行上遠慮すべき性質のものな

れば、割愛して態と省きたるもあり。

一本書原本には大概巻頭に目次、毎章には標題を設けたれども、中には目次あれど、標題を設けざるあり。標題あれども目次のなきあり。是等は體裁上及び索引上、一定の目次標題を附することゝしたり。又著者の署名の所或は編といひ著といふ、上の巻「卷之上」など區々なるは、何れも體裁上一定の方針を取れり

一本書の刊行に就ては、幸田成友氏、大阪市及各原本所有諸氏の間に立ちて、斡旋の勞を取られたり。又饗庭篁村氏、鹿田靜七氏は、其の藏本を貸與せられたり。其の他大阪市、原本所有諸氏の好意に對し、感謝の意を表す。猶ほ本書は前述の如く通言、地方訛り又本書の特質ともいふべき破格の文體を保存する上に、寧ろ深き注意を要したれば、特に其の校正を森岡格雄氏に委托し、大過なきを得たりこゝに一言氏の本書刊行に盡されたる勞を謝す。

明治三十九年四月

水谷不倒識

新群書類從第一目次

演 劇 (一)

西澤一鳳小傳

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)の序

上の巻序

○井原西鶴の傳○西澤一鳳の傳○八文字屋自笑の傳○近松平安堂の傳○江島屋其蟻の傳○竹田出雲掾の傳○作者となる近道の事○狂言趣向の種といふ事○淨瑠璃歌舞伎へ移る事○小説稗史を真といふ事○淨瑠璃の作を行といふ事○歌舞伎の作を草といふ事○狂言四番續といふ事○世界定外題文字の事○三都狂言の異なる事

中の巻序

中の巻

○作者八景の狂詠○奈河龜助が傳○奈河七五三助が傳○太夫役者行儀崩れし話○新淨瑠璃本讀の話○奈河篇助が傳○奈河晴助が傳○芝屋芝夏が傳○龜屋南北が傳○寂光門松後萬歳○並木の祖宗助が傳○並木正三が傳○並木五瓶が傳○附淺草堂より文通の笑話○作をせし役者の傳○金澤龍玉梅玉が話

下の巻

○近松半二が傳○獨断叙○近松徳曳が傳○崇禎寺馬場敵討の實話○上田秋成中村大吉が話○櫻田治助が傳○金井三笑本讀の話○瀬川女皇の話○福森久助が傳○辰岡萬作が傳○歌舞伎古作者の話○小幕滑稽書

様の論○西澤一鳳軒が傳○狂歌浪華土産月名殘○月並本讀會引條○閑樂のつらね

言狂作書跋

七〇

西澤傳奇作書拾遺叙

七一

上の卷

七二

○俳優者七部の書の事○昔狂言浪人盃の筋書○同氏神詣の筋書○北の新地五人切の實説○宵庚申桂川情死の話○南北が遺稿極樂の連○江戸作者三升屋二三治が咄○同自墮落の連の寫○東都戲場名題付方の法○同役者年曆珍重記○同三梨園樂屋雜書○木村園次村岡幸治が話○戲作者著編拘欄話の論○聲曲類纂の作者名寄

中の卷

一〇〇

○繁昌記戲臺之辭○銅脈先醒婢女行○同觀戲場○同戲場書事○俳優見立評判の説○梨園による俳諧發句○白猿が長夜の書溜○戲場好者家の發句○俳優金毘羅權○小春紙治情死の話○附近松平安堂作文論○近松半二が獨判斷の寫○同後段の話○西澤一鳳一代不性○奈河龜助の戲編

下の卷

一二〇

○賴政扇子芝院本摹寫○昔米萬石通院本摹寫○北條時賴記院本摹寫○觀道通鑑雜戀の話○三浦大助紅梅鞠の話○一谷嫩軍記須磨郡の話○同千載集流しの枝の話○娘景清八島日記の話○狂言の筋は八文舎本に有○同黄金の鷄内讀の話○佛法乘合噺の筋書○戲場番附に名前を削る辭

拾遺跋

一四四

西澤傳奇作書殘編

一四五

上の卷序

一四五

上の卷

一四六

○湖上李笠翁の詩○醒々齋稻妻表紙の話○小説を潤色せし傳奇の話○南總里見八犬傳脚色の話○けいせい篇傳授外題の話○同古今傳血達摩の話○淺草靈驗記大川が傳○淨瑠璃の作文なせし話○謡曲狂言釣狐の證考○讀院本釣狐尾花傳附同序文

中の巻序

一七一

中の巻

一七二

○芝更長話舞の話○東都合巻の外題の寫○同戲場にての外題の寫○當狂言外題見立番附○瀬川菊之吸俳名の話○淨光我童に蘭平を教し話○蘭奢待助市役の話○秋里雛島翁の話○十返舎が膝柴毛の話○御先代萩世界の話○義經腰越狀院本の話○岩井風呂人殺の實説○女郎富再び情死の實説○慶子紅桔梗女團七の話

下の巻

一九七

○歌舞妓道中圖繪○故人役者舊跡鑑○歌舞妓道中道しるべ○忍ばすにて作者咄初の話○基太平記白石噺の說○脚色に筆拍子と云話○筆拍子七草齋噺子の話○化菖蒲いろは連歌の話○同四十七段返し段書○市村家橘忠臣藏所作の事○四季寫土佐畫拙の文談○男哉婦將門勢出橋の文○富本常盤津外題角力○諸曲狂言釣狐尾花釋

殘編跋

二二六

西澤
文庫傳奇作書續編

上の巻序

二二七

上の巻

二二八

○當世芝居賢氣○竹豐故事の序○音曲狂言綺語の事○呂律五音十二調子の事○名人上手下手評判の事○太夫教訓名言の事○五段續語場役柄の事○淨瑠璃市者の事○淨瑠璃古今の序○同東西外題番附○古今いろは評林の序○古今いろは評林の發端○忠臣藏狂言の說○伊賀越復讐の說○普八丈城木屋の說○枕久物狂ひの說

中の巻

二五八

○三勝半七情死の話○簗笠雨談の齟齬○梅の由兵衛小梅の話○勢州龜山敵討の話○箱根彦山靈驗記の話○累怨靈解脫の實話○播州皿屋敷の實説○駕金組五人男の話○扇屋夕霧が略傳○八百屋お七が事跡○黒船一代男狂言の話○女達奴の小萬が事跡○盜賊日本左衛門が話○東海道茶屋娘の話○灰屋紹益吉野の話○景清重忠茶湯の話

下の巻

二八三

○狂言人名實説の話○英一蝶邊鳥の説○生島新五郎流罪の話○市川才牛横死の話○江戸三芝居替地の説
 ○芳澤春水名譽の説○能に新工夫を用ひぬ話○蒿に蕎麦事有の話○詩歌連俳を評する語○狂言繪語を評
 する語○淨瑠璃狂言穴の話○古浄瑠璃名作の話○歌舞妓狂言穴の話○古名人役者に妙有る話○同狐忠信
 思入異なる話○桑種御供狂言の話

西澤
文庫傳奇作書附録

上の巻

三一一

○唐土奇譚の寫○古浄瑠璃本の寫○諸流能舞謡名所競の寫○謡曲作者目錄の事○同内百番の部○同外百
 番の部○同習十番の部○獨吟八十五曲の部○同作者姓名附○復讐見立番附○武藝名譽一覽番附○男達見
 立角力番附○新大橋復讐新聞○同歌舞妓潤色の話○天王橋復仇の紀聞

中の巻

三二二

○元文奇説銀の筭○同續兩家落著の話○歌舞妓潤色の話○三十石戀始人名の話○極彩色娘扇の話○富士
 見月通者墳の話○淀屋辰五郎の事跡○持丸長者狂言の話○心中情死人名録○長崎丸山細見圖の話○角觥
 取狂言人名録○中興奇賊撰の話○妹背山婦女庭訓の話○花相撲蝶々紋目の話○東鑑御狩卷の話○素人藝
 島水練の話

下の巻

三六九

○雨夜三盃機嫌の寫○同跋牧童の辭の狂文○天河屋儀兵衛の實説○伊勢と日向の物語の草稿○續枚見景
 清の草稿○南北軍問答院本の話○泣男杉本佐兵衛の説○古代人名狂言の話○鹽賣長次郎の話○歌舞妓に
 名高き人名の話○響灘入船囃の笑話○彫物師左甚五郎の話○日貫後藤浮世又平の話○鍛冶正宗國俊の話
 ○高野女人堂心中の話○島原の青葉薄情の話

西澤
文庫傳奇作書後集

上の巻

三九八

○京攝戲場三番叟の圖○同脇狂言の事並に圖○東都三座脇狂言の事○中村座酒吞童子の文句○市村座七
 福神の文句○河原崎座甲子待の文句○中古江戸三座通詞の事○江戸狂言待た暫の事○當世榮花物語の序
 ○同初編六編迄の目錄○傾城繼幕湯の筋書○續新齋夜話の一話○續幕湯後駒脚色の話○豫州松山開城の

一奇話○假名手本四駒裏の正本

中の巻

○星野和佐矢敷の話○最明寺諸國行脚の話○佐野治郎左衛門入殺の話○宮城野信夫敵討の話○山崎與次兵衛吾妻の話○富士淺間復讐の話○佐々木巖流敵討の話○嵐小六忤難助へ教訓の話○三浦屋高尾最期の話○尾上岩藤草履打の話○妹背山の鴛鴦景事の話○衣裳好み上手下手の話○謡曲望月復讐の話○復讐望月譚の草稿

下の巻

○那須與市宗高の話○扇的西海硯の草稿○同後段那須野狐退治の場○中興世話早見年代記○堀田稻葉安宅丸の話○下總佐倉宗吾の話○齊藤吾櫻花日記の草稿

西澤
文庫
皇都午睡初編

上の巻

○表題の起原、枕を碎く○俗言の醜態○秀句の渡守○東都の地口○似口行燈○浪華の口合、盡口合○川柳點○冠附○折句○もちり笠○尻附跡附○枯頭續尾(山科の跡附)○雜俳の品目、札の立見○二字段々○鶴助の發句○物は附○何に附○何曾々々○考へ物○古代の謎○字謎○字謎の發句、犬の足跡○前句附○落首○戯場の落首○所俳諧○金毘羅權○畫に似たる文字○字にて畫を書く○古代の看板○畫囃○宛字讀○鈍畫○落囃○講釋○浮世物まね○玉川三吾○大人遊○幼童の遊戲○鳥指○俄茶番○拳○所作拳○童謡ふれく○小雪○十夜童謡○橋の下の菖蒲○地藏の勸化○木遣音頭○遠國の唱歌○鞠のかけ聲○手鞠唄○十二月萬歳○置錢一鉢(大靈舞)○鑄懸駱駝○おつち○胡麻摺○四谷萬阿波座稿○天王雛子天満巫子○いろは譬○井の名を異にす○寺子屋庵室○投電投扇興○茶佳否記(飯堂會)○園基將基○祭將基○宜山骨牌○佛像雙六○道中雙六○早口そり○竹田機關○大道具○輕業放下師○綱工見世物○猿狂言、馬藝、力持○座敷影畫○おどけ開帳○子守歌○順禮歌○潮來節○伊勢音頭○馬土唄○船歌船頭歌○白挽田植歌○豊後ぶし○淨瑠璃節○ちよんがれ節○娘道成寺○歌系圖○雪の唱歌○青葉の解○謡曲を唱歌にす○綾鶴○鈎簾の戸

中の巻

○萬歳の唱歌○七草薺を離す詞○女達摩の畫讀○男色影問○正五九月○松蟲鈴蟲○孫の手竹奴○金岸の發句○粹と通と程の解○曾呂利の畫讀○文七元結○懸鈎引墨○八百屋お七○妓王妓女○三井の家系○假

五〇一

面打の作名○鼓鳥帽子裝束○扇子の指方○三十六町一里○鯉鰯の地名○伏見の里の考○飄落月の客○庖丁刀○燧袋○兵庫の蕪○定家家隆○二月堂の茶筌賣○遊女町の街○飲酒の十徳夏日七快○宵拍○貫賊に逢○鷹匠○太平の腹鼓○向島の狸囃子○山科のノ貫○蝶番○陶淵明の菊○折助亡六○文資の石○水尾盡○無藝の大食○宗鑑の物數寄の竊香○金春の太鼓○宗禪の笛○小人の閑居○隱居一杓起實○狐輕者○木端の火○醫者の看板○煮染○杜鵑の蘇生○雀の隼人○木曾の猿酒○飛驒の篠魚○鳩の草莖○鴉餅○蟹に灸をすへる○鯖の鮓○熊野の大樹○北野の連歌○閑間の御遊○茶人への諷諫○六僧○飭磨の鴛鴦○謡曲の發明○太郎餘一郎○曾我兄弟六代御前○猪口太郎○慶庵肝煎○四方田四方八面○上來劔る○七里けつばい(反物龜物)○日披露○手枕の歌○燈臺元暗○板倉の明晰○富士の裾野○梓巫子○目想觀○安德帝恩○大雅堂霞樵○兜軍記○天明京大火○辻能狼籍

下の卷

五三七

○白氏文集○紹益吉野を悼○淡々の示教○輕卒者の連歌○十千十二支○金鳥玉兔○定頼の和歌○和泉式部○大佛餅屋○江島屋其磧○市中は中を行○道路は左を行○毛拔鮓○一噌の笛○赤良の狂歌○藤公の笑疾○百翁の茶會○富士と達摩の詣○長生殿の繪○月見の松○鰻鮓豆腐○李白仲磨を悼○支考の俳言○年中の雨○蕉雨の發句○行脚に句を貰ふ○無名の短策○光次○内科外科○基俊歌を盜まる○よしにせよ○商人の學問立○短文の書狀○國姓爺弟○自鳴鐘○大男小男○兼良の元服○夜詰の太鼓○不出門行の詩○義孝の連歌○鹹塚三所に有○徂徠の戲言○磯の浪○下谷の爭論○狐川の名義○潘行橋姫の考○そこにべ殿○名月は俳諧の題○辻能の道成寺○泊船寺住持○古今傳授○大佛の御首○七瀬川の秀句○蘆邊殿の婢女○故人の句を詠○青砥の積松○山伏の徳政○三船の才○難波次郎○重衡盛長○岡兩の歌○六徳牒記○内舍人老黨○歲風の子○馬の詠たる歌○かんにんの四字○桑平内兵衛○馬術に雅なし○羯摩樂親の面○雅人の傑○南方鏡○竹田近江○春日野の蟲○鶯白魚○頼政の亡魂○於菊蟲○鹿の時立○猿蟹を驚ふ○置鼓○水引○鳥貝○放鳥の試み○はなじろ○和歌に師なし○南面の障子○差合くり○二萬堂西鶴○三句の渡り○記録表紙○誤鬼つばた○兄弟の争ひ○佛は佛師○運慶の口落○鷗鷯の文○長範の詠○日本に象を涉○清人發句を譯○師直の歌を譯○兼好を評す○勢語源語の評○解脫上人○西行の歌○幽齋の狂歌○信西豆○普賢像○楊貴妃櫻○利休織部の詫

西澤
文庫
皇都午睡二編

上の卷

五六七

五六九

中の卷

○心太○安らひ花よ○盆踊○かん／＼踊○造り物○瀬戸物細工○煙草入○繪馬の繪○神佛の興廢○出開帳○空鐵炮○葛城の奇談○石川の洪水○復讐の次第○泉岳寺○魁の筭○皿の争ひ○通人の子○八坂の塔○饒の野○岨の夢○蜃氣樓○檢校○古き俄○國姓爺○清姫○新町橋○雪の五輪○鼻黒○砂もち○若江の碑○御影参り○韓信を題せる歌○倉治の瀧○戯場の和歌○高野の玉川○猴に似た顔○朱實臣○狐戯るゝの詩○經聲人を感じしむ○箔の小袖○妓家の星合○平語小曲○琵琶に落涙○雪中庵五世○來山が門松○句の新しきみ○釣狐の意見○淀川の抱鯉○馬の錢○經信の和歌○高麗王の惡癖○白龍網にかゝる○具喰の具足○匡房が強詔○雙魚扁鵲の文○孕句○懷劍の發句○流行語に卑し○猫の飼やう○永井の肩衝○永井正宗○音曲の譽詞○古き文に有味○領巾振山○應舉の畫○臥猪の眞寫○一蝶魚を驚く○鸚鵡籠を放る○遊女黃鳥を放す○臨寫摹寫○天龍川○行素夢常清○煙管筒の銘

下の卷

○茶白山○飛梅○雪花の争ひ○似雪開書○香盆○阿闍寺○平家を評す○熊野の謠曲○去來の反言○釋智藏○望月曇暗あり○絶景に句無○秋田の詠○けふの櫻○香阿彌の蒔繪○夜磨を見る○かまへ太刀○室の名所○室の八島○繪島の石○菜種の御供○花扇○急流の心得○粟田祭○住吉の奇瑞○慶安の歴劫記○東海道○算用○粟津の冠者○廣江寺の鐘○頓痛の占ひ○漂流の話○無人島○二島物語○影の膳○初午の句合○俳諧に學問いらす○西施が簪○鷹狩の始○小納言○天王寺の額○一河の流○燕子花を夏に定○初中後の子の日○反魂香○扇を鳴らす○十寸穗の薄○仁義を買ふ○空公行狀の碑○湛空の和歌○泥中に足を曳く龜○水車○常在法師○兎波上を走る○鵝は墨を賣す○流水を枕にす○門に鳳の字を書○老の接木○肘笠袖笠○草庵集○藹空言○千代能が歌○釋迦の法孫○味噌臭し○母子の訴へ○連歌の一直○如是院の米○月津川の湯○座頭の茶挽○三輪の山もと○藍染川○煙草一錢○金の臺子○妻敵討○聖人賢人○儒士の孝行○龜田窮樂

○奢侈の咎○木賊菊○薪の能○堀池權兵衛○狐瓜を喰ふ○逆木柱○佐川田昌俊(苔の清水、筑間榮)○一枚起請○念佛無間○名人と功者○故人の句に似○松柏の節を顯す○其雄の放蕩○渡邊庄太夫○赤極順從錄○芝泉雜記○介石記の一話○復讐の落目○追悼の詩○昭君の額○義士富の扇○甚打の言○渡邊綱の讀○九念面壁○筆道の論○宰予晝寢○妓女勝負山○守武眞筆の極○香の物○比叡の山ぶみ○小野の於通○座禪に妄想○鹿笛○松茸山○丸山權大左衛門○此木戸の錠○大廻し三段切○松の雪○了然禪尼○乞食女の歌○蛙の聲を止む○しゃの／＼衣○木村重成○池上意三○金毘羅の神馬○應聲蟲○金蘭齋○四つ子を産

西澤
文庫
皇都午睡三編

上の巻

六六五

六六七

○異形の觀場○十一屋の妻○梅心の辭世○非人の詠歌○五字の題目○整題横題○熊澤の和歌○曾品利の狂歌○滑稽頓作○信綱三仁政○井上の誤語(玉の簪)○角瓶の句○世を覆ふ句○我に飽○俳席の心得○句より心を聞け○尊氏の和歌○鎌倉の初鯉○明慧上人○泰時の無欲○畠山重忠○藤房通世○正成韓信を評す

○冬籠○鐘撞の階子○名聞は罪深し○賊の母歌を詠む○大野氏の女○嵯峨の山住○源語の發明○嵯峨の奥○神道の受○橋の下○欲は身の毒○鼠大根○作冤地を失ふ○下手のなき世○火替の神事○天下の俳諧○武運の稽古○宇治丸○羊肝牛干○氣違法齋○氏神正一位○七子の彫物○淺葱煎葱○ひやかし逃助○辨慶太鼓持○角兵衛獅子○悴銀鬼○戎紙神在餅○看板の謎○代神樂○月待日待待○孟の銘○瓦井○七蕨八平氏八庄司○愛子の庄司○我國のか紙附○雷除桑原○めりやす莫大小○鐵火味噌○自墮落者○蓮葉女○鶴の目鷹の目○桃鬼灯○蝸牛○箱入娘○蚊の喰め呪ひ○轍轆蜻蛉返し○道具と牛○惣嫁の出入○小倉色紙○友衛貝盡○有樂翁の茶○秀吉門破○泣涕微笑○箱中村○石川丈山○時平公の墳○位牌の和歌○鯉の差身○穢多の訴○孤草履を送る○弓に蜻蛉を附る○九郎佛○恵心の佛像○道明法師○元政魚料理○火の見矢倉○宗祇の發句○幽霊の濡文○疫病神馬に乗○淀屋辰五郎○村井軍兵衛○國造の烏帽子○日本左衛門○鷹の尾筒

中の巻

六九七

○北山壽庵○要樞に蝕す○變名○鶴の考○江口泊○陣兵羽織○南畝の辭世○牛の懸物○饅頭の名○正通の詩○往古の七種○漏刻の博士○貝原の書籍○大守三介○武林の八介○月烟雲客○法性寺の執行○瀧口帶刀○對句頓語○長谷雄の句○善光寺の號○歌の病○山家の秋月○鋸曳○蠅蠅○東の家土產○婦女の強氣○俠者は昔の事○名物に濃味無○婦人の情○八瀬や小原女○言葉の變○古着市○屋號不呼○金相場の權代節句錢○地面持○土藏造○左官仕事○橋敷少し○每日法會○昔の人数○京の人別○茶店中宿○引越蕎麥○三都の商人○河岸の船宿○辻駕籠○四季の賣物○錢湯○厠便所○雜具の名○食物の異名○諸品の變名

下の巻

七二八

○流行言葉○婦人の髪○戲場の方言○貨食店の名○京櫛の古遊所○深川の古遊所○吉原遊び○品川宿○内藤新宿○板橋千住○廻し床○通と野暮○持る持めの論○遊所の惣評○訛の惣評

終

西澤一鳳小傳

水谷不倒撰

西澤一鳳は浪華の書肆にして、通稱を正本屋利助といふ。狂言綺語堂。李叟は其の別號なり。俳名は秋聲庵蒼々、後に滄々と改む。享和二年、大阪に生る。

元祿より享保の間、浮世草子淨瑠璃の作者にして、兼ねて其の版元たる西澤一風こと正本屋九左衛門は、實に一鳳が曾祖父なり。一風の父は太兵衛と稱し、大阪上久寶寺町三丁目に住へり。然れども其の家業等詳ならず。西澤の家名の聞えしは一風の代にあり。一風寛文五年に生れ、京阪文學の全盛を極めたる時に際し、其の思想に養はれ、文才おのづから煥發し、西鶴を祖述しては浮世草子を著し、近松を學びては淨瑠璃を作し、これを刊行し、これを拘欄にかけて、文

名一時に盛なりき。

寶永は西鶴の影響を受け、好色本の最も流行したる時なり。其の著者一二にして足らずといへども、就中自笑一風の名高し。而して自笑は自らこれを作せしにあらず、其磧をして代作せしめ、自笑自ら名を署して己れが書店より刊行したり。これ所謂八文字屋ものにして、浮世草子、正本筋書、評判記等其の類少なからず。一風はさながら自笑の如し、自ら著作をなし、これを其の店より刊行せり。正本屋九左衛門は大阪の八文字屋八左衛門なりき。一風が都の錦の落魄を助けて、其の文名を成さしめたる如き、或は新作を招致して盛に出版したるが如き、當時八文字屋等同業者に對する競争の態度として、經營苦心の跡を見るべきなり。一風は文才に於て、世才に於て兩ながら兼備へたり。中興の祖といふべし。

一風享保十五年に歿し、其の子に利兵衛、其の孫に利右衛門ありて

其の家業を繼げり。一風の代、家を心齋橋南四丁目西側に移し、利兵衛に至り更に内本町二丁目に移轉せり。利右衛門また祖父に似て文才あり。俳名を一鳳と呼び、狂歌堂眞顔等と交りぬ。當時(明和安永頃)淨瑠璃漸く廢れ歌舞妓ひとり繁昌し、淨瑠璃には新作も稀にして歌舞妓には新脚本續出しぬ。狂言作者には奈河龜助、並木五瓶、近松徳三、辰岡万作等の秀才あり。利右衛門は是等の人々と交り、且時勢の推移に鑑み、歌舞妓書類を集め、これを貸與して劇道の發達を助けしかば、作者俳優間に尊敬せられ、新作狂言の内讀本讀には、座頭と席を並べてこれを聞き、狂言の筋立に容喙し、これを取捨し添削するの株となれり。

利右衛門は又當時の習慣として、狂言の筋書即ち臺帳は、作者俳優等芝居關係者の外は見るを得ざりしを遺憾とし、これを寫本に仕立、樂屋通言例へば一(てんがき)ト(とがき)等一々註解を加へ、貸本と

なし、素人の數寄者に讀ましめたり。これ京阪に於て狂言筋書を貸本にしたる嚙矢とぞ。爾來筋書の愛讀者を増加し、遂にはこれを刊行するものさへ出で來にけり。今普通根本と稱して、曉鐘成等の編輯せる拙き似顔繪入の版本あり。其の數二三十種に下らず。其のうち江戸狂言は僅に南北もの一二種に過ぎざれど、大阪の脚本は並木正三の作をはじめ、當時の名狂言は大概収められざるはなし。

利右衛門に男子二人あり。長を利兵衛といひ、俳名鳳堂、西澤の家を繼げり。次を利助といふ。これ西澤文庫の著者一鳳なり。父といひ曾祖父といひ、浪華文藝に貢獻少なからざる家に成長し、利助は遺傳と感化とによりて、幼き時より芝居を好み、歌舞妓書に眼を曝し、早く既に劇道の故實に精通したり。

然るに父利右衛門は、文化九年に世を去りしかば、家督は兄の利兵衛これを繼ぎぬ。利助は父が一鳳の名を襲ぎて、西澤一鳳軒と號し、

自らは堺筋清水町に居を卜し、正本屋と貸本業を営み、傍ら狂言の筋立をなし、これを舞臺にかけしむるを無二の樂としけり。然れども一鳳は名利の爲めにするものにあらず、全く物數寄によるものなれば、自然と劇界に重きを致し、最初は決して自家の名を出さず、りしも、後には本道に入るの已を得ざるに至り、スケの名義にて名を番附面に掲げしことも屢あり。

當時浪華俳優には梅玉最も勢力あり。自ら金澤龍玉と名乗りて作者を兼ねし程なれば、狂言作者を視ることさながら奴僕の如く、殆ど彼れと衝突せざるものなかりしが、一鳳に對しては逋の梅玉も敬意を拂ひ、殊に晩年は一鳳が意見を好く容れたりといふ。七代目は、天保の改革に、驕奢の故を以て江戸を追放せられ、爾後數年間浪華に流寓せしこと人の知るところなるが、一鳳また屢、彼れの爲めに筆を執りしことあり。

天保十二年の春一鳳は江戸に遊び、市村座に客たり。同年十月同座の焼失せしかば、暫時河原崎座に寄寓せしが、間もなく歸阪して『言狂作書』三卷を著はしぬ。弘化四年市村座の聘に應じ、再び江戸に下り、同座の帳元澤田なるもの、隣家に居をトし、三年が間東都の客となれり。

是より先、兄鳳堂天保十一年に死去し、正本屋の業は殆ど一鳳の手に歸しぬ。然れども一鳳は此の頃漸く劇作に忙しく、また屢、諸方に漫遊し、家事を見るの暇なければ、義弟に本屋利助の家名を譲り自ら祖父が芳名を慕ふの餘り、西澤九左衛門と改め、且退隱の志切なりしかば、

臍の緒を落して四十九左衛門

是より先きは生きたゞけ徳

との狂詠あり。同年冬東都を辭して浪華に歸り、爾來劇作をなさず、

専ら著述に従事せり。今左に挙げたる著書は、多く此の間に成りしものにして、『皇都午睡』の如きは、江戸客舎中の漫筆なりといふ。

一 傳奇作書

七編

二十一卷

一 皇都午睡

三編

九卷

一 脚色餘錄

三編

九卷

一 綺語文草

四編

十二卷

一 讚佛乘

二編

六卷

一 徒然文題

三卷

一 内外謡曲句集

三卷

一 勢語句抄

三卷

一 綺語堂發句集

一卷

一 忠臣藏類聚大成

四十八卷

一 源平類聚大成

十八卷

一當世榮花物語

十八卷

以上は一鳳の著書中に散見する書目を舉げたるものにして、其の冊數百五十一卷の多きに及べり。然れども『忠臣藏類聚大成』以下はいづれも淨瑠璃及び狂言の筋書等を集めたるものにして著述といふべからず。『徒然文題』以下四種の書は俳句集なり。されば一鳳が生涯の事業として、殊に其の心を籠めたる歌舞妓、淨瑠璃に關する隨筆は、『傳奇作書』『脚色餘錄』の全部と『皇都午睡』『綺語文草』『讚佛乘』の一部分なり。其の著書を繙けば、著者は紙上に躍如として、さながら其の人に接するの思ひあり。悉く自家の經驗の筆録にして或意味にて、其の著書は一鳳の自傳といふを得べし。著書中に現はれたる一鳳は、少しも飾り氣なく、能く諧謔を弄し、時としては人を罵倒することあり。然れども又毫も邪氣なくまことに親むべし。自らは長く劇界に携はりしも、金の爲めにもあらねば、名の爲めに

もあらず、全く好事に盡せしことは一鳳自ら誇るところなり。曾祖父一鳳、豐竹座の作者として、爾來同座の正本を刊行せしかば、一鳳は素より東蟲負にして、一鳳を近松に比し、『北條時賴記』を『國姓爺合戰』に比し、賞揚至らざるなし。此の自負心は、やがて一鳳を作りしなり。一鳳當時俳優跋扈して、作者道の地に墜ちたるを慨し、奈河龜助の見識を説き、金井三笑の威力を賞揚するなど、狂言作者の爲めに、萬丈の氣を吐くものといふべし。當時の狂言作者は素より一鳳の眼中にあらず。其の李叟と稱したるは、幼名を利藏と呼びしに因れりと辯解しあれども、一鳳は恐らく我國の李笠翁を以て任じたるものなるべし。『聲曲類纂』の誤謬を指摘し、殊に馬琴が『簞笠雨談』の杜撰を論じたる精細痛快を極めたり。さすが傲頑なる馬琴、一鳳の爲めには面皮を剥れたるやの感あり。

嘉永五年十二月二日、一鳳は是等多數の著書を遺して、遂に不歸の

客となりぬ。時に享年五十一歳なり。

新群書類從第一

演劇

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)の序

夫言狂作書とは元亨釋書の地口にして戲謔の著作に
名高き先哲の小傳を擧げ此道の好人に玄めす西澤一
鳳軒が例の戲編也予幼年より梨園を好む癖有て遂に
其門に入り狂言著作郎となり三都を遊歴して戲場傳
奇の異なるを知りぬされど短き才をもて何を書べき
や多くは故人の糟粕を嘗るのみ近來或人のいはく
かに珍らしからしめんとて商賣往來の表號を轉語し
て往來商賣と唱へたらんには飛脚屋の看板となるべ
しとの譏を得脱れずと雖も狂言に不易流行の論作者
と呼るゝ早學問附ては小説稗史操淨瑠璃歌舞妓道の
著作を真草行の三つに註釋脚色とくしやくの大概を叙て梨園遊
客にあたふる事去かり斯く演は元和時代より連綿舊

書林の隱居

時天保癸卯年晩春

西澤一鳳軒李叟誌

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)上の卷

日月燈江海油風雷鼓版原天地一大戲場
堯舜且文武末走莽淨丑古今來許多脚色

大清康熙帝聯句

臺門揚西亭

世事は狂言綺語

戲場著作郎書應
西澤綺語堂先生屬

願少虎

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)上の卷

目次

- 一 井原西鶴の傳
- 一 西澤一風の傳
- 一 八文字屋自笑の傳
- 一 近松平安堂の傳
- 一 江島屋其磧の傳
- 一 竹田出雲掾の傳
- 一 作者となる近道の事
- 一 狂言趣向の種といふ事
- 一 淨瑠璃歌舞妓へ移る事
- 一 小説稗史を眞といふ事
- 一 淨瑠璃の作を行といふ事
- 一 歌舞妓の作を草といふ事
- 一 狂言四番續といふ事
- 一 世界定外題文字の事
- 一 三都狂言の異なる事

西澤
文庫 傳奇作書初編(言狂作書)上の卷

西澤綺語堂李叟著

井原西鶴の傳

井原西鶴は難波俳林松壽軒と號して俳諧師なり宗因の門人にして大坂鎗屋町に住り此人よく世情にわた
りて戲作の冊子數多を著せり其書は男色大鑑、西鶴
織留、世間胸算用、一目玉銚、日本永代藏、西鶴置土
産、西鶴彼岸櫻、西鶴名殘友此餘いくばくも有べし今
日目前に見る所を述て滑稽を盡す事は此翁より始め
り近松門左衛門も俳諧は此翁にならへり元祿六癸酉
年八月十日に歿す年五十二墳墓は大坂八町目寺町誓
願寺にあり辭世前文略

浮世の月見過しにけり末二年

西澤一風の傳

西澤一風は正本屋九左衛門とよびて大坂心齋橋南へ
四町目に住す書林板元なりしが戲作を好み淨るり本

數多を著せり其書は日本建仁寺供養、井筒屋源六戀
寒晒、賴政追善之、女蟬丸、昔米萬石通、南北軍問答、
身替弓張月、本朝檀特山、北條時賴記、此餘操年代記
等有り中にも近松が國姓爺は竹本座に名高く豊竹座
には西澤が時賴記と當りを競ひ二ヶ年が間打續たる
狂言を殘せり享保十六辛亥年五月廿四日歿せり年六
十七墳墓は大坂下寺町大蓮寺にあり法號常譽貞寂禪
定門、紀海音、田中千柳、並木宗助は一風が門人也、辭
世

ちりゆくや風に常磐の木葉雨

八文字屋自笑の傳

八文字屋自笑姓は安藤八左衛門と呼て京師麩屋町通
誓願寺下る所に住す書林也此人戲作の冊子を著す事
幾、百番八文字屋本とて今に呼べり傾城禁短氣、同曲
三味線、同友三味線、同歌三味線、同玉子酒、野傾色やけいろ并
分里艶行脚、都鳥妻戀みやまこ笛、富士風流御伽會我、浅間裾野櫻、おやし風流御伽會我、かたき
同東海硯、同東鑑、同軍配圖、猶此餘浮世親仁形氣な
ど數多あり延享四年卯冬自笑樂日記を書納めとして
以後は忤其笑孫瑞笑に作意を任せぬれば常磐木の色
かへすいや榮に御求め下されかしと序に書自像を畫

かせ南溟の大鵬寓言かと思へば終に教となる

霜枯はさもあれ龜の長齡草よはいぐさ

九十歳にちかき自笑しるすとあり(延享四卯年十一月十一日八十餘にて卒す)

近松平安堂の傳

近松門左衛門姓は杉森名は信盛平安堂巢林子と號し越後の人少して肥前唐津近松寺に遊學し後に洛に住す生涯武林を出て一度は浮屠に入り夫をも捨て淨り數百番を著す其あらまは蟬丸、浦島年代記、龜山姥、曾我五人兄弟、加古教心七墓巡、用明天皇職人鑑、傾城反魂香、碁盤太平記、相模入道千匹犬、楓符劔本地、持統天皇歌軍法、國姓爺合戰、嵯峨天皇甘露雨、天神記、日本振袖始、本朝三國志、信州川中島合戰、お半おはん衛ゑ雷庚申、平家女護島、鎗權三重帷子やりのかさねかたびら、河内通、重井筒、此餘あまた有享保九甲辰年霜月十一月廿二日歿せり法名は阿耨院穆矣日一具足居士辭世は殘れとは思ふもおろか埋火の

けぬ間仇なる朽木書して

此人の事跡は南畝莠言にくはしければ是に略しぬ

江島屋其磧の傳

江島屋其磧きせきは俗姓市郎右衛門と呼びて京師四條御旅町に住しが後六角通柳馬場の角に移り又綾小路通柳馬場西へ入所へも宅をかへたり八文字屋と同時の書林にて(俗稱江島屋市郎右衛門と呼で是も戲作の名高き人にて始自笑と心を合せ著せし戲編數百番估客老圃の願を解せしが後自笑と中違ひしてより江島屋本とて一派を立世に行れたり)(以下缺文但し次の異本に詳なり)

異本、京師四條御旅町に住す大佛餅を嚙ぎて業とし自笑が戲作の代作す自笑其磧と兩名の本行はれて利を得ること夥し其書は傾城禁短氣、風流軍配團、風流御伽色紙子、略平家都遷、此餘質氣物とて數百番を著はして估客老圃の願を解かせしが後自笑と絶交して忤に書林をさせ六角通柳馬場角に移り綾小路通り柳馬場西へ入所へ宅を轉へ江島屋本とて一流をたてたり才は自笑に増したれどもその名自笑の右にいづることあたはず豈不幸にあらずや

竹田出雲掾の傳

竹田出雲は享保の頃淨瑠璃名譽の作者にて座本を兼て受領して出雲掾と成又千前軒とも云著せし傳奇は

大塔宮あさひのみや、曦あさひ、大内裏大友真鳥まるとり、加賀國篠原合戰、男作五雁金、蘆屋道滿大内鑑、楠昔嘶、平惟茂凱陣紅葉、菅原傳授手習鑑、双蝶々ふたてふふくろは曲輪日記、源平布曳瀧、小野道風青柳硯、義經千本櫻、假名手本忠臣藏、此餘數多あり百餘年の今に廢らず院本歌舞妓に仕はやせる狂言は大約出雲が作意のもの也辭世と聞えしは「影すゝし水に彌勒の腹袋」小出雲が作も又尠からず時代新薄雪物語、軍法富士見西行、日高川入相花王、夏祭浪華鑑等也三好松洛、並木千柳、長谷川千四は千前軒が門子也

作者となる近道の事

或偏屈者近松半二に逢ひて淨るりの作者となるは如何すればなれる事ぞ又文句の内不分明の事かつ古語故實の謬を正して難問す半二が曰堂上の事實をしらば有職者となるべく弓箭の故實をしらば軍學者となるべし佛教を覺悟せば大和尚と成べく聖經記典を記臆せば直に博識の儒者となるべし菅丞相が事も楠正成が事も丸のみに似つこらしく書て聞た程の語を奥深げにつばなかし和歌管絃より萬の道何ひとつ正しく覺えたる事なく聞取法問耳學問根氣をつめて學ぶ

ことのならぬ自情落者が則作者となる也と答へしかば口をつぐみて退きしと獨判斷の跋にものせし如く歌舞妓作者も是と同じく經學國學詩文などに長じたる人は作者には成難し牛刀割鶏其學力ををたのみて下情に移らず歌舞妓の作は商家民間工匠遊里婦女子の情に通ずるを要とす然れ共小野の筥歌字盡を崇み實語教童子教を聖作也と心得たるも無下に拙なく四書五經は素讀して唐詩選徒然草を記臆せし程こそ其器に當れりとかいふべし其餘は和漢三才圖會和漢の軍談古今物語類和歌三代集國花萬葉名所類花實年浪草王代一覽内外謠曲本琴曲唱歌の本俳諧發句文集諸家隨筆物八文字屋本近來の小説稗史はなし類此外眼力の及ぶ程は懈怠なく野史雜書を見るべしさりながら是程の書は作者ならず共見るべし是を讀得るまでに淨瑠璃本歌舞妓の正本古今來の仕くみいくらありともはかり難し是をあまさず熟覽せしうへ歌舞妓芝居淨るり操り芝居を見て是何の役はかようなる衣裳かの役は此様な拵こしらへと胸に覺え置べし昔の作者には淨るり歌舞妓に残りし正本なかりしゆる古今の書籍に涉臘あさりて狂言にせしが今は舞臺にて役者の出來る様先哲達

の書のこせし正本あり是を讀ずに外の書物をよむは廻り遠しとやいはん芝居には芝居の學問せし者ならでは作者には成難し三都の淨瑠璃歌舞妓の正本を熟覽せしうへ此門にいらば建作者に隨身して筆採を勤む筆採とは書役にて連俳の執筆とおなじ先作者の前に机を直し作者の詞にしたがひ正本の草稿に筆を下す事也其作者案文の内に和漢の故事古歌のてにはなど間違へる事なく文字にあて字をかゝず道具の模様衣裳の好み囃子の取合詞書の運びトがきの差くり其場の國は何國ときはめ又は四季時候の月を定め時は何時と晝夜のわかちを聞置作者口拍子に乗り段々と詞の通りを書く内にも重複あらば前にかようなるとりふありと批判を言ひ我得心せぬ詞あらば作者にとくと問きはめ一場の草稿を書を作者道の修行と言なり又作者にも一日の趣向を立一幕の趣意をもふけ貴賤の詞をよく正し唄より唄までの一件を或は三人又は五人とおなじ人數のつかざる様に愁の次へはをかしき事花やかなる色情の跡には見所ある詰合など都て同じ意の重ならぬやう一場／＼の算用して詞付はなるだけ小短かく知れたる事は見物の眼にあ

づけくどからずして餘情を含ませる事第一の心得也尤道具立は工匠鳴物は囃子方の預かる所容と衣裳は役者の好によるものなれ共其源はみな作意より出れば輕卒に扱がたし然共餘り理屈詰にも成がたしいは菅原傳授の判官輝國に野袴ぶつさき羽織を着せ袂間合戰の五右衛門に裏付の繼上下を着せたらば見苦しからん道具にても峨々たる山谷宮殿樓閣をわづか七間の舞臺に飭る事なれば是非なし囃子鳴ものにても太功記の本能寺禪囃子は聞苦しとて太鼓拍子木をいれず題目にて幕明たらんにはお七吉三が吉祥院と思はれん是らは狂言綺語の邊道有て世に托鉢坊主が淨土の門には南無阿彌陀佛禪の家には禪語をちらつかせ眞言宗には陀羅尼のようなる事をつぶやき律僧には虫も殺さぬ顔にて付合日蓮宗にはだゝぶだゝ／＼一向宗にはあゝ／＼と計にて濟するが如し如此作者の脚色樣を覺へ詞書の付樣を習ふには筆採をつとめ修行すれば追々骨髓を知り後には作者の三枚目二枚目ともなり手輕き場は作する様になる事也それも建作者より一幕か又は一件の筋書を請取書上て筆頭の作者に批判を請用ひがたきは幾度も添削し

て舞臺にかけたる事也當時は筆探をつかふべき作者もなく又筆とりをつとめ此道の修行するもの絶てなし作者のみばへは狂言方とて道具附小道具小裂衣裳附等の書拔なんどする役也此書拔にも心得有てせりふのくい切その役者の心に成て口調の能ように書を專一とし耳馴ぬ故事などにはかな附をして遣はし稽古讀合せの折書損落字かな違ひ等なき様文字あらく書を要とす役者は皆文盲なるものと心得書ぬきの内我會得せぬ事は不審紙を張作者によく聞置事也而うして稽古の時役者は何の事と尋ねし折夫は何々の事と即答の出来る様にせねば正本のまゝ書拔文字違ひ一字二字の書謬より役者わからぬなりに覺えて仕舞ふ時には舞臺に於て見物に訥言を聞せ譏をまぬかれず若後に言替させんと思ふ共口癖に成て改る事あたはず悔共詮なし日々幾萬人の看官に對したわいもなき詞を聞す時は作者の誤り役者の龜相と成物なれば能々書ぬきの時心を付るを狂言方の修行とは言なりそれより馴るに隨ひ正本をひかへ稽古をする様に出世することなり稽古とは則俳諧の執筆を本式にするが如く本をひかへ其場々々に出る役者に心を配りい

かなる建ものゝ役者たりとも呼び流しに名を呼び詞の言違ひ等ある時は遠慮なくかよう／＼と教ふる事いはゞ寺子屋の高弟が新弟子に筆の運びを教ふる如くするなり其内役者より此間に今一口づゝ詞をふやし吳よなどあつらへある時は能々覺え置建作者へ言繼一口の詞たり共其場を書し作者の下知を受て殖す事第一なり追々修行の功を積み出這入りのせりふ作者へ言ひ入るゝ迄もなく即刻に我拵へる様になりても其詞をならべ見て作者へ斷り相談の上計ふべしきなくては作者の意に違ふ事あり此稽古と筆探をよく手練して後作者とは成べし萬藝とも地に落たるは時運のしからしむる所是非なけれ共狂言方より作者になるはかく修行の功をつまではならざる事也今時の作者狂言方と名乗るもの書拔筆探稽古ども然するもの稀なりたゞ解らぬまゝに書寫しむづかしき字は考へもなく勝手になかをふり稽古の折にも役者の見識におどされ閉口するがゆゑに一日の狂言は扱置一幕の算用立ず入我我入にてする事とはなりぬ稽古するとは何がゆゑに呼ぞや正本を前に控へたるのみにて湯屋の錢取番にもおとるべし東都にては道具方より

勤めて狂言方の預る役ならねど京攝の戲場にては影を打とも附を打共號て拍子木を狂言方に打しむる事例なり此木さへ打ば皆狂言方と思ひ作者の見ばへなりと思ふこそはかなければ梨園を好み作者道どうを學まなび傳奇でんきの一番も著さんと思ふ者は右に演る如く院本正本を熟覽して閑暇には俳諧をすべし俳諧は普く世情に涉り俗に近くて作者はや學問とは此事なり往古より戲作を好む人大約俳諧をせぬ人なし東都に榮翁さかう巢兆といへる俳諧師あり此人の著編の發句集に七代目市川團十郎幼き時下總の成田にて巢兆と同宿せし時三升巢兆に俳諧を教へ吳よと頼む其ゆゑは五代目祖父反古庵白常々のしめしにも役者は俳諧を學ぶべし諸藝に通じ俗に近くてよき學問也との義ゆへ執心なりと語りしかば暫らく滯留の中懇に物語りせしとぞ書り實に尤なる事にて假初の話にも故人の語には味ひ多し一卷の俳諧の變化は公家かと思へば乞食となり戀かと思へば無常と成り貴人の館も地生にきの小屋と變ずる所實に歌舞妓狂言は俳諧の變化の如し手など拙なからず書人能辯の人数萬卷の書に眼をさらせし人作者とならば寺子屋の高弟物書手代の放蕩者講

釋師の前座に出る人腐儒者など皆作者に成べき物なれど論高ければ俗に落す普く諸藝に涉り遊里洞房うりどうぼうにはまる粹と稱する人にて押て作者とは成がたしかかる拙なき業にも所謂五德を兼備せずんば眞の作者と呼るゝ事かたし爰に此年頃詩歌連俳あるは亂舞音曲をすこしく學び放蕩に身を持崩せし人梨園の樂房がくぐら這入に狂言の穴を探り遊里に行ては藝子ぎし幫間はなまの惡評をいふのみを是とする輩時々尋來て著作道に入りたし門葉にならん名を付吳よ杯いふ人数多あれども予決して許さず既に尾陽の俳人半掃庵也有先生は文集鶉衣など著し中興俳諧の名家なれ共生涯門人は一人も許さず斷られしよしたとへ門人となすども初心の内は師匠しせうと尊めぬれ共五七五の詞少しわかれは芭蕉の弟子其角が門葉のと言ばかり一たん師とたのみし人の批判をいふもの多かれとあり諸藝とも此境へはまるもの多し和歌をはじめ俳諧に師なしといへばましてや狂言の作に師あらん筈もなし也有叟いさが確言を思ひ出で斷りて教へすよしや師弟といはば師たる者の覺悟せし程の事悉く教へざれば詮なし其道をくはしく習ふべきの人もなし當時たうじの張良は黃石公

の沓を取上たらば其座にて一卷を譲り受すんば承知せぬ事にて孫呉が秘書も虎の巻もはした錢にて買る時節なればさもあるべし詩歌連俳にさへかくの通りいはんや薄情なる戯作者ものに於てをやゆめ／＼好んで歌舞妓作者とは成べからずされど予が作者となりしは遁れぬ由縁あり祖一風が父西澤太兵衛は天和の頃よりの書林にして其子一風は享保に歿し元文より安永迄の内に其子九左衛門利兵衛と二代を経るうち淨瑠璃大にすたりて歌舞妓新作日々に流行す爰に於て太兵衛より五代目父利兵衛俳名一風は歌舞妓を好み其比の名たる作者を集め三都の正本を悉く所藏し自ら筋書をして作者に書しめ戯場者流のみならず素人にてても讀易き様讀方の法を口に書き世に弘めしより屋號を呼て正本といふ故に院本正本數萬卷を閲し戲編を好むの癖あるを梨園者流に知られ誰かれにぞいのかされていつしか狂言著作郎とはなりぬ是所謂まうらう蓼蟲の一癖ならん

狂言趣向の種といふ事

古今の序にも俟歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりけると我傳奇にも種なくては綴りがたし

其狂言の種に一話あり大岡忠相録の中に板倉周防守殿京師所司代勤役の砌綾小路邊に高城瑞仙とて外科を業とする者あり或時奉行所へ訴へ出しは拙者獨身にて候所此廿日ばかり以前黃昏過ぎに宿に唯一人罷り在候へば何もの共しれざる大の男四五人來り私を引立て無二無三に繩をかけ口に手拭を押込聲を立る事ならざる様に致し外へ出候と駕に乗せ上より物を打かけ道を急ぎ何國共なく連行申候尤先の東西曾て知れ申さずやがて彼所へ着し所山の奥と覺しくて森々として松風の音のみ聞えし其所に一つの大家あり近所隣家と申もこれなき離れ家にて御座候其所へ私を引出し主人と覺しき大男立出て申は其方外科の聞え高し今我手下の者共悉く手負金瘡に惱めり何卒療治いたし呉よと申し否といはゞ打殺すべき體なるゆる拙者も一命にも及ぶべきかとまづそれ／＼に療治仕り膏藥をつかはし大疵には縫遣し申し五六人も疵付候もの御座候より様々の療治にて大方快氣に及候へば今は古郷へ送るべし大義なりとて藥代金五兩を呉候て最初連行候時のごとく駕にのり乗て夜中にもとの私宅へ送り届け駕のものは何方へやら逃行けるが

更に行方知れ申さず此段不審に存候へば隠し置て後日に相知れ申候ては如何と御訴へ申上候とあり板倉殿之を聞給ひ奇怪なること也先方角といひかたゞしれぬとあれば手掛りもなし然れども其方廿日餘りも居し内に何ぞ替りし事はなきや食事等その外別義なかりしやとお尋ねあるにさして相替りし事御座な候然し諸山にこれなき鳥の音折々相聞え申候佛法僧々と鳴申候承り候へば鳥の名も佛法僧と申よし下野の日光山紀伊の國の高野山の外にはなき鳥なりと咄し申候もの御座候と申上ければ板倉殿聞玉ひよし夫にて相解りたり其金瘡の者はみな強盜の徒黨なるべし捕手をつかはすべしとて速時に役人を松の尾山の奥へと向はせらるゝ與力同心等はいかなればさは宜ふぞと伺へば板倉殿仰せらるゝやう彼醫師が申には佛法僧といふ鳥の鳴しよし彼鳥は高野日光の外になしといへどももや高野日光にまでは連行まじ推量するに松尾山の奥なるべし子細は藤原俊成千載集の歌に「松の尾の山の奥にも人ぞ住佛法僧の鳴につけても」此歌を聞く時はかならず松の尾山の奥なるべしと申されけり果して松尾山の奥より盜賊

數人を搦め捕來りけるとなりされば板倉殿和歌の道にも委敷ゆゑ此裁判いたされし也此佛法僧の物語は世によく人の知りたる事なれば近頃の小説物にも粗遣ひしを見る中に享和の末か文化の始か東都の戯作者山東京傳が著作せし優曇華物語の卷中にきりはめ盜賊の頭を大蛇太郎とか呼び黒髮山にかくれ本文の如く手下數多疵を承しゆる近在の醫を盜ましめ醫に療治させるまでは聊もかはる事なし數日の滯留に手下の輩あら方快氣に趣く時賊首酒肴をもふけて醫をもてなす折節空に佛法僧の鳴聲聞ゆ醫はたと手を打奇也と山海の珍美肴より彼「松の尾の峯靜なる曙に」とよめる佛法僧の聲こそ嬉しけれと言その時賊首足下はさすが識者なれば佛法僧の聲をしらるゝが鳥の聲聞ゆるからは此山寨は何國いかなる所と思はるゝやと問ふ醫の曰三才圖會などにも見えて此鳥は紀の高野洛の松尾東國にては日光山に住と言ひ我栖より里數と時刻とをはかればまさしく爰は黒髮山とも思ひ候ひぬといふ賊首あつばれの名智褒美吳ん今一獻と盃をさし出す醫是を取んとする時拔打に醫の首は遙に飛んで崖の下へぞ落たりける是予が空覺

なれば人名居所等確とは覺えずされど醒々齋が著述誠に骨髓にしみおもしろく覺ゆる也今時生物知りの醫が良もすれば博識ぶりにいへる所又賊送りかへさず藤戸の盛綱のきて只一討に切殺すなど人よく知りたる話を其まゝに書入れ終を轉じたる働實に感ずべし都て山東京傳が戯作の小説は此類多し近來小説稗史作者の冠たるべし

淨瑠璃歌舞妓へ移る事

扱佛法僧のはなしを種として淨瑠璃に編りしは寶曆六七年の頃三好松洛が姫小松子の日の遊三の口切なり嵯峨の里に俊寛が家來龜王丸若君德壽丸をかくまひ小辨と呼びて女の子にして女房お安には乳吞子ありはへぬきの岩といへる賊手下四五人を連來つてお安を盗みかへるにお安の親さへるを乳母を置けよと金の包を置小辨と共に連かへる是本文の醫者を盗みかへるの條也三の切異本日トアリ松尾山を轉じて男山の南洞が峠の岩窟にて主來現あるが前にお安小辨を連歸る來現手下の賊をよけて小督の局の懷胎ゆる産婦になれたるお安を盗ませし事を語り後お安鏡の金打より俊寛と本名を明し島物語をかたる此來現はこの賊首

にてお安は醫師なり金瘡をば産婦の介抱に引直せし作意和らがにして誰か佛法僧の話を種とせしと思はん院本作者の見付所は小説はなを書とはまた格別の案じかたならずや同好のかたへ能々味ひ玉へかし我歌舞妓にも是を種とせしは安永六酉年奈河龜助なるもの伊賀越乗掛合羽を作せしに四幕目に般若坂の場有癪病の乞食共我身に飽冠山異本部山ニ作ルの俗醫奥山左内癪病の療治に妙を得たりとて駕籠に乗せ盗みかへる此醫者はえせものにて始癪病になる藥を飲せ癪病ならぬ者に煩らはせのち又一服の解藥にて本復をさせるの方はしれど眞の癪病は治する事あたはずと云此時小屋頭の乞食出る時奥より骸骨の癪病といへる文句ありこれ則姫小松の院本を翻案して奥山左内はお安也小屋頭は岩窟の來現といへる地口なり股五郎言號の娘お園を連癪病石へ腰を掛るより癪病の仲間へ入よとて奥へ入しゆる骸骨の癪病のせりふに今客人もすや／＼と寝入花とあり是來現が出の詞にて姫小松を其儘きりはめしと聞せたる作意なり後に混じて何れの狂言が先なりや跡なりや作者の趣向を失ふがゆゑ爰に出す此伊賀越は中の芝居にて二の替に

出し大當をとる唐木政右衛門に中山文七

元祖世ニ
黒谷文七

田内記佐々木丹右衛門二役中山來助

黒谷文七第二
代目新九郎也

城五郎馬方の胴々大八二役中村歌七

加賀屋歌七祖
中村歌右衛門也

股五郎奥山左内母鳴見三役淺尾爲十郎

實惡の名人
奥山の事也

敵討の狂言を時代に取組遠責などを遣ひ世界を大きく書たるは龜助の手柄なり味はふべし始歌舞妓にて

當りしゆゑ後淨瑠璃にそのまゝ語る事とはなりぬのち天明三近松半二院本にて伊賀越道中雙六を出す是又大當せしゆゑ歌舞妓にも取立する事とはなりけり

此二狂言とも歌舞妓院本兼たる名狂言也扨此佛法僧の本文を種として京傳が小説は是真也松洛が姫小松は行也龜助が伊賀越は草也同じ作意の内に眞行草と三つにわかるは此話のみにあらず容をわけて解べし

小説稗史を眞といふ事

眞の位の小説をかくには七つの法則あり一に主客はシテワキの如く一部の主客を定めて筆を採也二に伏線後にならず出すべき趣向を前に墨打をする事也三に纏染は仕込みをして後に出す是を纏染共言て下染の如くせよとなり四に照應とも照對共言て對句の

如し重復に似たれど然らず態と對にてらし合す也五に反對照對は物おなじくて違ひ反對は其人は同じけれどする事の違ふ事也相背いて對する事也六に省筆事を人に立聞せ筆をばはぶき後話にていはす七に隱微は作者文の外に深き意ある事を云是らは唐山の湖上李笠翁などが作れる稗史にならひ國史經史歌書軍記をあさりあるは唐山の小説を通俗にして此頃の夜話に往古の年號月日を書入文花をかざり誤字書損ひ等をよくあらため梓にのぼし世に弘るもの也然し稗史小説の今の如くに讀はやらし出版の多くなりしは享和文化より此かた也その前には西鶴自笑其積等が著せしものを八文字や本とて見はやらしたるが其後は橋南蹊が出せし東西遊記より奇談怪談を書しものまれ／＼に出しのみなるを英艸紙繁夜話兩月物語西山物語吉野物語棧など戸河六藏建部陵岱上田餘齋の福内鬼外風人が著作せしより東都に平賀源内來山人と云云が滑稽本も廢りて山東京傳曲亭馬琴式亭三馬など我も／＼と小説稗史を著し出版する事月に數百部凡元祿より此方の戲編を見れば連歌俳諧師あるは儒者醫者などの著せしものにて別に戯作者とて業とす

る者まれ也よつて戲編には戲名を書て實名をのする
事なし近來戲作者追々にふえて京傳馬琴が筆意に倣
ひ一部の趣向も立すましてや法則も辨へぬ輩あらぬ
外題をつけて出版するがゆゑに看官も讀に飽て賣ぬ
事とはなりぬ小説神史の戲作にかけては往昔と今と
はいはず京傳を冠として次に曲亭なり京傳が作には
西鶴立圃が口調に譲りて新に案じを出さず馬琴は博
識なれ共文中に癖有偽作類板を嫌ひて近來出版の小
説にも名を賣らるゝ事を歎く斷りまゝ見及べり尤京
傳は文化に歿し曲亭は今に存命なれば年々に書を閱
月々に發明する事も多かるべし誰も生れながらの博
識はなし學ぶに付てわかり習ふにつけて上達す幼き
折に書しものは老て後讀で心耻かしくなる物也きの
ふの我に飽ものは俳諧の上手也とは森川異本五
老井許六
が詞也過たるは猶及ばずと頓着すべからず安永の頃
都名所圖會を著はせし秋里離島は博識にて五畿内を
始東海道岐蘇街道の名所圖會まで世に著せしは此翁
の功なり悉く引書をあらはし吾癖案を交へず實に感
すべき人なれど所々に湘夕斑竹とて下らぬ狂歌發句
を書入たり變名ながら愚詠を書入るゝは拙し詩歌連

俳ともにその輩あり變名なり共我句を入しは誤なり
曲亭の神史にも玄同けんどう簗笠やうかさ等とて詩歌連俳を書入しは
拙し名を賣らるゝをいとは魚魯のあやまちよりは
先に是をつゝしむべし醒々齋には絶て此事なし天保
の今に存命せば此誤りあるかもしらねど著作堂より
は一段勝れし所ありと予は思へり天保の今に至つて
は戲作者といへるものますゝ尠し近來中本と唱へ
て出版するものは浮艶鄙猥にして八文舍にもよらず
院本にもよらず笑本の文談をよむ如くにいていと淺猿
し小説神史の出し始の比は近世の如くいづ幾日迄に
作せよとの謔もなく我閑日のまにゝ書綴しをやが
て書肆の手に渡し梓に彫世に弘めて評よければ賣も
し其頃の人氣に叶ひし物は再板せられ評よからぬも
のは買はやらさず讀はやらさぬのみにておのづと摺
本もなくなるのみなり作意其比の情に通ずれば書林
は利を得賣れぬ時は書肆が彫損摺損なればさまで作
者の汚名も受す作者のちからは一部の趣向文談に善
惡はあらはるゝ物なれば草稿のゝち筆工彫刻の度に
校合をさへよくすればよき物と知るべし

淨瑠璃の作を行といふ事

行の位に表したる淨瑠璃は又小説稗史とは事かはり年號人名國所等にもさまでくどく糺さずともよく昔古流井上播磨掾山本土佐掾岡本文彌宇治加賀掾道具屋吉左衛門表具又四郎の頃は扱もそのうちのかかりにて文談もさら／＼として道具立もなく木偶もなく謠曲の如く三段計につやり所々に節をつけしみにて外題とても倭藤太、中將姫、蟬丸などにつけ院本に残りしも謠本の如しのもち延寶貞享の比當流竹本筑後掾義太夫コト也當流豊竹越前少掾より追々にひらけ豊竹を東竹本を西となへ竹本には近松門左衛門豊竹には西澤一風として作名をあらはす事とはなりぬ尤五段つゞき三段續にて狂言を作するには其折々の太夫の音聲咽喉を辨へ木偶をつかはせよく世界をたて趣向をもうけ文談を綴り満尾して印行し丸本として後代に残すにも手爾於葉假名違ひをとがめず譬へあて字あり共早く俗に聞え易きを專として節に耳をたのしめ木偶にめをよろこばせるをよしとすされば近松が國姓爺反魂香西澤が時頼記萬石通も東西の當り狂言にして其頃は名を噪なごうせり其後竹田出雲、三好松洛、並木宗助、近松半二等出で淨瑠璃の脚色段々

巧になり一通りの作にては聞者も看官も承知せぬこ
とに成り譬は作者三人あれば場割とて建作者より
誰は二の切かれは序切誰それは四の切と二の口我は
大序と三段の切を書なんど一場／＼と割付合作する
様になり行ふし付等も大落し表具などは三の切より
つかふ事ならずと法則を極めて作する事にはなりけ
る也是より銘々文談をはげみ書籍を見たる力をあら
はさんとてあるは戀女房の沓掛村に金石皆なる秋の
夜のと秋風の辭をつかへば源平躑躅の扇やには青葉
の笛の音に恨むが如く慕ふが如く愁ふが如くと赤壁
の賦をきかせ薄雪の腹切に虎溪の三笑をつかへば姫
小松の岩窟に漁父が辭をきかせるが如し是らはかく
文章を自由につかひまはして世話物所謂お染久松お
千代半兵衛の類ひ心中情死の狂言にしては其頃の人
情流行の詞をうがちよく其實説をしりながら世俗に
はやく聞せんが爲人名居所を引直す事譬は小野の
道風青柳硯に傳法轉所の文字を道風にかゝせるゆ
ゑ文盲人は四天王寺の花表の額を見れば道風の筆な
りと思ひ軍法富士見西行を見ては此春ばかり墨染に
咲けと詠しは西行なりと思ふ人も多からんましてや

忠臣藏は鹽谷判官高の師直も太平記の世界と混じ近江源氏の佐々木高綱北條時政は幸崎坂本邊にて戦ひしものと思ふものもあらん此淨るりの作者も寛政の中頃までは日々新に名狂言も著せしがそのうち只古き當り淨瑠璃を幾度もかへす事にて新作はまれくにて邂逅新外題を付しものもあれども所謂焼直しにて二番煎の茶と同じく味ひなし太夫木偶遣ひ三味線ども追々故人と成ゆくに隨ひおのづと此道の作者もなく衰へし物か

歌舞妓の作を草といふ事

草と見立たる歌舞妓狂言の作は小説稗史の作者淨瑠璃の作者とはかはり師の教ゆる規矩もなく又弟子の習ふ準繩もあらじ往古の歌舞妓には作者たるものなく一座集りて何々の世界と定め誰は何役彼は此役と配當して詞は互ひに言合せ打囃子もその場に休座の者勤しを正徳の比京師に橘良平と云外科醫有て此人芝居を好み日々に見物し都萬太夫座の役者と熟魂になる一座良平を頼みて狂言を作らしむ謝物として役者よりは衣類調度を贈り座本よりは家内の雜費を運び各師父の如く尊敬せしをいつしか謝儀を約金にて

納ることになりたるゆる後々は作者役者朋友の如くなりぬ

異本、浪花にても狂言は一度に仕組しまゝにて役者が覺ゆればそれにて濟みしを狂言本に委しく書くことにて金子一二兩より始まる

是によつて今時の識者には(異本歌舞妓作者は)いと賤しめらるゝこともあるべしさりながら上は公卿大夫より下は乞食非人に至るまで常に其通語を記臆して用ゆる事勿論なり一體の世情にわたり遊里洞房の癡情は親しく交らずとも其佳境はしり安し高貴のみじき人々に交はらざれば高情の場は知り難し作者さへ知らざれば來看も又知る人稀也是狂言綺語の場にて公家は公家らしく女鵲はいかにも女鵲らしくし源氏物語伊勢物語あるは春曙抄をはじめ古代の物語の詞を交へ俗に通易き様に用ひ武士は武士らしく源平時代ならば盛衰記(義經記)の詞を用ひ北條足利の世界ならば太平記の詞をかるべしましてや世語時代交へし狂言の武士には東都の方言をまじへていはせ傾城は里説とて新町のなます吉原のざんすなどそれぞれの方言を用ひ一日の世界を定め(異本一場の國

は何國と四季の時候を心に留め何時頃也と時刻を定め)小説にもある如く法則を極め切瑳琢磨の功成て一部の大筋をかく事也此階級をへざれば眞の歌舞妓作者とは唱へがたしかくの如く千思萬慮を累ね辛勞するにあらずんばいかでか日々幾千萬人の看官を引受尊卑上下男女老若の情に通じてあらぬ事をかなしみ又は嬉しと思はしむるの感動あるに至らんや小説は編安きとにはあらね共譬は往事をかたるにも細字にて書たるを數千枚が内につけて語る事あり歌舞妓は俳優いか程の辯者にても八行に書きて紙二枚ばかりよりは聲もつゝかす譬へ能辯にて語る共講釋の素讀を聞が如くにて看官の心にとめねば詮なし文に書には口には善をいふ其心には惡計を巡らすなどまゝあれど歌舞妓は役者の詞にていはせるが心工みの惡計を見物によく見せて置かねば情通せず此餘に小説には數十年の間にかく者を歌舞妓にては一日にかき縮め一場は長くとも一晝夜よりのびたるはなしまた院本操りは文中にゆとり有て既にその夜も明方の(異本詮方泪暮六つのなど、伸縮自由に利かせ)あるは居所の歩の末の刻など又時ならぬ花の盛りな

どは枕の文に出す事まゝ有て詞にきかせぬ事はいはんとせしが^{まて}暫しとの遁道いくらも有てせりふの次にふしあれば木偶にふりあり歌舞妓には此自由なければ淨りりの作よりは一倍辛勞多しその上木偶は死物役者は活物なれば一口に論じがたし譬は小説の主客に用ひし者も操りの木偶にも役不足をいふ事なしまづ假名手本忠臣藏にても師直の役にあたり大序兜あらためより三段目殿中刃傷の場までは^さ者の遣ふ役なれ共それより大切迄役なしにて敵うちには柴部屋にて討れさへすればよき役也手摺^{人形}の建^{遣也}もの大序と三つめをつかひ外に由良之助とか平右衛門とか本藏とかつかひ敵討の働のなき場にて外の役の差合ふ時には柴部屋より出る師直は門弟に遣はせても濟がゆゑに役不足をいふ事なし(異本又楓狩劔本地にて艾屋久作は敵役にて二代若君にもろく討れし儘にても濟むべし)歌舞妓は活物の役者をつかふ事なれば役のよき場は勤めても役あしき場は不承知なりとて作者へ對して斷る輩まゝあり是等は行義作法もしらぬ役者なり一日の狂言は勸善懲惡のすゝめなり役者は繪にかくべき者を活して働らく

が役なる事をしらず我仕勝手をいふなど論するに
たらず作者も常に一座の役者に親しみ人々の性質を
よくしりて立役實役敵役女形道外及び小詰に至る迄
各人品により行狀を辨へ役と人と相應する様に作す
る事第一の心得也醫の病に應じ藥をあたへ僧の說法
して佛道にみちびくに等しく仕打方太夫元とも又に世に銀主と云にも
讀きかせ一座の役者よく合點させて稽古にかゝらせ
その内道具鳴もの衣裳等の差圖をして熟してのち初
日を出させること也かくの如く苦心して狂言を著は
せし作者も其時々の番附にのみ名をのせ後世にては
誰々の作せしとあげつらふは纔に狂言見功者の人と
其ころの俳優のみ也此歌舞妓作者といへる者も明和
安永の比寛政の末までにて享和文化に移りて一兩輩
も残り居しが其後は一人もなく大方は狂言方とて拍
子木を敲くもの鼻垂も次第送りとかにておこがまし
く作者と番附に名をのするのみにて役者も年々衰へ
愚痴文盲なるゆゑ耳新らしき故事古歌など書入ても
得覺えず辯言のよいへば詮なしはんや月卿雲客の
狂言にも容さへ公家女臚に出たてばよきと心得詞は
覺えず拙き卑賤の詞をつかひ作者の意に違ふ事多く

たま／＼小文才の走る役者は作者に相談もなく仕勝
手にせりふづかひを直す事有てうるさし今時作者と
名乗もの其身不學にして立物役者に諂らひ應せぬ高
金を貪るゆゑ役者の無分別なる狂言の筋をいひ出す
を聞書に書ことはかくあれこれ取合すが故書にか
ける齋の如く首尾手足とも違ひ狂言作者とあらはす
者は役者の奴隸の如く皆人思へり著作道のすたれた
る事嗚呼時のしからしむる所にやいと淺まし故名人
の作者とひとつに混する事なかれ

狂言四番續といふ事

往古より歌舞妓狂言盡しを四番續と定めしは喜怒哀
樂の四情にもとづく見えたり口明は多く若殿の遊
興花見茶屋場は是喜也中入謀反人國家を傾け忠義の
家老切腹するは怒也次に小幕と號し次幕への仕込み
道外のちやり事あるは若殿傾城姫君坏の道行を見せ
引返して世話場は愛子を身替りに殺し寶物の質請に
女房を廊へ賣悲しみを見せるは是哀也大切に悪人
亡び寶もとへ返つて家國治るは樂也人間鳥獸に及ぶ
まで四情の外に何をか慮らんや又詩作の起承轉合と
も合せ見るべし大序は起二つ目なかいりは承三つ目はやくより一變

して世話場は轉大切は合也是より元祿寶永正徳享保の頃の脚色には未だ法則も定まらず昔物語のかな本をよむが如し元文寛保延享より追々ひらけ寶曆明和に至つては法則備はりますく巧みになりぬ右に云四情は不易にして實也人氣の好む所を計るは流行にして文花也一部の趣向一日の狂言を大筋といふは是も不易なれば實より入を要とす一場の趣向を仕組といふ詞書は流行なり花也實より入りて花を得ざれば妙作とは云べからず花實相對したる狂言は甚稀也古作の後世に残て時々用ひらるゝを見て知るべし流行にのみなづみて不易の實情を失ふが故に一旦は見物の心に叶ひ繁昌する様なれ共日數纔にて永くたもつ事なしはんや再三と用ゆべき役者も又しか也いにしへは作者役者共下手也しかれ共妙あり近來は上手にて妙なし梨園に限らず萬藝共亦しかり年々歳々氣根衰へ業に倦て淵底を探り得ざるは時のしからしむる所にや強て是非すべからず或人の曰萬の藝道古人には及びがたし今人にまさる様に心がくべしとは實に今時の金言なりとこそ覺ゆれ世の流行は十年或は五年にて一變す戲場年々に變じ月々に移るその故いか

となればけふの歌右衛門はきのふの鶴助にあらず即今の團藏は昔の團三郎ならず其餘もしかなり能々辨ふべし

世界定外題文字の事

不易流行を考喜怒哀樂の四情を案する時は先筆を下すまでに世界を定むべし世界定めとは新作を著さんと思ふ時は大名題俗に一枚看板の事也に載る建役者五人とか七人とかを集め傳奇の脚色により源平とか又足利とか其頃の時代を定むる事也又世話物なれば小稻半兵衛にせうか於三茂兵衛にせうかと相談をする事にして是を世界定めとは云也此世界にも四世界あり一に王代と言は禁裡公卿都て堂上の事を綴るを云淨るりにては大友眞鳥妹春山の類ひ歌舞妓にては伊勢物語菜種御供その餘推て知るべし時代ものは是に繼ぎ二の位にて北條足利あるは大友菊池など軍記にもとづき武將歷代の名を假るなり京攝の二の替り狂言は多く此時代もの也所謂太功記の世界と定むる共御當代にかゝるは遠慮あるべし三に御家とは一國の騷動時代にあらず世話によらず中庸をもちふ千代萩鏡山等院本にては薄雪物語の類也敵討は御家に屬す四に世話

ものとは男達角力取又は心中情死の狂言いづれも農工商にかゝりしを云此世界の中にも御家には騒動と復讐と二種にわかも世話にも俠客情死の二種あれ共四品にわかも世話眞世話など唱へるも頗る佳境に入し者のいふ事なり此世界を定めし上にて表號をつくる外題は一部の惣評にて外題を見れば趣意はあらかじめ知るゝ物なれば深切に心を用ゆべし諺に流行語には必ず熟字を置べし下の文字熟せざれば止りがたし近來江戸作者元祖櫻田治助五十韻の假名返しによりて秘訣あるようにいへ共韻鏡反切の外に亦かな返しあるべし非ずと知るべし又自字を造りしは中古大坂の作者並本正三拾石燈始と登舟の二字を合せて一字とす是より專用ひ來れ共道の本意には背けり音訓をよくし正し理なき假名を用ゆる事勿れ其後並本五瓶日本花赤城鹽竈此かなはよく叶へるといふべし春狂言二の替り外題の上に傾城と置事は寶永正徳の頃京師より始まり今は京攝とも風儀とは成ぬ春は假名にてけいせい次には傾城秋冬には契情と法則を定めしといふは非也下の文字によるべし又傾城

の文字を外題の中に用ゆるは目出度かしく傾城始國花萬葉傾城櫻味方原傾城容氣など例なきにあらねど故名人作者は字義をよく穿鑿して聊誤りなし近來は一部の新作まれなれば外題も共に古き外題を呼ぶはよけれど其世界さへわからぬ者勝手に外題を附る事ゆる書組とはなれ看板に偽り有と識るべし邂逅に新外題を附る時には通傾城花大矢數などゝ無理に誣け譯もなき假名をふり不通の文字を我儘に作る事いかに賤業なればとて文筆の冥加に盡耻を後來に残さん事淺ましき事ならず近來曲亭馬琴が著作の南總里見八犬傳は數帙を重ね評よかりければ予は歌舞妓に潤色して春狂言にはあれど傾城は角外題に書入角外題とは大外題の肩に書を云割はるゝと云ふ外題とは大外題の脇に書をいふ花魁苔八總と居たり其後淨瑠璃に取立しもの夏か秋か開墾たるに外題の假名を其まゝ梅魁苔八總と花の文字を梅と書替て看板に出しけり元來予が作意とは脚色異なれば外に新外題を附る共よきになまなか外題をかるのみか花と梅の文字をかへしは餘りに拙なしと獨笑うて過しが作者も心付しにや院本には花魁と改めけり浪華の顔見世狂言の外題と東都三座ともに道行所作事の外題の

附方

所謂常盤津清
元宮本のことは

は祝の語を置或はその一座の首領又

は新參俳優者の表徳など組合せるを趣向とすれば論の外なり東都作者瀬川如皇が瀬川仙女が(異本東都元祖櫻田治助が阪東彦三郎河原崎不座の時)道成寺の所作の外題に珍らしいものが振袖と付たり近來中村芝翫當時の歌江戸より上りし時御目見え狂言として姫山姥しやべりの場を勤し折予が附し外題に七重膝ななえひざ希八重桐きやうやちゅう此類也予不學文盲なれ共博覧の識者に隨がひよく問明らめ筆を下すゆゑ甚敷誤りはあらじと思へ共猶五十歩にして百歩の譏りあるか

三都狂言の異なる事

三都劇場の狂言の異なるは東都は武國なれば人氣瀾達にして滯るを嫌ひ俗に俠勇きやくゆうといふ早春の世界は往古より曾我物語を吉例とす年々三芝居とも同遍なるゆる趣向に盡江戸古作者壕越齋陽金井三笑のころより油屋お染實は化粧坂の少將丁兒しょうてい松は五郎時宗などと附合して綴り享和中大坂の作者元祖並木五瓶彼地へ下りおその實情を失はん事を愁ひて二番目と號け別に外題をもうけ世話狂言を作せしが例となり今に絶す京攝に云切狂言也惣體の看板道具甚る末にて狂

言始り二幕ばかりは中通り小詰にて濟し夫より次幕に黙だんまりとて花方役者或ひは新參の立物など寶物などを奪合事を見せ是より續て狂言を見せる事也京師は公卿堂上の高情庶民に移りて溫順なるを好めるゆゑに花車風流を專と書べし浪速は商家のみにて中にも東都に似たる風は北地に有て所謂黒船忠右衛門根強四郎右衛門など堂島の俠客也船場は豪家軒をつらね人氣借上也江南は青樓ちやうや多く陽氣を好む此三情を合して作すべし洛は勿論東都にても神社佛閣雪月花に遊ぶ景地數多あるがゆゑ見る目にともしからず浪花はさせる遊覽の雅境もなき所にや見聞識者多く作文役者の誤りを見出す人多し是を俗に穴を探すといふ格別骨の折る地なれば心を盡して作すべし都て梨園の上賓みづかひとするものは町家の御家御寮人嬢様若旦那等也よく其情を考ふべし詞を書にも傾城と藝子は書分るに易けれども遊女と藝子の詞は書わけ難きものなれば必うち混じぬ様書を作道の心得と知るべし

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)上の巻終

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)中の卷序

抑歌舞吹彈の伎は梵邦漢土に其例少なからず殊に吾皇朝は磐戸神樂に始り催馬樂は乙女廿五節の風曲萬世に傳れり俗倫は推古の御代聖德太子秦の川勝に命じ異邦の正樂を傳へしめ玉ふ其官荒陵山に残りて千歳を經り後平氏繁昌の時は白拍子と號る女樂有て朗詠今様に堪能の者尠からず室町殿の代となりては亂舞謠曲行れ今公門侯家の翫弄となれり當時の歌舞妓は世上よりして傳はれる舞曲の餘風一變して一劇苑を闢天正の頃濫觴するとなん其顛末は歌舞妓事始役者大全綱目の七書に委し操淨瑠璃の事跡は竹豐故事東西評林操年代記等に著せしかど未梨園作者道の意得規矩小傳を舉たる書を見ず故に言狂作書と題して既に肇卷に著近世歌舞妓作者の名高きを八景に准へ其小傳に及び樂屋雜談釋文傳奇の説を編此門に遊ぶ者に作業の徑路を演るものなり曩には西澤一鳳と名乗今は李叟と改めつる

狂言綺語堂主再識

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)中の卷

目次

- 作者八景の狂詠
- 奈河龜助が傳
- 同七五三助が傳
- 太夫役者行義崩れし話
- 新淨瑠璃本讀の話
- 奈河篤助が傳
- 同晴助が傳
- 芝屋芝叟が傳
- 鶴屋南北が傳
- 寂光門松後萬歲
- 並木の祖宗助が傳
- 並木正三が傳
- 並木五瓶が傳附淺草堂より文通の笑話
- 作をせし役者の傳
- 金澤龍玉梅玉が話

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)中の巻

作者八景の狂詠

西澤綺語堂李叟著

並木晴嵐

朝嵐吹さむ共幾もとの

なみ木の梢おひしけるらん

並木五瓶ハ始吾八ト云浪花ノ産正三ノ門ニ入テ後

東都ニ住並木含淺草堂ト云

近松夜雨

降雨のいく夜重ねて近松の

むかしも今も常盤なるかな

近松徳三又徳叟半二ノ門ニ入テ歌舞妓ノ作ヲナス

浪花阪町ニ住大榭屋ト云

鶴屋夕照

夕日影むかふ鶴やの千代かけて

みなみに北にてり渡るなり

鶴屋南北ハ始三代ガ間東都役者ナリ四代目ヨリ勝

俵藏改名シテ作者トナル

奈河歸帆

漁舟かへる奈河の水馴棹

さしての後もなほ流るらん

奈河一洗ハ始篤助龜助ノ門ニ入テ後洛東山眞葛原

ニ隠レテ一服一泉ト呼ケリ

櫻田落雁

匂ひさへ色淺からぬ櫻田に

雁もこゝろやなほ殘すらん

辰岡暮雪

暮る日のはては其名も辰岡に

つもれる雪の消る時なき

(異本いく代消なく)

福森晚鐘

風さそふ森の木の間に入相の

かねの音遠く世に響く也

西澤秋月

曇りなく世にすみ渡る西澤の

水の面てる秋の夜の月

奈河龜助が傳

奈河龜助は中古歌舞妓作者の祖にして前にのぶる四情四番續の法則を定めしも龜助より始めり此人もと奈良の産にて放蕩より家業を捨河内の縁家に食客の

櫻田治助ハ俳名左交ト云東都常盤津富元清元ノ淨

瑠璃ヲ數多著ハセリ

辰岡萬作ハ始狂言方ヨリ功ヲ積浪花河南ニ住時代狂言ヲ著ハス事ヲ得

福森久助ハ又喜字助ト云俳名ヲ一雄ト呼東都ニテ京攝ノ狂言ヨクハメタリ

西澤一鳳ハ祖一風ヨリ書林ニテ淨瑠璃歌舞妓ノ作ヲ兼タリ本町本理トヨブ

内も遊里戲場に通ふの癖有て遂に浪華に來つて作者道に染たり奈河と呼は奈良と河内に身を漂泊ぬとの洒落より附たると也此頃は仕打興行人は何事も作者に任す事にて一座の役者を抱へるも作者の指圖を請

狂言により一座の進退は諸事作者のまゝなりければ銀主興行人と同格にて威勢強く一座の俳優者流は作者に取り入り出世をする事なれば近世の作者とは雲泥の相違なり龜助中にもよき金主有て諸事龜助次第なれば一座の尊敬も格別なる事也此人狂言數多著せし内にも競伊勢物語はてくらべ成就大願殿下茶屋聚伊賀越乘掛合羽加賀見山廓寫本等皆當狂言にして安永天明より今に廢らず興行の度毎に大入せずといふ事なし尤和歌俳諧にても人口に膾炙の句一句あればよきとおなじく作者道にても數十番の狂言悉く當るとは及び難き事にて外題一つ二つも残ば至極の手柄にて龜助が如きは實に稀なるべし都て京攝の狂言には四季の時候によつて狂言にも亦規矩あり春二の替には陽氣に花やかなる事を書世界も時代を用ふる所謂大名の若殿の放蕩より謀反人幻術をつかひ或は遠責にて反逆人を亡す坏賑はしく有べき事三月狂言は永日の頃なれば時代世話を交へ御家復讐の仕組にして五月替りは前狂言に院本の時代王代もの切狂言を眞世話とて心中角力の世界とわかも永日の頃は看客に見飽せぬやう心得益替りは極暑の頃故俠客の水試合なんどいさ

ぎよきを專一とし九十月は陰氣に趣く時節ゆゑ傳奇の脚色をつまやかに御家敵討を取組顔見世は前卷にも演たる如く一年の終りなれば道外交りに種々内容をかへ入込せ所作事様のめざましき様書を法とする也然るに此龜助は伊賀越は復讐なれば三月又は九月に出すべきを二の替に仕組大序殺負殺しより中入圓覺寺までを足利時代に取なし狂言を手廣く書たるは自在を得たりといふべしされど此人の作は餘りに細密過てくどき所あり乗掛合羽の傳法屋殿下茶屋の人形屋又伊勢物語の春日野の場加賀見山の菊酒屋各正本にて百餘枚づゝあり此中に略せんといふ所もなく詞にも省く所なし是ゆゑ正本にて讀時は當時の稗史に増り面白き事限なけれど後世の役者は氣衰へ下根になりしか紙數多き場は來賓より役者の飽ものか短かき場を好んで所々を略するがゆゑ自と狂言の筋通じ兼る事多し龜助後來の作者は一場を小短かく書一幕に道具をかへず事度々也かはしとは道具を廻しあはるは引道具などする也道具さへ替へる時は來賓の目も改まれば役者よりも好める事也いは酒宴の席にて長座せんより又亭をかへて飲直すが如し是役者未熟なる故長き場は持兼る

より起ると知るべし院本じやうり操にはいか程長き場にても
幕明の飾附し道具よりかはる事稀也歌舞妓も安永天
明の比は一幕に道具かへしは一遍又は二遍よりなし
廻り道具繰上げなど出来しは皆此藝道の衰へにて況
や大道具を使ふは論するに足らぬ事ながら道具を一
座のシテと頼み惣座中はワキ師也耻かしき事にあら
ずや龜助加賀見山を作せしは天明元丑とし中の芝居
春狂言也前巻にもいへる世界寄をしてより脚色しやくしきにか
かり筆稿出来上り一座を寄て本讀をする迄に首領くわうりやうと
立物一兩輩には内讀とて惣座中に聞さぬ先に密に讀
聞す事也その上役者の差繰をして改め一場くに出
る役者を寄せ樂屋三階にて披露するを本讀といふ此
内讀の時尾上新七南部屋美雀後上鯉三郎の役は多賀大將安田庄
司と二役にて鳥井又助谷澤頼母の二役は嵐吉三郎
元祖也此又助の役と多賀大將と二役を早替りにして
見たきものと龜助へ所望せしゆる谷澤頼母安田庄司
を里環に役を割替たれば元より聞込し役と違ふゆゑ
此芝居を退座しければ美雀心のまゝになり右二役を
三保木儀左衛門始富士松三十郎出勤して大將又助の二役
は美雀が當り狂言とは成けり望月長玄に山村儀右衛

門俳名加賀の千代に山下金作俳名何れも評よく舊冬
より始五斗三月中旬なかつうまで打續き繁昌しける此後廿一年
たち享和元酉年やはり中の芝居にてこの替に故郷錦
鏡山草こやまぐさと廓くわく寫本しやほんと類聚るいそにして接合つぎはぎ北國梅と外題を附
望月源藏局岩藤に片岡仁左衛門中老尾上に澤村國太
郎召使お初に江戸上り松本よね三多賀大將安田庄司に尾
上鯉三郎谷澤頼母鳥井又助に嵐吉三郎二代目にさせ
たり璃寛此又助役は中々我々が勤る役にあらずと達
て辭退に及し時美雀以前の時はか様くにて誠は
先里環にて書し狂言なり我その役のして見たく先里
環を落して樂屋方言に退座さ又助の役を奪取り幸ひに
して評よかりしかど作者龜助始より里環と見こみ書
たる故里環ならでは勤がたし今老衰して猶更こなせ
ず親里環への言譯に今の璃寛へ此役をかへせば親の
役と思ひ勤られよ爰はかうせよ此間にかくすべしな
ど教へしまゝ璃寛此役を勤る所親里環の俤有て美雀
より遙に評よく切腹の跡にて此身の運の筑間川との
長詞は今に残れり都て新狂言は役者を見込で書もの
なれば再三返してする時は役と役者に足不足ありて
いかなる當狂言にても始ての折よりは劣る物と知る

べし此後又十八年目に中の芝居にて文政元寅年二の替り望月源藏安田庄司に市川鰯十郎始市川市藏加賀の千代嵐小六始叶眠子多賀大將鳥井又助に嵐吉三郎勤めし時也大當りにて其時予に此物語をしけるゆゑ爰に出す此餘の役者も又助をすれ共二代目瑞寛には及ぶべからず因に云加賀見山は草履打と茶坊主の立身せしと二種あつて本文はよく人の知る所也鏡山と云より江州多賀の名をかり望月長玄後左衛門と名乗より安田庄司友治の名をかりしは謠曲の望月を題にし多賀の大將は加賀の宰相のもちり菊酒屋加賀の千代など名を集め世界は足利に假しは是龜助が作意の功なりけり

奈河七五三助が傳

奈河七五三助は龜助が高弟也此人天明より文化の末まで永く此道に染ながら多くは院本を譯文きりひめし物或は古狂言を添削するのみにて一部の趣向立たるもの少ししそれ故戲場者流より洗濯物の七五三助と異名を附たり然れ共著せし奇傳は、めいしよのしへはな礎花大樹木下藤吉に市川團藏今の團藏が親なり山口九郎治郎に淺尾爲十郎淺尾鎗の奥山鎗の長短の試合を見せ寛政四子年角の芝居かじにて古今の大當

りを取たり續て三の替りに其後日狂言と色鏡いろくづく續箭つづや戦あはせを出す江戸尾上松助今の菊五郎が父松に南巖寺の伴天連鏡てんれんかみに人面ひとのかほを寫せば馬に見ゆる木下藤吉の妻に芳澤いろは俳名巴江菊の枝を折り鏡に照せばやはり馬の容に寫るより伴天連の謀逆ほんざやくをあらはす場を書たれ共二の替とは見劣りして興行日も暫にて有しと又寛政元西年中の二の替にけやせい北國こしかのあけはの曙世界は比良ヶ嶽大德寺の焼香など綴世話場にて美濃と近江寝物語の場堀尾小助に山村儀右衛門免受勝助に叶雛助後嵐小六云と幕切本名は今川四郎義國にて關帝堂へ隱幻術にて關羽の容と變じ青龍刀を携へ花道へ耀上る此幕大に利たりきくとは樂屋方言因に云叶雛助は先嵐小六若女のみにて大當りきくとはいふなふ因に云叶雛助は先嵐小六若女のみにて始娘形より女形を勤しが所作に妙を得しうへ後殊の外肥滿なれば安永二已の春けいせい花書合に始て小栗宗丹總髮長袖の役をせしがもと女形なるゆゑ生溫なまぬるとして甚不評にてありしを追々實惡色敵の役をせしかば後々には立役の逸人とはなり右に云北國曙の中入にて雛助柴田の奥方小谷の方秦の花才に山村五登儀右衛門小谷の城落城にのぞみ郭公の一聲に辭世を詠よみ自害する段あり此時雛助二役柴田勝

重の切首を卓の上に置文花才焼香する内は雛助は奈

落^{ぶた}下^ふを云ふより本首を出す此頃珉獅^{びんしう}雛助^{ひなすけ}が首領^{しゅりやう}にて威

勢尤強く家僕金剛^{こんがう}の役者^{やくしや}の下使^{げし}を責つかふ事の甚しき

を憎み奈落より珉獅の腰膝或は脇の下を操りければ

來看者に頭を見せ身體自由ならざれば悶苦しみ漸く

其場を勤慕しまりければ樂屋に入て誰なればかゝる

轉合をせしぞと言し時僕金剛等詞を揃へて我々なり

と名乗りかれはいはい打擲も仕兼まじき體也その時

珉獅僕一人に金壹圓宛つかはし召使の其方等がかく

憎む程なれば囃樂屋内にて我を憎むらんけふの惡

戯は我身の爲にはよき異見也とて咎もせず免しけり

是より珉獅は玉じや性根が違ふ親小六増りの玉也と

賞しより後改名して嵐小六となる又小七小六玉と呼し

は此狂言の時よりして也扱此北國曙の三の替に七五

三助が書し大振袖粧湖の世界は太平基軍傳石田

原の書寫本六十卷ありを近江源氏に假りて北條時政に山村儀右

衛門石田爲久に叶雛助宇治の方に山下金作天王寺屋裏

とい序切和田義盛を始諸大名石田を憎み惡口の條に

石田は先君頼朝公に詔ひ宇治の方に出頭して威勢を

張る宇治の方の光を假ば螢大名也との詞あり後時政

和論^{わろん}をして館へかへる跡に諸大名と石田云合せの爭

論にて北條を欺く計畧也との詞ありて今に北條を亡

し實朝公の世にすべし石田どのと聲を揃へて云を石

田おさへて謀は密也くとの幕也是は基軍傳にて今

もよく知つたる螢大名又石田の密なりを潤色したる

にて來賓の嬉しがる物也此類誰々の作にも多し奥に

も解べし此大振袖の三つ目に佐々木義秀に雛助九度

山に隠れ眞田を織總領佐々木盛綱に中村京十郎弟高

綱に中村十藏雛助伴小珉兄は放埒にて勘氣を受け詫に

事よせ時政方に味方させんとする弟は實朝方に仕へ

軍術を農業に寄て習ふ義秀妻微妙に山下金作微妙の

弟源次廣綱に坂東岩五郎坂東壽太郎の親懷に短刀を隠し刺

客に入込折節家普請に壁の上塗の土こぼれ廣綱にか

かり着物を着替させんとする時短刀を落すなど悉く

軍記に倣へり其後蝶花形名歌島臺の院本は是を種と

したるもの也此狂言の時時政と佐々木遠見にて子役

二人立廻り有時政の役は加賀屋福之助後中村歌右衛門

佐々木の役は叶春之助女形叶珉子小高綱をせし中村十

藏も秀次郎小珉改名して子役上りの時也梅檀は嫩

より芳とかへる名人役者の中に育ぬれば後々各名を

得たる俳優になるべき筈なり當時の役者は修行もせず誰もゆるさぬ立物多くてうるさし

太夫役者行儀崩れし事

操淨瑠璃も昔は一人の作なりしが中古より三人或は五人の作者場割とて合作する事に成り太夫三絃も一座に多く成しより五段續にては役人餘り休座わきての者あるがゆゑ一の谷の三の切妹春山の三四桂川の下などに見取淨瑠璃にて一座の場割出来る事とはなりぬ何なり共通し狂言にてする事稀になりしは素人が座鋪淨瑠璃と同じく此道衰へし物か往古受領せし名太夫は口中切など、一場を割事なく幕明より段切まで語りしを名人とも上手とも賞たりしを中古惡聲の太夫工夫を凝し旦末淨丑と老若の聲を分け語出せしを始の内は不評にて有しが追々と人氣に叶ひ今にてはいかなる美聲妙音にても聲の替らぬ時は駄曲といやしめ微聲小音にても言語のかはるを名人上手といふ事にはなりぬ役者も昔は立役は立役計り女形はいつも女形のみをして今時招看板に實惡立役と書或ひは女形と書甚しきは兼るなど書を是とする事とはなりけり昔は敵役をするものは憎るゝ役なれば建敵とな

れば外に役を取すいか程不座の時にても立役より女形をする事なし譬はい色情いろこじょうの狂言にても元男子艶冶郎なれば實情移らぬものゆゑ幼少より女の容にて育ちて成長後傾城にせよ娘にせよ出たては實の女より情を深くせずんば濡事師と口舌痴話の時來賓に情移らず往古水木辰之助と云女形は旦の名人にて男子なれ共月水を覚えしと云事菖蒲艸に出たり初代芳澤ある書也當時立役良もすれば旦娘形を勤るは何ぞや世俗に餅は餅屋といへる如く一道ならで妙は得がたし前幕まで尻をからげ切合あて割合などせし者が野良帽子を當振袖を着たりとて色繪作者方言にいろ事の事をいふと云の情通じ兼觀りんかん的に氣を惡くさせるなど絶てなし今時何の役にてもよく仕こなす調法役者の所謂多藝は君子の耻る所にて立役にても女形にても一つの妙さへ得ぬは商人にていはゞ幾商賣もする萬屋なるべし初代尾上菊五郎忠臣藏にてとなせをすべき女形なかりし故由良之助となせ二役勤しより此方仕來りとなり淨瑠璃太夫は古竹本政太夫世に鹽町といふより言語を語り分行儀作法も今の如く崩れし也と見聞識者の老人子が幼き頃話されしがさも有るべき事ながら今淨瑠璃を何に

ても一色歌舞妓も立役より外せぬ事とならば益下手
也と誹るべし移り行世の流行は是非なしと云ふべし
新淨瑠璃本讀の語

享和文化の年間に豊竹麓太夫が大當りせし淨るりは
蝶花形と繪本太功記八陣守護城等也此作者は長町河
四郎といへる宿屋分銅河内の主也人七五三助と熟魂に
て古淨瑠璃を能記憶してそこ爰添削して若竹笛舁
中村魚眼近松柳等に筆を採せり麓太夫はいつも本
讀の席へは我女房を連行聞する事例也段切まで本
讀仕舞ふ時は麓太夫女房の顔を見らるゝ時女房には
淨瑠璃の文談に聞入愁を催し泣顔なれば即座に狂言
納めらる女房さまで愁傷にもあらぬ時は今少し作有
べしとて斷るゝと也此内儀は追太夫に連添ふだけ
にや詞容もやさがたにて至極涙脆き人にて太功記
尼が崎の場ならば重次郎の討死初菊が愁を聞嘸かし
母子や光秀妻操婆御前老母の悲しさ思ひやらるゝなど
我子や孫に死別れたらん様にくり言をいひ出大聲を
上て泣るゝ事也麓太夫のいふ世に女程さらでもなき
事に泣たり笑うたりする物はあらじ其女が泣ぬ淨瑠
璃なればいか程上手に語共詮なし夫ゆる語る我より

先へ女房に聞せて試る也と申されし名人と呼るゝ人
は又一見識あるもの也さればこそ一部の趣向はとも
かくも太功記の尼が崎の文句に軍の門出にくれぐ
もお諫申た其時に又蝶花形の八ツ目の文句に姉はよ
ろこぶ妹は手おひにすがりなど三歳の嬰子までが口
唱むは是みな鍋屋が功也麓太夫往古山中平九郎が工
夫をこらせし鬼女の姿に女房が見て氣を失ひしも事
こそかはれ同日の論ともいふべきか何藝にても故人
には一の妙あり

奈河篤助が傳

奈河篤助後奈河一洗又東都にて一洗堂歸阪して奈河龜
助と呼び又金龜堂とも呼べりもと泉州一向宗派の僧
なりしが還俗して浪華に來て七五三助が弟子と成り
狂言方より取上り老後洛東山眞葛原に茶店を開き一
服一泉といふ天保十三寅年二月三日行年七十九にて
歿しぬ法號釋達應とあり此人著せし狂言は復讐高音
鼓曲亭馬琴作三國一夜物語けいせい京三五佳節大切鴛鴦の景事
臺頭緑色幕三勝半七の母岩井半四郎半七早替り狂言け
いせい繁夜語等也此人一日の趣向放曠にして狂言を

手廣に書首尾調はぬ事多し初め七五三助より十九助と名をもらひ後篤助と文字を書替たり頭の髮眞赤なる故仇名を猩々の篤助といふ一洗といふ名は故中村歌右衛門加賀屋歌七といふ加州金澤の浪人梅玉が實父の俳名也文化五辰年中村歌右衛門俳名江戶表へ行同七年篤助を浪華より呼び一洗の俳名を譲れり同十四年芝翫とおなじく浪華に歸り一兩年立て一洗の作意當時の人氣にかなはざりけるにや評よからず依て七五三助が師龜助の名を繼ぎ二代目龜助と成けり是より芝翫と絶交して一洗の名をかへし京友の抱作者京友は濱芝居の仕打者太夫又は大西芝居等也となり名を金龜堂一泉と更め濱芝居の作者と成て果けり此人本讀の名人にて披講の間にて一座中の顔色を詠て正本を空讀してさも面白くよき役のように讀がゆゑに俳優者手を打て納る狂言納る時は座手を打祝ふ後書拔をとればさまでよき役にもあらぬゆゑ又一洗に欺されしと諺詢つひてもをかし是を樂屋の方言に讀生ると云面白き狂言にても思ぐ字じと讀時は聞人退屈して眠出る是を讀殺すといひて甚忌嫌ふ事也奈河の祖龜助も甚能辯者にて本讀の名人也前の條に叙る如く龜助威勢を振ひしゆゑ役者一兩輩拒て休座せし事あり是を樂屋詞に浪

人といふ也龜助は是に屈せず座敷へ鳴物囃子を連れ行き戲場狂言正本講釋とて見臺にかゝり院本の素語をする如くせしとぞ奈河一泉も龜助の跡を追ひ妙を得たるが芝翫と絶交の後京師に於て芝居狂言の正本講釋を座敷へ請招せられて披講せし事あり此人作意編と號して著作道の一二を書し草稿を先年予に見せし事有此中に或人一泉に云て曰何を新しく面白き趣向ありや一泉無しと答ふ難じて曰作者にして趣向無しとは如何一泉答ていふ狂言は役者にあり譬はい千金を求るもの千雨の力あり百雨を興ふるものは百金の術あり種々と並べ此一座にて趣向は如何と問ば一晝夜勘考せば王代御家世話と各二番づゝ都合八組の趣向を立談話すべし又曰年々歳々狂言ならざるはなし（異本書盡して新奇の趣向あるまじと一泉曰天地の間は森羅万象一として狂言ならざるは己が罪也國土あらん限りは狂言もまた盡ること有べからずといへば彼人諾して去ると有實に此辭の通り生肴四五種も持來つて料理人に見せなば庖丁にかけいかなる會席料理にても出来るべし魚は鯛か鰻か見

合に遣ふべしなど有ては料理獻立定め同じく狂言の料理には生魚精物の役者と取交是々を吸物是を取肴と俎の机にかへり加減鹽梅のある事なれば輕卒に庖丁の筆はつかひ難しと予も毎度話して笑ひぬ

奈河晴助が傳

奈河晴助後豐晴助は元京師の産にて宮島屋嘉兵衛と呼で素人俄狂言の作を好み此門に入て一泉の門人となり京道場因幡藥師芝居の狂言を書き居しを予が父浪華へ呼下嵐吉三郎二代目 寛の狂言のみを書り狂言の筋さら〜として能解れど世界狭くて狂言の筋狭端手になくいつも九月狂言の如し然共嵐吉三郎寛嵐小六淺尾工左衛門金田屋 鬼丸など何れも老練なるがゆる自然と移りよく狂言を仕生ること多ければ狂言今に残れ女夫池 かなたうちのしがへ駒か池敵討義戀わかはのさかへ柵是は寫本にては雲水錄繪本にては若葉榮として二種あるを脚色しくみしもの也出村進平 越前前三國夫婦墳是も寫 耶智山 敵討浦朝霧（異本これは尾張傳内を小割傳内とし明石を網干とし世に説教チヨンガレにかたる女盜賊と巡禮殺しを寄せたるものにて大當りを取る）遠江瀉戀このしなみ賊は日本駄右衛門の狂言なり此頃遠州濱松侯に雜説ありしを取組月

本圓秋に淺尾勇次郎後改名して 實川額十郎玉島逸當に淺尾工左

衛門牙の於才に嵐小六後湖鹿 後名紫朝日本駄右衛門に嵐吉

三郎中入にて敵役の諸士圓秋に向ひ惡口の條に密夫府君井の内の蛙侍向後は井の内蛙の守と名をかへ

さつしやれとあるは前に云七五三助が石田を螢大名といふに同じく作者が腹稿にもあらず一時の筆

拍子より出るものなり此外に又けいせい筑紫つきのつみ歎一名を朝顔とよび晴助の名にしあれどこは故人芝屋芝

叟が長話にて稗史にあるを近松徳叟が作れり娘深雪

後盲人となりあを勤る女形なきゆる遺稿なりしを澤村

田之助俳名 澤山 宗十郎 始一徳大江戸よりかへりし當座にさせ當りを

取しなり中山由男右にいふ小六 又小虎とも等は琴三

絃をひかず田之助は三曲ともによく彈がゆるなり晴

助終始多病の上二代目璃寛嵐橋三郎と改名す 俳名は文政

四巳年九月廿六日に死しければ（異本奈河の苗字を

改めて豐晴助と更へ）晴助も中村歌右衛門作名 金澤龍 玉といふ

に助作せしがけいせい染分手綱三幕目頓々の場は晴

助なり是は江戸市山七藏といへる役者が話にてある

豪家の娘色男との忍路に裏の切戸口にて足駄をとん

〜と鳴すを合圖に切戸を明忍び込す約束あり折節

其夜雪降けるゆゑ近邊の者軒傳ひに來て足駄に雪の
 挟りければ露路口にてとん／＼と敲きけり内には合
 圖と心得其ものゝ手を取叩きなどして娘は寢所へ連
 行しと云間違の話なり都て狂言の種はか様なる思ひ
 かけぬ事を佳とす市山が話又外にあり此奥に出すべ
 し爰に笑談ありさきにいふ篤助の一泉は七五三助が
 弟子なれ其後には龜助が門人なりといふ晴助は一泉
 が弟子なれど七五三助が門人なりと云しは各其作意
 に倣ふて言ふもの成べし譬之巻に演る也有翁の確言
 思ひ出て予は笑ひぬ七五三助の門人に奈河十八助
 是は文化中演是は文化中演奈河九二助是は歌舞妓狂言方と云有り其餘奈河の苗
 字を名乗るもの數多あれど舉るに足らず

芝屋芝叟が傳

芝屋勝助は芝叟とも又司馬叟とも書く享和文化中淨
 るり歌舞妓の門に遊びし畸人なり元肥前長崎の産に
 て母は圓山の遊女にて來舶清人の胤なりとぞ僧にあ
 らず醫にもあらず浪華に來つて淨瑠璃を四五番著せ
 り箱根靈驗壁仇討、新吉原瀬川仇討、太閤艶書合等な
 り常に長話として小説稗史を綴自素人好人を寄せ一夜
 讀切講する事をし此連中を組其社中に話の種をいふ

人あれば夫を稗史に綴り重ねての席に講じ一夜の
 讀切とはする事なり長話數種あり今繪本にあり
 油唐の小説賣油郎首鳥の内の名妓三光の師吳服屋十兵衛狗
 佐野の經世が事跡源此餘數多あり皆二字題にて予も此人
 藤太夫と成はなしお夏清十郎がの長話の内に瘡婚禮の間違の一話耳底に残り覺え居
 しを近頃角の芝居にてけいせい演眞砂中村富士郎の女
 第三段目四段目に用ひ膳所の鮎屋より三井寺にて見
 合して次幕滋賀の里へ智入の脚色に浦辻十内に淺尾
 工左衛門二代目始中村富士郎又三光乳母のお
 松に嵐璃光始中村重次郎智平野屋平平に中村友三先友三
 幸と云三九にせう鮎屋源五郎に片岡我童片岡仁左衛門にて古今
 の大當をとりし事あり是らは役者によくはまり看客
 の意にもかなふがゆゑに當りも取れ共瘤の話の筋よ
 ければ也この芝叟にをかしき説あり或夕暮予が方へ
 芝叟來つて青銅百文借くれよと乞ふいと易き事也と
 て出せしを袂に入れ湖上の雜談をせられき愚父存命
 の頃にて予はまだ幼少なり傍にて話の面白さに聞居
 しが愚父が曰鳥目は何を買玉ふにやと芝叟が曰此程
 本町の曲曲によき夜發やうを見たれば其翹翹間を買はんと思
 へど懷中空しければ拜借したりと云つゝ空を詠時刻

もてうど夜鷹の出句又重ねてと歸られしが誠に飴りなき畸人なりと愚父も跡にて感じられし事あり予も幼心に覺え居て餘りをかしければ筆の序に記置ものなり

鶴屋南北が傳

鶴屋南北は東都近來世話事作りの作者前にも云二にして此名始三代が間は半道道外交りを云ちの役者なりしが番目なり（異本三代の娘に聲を取る）四代目を勝俵藏と呼び狂言道に入て後滑稽道化場を能書後舅の名を繼ぎ鶴屋南北とて建作者とはなりけり此人肚裏に一字の文學なければ狂言に一流あつて入組たる出し物なれど筋からみ合て新しくこれを氣世話と稱へて其頃の人氣に叶ふ其上松本幸四郎二代目の高麗や坂東三津五郎大和屋秀佳今は秀調始岩井衆三郎今此三人の役者の呼吸をが父岩井半四郎の杜者がこよく知り二番目狂言を著せし事數多中にもお染久松うまのころも色半四郎七讀役なり販今東海道四ツ谷怪談お岩の狂言古今の當りを取り隅田川花御所染女半四郎は一番の佳作にて浪花狂言にも相似たる脚色なり其餘は文章猥褻にして所謂江戸狂言として一部の趣向立たるもの稀なれ共近世の痴情にやかなひけん南北風として一時作名を高

くせり文政十二丑年霜月廿七日行年七十五にて歿せりこの人常に棺桶を狂言につかふ事を好み棺を用ひたる狂言を見れば作者は南北也と江戸の來賓は云事なり辭世はかねて正本仕立に拵へ摺物として野送り江戸にてはの節是を配れり當る寅の孟春とせしは大方吊ひと云春まで生きるであらうとのつもりなり

寂光門松後萬歲

菩提所は本所押上春慶寺と外題

異本、元鶴屋南北は歌舞妓役者勤むるは三代深川雲光院に印を残す下拙其名跡を繼ぎて四代作者を業とす文盲にして愚作を著すこと五十餘歳と正本の如く書けり

本堂正面三寶祖師大菩薩文殊普賢佛前には常燈香花を備へ祭旛天蓋を飴り能所に棺をすへ置施主の輩並よく並び半鐘の知らせに付住僧所化がた花やかに出立葬の鳴物に成り讀經始まる實にも妙なる法華經の功力によつて娑婆の苦患をまぬがれすみやかに往生極樂

ト南北思入には自由になるなら野邊送り被下置候各様へ御目に懸り御禮申上度候へども黄泉の

客と相成升れば心に任せずよつて亡者が心底一冊につゝり御出の御方様へ御覽に入奉り升る

一南北畧儀ながらせまうはムり升れど棺の内より頭をうなだれ手足を縮め御禮申上奉り升る先は私存生の間永々御最眞になし下されましたる段飛去りましたる心魂にてつしいか計か有難い冷あせに存奉り升る扱私事もとくより老衰に及び升れば皆々様の御機嫌をも損はぬ内早う冥途へ赴けとは是まで度々佛菩薩の靈夢を蒙り升れど流石は凡夫の淺猿しさに達て辭退仕升れど定業はもだしがたく是非なく彼地へ赴き升れば誠に是が此世のお名残いまはの際の死おくれ萬歳太才若兼まして亡者の私舞納升る間いく萬々歳御長久の各様御宗體の御回向の程庫裏からすみ迄偏に奉希上升

ト是を聞て施主の人々扱は佛に魔がさしたか但しはよみじがへりしかと顔見合せて思入此時住僧棺のそばに立より合掌して

一住僧得入無上道速成就佛身南無妙法蓮華經

ト松明をもつてボン／＼とうてば棺碎けて内より南北額にごましほをあて經帷子にて桶ぞこを

ボン／＼とうち鳴らし

一南「徳若に御りんちうとは御家も戸ざしてましますイヤ」葬禮ありける新佛の年寄親仁の火葬にはイヤ「しらんがあたまへごましほをハリヤノイヤ」末期の水を口に含んで櫛の花をば手に持てイヤ「あら玉のやうなる涙をこぼしてイヤ」御客殿の御位牌堂に戒名並べて見てあればイヤ「常香盤の煙の中に白銀の劔の山をつかせけるイヤ」四十九日の餅をば喰んと鳥が大ぶん舞遊ぶイヤ「住持と所化たちつらりやつんとおならびなされて引導お經始りけるは誠に悲しう葬ひけるイヤ」京の三十三間堂佛の数が三万三千三百三十三體あると申が誠にさやうでゐるかのう「是なるお寺のゆかん場なんどは竹田の番匠飛彈ンの内匠が立たる所のゆかんばんにて一本の卒塔婆が一佛一體誠に因果の守り神二本のそとばが人面獸心三本のそとばは死かね申せば五本のそとばでごほりや／＼と痰が手傳ひ六本のそとばが六字の名號七本のそとばが七字の題目八本のそとばが八苦のくるしみ九本のそとばが

苦痛のお仕舞十本のそばでじいがとふくぐねられけるは誠にめでたうなられんける「ウンといふてたえられける是からそろく萬歳」「ハア萬歳くヤレ萬歳」「さつても是からみんどもらが「才藏なんどもほろりやほろりはつと泣つ笑ひつおくやみ申せばのうヤレのう「旦那寺へ當年のゑほから新佛がまゐる「さらりやさつとまゐる「ホホヤレまゐる「とんしの佛がまゐる「とんしと申せばわれらもとんしだ「なんで又とんしだ「ぼつくりごねたとんしだ「とんしくくくくエ、ホホヤレとんし「穴ほりの三助なんどはかなてこやつるッばしをおんがらかいてふつくりした餅のようなつゆ澤山な所をばかつぼじつてまゐらう「アアまゐらう「かよう申みんどもなんどはむつくり難煮なんどをその椀へ五六ばいもかつくらつらやア餅がのどへつまつてギツクリくくくきくついてやアとんしくくく「とんしとん病よいく病で未來成佛なさしめ玉へ「百千萬の御回向を皆様願ひ上升

ト舞納る此時家主羽織袴にて施主大勢を引連

一家主「遠方の所御苦勞様にもり升御銘々様へ上り升る筈の所是にてお禮申上升萬歳も相濟升てムり升れば御勝手次第に御かへり被下升せト葬禮打だし

文政十二己丑歲霜月廿七日行年七十五先祖代々叶俗名鶴屋南北

右は小杉原五枚の綴物とし存生中拵置しと也餘り洒落たる物故爰に出す南北が忤に幼名阪東鯛藏阪東彦水の後に阪東鶴十郎役者を止め直江屋十兵衛とて作名は出さね共南北の狂言を能吞込て遺稿を綴り抔せしが續て故人と成けり是も東都の名物男なりけらし異本、此忤孫太郎は幼名丑左衛門とて役者なりしが祖父の名を繼ぎ南北とはなりけり祖父南北門人に槌井兵七後増山金八と改む勝周藏後勝井源八と云ふ花笠魯助文京と云ふ高麗金助等あり南北の話残るは後帙に出す

並木の祖宗助が傳

並木宗助並木丈助並木永助とて三人とも淨瑠璃東もの、作者なり所謂豊竹此後歌舞妓作者並木正三より並木五瓶へ傳はれり其祖宗助は享保十二年安田蛙文と共に著せし院本數多中にも清和源氏十五段大切山伏せつたい撮

津國長柄人柱、和田合戰女舞鶴、釜淵双級巴、寛延年間に死し遺稿名殘の作は一谷嫩軍記也並木丈すけが作は那須與市西海硯、荊萱桑門筑紫、容競出入湊、東鑑御狩卷、攝州渡邊橋供養、八重霞浪花濱荻等なり何れも不易の狂言ながら此八重霞は(異本今に専ら流行せし中にも此濱荻は)寛延二巳年三月十八日天満砂原の兄殺しかしくの引廻しと長ほり間屋橋材もく屋濱にて大工と南新やしきの女郎が情死と神崎の涉し場の喧嘩と此三ツ同日の事なりしをすぐに作して廿日に外題を出し廿六日に初日を出せし所古今の大當をとり同年七月末迄打通せしも此三ツの咄は別々にて由縁もなきをひとつ狂言に著せしは並木丈助が手柄と云べし因に云かしくが引廻しの時永々の牢舎にて色は透通る計白きうへ髪の艶よくうるはしく誠に胡國に嫁す王照君の容もかくやと惜まぬ者はなかりしとぞ此頃は科人落着の日はひとつの願ひは御聞届ある事にて何にまれ好べしとありし時油揚げを三枚計望しゆる食する事と心得求あたへられしをかしく戴取透上髪の上へかの揚豆腐の油を絞り附しゆる色光澤よく今死する身にいらぬ事乍ら女の身だ

しなみなりしとぞ云しを皆人聞て感せしとぞ天満神明前にかしく寺とて辭世の印せし石碑あり又南新屋敷の女郎お園といへるは今云素湯具の如く價の安き賣女也大工の穴彫など馴染なればさもあるべし故に是も流の島の内花珍らしきとの文句あり福清の女房於梶が異見の詞にも病氣本復したれば郡内縞に紅の一陽裏を着せて開帳參りに連行うなど尤價の安き賣女とはいへ其頃の質素なる事思ひやるべし此淨瑠璃に限らず都て此頃は心中情死のある時は一夜附とて日數十日も立ば操淨るりに取立し上(異本板元より賣出すと也)書林の店にて番頭手代丁稚を始板摺工表紙屋の職人まで手傳ひて本渡とて入口に丸太圍ひにて木戸を拵へ何百冊何十冊と印せし切手を前に渡し置しを持來ればかの木戸口より一人づゝ入取渡しにする事也今時の如く書本の赤本のと諸處より賣出す事なければ買流行見はやらす事おびたいしく尤價も安ければ院本を好めるものもついに芝居など見ぬ者迄も一冊は買うて見し物と聞り今書林に新本を拵らへ一部の手本の製出來たる折は杉原紙二つ折にして水引にて綴價何程と書部數澤山に求吳よと仲間

をあるく是を入銀帳と云又入銀にあるくともいふ此
譯解せずこは右丸本賣出しの時先に手本一冊をもて
仲間へ披露の時此方へは何十部求むるとて其代銀を
先へ板元へ渡す板元よりは切手を置かへり來る幾日
本渡也とてかへる是ゆゑこの帳を入銀帳とも入銀に
あるく共云し也今は入銀は扱置延銀にても餘計には
賣れぬ事とはなりぬいかにとならば愚作の書物に價
高く諸處より出版する本の多ければ也其頃予が家に
出版せし入銀帳を近頃見出し發明せしゆゑ因にしる
し置きぬ並木永助が著せしは相馬太郎ふまのたろう文談、天
智天皇蒞穗庵、岸姫松轡鑑等豐竹千落豐竹應律等と
同作名を出せり是は實曆年間の事也此東ものとは前
にいふ豐竹座の通號也西物竹本所謂所謂に並木千柳是はも
と田中千柳とて享保年間は西澤に隨がひ東ものゝ作
者なりしが元文寛保には竹田出雲掾弟小出雲と共に
竹本座の作者となり並木と改めけり

異本、竹田小出雲が作も又少なからず時代新薄雪物語
語、軍法富士見西行、日高川入相花王、夏祭難波鑑
等なり三好松洛、並木千柳、長谷川千四等は千前軒
が門子なり

扱丈助永助は瑠璃のみにあらず歌舞妓の狂言も
書並木翁助並木十助並木利助等の門人あり

並木正三が傳

並木正三は道頓堀宗右衛門町に住高砂屋平左衛門と
いへる菓子屋にて年古く住町人也若き比より戲場を
好み並木宗助に入門して歌舞妓狂言を數多著せり霧
太郎天狗酒さかもち醺けいせい天羽衣のほものの桑名屋徳藏入
船話三千世界商往來日本第一和布わふ蒞神事三拾石よしの
始等なり和布蒞神事を名殘の作として安永二巳の
年歿しぬ墳墓は法善寺中に南無三寶正三が墓と碑に
彫刻せり作者道に譯文とて古作の狂言を遣ふ事あり
和歌は詞の古きを用ひて心を新しくせよと定家卿も
教へ玉へりと聞り狂言は此うらうへにて心の古きを
詞あたらしくするをはめ物といふ並木正三が卅石の
神道源八關口平太は淨るりの双蝶々のぬれ髪と放駒
に上下を着せたる也と語りしと也筆力なくては出來
ざる活用實に奇才といふべし近來のはめ物は趣向仕
組詞付其儘にて役者の名付ばかりを改たるは切繼敷
寫しともいはんか耻べき事の甚しきといふべし正三
生涯に當狂言も多けれど世に名高きは宿無團七時雨

傘一名岩井風呂の狂言にて團七茂兵衛に異見の間澤村國太

郎此頃ハ嵐三五郎是もようやく二枚目やつし兩人狂言の相談に来るゆ

ゑ七十餘年先の故人乍ら拘欄好の女童にまで名を知

らるゝ事也是は明和五子年八月廿二日道頓堀太左衛

門橋北詰（異本岩井風呂利助抱女郎富と食客佐助と

いふ者色情より事起り主利助を殺せしを此實説委し

く子が著述讀佛乘にあり之を略す）の床に茂兵衛と

いへる毛剃女郎富を殺せしを翌日若太夫の芝居にて

急作の一夜附にて敵役者中山卯八といふものその茂

兵衛（異本佐助に作る）に面體格好のよく似たれば則

卯八に茂兵衛をさせ（異本元堺の者ゆる夏祭の團七

九郎兵衛の名を假り）大當を取し也尤岩井風呂の狂

言は比翼鳥部山小菊半兵衛永樂や孫太郎の古き狂言の名前或は阿

彌陀池の開帳場を堺の魚市場に直し杯して前に云譯

物也是等をはめものの中にも活取と唱へ演芝居の

作者の仕事にて並木正三の作にあらず夫ゆる始て此

狂言を出せし時には高砂屋平左衛門と正本にも書道

具の飭付も菓子屋暖簾などかけあり宗右衛門町の年

寄を勤作者にもあり太左衛門橋近所となれば幸ひ

所の老人に聞り明和七寅六月中の芝居にても此狂言
を出し高砂屋平左衛門を並木正三と作名を直せしは
正三歿後寛政二戌年五月角の芝居にて中山來助二代目也
始中山猪八後二代目勤めし時なり以前は近邊にてありし
中山文七髪附屋と云
事にても直に一夜附として構はず狂言にせし事也後々
は芝居にしらるゝを名聞に心中情死などする族ある
ゆる風義惡敷なり行とて御差とめなされしと也二代
目並木正三は寛政五六年頃中の芝居前茶屋の主正三
の名をつぎ享和文化の始迄に並木五瓶近松徳三辰岡
萬作らと共に此道に遊しかども一部の趣向立たる物
を見ず唯古き狂言知りにてこれを正三隠居と呼びな
しけり並木十輔も明和中に著せし狂言はけいせい
陸玉川、天竺徳兵衛聞書往來、敵討巖流島宮本武者之助
等也安永に至つては並木五瓶が助作せられけり

並木吾瓶が傳附淺草堂より
文通の笑話

並木五瓶は天明寛政中の作者にて始並木吾八といふ
狂言著作數百番かぞへ舉るに盡ざれ共名高きをのみ
爰に出す鍋祀貞婦競、日本花亦城鹽竈、金門五山桐、
掉歌木津川八景、袖簪播州巡、歸命曲輪敦、けいせ
い黄金鯨、けいせい忍術池、けいせい倭莊子、入間詞、

大名賢儀、天満宮榮種御供、けいせい飛馬始、けいせい
路島臺、けいせい誰伏水、平井權八吉原街、島巡戯
聞書、此狂言の三段目迄は琉球の狂言にて（異本、島
津琉球攻を潤色）させる面白みもなかりしが四ツ目
より今三都にて專出る五大力戀絨これ也古今珍らし
き大當りを取り寛政六寅年より江戸表へ趣きかの地
にても春狂言に二番目を仕始しは此人の功にして上
卷に寛政十一未年に浪華へ歸り澤村宗十郎同道にて
俛雛備淺妻船、源平杜礎屑、隅田春妓女容性を著し嵐
助嵐小六玉船と云澤村宗十郎同道して享和四年に東都へ趣
きかの地にても五大力戀絨浪花にては菊野いろは源五兵衛
源五兵衛宗十郎新七なり江戸にては小萬菊の五
十郎なり金門五山桐五右衛門小環是等を始都て江戸狂
言を京攝風に直し又東都にて仕組し狂言の中にも
隅田春宗十郎の梅などは浪華にても五瓶の作りなとて
來賓のよろこぶこと限なし東都にては大門通高砂町
に居を構へ淺草堂と號表を雷神門の如くに立風樂雷
除香を商ひ門人に風治並木雷次高柳と呼びしは

異本、江戸座の俳諧を好み其比の附合の句に、兩國
の二人かむろは柳ばし」といふ句に名を高くしど
この俳席へも出たるが至つて女好にて其頃藏前に

青我といへる行燈掛けたる水茶屋に廿四五の女あ
り毎日觀音へ參詣の道此女を見染め此店に腰をか
け朝より晩方まで半日づゝ遊ぶ狂言方柳川忠藏俳名
賀之を知つて五瓶に云ふ毎日ノ青我の店へござ
つて半日づゝをられてはさつても迷惑女は承知し
てお手に入りしかと尋ねれば五瓶の曰まだ半日で
は手に入らぬ一日ついてゐねば色にはなられまい
といひし跡にて此女は月圍ひにて三分出せば一月
圍はるゝといふ其女に高料の茶代を費すなど高名
の人どこにか滑稽あり

淺草並木所の名雷神門による戯號なるべし文化五辰
年二月二日東都にて歿せり

異本、元日三節の摺物に上代の寶船を寫させ辱く
も百敷の御壽の畫を略寫奉りて歲端奈加幾代のた
めし始ぞ今日の春春興七種の音のよきかな皆目さ
め歲暮いさぎよき浪乘船や年の灘右辰年並木舍五
瓶これを配り其二月二日京都にて歿せり年六十二
辭世梅は咲我は散行如月や日頃風交の銘々より追善
の摺物出る其内兩三句を爰に出す並木五瓶とし百
敷の御賀の寶船を摹し是に三節の句をつかねて年禮

に來る此方へと申せどはいぬめりと聞て奴僕を走らせけれど呼得ず西の方さして行けるが姿も見えぬよし申す西方へ行て姿を見失ふとはいふかしき事よと獨つぶやきけるが十日を過ずして二月二日身まかりしと聞てもて來る三節を今は紀念と取出し遺文感情を動かし侍る「さればこそ彼岸に至る寶船」晉子堂

芳川、淺草觀音の境内に碑の残りたるに「碑に朽ぬ名悲し花の陰」梅路、「梅の花是も五の字の紀念かな」永車「並木にも殘る匂ひや夜の梅」角馬、彩雲散じやすく美器のもろきためしおしめどもすべなし「名物の並木も海苔の脆さかな」四方歌垣眞顔、花飛蝶驚てなんどはいとかしこき人の見所ぞかしいつまで草のいつまでもと五瓶の作せられし五大力もかたみとこそはなりにけれ「散る花にをしき筆とめ候かしく」俳諧堂葛呂中^略釋尊の方便も並木が胸の作に及ばず「嗚呼五瓶其如月の涅槃像」松甫、「春の霜並木を鶴の林かな」如阜、並木の高き思は我が師の如く思ひ我を又丁稚の如く思はれ常に幸三々々とのみ「呼人のなくて淋しや春の雨」讓屋、作者の心持は色々教示せられしが今朝夕に思出られて「今迄の世話狂言や土の筆」金

二、いかなるすぐせのえにしにや此東に下り廿とせにたらず住居つるに此はるの始つ比より心地常ならず惱みしとて打ふさがれしが

異本、次第へにおもりはべればくすしも術の盡きたるにや餘の人に見せよなんといへる悲しさに神にいのり佛に申せども其甲斐も見えず如月云々如月二日の夕と申に稱名の聲と共に言きればべりぬいかなれば／＼難波を去て東なる梅の盛りに散行との一句を殘されしを長き別の紀念と思へば今は泪の種とぞなりける」をやみなく降るや木のめも春の雨」五瓶妻美與、終焉の枕にありて稱名を勧め侍るに正念に念佛して往生疑ふべくもあらず「今迄の狂言綺語や法の花」獨步庵、同七午年春三回忌の摺物に「異本、菜の花の書を薪水書^{坂東彦三郎後}樂善といふ」て此如月二日は並木五瓶の三回忌なれば志の一句を示しなほ諸君のお手向を希ふのみ

「造り物三年の間梅並木」金二「追善やよつて世話場の山笑ふ」讓屋、亡父より年比のよしみなれば「本讀か經よみ鳥を聞泪」訥子此摺物の繪は薪水也^{坂東彦三郎}讓屋の松井幸三は^{始名新幸後に作者となる}

異本、右讓屋の松井幸三は古作者金井三笑の家に
松井由輔といふあり其苗字を名乗て五瓶に隨ふ元
僧落にして佛事に委し五瓶歿後暫く建作者となれ
り此門人二代目幸三初名新幸大酒を好み吉原に住て牽
頭を兼師の名を穢せり

金二は篠田金治後に二代目並木五瓶となる

異本、金二は篠田金治後に並木五瓶となる此人本
所割下水の御旗本の次男にして狂言方とはなりぬ
性質下戸にして男色を好み一畸人なり文化八末年
五月堺町にて花菖蒲佐野八橋といふ狂言にて三浦
荒二郎佐野の兵衛政經傳逸坊三役中村歌右衛門
後年玉助秋田城之助白砂大助に坂東彦三郎源左衛門姜
玉笹新造船橋二役澤村田之助船橋勇助佐野治郎左
衛門に尾上松助今の菊五郎なり佐野源左衛門紀國や文藏二
階信濃之助三役澤村源之助後宗十郎なり萬字屋八
橋勇助女房お袖に瀬川路考仙女作者は奈河篤助後一洗
松井幸三屋讓大切落合秋田屋敷の場を篠田金治後三目
並木五瓶書きけるが讀ども／＼納らず三度目の本讀
に誰ひとりも手を打ざりければ金治如何と案じ皆
皆の顔を詠めし時思はずブツと放屁しにけり皆々

笑を堪へんとする程猶をかしく金治も赤面しける
折から路考曰此場は難作場にて是より仕方もある
まじ何れも今の放屁にめんじて打升うかと發言し
けるゆる皆々笑ひながら手を打納めたり金治は五
瓶の弟子故放屁で狂言を納めし故四瓶であらうと
興じけり後二代目並木となり建作者とはなりぬ此
弟子に篠田宗六今三代目並木五瓶となりけり

訥子は澤村宗十郎なり江戸淺草金龍山の奥山に(人
丸堂の前に初代)五瓶の狂言塚あり浪花四天王寺西
門前納骨堂の前(傍に同じく五瓶の)墓碑を營て予が
父を馴染の俳優者誰彼と施主の姓名を彫刻せり浪花
に並木三四助吾助伯父並木長藏坂町茶や井筒峯並木吾助幼名並木清造後芝落と
改並木喜多助等皆祖五瓶が門人なり並木五瓶藏財錄
とて劇場作者の祕事を門葉に教んが爲書し自筆の一
小冊子祕藏したりしを先年樋田萬造といへる狂言方
に異本江戸狂言方貸せしが其者相果行衛しれず本意な
樋田萬造なりき事してけりと悔めど詮なし其中に大名題に乗る俳
優者は味方の大將にて作者は座中の大軍師なりよく
指揮して座中の軍兵をつかひ或は魚鱗鶴翼に備へを
立諸萬人の觀的けんぢうは敵方なれば是を日々に降參させず

んば有べからずとの教へおもしろき見立ならずや此人に付ては笑話また種々あり一二を爰に記す或人五瓶に難じて曰奈河龜助が表號は字義にかなへり曲輪教の外題に足下は歸命と書て穴賢とはいかいと五瓶笑つて曰狂言綺語とは是をいへり戯場の表號は學者に見せんとはあらず作者に學文の心あつて金門五山桐と呼べるべきか我書く所は芝居の外題とは云也と答ければ彼人感じて去る因にいふ金門の中入に此村大炊の助本名は唐の宋蘇卿謀逆顯れ唐土に一人の^{まね}扮を残す素友と云^{日本へ渡つて明智左馬之助盜賊となつて石川五右衛門と名乗}我朝へ渡つて後瀬川采女傾城花橋三人を兄弟とする事は謠曲唐船を借し物也御當代にさしてさはる事は世界を謠曲に借るなど歌舞妓作者の用心とは爰なるべし日本花赤城鹽竈の二つめに大星力彌元服する場に力彌役嵐雛助^{小六}由良之助に尾上菊五郎お石に花桐豊松小浪に嵐松次郎幕切に至つて（花道へ駈出す力彌を由良之介呼止め）矢を一本出して折らせ數本の矢を出して一時に折らすに折れず一本の矢は折ても數多の矢は折れまじ敵討も徒黨をせねば大敵は討れぬと教諭して小浪と婚禮をさせ時節をまてと諫める跡にて

心變せぬ誓の大石と力彌手水鉢をこぶしにて打割る由良之助の詞にこりやちからの程を隠すが肝要と云幕なり是大石主税を匂はせたる詞にて竹田出雲が忠臣藏にて淺きたくみの鹽谷殿とあるも同日の論なりと知るべし文化三四年頃江戸堺町葺屋町出火の次第子が家へ知らせの文體に霜月十三日夜五ツ時前兩芝居ともまづ今日は是切と打出し扱葺屋町はわけて明日が第二ばんめ落合まで残らず御覽に入申候と口上書出し則打出し後稽古にて各樂屋中皆残りやうやく風呂に入ものも有り又は顔を落してゐる者も有り此時そりや火事と騒立より早く直に燃立四つ少し過迄に兩芝居残らず葺町まですいと焼出し申候誠に近比の急火ゆゑ芝居茶や其外も中／＼道具其外一つも残さずやきすて申候火元かづら師音羽屋友九郎奈河七五三助殿は右友九郎居宅土藏造の事ゆゑ兼々正本并に道具類等入置申され候所火元の事ゆゑ灰も残らず焼失扱々氣の毒に御座候扱義痰氣にて火事さい中大なやみにて道具片付候所へ行かず折節俳諧師杉甫と申人參り合せ道具を入る籠長持へ熊の革を敷蒲團を入此中へ五瓶這入是を金治と右俳諧師兩人にて兩

國橋詰までかづき參申候勿論兩人共一向に非力にて肩もきかぬ事ゆゑ息杖の才覺もなく折節見せに有合し候金剛杖是は私此前富士山へ登りし時杖に突し金剛杖なり此時五瓶右長持の中にて淺草觀世音を信じ觀音經三遍くりかへし候内痰も漸しづまり安堵仕候全體さのみ大火にても無御座候此位の火事は随分まゝある事毎晩く小便に起候度毎にどこにか一つ宛ある火事に御座候され共此度は町家の建家殊に兩芝居焼申候事ゆゑさすが繁華の地何となく大そうに聞え申候葺屋町市村羽左衛門座來る廿一日より普請に取かゝり則取あへず正月七日初日やはり今迄の狂言ゆゑ一座へどこへも外へいてくれなとの事に御座候堺町中村勘三郎座急に假ぶしにて正月二日より興行の由何さま芝居は随分勢ひ宜敷是のみ安堵仕候先は取急知らせ申上候如此御座候以上霜月十七日西澤様並木五瓶右手紙の外に火事場の圖をくはしく書送り病中に近火にあひ殊に葺屋町はわが住芝居焼失しても洒落たる文體を書送る氣質の闊達なる事推てしるべし此餘にも笑話あれ共事しげければ略しぬ

作をせし役者の傳

都て役者は愚痴文盲にして記憶よきを最上とする也なま中に文才の走りし者は自己の量見にて詞を引直して作意を失ふ事多し役者にて作者と呼ぶ者江戸にては元祖市村羽左衛門中村傳九郎早川傳四郎京攝にては明和安永の頃初代中山新九郎の俸中山來助金柳と呼黒谷文七兄弟なり家名松屋と呼び松屋來助と作名を出す事久し近來にては金澤龍玉三代目歌右衛門後玉助梅玉一齋二代目百村共伯父共云是等は文盲なる役者なれば作意有筈はなければ幼稚より古名人役者のせし狂言を爰かしこ見覺あるを思ひ出我役のよき事を一番に見込み客衣裳體からだのあがき迄勝手によき様に書がゆゑ狂言の趣意はわからず共華美なり狂言の筋なかにまじり響は自分所作事を得ば狂言の中に景事様の事を書我能辯なれば狂言のくゝりに長詞を言ひ又小男にて小手利なれば壁ながら立廻り或は鳥目とりめを隠して詰合など異本或はちどい癖己が常々得たる事にて仕組がゆゑ相手の女形どい癖顔役などには念頃せりふに詞も付れど我休の場の狂言又は中通役者の詞は一向放曠はなはなるものなれば一日の趣向は立がたきものと知るべし

異本、女形顔役などには念頃せりふに詞も付れど一場の

内二件か三件に過ぎず一日の趣向一場の著作は出来兼ね々々は一向往曠にて首尾揃へるには作者の手に掛けずんば成りがたしと知るべし

井筒翁一才字は中芝居^{中芝居}異本濱芝居とありの役者にて兄百村友

九郎を始中山栖藏柴崎林左衛門萩野伊太郎^{大場共云近比澤村國太}

郎の親等が狂言のみ覚えし事ゆゑ振附は相應に出来

れ共作者など業とせん事難しもとより濱芝居の狂言は一切くに入替り一日通しの來賓は稀なれば

狂言一部の趣向に拘はらず一場毎に見渡しさへ面白

ければ佳とせしものなり尤濱芝居にも古來より作者

數多あれど正本を残す事もなく是を作道にては竹田

狂言とよび佳作の狂言有ても歌舞妓につかふを恥と

せしものなり譬は幕明に出たる役者奥へ這入てい

つの間にかへりしやら知れず又花道より建者役者出

て茶屋場とか世話場とかへ來て道具替り奥座敷にな

る時又向うより其役者出て今始て出た様なるせりふ

まゝ有此餘時候晝夜の差別なく重復多しゆゑに濱宮

地芝居にては新作をする共新外題を附る事を禁じ古

來の狂言の外題を借つて附る新外題は京攝とも大歌舞妓芝居より外附る事なしはゆる正本の草稿を月番

の御公儀へ差上作者誰々興行人誰々と書伺濟で狂言

を始る事なれば輕卒には付る事能はず今若太夫筑後

竹田京都にては道場^{今島原}藥師^{今宮川町}此餘浪花北

の新地堀江市の側天満社^{異本天満天神御靈座船荷等}

にては新外題つくる事ならずと知るべし其内堀江北

の新地(兩座)は新作の節は上本^{おぼん}をして新外題を願ふ

事あり如此作法なれば一日の趣向を新作を著さんと

思ふ者は大歌舞妓にて書べし名利の欲を捨し好人か

此道に離れては口に糊する事のかなはぬ者ならば不

知世に雜俳とて冠づけ折句等に苦心するも詩歌連俳

に心を碎くも同じく竹田狂言を綴らんより一場半幕

にても歌舞妓狂言に筆を採るべし爰に作者の名は出

さねども役者にて作意有しものは尾上新七なり^{南部屋美}

鯉三郎^{雀後尾上}然れ共自筆を削作する事をせず其座には作者

あるゆゑ我思ひし趣向あらば作者に咄作者の手にて

則作者なり天明の始新七ふと古代の枕書^{春書共いふわ}

の巻物を最良よりもらひ是より趣向うかみ^{以下數行故}

五瓶に是をかたる五瓶諾して世界を柿の木金助高阪

甚内を齋藤時代にさだめ黄金鯨是なり龍興が新七言

號の姫假に姥關屋に國太郎鑢びつより晝卷物を出し
あら方承知といへる場合に殘れり異本人口に餘かよう
に筋を思付けば作者を見定め書せる事なり舞臺にか
けてはいか程役者の名人にても脚色は作者ならでは
前後の連續仕がたき所あり何にもせよ我して見たき
筋あらば作者に嘶し綴らせ心に叶はねば幾度も再案
をさせ其上にて狂言をいだせば後世に誰々のせし狂
言として殘るもの也我納得せざる役を附焼刃にて急稽
古にする事多ければ芝居に當りをとらず狂言の筋通
らず詮なき事なりけらし

金澤龍玉梅玉が話

近來故人と成し中村玉助三代目中村歌右衛門は曩に篤助
一洗と絶交に及し後は自ら金澤龍玉と作名を出し金
澤芝助始奈河金澤芝後並木金澤一洗始奈河恒助といふ異
取立金澤の苗字を吾助此餘濱松歌國戯作といへる狂言方を
名乗らせとあり者といへる狂言方を用
ひ諷ふものを建作者二枚目の位に昇し我も机に直り
年頃三都にて見し狂言を所々に譯文きりめなま邂逅新外題を附
しものもあれど大約歌舞妓院本の古狂言を少しく
添削するのみにて筆を採るものにも誰か一人一日の
趣向を立る筆力者なければ多くは寄物にて一場は龍

玉自作する事にて予にも代作を頼みし事度々有り前
にもいふ如く役者にかけては古今の名人と呼べる者
なれど作道にかけては一文不才にて時代人名の新古
解らず片腹痛きことまゝあれど首領くしやうの勢に閉口して
諫むるものなし予は一場の代作なれば誂の筋まかせ
草稿出来れば前後讀合す時意の違ふ事多しして始の
あつらへの筋とは世界かはれり予は此役は市川蝦十
郎始市藏初代なりと見込書しも片岡仁左衛門とかはり國太郎始萩吉新升と見込し遊女も松江ことなりとかはれり姫君
の身替りを此場の眼目と見込しも前幕に子役を殺し
血しは用だつなど重復のみ多くこはいかにと問ば前
段の趣向につき取組たり又役者の違ひしは誰々に合
ひ一時の戯に役をふりかへんと云ひし故趣向筆意の
的も狂ひ片腹痛きこと異本的に狂ひ筆も立ざれどまゝ有
再案して與へし事とありされ共當時首領にて其餘は皆門人の役者の多ければ
師の權威に推れて役も納る事なり

異本、既に頼々の狂言本讀の時序の筋世話場へ通
らずして奈河晴助は立腹して龍玉と刺違死んもの
と相口に手をかけしを予もといめし事あり
然其世にいふこばれ幸とかにて首尾わからぬ儘にも

観客よろこび相應の當りを採りし狂言も有けりけい
 せい廓大門美濃正九郎と梳久な混ざし狂言 適傾城花大矢數傀儡淺妻船を種とす 傾
 城百萬石、天満宮花梅松櫻あいじゆのめいさく 此外題の附假名あまり拙
 きゆる再度せし時愛梅櫻松と予が一直せし事あり花
 雪歌清はなぶきうたのきよ 水此外題は薄雪の類聚にはかなへるといふ
 べし天保元寅伊勢御影參の年早春に石川五右衛門の
 狂言をあれ是集めてけいせい雪月花と呼しは龍玉の
 意より出たるにあらず始けいせい價千金と出せし所
 いかん歌舞妓の外題にても千金など、自賞せしは聞
 苦し遠慮すべしと公儀より御差留ありける夫より龍
 玉種々案じ外題を三つ四つも書て伺ひし所何れも惡
 しく都て外題には花鳥風月とか雪月花とか花車風流
 に付たらば上にも障らずよかるべしと其時の御役人
 申されしを聞手代頭取かへつて龍玉に曰今日の外題
 も納らず花鳥風月とか雪月花とか二つの内にすべし
 と仰ありしと龍玉も上よりの指圖とあるにせん方な
 く花鳥風月にては四季になれば雪月花に定め濟しけ
 り是にては外題を付し作者はその時の御役人にて作
 者の附し外題ならねば何の狂言にても外題にも通う
 て調法なり外題は肇の卷にも演る通り一部の惣標に

て何々の世界とわかるやうに附るを專一とす表題を
 見れば五右衛門の世界ならば釜が淵双級巴ふたつどもへ是等は眉
 間尺の故事をとり皇都七條の竈が淵は河原院融の鹽
 竈の故跡残り有を態と五右衛門が釜煎の跡なりと聞
 かせたる趣向にて奇なり歌舞妓にては艶薙石川染け
 いせい忍逢淵しのぶあふみなど古作者は附たり此餘にいくらも有
 べし雪月花は五右衛門に限るべからず是らは手代の
 聞達へと外題を付る事を知らぬ黨のみなれば是非な
 し予も此時三ツ目髪結床の場三二五郎七に歌右衛門
 妾めかけりつかさ司つかさに中村松江前野左島さじまに淺尾奥山始淺尾友藏家老治
 郎大夫に嵐璃寛始徳三郎世に目徳といふにて一場代作せしが此外
 題の間違を聞てせめて假名をかへて雪月花とすれば
 語路しげなり共よきにと笑ひしこと有り此前年けいせい
 繁夜話はなやの中へ藥種屋の番頭隣家の妾にほれ忍び合ふ
 夜盜賊に見付られ金をとらるゝ場を龍玉自作にて書
 入たり是は蜚の藻汐艸とて江戸芍藥亭長根の書し雙
 紙の中にある噺を脚色せし物也其のち東都より役者
 必讀妙々痴談とて役者の常のみもち異本役者常住座臥とありを批
 評したる書出けり此中に近松門左衛門金澤龍玉をな
 じるとの口畫を出し文中に歌右衛門文化中にいまだ

芝翫と呼びし頃江戸中村座にてさるおやしきの最員より扇面を携へ是に畫なり共發句なり共書くれよと乞れしかど風雅の心得なく甚迷惑せしが是に達ての所望に是非なく庵書をしたゝめ芝翫寫すと惡筆にて書けるを其人もちかへつて後坂東彦三郎俳名薪水筆とあり後に樂善に見せ異本芝翫の餘り拙し是に賛をして興をそへよとあるに薪水は書畫共に出來たれば「様先や蚯蚓のたくる五月雨」と書そへ芝翫が拙畫を補ひしと有り都て江戸は役者の書畫を愛する所なれば日々扇面など書くされば耻をかく事あり此後芝翫も少し宛は風雅の道を學手跡もこるに上り後々は狂歌發句も少しは出來る様になりけり東都にて蜀山先生に狂歌發句の代作を頼み句帳に發句狂歌等蜀山自筆の書一冊龍玉祕藏して予にも見せたる事有り

異本、江戸にて坂東三津五郎秀佳最員と二人奴の所作をせし時太田南畝先生蜀山秀佳最員にて芝翫を始めて見物に來られたり芝翫是を聞くと直に棧敷へ挨拶に行きしかば蜀山芝翫の扇へ思案もなく書かれし狂歌「大和屋と加賀屋と二人奴らさこんのだいなし外にねば」是より蜀山も芝翫最員となり狂歌

の發句の代作を句帳に書てあたへられし也蜀山自筆の書一冊龍玉祕藏して予にも見せたる事あり

かくの通りなれば一日の狂言著す事はかたけれど全體根氣強く工夫に懲つては寢食を忘れ藝道にはげむがゆゑ歿前には役者改名妓女の名弘め等摺物にも追加の發句狂歌などあまたよみけり語路てにをはの分らぬながら中には相應に出來たる句も有り天保の始天保山の川浚の時銘々鈴を腰に付テウ／＼と懸聲をして砂を運び或は踊步行て土砂を踏かためし事有り其時異本其時梅玉の狂歌にありの狂詠に「呵らりよと儘よてんばの川浚砂といふ程踊る蝶々」此餘にもあれどぐだくしければ略す惣じて京攝の役者には近來風雅の心がけあるは尠し（異本元祖中村富十郎は書を英一蝶に習ひ英慶子と云元祖中山文七は書を能書て黒谷淨光此兩人の書し書畫とも今に残れり）東都にては諸所の御屋敷より扇面團扇（帛紗）など（に句を）好まるゝゆゑ役者立ものは勿論安き役者にては俳諧ぐらゐは嗜めり中にも市川海老藏七代目團十郎は代々其角流の發句又狂詠をよくし手跡も拙なからず五代目白猿向島は相應の博識にて一代の狂詠甚だ多し長夜の書溜

徒然文談など文集今に残れり當時の白猿御影年に浪華にての發句主親もゆるさせへ○ぬけ參り是等白猿流とて一派あり前卷にも演る如く役者は藝道に疑り遊藝のたしなみには俳諧發句の一通り位は心得おかしたきもの也奈河一泉が弟子に奈河元助後江戸にて本助といへるものも是も元狂言方にて有りしが東都にも中興作者ともしきゆゑ次第送りにて建作者と成り天保六末年浪華に歸りしが龍玉根氣弱り狂言も仕盡し上妙々痴談にたしなめられ(作者を止まりしかば)作名(龍玉)を譲り度心あり此本助へ繼さばいかにと予がすゝめに二代目金澤龍玉となりけるがさまで殘せる狂言もなく去寅の春黄泉の旅に赴けり此人の書しは去る酉の春けいせい玉手綱三幕目に入間屋喜十郎に歌右衛門四代目番頭彦七に玉助前歌右衛門梅玉講釋師左内前に工左衛門娘お三富十郎是は江戸市山藏話にてテレメンコチリメンコと言ふ藥屋にてろくろ首也と嫁の惡名を付し話を先龍玉玉助梅玉が指圖にて筆を採らせしはなしなり

西澤傳奇作書初編(言狂作書)中の卷終

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)下の卷

目次

- 一 近松半二が傳獨判斷叙
- 一 近松徳叟が傳
- 一 崇禪寺馬場敵討の實話
- 一 上田秋成中村大吉が話
- 一 櫻田治助が傳
- 一 金井三笑本讀の話
- 一 瀬川女臈が話
- 一 福森久助が傳
- 一 辰岡萬作が傳
- 一 歌舞妓古作者の話
- 一 小暮滑稽書様の論
- 一 西澤一鳳軒が傳
- 一 狂歌浪花土産月名殘
- 一 月並本讀會引條
- 一 閑樂ひまろくのつらね

西澤文庫傳奇作書初編（言狂作書）下の巻

西澤綺語堂李叟著

近松半二が傳獨判斷叙

獨判斷叙、近松半二の、浪速の人、穗積先生兒子了、自年紀後生、好了破落戸社裏勾當、住在烟花陣裏、托地入拘欄部了、仍舊會造曲本兒、那社裏各位、擡舉做了竹本坐的傳奇作者、江湖上張揚了其名、大凡那舖謀定意院本數十百種、筆兒上來七夾八打張了、延握佗戰聞的本事使看的列位打起精神掏乾了、演那悲哀伎倆使看的各位掉淚來叙這淨的本事使觀的衆位翻腸一般胡蘆、演些消魂種女且的、手段使叢人羅漢思情嬌娥相嫁、如他光捉紫園的小^三幼兒大的老^三官粧紛的娼女兒的飛絮瓢花的奶々小娘々の保兒的幫間的做事、莫不寫其真的弄出將來了、當真與門左做了一本帳築後傳奇的老手了、小道若年時於京師做有隣軒徒弟習學傳奇曲兒有隣物故後虛華地撇了彼曲、近間做綠野居士

寓在江南遊聞名的染大的門、打起舊癖學院本兒音操、只是小童一個老禿不記掛江湖上多口的譏諷、只顧習學了、因與那半二甜意投學只管相投、這箇漢子儀容上不十分招架、小道也是一箇躲懶的、借一步做伴還京師、做了弄友暫時的拋京小道歸浪速、災星臨身羅疾病故了、不等近松千歲的壽、被無常的風吹倒西方、小道風吹兒聆之了吃了一寒、倚于小兒兒假寐、恰然鼓聲琴琴裏隱々の抵面現了半二、髻髮種々穿半晒夏布絆柳條棉束腰拿、若烟皮包舊短烟管、鼓歌一般的肝張音的謳道、小可有一件掛念、陽生裡著生涯的安心、做了一小冊子了、欲示同好、當不得俄子兒點鬼簿了、紀官人昇小可同好會造曲本兒、深蒙青些難得二官人爲小可將把小冊子去付着衆則箇隨手托庇成果得了、言畢也着了常套琴裏消了、小道因興、紀上太商量了付了梓、普示江湖上的同好追薦法事云爾。

于時天明丁未十月上浣傳法門人平安疎懶堂仙人向十萬億土的彼些聊振粹哩

右は近松半二が遺稿獨判斷の叙にて此人の傳にかへたり著せし狂言實に數十百種中にも名高きは蘭奢待新田系圖、烟袖鏡、本朝廿四孝、太平記忠臣講釋、近江

源氏先陣館、京羽二重娘形氣、伊賀越道中雙六、新板歌祭文、妹背山婦女庭訓、關取千雨幟、三日太平記、いろは藏三組盃、心中紙屋治兵衛等枚舉に限りあるべからず天明より天保の今に至つても院本歌舞伎にもてはやすこと全く此人の筆力の餘光成べし此獨割斷といへる一小冊は辭世にかへて疎懶堂と紀上太郎が梓に刻同好の人々へ配りし書也實に作者の一見識ありて當時の稗史小説を編る輩も半二に及ざる事遠し

近松徳叟が傳

近松徳叟は始徳三と言て浪華伏見阪町の娼家大榭屋と呼びけり俳名雅亮幼名頃より芝居を好み院本作者近松半二が弟子となり歌舞妓作者となりけり尤伏見阪町には大坂伏善其頃の歌舞妓の銀主なるが故勸により始は並木五瓶、辰岡萬作、並木正三二代目等とともに作せしが寛政八九年より建作者と成り著せし傳奇は伊勢音頭戀寢劔伊勢古市十人斬のことは伊勢古市にて大夫齋宮といふもの色情により大勢のものに手疵を負せしを彼地より文通にて知らせしもの有て直に狂言に取立しが當年は嵐小六前嵐雛助と云女形夫より叶雛助とて立役三月廿

九日死しければ悴嵐雛助始秀之助後四月五日より父の替り役をしたる盆替り狂言にて小六生前増りの大當りを取り續て敵討安榮録小栗栖も、ちどり鳴門白浪淺草靈驗記印南數馬大川友右衛門いせい挾褌けいせい會稽山寺子屋慶二即池上七郎紅楓秋葉話是其一年前棧物語とて小説の中に岐蘇の山道にて寺に宿す酒の中に虎口をのがる千仞の谷底に孤家有其主は老婆にて此日の盜賊の黨也内に小娘有てこの男を憐み老婆山寨へ知らせに出る間に譯を告此男を落し母への言譯に死す是水滸傳の棗商人淺草の孤家石枕の話を合せし如し夫を種として脚色しもの也後京師にてせし時けいせい棧物語と外題に賦しけりけいせい花山崎荒木撰津頭と古曾部主水異本と俠競廓日記芝叟がいせい宮傳荒木村重齋藤内藏分有と授は中入に仕組三つ目筑紫權六チギリンタイの駒は上田餘齋が作の小説秋雨物語の中に有一話を取組り（後京にての外題は艶色秋雨譚と付る）欄自來也譚栗枝亭鬼邪が競かしく紅翅船越十右衛門に嵐吉三郎続作の小説也是は文化五辰の春北新地の或茶屋にて振舞有て藏やしきの留主居行かれ此供の者臺所に居ける所へ名うての妓

女來て二階へ上らんとする時筭を落しけるを僕下に居けるゆゑ拾うて渡せり藝子憚りと言さま僕の手と共に握つて戴取りける此僕遠國に育ち始てかゝる美女に手をにぎられし事故嬉しさ心魂にてつし屋敷へ歸りても片時も忘れられず女郎と違ひ藝子なれば小金にては求められず人の花と詠めさせんよりはと無分別なる了簡を發して其後曾根崎北の新地の途中にて一刀に切殺しけり藝子はもとより馴染にてもなく思ひもかけぬ者の手にかゝり不便さ言ん様もなしかの僕は其場を逃去り大仁村麥飯屋の實の子の下に隠れ居しが翌夕方空腹に成しかば這出て食を乞ひし所を召捕て出しけり此頃は太仁村茶店賑ひし時分也是を徳更かしくの世界に仕組しもの也名作切籠曙一名高槻騷動是も噂ものにて伏見京橋靜實錄といふ古狂言に里見伊助といふ役名有りそれを借し者也けいせい廓源氏物草太郎と金魚や金八いろは歌櫻櫻花は文化三寅年二の替りにて大當りせり此四五（此四幕目カ）に岐蘇の巻おろしの場あり百姓與市兵衛に二代目嵐吉三郎滅法彌八本名斧定九郎に淺尾工左衛門初代鬼丸にて斧九大夫中山文五郎やんまといふ山岡覺兵衛猪三郎（異本嵐後三）兩入爭ひ（異本連判を耶に作る）瑠寛の兄

とり合ひ）谷底へ落込與市兵衛定九郎是を助けんとて倉に入て釣下ろさるゝ狂言也是は四天王剿盜異録馬琴作小説也の中より見出したる也けいせい英艸紙舞扇南柯話三七全傳南柯夢曲亭の作島廻月弓張は椿説弓張月馬琴の作等也（異本斯の如く小説ものを脚色こと來賓も好ける故皆々當りを取りけり）此節は小説稗史も各讀はやせし程有て作も後々の物とは違ひ筋もよく面白かりしが後は是を拘欄しほにせよ此役は誰にさせよと歌川豊國葛飾北齋等に書しめ狂言作者の心得にて著述するがゆゑこれを歌舞妓に脚色む時は却て古くなり作するに詮なし文化七午年八月廿三日に徳三は歿せり近松門喬後江戸に歿す近松加造桂諱と云近松万兵衛等は皆徳更が弟子なり（近松柳は半二が末弟子淨瑠璃濱芝居の作者）といふは此柳の弟子なり）

崇禪寺馬場敵討の實話

寶曆八寅年三月に淨瑠璃にせし敵討崇禪寺馬場は作者竹田小出雲今寫本にも書本にも有て世によく知れる所也返り討となりし兄弟が墳墓は北中島にあり此實説を去る老人の夜話に聞し所返り討にあらず合計にて有しとぞ生田傳八郎は武術も鍛練してさまで卑

怯なる武士にもなかりしが郡山の藩中にて遠藤宗左衛門を意恨有て討取り浪華へ來つて谷町弓師丹波方の食客と成て居しが其頃浪華には劔術柔術を勵む武士多く此生田が門弟と成けり丹波は常に心易き曾根崎新地の妓家花屋何某が離れ座敷をかり受傳八郎を入れ武藝の稽古場となしたり此花屋何某その一兩年前に死して後家と娘二人あり姉は病身にて藝者を休ませ内にて保養をさせ妹は舞子なれば勤に出し其外抱への女郎一兩輩も有て相應に暮しけれ共主なく成てより離れ座敷は茶室の好に建しまゝ空しく明家同前なれば丹波が引請にて生田にかしける傳八郎の武術もよきゆゑ追々に門弟ふえ豊に月日を送りける内裏と表の事なれば病身の姉を傳八郎方に客來の節は茶の給仕等に出せしをいつしかわりなき中と成り懷胎しけるを母親知りけれど多くの門弟に尊敬せられ富るとにはあらねど暮しかたに不自由もなければ幸ひの事にして娘が心のまに／＼暮させけり然る所ある門弟に誘はれ生玉邊へ傳八郎の出し途中にてはからず遠藤(異本遠城)治左衛門に出合ひ名乗かけて敵を討んと乞ひけれ共傍には門弟も數多居る事なれば

段々と言なだめ明後日北中島崇禪寺にてと約してわかれぬ跡にて門弟口々に尋ねける故傳八郎にも是非なく郡山にての次第を物語りければ若手の門弟血氣にまかせ先生のお手を勞さるゝに及ばず我々が討取んと進むを段々と申なだめて曾根崎へ歸りぬ扱も治左衛門には石町異本の谷町の借座敷にかへり弟喜八郎に其日の子細を語り約束の日遅しと待わび當日崇禪寺馬場へ行けれ共見えす空敷歸りがけに丹波方へ催促に行ける丹波方へもとくより傳八郎の書面來てあり今日ほもだし難き用事出來明日は相違なく彼所にて勝負を決せんとの文言也翌日こそ優曇華勝りの敵討と兄弟諸共に小踊りして翌日未明より宿を出長柄の渡場さして行けり爰に傳八郎日限を延せしは門弟の銘銘面白き事に思ひ且は後學の爲などゝ同道せん事を乞へ共傳八郎にはまさか兄弟の者を討とて大勢の門弟を連行んも耻かしとて此評定に日限一日延しけれ共達てとのぞんでやまざりければ是非なく翌朝門弟の銘々を同道して渡しを先へ越すより兄弟も渡しを越へ勝負にかゝる迄は大體寫本の通りなれば略す互に姓名を名のり立合ふ頃はまだ薄暗き頃にて人顔も

臚に見ゆる計なれば松影より遠矢にて兄弟共に射て取んと雨の如くに放しかけたり兄弟是を事共せず傳八郎の雙方より薙刀と刀にて打かゝる傳八郎雙方に受ながらまつしぐらに戦ひけるが木陰よりは眼つぶし或は瓦石礫を投出し誰か一人顔は出さねど投かけ射かけする程に兄弟の眼へ砂や入けん互に喜八兄者と聲をかけながら傳八郎に討てかゝりしが傳八郎にも疵やあうたりけん三人共に掛聲もかすかに成りひつそと成て靜まりける夜も明きらば道通りの者の目にやつかんと門弟共そこ爰より馳集り三人の傍へ立より見し所三人共朱に染み傳八郎傍に分れ兄弟は體をにじらせ負重なつてぞ息絶たり門弟あはて傳八郎には印籠の氣付をのませなどして介抱し兄弟の骸には惣々よつてとゞめをさし身に立し矢を抜とりし折遠藤兄弟よりは傳八郎の身に立し矢數多かりしとなりさも有べし鼎の足の如く三人の向ふ所へ的も定めず遠矢を射しゆゑ生田の身に立し箭の多きは是實說正銘也と思はる斯て門弟共師の助太刀をせんと思ひしに計らずも三人共に射殺せし事ゆゑ人々周章虫の息なる傳八郎を介抱がてら肩にかけ長柄の渡し場

迄來し所に川端にて生田はあへなく息絶けり今更詮方なければ其儘長柄川へ投込み互ひに後日は沙汰なしに濟さんと言合せて歸りける程なく往來の者の目に付ければ兄弟の年格好をしるし檢使を頗ひ意趣切にて事濟み傳八郎の事は誰知らするものなければ弓師丹波も花屋何某にも吟味もなくそのまゝ事濟みけるとぞ

上田秋成中村大吉が話

爰に哀をとゞめしはかの花屋の娘には生田が胤を懷胎し月も重なれど夫にはかへり來らず其節噂にきけば崇禎寺にて二人の侍の死骸ありといふに驚きもしやと家内より見せに遣はせし所終に見知らぬ面體なりと聞き少しは心落付けど昨日まで大勢來りし門弟誰一人も來らずしかし幸に吟味もなければ只家内のものゝ心の内には何方へか落延しものならんとひそひそ咄に日を送りし内かの姉嬢臨月來つて男子を産み小兒は達者にて育てども母は何角と心勞せしにや産後に空しくなりければ後家は小兒を乳母にて育てかの客人はかへらねば殘りある金子調度の類を皆幼子に付け孤の事なれば不便さも一しほまし心の儘に

育し所追々成人にまかせ茶屋置屋の忤には似もやらず書畫琴碁は更也詩歌連俳など高尙なる事を好みけるが妹娘は藝者を勸居し内東國のよき客付て身をひかせけるゆゑ客に隨がひ東都へ趣き母も孫の成人のみ樂しみ居けるが姉には死わかれ妹は他國へ嫁し便なく思ひしにや孫が十七八の年終に空しく成にける此孫實は生田傳八郎が忘れ儘なれど世を憚かり花屋何某が内に育由緒ある武士の胤也と近しき人も思ひけるが誰か知らん此人成長して寛政の頃和歌及俳諧をよくし著述の書數多編せし上田秋成又餘齋とも無腸共呼び近來名家の逸人也其身は生田の姓を深く包み母方は遊里者なれば風雅の友に賤しめらるゝを嫌ひてや後には京師に住み心の儘に身をもち放蕩なる事自笑其碩等が口調にならひ聞耳世間猿といへる戲編を著はす讀て知るべし其餘前に言ふ兩月秋雨の稗史を著し近頃癖物語とて勢語に倣ひし滑稽書は無腸子が遺稿なり又花屋某が妹娘東都に於て男子を産む成人して俳優者中村大吉家名鳴尾屋俳名巴丈といふ始娘形の頃は川藤尾綱太郎文化元子年坂東彦三郎同じく浪速へ來り同十一年秋東都へかへり後役者を止め剃髪して彼地には

てけりかゝれば無腸子と巴丈は從弟同士にて巴丈は生田傳八郎が爲には甥也然れ共餘齋は氣性高ければ是をいはず大吉も深くつゝみ語ることなかりしとぞ此咄しは無腸子が成立よりよく知りたる老人より傳へ聞く虚實の程わかり難けれども餘齋が著作に縁あり巴丈が俳優に成たれば劇場に因みあるにより此事をしるし置事しかり

櫻田治助が傳

櫻田治助は俳名を左交と呼て東都にて中古より作者も多き中に寶曆の末より劇場に出淨るりを著すと百廿餘段に及び此道に遊ぶ事五十年生涯の内淨瑠璃塚を築ん事を願ひしに計らず文化三寅年六月廿七日歿せり默了院左交日念信士と號す其志を遂げざる事を舊友門子悲しく翌卯の六月一周忌に辭世の一句を彫り淨瑠璃塚と號して柳島妙見の境内に建てたり此淨るりとは京攝にいふ院本と違ひ東都にて所謂常盤津富本とてそれ〴〵流義あつて所作事道行等文談を演る京攝にて云江戶歌の事也いはゞ歌淨瑠璃也（異本）清元（富本より近來別る）などの餘流出來て京攝の淨瑠璃を東西の論なく義太夫と唱へ此歌の文句を淨瑠璃とゝのふ

る事也)芝居にてする時は文談の長短によつて七枚十枚の綴本として賣る事定例と成り其俵淺間嶽積雪戀關戸辰駕色相肩の類なり

異本、この櫻田左交は壕越二三次俳名齋陽の門人にて師

の齋陽も豊後淨瑠璃を數冊著して其名高し左交師齋陽の文句を和らげて當世に演べたるこそ此人の才智といふべければ左交は吉原に至て心を

よせ廓に遊びて女郎の痴情をよく吞込み文句に傾城ごと多し年七十に及べど毎夜〱吉原へ行て大門をくゝらねば寢られぬといふ程の畸人也江戸の人氣其土地の風儀をしらんがため遊所場風景の地を望みて變宅すること度々老人に及びて花川戸柳の井の隣なる家に住て柳井隣と戲號せり又其頃左交吉原丁子屋に思を懸けたる女郎あり何卒これに近付きになりたしと種々心を碎きふと思ひ付たる淨瑠璃の心を用ひつくり花の梅が枝に文を書き結び付け懸想文の見立にし自分かたげて丁子屋の

格子へ投込みければ女郎皆々立寄り騒て文の名宛を見れば誰の君さまへ櫻田と書あればさすがの全盛丁子屋の名の譽と部屋に飭り女郎より櫻田へ返

事を送りし事ありとぞ是よき年をして眞の戀にあらず流行に遅れじと我が名を高く弘めんが爲めなり是等は餘人の思ひよらぬ名弘めならずや二代目櫻田治助は始松島陽助とて笠縫專助の弟子なりしが後櫻田に取立られ松島半二俳名と云改名して櫻田治助左交となる師匠櫻田風をよく吞込み淨瑠璃を書事妙を得たり

阪東三津五郎秀佳が七化の所作事に著せし源太箴の梅松風の汐汲など今京攝にても專諷ひはやして文談のこれり此汐汲の文句によれる渚に世を送るとの唱歌は行平卿の歌なり歌舞妓ものゝ作にはよく穿鑿したりしと尾崎雅嘉浪華歌人も百人一首一夕話に賞められたり二代目左交亡師の女房を五七年も扶助せしが不和となり名を返へして松島調布と改名して後終れり此弟子初め松島音助後半二となり今三代目櫻田治助左交とはなりけり

金井三笑本讀の語

金井三笑は江戸古狂言作者の冠たる人にして壕越齋陽と對せり此三笑草稿を至つて細字に書く我も本讀の折は目鏡をかけて讀事也よつて紙數甚だ少し格齋

にて紙を惜まるゝかとも思ふ者あり三笑曰く細字に書くは本讀の節脇外より延上り役者共が見たがるもの也文字あらければ讀るゝがうるさゝにかく細字に書也といはれし由其上本讀の席へはいつも長き刀をさしてゆかれひやうし幕と讀切るや否直に刀を取上げ柄を握てサア宜しいか惡いかと万一の場の批評をいふものあらば一刀に切て捨んとの勢ひにてあたかも首實檢の場の竹部源藏の如く八方へまなこを光らし長き刀をひけらかすが故此權威に恐れ今少し有たしと思ふ所も我慢して直に納め手を打しとぞ是らは實に年功にも身柄にもよるべし予も毎度本讀の時は三笑の心持にて利法權の三つの旨を以てすれど若年といひ帶刀すべき身ならねば是非なし御城代とか御奉行にて作者をすれば如何なる惡き役を書く共直に納るべきと獨笑捨る事も多かりし三笑は作者より役者の方上手にてありつらんと思ふ

瀬川如阜が語

元祖瀬川如阜は始女形にて瀬川乙女と云し者なるが後作者の道へ入りしかどさせる狂言も殘らず河竹文次又六兒といへる者（二代目瀬川如阜となり）天明七

末年東都より上り役者中村仲藏俳名秀鶴に付て角の芝居へ出勤しけり此仲藏は志賀山一流三番叟世に舌出三番叟と云を始め翌申年歸國するまでに狂言數多作せしが忠臣藏の定九郎尤是までは丹前にはを仲藏江戸にて私家人の俄雨にあひ尻からげに蛇の目傘の破れしをかぶり走りしを見しより思ひつき黒羽二重の紋付に朱鞘の小とせしより今誰にても此拵へとはなりけり又千本櫻の權太も銀あたゝまとどてら姿と鮎屋の忤なれば馬士めきたる拵にてはあるまじとて工夫の上三の口椎の木はは青月代の旅形にて主馬小金吾に中村京十郎是を相手にかたりの時銜と知つて銜とりとらるゝ廿兩と言ながら荷物より卅兩ばかりの包を出し廿兩かぞへて渡す内延上つて是を詠めエ、まだあるなアとの仕うち銜とてはまだ仕馴ぬ思入と拵らへのよかりけるよりは又今も秀鶴の形をとる様になりけり鶏鳴吾妻世話事といへる狂言は江戸にて秀鶴土手の道哲大切は姫と道哲の二面の所作事垣衣戀寫繪大當りせしを市川團藏今の團藏の親なりかの地にて見置き五ヶ年先に江戸より歸坂せし當座に隅田川のち續俤と外題を直し聖天町の法界坊とて秀鶴の當り狂言を我がものとして出し大當りを取

りけりこの狂言の源は秀鶴なりければ此鷄鳴をせんと云一座のものより夫は團藏が名をかへて仕てゐれば如何あらんか」とどめしかど秀鶴の曰く市紅の團藏の件名あられしまね也我は誠の道哲を見せる也と出せしが又市紅よりは見所多く男はよし江戸訛の惡坊主の仕打にてさすが秀鶴は名人なりと一座の役者までが感じけると也河竹文次も秀鶴と共に江府にかへり後如阜と改め瀬川路考に隨がひ後菊之亟仙女後享和三亥年に京攝へ來り此時好縹子帶屋おはん路考長右衛門片岡道行瀬川の仇浪は此如阜が作なりけいせい宮傳授二つ目長岡勇齋に片岡仁左衛門小西行長に嵐吉三郎同妻唐織に瀬川路考宋蘇卿に大谷友右衛門此場は如阜が筆を立たり其秋瀬川路考は其傍淺間ヶ嶽淺間巴の丞に中山庄太郎傾城奥州の靈に瀬川路考大切相生獅子餘波英石橋の景事を暇乞として如阜もろ共江戸表へ歸りけり近頃歿前には狂言を書ず外題のみを附けり此人中古芝居作者に似合ぬ博識にて外題割書等は字義を正し聊も誤なし仕組は時代王代ものを書く事を得たり

異本、其頃本屋宗七といふ二枚目作者あり初武井藤吉又豐島
大豐島は江戸の郡名にして大作は大作者といふ心

自日本一といふ故日本ノと仇名せられし元増山金八の門人にて本所龜戸天神の社家より出でたる人なり社人の頃吉原の女郎に馴染み金に支へて困り寶藏へ忍び入りまんと首尾よく天國の寶劍を盗出しさらば質屋へ持行き金にせんと門前へ出て柳島へさしかれば俄に空掻きくもり業平橋を渡らんとせし時しきりに稻光して雷鳴轟き寶劍を持たる儘立すくみになり倒れし故菅神の御罰恐しと心付取て返へし寶藏へ元の如く納めしかば天氣快晴したり不思議といふも恐れありと作道に入てより語りしとさまでのこせる狂言はなけれども此道に入るもの皆一癖ある故をかし今は斯様な話さへもなき輩計にて風雅もなく滑稽もなき事は非なし

福森久助が傳

福森久助は後暫く(異本玉卷恵助の門人にて始め玉卷丘治といふ後に久の家を憚る事ありて)喜宇助と書併名如阜南北等と同時に久の人也並木五瓶元を見ならひ京攝の院本を江戸狂言に引直すことを得たり譬は關取二代鑑の秋津島を民谷源八に直し鬼嶽を堀口源太左衛門とし翌日殿の御前にて若殿の跡目を試合の

勝負にまかせるを堀口門弟を連來て民谷を罵り額を割てかへる内記は高倉隼人の如く推舉の誤りに切腹する分の事と屋敷へかへるあとにて源八切腹して坊太郎に血汐を吞せ翌日の試合に勝すなど無難作に譯文たり安永天明の頃中村重助俳名故述と言建作ありけり此人の頃にも専京攝狂言を世界人名を呼かへて遣へ共誰も是をしらざりしとかや寛政中に江戸淺草御藏前に敵討ありけり悉く實説予が著述續續佛乘に編てあり略之直に狂言に仕組敵討靚鷹的といへるは京攝に古き狂言大和國非人實錄を後外題を改め敵討郡山染ともいへるを近松門喬江戸へ持行き松井由輔金井三笑の子也が作にて其まゝきりはめたる也都て東都は京攝の院本を一向不知近世女義太夫など流行して少しく淨瑠璃を覺えたるなり夫ゆる右に演る常盤津富本大薩摩河東一仲新内説經などの古風今に残り眞の淨瑠璃はしらぬ筈也作者古淨るり本を祕藏して譯文きりばむの事有ども其道のものさへ知らぬ程の事也附ていふ東都にて琴歌とて近世山田檢校が作調したるもの數種ありて京攝に弄ぶ端唄をしらず婦女子に三味線を習すにも富本常盤津長唄などを教ふる事也長唄とは安宅松などをさしていふ上方

の端唄をめりやすと唱へ又上方唄ともいふて稀には彈諷ふて陰氣なりとなじれり並木五瓶の東都へ行し當座は端唄をかの地にてしらぬがゆゑめりやす本と唱へ黒髪雉子雪いさゝめ夕空などを拘欄にて諷はす折は二上りとか三下りとか印て五瓶調ぶるとして弘めしもの也京攝にても中古までは宮古路宮園國太夫重太夫など數種ありしが當時は淨瑠璃端唄の二種に止り其餘は江戸唄と號して常盤津富本清元長唄を流行らす事とはなりぬ元音曲鳴物は異國より渡り九州地より關しにや筑紫琴を始豊後節薩摩節などのふれば京攝にとゞまり夫より東武へ移りしものゆる本竹豐淨瑠璃琴三味線の唱歌を悉く知らぬも斷りなりかし東都狂言作者も藤本斗文津打治兵衛純通興三兵衛常盤津田平増山金八寶田壽萊松井由輔松井幸三木村園次村岡幸治田名圓八より近年本屋宗七田島此助梶井兵七重扇助勝井源八三樹屋二三治などの傳を擧るも事繁ければ後編に譲つて爰に略す見る人子が杜撰を責る事なかれ

辰岡萬作が傳

辰岡萬作は浪華島の内疊屋町に住寛政享和中の建作

者にて著作の狂言抄からずけいせい楊柳櫻譚國女太平記遊屋辰五

郎事東海道戀闌札此中入は伊達新左衛門に尾上新七

美姫重の井に芳澤いろは後あやめ江の事驚塚官太夫に山村儀

右衛門登にて重の井に心をかけ口説ども落す其上何

もの、胤にや懷妊しければ不義の相手を吟味する段

に新左衛門は家老なれば重の井を預り不義の合手を

詮義する所誰か知らん其男は新左衛門にて有馬の入

湯の折節酒の機嫌に湯女を黽る姫重の井は堅くろし

き新左衛門の氣性に惚て湯女に替つて添臥をせし一

度の情に懷胎せし也と語る是にて新左衛門は不義も

のとなり上下大小をとられ追放となる家門佐々木玄

蕃頭に三栞大五郎初三升時藏又改て調姫の乳母とす

る切前戀女房子別男の重の井新左衛門の紋切形となる此

二つめは桂川長右衛門に上下を着せたる趣向也と萬

作は云けり曩に云正三が卅石と同じ考へなりけいせ

い春陽鶴は大久保武藏鎧といへる寫本を其まゝ仕組

しものにて宇都宮騷動と日本橋大坂の馬切を書し本に

て一説には辰岡徳三と兩人にて狂言に出さん爲め先

に寫本にして出し置しといふは非也此寫本面白けれ

ど虚説多きゆゑしかいふか猶可^レ考世界を太功記に

做ひ三輪五郎左衛門大久保忠教阿波屋太郎助金井三九郎

花井三三役淺尾爲十郎柴田修理之進勝重本田上野河田歌左

衛門に嵐小六眞柴久吉井伊掃部三七信孝長七二役に市川

團藏此狂言古今獨歩の大入大當りをせり中入に五郎

左衛門炮燂頭巾長刀にて柴田の旅館へ手に小松葉を

一把提け杖を突き出て來て先日は鶴によばれし返禮

に鶴一羽進上申すと投出す宅間玄蕃に山村友右衛門

惡口の詞に貴殿は大坪流の馬術達人也と見ゆれば大久保

聞せし鶴じや〜とこの小松葉どふして鶴じや扱は

老耄めされしかと言ふにイヤ三輪五郎左衛門虚言は

吐ぬ先頃爰にて鶴の馳走に預かりし時お氣に入らば

何盃もかへよといふゆゑヲ、喰ふ〜といへば大久保

云仕舞には吸物の椀の中に菜ばかりゆゑ此様な鶴

ならば手前の庭にいくらもあるから重ねて持て來よ

うと申たのだ下瀬川采女に泉川桶藏傾城園菊に中村

野鹽兩人を三輪の謳曲にて柴田釣夜具の中へ寢させ

る所釣天井を和らかに仕組しなど辰岡が趣向也此信

孝の役も柳營の公達ゆゑ男も優にやさしき様中山文

七二代目文七びん付や也にさせる積りにて書し所中の座へ勤め

是非なく團藏にさせしが此人小男にて移り如何と案

じ居しに市紅段々工夫をこらし大和橋にて早切の太刀打を役として勤めしより今に市川流の狂言と也けり銘々得たる所の工夫ありたきもの也當世寄族撰是も寫本にあり白銀屋與左衛門に山村燈藏竹源藏に新七鶴木屋本の助に小六序切に桃園に義を結ぶ容に合せ此三人をせり上にしたれど惡口に當世きふくせんといひける故狂言取替姉妹達大礎を出しけり近松徳叟と兩人の作にて辰岡は金襖物を得時代徳叟は御家狂言を得意とすれば序馬場より甚内殺しの和らかみは徳叟二つ目出立は辰岡三つ目岡崎徳叟四つ目普傳の場は萬作五の返り討道行は徳叟六敵討は萬作也時代世話と氣のかはりめ雙方共に筆力を震ひしゆゑか古今の當り狂言となりけり艶競石川染も此兩人の作にて稽古中嵐小六三月二十九日に死しければ悴嵐雖助始秀之助中村十藏小珉子に親の役石川五右衛門石田の局をさせ四月五日始めしに大當りしにけりけいせい遊山櫻扇屋花扇遠山甚三吉原細見圖遠州中山染是は世に云中山問答也忠孝譽二街雪國嫁威谷花燈淀川語馬士平太片岡仁左衛門渡守源八澤村宗傾城忍逢淵五右衛門濱眞砂續石川五右衛門いせい高砂松を書納として文化六巳年九月三日に歿せり

辰岡は實より花を得徳叟は花より實に入るの脚色にて此二人歿してより後斯る作者を見ず此辰岡も安永五申年未だ狂言方にて春狂言に北條五代記會說の中入に三浦彈正の役に三柵大五郎初代遠風謀逆あらはれ軍兵大勢相手に立廻りの時萬作は拍子木を持ち附を打けり大五郎立廻りの内ふと萬作を見し所如何したりけん禪はづれて男根を出しながら一心不亂に木を打ひけり大五郎をかしく小聲ながら萬作陽物が出てあると言ながら立廻りけり軍兵銘々之を聞て萬作まらが出てあるといひ様長柄の鎗にて突かけ之を知らずれ共萬作は耳にも入らず大五郎始軍兵共立廻りながら萬作尿が出てあると大音にて掛聲の如く口々にいへ共萬作更に心付かず此立廻を打しまひぬ大五郎軍兵を皆々切すてんとする時エイと矢聲をかけ花形大仁に嵐雖助小六花道よりせり上げ反謀を請繼彈正の首を落し宗尊親王の還御に紛れて向うへは入跡管絃残り嵐文五郎金打文五郎とて小男にて上手なり由解大助仕丁の形に出て向ふを急度見る姉川大吉北條時頼の御臺にて出て大助人も知つたるその面體ではといはれて文五郎ツカ／＼と戻り石燈籠の油煙を鼻の下に付るホ、

通れと大吉あふぐ文五郎長柄の傘をちよんとかたげ
るを拍子幕になる是昔より評判の幕也近比淺草靈驗記大川友右

衛門に中村歌右衛門梅玉の實交雷神門の幕に一文奴にて鎗を

ちよんとかたげるとき此油煙をつかひし事あり尤文五

郎のは時代狂言なれば面體をあやどる事勿論なれど

歌右衛門の折はお家狂言なればこじ付也共是らは人

の喜こぶ仕打なれば故人の藝風を移す事老練のなす

所也扱も辰岡萬作は幕しまりてより樂屋へ入皆々ど

つと笑うて前の事を語りければ萬作始て心付附を大

事に思ひ皆々の聲の耳に入らざりしと赤面ながら笑

ひける大五郎萬作を呼び我役を大事に勤るは頼母し

後々適れの作者となるべしと賞けるが後建作者とは

成ける何の藝にても凝るとこらぬとは違のある者也

歌舞妓古作者の語

京攝にも寛保延享の頃の作者には田木幸助澤村文治

市山角志爲永文蝶淨瑠璃作者爲永太郎兵衛の弟子也藤川茶谷松本佐流

長谷川傳治淨瑠璃作者長谷川千四が弟子松屋久左衛門豊田一東實曆

後は高木里仲英霞鳥岡井正平松田百花境喜平など

(番附評判記等に名前のれども)一部の趣向殘らず殘

念也中にも竹田治藏は淨瑠璃作者竹田出雲の門人秋葉權現廻船話清

水清玄六道巡り銀閣寺祈始假名草紙國性爺實錄等を著せり

異本、此秋葉權現の二つ目日本駄右衛門に中村歌

右衛門加賀屋歌七梅玉の實交街あらはれ花道へそろ／＼と歸る

月本圓秋に中村四郎五郎呼びとめる所をとくと呼

ばずに仕舞ひし故歌右衛門せん方なく花道へ入り

しばしあつて花道より歸り來ること普く人口に膾

炙する所爰に説く歌七は元加州金澤の浪人にて人

品甚よく中年より役者となり上下容はべつしてよ

く寫れり故に此歌右衛門にても伊賀越の澤井城五

郎にても今のやうに燕天かづらはかけず青月代な

り品柄よく街とは見えぬ故四郎五郎も呼びかねた

るが今例となりて誰がする時も呼びとめぬ也役も

のを見立する作者の第一の心得也

安永後五十助爲川宗助中村阿契津打亭助筒井半

二増山太郎七春木元助竹本三郎兵衛佐川藤造江戶市魚丸

岡和七後江戶へ行市岡頑記是らの人皆建造りとなるべき才足ら

ず残り多き事なりかし

小幕滑稽書様の論

曩に云喜怒哀樂の四情の外に小幕と號して道外色敵

半道等の勤る齣をかしみを旨として作る事也是を此道に遊ぶ人まで手軽く書ける様に思へ共謠曲亂舞の狂言淨瑠璃の滑稽齣とおなじく來賓を笑はせんとて下がゝりの惡身差あひの事をいへば誰も笑ふものなれど夫となく腮をはづすばかりに笑はせるはいとなしがたき業也東都の風來山人平賀源内の洒落本皇都の銅脈先醒の狂詩以來滑稽本年々歳々出板すといへ共十遍舎一九が膝栗毛初篇より四五篇迄本町庵三馬が四十八辯浮世床に限るべし狂言の四情は求めず其自然に有（異本此小幕ををかしがらせんとすれば今時の俄茶番の如くなりて拙し）小幕師とて古より芝居には絶す一人づゝはありしもの也大松百助といひしものはいつも狂言に舞臺にて物を喰事をする故今小兒食滯せし時は大松が過し杯いふ中古にては中村治郎三中山文五郎やんま坂東岩五郎坂東壽太郎親大谷徳治其後は淺尾友藏後奥山淺尾國五郎中村友三嵐團八桐山紋治始利八とて詰問なり等各顔つきよりをかしきとか形の不束なりとか見付所ある者を見立書事也此うちにも中山文五郎大谷徳治を此道の名人とする也近來の滑稽役者は假初にも尿桶小便壺など穢きものを舞臺につか

ひ或は裸身になり陰囊を出さぬ計の惡身をする事はとし譬はゞ人に笑はせんとて脇のしたをこそぐり笑はせるが如きいと淺猿し近時は此役者もなければ作者は猶更なかるべし狂言の書習ひに小幕なり共書せよとは了見ちがひの甚しと云べし書にてはい細密なる書を盡して龜畫輕がきの墨畫を書が如し練磨の功を積ずば書事あたはじ文五郎俳名美男やんまといふが大船久右衛門ひよつくり兵藏藤屋伊左衛門徳治が湯屋泥坊治郎三が諸葛幸平の正本を見ても嚙かしと思はれ獨腹をかゝゆる事也昔咄の中に或人鰻を料理せんとてとらへしが手の股より首を上へ出しけり左の手にもつ又上へ首を出す又右の手にて段々に握りなどする内鰻に付て空へ上り終に雲の中に入つて戻らずなりぬ翌年それの月其の日一周忌の追善の半へ空より短冊一葉落ければ見るに一首の歌あり去年のけふ鰻に付て昇りしがいまだに空へ上りこそすれ裏に兩手叶はず候ゆる代筆にて申上候と書たりける此話など品よくてをかし小幕の滑稽を書はかやうなかたちに有たき物なりかし又新作の歌舞妓狂言に一齣か半齣かは淨瑠璃の文を書入るをちよば入といふ是は始趣

向の内に其役者を見立操仕立になくて叶はぬ事あり
其時は淨るり(ちよぼ)を加ふべし文句は成たけ役
者の振りの仕よき様に書べし餘り文花になづみては
舞臺のびて面白からずさればとて自他のわからぬ院
本は書べからず歌舞妓の來客にちよぼの文句まで聞
とる人はなければども院本に氣の有人は批判を言ふも
の也

異本、中昔迄は歌舞妓は淨瑠璃の眞似をせず淨瑠
璃は歌舞妓を似せず續耳塵集民屋四郎五郎
俳名江音の撰の中に音

羽治郎藏は淨瑠璃に仕立ることを遂にせず其故は
元來操淨瑠璃は歌舞妓を眞似て語り人形も役者の
眞似をして行ふ也然るを歌舞妓より操を眞似と
歌舞妓衰微の基なりといへり澤村長十郎宗十郎の
祖也のも

其心にや淨瑠璃事を勤むること嫌ひなりしに銀主
より望つよく國性爺に新四郎故姉川
の祖和藤内長十郎
甘輝の役元より心に入らぬにや當らざりしとなり
死物の木偶を活たやうに使ふが故近世吉田辰五郎
はおやま遣ひに妙を得故人の格を外して端手に遣
ふ來的くわう丸で活てゐる様など悦ぶ是尤なり今歌舞妓
役者やゝもすれば道具まで木偶舞臺にて手摺を出

し黒子の後見人足音をさせちよぼ太夫出語りにさ
せ人形仕立にするを是とす重井筒上の卷四ツ辻な
どなり其後我も〳〵と木偶を眞似る來的も取違へ
丸で木偶じやようする杯と譽るとはなりぬ活物
の役者人形の死物の眞似をすること手柄なるまじ
と思ふ近世中村歌右衛門梅玉の
こと竹本組太夫藍玉の
ことと
同座にて娘景清八島日記島の場合吉田千四に遣はれ
首振をせし話あれど後編に譲り略す

所作事に歌と淨瑠璃所謂
豊後掛合等の折は歌淨瑠璃異本歌
豊後
りの文句ども成たけ筆力を盡して書べし後々節付の
うへ世上にも彈諷ふものなれば拙文にては心耻しく
なるもの也狂言により謠を囃子に遣ふ時は内外の内
正しき謠を遣ふべし新作の謠には節付あしくて聞に
くきもの也淨瑠璃にても新うた獨吟の歌等にても新
作をせし時は役者へ書拔を渡す迄に早く床淨瑠璃
三味線囃
子鳴物方頭
一人有へわたし節付出來次第に先へ聞べし文句の
わからぬなりに非言を語り諷ふもの也是は冠字とか
故事人名とか言聞せ語路の運びを吞込せ置ねば作意
に違ふ事多し心得べき事也建道具も手放れ次第筋ら
せよく見届置すんば書割等に誤りあつて貧家のあし

らひに築地塀足代垣を置あるは貴人の館に世話欄間をかけ夏の山家に雪持のかき割をし能舞臺の橋懸りを左右に付なんどする事まゝ有惣稽古にさしかゝり造作多き時は初日のび混雜するもの也かゝる誤は作者の不穿鑿となる事也道具付を渡すとき棟梁と對談しよく誂の道具は言合め置べし

西澤一鳳軒が傳

我父西澤一鳳は祖正本屋太兵衛の頃は上久寶寺町三丁目に住其節賣出す院本の奥書にも音節は此道の父清濁は文句の母なれば正本まことに珍重すべきもの也豊竹上野少掾と印せり其悴九左衛門俳名の奥書に傳奇新法判意扮戲未生且淨丑淨寓基授文儀共武儀凜耶活手段具託弦誦談又伍齣付可笑樂院本掩的詞曲者清傲之云耳豊竹越前少掾（本ノマゝ）大坂心齋橋南四丁目西側西澤九左衛門板と印此外に右傳ふる所の正曲の調は節博士何れも其品多し七行和漢大字のかなづかひを世間あやまりて斯く類板を出す甲乙てにはの違ひ纔なりとても正本にあらず此故に西澤九左衛門義教改て梓に壽き予花押の記を添る事しかりとも印せりこは寶永正徳の頃なり後享保の院本には

（異本右謳曲心通俗爲要故文字有正有俗且加文采節奏）爲正本云爾高弟豊竹越前少掾豊竹筑前少掾江戸大傳馬町三丁目鱗形屋孫兵衛大坂心齋橋南四丁目西澤九左衛門板と記せり一風著作のものゝ南水漫遊といふ書に萬石通の小野屋膏藥の連ねを賞曲亭が燕石雜誌種彦が用捨箱にも見えたり享保に死してより悴九左衛門其子利兵衛と連綿のうちに内本町二丁目に宅を移す夫ゆる本町本利と呼けり父祖より院本の板元なれど明和安永の頃院本大に廢りて歌舞妓専ら新作與れり依て父祖の志を一變して戲場を好み作名を一鳳と呼び歌舞妓はじまりて以來の書を集め作者奈河龜助並木五瓶近松徳叟辰岡萬作芝屋司馬叟を最員にして筋書を渡し書上げさせ本讀内讀にはいつも首頭と並んで一番に聞添削をする事例となりけり戲場の書を筋書とも詞書とも根本共臺帳ともいひ三都の作者俳優のみ讀事にて他見をゆるさぬ物にてありしを素人の好人にも讀せ後世誰々が書きしと作者も殘れかしと寫本に製したて一部毎に讀方の通言を書てんがきくしやめいゝのせりふがき也トとがきトの下にある文なトがきと云役者のほたらき心得

を書 ▲ムり 舛御座りますの略字にて至急 ▲鋳 仕打銘々の振りにてする ▲立廻 世話だち共大勢立廻るを大立とも ▲思入 調を一寸思案するを氣味合 ▲宜 當意即妙を云 ▲疾々 とく／＼手早き ▲見何となく見物への ▲留 立廻り或は詰合の ▲丁々 組子とりて打ぬ内 ▲合方 役者せりふの ▲唄 舞臺へ出這入 ▲返し 道具かはる ▲鳥屋 花道 橋懸り 右の出口中古まで 舞臺は能舞台 ▲臆病 口左の口ゆ ▲向う 花 々々 拍子木 ▲留の拍子木 是にて幕開くとか ▲心意氣 じつとなる 様々あり 吞込す 早める 屹度なる 能所 坏いち／＼ 讀方を記し 賣出せしゆゑ 今時の如く 弘まり 梨園など 來賓に出難き 貴人方にも 讀又遠國の田舎芝居にも 筋立言合せの世話なく 正本を持行事となりぬ 故に 今我家號を呼んで 三都とも 正本と云ふ 文化九申年臘月四日に 歿して 釋淨西と法號す 此年の夏東都狂歌堂眞顔 天明より狂歌連四方連と稱す 息柳亭千萬多書工辰齋浪華に 遊歴の 内狂歌の友たるがゆゑわが内に 宿せり 其頃の俳優も風雅の友に加へ 四方連を組吉野和歌の浦を 始祇園會天神和歌祭に誘引して 仲秋東都へ 歸國に及び 留別の會の折から 西澤の家號に 倣ひ 正本仕立のかたち にせし 狂歌の

摺物を製し 風交のかた／＼へ 配りけり 外題に 東都の書方を交へしは 狂歌堂主に 送るがゆゑ也 正本に 因みある ゆゑ 爰に あらはす 當る 申秋狂歌浪華土產月名殘本町橋の場、 雛雄、辰齋、眞雛、珉子、眞顔、かぶら坊、千萬多、年布留、魚鱗、眞垣、百成、瑠寛、太夫本父一鳳造り 物舞臺一面の 橋舞臺先波板下座の方障子屋體也 椽先に 三寶かざり 付いつもの所へ 月出ると 幕あく仕出し 大勢出で △一、噂すれば 影さす 月の太夫さん ○一、アレ／＼そこへ 見えるは／＼ 珉子一、さし向ふ月の桂の花道の、程よき所に 峯の松が 魚鱗一、珍らしや 今宵くまなき月のまへトヒヨ／＼と 雁ぞ渡れるまがき一、月にとぶからすのみかは 鳩までも 戸屋の内にて ばた／＼とする 雁いち羽おつると 月の辰齊一、あり／＼と 片敷袖や 宿のさむしろ 百成一、宵の間の黒ま／＼と 切て 落すより 仕かけの月のいで、さやけきチヨン／＼と 道具も廻る 眞三郎一、盃の顔も 傾く 山の端の月下座の 藪たいみより ぬつと 出て 本一、月のひかりは しようムり升 年ふる一、遠せめは 宵の程より 太鼓三味月は 峯に ぞせり 上となる 眞ひな一、月に ほれまだしき宵と 詠む うち夜あけの 鐘のごん／＼となる ひな

を一、いつしかに今宵もふけて月は、や深山の奥へツイト這入れり蕪坊一、鎗ぶすませうじ取のけ見る月に氣も浮瀬で大立と成る折々に月をもてなすこなし有てちまた一、あやしき雲のふるまひじやなア立かゝる雲を見事に投のけてうた垣一、かまはずとゆけト月にはまく

文化九年壬申八月大吉日日數六十餘日大々叶

狂歌板元

西澤一鳳

右の内真雛といへるは家兄利兵衛幼名助市俳名を鳳堂と呼けり此年の冬一鳳死したりと東都狂歌堂へ申送ければ浪華土産の外題と同じく月の名殘にて有けりと眞顔よりも申來りける鳳堂眞雛も父の跡を繼し所天保十一子年二月廿九日歿す法號は釋鳳音存生の句を探れば「元日もやすます暮ぬ水の音」「漏屋根をついでに直す菖蒲哉」「染^{しき}まで霧の香嗅し野の祠」「もちつとで時雨にあふぞ瀬田の橋次男利助幼名利藏幼少より戯場を好み堺筋通清水町に住で書林正本屋利助（書林榮海堂は義弟に譲り）父の名を繼ぎ西澤一鳳軒又狂言綺語堂共呼けり俳名は秋聲庵滄々始蒼々亡父が良闇忌祖一風が本然忌に當りし時先

中村富士郎も五十年に成ければ追善には女鉢木の増補を著せり其時の番附を招物にして今の慶子より配れり
五十回忌の追福も實に光陰は矢車の紋所其縁に寄る段書は

加賀の梅田に
よる御馴染の
＊定紋越中
の櫻井に寄る
御存知の＊
の替紋上野の
松が枝に寄る
御最員の
の詠紋

將^{まさ}其時の着到に離^{はな}其足の武者ぶりは思の外な焚火の返報情にこもる三木の其名芳經世が忠心
會稽雪後日鉢木^{本領合三ヶ庄}
扱も其後の雪降に細布衣の艷容姿は以の外な子故の愛着筐^{かたみ}に残す三人の其名懷し白妙が貞心

捻梅の紋は梅玉佐野源左衛門經世、裏櫻は淺尾與六の紋にて佐野源藤太經景、光琳の松は今の慶子元松江共常盤とも言ひし頃よりの紋也父祖の狂言を翻案して改名李叟とよぶは幼名利藏と呼びしゆゑ也
又天保の始の頃東都戲作者花笠魯助浪華に來り催主

となつて一泉皇親東山眞鶴が原金澤龍玉梅玉等と共に本讀會をせんと謀りしも魯助俳名は東都に歸り梅玉一

泉も故人となり書瓶とはなれりける

閑らくのつらね

天保辛丑の春予東都に趣き著述の内其冬中村座堺市村座ふきの町の劇場焼失しければ暫の連ねに倣ひ閑樂の

連ねを演て戯れし事有圖を紋にこち附鉢の木の梅も櫻もほだ椿と成雪を明りに冬籠一陽松劇場第一番目に書て三建目源藤太經景に西澤李叟新塲座と印し夫好は阿房に似て飛て散財し人は色情に依て徘徊す元より名題の情け者梅の浪華の西澤から花の吾妻の名所を兼て見たさの雪の暮古郷遠く立出て勸めに

新狂言月並本讀會

湖上の李笠翁は唐山編戯文漢其雷名を耳にきこらいびんかん多冊の傳奇を編て世に傳る事夥し平安の自笑其積は皇國の戯作を編出操淨瑠璃の劇文も門左一風に益開け出雲半二に愈巧也夫よりこなた歌舞妓の脚色も口建したる往古はしらず正本に詞書仕肇てより江戸に榮陽三笑あり浪華に正三龜助有其他は邂逅作名ありといへ共皆牽合附會たゞ糟粕を嘗るのみ元來演義小説は文人才子の偶然

助聲 奈河一泉堂

判者 西澤一鳳軒

場づゝ御認有ならば催主の幸福甚しからんといふ時代物世話物御草稿の上新古に拘らず連續致候分は判者校合有て御作名のまゝ狂言に致させ申候以上(以下異本になし)淨瑠璃は節附相成候て出板申候間役名は誰々と大座に御仕組の上催主迄御知らせ可被下候

會席例 月なん松の尾

聽衆 歌舞妓上り太夫連中

催主 金澤龍玉 花笠魯助

異本こゝに閑樂のつらねの圖あり
ふわと乗物町歌の名におふ成駒にまてと一聲かけら
れて袖打拂ふも古嗅く客をふるのは女郎の野暮ちぎ

れ具足のつぎ合せ古狂言に飽果て新場の魚の朝市に
柿の素袍や烏帽子籠市川の流れ一樹の影逸物の木ば
に跨長刀ならぬ切筆追取勝間上げて着到に罷出たる

某は祖父が作意の北條時頼記子々孫々に至るまで道
崇殿のもて餘し源藤太經景といふ難作者當年積つて
十八歳もひとつ重ねてやがて四十に手が届くも何と
若いじやムリ□んか明暮遊ぶ一鳳がもふいくつ寢て
正月と松梅櫻三番叟三座は此身の三箇の庄是が株木
の大太刀とホ、敬白

文化十酉の春より卅餘年の此のかた戯場に遊び傳奇
脚色する事十萬言に過たり櫻はいつも白雲と見紅葉
は常に錦と詠め夏雪を降らせ冬帷子の物好は幼稚す
かしの化物話にひとしく狂言綺語の變體取るに足ら
ざらんや始瑞寛梅玉に趣向をたてそめ巖獅慶子が首
領の劇場に筆を弄び東都にては白猿さる翫雀が首領の梨
園に戯編をのべ此春筆をとゝむるに就て竊に己が著
作の大概を告る是自得の見にして初入の門子に授る
のみ

時天保癸卯年晩春

西澤狂言綺語堂李叟

劇場傳奇作者新狂言を著述の時は本文に出せし如く
初めに世界寄をして筋書仕組仕事にかと云内讀草稿のよ本
讀此内役者のあつらへな聞狂言納まれば看板外題を出す次に書板
讀合より稽古にかゝる此内道具附衣裳附小裂附小道

具附は狂言方にさせ番附書本等をする内鳴物節付調
ひ稽古かたまりし時中ざらへ又附立とも云ひつ幾日
より始ると日披露ひびらを出し惣稽古ひらこれを惣ざらへとも
足揃とも云翌日初日なり出揃目出度打納めの日を千
秋樂と云此餘に口建くたぶつゝけ小返し等急稽古の時に
通言あり又狂言を書ても遣はざる時は是を御藏にな
りしと云

西澤
文庫傳奇作書初編(言狂作書)下の巻終

西澤文庫言狂作書跋（此跋異本になし）

玉の貴き瓦の賤き三歳の嬰兒もよく分てりされど玉に朝鼠あり瓦に銅雀あり爰に此一帖古へ今の俳優に筆を弄び思を述し人々の傳をあげ其玉の屑其瓦の美なるものを集めものしたれば塞翁もみなむ日あらば樂しむべし衰頹も見る時あらば笑ふべし我樂しみ我笑ひて其しりへに一瓦を添ふ

白髮少年場の主

西澤文庫傳奇作書拾遺叙

往昔北條越後守平顯時は武州金澤に文庫を營建して内に和漢の群書を納め儒書には墨印佛書には朱印を用ひ世に金澤文庫と賞し上杉安房守憲實再興有しかど荒廢して今は書籍散失せりと聞此西澤文庫は予が友西澤李叟が其祖より傳はる竹豐兩派の院本は素より八文字舎が戲編を集めもて墨印を押亡父の集めし三都戲場狂言の正本には朱印を押數萬卷の書を綺語堂に藏むる實に西澤文庫の名偽りならじ曩に天保癸卯の春康熙帝が天地一大戲場の聯句を世事是狂言綺語と賦し言狂作書三卷を著し翌甲辰の冬なにはづに作者此度冬籠と自詠し讚佛乘三卷を輯録せしは狂言綺語堂の謂なるべし弘化丁未再び東都に遊び此夏歸坂して紀行の狂詠戲文を集めて綺語文草五卷讚佛乘の二輯三卷言狂作書の拾遺三卷を著す李叟は幼名利藏と云しにや湖上笠翁を象る物歟書肆の通號を本利と呼て遊戯三昧風流一鳳軒傳奇脚色の名を賞して

月雪に花に日本李笠翁

時嘉永己酉初冬

洛東山の隱老

白髮少年場主識

西澤文庫傳奇作書拾遺上の卷

目次

- 一 俳優者七部の書の事
- 一 昔狂言浪人盃の筋書
- 一 同氏神詣の筋書
- 一 北の新天地五人切の實説
- 一 霄庚申桂川情死の話
- 一 南北が遺稿極樂の連
- 一 江戸作者三升屋二三治が咄
- 一 同 自墮落の連の寫
- 一 東都戲場名題付方の法
- 一 同 役者年曆珍重記
- 一 同 三梨園樂屋雜書
- 一 木村園次村岡幸治が話
- 一 戲作者著編拘欄話の論
- 一 聲曲類纂の作者名寄

凡十四條

西澤文庫傳奇作書拾遺上の巻

西澤一鳳軒李叟著

俳優者七部の書の事

役者論語に舞臺百ヶ條を著す元祖坂田藤十郎師匠杉九兵衛と云花車形の書置く書にして心得藝鑑昔の作者富書置く書あやめ草あやめがはなしを福澤五郎後人の爲耳塵集名人のはなしを金元祖若女形の名人芳澤とめたる書也賢外集染川十郎兵衛の俳名を賢外と云聞覚し佐渡島日記蓮智坊と云佐渡島長五郎の法右七部の書は俳優家の龜鑑なる物安永五申の秋八文舍自笑の板なり藝鑑に曰何事も時に隨ふ習ひなるにわきて狂言の風は時代品替れり昔狂言盡の頃古今大當りを取し浪人孟氏神詣の狂言こそ古風なれ

昔狂言浪人孟の筋書

萩山の家中高坂采女といふ武士馬上にて使者に趣く途中にて道の景色などほめ家來迄せりふ渡り采女が曰向うの館は賀君のお國なれば國境より行義正しく

何れも兎相なき様にといへば皆領掌の答あり謠に成ると采女馬を廻らししと行向うへ深編笠着たる浪人者あゆみ來てしほ々と平伏すれば家來答めて何者なれば慮外もの笠を取て片よれるといへども答へなしイヤ推參なと侍共よらんとする所を采女ヤレまで彼者我に向ひて平伏の體見ゆれば是全く慮外にあらす去ながら笠をとらぬは心得ず是そな男某に向ひ用有氣に見えたるはいかなる人にて何の用事子細きかんとありければかの男詰て采女殿には御堅固の體先以て大慶至極以前御懇意の拙者なれど年へたれば聲も聞忘れ給ふべし今日此道筋を御通りと承りあまりおなつかしさに最前より待受御馬先に平伏いたし乍ら御勘氣を蒙し身なれば顔を貴殿に見せるも恐れ有又面目なく存慮外の編笠よつ平御めんと詞の内采女つく思入有てむ、扱は貴殿こそ以前の傍輩轟辨右衛門殿な此方もなつかしく存る某は御用の道筋馬上は御免編笠を慮外と申にあらすお顔が見たいお斷の段何かくるしかるべきさあ笠を取給へ辨右衛門殿に違ひはあらじと詞かけられ扱てよくこそ御推量いかにも辨右衛門が成の果お恥かし

やと笠とれば先は御無事でおひさしやと互ひに經りし物語聊の事にて勘氣を得られし貴殿申出さぬ日とてもし何とくらし給ふやと問はれて辨右衛門あゝ忝なき御詞浪人の身なれば朝夕の煙もかつゝ習置し謳の袖乞無念とは存ながらもと諫言過て御勘當か

ならず時節を待れよと其元の御詞をたのみに今日迄命永らへ候也御上使とあれば殿の御名代御目見いたす心地仕る是を浮世の思ひ出に致す了簡隨分御無事に御勤あれおいそぎの妨名残りは盡すお暇と泪ながらに立行を暫とといめ仰の如く今日は殿の御名代追付御勘氣御赦免有て所領安堵の印の盃を致さんハツアこは有難しと又手をつけば采女扇をひらき途中の馬上取あへぬ心ざしの大盃いざゝつげと小姓にいひ付れば同じく扇を銚子としつゝ思入吞こなしさあいざと辨右衛門にさす此お盃といひお志の深切いつは吞すとしてうどたべんと三度戴き吞思入有て時刻うつると立ざまにお志の御酒に酔たりと足もとひよろゝ國を祝ひ禮をいふに舌廻す小歌ぶしこなたは馬上に泪ぐみおさらばゝと別れ行幕
此一段にて狂言大當りせしとなり此餘昔の狂言は多

く衆道の趣向有けり若衆形の立ものは若女形より高給金なり其時分には町々にも衆道はやりし事は自笑其積が兩作の傾城禁短氣に男色女色の大問答などあり讀て見るべし

同氏神詣の筋書

殿さま氏神詣遊され六法の出所作あり跡に曳馬行列踊り其頃の歌二上り殿のお馬はさび月毛連錢あし毛鹿毛かすげしとゝ打てばかけあがりお江戸そだちの髭男お馬の口をしつかりとつりてんゝ髭男つりてんゝゝつりてんゝゝりんゝゝゝりんとはねたるいさみ馬つなぎとめたる戀のせき札と此唄にて舞臺へ來て殿皆々太義じや休めゝ家來手をつき先殿様には神主方にて御休息と歌にて皆々はいる奴共はけしきを詠め小姓の器量を評判して艶之丞がよいやおらは友彌殿に惚れたと色々噂するを侍出何をたはこと御小姓の噂今一言いふてみよと咎られてそりやこそと跡を見ずに逃這入れば神奴お神樂々々と呼はりて侍はいる所へ艶之丞出て神前に向ひ拍手打主君國家太平御武運長久と祈念する折から茶道珍才うしろに立艶之丞が袖をひき小聲に成てそのも

とのお爲を申さん殿さまの御寵愛は其もとお一人と思ひしに此間は専ら友彌殿に御鼻毛を延し給ふ拙者はお使に参るこなたは神主へ参れと仰付られは跡にて友彌殿と殿様と契らせ給ふはかりごと御油斷あるなと焚付てお使に走り入艶之丞腹を立様々友彌め憎やはらだちやと妬のせりふある所へ殿様おたちといふ内に家來數多出て並ぶ殿立出給ひ友彌に仰せて艶之丞を呼給へ共返事せず殿見給ひこりや艶之丞もはや歸らう是へ参れハッ爰へこいと手を取引よせ給へば艶之丞物をもいはず殿の顔を見てふいとふり切橋懸りへはいる是は扱きやつもついと行おつたと草履取を呼給ひコリヤ艶之丞の仕方はどうじやあろと思ふぞと尋ね給へば草履取又殿の顔を見てふいとふり切つuitといはいるかくのごとく家來共を一人／＼呼び問給ふに皆々同じくふり切はいる扱もめんようなる今ははや引馬計りに成たと馬を引よせこりや馬よ何と艶之丞がふいといた心のどうであろと思ふと問給へば馬も殿の顔を見てつuitといはいるが幕カ

今思へばかやうな狂言が大當りとはおかしな様なれ共その頃の見物かゝる狂言をあつさりと面白く思ひ

又役者もかやうの狂言をよくこなし勤けるとぞおもはる

北の新地五人切の實説

元文二巳年薩摩の侍早田八右衛門大阪北の新地曾根崎三丁目大和屋十兵衛夫婦並櫻風呂抱へ菊野と云女郎下女二人都合五人を殺せしあらましを尋ぬるに八右衛門菊野に思ひ込み段々と欺かれしより事起りし也八右衛門は留守居に付添ひ登り居たるが留守居留守居の此年の五月に歸國の日限來り留守居と共に國元へ歸るべき所國許より時計のお詔へ有之ゆゑ先達て竹田近江方へ詔へ置しかど甚だ六ヶ敷細工なる故出來隙取止事を得ず八右衛門は大阪に残り時計出來次第歸る積りなり扱留守居は彌明日御歸國とて銀主より北の新地にて振舞いたしける刻八右衛門も留守居と同道にてかの茶屋にいたりぬ銀主よりは馳走として藝子法師幫間其外野良まで呼よせ心を盡してもてなしけるに留守居の相方いよといふ女郎此節病氣にて引籠り勤なり難きゆゑ甚殘念に思ひ妹女郎の菊野に云々の譯を語り我代りに勤吳よと頼みければ菊野も世話に成し姉女郎の事故早速納得して留守居の伽を勤め

ぬ此時八右衛門は菊野を見染ぞつこん思ひ込て何卒我相方にせばやと思ひ居たりけるが座敷は手をかへ品をかへ走走の上馳を脱するカに各機嫌よく興に入夜も明方に成りければ暇を告て留守居は歸國の出船しけり跡に残りし八右衛門は夕見染たる菊野の事忘れがたく夜に入るも昨日の茶屋は如何と思ひ大和屋十兵衛と云茶屋に行て菊野を呼に遣しけるに早速菊野來りて八右衛門を見ていふはあなたは昨日のお客人様その席のお留守居様の御連中途舛事はおゆるしとふられて八右衛門は當惑ながらいやゝ夫は苦しからぬ事かの留守居といふは此度國元へ歸られては再び當地へ來らるゝ事なしすりや昨夜限といふ物なりなどゝ詞を巧みにしていひければ菊野もかれが眞實思ひ込たる様子故日柄内證の借錢の助にもと思ひそこゝに相手に成て其夜は座敷計にて歸りける夫より八右衛門は晝夜となく通ひし故菊野も打解たる顔して簪買への鏡袋拵るのと金をせがみ取その上着物までも拵させ取る事はゞれ共兎角病氣を言立逢はぬ様に立廻りしこそ道理堂島中町錢屋善兵衛といふに菊野はふかくいひかはし居れば日柄紋日は八右衛門に買は

せてその身はみすゝな病氣をいひ立錢善方へ行て忍び逢ふ事毎度なり八右衛門も初の程は左も思はざりしが我を出し拔錢善に忍び逢ふ事を聞其上誰が玄たりけん狂歌に「させゝ」といふても安い薩摩櫛とけて菊野がすく歟と思ひてと云ふらしけるが後にはすこし違へて「させゝ」といふてもあらぬ薩摩櫛すかぬ此身は譬身をけづるとしてもときやせまいと節を付三味線に合してはやり歌の様にうたひける是に依て八右衛門今は早堪へ兼おのれ賣女め一討にして我も腹切死なん物と覺悟きはめしきつそうを伴助と云家來夫と悟り涙をこぼして段々異見いたしける故八右衛門も納得して先事濟ぬ然れども菊野にかゝり時計代の金百兩の内廿兩遣ひ捨て不足と成し故是に行當り當惑いたしけるが爰に傍輩の若侍に宅之進といふは八右衛門の親父に世話になり學問兵衛の師範たるにより八右衛門とは別て懇意に交りける依之八右衛門が此頃の行跡合點ゆかすと思ひひそかに對面して深切に異見致し其上詰らぬ事もあらば申候へ手に合候義ならば何にても承らんといふに八右衛門大に悦び菊野に欺かれし始終及金子不足せし事迄不殘

心底を打明語りしかば宅之進も外ならぬ八右衛門が事ゆゑ早速金子調進してわたしければ八右衛門押いたいきく、扱々忝此御恩死しても忘不申と懷中し最早此金ある上は當地に滞留にも不及明日歸國致すべしとくりかへし、一禮のべて別れる夫より八右衛門は時計も取寄出船の用意を致して知音の方へ暇乞に廻りしが何方にても暇乞の盃とて酒を出せし故殊の外酩酊に及び猶又ゑるべの茶屋へも行んと小唄を謡ひ千鳥足にて曾根崎三丁目大和屋十兵衛方へ趣ける此節菊野は八右衛門が重ねて恨み有噂を聞方一あやまちあらんかとて親方より外の店へ預け置やがて八右衛門歸國なれば暫しの間忍びて夜ばかり馴染の客は勤居しなり扱も八右衛門は大方へ來り暇乞を告其上にて菊野が事を尋しかば十兵衛妻とめ答へて菊野は京へ仕替にお出なしたといふに八右衛門も誠と思ひ田葉粉一二ふく吞歸るとて表へ出しがそこ爰にて吞し酒ゆる益酔に乗じて見世付女郎をなぶらんと新地中をかけ廻りてぞめきけるがかの我方にとあてし小唄を往來の謠うて通るを聞と忽怒りの心火くわつとせしが能思へば此地に居ざる菊野なり

と胸を押へてそこ爰覗き歩行て歸らんとせし向うより菊野何心なくわしや大十へすまぬ客で行わえといひつゝ摺違ふ計に行過る頃は七月二日やみはあやなし掛行燈の灯の明りにて顔は定かにわからねど聲は聞しる菊野めのれ本ノ振歸り見ればちよこゝ走りにて行後姿寸分違はぬ菊野めおのれ此まゝ置べきかと跡より付て來たりしが菊野は八右衛門をちらと見たるゆゑ急いで大十へ走り入其まゝ二階へ上り聲もせずして忍びゐる此夜二階の客は堂島錢屋善兵衛平野町繪屋仁兵衛幫間礪八仁兵衛相方湊といふ女郎と都合四人來合せて居たり依之菊野を呼にやり菊野は泊りの約束にて來りしなり扱引つゝいて八右衛門大十へ來り聲をあらゝげて大阪に居る菊野を京に居るというて武士を欺くかといふに妻のとめはつと思へど隠しかけたる事ゆゑ嘘付はいたさぬ京に居なざるに違ひはないと云に八右衛門彌怒り二階へ上り菊野めを引摺おろさんとは思へ共さすが武士客座敷へふんごむも如何と胸をおさへて然らば京に居る菊野が今此内へ這入りしはいかに我とくと見付跡より付て來たりと云とめ笑うて夫は湊さんじやと云いや菊

野じやと争うて居る所へ家來伴助は土産物等買調へ主人を待共歸らざれば心元なく思ひ先新地を尋んと此場所へ來り様子を聞て胸をいたため何卒無事に旦那を伴ひ歸らんととめにむかいさほど湊に違ひなくばその湊とやらんを是へ出して旦那のおめにかけて候へと目でしらせければとめ早くもさとりそんなら湊さんと呼ばひ升て參り升ふと二階へ上り湊にとくといひ合めやがて二階より連て下りしかば湊は八右衛門がそばに行最前松みよの門で行合升たはあなた様かいなわたしや爰へ氣をせいて來たゆゑどなたやら覺ません私を菊野と見ておくれなましたかヲ、嬉しと云に八右衛門はこやつも同じ穴の狐どももう了簡がとも思ひしが伴助の手前又場所も惡しと態と面を和らげいかさまさう聞ば身どもが見違に極まつたもうよいゝと機嫌を直し暇を告て表へ出おのれ夜更なば斯々と思案を極め半丁計來てふと見かへれば後より伴助付そひ來れば八右衛門立留りコリヤ伴助その方も明日國もとへ歸れば又と當所へ來る事成がたし最今宵限りなれば大阪の女郎を買て國もとへ土産にせよと旅銀少々遣し見世付女郎を買はせ其身は一人

と成り今は心安しと又新地中を歩行夜の更るをぞ待居ける大十家内は手に汗にぎり居たりしが八右衛門機嫌直して歸りしかば各吐息をつぎ先安堵致しぬ錢善は最前より二階にふるうて居しが氣色あしきとて磯八を連て歸りける跡は仁兵衛湊と二階にとまり菊野はとめと下座敷の蚊帳に二人臥し其間に十兵衛臥臺所の蚊帳には下女二人臥居たるに次第に夜も更皆皆前後も知らず寢入たり扱八右衛門は既に丑滿の頃になれば時分はよしと立戻り十兵衛が隣の路次より這入裏へ廻り庭先の切戸を押はづし椽先へ來り見れば暑にや雨戸を少し開かけあれば直に座敷へふんごみ蚊帳の外より伺へば菊野とめは前後もしらず寢入ばなしすまじたりと釣手の四てんを切落し蚊帳の裾を一つに束ねねぢ結べば袋に入し鼠の如く二人はいかにもがけども出る事叶はず聲を立る事(所カ)を蚊帳越に刀を次てぐさゝと突ければワツと苦しむその聲に十兵衛目を覺しやれ盜賊よと呼はつて蚊帳より出る所を飛かゝり肩先一つ切付返す刀に右の腕を切落せばそのまゝ爰に倒れたり臺所の蚊帳に寢入し下女二人はなきさけびて逃出んとする所を八右衛門

走りよりめつた切に二人を庭に切り倒す二階には仁兵衛と湊最前より此のありさまを見て魂きへ手足の置所なくふるひゝかけ廻り表の方の戸を明庇の上なる目かくしを破り是より飛下んといへど湊はとも飛ぶ事叶はねばたとへ切らるゝ共爰に居んといふ仁兵衛も湊をのこし置ん事不便に思ひさらばいづれにても隠れ忍ばんとかしこの押入の中へはいれば長持の上に蒲團をのせたり此ふとんを身にのせて二人は長持の上に忍ばんとする拍子に天の助け給へる命にやわづかにせまき長持の向うへ二人共落たりしが幸ひにして忍び居たり扱八右衛門は五人の死骸を片端より伺ひ少にても息あるを突通し／＼て今は心よしと悦び猶二階に客ある體助け置じとかけ上り爰かしこ尋ね廻り釣たる蚊帳を引まくる拍子に傍なる行燈打轉て灯きへ真くらがり物のあいもみえざれば拔身をふり廻し探りもて押入の長持蓋引あけ拔身にて突廻れど夫と手答へあらざればかく蚊帳釣り寝たる跡なれば何にもせよ居るに違ひなしと猶二階中を尋ねめぐり表の方へ來りし所戸明放し目かくし板の破れたるに扱は爰より逃歸りしと思ふ折節鶏の音八

聲を告るに心せき今は是迄と走りもとに行井水汲て刀を洗ひ身を繕らうて一さんに屋敷にぞ歸りぬ扱夜も明百姓小便取に來り見付かくといひしかば追々寄集り猶聞付て他町遠方よりも見舞やら見物やらその騒動大方ならず直さま御公儀へ御届申是に依て早速御檢使下され御吟味の上相手は大體八右衛門に極り直に薩摩屋敷へ仰遣はされたるに八右衛門は早出船致したるにより早船を仕立追かけ早速召捕牢獄仰付らるゝ夫より明る午年二月十二日八右衛門死罪の御仕置に成首は千日に梟首と成り係り合ひの銘々も事相濟けり右の一件を廿一年立て淨瑠璃に取立薩摩歌妓鑑とて寶曆七年に出せり歌舞妓には國言詢音頭とて出す又薩摩歌五人切子とも外題をかへてせしかどもさ迄の當りもなかりしが淨瑠璃には木偶の名譽吉田文三郎寶曆年問の人が遣ふ八右衛門の 人形樂屋にて夜な夜な動くなど人口に膾炙す安永六年淨瑠璃にて置土産今織上布と外題して右本文の通りを取組たり是を歌舞妓にとりたて初嵐元文嘶とも呼けり此頃の濱芝居にはあれど佐久間源五兵衛早田八右衛門の事柴崎林左衛門早田八右衛門の事中間伴助家來伊助萩野伊太郎伊助萩笹野三五兵衛傍輩宅右衛門其餘錢屋善兵衛百村友九郎

繪屋伊三郎とし菊野大十などは名を其まゝにして大當りを取り此柴崎林左衛門は實惡なれど當藝多き名人にて八島日記の景清釜ヶ淵の五右衛門文月の八郎兵衛など古今になしと嵐小六五也もほめしとなり此柴崎の咄ちにとくべし此源五兵衛にて五人切の所は故人吉田文三郎の木偶にせし通り死骸の腹の疵口へ思はず足を

ふんぐみ足先に腹臍を引かけ上る思ひ入物すごき事見物身の毛よだちしと毎度老人の咄に聞たり此柴崎は實惡の役者なれば八右衛門の役を敵役にてする故かゝる凄みを思ひ付しものなり今専ら用る五大力の源五兵衛は眞立役なり一つに混する事なかれ扱前編並木五瓶が傳に出たる五人切は寛政六寅年中の二の替りに島廻戲聞書とて島津の狂言の繼に勝間源五兵衛に尾上新七笹野三五兵衛に片岡仁左衛門藝子菊野に芳澤いろはと見込本文に拘らず書て狂言の筋一變す前の時代の間は評あし、富市の場より毎日大入をする故奥だけを裂て後に五大力戀織と外題に改三都に及び伊勢尾張にても仕はやらせる事とは成けり是五瓶の手柄にして五大力とは神か佛かの名にして既に住居神宮寺にありて其頃のやはり神なり狀の封じ

めに五大力と書て送る時は他見を忌て滞なく達するとして其頃は専ら流行しけり五瓶三五兵衛との役名より計らず此五大力を遣ひしが今五人切といはんより五大力の方通名となりけり元文二年より今年迄百十三年になりけり

雷庚申桂川の話

大坂新靱町の八百屋半兵衛嫁お千代と心中情死したるを直に雷庚申として出せしは誰もよくゑりたる事にはあれど予幼少の時新靱の老人の話に聞しは實説も淨瑠璃の如く唯違ひあるは八百屋の姑婆には虫も殺さぬといふ程のよき人なり伊右衛門といへる老人もあながち惡人ならねど兎に角若い女好にて下女雇女を孕せる事度々にて嫁お千代を口説事甚しければ姑に是を告れどまさか男の半兵衛には此事もいひ兼年月を過す内半兵衛は用事有て遠方へ行長らくの留守中なれば舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか晝夜とも透間さへあれば嫁をくどく老婆是を氣の毒に思ひ常盤町の伯母の方へ預け世間の人の問ふ時には連合の惡性よりとはいはれずよん所なく嫁の身持家風にあはぬ故預けし杯答へけり半兵衛歸宅

の上は子細なくお千代も呼戻せしが伊右衛門ますま

す煩惱の犬の如く人めをかまはず口説聞入ざるを根

にもちて養子智半兵衛すこしの仕あやまちも仰山に

罵りけるにぞ老婆も種々と諫言しけれど伊右衛門は

猶逆立物いひの絶ぬ故義理にせまつて暇を出し霄庚

申の夜遂にはかなき情死をしたりとぞ淨瑠璃に書く

時には老婆を惡人にせぬ時は憎み増さぬ故にや門左

衛門の作意より善人がへつて惡人といはるゝも老婆

の不幸なるべし又皇都虎石町の帶屋長右衛門信濃屋

おはんの跡を町内の^{虎石町}好者家穿鑿して百回忌の追

善を營み遣はせしと云事以前隣町に住友より聞し事

有是も歌舞妓狂言淨瑠璃とは違ひお半懷胎したれば

身二つにせんと丹波の親類へ預んものと長右衛門付

添ひ夜深く立て檜原へ行んとする途中にて盜賊にあ

ひ旅用金着替等を奪とられ兩人共に去め殺され跡の

死骸を心中情死の體にして桂川へ打込まれしなりと

ぞ其後盜賊相知れお仕置になると聞此狂言は安永元

年歌舞妓にて立臈桂川と云是を堀江市の側此太夫座

にて安永五申年淨瑠璃に仕組桂川連理柵とは云也近

來お勘長三として^{おはん長}右衛門の前生を拵らへしは月桂新話

と云小説物より出たる也

鶴屋南北が遺稿暫の寫

本堂三寶の間七字の題目左右に四季の造花能所に淺

黃の掛無垢をかけし棺を直し此前にいろゝの飾物

惣て南北葬式好の道具半鐘に連れ奉納の幕引あがる

ト直に葬禮の鳴物に成り向ふより袴股立棺脇四人

蛇燈籠を持敷石の上に立並んで

一四人今度此度老人のよい年だけによい往生二つ合

せてよいゝといへば四神は當りまへ夫にはあら

ぬ蛇どうろう四人一所に差かけべいか

ト又鳴物に成りみなゝ本堂へ來る此時奥にて

一よび葬式の刻限

ト是にて施主みなゝ宜敷住ふそれより

「今身より佛心に至る迄たもちたもつも法華經

の御法の徳や題目の利益の程こそ有難き

ト奥より假僧吳服屋へ誂の袈裟衣所化二人後に上

下の世話人天蓋を差かけ須彌壇の前へ押出す是を

見て

一施主は

一世話人けふ御住持の他行により假りの引導

一 假僧一天四海皆歸妙法落る所は法華一人の成佛と
祖師の極めし宗旨のいしづえ皆題目をとへるエ
エ

一 皆々唯々御悔み申上舛る

ト此時向うばた／＼にてのりおくれの施主高股立
にて藥鍋と帛紗づゝみの短冊を持走り出で

一 施主まつた／＼成佛解脱の御引導暫御待被下升う
けふ葬式の供にもおくれ参りしも南北をせめてま
一度いかしたくそれ故持參の獨參湯かつは是なる
辭世の短冊御覽被成て下され升う

ト假僧の前へ出すひらき見て

一 假僧遺言に辭世發句とすゝむれど死ぬ氣なければ
とんと失念

一 施主サア死ぬ氣ないとの歌の心何卒蘇生致させ度
夫故持參の獨參湯

一 世話人サア役にも立ぬ獨參湯吞せし上にて生ると
も年をかさねし上からは苦痛をさせなば大きな罪
さすればこなたはきどくな罪だぞ

一 施主きどくの罪との一言に手出しもならぬか
トほろりと思入

一 世話人いらざる落るい黄泉のさまたげいで此上は
いそひで香刺引導終らば施主のめん／＼とく／＼
焼香

一 委細畏つてムリ升

トどろんと葬式の太鼓に成り施主きつと成て股立
をおろし并能居並ぶ假僧たいまつを持て棺に迎ふ
所化髮刺を持控へる此内始終わや／＼と題目の聲
よろしく有て

一 假の浮世に假僧が祖師の利益をかうべにいたいき
いでや冥途へ導引かん

一 寺法なれば佛を改め香刺せん鶴屋南北今が坊主だ
どれ

ト立かゝる此時棺の内にて

一 南北香刺しばらく
一 世話人いや／＼まで／＼今香刺引導一時に成佛さ
せんとする所へ

一 假僧しばらくと聲をかけたは

一 皆々何やつだエ、

一 南北しばらく／＼
一 皆々暫くとは

一 暫らくしばらブウ

かゝる所へ往生なしたる南北が

トどらによう鉢に成り棺の内より南北いつもの佛の拵にてひよろ／＼と出でべつたりすわり

「得入無上どう行か踊みもならはぬ六道をまご

つきあるく有様はかなしくも又あはれなり

トよろしく有て仕ふ皆々是を見て

一 世話人まで／＼今暫と聲をかけのたくりつん出た佛を見りやア黒船のぢひさんだなせ香刺を受けないのだエ、

一 南北葬禮南北卽身成佛天地乾坤の其間に人たる者の死なからんや命は自分の持まへにて當年積つて七十六歳何と死にはまだ早ひではムり升せぬか早いがお徳此上に生て逆さま有時はうき目三升に業恥を柿の素袍にかき衣帽子筋隈ならぬしづわらは猿が人まね何事も無學文盲戈もなく書く狂言はそれ佛又は葬禮度々に出した報ひが廻り來てけふは此身の葬式にお出の御方へ清めのため一ばんさきに拂ひ升う一夜置たら青々と鶴は線香龜は末香東方作者はついにがつくり浦山しくば御同道三浦の

大助明六ツから七字唱へて八苦の患を十でとふと
ふ往生致すとホ、つらまつて坊主

一 世話人扱はこいつは魔がさしたな差詰引立はお迎ひ僧があたりまいでムる

一 施主誰かれと申さうより施主の事也且は皆様へ御禮がてら惣一座で參らう

一 南北イヤ／＼わいらが行くにも及ばぬ折角御出の御方々へあまり失禮だ爰は一ばん新らしく晩には佛が自身にゆくは

一 みな／＼ヤア、

一 南北夜はこわいからひるま出るぞ

一 みな／＼ヤア、

一 南北旦那寺からすぐにゆくぞ

一 みな／＼ヤア、

一 南北同年の衆は用心しろ

一 みな／＼ヤア、

一 南北去らば棺をばかき上げべいか

ト葬禮の鳴物に成り本堂の眞中に居直りがつくりと往生する是を木がしらに題目だいこに成り此折家主袴羽織にて出で

一家主東西くどなたも遠方の所御苦勞に存升まづ
南北はこれぎり

ト是にて葬禮おひらき

七代目三升印

銀世界蕪のぼさつの立作者

魂祭之砌任聖靈之幸便一筆啓上致候亡者事も無異儀
極樂往生致松緑菩薩樂善菩薩御世話にて早速菩薩
の仲間入蓮の臺の借家住然るに勝兵助源八瓢七の
菩薩達被參世話致し吳候うち二代目俵藏も參り殊に
皆近付の菩薩達何不自由なく歌舞の音楽にて遊び申
候なれども鱧もこぢ(たべカ)付ては鼻につくとやら
ちと地獄へといて見まほしく皆々打連參りしが彼方
も聖代のしるしにや罪人もすくなく閻魔どのも嘶し
相手のほしき最中大歡びにて閻魔王宮に逗留のうち
先達て參りし二代の松井幸三地獄へも落す極樂へも
行すごろつき菩薩となりはや牛頭馬頭とも心安く地
獄の事なれば鬼殺はなく三途川といふ銘酒を呑あげ
くの果が赤鬼の虎の皮の褌をそふつ(さんづカ)の姥
の處へ質物におきあちらでも困り申候扱閻王申さる
は此土に長く住めど未だ暫くをも(と云カ)狂言見

たる事なし極樂には元祖よりして代々の團十郎菩薩
も居られ候得共地獄より極樂へ呼寄るものいなものな
れば打すぎしが皆々參られしこそ幸ひ打寄て暫くの
狂言がさせて見たいとの事達て辭退仕候へども再三
の進めいなみがたく閻魔のうげ赤鬼と幸三の中受え
らの圓八鯨坊主源八其外太刀下にて爺の暫と役割致
し候所地藏菩薩の申出されしには我に濟度の節承り
候はとかく早桶が出ねば南北が狂言の様に思はれず
殊に葬禮の暫くまだ聞ず是非其仕組が見たきとお好
にまかせ南北往生記と申名題にて仕候亡者御近付様
方へ別紙狂言自作のつらねを奉御覽入候乍去御心遣
ひは御無用此方へは何も届不申先は盆便之時待候空
々寂々鶴屋南北事一心院法念日遍信士右暫の連ねは前編
に解く鶴屋南北始勝俵藏生前に寂光門松後萬歳とと
もに書置たる遺稿にして舩直江屋十兵衛も南北歿せ
し翌年死したりければ二代目勝俵藏一周忌と祖父南
北が三回忌に摺物にして配りたる也孫太郎といふは
今の南北也後二代増山金八松井幸三樂善菩薩坂東彦三郎勝兵助
俳名薪水
勝井源八始勝周藏槌井兵七後二代増山金八松井幸三讀屋の二代新幸皆此頃
死したる者故文中に出せり祖父南北合卷雙紙物を書

高砂町に住し故名を姥尉助と呼びたり（極樂のつらね繪番附略す）

三升屋二三治が話

三升屋二三治は原淺草御藏前札差し（にカ）て釐本衆の相應の暮しの人なるが此道に入て終に業を捨て今に存命なりとて浪花に云堂島そだち杯の類にして俠客有祖父南北と親しみ深く互ひにおかしき新らしき趣向を負じおとらじと思ひ付果は否がらせる事のみを案じてある秋南北風邪の心地とて臥し居たるを見て二三治宿所へ歸り其頃奥詰御醫師に吉田快庵と云は二三治至て心易ければかの御典醫を頼みて本供にて南北が住所高砂町の裏店へ長棒の乗物にて行南北病氣ゆる二三治より頼みによつて見舞ふと案内させて入ければ南北驚き床の上より這出で恐れ敬ひ誤り入る典醫は御立にて跡に若黨中間兩人残り酒代を乞ふ南北再び悔りしていかいしてよからうやら始て御典醫の御見舞に預り當り付ねばいか程と問ふに若黨何れの町人にも金百匹也と云に詮方なし一步出して歸し此徒らこそ正しく二三治が思ひ付にぞむやくしゝとて二三治白銀清正公へ月參して聖り坂に大野屋と云水茶屋

有爰に美しき娘有て一兩度爰に休むをはや浮名にたつ南北是を聞て女の名と二三治の名の書紋を聞出し男女の比翼紋付たる提灯を清正公の神前へ掛させ諸所の近付へ風聽して二三治に困らせしは以前の醫師の返報とぞしられしかゝる馬鹿くしき咄のあるを歌舞妓作者とも云べし年々人世事賢くなり行て風流滑稽なる人をきかず此二三治老人と予と故人櫻田左交が名譽淨瑠璃前編に云常盤津八百萬蘭生梅枝此くどきの文句の通り廻り道合點にて行見んは如何と春日永の頃兩人旅支度にて早朝より出し事有委敷は予が著述綺語文草東都の部に出したれば爰に略す二三治老年なれど健也されば戲場の交りむづかしとて今年嘉永二己酉の三月劇場を辭してじだらくのつらねを著して風交の先々へ配るゆる爰に出す

じだらくのつらね

當時難澁北秋世間の噂にも年が寄たで追込と言れぬ内お暇を願ひ揚幕出づゝの向う音羽屋さんにもお世話を受上座にかゝやく金冠金がないゆる三十年くるし借着もやうくとお禮がてらのじだらくはつらねの初音初鯉辛子が利たかよつく聞こともおろかな某

は成田屋ののれん内にて白木屋おこまじやなければども聞えませぬは此春から遠くは八王寺の三太郎が股肱(耳カ)目と呼ばれたる聾太郎耳遠當年積つて六十五歳なんと赤く(いカ)あたまじやござりませぬか髭がひつ込足元も親父はしれた正直正銘掛直なじみのいづれも様へ申譯やら面目が内證しつたひつてんからじゆばん古ぼろ古布子古金買に賣はご板思案も盡て明俵三だら法師と思へ共何にも白髪のお目見得は素袍も柿の下手作者桃栗三升柿八代目出度丁ど身の納めちやんころなしの木摺子木のつかいながしのでくの棒厄介邪魔といはれても御存しられた持まへのわんぱく爺の根元とホ、敬曰モウお仕舞(じだらくのつらね繪番附略す)

江戸芝居外題付方の事

既に前編にも述べたる江戸三座歌舞妓大名題を付るには文字にかゝはらず上下の假名の相性をもつてすゆると云五代目白猿市川海老蔵向島反古庵より木村園治前篇に云へ古作者也教しと云白猿自筆の歌に

あはやつちたらなは火也さしはかね

はまは水にてかは木とぞしれ

此書三代目櫻田治助俳名左交と云始の名前篇に有より予に送れり故に所藏すまた瀬川如阜も此假名の相性を見て名題をすゆる其歌少しく違へり

アハヤ土サ金ハマ水タラナ火ぞカは木なれども土もぞくする

土アイウエカヤイユ金サシスセソ水ハヒフヘホ火タチツテト

エヨウキウエカ木カキ(是より下土に)

ラリル木カキ(是より下土に)

此意をもつておせば北條時頼記等は水也キは木也水生木假名手本忠臣藏カは木也ウは火也木生火彦山權現誓助飢トは水也チは火也水尅火箱根權現覽仇討ハは水也チは火也水尅火此相尅をもつて東都には外題をすゆると云京攝にては餘り用ゆる事を見ず

役者年曆珍重記

一枚摺にして裏は三芝居樂屋雜書瀬川如阜が戲作なり爰に出す

寛永 子 二 丑 三 寅 四 卯 五 辰 六 巳 七 午 八 未	中村勘三郎中ば此ころ中ばし生かつらぎ太夫目此ころ女かぶき此ころ一と切づ此ころ女かぶき桐長桐座くはん長桐座元祖幸若東所々に興行初る	興行 ぶき有 ぶき興行 所々にあり 也 御禁制	九 申 十 酉 十一 戌 十二 亥 十三 子 十四 丑 十五 寅 十六 卯	中村勘三郎めざされや喜三郎さ村上又三郎葺屋町にて興行市村村山十平治下る上方より下る 作(者カ)九兵衛 萬川千之亟下る 此頃の狂言一ときぶ浪の道行よこ笛今川爲之介所作	町へうつる 若の相手勤る 座元祖也	十七 辰 十八 巳 十九 午 廿 未 正保 申 二 酉 三 戌 四 亥	此せつ大方長唄多門庄□□門下小舞庄左衛門下右近源左衛門下丹前六法此頃さ此頃ひんだぶり早川初瀬下る久松喜三太竹之也 におどり狂言 る る る かり也 はやる 亟座へ下る	慶安 子 二 丑 三 寅 四 卯 承應 辰 二 巳 三 午 明暦 未	此頃河原崎標之中村勘三郎さか公命にて女方ま市川の先祖増越村山又三郎死ふきや町二代目市村座にて一日道具だてかざり助京より下り木い町へうつるへがゝを剃る何某江戸に来る 市村羽左衛門 のつゝき狂言初 つげはじまる	二 申 三 酉 萬治 戌 二 亥 三 子 寛文 丑 二 寅 三 卯	引まくはじまる大火にて芝居類元祖さる若勘三二代目明石勘三森田太郎兵衛木桐太郎木挽町にて興行 焼 郎死 郎興行 じまる て興行 花川作彌下る 田勘彌桐座本にて興行
----------------------------------	--	-------------------------	---------------------------------------	--	-------------------	-------------------------------------	---	------------------------------------	---	-----------------------------------	--

四 辰 五 巳 六 午 七 未 八 申 九 酉 十 戌 十一 亥

四代目市川竹之いにしへ久三郎都傳内京より下
久三郎往古傳内
此ころ花道初る
附舞臺出来る
四之宮源八下る
わけぶしはやる

元 蒸玉川主膳桐座 神田明神社内に
て興行
る
改堺町にて興行
此ころ申
九 酉
十 戌
十一 亥

十二 子 延寶 丑 二 寅 三 卯 四 辰 五 巳 六 午 七 未

此頃山村長太夫 都傳内下りさか 三代目中村勘三
山村座にて五月
霧浪瀧江市村座
大阪傳吉木村喜
四代目中村勘三
三國彦作此頃の
芝居木挽町にて
い町にて芝居は
郎興行
郎時宗元祖團十
へ下る
左衛門此頃のた
てもの也
郎興行
道外也

八 申 天和 酉 二 戌 三 亥 貞享 子 二 丑 三 寅 四 卯

はやし方いがら 元祖中村七三郎 中村座正月元祖
元ぶく立役とな
傳九郎始て奴朝
く者自分に狂言
作りし也
四代目中村勘三
郎隱居して傳九
郎と改名奴あら
也事朝ひなの関山
郎興行
年迄興行
座へ下る

元祿 辰 二 巳 三 午 四 未 五 申 六 酉 七 戌 八 亥

松本左源太三條 つた八郎兵衛長 元祖河原崎權之
河原崎二代目さ
市村八代目竹之
若山五郎兵衛て
杵や勘五郎ぬれ
小舞又三郎中村
勘太郎上村かもさき五郎治たる
元祖河原崎權之
かい町にて興行
團十郎上京
唄の上手也
味線の名人
座へ下る

九 子 十 丑 十一 寅 十二 卯 十三 辰 十四 巳 十五 午 十六 未

京都村山平右衛 元祖中村七三郎 元祖團十郎鳴神
門座より市川團 京都市川九藏入
才にて初ぶたい
上人外記上るり
初める
所作
郎興行
まころ引
てふばらく

寶永 申	二 酉	三 戌	四 亥	五 子	六 丑	七 寅	正徳 卯
元祖市川團十郎 死九藏二代目市川團十郎改	死	又太郎死同八月 荻野澤之丞死	らし死	村七三郎死	二代目團十郎くめの八郎が支實大當り	は死	十月小勘太郎死 十月小の川千壽死
二 辰	三 巳	四 午	五 未	享保 申	二 酉	三 戌	四 亥
十一月市川若松死	十月元祖中村傳九郎死山村座に初て團十郎助六本名田はた之助也	七月森田座にて中村座萬民大福帳團十郎權五郎ら曾我助六團男雁金文七市川十郎半太夫上るりばち巻の文句中しま勘左衛門止む	中村座萬民大福帳團十郎權五郎ら曾我助六團男雁金文七市川十郎半太夫上るりばち巻の文句中しま勘左衛門止む	中村座にてやわ正月中村座五人元祖澤村宗十郎市村座にて曾我十郎澤村宗十郎同五郎二代目市川團十郎	中村座五人元祖澤村宗十郎市村座にて曾我十郎澤村宗十郎同五郎二代目市川團十郎	市村座にて曾我十郎澤村宗十郎同五郎二代目市川團十郎	市村座にて曾我十郎澤村宗十郎同五郎二代目市川團十郎
五 子	六 丑	七 寅	八 卯	九 辰	十 巳	十一 午	十二 未
森田座十郎三升や助十郎五郎市川團十郎將某のかげ合大さつま上るり	二月元祖大谷廣右衛門死	六月大くま字田廣次大佛のみぶ團十郎小佛小兵衛大當り	團十郎山上源内團十郎池の庄司まばらく池づくしのつられ	中村座工藤元祖松本幸四郎五郎坂東又九郎名前にて興行	中村座工藤元祖松本幸四郎五郎坂東又九郎名前にて興行	中村座工藤元祖松本幸四郎五郎坂東又九郎名前にて興行	中村座工藤元祖松本幸四郎五郎坂東又九郎名前にて興行
十三 申	十四 酉	十五 戌	十六 亥	十七 子	十八 丑	十九 寅	二十 卯
市川外五郎七才にて初ぶたい三代目團十郎也	去年役者金のござ板元でできる	元祖瀬川菊之丞中村座へ下郎團藏わばく和月菊之丞初て無	中村座にて團十郎團藏わばく和月菊之丞初て無	去年かほみせ瀬川菊次郎下る三下る所作の達人	佐渡じま長五郎森田座所がへ願にて休座	森田座所がへ願にて休座	團十郎海老蔵柏蓮と改河原崎權之助木挽町にて興行
元文 辰	二 巳	三 午	四 未	五 申	寛保 酉	二 戌	三 亥
荻の伊三郎市川村羽左衛門と改何江名人也菊之丞たるやおせん流の暫く大當り	中村座津打治兵衛作女護のしま市川座海老蔵と三郎改二代目市川團藏	中村座澤村宗十郎露野五郎兵衛市川座海老蔵と三郎改二代目市川團藏	中村座澤村宗十郎露野五郎兵衛市川座海老蔵と三郎改二代目市川團藏	市川海老蔵上る四月五日元祖市川團藏死市川團藏死市川團藏死市川團藏死	市川海老蔵上る四月五日元祖市川團藏死市川團藏死市川團藏死市川團藏死	市川海老蔵上る四月五日元祖市川團藏死市川團藏死市川團藏死市川團藏死	市川海老蔵上る四月五日元祖市川團藏死市川團藏死市川團藏死市川團藏死
幸四郎藤柳	本のせりふ	川團藏	川團藏	愛ぜん大當り	愛ぜん大當り	愛ぜん大當り	愛ぜん大當り

延享 子 二 丑 三 寅 四 卯 寛延 辰 二 巳 三 午 寶曆 未

森田勘彌再興二澤村宗十郎下り松しま八百藏ふ五月大谷廣治十
代目市川團藏上長十郎と改春五川と改菊之丞成市二月大谷龍右衛
壽市川海老藏日と改菊之丞十郎人羽こるもの所門死此とし小六
上ちどり道成寺作染はやる鬼治事廣治と改菊之丞死

二 申 三 酉 四 戌 五 亥 六 子 七 丑 八 寅 九 卯

澤村長十郎始て風九八坂東又太柏建矢の根五郎澤村長十郎初て
實事の工藤祐經郎と改澤村長十松本幸藏初ぶた江戸にてする京
大當り郎高助と改名四郎二代目松本幸江戸にてする京屋高助死瀬川菊
二郎死

十 辰 十一 巳 十二 午 十三 未 明和 申 二 酉 三 戌 四 亥

總角林彌ふたい市川團藏中村松九代目市村羽左中村傳藏二代目
び吾妻藤藏と改坂中村歌右衛門上衛門家橋座本相中車也中村助五
藏と改

五 子 六 丑 七 寅 八 卯 安永 辰 二 巳 三 午 四 未

二代目坂東彦三坂東三八死あら中村座初て工藤森田座へ中村富尾上菊五郎下る
郎死市川友藏初し音八死明年風橋大あたり中村十郎中村のじ中村喜代三郎八
ぶた跡がへり三五郎下る歌右衛門清芝か同田之助上京十郎京にて死

五 申 六 酉 七 戌 八 亥 九 子 天明 丑 二 寅 三 卯

去年中村仲藏大日坊まのぶうり去年市川こま藏三月四代目五粒市川辨藏元ぶく
富三郎三代目瀬松本幸四郎と改三年六月二代目死市川之助と改
四郎ふび藏と改幸五郎角力菊之丞川八百藏死中村菊之丞三代目淺
一世一代おし鳥所作のじに死間がだけ石橋大あたり

四 辰	四 巳	六 午	七 未	八 申	寛政 酉	二 戌	三 亥
四代目澤村宗十郎男傾城坂田くま十郎三代目坂田半五郎改	去る顔見世桐長桐興きや町に積戀雪關戸小町くら上るり也	中村座にてまが山三番奥中むら仲藏相勤此うち中村小十郎と改	中村仲藏上坂中村十藏嵐龍藏下る染松七三郎森田座へ下る	浅尾爲十郎桐座へ下り春二月が仲藏大當り中村座へ下り大當り	顔みせより市村座再かう中村座仲藏死中村座松下萬菊死中村座助常世草履打か八百藏菊之燕半ばらさき座再興四郎春駒の對面	四月廿三日中村五月十三日古山	
四 子	五 丑	六 寅	七 卯	八 辰	九 巳	十 午	十一 未
去秋爲十郎上る後藤生醉大當中村座三かつ七村座おはな二日替市當り	岩井半四郎上る五代目團十郎改なり江に成戸砂子慶なり我下り成	岩井半四郎下る木挽村座休部傳十郎	去年中島勘右衛門市川口波市川新之助初ふた代目團十郎也	去年都座へ片岡仁左衛門中村大あたり春五郎死梅坂田兵衛五十郎死	都座顔見世市川藏藏一世代しあからく隱居して成田や七左衛門文宗十郎	中村座再かう新市村再興岩藤松之助改市川藏助尾上常よ初あかん平しばら菊之燕中村座六下る	市村再興七小代目團十郎助六
十二 申	享和 酉	二 戌	三 亥	文化 子	二 丑	三 寅	四 卯
顔見世市村座坂東彦三郎暫く延壽才一世一代二男岩井半四郎死五月六代目團十郎死	去年二代目風ひな助中村座へ下る市川團藏中村座へ出勤松本よ座三上る	去年三月三日目宗十郎死瀬川るき下る浅尾工左衛門本米三郎市村座へ下る	市川こ藏改松幸四郎去年年中狂言中村座百八尾上松助初て水瀬川るこう中山三月河原崎座類三月月中村座二日替助六三つ五郎男女藏半四郎五當りせつくの所作大	尾上松助初て水瀬川るこう中山三月河原崎座類三月月中村座二日替助六三つ五郎男女藏半四郎五當りせつくの所作大	瀬川るこう中山三月河原崎座類三月月中村座二日替助六三つ五郎男女藏半四郎五當りせつくの所作大	三月河原崎座類三月月中村座二日替助六三つ五郎男女藏半四郎五當りせつくの所作大	三月河原崎座類三月月中村座二日替助六三つ五郎男女藏半四郎五當りせつくの所作大
五 辰	六 巳	七 午	八 未	九 申	十 酉	十一 戌	十二 亥
瀬川るこう仙女と成路之助菊之燕に成三月月中村座へ歌右衛門下る關三十郎澤村田之助下る	小川吉太郎下る二代目菊之燕三森田座へ市川市藏下る浅尾勇次一代目坂東彦三郎一世一替大	歌右衛門七化三澤村源之助改宗澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る	澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る	澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る	澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る	澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る	澤村田之助道成田之助上京中村藏三郎下る市藏三郎下る市藏三郎下る
十三 子	十四 丑	文政 寅	二 卯	三 辰	四 巳	五 午	六 未
去年松縁死ふきや町桐長桐再興目坂東彦三郎と改正月市川助死十一月市川助高屋高助死	芝衛中村歌右衛門と改下るふき十郎芝居興行九郎所作五月ふび久米三郎高尾頼代三郎當る	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上	三月幸四郎半四風德三郎三升源市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上
科甚吉下る	國之助死	助高屋高助死	月中山安三郎死	十郎門之助下る	かれ一日替	代三郎當る	る

七	申	八	酉	九	戌	十	亥	十一	子	十二	丑	天保	寅	二	卯
七月市川門之助 死八月申村大吉	國十郎菊五郎權片岡仁左衛門嵐 三權八大當り菊龜之丞下關三 五郎上京名殘狂十郎上阪名殘大	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年	當年

三	辰	四	巳	五	午	六	未
三月團十郎改市 川銀藏助六養助 改三つ五郎源之 助改澤村訥升	市川團藏下る八 代目團十郎はつ まばらく半四郎 改杜若中村みよ し下る中村芝翫 上る	海老藏半四郎菊 五郎はかた大當 り二月三芝居焼 る森田座再興	岩井紫若坂東彦 三郎下る	三月三芝居類焼坂東三津五郎一 中村歌六中村芝三月三芝居類焼坂東三津五郎一 齋下る阪東みの澤村源之助下る世一代秋つしま 助中村芝翫兩座七代目團十郎上 源之助かるかや	京	下る	下る

三芝居年中行事正月元日惣役者年禮式三番叟太夫元若太夫相勤る惣役者座付口上座頭春狂言名題并役割附をよむ子役并制外子踊初所作事小舞等相勤る春狂言の名題看板を出す五日或は七日春狂言本讀十五日初日徒古は本よみ稽古は年の内にて正月二日或は七日初日二月初午新狂言出る一幕ぐ三月二日替り狂言初日四月八日新狂言出る前に五月五日替り狂言初日廿八日會我兩神祭禮六月土用中休み近年夏芝居興行初日不定七月朔日頃盆狂言名題看板出る七日本讀十五日初日往古は七日也八月朔日新狂言出る前に年により夏狂言大入の節は七月廿日頃迄興行八月朔日盆狂言初日も九月九日新狂言多くは上方へ登り役者名

殘狂言又は一世一代名殘狂言を出す十二日顔見せ世界定十月十五日頃年中中の舞納めをり狂言座頭口上有十日頃新役者附配る翌日賣出し十七日子役踊初舞臺にて新はやし方太夫元益有夜に入て寄初惣役者太夫元益狂言作者顔見世名題并役割附をよむ往古ははなし初あり廿日紋看板出る并本讀廿五日顔見世名題看板出る廿七八日頃下り役者乗込み晦日惣ざらひ木戸前積物町内茶屋中飭り物出し終夜見物群集して賑はし霜月朔日正明七つ時式三番叟太夫元若太夫相勤顔見世初日十二日打出し後春狂言世界定十二月十日頃迄に顔見せ狂言舞納をり狂言惣役者座付口上座頭と云十三日煤拂ひ十七日仕切揚木戸前に飭り物

春狂言の趣向荒増口上看板出る木挽町は廿四日愛宕市より出す廿日舞臺大鏡餅搗卅日本戸前舞臺注連飾り右年中行事終り狂言替り每稽古の次第本讀合立げいこ中ざらひ此間に(脱字あるか)淨瑠璃ふし付同ふりけ立廻り大惣ざらひ初目也(但し中ざらひなつてといふ)三座家の狂言并脇狂言中村座さるわか新ワキ酒吞童子市村座街道下ワキ七福神森田座佛舍利長者開甲子待同休座之分桐座なすの興市ワキ老松都座はうる割大社河原崎座茶のワキ舞狸々大立試合立廻りの名目中がへり、さるがへり、車がへり、佛がへり、ぎつくり、ひよつくり、ぎば、はい、ぎは、よこぎば、手ばい、逆さ立、杉だち、天地、大まくし、つき廻し、千鳥、がんつぶし、れんり引、あとがへり、遠あて、古來囃子外座付名目大略

○大太鼓打込み、打出し、どろく、宮神樂、岩戸神樂三保かぐら、大拍子入時の太鼓、ながし、山をろし、風の音、波の音、あばれ、丹前、樂、管絃、どんく、遠よせ、唐かく、渡り拍子○笛らい序、寢鳥、早笛、とひよ、竹ぶへ入、ひしぎ、かけり、一聲、通り神樂、小鼓、白囃子、こだま、のつと、こいやい、つつかけ○太鼓もみ出し、一挺、大小の合方、しば、○小太鼓天王立本神樂、

和歌、下りは、舞ばたらき、片しやぎり、踊り地、出端、立の合方、狂ひの合方、角兵衛獅子の合方○唄長歌、めりやす、琴うた、ざいご歌、出の歌ぬめり、肥前ぶし、騷、馬士唄、順禮唄、佃ぶし、相の山、丹前、一つ鉦念佛○三味線てんつ、三重行列三重、早三重、幕三重、忍三重、きはひ三重、愁ひ三重、對面三重、兩座にてかはるあり合方、戀慕の合方、碓の合方、こまわりの合方、狐釣の合方、化物の合方、琴胡弓尺八は加役也。故人狂言作者の分大略元祖市村羽左衛門

常盤井田平 <small>後に中村河七</small>	早川傳四郎
増山金八	市山又太郎 <small>志山</small>
笠縫專助 <small>米富</small>	中村角止
瀬川如皇 <small>初女形乙女</small>	機文輔
寶田壽菜 <small>かんが</small>	津打治兵衛 <small>英子</small>
齋馬雪 <small>始瀨川秀助</small>	藤本斗文
古松井山輔 <small>三幸</small>	壕越二三治 <small>紫陽</small>
古並木五瓶 <small>淺草堂並木舍</small>	中村傳九郎 <small>舞鶴</small>
近松門喬	金井三笑 <small>興鳳亭</small>
村岡幸治	中村重助 <small>故一</small>
木村紅粉 <small>始園次遠龜</small>	櫻田治助 <small>左交</small>

松井幸三鴻藏 純通 與三兵衛
奈河七五三助 並木良助

河竹新七能進 門田治兵衛

福森久助一雄 田口金藏

本屋宗七大雄 奥野瑳助馬朝

篠田金次二代目 櫻田治助始

鶴屋南北始 槌井兵七松島半次

直江屋重兵衛南北忤 松井幸三始新幸

勝兵助始 勝井源八始周藏

田島此助龜山爲助 重扇助二代目

瀬川如皐河井文治

右の外中古達人唄三味線離子方之名中古名人役者俳名大道具小道具藏衣裳迄あら増を出し三芝居三階中二階惣樂屋の圖を萬國の圖にまがえ年代記一枚摺にせし戲作なれば略す江戸京橋南傳馬町三丁目仙女香の施板にして天保六未年早春の歳玉なり

木村園次村岡幸治が語

右瀬川如皐が書し故人江戸作者の内名高き人は前編に出したりその内に書もらせし木村園次は古櫻田の門人俳名園夫又遠見共俳諧を好松花堂の書を學びて小石川八百

屋お七の石塔に筆を殘せり後に改名し木村紅粉助といふ市川團藏待請話と云名題にて忠臣藏の増補狂言に手柄をせり改名の年紅粉助の名によりて赤い物を着んと羽織小袖の縞がらも赤くして四ッ谷邊迄行し所往來の人見てあの人こそ誰人ならんと不審がるを悦びて人目に立は此容に増したるはなしと江戸中を其姿にて歩行評判させ改名の名弘せしとぞ實は此年六十一の賀なれど年をかくして紅粉助の名によせて赤盡しの着物を着しこそおかし後にゑんぶと假名に書かへて寛政の末建作りなりしが文化の始に終る此門人に木村松六といふ狂言方有元角觥の行司にて幸ひ木村を名乗りてゑんぶが門弟となりしもおかし又村岡幸治も古左交の門人にして龜玉と云松木幸四郎始市川高麗藏今錦升が親此人の從弟にて始左交の二枚目を勤後建作りとなる世話物に多く狂言を殘し福清松本幸四郎の書物は龜玉が作也森田座の顔見世に八百八町瓢箪の筭と云太閤記の名題は八百藏後助高屋高助の座頭に付たる也評判よく其頃は賣れたる作者にて有しが後業を休みて終ると三升屋榮子二三治の俳名が夜話を思ひ出て爰に書付置ものなり

戯作者戯場話の論

往古より梨園を好んで戯場の書を著せし人々頗多し東都には戯場三臺圖繪、三座例遺誌、劇場年中行事、俳優訓蒙圖彙、梨園狂言紋切形、歌舞妓年代記杯舉て數ふべからず中にも年代記は淡洲樓馬馬の戯編にて右に出せし瀬川如阜が年曆珍重記の委のみにて元江戸三座の外題年鑑に歌川豊國の似顔をまじへ其時々前云の當藝或は淨瑠璃常盤津の綴物連ね等を出し古役者の似顔は古くは浮世畫師の鼻祖師宣後には春亭英山等の古圖を摸寫せしのみにて役者の改名上下の評を旨として狂言の説は二段となりたり又訓蒙圖彙は式亭三馬の戯作にして天文地理に合せ舞臺大道具小道具樂屋の圖まで豊國初代の書に三馬戯文を加へて出せり素人の見て戯場の樂屋の穴まで書たれば面白き事限りなく誠によく賣れたる本なり此中に狂言作者の見習鳥を遣ふ黒子を着させし圖あり其頃の狂言方一統是を見て大に腹立し本町庵三馬へ一兩輩行風にて密書散り雁鳩鷹衛雀などと狂言によりて差がねにて遣ふには夫々の役人有何ゆゑ作者狂言方より遣ふ物とは書れしぞ以後は此役を勤めさゝるゝかしらず

と雖戯場の事を知ぬ人々には狂言作りは左様な賤しき業迄勤る者かと思はれん事文筆を弄ふ作道に恥る所也といひし時三馬大に誤り即刻板元にいひ付其文を削せりと云ふ如此誤り數多有べし京攝にて戯場によりたるを書に出す時は東都と違ひ戯作者を業とする人なく只金満家の主戯場遊里に遊び俳優角觥藝者東都云を愛し穴を探つて樂とする人は是を皆粹人と號中興河太郎丸平大江丸などは是也出入の幫間俳諧師點者などに筆を下させ一部の草稿成つて板に彫賣出さすとも氣性高く我名をかゝす皆戯場によりたる書には八文字屋板と印せり八文字屋は初編にも演る通り京麩屋町誓願寺下る所の書林延享年中に自笑歿して舐其笑孫瑞笑に至りて身上甚衰へ浪花に下つて貧く暮し板元をするの力なしなれ共閒馴言馴たれば戯場評判記にも八文字屋と記して板元の名も出さず原より役者の批判を書し書なれば作名は猶さら出さず自笑とばかり書置が故に遠國の好人は自笑の子孫今に連綿すると思ひたがへる人もあらん寛政享和文化の内評判記を書には右に云粹人芝居見物後に各茶屋料理屋の席を定め黨を集て評を定て筆をとる

は京に俳諧師月居此二庵齋村の門定雅狼咽浪花に同俳人蘆橘齋

終書數多

可物本と云

馬宥と云

酒屋隣

など誰々を最負ゆる賞

め誰々を嫌ひゆる悪く云など依怙の沙汰する人は斷

て席を退け立物小誥を論せず評有者は文長く間中の

役者

上分を入枚と云

にも紙數三四枚も有けり其頃は見

聞識者多く最負連中にも大手笹瀬藤石花王雜喉場大

連中紅奔とて連中數多ある故此中より評判を定る人

多かりし是故刻成て翌正月二日早天に賣出す

板元好

河太

人求て見るもの甚多かりし今は價の高きとて紙數に限り有惡口を書時は其役者より板元へ彼是といはせる故只何役もよう出来ましたくと譽て計有是にては評判記にあらず役割を書出せるのみ也右に云評判記連の書し頃は作料むなし今は三都伊勢尾張田舎の部まで書集筆耕代までこめて金何程との限り有夫を請取人一遍の狂言見物に行ば年中の作料をとらるべし夫ゆるに芝居は見す役割番付を内にて詠め人傳に聞たるを書なるし役割にあれ共舞臺に一度もせざる事迄さも見た様に書たるなどいと淺猿し此餘戲場に拘りたる書には大約別號假名を書來れり中にも文化中に歿したる浮世畫師似顔畫に名高きは松好齋半

兵衛也此人芝居の好者にて樂屋圖會前編二卷を著す

秋里難島作五畿

内諸處を出す

に倣ひ始出雲のお國或

は西の宮の傀儡師などの圖を著はし樂屋の圖看板の

模様など自畫人なるゆる自在に畫きけり京攝に浮世

畫師と云もの往古より聞ず大津繪の岩佐又兵衛など

は既に古き隨筆等にあればいはず役者の似顔を畫き

浮世繪師と唱へるは流光齋より始りしなるべし

扇面

な

く書し子鍵と

流光齋の役者似顔の畫は三組ばかり有畫

云は此兄なり

風當時畫く所と違ひ淋しけれども顔容老實によく似

せたりと老人はほめけり松好齋は此門人にして畫風

又一變す此人の畫きし顔にせ本又數冊あり其餘女繪

をよく畫きしは西川春畫に妙を得しは月岡鳥羽僧正

に倣ひしは耳鳥齋なるべし梨園看板の畫も一風有て

中興奎兵衛九右衛門など有しが其後畫虎と云人歿し

てより看板一變して似顔畫師にかゝせる様になりた

り似顔畫も松好齋の後は蘆園春好

此人は業と蘆幸よし

國重春北英など有しが近世書ざるにや見ず戲場看板

は看板らしき畫法あるもの似顔の看板を出すは中古

吾妻清七といへるもの天神稻荷の社内にて最初は輕

口をいひおどけたる事をして見物の顚をはづさせ跡

には清七身振物故人淺尾爲十郎芳澤舞臺にて鏡臺にかゝり早替り二役三役かけ合等をするその者の類に長らく頭取をせし忠六と云へる者あり皆忠七の小屋小屋と云東都にて豆藏と云淺草奥山兩國等に有此表の看板に其頃のはやり役者の似顔を書いて出したる物也今道頓堀の歌舞妓戲場の看板に海老藏の役を海老藏の似顔にて出すはほとんど忠七の小屋の看板めきて恥しからずや是も近世梅玉より此風とはなりたり嗚呼時のしからしむるにやいと淺猿し東都芝居の看板は三座とも代々鳥井風として古風を守り鳥井一家に書せり年々歳々三座の看板顔見世新役者附極り付とも云人物圖取同じき様に見ゆれ共新を挑み奇を爭ひ連綿絡繹として今に變らず鳥井の畫風も大江戸の名物なりけり

聲曲類纂作者名寄

弘化丁未冬東都にて發板の書聲曲類纂全六冊は神田齋藤月岑が編輯にて音曲に拘りたる高名家の傳を舉て古雙紙ものをの奏りいと委敷書也然れど前編にも演る如く原音曲鳴物は異國より渡り九州地より關しにや筑紫琴を始豊後節薩摩節など唱れば大約は京攝にといまり竹豊雨派の淨瑠璃又歌舞妓小唄の音曲まで

京攝より發り夫より東武に移りし物ゆる引書にても京攝よりともしく杜撰なきにしもあらず中にも淨瑠璃作者歌舞妓淨瑠璃作者所謂常盤津宮の名前を因みに舉たり尤正本によつて書出せしにあらざれば相違せしもまゝあれ共音曲家はいはず作者は此書による所なれば重復になれども爰に拾ふ

竹本座淨瑠璃作者近松門左衛門信盛平安堂集林子不移山人等の號有 竹田出雲掾清定初代出雲掾は近江と改名して作なせしは二代目なり千鶴軒共云

長谷川千四 三好松洛 錦文流錦項子

文耕初名松田和吉吉田冠四文三郎近松半二

並木千柳 二步堂 淺田可啓

中村潤助 八民平七 榮善平

竹本三郎兵衛 北窓俊一 竹田因幡

竹田平七 竹田外記 竹田和泉

竹田瀧彦 竹田正藏 小川半平

近松景鯉 竹田伊豆 並木永輔

竹土丸 福松藤助 竹田文吉

北脇素文 一來堂 寺田兵藏

近松東南 松田才治 竹田新四郎

荳源七 青江堂 原羽裳

近松能助、松田ばく、守川文藏、中井余次、春木元

輔、豊竹座淨瑠璃作者 紀海音貞義と號油煙齋貞柳が弟

大阪に住 貞柳發跡に送る 知るまらぬ人 西澤一風 本には一

を狂歌で笑はせしその返報に泣てたまはれ 西澤一風 本には一

田中千柳、爲永太郎兵衛 千蝶 安田蛙文 西澤にしした 安

田蛙桂、並木宗輔 市中庵と號す西澤に習うて作る佳作尤多し

月に終 並木丈助、並木良助、並木素柳、村上嘉助、豊

竹應律、豊岡珍平、淺田一鳥、浪岡橋平、浪岡鯨兒、

同蟹藏、中村阿契、中村阿笑、豊田正藏、梁塵軒、豊

正助、難波三藏、黒藏主、七才子、三津欽子、竹本三

郎兵衛 竹本座の作者 筑後の倅なり若竹笛躬、清水三郎兵衛、近松東南

菅專助、豊竹甚六、但見彌四郎、豊竹上野、並木齋治

福竹藤助

同書追考 南水漫遊を引て竹豊兩座作者の略傳を擧た

り 紀海音 榎並貞義と云俗稱喜右衛門後善八と改僧となりて高節と

周と云鳥親齋とも號元文長 夏法橋に叙し寛保二 始松田

戌十月四日一説に延享四七月とも行年八十才にて歿文耕堂 和吉と

云千前軒 錦文流 西鶴門人座 櫻塚西吟 攝州池田人 三好松洛 師

門人なり 吉田冠子 人形遣ひ吉田文三郎 二 並木丈助 北新地 竹本三郎兵

衛 竹本筑後 近松半二 積伊助 爲永太郎兵衛 始竹田 春草堂

高田端庵と云 菅專助 醫師の倅竹 長谷川千四 和州長谷寺の 安田

醫者俳名笛十 播摩と改三味線上手也 淺田一鳥 長

三郎諺也 中村阿契 始團助 八民平七 大阪や太郎兵 若竹笛躬 若

藤九郎人形 二代目笛躬 復松麟と云 紀の上太郎 三井某嘉栗 豊

竹應律 主甚云 松田ばく 俳諧師岡本兼 男德齋 竹本吟 太夫

也 榮善平 道頓堀に 七才子 岡本原一 川四郎 長町七丁目分銅河

の主 中村魚眼 難波新地中村 近松柳 始並木柳後 司馬芝 曳庵

梅の下風 湖太軒 佐藤太 江戸歌舞妓狂言作者 河東節常盤津富

本豊後節の淨瑠璃又は長唄めりやす等の文句は 大か

た歌舞妓作者の作なればと斷りて 玉井權入、南爪與

惣兵衛、宮崎傳吉、立島七郎左衛門、樋口半右衛門、津

打治兵衛 子村瀬源三郎 五月村山十平次、玉松小十郎 晚楓 竹

島甚助、坂東田助、江田彌市 右津打九平治、津打半右

衛門 沈席元役者 鈴 津打又左衛門、藤本斗文、中村少長

中村清五郎 正徳年間流 中村清三郎 長の弟なり 早川傳四郎

且津打菅祈、堀越齋陽次 三 並木良助 柳中村太郎右衛門

津打國次、津打三郎次、機文輔、門田侯兵衛、純通與

三兵衛、始津打傳十郎後 金井三笑 興鳳亭俗 櫻田治助 左交津

後さくら 中村重助 一河井金次、奥野善助、中村山三、大

里榮藏、増山金八 吳山眞野馬朝元 左 瀬川馬雪 元秀 河竹新

七進菰馬岱 元仲 喜市 元半二 澤井住藏 象平田千次、西川

仙助、梅田利助 明沙 平田半三 豐 海木村八一 長 八起好助 大福

岡與市、市山又太郎志中村角止、並木五瓶辭世月雪のた
雪の竹寛政八松島半次二代目中村虎八、瀬川秀藏、笠縫
十二月と有專助米瀬川如阜乙近松門喬、勝俵藏鶴屋村岡幸治、常
後中村盤井田平河七福森久助推寶田壽菜、松井由輔幸松井
幸三藏始木村紅粉助始國次奈河七五三助、田口金藏、本
屋宗七雄大與野瑤助朝篠田金次二代目槌井兵七二代目増鶴
屋南北、直江重兵衛南北勝兵助始龜山勝井源八始周田
島此助、重扇助二代目松幸瀬川如阜始河竹文治二松井幸
三幸始新此餘有名の輩頗る多し尙後編に詳なるべしと
有

聲曲類纂は音曲家の事のみにて作者はついでにしる
す事なれば一人を二名にわかし二人を一人に混合せ
しも尤なる事也されど其道々の博士有て江戸歌舞妓
作者の事は曩に出す瀬川如阜が樂屋雜書に有名の輩
は舉盡せり竹豊兩派の淨瑠璃作者にも少しく違ひあ
り西澤一風を一風と書豊竹座板元西澤九左衛門の事
所々に書て別人と思へり又淨瑠璃作者の内へ並木五
瓶を加へて辭世及歿年を寛政八十二月と有五瓶は前
編に著せし通り文化五辰年二月二日に歿せり並木宗
輔の家名を松屋と云後舍柳と改めしとは違へり松屋

舍柳は役者にて又作もしたる事は前編に悉し松屋來
助中山來助と並木宗輔は別人なり此餘南水漫遊にも誤
假名金柳りあれど原京攝より發りし淨瑠璃を東都の齋藤氏よ
くも諸書を涉獵して一部の冊子とはなりけらし其苦
心の程感心して作名だけを此しりへのせぬ

西澤
文庫
傳奇作書拾遺中の卷

凡十五條

目次

- 一 繁昌記戲臺之辭
- 一 銅脈先醒婢女行
- 一 同 觀戲場
- 一 同 戲場書事
- 一 俳優見立評判の説
- 一 梨園による俳諧發句
- 一 白猿が長夜の書溜
- 一 戲場好者家の發句
- 一 俳優金毘羅樽
- 一 小春紙治情死の話
- 一 近松平安堂作文論
- 一 同半二が獨判斷の寫
- 一 同 後段の話
- 一 西澤一鳳一代不性
- 一 奈河龜助の戲編

西澤文庫傳奇作書拾遺中の卷

西澤一鳳軒李更編

繁昌記戲臺之辭

江戸繁昌記は靜軒居士が著編にして天保三千辰年新鐫發行せしが後子細有之絶板になりたり初篇にも戲場の文あり作者に因あれば爰に出す

演戲國語謂之曰芝居。曰歌舞妓。蓋聞在昔平城帝大同中南都猿澤池側土陷吹烟觸者即病因大燒薪以壓其氣。且舞三番更舞于興福寺門前生芝之地。本邦古誤言結縷草爲芝而攘其侵毒焉。是此名所以緣起也。風俗歌舞俗技等名目既見于續日本紀。而烏羽帝世儀禪司者善舞。或曰男舞。或曰白拍子。又曰歌舞妓。此是也。四海爲家後寬永初年猿若勘三郎賜命創開戲場于中橋街。至九年移于人形街。次都市村二氏之場亦皆成焉。慶安四年又徙于今地。而山村氏起場于木挽街。者在正保元年。始於卯終。

於酉。此是演戲常式題在三看棚頭。東方將白鼓聲始震例爲三番更舞。次演家藝。俗謂之脇狂言。中村氏演酒吞童子事。市村氏七福神舞。森田氏猩々舞。既而旭日始映。招牌爛燦喧座漸揚。田舍人早炊已往。女兒夜粧急走。味一朱塵至。陸續聚自四方。人山人海。鼠戶開不暇。閉棚欄撓將傾折。東西看棚紅氈連接。真不霽之虹臺。面前棚人頭鱗次真未雲之龍本舞臺。三間內正面有亭。左樓右門樓下掛一箇吊燈。夜色靜寂。由良助方乘無人之時。手主夫人所送書簡。悄立照吊燈。展讀過就意。何佳兒倚定樓欄。把鏡照之。九大夫自階下延頸捉其紙端。斜引月光。一紙長箋。二人讀得正熟時。佳兒頭上金釵溜落。撲地有響。由良助吃驚急掩紙於背後。仰面始知樓上有入。階下人亦錯愕。潛身三人有三樣趣。觀者喝采齊呼。山崩海翻。佳兒旋正。驚襟粧嬌含笑。呼由良助。由良助曰。汝在樓上。何爲佳兒曰。妾被君勸醉。不堪困苦。倚風吹醒。由良助曰。如然甚善。但我欲有與汝言。奈何雙星相見。徒守銀河之阻。請下樓來。佳兒曰。曉得矣。將起身。由良助急呼止之。曰。如自本階恐幫間強住更困。勸盃爲之奈何。適見樓外有

一梯子、乃大喜下、庭自將梯子、倚住樓欄、曰幸矣此九級梯子徑躡此降之佳兒曰此非平生所躡之物、無乃危險乎由良助曰言之汝妙年身上事自今一舉趾袴三步間過不復及膏藥醫破裂一佳兒曰莫費冗語勤稱如此恰似乘船由良助曰宜哉出、現天后聖母、來時看棚中忽起爭鬪喧嘩沸騰兒女踏踐叫苦並望本舞臺走上由良助阿佳兒等皆錯愕乃向假驚却作今真驚九大夫狼狽潛居不得自階下一出身頓位三階上不多時天成地平復續前伎嗚呼若此爭鬪乍發若此沸騰乍歇箇這江戶人氣質但此都不繁昌何如起此爭鬪何如發此沸騰然則以此爭鬪以此沸騰言粧此繁華猶信矣

右忠臣藏一力の齣にて喧嘩の態江戸の人氣まの當りに見るが如し詩人の滑稽も珍らしきが故因に銅脈先生の太平樂府のうち戲場に寄する狂詩一二首を出す

銅脈先醒婢女行

遠國這出望奉公、來京不_レ知西又東、獨有_二千本阿姥在_一、頼_レ之有附請狀窮、百文荷擔算用外、一枚布子葛籠中、布子萌葱若松鶴、袖口端掛茜草紅、律儀

一片入主氣、數入三日名所邊、祇園清水兩門跡、愛宕大佛三條橋、翌日與阿姥復連立、音聞芝居今初看、取分投分危々思、斬分殺分慄々寒、尾上梅幸狐忠信、中村鯉長鮮屋娘、鯉長梅幸兩上手、今度狂言銘銘箱、還休四條河原上、熟感風流京繁華、從是每朝手水起、心欲洗落在所沙、八文白彩試塗面、五兩梅花初登頭、麥飯雜炊久不食、偶逢茶粥已爲憂、烟草飲習酒少就、一坐附逢相應劬、口謂不好鳴笑止、鼻唄道行國太夫、減多偏伏金丞相、無正張出燈籠鬢、八寸長簪腳鼈甲、真鈕耳搔今不新、新裁染分履前垂、半分桔梗半分鼠、中有小川英子紋、常履板履絲鼻緒、近所有男字忠七、少宛無心依之恃、時見繰出行處何、二條新地御靈裏、二百席代三百酒、酒罷今宵有談論、談論山由多是鍵、其而忠七終出奔、近頃能從小錢回、他行縮緬平生紬、縮緬紬子最易着、青梅三留身不柔、君不聞在所親父、長困窮如何借上、驕此極試問給銀、知何程半季所取三十目

同觀戲場

一從失寶物、騷動及家中、若殿初踐土、上使肩切風、說愁幽魂白、巧事惡人紅、梅幸此場出、

詮議皆盡^レ忠

同 戲場書事

藝當^ニ金作^一入如^レ山、於染久松袂白攀、割合辨當茶
煖裏、水辛番附幕開間、皆言己宜初末、共喚爲何今
欲^レ還、金槌音休鳴^ニ折木^一、青田高向棧敷班

此餘にも數多あれど略す明和己丑八月故逸滅方海著
惠葉安陀羅校とあり己丑は明和六年なり今年迄八十
一年になる梅幸は祖尾上菊五郎鯉長は中村糸太郎英
子は祖小川吉太郎山下金作皆その頃の建ものにて京
都芝居に出勤の折からなり八十年前の昔も世情は
かはらず太平館^{銅脈}の號は狂詩の冠たり

俳優見立評判の説

往昔より役者見立番附などは時々流行に隨ひ賣事あ
れどもさせる佳作もなく當然に散失して殘らず寛政
中に可物^{前卷に云俳人が其頃の俳優を獸物に見立し草}
稿予幼少の時家父が譲られ珍藏せしが第一を熊嵐小
六<sup>始顯助
小六玉</sup>日本獸物の司にして唐土の虎に對すかたち
肥太り毛色麗しくて猛き中に胸に月の輪と云所作事
を抱き是に増すべき獸なし二番に猿市川團藏<sup>近年歿せ
團藏の</sup>
父形も少さく顔見にくけれど猿の人真似とていか

なる事もせずといふ事なし本手の早切早業なんと殆
深山木の梢を走るましろの如し第三に狼淺尾爲十郎
淺尾此ものの牙をむき出し一聲はゆる時は身の毛立諸
見物に寒がらしめる猛獸也四つには狐尾上新七<sup>祇園
町南</sup>
上鯉三郎^{都屋後尾}是と云能もなけねど只の野狐ならず白狐通
を得たるにや諸人をたぶらかし喜ばせる事奇體なり
此餘猪鹿狸兎など末々の役者に見立女形は鳥類に
見立あり其評に依怙なく又文化中に江戸作者木屋宗
七が書し見立に其頃の役者松本幸四郎坂東三津五郎
中村歌右衛門<sup>梅
玉</sup>澤村宗十郎<sup>源之助田
之助の兄</sup>岩井半四郎等を太
閤記の人名今川義元織田信長武田信玄上杉謙信など
によく見立ありし草稿を梅玉祕藏して或時予に見せ
し事あり此宗七は狂言は一向書得ぬ其かやうの事には
おもしろき書もの有けり今は諸藝とも地に落見立
る俳優者なく殘念なり

梨園による俳諧發句

前篇にも演し如く歌舞妓作者は勿論役者の學問は俳
諧をたしなみ置べし古作者櫻山庄右衛門はせりふ付
に便りよきとて古歌三千餘首を暗記せしとぞ俳名を
鶯山といひし又初代片岡仁左衛門も傍輩の役者に俳

諧を進めしと云心は神祇釋教戀無常何にても役に隨
ひ心詞文旨ならず藝のたよりになる學問也と依て
役者を俳優とて古く唱へ來り既に初代山下金作虹里
明曆二丙申年京都芝居にて女形の下髪は法度なりし
を金作下髪にて出しゆみ歌舞伎停止仰付られしなり
ゐにかへる寒さかなとはよく生死の門を詠しといへ
り夫より已來初代中村富十郎慶子は英流の畫も出來て
龜書の物に自賛「いつ迄も娘心の柳かな女形の情よ
く含めり古水木辰之助の句「永無月は男になつて寢
て見たし是ら人口に膾炙して實に世をおほふものな
るべし近くは江戸五代目市川白猿俳諧狂歌をよく詠
じ徒然文談の書を著す自筆の書珍藏して既に讚佛
乘前集に出す讀て知るべし又老の贅書とて是も自筆
の書あり因に爰に出す家主成田屋七左衛門
書判あり



白猿が長夜の書溜

天上天下唯我獨尊「釋迦も指さすや鯉もほとゝぎす
白猿刑にちかき惡をせざればその身全し名に近き善
をせざれば其心安らか也唯愚を守り天遊を樂しむべ
し

たのしみは春のさくらに秋の月夫婦中よく三度くふ
飯反古庵述鼻しもふさの國成田山の街道に巨金の原
といへるは里々に其名の替りある莫太の原なりこが
ねよりとふる者はこがねの原と心得のぶとよりいた
る人はのぶとの原と覺えず或はしゆすいかまがいよ
りかゝるものはしゆすいのはらかまがいのはらとも
いふ又此原にしんだうよりおもむく人はたかまがは
らと申すなり儒道よりゆく人は空原と號し佛道より
來る者は極樂淨土の原と唱へ仙人街道より行く人は
蓬萊のはらと思ひ莊子のぬけ道よりとふる者は本分
の田地と往來なすなり神道には駕を用ひ佛道は船で
廻り儒道はかちをたどる事也老子は馬より牛に乘て
ゆけと被申しを莊子は人におぶさつて通れと思ひ
／＼の了簡もみな勸善退惡の都にいたらしめんが爲
なり

世中は子の曰南無阿彌陀どふでござすに内外清淨

市川白猿
戲述鼻

市川團十郎は代々俳諧を好みて今の七代目白猿狂句
延猿集とて天保の始に一集冊を出す花笠文京の頼み
にて予筆を耕せし事あり

戲場好者家の發句

大江九舊國

俗性大和屋善右衛門
内平野町金飛閣屋

は予が父の友にして俳諧

をよくし戲場をこのみ狂言を見物すれば吾一人の評判を書同好の者に見する倭なく批判を書面白き事限りなし予五六冊所持せり此人寛政二庚戌の冬俳懺悔三卷享和元年酉の春俳諧紙三卷を著す其中に戲場俳優傳奇に寄を爰に出す俳諧一卷の變化をとく序物語に昔淨瑠璃の作者近松門左衛門國姓爺といへる狂言を作り出して大當りせし跡をおもしろき趣向もがなと枕をわりて工夫に渡る其時の芝居主竹田近江が申は作者の心には左こそ存せらるべきが去ながら大當りの跡は大體すらくとしたる事をなしておかるべし國姓爺にてよほど徳分あれば一二年不當りしたり共我ら式が給る程は澤山也其間は古き物にても出し其内には自然とよき狂言も出候はん夫よりうへそれよりうへと趣向に趣向を重ねたらんかくもて行ばわが家業は盡果申さむたゞ天然にまかされよと申たるは一道に秀たる者の詞諸道に通じ俳諧の一卷の變化も此心專要なるべしと云々

又古雪中庵曰

雪中庵夢太を云也三代目
嵐雪の弟子史登其弟子也俳諧も年よりて

段々と詞を伊達に遣ふように心がくべしさなくては物古びて靜かなる句も出る様になる基也されば妓家の長といひし中村富十郎慶子が心がけを心の師として我はする也と又云俳諧はものゝ模様だてなる中に淋しみを聞かせたらんこそよからめ譬へば古團十郎が顔はあかゝ隈どりながら紙子着て樂屋に居たらんやうに有こそよかるべしと又かぶき役者二代目海老藏が門人に云修行はおのれがかつ手あしきかたをならぬまでも精に入てはげむべし得たる方は夫につれて上達するもの也と申せし我はいかいもその如し發句が附合か勝手あしきと思ふ方を修行すべしと云云又市川五代目の團十郎わざをのがれて手島にかくれ白猿と號し少き庵をむすび老をたのしむ爰にたづねて

色の白きさるどのにそと見參まう

大江丸

とつば冷酒けふのもてなし

白猿

月を秋の花と詠むる世にすみて

完來

此完來は夢太の跡四代目雪中庵也近世對山五代目を繼此餘にてほし合を詠

ある妓家にてほし合を詠

七夕の今宵大星力彌かな

大江丸

舊國

しのぶ戀といふことを
吉田屋の蚊に喰れけり伊左衛門
戯場の雪を題
あまりの大雪に申事さへ遠げしき
同 同 大江丸 舊國

顔見世や旦那みつけし馬の窓
此餘戲場好者家の句思ひ出るまゝ少し書つく
同 完 來

秋の風芝居の窓を吹やぶる
かくれ家はしばるなるべし年の暮
白 大 江 丸

二日からば珍らしい初しばい
顔見世や馬の足跡名はなんと
文 頂 鳳 堂

張ものゝ山も笑ふか二の替り
瀧川仙女に送る
饅喰ふときけば恐ろし菊の丞
米 彦 金 鶏

吉例の曾我朝ひなを題
雨風のそこをこたへろ梅椿
李 叟 玉

道ばたの菜種は關に踏れけり
石川五右衛門の役を題
出代りや葛籠負ふたがおかしいか
眼 玉

狂言も秋の半でムリ升柴のト出に月の思入
眞 顔 馬

極樂へ功のものなる蓮生も西の棧敷に後見せり
年以内に春を迎ふる顔見せはめに正月の事始から
京 傳

此餘校擧に違あらず又文化の始道頓堀角中の樂屋内
にて狂言を題して東都の柳樽に倣ひ穴さがしの句集
出來たり其番付に

俳優金毘羅樽

忠臣藏尾上青蛾評 夏まつり堀田馬宥評

卷首 となせ小浪手踊りの間供をよけ

桃の井が屋敷荒神松買はず

勘平はその儘の手で門たゝき

山科に一日後家が三人出來

さし紙に去る屋敷出と書おかる

長持へ尿瓶をいれる由良之助

奥切らず理窟もとらず平右衛門

伴内は師直が爲に由良のすけ

一力の亭主うそく石たづね

定九郎を命の親じやと猪はいひ

千崎が蚤に喰はれぬ藥買ひ

由良之助出しなに一寸鬚直し

天川屋鐵炮鍛冶で嘘をつき

一夜さに二度月の出る祇園町

異見した諸士が三人新造買ひ

つる井の

天正の

並木の

儘の

並木の

入我の

前髪の

大佛の

旗の

五郎三

きせたの

直住

ちが松の

大舛

藥師の

中村の

芝

富舛の

床

西澤の

一

鳳

卷軸
卷首

其のちは勘平が母高歩貸
 右馬之丞いにしなにいふ京言葉
 八軒屋まで寝つゝけにする力彌
 下女のりんわれ三寶で焚付る
 月影でおかる見てとる左り文字
 團七がしらみは床に置土産
 徳兵衛が女房の顔は鶉やき
 團七は播磨あたりで錢きらし
 賣聲に似ず團七が魚くさり
 茂平治の方がりくつと駕はいひ
 蚤の事一寸の虫といふ九郎兵衛
 ぐれ宿の宿老立合ふ畠中
 九郎兵衛は戻つてもどでん耳に付
 殺さるゝやうに舅は理窟いふ
 お鯛茶屋みだれ三人義を結ぶ
 其後は手水半ぶんつかふ辰
 氏地よけ囃子は畠まはりする

並木の ぬけ道
 小判の 呂 眞
 あらしの 錢 丸
 徳の 李 冠
 一斗の 川 成
 きせの 升 成
 淀川の 直 仕
 天正の 水 成
 まいの 川 成
 まいの 川 成
 富井の 成
 がやの 石
 やたばいの 芝 甕
 やし村の 五郎三
 やく師の 秀 南
 並木の ぬけ道
 ぬけ道

蚤しらみとるは徳兵衛が上手也
 傳八は來世で首しめの指南する
 其のちは寺へ來れど珠數もたず
 茂平治が口をつぶやく借物屋
 九郎兵衛は七丁目で髪ゆふていぬ
 團七に水あびたかと女房とふ
 團七が髪とけて鬢あつうなり
 巻尾 妻は顔夫は雪踏へ焼印
 右之外狂言の外題に寄り毎月會仕候御作意の御方何
 れの撰者へでも點相頼可申候間集元へ御遣し可被下
 候以上
 信仰記
 八月廿八日開卷 板元 正本 屋利兵衛
 近松平安 河内屋 太助
 小春紙治情死の話 堂作文論
 享保七寅年十月十四日十夜回向の折から網島大長寺
 の境内へ紙屋治兵衛紀伊國屋小春參詣群集に紛れ終
 夜法座に連り終に晨鐘の折から境内の傍らにて左の
 一紙を懷にして空敷なりける書殘す一通の寫のべ紙
 二枚なり

近松の 慶 壽
 近松の 大 升
 竹田の 庵 里
 岡しまの 一 笑
 まいの 李 冠
 岡しまの 川 成
 近松の 李 冠
 大 升

今宵ありがたき御教に預り忝奉存候私共淺猿敷
身の果未來のほども覺束なく存候何卒なき跡御
弔ひ被成被下候は、忝奉存候是のみ御頼申上度
書殘申候以上

十月十四日

治 兵 衛
小 は る

大長寺様

追善狂歌三首 網島大長寺一代進譽
皆人も南無あみ島のたむけ草

紙屋ほとけの縁にひかれて

十月の小春の昔おもひ出で

みな心中にゑかうあれかし

境内に墳墓有て書置も一紙に摺て彼寺より出す享保
壬寅年より今年迄百廿八年になれり然るに外題年鑑
には享保五子年十二月六日より小はる心中天網島の
淨瑠璃初日とあり既に二年の相違あれど何れぞの書
損なるべし此作者は近松門左衛門にてひと日住吉へ
詣新家の酒樓にて遊びける時俄に大阪より芝居者來
り夕べ網島大長寺に男女の情死あり何卒速に淨瑠璃
に作りて給はらば翌一日の稽古にして明後日より興

行せんとてひたすらに頼ければ早駕にて走り歸りし
まゝ書つけしとて走り書と書出し直に謠の本は近衛
流野郎帽子は紫のと書つけしと近松翁の頓作を南
水漫遊にほめたるが享保子歟寅年にせよ情死は十月
十四日なり初日出しは十二月六日なり是にては五十
餘日のゆとりあり翌一日の稽古にて明後日より始め
んとは近松が頓作を賞んとて素人丁簡の詞也いかに
急作を得しとても歸つて其事實を聴く間もあり草稿
なつても節付木偶のふりもあり五日と七日とカタ
ずば五日と七日とあら筋の立ものにはあらずいはんや
駕にてはしり歸りしゆゑ走り書謠の本は近衛流など
書しといふは後世好者家の拵事也歌舞妓にての外題
は心中のべの書置といふ天の網島とは盜賊惡徒の類
を云よう覺えて男女の情死にはのべの書置の方やす
らかでよかるべしと思はる是も事早卒の間なれば仕
かたなければ五十餘日の暇あればいかなる事にても
書るべし又能或力老人の語にいふ近松翁が文勢には
人を寒からしむる言葉多し元禄十六年末三月最明寺
殿百人上臈といへる院本に最明寺が道行ぶり蝶の翼
のおしろいを草にこぼして梢には鶴の霜毛を脱かく

る雪は花より花多きと書けり是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書る所に石曼卿が雪を題せし詩を出せり蝶遺粉翼輕難拾鶴墜霜毛散未轉といふ此句を和語にうつせりかゝる才智をもつて和歌を詠じなば秀逸あまた有ぬべしとてやんごとなき御方の御感ありしよしをいへり又橋庵漫筆にある時竹田出雲穂積以貫などいふ人近松が方に赴し時淀屋辰五郎が事跡を記したる草稿に彼が驕奢のさまをいふとて金の冠り着ぬばかりと書るを見ていかに奢れるとても町人には似合しからの様覺えて翌日行て猶草稿を見しに金の冠着ぬ計りといへる次に玄やくは持病にありとかやと書つゝけたるを見て各愷然たりしとかや院本文句評註を書し難波土産といへる草紙に穂積以貫翁近松平安堂が像に題する詩あり

見性却清醇 享齡擬壯椿 春溫渾滿腔
空眼轉洪鈞 句翰譚歌妙 少牋綺語神
申休門榜燦 樂隱特相親

又以貫翁は醫を業として半二が父なり半二を穂積伊助と云也

近松半二が獨判斷の寫

前編近松半二が傳にかへて獨判斷の叙疎懶を出せしが其本文のおかしければ爰に出す

我等元來生れ付たる不器用者にて何を稽古して見ても埒明ず其癖根弱くして二三日の中に退窟して捨て仕舞ふ故是まで何一つ覺たる事なし所詮いかぬ事と觀念してそれより一向人に物習ふ事を止て何事も我胸一つで得手勝手の手了簡を付て人は何といはうと儘よこちのはかうじやと自身に濟して仕舞ふ一分了簡なれば人にいふ事もなければも淋しき儘に思ふ事を書つけ置事左の如し

若人吾に問て世界に神佛といふ物ある物か無い物かといはゞ誠に有ものなりと答ふ其又誠にあるといふ證據はいかにと問はゞ所々方々に宮々あり寺々あり木に彫み銅に鑄たる佛あり是神佛あるにあらずや若其誠の神體佛體といふ物有りやと問はゞそれはあるやらないやらこちは知らぬ也是我等が玄らぬ計りならず聖人といふ者は人間の中の智慧の司つかさどなれども其聖人もしらぬ事なり知らぬ證據は唐の大聖人孔子と云人あり其弟子の子路といふ者神に事する仕様はいかにと問へば孔子申さるゝは我いまだ人に奉公する道

さへとくとは手に入らずまして神に事することは我力にも能はずと答へらる又死で先どう成るものぞと問へば我いまだ生て居る間の事さへとくとは知らずまして死での後のことは一向知らずと答へられたり是を孔子最眞の人の評判には孔子は天地に通ずる聖人なれば是式の事はよく知て居給へども子路に言うて聞しても逆も合點の行ぬ事故わざと教給はぬなりなどいへども知て居る事を知らぬといふは嘘つきなり孔子は嘘つかぬ人なれば實にしらぬ事故知らぬといはれたるなるべし或人又難じて曰孔子は生民始つてより跡にも前にもない程の聖人なるに人に奉公するすべも知らず生て居る中の事さへ知らぬとの玉ふは是も嘘では有まいかといふされば嘘といふと卑下といふとの違ひあり是は卑下の言葉也管仲を仁者と譽て自身を仁者と云はぬにて知るべし孔子兼ての語に人に忠信を盡す事は我におとらぬ者一在所の中にも澤山に有らうが學問を好む者は凡我に勝る者は有まいと申されたり孔子程の聖人なれば最早學問は入そむないものなれども天下の道理は限無い物にて何程の聖人でも知盡されぬことなりさればこそ周公と

いふ聖人も過あり孔子の心にはまだ此様な事では物知りといふものでないと一生學問を捨ず修行めさるゝ故人の目には聖人と見ゆれども自身は中々聖人などは此方如きの及事ではなしと申されたり又人に事るとは主人に奉公する計でなし親に事るも友達に付合ふも國の守が民百姓をあしらふも皆奉公する氣でなければならぬ事故今日人に事ることを知れば生て居る中の事は濟なり夫を孔子の心にもう是でよいとは思はれぬ故押放して知つたとは申されぬが聖人の聖人たる所也此目に見えたる世上の事さへ知り盡されぬことなるにまして目に見えぬ神の事や死で先の事は聖人も實に知らぬ事なりそれ故鬼神は随分敬うて遠ざけるを智惠者といふなりすべて人の死したるを祭つて鬼と名づけ又天地の間山には山の靈あり川には川の靈ありとて是を祭つて神といふ是も靈が有やら無やら見た事はなけれども先昔から有として祭てあることゆゑ敬うに如くはなき也夫を無いものにして輕するは垣破無法ものなり又胡椒丸吞に信心して福德を祈るは愚人なり高は知れぬと云より外のことなし孔子子路に教て曰知を知とせよ知らざるを知

らずとせよ是知るなりと云ふ心は今日知らねばならぬ人倫の道は随分と詮義して知るがよしなば吟味しても所詮知れぬ事は知らぬにして捨て置くが誠の物知と言ふ物じやとの事也昔楚南公と言ふ人蕭寥子雲に向うて曰天地の際は有る歟無いか子雲答て曰聖人は天地の中のことと言へども天地の外の事は言はず楚南公笑うて曰聖人が言はぬといへば知つていはぬ様なれども實は聖人も知らぬであるべし有よう知らぬといへばよけれども言はぬといふは負おしみなりと一口に打込しは尤かな今つくぐと案じて見るに此天地はいつ開きし物ぞ漢の司馬遷といふ馬鹿者天皇氏地皇氏などゝ知れもせぬ者を書並べて是を天地開闢の始とすれども一つも證據はなしよし亦其様な人が有たにもせよ其開闢よりまだ前が無くては叶はず邵康節といふ唐の事觸が十二萬九千六百年に天地一度改まると言ひ經には釋尊より九十六億七千萬歳後に地火起りて燒盡すといふ夫より彌勒出世三會の曉是なり或は仙境の赤縣九州三十三天三千大千世界などゝいへどもその三千世界の外にまだ世界がなければ叶はぬ理也さらば又開闢もなし世界の際もな

しといふ時は都ての物に始終の無い物はないに天地計り際がなうては是も又ばつとしてつまらぬものもこれを案じて居ようならば氣のかた病に成うより外はなしいつまでもとんと知れぬ事なり夫故孔子は堯舜より後のことを述て其前は伏羲とも神農とも黃帝ともついに孔子の口から言はれた事なし是堯舜より後は上に史官とて物書の役人有て其時々を事書記し置し故書經といふ書物有て證據正しきゆゑ也其書經さへ武成の篇は二三策を取用ると孟子は云へり然れども先は書經は證據に成べし尤堯舜より已前に農作を教たり藥を吞おぼえたり衣類を織る事を思ひ付たる人は誰ぞありつらんれ共伏羲神農黃帝と言ひ傳へた計で有つたやら無いやら證據なし三墳といふ書も有れども是も後世の拵らへもの也素問といふ書に黃帝の語あれども是全周の末戰國の間に巫醫の輩黃帝の名を借つて俗の信仰する様に拵へたる素問内經取るにたらず其文の體書經などゝ違うて古體ならざるを見ても知べし其時分の事さへ知ぬ事なるに天地の始つた所其始つた時の人がいまだに生て居て云うたらば誠ともいふべし誰が見て誰がいひ傳へた

る事ぞや吾日本神道の事は唐の鬼神などは格別の事にて我々匹夫の口にかけて申も恐多き御事ながら先一通り神代之卷を拜見すれば伊弉諾伊弉冊の二神をぞ國の始とも思はれぬれども日本とても同じ世界の中なれば日本の開闢が知るれば唐の開闢も知れる筈也但し軽く清るは天となり重く濁るは地と成とは開闢の事ではなし是は唐も日本も同じく一元氣の廻る所をいうたる物也天地の始る所はいざ知らず其輕きは昇り重きは降るは今において其通にて一元氣が絶えず昇り降りして居る者也是を大極といふは何故ぞ極は元屋の棟の名也凡天地の間森羅万象此一元氣から生せぬと言ふ事なく世界は此一元氣一つで持て居る故屋の棟に譬へて大極といふ日本にて國常立尊と申も此國のいつ始るとも知れず常住立て有る此一元氣を申す事なりと聞はべりしがいか様舊事紀古事記日本紀の作者の心も孔子が堯舜より後を説かれし心と同じく諸冊の二神より已前幾億万年有る事やら知れぬ所を一元氣の國常立にて斷りたる物ならんか兎角孔子流の教へは目に見えた現金な事より外はいはぬ事なり生て居る心の事は説ども死での後の魂の

事はついにいはれた事なし鬼神は中庸にある通り視れども見えず聽ども聞えず神の格測るべからずとて神を祭つて神が來り給ふや來り給はぬや測知られぬ不思議なる物なれば隨分敬はねばならぬ物とはいふて有れども又其鬼に非ずして祭るは諂也とて我先祖の鬼でもない餘所の先祖を祭るは鬼神に諂ふとて孔子が呵りし事也易は元占の書物なれ共孔子は易の道理を今日の人の身持の事に引直して占のことは用ひず論語に不占而已といへり一切今日の外の事は孔子の門では言はぬ事なり併し天地の始終の知れぬ事をおもへば誠に世界は浮ものにてどうした操で日輪といふものが出たり引こんだりする事やら何で星が澤山にある事やら一つも譯の立た事はない物爰を思へば鬼神は勿論化ものも天狗も有まいとは言はれず莊子が蝶の夢を見たのか蝶が莊子の夢を見て居るのかと紛はしう言へば言はれる筈なり爰の所は所詮人間の知恵では知れぬ事成程無量無邊那由多阿曾祇劫生通しにして居る佛といふ和郎が知つて居ねば此仕舞は付かぬなるべし阿彌陀佛を無量壽覺と釋して法藏菩薩の時より衆生濟度の事を御工夫なされた間さ

へ五劫非載とあればいかにも文字の如く量りなき壽命の佛也如來といふも無始已來生れもせず死もせず億萬劫の昔も億萬劫の後も替らず此の如く在來り給ふとの事なるべし法華經の壽量品に釋迦如來が弟子の諸菩薩に告ての給ふ我成佛して已來今まで行めぐる世界の數年數無量無邊百萬億那由多阿僧祇劫と云云那由多是萬億といふ事と見えたり劫といふは四十里四方の谷に一ぱい詰たる芥子粒の數を一劫といふよし此數を十弄盤で積つて見やうと思へば幅四十里底も四十里の谷を堀て其中へ芥子を一杯つめて夫を一粒づゝ讀んで見れば知れる事なれども其様な大造な事を仕て見るあほうもなければ一向知れぬ事を言た物なり阿僧祇といふも無數とて算へるにもかぞへられぬ方量もなき數なり爰でみれば釋尊佛に成給ひてよりは誠に無量の年數其間にあそこ爰で色々と名を替へて幾度も滅してわざと死で見せては又現れ給ふ是則方便なりなせなれば佛が常住傍に居る様に見せては衆生が澤山に思ふて誠の信心が出ぬ故わざと死だ眞似して見せた物じやと壽量品に説給へり釋尊淨飯王の後の腹より生れ給ふと直に立て右の手を上

て天上天下唯我獨尊との給ふよし今時生れし子がか様の事を言はい化物也とて擲き殺すべし是は釋尊の心の中にての給ひしならん我土衆生は無明十氣の雲霧に覆はれ我前生も得知らず釋尊は右の通り幾億萬劫を歷る佛が假の方便に後の腹にやどり來り給ふ物なれば形は赤子でも心は三身即一神通の佛體なり生てほぎやあとの給ふよりあまえ聲にて物をの給ふもわざと子供の眞似をし給ふ皆狂言也併し夫程の釋迦如來が阿羅々仙人などに事へて難行苦行の修行はいりそもない物じやとの不審ありそこで又ある經の説に人死して中有の魂の間は前生の事を覺て居れども胎内にやどり生れる時に子返りする時の苦しみにて忘れてしまふなり釋尊は凡人ならねば生れても忘れ玉はず七歩あゆみ物をの給ひしが此世界の惡風が身にしみやがて倒れ給ひて氣を取失ひて忘れ給ふ元衆生の爲に此閻浮提へ出現ありし應身佛なれどもやゝもすれば佛體を忘れ給ふを忘れさせまいと光音天などがあるゝと世話を焼かるゝ其力にて三明六神通を得給ふと也扱又凡夫にも輪廻といふ事有て死で再び生れ替るといふゆる我々も此一生こそ賤けれ今度

は大名に生れて來たいなど、願ふは大な丁簡違ひなりなせといふにたとへば何兵衛といふ百姓が今度國の守に生れ替つても其以前の何兵衛の時の事を覺えて居ればよけれども我前生が牛で有たか馬で有たかとんと覺えぬからは此後何に生れ替へても今の何兵衛の事は忘れてしまふて覺えぬ時はたとへ其再來でも餘所の人と同じ事云はい中風病の瘥れた足は我體でも痛うも痒うもない様な物で何の益にも立ぬ事なり時に彼佛様は識宿命通の通力にて八万大劫無量劫の事をよく覺えて居給へども凡夫の身分では行ぬ事なり其凡夫も佛に成た時は夢の覺たる如くにあらゆる事ども一時に合點の行事のよし此又佛に成うと思へば我と我身を科人を責る様にする事なり衆生の體八百八煩惱でかたまつたる物なれば身口意の三業を戒律にて縛りからめ先酒は惡行の根本五辛は淫欲を起すとしていましめ食事も一日に一度それも日中過ると時に非ずとて喰ふ事ならず虫を殺さぬ様に水さへ水囊で漉してのむ意に貪瞋癡の三毒有りとして密法三摩地に心を定め夏の中は大小便の外立事ならず結跏趺坐して觀法に智恵をみがけどもまだ色々の障り

有是も三界にて品分れ見思の惑に五下五上の分あり那含羅漢四果の衆はだん／＼煩惱去つて過去の事を記する通を得る皆佛の雛子達是にも三乘の品有りて聲聞は四諦の法門に折空の理を觀じ三生六十劫の間七賢七聖の位を歷緣覺は四生百劫の間十二因縁を觀じ菩薩三祇百大劫の間六度の行を修すと云へり此衆が是程の因縁修行でどうやらかうやら實報土の主圓滿報身の如來と云ふ物に成事なりされども此衆は昔より佛に成る株の有衆也尤我等衆生も佛性をうけて來たと聞て居れども無始より已來迷ひに迷ふて其佛性はどこへ質に入て有やら今は株なしの我々いかに修行しても五百羅漢の足元へ寄る按摩取にも所詮ならぬ事兎角世界はどうしても知れぬといふがいつち慥也但經に書てある事を眞受にすれば此しれぬ事を釋迦といふ佛様が知て居給ふと思ふて濟す物か又は惡る氣を廻して見れば此釋迦どのもやつぱり同じ人間にて世界の事をどう思案して見ても知れぬ故知れぬといふては仕廻が付かぬ故せう事なしに人間の外に佛といふ物を拵へ四土の三界の或は須彌の四州など、さま／＼の廣大なる事を説て置かれたる物

か此後いかなる智者が出ても此二つより外は有まじ萬卷の書を學ても知れぬ事なればたとへ聖人に成つても一文不通の我々も詰る所は同じ事學問して氣を鬱する才が損一向あたまから何にも知れぬ方がまし又知れもせぬ經文を信仰して錢一文でも費すは眼前の損也神にも佛にもよらずさはらず只商人ならば商ひ百姓ならば農作の世渡りを精出して喰たい物喰うて死るが末代迄の徳と知るべし必物知りに成給ふな

同後段のはなし

佛天竺より渡りて後種々の佛者出て諸宗さまゝある中に唐土の善導大師と日本の法然上人ほど發明なる人は有まじと覺ゆるなり其ゆるは右言ふごとく天竺の釋迦の有難は人間の外に佛といふ物を拵て世界の濟ぬ事どもを何もかも是に預けて置く掃だめをこしらへたる爰が釋迦如來の發明なる所なり然れども根が證據のない事を説擡げたるもの故空假中と立衆生は此假の世界を有と見る是惑也又空に偏るも塵砂の惑といふ眞實の所は有でなく空でなく其中道の所を語るが正覺を得たる佛なりといふけれども全體が世を捨る法なれば眞と假とを論すれば無は眞也有は

假也我身を諸苦の本として寂滅を樂とすれば詰る所は空に落無に落るなり予按するに此無といふが悟の至極なり仁齋の語孟字義に世界は萬億の昔も萬億の後もやはり此通りの物にて開闢も終もなしと言へり或人難じて曰開闢有といふに證據なければ開闢無しといふにも證據なし然ればきつと無いとも言はれまゝいと仁齋答へてされば是はどの様に詮議しても知れぬ事なりいつ迄も知れぬからは無いと言はふより外はなしと申されたり是が偽りも飭りもなき正眞の所也釋迦も爰を知つて居給ふゆる我成佛已來無量無邊那由多阿曾祇劫とて量なく邊無しとの給ふ是則仁齋の言はれし所と同じくどう詮議しても知れねば量無く邊無き也畢竟無といふは知れぬといふ事也大昔の事を無始と云て文字には始無しと書く人口を開けば阿といふと阿は物の始なるに經には阿字本不生とて阿の字を無生の義と説く是老莊の書に無名は天地の始といひ又は始有て始無し始なしといふものも無しと莊子がいうた様なもの也佛阿難に告ての給ふ我昔文珠師利と有無の二諦を論じてより死して三途に墮ち無量劫を歷て地獄より出迦葉佛に値うて有無の二

諦の事を尋ねければ迦葉佛の給ふは汝此體を有といひ無といふそれが則迷ひなり一切諸法は定法なし萬法皆悉空寂有に非らず無にあらざる實體不思議なりと答て其跡は語無し然れば此有無の二つは釋迦如來も合點が行かす殊の外難義なされし事を自身に言ふて置れし也いかさま有にもあらず無にもあらずといふ時は宙にぶらりでやつぱり空也此跡は最早知れぬ事ならん智論の中に可得の願とは願へばきつと叶ふ願の事なり不可得の願とはいか程願ふても所詮叶はぬ願の事なりたとへば地を掘て水を求め石を鑽て火を出さうと思ふ是らは願へば必叶ふ願なりと言へり夫なれば經の力でも佛の智恵でも知れぬ事はやつぱり知れぬなり惣じて老莊佛の説は目に見えぬ空なる所を説たる物ゆゑ條の通つた事は一つもなく行詰つた所では止なん／＼不可説とて其所は口では言はれぬ所じやとよい加減に逆げて有所經の中に多く有る事也不立文字の悟りを以て禪宗が出ほうだいに人をおどしてもどの様に高上にいふても畢竟空なり無なりいつ迄座禪工夫しても氣違に成がとりえにてついに本來の面目の開けるといふ期は無い事なり律宗が釋

迦の行を學て二百五十戒をたもつ是れも五人と三人とは此行も出來れども世界中の人を皆此通りにせうといふ事は成まじ先夫婦の交は煩惱の第一なれば是を絶ねば佛法の本意ではなけれども男女の交は虫虻に至る迄生れついたる事なるを世界一まいに是を絶事一向出來ぬこと也もし又世界の人殘らず男女の道を絶ば子を生といふ事もなく世界に人種はたえて仕舞ふべし眞實禪律を修行すれば此穢土を離れて首くくつてなりと早ふ死ふより外はなし此きたない穢土に住で居る中とはとても佛法の教の様には成らぬものゆゑ出家といへども寺の内の格式は在家に少しも違はず下男を使へば半季何程と給銀を極める飲酒戒といへども酒も呑ねば檀方に付合が出來ず六十日の勘定が合ねば寺が相續せぬゆゑ十弄盤に隙なく座禪工夫所ではなし日本には僧官僧位ありて何僧正何法印など、禁裏より官位を給はる是も佛法の本意は山林へ引籠り頭陀乞食を業とするそれには大に相違したる事也又俗家にも位牌に戒名をかいて年忌を吊ふ此位牌と言もの佛法には無い事にて是は儒者の神主といふ者が佛法者に移りたる也儒者の教は佛法とは裏

はらにして我親たる者死してもやはり生て居る様に敬ひ神主に諡號を記し詞堂に祭り置命日の一年目を小祥と名付て一門寄合ひ祭る事あり三年目を大祥とて祭る事なり佛法の本意にはかよふの事はなき事なり又服といふは親類の死したる喪の中は悲みの情を姿に表はして常に替りて兇服を着る聖人の教なり日本神道には穢を忌むゆゑ此兇服を着る喪の中は神事にたづさはる事を忌故服忌といふなり佛法の年忌を吊らふと云は彼儒者の方の小祥大祥の祭りの禮が佛法へ移りたるにて忌と言ふ名は神道が移りたるなり誠の佛の悟りには親にも妻子にも執着せぬを本意とすれば燒な埋むな野に捨てよにて魂此土を去れば親も兄弟も他人も犬も猫も皆一體何の着する事あらんなれどもそれでは一向世間が濟ぬゆゑ佛法にもいつともなう儒者の禮が移つて儒道と佛道と神道とませこせに成たる物なり唐の代に大原といふ地に佛法甚はやりて親兄弟の死したるを葬らず尸を犬にあたへて喰する故其他の犬は人に喰付く事習はしと成り次第にか様の事つゝのりて政道の害になる故韓退之歐陽永叔などいふ儒者が佛法を邪說也とて惡みたる事

なり誠にか様に成ては天下國家の大害なり法然上人爰を能知つて諸經の説諸宗の論を放下し難行を捨て易行を用ひ南無阿彌陀佛の稱名一つで濟む様におしへられしは發明の至極と言ふべし成程佛法を餘りふかく修行すればいやとも山林へ引込體を犬にあたへる様に成る其様になると世の亂れに成る事眼前なり兎角人の深う佛法に入らぬ様に身力を禁しめたい今日銘銘の家業を大事に勤めて其間に阿彌陀如來をお頼申て置さへすればあなたが極樂といふ結構な所へやつて下さる程に自身にこしやくを出すな經もよむな戒もたもつなどの教へ渡世なれば漁夫が鰯網引にも念佛申せば罪にならずにむづかしい戒定慧の三學する事もいらすいかにも世界は文盲片言で濟んだ事なり彼極樂へゆくと百味の食を給はるといふ是も佛説に段觸思議の四食とて此人界の人は五穀魚肉などを食とすれども色界無色界には我六根を活らかする識といふ物を食とする或は地獄には業苦を食とするといふ此理を以て見れば極樂往生の人は如來の無上菩提の法味を食として長く樂といふ事なるべしそれを心得違て念佛の德で往生すれば極樂の虎屋から毎

日羊羹でもつゝける様に思ふて居る人も有り又世にいふ鬼と言ふ物あり鬼とは死人の事なれば諸の迷ひに鬼が責られるといふ事を地獄で鬼が責めると間違ふて居る人あり精進と潔齋とを取違へて肴喰はぬ事を精進と心得天竺と云へば空の事と思ひ駈落する事をしゆつほく^{本ノマ、出奔カ}と覺て居る人も南無阿彌陀佛さへ申せば極樂へ行と安心する是では今日人倫の道は道で立て政道の害に成る事微塵もなし此通りなれば儒者も神道者も佛法を惡ふ言はふ様は根から無い事どこもかも中がやうて是ほどようした宗旨はなく爰で見れば法然上人は釋迦よりはやつと發明なる祖師なり右云如く佛法の實の所は無の一字にて根が何やら知れぬ事を數千卷に説擴げたる物ゆゑ經々に説く所度々に違ふてどこが實やらどこが方便やらつかまへ所のない様に仕たる經の面其中のいつち心安い所の教へたるが淨土宗なり其後に日蓮が出られて題目の德で往生すると説けたる是は念佛を先へ仕て取られて負おしみに題目とぬけたるもの也併し此日蓮宗にはまだ自力が有つて惡し只一筋に念佛にて死んだ先はよい所へ行と思ふて一生を安心すべし淨土の教

の如くに説けば佛法は今日の害にならぬ計ならず大に世界の爲になる事なりなせと言ふに今日同じ人間にて大名の家に生るゝも有り非人乞食の子に生るゝもありそれをめいゝ足る事を知つて天も人も怨みぬは聖人賢者ならでは無し凡人は必身をうらみ人をそねみ惡心生ずるは人情なり所を過去の宿業といふ所で明らめが付故惡心起らず面々身の分際を守る時は天下泰平の基にあらずや唐土にて佛法ゆゑに世の亂れたるは無理に佛法の理を知らうとするから也さば知りおほせた所が根が空なる事なれば修行すればするほどまつくろに成て一生迷ふて死る事たとへば傾城になづみて色町へ入こみ粹に成らうゝと深う入れば入る程商も手につかず身上叩き上げた所ではやつぱり野暮と同じ事それよりはどの傾城にも凝らず一坐流にさつと一つ飲んで氣を發して歸れば身上もいがまず養生にも成る是が本の粹といふ物也佛法もその如く深う釋迦の廓へ踏込す唯上かは一通りの南無阿彌陀佛なりと法蓮華經なりと唱へるに格別腹もへらず時々寺へ布施取られるは付合に紋目くゝりつけられたと明らめれば濟む也是ぞ大悟道發明釋

尊爰に現はれ我詞を聞給はゞ善哉〜と讃歎し給ふべし南無阿彌陀佛〜

右は半二が遺稿にして疎懶堂と紀上太郎とが梓にのぼせ天明七末の仲冬同好の人々に配る予も是を一部祕藏して讀に至れるかな此翁かゝる博識ながら前編の始にも演る如く自聞取法問耳學問根氣を詰て物學ぶ事のならぬ自墮落者なりといはれしよし予も此翁の自墮落を眞似るにはあらねど東都においてひと日戯れに書たるは戲場正本寺の大上人

西澤一鳳一代不性

法然上人の一枚起請は愚痴無智の尼入道にあたへし文吾れ生れし折は氏神始諸神達のお世話に相成生ある内は孔夫子の仰をかれし仁義五常の道のはし〜をとなへ來り是から先死ぬ一段と成ては佛達のお世話に預らんさすれば念佛や題目ばかり唱るも見えぬ先の世の事ばかり願ふて其もとを忘るゝに似たりと一流神儒佛の尊きを思ひて朝夕天照孔子彌陀佛と吾のみ相となへ候我と心同じき衆は是をとなへ給へいやならよしにせよ

右一時の戯れながら半二の靈若是を聞かば善哉〜

と讃歎すべし扱遊里洞房の痴情などは親しくたちふるまふにあらずとも知りやすく書やすきものとはいへども戯作者ならぬ歌舞妓作者の奈河龜助が戲編有色相畫文男女相姓とて自笑其積が口調に倣ひその文意猥雜なれども遺稿なれば爰にのする

奈河龜助が戲編

(此一章稍猥雜にわたれるを以て略す)

西澤
文庫
傳奇作書拾遺下の卷

目次

- 一 賴政扇子芝院本摹寫
- 一 昔米萬石通院本摹寫
- 一 北條時賴記院本摹寫
- 一 艷道通鑑雜戀の話
- 一 三浦大助紅梅鞆の話
- 一 一谷嫩軍記須磨都の話
- 一 同千載集流しの枝の話
- 一 娘景清八島日記の話
- 一 狂言の筋は八文舎本に有
- 一 同黄金の鶏内讀の話
- 一 佛法乗合噺の筋書
- 一 戲場番付に名前を削る辭
- 凡十二條

西澤文庫傳奇作書拾遺下の巻

西澤一鳳軒李叟著

享保九甲辰年春始興行追善の芝廿八ヶ年後寛延四辛未年秋に扇子芝

頼政扇子芝

豊竹越前少掾直傳
豊竹筑前少掾
西澤九左衛門版

享保十乙巳年春興行廿五ヶ年後己巳の秋是よりして雙蝶々の狂言を出しけり

昔米萬石通

豊竹上野少掾直傳
正本屋九左衛門版

享保十一丙午年四月八日より翌十二丁未閏正月晦日迄興行嘉永己酉迄百廿三年になる

北條時頼記

豊竹越前少掾直傳
豊竹筑前少掾
正本屋九左衛門版

頼政扇子芝

作者 西澤一鳳
田中千柳

序詞 天上の衆星北に拱して尊を忘れず。地下の諸水
東に朝して大よく細を容る。中に牙む葦原國。神日
本磐余彦の天皇より。千餘り八百や四十の年。君を傳
へて八十代。高倉院と申奉るは後白河の法皇第三の
皇子。大政入道平清盛が御智君治承四年も二月や
位譲りの大内山ナロシ御即位の大禮經營有。受禪の
宮は言仁親王安徳天皇と號し。御年いまだ三歳の。
いとけなき御姿に衰晩を召せ。内大臣平の宗盛かき
いだき奉れば。父みかど御惱によつて後白河法皇三
種の神器を傳へられんともうけある。玉座は唐の例
をうつし。四神の幡を堀に立、諸衛鼓を陣に

昔米萬石通上之巻

作者 西澤一鳳
田中千柳

西鶴法師が筆の跡女郎のよれる見世さきには。たけ

き虎もかうべをうなだれ印花禿さくらがらが横町を。袂かゝゑて通るには人かみ犬も尾をふつて。必よると書傳へ。あしこそしげれなには江や。夕暮ごとの。ぞめき人。相圖の小歌物まねやうかれ淨瑠璃口々の中に目に立東口。新町根元根本の。油鬢あぶらびんつり付仕出家。虎やが見世にいろさはぐ。竹取唐土木もろこぎ々野など。客付る間の何がな慰み。是三五郎殿。あれ／＼小野屋かうやくの聲がする。來たら呼込うたはせて聞せてや。なふもろこし様木々野様かあらしいでつち殿じやないかいの。それ／＼。見かけは十七か十八か年よりあどないおぼこ生れとそやされて。あほうのくせに口あはだて。おつと心得たんとはしらぬかうやくの。一座や二座はもめ姿。是／＼小野やかうやくと。呼れて頃も六十餘りねばはづよなるかた親父おやぢ。箱ふりかたげ立よれば小野やおの

北條時頼記

作

者

西澤一風
田中千柳

序詞葵の花は日を見て轉じ。芭蕉はちは雷かみなりを聞て開き。耳みみ

目めなくして時を知る。況や明君機に臨み變に應じて民を撫艱苦を憐み世を富す。惠みめぐれる國人くにとらの相模守時頼朝臣古今に厚き仁徳の。榮へ茂りて桑の門薙髪たぎはみの昔を尋るに。建長かぞへて四つの年。卯の花月の都より。後嵯峨の院第一の皇子。宗尊親王と聞えしは鎌倉の御所に入御なつて前の將軍の御代嗣とナロシ「各かしづき。奉る親王御年十三歳。才智賢く渡らせ給へば。執權北條相模守時頼。同若狹の前司泰村。御藏の典鑑佐野兵衛政經其外在鎌倉の諸大名。善盡し美盡して。御家督相續ことぶきて天下の悦び餘り有。宗尊親王御袖を引つくるひ某いまだ

艸道通鑑難戀の話

艸道通鑑は正徳五乙未年八月發板して似切齋殘口の著述なり神祇釋教難無常の戀を六卷にわかし昔より歴々の戀知りの情を書常世の薄情を誘ういとおもしろき書也難の戀の部第十一段に白浪ばかりこそよると見えしかと詠せしは須磨明石の暗りみがゝれ出ると詠しは木賊山の有明頃同じ月ながら所によりておもしろくわけて武藏野の草より出て草に入月虫の聲も高調子に隣りをはいからず露も大粒にて餘所より

耀めきつよし見る人の心も空とひとつに成て寛濶なるはむかう境界に随ふ魂なるべし葉月の中の五日もろこしも大和も詩作り歌よむ人の宿に寝るはなし終夜友にさそはれて興に乗するの望風願淺（頑世カ）もなき童も宵まとひせず病なしの奴婢も隙有ながら居眠らざるは東坡居士のいへる造物者の無盡藏か爰に中橋邊に人の家の賄する男伴ふ人もなく夜更までここがれ歩き往還も稀なるさびしく成しまゝ我も家路に急ぎ足早に戻りけるに汐留あたりのほぐらき方よりふり袖着たる女の色白く品かたちのさもしからぬが差出てふるひ聲して見かけて申上ます御情けあれかしといふ男は思ひがけなく何事にかといへばたゞおたすけに鳥目少し給はれかしと云男扱は此頃夜鷹とやらんいふものにこそ何にもせよ今日は心ざしある日なり有合たるぞ幸ひと遍路打あけて残らずとらせけるに此女左右の手を受け雨雫としやくりもあへず不審に覺えていかにかくまでは歎くと問ふに女のいふにはかく御めぐみに與り候上はつゝますかたり參らせんみづからは浪人の獨り娘にて終にかゝる業に出たる身にあらず母にて候ものは去年相果て年老

たる父親ひとり殊に病の床に臥して持合せたる雜具も賣代なし朝夕のけぶりも絶々なるにつけ隣あたりよりすゝめられ此頃は身過の爲めに夜々ちまたに出て往還の人に袖ふるればその日を送る儲はありと聞しまゝに遣る瀬なき貧しき恥を忘れて今宵此業に出參らせ候へどもしつけざるゆゑ又はおもはゆく宵には人にも近づきかねとかくと夜をふかしもはや宿にかへるべきかかくて歸りたればとて明日の便なければ是非なくそなたの御袖に取つき候にかほどの御たすけ身にとりてのよろこばしさと涙ながらに語るに此男も共に泣てあくる夜必と契りてわかれぬ扱それより夜をかさねて小宿をもとめ出合しに心だておとなしくいひ出すことばもあさはかなく次第／＼にかあゐさまさりけるにある夜女のいひけるは我身かゝる淺猿しきわざを親にしられんも口惜くそのかたと夫婦の約束致せしよしつゝますしらせ候へば老後の悦び是に過す何とぞ逢參らせんと願はれ候とかたる男も今はとてもぬれ衣かさねしうへのおもき縁いざ諸共につれだちて親の在家へ行て見れば娘がいひしにいさゝか違はず親仁おもき枕をあげて手を合せて

我等はいはれある者ながら幸ならぬ事漸増てかほどに落ぶれ候しかしむすぶ縁有てぞ娘はそなたにまかせぬらん今は浮世に思ひ置く事なしと古き食の下より脇差一腰出して最後まで猛武のしるしに放さじと心がけたれど今の嬉しさ聲の引出に送り候と渡され忝しとおしいたゞき其日は家に歸る此男が主人は道具好にて取わけ此頃指料の求しけるに幸と見せければ本阿彌へ出し吟味の上菊一文字の助宗に極る世に稀成上道具と成ければ主人も日頃の勤を感じ今日のむすびを悦で家屋敷に金銀そへて此男に取らせ娘も親仁も迎へて心安く看病しぬ其年のくれ親仁はながく世を退ぬ扱も泉岳寺の土に埋むと聞しはたしかに大石のくだけにやあらん

此出版は元祿十五義士復讐の年より十四年目なれば近き事ゆゑ大石の碎にやあらんと遠慮の文なり此一段を借りて明和三丙戌年十月近松半二太平記忠臣講釋の六つ七つ目に仕組たり親仁を矢間喜内とし重太郎おりえに潤色したり實に浪人の堅氣嫁が貧苦にせまり河原へ夜毎に辻君に出るなど人情を盡せりといふべし予又此一段をもつて奈河晴助にすゝめ義士傳

によらず本文の通り仕組祖父を鬼丸初代淺尾惣娘を湖鹿娘環子を璃寛二代目此三人にさゝばよからんと晴助諾して璃寛にはなし筆を採り予に外題を商議す作者殘口子を賞じて艶道通鑑廓卯花などよかるべしといへるうち譯有て鬼丸は退座し市川蝦十郎始市

名新出勤と成ける璃寛新升久々の一座なれば幸ひと出村玉屋の名を借りて越前三國夫婦墳と外題して寫本十卷を出して文化十四丁丑の冬顔見世に出し幸に當りを取りけり是等狂言の種とするには其折の役者

によるべし數多ある野史雜書の中には是を潤色して誰々にさせんと腹稿新奇無量のもの數多あれ共時候座組により世に出ず年月立ば忘れ腹稿の儘徒とはなりけり詩歌連俳に孕三句とて趣向うかびながら句を惜しみて其場をまづ昔源の順が楊貴妃歸唐帝恩李婦人去漢皇情云詩を兼て嗜み對雨窓月といふ題を得て此句を出し津守の國基が薄墨にかく玉章と見ゆる哉の歌もおなじ其餘ふし柴の加賀は白川の能因も此類ひなり芭蕉も浮世の果はみな小町なりといふ句を久しく心にかけてさまゝに品かはりたる戀をしてと前句出しをりに爰でこそと附たり詩歌連俳にすら讀

ばえあるなしの跡あり況はんや諸萬人の看官に見せる狂言なれば時候人氣役者の三つに呼吸あはねば手柄とならず期をまつて期を失ふる口に言へば辨當もお藏となりしといふべきか此三つを辨へすいかに當り狂言なればとて無理往生に出して益なく不評にして看物の入らぬ時は金主には損をさせいらざる氣根をへらすのみなり三つのうちひとつかけても時來らずと腹稿のまゝ持にしたらん方ぬかぬ太刀の高名なるべし

三浦大助紅梅鞆の話

此狂言も享保十五庚戌年の春竹本座の新淨瑠璃にて長谷川千四と文耕堂の作なり大序は眞鶴が崎にて頼朝敗軍を集める場二つ目は八丁礫の後家再縁して眞田文藏藤九郎盛長等と再會の場三つ目は稚子が辻青貝屋より星合寺四つ目は三浦義明衣笠城の場何れも面白き場ながら衣笠城にて三浦大助百八歳けふ討死のかどんでと老の粧ひの若々敷花田の衣に白の直垂金造りの太刀をはき心をもみに菱烏帽子しのゝめ芝毛の駒にのり紅梅鞆かいくり／＼五色揃ゆる出たちばえとの駒あるゆる表號に紅梅鞆と出せり此三段目

は餘の三の切と違ひ屋體組なく往還の狂言なり娘景清の三の切襤褸錦の大晏寺堤の外三の切を往來門傍にて書しはなく數百番の淨瑠璃の内にも所謂天狗もにて老練の者ならで語らず三十年前北の素人淨瑠璃に名高き吹松獨是を語り予も幼少の折聴し事あり然るに文化十三丙子年瑠璃を最負の老人よりすゝめて兒源氏道中軍記の二の切青墓熊坂長範の役又太政入道兵庫岬三の切能登守教經と二役をさせしに古今未曾有の大當りをせしより何がな珍敷院本を見出し瑠璃にさせんと種々勸むる中に三浦大助の三の切梶原をせよと北の最負連より達ていへ共瑠璃役は納りながら時節有べしとて是をせず六郎太夫を鬼丸娘梢を珉子ならば役割にも誣なかるべしと再三勸めし時瑠璃の答へに六郎太夫と娘はよくとも大場景親侯野景久を冠十郎俳名慶舍團八俳名國風俳名にさせたらんにはかゝる名譽の狂言を仕崩すべし其譯は石橋山合戦の頃は大家庭侯野は本身なり梶原景時は身分遙に低からずや其兩人の見る前にて切る劔を手の内の術にて切らず鈍刀と偽る役ゆる大庭侯野は我藝と同じき立物にさゝでは狂言の情に叶はず先片岡の大庭新升の侯野なら

ばしても見ん狂言は是に限るべからずとて再言はず影にて看板等の手當までしたれ共出ずなりけり此時いかにしても残念なりとて會稽三浦譽と外題して濱松歌國に託して繪入讀本に出させ文談は院本のまゝを書けり後五六年立て文政四辛巳年三月歌右衛門此頃梶原をしけり六郎太夫鬼丸娘梢松江大庭奥山俣芝翫野歌七にて外題も無雜作に梶原平三紅梅鞠と呼けり四の切をしてこそ紅梅鞠なれ譬はい紅梅の簾にするにせよ簾の梅は源太景季なりかゝる事は前編梅玉の條にのぶる如くなれば論なし其頃璃寛芝翫とて最負ゝの鎗を削り甲乙を爭ひしかど璃寛は年も芝翫よりは十ばかり越修行も故銘人の狂言を見覺えし故か三段ばかりは丈夫に上なりされども芝翫は若手なり時の人氣に叶ひし故血氣にまかせ何役にても仕おはせ暗的も中には有けり此時予が文の友魚力といへる老人素人淨瑠璃俗號備七古今戯場の見功者にて珍敷狂言出しゆる一見せしが片腹痛くなりし故石切だけに歸りしと予に咄さる其批評を聞くに此紅梅鞠の三の口切は實曆明和の頃一見せしが其時の役割梶原景時に三保木儀左衛門俳名素桐六郎太夫に三樹大五郎元祖逸風娘梢に澤

村國太郎いまだ娘形に有りし大庭景親に嵐七五郎俳名舍丸股野五郎

此頃は喜吉

にてせしを見て餘りおもしろきまゝ其後此狂言出たれば老後の思ひ出に見物す

べきと樂しみ暮せしに永らく出ず又當時の役者共は見るが物なしと近頃芝居は噂のみ聞て見物せず然るに此度中村歌右衛門工左衛門等がするよし聞早速角の芝居見物せしに衆人一統よろこべども此方の評するに論にかゝらず夫を大明神の親玉のと諸見物は皆盲同前なりと散々の評也予も老人の昔を賞め角觥の咄いづれば谷風小野川雷電に威され戯場はなしには黒谷文七平九郎川森初代あやめに倒され閉口するも口惜ければいかなる所が氣に入らず委敷評じ候へと魚力老人の評を聞に先梶原の了簡違へり大庭俣野は東國の大名なり景時は小身なり今の芝翫が梶原ならば大庭は片岡に限るべし俣野は新升か大友なるべし奥山歌七等にさせるは何ぞやその上今にも耳に残り眼にさへぎるは茶の湯のうちなり詞「此馬場先の松風を釜のたざりと聞なして持參の茶箱澁くとも御兩所へ差上げんフシ」此場のゑらけ汲流すお茶の手前は小扨従が色をゆかりの紫帛紗青しつ覆ひの挾箱腰をか

くれば是も又三疊臺目の心地ぞと梶をとつたる梶原が心の花ぞ優美なると此内茶の手前をするはかの北野の大茶湯のさまを見するが狂言なり茶の湯は東山殿以來の弄びなどとして芝翫が酒にかへ歌をよむかは知らねども都て小利口にて大名とは思はれず與力同心の心持なり後刀を改る所物語親子の影を手水鉢にうつす所も皆下卑たり幕切淋しきとてか大庭侯野が出て軍法の問事などは論にかゝらず又鬼丸の六郎太夫甚あし、逸風の事^{大五郎}のせし時は「するどき劔のかゝみ打音はばつたり砂煙り血はたつなみと涌かへる上の死骸を引のくれば六郎太夫は茫然と起上つたるからだの門(内カ)聊も疵付ず繩目はふしぎにきれほどけ氣を空蟬のうつかりひよんと此時起上りしまゝ眼たゝきもせず正面を見つめ居たり大庭兄弟が悪口矢來の外にて娘のよろこびせりふ渡りて大庭侯野挨拶もなく立かへる迄長き間正面は見付いれ共爰は冥途か何國ぞと心の疑ひ顔にあらはれ兄弟の這入切た跡にて心付死んとする思ひ入得もいはれず鬼丸は骸うごかせて扱は刀はなまくらかと大庭兄弟の這入らぬうちから早心付たる體然らばとめ人のないうちに切

腹は出来るべし嗚呼拙なしとつぶやかれたり予も此體のおもしろさに以前璃寛に勧めし時時有べしといへる事を老人にかたりければ實に璃寛にさせたらば鬼丸にも教べし其心にてする時は素桐にも増るべし残り多しといはれしが璃寛は期を待て期を失なひ芝翫は我を張り仕おほせたり夫すら又梅玉の狂言となりて仕様を知らず星合寺を宮となし手水鉢變じて駒犬とかに化す役者はもとより見物の目も其時々にかはるなるべし

一谷嫩軍記須磨都の話

此狂言は今専ら歌舞妓淨瑠璃にも流行して誰も知りたる事乍ら並木宗助が遺稿にて歿後寶曆元年辛未臘月より豊竹座に於て尤書さしの所は淺田一鳥浪岡鯨兒が補助もあれど宗助數十番の狂言ありと雖も是等が名譽の佳作と云須磨の若木の櫻を源平の世界へ借り敦盛を院の胤故無官太夫と云熊谷直實はもと佐竹の治郎などと思ひもかけぬ軍中の身代り斯押出しての趣向はつかぬものなり三の切枕淨瑠璃に要害嚴敷逆茂木の中に若木の花盛八重九重も及びなきそれかあらぬか人毎に熊谷櫻といふぞかしと嫩の櫻に熊谷櫻

を混じ寺内の餘木に梅有て此花江南の所務なりと辨
慶執筆の制札を梅と櫻の樹はかはれど態と一本に寄
たるなるべし予當仲秋月見がてら彼地に遊ぶに付古
圖名所等を齎りかの地に引當て見る所源語須磨記の
古きはいはず源平戦死の古墳は源平盛衰記平家物語
より見出して爰か彼所かと定めしにはあらず大約嫩
軍記の院本より所を定め標石を建しと思はる山上に
は内裏の跡あるが故三の谷の前に一門の古墳有を嫩
軍記の淨瑠璃此かた敦盛の石碑と唱へ替たり古き船
頭唄に「爰はどこじやと船頭衆に問へば爰は須磨の
浦敦盛の石塔是實曆明和頃の流行歌なるべし新畫圖
を見れば鉢伏山鐵楞嶺より須磨寺の北手を都て後の
山と云とあり三の切物語の文談に述去たる平山が後
の山より聲高くとはより土俗唱へ來るを攝津國大繪
圖に迄書入ると見えたり是に不限都て名所古跡は多
くは淨瑠璃より出て所定まれる物人も尋ねて少々の
廻り道をして必訪代々の撰集に出し和歌の名所古
物語物に出たる古跡は俗に遠ければ人行す四天王寺
の西門の花表の額を小野の道風の筆也とは竹田出雲
が青柳硯より定め須磨の古戰場は並木宗助が嫩軍記

より極る原より根なし事を書編る業ともいはいへ
是らを作者の面目といふべし曩に云兒源氏の熊坂長
範の珍らしかりしより銘々古淨瑠璃本より見出して
文政元戊寅年五月堀江市の側芝居にて須磨都源平躰
躰二の切扇屋若狹の場源平雌鳥越三の切鷺の尾經
春の場を集め熊谷鷺尾の二役を瑠寛にさせけり源平
躰躰の院本は享保十五庚戌年霜月に始て長谷川千四
文耕堂の兩人竹本坐にて作なり然る時は嫩軍記より
廿二ヶ年前の狂言にて熊谷敦盛は嫩軍記の佳作に奪
はれて久敷世に出ず其うへ二の切なれば齣輕く操り
に取立ても眞の太夫は三の切をとり二の切は二枚目
三枚目の太夫語れば輕き事勿論なり物によりて三の
切は語り手なく二の切四の切など流行する狂言あり
いはば蘆屋道滿大内鑑の三の切は人語らず四の切葛
の葉の子別れのみ也攝州渡邊橋供養にても其場を語
らず四の切袈裟御前鳥羽の戀塚のみ語るに同じ依て
扇屋の場を人しらず漸北の吹松前にいふ素人は時々語
上りの名聲と聞たり近來こそ法則崩れ形容にもなき背けたる
役を仕もしさせもすれど文化の末文政の始頃は嫩軍
記の熊谷などは仕手の役者を好し事なり既に奥山十

郎のは容猛いか様坂東武士とも見ゆるが故熊谷は
 毎度せしが芙蓉南部屋のせし時人柄に似合ずとて不
 評なりしとぞ寛政十戊午年益替りに珉獅瑞寛とて若
 手揃への折熊谷は小珉獅六彌太は瑞寛切は八郎兵衛
 嵐吉助猿毎日替りの時也其後は熊谷は片岡一人より仕手
 はなき様に思ひしに文化十癸酉年江戸より歸りたて
 の歌右衛門後梅玉と云小兵ながら歟軍記の熊谷をしけり
 もとより手だれの芝翫なれば故人の仕來りと違ひ新
 奇無量の思入を加へたりければ二の口須磨の浦組打
 の場は古今に仕手あるまじと評よかりき三の切物語
 迄よく幕切切拂ふたる有髮の想との所にて兜の下く
 る〱坊主なり義經より暇の出るや否わからぬに青
 坊主になるとはあまりなる思入をとて甚不評の上角
 の芝居にて瑞寛青柳硯の道風をして大當りをとりにし
 ゆゑ興行わづかにして京都芝居へ登りけり其時の落
 首に熊谷が夏のとうふにあてられてあたま丸めて京
 へ御隠居とてそしりけり此時より後歌右衛門度々出
 し坊主あたまを見馴しゆゑ今又有髮の想にしてした
 れば古風なりとて笑ふべし右に云ふ如く熊谷の容瑞
 寛には似合ざる故歟軍記の熊谷はせぬ事に極めたる

を源平躑躅は狂言も違ひ殊に深編笠にて長く顔を隠
 し居るゆゑ薄肉低の粉摺兀しにて見せたらば珍らし
 かるべし拵へ樂屋通言に顔のつくりを云だけにても役になるべしと
 勸によつて始しに狂言の珍らしきと瑞寛の拵衣裳萬
 端評よく大當りを取たり此時の役割は小萩の敦盛
 に萩野錦子後澤村國太郎扇屋上總に嵐冠十郎同女房に中山
 文七阿根輪の平治に嵐團八尤瑞寛の心には此直實は
 院本のまゝ添削なくする事故役輕く狂言は次幕鷲尾
 經春にて見せ此場は拵容を役として勤けり翌年京に
 て此狂言を出し上總に工左衛門小萩に小六にて是又
 大入せしなり其後中絶して狂言出ざりしを十五年後
 天保三千辰年歌右衛門梅玉年々根氣疲れ新に一日の狂
 言を稽古をする能はず大體の役は仕盡したり一齣は
 乃至本ノ口切ものに殘る狂言のあらまほしと手に相
 談に及ぶ色々と話す内ふと源平躑躅の事を咄せしか
 ば梅玉も兼て噂に聞居る事商議の邪魔なりとて餘人
 を退け梅玉に其役出來ふや出來まじくやと問ふ予が
 曰瑞寛は常に眞立役のみをして替りし造り拵へをせ
 ず故に見物珍らしがりたり前にもいへる瑞寛すら役
 は不足なれども造拵にて勤めし事を語り聞す梅玉云

我に熊谷の造り拵へ珍らしからず殊に岡は鴉寛の狂

言を腹でして働きをせず看官に感心させる名人なれ

ば所詮梅玉の狂言になるまじ予又曰二の切位故役輕し是を三の切に脚色ばいかにと院本正本を取よせ讀聞せければ梅玉聞て成程是は輕くてする所少ないかいすれば三の切になるやと問ふ本文の熊谷は菅原傳授の松王にて小太郎のなき役なれば輕し是を口と見て道具をかへ五條の橋にて嫩軍記の二の口組討をして見せなば梅玉素より檀得の樂屋通言に二の口を然唱る方評よく東都より岩井紫若杜若梓松之助來り出勤なれば是に敦盛の小萩をさゝば取合よからんと云梅玉大によろこび兩人共に引拔の衣裳を誂へ予は正月元日に此増補にかゝり都て一幕を賑はしく人數をふやし五條の橋よりチヨボを駒太夫に書豊竹駒太夫は延享寛延寶暦年間の人古今の美聲名音也とて駒太夫ぶして有愁ひ大落しの跡かゝる歎きの折しもあれ俄にひびく鯨波耳をつらぬく鐘太鼓手に取如く聞ゆるにぞ夫婦ははつと打驚胸を痛る計り也敦盛耳を翫て給ひセリフ「ハテ心得ぬ人馬の物音扱は先刻の阿根輪とやらんが再び是へおしよするか我命はをしからねど名もなき匹夫の手にかゝる事一門の思はくハテ殘念や

なア「御落涙ぞいたはしき下略敦盛を忠度につかひ熊

谷を六彌太につかふ兩人役の肥たる事なし其末にセリフ「イヤウ熊谷殿御所望に候得ば此二本の陣扇わけ一本進上申すかさねて廻り扇の印チヨボ「互ひの勝負は戰場でといはぬはいふに彌増る涙かくして手に渡し夫婦さらばと立出れば是のふ暫しとひきといめ可愛いゝ娘の死顔をまいちど逢うて下されとすがる袂をふり拂ひ早立出る其隙に熊谷馬に乗り移りさもゆゝしげなるその有さま見るより敦盛心をはげましセリフ「いかに直實此場は此まゝ別るゝ其一の谷の戰場にて我ぞ誠の敦盛と名乗つておことに出合ひなば助る心かいかに花道にて紫若引ぬきチヨボ「いかにと呼はれば此時熊谷につこと打笑ひウタ「ホ、いしくもとがめたりモシ一の谷の戰場にて出合なばけふの情を其日の仇此加茂川の流れを直に須磨の浦になぞらへ一

二の谷は東山今恵れし此陣扇さつとひらひて高聲にチヨボ「駒をはやめて追駈來り舞臺で歌右衛門「ヒリフ「ヤ

アゝ夫へ打せ給ふは平家の大將軍と見奉るまさなうも敵に後ろを見せ給ふかかく申某は武藏の國の住人私の黨の旗頭熊谷の治郎直實見參せん返させ給へ

ヲ、イ／＼チヨホ「扇をひろげ暫し／＼と呼はつたり
爰にて歌右衛門「敵に聲をかけられて何か猶豫なすべき
馬上にて引抜き」敵に聲をかけられて何か猶豫なすべき
ぞ敦盛駒をば引かへしイザ來い勝負と詰よれば熊谷
も進みより互ひに打物抜かざし朝日かゝやく鈬の稻
妻かけよりかけよせてう／＼蝶の羽返し諸鎧駒
の足なみかつし／＼こは須磨の浦風に鎧の袖は
ひら／＼群居る衛村千鳥むら／＼ばつと引汐に
よせては歸り歸りては紫又打かくる歌「虚々實々チヨ
ホ」勝負果ねば太刀投すて馬上ながらもむんずと組
エイ／＼の聲諸共たとへ鎧を踏はづし兩馬が合
に落る共歌「首かき切て高名なさん其時かならず情
ある武士杯と油斷せば終にかの土にかばねをさらさ
ん心得たるかといさめの詞略次」の狂言を前に云越し
奇麗にて紫若と老練の梅玉と所作が／＼をさせる心
に書上げ三日寄初に相談したりければ梅玉よろこび
の餘二の替りには惜しとて三の替りに角の芝居にて
出しけり熊谷梅玉敦盛紫若上總大友合女房加納阿根
輪翫十郎大當りを取りり是より梅玉の狂言と成り翌
巳年三月京都にて敦盛を尾上多見藏にさせ同七申年
の顔見世に敦盛を瑞寛三代目めとくにさせ幸にしていつも

評判よかりけれど敦盛は紫若に限るべし市川海老蔵
東都にて此噂を聞三升屋四郎狂言方の内彌助に院本を仕組ま
せ彼地にて熊谷をしたれどもかゝる増補とはしらざ
る故熊谷花道へかゝり敦盛本舞臺より呼もどすが故
兩人とも引拔目立ず殘念しかし東都にては珍らしき
ゆる度々勤め今はねこも釋子も扇屋熊谷ととする事
には成たれ然れば此源平つゝじの熊谷は瑞寛を元祖
と見て梅玉を中興の開基なれば今時の駄熊谷とひと
つに混する事なかれ

同千載集流しの枝の話

天保十二辛丑の春予は東都遊歴に下りし處武州熊谷
驛熊谷寺の靈佛靈寶等向兩國回向院にて開帳なりけ
れば木挽町河原崎座にて蓮生坊が悟道の發起は一子
を悲しむ制札櫻樂人齋が忠孝の懺悔は其名を惜しむ
詠歌櫻一谷嫩軍記大序堀河御所の場二の口須磨浦組
打の場三の切直實陣家の場四の切六彌太屋敷の場と
の看板出けり熊谷直實岡部六彌太訥舛相摸に杜若傾
城菅原に大吉敦盛小次郎菊の前に紫若彌陀六田五平
に海老藏にて四月上旬より始め相應に入けり原此四
の切は佳作なれども院本にても語らず歌舞妓にても

至つて仕にくい場故京攝にても今迄歌舞妓にては二の切流しの枝の場限にて四の切はせし事なし東都にて先年故人三津五郎^秀始て六彌太を勤め田五平は片岡市藏にてせし事有名人上手の秀佳ゆゑ工夫に工夫をしてせしがさ迄の當りはなかりしとぞ扱此時海老藏は晝後堺町勤三郎座へすけに出で兩がけにて例の扇屋熊谷一幕出勤也即看板は開帳の略縁起奉納造物熊谷蓮生法師^{熊谷蓮生法師}東下向の時を得て實に有難き御利益もす^{敬盛自作尊像}に頼みの取持は御最負よりの御勸に任て魁源平躑躅熊谷海老藏小萩榮三郎上總冠十郎女房常世阿根輪鶴藏此五月木挽町は神靈矢口渡に替り堺町は多見藏下て海老藏^げの一幕も堺開帳三舛花衣と外題して熊谷蓮生法師に海老藏玉織姫に榮三郎主馬盛久坂彦弟子尼常世松之助是は源平躑躅四の口の趣向をかり玉織小原の庵室に敦盛の菩提を吊らふ熊谷法師と成て尋ねるは鉢の木の最明寺と見て坊主頭にて組討の物語をして見たき誂へ也此後浪華に來つて是を扇屋熊谷と二幕ものに勤しが岡部六彌太をして見たく忠度を助けたき誂へなり予曰扇屋の狂言につぐならば忠度は生置れ共嫩軍記には次がたし其譯はと問ふに敦

盛を小次郎と取かへ身代りに助け置くに次に忠度を助け置く時は二劑と成て魂入らず所詮嫩軍記の四の切を捨て新に趣向を立んより仕方なしと工夫に及べども四の切の文談に捨がたき所二三ヶ所あり菊の前傾城と容をやつし乳母の林も花車と成り出の文句別れにし其日ばかりはめぐり來て又もかへらぬ人ぞ戀しきと上東門院の女房伊勢の大輔の歌の心夕の雲朝の雨と誓ひし事も楚王の夢はかない浮世のあぢきなの此身の上と計りにて思はず結ぶ露時雨あゝ是々それはまあ何いはしやんすあられもない事ばかりエ聞えた昔の勤をかくさうと堂上めかしてヲ、陸都九條のお傾城菅原といふ事は何ぼ隠してもしれて有^下又菊の前と菅原とせり合の文句に其菅原といふ傾城の御本家殿をとらまへて菅原といふシャの果じやとはテモきつい間違ひようム、娼衆か但し又家中衆の御内儀様か近付に成りましょと上から出れば菊の前イヤ、和歌三神を證據其菅原はわしじやわいな^下略かように倭成卿の娘故自然と詞に雲上めく所佳作名文なりと味はへば捨るに惜しく忠度を生かし置けば樂人^{平田五}にかせなく兎やせん角やと書ては捨て

捨てする事兩三度二の切兎原の里を見せねば奥へ趣向といかず口に奥立など見せる時は忠度傾城と成りても跡に役なし此時千載集櫻花の秀逸と外題をすえて草稿なりけれども夫を捨て弘化三丙午の春やうやく狂言とはなりけり田五平を後藤盛長の忤とあれ其須磨の戦ひの場所にて主人重衡を捨て逝たる盛長の後家粉兎原の里の貧家に暮すも時候違へる様に思ふが故伊賀の平内左衛門が忤と直し菅原を深谷の奥方にして伊達なる傾城の容は忠度に假りたるもの也中山道深谷の驛に岡部忠澄の舊領あるが故女房の名に賦したり源平盛衰記は元より謠曲の俊成忠則を始として忠度六彌太の名の出しものゝ書を搜し數多度練らずんば脚色するとも心よからず嗚呼痴なる哉此業笑ふべし——此時の役割は江口の遊君連本 瑞珥人足廻し名寄場 仲藏 隱居樂人齋本 鍛十郎 奥方 壽美之丞 平山武 文五郎 神崎の傾城長等本名 巴丈 岡部六 海老藏 琴唄獨吟流しの枝本調子江戶佐々木市藏調西澤一鳳軒著綴本を出す「行かれて木の下蔭を宿とせば空にしられぬ雪を降り合花を枕に吹雪の梅ね憎や嵐の瑞王當言を聞て流しの花の枝合本利を云に男の氣木場ば加利本を汲んで一

夜まろ寐の添臥もいはぬがいふに彌増る合花や今宵のあるじならまし今年東都八代目團十郎父海老藏に逢はん爲夏休に上阪して土産狂言に是を習ひ歸府して三丁目猿若町芝居にて勤る其外題に源平櫻平家艳さい波や志賀の都はあれに江口の里忠度傾城姿難波の仕組に狂言の世界は春の錦花やこよひの趣向をかへて神崎の廓田五平大盡姿江戸の仕込に芝居の世界は秋の錦嫩軍記を艶色和げ六彌太が琴唄の物語古郷へ飢須磨凱陣一の谷武者書土產新板五枚續と書たりひ連本名忠小團治けいせい長等 新車 平山武 奥山 人足廻し 度 實は菊の前 者所 茂治兵衛 爲十郎 深谷 菊次郎 實は田五平 眼玉 六彌太 忠澄 團十郎 幸ひにしてかの地にても評よかりしと云をこせり

娘景清八島日記の話

此淨瑠璃は明和元甲申年十月廿一日より始る作者は若竹笛躬黒藏主中村阿契三人の名を出し新淨瑠璃は三の切迄にて四の切は義經腰越狀三の口切を次にすえ大切は追善紀念口とて豊竹越前少掾藤原繁泰行年八十四才にして此秋九月十三日に死し其追善の段ありていはい三段目迄の端狂言なり序は清水より大佛供養二は武藏守知章監物太郎の場三の口切は手越の

宿日向島なり是を歌舞妓に取立勤めしは濱芝居にて柴崎林左衛門大戲場にては嵐小六なり寛政元己酉年十月叶雛助一世一代に出せしが尤三の口切計也此狂言程仕憎き役はなきよし泣ば弱し強ければ愁ひ利す兩眼は大佛供養の場にて繰抜たる眼なれば白眼む所も開く事ならず即此時柴崎も同座なれば柴崎とも相談して始しが左程の當りもなかりしと也され共景清の人柄は小六に限るとて人も進め我も捨す度々せしが寛政八丙辰年の顔見せに傾城阿古屋の松序二の檀浦兜軍記の口切鯉の場琴責岩永小六重忠文七髪付あこや國太郎段切所かへしにてあこやの母十六夜に小六井場重藏に文七早替り早拵へにて大に評よし娘景清八島日記三の口切景清小六糸瀧いろは左治太夫山村三組譽景清と云外題にてやうく此時小六の景清當り藝となり珉獅選玉の光二組とも小六玉藝評を書し書也にも大極上々吉に位せり小六柴崎歿して後誰も仕手なく適三樹清兵衛今の太五郎の親始芳龜後太五郎堀江市の側芝居にてせしを予も見た事あり其後文政元戊寅年盆中の芝居にて娘景清八島日記には北條義時に璃寛彌陀六に鬼丸敦盛幽靈に錦子三は糸瀧に小六左治大夫に鬼丸景清に璃寛

舅澤村國太郎舞臺を辭して海老丸と云カ故柴崎の小六のせし事を

委敷教稽古万端再吟して出せしが其頃は見功者も多く小六柴崎等をよく見し者多きにや泣過愁き過るゆる弱しと云けり小六玉すら數遍勤ても評よからず漸後に佳境に入りし役中々容易に出来る役ならずと璃寛もつぶやき居たり爰に天保二辛卯年五月狂言に角の芝居にて梅玉幼少の時加賀屋福之助座摩稻荷等の宮芝居にて淨瑠璃に木偶をつかはす子供役者に首振と唱へあまり人數の餘計出ざる物をカ見取狂言にせし事有此事を思ひ出淨瑠璃は竹本組太夫素人の内藍玉といひし人なり三味線に鶴澤勇造手摺木偶は吉田千四同新吾同三吾と打交同座にて興行せし其時口上書に私幼年より操り芝居へ出勤仕候往古は操歌舞妓打交是あり其後にも私首振と唱へ相勤ましたる先例も御座候に付操方衆中と打寄内談仕り右操歌舞妓興行之義一統坐組仕郎狂言は私多年八島日記三の切島之段相勤度候へども是迄名人達の致され候役儀故是迄相勤不申候所然御最負の御方様より押て右の役儀相勤候様御被下候に付操方衆中と打交にて組太夫殿を以て首振操にて私相勤申候誠にいちか罰か立横十文字の島景清を

奉御覽に入候^下略^下扱も稽古は梅玉の部屋にて組太夫勇藏と並び千四は前狂言の權太の木偶を景清の心にて遣ひ見せ新吾は左治太夫三吾は糸瀧を遣ひ見せる事にて樂屋は中通り部屋を明て操り方に渡し舞臺建造具も操りと歌舞妓の道具同じ場を二つ宛拵らへ前狂言千本櫻打交と云は大序鼓渡しは惣操り也序切堀川夜討は歌舞妓なり二の口はなし二の切渡海屋幕明より友盛の向うへ這入る迄操り千四友盛獨り遣ひにて這入切と拍子木にて道具歌舞妓にかはる國太郎典侍の局友盛梅玉辨慶歌七義經小川にて幕切迄歌舞妓なり三の口椎の木又操り幕切小金吾の立より歌舞妓三の切鮮屋豐竹此太夫同時太夫丸で操り八島日記三の口惣歌舞妓三の切島の段一幕手摺り舞臺幕明百姓賤の女は木偶にて這入る跡梅玉には千四上下出遣ひの容にて附そひ餘は黒子にて松江^糸に三吾^{龍十郎}殿^{龍十郎}事^{龍十郎}左治^{左治}に新吾小川嵐吉^里人に東十郎彌三郎付そひ一統首振にて操歌舞妓とも名譽の者計り打よりする事なれば誤りはなけね共まづ眼に働きある梅玉を盲に遣ふは損也景清計りはいかにも木偶なれども餘はどう見ても歌舞妓也評判程にもなく一日の場代にて操りも

見歌舞妓も見る事なれば朝の内は珍らし共思へど後はすこし飽る心地せられて切狂言曉島祇園調お花半七は惣歌舞妓なれば見馴し見物やはり是をよろこぶ也是を試として評よくば時々打交にすべしと相談して操歌舞妓の二座を抱へ難費かゝる事甚だ多く大騒立て興行せしも時候暖氣の頃にはあり長く興行もせで止けり前編にもものぶる如く中昔迄は歌舞妓は淨瑠璃をまねず操りは歌舞妓を似せず見物も又別々なるものなり故澤村長十郎のいひし如く歌舞妓より操をまねぶこと歌舞妓衰微の基なりとは宜なる哉都て昔は諸藝ともに意地を立てはげむ事也所謂歌舞妓は淨瑠璃より古しと云ひ淨瑠璃よりは歌舞妓者として卑しめる心あり淨瑠璃にさへ東西^{雙竹}の兩派有て始て竹本に取立し淨瑠璃は豐竹座のは語らず豐竹になる院本は竹本に語らず淨瑠璃の坐に作者を抱ゆる時他門の者へ我座の狂言の筋を中間敷と給分渡す時證文をとる事なり若此事あれば兩座より封じを出して遣はず歌舞妓にも大歌舞妓濱芝居宮芝居として位をわかちて濱芝居の役者大歌舞妓へ出る時は出世と祝し歌舞妓より濱地へ出る時には卑しめらる斯意地を立るも

藝道のはびみかつは法則立たり今は其意地もなく法
則もなし素人が直太夫と成り宮地濱芝居の役者も
大歌舞妓の役者も一つに混じて人のゆるさぬ立物
のふゆる事蚤虱の湧くよりも早し扱も八島日記の景
清はなしがたき役とおもはる梅玉のは首振なれば
我才覺有ても手摺と太夫とに任せるなれば論の外な
り小六璃寛すら右に評する通りなれば所詮今の役
者の出来る役には非ざるべし去嘉永改元申年の春東
都中村座にて今の歌右衛門赤松圓心此島松園心の場を増補して段
切船を呼戻す所檀風縁陣幕となり清水觀音の利益に
て兩眼ひらくなどにしたれば東都にては島の景清は
珍らしければ此様なるものと思ふが故かよく入て長
く興行したりけり斯新狂言とすれば格別狂言は濱の
眞砂盡る期はなし是計りに限るべからずと思ひ捨今
時若輩の俳優かならず好んでする役にあらざるべ
し

狂言の筋は八文舎本に有り

前集に演る自笑其磧が合作傾城禁短氣の中より幾ら
か歌舞妓狂言の筋は出たり嘘の誠眞の嘘の論を増礎
花の大樹中入嵐來芝元祖三が拍手公成に遣ひ腕久松

山吾妻與治兵衛の條をひとつに書入戀にとはの下心

と一字外題の狂言も是より成る梶久爲十郎松山國太郎與五郎三五郎吾妻いるは

伊達の與作關の萬兵衛駕舁の條は戻駕色相肩に遣へ

り予此駕の條より思ひもふけし狂言有て天保始の頃

にやあらん一日梅玉に筋を嘶すに梅玉奇也とて手を

打先世界は何にし給ふやと問ふに予傾城楊柳櫻にせ

んと云此傳奇は寛政五丑年春辰岡德叟兩人の作にて

護國女太平記廿卷の寫本にもとづき武州足利義教女

色を嫌うて男色を愛る常憲院様榮飛驒守酒井津關兵

衛根津一色結城守は柳新七にて座頭なれば即外題柳

櫻也淀屋辰五郎に三五郎此狂言によせて梅玉に結城

守をさせ序二は是に少しの添削にて濟せ三四に至つ

ては此より思ひよせ女太平記に出たる辰五郎廓戻

りに白無垢を重ね着て駕にて歸りし奢の間を書入先

幕明に短かき茶屋場有て返して北濱迄還る往來一面

の雪もちとし淀屋辰五郎に團藏駕舁關兵衛に坂東先

肩の勝五郎に梅玉五分局代露次口より牽頭末社送り

出て後程とか明日とか云て這入る坂東梅玉駕をかき

出し花道より西の通ひ道にかゝり本舞臺へ戻り其内
向うの道具段々引て替る團藏中に白無垢にて太夫の

文を出してよみ嬉しがる様あるを所々にて肩を入る度に梅玉このもしがるおかしみ有てをれももとから駕昇の家に生まれはせず相應のくらしなれど川東の色めにこつて以前は駕に乗つた者が今は腰をふつて昇ねばならぬと述懐交りの穴を云坂東も是にあどを

打ておれじやとて駕にも馬にも乗りかねぬ武士の祿をかちつた身が今の唄めに打こんで梅玉ハ、アあの唄衆も筋ものか道理ですつかりしてゐると思ふた團藏勝五郎はおもしろいやつじやそちの駕昇になつたはどういふ遊びをしてからじや咄して聞せい〱梅玉旦那と違うておいら大金はつかはねど腹づくでする色事夫は〱おかしい事もムリ升たぞえ坂東嗚呼相肩受賃がいるぞや梅玉一朱なら旦那からふり出してもらはう杯との捨てりふにて本舞臺へかへる此内犬の遠ぼえ十番提灯捨子番の穴などを梅玉おかしみ入にて卑陋て云とゝ幕切は淀屋橋を飾り付夜廻り役人此玉を附けて来る心にてひそめきて這入る梅玉坂東は是をあやしむ團藏は無中に太夫の事を云て文を又出す梅玉は迂りこける團藏は恠りし乍ら文を抱しめる坂東はあきれて困つた物じやとあたまをなでる

梅玉膝頭へつばをぬる是を幕との書物團藏坂東梅玉三人をよせて内讀の時しばしは鳴りも静らずまだ奥もきかずに三人とも言合せたる様に手を打けり本讀には手は打内よみ其時は予も自笑が履物を直し其積が提灯を見せ迎ひに來し心地せり

同黄金の鶏内讀の話

翌日より又次幕淀屋の場の著述にかゝるに梅玉次幕の趣向を聞度たび〱人を以て予を迎ふ予行す面會する時は尋ぬ問へば語る梅玉一坐の者に風聽をして面倒なれば返書に次まうは黄金の鶏を脚色來る何日の夜讀べしと認め返す梅玉黄金鶏は淀屋の重寶誰もよく知りたる事乍ら外に黄金鶏と名付し筋もありやと一座をよせては評議したりとかや予草稿成つて又内讀聽人は梅玉市紅巖獅常盤松江俳名其答なり其筋は淀屋古番頭與茂四郎今年還曆にて赤いもの揃への白髪親仁は片岡也淀屋の看抱人にて榮飛驒守が謀反に組して淀屋の内を大名にもせんととの工みを隠し格齋なる事計り云辰五郎に幼少より養子娘暖簾内より貰ひある娘小庵松江也是奴の小萬の心にて俠氣をこのみ男嫌ひにて伊達なる姿をし乍ら近々剃髪するとして名

を小庵と云名前辰五郎は團藏にて唯奢りに長じ新町通ひにて南枝の吾妻にほだされて身持放埒なり此中庭の供部屋に坂東駕舁の關兵衛女房お次國太郎にて夫婦共旦那の氣に入り久三やら駕かきやらにて小川の手代新七本名上杉三島之助の受人にて繩暖簾の世話場を豪家の中庭にてする役なり梅玉の駕舁の勝は新町の駕なれど是又氣に入なれば爰に寢泊りする國五郎の手代敵娘小庵に惚れて小川の手代に爲替のかね紛失の科を塗付る梅玉は是に一味して安き敵をして居る片岡は松江を辰五郎が嫌ふ故嫁入さすか但し又庵寺へ坊主に成て這入れといふ小庵は先のとゝさまの云事は聞うが興茂四郎のいふ事はきかぬとせり合ひ辰五郎挨拶すれば片岡放埒の異見する種々狂言有て歌七の役人來つて辰五郎は飛驒守が悪事に組せしとの疑ひかゝり奢のとがめ一時に發し國五郎梅玉また此中へ出て奢りを大業に云片岡坂東は是を言譯する團藏我と名乗つて科に落る此時坂東誠は足利のかくし目付と本名なりの情をかけて今宵夜半のかせをかけ大ムアハ一件這入る返して放れ座敷團藏死罪を覺悟にて松江の小庵に身持放埒は此科を引受ん爲なり小川

の三島之助に南枝の吾妻を逢はさん爲我は又誠淀屋の胤にあらず片岡の番頭惡心にて家の和子には何々の裂の守りをつけ捨てさせ我子を淀屋の跡目に立んとの工み事我は則片岡の子じやゆゑ跡目を繼ぐ丁簡なくまだ其上に飛驒守に組して大名にも成べき心是が否さの放埒なればいまだ女の味をしらずとの言譯松江の小庵聞て扱はさうした心で有たか此身も幼少より娘にもらはれ一旦結びし妹脊なれば婚禮を待兼しが新町通ひは不束な此身を嫌ふてなさるゝと愠氣嫉妬の發るをたしなみ伊達なふりして力業と奴の小萬の云譯にとゞは罪科を受けるには夫婦のかためと小庵の頼みに姉共に寢所敷せ後にたてし硝子の阿蘭陀細工の屏風をあくれば結構づくめ(此間三行餘削る)：屏風を廻す此内に梅玉は是を立聞おかしみ乍ら守りを取り出し扱はおれがと思入笑壺の前へ國五郎圍ひの屋根より現になり落るを梅玉飛のいて是を見るのが返し道具梅玉此時思はず高聲あげ黄金の鶏受付た大當りくゝと我を忘れて聞入るにぞ皆々ジャくゝいうたるは雜俳の卷開きに表題聞しに異ならず扱も夜半の鐘鳴れば坂東姿改て其答小川歌七も出て返答聞ん

と云入る市紅松江出て科にふくす片岡出ていや反逆に組せし覺なしと云坂東證據を出す市紅片岡をとらへ親人様エ、こなた様はのふ主人の胤と取替て淀屋の内を横領しながらむほんとして組する欲心科を此身にあびんが爲め心に思はぬ放埒だちやく遣ふてもくへらぬは金と本行淀屋のせりふとなる梅玉出て片岡を二重より蹴飛ばしうマアおれを捨上つて我子にさせる榮耀榮華是からをれば淀屋の旦那どうするか覺えておらう國五郎出て若旦那おめでたう御最負ぶりに御めかけて梅玉つかうてくれる奉公始辰五郎夫婦をさいなめおりや親仁めをと立かゝるを坂東とめて梅玉の守りを改め淀屋の主は勝五郎向後名前も切かゆる上は辰五郎夫婦は八幡領へ追放せん皆々して與茂四郎が納りは片岡おりやいつ迄も看抱人坂東イヤ八幡に於ておしこめ隠居かならず用捨はならぬぞよ團藏松江エ、有難うムリ升梅玉皆がらくたは片付た是からおれは此家の主坂東申付し一義は何と國太郎廓の諸拂ひ皆相濟小川か七残る有金諸色のむき皆々奥より役人成り出て封印付てかくの通り梅玉恠りして此淀屋の内は坂東のこらす關所被成るゝは

やいと騒く國五郎を投のけて梅玉こいつアどゑらいめに逢しおつたとあたまを叩くが拍子幕又々内讀に手を打成程黄金の鶏なりと皆々よろこびたり是前篇に云並木五瓶が黄金鯁の二つ目を潤色したるものなり既に文政二己卯年三の替り中の座にて興行せしが其後の役者に一兩人よく役割に叶ひても餘はこぢ付に成て始て書上し時とは遙に見劣せり依て黄金の鯁の狂言を種として楊柳櫻の世界により種を見せて手妻をするに似たり齋藤龍興を淀屋辰五郎姉關屋を小庵山形道閑を與茂四郎向坂甚内と柿木金助の兩人を關兵衛勝五郎に盛分しものなり此虛にのつて踊子賣五郎八の世話場本文のを書べしと看板等にかゝる内片岡は隣の芝居へ出勤の約束有て此座に遣へば國五郎にさせる時は折角見込みし狂言も浮くべしと評議の内一兩人役者間違せひなく是をお藏として繁々夜話に取かへて此草稿は梅玉にくれたり後年毎に是もせんと言出せども予又筆をとるの丁簡なし此内一人間違ひても狂言の釣合あしく役者は追々故人と成り天保十二丑年に楊柳櫻を出せし時慶子のみ覺えればあればいかにと勸めしかど辰五郎を我童と見て

鶴の二人を源之助五郎大芝翫にさせては寸尺あはず
と思ひ捨たり纔十年餘りのその内に老練の役者は歿
し仕古せし狂言にても當時の役者は始めてすれば皆新
狂言をするが如し心なしに仕られんよりさせぬ方遙
にまされり

佛法乗合噺の筋書

是も其比の事にて有けり一夏虫干の折から古き八文
字屋の本をしらぶるにたゞ一冊の闕本あり外題を佛
法乗合噺とて自笑其蹟の口調に劣れど紙虱に喰れし
三の巻は何ぞの種にもと皺引延し讀たる所人名居
所を忘れたれども曾根崎村の世界を借りていふ時に
は是より筋書平野屋徳兵衛とも云べき色男天満屋のかゝ
へお初といふ女郎に馴染幸ひ未だ女房もなければす
へは夫婦と相談極りもう一年で年季も明れば價何程
と親方につけ合半金をやう／＼調へ殘金出來る間は
氣儘勤の約束成りけり爰に又油屋九平次といふべき
男お初を呼出し口説といへど初は嫌ふて逢はぬを根
にもち内證を聞所徳兵衛との約束あり其徳兵衛は九
平次が兄へ身上書入れ先祖より持傳へる祖師日蓮の
曼荼羅もろ共九平次の兄に預け此比の半金も夫にて

大かた調ひしなるべし九平次は兄の方へ讒言して徳
兵衛に金はかさねども郎女郎カ賣女に打こむかね
氣違に松明もたせ石春負わせて淵より浮雲し早く金
子を取りかへすべしと戀路の意趣にいふとはしらず
老實な兄より徳兵衛に金返さずば約束通り家財ぐる
めに渡すべしと徳兵衛を突出しけり徳兵衛も詮方な
く漸裏店をかりお初に逢ひ身の不仕合をかこつのみ
お初には又徳兵衛の胤をやどして七月ばかり此程は
勤等もひき何かと物のいる事計り憂に月日を送る内
河内教興寺村に淺田宗司と云郷士有て以前お初を一
兩度もよび馴染のよしにて病氣の容くるしからず是
非にと茶屋よりいひ送る天満屋の女主お初にむかひ
言聞すには徳兵衛の手より跡がねこすばいつとも年
は明まじ譬へ年季の明たりとて住べき家もなく成り
ては親子三人流浪すべし度々いひきかせたるカ河
内の客は身もと慥な郷士にて奥様あれどお子はなく
子を産みさうな妾をとそなたをめざして呼遣ひ徳兵
衛殿の半金にて身二つ誤脱アルカなつた上一年と
か半季とか郷士の方へひかされて年通りの金子も濟
せ其上尋常に暇をこひ徳兵衛殿と夫婦になれば雙方

ともに身の納り是にうへこす思案もあるまじ分別せよと勧められ初も兎に角仕方なく徳兵衛にはいはねども親方と相談極め客の方へは人をもつて病氣全快次第行べしとて内談すみて臨月になんなく男子を産しゆゑ客の方より金子を取り諸雜費の勘定残り少しのかねと乳呑子諸共徳兵衛の手に渡し心にすまぬ事ながらかよう／＼の譯有て半季乃至小一年郷士の方へ行間此子を私の筐と思ひ貰ひ乳でなりとも成長させ首尾好此身の歸り來る迄隨分短氣を出さぬ様時節をまつて下されと涙ながらにいひのこし郷士の方へ行にけり徳兵衛詮方なく水子を抱へて貰ひ乳に月日を送りしが我乍ら身のあぢきなく所詮育る事ならねば誰になりともやらうかと幾たびか思ひしが妻の筐と一言の耳にのこりて捨られず折しも師走雪の夜にいつも連行乳を貰ふ先は留守にて歸りも待たれず薄き肌への懷に入たる水子は乳を乞ひ寢入もやらす泣いだすゆすぶれば寢入事もやと抱て北野の町はづれ當てはなけねど雪道をあちよこちよとあるくうち植込みにぐるりを圍ひ風雅に建し門構へ塀を見越しの二階より雪の夜道に往來あらじとざぶりと捨しは茶

か水か徳兵衛が子を抱たる襟からむねへかゝるにぞあつと飛のき二階を見こみ往來に人有と知つてかけたる情なや唯さへ冷たき雪の夜に懷に抱く親子共胸欲なめに逢ふ事とつぶやく聲を聞付て兎相したりと切戸より婢女二人が走り出わづつゝ親子の濕りを拭ひかく往來へ流せしはさら／＼穢物ならず此内方に乳あまり呑子なけねば絞りつゝ外には人も通るまじと思ひ誤り兎忽の段ゆるさせ給へと詫るにぞ徳兵衛聞て歎息し親のなき子は乳を乞ひ子のなき内に（はカ）乳を捨るまゝならぬは浮世といへども見らるゝ通り此乳のみな（子カ）吞たがりて泣止す哀れ其乳一口と吞せてやつては下さるまじきや婢女は兎忽の敷かへしに何より易しと切戸よりつれて勝手にまたせおき委細の様子云入るに何よりの幸ひと奥より此家の妾と見へ出合頭に顔見合せ別れて程へしお初徳兵衛互ひにあきれて物をも得いはす女共は心つかねば水子を取て妾に渡せば涙ながらにいだきしめ餘所にいはせる身のいひ譯果しなれば心中にと雙方死んとせし所を主淺田惣司夫婦とも立出て兩人を引とゞめ我元來一子のほしさ懷胎のお初を根引にせしが子

をふり捨て來し故に一つの望みを失ひしが其小兒は
いかいせしと問はれもせず此別莊に圍ひ置女房にい
ひ付産後の養生今日の今宵迄無事に育し幼子は此宗
司にとらすべし淺田家は淨土宗なれどもし一子をあ
たへ給はゞ經宗にならんと佛に誓へり今こそそのぞみ
たれりとして徳兵衛が傳來の曼荼羅を買戻させお初
の親と成て徳兵衛と夫婦にする是卅石の夜船にて乗合
の嘶をそのまゝ佛法乗合嘶と號しなるべしこはよき
筋なりと書並べさせんと思へど役者なく腹稿のまゝ
出さずありしが天保四己年の春けいせい稚兒淵と世
界を据えたり此狂言は文化十四丑年梅玉が自作にて
序は稚兒が淵二は石川染三は實永祀の場^{岩木}四は七浦
の茶屋場五は大佛餅各類聚にて連續せねど時と役者
のよかりしにや評判よくて入りしかど十餘年の内に
役者衰へ役割にもこち付多く一場と二場は新物に増
補なくては叶ふまじと予に梅玉が相談せしゆゑふと
此乗合嘶の筋を咄梅玉よろこびて是に極め三つ目仕
込みは自身に書四ツ目乳貰ひの場は予が作なり梅玉
の狂言は時代人名の差別なく道具立を度々かへおか
しみを旨とすれば至つて癖ある書ものならでは仕が

たき所あり其頃の狂言にもまづ頓々の三吉天満宮の
十作雪月花の五郎七繁夜話の銀太など皆おかしみを
交へ下策なる所をするがゆる筋の善惡腹の善惡をい
はす色敵と見こみて書なり右に云徳兵衛ならば梅玉
の役ならずされども腹稿を一變してやうやく狂言と
はなりたれ石川五右衛門の世界に狩野の四郎次郎は
無理なり然れども梅玉にいはせる時は信仰記にも久
吉あり五右衛門の時にも久吉なり(ありカ)と一口に
いふが故心のまゝにさせて見るより外なし是ら老練
の役者ならで出來ぬ役也此三月京都芝居にて上下二
幕に縮め花雪戀手鑑と外題して上の巻は洛陽の花に
寄眞葛が原の闇仕合一刷毛に書起さばや花の雲此執
筆は狩野の小雪下の巻は浪花の雪に寄東高津の再環
會乳貰ひに往ては拂ふや袖の雪此秀吟は狩野の直信
當春東都において歌右衛門^{飯子}青砥調の中へ入れ^{狩野}
鐘馗新助^{飯子}言號おもと秀佳^{岩木}富屋甚兵衛羽左衛
門にてせしが幸ひ評よかりけれど梅玉がせしにしか
ず近來大西にて我童がせしより予は東都に居り得見
すいかなる事をせしやらんいと見たく有けり斯書付
れば三都評判記めきて際限なかるべし是にもれたる

雜話は此冬殘編にいふべし

劇場番付に名前を削る辭

天保十二辛丑年春中の梨園にてけいせい楊柳櫻茶屋場を書て予は三月より東都に遊び葺屋町市村座に抑留せられ花菖蒲いろは連歌種花蝶々色成秋二部を書内十月に焼失して翌壬寅の春木挽町河原崎座にて岩藤波白石を彼地の名殘として歸坂せしが此秋慶子が勸にて角の座に出紅楓いろは文庫を著時賴記鳥邊山など増補せしが慶子は適せらて泉州に赴卯年の春言狂作書三巻を書中の座團藏より招きしかど名前を出さず手傳ふのみ此冬東都より眼玉堂白猿來つて勸にまかせ辰巳午と三ヶ年筆を弄して遊びしが年々劇場の作法崩れ傍若無人の輩多く作名を番付にのするもいと恥かしく成り行まゝ以後は名前を出すまじと演たる辭左の如し「近松並木の昔はいはず文化文政の末まで京攝の劇場に狂言作者とのする者はよくも悪くも一日の趣向一場の脚色をせざる者なし譬はい假名手本忠臣藏菅原傳授にもあれ新規の入場あれば作者の名を顯せども古き狂言をする時には作者のをせざる事古例なり我等幼きより此道に入作名を出

せる事はに背かず然るに近來一場半幕の作意も得えせず古來より有來りの淨瑠璃歌舞妓狂言の世話やきをし頭取手代を兼立物役者に隨身し屋號俳名の一字を冠り狂言作者と墨黒に印する輩數多あり是をとがむる座頭仕打興行人もなし故に行義作法も崩れて大作者あるは狂言役者と印せるもあり依て我等狂言作の外餘事を勤めねば作者一鳳を守りたれど所謂多勢に不勢ちからなく是を耻らふ向(てカ)番付の名前を削るさればとて大天狗となつて深山幽谷へ籠るにもあらず又一世一代と披露するにもあらず今より狂言の相談相手誂直しものは好みに應じ内職としてもとの西澤本利と名乗り後來の名聞を削るさすれば一日の狂言に三つ四つの外題を出して古狂言の切賣見取狂言の嘲りを脱るゝ言譯にもならんと獨り笑ひ獨點(頭カ)て

根にかへる草何々ぞ冬木立

かく述るものは狂言綺語堂の主西澤一鳳軒李叟改西澤本利弘化三丙午年冬右を摺物にして披露せんと思ふ折から東都猿若町二丁目市村座より招かれたれば先に遊歴せし時元地の芝居焼失して今の淺草へひけ

る折から歸坂せし故當時の場所のさまも見たく翌未
の正月より彼地に趣き好る道なれば筆を弄び傳奇は
編ども名前を出さずたい狂言の相談相手と呼び三と
せの内帳元澤田の隣家に籠り食客の能樂隱居も去春
豆州熱海へ入湯の折から年號も嘉永と改りしゆゑ浪
華の舍弟に本利といへる名前を譲り予が曾祖父の俗
名を受繼西澤九左衛門と呼び半百の齡も近ければ吾
たい足る事を知と云心より道外方引込の詞かうも有
うかと

臍の緒を落して四十九左衛門

是より先は生たいげ徳

相替らず極樂蜻蛉の親仁分と呼れ遊戲三昧に暮さん
事を願ふ

時嘉永二酉年初春於東都淺草猿蓑街綺語堂

西澤一鳳軒本利更九左衛門述る

西澤傳奇作書拾遺下の卷終

西澤文庫傳奇作書拾遺跋

此書や新に一部の趣向を立て著編するにあらず曩に天保癸卯の春言狂作書と題して歌舞妓作者の傳及梨園狂言道に遊ぶものに作業の徑路を演たるが尙それに落たる人名書もらせし雜話も尠からず又此三とせ東都に遊び新に聽たる珍說奇話まで歸坂の後思ひ出るに任せ拾遺として三卷を著編せりされど一時の戲墨にして猥雜なる事甚しく馬鹿等識者の笑ひを採るべし東武出立の前或人戲作者となる披露にとて曲亭京山の老人を始め當時の戲作者傳奇作り迄名高き人の句を集めて予にも一句求められけり例の地口に世の馬鹿は三日見ぬ間に作者かなと譏りしも所謂猿の尻笑ひにして我事を詠む時には熟す間もなくてや柿のへた作者といふべし戲場の傳奇は其時々書捨て櫻木に彫刻ねば譏を残す論もなければ小説稗史を書とも調高ければ賣れず賣ればいやしめらるまして當世の人情を盡す時は作者の心ざまも推量られ徳を傷るものなるべし水滸を書たる羅貫中が事跡を思ひて此程

作者にはなる事勿れ孫子迄

啞に生れてたまる物かは

時嘉永二己酉年孟冬於浪華得々清水街綺語堂

西澤九左衛門一鳳誌

四澤
文庫
傳奇作書殘編上の卷

枯蓮子打鴛鴦笠翁一家言作宋蓮歌十首其五

郎看妾在水中央、妾笑回看岸上郎、去歲採蓮猶未嫁、
曾將比翼妒鴛鴦。

李笠翁

斷畫新眉笠翁一家言作賢內吟十首其四

曉沐雖分次第班、互相掠髮整雲鬟、從今間殺張京兆、
不復親勞畫遠山。

李漁

捲簾通紫燕笠翁一家言作納姬三首其二

脫却霓裳換綺衣、布裙窄稱楚宮圍、儒家不作婆娑舞、
燕子無煩掌上飛。

笠翁

秋水澄月笠翁一家言作倚樓美人圖

樓倚娉婷子、疑眸顧水濱、淡烟深樹下、應有斷魂人。

李漁

四澤
文庫
傳奇作書殘編上の卷

目次

一 湖上李笠翁の詩

一 醒々齋稻妻表紙の話

一 同豊國畫京傳贊團の寫(略之)

一 小説を潤色せし傳奇の話

一 南總里見八犬傳脚色の話

一 けいせい宮傳授外題の話

一 同古今傳血達磨の話

一 淺草靈驗記大川が傳

一 淨瑠璃の作文をせし話

一 謠曲狂言釣狐の證考

一 讀院本釣狐尾花褥

一 同序文及姓氏目錄

凡十二條

時嘉永二己酉年仲冬於綺語堂燈下筆採

西澤文庫傳奇作書殘編上の巻

西澤綺語堂李叟著

湖上李笠翁の詩

唐山李漁先生は傳奇小説に因あれば曩に寫して序にかへたり尤毎文圖有畫彩精密にして摹寫する事あたはず唐土奇談といへる書に笠翁の肖像を月儼の畫たる者予所藏したりしを何人にか貸失ひいと遺りおし後再び手に入らば補ふべし

醒々齋稻妻表紙の話

山東京傳が作往昔咄稻妻表紙の發板なりしは文化二三年の頃なり不破伴左衛門名古屋山三の事跡は京攝にては淨瑠璃の傾城反魂香又十帖源氏物草太郎にのみ有て草履打或は鞘當と唱て六法丹前の容に出たつは東都にて古云事也「稻妻の始り見たり不破の關と晋子其角の句より元祿年間赤穂の義士不破氏淺野侯及傷の狂言を梨園にてすると聞て看的に紛れ好ん

で口論して頭取花井才三郎を草履にて打しより始るとは妄言也其角の喰もおなじ元祿の比の事故後人作り設けし話也京傳は不破名古屋のみにあらず女太夫六字南無右衛門浮世畫師又平辻講釋露の五郎兵衛杯珍らしき人名を集て新に作り設けし稗史にて畫は一陽齋豐國畫此頃行るゝ事爰に文化五辰年に浪華角中の兩劇場にて是を潤色して外題看板出けり新作の小説を狂言に脚色しは是を起原とす此圖は團扇の表に摺一千本を兩座の芝居へ板元より贈りし也日々の見物へ配りしを予珍藏して書畫帳に貼置しを拙筆に摹寫して爰に著すものなり(團扇の圖略す)

角の外題きのは不破ふはの關くわまるるけいせいけいせい輝艸紙名古屋

山三さんさへらさへら三八梅津嘉門こ三さん嵐吉三郎不破伴左衛門嘉

門母はは二に市川團藏湯淺又平淺尾工左衛門山三妻葛城又

平妻お國中山富三郎石塚玄蕃鹿藏市川市藏名古屋

山左衛門關三右衛門不破伴作頼蒙院二大谷友右衛門

けいせい遠山三八妻儀榮二中村大吉佐々木桂之助中

山文七狂言作者奈河七五三助、近松徳三二中の外題

稻妻表紙は姿の彩色しき十帖源氏に意の寫畫しきけいせい品評林名古屋山三佐々木藏

人浮世又平三さん中村歌右衛門佐々木桂之助奴鹿藏嵐來

芝銀杏の前、又平女房さへだ叶珉子不破伴左衛門千島冠者^二中山新九郎嘉門の母蓬生三柵徳次郎傾城葛城藏人妻お澤^二中山よしを名古屋山左衛門片岡政元萩野伊三郎白拍子藤浪三八妻磯榮^二芳澤あやめさ、ら三八梅津嘉門片岡仁左衛門狂言作者並木三四助奈河篤助狂言の脚色は異なりと雖書本の儘の人形看板なれば最負^ノの見物夥敷兩座とも大入大繁昌せしが道具衣裳役者の奇麗なるを好まば角の芝居狂言と上手役者を好まば中の芝居と評定まりけり尤中の座は先に催ふし角は跡より追うて作せしゆゑにか見所少なし是より不破名護屋の世界を京攝にては一變せり是山東京傳子の功なり予東都にて此世界を潤色せし猶反魂香に趣向を返へして狩野四郎元信を八代目三樹(升力)にさせて見まほしく心は芝叟が長話の瘤先年浪華角の座にて作^を脚色して武隈の松を寫さん物とせし事前編に^{くはし}を脚色して武隈の松を寫さん物と下人と容し長谷部雲谷につかゆる雲谷^{文五}土佐將監^{三津}五郎の娘お光^{しう}に懸想して下男與四郎^目八代を鷹鷲として光信の住家に至る大體先年の瘤の如し後名乗て父祐勢より松の口傳を受ず是を書て本知にかへらん爲と云將監は祐勢より譲られたればしれども元信の

行衛尋ねて返さんため年頃尋ね居たると云白張の衛立に其場にて武隈の松を畫雲谷邪魔するを立廻乍ら將監雲谷の手足を松のふりに教ふる是反魂香に寫し繪の場とてけいせい遠山^{土佐將監の娘の仲居お宮と云}門弟歌之助の奴^前に花笠をもたせ元信に口授する間近松平安堂の名文を其儘とつて淨瑠璃に合させたり八代目は畫をよく畫ゆゑかくは思ひ付たり近年稀なる大入をとりけり其時の外題段書を爰に出す

世界は東山の櫻時

傘に塙かさう濡燕行ては戻り戻りては又繰かへす不束も古きを以て新敷との御差圖に任せ

昔語稻妻帖

山東庵の滑稽一陽齋の筆意

繡像稗史 六冊續

左の儘を敷寫して狂言の榮

- | | | |
|----|--------|-------|
| 第一 | 堅田の別館に | 主命の履打 |
| 第二 | 高島の城外に | 意外の待伏 |
| 第三 | 石場の柏戸に | 書畫の發會 |
| 第四 | 三井の坂下に | 奇縁の見合 |
| 第五 | 六原の靈場に | 身賣の調達 |
| 第六 | 逢坂の山越に | 六部の惻憶 |
| 第七 | 大津の貧家に | 吃訥の小舞 |

第八 志賀の名家に

武隈の寫繪

第九 鳥越の浪宅に

下女の初戀

第十 吉原の花街に

賈論の鞘當

第十一 上林の青樓に

兄弟の割符

第十二 淺草の田甫に

本懷の復讐

不破伴左衛門狩野四郎治郎元信二團十郎浮世又平下部猿治郎二小團治佐々木桂之助土佐修理之助奴鹿藏役三源之助名古屋山左衛門土佐將監光信二三津五郎修

理女房お松綾の臺常世長谷部雲谷文五郎白拍子藤浪

又平女房早枝二花友傾城葛城始又平妹お柳將監娘お光下女お國三しうか名古屋山三笹良三八六字南無右衛門羽

左衛門三月四日より四月晦日迄興行しけり物の趣向

は古き中に新らしみ有り反魂香といへば又平の場の

み知りて一日の趣向しらず是等を戯場の學問とはい

ふなり

小説を潤色せし傳奇の語

稻妻表紙の當りを取しより同年秋櫻姫踏雙紙京傳作豐を清水清玄契約櫻とし富士一夜物語馬を復讐高音鼓三七全傳南柯夢馬を舞扇南柯話と潤色せし

が三勝は大當りせしが餘はさのみの當りもなかりし

此冬の顔見せに椿説弓張月を島廻月弓張とし座附狂言に迄續かせ中の芝居にて出しけるを江戸板元より

壽きて摺もを送りけり外の袋に**太**を金と紅にて摺しん上大坂中の芝居に新曲弓張月東都曲亭馬琴述奉書一枚を二つ折とし北齋の書に簀江あやめの紋付白縫瑠璃子の沙汲の圖真中に八郎爲朝風吉左の手に弓を突右に日の

九陣扇を遣ひ居る圖なり祝言「爲朝の名題芝居にあ

ぐるかな弓はり月のいるあたりとて簀笠隱居と書裏

はあづまぶり新曲弓はり月唱歌のかしらに一座の紋盡し摺たり

梓弓ひけや歌舞妓の顔見世に心なぐさむ爲ともな

らばうき事絶てしらぬひに身をば盡して來てもみ

よ曉の七つと八つしろに八町礫のあたりも嬉しさ

さらゑにしのつきやらぬうるまの國のおやこ草男

島めじまに通ふ神風ふくろく壽聚し人の山雄にも

野風さやけく礪菜つむ名にし高間の手どりして猛

き心の鬼夜叉か鬼ならなくに照る月の稚兒は九つ

藤市が牽馬の鞭に武藏太を懲らす誓は眞菅よし讃

岐院のあら神靈廿八騎の功はしんせい揃勇しく遊

べや阿蘇の忠國に冬よりひらく花堦の花の俳優よ

しともくくに九郎が玉の春まち得るや梅の浪花津

なか／＼に中の芝居を守るめてたき時に大島の宮居久しきもの語宮居久しき物がたり予が著述の稗説弓張月に據て浪花中の芝居の顔見世今茲仲冬十三日より新場をひらくと聞え候に贈るとてかつしか翁の書るまゝに書肆平林堂の需に應じて

曲亭馬琴のふ并書

忠孝潮來府志種彦作をけいせい潮來諷新累解脫物語馬琴作を草紅錦絹川神史自來也物語鬼卯作柵自來也譚繪本若葉榮寫本にて雲水錄作者忘れたり敵討義戀柵等新に挑み奇を争ひ出せしも後には珍しき小説もなく専ら戯作者より是を脚色わ此内を梨園にさせよと歌舞妓作者の心になりて作るが歌舞妓に潤色ならず小説の作者歌舞妓の作者共文化中に大約故人となりて脚色すべき稗史もなく潤色すべき歌舞妓作者もなく也文政中には古き淨瑠璃を見出して仕はやらせる事には成たり古淨瑠璃を出す事拾遺に委し

南總里見八犬傳脚色の話

享和文化の頃より小説稗史に作名を出し五十年の間存命で時々作名の書を著はすは東都の曲亭馬琴飯田町に住ゆる飯台と云著作堂なり著作の小説數百篇近世性を瀧澤箋笠等の數號有り眼疾孫子に筆を採らせらるよし近世出版の書に著せ

り誠に命めで度翁なり文政後著述の書多き中に評よく數篇を重ねしは南總里見八犬傳なり初編より五編迄出し頃予は是を潤色して一日の趣向に立るものから發端鎌倉足利の没落より神餘家亡びて里見義實房州をとる迄の條を略し里見家の太守を義基とし義成を若殿とし山下定包は杣木朴平の手を借りて義基を討せ義成を毒殺して伏姫始忠臣堀内藏人金鞠大助杉倉氏元等をなき者として八犬士の親を皆里見家の臣なれば是を離散させて里見家は一たん二段目にて亡べり伏姫富山の洞にて腹をさき珠數八つを走らせて里見忠臣の家々に孕再び家を起さんと云是二段目の幕にして次幕信乃が幼立の場まで十餘ヶ年を立せ又次幕へ七ヶ年をたゝせ藩家の成氏へ行ば十九か廿なりと見込道節額藏小文吾等も原より里見の浪人なり此八犬士集りて廢りし里見の家を起す義成の忘れ筐義實にて惡人亡びて里見家再興なるとせねば歌舞妓の狂言には成べからず此腹稿を立てまゝに筆を取草稿なつても是に合せる役者揃はず時節を見合せる内又四五年立たり其内古き草稿を取出して見れば我書たるものにも時々流行有て捨る所あり又翻案し

て書かへる所あり是等も世に出る時節やありけん天保七申年中の芝居の春狂言に漸成れり夫すら一座に割合せる事なれば俳優の分量に輕重あり己々の仕勝手よき様詠あり其度に筆を入るれば原の腹稿より趣向變り大筋狂ひて異なる脚色と成也右に云里見家興廢は傳奇の原なれば新に思ひ設くると雖成たけ曲亭の趣向は崩さず居所人名までもらさず遣へり番附に割わり(割がきカ)外題等出すべきを役割多しとして略せり予が作名も略せしが段書と共に爰にあらはす

白妙の人くひ馬にゐいとほなせし弦音は硯ひ狂はぬ古歌のはん断血筋にからむとリ繩におもはずそふはしやう風の良藥衰れ

もよふす一ふしは音色やさしき嵐山の名笛

傾城の八文字は閨の勝閑かつらん花魁けい答八總なづ名木八株

里見の八犬士は廓の先陣

その大寄を爰に見立て煩惱の犬張子にぼんと討たる筒先は當りはづさぬ玉のいんふん戀ちにこがすたびの火に姿かきけすふしぎの道術再び手に入る一こしをわけば玉ちる村雨の名劍

肇輯 洲崎社に玉梓戀情述 落葉嶮に朴平白馬悞
貳輯 瀧田城に大輔逆臣誅 富山洞に伏姫八犬走
參輯 簸河原に信乃與白弄 大塚村に番作孤兒托

肆輯 枯華庵に濱路憂苦詠 神宮川に綱干村雨奪
伍輯 莊官舎に額藏奸黨擊 圓塚山に道節故事譚
陸輯 詩我館に在村雙狗阻 芳流閣に現八勇力顯
七輯 行德浦に鉤翁銘刀得 入江橋に文吾良藥求
八輯 紅梅亭に於尺歌舞賑 對牛樓に毛乃仇讐磨
統計八輯の内芳流閣迄を正二月と見せ三四月には曩を少しく略して七輯より對牛樓迄見せて満尾せり犬塚信乃金鞠大輔嵐璃寛徳目大塚番作堀内藏人犬川額藏市川鍛十郎杉倉氏元犬田小文吾關三十郎犬山道節坂東壽太郎杣木朴平女房龜篋馬加常武大谷友右衛門大塚墓六安西景連中村翫十郎里見義成鮎原胤教蟹崎照武犬村角太郎中村歌十郎姉ひく手いさらご御前紅梅やお尺山下金作里見治部大輔季基古那屋文五兵衛中山文七傾城玉梓番作妻手束中山南枝山下定包百姓糠助綱干左母二郎犬飼現八小林房八片岡市藏里見伏姫娘濱路小文吾妻お縫舞子朝毛乃富十郎顯定横堀史在村片岡仁左衛門番附は杜撰にして續編増補と書てあらぬ假名をふりたりかゝる長篇を僅に一日に縮め見せんはいと仕難き業也好てこそすれ所謂夢虫の一癖ならぬ

けいせい宮傳授外題の話

文化元子年角の芝居にて春狂言に出しが作者は近松
徳叟瀬川如阜なり三つ目筑紫權六本名瀬川采女秋雨物語と
云小説より徳叟が潤色せしは前編に委しく出す中入
天の橋立の館に長岡勇齋武事をすてゝ風雅に籠る堵
小西行長妻唐綾を離縁して上使にたち白木の箱を封
じ送る中に腹切刀と三寶入れ有後孫に腹切せる仕
組大約蝶花形八つ目に似たり此箱の内や床しき箱傳
授と云せりふ有て憚り有は狂言には外題に賦す程は
脚色なし瀬川如阜の作にして勇齋片岡行長璃寛唐綾
路考なり此箱傳授と云は東下野守より種玉庵宗祇へ
古今傳授をつたふ三條西道遙院へ宗祇より傳へ夫よ
り圓智院公國へ傳ふ然るに公國早世の折柄其子實條
未だ七歳なりしゆゑ細川兵部大輔藤孝へ傳ふ藤孝は
文武兼備直實の名將にて其身の師範たる公國の子息
實條卿へ傳へかへさん爲に實條卿を丹後田邊の城へ
迎へ取て歌道神道の傳授悉く申と雖未幼弱なれば古
今の傳授ばかりと殘し置ぬ扱實條も次第に成人なれ
ば帝都へ歸し奉り古今の傳授をもとげて師恩を報せ
ばやと思はれし所に秀吉公より朝鮮征伐の御觸有に

よつて合戦の用意に取紛れ實條卿を呼迎へて傳授せ
ん隙のあらざれば箱を幽齋の孫聲鳥丸大納言光廣卿
へ持行て曰此度異國へ赴候我身武士の習ひ何時討死
仕らんも難計候得ば永く此傳の絶なん事歎かはしく
候依て預け置申なり無事に歸りなば藤孝が手より實
條卿へ相渡申べし自然討死仕りなば此箱を貴卿より
三條西殿へ渡し給はれと頼入て二首の和歌をぞ添に
ける幽齋

人の國引や八島も納りて

二たびかへせ和歌のうら浪

もしは草かきあつめつゝ跡とめて

昔にかへせ和歌のうらなみ

鳥丸光廣卿古今箱を預り給ふとて

萬代、ちかひし龜の鏡しれ

いかでかあけん浦島の箱

かくの通りにて藤孝入道玄旨は太閤に隨がひ肥前名
護屋に詰られける其子忠興朝鮮にて軍功多きに依て
豊前の國臼杵の城を加恩に預りぬ歸陣ののち光廣卿
より箱を藤孝にかへすとて
明て見ぬかいもありけり玉手箱

幽齋かへし

二度かへる浦島の浪

浦島や光りをそへて玉手箱

明てだに見ずかへす浪哉

と吟詠ありて傳授の箱を送りかへしぬ斯る名家たるによつて慶長五年子の秋關ヶ原合戰の砌石田治部に組せし諸大名八万三千餘騎にて田邊の城を攻る事既に七月廿二日より九月十二日に至り城中も堅固に守防戰すと雖寄手は多勢新手を入かへし攻戰ふよし天聽に達し驚かせ給ひ藤孝討死に於ては古今の傳授空しからん急ぎ實條に傳授せよとの勅諭によつて則實條卿島九大納言光廣卿并に加茂大官司松下丹後の戰場に下向ましゝて大官司松下を以て寄手の大將共へ勅命をのべさせ給ふ其趣は勅使として兩卿實に參向ましゝて藤孝入道玄旨法印は天子の御師にて有る間此陣早引取べしくれゝ朝敵にひとしき振舞近頃尾籠也との仰を蒙り寄手の面々牙を嚙乍らもいか様藤孝入道は國師なれば弓を引べき謂なしと寄手の大軍圍みを解いて引せける天恩の重き事申も中々おごそかなり此籠城の場を仕組しものにて箱傳授の

となへはよくても狂言高尚にて俗に落す三つ目筑紫權六チギリンタイの齣は今も折々出れ共外題箱傳授の場はそのうち出ず宗祇の堺傳授と云事あれば堺傳授として可也

同古今傳血達磨の話

夫より程なく石田が徒も亡失て太平を樂しむ世とはなりぬ其後幽齋逝去ありて忠興は三齋と號して専ら茶湯連俳の風雅の道を樂しみ其友とする中に金森宗和茶人は茶の師範たるゆる誠に交はり厚く斷金の中名家は茶の師範たるゆる誠に交はり厚く斷金の中なるに依て古今の傳を貸置けれ共其儘に打捨年月を経ける内金森家一亂起りて終に改易と成る金森領分に始末は寫本に有略之是に依て細川家にはかの古今傳を取得たく家中の士を道具屋又は書畫屋抔に仕立さまゝ手を廻し吟味有しかども終に行方知れず失たるこそ是非もなき爰に濃州洲の股の宿に文右衛門と云宿屋の主前年金森家爭論の砌右の古今傳を金貳分にて或士に買置しが何とやら大金にもなるべき物と思へ共何の譯も知らざればとかく見る人に見てもらはんと思ひ大身貴人の御泊りの節は彼古今を床の置物として飾置けれ共いつしか尋ね問ふ人もなかりしが或年細川

侯參勤の砌家老何某は尾州名古屋表に御用あるよしにて中仙道より下られ細川侯は東海道を御下り有て池鯉鮒の驛にて御出會奉るべき由にて何某殿は美濃洲の股文右衛門方に宿陣有るに彼床の置物を取上少し開き見られしがやがて立て手水を遣ひ身を清めうや／＼しく戴きとくと見終り亭主を呼び此品は其方の所持なるやと有るに亭主いかにも親の代より譲り受て私所持仕るといふ何某此方に望ある間何卒譲り申さんやと有ければ亭主扱こそと思ひ畏り奉り候得共親共より譲り受候品に候得ば放し難く奉存候然し乍ら財は身の差合也と申謔も候へば金百兩にも相成候儀に候はゞ如何様とも可仕旨申上る然らば望の通り遣すべしとて金子百兩渡されければ文右衛門は存の外大金を得悦こと限りなし何某殿も殊の外悦の體にて先家來に申付て此趣主君へ御知らせ申上よとて早飛脚を以て告知らせ悦の餘り供廻り人足雲助に至るまで青ざし鳥目壹貫文宛御祝儀下され宿の家内下女飯焚に至る迄紅絹一疋づゝ下され明六の御出立を一時早く七つ前に出立有越中侯は池鯉鮒にて御待合せあるに追付奉り委細申上古今傳を手渡し申上て事

濟ぬ尤御歡び大かたならず扱又跡にて文右衛門つく／＼思ふには斯程に歡び給ふ事は等閑の品にてはよもあるまじ扱々殘念なり今少し高金に申共下さるべき物と頻りに後悔せしが否々下されずば元々先願ふて見んと支度そこ／＼にして道をいそぎ既に池鯉鮒に來り何某殿の許に尋ね參り取次を以洲の股文右衛門御願ひの義御座候て參上仕るとのべければやがて何某殿御出座有て如何様なる願と御尋有文右衛門頭を地に付お願ひの義は昨日差上申候品にて御座候兎角代々譲り受持傳へ來り候處私の代に手放し仕る事甚歎かはしく本意なく存奉り候是に依て恐乍願ひ奉ると申上る何某殿御聞有て暫く相待べしとて奥に入らせられ間もなく金子持出て扱々その方は賤しき者じやなと一言のみにて又金百兩下されける文右衛門推戴き有難旨申上悦び勇みて歸りしが又々思案して悔けるは扱々殘念かな口惜かな此金子申受すば永代御扶持も下されべきものと後悔いたしぬ人間の欲には限りなきものなり足る事を知らずんば有財我鬼といふ尤なるかな此一話は傳奇作者によらずといへども遠幽雜記といへる書に出て後大川友右衛門が傳細

川の重寶血の達磨の一軸に因みあれば爰に出す猶次の條を讀て知るべし

淺草靈驗記大川が傳

淺草觀世音の利生にて印南數馬美少大川友右衛門と兄弟の約して父の敵横山圖書を討つ話は寫本廿卷淺草靈驗記とて有是を潤色して寛政九巳年五月角の芝居にて興行す印南數馬芳澤いろは大川友右衛門尾上鯉三郎横山圖書山村儀右衛門既に前編辰岡万作の傳にも演る通り男色の狂言珍らしく大當をせり後文政十二巳年三月又少しく増補して印南數馬嵐富三郎俳名露蝶大川友右衛門中村歌右衛門梅玉にせしかど今は男色廢りて歡ばず迄當りもなかりけり爰に去申年東都中村座にて印南數馬岩井兼三郎紫若大川友右衛門中村歌右衛門金にて興行せしが本文寫本には友右衛門復讐助太刀のち細川屋鋪江出火出して大守の重器寶藏納めし儘一塵の烟となる大守悔みて止す寶藏にこめある重寶の内漢の武帝の書し達磨の一軸あり是を亡びん事を歎かるゝを友右衛門聞て重恩を報はんは此時なるべしと駿馬に跨り火中に飛入り寶藏に近付見れば火烟文庫に漫々たれども一軸の箱はいまだ焼ず

是を取て外に出れど駿馬は早焼死て烟氣に包まれ其場を通るゝ事あたはずとかくする内鬢髮焼ちいれすべき様なく寶藏の影を腰刀にてうがち土の窪みに端座して腹切あばき軸の飾りをすてゝ畫絹を腹中に納め終に火中に焼死たり火收りて大川が行衛知れず大守はおしませ給ひ灰搔退て吟味をすれ共全身焦て何者かしれね共骸を掘出す傍らに友右衛門が覺えの腰刀散亂せるゆゑ大川と知れ死骸を改る所腹切て死したり子細有べしと疵口を搜せば腹中に一物あり大守直々に見らるゝ所漢の武帝の書し達磨の像也絹の兩幅鮮血に染て縁を取たる如し近臣血汐の穢を落さんと雖大守大川が義勇を賞して其儘に表装し是を細川家の重寶血の達磨と賞し人口に唱へる事噪し翫雀此齣をする由評判して復讐の事は二段になりけり依て奥州の高木折右衛門是は又別に寫本ありを思ひ合せて印南數馬の助太刀を高木に托し大川は達磨の一軸を奪合横山大藏關三を殺害して琵琶湖の水の中にて切腹して疵口へ伴の一軸を隠し亡靈細川の館へ歸つて手渡す狂言とはなりたり外題は高木折右衛門武勇話とか賦したり尤火は戲場に忌る事なれば水中にかへたれども

謠曲の海士は龍神を遠ざけん爲乳の下を搔切て寶珠を包めり畫絹の軸物ならば腹中に納めず共いか様共仕方あるべしと彼地の穴探は批評言けり此時火中より出たるは達磨の畫といふは妄言にて誠は右に説く古今傳一軸にて大守身命にかへて惜しまれしと云は實なり大川氏寶藏の壁に向つて坐禪の容よく悟つたりと言心より智の達磨と云なるべし

淨瑠璃の作文をせし話附謠曲狂言
釣狐證考

文政中淨瑠璃大夫播磨の大掾始竹本土佐
太夫受領と心易くて文

談の内不分明なる事あれば弟子をもつて尋問に來らせる事毎度なり予も好める道ゆゑ引書を携へて往註解す序に一世一代として語る物を書くれと乞はれ謠曲釣狐の狂言は古今來許多の脚色になど予兼て腹稿あれば書んと約す此一段は楠昔噺作者竹田楠の影にて
正成夢見るの別當祖交婆々
端午のば三の切盆踊り四の切赤坂城七月七日大詰九月九日と割合せたり端午三の切のみ人知つて外の場を愛す予是に習ひて謠曲の狂言ばかりにて五段を重ねて序花子ならば二を三人崎三を吼囈なぞと見立て著述せんとと思ふ事久し播磨の頼を幸ひ先三の切を先に書た

り稿成て讀きかすに大に歡びとてもものに前後滿尾させん事を云其内予は歌舞妓の作に隙なく一二ヶ年を送る内播磨故人に成り此場草稿の儘播磨の手にありて世にいでずいと残り惜しく思ふから草稿を取かへして出版し追善にもと思ひ淨書仕かけてはまた拾置たり思ひいづるにまかせ爰に出す

英雙紙のはなばたせうし心る恩愛からむ老が身の泣音に血をば伯藏主が誠心むさしのにありといふなる邊水にとけた秀句の心と
拔萃にはなばた釣狐尾花褥きつねおはな

東遊記のとうゆうき註釋にちゆうしやくと良因果は廻る己が名の作りをくらふお瓜が貞節きんごう

古今來歌舞妓淨瑠璃の脚色を案に各趣向に證ありと雖多くは謠曲を父とし端唄を母とするもの解易くして後に遺れり今爰に著は謠曲の狂言を種として唯筆の走るに任せて書付たり専ら院本の文談に似たれど強て節を下さんにもあらず亦歌舞妓に仕組俳優者流に勞さんにもあらず讀んとすれば文章拙く諷はんとすれば語路直ならず劇場に見んとすれば詞くどく

其文の拙きは才なき筆と見ゆるし給へ此書原より首尾ありて時代は太平記趣向は狂言記を取組宗論花子三人畸末廣鞠猿など一齣毎に用ひ作りもふけしかど未稿ならず此吼噓の條は所謂三輯の意にて幼き頃書付置しを朋友何某に需られて草稿の儘あたへぬ原より狂言綺語の根無ごとなれば時代人名地名等の誤をいはんには際限なかるべし是なん歌舞妓の筋書とも讀本淨瑠璃とも唱へて見給は幸甚しからん

作者西澤綺語堂誌

釣狐ノ證考、堀鑑ニ曰釣狐ハ南ノ莊少林寺ノ塔頭永徳年中ニ耕雲菴ト云アリ其住僧ヲ伯藏主ト云リ此僧鎮守ノ稻荷明神ヲ信仰シテ毎日法施不怠或時神感應有テ森ノ中ニ三足ノ野狐アリ抱歸テ養愛ス此狐ニ有靈達隨仕用追賊難事アリ其孫々三足ニシテ今ニ至寺内ニ住居ス稻荷ノ靈驗新也世ニ云傳釣狐ノ狂言又吼噓共云リ此寺ヨリ發レリ然バ才覺ナリシ狐ノ謀ナレバ其時大藏其狂言ニ作シテ彼狐感ジ老翁ニ化シテ狂言ヲ見テ猶野狐ノ骨髓ノ働ヲ口傳セシトナリ誠ニ狂言綺語トハ云ナガラ道ニ達シヌレバ如是奇特モ有事ニヤ尤家ノ大事トスル狂言也

釣狐尾花褥姓名錄一伯藏主本名殿法印了忠一囀ノ畠作本名速見下總一畠作妻於瓜一娘於菊一於瓜妹於蘭本名大塔宮護良親王一油揚鼠六一行脚ノ僧本名万里中納言藤房一足利ノ眼代野見ノ軍太吾妻路に限なき月の名所や武藏野の片邊り尾花隠れの孤家に主は囀の畠作とて名に似合ふたる惡業者耕す業は仕もやらで酒と喧嘩と殺生に其日を送るうたてさに妻のお瓜は連合ひの身もちを日にち諫むれど聞入もなきねじけ者けふは夫の留守ぞとて持佛の煤を打拂ひ心ばかりの吊らひに娘お菊は母親に替りて助く水仕事馴ぬ仕業も親思ひ母は御燈おかしあげしまひいやのふお菊今更改云ふではなけれどそなたは夫畠作殿が先の御内儀に出來た子わしも其後嫁つて來たれど本にマア産の母より大切にしてみたも志忘れはせねど夫に引かへ連合の畠作殿どうした事やら此一二年の身持の惡さをなたも母も口の鮮うなる程異見すれど馬の耳に風とやら困つた物ではないかといふに娘も打しほれさいなア噂様のおつしやる通り現在實の爺様なれど恐しい惡業ばかり夕も釣て戻つたとてあれあそこに釣てある狐毎晩〰〰狐を取つて夫

を肴に酒を呑みあちらでは喧嘩をしたりこちらでは殺生したり先の唄様の着物からおまへの着物も賣代なし博奕とやらに入さしやんして異見をすれば猶逆立お前やわたしをうち打擲わしやあんまりの恐しさについて死んでも仕舞ふかと思ふて常住死かけても嘸や私が死んだればお前獨りが便りなから又二つには大切な宮様の事もし爺様が知らしやんしたら難儀な事もあらうかとそればかりが悲しさに生永らへて居ますると母の小膝に顔すり付歎ば母も諸共に落る涙を押ぬぐひサ、母もそなたと同じ事近頃夫が悪とうにならしやんしたも皆殺生の報ひかと思へば後生も恐しくせめてわしなと死んだならちつとは夫の殺生や悪い身持も直らうかと色々思案して見てもあの宮様はわらはが伯父様白藏主様が大切にせねばならぬお方もし世間の人に見知られてはとわざと女の姿にしてわしが實の妹と呼なし現在運添ふ夫に迄深う包て知らさぬはこちの人の身持もし宮様のお身の上どういふ事が出來うも知れず又二つにはそなたでも爺御ひとりでもぎどうに折檻したり敲ひたり當り所でも悪うして疵やなど付さんしたらわしや未來で

そなたの母御に何と言譯ならうぞと二つの事が苦になつてけふまで命永らへしぞ孝行にしてたもるそなた故宮様の事まで打明てのちから草かならず〳〵忘れても毘作殿に此事を悟られてばしたもんなやと義理ある中に隔なき詞に娘は打點きそりやよう心得ておりまするあのこわい爺様でも伯父様の伯藏主様のいはしやんす事はついぞそむいてはござんせぬになせ伯父様にさういうて呵つてはもらはしやんせぬヲ、そなたのいやるまでもない伯父様に相談したれば姉のそなたを片付た毘作は甥同前器量骨柄揃ふた男兼て宮様のお力にもと思ふたれど咄すには折もあらう又惡とふがまつこと止ねば異見の仕様も有程にマアそれ迄はおくびにも宮様の事忤悟られぬ様にせいと呉々とおしへどういふ夫の心かは知らね共今ではけつく世間の人よりこちの人が恐しいまだわしは女房の事可愛やとしもゆかぬそなた親ゆゑ苦勞をさす事ぞと互ひに手に手取かはし又さめ〴〵と泣居たる折から門に足音のするは夫の戻かと二人は泪おしぬぐひしふる茶の下流しもと泣かぬ顔して立直る心ぞ思ひやられたり道の邊に清水流るゝ柳影と彼西

行が跡を追ふ諸國行脚の歌枕首にかけたる頭陀袋まぶかに着なす檜笠心なき此あたりには所化の僧とや思ふらん實に果しなき武藏野の中に見えたる孤家を目當に暫し立留ゝ是は遙遠き都の者諸國歌枕修行の爲名所古跡を尋るもの一夜の宿を御無心といへばお瓜は手をとめヲ、夫はマア遠ひ所をおやさしい嘸獨り旅で草臥給はん御一宿遊ばせと云にいはいぬ此あばらや殊に夫はむくつけ者留主の内にお宿申跡から御斷申たら夜に入ての御難儀も思ひやる夫ではかへつてお氣の毒ノウお菊お斷申がよからうかと問へばお菊は打點き本に鼻様のいはしやんす通り爺様が戻らしやんしたら何といはしやんせうやらしれねど人里遠い此むさしの折角のおたのみを無下に申もほいない事爺様が戻らしやんしたら何となりといふても一夜の事おとめ申て下さんせといへば旅僧詞につきいやも旅の身の心易さには庭の隅でも厭ひは申さぬ是非に一夜とたのむにぞ本にけふはそなたの母御の忌日旅のお僧をお宿申も供養のはしもし夫が戻られたら頼寺の坊様じやといふておかうごうじやる通りむさぐろしけれどゆるりとお休被成ませマア

是へに旅僧は笠ぬぎ捨て内に入り夫はお志忝し一宿願ふも何ぞの因縁幸ひあたまも丸ければ御佛前へはあたまた役と草鞋とくゝ腰かくればお瓜お菊も其々に笠と頭陀とを片付て虧し茶碗に出くちたる澁茶ぞ一の馳走もお瓜は旅僧にうち向ひ都のおかたは殊更に同じ故郷の事なれば一しほましてお懐かしいホウすりやお内方も都のお生れとなそれはマア不思議な出合シテマア此遠い國へはどうしてお移なされたなアイ私も都では育たれど縁あつて此吾妻へ片付今ではちつと國馴て都の事は大方に風の便りも聞ませぬと語る内にも旅僧は身震ひ立てかむりふりア、其都はいはぬ事、我等も都を飽果て此吾妻路へ歌枕イヤモウ都は修羅の街折角公家の世となつても足利と云ふ武士に支へられ新田楠といふ智勇兼た大將を始忠義の人は大かた討死足利殿の威勢は日に増し其修羅道のうるさゝにかゝはらぬ我等まで思ひ立た獨り行脚イヤモウ此方が何ぼう心易い事やと咄す内にも女房が都の事を聞につけはつとむねに答へるも知らぬが佛行脚の僧イヤモウかう遠いをあるく内も兎角名所や舊跡が我等が友イヤお娘御あれ、あの向

ふに見える川の様な所是はけしからぬ大川と便りの船を案ながら行どもく向ふに見え今又爰のお内から見る時はどう思ふても渡てこねばならぬ道あの大川をいつの間に越て來たか此むさし野の狐にがなだまされはせぬか一向がてんが行ませぬかありや何と申川じやなと聞に娘は微笑てこの武藏野は西は秩父根東は海北南の向ふが岡都筑が原より北は川越迄縦横十郡にまたがつてその内に川と云のは玉川糸川入間川と此三つ又年とらず川と云はあるに甲斐なき細い流れ節分の夜は水流がないとやら又向ふの川の様に見えるのはありや川ではござんせぬ遠いから見るとは大川の様に見えるどもその所へゆく時は川はなく行どもく向ふへ行ようなれば是をむさしの迹水とやら申ますると云に旅僧は小膝をうちハア、すりやあれが武藏野の迹水と申かと驚く聲に案じあるお瓜はふつと心づきそしらぬ顔に紛らしてホウお珍らしいはお道理くわらはも爰へ來た當座は眞實ほんまの川かと思ひましたが私が伯父様は敷島の道もお好きゆゑ常々私のお咄にはおれをむさしの、迹水といふて古歌にも武さし野の草葉隠れに行水のと申もある

との事珍らしい物ではござりませぬかと聞につけ思ふにつけ獨感じて打うなづきア、誠に歌人は居ながら名所を知るといへど目前見るは行脚の徳又古歌まで聞覚えてござるこな様方の生立も奥床しい今宵は夜ともお咄を承りたい程なう御亭主もお歸ならん僧の手前の役目ぶりお看經でも致さうかと立上るれば女房も眞ほんにこちの人の戻らんすに間もあるまい何はなけねど粟のまゝいざ納戸へとお菊があない然らばお辭儀申さずと連立一間へ入にけり跡見送つて女房ははつとばかりに吐息つぎ今のお人の咄では宮方は日にく衰へ足利一家はさかんとこの事宮様の御供して簾上するは今此時伯父様が頼に思ふこちの人はあの通りおめく時節を見合す内國を隔し都の事どうならうやらわからぬ時宜すりやどうしたらよからうぞとしはし途方にくれけるがやうく心取直しいやつい近所のことですへ人の噂は違ふものまして隔たる都と東とくと夫の心もさぐり伯父様にも相談したうへ仕様もやうも有うぞと心でこゝろ取直しヲ、今のお人も嘸ひもじかろどれ御膳をあげて看經をたのみませうといひつゝ納戸へこそは立てゆく龍も池中

にある時は蚯蚓にたぐひをおなじうすと後醍醐帝の御弟君大塔宮護良親王足利の讒奏によつて御兄弟中不和となり淵邊伊賀守に預られあやうき場所を通れ給ひ此隣村に忍びいで人目を包むお身なれば女姿に身をやつしお瓜が妹お蘭とて年も二八の苔の花ひらきそめたるやさ姿けふの忌日に備るとて片手に提し女郎花くねる野道を玄とやかにあゆむ姿は誰が見ても男へしとは見へざりし遙か跡から聲をかけヲ、イヲ、イと呼つゝも戻りかゝりし主の毘作舌もゝつる酒機嫌お蘭は見るより振返へりヲ、お前は毘作様今内方へ行所最前から呼しやんしたかえイヤモ呼んだ段か伯父貴の門口をそ様が出たゆゑ呼とめうとは仕かけたがもし伯父貴めに顔を合しや又長咄を受けるがづらさにちよこゝ走りて通り過村はづれから大聲で呼んでゐるのに聞ぬ顔エ、去とては聞えぬぞよ是蘭せんどころにいふ通り貴様噂が妹じやといふて伯父貴の所へ來た折からハテ美しいものじやと首だけ所かぞつこんおれが惚こんだが何の他人じやあるまいし姉嬢は妹の我身の聲も同前じやないかはどうじやぞいのゝと鹽の目に玄なだれつくを振拂ひ又し

てもゝ毘作様の玄やらゝとこちやそんな事は知りませぬハテそれはすげないコリヤ君よハ、ア聞えたコリヤ姉のお瓜が聲じやゆるゑ玄んしやくかハテ貴様さへうんといや古くさい唄めはばいまり此毘作が宿の妻コリヤうんといふてくれエ、吳おれと附つまとひとつ口説にぞエ、不作法なと心ではいかりながらもそぶりにとはさとられまじと柳に受段々のお志は嬉しいけれど伯父様のお耳に入たら大體や大方やかましい事ではござんせぬと言せもやらすゑせ笑ひへ、伯父貴がおこつたとてこはいかいム、そんなら何もかも伯父様に告るぞヘア、めつさうなそれいふてたまる物か何でも内へ連ていんでうんといふ迄はなさぬゝさあこいゝと門の口明るやあけずどつちよぐえヤイ今戻たぞうぬら何してけつかるのじやと内中ひいくわなり聲お瓜お菊は納戸を出ヲ、今戻らしやんしたかヲ、妹おじやつたかお蘭様ようマアお出と言ひながら小氣味の悪い毘作の顔にふさが二人がむねお蘭は提し花を置きいなアけふはお菊様の實の母御の命日と伯父様が氣を付て此女郎花を備る様早う持てゆけいてゝその御使にきた道で毘作

様に出合たら酒機嫌かしてぢやら／＼と云を毘作紛
らせてヤイ／＼／＼おれがするすじやとぬらマア何
してけつかる見りや佛壇へ灯をあげて優長らしい佛
なぶりあた情ない穢らはしいごくにも立ぬよまい事
より寢酒の肴は出来であるかハテうぢ／＼せずとち
やつきりちやつとさらせやいといふたらまた錢がな
いの金がないのとぬかすで有うハテ錢がなけりやう
ぬらが着ておる物なとぶち殺し買ふては置いてエ、
いま／＼しい街妻めらとあたり眼のぐわつたぐわた
火入引よせふと煙管ア、世の中におれ程精出す者
はないぞよ博奕は打酒はのむ殺生なら得手の物毎晩
／＼狐を釣るもうぬらにどがひしよがないゆる寢酒
の肴も得えせぬからせう事なしにお釣遊ばす狐をば
イヤ殺生じやの可愛さうなのとエ、眞に情も張合も
ある物かいけさから方々かけあるいて草臥たお菊め
腰なともめと寢腹這ひ何とお蘭女郎貴様も手を遊ば
すはきつい毒ちと此姉聲を見習うて若ひ折の玄んど
は乞うてせいとおれが足などもみやいのと足投出せ
ばお瓜は聞兼ア、是勿體ない何じや勿體ないとはエ
、サア勿體ないとはあの體を遊して置のは勿體ない

サアさうじやによつて私が先へもみましよと此場を
くろめるお瓜が氣轉毘作はふり拂ひエ、誰が頼もせ
ぬにうぬがその割松の様なほねでもんではをげが立
わいコリヤお瓜よう聞よもうおりやわれがとんと否
になつたエ、エイヤサわりや古喫ふておかしうない
我にやもう隙やつてあの妹のお蘭又美くしい者じや
此春まで京に奉公してゐたといふがイヤモたまつた
姿じやないて是からあのお蘭を女房にするさう思へ
と無法無徹な夫の詞きくに二人はあきれ果何といら
へも口籠そば腰もみながらお菊は聞兼是滅相もない
爺様あのお蘭様を眞實ほんまの女とやなんとサア眞實ほんまの女
房にもたうとはそりやあんまりでござんせう何をう
ぬ迄がませくさつたおれが女房にしたらどうするイ
、エイナア今お菊がいやるのは妹のおらんじやとて
まだことしが十七なりや娘のお菊とは一つちがひす
りや娘を女房にする様なものじやによつてハテ娘の
様であらうが孫の様であらふが何のうぬらがいらぬ
世話コリヤお蘭ヲ、といふて呉んかエ、是しか／＼
ともみ上れと妻や我子に手づよきも戀にはのろき物
なりしお蘭はお瓜と顔見合せ唯もち／＼とするふり

に毘作はこたへ兼ねうたまらぬと起上り否がるお蘭が手をとつて抱付んとする所をお瓜はわけて中に入イヤそうはなりませぬおまへもあんまり悪性なと格氣によせてさゝゆるをエ、置上れ法界悋氣面倒なそこ退うと振のけ蹴のけて行かけるを娘はかいなにすがりつくお蘭は傍にあぶくくと案に果しなかりけり毘作始終に目を付て伯父坊主や女房めが大事がるといひどうやら合點が行ぬお蘭のそぶりコリヤ是正しく男エ、イヤサ男のおれがする事をなせうぬが邪魔ひろぐ退ておらうと飛付をお瓜は屹度抱とめ是こちの人夫程迄に思はしやんすも他人ではなし妹の事随分得心さしもせうが木折にならぬが戀の道ム、そんなら我が口説落しサア色よひ返事をさすわいなアム、面白い一口商ひ今爰でイヤ後迄にいひきかしア、申喚さんそれではハテ何事もわしにまかしてそれお菊妹を連て奥の間へアイと返事は仕ながらも心は隔つ奥の間へお蘭を伴ひ入にけり跡に女房は興さめて何とせんかたなき折から猿戸ぐわらく音さして毘作内に居るか毘作と猿の様な聲をしてすつと這入るは油揚鼠六毘作見るよりエ、きよとくしい何じ

やぞいイヤ何じや所もすさまじいせんど都築が原の盆の上で取かへた卅兩の金我が眞裸まうはだかに成ておつたをおりや其時に手合はよしゑいわかしてやううがあさつて迄に五拾兩にして返せよといふたればう、合點じやとぬかしながらイヤあすのあさつてのとけふが日迄素股ふませて所詮返す金はあるまいゑいわ金返さにや爰のめらうを連ていんで大磯か手越へ女郎に賣四拾兩と五拾兩にして腹いるわサア金返すか娘渡すか毘作返事はどゝどうじやといふもそゝこしあぶらあけ鼠六毘作ゑせ笑らひへ、馬鹿盡すな猿松めうぬらに娘をうる事を習うかいめらうのお菊はさる所へ賣る約束して置た其金も我に返したら能らうがそれも外へ渡すかね我にかつた金は追付かへす落付て待ておれヤイくくわりや太い事をほごくなア娘賣た金もおれにはおこさぬかよいわモウわれにやとらぬその替りにうぬが伯父隣村の伯藏主めにさういふて臍くりがねを取たつるか又それもなけりや向ふにおるめらうのお蘭めちと心當りの口もありあいつを連ていて金にするさう思へとかけ出すを毘作は立上り鼠六が弱腰引つかみゑのころ投にすでんどう傍

にお瓜は只ハア／＼開度毎に悔りの胸轟かすばかり也こなたは鼠六しめ上てヤイおのれそれを伯父坊主めに云てたまる物かうぬらが智恵は皆跡へん常住手合の惡ひ時は伯父坊主めをだましこみ臍線は皆せしめてしまつた今時そんな事ぬかしたとてかんつの虧にもなる物か其うへあのお蘭めはおれが首切惚てゐれば此噂アめをばいまくりお蘭はおれが間の花わいらが手儘にやエ、さゝぬコリヤ我に返す金は爰にあると懷より取出す人相書鼠六は取て打詠めコリヤ是けふ代官所から渡つた大塔の宮とやらの人相書是をおれへ渡すかねとはハテした事じや此大塔の宮といふやつを此間から嗅出して置た是をとらへて褒美の金をせしめたらコリヤ我へ約束の五拾兩まだその外にわけ口も添てやるムウ、してその宮はどこにあるイヤそりやおれが見込である何でも今夜は通さぬ筈コリヤたのしんで待ておれと聞より俄にいた／＼顔よし面白いそんなら晩に請取うとうなづき／＼門に出歸へるふりして藪垣に身をひそめてぞ窺ひゐる内にはそれとしりながらそしらぬ顔に舌なめづり始終を聞てお瓜が當惑義理ある娘をうるといひ殊に宮

の身のうへ迄最早夫に見だされたかといち／＼胸に釘さす苦しみこなたはかまはぬ高あぐらコリヤイぞけめ今もうぬが聞通りお蘭を女房にするかよし又それがならにやおれがきつと仕様があるサア手短に返事せいヲ、といふて抱れて寢さ、にやよもや此まゝでは濟まいと否といはさぬ夫の難題吐息つく／＼顔打守りサア妹じやとて時分の年まんざら否でもあるまいがあんまりお前が邪慳な故何じやおれが邪慳なさいなアお前が常體のお人なら隨分心にもしたがほうし又わしじやとて何の悋氣もせぬけれど今更いふではなけねども近比おまへの身持惡さお年とられた伯父様の助ともなる心はなく畑仕事も打捨て博奕打たり喧嘩をしたり狐を釣てよしな殺生夫ばかりさへうたていに今鼠六との言合せ宮様をとらへて褒美の金のと現在連そふ私さへ恐しうてならぬもの年端もゆかぬ妹がついとくしんをしませうかいなアヤア二言めには聞たうもない意見立今時面倒な百姓業より遊んでくらすが男のかいしよふと思ひ付た狐釣りヤ又面白ひ物人を殺せば下手人にとらるゝ畜生の氣さんじには四五十疋も釣たれど誰が何ともいふては

來す今亦いふた大塔の宮めも足利殿から配符の廻た
お尋者ひとつとらへて連てゆけば褒美はすつしりなり
やうぬらまで出世の種は皆筋の立た事ばかり何で夫
が恐しいサ、其得手勝手が私が癢シテ其宮様とやら
はどここの何國に匿うてござんすえと裏問かくれば空
とぼけハテそれをうぬが聞糺して何とすりやいらざ
る世話をやかうより奥へいてお蘭めに言聞せうんと
いふて抱れて寝させい又めらうのお菊めは今夜約束
の所へ賣る拵賣物には花をかざれじやきり／＼髪も
結ふてやらうてエ、そんなら眞實あのお菊をヲ、賣
たらどうすりやおれが娘をおれが賣るに何とぞした
かサアそりやお前の娘でもござんせうが私が爲にも
大事の娘あの子を賣ては私の義理がヤア七めんど
うな義理だてうぬがさらさにやおれが直にとけしきを
すれば女房は手ごわき夫を諫め兼是非もなく／＼納
戸口打しはれてぞ入にける畠作は仕濟顔その儘そこ
に空寢入始終を立聞鼠六はそろ／＼敷疊より這出て
合圖の呼子に小蔭より足利の家來野見の軍太組子大
勢付したがへひそ／＼と近付ば鼠六は猶も聲をひそ
め仰られた何角の事畠作をさぐりし所きやつも欲づ

ら我等と同心ヲ、よし／＼然らば畠作を是へ呼出せ
畏つたと油揚鼠六門口あけて畠作にそれと合圖に起
上り戸口へ出れば野見の軍太すりや其方は此家の主
畠作とな身は足利の家來野見の軍太といふ者汝大塔
の宮の詮議致し差上る條是なる鼠六より慥に聞クシ
テその者はア、いかにも心當りのやつはあれどいま
だ確とわかりませねば今一度さぐつたうへいよ／＼
大塔の宮とやらに相違なくばヲ、搦て渡すか首で渡
すかもし手にあまつた其時は心覺の山刀で首にして
差上ませうヲ、出かいた／＼然らばのちに受取に參
らう夫は御苦勞是そのかはりに褒美をすつしりハテ
つがうに及ばぬ首さへ見れば三百兩エ、夫は忝い然
らば畠作ぬかるなと蚤取眼の野見の軍太組子引連立
かへる畠作は鼠六を近づけサア三百兩ももうこつち
のものわりや伯藏主に是かう／＼と叫けはヲ、そん
ならおれが釣出さう早う／＼と點き合鼠六は野道へ
畠作はどりや奥へいて前祝ひに夕の狐を肴にして一
盃やらうと獨り笑一間の内へ入相の空さへ秋は哀れ
にて千草にすだく虫の音と共に泣たき娘ぎのお菊は
一間を忍び出思案途方に暮六つの鐘ゆる賣らるゝ身

のうへとといろく胸をおししづめて恐しい爺様の巧み事宮様の首を渡すと今の約束殊にわしまで今宵の内に遠い所へ賣との事此春今の噂様が妹御じやとて都からきやしやんした本間の女郎と思ふてゐたに義理を思ふて噂様が誰にも知らさぬ宮様のお身のうへ包み隠さすいはしやんしてからでも可愛らしい尋常なあんな殿御が此廣い世界に又とあらうかと思ひ染たが身の因果いとしいやらかわいゝやら常住目顔でしらしてもあのこわい爺様に見付られたらどうせうとけふまで枕かはさねど思ひ詰た女子の操そのいとし殿御をば今宵の内に首を討れ此身は女郎に賣渡され何にたのしみに生延てつらひ勤がならうぞと袖くひしはる忍び泣娘心の一筋に思ひ詰たる戀の道哀れにも又しはらしき泪拭うて思案を極め、さうじやくどゝと思ふ間に爺様に見付られては一大事それより此場をちつとも早う宮様を落しまして爺様への言譯にはお身がはりにさへ立ならばとはいふもののせめて此世の思ひ出にたつた一度抱れて寝たい寝たいわいのと口説き泣いやゝゝ夫よりは潔ぎようお身替りに立たなら此世の縁こそ薄く共未來の縁

を噂様に頼おきちつとも早う宮様をそうじやゝゝと打點づき足音させじと忍び足窺ひゝゝ入にけるやゝ更渡る秋の夜の音のみ冴て聞ゆらん次第名残の後の古狐ゝこんくわいの涙なるらん憊る夜道を老の身の杖をもちからに伯藏主甥子の爲に心の闇浮世はうしや墨染の衣頭巾もふすばりて二重の腰を立そらし一狂言詞是は此邊りに住百年に餘る古狐のこつちやうでおじやる爰にある者の候がいつの頃よりか狐を一つ釣初て面白いと思うてか釣程にゝ我等がけんぞく共を悉く釣とつて今某をもねらへども油斷致さぬ所で聊爾に餌をはみにでふ様もござらぬ爰に彼者の伯父坊主に伯藏主といふてある此人の申さるゝ事はあまさか様なる事をも彼者が承引致す程にけふはかの白藏主に化て居て異見をして釣止らせうと思ふて是程に化た急ぎ彼者の宅まで行ばやと思ひ候一遣行住馴し我古塚をたち出てゝ足に任せて行程にゝゝ彼が元にぞ着にけり狂言詞いそぐ間彼がもとに着た扱々物には取得がある彼者が犬を飼ふならば我等如きも參る事なるまいに犬を飼ぬによつて何より心易いとゆかんとしては飛しさり邊り見廻し息をつぎ

狂言詞ア、嬉しや遠鳴で有た物扱々ゑい肝をつぶした先案内を乞はう物もう案内もうおとなふ聲に納戸より眼をすりながら主の畧作誰じや〜と立出て覗けば伯父の白藏主南無三寶あた邪魔なと思へど俄に追從聲狂言詞案内は誰ぞエ、イ白藏主様でござるかヲ、愚僧でおりやるこなた様ならば案内なしにお通りはなさらいで殊に暮におよふで何と思召てお出なされました案内なしに通らうずれどもけふは思ふ子細があるによつて案内を乞うた夫は心元ない何事でござりまする今日參つたは別の事でもないちとそなたに意見のしたい事有て參つた御意見とござるならいか様の事成其承はりませう先奥へお通りなされませいイヤ〜思ふ子細有て奥へは通るまい是にて申さう聞ばそなたは狐を釣さうなのア、申私は左様な事は存ませぬイ、ヤかくさしましと寺へくる人毎にそなたの甥の殿こそ狐を釣れ人の事をだに言はうする者があれが目にかゝらぬかと何れも仰らるゝよもや僞りではおりやるまい眞直にいはしませ扱はしかとおきゝなされましたかいかにも聞ておりやるとも御存の上は隠しませう様はござらぬ成程釣らぬ

ではござりませぬ此程一つ釣ましたが面白う存て釣程に〜七八疋も釣たでござらうア、それ〜人がない事は仰られぬまづそなたは狐を釣て何にお仕やるハアまづ革はいいで引敷に致しまするエイ身は料理して食ますエ、イ骨は黒焼にして膏藥煉へ遣しまするハア、最早聞てさへ身が震はア、あの狐といふ物は執心の恐しい物じやその狐の報ひで心があらあらしうなつて後には人の害になることもする物ぞ今迄の事は取も返されぬ此後はふつ〜と釣をとまらしませと狐に掛し身の意見畧作はぎつくりと胸に當れば謝り入狂言詞何が扱今迄は左様の事とも存ませなんだ此後はふつりと釣をとまりませう何じや釣を止らうハアさうあらば爰に狐の執心の恐しい物語がある是を語つて聞せうがとともとまるまいならいらぬものイヤこなたの仰らるゝ事をいつ背きました事がござる成程釣をもとまりませうぞ先お物語が承りたうござるさうあらば追付語つて聞せう愚僧もはるゝ來たればいかう草臥た其床几をくれさしませ畏つたとあり合す床几をとるも槌で庭白藏主は座に直り狂言詞此物語をお聞やつてふつ〜釣をおとまり

やれや畏つてござるカタリ抑狐と申は神にておはします天竺にてはやしほの宮唐土にてはきさらぎの宮我朝にては稻荷五社の大明神と申も是皆狐なりハア爰に鳥羽の院の御時玉藻前とて容顔美麗にして並びなき上童の有し然るに此女を玉藻の前と申子細は四角八方より其姿を見るに譬へば寶珠を見るが如く裏表なき女なり總じて裏表なき者なればとて玉藻の前とは呼れたりハア又化生の前と申は何ぞなれば一とせ帝に御歌合有て後御管絃の有し時ゑいその如くなる大風吹來つて禁中の灯火一燈も残らず消ぬ其時玉藻の前が身より金色の光を出し玉殿は申に及ばず御庭の眞砂の数までも限なく見え候程に玉藻の前は人間になく化生にてありやとて夫よりも化生の前とぞ呼れけるハア、其後帝程なく御惱とならせ給へば貴僧高僧を召れ色々御祈禱ありけれども夫にその驗なく安倍の泰成といふ博士を召れ占なはせ給へば泰成念比に考て申上げるは是皆玉藻の前が仕業なりそれをいかにと申に此女と申は根本狐なるが假に人間と化して天竺にては斑足太子の塚の神大唐にては幽王の後褒似と成りて既に七帝迄取り奉り今又日の本の

帝王を取奉らんとするかゝる一大事の御事なれば急此者を調伏あつて然るべきと申上る頓て四檀のついで五檀を飭薬師の法を行はるべしと有し時大内にたまりかね下野の國那須野の原に落てゆく國內通化の者なれば疎にしては叶はじと犬は狐の相を得たるものなれば犬追物といふ事を以て御退治あるべしとて三浦之助上總之助に仰付られる兩人は勅詔を蒙り那須の原に下着して百日の犬追物とぞ聞えけるハア百日の犬満じければ尾頭七尋に餘る三尾の古狐顯れ出るを一の矢は三浦之助二の矢は上總之助ヒョウどつきと射る得たりやヲ、と飛でおり劔をぬきかれを害し帝へ奏聞ありければ君の御惱も忽御平癒あり國土納り太平の御代となるぞとよハアされども狐の執心残つて大石となり人を取る事數しらす地を走る獸空をかける翅まで地に落かゝる殺生をする石なればとて殺生石とは名付たりハア爰に玄翁といへる僧あり彼石に向つてがつす汝元來殺生石とう石靈せう何れの所よりか來り何れの所にか去ると桂杖を以て三つ打打れて此石割れしより猶も人を取ぞとよかゝる恐しい執心の深いものなればけふよりしては釣をふつ

とおとまりあれかしと思ひすよ是此伯父が一生の頼
じや程にふつゝりと思ひといまつて下されと甥子
を思ふ老の身の泪に誠は顯れたり毘作ふつゝ誤りい
り狂言詞扱もゝ恐しいお物語を承りましてござる
其物語を聞ては狐を釣う物ではござらぬ此後はふつ
ゝ止りまするで御座らう間に伯父坊嬉しげに狂言
詞何じや釣を止らうとおしやるか中ゝ左様でござ
るヲ、それならば爰に狐を釣輪毘とやらいふ物があ
るげなそれを捨てお呉やれお歸りなされたらば捨ま
せういやといへば其道具があれば又釣たい心も出来
いで叶はぬとても捨るならば愚僧が見る前で捨さし
ませハア畏つてござる毘と申は是でござる傍なる毘
を鼻先へ突付出せば身を背け鼻動かしてふり拂ひ狂
言詞ア、扱も腥やゝゝ其道具でいか程か狐を釣やつ
たのふ早ふお捨やれゝ心得ました捨て参りませう
是ごらんせと毘折すてゝ外面にすて狂言詞ハア捨ま
してござるおすてやつたかようお捨やつたのゝ愚
僧がいふ事じやと思つて早速承引おめさりやつた近
頃満足した奥へ通つて子供にも逢うすれどもけふは
穢らしい重ねて來てあふでおりやろ夫は兎も角も

でござる又そなたもちと寺へお出やれ成程お見舞申
ませうお出やれとはいへども愚僧が事なれば別に振
舞ふ物はない毘布に山椒でよい茶を申さう杖を便り
に戸口へ出れば毘作は送りト狂言詞それは何よりの
御馳走でござりまするかならずゝ出さしませお知
りやる愚僧じやによつて何も振まう物が無い毘布に
山椒をまいてハア茶ばかり申さうようお出なされま
した胸に一物毘作が門のやぶれ戸びつしやりとしめ
た振りして窺ふにぞ白藏主は只そろゝ狂言詞ア、
馳走をしたうは思へども何も振舞ものがない毘布に
山椒茶ばかり申さう毘布に茶ばかりゝと影隔つま
で口の内道かい曲る尾花原姿は見えずなりにける跡
見送つて毘作がまんまとばれはいなしのけた此上
は手延にならぬ宮の首さうじやゝと打うなづき戸
棚に置し山刀腰にばつこみかけこむをお瓜はそれと
走出夫の向ふに立ふさがり是毘作殿最前からの一部
始終残らす納戸で聞きました老としよつた伯父様が夜
道もいとはず御意見にござんして頓と心を改たと今
誤らしやんしたじやないかいのそれにマアその山刀
をもつて一間へかけこみお前は何とさしやんすのじ

やえハテ知れた事伯父の意見も何の其耳にとめねば
空吹風ムウ、すややあれ程にいわしやんしてもヲ、
十分手に入る褒美の金奥におるお蘭こそ大塔の宮に
相違はない今又意見にうせた白藏主めは古狐のこつ
ちようめ妖てうせたに違ひないア、是勿體ない何の
狐が伯父様にイ、ヤぬかすな目頃から伯父貴めが意
見がましい顔付に小氣味の惡ひと思ふを幸ひ妖てう
せたに極つたよし又誠の伯父にもせよおれがかねも
ふけの邪魔するやつどちら道ばらして仕まうエ、エ
イ誠の伯父めか狐めかきやつめが歸る道筋に用意
も仕掛てある何れの道にも只はいなさぬマアそれよ
りは手短にお尋ものゝ宮めを生どりそのうへ伯父め
もばらしてくれう邪魔さらさずとそこのけと取付お
瓜をふりのけ蹴のけ猶かけ入んとする所へ娘のお菊
は走り出毘作が手にむしやぶりつき是爺様堪忍して
下さんせあんまりお前が胸欲さにお蘭様は今宵とめ
た御出家をたのんで裏道から落しましたと聞に毘作
齒嚙をなしヨ、すりや大塔の宮を落しおつたかチエ
、うぬマア現在親が金の蔓よううまゝと落したな
お菊が襟がみ引よせて欲にふけりし怒りの眼母はお

菊を身におはひエ、お菊よう落してたもつたのうせ
めて夫の罪亡し二つには又此母へ義理を立ての孝行
さヤア何をうぬらが得手勝手遠くは行まいぼつとい
てとかけ出す足もと二人は引とめ是爺様是はつかり
はゆるしてたべどういいう事やらわしや宮様がいとし
さに、孝も不孝も忘れはて思ひ染たが身の因果現在獨
りの娘が頼みヤア忌々敷ひ色事三昧山の神めとひと
つになりよううまゝと落したなうぬらどうして腹
いよふぞチエ、殘念やと立つ居つサ、、腹が立な
ら私を殺してあの宮様のお身代りにして下さんせわ
しやあの宮様ゆるなら譬へ死でも本望じやと身を突
付て覺悟の體母は娘を突のけてイヤそなたは殺さぬ
落しましたはわしへの義理わしを殺して腹いせにと
二人は足に取すがり果しなけねば毘作はエ、面倒な
と突倒す折柄鼠六はすたすつた走り來つてコリヤコ
リヤ毘作約束のお尋者はエ、約束所か宮は裏から二
入りがふけらしあまつさへ邪魔さらすおれは是から
跡追かけ宮めの首をちよち切てとめだてひろぎや伯
父でも構はぬ此めらどもの邪魔せぬようがてんか鼠
六、吞こんだと取りすがるお瓜を支るその隙に得

たりと駈出す足もとをお菊がとつて動かさねばエ、
足手まとひの此めらうめ幸ひおのれを連ていて約束
の所へばらしてくれうサアうせおらうとひつばさむ
さうさしては義理たゝずともかくお瓜を鼠六は引た
て毘作早うヲ、合點じやといふさへくらき露の闇欲
のくらやみ幸ひにお菊をひんだき毘作は跡を慕う
て

この段切まで今すこし長ければ下の卷に出す讀て知
るべし右吼噓の狂言は此道の習ひことにして狂言記
にも出さず予大藏流の何某より一書をかり受其餘書
と參考して是に出す狂言詞に讀癖甚多し所謂是を大
藏派の大事とする所なるべし

西澤
文庫 傳奇作書殘編中の卷

露廻千努間能朝顔耳

輝壽日影農難面幾爾

安盤禮一無良佐免乃

婆羅々々登富連可之

(春江の朝顔の戯書略之)

瑠 寛

西澤
文庫 傳奇作書殘編中の卷

目 次

- 一 芝叟長話薺の話
- 一 東都合卷の外題の寫
- 一 同戲場にての外題の寫
- 一 當狂言外題見立番附
- 一 瀬川菊之丞俳名の話
- 一 淨光我童に蘭平を教し話
- 一 蘭奢待助市役の話
- 一 秋里籬島翁の話
- 一 十返舎が膝栗毛の話
- 一 伽羅先代萩世界の話
- 一 義經腰越狀院本の話
- 一 岩井風呂呂人殺の實說
- 一 同京都芝居番附の寫(略之)
- 一 女郎富再び情死の實說
- 一 慶子紅梗枯女團七の話

西澤傳奇作書殘編中の卷

西澤綺語堂李叟著

芝叟長話薙の話（薙の戲畫並讃略す）

前集芝屋司馬叟が傳に説長話數種ある内此薙は自得の語にて其頃の歌舞妓に取立璃寛に宮城阿曾次郎をさせ度望にて近松德叟に談じ狂言あら方書上たれども深雪をすべき女形なくて四五年を経にけり其内柳浪馬田と云醫師也に諾し（話しカ）て書を交へ小説稗史前編五卷後編五卷に出版したり又四五年を経るうちに芝叟德叟共に歿して薙日記の小説のみ擴まりて文化九年頃堀江市の側芝居にて生寫薙日記と外題して濱芝居作者出来市川團三郎に駒澤をさせけり評よくてもさまで歡もせざりしが文化十一甲戌年東都より若女形澤村田之助先宗十郎助源之助の弟七年目に浪華へ歸る俳名曙山として器量善く琴三絃に達したれば薙の深雪は是に限るべしとて芝叟德叟の遺稿を出して奈河晴助潤色して則

外題をけいせい筑紫つまことと賦したり春狂言に薙といふなへし曙山警女となり春負ひ出る手琴を朝顔琴と唱へ璃寛には扇子に薙の唱歌を書せ持はやらせけるが故柳簪團扇子縫模様染模様朝顔ならずと云事なし畫人春好齋の門人春郷といふ者橘を薙の花とし三吉の文字を葉あらしのかなを蔓に書けり唱歌は璃寛の認しを寫して前に出す此頃又朝顔の珍花をはやらせり何事も朝顔々と唱へ芝居は古今稀成大入しけり芝叟存命ならば嘸かし歡ぶべしとて璃寛追善の摺物を出せり花蠟燭の艶摺にして左の如く三本有て上に漆越を置外袋に文を書たり餘紙に寫せし如くして風交子に配る是も三十餘年の昔となれば皆故人と成りて小説の板元なる予のみ残り然るに弘化四未年予は東都に行て五月頃にやあらん澤田氏の詠にて筑紫と江戸狂言復讐合法街故鷗屋南北が作是を混じて一日の傳奇に脚色を望まれ暑中をいとはず江州多賀家の世界と定め著述にかゝり日ならずして全部八冊草稿なる頃舊友花笠文京來つてさる書林より薙日記の合巻を頼まれたり兼て狂言出来ときけば其狂言の筋書を合巻に出し來春賣弘めし上にて此狂言を出す時は近くは戲場の報條

となりて見的に其筋を能知らしめ

(璃寛追善の摺物略す)

其まゝを芝に手向を五形艸

璃 寛

花すみれゆかりをとふや芝の露

曙 山

筆のあと探りてとはん嫁菜哉

晴 助

薺の芽出しに種の噂かな

土 卯

万倍の花朝がほの嫩より

柳浪外史

其圖に乗つて書林も幸を得んこと一事兩益ならんと
勸るに澤田子も兼て其事を思へばよかるべしと云早
速筋を認め文京に送る其後文京來つて書林何某朝顔
を刻したがるは近頃淨瑠璃に薺の宿屋の段を作りて
語るに評よければ全部せし所を梓に彫んとの心にて
外題を則かたり草瑠璃の朝顔と號最早願ひも相濟書
畫とも彫刻にかゝりしと云是を聞てこは以の外なる
ことなり其宿屋場の一段は浪花山田野亭と云へる者
阿古屋琴責と袖萩の祭文を混じ前後の筋も辨へず拵
へし場也予も一兩度聞て片腹痛く覺えしに思ひきや
予が著作の外題に淨瑠璃を題とせられんは好ましか
らずと悔め共願ひ濟しと聞て力に及ばず獨つぶやき

思ひ捨たり年の幕本出來せしとして校合摺を文京持來
り予見る所袋と叙文左の如く書組文談も紙數限り有
とて曩に説く合法の筋を抜地名も略して草稿とは異
なりその上名を賣るを厭ひて綺語堂作と書あたへし
を屈もなく西澤一鳳と表にあらはし西澤と書では書
林納らずと云劇場にすら名をのせぬに年頃の舊友た
る文京にも似合ざる仕方と悔めども甲斐なし原此駒
澤は熊澤の事蹟を書もふけしもの故常の戲雄とは同
じからず夫を文京辨へず婦女子に歡せんとして心浮た
る當世男と見しか螢狩の船中にて娘深雪と琴三絃を
合奏せし様に書たり柳里恭_{柳澤}淇園_園などの人と思はる其
餘書組等も予が心に落す詠めて腹を立んよりはと再
び見ず文京も利欲にふける書肆と言合せ我虛名を賣
しを氣の毒とや思ひけん久しく來らず因て朝顔の唱
歌にもとづき恨みを言ひ送る

東都合卷の外題の寫_{朝顔艸紙表紙の繪あるも略す}

露も見ぬ間に薺をほらす書屋のつれなきに哀れ一
枚宛なりと花笠の見せかし

此外に述懷の狂詠一首

色々に作りし物をるり色の野ら朝顔となせし花笠

かく書送り以後は人の勸め有ともうかつに筆はとるまじと思ひ捨ぬ

此朝顔の物語は芝叟が夜話の中なるを柳浪探て小説に培て世に流布する事尙し京攝にはいち早く狂言に其蔓を傳せて異種の薺と共にてはやせしも廿年餘の昔と成にけり吾友浪華の西澤家産とするる劇書の種を多く齎し來て猿若の地に蒔んとするを聞て書賈稗史の鉢植にせんとて校合を予に求む

東都戲場にての外題の寫

原來詞華言葉の繁き上に加之に合法の復讐なれば彼を摘是を省きて只幹すちを助て榮枯全うせんとすれ共兎園の狭き爭でもらす事を得ん所謂小風呂敷に夜具を包に異らす小を以て大を覆んとするは愚の極なり苗を日陰に植たるは花も亦頗る遅かるべし

弘化五戊申春新鐫

花笠文京

同芝居にて外題段書(略之)

時は應永年中江州多賀の兩執權駒澤主膳瀨左衛門が諫言耳に

界杭爰で立場の太平次がお米を乗て孫七の小室節

孝貞忠信比四季花籠

春は早枝大學之助
夏は高橋彌十郎
秋は多賀采女之助
冬は宮城阿曾次郎
みゆき

復讐雙

合法榮

繪入
稗史

薺

物

語

全八
部卷

あらし思議行衛慕て大井川と心を替女の筑紫琴

頃も秋月石山の妻子は宇治の螢狩闇に礫の岩代瀧太がたくみも忽

秀逸の吟に寄る

越川の村境に

鷹野の狼籍

盛りは憎し迎ひ駕

武射の陣屋に

意恨の欺討

第二の吟に寄る

宇治の川邊に

赤繩の蝨狩

その日／＼の花の出來

篠原の水門に

闇夜の曲者

第三の吟に寄る

八橋の泉水に

杜若の文使

うがひ茶碗に鐘の音

多賀の屋形に

發心の門出

第四の吟に寄る

藪原の峠道に

旅路の艱難

地にさく事の覺束な

櫓井の建場に

名代の返討

第五の吟に寄る

石山の別業に

夢路の私語

扇のほねを垣根かな

鳥羽の湊戸に

暴風の別路

第六の吟に寄る

大磯の柳巷に

情死の仇討

紺にそめてもよは／＼し

花形の青樓に

追善の燈籠

第七の吟に寄る

駿府の宿屋に

妻琴の憂話

釣瓶とられて貰ひ水

島田の河原に

主従の再會

卷頭の吟に寄る

鏡山の下館に

本復の祝着

露や朝々賑しき

柏原の辻堂に

開眼の復讐

右嘉永改元申年秋狂言に出せしに朝顔珍らし

く合法のかた出來能ても見古したればと茶屋

場總一座



の揃太夫元家橋の紋にして綺麗也是を

見て亦例の狂詠をはく

市むらの芝居に作る朝顔に

盛りあらそふ木場黄葉とうづ家橋川

同同同同同同同同同同同同同同同同
銀閣寺宇商往始
三子界來
桃柳鄒島
松平遠津歌
井出玉川正合
本城牟川月合
防州苗討
敵兄昔討
花敵弟
假假安弟
名冠誕士
彩色俊美川
極優丹繪紳
敵蘇丹綸問
雪藏波綸答
媚國討詩語
重作風國討
重名媚雪敵極假假花敵防州苗敵弟
同同同同同同同同同同同同同同同同

行司 領 大 手 進 中 進 中

大 手 連 中 手 連

頭取

近松德三
辰岡萬作

元進勸

大坂太左衛門
鹽屋九郎右衛門

同	茶	伊勢日輪	同	太	怪はる	竹笠	同	日出度か	同	傾城咬	同	情高	同	けいせいの花	同	計略花言	同	入間詞大	同	もくろび鳴鶴	同	伊達姿燕	同	露蝶廊名	同	けいとせい	同	粧倭畫	同	東証懸深
---	---	------	---	---	-----	----	---	------	---	-----	---	----	---	--------	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	-------	---	-----	---	------

[illegible]

右歌舞妓當狂言外題見立角力大番附は囊に豐竹竹本を東西にわけ當淨瑠璃の外題角力の番附出けり竹本座大關國姓爺合戰豐竹座大關北條時頼記夫に倣て出しは文化四五年の頃なり是にもれたる外題數多あり枚舉すべからず順は作の佳否に拘らず大入大繁昌せしを上段とせしものなり下段細字の所にも佳作なきにしもあらず當狂言の分此前編拾遺に解もらせしは此編に註すべし狂言の世界多き中にも假名手本忠臣藏は種々の増補有て評註甚多し予是を輯録して別に忠臣藏類聚大成と題して四十餘卷傳奇の系圖作者の評論とも都合五十卷に著すべし好者は是を見て悟したまへ

瀬川菊之丞俳名の話

昔文祿の頃小野攝津守息女優に艶敷氏を繼て小野が跡を追ひしかば六義の詠も大内に耻かしからで鄙人にはたぐゐもなかりけるを國ならびの龍造寺の家臣瀬川采女正といふ好者見ぬ戀にあこがれ千束の（文カ）通はせ星霜をかさねしかば玄たふになびく習ひ終に兩親にしらせて迎へとりけり其二月ばかりに高麗の陣觸有て龍造寺も其催に采女も朝鮮の軍旅にと

どまり一年も便あらざるを妻の菊女一説に閨淋しきは蘭菊に堪兼て思ひの餘りを一封の水莖に黒ませて渡海の便に頼つかはしけるに其船灘の風に破れ船の中の品々悉く行衛なく成しに彼文箱一つ名護屋の浦にあがりて浦人とり傳へて上聞に達す豐臣秀吉公其文を讀せ御聽あるに心まめやかに夫を思ふ情ふかゝりければ憐み給ひて龍造寺に命じて采女を朝鮮より呼歸らしめ給ふと太閤記に見えたり錦に文字をあらはして戀の心ざしを萬里に通はせ卒都婆に歌を彫て沙路に孝道を傳へし同日の話なり菊女が文高麗へ行たらば采女が歸國は有べからず波にゆられて浦人の手にわたり上聞に達せしは貞心天に通じ鬼神も感ずる所なるべし初代若女形瀬川菊之丞の名は采女夫婦が貞操に習ひ然呼といふ事人口に膾炙するゆゑ爰に出す因に俳諧を其頃美濃風の祖獅子庵支考に學ぶ芭蕉翁の高弟東花坊西と云支考菊之丞に一字を免して路考と呼けりかゝれば元祖中山文七は中山新九郎菊後か黒谷淨光と云の元祿中に名高き忠臣大石の義に倣ひて由男と呼し物ならん此弟子に中山文五郎始中山小三郎一名やんまと云道外役者なれば俳名を美男と附たり名をきくさへおかしくてよし又初代芳澤あ

やめは俳名を春水と云春水四澤に満るより呼なるべし郭公啼や五尺の菖蒲草と芭蕉翁の詠しも此あやめの事にて其頃の評判記に三ヶ津總藝頭とあり此舩芳澤崎之助親の名を繼二代目あやめとなる俳名を一鳳と云此弟中村新五郎の養子となり中村富十郎是又後三ヶ津總藝俳名を慶千と云此兄弟英一蝶の書を學んで墨跡今に残れり爰に笑話あり文政中長崎の雅友長岡梅子方より予に軸物一幅を送らる柳に燕の書に由男の讃有書は親父か祖父なるべし不思議と彼地にて見出し故呈上すとの書狀添たり予一軸を開かぬうちより思へらく父は戲場にのみ遊び書畫を弄ばず祖父は享保に歿したれば由男の讃には年曆あはずとあやしみ乍ら軸物を開き見れば英ふうにて一鳳あやめの書也由男の詩に柳に燕の二字を書ず則書にて利せたる合作の書畫なり寶曆明和の頃の筆にして數百里隔てし崎陽より予が父の筆ならんと雅友梅子より送られしも奇なりとて表装を更時々床にかけて樂めり昔の俳優家の俳名に師より譲り受しは格別多くは我身を卑下して呼しものなり所謂栢庭とあるを畸なると卑下して白猿となる里環の舩李冠と書しを後璃寛とは替

ずとももの事なり芝翫も役者にはよき名なるに弟子に譲りて後梅玉と改浪花の玉とは自賞なるべし其餘近來の俳名は熟字もせでいと狼籍なる俳名あり笑ふに堪たり

淨光我童に蘭平を教し話

中山文七由男淨光は天明二壬寅年秋角の芝居にて一世一代とて物艸太郎切に蘭平物狂ひをし後に博多織の小平次切は紅葉一世壽に平惟茂役をし九月九日より霜月四日迄興行大入大繁昌せしとぞ此時弟中山來助初代中山新九郎父の名を繼二代目新九郎となり門弟中山猪八京都にて改二代目中山來助となる是後寛政八辰年二代目中山文七鬚一世一代に付風流連管三番叟は皆門弟より出る翁中山咲藏三番叟中山他藏二代目新九郎死てより俳名舎柳中山嬌藏濱芝居立物也後泉川と改中山太四郎後淺尾と改又工左衛門と成小鼓中山新七後三代目新九郎喜樂也一蝶の父同中山榮藏同中山小三郎後文五郎美男の事笛中山金七太鼓中山友九郎後百村と改目出度打納また京都にて興行して直に剃髮して淨光と呼び墨の衣に着替て東山新黒谷の茶處に籠り念佛の信者となつて再び舞臺を踏す信心堅固の大道心也爰に中興片岡仁左衛門七代目南麿舍我童は始淺尾國五郎とて爲十郎の弟子也師の不興を受山澤國五郎

と暫し名をかへ居たりしを叶雛助小六玉に云我弟子には
 しく爲十郎の許をつくるひ片岡といふ名字は先祖中
 村十藏俳名より因ある名にて吉右衛門虎看片岡又十藏
 小珉御十と傳て六代目に及ぶ則七代目片岡仁左衛門と
 改名させて我弟子としたり此紋奥山の弟子なるゆゑ
 紋は丸に二を付たり俳名我童と云て元色敵より後立
 役となり實惡となりたり敵役をする時は奥山の流を
 し立役女形實惡は小六を寫せり天明八年改名して寛
 政の中頃京都の芝居にて倭假名在原景圖の蘭平を好
 まれ我も兼て仕て見たき心あれば一日黒谷へ詣て淨
 光の庵室に尋ね茶菓子の見舞を送り浮世咄より言よ
 りて蘭平の事を問ふに淨光も好の道なれば爰が仕ど
 ころ又此間がむづかしとて居ながらにして所作を教
 ふるに誠に古今に通ずる名人の教ふる所なれば一二
 應にては會とく仕難き處あり我童淨光に一禮をのべ
 甚申兼たる事なれど雙林寺中に閑靜なる座敷をかり
 受あればあの方へ一日御出あつて御傳授はなるまじ
 くやと頼みに淨光一義もなく今は浮世に交らぬ身な
 れど元より覺えし好の道嘸や芝居からは急べし明日
 未明より參るべしと心易くいはれし嬉しさ然らば翌

日と所を言置我童は返つて座敷しつらい淨光の來る
 を待に程なく淨光訪ね見え坊主あたまに手拭を冠り
 物狂ひの始より咲た櫻になせ駒つなぐ又浮世くし
 ん氣な顔うかせ浮たる物に取てはのふかよりお草履
 掴んで尻ふるべいの終り迄仕て見する事數十遍身う
 ちの汗をぬぐひつゝいと懇ろに教へけり我童は見入
 りて感に絶精進物の饗膳も淨光はそこゝに取らせ
 せりふの言樣身の取なり委しく教て返りしが跡にて
 我童所々をさらゆるに淨光のする所言外餘情の妙あ
 りて中々心に覺えられず途方に暮る其内に早芝居に
 は看板出初日はいつとせつかるゝ淨光法師をさう度
 々は迎はれず詮方盡て一兩人の藝子を呼び夫とはな
 しに相談しければ藝子の中より山ねこの誰々は下河
 也子蘭平の役を得たるゆゑ圓山或は靈山にて毎度勤し
 を見しと云我童それこそ呼に心易しとかの山ねこそ
 呼よせて藝子の地にて踊らせ見るに女のふりゆゑ端
 手あり色ありきつかけ有て覺えよく並んで振りを習
 ふ所一夜にして習得たり淨光に教を受ては心改つて
 遠慮の氣味あり舞子は後の名聞あればよろこんで教
 ふるなれば花を買ふて祝義ですむと高をくゝつて侮

る氣味あり心あらたまらねばくつろぎありて覺易しされど淨光のおしへし處々覺へし所は是を交やがて初日も出て相應に評もよかりしとぞ黒谷へは反物を送り其日の禮を言やりしを其又禮をのべんとて四五日程經て來りしゆゑ幸ひ唯今蘭平の場也見物有て批判を乞ふど棧敷を明て迎へければ淨光は衣のまゝ頭巾冠つて見物し幕しまつて宿へかへる我童返つて淨光に逢ひ御影で此役勤めしと一禮に及びし時淨光は當りをほめ扱我等が勤し頃より年數立ば流行もかはるべし我等教へし所は所々に見ゆれど一體が女のふりになつたるはいぶかしゝ小手の利し取廻りは當時流行の所なるべし此蘭平の役程仕難き役はあるべからず本名は伴の義雄にて行平を父の仇と心得復讐の爲に下郎と容（略しカ）又物を見れば狂亂すとは肌ゆるさせん謀事也然れば器用には踊れぬ役なり又拵事なれど附しは女の死靈也彼是と工夫を附度々勤て試み此頃我等がして見せしは手譽か知らねど頗得意を得し所也今日見物せし所を評せば舞子山ねこのふりに似て狂言には遙に遠しと名人の眼に見すかされ我童滿面に汗を流し淨光尊師のせらるゝ所誠に絶妙に

して覺えがたく覺ゆるとも仕難き所有依之山根子何某に習ひて漸當座を凌げり實に恥べき所也と始終を懺悔しければ淨光も打點き夫にて様子わかりしとて所々を口傳して黒谷へ歸られしと其頃の物語を歿前樂屋にて予に咄せり以前下手岡などゝ誣たれども古き役者は名人上手の狂言を見古人の教へを受たれば今時の役者と一口の論には及びがたし

蘭奢待助市役の語

蒼頡鶏の足形を見て文字を作る後世虚言を云者多からんと鬼神哭せしと云又文字を教へたる鶏今飛來らば一字も讀む事あたはずと啼べし豈筆道に限るべからず淨瑠璃歌舞妓の文談にも作者の始て書置たると後世語り勤る者了簡ぐわらりと違ひ若し古の作者當時の狂言を見たらんには我書し時とは心違ひ今更云とて癖は治らず眉を顰めて逝去るべし蘭奢待新田景圖は近松半二の作にて能操歌舞妓共に時々出て名譽の當狂言也然れどもいつも三の口切のみにて五段續にて興行せしは文化元子年の秋中の芝居にて義貞市藏（後綴）幸内團藏助市三五郎（二代）來芝女房路考四の切彦七團藏楠後家路考（曲）女が（曲）ま六大友可兵衛三五郎也助市可

兵衛の二役は來芝得意の役にて度々出せり予來芝のせしは見ず文政二卯年中の座にて黃金鱸關取二代鑑當りを取り數長く興行せしゆゑ後に蘭奢待三の口切を添たり新田に片岡幸内に工左衛門誠の内侍に歌六助市に嵐吉女房に小六也何れも老練の輩のみゆゑ見物するに飽ず此時瑞寛病氣に付三四日計助市役の替りを三樹他人當時の大勤也評よかりけり夫より以來是程揃ひし蘭奢待を見ず爰に予が父の友に平野町一丁目末廣師鶴卯といふ男有けり原堀江九平小六玉龜負丸や平兵衛の幫間にて戲場遊里評を觸歩くを樂みとする老人なりしが古き事を聞には勝手よき故予も親しく交り或日蘭奢待の話に及び中興來芝が毎度するを見ねども瑞寛のする所より仕所あるやと問ふに鶴卯瑞寛の舞鶴うつしふと有頭をふつて來芝の得たるは庄屋可兵衛田舎座頭をよく踊るゆゑ也助市のあしきは凡來芝にとゞまるべし先助市の役は戰國の砌りなれば親幸内を宮方とも知らず足利尊氏に仕へて妻鹿孫三郎と名乗り軍慮の爲に造病臆病者となり親の勘當をゆるされんとの心也幼少にて家出せし兄は小山田太郎とて新田義貞に仕へ主にかはつて討死をしたり義貞は幸内の

扮也とて勾當の内侍諸共に容を略し是も勘氣の佐に入りこむ小山田の女房を勾當の内侍と名乗らせ幸内の家にかくまはれり助市の臆病を父の幸内罵つて止す女房およね聞兼て自害をし夫をはげます傍に内侍は介抱する嫁に苦しみさせんより早く首討苦痛を助けよと幸内の差圖にこは／＼刀を引拔て此身に代つて死たる女房嚙とは思はぬ南無嚙大明神今が最期と振上し刀の著られて内侍の首打とり血刀提て門に飛出それ傳へ聞く漢の沛公は座する所に紫の運氣たなびきとせりふいひ終つて橋懸りへ駈込む此内幸内夫婦嫁およね餘りの事にあきれ果妻鹿孫三郎と名乗りしより扱は扮は尊氏に味方せしかそんなら夫とは敵方かと嫁是にて事きれる是本文を來芝は小才覺にて直し嫁の苦痛を助けよと聞くより刀を抜て立上りそれつたへきくとせりふの終りに内侍の首討駈こめり常々臆病の馬鹿者が唐倭のひきことをいふ隙に幸内も心付き内侍を傍には置べからず詞と仕草はかはらねど唯一處の跡先になるより此狂言の魂相違せり半二此世にあらはれ出て是を見れば大聲あげて泣なるべしと鶴卯は評せり故に淨瑠璃は木偶にかけて文を演

る歌舞妓は文を次にして我仕勝手の能を先にす古來在來りの淨瑠璃を我一人の才覺にて猥に前後のすべからず一人の思入より狂言の惣崩れとなれば慎しむべき事也去々末年の秋江戸河原崎座にて大塔宮旭鎧の二の切へ蘭奢待の三をきりはめ助市の本名を宇都宮宮綱に直し錦升^{今の松本幸四郎}新田義貞を楠正成にして翫雀脇濱幸内を徳太夫に呼かへ大友^{始萬作}楠昔嘶の三の切に混じたれど狂言浮きてさせる見處もなかりけり

秋里籬島翁の語


秋里籬島は五條橋下融の大臣が鹽竈の舊跡籬島に住居せしゆゑしか呼ぶとぞ常に人と雜談の時にも龜墨龜紙を持出て聞ごとには是をひかへ譬へ小兒婦女子の咄しにもせよ耳新らしき事は問ひたいし記さずといふ事なしとぞ天明中貧窮の内にふと都名所圖會六卷を撰出して竹原春朝齋に書を乞ひしに春朝下書をかきて與へり籬島書林何某へ持行てちりばめ出版させんと勸るに書林是をよろこばず原より山城名跡誌京羽二重同織留京の水貝原氏の都廻り等有て山水美景は朝夕に見て飽たれば此書出版するとも行なはれまじとて彫刻の心なかりしを籬島の曰足下こそ洛陽長

安に住み寺院社祠名所の奇觀は珍らしからねど遠國他邦の人此書を見ば愛で求る者多かるべしと一派の宗門を弘る如く達て發行を勸るに書林も澁々受引て筆工彫刻にかゝりけり書は春朝に淨書させ籬島は校合にかゝり作料漸貳參圓金也長く著述に苦心をして數多の書籍を引書せし甲斐もなけねど此書世上に弘まりなば望は足りぬと思ひ捨しに全部六卷出版して賣る事夥しく僅の内に數千部摺出し書林は暫しに大利を得たり其上此平安城に名所舊跡いと多し是に漏れたるを拾ふて出せよと買手の方より催促によりこたびは籬島に詔らへければ秋里も面目にて作料何程と極し上引書のむきは書林より運びだしなき書物は穿鑿しても籬島に渡せり都の拾遺成ると早次は大和より五畿内を揃へ六十餘部も膨んと云籬島は餘事を打捨て書工竹原と筆者をつれ筆墨紙と眼鏡を數葉^{山水の絶景堂社をう僕に持たせ着類調度を荷はせる剛力つし取る畫工の具也}諸共以上五人けふ旅立ていつ歸ると云日數もいとはず大和路さして見物に路用雜費は書林より續送れば不自由もなくいとまたのしき旅立なり行先々にも都名所の噂高く埋れし舊地の世に出る事故大地の寺院

は坊に宿り大社は社司を宿として縁起寶物は文庫をひらいて取出して見せ寺社のひらけし年號はもとより社務開基の傳來まで残る方なく寫すうち色々との響應にあへり雨中は宿にとまりて著述にかへり竹原は畫の清書して天氣快晴の日は畫圖に合せ國ごかひより界まで縱横に廻りて残る所なく書取る時には一度歸國し引書をあさりて成就すれば河内和泉津の國と經歷草稿成れば淨書にかへり彫刻成れば校合し五畿内都合四十卷此餘伊勢參宮東海道岐蘇街道都林泉等の數編を著し其間々に法橋中和に畫を書せ源平盛衰記保元平治前太平記年代記年中行事まで書抄を著し生涯安樂に過られしとぞ其後秋里の名所に倣ひ廿四拜順拜圖會播州廻り紀伊の國阿波近江尾張など出版したれど撰者は籬島畫は春朝に限るべし此兩人は名所圖會を世に著さん爲生れしなるべし近來江戸名所圖會出版せり原菊岡沽涼が江戸砂子を題として長谷川氏の畫を交へ齋藤氏の編輯なり夫すら作者三世を経てやうやく満尾せりと聞寺島良安が輯録せし和漢三才圖會も三世を経て漸成れりと聞けばかたき哉著述の道其書々々の世に出るも人と時節の廻り合

ふなるべし

十返舎が膝栗毛の語

東都にて狂歌流行せしは天明年中より文化の始頃迄也其人々には四方赤良、鹿津部眞顔、唐衣橋洲、平秩東作、朱樂菅江、むりの光、錢屋金持、芍藥亭長根、六樹園飯盛、手柄岡持、間屋酒船、森羅萬象、淺草市人、三陀羅法師、金鶏入道、尙左堂俊滿等連中を組て四方連と云四方と云酒屋あつて菰包の印を太田南畝齊花園赤良山人書れしより四方赤良と云此人詩作に妙を得て皇都の銅脈珍芬館など敬號ありを二大家と賞て狂詩の贈答數多あり四方の酒店の井より銅印一顆を汲上たり則文字は巴山人との三字也夫ゆゑ四方連の印に是を押せり自ら四方山人と書詩の力を以て狂歌連に交はり尤書を能す扇子など頼めばおしまふ書れ其詩崎陽の來泊人太清に持返り日本の書を受する輩見て詩は李白の風ありて日本にもかゝる人ありやと賞四方山人の文字を讀兼て蜀の字ならんと推量し當時太清の詩人に是程出來る者は珍らし日本の蜀山人は詩と書を善すと賞越したり赤良是を聞て我名の異國まで聞へしをよろこびて其後蜀山人と呼かへ四方連を鹿津部

眞顔に譲る四方の眞顔狂歌堂歌垣と云是也巴山人の印を山

東京傳に送る京傳俗姓京屋傳助醒々齋の號有戲作を業として即



此印を用ゆ爰に又十返舎一九は若かりし時より身持放蕩にて晝夜吉原に通ひて遊廓の癡情を愛る故に女郎も浮氣となり一九に馴染めば餘の客落る彼是の譯ありて大門口にて一九をとめ以後廓中へ這入まじとの證文を取り今猶大門口の會所にありと云虚實わかも難けれど夜話に聞しまゝ爰にしろす扱も一九は貧くて仕方なきまゝ京傳方へ行て食客となる京傳小冊の草稿を出して一九にあたへ夫を清書して書林にもち行小遣ともなすべしと云一九是を淨書して早速書林に持行て僅の料を取つて歸れり此書東海道羈旅の滑稽を書て神田八丁堀とちめんや彌次郎兵衛喜多八が洒落膝栗毛初編一冊是也其頃洒落本の小冊は風來山人福内鬼外平賀源内が六部の書の後櫻川慈悲成が落し噺より京傳馬琴三馬等の作のみにて旅の滑稽はなく傾城買二筋道仕懸文庫の類にして吉原深川の癡情を書或は浮世床浮世風呂のうがちのみなれば膝栗毛の評よくて賣る事甚多し書林は利を得て一九に詠へ二編三編と作させるゆゑ作料自ら高く伊勢參宮にて歸路

に及ぶを猶京大坂迄出さんとして旅用を出して一九を登せ歸府して八編の大坂に止る歸路の本曾地はまだはやしと金毘羅より宮島を詠らへる一九浪華より西を知らねば長崎紀行といへる老實の書をもて海陸の里數挿畫は大約是より出し滑稽洒落を書まじへ續膝栗毛とゝなへて岐蘇道中を數編に出せり初編より二三編迄は趣向を惜しまぬがゆゑおかしみ多し後々は能滑稽の筋ありとも次に／＼と引延すがゆゑ先觸ばかり仰山にて讀ども願をはづす迄なくいと本意なき事乍滑稽を書し本に是程數編を重ねしはいと珍らし僅三冊の小本を書て後作料は數十金を取れりと云又書林より出すも妙也始京傳の書すてをもらひてより一九の作名は膝栗毛より弘まる其頃是に倣ひて偽作多く出たれ共膝栗毛の右に出る事あたはず曩に云籬島が名所圖會十返舎が膝栗毛同じ日の物語なるべし十返舎が墓碑は東都向ふ島長命寺に有り前書あれども覺えず内損と腎虚を我は願ふ也其百年を生延た上とあり又寛政のすえ霜月晦日名所圖會に名を知られし竹原春朝齋身まかりしを悼て深山橋おしわけひくかめいどづえと大江九舊國の句あり思ひ出せしま

ま爰にしるす

伽羅先代萩世界の話

先代萩は安永六丁酉四月中の戯場にて奈河龜助作にて始て成る奥州秀衡跡目爭論と角外題に置て世界を伊達友衡綱宗にして井梶原景時に歌右衛門板倉秩父重忠に文七田原常陸坊海尊爲十郎安藝伊達治郎秋衡來助片倉小治郎親衡文七岡朝乳母政岡來助梶原奥方榮御前歌右衛門前松ケ枝駒之助文七と皆悉く此世界にすえたり谷地の爭ひの場に小治郎親衡の妻と治郎秋衡の妻と夫々の事を云居り夫治郎は氣短ゆゑ伊達の治郎秋衡とはいはひで伊達秋くと申舛とせりふ有又大切對決に海尊負色になれば梶原引とり武さしのにありと聞なる迹水の迹隠れても世をすぐるかな杯と古歌にて紛らす重忠聞て景時殿は適の歌人そこで世上にては梶原殿は歌よみじや歌じやくと譽まするとの詞も有九段續にて誠に名譽の狂言也翌七戌年京都にて竹本春太夫座にて此まゝ淨瑠璃に取立御殿場迄院本出板せり奈河龜助は前編にとて伊賀越を極月二日より出して明る三月末迄打續て此先代萩を四月始つきたより出して六月迄打たり又世界を江州佐々木にし

て綱宗佐々木六角田原才原勘解由安藝秋塚帶刀板倉岩倉主膳井榮飛驒守淺岡淺香富十郎倉片桐小十郎と名をもふけ其後伊達姿萩燕都裾歌枕萩舊跡と外題を呼び新狂言成りても世界は大約陸玉川の世界人名を借し物也東都にては世界を應仁記に借りて綱宗足利小金吾賴兼原仁木彈正部兵大江鬼貫安藝渡邊外記左衛門井山山名宗全前松荒獅子男之助倉板細川勝元として都室町間注所にて對決したり江戸淨瑠璃には伊達競阿國戯場と表題して累の解脫を取組たり都て江戸にては残らず京にての狂言ゆる高雄は九條の里の傾城とし豆腐屋南禪寺前と云三股川の下ゲ切を宇治川に准らへせりふに京を言て方角けしからぬ道筋也九條の里より高雄九の船に乗り宇治川へ行歸路浪籍者に出合ひ南禪寺前豆腐屋へ賴兼を預くるなど也其内に日本堤といふ土手の道哲など有て心は江戸也東都は前編に云如く狂言を見ぬ處なればさも有べし文政四巳年中の芝居にて穂花先代名松本とて仁木彈正に松本幸四郎渡邊外記左衛門に工左衛門細川勝元に歌右衛門此對決場は江戸仕組なれば應仁の世界也跡先は佐々木六角もあり奥州秀衡の類葉もあり世界わからず其後一日の仕組なく

色々古狂言を辨へなき輩が寄物にする事なれば御殿にては武將頼朝公より給はるお菓子毒とは何がお毒といひせり上と成り花道へ出る鼠は仁木彈正也荒獅子男之助に對して今川女之助と云有其上へ松が枝敵之助出て對決は鎌倉の間注所にて山名細川が裁斷あり足利頼兼が奥州五十四郡の主となり京の高雄やら江戸の高雄やら是もわからず此世界はよつてかゝつて眞暗と成りたり故人世界を定めて苦心せしもかう仕崩してはため直らず淺猿し近來角の芝居にて慶子

五節句を一時にする政岡を二の替りの大切に一場仕けり予春に先代萩と呼ぶも不自由也とて先代萩の若葉と賦したり番附に摺たる外題までに心を附て見る人は稀なるべけれど是も一癖なれば免さるべし其後海老藏中の芝居にて先代萩類聚をし鹽澤丹三郎の場を脚色し事有り江戸には此寫本もあり講釋にても専ら讀事也是に半井通仙の醫論伊賀越の前競本騒動によむを書入彈正妹八汐に與六典醫大場道益に毒藥調合をさせ膳番鹽澤丹三郎海老藏に言含家の納りなれば幼君にあたへよと言付歸つて母宮城に文七召使お陸に路之助茶を煎て出す中へ蠅飛入て死したるより母下女を呵り主

人に毒な物を吞せて濟かと異見のうち丹三郎我身に思ひ當り彈正には從來の恩義もあれど幼君を毒殺するは不忠なりと書置を残して毒の入たる膳部をば合點にて我食し切腹して相果ると云場也上田餘齋子が作の秋雨物語に連歌師紹巳高野の玉川に毒有なしを辨ずる條を母の髮見にいはずなどして潤色せしが幸ひに其訥評よかり跡先は世界混雜して片腹痛き事もいと多かりし

義經腰越狀院本の話

腰越狀は寶曆四戌年の秋並木永助の作にて五段續なりしを四の口切御差留になり院本も三段目迄出させ奥は絶板と成りけり予以前所持して讀たる事あり二の切目貫師後藤の内へ本田二郎近經頼朝方の軍師にせんと抱へに來る五斗酒樽にもたれ熟醉して心付ず五斗が先妻の子大三郎と云前髪の子をほめせやして養子にせんとて連歸る是五斗を義經方へ味方せぬ様人質がはりに連て歸る也女房關女は義理ある子の出世を悦び渡せし跡にて五斗に問はれて悔も事あり是ゆる三の切覆水再び元へ復らずと大公望の故事を用ひ離縁を悔めど聞入なく娘徳女の自害より關女も共

に死んとするを五斗推とめ今死する命を永らへ兄大三郎を取かへし來よと云付る關女鐵砲をひろひ取鎌倉武士は色好み筒と出かけて口藥のどの火ぶたの掛がねもはづゝ計の味みを見込みほんといはする二つ玉やはか氣遣ひ遊ばすなと出行が三の切也是迄は本にもあり淨瑠璃にも語り歌舞妓にもして誰もよく知りたる事乍大約三の口切のみにて二の切もしらぬ人多しよく五斗が樽にもたれて寝たる看板あり是二の切の容也扱四の口鶴が岡八幡へ武將賴朝社參にて供は本田近經也並木の松原に供人賑はし、關女は鐵砲を懷中し大三郎に逢はんと旅の婆にて鶴が岡社參と聞もし逢事もやと尋ねより供の奴に聞く所奴共は關女を口説んと營中の事をさもよく知りたる様に云然らば本田殿の身うちより大三郎といふ美少年は賴朝公の近習小姓を勤め居るかと問ふに居ると云連ていてあはせくれと云に迷惑して賴朝公の御氣にさはりとお手討成りしと偽る關女悲しんで義理ある我子を死しては立歸つても言譯なし我子の敵は賴朝也とて懷鐵砲取出して還御の興へどふと討是則空輿にて本田近經曲者を吟味するに關女をつれて突出すゆ

ゑ近經見るより扱と思ひ關女に繩かけ我預かり館へかへるが四の口也此場に察度の入りしなるべし四の切本田の館にて近經に獨の娘有り兼ては大三郎とめ合せ本田の跡目母親が娘にいふてよろこばせけふ久にて御前より大三郎をつれ歸ると噂半へ主近經大三郎を連立出大三郎に役付させる手始にかの鐵砲をうちたる女の詮議をさせんと言付る母も娘も共に勇み進む所へ今日の詮議の横目に梶原平次來つて兼て娘に執心なれば大三郎は若輩なれば此景高が詮議せんといつもの憎てい近經女を引出せと差圖にハツと近經懸り關女に繩かけ立出る關女は始終白狀せず空輿と聞しより狂氣と成りて夢現大三郎は白狀せんとしもとを取て庭に飛下り女を見れば義理の母關女も我子の無事な顔詠めて忽狂氣も雙方恟りしながらもうかつになのれぬ親子の案じ梶原は猶豫をとがめ近經は關女に向ひ大三郎の問狀には白狀せずば成まひとかせを掛たる手詰の場所討は不孝討ねば主君へ不忠となり當惑したるを近經は夫と悟つてヲ、それよ今日は御先祖義朝公の御忌日なれば拷問は重ねてと關女をば獄屋へ引かせ皆々引連入る跡に大三郎

は義理ある母何ゆる武將へ敵たいしぞ預り人は今の親何れを何れと分兼て涙に暮る奥の間より大三郎に暇を呉る着替調度の入たる葛籠持て都へ歸るべしと葛籠を置いて姉婢氣の毒さうに入るあとへ梶原出てせゝら笑ひ惡口云て立歸る大三郎は合點ゆかず葛籠ひらけば中には關女絶て久しき對面に我子の敵と思ひ詰鐵炮うちしと身の懺悔親子手に手を取合ふて歎きの内に奥より人音關女をもとの葛籠へ入れ涙を拭ふ其所へ近經夫婦娘も立出其葛籠を負ふて都へ歸り改めて東へ下らば其時こそはもとの親子此娘とも夫婦ぞと思と情にからまれて父とはたとへ敵方なりとも頼朝公の御味方再歸り來る迄は暫しの暇と泣々も葛籠背負ふて近經にわかれ出るが段切也四の切させる見所なければと全く口の鐵炮より御差留とは成たる也是ゆる本も三迄出全本甚稀なるもの也今娘景清の四の卷に三の口切を綴入れあり尤世界は源平なれども眞和泉の三郎後藤五斗兵衛を書たる物を景清と混する時は意合ず關女は何國へ行やらん覺束なき狂言とは成けり是も世に出ぬ時節なるべし

岩井風呂人殺の實説

大坂道頓堀太左衛門橋北詰岩井風呂と云女郎屋有主の名利兵衛と呼抱への白人四五人有中に富と云るおし立容貌よく相應に花數賣つて此家の立者なりしが爰に佐助と云者有是は岩井風呂女房の爲には甥にて泉州堺の者なりしが若氣の至り身もちあしく親一門に見限られ身を寄る方もなかりしを此利兵衛男氣の者なれば佐助にとくと異見を加へしかば佐助も寄る方なき難儀の身なれば以後は心を入替嗜み可申よし申により然らば我家へ來られよと呼寄召遣ひ同前にして匿ひ置けるが始の程は諸事精出してよかりしに燃杭に火の習ひいつとなく邪魔にさへならずばと見遁して末々は妻合せもすべしと丁簡付れば色情の習ひ終には我を忘れ口説の言上りに門中にて敲き合大聲上て互ひに言ひ争ひける事度々なれば聞人終に言ひ廣めて里中取々の沙汰と成れり是に依て富に馴染の客は皆々落ければ利兵衛夫婦大に困り内々にて意見すれど中々聞入ざる體ゆる持餘し所詮此儘おかばいかなる事や仕出さんと先佐助を堺へ戻しけれ共佐助は中々堺に立寄るべき方なければ其儘道頓堀邊に立歸り爰彼所に立寄居て何卒富に出合ていかにもせ

んと髮結の手間取抔して日を送り居ける扱また富には段々異見を加へければ合點して始終は詰らぬ事と思ひ廻し止る心も出來しとぞ然し世上の評判高くその上佐助が附廻す様子聞えければ迎も客はなく又いかなる事を仕出さんも覺束なく此上は何れへなりと仕代にやらんと相談最中なりしが佐助は立寄方もなきゆゑいきどほり居けるうへ佐助に思ひ切せんため今は富も心を改めもはや佐助が事は思ひ切しと手を廻しいはせければ佐助いよゝゝいきどほり何卒して富に出合諸共に死んと思ひ定めけれども岩井風呂には此事を恐れて最早京都へ登せしとて奥深く隠し置常の人にも逢さゝりしゆゑ徒に口を送りけれ共富はまだ何方へも仕代られず隠しある様子をしり佐助は出刃庖丁を手拭に包み隠し持頃は明和五年八月廿二日暮方過に岩井風呂へ來りければ利兵衛女房臺所に居ける故佐助庭に手をつかへ私自分此家へ參るべき筈は無御座候へども今にては頓と致方無之候ゆゑ今晚より京都へ登り申候夫に付恥かしき事に候得共何卒富に一寸逢度御情に御逢し下さるべしと願ひけるに女房大に立腹して夫利兵衛には我に縁ある其

方故義理を立たちよる方もなき身を世話して呼よせ置れしに恩を仇なる不始末奉公人に惡名を付終には内には置れぬ様に成しは皆其方故夫にまだ富に逢せ吳などゝはどの頬下て來りしと散々に罵りけれども只御尤申べき詞も無御座候へ共御情に富に逢せ下されとひたすら手をつかへ申ければ主利兵衛奥より立出女房を奥へやり佐助に云様何程我が富に逢たうても富は京へ登し爰には居ぬ早う歸れといひけれどもいや左様仰られても富はまだこなたにおりますどうぞ逢して下さりませと申ける時八方の燈し火ほの暗くなりしゆゑ佐助は顔を隠さん爲八方の下につくばひ居たり利兵衛は佐助をねめつけ聲あらゝげ此方には居ぬといふに無體の言ぶん逢せたうても居ぬわいやいと云つゝ立て八方の灯を搔立る所を下より佐助隠し持たる出刃を持て逢す事がならすんばかうじやと云様胸板へ深く突込しかば利兵衛たまらず其儘に倒れける内に居合す廻しの彌助といふ者ははと飛つく所を同じく突れて倒れふす時に武兵衛といふ出入の男表より來かゝりて此體を見て佐助が後より抱とめるを後さまに突ければ同じく胸をえたゝかにつか

れ息絶たり其間に利兵衛起上り庭へ飛おりとらへんとせしに佐助は早くも表へ走り出彼出入を我咽へ突

込けれども三人に手を負せ心轉動して咽の所々は疵だらけに成て大道をのたくり廻りて苦しみけり其内邊り近所より立寄その騒動いはん方なし扱御檢使も相濟佐助はその夜の曉方に死し利兵衛武兵衛にも手疵養生療治しけれど叶はずして利兵衛は翌日死し二人も養生叶はず死しにける芝居にて直に取組しは前編並木正三が傳に委しければ爰に略す宿無團七時雨傘と外題して今嘉永己酉年迄八十有二年になれど廢らず出て興行の度許よき狂言也さまで見所もなければ所謂素人好のよきと思はる世界は夏祭の團七堺の者なるゆる佐助を團七茂兵衛とし利兵衛を治助彌助を久七武兵衛を佐兵衛と呼かへ八月末より始し狂言なれど今に帷子單物にてする狂言を時雨の傘はいかいして賦しかいといぶかし今淨瑠璃にも愛想盡しの内を語れども卑陋にして聽れず予弘化四年末の春東都へ行たる跡京都にて此狂言を出し並木正三の役を西澤一鳳として國太郎三五郎狂言の筋を相談に來る所市川高麗藏中村梅花直々の役にて來る成田屋一鳳

身ぶり聲色にてせしよし番附東都へ送らる是らも一時の戯れなり(此番附の寫し略す)

女郎富再び情死の實說

扱又富はその明る月九月になりて京都へ仕代られ登りける則内野新地五番町龜長と云茶屋に來り勤しに何が評判ある女郎ゆゑおし立もよければ日々の常客絶る間なく二ヶ月程は全盛なりしが此界の習ひ翠帳紅閨に枕並べし妹眷もいつの間にかは隔つらんと例の常客も掃仕舞馴染の客もそれ／＼に出來たれ共縁の切めは錢のきれめ繁々通ふ跡は詰らぬだらけにて馴染の客の足が止ればまた出來又預らるゝなど兎や角して女郎は借錢拵へ客に無心いふて渡るが大體常也夫が中に蛭子屋某店の手代彼富に深く通ひしがある時富いふは其許樣繁々御通ひ下されかく馴染に相成嬉しく存候へば私命はそなた様へ差上居候何卒一所に死んで下されずやと云にかの手代商賣柄とて誰にもかくはいふぞとそこ／＼にあしらひ其夜は歸り又一兩日過て呼向へしに初の如く一所に死たい死でくれぬか兎角死たひ／＼と實心に云顔何となく物凄く色々欺して宿にかへりしが餘り恐しさに其後は頓

と通はざりけるか様に死神の付しもかれゆゑ非業に死せし四人の恨ならんか扱も初冬も過霜月頃になりしかば初入込の時に引かへひつしと淋しく成ぬ爰に一條千本西に帶屋喜七といふ有て頃は霜月上旬の事なりしが町内に振舞事有て他に參會す終日飲酒にもてなされ夜に入て歸るさ酒機嫌の若輩同志五番町へ立寄り銘々女郎を呼迎へける是因果の始り也かの富を呼むかへし喜七は卅歳に滿ざる美男なれば富殊の外悦び眞實を盡してもてなしける既に友達は打連歸らんと云に是非なく別れ歸りしかども富が實心忘れ難く翌日又彼處に行て富を呼迎へければ昨日より猶又面白く可愛がり近所の事なれば日々夜々に通ひ詰たり尤喜七に老母又妻子あれども打捨かく膠漆の中となれば朝毎に富風呂屋へ行も時刻を合せ置一所に入などその餘は推して知るべし然れども錢財限りありその上喜七内證もとより豊なるにもあらざれば今は諺の錢の切目と成りしかば富は様々工面して馴染の客はいふに及ばず一見客に迄無心を言ひ我あたまの挿物迄皆質物に入成だけ借錢拵明る年二月迄介抱して續けれども男も女郎も義理の借錢だらけに成り

今は死より外あらじと互ひに心を定めて郡が淵へ身を投相對死をぞしたりける爰に奇なるは其夜喜七富かの淵に走り付富の帶を半引明綿をぬき兩端へ石を拾ひ入是にて二人の身をぐる／＼巻にして其上喜七が褌にてしかと結びとめたり是二人一所に沈み浮上らぬ爲とぞ如此不工面なる形りゆゑ淵へはまるも思ふ儘にはなり難く岸の杭に額當り一寸餘打破り死し居たり是に依て檢使も隙入り一條町内年寄五人組その外過半かの所へ至り町内にるすとして残り居しは若き輩兩三人のみ也其中に布屋何某と云有是は喜七が朋友にして年も同輩にて至て親友なりしが此日夜に入れど町衆一人も歸り來らず既に夜半過る比にもなりしかば布や某炬燵に寄り掛り睡り居たる所夢共現ともなくふと面をあふむけ見れば顯然としてかの喜七立居たりその形色青ざめ眼釣り上り額に一寸餘の疵より鮮血を流し無言にて立居けり何某驚き其方は非業に死せしと聞しが無事に歸りしやと言けれ共半句も答へなくひよろ／＼とし表をさして出ると思へば夢さめぬ何某ふしぎに思ひとかくする内組頭屋根七といふ人歸れり何某落着を問ふに大體相濟候ゆ

る先しらせの爲我計り歸れりやがて皆々歸るべしと云何某又問ふ喜七が額に是々の疵無やと云に屋根七大に驚き我より先へ歸る人無に如何して知れりや其通りの疵ありと云に彼喜七が亡靈まざ／＼來る様子を語り初て身の毛いよ立しと也二人の死骸は六波羅野南無地藏と云へ打込れしかど親類より石碑を拵へ今北野下の森下の西側にありと予以前京都に遊びし頃は是を聞けり讚佛乗後編に書置たれど岩井風呂に因ある説なれば爰にしるす拾遺にのするお半長右衛門の前生お勘長三郎など作りもふくる程ならば岩井風呂の後日も雙紙ものに出そうなるもの也

慶子紅桔梗女團七の話

役者五雜俎拾遺に云七部の書より五部を出の中に往々女形の心得を書たる物多し古名人の女形姫君あるいは娘などの役をする時には先書拔をとつて能々熟覽して夫より書拔を消し成たけ詞を少くして勤ると云婦人の詞多きは愛を失ふとのたしなみ也年増の世話女房にても亭主の用を助けるを旨として詞多きは嫌ひしゆゑ適淨瑠璃にも軀山姥の八重桐廓話の場をしやべりと云傾城反魂香大門口の場のお宮物草太郎町盡しの段の葛城

是皆しやべりと唱へて其頃は珍らしかりし物也先の慶子所作を善くし口跡あざやかなりしより此しやべり役を歌舞妓に取立勤し也天和貞享の頃は西鶴文流等が演たるごとく男色大に流行して女色を今世の如く歎ざるゆゑ婦女は至て内端めにて有し物を男色廢してより婦人の勢廣大無邊と也今は總一體女のしやべりと成りて八重桐傾城もとお宮城遠山葛城山三女房皆それしやの果にて盛はとくに過て色氣捨たる役なれば心のまゝにしやべらせる也今は姫君でも娘御でも裏屋住の女房唄に負す劣すやべる事常と成り詞少きを馬鹿か病人の如くあしらふ時節なれば狂言の外題男哉女鳴神又男哉女將門と立役では珍らしからぬ女形にさせて謂は後家茶屋とて亭主のある青樓より流行しに倣ふ爰に今の慶子始市川十太郎弟子市川熊太郎と云三光となり松江とかへ三都を修行して功を經富十郎と大名を受繼同輩の女形は皆故人と成つて所謂無盡の流込をとり右に云男は有てなきがごとく女でなくては夜が明ぬと云時節ゆるゑ人氣にかなへり天保七申年予は八犬傳の著作すみて後暑中に思ひ付て女團七富十郎女一寸壽太郎にて夏祭浪花鑑の後日を仕組めり稿なつて

兩人に讀し所早速納まり七月上旬より北の新地芝居にて興行せり前は五節句の政圖を題とすえ跡先代萩のよせ物にて萩の染小袖槐の縫衣裳伊達姿吾妻寫繪切は一寸縞の媚容者戀には世話を焼鐵と釣船ならぬ土舟の三ぶが好に織替て紅色桔梗女團七仲居おかち富十郎大鳥嵯峨右衛門新九郎助松靱負延三郎玉島磯之丞權十郎伯人琴浦勇次郎魚仲買彌市歌十郎土舟三ぶお梶母お熊市藏お辰坂壽珍らしかりしか大入大繁昌しけり慶子はより何にても女の狂言にして仕度のぞみ發れり往古の女鉢木にても北條時頼記と外題していはば大切所作がゝり也近來江戸岩井半四郎の女清玄も隅田川花御所染と題しておやま江戸では若女形を云一通りより杜若は替りし造りをせず殊に器量よき女形に青坊主いがぐりをさせるが故狂言の善惡はいはずとも歡べし拾遺に云瑠璃熊谷のつくり拵と同事也いかに女を愛る世の中なりともそう度々見せる時は見おとりせらるべしと捨置けるが同九戌年の秋堀江市の側芝居にて女猿曳間諷を書同十亥年の春女五右衛門を著せども外題はけいせい濱の眞砂とせり都て女形座頭なれば鎌倉時代の尼將軍の勢ひ有て一座の役者も上べには屈伏すれど蔭では誣

者も多かりけり女と云狂言度々出るはうるさきゆる同年五月天滿天神奉納芝居に葉越廻月女熊坂二場を仕組て坂壽にさせ其後丑年東都へ行寅年歸りし所秋忠臣藏の世界と納り以前組太夫玉藍らと歌舞妓打交折士鑑堂島の段と記せし五行大字の床本一冊を見せ是に跡先を拵なばよからんと予に見せし事あり是は此場一段ものにて前後いかなる筋あるかわからず予前後を著編し置たるを出し天滿天神より鍋島船入橋を口として堂島貧家の場題に居矢當茂七に多見藏うどんや與三兵衛に工左衛門娘お梅に富十郎外題に義士の大石摺貞女のかな手本紅楓いろは文庫と賦し二度の清書平右衛門注進の場を書かへんと著作にかゝる慶子女由良之助をして見たき由責て止す此者に此病ひ有と仕かたなく望にまかせ先一力の場合原にて大文字の送り火などのうがちを趣向として書あたへぬ初日出て評を聞ばお石紫の羽織を着てめんない衛にて出るを女醫者也との見立尤なるかな原狂言綺語なればいかなる事も書れぬとにはあらねど菅原の丞相と由良之助ばかりは女にては筆立す魂なくては狂言になるべからずされども溫鈍屋の場評よくて相應に

たるなるべし

入けり其冬舞臺出勤差とめられ長く預となりし内見舞に行て狂言の咄に及ぶ予戯れに曰先の女團七より出たる趣向あり女髮結にて色男の茂兵衛我童か延三郎也せかれて逢さぬから正三の内へゆく正三女房瑠光にて正三るす中へ役者相談に來て思はくを女房に誂らへて歸る此内女房お富女髮結に髮を透せる事有て跡が髮すきの獨吟近所の子供がさらへる體文句あはせ意見になりすべて岩井ぶるをうつむけたらんにはおかしかるべしと云慶子笑つて夫もよからん杯はなせし事ありしに翌年泉州堺へ拂ひと成りけり予も一兩度見舞に行て戯れに云たる女團七の身のうへになりたる事を思ひ出書狀のはしに堺へと富は仕かへにやられけり乾く間もなき時雨傘と書送りし事も有けり慶子は常々儉約をなし俳優者流には似ず奢侈僭上はなきとおもへど歌舞妓道にて富十郎慶子といへば神とも佛とも敬ふべき名にて同じ中村にても慶子の中村と加賀屋の中村とは異なり梅玉歿前此道の老父たる故進めて野鹽が娘先慶子の孫老婆なりを養ひて大名を受繼其名によつて出藍の譽高く其名によつてかゝるとがめも蒙りたるは塞翁が馬とや云べきか實は其名は負

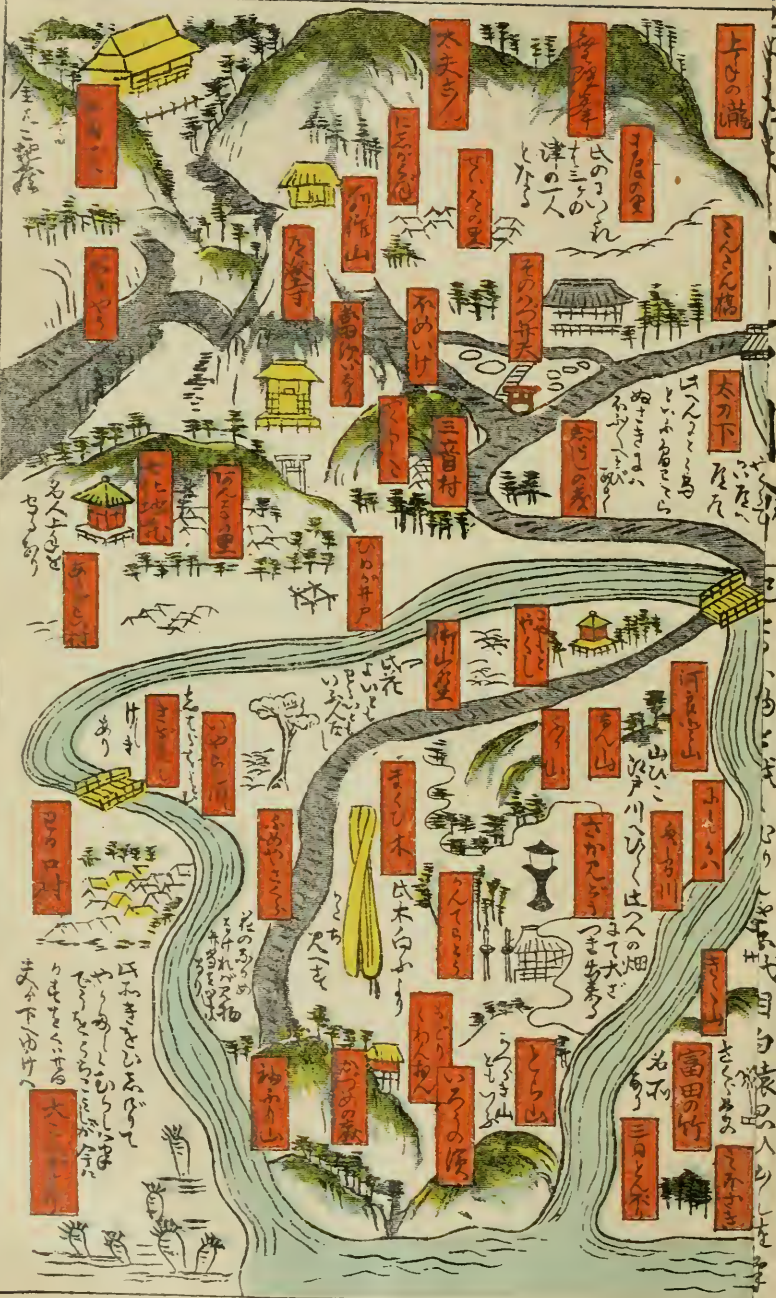
西澤文庫傳奇作書殘編下の巻

目次

- 一 歌舞妓道中圖繪
 - 一 故人役者舊跡鑑
 - 一 歌舞妓道中道しるべ
 - 一 忍ばずにて作者咄初の一話
 - 一 碁太平記白石噺の説
 - 一 脚色に筆拍子と云話
 - 一 筆拍子七草薺囃子の話
 - 一 花菖蒲いろは連歌の話
 - 一 同四十七段返しの段書
 - 一 市村家橘忠臣藏所作の事
 - 一 四季寫土佐書拙の文談
 - 一 男哉婦將門勢田の橋の文
 - 一 富本常盤津外題角力
 - 一 謠曲狂言釣狐尾花褥(結局)
- 凡十四條

立川談別馬戲編

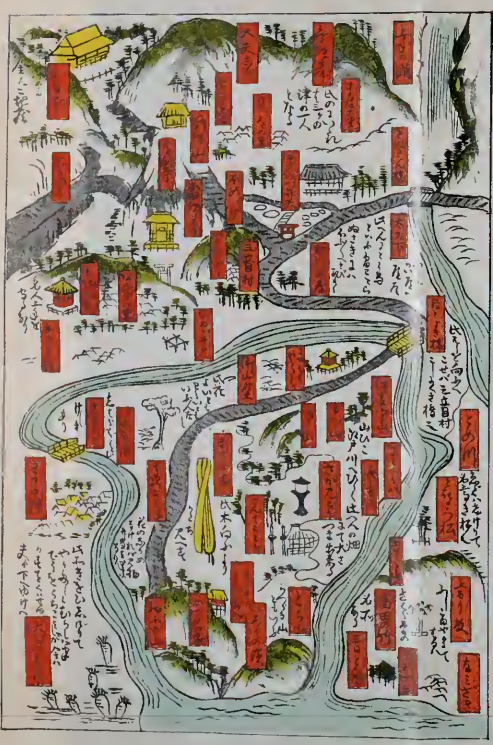
故人市川海老沢村常十郎のお子と有妓街を



立川談別樓馬戲繪
歌舞妓道中圖繪

喜多川月磨 圖畫

故人市川海老屋沢村宗ヤ郎のお子有妓御
記といふ物語を戯し居りしを不代目白猿思ひ出し陸き
し予が海老屋と贈りて有りきと云肆衆聖閣の常
座を補ひ桜木と花と咲せむとのあめと云



西澤
文庫傳奇作書殘編下の卷

西澤一鳳軒李叟著

故人役者舊跡鑑

抑歌舞妓の始りは天照大神天の石窟に入給ひ磐戸を
とちて幽居故に六合の内常闇となる時に猿女の君の
遠祖天の鈿女の命則手に茅纏の稍を指石窟の前に立
て巧に俳優す此時天照大神聞し召て宣いかんぞ天の
うすめのみこと斯のごとく噓樂するやとの給ひて則
いわ戸を少明これを窺し給ふ是ぞ歌舞妓の根元なり
年ふり代々おしうつりて永祿年中出雲の於國これを
まなびしより京都大阪に興行す今京都においては寛
永元きのへ子年中村勘三郎始同十一甲戌年市村羽左
衛門始萬治三庚子年森田勘彌始る是を三座大權現と
て芝居を守るに毎年霜月朔日顔見世の人事有左右に
名人の瀧上手の瀧の流れたえず無類の峯は惣藝頭の
山に並ぶ座頭の社といふは往古元祖市川團十郎才牛

上人こゝに俳優の神を安置す二世栢庭上人澤村訥子
を別當社職の始といふ○市川寺の寶物ちまた有中に
景清が車のかづら暫の太刀はおんてき退散の筒守
となり助六が鉢巻にあくたいの巻物外郎賣のせりふ
に錢こまがはだして逃る鬼もこはがる鐘馗の畫像關
羽が青龍刀祐經が對面の盃時宗が鐵条寺がけぬきは
忍びの者をあらはし大鷲文吾が大槌は義士のかいみ
と殘る伴左衛門が雲に稻妻鳴神上人の柄香爐五世口
上辭の入道はらの白猿に傳り愛敬の守を出す門下に
中車新車の二の車あり何れも女のひける車にて音は
世界に五郎／＼とひいき今に其名のこる本尊成田屋
不動明王あゝつがもない靈驗鼻高にまします○澤村
の訥子寺は助高や高助の建立なり寶物には平相國清
盛の扇油賣の柄杓齋藤道三よりの傳來安倍の清明が
算木梅の由兵衛が頭巾に鉦をおろし重忠が双六盤に
四三をさとする衛の紙衣は祐成が大磯通ひ名産はこぶ
に山椒ハテいふてもいはいでもの事ハレやくたいも
なまゑひの鍔刀は由良の助が名作忠臣藏のはじめ也
○坂東の舊跡は薪水寺に大岸宮内が忠臣こがねの短
冊あり日本武者之助が鶴の丸の鰐は代々ゆづりのき

ん鐵也○また坂東の平久寺に獨銀のごときもん有り朝いな○三郎の古跡夫より別れて坂東の三大寺は是業法師浪速より始て下り森田に頼朝堂を安置す又市村に長七唱の舊跡小栗太郎が茶臼梅津のかもん宿長作が晒布名所今にのこる○松本の男女川に鬼王新左衛門の舊跡それより道五粒ほど行て佐々木嚴流寺の元祖後に市川寺へ入院して四世木場の親玉上人といふ景清牢破りの尊像岩窟の五郎藏五大三郎の古跡今の世まで名高し○それより松本の錦江法師の開基ふくせい寺といふ有難波のかしくといふ女に教化ありし所幡隨長兵衛といふ男達の住しあと有藪鷺を友として百文が米をもとめて白水を流せし所高麗屋島とも云○河津俣野が角力の跡は大谷より十町程ゆきて魚らくらかんの堂あり○坂田のさんきやうに髭の伊久の塚あり△中島の天幸寺に時平の目玉あり甚だ光る△道外方の名所は和光院に辻法印の古跡諸藝指南所名物かこの餅今にあり○中村の秀鶴寺は縞の財布のしま黄金五十兩の金佛にて定くらうほざんとも申なり又大日坊といふあく僧煩惱の迷ひに靈魂忍ぶ賣と顯はれ影の身だといふは是より始る○四紅葉の名

所は市川のながれ瀧の谷のほとりにいなり九藏の社あり又やねこぞふといふ團三郎の古跡なり○市川寺六世三升はつし廿一歳にて座頭となる横川の覺範の像相摸次郎時ゆき日本廻國の笑佛あり○嵐山眠獅上人は吾妻へ下り白猿にたいし叶升の紋を立る扇の手より五右衛門のあたり六歌仙の里逆櫓の松蔭の細道名所多し淨心寺に塚あり石面に辭世をのこす「東風にちるなにはの梅に鶯のほうほけ經の聲のみぞきく○驪の團藏寺は元祖より二世市紅上人の開基猪の早太が真向の如來大伴黒主やつしの像をのこす三世市紅忠臣藏を立是より七役始る知盛が長刀俊寛が鳥物語の舊跡あり○抑太夫山おやま寺は開基路考大師瀬川の水上において百万遍の所作をくり石橋を渡り獅子の座に直り給ひし始なり無間の手水鉢に鐘をなぞらへ柄杓を持て打給ふに忽黄金の花ふりける始なり八百屋お七の古跡あり其のち仙魚禪尼王子稻荷のかんとくを得て一子を育成長して二世路考上人はなり中村において田舎娘の踊りを始る業平吾妻下りの御影をのこす○芳澤のあやめの名所に一鳳國師の中村の慶子禪師道成寺を建立してより末世の衆生に是を

のこす其外かぶき堂に此人々の名所古跡あまたあり
○松本の里より岩井の水わき出て杜若の名所あり三
浦のあげ巻三ヶ月お仙が古跡世の人しる所なり○夫
より小佐川に巨撰山じがい寺月さよの里おのえが古
跡をのこす役者の舊跡其數多ければ其一つ二つをし
るす小紙にあらはす事をえざれば後編に述るといふ
歌舞妓道中道しるべ

まづはやし町よりむかうに見ゆる山はばんたち山と
てめでたき山なりこなたに千載山とて若松のはやし
枝をならべ白きは翁草黒きは尉とて是をさんば草と
云鼓が瀧の流れとうくたらしとしからす飛の岩鈴
のみねの松風壽をうたふ名所なり扱はやしまちの名
所音曲道中淨瑠璃の名所表の繪圖にくわしければ爰
にもらす○扱又こなたに三味せん堀くわりん堂杵屋
の宿是より音曲街道の道筋をしるす△とこ山の麓に
もとりの観音堂あり後に巻立さうけまさかりつゝ
こみ茶釜大銀杏ゑんでん百日しつちうこうさい摺は
がし島田勝山三兵庫忍ぶ鬚三づと當世はぶたい様々
の草木しげる是をかづらき山とも申なり△幕ひ木と
いふ木のもと道具直し岩臺おどり臺切穴まがきの

名所あり諸鳥のこゑトヒヨ／＼となく闇の夜の黒ま
く日覆の月にだんまりの顔見世又紅ひの花をちらせ
ば三角の雪を降らす四季折々の詠は作者のはらより
出たり爰に後見堂といふありてさゆを汲差出しの如
來とて日暮よりかん寺に安置す本地は燭臺せいし苦
薩靈驗新にして夜に入れば龍燈をあぐる事晝の如し
○歌舞妓出世かい道はまづ稻荷町より序開の門に入
りて花道にかへり此中程に大音寺といふありこゝを
申あげ村といふ夫より板おろしの關をこしおした山
荒しやば不動の堂ありその上をおかしら山ともいふ
口上の披露役者かへ名の次第をよみし處なり是を過
てくらやみ峠杉たち宙返りといへる嶮岨を越してぎ
ばの妙見へまいりそれより三階の峯に登る上り口に
女人禁制の札あり又猿がへり跡がへりといふ難所を
修行して合中の立山に至りやがて評ばんの辻に出る
爰に身上石とて百兩よりだん／＼おもき石いくらも
有若き役者此石をもちて身分の力をまし出精して三
枚目の橋へ出ると白猿の道の記にもあり○役者建物
子供は親船の地藏堂よりおどりそめ若君の宮千歳山
をこへ元服寺爰にこえがわりの彌陀といふあり信心

して程なく評判の辻へいで三枚目の橋にいたる○三枚目の橋にかゝれば左の方にひる木といふ大木あり枝葉せいかいにかんばしく日の出の松は次第にさかへて重年寺の稻荷より座頭の社へ近道あり又和實の里男達の大木戸敵やくしの堂より登る道もあり脇道に赴く時は功者の原へ出る此所月雪の詠ばかりにて花はなし又舊功村へかゝれば駄味噌の原へ出る事あり此所狼出て後より舌を出して人をくふ油斷すべからず是より下の道へ迷へばかたはらいたき所に高慢寺といふ寺あり俗に天狗堂と云夫よりめいつ田といふたんばを行過てよほどきた山寺あり本尊ねいりん觀音下り坂にはなぶられ地藏とんち木といふおかしな大木ありおひ込の松は腰をかゝめおべつか山にはうそつき彌太郎の城跡あり是より東西を失ふ事あれば間ぬけの里とていやみ絞りを染いだす所にうろたへゆけばへんしん寺といふあり是は昔鍋かむりへつしん七字の曼陀羅をのこす所むちや川の流れにはひつ天寺といふ寺あり此所のかね久しくたいてんして人々に金のくにうをたのむといへどもちう夜に限らずあまたの怨靈來りて恐ろし爰に出てすかまた川のは

とりに來り滅法海へ帆をかける恐るべし慎べし○太夫山おやま寺は本尊金箱地藏と申なり此道筋は色子の濱といふより若衆潟袖ふる山に登り小詰の森にさしかゝり花笠の社は正月元日翁ぞめおどりを行ふ事吉例なりそれより腰元の藥師堂へゆく此道人の詠もなくはかどらずやうくまだる木橋へ來り是を越て三立目村へいでたち下姫が井戸ぬれ事の里愛敬稻荷を信心して開運出世を願ひ檐下にその名をあげる七化の地藏は大入村にあり有がたい野といふ原是はおどりの判官馬具を乗りし所といふ同じく譽池にはその筈の辨財天を安置す世話琴の里自藝房といふは時代と世話を鶏合ありし所なり道成寺を過て石橋を渡り所作山に登りお山寺にいたる○もしまだるき橋をふみちがへはづかしの森へ出ればいやらし川きざ橋を渡り淋しい野へ出る此所に春は花さく事あれどもよいとも惡ひとはいはず此名をうにや櫻といふなり夫よりわる口村にかゝれば木生ひ茂りてやかましき風吹昔は半疊をうちこみしが今は糟をくはせる所多し下の道へゆけば大根畠あまたあり是より田舎道にふみまよへば立身出世おそし信心をこたるべから

す衆星閣梓

忍ばずにて作者咄初の話

曩に云戲場世界定すむと建作二枚目三枚目と打寄銘銘場割をして誰それはいくつ目誰はいくつ目と仕組場を定る是を咄しぞめとて建作りの内にて定る事定法なれど狭き家内にて咄しぞめにもあらずと靜なる料理屋へ行閑靜なる一間をかりて狂言の筋を通し詠らへを言などする事江戸にてはまゝある事なり以前鶴屋南北始驛倭藏今の祖父也槌井兵七松井幸三勝井源八などを連て上野より忍ばず辨財天の境内には茶店料理屋軒を並べて座敷へ通れば池の上に建出したれば閑談にはよき場所なれば爰に咄しぞめ然るべしと打揃ひ行く酒飯あつらへ出來る間に仕組を咄し合ふに此頃の役者は坂東三津五郎松本幸四郎岩井半四郎等盛んの頃にて南北の世話狂言時の人氣に叶ひしゆゑ幸四郎の業惡にて亭主三津五郎の前にて杜若の女房を強淫するなど度々出すゆゑ各新奇の工夫に及び膝突合せて小聲になり國俊とか村政の刀はどこで盗んだどうして夫を質にいれた夫こそ大殿を毒殺して近習誰それの科にぬり用金を盗んで女郎買に遣ひなくし夫

から寶の刀を奪ひ取贖物を質に入誠の刀はどこそこへ埋めて置いてあの女房はサアあの噂をふすくり出して二度のつとめにかせがせる是で又一もと手といは亭主をばらして隨德寺など酒のみながら後は高らかに咄するゆゑ給仕の女は是を聞勝手へ立て手を叩けども自由に來らずやゝ暫し有て次の間より襖を細目に押明て此場の人數を窺あり又立替つて立聞する有り様子有げに覺ゆれど座敷の者はこゝろ付す女共が役者と心得立がわりて覗きに來ると俄に建物役者の氣どりになつたり所體を造りて厭氣をすれど誰も座敷へ來るものなく筋もあら増通つたれば歸つて翌より筆をとらんと先勘定を聞べしと手をうてば一人の大男此座敷へ來て何か言かけふと南北の顔を詠めて扱は此御人數は皆おまへの御仲間でござりますかと始て合點のいたる様子こちらは何の氣も付す南北も思ひ出せばまんざらしらぬ顔でもなくアイけふは例の狂言がはり咄しぞめに來ましたがお前は爰の御亭主かと尋にかの者迷惑していや此茶店は女主我等は役を勤る者此頃上州路より名うての盜賊五七人江戸へ入込みしと觸有て諸所を吟味の最中へけふ此内

の客人は銘々屈竟の男にて酒がいはずか悪事のもくろみ世間かまはず咄すゆゑ噂のあるお尋者の盜賊に相違ないと是の内より知らせに依て組のものと共手配りして爰で捕うか出る所をいち／＼組で捕うかと最前より仲間の評定先一通り尋ねて見んと通つた我等は下地より顔しり合うた芝居のお作者鶴屋南北殿なれば扱は芝居の咄かと今と云今心付き間違とは言ひながら盜賊でもない各にいち／＼繩をかけんものと合圖をきめしも鵜の嘴扱々ひあひな事かなと汗ぬぐひつゝ詫るにぞこなたは始て心付成程それで一間よりかわり／＼の足音は役方の衆の見に來たのか扱もあやうき間違ひと始のみたる酒もさめ今一銚子と酒とりよせその男とも呑かはし果は笑うて歸りしとぞ世にあやしき業とて狂言作り程怪しき業も有まじ假初にも大國の大名を亡し十人廿人の人は立處に殺し金銀を自由にし有とあらゆる惡事を書も勸善懲惡の爲なればこそ免してもあれ君子の爲には耻べき業也其内同じ戯場の作にも南北が仕組を眞世話と云てよく當時の人情に合ひしが野鄙なる事甚しく見物後宿へ歸つて主親に對しては話し難き事まゝあり詞は卑

く付るとも趣向はいつも高情に作すべき物なり因みに云近世東都より出板せし江戸名所の畫工長谷川氏は水戸橋の景色を摹寫せんとして鰻屋に行て座敷先より庭に下り懷中の紙筆取出し荒増を寫し取ゆる／＼と酒飯したゝめ宿に歸り清書にかゝれども今少し見殘したる景色あれば日數十日計も立て又右の鰻屋へ行猶も美景を寫せる内次の間より役人來つて有無をいはず長谷川氏を召捕けり長谷川氏大に驚き何故あつて繩かくるぞ身に繩かゝる覺なし子細聞んと云ければかの役人の曰其方事先日此内へ來て此傍の勝手を見届け其夜何某の方へ盜賊に入たるべし翌日種種と詮議せし處其畫一人の客有て川邊に下り立くわしくも忍び入べき所を見届て歸りし由此家の者の申により外に思ひ當の盜賊もなく汝が業に極まつたり重ねて參らば知らすべしと待もふけたるけふの今我と名乗つて來たるも同前今更陳するとして遁しはせじと高聲に言つたり思ひもよらぬ濡衣に長谷川大に迷惑して我は中々盜賊など働きし覺なし雪旦と云畫工にて此程東都名所圖會出板に付諸所の美景を寫すため懷に紙筆を用意しお茶の水より水戸橋此邊の圖を

書んとて此程爰へ來たれ共一應にては盡す事あたはず夫故猶も眞寫を圖せんと今日また來たつたり此事更に僞りあらず此近邊にて誰彼は我風流の朋友なり爰へ呼寄尋ぬべしと懷中の畫圖を改めさせ委敷言譯せしにより扱は盜賊にてはなかりしかと漸に明りたり無難に繩をゆるされしが世に間違も多しと雖是等は意外の間違なり溪齋英泉畫工一筆庵の主人存生の内子に咄されたり曩に云狂言作者の話初によく似かゝりし一笑話なれば思ひ出るにまかせ爰に誌す風雅の道は是に限らず聞えのあしき事多かり予幼き頃の狂詠に

風流は實に道らくの司なれ

水雞に朝寢鹿に夜更し

英泉老人にはなし笑ひし事あり此人も去申の七月故人となられむかしがたりとはなりけらし

基太平記白石嘶の説

安永九庚子年の春白石嘶は江戸淨瑠璃にて興行なる其時の作者連名

第一 一堂上地下の主従は繩目に引るゝ大内の鶏合

紀 上 太 郎

第二 仇と誠の朋友は義心に別るゝ一國の首塚

容 楊 黛

第三 お主と家來の妹脊は相圖に隠るゝ名鏡の奇

特 焉 鳥 旭

第四 孝と實義の伯父姪は愁ひに亂るゝ血筋の植

付 紀 上 太 郎

第五 娑婆と冥途の智舅は餘所に見らるゝ一樹の

宿賃 紀 上 太 郎

第六 江戸と田舎の姉妹は我身に賣るゝ軍用の品

玉 鳥 亭 焉 馬

第七 通と野暮との客と客は異見にしらるゝ曾我

物語 鳥 亭 焉 馬

第八 白と黒との敵味方は位牌に紛るゝ幻術の仇

討 三 津 環

第九 道行 いはぬ色きぬ

紀 上 太 郎

第十 色と情の娘と下女は智略にもつるゝ井出の

山吹 紀 上 太 郎

第十一 仁と禮との南北朝は武威顯るゝ和睦の勝鬨

紀 上 太 郎

名代薩摩屋小平太座元豊竹新太夫板元春松軒西宮新

六于時天保十三壬寅年三月予東都より歸らんとせし
時市川海老藏木挽町河原崎座にて詠らへにより彼地
の名残の作として此白石嘶と尾上岩藤草履打とを一
狂言に混せよと云依て世界を奥州秀衡の役後と立志
賀團七を劔澤團七とし百姓與茂作は前の名杉本甚内
なり賀谷五郎の本名を根の井の小彌太宇治の常悅誠
は清水の冠者義高にて駿河の清水にて成長し父義仲
宇治川の武名にかたどり宇治の常悅と云二つめ江戶
は中通り
にて仕舞
森常悅海老藏
谷五郎九藏
本行にては明神の森すんで田植は次なれ
ど轉じるに仕組ありて道具かわつて逆井村段切のノ
リ南北朝かわつて伊達の大木戸さしかため奥州駒に
鞭打て龜割坂に駈登り遠く逆るを遠矢に射立近く勇
を蹄にかけ
四天王寺の東門に陣
所なかまへと云所
など有て段切まくを引く
と直に醫者毒藥を岩藤へ渡さんとの出有て這入る此
幕切落して鎌倉清水お先揃へて花やかかの唄にて
岩藤海老藏
尾上榮三郎
行列早拵總出にて此跡へ紫若お初にて出て
玄なへ打となり一件這入る順禮歌にて忍ぶ菊治郎大姫
出て淺草の身賣の筋海老藏拵へ抱へて連立這入る
跡姫君のお立皆々早替りにて出て岩藤いつものお刀

を穢し升たの幕是本ま次草履打より道具かわつて常
悅團ひにて茶を立る湯氣にて謀反露顯を考へ大勢と
の立有て道具替つて尾上の部屋より門外烏啼仕返し
迄にて幕次まく吉原仲の町秋夜八代目鞘當の出に成り
伊平次九藏中にわけいり買論の仕舞は天水桶にて月
を取る兩人切てかゝる千代能の古歌にてさばく道具
かわつて宮城野の部屋出語にて宮城野榮三郎曾我物語
道具替つて大門口にて姉妹敵討にて脚色成れり名題
は

當近江の舊跡に残桃青塚
名陸奥の名所に殘芭蕉辻
口故擇新清水俳席の榮
前句の趣向に寄武家草履の返報
附句の旨案は寄農家泥土の怨
結題の仇討しかやわき嬉
女の手爾を葉に能も切たり切字
の働きた晴なるかな忠孝の其
感吟は天下に未世に輝く秀逸の
鏡山

岩藤浪白石

懷紙表裏四番續

東都にて二日にすべき狂言も一日に縮る狂言は添削

によつて屈伸自由なるものなり名題役者心の合ふ時は二三日の稽古にても早く塊る物とゑるべし

脚色に筆拍子と云語附七章薙離の話

我著作道に筆拍子と云るは俳諧の歌仙或は百韻の席にて句者の銘々乗りが來て執筆いまだ前句を認めざるうち次韻附が如く執筆書と吟じるにおはるゝばかり面白き迄に句の附くあり狂言道にてすらゝとせりふ付認る内次の詞並ぶ是を筆拍子と云又少しの事心にかゝり早く書上んと心ばかりいらちて書ても書ても讀下す時に語路の運びあしく詞二重になりて行ては歸りゝして筆のゑぶる事ありか様の時には筆をとらず快情の日は近き野邊を追遙し雨中なれば青樓柏戸に行て飲食入湯などして心を慰め而して後筆をとれば忽成る筆たつ時には思ひもかけぬ趣向うかみてさまで見所なき場も面白くなり詰らぬ役と思ひこみしもよき役となり俄に役者を取かへて端役を立物にさせる事あり是らを筆拍子と唱へること也天保十亥の春角の芝居にて新狂言けいせい濱真砂序切南禪寺の山門の場は傾城石川屋真砂路に慶子女順禮誠は淀町御前に瑠光金門五山桐並木五の山門の如く立

役と女形とかわりたる趣向にて禪離子にて舞臺一面耀上となるを舊冬書つかはし三つ目より末は芝叟の長話瘤の一條を書居たる所へ慶子戯れて此山門の内へチヨボを入れよと云送りぬ原より歌舞妓仕立に書あるを俄にチヨボを書入るはいと心易き様にて容易に筆は走らぬものなり脚色のト書役者いろ／＼の仕草を云なりをチヨボにていはせるなれば役者には仕よく文談跡より書入る時淨瑠璃とはだゝに成りて語りにくゝ聞苦しきものなりよつてチヨボを入んと思ふ時は先の書上たるせりふを捨て改めチヨボ入の心に書時は意一變していひかけのせりふなど自由につかへ返つておかしき文談の出るものなり其時瘤の仕組を捨てて急作に書かへて遣はす其文談に所謂チヨボ駒太夫ぶしなり「九重の櫻に匂ふ山門の薨も花に埋もれて霞たなびく夕間暮南禪寺につく入相の枕にあらぬ檻に身を敬て聞すまし香爐峯の雪ならぬ簾を蒔繪の煙草盆よせてくゆらす煙りさへげに諺に傾城の晝寝ぬ程に思ひ詰願ひ有氣の獨りごとトかすかに本釣がね暮六つを打櫻ちら／＼ちらす上るりの合は床と離子の打合せ合方禪のつとめ

一富十郎春の詠めを價千金とはさもしいたとへ此石川屋真砂路が爲には詞にも言ひ盡されず日も山の端

に傾て暮の櫻も一入にハテ麗な詠じやなア略右思ひよりなき枕詞さへ出る時はすらくつゝくものなり此文を書しは正月九日の夜にて雪夥しく降りやがて夜明放れたれば難波慶子の方へ此正本を送りやる手紙は例の戯れ文章尤正本仕立にして

造り物三間の間鐵眼寺山門の二重目高欄付右山門の兩脇落間にて一面に枯木の梢一面の雪もち屋根雪降りの體前蹴込み霞にて右椽先に富十郎寢間着丹前前に否身箱を置書拔をしらべある體木魚入禪の勤の中へ法華拍子木題目太鼓を打交道具納る

一富十郎春の座を女形座頭とはかわつた趣向早初日も近付て日にくふへる我詠らへはて心せわしい事じやなア

ト否身箱にもたれせりふをくる此時トヒヨにて雁一羽口に詠らへの書入をくわへて高欄の前に下がるをきつと見て

ハテ心得ぬ此雁金かの蘇武ならで誰か玉章を傳へしぞト取て見えてム、こりや是きのふ日暮に西澤へ遣はしたる詠らへの序切の上るり此雪の夜もいとはずに早出来しかゝ、是でよしさり乍今つよひ者がち

のより合芝居此せり上へ若手の銘々我もくつと出ようといふが又立腹かはしらねども追々に書入させあの西澤を戯れに書よわらさいで置べきか

ト立上るチヨンくつにて鳴物せわしく雪をふらせ段々と此山門をせり上る右山門の石壇のもとに西澤李叟髭ぼうくと延し髭をいがめ蝙蝠羽織にて机をひかへ手あぶりをかへ乍硯の筆にて短冊を書居る體鳴物にて道具残らずせり上げ宜敷納る

一李叟西澤や濱の役者はいちるとも世に狂言の種は盡まじ

一富ヤ、なんと

ト雙方顔見合せ上より詠らへの書付をエイとほうる宙につかんで

一李こりや又外の詠か

一富筆入れ升う

ト雙方こなし宜しく幕

此戯れ書を送りし處慶子直に表具をさせ晝後角の芝居稽古場の見付へ此文をかけ一座に見せて大笑ひをせし事あり右筆拍子の因に云同十二丑の春中の芝居

にてけいせい楊柳櫻に納りしが當時若手役者には役仕足らず三つ目に書入の新場一幕を加ふる冬のうちは脚色にもかゝらで正月二日より筆をとるに島原の福升屋と云揚屋にて入智門兵衛誠は木津關兵衛中村芝翫けいせい七草誠は關兵衛女房中村富十郎廓の門番喜平治に淺尾工左衛門おかしみは友三文五郎蘭九郎にさせて門番の親父全盛の七草に戀煩らひと見せ

誠は親子の名乗りになる

小栗の門番蝶す兵衛による

親仁は七草の殘

黨にて夫關兵衛とは仇敵なり依て愷氣に事よせ關兵衛の手にかゝり本心を明すと云場なり芝居よりは急使度々來てうるさき故出來たるだけの草稿をわたせば直に書抜にかゝり後にはいかなる役になるか知ずに稽古にかゝれり結局二三分通を殘して先は早稽古かたまり催促する事噪し六日夕方幕切になつて趣向に盡芝翫に幕を切らす工夫に渡る催促の人數四五人狂言待居て心せはしく書居る最中隣家には早齋を囃す音聞ゆるふと是に思ひよりて鬼丸慶子は手負なり依て詞に土は土水は水と今ぞ五行に歸す時との筆拍子出たり元より名に呼ぶ七草の鈴な鈴しろ佛の座遠どの土地へ歸參の賜渡らぬ先にその實をと敵役のか

かる杯地口よりせりふ續き組抄子火箸にて立廻つておめでたう存升と芝翫の關兵衛が幕となり持せかへすと即座に書拔翌日粥を祝ふ迄に稽古はすつぱり塊りけり是等原よりの腹稿ならず不意に出て不意に成る是則筆拍子なり原より一時の戲墨なれども拍子に乘らでは筆立ずあやしき業もあるもの也

花菖蒲いろは連歌の話

此夏東都にて葺屋町の芝居より好まれて義臣傳の新作にかゝり江戸にていまだ取扱はず珍らしき狂言のみ類聚して勘平の萱野村は廓景色雪の茶湯を題とすえ勘平家橘お輕菊次郎言號お組しうか小寺十内關三早野三左衛門歌右衛門にて脚色し天河屋の場は馬琴の小説稚枝の鳩より潤色して田舎娘お淋菊次郎にて道中の雲助共に手ごめに逢ひ難儀の所を定九郎九藏にて是を助け闇夜なれば顔も見とめず契りを結びて小柄をわたす此儘物わかれせしを五まくめに仕こみ後天河屋下女お淋と云は田舎娘なり住吉三文字屋の場をいつもの一力と見て斧定九郎は山名京攝にする藥師寺也の取立にて堺屋敷の留主居と成り天河屋の女房お園かうに心をかけ親了竹菊四郎をこまづけいろ／＼にか

せをかけ義松を人質にとりお園にせまるお園是非なく操を破る約束なれり下女のりん是をきゝお園に操を破らさじと闇を幸ひに定九郎と寐るお園はしらす涙ながらに中二階へ上らんとする所へ天河屋義平断伊丹屋に振舞有て下男に送られ三文字屋の妻子と連立歸らんと心にて提灯ともさせ内へ這入る此物音に中二階はいもうして見越の松より定九郎は下りる義平は提灯の明りにてお園のしどけなきを見てとがむ此時エイト定九郎は小柄を打義平消たる提灯を捨て小柄を取上げハテおつうな風が吹たわえと是口幕なり天河屋いろゝ狂言あつてといは女房を離縁する定九郎連かへつて了竹の内にて床へいるゝお園夫の謎をとき播摩渇の香爐を取かへして定九郎を切害す下女のりん自害して人殺の科をあびる義平かけ付て小柄を見せお淋が以前言かはせしは定九郎也と筋わかり縫之助石堂家へ寶を持參し本地にかへると言が幕以上予が著編なり此時作者まねき一枚出し看板は書六枚より餘計に出さぬを江戸の定めとするに書看板十二枚出し段書四十七段返へしと印せり看板に偽りあるは江戸の戯場の習ひながら餘り仰々敷け

れば名題段書を爰にしるす

同四十七段返しの段書

せいこうぎやうけんいん精忠義士銘々傳今まで洩れたる傳をあげて拙なき筆に燕子花しやうかうとき趣向も時のはなの色に似たりやにたり

はなあやの花菖れんがいろは連歌

假名手本の字數にあてゝ四十七段返しに仕候

い 賤しからぬ築山の鳥
ろ 樓閣のうへは霞の花の雲

諸侯營中に參衆のだん和歌を吟じて憤りを發するのだん

は はなに恨の春の山風
に にくまるゝ鳥の羽音かしましく

奉幣使へ猿樂を饗應のだん執權威を奮つて拜膳を碎くの段

ほ 佛なき世になど生るらん
へ へつらはぬ社武士の習ひかや

再び師直高貞を譽るのだん鹽谷判官切腹のだん

と ともに住んといひし山里
ち 契り置言のは結ぶ草の庵

諸士本國を離散すのだん顔世御前佛門に入るのだん

り 龍の腮の玉のますらを
ぬ 抜ばぬけ是ぞ日本の要石

大星力彌父母に愛敬を盡すのだん由良之助諸士の心中を試るのだん

る 瑠璃の世界の家づとにせよ
をしむべき岩木の枝を折切て

早野三左衛門倅に
勸平義を勤るの
切腹を依て
双に臥すのだん

わ 涉ればぬるむ春の川水
か 風匂ふ山本寒く梅咲て

竹森喜太八鳴海
宿に難に逢の
大驚文吾師直が
館を窺ふのだん

よ よる手にさわるさゝ蟹の糸
た たまきの晝くる事のならざれば

貞女おりえ計ら
夫に廻り合ふの
矢間重太郎盜賊の
汚名を受けるの
段

れ 連理の枝に月の傾く
そ 染つくせ紅葉むらごのかた時雨

小浪松が枝を切て
貞操をあらはすの
平右衛門が妻身を
賣て夫をすくふの
段

つ 罪も報ひもさもあらばあれ
ね 寝ぬ夜半に霜の劔のさやま風

下部備兵衛主を
殺さんお謀るの
斧定九郎お園に
戀慕するのだん

な 詠にあはぬ月の長閑さ
ら らうたけき文よむ娘かしづきて

茶道三才義士の
勇氣を感じるの
おらんの方師直を
諫言するのだん

む 昔床しき人の面影
う 烏羽玉の黒髪山の秋の霜

岡野利太夫翠
引手に繪畫を與へ
るの段
老母唯七が柔弱を
せむるのだん

の 井の端に咲櫻一もと
の 長閑さや笈の水のあふれきて

義平女房敵に
操をやぶるの
義策載れて
天井に落書の
だん

わ 萩のうは風波の立ころ
く 雲は雪月は氷と見ゆるかな

寺岡平右衛門
刀を求めんと願
だん
鹽谷壹岐守
出立を祝すのだん

や 山の梢の秋しらぬ色
ま 松のはに馴る時雨の晴やらで

丁稚伊吾浮橋へ
聖書を願るの
小寺十内密書を
奪かへすのだん

け 烟りもしめる五月雨の空
ふ 降る雨もさのみはもらぬ松の影

佐藤與茂七おすはと
堅川甚平雨舎して
妻に逢ふのだん

こ 木の葉隠れに秋の澤水
え えもしれぬ小草花さく山ちかな

種が島六藏等
傾城浮橋縫の
跡をしたふのだん

て てる程凄き冬の夜の月
あ 足曳の山に臥猪の影見えて

近藤源四郎主の
用金な奪の
獵師角兵衛過て
旅人を害するの
段

さ 定かに見えぬ晝の灯火
き 炙すゆる皮切ひとり苦しくて

師直問者京都へ
登するの
斧九大夫敵方へ
内通するのだん

ゆ 行水遠く梅匂ふ里

め 惠ある春の朝たの日影かな

み 見る目に曇る長月の空

し 白露のとはれぬ袖は恨みにて

る 酔ひさまさんと結ぶ川水

ひ 蛸の啼聲宿す峯の松

も 物思ふ夜半に啼時鳥

せ 瀬も淵もかはるが人の習ひまで

す 末の世迄もかはるたち花

綺語堂西澤一鳳作

狂言堂櫻田治助述

市村家橘忠臣藏所作の事

弘化四丁未年三月大切に市村羽左衛門忠臣藏十一段
十一役の所作事を勤けり京攝にては歡ばぬものなれ
ど餘り珍らしければ淨瑠璃の文談をしるす出雲が筆
の操を歌舞妓の所作に名題もその儘假名手本忠臣藏
作者櫻田治助大序直義常盤津文八雲たつ出雲が筆の

天河屋義平
實義を顯はすのだ

千崎彌五郎謀て
敵地に忍び入るの
だん

野間屋久兵衛
孝子を憐むのだん
下女おりん主に
かわつて身を捨る
のだん

太田了竹惡事に
組し切せらるゝ
のだん

寺井玄庭東行の
供に望むのだん

早野が妻お組
剃髪染衣のだん
遊女かる稚子を抱て
茅屋にたよるの段

本望を達して諸士
凱歌をあぐるの段

操を歌舞妓の所作に假の御所源きよき康平のためし
を爰に金澤や羽左衛門出泰平の代の松が岡めでにも御浦

片瀬川晋(秦カ)の除福が蓬萊の鳥も手もとの浦つゝ

き岩打浪はおのづから妙手を碎く鼓の音引糸竹は越

殿樂神釋無常戀草の妙なるしらべ面白やはや放生の

時刻ぞと往昔源祖の例式を鳥籠一度におしあくれば

國に羽を伸す鶴が岡鶴の齡の千代よろづ四方に輝く

黄金の短冊虚空遙に二段目引ぬき小浪常盤津二より「こがれ」

て神々さんに無理な御願はあつかわな女子と罰があ

たろとも思ひそめては夢の間も何のわすれうかほよ

鳥たらちねどしの言號たのみのしるし取かわし忍ぶ

に餘るその夜半は心床しと祝言を松にかけたる藤浪

の巴の風のふくさものおいた家老の名代をせいもん

實に冥加ない粹な御用を梅が枝の咲て一重に嬉しい

けれど殿御心は仇櫻思ひ莖に置露の雫に色や増るら

ん夕顔の閨の扇のなぞの帯解て墨畫の末廣う扇車の

くるくく〜と浮たつや谷の戸明て鶯に中を結ぶの

月と梅雲のさはりのうやつらやあぢきなやせり「せ

りつむ胸をおし賤のはしたなしとや岩躑躅奥殿さし

て三段目聖應の能卒都婆小町歌也引ぬいて四段清元太兵衛大星力彌也誰か謂水にも

心有明の櫻うつしてうづまくはかげ唇をはたらかす
といにしへ人のからうたに殿の心を慰めんと鎌倉山
の八重九重いろ／＼櫻花かごへ生る人こそ花紅葉佐
野のわたりにあらね共まづ冬木より咲そむる梅を切
りやはつべき山里の櫻を見れば春毎に心盡して育し
を仇に切とるかなしさに「松は元より庭木にて詠と
なるはむめ櫻」よしそれとても君ゆるゑに何かをしま
ん諸枝を折から一天かき曇り俄に草木鳴動なし鐵炮
雨の震動雷電たがみな月とゆふ立のはれ間を爰にた
いすみぬ五段目大雷にて花道戸屋にて早六段目かけ稻かわつがはり角兵衛獅子うた常盤津「ヲヤ目が覺たしかし夢にはなア富士に鷹どこ
か似よりの嬉しさは一獅子見たか三角兵衛こいつは
仕合せ吉野塗辨當包ときほどきふりア、ラあやしや
いぶか獅子夢ならでおれが晝餉のめしとりしいでや
返報しはしきやつが心を引尾ならエ、わんのこつた
／＼そんなよは犬じやごんしないアレむく犬ぞえ
胸長なお前ゆるゑには黒をしてかうしたわんけになつ
た物手もくれもせで犬ぬるとは何か心に一物がさう
いやおれもぶちまけてそんなら胸を嚙合てさつして
かいなとよりそへばエ、畜生めとはおれが事嬉しい

中じやないかいな今宵はどこへ息枕にまかせてかけ
ぐえホイカゴホイ舎、旦那御きりやう御如才はなん
でものみこみしてこいな舎、いそぐぞ三まいがつて
んだ舎、あづま駕其間に辨當ひつゝわへ行をやらじ
と追て行七段目花に遊ばいの歌にて茶屋は八段目つゝ清元太
衛兵ふるはみぞれか初時雨けさの出がけに棒ばなで
手當りまかせ酒きげん五十三次また爰でなんぞ沼津
に行かりやうものかそりやこそ腹もよし原と口あひ
まじり來りけるどつこいとまつた水たまりナ、なん
だあるけばあるくとまればとまるおれがまねをしや
あがる向ふは慥左りきゝあるけばあるく留ればとま
るコリヤどうじやハ、わかつたかげぼうし旅は道づ
れ世はふざげとんだ月夜とこむろぶし登り下りのお
萬籠馬よ扱も見事な手綱染かいナアエまご衆のくせ
か高聲で鈴をたよりに小室ぶし吉田通れば二階から
ナしかも鹿の子の振袖でふつてふりくる御國入殿の
歸りを窓から見たれば臺傘立傘曳馬おかに若黨草
履取鎗持コノ合羽籠舎、アレハサノサコレハサノエ
イエイ／＼／＼うきたつ空も入相の蒲原さしていそ
ぎゆく九段目十段目下女りんてつち伊吾早「世をすねて
がはりかけ舎常盤津

風雅もしやれも内證のさし合くらぬ佗人の祇園の茶屋にきのふから雪の夜あかし朝戻り太鼓仲居におのくれて庭ははたへの雪こかし當「アイたのみませう」ヲ、誰さんじやエ歌「こへはなじみと思ひつき當「エヘンものもふウタ」どうれば賣詞かいしよなしでも行義よく當「たすきはづして飛で出る昔の奏者今のりんあたり見廻しヲヤ」ム、扱は噂のおきつならとらへて開帳の見せものと欲は微塵もなふ繩の柱合手の狐釣^{ウタ}「うかそ」信田の森のきついあてずいいざらば當「こちらぬ（もカ）まけぬ一穴ウ「一つ東山今花盛り手に短冊もつてゐる是は何じやと問ふたれば俳諧つくくはいつくつ當「そりやこそべたぞ當「い」ウ「いた當「ヲヤ」くくく」狐じやと思ふたらヲ、すかん是いなア今度つかひにお出なら面白い事して見しよといふたぞや旦那の御用は跡にしてさあくはやうと夕間暮ウ「下地は好なり御意まかせ當「東西」古めかしうはござりますれどありふれましたる花鳥の働らき怪談の一曲まづは寫し畫の始りその爲口上さよ當「三番始りエイ」くくくぶまな拍子の鳥飛當「お菊は恨み幽靈のエ、う

らめしい鐵山様情なの心やなア是も何ゆる皿ゆるにエ、九枚よウタ「きやつときなせウタ」跡は牡丹の石臺の花は一度によう咲た當「ヲ、それもよからウ」あぶない事よ天へのぼろくあぶない事よ當「のびてちいんで氣儘ぶしウ」わしがちいさいときやお龜といふたがの今は庄屋どんの孫だきねんころねんころねん當「伊吾よく」と呼んでも見たがのかあいよし松はおとさんと寐んころくくくねんおかしらし當「さらば取次しかうと打連てこそはしりゆく十一段目^{大薩摩}大驚源^{源若}にて夜討の形りかけやをもつて立廻り打出し幕忠臣藏所作事は難作なりされども東都は所作を愛る故年々歳々出し盡ていかようなる事をするやらんと見物多く打續けり

四季寫土佐書拙の文談

同年冬顔見世小團次所作の七役をするに浪花にてせし歌淨瑠璃ども東都の口にあはず文句覚えしものもなく予に書くれとの事なり依て又出る儘に書付やる龍女は土間の上より燈籠吊下し大約浪花の通りなり歌「わだつみのたつの都の殿造り珊瑚の柱瑪瑙の瓦宮殿樓閣ぎ」としていはんかたなきけしきかな

燈籠ひ「爰に八大龍王のまな娘乙姫君と聞しは柳の眉
に桃の媚錦しう羅綾を身にまとひ八重の褥に座し給
ふ御ありさまぞ艶しけれ合その戀人は故里の丹波の
國の水の江を忍びかねつゝ出行てたよりなけねば屋
氣樓合そなたの空も雲霧も浪もひとつに見渡せば雲
路の雁の女夫づれ合ア、浦山し浦島に合すてられし
身の何を花何をつたよりに告やらん合わかれにおくる
玉手箱よもや惡しよはあるまいと合思ひ捨てても男の
心ぐちも女の耻かしや佛の在世虚空會に八歳の龍女
成佛の悟れば是ぞ玉の都と夕風に合さしくる沙のど
ふくくく合波をけたてゝ入にけりく船頭土間より出る常盤
津夕月に涼風を待が花火や三股の岸につなぎし通ひ
舟星もあざむく賑はひは慥ちがはぬきやつが聲ヲイ
取かち篠を束ねてつく様な雨にぬれて通ふがにくか
ろかせく「あたるくくく」當りやすセリ「爰に
名高き淀川の流れを渡る氣さんじは氣も幅廣な緋ぢ
りめんしめて結んだ鉢巻もそこが根生の水の恩三筋
の糸をかりぶしに二上リ」淀の川瀬のナアけしきを爰
にひゐてのぼるヤレ三十石船に清きながれをくむ水
車めぐるまごとはみな水馴棹さいた盃おさへてすけ

りや酔うて伏見へくだまき綱よかうした所は千兩松
ヨイくくくよいの雨「あいたさにひとり夜ぶ
かにきたものをちよつと切戸をあけてんかいなく
おゝなかさんモシお内かお宿かおるすさんかゐない
のにとんくくく」とたゝいてもエ、くくゑれつたい
ではないかいな二上リ「させばエさせば出てゆくさゝ
ねばゆかぬさしてくだんせヲ、イ船頭さんヲ、イ
くくくくヲイくくくくあの聲は嬉しからう
じやないかいな面白やな體癪子にそやされて甲子待
と人毎に富貴を願ふ大黒は脊に大極の袋を負ひ手
に混沌の槌をもち足下にふまへし俵こそ五穀成就豐
年を守る神こそ尊けれかけ物四つ世の中よい様と槌
ほう杖ににくくくくと笑ふ門には福鼠又いたづら
なと呵られてそりや胴欲な旦那さんそもわすれてか
去年の冬豆鼠蒔く年越はつちの子なりとたく物と枕
の下の寶船敷て假寐の初夢に「是のお庭に大きな池
ほればぶくりくくくくく水もわき候黄金
もざくくくわき候池の汀に龜遊ぶ鶴の齡のながく
もく御ひるきを願ふも恐れいり豆に花の御江戸の
お取立鼠の「ヤアひけやひけくく引ものは何々子の

日小松春霞花さく頃の鶴と鳴卯月八日は團子の粉池
 のあやめに祭の鉾よまだも引ものは七夕の牛待膏は
 三味せん酒はあと獵師は網ひくうつい姉への袖妻は
 引手あまたであろぞいな打出の小槌ふりたてゝ寶盡
 しの福曳は實に顔見世の悦びとたのしき代々の福遊
 び引ぬき鼠も共に契情大盡常盤津ウツタ戀風のもれてれんじ
 の紙二重合隔てぬ胸の約束をちがへぬ筈の中へに
 合女のぐちか廻り氣か合元は浮氣な男ゆゑちらずが
 野暮か粹かいな合鐘は上野か淺くさの田面の末の夕
 月夜冷夜見世の鈴の音さえて人呼子鳥百千鳥つばさ
 かはせし二人寐の床に關もる袖屏風常春まつ里の
 夕げしき見せすがゝきを生聞も通ふ千鳥にさそはれ
 てウきぬぐの心のうさを鳥さへ合ないてたすけて
 東雲の土手の夜風に通ふ神見送る影の四つ手かご常
 「たれも戀路に身をやつす里の手管のわざくれにむ
 つとせきたち合ゆさかゝるウ」コレまた玄やん常「コ
 レハなんじやいやいウ」んせアレまだ無りなひぞり
 ごと常「まだ里なれぬわたしでも縁にひかれてはま
 弓のウ」やがて廓の年あけて踏「名も呼かへておかも
 じとたのしむ甲斐も七草とウ」疊叩いてなくなみだ常

「それで照日も笠きてぬれにウ」ぬれに廓の花の雨常
 「それにそのよな胸欲な若水くさいすね詞ウ」情はう
 れど心まで常「うらぬといふもこまらしいウ」エ、に
 くらしいじや常「なウ」い常「かいウ」いゝな常「ちわが
 こふじて口舌のたねよおよりなんしと引屏風跡は二
 人が譯さへもおし繪羽子板手まり唄ウ」宵の口舌に
 無理なお客のむなづくし合とりもつ酒のさゝめごと
 をしやわかれの合かねつく坊さま合惜いきぬぐ合
 それはほんに色じや一い二う三いうつか女夫に
 なりふりもまゆげ落してさがした羽根を仇にとられ
 た板屏風ふくぬ猶ふくなよい羽ごの合春あそびかぞ
 へる文のやりばごの手にとる禿の袖几帳うかれく
 て遊びける雷津常盤夕立や田をみめぐりの雷も富士と
 筑波を右左りはれ渡りたる雲のうへ平氣で玄やれて
 鼻唄で中「下の遊びの浦山しちと遠見の摺火打雲と
 見まがふ煙りかな下界遙に見わたせば木の間へ」に
 茶船が見ゆる櫓をおす聲のエツサツサさつと家根ぶ
 でひく三味せんの中の小唄の顔見たやさへつおさへ
 つ天目酒に三なん四のむり酒はエ、畜類めガ玄やれ
 のめすこつちもまけじと持前の太鼓拍子で一踊り鉦

とエ念佛でわしや暮すなら雲に巻れてわたりやせ合
んどんな事して太鼓を落したこんな碇で引あげよか
金三千餘丁成田屋のその稻妻の師の光り合音も高鳥
やと鳴ひいき雲間くをかけり行く本鐵炮にて宙のり落
牛若丸上るり出語り
「扱も源の牛若丸父の修羅の魂魄をなぐさめんと川
風をゆる夜嵐の夕程なき秋の空面白や心うき立御出
立肌には練の御拾紅る裾濃の御きせなが糸かす織の
大口に薄緑と云御はかせ五條の橋をさして來る傘の
まぶきも高足駄橋板といろとふみならし行かふ人を
待給ふ御有さまぞ不敵なる西塔の武藏坊辨慶は其頃
都にありけるが五條の橋には人を惱す曲者有りと聞
しかばそれを従へ召仕んと心に空もはるゝ夜の月も
音羽の山の端に辨慶團十郎の出出たつ鐘は黒皮威好む所の
道具には熊手ない鎌鐵の棒戈槌鋸鉞さすまたさすま
ゝに權現より給はつたる大薙刀真中取て打かつぎゆ
らりくゝと出たる有様いかなる天魔鬼神なりとも面
をむくべきやうあらじと我身乍も物たのもしく手に
たつものゝエ、ほしやとひとりごととして打渡る向ふ
をきつと見てあれば橋のほとりの青柳の糸より細き
腰付にてすつくと立たる女姿傘かたむけておもはゆ

ぶり辨慶元より法師の身女何とぎかけん詞も媚く氣
色に恥橋のかたへを過行ば若君かれをなぶつて見ん
と右へよくれば右にたつ左りへ行けば左に行違ひさ
まに薙刀の柄をはつしと蹴上ればすはしれ者よ物見
せんと長刀柄長くおつとりのべ切てかゝれば若君は
薄衣取のけ打よする劔をあざむく傘は六十間の橋の
上ひらりくゝくるくゝ車にもまるゝ牛若丸辨慶
いらつてさそくをふみ遁さじものと切込むを丁ど受
たる勢ひは雨をおこせる蛇の目のかさ風吹拂へば飛
かはしひらりとぬいたる小太刀影星の光りと水車所
は名にあふ加茂川の流に立浪どうくゝどうとよ
すれば白鷺の蘆邊に齎るかたし立姿はつくばねはこ
板の拍子は砧の音無双がへし現の太刀二の鏝音から
くゝ欄干傳ふさゝ蟹の蜘蛛の振舞木傳ふ猿水の月
かや手にたまらぬ姿を慕ふ薙刀のえたりやおふとし
つかと取るいやと引ばぬいと引橋の葱帽子玉の汗鎬
を削りて戦ひける辨慶秘術を盡せどもついに長刀打
落され組んとすれば切拂ふすがらんとするも便りな
く詮方なくて橋げたを二三間飛ばさ兩人セ今より
三世の主從ぞと約束堅き五條の橋辨慶と末の世に語

り傳へて繪にも書中の顔見せ市村に祝ひ壽き舞納む
男哉婦將門勢田橋の文

右橋辨慶は鬼一法眼三略卷の結局にて文耕堂の作に

て節よく附て立廻りに淨瑠璃を遣ふには是に倣うて

佳なり瑞寛二代目熊坂宿屋の場牛若市紅と立廻りの

時故人吉田九孝音五に橋辨慶の立をさせて見て此時

に引直したり橋辨慶は歌舞妓にて小六玉國太郎を牛

若にて毎度勤めし事有瑞寛は是を見て九孝に習ひし

也予天保五年の秋婦將門三つ目瀬田の橋の段龍女の化

神誠は白也予天保五年の秋婦將門三つ目瀬田の橋の段龍女の化

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

倭藤太 芝翫當時の歌 兩人の脚色の時橋辨慶に

髪を梳りと七言を詠じけるに忽空中に聲有て氷は消
て浪舊苔の髪を洗ふと讀つゝけて再び答へず是は正

しく鬼神の詞それは鬼神是はまたいとやんごとなき

女蘭の姿をあらはし橋上に夜な／＼出て往來の人民

を惱す由ちまたの風聞實か虚かいで正體を見届くれ

ん上ルリ」好む所の弓箭かいこみ今や遅しと待かけた

りやゝ更渡る潮面に川風颯と音につれあらはれ出し

その形相慶子薄衣深くおもはゆふりすつくと立たる

異形の有様秀郷見るより心にゑみ扱そくせものご

ざんなれと五人張にせき弦かけ十五束に三ぶせして

三筋たばさみゆらりと近よりて掴みひしがんそ

の勢ひ女らう恐れず打迎ひ右へよくれば右に立左り

へ行ば左りへゆく大膽不敵のおこのものなぶつて見

んと身をおこす秀郷是を物ともせず違ひさまにむん

ずと組を心に笑ひ振拂ふ蜘蛛の振舞木傳ふ猴水の月か

や手にたまらず姿かよわき檜扇のひやいさ危ふさ薄

衣をちからにまかせて引のくる立廻一芝セ

ぶかしや化生の女め汝此頃爰に往來を惱す由その

正體を糺さん物と月てる夜影を幸ひにゆきつ戻り

つ長橋の半も過すへんぐゑに今こそ廻り近江路や鴉

うつ浪に化の皮落して白狀なせ猶豫なさばいにしへの素輕の大臣が雷神を手取にしたるためしにならひ掴みひしいで某が末世の龜鑑に備へてくれん化生め返答はどゝどうだ上「大手を廣げて話かくればこなたは猶も聲高く一富^セアおろかや汝人間五輪の生をうくとも我通力に及ばんやそこ立され一芝なくなれ化生め一富立さるまいか一芝なくなるまいか一富達て妨なすにおいては忽五體は吹雪と散て鴉のみくすとなしてくれん一芝何を小しやくな^上秀郷いらつて早足をふみ遁さじものと組付を丁ど拂ひし有様は風にもまるゝ青柳の雨吹拂ふその風情互ひにいとむ物音はげに轟の橋のもと流に立浪どうゝゝ女らう遙に身をすさり一富マアゝゝまつた待てたべ一芝ヤア卑怯な變化女すみやかに正體を顯すまいか一富サアそれは一芝但し是にて打放さうか一兩人サアゝゝ一芝サ、返答は何と上「せめ問はれ女薦落くる涙を拂ひ一富かくなる上は何をか包まん誠われこそ人間ならず龍の都八大龍王の乙の姫たまゝ生を受^上ノウ淺猿しや上「三惡道の苦しみものがれ渚の捨小船一富ゆきゝの人をためしたうへ我願ひをかな

へん爲^上「扱こそよなく顯れ出化生變化と恥かしい此容一富然るに今宵不思議にも御身の如き武勇のかたにあひ奉る自が本望何卒此身の願ひをばもし叶へて給はらば彌勒の世に及ぶともかつて御恩は忘れまじどふぞ叶へて下されいの^上「思ひ入てぞ願ふにぞ一芝扱こそ我推量に違はず正しく蛇身の變化よな我神國に生を受萬物の司たる人界に依て望を叶へんとは尤なる事いかにも叶へ得せんがシテ其願ひは一富その願ひは只今御覽に入れん^上「あやしの俵さしおしへ一富自が願ひは此一品一芝内やあやしき此俵^上「立よる秀郷おしといめ一富サア何事も自が心をこめし願ひの一品一芝シテ其子細は一富その様子は^上「いはんとしたる折こそあれ漣よする浪の音龍女は渚を打詠一富アレゝゝ刻限きはまる此土の遊行はや龍宮へ歸れとある父龍王より知らせの浪磯打音は是非もなし早おさらば一芝ヤレまで乙ひめ一富いやゝゝおといめ有てはかへつて我身に仇浪の音を限りの龍神界名殘は盡すはやおさらば^上「名殘は盡じと振拂ひ霧立渡る長橋にくゝれる浪の水の音に姿紛れて失けるを末世の記錄に残せしはあやしかりける次

第なり是段切跡將門芝翫 だんまろ黙岩浪慶子りなり此文談橋辨慶に倣ふよき文談は何にても潤色なるもの也

富本常盤津外題角力

此一紙は其作者の甲乙をいふにあらず稽古する子供衆のいまだ習ざる外題を見るならば稽古をはげまふ便りにと横山町二丁目和泉屋永吉板年號見えねど文政の始頃出板と見え富本さかんにして清元の外題見えす今清元の方流行して富本は衰へたり常盤津のみ色をかへずますゝもてはやせり作書に因みあれば爰に出す常盤津富本清元の系圖は聲曲類纂に委しければ略す好人此書を見て知るべし

謠曲狂言釣狐尾花癖

行水の草葉隠れも武藏野や月代前の闇の空子故の闇
にあらね共甥子を思ふ白藏主我突杖も音すへて芒の
穂にも伯父の身の異見くわへし戻り道邊り窺ひ溜息
して狂言詞ノウゝ嬉しやゝやうゝと意見をし
てまんまと釣をとまらせた是から何方へ行うとも氣
遣ひな事はない此様な心面白時は小唄ぶして古塚へ
歸らう小唄此里に住ばこそ浮名も立のふいのやれ我
古塚へしやならゝと小唄うとふて嬉し氣にあゆむ
向ふの草の中民につまづき飛しさり狂言詞ワイのふ
ゝ恐しやゝたつた今民を捨てたかと思ふたれば某
の歸る道のまん中に罨を張すましておいた扱々罨作
といふ者は近頃聞えぬものじや誠に人間の狐をばや
この心と申て物疑ひをすると申と聞たがきやつは狐
にはおとつたやつじやいや又罨といふ物をいか様に
して置ばけんぞくどもがかゝつたぞついながらわ
なのしつらひを見て置うそろゝ立より捨罨を杖突
ながら打詠狂言詞何やら黒いちいさい物があるヤイ
ゝおのれその黒いちいさいなりをしておれがけん
ぞく共をようとつたなアよう儕それがよいか是がよ

いか覺えたかゝ一杖打ては一あしより二杖打ては
二足より打たる杖の匂をかぎ狂言詞ム、味い匂ひや
ゝ若者共がかゝつたこそ道理なれよい頃な若鼠を
油揚げにして置た是がくわひで丁簡がならうか飛かゝ
つてくわんとせしが足つま立て飛しさり狂言詞ア、
よしな事を思ふた目のまへにけんぞく共をとられ
今又此餌にはだされ某が怪我をしてはなるまいまづ
二足三足行んとせしが立どまり鼻動かして振歸り狂
言詞戻らうとは思へども此匂ひを聞てはなかゝ戻
らるゝ事ではないよう思へばけんぞく共が爲には敵
じやその上若者共が餌ばかりむしつて喰ふ事はしら
ぬでよしない罨にかゝつた餌ばかり喰ふに何の事が
あらうぞ飛懸つてエ、喰ひたいなゝ身もわなゝ
と震はれて匂にきゝとれ餘念なき芒おしわけ罨作が
窺ふぞともいざしらず狂言詞イヤゝ喰たうても青
縁^{本ノ}を身にまゝとふて居るによつて身が重うてく
われぬヤイおのれ此化た装束をぬいで來てたつた
今ぶくする程にそこのいたらば卑怯で有うぞエ、
イゝ行んとしたる後より罨作得たりと山刀ぬくよ
り早く二太刀切付られてたまらばこそウンとこけこ

む芒の中毘作は仕すまし顔まんまと是もしてやつた此手次手に宮めもとうなづく所へ女房お瓜つまづきながら走りよりエ、お前はとむしやぶりつく又うせたかと振拂ひひばらをぐつと眞の當鼠六は跡より駈付て手ごわい女郎め手におへぬシテ宮めにぼつ付たかヲ、伯父の坊主も一急ぐり宮めも爰へ手まへて來たと毘の中へ飛こんでエイト打たる首の音鼠六は又もや合圖の笛待もふけたる野見の軍太組子數多に提灯もたせヤア／＼毘作約束の首請取ういかに／＼と呼はつたり毘作は兩の手に首と血刀引提出まんまと爰まで釣出した手ごわいやつで手廻らず是非なく首に致しましたいざお受取とさし出せばヲ、出かいた／＼女と容せし宮の首シテ約束の褒美はな家來共それ毘作に褒美をとらせはつと家來がさし出す包みエ、忝い是もふけうとてどるらい骨折ヲ、さう有う々々主君直義公へ差上なば嘸御滿悅鼠六にはまだ申付る用事もあり家來つゞけと野見の軍太皆打連て立歸る跡見送つて毘作は褒美の金を押戴きこいつもしめたと懷へ納るうちに氣のつくお瓜夫の胸ぐら引とらへユ、胴欲な毘作殿義理も法も辨へぬ大惡人大事の

／＼宮様をようも／＼むごたらしう首切て渡さんしたのいかなる天魔が見入たぞと恨の泪たくしかけ宮様を殺された言譯此身も共に南無阿彌と落たる夫の山刀取んとするをヤレ待と芒搔分白藏主あけに染つゝ起上りお瓜か刀引とればヤアお前は伯父様ヨ、白藏主様かとお瓜はもとより毘作も南無三寶と仰天顔エ、そんならお前も夫の爲にエ、コリヤマア何とせうぞいのと云もうろ／＼おろ／＼涙毘作曇りし聲音にて背に見置た形容狐の變化と思ひし故仕すましたりと手にかけてしがやつぱり誠の伯父御で有たかチエ、残念やしなしたり御ゆるされてと俄のはいもうお瓜は夫にしがみつきチエ、是あの様にむごたらしう殺して置て今更何の驚顔あんまりむごいと聲ふるはせ恨泪にむせかへるこなたは苦しき息を繼コリヤお瓜必ず歎くまい元より覺期の我命子供たらしの咄にも聞置たる野干の身ぶり眞似たればこそ殺しもすれ殺される様にしたればこそ強欲非道の惡者と思はせ心の底に納めたる毘作が大丈夫心底の程見届たヲ、天晴／＼今こそあかす我本名毘作殿聞てたべと手負を屈せぬ丈夫の老人居直つて詞を糺し元某は官軍に

名高き殿の法印了忠といふ者大塔の宮に随ひ參らせ
紀の國に旗上して終に北條が大軍を攻亡し主上の御
危難救ひしかど帝の御心定らねば遠からず亂發らんと
未前を察して武門を捨我心底を宮に告大藏の局と
呼れし内身の姪此お瓜を召連此武藏は我故郷なれば
國へ歸つて名を包み白藏主と名乗る隱遁者又こなた
社今民間に育ども一器量ある者なれば幸ひ姪のお瓜
をば其方へ後妻に嫁らせまさかの時の力にもと心便
に思ふ内我推量の的をはづさす足利兄弟は准后に取
入り新田楠が軍慮を拒み大塔の宮を害せんと計り淵
邊の手にてお命も落されんとせし所を不思議にまぬ
がれ我を尋ねて此地へ來給ふ此了忠が匿ひ奉りけだ
かき宮の御姿人目に立ば詮方なく女姿に出立せ參ら
せ是なるお瓜が妹と呼なし時節を計つて東國に旗上
なさん我計略兼ては宮の御味方にと心頼は今此時ま
づかうくと打明て物語んとは思へ共いやくかく
亂世の折なれば汝もし兼てより足利方へ心を連し宮
方の我々を覘んも計られずもし打明て後悔やせん兎
やせんかくやと思ふに付お瓜が頼を幸ひに異見に事
よせ其方が心底を探り見るに人目を造る放蕩ぶらい

誠は獨の娘を手にかけて大塔の宮のお身代りエイ／＼
／＼と驚くお瓜サ、その心底を見るからは老さら
ばいし此了忠此世に居すとも事足りなんいかなれば
さ程まで宮方に心をよするぞ様子ぞあらんサ、いか
にと深手を屈せぬ物語きくに畏作いち／＼に胸にこ
たゆる心の割符エ、早まりし殘念やと落る泪を振拂
ひム、扱はこなたは殿の法印了忠殿にてありしよな
かくなる上は何をか包まん我こそ足助重範が一族に
て速見下總之助範廣と呼るゝ者と始て明す夫の本
名きくにお瓜はあきれ果顔打守る計也手負も苦痛
打忘れオ、すりや先年笠置籠城の折からいかに六
波羅方の虎口を蹴破り主上を始官軍を助て共に笠置
に籠り數度の敵軍攻なやまし主上の御感も殊ならず
一旦武名を上し身が運拙くして笠置は落城帝は捕子
となり給ひ此身はその夜手疵を負ひ辛ふじて命を遁
れ手疵保養をせんが爲本國に隠るゝ内北條一家は滅
亡し自然と開く帝の高連我身の手疵も治す上は二三
嬉しや都へかけ付主上の龍顏拜せんものとは思へ
共いやく／＼戦ひ過て公卿の世となり今更都には
せ行共恩賞を受んが爲と笑ひをとらんも口惜く其上

新田足利も功を争ひ確執と街の風聞まち／＼なればよし／＼何れにもあれ主上に弓引朝敵謀逆の企あらばそやつを亡し再武名を發せん者と一人の娘を伴ひ此地へ移つて姿をかへ強欲非道と仕にせをうり數多の金銀むさばるも皆是まさか軍用の手當又さいつ頃後妻にめとりしお瓜と伯父が氏素姓定めて宮方に由緒ある人々ならんと思へ共折もあらんと見合すうちはたして足利兄弟が讒言にて護良親王を追失ひ謀反の色を顯わせど主上はかへつて悟り給はず新田楠が諫を用ひず又もや天下の亂口此春お瓜が妹とて尋ね來りしお蘭こそ正しく大塔の宮に相違なしお力になるは此時と思へど未だ明さぬ心底かく亂國の砌には親子の中にも心おかれ互ひに探る胸の内此頃足利より配符を廻し犬に入たる油揚鼠六きやつ諸共に欺かねば身代りはとるまじといよ／＼造る上邊の強惡其虛に付入る古狐伯父御の姿に出たつて釣を止めと異見を幸ひ是も手にかけ殺して見せなば横道者と思ふは必定兼て用意の捨毘に掛つて餘念なき有さま誠の狐と思ふが故誤つて此生害又手次でに宮の首討て見せしは兼てより心もふけの娘が命只一討に首をはね

軍太鼠六に渡せしが跡の骸は尾花の中思へば不便の最期ぞと語る内より女房お瓜扱はと驚き走り寄哀を招く村尾花搔分見ればお菊が死骸是のふ母じやと抱上見れば甲斐なき亡骸に扱も／＼可愛やな忠義故とは言ひ乍ら義理ある娘や伯父様を先立てわしやどうせうぞとお菊が死骸抱きしめ聲も惜まず口説なき下總泪ふり落し娘お菊が身代りは兼てよりもふけし事鼠六めをたばかつて此所まで娘を連出し軍太に難なくつかませしが合點のゆかぬは丁忠殿左程大望ある身にて我手にかゝつて死する事は疑ひの晴ざる所我此程殺生に事よせ多くの野狐を釣とるを無益とも思されんが我家の先祖より傳來せし軍法の秘書のうち調伏の法有て年經る野干の生膽をのらふ者の家の巽隅に埋る時はする事なす事けつまづき忽家の亡るよし詳しく記せり足利調伏には屈竟一と思ひ立たる我殺生今迄數疋の狐はとれども未老狐は手にいらす今宵宮の御危難を窺ひ化てうせたる古狐仕濟したりと切付しが老狐は釣らで片腕の父とも伯父とも男とも譬がたなき恩人を我手に掛て殺せしは何畜生と思ひ乍やつばり是迄殺したる野狐の恨で有けるかと悔む

をまたず白藏主ヤア悔まれな下總殿我も其調伏の法をしれば多くの狐を釣とるこなた正しく足利を調伏の爲求むるに相違なしと察せしゆへ何その老狐の生膽より百倍増りし奇法あり巳の年月揃ひし者の生血をとつてかたの如くおこなへば其効驗新なり此了忠は巳の年巳の月巳の日の産れ天子の爲に捨る命生過た此體腹かつさばいて望を叶へんとは思へ共なま中に夫を明さは義理立してよも我を殺すまじと思ひ付たる今宵のしぎ態と狐の變化と見せ毘に掛りし戯れも狐の人に化るはあれど畜生ならぬ此身をば狐と迄思わせて手にかゝりしも此身の本懐こなたの望を叶へん爲とかたるに下總あきれ果すりや調伏の血汐を用立んが爲にとや我もその法をしらぬにあらねどと^マ揃ひし者もなく思ひ捨しが計からずも血汐調ふ上からは足利滅亡まのあたりチエ、有難や忝やと天を拜し地を拜し勇むにつけて女房は空しき娘の亡骸を抱かへてむせかへりエ、そふいふお前の心ならなせ始からこふくど打明ては下さんせぬ可愛そふに此お菊おぼこ心の一筋にあの宮様を思ひ染一夜の契りも得えせずと死なした事の可愛やと又さ

めくくと泣出せば夫もともに恩愛の涙にくれしが聲はげましヤアめろくとかへらぬくり事勿體なくも後醍醐帝の御弟君大塔宮の御身代り立たる娘は親にましたる果報者子故に親は名を上る娘は天晴忠義ものと了忠殿にもほめてござる未練な泣なほゆるなど泣ぬは秋の虫よりも一しほまして哀なり了忠も涙をおさへヲ、お菊出かした同じ忠義に死ぬ身でも生て詮なき此了忠此世の望更になし可愛やお菊は思ひねもはらさず死せしふびんさといふにお瓜は猶百倍せめて宮様のお世となり一日なりとも二日なとお宮仕もさせたならかうした歎きは有まいにと互ひに手に手取かはしたもちかねたる泪こそ此武藏野の三の川あふれ流るゝ如くなりかゝる歎の折しもあれ委細を窺ふ油揚鼠六芒原より現われ出ヤア聞たく大塔の宮のにせ首わたし足利殿に敵たふ毘作此通り注進せんと駈出す鼠六支る隙に弦音してはつしと立たる白羽のそ矢鼠六が咽ぶえ突通しわつと計に息絶えたり是はと驚くその隙に尾花の中より聲高くヤアく速水下總が忠心慥に見届しと詞をかけて立出給ふ大塔の宮護良親王御装束を改させ白木の弓を御手に携次

にツイて以前の旅僧姿は烏帽子狩衣に粧ひ出る跡よりも數多隨がふ警固の官軍見るよりハツと三人は飛しさつて平伏す宮は御聲臺らせ給ひかくまで不幸の某を見捨ぬ忠義の丁忠下總其身を殺し娘を殺し厚き二人が志忘れは置ぬ嬉しやと忠義を感じる御泪勿體なやと三人がありがた涙にうづくまるこなたの公卿御目を拭ひ我こそ萬里の中納言藤房といふ者我行脚の形りに出立今宵下總が家に宿りしは敷島の道の徳當今准後の色香に迷わせ給ひ足利が譏奏にまかせ直義にお預けありし宮のお命危ければ某屢御諫言申上し處主上御答の御歌にむさしのにありときくなる迹水のにげ隠れても世をすごすかなと御宸筆の短冊を給はる我其意を知らざれば御心を尋ね奉りしに帝の御けしき大に損じ吾妻の歌枕見てこよと追やり給ふ我何の罪かは知らねども寂慮にまかせ深き御心のあるやらんと直にそれより旅立ていつかへりいつか本逢坂の關ならんと心細くも吾妻路の此武藏野に來りし所尾花隠れの孤家あり宮は此地にましますと我にをしゆる古歌の御心殊に淵邊が毒蛇の口遁れ給ひし御宮を邪智深き足利直義猶も枝葉を枯さんとは

かるにそれをふせぎし二人が忠節感しても猶餘りあり君御宸筆の御短冊下總にとらせ得さするぞと下し給へば三人はこは冥加かやと推戴く重ねて宮ののもふには丁忠が今迄の忠節お瓜が辛勞下總が誠心何れをいつれとおとらねど不便なるは娘のお菊我にせつなる志殊に枕もかわさぬに我にかはつて死せしとは不便の最期をさする事よ此世の縁はむすばずと未來は必夫婦ぞと勿體なくも御歎下總始了忠も恐れ入たる嬉しなきお瓜は嬉しさ死骸をだきあげ是娘魂魄此土にあるならば今の仰を聞やつたか親に増つた果報ものとは言ながら生ある内あの御詞を聞せたらゝよろごぼう物かあいやとかへらぬ事を女房がくりかへすこそ果しなや丁忠はほゝ笑てア、忝や有難や忠義の爲に死する命老のよろこび此上なし又二つには下總が忠義故とは言ひながら執着深き狐をば多く殺せしそのかわり此身を狐の姿になり手に掛りしは後の世の報ひをはらはん我心是で心なき狐狸迄も長く恨を忘るべし末世に武藏野の狐の義理とも云ならば無益の殺生禁るはしともならん嬉しやと詞に宮はうなづき給ひホ、ウ我都に歸りなば此所へ一字を建忠

義と義理に死せし汝我にかわりしお菊が死骸も此所へひとつに葬り塚を去つらひ得さすべしと仰は今にむさし野の狐の義理や狐塚名を後の世に残しけり了忠は喜悅の眉有難し〳〵サ、此上は下總殿某が血汐をばちつとも早く絞り取足利調伏の用に立潔よく出立をといふも苦しき息遣ひ下總はつと泪を拂ひ事おくれては詮なしとよわる心を取直し死其朽ぬ忠義の生血是へと用意の器疵口にあて汲とればお瓜はあるにもあらぬ思ひけふ程嬉しい悲しい日はあるまひ連添ふ男の本心は聞ながら義理ある娘がむざんの最期まだその上に伯父様まではかなひ別れをする事よし生延はりし此身の役と傍に落ちる山刀とるよと見へしが黒髪をふつと切て差出し是此黒髪を切たるは先の母御へ申譯伯父様始娘の弔ひ首尾よう夫の高名を蔭より守る尼法師大倉の小林尼とあらたむべしと法の心ぞけなげなる藤房感じ入給ひ後悔ならぬ吼噓の口授をのこすも狂言綺語お亂お菊が文字を合せば亂菊なり狐は菊を愛るといひ瓜を好んで喰ふもの瓜の文字に化物籍を添る時は則狐我身を喰るゝお瓜が思ひ後世瓜の畑を狐のあらず事あらばうぬが名の作

りをくらふ狐かなと書付おかばよもあらず事あるまじと仰にハツと皆々も感じ果たる計なり下總はいさみたち宮を都へ還御の御供只今は呼よせんと合圖の狼煙を上るにぞハツといらへて數多の軍兵列を亂さすはせよつて宮を見るよりハ、ハツと恐れ入てぞ扣へいる下總は宮に向ひ我は是より姿を容し足利の館へ忍び込みじゆその血汐を首尾よく埋跡より御供に追付んと云に藤房いさみ立某は宮を伴ひ楠正行が立籠る繩手の砦へ御供申さん路次の警固は了忠下總二人が集めし數千の軍兵はや還御と立上れば東に昇る月代に勇みすゝめど唯ひとり残るお瓜が憂思ひ了忠今はのめを見ひらきヲ、勇しき御出立御門出の血祭は殿の法印夜の殿忠義にからむ畏とかせなく音に血をば白藏主草葉隠れに行水と哀を爰に残し置今の世迄も狂言に其名を呼て釣狐の謂を残して出て行

天保改元庚寅年孟冬

歌舞妓狂言著作郎西澤 鳳著

西澤
文庫傳奇作書殘編下の卷終

西澤文庫傳奇作書殘編跋

造り物三間の間と書正本屋の主人先年打拔遠見の奥深なる樂屋の珍說本舞臺の狂言には金輪奈落の切穴の祕事近松の釣枝奈河の浪手摺並木の書割を始め三都に名高き作者の傳によせて八景不審やなアと思ふ黒蓋も嵐さず明るゝ作道の階梯を著外題の文字を田樂返しにして言狂作書と云今年夫を清書の序拾遺殘篇を戲墨して淨瑠璃歌舞妓の世界をわかし王代時代世話眞世話の腹稿を一夜附同様に書たるはまさに西澤氏のお家の物なるべしかゝる長しき作り物語三編が間引道具の書を用ひず幕無しに書續思入こなしのト書と共暗記でムリ舛とブツ、ケ書の内讀をきゝつけ予此道には黒幕なれどキツカケとたんの校合おして此本幕をえむる事になん

時嘉永己酉霜月幕外花道にて六法ならぬ

一鳳軒にかはつて此道の好人 薺窓飄翠述

西澤
文庫傳奇作書續編上の卷

益々其御地皆々様御きげんよろしく御揃大壽山極奉
申上候次に此方無事御安心可被下候しかれば言狂作
書三編とも誠にもしろく覺候中々作者衆ばかりに
てはなく我らが爲にも孫吳の祕書六韜三略の卷とも
いひつべき珍書に御座候續編附録とか追々御作出來
候由早く一見いたし度事に御座候かのなにはづに作
者此たび冬籠といふ御作に

今わざをぎを書は此人

と下の句をよみそへ候御一笑く

成田や

七左衛門拜

西澤九左衛門様

無別條

西澤
文庫傳奇作書續編上の卷

目次

- 一 當世芝居賢氣
- 一 竹豐故事の序
- 一 音曲狂言綺語の事
- 一 呂律五音十二調子の事
- 一 名人上手下手評判の事
- 一 太夫教訓名言の事
- 一 五段續語場役柄の事
- 一 淨瑠璃作者の事
- 一 淨瑠璃古今の序
- 一 同東西外題番附
- 一 身替弓張月の寫
- 一 古今いろは評林の序
- 一 古今いろは評林の發端
- 一 忠臣藏狂言の説
- 一 伊賀越復讐の説
- 一 昔八丈城木屋の説
- 一 腕久物狂ひの説
- 一 當世芝居賢氣
- 一 安永年間狂言作者の部の作
- 一 寶曆年間狂言作者の部の作
- 一 天明年間狂言作者の部の作
- 一 同
- 一 同
- 一 同
- 一 同金玉論六話
- 一 同
- 一 同
- 一 寶曆年間狂言作者の部の作
- 一 天明年間狂言作者の部の作
- 一 享保年間狂言作者の部の作
- 一 天明年間狂言作者の部の作
- 一 元祿年間狂言作者の部の作
- 一 寛永年間狂言作者の部の作
- 一 享保年間狂言作者の部の作
- 一 延寶年間狂言作者の部の作

西澤文庫傳奇作書續編上の巻

西澤綺語堂李叟

當世芝居賢氣狂言作者の部

道頓堀の因果經に曰人間の捨處野等の塵場は作者也と宜なるかな就中歌舞妓作者涌出るは娼家の小息子下手俳諧師ならずば學者醫者の成損ひ坊主落いづれ錢なしの野等共也さう乍作者といへばいふものゝ立作者となるは野等では根からならず上根に氣轉がなくては叶はずボイ／＼作者には成易し立作者には容易に成がたしされば才覺氣轉を廻らす事は今時の醫者にひとしく素人が物しりの様にいへば我は物識顔で鄙言だらけの仕組本役者のいひ損ひにぬすくり付けりやう文盲でもすんで通ればこそうだら／＼と性もない咄する間に片假名本なりと讀ばよけれど地が野等氏なり錢遣ふにもカン／＼坊貧乏苦にせぬ顔は莊周が濶轍顔回が一瓢の飲に張合たる貧樂の高枕

あはれ聖人の心に叶ふ身持は作者なりと仇口も詮かた盡た産業也爰に瀧田治藏とて道頓堀より沸出たる異物有天晴作者にならんと心は矢竹に根氣を碎け共中々狂言の合點仕組の鹽梅減多無性役者さへ得心すればヤン嬉しやよい狂言じやそうなと我作ながら善惡見へず初日が出て舞臺へかけて脇から見るといかにも役者が下手屎作者とこき出した様に呵るも尤仕組がだれたり又は味みのない狂言なること氣が付てどふぞ此事を机の上でがてんのゆく工夫役者の遣ひ様座組によつて狂言の案じ方仕組様急に吞込み三都一番の作者と呼れたいと一心不亂こりかたまつても力業にも及ばぬ所に當惑せしがふつと心付獨木は鄧林の茂をなす事あたはずといふ事あり萬事一本立では立身ならず人の工夫をとる中に我才覺も出来る物なり幸ひ中興の名人日の出の作者並木宗左に付隨ひ仕組の稽古せばやと早速宗左方に馳行假に師弟の契を結び上手の案じ所役者の遣ひ方に氣をつけ餘念なく執心なりしが一とせ顔見世の座組出來かゝりて銀主の變改一座さらりと解て仕まふ所を宗左切て出て我は無給金表の步錢を取るべし役者も寄合て興行

せん芝居、軒出来る。と此廓で餘程の人のたつ事とか
り廻りて相談するに役者も外聞旁尤なりと俄に顔見
世番附を拵るか狂言を案じるやら座拂ひの銀子工面
やら上分の役者は本給の内八分の仕切中通り部屋囃
子方は初日の晩に六分三日めに二分十日めに又二分
で本給丸拂ひと定めどふやらこふやら初日もふいご
祭り思ひの外に繁昌せしかば役者もぐつと乗が来て
二の替りの新狂言冬のうちにこそふと相談かため宗
左はそれより取籠治藏を相談相手其外ごらく作者
二三人膝共談合ひとり咄しはならぬ道理用にたゝぬ
作者もそれゝに抱置は宗左が大腹中かの桶が泣男
かゝへしも大將の器量夫に付隨ふ治藏自然と役者の
遣ひ様會得する事も有し油斷せぬ作者に精出す役者
と持合ふて二の替りの評判よく注連の内より大入治
藏つくづく思ふ様淨瑠璃の作は素人が作つても出来
る筈じや太夫が節付て語さへすればマア淨瑠璃にな
るといふ物素人作は操にかゝるかゝらぬはあの曲輪
の妙も有ふが死物の木偶淨瑠璃本で諸事捌て通るこ
つちは役者といふ手にあはぬ人間共をつかふ事自由
にならぬ筈じや是を思へば歌舞妓と淨瑠璃の作の懸

隔する事を覺へたり全く並木の林に入りし徳誠に勸
學院の雀作者の飯くはねば作者になられず素人より
出て歌舞妓作者の上手はなきもつと感心の餘りいよ
ゝ道の妙を探り得んと修行しける程なく三の替り
の相談靜なる貸座敷にせふと宗左が差圖座敷をから
ふにも奇麗な所は宿賃高し寄合芝居の金も出じ止む
なく濱屋敷の明屋家守を調子にのせてたゞ借り古疊
四五疊に茶瓶風呂に眞黒な羽釜をかけ辨當持寄狂言
の相談場元より河岸へ掛出したる濱屋敷の荒地下は
物置納屋しまりの戸もあばらやにやぶれ損せし透間
より吹上る下屋風根板の上には作者の面々煎餅の様
な借蒲團身にまとひまだ如月の餘寒もはげし伯母が
心を焚しめた小袖を島迄めさるゝ鼻唄もおどぶる
ひながら狂言の相談の間には役者のそしり話に夜も
ふけ四五人がそれなりけりにまろび寐いとあはれな
る寐姿寒さひだるさこたへられずぬけ出てかへるも
あり心安き方へ酒のみにゆくもありこそやへうまり
にぬけるもあり残るは宗左治藏兩人狂言の工夫につ
かれ寐の枕もと治藏ゝと呼ぶ聲にフツ目さませ
ばヒツトロゝにて四つの魂宙にぶらついた治

藏きつと見てがてんゆかず舞臺でつかふ樟腦火の人玉は見馴たれど是は正しくさしがねでつかふにあらすたゞし化物屋敷かかゝる繁華の地に狐狸の栖も珍らしい何にもせよハテ希有な事を見るなアと寐ながらまじ／＼ひとり言おろかや治藏我は是並本宗助松屋來助じゃはやい是なるは姉川新四郎殿藤川半三殿役者にて名作者なることそちもよく聞しるらん我々四人が來りしはそちに作者道の秘事をつたへん爲極樂芝居の休みの間に假にあらはれ來たれりと寐鳥ドロ／＼は芝居の様なれど何にもせよ作者の秘事をつたへんとある四人の名作者達いかなる大事を傳へ給はらんおしへ下されかしと始て尻もつ立て敬へばさもそうす／＼此道に執心なるそちが心をあはれみ立作者となる秘事の一卷開き見てとくとゑとくせよ併し冷酒をのんで半途にして根氣を破る事なかれといふかと思へばドロ／＼火の玉は四方になくなり上からばつたり落たは一卷なり治藏始て悦喜の眉一卷取ておしいたいき四人の作者は四天王其秘事なればさぞやさぞ張良が黄石公に一卷を貰ひしは唐土の下邳の橋の上是は日本道頓堀の空家の内エ、大願成

就忝しと其儘開き見るに大文字にて第一氣轉第二大膽第三上根第四記臆第五堪忍と計り書附て外に何にもなし是は何の事じや秘事でもまつげでもないハテかわつた事を書た物じやとあざける體相に宗左むつくと起上り最前からのあやしみ寐た體にてとくと聞たりそちは稀もの故人の生靈に傳を受るとは作者道に叶うたる仕合せ我もあやかる爲其一卷いたゞしくれよとあるに治藏猶もがてんゆかずスリヤ此五ヶ條は先生のいたゞく程の名語でござりますかいかにも／＼先第一に氣轉と書たは作者道の肝要たとへば古き狂言を仕組改め新らしく見せるが歌舞妓其中において役者の遣ひ様を工夫して其場の模様を目あたらしう仕組時々の見物の悦ぶ穴をとらまへ所に定の狂言を取廣げる時は一日はでにして役者によく合ひ面白がるべしさればこそ大坂狂言は京にてしぶくて見物の氣にあはぬ所もあり又京狂言は大坂では一向手ぬるし江戸狂言はさる物着て帶せぬにたとへ何れそれ／＼の氣轉第一也第二大膽とは膽が太くなくては仕組になつても行つまりどの様な上手なる役者でも糞屎屁屎に思ひ丁稚小女童つかふ心にて仕組めば

机の上よく見へ役者自由につかはるゝ物也第三上根とは下根では上作者にはならぬといふ禁なり第四記憶とは物覺のよいこと今誤つて氣丈なると取違へ覺へたるは作者の文旨がしれて恥かし古狂言を能覺前々の上手の仕組をとくとがてんしてゐる時は舞臺机の上に見へて役者に働らき付やすし第五堪忍とは作者の心入れなり此道によらずよく堪忍する物は立身出世せし事古今藝者に限らず就中操作者と違ふて口からさきへ生れたる役者を相手にする事屎糟の様にいはれても腹立ず狂言本打付てこんな狂言がなる物かおのれして見いひりくそ作者の給金盗人めと惡たい云はれても何とも思はず又は惣々こぞりかゝつてあほらしい狂言じや是をおめくゝとよふ本よみがしられた事じやとたとへ叩かふが張まはそふがへちまとも思はず堪忍して幾度も修行じやと心得しかられた顔もせず仕組あらためて役者の穴をとらへるが肝心腹立たり口おしいと思ふ心が有ては此廓にすまぬがよし昔より藝者根性といへば今更の事にあらずよくゝ堪忍を守るなり此五ヶ條は名作者の性根魂なる事先師並木宗助口受の意見おれが心魂にゑり付

置たり然るに今までのあたりのふしぎの一卷授かりしは天晴上作者に成べき前表たのもしゝと逐一に利害をとけば治藏ほとんど感じ入やゝ有て一卷懷にねぢこみ物をもいはず根板ぐはたゝゝ空家の戸蹴立て飛ぶが如くに立かへりけり宗左跡に片頬で笑ひあいつは何を思ひ出しをつた渡邊の嬢になつて是取ふ計りじやと破風蹴破りしけしきはてなアと夫より案じかけのもやう烟草と相談しける扱治藏は夫より謀反を起し師匠と頼みし宗左を敵にとり晝夜根氣をくだき五ヶ條の法を守りわづか三年の内に一方の大將となりしはゆゝしき嗚呼の者也なれども命を的に仕上たる作者故勞れ毎には茶碗の一こくのみ冷酒のといこふり心の火を削り終にヒュウドロゝに成しはその身の本望とやいはんもと治藏は立作者となつて名を上たるは作者道の祕事の一巻所持せし故と兼々沙汰有ければ治藏が息引とるといなやならず作者の面々悔にゆくを付たりにてかの一巻を奪ひとらんとたくらみ我一後家をたらしこみかの一巻をいたいかしくれよとたのみ取出し見せる所を互ひに奪あひつかみあひ何が書てあるやら血眼になつて喧嘩の

最中へ宗左のら／＼と出来り各さなせそ／＼其一巻の曰因縁おれがいふて聞かそふ元來其巻物はおれが拵へて其夜芝居の魂を釣おろし家根から付聲にていはせ一卷を雨のもる所よりほふつてやりしもきやつは上作者になるべき性根魂を見すへ心をはげませし計略鬼一法眼の三段めの趣向うつむけしと咄を聞て皆々はアレと喧嘩の腰もぬけ作者始てがてんがいたかゆかぬかまじくじ／＼

右當世芝居賢氣は安永六酉年浪華半井何某が戯作にして京寺町三條上る菊屋安兵衛の板なり五冊物にて役者を始淨瑠璃語り三味線ひき人形遣いなど數段有る中に此一段は狂言作者の因みあれば爰に出す文中並木宗左と云は並木正三瀧田治藏は竹田治藏の事にて秋葉權現廻船話など書たる寶曆中の作者にておかしければ寫し置ぬ

竹豊故事の序

時つ風浪靜なる難波の濱むかしの京と名に高き高津の宮の高臺に登りて見れば煙立茶屋はいろはの四十八櫓は八つの定芝居爰繁榮の大湊ふかき恵や道廣き道頓堀の片邊に住居する老人有年壯き砌より竹本豊

竹の淨瑠璃を好てかたる事は不得手なれど聞事は好者なり幾年か東西の淨瑠璃操の替りを見放したる事もなし住家より程近ければ芝居の木戸口へ成共毎日通ひ外題看板にても見てかへらねば氣分勝れずあまり此道を好るゆえ知れる友達異名して筑後越前の頭字を取筑越翁と稱じける獨住身の氣散じと虧天目と徳利引寄一杯の酒に酔を催す酒吞童子の道行月に分れて月に行實や盧生が見し夢の榮華の程は五十年借の浮身の樂みと雪の段を副臥とし一睡せるぞ豊なれ時東雲の頃なるに若き者共數十人入來り先生は御内に有ますかと案内す主は空と起て戸を開き是はく未夜も明ざるに各打連立ての御越は芝居行と推したり初る迄は餘程間も有ぬらん先煙草にても參緩々と御出あれして各々方は筑後へか越前へかとなつぬれば大勢の中より親父分進み出否此人數の中にも豊竹へ參る者も有又竹本を見に參る人も候が斯同道して宿元は出ましたれど西最負の東連中のと二組に別れて動もすれば喧嘩を仕出し姦しい事でござります先生には此道の御粹方ゆえ芝居の譯を御存の義なれば若い者共が片意地成最負論をいたさす納得仕る御示

しを頼みます然ればまづ今日は芝居行を追ての事に
いたし幸ひよい次手なれば淨瑠璃の由來物語が聞ま
し度存ます若い衆いづれも何と／＼と尋ねれば皆々
聞て是は一段とよい思ひ付御苦勞ながら御咄を頼み
上ます筑越翁聞て同氣相求る御所望幸ひ某しも徒
然の慰み然らば物がたり致すべしと大字七行の稽古
本二三冊と巻物一軸とをたづさへて座上に居り此來
歷の義は餘程年經りし事と云又物覺へ薄きは老人の
習ひ傳へ聞しに違し品も忘れたる事も多からん併所
まだらに咄し申さん聞給へと破れ扇を又に構へて聲
繕し東西／＼東ヲ、西イ

寶曆第六丙子の年

浪速散人一樂

右竹豊故事三卷は我家の板にして芝居の濫觴淨瑠璃
の由來太夫の受領を始古流の太夫の評三味線の由來
操人形のご事に至る迄筑越翁のはなしに寄て實に盡
せりといふべし其文淨瑠璃歌舞妓共に通ずる確言一
二段を爰にいだす

音曲狂言綺語の事

惣じての音曲を名談集には郢曲共俳優共戯遊共云な
り何れも狂言綺語の戯れ事なりと云々狂言とは物狂

は敷詞なり法界次第に曰綺は側なり語は辭なりと云
心は道理に卒を綺語と號と云々周禮の註に曰發端を
言と云答述るを語と云と云々毛詩の註に曰直に言を
言と云論難するを語と云と云々然れば狂言綺語と云
は堅き事を和らげ或は方便の爲に戯れ言をなして愚
なる人を善道に導く謀計の誠なり白樂天の洛中集の
記に曰願くは今生世俗文字の業狂言綺語の誤を以て
翻して當來世々讚佛乘の因轉法輪の縁となし給へと
云々此文に依て見る則は諸法實相の理顯然たり峯の
嵐谷の響き鴉鳴鵲噪皆佛法と觀す況や此淨瑠璃の文
句趣向表には世間の戲相を顯すと雖勸善懲惡の深理
をふくみ詞には當世の人氣をさつして作文をなせり
神祇釋教幽玄戀慕哀傷兵戈君臣父子夫婦兄弟朋友等
の五倫の道を正し世の爲人の爲専ら賞翫すべき道な
り信すべし見物すべし聞べし心を止て語るべし

呂律五音十二調子の事

夫若以謠淨瑠璃等の郢曲の譜は狂言綺語の嬉遊言也
とは雖も其態堪能に達する時は音義正しく大鐘大族
姑洗蕤賓夷則無射等の六律に通じ大呂夾鐘仲呂林鐘
南呂應鐘等の六呂にも達す史記の正義に曰律は氣を

統べ物を類す呂は陽を統て氣を宣と云々呂律調和すれば化來宮商角徵羽の五音に達せる故衆人の六根に徹して心耳を清させ六塵六情の偏欲を厭離なさしめ神魂を清淨になさしむるなり調音秘訣に曰○甲は聲の始なり其音上つて天の五蘊と成寒暑燥濕風なり呼吸則天なり陽なり一調子高きを甲の音とす○乙は聲の終りなり其音下つて地の五立と成金水木火土なり吸息則地なり三調子下るを乙の音とす○呂は悦びの音なり陽なり雙調黃鐘一越調等は呂の音なり是天を司どる天上には樂多き故に此調子を悦の音と云なり○律は悲しみの音なり平調盤涉は律の音なり陰なり是地を司る下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす○角の調子は肝の臟より出る和調にして直なり是雙調なり○徵の調子は心の臟より出る和調にして長し是黃鐘調なり○宮の調子は脾の臟より出る大に充て和かに緩しは一越調なり○商の調子は脾の臟より出る軽く少けれども勁し是平調なり○羽の調子は腎の臟より出る沈て深し是盤涉調なり○壹越斷金平調勝絕下無雙調鳧鐘黃鐘鸞鏡盤涉神仙上無是を十二調子とも十二律とも云なり

熟思ふに筑後越前は天性の達人にて音聲の開語自然と五調子十二律に合ひし淨瑠璃一道の聖也孟子に曰大に而之を化するを聖と云と云々生得にして事の理に達するを聖と云也と註す然れば兩元祖の當道に達せられし所を以て見る則は聖といふに何ぞ憚る處のあらんや周易の略註に曰聖人の道は天地の萬物を育るが如しと註せられしは尤宜なる哉竹本豐竹の兩氏當道を世に弘められし德に依て今當流の淨瑠璃世上に専らに流布し是を産業として世を渡る人諸國の中に幾千萬人といふ數をしるべからず天地の萬物を育てやしなひ給ふ理に違ふべからず其功大ひならずや

名人上手下手評判の事

故陸奥茂太夫多川源太夫豐竹幾世太夫竹本播磨掾同頼母大和太夫和泉太夫河内太夫以下其時代に名人と呼れし太夫衆も筑後掾越前掾の兩元祖に及ぶ音聲は一人も有べしとは思はれず兩祖師は天性自然の達人なる故に卻句甲乙編頗の輩の師範にはなりがたかるべきか其故如何となれば斯る衆中の師傳を受得ても音聲不都合の輩は其流を直寫しに語る人は稀成べし

喩へば龜相なる木地の道具を上手なる塗師がぬり上たるを又島桐さつま杉杯の空目よき木地道具との違ひ有がごとく成べし兩元祖は木地道具の如し其外上手分と呼るゝ衆はみな下手を塗上てよく仕立たる上手成べし夫故に今の世に譽れ有衆中は皆下手を塗直して能藝にする筋を魂膽しての上素人の弟子中に教へらるゝ故に此理を以て考ればかやうの太夫衆を師匠と頼み稽古せられれば利方よからんと存せらる故竹本播磨掾當時の豊竹筑前掾豊竹駒太夫竹本錦太夫等は音聲兼備の達人と云にはあらざれ共切磋琢磨の功をつみて名人の譽れを取られしと存る兎角上手ぶんと呼るゝ太夫衆は何分にも生質の器量薄くては名は揚られまじ又都ての藝者に名人と上手と下手の三品あり先名人と云は其一道に生れ付ねば達人名人杯といふ場にはゆき届がたかるべし下手にても骨髓に徹して其藝に執心ふかく修行の功つもりなば上手といふ迄にはなるべきなり名人に成べき淨るりは未だ功もなき内より程拍子の間合能關語譯能開へ清潔なる音聲なる上序破急の氣轉取廻しよくかたらるゝ人は名人に成べき器量兼て見へ透ものなり然れども其名

人と成べき仕出しの淨瑠璃なれども稽古修行に精の入らざるは惡挫になり上手分と云場迄も行といかず終る太夫衆も有しなり又炊付て當をとらんとのみおもひ語る衆中は大方下手分の爲業なり顔氏家訓に曰上智は教ずして成下愚は教ふといへども益なし中庸の人はおしへざれば知らずと有此語實に宜成かな所詮名人と云は藝の道堪能にして其爲す業自然と至極の場にいたり感應見物の心魂に的するを云成べし故竹本筑後掾同播磨掾隱居豊竹越前掾三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は神化不測の名達人と稱して誰か非言あらんや次に上手といふは夫々の業をよくなすを云ふなり併し上手なれ共名譽の少き人も前々に有し故陸奥茂太夫竹本頼母和泉太夫等なり又上手の至る所にて名譽有しは故河内太夫當時の竹本大和掾同政太夫等成べし又上手分の中に大丈夫なる聲柄は見物のほむる掛聲も多く是等の衆は時に合たる名物と云べし故竹本大和太夫當時の豊竹若太夫等を云べきか何分上手と呼るゝ太夫は數無そ

太夫教訓名言の事

井上播磨掾清水の理兵衛に示されて曰淨るりの一體
秋は随分聲花やかにかたるべし是人の陰氣を引立ん
が爲なり春は引玄めて和らかに語るべし人の氣浮立
時なれば引しめざれば人の情寄らず時の氣に乗じて
やはらかならざれば人の情に應へがたしと教訓せら
れし由是に依て思ふに増補鍊槌に北村季吟の曰呂は
凡て和らか成音なり律は立て硬き音なり唐土の音聲
はやはらか過て聞わけがたし日本の言語は清濁分明
鮮然にして剛く聞ゆる唐土は呂の國なり日本は律の
國なり是和漢呂律の不同呂は陰律は陽なり和朝には
呂は春に用ひ律は秋に用ゆ唐土は是に反すと云々依
之見る時は井上氏も此理に達せられし名人と覺る
竹本筑後掾へ陸奥茂太夫初心の砌問て曰女の詞はい
かゝ心得てかたり可申や筑後掾答て曰第一に傾城の
詞をよく合點して語るべし瓢々と語れば懦弱に聞
えて下品なりたゞ取止なく茫然と柔從成言葉を能々
考へらるべし是さへかたり厭煩るれば外々の事共は
皆語り易かるべし其故如何となれば語る處の者元來
男成故佶としたる事は生質に持て居る故なり次に心
得べきは高位成御方の詞をばよく勘辨せらるべし貴

き御方の詞なりとて位を取過てかたれば仔細らしく
成て聞ぐるし此段稽古に工夫せらるべしと教訓有し
とかや

豊竹越前掾門弟和泉太夫河内太夫等に玄めされて曰
藝に精入ると云はわが役割の場をよく工夫して稽古
に飽迄精を出し扱床へ上りて心を安らかに思ひてか
たるべし稽古に精を入てさへ置ぬればやすらかにか
たりても少しも間拔はせぬものなり兼ての工夫に心を
盡さず床にて計り精を入れるれば力身立行づまりたる
様に聞へて賤し其上操へのうつり人形の働迄が不都
合に成とおしへられし由聞たり

加賀掾門人宇治甚太夫伊太夫寄合談せしは師匠のか
たらるゝ節所は見物衆極めて讃ざると云事なし我ら
は随分精を入大事に語りても見物衆の掛聲なきは合
點ゆかずと咄し合けるを加賀掾聞て曰皆の衆はかた
り出すと否や讃られんと而已思ひ始終面白き様に語
らるゝ故要の場に至つて聲いたみ聞ゆる故讃度ても
聲の掛られぬ様に成なり某はたゞ何となく安らかに
語り節所の場所にいたりて精を入語るなり始終共見
物衆の掛聲をとらんとのみ心得ば肝心の場當るべか

らずと云々かゝる示しを傳へ聞れしにや又自分の發明成や故竹本播磨掾當時の豐竹筑前掾等は此教訓の理にかなひし語り方の様に聞ゆる也

岡本文彌の曰荒事を語る時は淨瑠璃の文句相應に強みを引張て語るべし上邊計りを語り並べても人形の働きと相應せず心と形と二つに成る故當り目なしと云れし由尤成理なり併し事は一圖に計了解すべからず或太夫酒の酔の場を受取てかたられしに床へ上る時に臨んで茶碗酒を二三盃吞で語られしに一段と見物の請よく出來晴せしとかやかやうの人に若手負の場杯をかたらさば床へ上る時毎日肩先にても二三寸計り切られて後に語らるゝや一笑ノ何様の場成共只一心の工夫に有るべきなり

芝居を勤給ふ太夫衆は文句の清濁り節付等にも心を付給ひて兎相の無様に心得給へかし物置納屋の連子は破れても人目にたゝず座敷の障子紙は少しの破れにても見苦しく元祿年中に岡本文彌のかたられし淨瑠璃に老女の戀慕せる段の文句にしらがみすじに油付と云所を岡本氏は白髪三筋に油つけとの關語にかたられしなり虎屋源太夫此處を難じて曰此文句作者

の心には白髪筋に油付にて有べし如何なれば三筋や五筋の髪の毛には油を付る事は成まじ勿論三筋計の白髪は目にも見えず手にもかゝるまじ併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非に及ばず一聲二節と云なれば文盲にても時の譽を取し人なりと云々故實を知り顔に自慢せられても聲がらの甲斐なき人を喩へて云ば智恵有人の貧乏成に同じ不都合にても聲のよき語手は有徳成人の阿房に同じ賢くて金持たらんは猶以て好ましかるべし然れば聲のよきを頼みにして修行のうすき太夫衆は名人といふには成がたかるべし

藝者の身の上計にも限ざる事なれど運の能と悪きと有先運あしき人は至極の上手なれども時に合ずして用ひられぬ身の上も有或は自分の器量を顧みず古實を守るがよひと計り心得筑後越前兩元祖のかたられし通を直寫しにせんとのみ思ひ語らるは了解違ひといふべしかゝる人をたとへて云ば學問によく達したる僧の談義の下手なると同意なり佛の本意計説て方便の説をまじへざれば聽衆眠氣出次第に參詣も薄らぐものなり然れば何を以て衆生に濟度利益を施さん

や機に因て法を説と云なれば此段淨瑠璃に引當工夫有べし併し芝居を見淨瑠璃を聞は鬱氣をはらさんが爲の慰み事なれば兎角して成とも見物衆を悦ばさんと名譽有し太夫達の眞似をし又は歌舞妓役者の詞色を似せ或ひは放曠にて當りをとらるゝは本道の當りとは云難し道外がましき語り方は場の見物衆へはあたりは有べけれど棧敷に居らるゝ衆の耳へは悦ばれまじ何とやら此近年に及びては兩元祖のかたり弘められし遺風はうすらぎし様に聞ゆる也

五段續語場役柄の事

連中間て曰淨瑠璃五段つゞき十一二幕の内いづれの場か大切に候哉筑越翁答て曰是を五段に綴るは能の番組に同じ初段は脇能二は修羅三は葛事四は脇所作第五は祝言なり大體是に表せる物なり其内第一太夫の重んずる所の役と云は大序と三段目の切第二は四段目の切と道行第三は二段目の切と三段目の口なり第四は初段の切と四段目の口なり又出語りは三段目の詰と同敷大切成役なり其外作趣向に依て景事杯に限らず此餘の所にも要とする能場所有べし古來より兩元祖大概此意を以てつとめ役割をもせられたり右

に談する如く大序は一座の立物太夫のつとめらるべき第一の大役なり先は其日の祝義と云次には見物衆への一禮の爲なり尤一部の始なれば末々の輕き衆には語らせ間敷場なり爾雅の釋語に曰序は叙なり緒なりと然る時は其綱要をあぐる事蠶の絲を抽づるが如しと云々序と云字を糸口と訓なり其糸の口亂れなば始終の亂と成なんものを然るに此近年良ともすれば輕き太夫衆の大序をかたらるゝは歎かはしき事にあらざるや併し今時の太夫達は兩元祖ほどに大丈夫にあらざる故三段目四段目の本役を大事と思はるゝから未だ見物も入そろはざる間の役目故此大役を未熟なる衆中に勤さるゝと推量せり故筑後掾存命の節は今時ほど淨瑠璃も長からず越前掾時代に至りては五段續も次第に永くなりしか共大序三段目四段目の切は勿論五段目に景事の有しか共要の場は越前掾一人しつとめられしなり老子經に曰天下の難事は必易より作る天下の大事は必細成より作ると云々然れば大序は勿論其外の役義をゆるかせにし給ふべからず又末々の太夫衆初段の中五段目落合等の輕き場を受取給ふとも其役義を大切に存られ工夫を付て勤め給は

い次第に立身し給ふべしさせる場にあらすとして捨鞭を打給ふ事なかれ

淨瑠璃作者の事

淨瑠璃の作者と極まりたる人古昔はなし俳諧師あるひは遊人などの慰みに作れり中昔暦といふ淨瑠璃は西鶴翁の作也とかや是を産業となせる人は近松門左衛門に始る此人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察し世間の世話をよく吞込て百餘番の淨瑠璃を作られけり文句玄妙不思議を綴る元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ本姓は杉森氏にして由緒正敷人なりしが故有て浪人と成又宇治加賀掾の淨瑠璃をも作られたり此人世上作者の元祖なり其後大坂に立越竹本筑後掾の作者とならる享保九年辰十一月廿二日七十餘歳にて死去せられぬ平安堂巢林子と號す法名は阿梅院穆矣日一具足居士と稱せり近松氏過ゆかれしか共猶餘光失す相つゝ數多の作者出來りて趣向作文をなすといへ共元來近松程の器量なき故か古語の取誤り古實の相違有職のたがひ等間々ありて見聞苦しき品も多ければ畢竟は狂言綺語也と了簡せねばならず併し機轉發明の作意劣らぬ所も有又は希有の

趣向等も出さるゝ故大當りを取らるゝ段是亦何れも達人と云はんに強て難有るべからず其外作者と名を揚られし人々には錦文流村上嘉助紀の海音西澤一風筑後の座本竹田故出雲松田和吉長谷川千四並木宗助同丈助安田蛙文爲永太郎兵衛江戸にては北條宮内塚原市左衛門岡清兵衛等此外にも有しかど換骨の餘情薄く名高き衆ならねば略し畢ぬ併し是等は皆故人と成られしも多し當時東西の座共に名譽を顯はされし作者達は人々の知れる事なれば談するに及ばず

淨瑠璃古今の序

夫淨瑠璃は人の心を種として万の趣向とはなれりける世の中に有人事業繁き物なれば心に思ふ事を見る物聞物に付て作り出せるなり色に愛る世話事義理に清る時代事を見れば幾年生るもの何れか此道を好まざりける力をも入れずして人の情を感せしめ嫁を惡む姑にもあはれと思はせ男女の中をも和らげ憎き親父の意をも慰むるは此道なり過し時世の竹本筑後掾なん淨瑠璃の聖なり又豊竹越前掾といへる人有けり淨瑠璃に奇敷妙なりけり頼光山入の道行は竹本氏の一節に綾錦の如く語り雪の段の出語りは豊竹氏の音

聲に雲井迄も響きなんと思はる越前は筑後の上に立
む事難く又豊竹は竹本の下に立む事難くなん有ける
此人々を置て吳竹の世々に蔓茂り多き門弟達の中に
竹本播磨掾なん世に知られし名人なりしかど惜や不
幸にして短命なり爰に往古の事をも此道の意を得た
る人當時は僅に五六人なりき而はあれども彼是得た
る所得ぬ所なんあれり豊竹若太夫は歌仙第一僧正遍
昭の歌の意に同じ淨瑠璃のさまは得たれども其言葉
花にして實少し譬へば圖に畫る女を見て徒に情を動
かすがごとし

豊竹筑前掾は歌仙第二在原の業平の歌の意に同じ其
情餘りて調子低し譬へば盛り過たる花の色は少しと
いへども而も薰香あるが如し

竹本政太夫は歌仙第三文屋の康秀の歌の意に同じ淨
瑠璃は功者にして其體俗に近し譬へば商人の好衣着
たるが如し

豊竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ詞幽
なる様なれど始終り正しく喩へば雲隠れせし秋の月
の曉の風に晴るゝがごとし

竹本大和掾は歌仙第五小野の小町の歌の意に同じ古

への竹本頼母の風なり音聲艶敷して氣力なし喩へて
謂はゞ好女の惱める所あるに似たり

竹本錦太夫は歌仙第六大伴の黒主の歌の意に同じ頗
逸興有然れども少し野鄙なりたとはゞ薪を負る山人
の花の蔭に休めるが如し此外の太夫達其名聞ゆる野
邊に生る葛の榮擴ごり林に繁き木の葉のごとく多か
れど未だ淨瑠璃の奥義には至らざるべし竹本の流絶
せず豊竹の節細にして正木の藤永く傳り鳥の跡久敷
とゞまらば程拍子をも知り事の心を得たらん語人達
は大空の月を見るが如くに上代を仰で今を希望ざら
めかも

淨瑠璃東西外題番附

天明年間竹本豊竹東西の淨瑠璃外題を見立番附とし
て半切二枚にわかし角紙番附の如く摺し板行の寫を
爰に出す

西方

大關 五段續

關脇 同

小結 同

前頭 同

同

同

同

同

同

同

同

同

勸進元竹本

國姓爺合戰

ひらがな盛衰記

蘆屋道滿大内鑑

菅原傳授手習鑑

大塔宮 儀 鎧

大内裏大友真鳥

加賀國篠原合戰

三浦大助紅梅鞠

須磨都源平躑躅

鬼一法眼三略卷

壇浦兜軍記

夏祭浪花鑑

義經千本櫻

假名手本忠臣藏

新うすゆき物語

小野道風青柳硯

東方

大關 五段續

關脇 同

小結 同

前頭 同

同

同

同

同

同

同

同

同

入場

勸進元豐竹

北條時頼記

祇園祭禮信仰記

和田合戰女舞鶴

頼政追善 芝

清和源氏十五段

攝津國長柄人柱

後三年奥州軍記

糸仙人吉野櫻

那須與市西海硯

荻萱桑門筑紫轢

藤原秀郷俵景圖

釜淵雙級巴

一谷嫩軍記

風俗太平記

東鑑御狩卷

八重霞浪花濱萩

行司

近松門左衛門
松田和吉

行司

紀海音
並木宗助

前頭

七場
初中後

男作五鴈金

前頭

五段續

相馬太郎孝文談

同

五段續

愛護雅名歌勝関

同

同

義仲勳功記

同

同

津國女夫池

同

同

倭假名在原景圖

同

同

佛御前扇車

同

同

百合稚高麗軍記

同

同

井筒業平河内通

同

同

安倍宗任松浦箋

同

同

三莊太夫五人嬢

同

同

本田善光日本鑑

同

同

信州川中島合戰

同

同

武烈天皇

同

同

右大將鎌倉實記

同

同

潤色江戸紫

同

同

小栗判官車街道

同

同

酒吞童子出生記

前頭

御所櫻堀川夜討

前頭

忠臣金短冊

同

本朝三國志

同

建仁寺供養

同

行平磯馴松

同

身替弓張月

同

平家女護島

同

客競出入湊

同

姫子松子の日の遊

同

岸姫松櫓鑑

同

相摸入道千足犬

同

楠正成軍法實錄

同

戀女房染分手綱

同

前九年奥州軍記

[illegible]

西澤文庫傳奇作書續編上の卷

前頭

雙生 隅田川

前頭

同

七 小町

同

同

車還 合戦 櫻

同

同

應神天皇八白幡

同

同

赤松圓心綠陣幕

同

同

京土産名所并筒

同

同

軍法富士見西行

同

同

楓狩 劍 本地

同

同

本海道 虎が石

同

同

曾我 扇 八景

同

同

心中 天網 島

同

同

心中 宵庚 申

同

同

心中 二枚畫 雙紙

同

同

卯月 の 紅葉

同

同

冥途 の 飛脚

同

同

河内 國 姥火

同

同

二人 靜胎 内探

同

同

百合 若野 守鑑

同

同

傾城 吉岡 染

同

同

鎗の 權三重帷子

同

鬼鹿毛 武藏 鎧

けいせい 三度笠

けいせい 吉原 雀

鎮西 八郎 唐士 舟

日本 傾城 始

賢女 手習 鑑

心中 戀中 道

西行 法師 墨染 櫻

南北 軍問 答

お初 天神 記

曾我 錦兒 帳

記錄 曾我玉簪 筭

大佛殿 萬代 礎

蒲冠者 藤戸 合戦

源家 七代 集

赤澤山 伊藤傳 記

秀伶人 吾妻 雛形

萬屋助 六二代 紙子

和泉國 浮名 溜池

尊氏 將軍 二代 鑑

同 同

長町女腹切 賴朝伊豆日記 曾我五人兄弟 博多小女郎浪枕 娥歌がるた 松風村雨束帶鑑 日本武尊東鑑 鎌田兵衛名所益 忠信廿日正月 雪女五枚羽子板 兼好法師物見車 伊勢平氏年々鑑 元日金年越 太政入道兵庫碑 丹州爺打栗 兒源氏道中軍記 伊豆院宣源氏鑑 双蝶々曲輪日記 將門冠合戰 崇徳院讃岐傳記

同 同

南都十三鐘 待賢門夜軍 本朝檀特山 鎌倉比事青砥錢 戀の寒ざらし 女蟬 茜染野中の隠井戸 狹夜衣鴛鴦羽 鷗山姫捨松 本朝班女扇 青梅擇食盛 播州皿屋敷 道成寺現在 紀僧正旭車 遊君衣紋鑑 詩近江八景 浦島太郎倭物語 花筏巖流島 萬戶將軍唐土日記 夏楓連理枕

身替弓張月の寫

享保十巳年五月豐竹座淨瑠璃丸本今年迄百廿六年に
なるむかし狂言なれば寫して爰に出すものなり

美丈御前
幸壽丸

身替弓張月

作者

西澤一風
田中千柳

鷹の身馬の足牛の尾まろき蹄蛇の頭燕の頤龜背魚
尾の妙質いかなど時に得がたしとせん文武を兼し
英雄良士則人の麟鳳にして。徳をならぶる聖が御
代六十六代一條の院。寶算わづか七歳にてあまつ
工を日の本にチロシうけ繼給ふぞ。やんごとなき。
君いとけなくまします故。

古今いろは評林の序

陳眉公的、評西廂記、李卓吾的、評琵琶記、千古撮
當、後人尙且、有紙鶴泥龜之悞、是个甚麼緣故、謂其
翹不施足不縮也、原來院本的評論、世人唯知介做
乾扮做坤、未知凍暖蒸寒之趣意、是故到底不免
膠柱鼓瑟之見識、噫嗟蠢子無眼、知情有僻、是个
古今通病、遂入膏肓、況且後世灰飛煙滅、不見一個
扁倉、平安自笑主人、原是插趣的元師、其論俳優、真
個似詹尹君平的善卜、唐舉子卿的善相一般、些寸花

嘴、說綠談紅、遇人所喜、登場子弟縱然做套做
圈、能穀得青龍擬白虎麼、件々有君眼中、如今這
忠臣藏院本、生則上從澤郎訥子、下至尾上芙蓉、三
都四十余次拘欄、一座之且、淨、丑、渾、論其本事頓
盡、其明辨當論誰入簾麼、啊噫恁地的咱、自笑主人的
才却在陳李二公之右者可知、俺於自笑、一路友
班、故人所謂酒兄肉弟也、諺道狸子打鼓猫子舞、得
不爲左氏之作玄晏麼、奉勸當今趨情步趣的徒、死
心塌地、熟讀這書、他日做那知情的掌盤者、不待
七十三八十四呢、于時天明乙丑之冬日、書于淨福
門前、一條衞衞之寓居、

平安第一風流才子宿花眠柳幫襯主者

出生子

古今いろは評林の發端

己を發して白盡すを忠と云とかや其心を盡して欺か
ざるなりとは自然の字論忠を體として義を要となす
の作意、どう取なしても當らざるといふ事あらず
抑元祿十五癸午年東武なる俳諧師寶田晋齋其角のも
とより浪花の何某へ來りし文中に

此程の一件も二月四日に片付候て甚噲とりく花

やかなる説も多くして無上忠臣と取沙汰此節其事
計に候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致し
て十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事
遠慮も有べきよしとて三日して相止候前後略口但し
少長は元親中

村七三郎傳吉は
二代目宮崎也

是を此趣向の始として大坂にては寶永七寅年篠塚庄
松座におゐて吾妻三八作にて則篠塚次郎右衛門大岸
宮内の役力彌には中興までつとめし佐野川萬菊若衆
がたの時是を勤めしが歌舞妓狂言にての始として此
狂言大當りなるよしとて中寺町正法寺日親堂へ繪馬
に此圖をあらはし次郎右衛門悦びの餘りに是を奉納
なし今に残れりとぞ京都にては同じく寅年の秋二芝
居共右狂言を出す一方は大岸宮内に山下京右衛門一
軒にては小佐川十右衛門此役をなす小佐川跡より初
日出たれども大々あたりを取しとぞ其後享保二酉年
大坂にて故澤村長十郎大岸となりて姉川新四郎寺岡
平右衛門の役をぞ勤め大當りを得て同十一年年の秋
大坂嵐三右衛門座にて又も澤長此役をなせど此時は
狂言少しかはりて不破數右衛門に嵐勘四郎勤めしな
り享保廿卯年四月大坂にて中村十藏則座本にて大岸

宮内の役をなして此時堀部安兵衛に藤川平九郎夫よ
り後狂言いろ／＼とかはり作るあるひは大岸に姉川
新四郎などの勤し事もあり後延享四卯年京都中村衆
太郎座元の時大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎
後に助高屋高
助元親談子大岸役にて六月朔日より初日出して大入
を取しなり其矢聲大坂にひゞき同じ外題にて市山助
五郎宮内の役にて狂言つとめたり今の假名手本七つ
目は此時澤村宗十郎が形となりて凡其係を手本と成
來れり其後歌舞妓狂言にも

寶曆十一年巳十二月廿二日

泰平いろは行列 續 十 段

大坂角の芝居
座元中山文七

明和八年

小袖藏いろは配 七 冊 物

京北側西の芝居
座元尾上乗助

安永六年西十二月八日

日本花赤穂鹽竈 四十七段續

大坂角の芝居
座元小川吉太郎

是らも追々出て各當りを取るといへども兎角忠臣藏
出て後は此狂言を第一として仕打も是にこそ工夫物
好を入大に委く成たり

一操淨瑠璃狂言にては其頃近松門左衛門作にて寶永
三戌の年五月五日より竹本筑後掾の座に兼好法師物
見車といへる切に基盤太平記と外題し此趣意を出し
たり尤此淨瑠璃には高師直鹽谷判官また大星由良之

助と出し初たり又豊竹越前少掾の座にては享保十八
 丑年十月朔日より忠臣金短冊と外題を出したり此時
 は小栗横山の時代にて大岸由良之助の名で出たり夫
 より後寛延元辰年八月十四日初日として同竹本座に
 て初て假名手本忠臣藏と外題を出して大當りの評判
 つよく有しが其頃太夫がたのもめ合出来て此太夫島
 太夫など半にして豊竹座へ入かはりて大和掾初め内匠
太夫後有
 軒上總太夫入來りてしばらく勤といへども自分の節
 付なせし程にもあらねばおのづから勢ひうすく成り
 て思ひの外に其年十一月中頃迄して蘆屋道滿にぞか
 はりたりされども始にいふ如く此狂言のほまれつよ
 くして始の大岸宮内の名は是にて消て是よりして大
 星由良之助にぞ改りたり故吉田文三郎此大星の人形
 を遣ふもかの澤宗訥子が風儀をあらはし並木宗助が
 作意に丸にて七つめを其儘にて用ひ入たりとぞ
 一操淨瑠璃にて同趣向の狂言の外題其年記をしるす
 竹本座は 碁盤 太平記 上下 寶永三戌年五月
 假名手本忠臣藏 十二幕 寛延元辰年八月
 太平記忠臣講釋 讀切 明和四初日
 十一幕 十六日初日
 碁方武士鑑 十幕 明和九丑年七月
 廿八日初日

いろは藏三組盃 續十幕

豊竹座は 忠臣金短冊 五段續

難波丸金鶏 五段續

いろは歌義臣鏊 十段續

忠臣後日噺 上下

合詞四十七文字 十段續

太平義臣礎 十冊物

忠臣いろは實記 續十段

其外女ゆらの助になしたり又は中芝居或は操などに
 ても其倅を端くれに加ふる事有といへども今是を略
 してかの忠臣藏の各仕打のかはりめをしるしそれに
 評を付て古今いろは評林と題する物ぞかし
 一寛延元辰年より今天明五乙巳年迄年數三十八年の
 間に假名手本忠臣藏を三ヶ津の芝居に於て四十一度
 の興行なり其役割残らず左に記す

安永二丑年七月廿八日初日曾根崎芝居にて座元竹本染太夫

享保十八丑年十月朔日初日

寶曆九卯年五月十四日初日此狂言大序夜討墓前に首を

手向る

明和元年十二月十七日初日

明和九年四月七日初日堀江市側座

元豐竹此吉

天明二寅年九月廿三日初日堀江市側座

座元豐竹此吉

天明四辰年正月二日初日堀江市側座

元豐竹此吉

安永四未年七月十五日初日江戶豐竹肥前接座

天明五年乙巳霜月吉日

八文舍自笑述

忠臣藏狂言の説

右古今いろは評判は中本二冊に假名手本の狂言を三十八年の間に四十一度興行の度毎の役割及び其時々仕うち思入の評判をくはしく書し書なり天明五巳年より六十六年此かたの忠臣藏のみを擧て評せばなか／＼際限なかるべし予近頃忠藏類聚と外題して假名手本は誰も人のよく知る所なれば是を省増補の書を集るに前に云基盤太平記忠臣金短冊より此かたの外題四十餘部あり尤歌舞妓淨瑠璃の佳作なる者を抜萃して四十七段を一部とし櫻木にのぼさんと早草稿半に及び此書の附録一卷に雜劇の番附畫雙紙迄悉く寫て戲場好人の方に示さんと欲すやがて上木のうへ見給ふべし爰に四十七士の實説を書たる書頗多し舊赤穂義臣傳といふ板本を始め赤穂精義内侍所寫本芝泉雜記泉岳寺にて義士の勳を聞書せし書なり介石記長雄の行狀の聞書なり義士順從錄寫本廿五卷淺野細川の太守家中に命じて實説を集させられし書也此餘誠忠武鑑など呼で諸家の聞書をこと／＼く見しが大同小異にして趣は變らねど珍説も又なきにあらず其よき條を舊として予大石摺義士法帖と題して一日の狂言十一段兼て仕

組てあり未よき座組にあはざれば世に出ず是も類聚に續て上梓すべし抑此一件は誰もよくしる事なれど元祿十四巳年三月に發つて翌十五年極月に夜討し翌十六未年二月四日に落着す然れば復讐夜討の年より今嘉永三戌年迄百四十九年となれり此一條より歌舞妓淨瑠璃の雜劇にかゝる輩を始講釋錦畫等に至る迄年々歳々是が爲に業を發し口に糊する事いか計りか皆此義士の餘光成べし

伊賀越復讐の説

此傳奇の事は前編にも演たれども序に云實説と呼ぶ書殺報轉輪記寫本渡河記實錄寫本水月記寫本など有戲場狂言には伊賀越乗掛合羽寫本淨瑠璃西永六には伊賀越道中雙六天明三始て狂言とはなれり此實説は武將感狀記板本の中にも演て寛永九申年正月廿四日池田家の臣渡邊鞠負同家中河合又五郎に討れしより騒動おこり伊賀上野にて荒木又右衛門が助太刀して數馬が父の敵を討しは寛永十一戌年十一月六日なり今年より二百十七年のむかしなり安永に始て狂言にせしは百四十三年めなり尤御當代のことにて遠慮もあれば足利時代にして管領上杉の家臣和田志津澤澤井又五

郎と呼かへ譽田大内記の家來唐木政右衛門助太刀せしとは歌舞妓作者奈河龜助が一世の作にして此右に出る狂言なかるべし淨瑠璃に近松半二が道中雙六は乗掛合羽を原として七ヶ年後の作なれば第二義となる事勿論なり近世子が増補の外題に袖視伊賀越日記とし此春又けいせい譽の兩刀と文字にかきほまれのすけだちと讀せたり外題に伊賀越と呼ずして伊賀越としらせん爲の戲なり其上翫雀當時歌右衛門成駒やないふ十三ヶ年ぶりにて東都より上坂なれば其口上を割外題に書込て

伊賀越通る初旅の曠は上野か淺草から乗掛合羽のお目見へは唐木流の奉書試合渡邊澤井が仇討の道は吉田か岡崎泊り道中雙六ふり袖を古市躍の花笠試合とは賦しけり尤奉書試合笠試合と云は水月記に有て柳生但馬守に二人の子有兄重兵衛は和州千壽院に居二男又太郎父に勘氣を受大久保忠教の世話にて諸國を劍法の修行に廻り練磨の功をへて東都に歸り忠教の屋敷にて父子の名乗をせずして但馬と立合ふ但馬我紛としらず鎗にて突てかゝる又太郎は無刀にて是に向ひ庭前に作りある菊の上にふるき笠有此笠をとつ

て鎗をふせる是を柳生の笠試合と云但馬親子名乗をして又太郎跡目にたちいまだ柳生の奥義をうけぬ間に父但馬は相果けり兄十兵衛も和州にて歿し又太郎但馬の守と名のれども眞の奥義をしらず天下の師範をせり爰に和州柳生十兵衛の門人伊賀の産荒木又右衛門と云劍術無雙の達人有て十兵衛より柳生正傳の奥義を受後東都に出て劍術の道場を出し海内無雙柳生眞傳とか書たる看板を出す柳生の門人諸大名二代目但馬始名又太郎に告る但馬は眞の奥義を受ざれば呼寄て試み父兄の弟子にて眞傳を受し者か又虚をもつて名を賣る者ならば討すてんと又右衛門を屋敷へめしよす又右衛門臆せず但馬の屋敷へ行無刀にて稽古場に通され但馬次の間より透見して人相のたいならぬを感じ半信半疑ながら餘人を遠ざけ稽古場に入て立合んとす又右衛門木刀しなへなどを取らず神棚の瓶子に挿たる奉書の造酒の口をとつて但馬が木刀清眼八雙の構へにむかひ是より但馬又右衛門が素性を問ふ荒木は十兵衛殿より直傳を受しと云是より但馬へ奥義をつとふとの實説を奉書試合とて呼て手にもとられぬと云意を以て水月記に出たり是は伊賀越の狂

言にはのきたる説なれども予兼て此條を仕組伊賀越の狂言に取組んと思ふがゆへ割外題に書入腹稿は有たれども狂言幕數にかぎりあり重ねてさせんと腹の内に溜置たりかゝる著作道に戯るゝ腹中にはいかなる物のあらんもしれずいともおかしき業にあらずや

昔八丈城木屋の説

實は白子屋お熊と呼て江戸新材木町^{茸屋町堺町兩芝居の跡今有隣町の事にて其}白子屋庄三郎とて材木屋の娘なり實説と云書大岡仁政錄及近世江都著聞集にも出てよく世人のしる事なれども爰に畧出す主庄三郎は世事にうとき虚氣者にて女房お常は心持いたつてかたましく欲心ふかき女なり故に亭主を尻に敷町内を廻る髪結と密夫をし娘お熊は器量姿とも申ふんなき美人なれ共母に似て身持正しからず衣裝の好かみかたちも芝居町に近ければ役者の如く仕立上氣の者にて忠八といへる手代と通じ家内取しまりなく奢つよければ身上少々不廻りに成けり仲人有て大傳馬一丁目地主彌太郎の手代又四郎といふ者五百兩の持參金にて聲に入りお熊との中に男子一人出生しけれども是忠八が胤なりと

は世間の者迄よくしりけり母お常は出入の者と通じ娘は手代と密通すれば下女下男迄姦姪して更に人家の交にあらず手代共は引負の上駈落取逆して身上さんぐになり持傳へたる角屋敷を賣んとす同町に加賀屋長兵衛と云者有て律義なる人にて常々懇意の中なれば白子屋の家に段々異見を加へ智又四郎の持參金も多きに親もとへ聞へもいかゞなれば三百兩は此方より貸べき間屋敷を賣拂ふはといまるべしとて質素儉約の事のみをさとして合力有しに俗に云焼石に水とやら其年もつかひなくし智又四郎を不縁にせんと計れども表向に離縁の時は持參金をもどさわればならずとお常お熊忠八と姦計を廻らし朝飯の膳部に大毒をまこみ智又四郎をころさんとせしを下人長助と云もの密にまらせければ又四郎大に驚き早速懇意のかゝや長兵衛方へ行いさいを告る長兵衛是をなだめて白子屋へゆきよそながら異見を加へ智離縁には金子入べし爰でこそ家屋敷を賣てなり共持參金をつくなはれよといはれて庄三郎御異見こそ忝しと屋敷を長兵衛方へうり金子五百兩受取けり^{此かゝや長兵衛といふ人は其頃の篤實家にて其後公儀かざり御規式御用なつとめ子孫今に有}扱右の金子を又四郎に付

離縁すべきを常忠八此金子を惜しみ外に科を付又四郎を追出すべきと謀をめぐらし下女久より腰元菊に申ふくめて聲又四郎に剃刀を持て疵を付させ心中の仕をんじなりと流布させ持參金を返さず離縁せんと工みしも忽天罰にて事あらはれ又四郎菊をおさへて町奉行所へ訴へければ大岡越前守殿御捌にて御吟味の上享保十二未年十二月七日に落着しけり又四郎妻廿三歳此者儀手代忠八と密通し母忠八らと申合夫又四郎を殺害致べく爲下女きくへ申付疵付候段不届至極に付町中引廻しの上淺草に於て獄門に行ふものなり庄三郎手代忠八此者儀主人庄三郎養子又四郎妻と密通いたしふといき至極に付町中引廻し淺草に於て獄門に行ふ者なり庄三郎下女菊十八歳此者義主人庄三郎妻常何程申付候共主人の事に候へば致方も有べきの處又四郎に疵付候段ふといき至極に付死罪可申付候但し引廻しに不及候庄三郎下女久此者儀庄三郎聲養子又四郎へ疵付候やうにと傍輩の菊へ申すゝめ候上又四郎つま熊へ手代忠八密通の儀取次いたし旁不届に付町中引廻死罪申付候庄三郎妻常四十歳右常儀養子又四郎に菊疵付候儀に付熊事母子の儀に候へば

惡心たくみ候事露顯依之遠島可申付候但し事濟候迄牢舎たり又四郎養父庄三郎養子又四郎へ菊疵付候節もさつそく様子をも見届す候上妻娘并に手代忠八ふとどき成儀一所に有ながら不存候段重々不埒なる儀に付江戸中追放可申付候庄三郎養子廿九歳又四郎を始手代清兵衛下人彦八長助權助伊助右之者共御構無之右之御書付は御用番御老中松平左近將監殿より大岡越前守殿へ御渡し被成候となり此時お熊は引廻しに出るに衣裝上に黃八丈の小袖下着白無垢きよらかに着繩にくゝられ馬に乗り襟に水晶の珠數をかけ口に法華經の普門品を高らかに唱へて引渡されけるとかや斯る時觀世音も何として救ひ給ふべき此已後まばらくは婦人黃八丈の小袖はお熊が引れし時着しとて忌嫌ひけるとなり享保十二未年より五十三ヶ年後戀娘昔八丈と云江戸淨瑠璃安永四年九月に仕始けり今よりは百廿四年の昔語りなり白子屋庄三郎を城木や庄兵衛お熊をお駒母お常の密夫髮結を娘の色として才三と呼び忠八を丈八と作り聲の又四郎を佃屋喜藏と云惡者にせしは聲又四郎が不幸なるべし淨瑠璃の後いろ／＼と増補せしもの少からず色盛八丈鏡など

外題に呼し事も有けり

椀久物狂ひの説

椀屋久右衛門は浪華御堂前の豪商にして古き家とぞ舊趾今詳ならず椀久新町の松山とふかく馴染端手に遊ぶ事増長して延寶の頃中元に正月の遊びをし廊中の青樓に門松を建させ其身は年男の豆打なりとて歩金小粒を櫛に入れ坐敷くゝに蒔たりける親類縁者其奢侈をとがめて座敷におしこめ世間へとは出さゝりければ鬱氣のあまりに發狂して炮烙頭巾の儘くろひ出る故京師五條坂に出養生をさせ後すこしく病ひ治して京都にて歿したりとも云寺は大坂八丁目寺町實相寺本堂南の方に有て宗達の墓とのみ記して年號見へねば歿年の程あるべからず五條坂に居る頃近隣には陶器師多く住所なれば椀久も手づくねにて金魚の如きの魚の素焼を拵らへ庭中の池へ投こみ樂みとし其遺る物なりとて京師の陶器師より予に先年送りし事有椀屋と呼は木具の膳椀を商ふにあらず陶器商ひの問屋にて五條坂の職人は多く椀久方のかゝへにてかの地に別莊あれば扱養生に登せたりと云寶永の頃椀久末松山椀久熊谷笠と云淨瑠璃に物狂ひを仕始

てより享保十八丑年に椀久元日金年越と外題して文耕堂長谷川千四作せしより此狂言行はれ椀久狂亂笠松山由縁の十徳など呼て明和頃には毎度椀久の狂言は出けり既に自笑其蹟が作の御伽紙子などには一番に出たり曲亭馬琴寛政のすへ京攝にのぼりて戯作者の常なれば是らの事蹟をたゞせども詳にしる事あたはず本願寺書院の庭に有椀久が寄附せし石の手水鉢をたづね正保三年十二月九日椀や久右衛門寄進とあるを石摺にして山東京傳に送ると簀篋雨談に書たり此書に馬琴椀久の宅趾は大手筋に有しとのみ聞てゆかず浪華の古老の話に聞たる一話也とて出せるは椀久其始老實にして嘗花街の地をふます同庚の社友是をあざけり強て青樓にいざなひ恥かしめんとす椀久が母はやく此事を聞て心憂や思ひけん俄に文認めて松山と云新町の花魁の方へしかゝの事をつけて椀久が事を頼む椀久是をしらず母に辭別して花街に赴んとす母の云商人の利に走るは常の事ながら靡にあそびてはわきて心を見らるゝものぞとよわれ閑松山は全盛たぐひなく其心みやびたりと御身くるわにゆかばかならず彼をよべと云椀久母の命を得て遂に

其友とゝもに樓に登る友人等おのれゝがしれる妓を呼むかへ椀久一人熟妓なきをあざけり笑んとす椀久母のおしへを守りて松山をよぶ松山來りて一別の會話を叙る事ひさしく相しれるが如し衆皆思ふにたがひて驚き羞椀久もいぶかしくは思ひながらよき程にあしらひつ扱房に入て云りけるは吾元より御身をしらす然るをさきの如くもてなし給ふこそ心得ねされど御身が情にて今宵の恥かしめを免たりと篤く是を謝す松山うち笑てあなおかし是皆母君のいつくしみふかきにありとしかゝの事を語る椀久始て母の慈愛のふかきを感じ且松山が情あるをよろこびて終に家をうしなふにいたりけるとなん椀久が紋は扇車なりしにや其事曲三味線に見へたり又寶永の頃瓢箪かしくといふ弱法師佛説を俗談して人を興じ市中を徘徊せし事有歌舞妓狂言に椀久と此ひやうたんゝとを附會して作りしなり愛敬昔男といふ冊子にひやうたんゝが圖有摹して爰にのす昔畫の曲圖を書三味線卷の二に右は此津に名を残せし椀久むかしの姿その儘にむしやくしや天窓に立島の布子丸絆のひとへ帶革巾着のあきから懷に伊勢天目吸口なしのき

せるとろめんの沓足袋細緒のなら草履かはらぬものは扇車の紋所今はなさそふな顔して座せり下此曲三味線に書し椀久が打扮はへうたんゝが模様ともきこゆ近世の俗談に名高きはへうたんゝと江戸の志道軒なり又椀久が事を小曲に作りしは昵近竹と云冊子にのせたる椀久道行是始なり今の唱歌は皆是より出たり昵近竹の唱歌左に抄出す是らを見てもへうたんゝを附會せしをしるべし去りて益なき事ながら夜話の一助ともならんかと爰に附す椀久道行三上り一中ぶし略上ほさぬなみだの露しほりくちなば袖に今の身はせいしがのべの思ひ草葎の宿にたいひとり床はなれ行あかつきの其きぬの俤をとへどこたへもしよんぼりときのふはけふのむかしにて法師ゝは木のはしと思ふはやばかわけしらぬ心の花のかほりをばしらせたいぞやあゝはちゝ此十徳も過し頃ゆかり法師が一ふしに智恵も器量も身體もみな淡雪と消うせてかわせし事のかはるともはなれまいぞの君こわくわれはちりかや身につもる心のあくたむねにみちそれがこうじた物ぐるひ下略へうたんゝは後狂人となりて夜なゝ新町の廊をくるひ

ありきしとなり梶久物狂ひとて是を作れり

右は曲亭子が簀笠雨談に出せる考にて古老に聞たる

説といふも御伽紙子にある作り話にて實説とはいふべからずへうたん（ト）と附會して物狂ひの淨瑠璃

成れりと云も曲亭子が推量の説なり既に傾城禁短氣

の中より梶久と山崎與次兵衛の二人を出し寛政七卯

年戀と一字外題に書てことばのいと其下心とかな付

して梶久爲十郎松山國太郎與（ト）兩人一時に狂亂となる仕組

あり此文句に茶碗がわれたらついで見やそれサ（ト）

又納戸の掛がねそつとあけ親の髭をさともも大事な

どの文句有近來三つ面といへる梶久の文句は大かた

此戀といふ狂言の文句を梅玉にてつかひし也然れば

梶久が事跡は予が始に演る所實説にちかし大坂本願

寺へ寄附の手水鉢有は梶久の父にて一向宗なり瓢箪

（ト）は空也念佛に似たる説經者なれば禪宗か淨土

なるべし近來梅玉にて仕組し折は彼法華宗なれば我

宗に引つけ經宗とはしけり何にもせよ俗に云燈臺元

暗とかにて浪華の者（ト）はかゝる事實を投やりに穿鑿も

せざるを東都より來てたま（ト）古老の物語を聞それ

附會して誤る事いと多し次に説く三勝半七が傳を見
て齟齬せしをしるべし

西澤文庫
傳奇作書續編中の卷

目次

一三勝半七情死の話	元祿年間の事
一簑笠雨談の齟齬	寛政年間の事
一梅の由兵衛小梅の話	元祿年間の事
一勢州龜山敵討の話	同
一箱根彦山靈驗記の話	天正年間の事
一累怨靈解脫の實話	正保年間の事
一播州皿屋敷の實説	延寶年間の事
一鴈金組五人男の話	元祿年間の事
一扇屋夕霧が略傳	延寶年間の事
一八百屋お七が事跡	同
一黒船一代男狂言の話	寛保年間の事
一女達奴の小萬が事跡	同
一盜賊日本左衛門が話	同
一東海道茶屋娘の話	寛永年間
一灰屋紹益吉野の話	同

一景清重忠茶湯の話
凡十六ヶ條
同

西澤文庫傳奇作書續編中の卷

西澤綺語堂李叟著

三勝半七情死の話

元祿八亥年十二月七日攝州下難波村^{今千日寺墓所也}代官辻彌五右衛門殿支配所墓所南側石垣の根畑中にて年比卅四五歳の男年比廿四五歳の女相對死の趣願ひに出則檢使として關戸條左衛門殿渡邊爲右衛門殿改られる所男の疵咽二寸計腹臍の上一寸計突疵と見へ女は咽四寸計突疵くり候様に見へ男の衣類郡内縞兩面綿入一細帶一筋羽二重下帶一革足袋一足珠數一れん手に持脇差一腰拵付燒付金具糸柄長さ二尺一寸小刀一本但し脇差の鞘に有女の衣類日野絹煤竹小紋綿入裏日野絹茶一郡内縞綿入一糸ろく帶一日野絹湯具一本綿足袋一足縮緬紅裏の服紗一右は男女着用外に木綿茶服紗に封狀一通三勝母さま美濃屋平左衛門様としるし有を包有檢使改すみ番人付置所上本町八丁目札

辻町京屋安右衛門の訴狀に私女房の妹さんと申女に紛れなく男は存申さず候長町四丁目荒物屋市兵衛借屋美濃屋平左衛門の訴狀には私娘さんに紛れなく男女相對死と見へ候上は女の死骸申受たき願ひ也又長町一丁目近江屋庄右衛門貸屋中村屋安右衛門よりの願ひ狀には私方常に宿仕置候大和の國五條赤根屋半七と申者當月五日に參り罷在昨晚罷出今朝早速見届候處女と相對にて相果候は申分もなき次第に候宿に書置一通候ゆへ御番所へさし出し候處大和の上書に候ゆへ直に爲遣様仰に付遣し申す相果候様子は曾て存不申宿仕候仁に候へば半七の死骸申請たき願ひ書狀五通外に半七書置一通御番所へ持參の上玄蕃頭殿^{御奉行と見へたり}御間届有雙方の死骸半七の書置とも下し置れ兩町よりも請取差あげ事濟しけり書置の寫

尙々御袋様にはいつぞやくれく御申置候御事も皆偽りになり今更に恥かしく存候へ共しかしくわこのごうなりと思召御あきらめのみへり

今度三勝私かた相果候事扱々にくしと思召候わんなれ共互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく具に書き候へども戀のせつなる事推量可被下候各様に

も身の上の大事なる娘我身も獨りの母と申殊には身上の事も不辨人口にかゝる死をとげ候も銘々うわきなると思召被下間じくともかくにも筆にはいわせがたく候まゝ跡不便と思召下され間敷まづ〱次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候已上

十一月 半 七

三勝どの御袋様

平左衛門様

千日石碑靈名は 一連

嵐雪月照信士託生
月雪妙霜信女

和州五條新町

赤根屋半七

攝州大坂長町
美濃屋三勝

右兩人情死の節の願ひ書は十九年後正徳三年に辻彌五左衛門殿の扣へ書を爰に出せば實説にして又千日寺の石碑は其比の歌舞妓役者の誰彼直に狂言に取組大當りせしゆへ長町親もとも心易きゆへ其當座に建たるものなり扱も五十六年後寛延三庚午年に出板の俳書嵐雪句集一名玄峰集とも云は嵐雪の別號なればなり此中に

あかねやみのやと聞へたるなき名のながれといま

るところは千日寺の露ときえかへりぬ盆の比は夜毎に群集し逆縁とぶらふ人あまた侍りけり戒名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たりあるまじきことならねど思ひかけず思ひはべりければ爰によく似たるゆめかな墓參嵐雪

簑笠雨談の齟齬

文化改元甲子年正月に出板の簑笠雨談三卷は東都曲亭馬琴子が其前京攝見物に登りし時の紀行の内より珍らしき事のみ拔萃せし書なり其中に三勝が古墳と辨を出せり美濃屋三勝が墓は大坂難波新地法善寺金毘羅堂のこなた茶店のむかひに有世俗此寺を千日寺とよべり七月廿七日此地の友とともにこゝに遊びて三勝が古墳を見る石塔に南無阿彌陀佛の名號を彫付て外に法號なし予がかねておもひしに違へば此外にも彼ものゝ墓ありやとふになしといふ墓のかたわらに新しき塔婆を建て寛政十三年辛酉二月日美濃屋三勝苗屋半七爲三百回忌追善也と記せり今もその由縁の人あるにこそといへれば嚮導せし人のいへるはさにはあらずかゝる徒は俳優家より追福いとなむといふ寛政辛酉年百回忌に當れば歿年は元祿十五年二

月也石塔婆の角缺てありしれる者の云勞瘁を患る者此石を末にして飲ば治すといふ又此寺の門前にある乞丐女六が墓もしかすれば酒量すゝむとて俗子往々かゝる殺風景をなすとなんこゝに疑しきは嵐雪句集前に云々峯集の文夢に云々かゝれば予が見しは後に作りかへたる物か又別に嵐雪月照と戒名彫入たる墓あるか序あらば再び尋ぬべし又大坂長町といふ所は傘張多く住り三勝が家なりといふ傘屋長町東側中程にありみのやは藝子の店の名なり故に一名を笠屋といふよしへり是全く附會の説なるべし雜劇にて笠屋三勝とかへたるは慶長のころ女舞大頭の座元なりし笠屋三勝を擬したるなり事迹合考といふものに女舞は白拍子の事なり慶長の比桐屋大藏笠屋三勝女舞大頭の座元なり云々是は平家物語盛衰記等のおもむきをうたひものにつくり大鼓にあはせて是を舞ふ舞の打扮は天冠をいたゞき狩衣を穿大口をはく是を女舞大頭と名づく此舞に岩戸開天地拍子羅生門などいふ傳受の舞有しとぞ永祿の頃室町家より祿給はりたる舞女に笠屋夏といふ者有夏が事室町殿物語にみえたり是笠屋と名付るの始かその子孫に笠屋新勝同万勝同春

勝などいふ女有皆寛文の比までの女舞なり三勝も此門より出たる女にて由緒あるものなり歌舞妓狂言作者並木五瓶といふ者三勝がいたゞきし天冠をおさむるよしきけり天明四年十一月桐長桐芝居興行免許の時馬揃とやらにいふ狂言をしたり天冠狩衣大口のいでたちにて大鼓一挺にてうたひまへりこれいにしへ女舞の遺風なるべし三勝は寛永の比既に老女にて京に住せしといふ此一條醒世子の説なり亦蕎屋半七といふものと不義の死をなせし三勝は大坂かごや町額風呂次郎左衛門が抱えなりし小さんと時を同じくせしお三といへる湯女なりとぞ然るを歌舞妓狂言には昔の笠屋三勝が高名をかりて笠屋にみのや對もよく其名もともに三勝といへば狂言作者の働らきにてかくは作りなしたるを後人笠屋三勝が事迹を考ず戯文の説に泥みて三勝が家は長町の傘屋なりしなど、附會の説をなすにこそあらめとまれかくまれ三勝が墓など只何となくをかしきものなればこゝに記かやうなばかゝしきことを論じをくも又わが黨の一癖なり又追考に此頃一奇書を得たりと始に出す本文の書置を出して此おさんは世にいふ三勝が實名にして當

時の作者笠屋三勝と附會せし事しるべしと有是皆推量の說にして曲亭子が考は皆齟齬せし事明らけし始法善寺の一名を千日寺とも呼りとは誤の始にして嚮導せし人とは是浪華の雅人にはあらで宿屋より雇ひたる案内者世に云猛者曳の事にて一文不通の雇人なれば何をしらんや其者の詞を信じて深く穿鑿にも不及かゝる戲作の草紙にもせよ書のするは非なるべし文化の始比は道頓堀繁昌の餘りにや毎度失火有て法善寺邊始終燒跡の荒しまゝにて東北の小門を入りし所に石塔凡十基ばかり有けり所謂南無三寶正三が墓又徳利の形を畫中に平の字書たる墓石の地藏尊など狹き所に並び有し事有今源氏そばの居る所にて井筒嘉といへる酒屋の向ひがはなり今取のけて何國にあり其墓の内古き名前のなきを三勝が石碑といひ又長町をつれ通て爰がかの笠屋の跡也など案内者の出るまゝに欺かれたるなるべし亦俳優家の建たる百回忌の塔婆も現に今千日墓所の東榎の社の後に一蓮託生の石碑遺れども手遠なるゆへ法善寺中人目にたつ所へ建たるなるべし尤年號も七年の相違有歟元祿八亥年なれば寛政六寅年則百年に當れり寛政十三酉とあるせば享和元年にて歿年より百七ヶ年となる

なり爰にまた予が家の板淨瑠璃外題年鑑にて見る時は寶永六丑年八月笠屋三勝廿五年忌と云外題見へたり三勝歿年より寶永六年は十五年目にして廿五回忌には違へり此時始て淨瑠璃にとり立後すこしづゝ増補して延享三寅年に女舞劔楓明和九辰年艷容女舞衣と外題出たりされば此法善寺中に雜劇者より追善に建たる塔婆は歿年より七年目に其比の名代俳優坂田藤十郎杉山勘左衛門等歌舞妓狂言に取立大當りせしゆへ長町の親もとと言合せ狂言當りし冥加の爲に千日の石碑を建たるなるべし石碑臺石に俳優の名前を彫しは此由縁あればなり扱此七回忌の時を原として百年の追福の塔婆を法善寺に建しものと思わる又淨瑠璃にて十五年目に廿五回忌と外題せしは所謂取越にして近き事故通れぬ遠慮の事有しなるべし正しき神社佛院にも大よりの年數にあはせ五年七年の遅速を論せず年忌開帳等をすればいわんや心中情死の輩深く論するも無益なるべし扱事跡合考をひきて笠屋三勝は古き名なり女舞大頭と名付て白拍子の祖なりなど醒世子山東傳の說といふも曲亭子の考かごや町額風呂の抱へ小三と時を同じふせしお三といへる湯女

なりと云説は皆推量の説にして論するに足らず金屋金五郎は島の内笠屋町額風呂の高三と情死せしを淨瑠璃にて元祿十五年八月金屋金五郎浮名額とて外題によぶ此年赤穂四十七士敵討ありし年なり既に唱歌にも笠屋町千たびもと有て坂田藤十郎杉山勘左聲を似せつゝ合圖をえらすとも有て島の内の遊所を六軒丁と云古名有玉屋塗師屋笠屋など呼ぶ家六軒を開發人にて笠屋町も六軒の内なり三勝の親もとは長町四丁目の美濃屋なれど島の内笠屋を假店して垢摺女なり故に笠屋三勝なり何もむづかしき譯あるにあらず六軒町の小夜格子といへるは木と竹を交て二階の格子に打しなり其頃島の内置やと唱ふる家は皆其格子なりしとかや重井筒おふさ徳兵衛の淨瑠璃に有重井筒は寶永元申年の事なり四十七敵討又金五郎の三年日也へにすこし好者の癖ある者は是も附會の説なりとて遠き舊事をひき出してかへつて我附會の説をもふくる事多し都て此一條によらず何事にても東都には平賀源内より發りて京傳三馬馬琴など寛永此かたの人物を評じて小説をもふくる物多し京攝は都ての人氣高尚にして中興のことには甚疎く假初にも古代の人を評し古き事のみを論する

の土地なり東都は古き名所とてもすくなく古代の事を論せずして二三百年来の事を我おとらじと穿鑿して傳記をもふけ彼地のことを盡したればとて京攝の事を彼地へひきて揚卷助六などを東都のものとなせり近世奇迹考などに出たる江戸の俠者の事は實説にもあらんが京攝のこと書たる物は土地の方角年月の相違などいと多くて讀に片腹痛き事、有京攝に中興の事不穿鑿なるは名所古跡人物など多きゆえ未手の届ざるなるべし

梅の由兵衛小梅の話

是は又心中情死の類ひにあらず夫婦とも強惡のものなり此實説は新著聞集にも出て大坂聚樂町に梅澁吉兵衛と云者胡椒頭巾といふ事を始て盜賊に勝手よき頭巾なるべし仕出す程の大惡黨なり大坂中の兩替やの手代小者の親兄弟在所の荒増をも能覺へ盜の方便とせしとぞ常に丁銀板を兩替屋へ持行子銀にかへ今一度見せよとて丁銀を手にとると思へば摺かゆる事神變を得て兩替屋毎に兩三度宛是に逢ざるはなし因て異名を板替の吉兵衛とて恐れしが博奕の事につき牢舍して元祿二年四月十九日の大赦に獄を出てその五月十九日天王

寺屋九左衛門小者長吉金子百兩かへに行を何とかし
けん途にて呼かけ其方の在所より親來りたり云度事
有により早く逢度よしざ來よとて誘ふ長吉我は大
切の用事なれば參るまじ心得てたまへ扱汝は誰ぞと
問ふ其方の在所の者にて親とは入魂にするなり當地
に久しく住て其方は我を見しらねど我はよく見しり
たり是非來よさなくば親恨みなんと云ふ然らば立な
がらまいらんと吉兵衛がもとに行ける吉兵衛が妻に
小梅とて十五六の年増りを博奕の上手ゆへ妻にせし
それに云置て長吉が後より蒲團を打かぶせければや
れ人殺しよと聲を立る處を吉兵衛さし殺してげり隣
の者壁の破れより窺ひ見れば早脇差の血を洗ひし外
の相借屋彼是出合ひ家主與次右衛門にかくと云ば以
の外なる事をいふ人々なあれは夫婦いさかひなり
庵相なる沙汰あらせなと各をかへしける吉兵衛その
金を奪ひ新地堂島北町にて茶屋をせんとて借宅し用
意せし頃小梅が弟三右衛門いかなる故にか妻を離別
しけるその女天王寺屋に落し文して長吉は梅澁吉兵
衛夫婦して殺し死骸は三右衛門拾しとぞ書たりしか
ば頓て公議へ訴へしに與力同心をあまた新地につか

はしたもふ吉兵衛は新町曲輪へ行ければ六月十九日
の夜なりしがしめだしにて吉兵衛を捕ふ小梅三右衛
門與次右衛門相借屋召出されしに相借屋はしかく
の斷悉く演て別議なかりき餘人は閉口してければ獄
舍しけり扱死骸はと尋ね給へば小初瀬の邊の古井に
捨しと云しを頓て搜させたまふに色も變せずありし
金の御穿鑿ありしに取合せ八十兩ばかり出しぬ扱科
極りて吉兵衛は磔にかゝり餘の三人は大坂追放侍り
しに與治右衛門は高津に隠れ居たりしを訴人ありて
首を刎られ小梅は其後子殺をして磔にかゝりしとぞ
是は四十七士の敵討より十四年前にて今嘉永三戌年
迄百六十二年になる昔なり元祿それのとしより五十
年後淨瑠璃に仕組み茜染野中の隠井と外題して吉兵
衛を由兵衛とし小梅の弟長吉を忠義の爲に殺すと惡
黨を善人にかへたり其後は追々に此狂言を題して増
補する事なれば梅のよし兵衛小梅といへば皆善人と
して愁ひ事に仕組めり寛政の末歌舞妓作者並木五瓶
江戸にて隅田春妓女容性と題して其比の名代俳優澤
村宗十郎に低鬢の俠者と書かへ梅堀小梅源兵衛堀と
東都の地名に引直しさせたるゆる今の世の女子供は

江戸の事なりと思ひ違へるも多からん今にも小橋野中の井戸とて年老の衆はよく知りたる事なれども其實説をしらすものなり

勢州龜山敵討の語

此實説も新著聞集に有て敵討は元祿十四年の事にて赤穂義士夜討の前の年の事也然れば赤穂離散と同年の事にて半藏源藏兄弟父と兄の敵を討たるなれば世に元祿曾我ともてはやせしが翌年冬赤穂夜討は古今にためしなき事故元祿曾我の取沙汰は第二義とはなりけり抑此舊を尋ぬれば青山因幡守殿大坂御城代るとき家中に石井宇右衛門と云有西國方の浪人赤堀源吾右衛門あるべ有りて宇右衛門方に食客となり家中の若侍と出合鎗の師をなす宇右衛門源五右衛門の未熟を異見せしを聞入す立合を頼ければ是非なく試合源五右衛門物の見事にしつけられ其意恨によつて城より歸りを待うけ切たおし逃ける僕のしらせに總領三之丞かけ付漸助け返りしかど大疵なれば敵を討よと遺言して畢ぬ次男半藏は五歳三男源藏は二歳なれば母に預け免許狀を戴き若黨をつれ廿二歳の春迄東西南北尋ねめぐりしかど敵に逢ざりければ源五右衛

門の繼父赤堀遊齋といふ醫者大津に有ければ此者を討て高札を建遊齋を討しは石井三之丞なり親の敵取んと思わば美濃の國何某が家に來れと書付たり扱夏にも也て三之丞は美濃の何某が庭にて行水しければ竹藪の内より源五右衛門かけ出親の敵と切付しを三之丞心得しと一太刀切付しかど其儘死しぬ若黨口惜き事に思へど敵を見失ひせひなく本國へかへり次男三男に事の段々を傳しが兩人も成人して諸國を駈めぐり源藏廿三歳の時勢州龜山の城主板倉周防守殿家中二百五十石取し下村孫左衛門へ森平と變名して草履取に入込奉行他事なく仕へしかば同家中に赤堀水右衛門とて百五十石取の内へ森平が家來を若黨に入込せひとしほ念頃に入込せしが比は元祿十三年夏の比主人の用にて水右衛門方へ森平參りしに水右衛門は行水してげり日比情をかけし森平なれば呼よせ背を流させしに背に以の外の疵有是はいかよふな疵と尋ねし時其方は格別のものなれば語らんとて若き時石井宇右衛門を討其勘三之丞某を引出さん爲某が親遊齋を討しゆへ美濃の何某方にて四五十日窺ひ三之丞行水せし所を討しがさすがの者なれば某逃る所を

拂ひし時の疵なり其弟兩人有しが四五歳の水子なれば生死をしらず殿にも此事知り給ふゆへ随分かこひ給はる此事構へて人に語るなどの咄を森平心中に歡び色にも出さず返りいさい文に認め江戸なる兄半藏方へしらせけるに半藏もつてを求て周防殿扶持人鼓打棗八兵衛方へ吉助と名をかへありつき龜山へ供して來り翌三月に暇を取り森平口入にて七十石取し近習役鈴木芝右衛門方へ奉公し兄弟と水右衛門方の若黨と三人出合ひ何卒殿江戸參勤の前に本意を遂べしと内談極め家來敵打助太刀を願ひしかどゆるさず母の方へしらせよさなくば七生迄勘當ぞと云に此上はちからなし爰より一里計りの所は松生ひ茂り影あらはれがたければ糧をもち行相待ん本意の上にて來り給へとて主人水右衛門方を一兩日の隙をもらひ出行けり吉助は四月九日に主人芝右衛門に暇を願ひ國方の者尋參りしと髮月代をして出城の裏堀松の木影に紺の單物大脇差にて待かけたり森平は主人より若黨に取立名を津右衛門と呼び刀を賜る森平此事を伯父に聞せしにいか計よろこび重代の一腰を呉しと兼て所持の刀を主人に見せしに關和泉守の二尺三寸氷の

如くにて主人も肝をひやせしとぞ扱八日に水右衛門方の下女に白の下帶二筋のはし縫を頼み九日の早朝油元結を調へんとて出しに大手にて水右衛門に逢はいいつに變り小野郎一人にてお下りとは心もとなしと云しかば水右衛門今朝は殊の外頭痛せしゆへ五つの番替りを待かね同役に斷り野郎が藥もち來りしを幸ひに連歸るとあれば然らば我等按摩をして參らせん扱と供せしに水右衛門の曰其方口入の芝右衛門が家來吉助何共がてんのゆかぬ眼ざしなり重ねて慮外あらば討てすてんと云折しも松影より吉助飛出て石井宇右衛門が舁半藏なり父兄の敵覺たかといふ儘頭より鼻の下へ半分にて切て落す同弟源藏なりとて肩先より大袈裟に開放す兄弟三十三歳と三十歳年來の素意達せりとて四方を拜し扱書置し一封を水右衛門が腰にゆひつけ足早く松山の内へかけつけ三四日ためらひ往還の人の噂を聞届けもはや追手の氣づかひなしとて若黨を本國へかへし兩人は上方の帳面をけさんとして坂の下にて五六百石もとらんと覺しき武士の下向に出合かよふの趣にて此三夜まどろまず殊の外疲れし儘暫しお圍ひ有て休ませてかしといへば侍

互ひの事なりとて茶やの奥にて半日計り寐させ料理をすゝめ金子十兩取出し不自由をたせよといへど斷りて貯はかくの通りと百兩計りの路用を見せければたのもしゝとて雙方禮儀をのべ南北へ別れる扱水右衛門の小野郎は早速殿へ言上し件の一封をひらけば大坂以來の事書つくし假名實名刀脇差の銘迄くわしく印せり追手には誰彼のと二時計案じ給ひて漸仰出されしとなり誠に深き御思慮やと皆人感じあへり青山因幡守殿御子息下野守殿は遠州濱松の城にをわしければ右の三人立歸りしをいかばかり悦びたまひ兄半藏に親の本知二百五十石弟源藏に新知二百石賜り屋敷嚴敷かこひ下されしとかや未曾有の事として人感じほめけるとなり

評に曰宇右衛門横死の節半藏は五歳源藏は二歳なれば復讐のとし三十三歳と三十歳にて廿八年目に當れり然らば横死の年は延寶二年なり廿八年が間敵を尋ね討をゝせる内の艱難辛苦いかばかりかいと難き事ながら此うちさせるふしもなく三之丞も手立に盡遊齋を討しがゆへ返り討となりいはゞ五分の一の事なれば淨瑠璃歌舞妓に取立るにも爰ぞととらふ仕組な

けねば狂言遺らず淨瑠璃に道中龜山嘶往昔模樣龜山染敵討優曇華龜山有歌舞妓にも種々とあれ共千手助太刀のみ稀々に外題を出す石井明道志と呼ぶ寫本にもとづき伊賀越の前編龜山話の後編平井權八吉原衛といへる歌舞妓狂言あれども世に用ひず是等も實に種はよくて仕組にならぬ世界といふべし半藏源藏の名は呼ずして三木重左衛門中野藤兵衛の方世人皆覺へてよく呼ぶは兄弟の不幸なるべし

箱根彦山靈驗記の話

箱根靈驗壁仇討といへる淨瑠璃は芝屋司馬叟が作にて舊は太閤起亡録といへる實説の寫本よりなれり是もたい壁の腰が立親の敵を討しのみにてさせる仕組もなきゆへ始に佐々成政の黒百合献上など出し勝五郎は下部道助と變名して北條の家臣九十九新左衛門に仕へ娘初花をめとり當もなき奥州路へ行風疾を病て足なへとなるなど都てのことの本文になき事故是ぞといふべき筋にならず一日の仕組に足らぬ物から狂言浮て居らず其上三年といふ者を拵へ返り討にあへども是も浮物にて佐藤郷助がなすわざと筋立ねば憎みも少なし予以前玉匣箱根曙と題して増補し成政

が献上せる黒百合を飯沼勝五郎に言付大汝山千蛇が池へつかはす池に年經し蝮栖んで勝五郎に退治せられ毒氣を其時吹かけしゆへ勝五郎は覺となつたり父の敵を討んにも足なへなれば行事ならず嫁の初花車に夫を乗せて甲斐／＼しく出立し旅に初花眼を煩らひ盲目となり夫は覺妻は盲となり艱難すと愁を添へたり尤狂言は其時々座組に合せ仕組む物から其俳優には此役誰には此役と見込て書がゆへ俳優に病氣等有りて替り俳優にさせる時は狂言の著違ひて作者の苦辛せし事もむだ事となる事まゝ有此狂言の時も病人有て看板も出し稽古もしたる儘に始すいと本意なかりし

彦山權現誓助劍も梅下風の作にて鎮西御軍記といへる寫本の内より毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討せる條を仕ぐめる物にして是も筋は至極よけれど兎角狂言にまゝより兼たる筋なりなせと問へば京極内匠は劍術不鍛練の卑怯者なり吉岡の姉妹は女ながらも剛力の者なりそれに毛谷村六助助太刀すれば所謂鬼に金棒にて敵を討は大丈夫なり故に危くひやいなる事なきにより狂言になり兼るなり尤お

きくと絹川彌三郎の返り討有ても覺の飯沼三平とおなじく餘計の仕組にして有てもなくても事かゝす浮たる筋なり以前梅玉此事を言ひ出し六助を梅玉の柄に出来よふの工夫を詔らふ予本文に不拘一條の筋をもうく其筋といつば先發端幕外にて六助一味齋のもとに寄宿して劍術の奥義を授り姉娘お園と言號迄出来たる當座に途中にて天狗に抓まれ一朶の雲の下より六助の着物のし下りたるを引糸にて向ふより舞臺へ引とる吉岡の中間下部ども是をしとふて出て日比正直なる六助ゆへ天狗につまゝれたり何にもせよ有家をさがさんとて幕の内へ這入る幕明ばいつもの通り若殿の放埒など有て狂言至つて大きく書六助の有家はしれても氣拔の如く前後をしらずあほう同前にて生國にいる一味齋は一たんの約束なれば姉のおそのを介抱がてら彼地に下さんとするを内匠奥義の一巻と姉妹の内一人婦妻にくれよと望む一味齋内匠の奸佞を知つて耻しめ跡待ぶせして一味齋を殺すお菊彌三郎の返り討は新奇の仕組有て毛谷村の場に至つては贗婆を拵へて試合の負を頼むなどはなく未塵彈正も臆病ものゝあほう同前の六助を討すへて武名

高く仕官をしたりお園は是を口おしく思ひ彦山權限へ願ひをこめ後自害して血汐を六助にのます六助俄に強勇となり庭の踏石三尺計と云所になるなりお園を秋津島六助を國松又お園を乳母お辻六助を坊太郎と仕組かゆる時には小男の梅玉にても出來るなりと筋を拵らへ梅玉に聞せたる時誠に妙なりと手を打て悦びしが彈正に初代鍛十郎お園に國太郎にてなくば仕榮なくいつぞはく々と云うちに梅玉も故人となり終に趣向も晝餅とはなりけり都ての仕組は此よふに危ふく立ねば敵に憎みすくなくよもや得え討まじと思ふ敵を討てこそ面白みはあるなり昔の仕組に敵討の世界といへば敵はいつも一役にて出ると人を殺し出ると惡事をするが役にて決して二役に立役杯はせぬ事也近來此敵役をして憎まるゝを嫌ひ外に立役を一つ宛ひかへにする様になりたるは皆此道の衰へとしるべし

累怨靈解脱の實說

下總國岡田郡羽丹生村與右衛門といふ者は入智にて妻の累姿甚だ醜きのみならず心ばへまでかたましきゑせ者なれば絹川に誘ひゆき突おとし沈め殺し同村

の法藏寺にて妙林と法名を弔らひしは正保四年八月十一日なり其後與右衛門妻を迎ゆれども死せる事五人なり六人目の妻菊といふ娘を産む菊十三歳寛文十一年八月中旬に母は身まかり翌年正月四日より菊いたく病日々におもり同く廿三日に口より泡を吐眼をいからし父をにらみ我は廿五年以前に絹川にて殺されし累なり我最期の事は法恩寺村の清右衛門も慥に見たりとさまぐの恐しき事共言し人々恐れ噪ぎ村の者共來て問ばしかくと答ふ頓て僧彼是を招き祈禱せしかど更に驗なかりし然るに三月十日飯沼弘經寺の所化祐天同侶二三人訪ひ來りて見たもふに件の苦しみにて有ければ同音に數遍念佛して苦を問へば怨靈今迄は胸の上に居て苦しかりしが今は脇に居て我手を放たずと云祐天名號を書四方の柱に張りて一向に念佛せよと勸め給へば怨靈胸をおさへて唱へがたしといへども強く責給へば漸々二三遍唱る辭につきて十念を授け畢ていか々と問へば手を放ち退く又十念すればいよく退て西の窓にむかふて居る又十念すれば何方へか去て見へざりしが又東の方に居けり時に守り本尊を拜せければ有がたく頂戴しけ

り暫し有て本尊をとらんとし給ふに目を付て慕ふ様子なれば扱は此尊を慕ひ奉るにこそあらめ然らば是にて念佛せよとて持る珠數をあたへて各歸りけり翌日又來りいかにととひ給へば地獄極樂をまのあたり見侍りぬ極樂の門前に僧おわして此所の事語るなと固く制し給ひぬその僧珠數をあたへて我名を妙槃と付たまひし又累其門外にて汝は定業來らねば歸るべしとて衣の半を我に掩ひて爰は地獄なるぞと云て去りにき我衣のひまより窺ひしに白き途ありて累その方へ至ると思へば夢の覺たる心地しけりと語れり最前與へし珠數を見せければそれなん我得たりし珠數なりといへり累が法名を理屋照貞と改め菊を不生妙槃と名づけて一夜念佛して絹川の邊に石塔を建しとなり同四月十九日の早朝に又菊俄に苦しむ事前の如し村人集り問ば祐天來り給ひて汝は累にてはあるまじ彼は決定往生せし事なれば再び來る事あらじ狐狼野千の所爲ならんと責しかば我はさある者にてはなし助といふ者なり慶長年中に絹川にて沈め殺されしが此度累が往生せし事を浦山しく思ひて來れりといへば村の老年が曰それは累が兄なり其者の母助を他

所にて産六歳の時此村に嫁し來れり然るに繼父助が生れ付あしきをいなみて他に育はせよと一向に云しかば母此子醜く生れ我だにいふせく思ふに誰人か養ひ侍らんとて絹川に連行て終に沈め殺しつ其後川の邊りにて雨の夕暮などには五六歳の童を見し人多かりしは此助が幽魂ならん祐天くわしく聞得させて十念を授け菊か助かと問ば菊也と云助はとあればかたはらに居るといふ頓て單刀直入と法名を書たまひて佛檀にはらせければ菊ゆびざしてあれ／＼只今助が佛檀へ往たといへばかたはらの人々も雲煙のやふに稚き者の形を見ると思へば忽光明かくやくとして家内を照らしけり與右衛門も甚だ慚邪懺罪して髪をそり西入と改名し端直に念佛し延寶四年六月二十三日に終りしが七日前より死をしりて稱名をこたらず聖相拜せし事共くはしく語りて往生せしとなり是正保は今より二百年の昔にして與右衛門死してよりも百七十餘年となれり是ら怪談にて題につかふ累は醜女なれば色氣薄く狂言になり兼よ／＼明和に粧水絹川堤と題して浪華にて淨瑠璃とし安永に伊達競阿國戲場とて江戸淨瑠璃に仙代萩と混じて狂言とはなり

けり故人尾上松縁此頃の菊五郎が父尾上松助化物の名人妖物幽霊をよくせしゆへ累は彼家の狂言となり誰のするも皆此流義となれり

播州皿屋敷の實説

是も累とおなじき怪談ゆへ淨瑠璃歌舞妓の狂言になり兼ふやくお菊虫とて女の後手に括られ髪ふり亂したる容の虫を見れば此説出るのみにて江戸番町旗本衆多く住所也の事を播州と云又江戸青山の屋敷にての事ゆへ青山鐵山がお菊を殺すとも脚色せり實は小畑孫市殿奥方召遣ひ菊と云女は膳部の役なりしが或時物縫おわりて膳を調へ何としけるにてか飯椀の中に針の有しを奥方見給ひ大に怒りたけりて日來疑敷思ひしが自らを殺し己が儘にあらんとて恚る恐しき巧せし憎さよとて髻をつかみ引立て庭の井筒に落し入れて殺されけりそれが母も家に有しが此事を聞情なき事とて炒芥子を井の端に持行菊よしし心有てしけるか左もなくば今蒔所の炒芥子を生て見せよ此恨を返しなんとて井の邊りに蒔ければふしぎや此芥子見るうちに悉く生出たり奥方是を見たまひて憎き仕業や我をのらふはとて母も又井の底へ落して殺されし夫よ

り兩人が怨靈時ならずあらはれ出て孫市殿夫婦を始其類葉の方々を次第に取殺しけるまゝ諸尊に祝願し大法秘法を修しけれど更に驗なくて餘りの事に甲州の知行所に菊寺とて一字を建立し給ひてさまゝに弔らひ有しかど猶も止ざりし病人あらんとては彼寺に灯多くかゝりぬ病人死すべき時至れば飯の湯を乞ふて湯桶に二つ三つ吞畢て忽死する事なりどれもゝ同じさまなり詮方なくて出家したまひしも有しかど逃れやらで幾ばくの一族悉く滅び果て今は他家より名跡を繼たまひしとなり此書に年號をしるさねば確とはわからねど新著聞集は寛延二年の出版なれば大體延寶天和の比と思わる然らば今より百六十年以前の事なり既に元文六年に播州皿屋敷と外題して爲永太郎兵衛淺田一鳥兩作の淨瑠璃出たり此比は皿屋敷の説専らにせしと見へ延享三年出版の八文字屋自笑の作勸進能舞臺櫻といへる書の中に傍間三郎左衛門といふ家老家の重寶珊瑚珠の玉の皿十枚預るを秘あやまつて一枚割たるを科として庭の古井へ切込みしが夜なゝ一枚二枚と九枚迄數へて跡はワツとなく女の聲して三郎左衛門は其内人事を辨へす七

顛八倒して惱むを圓山といふ伯父敵よりの上使明石梅軒と云敵役合役加古川右近と云立役目前に怨靈に惱さるゝを見て返る跡に三郎左衛門召遣ひに至る迄人どめして庭の井筒へよれば井の内より硫黄ゑんせうを持若き男一人飛出てお頼の通り菊五郎もどきでやりましたがいかいと問ふうゝ出來たゝゝその方井戸堀に似合ぬ役者物まねの名人ゆへ頼みしが元來賣の皿を伯父敵に渡せぬから姉を手討にしたと長櫃へかくし置けふ見届の見分役人の前にて言合せし通り其方の物まねにてままと敵はたばかつたり褒美吳んと招きよせ井戸堀藤治を手にかくる是藤戸の盛綱の仕ぐみになる條有又寶曆中歌舞妓狂言にけいせい播磨廻の中にはお菊の役を立役にして嵐三五郎やつし役めくらにて隣の娘と色事しけふお家の寶具足皿十枚の賃受に金子つまる隣りの娘身を賣りて具足皿手に入る盟受取の役に來りしは青山鐵山三升大五郎敵役にて皿が手に入らずば夜半の鐘を合圖に若殿の首を切ると奥にいて三五郎の首を幸ひにそつと出て皿一枚を隠しもつて這入る三五郎は是をしらずに娘の身賣を跡にてきゝ愁ひ有て又悦び若殿の命の親の

具足皿と箱をあけ一枚ゝさぐりながら數へる所九枚よりなし大恠りにて一枚二枚と又數へ直す内遠寺の鐘ごんゝとなり出すありや何時と鐘の音に合せて一枚ゴン二枚ゴン九枚ゴンア、かなしやゝの仕組あり是ら其頃の穿にて古き狂言にはどこにか一所二所はよき所有是らは天下に博識の方數多なれど詠て知つたる者は予獨りなるべし時節來らず再び世に流布する事なく徒らに朽る事惜しむべき筋なりけり

鴈金組五人男の説

五人男は元無頼のあぶれ者のことは其節の口書等寫し傳て諸所にもてる者有簗笠雨談にもそれを略出せり元祿十四年前に云龜山敵討と同年四月十七日夜討の前の年なり六月六日の夜大坂南久寶寺町四丁目河内屋五兵衛が雇人喜兵衛と云者同じ町なりける三木屋勘兵衛が下人五郎といふ者と西横堀の濱際に納涼し家に歸らんとて北久太郎町の濱際を過りける時上難波町に住ける木挽庚申の勘兵衛及同町板屋三右衛門が下人市兵衛と云者喜兵衛五郎に喧嘩を仕かけ互に掴合ける所へ博勞町の溢者庵の平兵衛來かゝりて懷劍をもて喜兵衛が膳を突破り立去ける是より事起りて元祿十五年八月廿六日さら

に虎狼の如く人も恐れたる五人男等終に法場に屍をさらせりその名をいはゞ先鷹金文七は奈良屋町雁金屋七兵衛の歿年廿八是を七組の頭とす其手に屬するもの博勞町庵の平兵衛年三十立賣堀中の町極印屋庄三郎が舫極印千右衛門年廿三坂本町の雷庄九郎年卅一天滿六丁目七兵衛が舫はての市右衛門年廿九是を撰み出して五人男と云此外にかいたての吉右衛門喧嘩屋五郎左衛門とんび勘右衛門三つ引治兵衛からくり六兵衛因果の平兵衛などと云溢れ者川船水手の飛乗して半俠半賊の惡徒なりしが是も此時路傍の霜と消て無祀の鬼となれり此内喧嘩や五郎左衛門三つ引治兵衛を頭とす雷庄九郎も川船水手の飛乗して喧嘩や五郎左衛門が手に屬せし者なりしが後七組の手に屬す又讃岐屋町に道具屋與兵衛といふ者有異名を親仁の三郎といふ元溢れ者にあらずといへども彼等に脇差をかして是をさゝせ其恩をもて群集の場所の後楯とせしが此時我身の善惡いひわきがたくて口に溜る津の國の住居を許されず棚なし船の行衛もしらずなりぬ予浪花に遊びてその實記を閱す是その略なり元祿十六年始て五人男の事を作りて板せし冊子に彼

等が我名をのせたるよし聞しがいまだ面あたり見ざればこゝにもらしぬ天王寺の塔中に鷹金文七が奉納せし八島合戦の繪馬有しが近曾天王寺回録の時失て今はなしとある人かたりきと簑笠雨談に出せり扱も淨瑠璃外題年鑑には雁金文七と外題を呼て元祿十五年午八月十六日に御仕置に合ひ同九月九日に初日を出すと有是は岡本文彌の淨瑠璃にして續物の淨瑠璃にあらず今云說經祭文の如きものなり夫より四十一ヶ年後寛保二年七月竹本座の淨瑠璃に男作五鷹金と題して作者竹田出雲掾なり此時たゞの俠者として善人とせるより後追々に新作して今にては浪花男とて名うての男達と思へりまた彼等が墓は生玉寺町正法寺^{日親}に有て鷹金屋極印屋と臺石に彫たる有是らを曲亭子に見せなば無よろこぶべし

扇屋夕霧が略傳

夕霧が墓は大坂下寺町淨國寺に有て花岳芳春信女脇に延寶六戊午年正月六日俗名扇屋夕霧と彫入六尺計の見事なる石塔なり今を去る事百七十餘年にして遊里の女郎とひとくちに呼べるものゝ東都に三浦屋高尾^{藝は鳥越橋詰に有俗に土手道誓寺}京都に林屋芳野^{藝は北野立本寺灰屋紹益が妻なり}浪華

に此夕霧の三人は一個の名物なり伊丹の俳師鬼貫此墓に詣て此塚は柳なくとも哀なりと詠たり此三都遊君の内にも高雄は三派の横死によつて名高く芳野は灰屋紹益に嫁して數寄の道に志深く吉野廣東に名を呼ぶのみ夕霧には一點の難なく唯全盛の拔群なるゆへに名高きなりされば夕霧の書たる文を扇屋に珍藏して後夕霧文章といへる端唄有此文中にその扇屋の金山と名に立登るとの文より後人いろ／＼と附會の説をもふけ折屋の夕霧扇屋の金山と二人の全盛有しなど云は論するにたらず金山は金箱金藏と稱するの詞なり延寶六年二月三日より夕霧名殘の正月と云歌舞妓狂言を始坂田藤十郎が女郎買の大盡の骨髓に當りを取三十年後寶永五年迄に夕霧の狂言を出せしこと以上十八度なりしが皆悉く繁昌せしと云是夕霧は此津第一の名妓坂田は俳優中の名人なりしこと是にてもしるべし寶永七寅年七月に夕霧阿波の鳴戸といへる淨瑠璃出てより夕霧篋の袂浪花文章夕霧塚落標浪花詠など皆夕霧を題にして藤屋伊左衛門と云大盡は別にもふけて拵へし名なるべし箕山が大鑑に夕霧は尤麗容澤なれども目は瞎目なりとしるせり又太夫

の引舟女郎をつれる事夕霧より始るといふ都て夕霧が事は自笑其積が比の書にいろ／＼出て全盛遊君の冠たるものなり其後此名を繼者なきを以てしるべし

八百屋お七が事跡

近世著聞集と云書にお七が傳は委しく出たれども少しは推量の説有湯島为天満宮へ松竹梅の額をお七自書して奉納したりと専ら世人の口碑に遺れども湯島にはなし實は谷中感應寺中祖師堂に常在靈鷲山法華最第一と額をお七が十一歳の時書て延寶四年辰春二月と落款したるを訛に傳へたるなり扱罪を得しは十六歳の時のことにて天和二年戌の二月なり墓所も駒込吉祥寺と狂言にはすれど實は小石川指谷町南縁山圓乗寺と云天台宗の寺なりお七が法名は秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石碑に彫て有今より百六十九年の昔語なり天和笑委集と云天和年間の江戸大火をしるせし書の奥に實説有是らは江戸の事故彼地にては歌舞妓に早く取立浪華にては廿三年後寶永元中年に八百屋お七歌祭文と云淨瑠璃なれり享保十七子年に八百屋お七戀絆櫻安永に伊達娘戀絆鹿子など追々

増補有歌舞妓にては初代岩井半四郎お七の役にて大當りせしより代々岩井の家の狂言とは成けり

黒船一代男狂言の話

寛保の比浪華の俠者黒船忠右衛門と云るは舊より歌舞妓狂言に拵へし人名にてあるべき筈なし故に其事跡を書たる書もなきか予が亡父の話に兼て聞實説に近ければ爰に出す抑享保元文寛保の比は前集にも演る如く男色世に行われて途中にても狼籍の事まゝ有けり其蹟が傾城禁短氣に男色女色の太閤答あり北濱加島屋何某の丁稚此頃は前髪徒らといふ物を出して結木綿ふり袖をきたる也米切手を懷中して中の島を通りしに片町の馬士頭庄兵衛と云者此丁稚を呼とめ男色の念者とならんと口説ども隨がはずゆへに米切手を隠し取さらぬ顔にて返しけるが歸つて見れば米切手なし正しく馬士庄兵衛が業なりとしれども取かへすべき手立につきて堂島の親仁米仲士の頭を云若き者にも親仁の號有又年よりたる者にても名い者と呼通稱なり根津の四郎右衛門と云俠者を呼よせ相談に及ぶ根津の四郎右衛門一義にも及ばず請合て新町橋にて庄兵衛に出合ひ取返したり尤庄兵衛も切手を取ても仕方なくたゞ戀の意趣にて隠したるの庄兵衛は無念に思ひ度々四郎右衛門方へ行立引をせんと云ふ四郎右衛門今晚とか翌の晩とかどこ

そこにて出入せんとて期を延しけるうち庄兵衛も拍子を拔し大津へ逡行事なく濟けるとなり爰に其比俳優初代姉川新四郎は座頭座元を兼作も自らすと云名代役者なりしがふと夢に此立引を見て趣向をつけ四郎右衛門方へ行あら増の筋を聞て新町橋の上に黒き帆掛舟の行燈を出し女悦長命丸を賣るは古き事にて今の新町の廓開發の比より賣る事なり廓中細見みはつきし等に委し是に准らへ黒船忠右衛門と云名をもふけ狂言に始よしを四郎右衛門に云て歸れり寛保三亥年正月二十八日より初て中の芝居にて黒船一代男と外題を賦しけり其比實惡の名人嵐七五郎獄門庄兵衛やつし事の名人山本京四郎は鎌倉や五郎八男色より思ひつきて鎌倉街道との滑稽なり日出て評よく四郎右衛門も見物に行しが北の立引に手ぬるしとて中座をして歸れり新四郎又北へ行て立引の心を聞て工夫に及び根津を又呼て見せたりければ四郎右衛門是でこそとて悦びけると其狂言今に遺れり始五郎八に煙草の烟りを吹かける其仕かへしに花道にて行合ふ時忠右衛門庄兵衛につを吐かける庄兵衛しらぬ顔して行かけるを舞臺よりは若いのと呼とめる是四郎右衛門の詭らへなりとぞ又立引にか

ゝり庄兵衛を見事に取て投る此時七五郎も大立者ゆへ投らるゝを不承知なりと云投ねば根津了簡せず作者並木丈助挨拶に入りて投らるゝ不肖に幕切に下駄がないゝとわめく時忠右衛門下駄屋に一足貰ふて北の者の立引して何がないかないといわるゝもいな物此下駄はいていねと云庄兵衛いや下駄もらふたといわれるは否じやそんなら爰へ捨ふわいとちよんと一足直す捨てた物ならひらわふわえと履是忠右衛門がはき物を直すが七五郎の投られ駄賃なりとぞ僅六十年前なれど役者にも古風なる事有たりなど亡父の咄幼き比聞たり是も今からは百年の昔なればさも有べし寛延元年に黒船忠右衛門當世姿とて歌舞妓にてし同年淨瑠璃にて容競出入湊と外題出しけり故に黒船の役といへば誰も初代姉川新四郎俳名をまねてすること習ひなりとぞ黒船の着る頭巾を姉川頭巾と號銘々冠り流行せしなり安永年中には性根競姉川頭巾又昔追風出入の湊と云外題も有後段々に増補して新奇に巧めり附て云出入の湊新町橋の口幕を五行床本にも瓢箪町の場と書有見る人皆茶屋場と心得り院本にては播才といへる町の料理屋なり瀧川は他所行に

て駕に乗り來る黒船は判事物をつれて彼岸參りの歸りがけに此料理屋へ來たるなれば今の四つ橋とか御池橋邊に其比播才といへる名代の貨食店有しなるべし因に云關取千兩幟上の卷惠海庵と云料理屋は安永天明の比まで西照庵の隣に有しとなり浮瀬の舊は高津植木屋吉助の所に有し事は子が綺語文章に出せり遊所貨食屋などの興廢はまゝあることにてよふゝ淨瑠璃歌舞妓にのみ遺る物なりお染久松の比は天満天神社内小山屋盛んなりし事は此淨瑠璃にてしらかしくの文句に爰も流れの島の内と南新屋敷とて幽な遊所も皆昔とは成けり

女達奴の小万が事跡

黒船一代男に奴の小万と云女俠子を書込しより續て容競出入の湊にも乗たるがゆへ髪は奴鬘に結び脊に尺八をさしあるきし女有と思ふも有べし是は又其比より五六十年の昔土佐書と號し古風なる畫に合せ容を別にもふけし者にて實は木津屋の養女お雪といへるを仕組るものなり平野や何某の娘雪女長堀木津屋何某へ養女となり幼稚より書をよくし詩歌糸竹の道にも暗からず實家養家の家督の儀に付親族に爭ひ有

雪は是をうるさく思ひ身の片付を好まず氣に入の娼
二人^{お龜}を連て氣儘に暮せり十五六歳の時二婢をつ
れて四天王寺へ彼岸會に詣口繩坂にて惡者二人雪が
簪をとらんとするを左右へ投のけ再びきたるを二婢
と共に打こらしければ惡者恐れて逃行しより其力量
をはめそやし名高くなりけり實母の名を万といへば
我名も又万と呼びけり扱万が廿計の年寛延元辰年に
出入の湊又當世姿の狂言出て奴の小万と呼て奴鬻に
尺八もてる圖を出しけり或者方に告て曰今淨瑠璃
歌舞妓にて奴の小万と云女達有は御身のことをする
よしお方は事に拘はらぬ氣象なればあゝおかしと笑
ひ拾けり後に芳澤崎之助^{芳澤あやめの村中}村富十郎の兄なり奴の小万の
似顔畫を持て或人方に賛を乞たり其賛に眼前不受綺
羅紅何願後身住^上空^二憂憤由來除^三國賊^一千生萬古
護^二皇宮^一此冬京師に登つて或堂上方に仕へ四五年を
經て浪華にかへり氣儘にくらし遙後難髮して正慶尼
と稱じ養家の氏三好正慶と云長慶が後孫なるゆへ然
呼とも云谷町寺町月江寺に住又難波村の別莊に移り
文化元甲子年七十六歳にて終りぬ木津村幽泉寺に雪
龜嵩と彫たる石碑有正慶尼の書たる物予も一二枚も

てり奴の小万とは雜劇より附たる名にて我も人の呼
ぶまゝに奴の小万といへば我事なりと思ひしものと
おかしき氣象にして是も又浪華の名ぶつなり

盜賊日本左衛門が話

先年東都にて東海道濱松英賊とか外題したる十卷ば
かりの寫本を見たる事有虚實相わからねど日本左衛
門一代の事を書たり年號時日も忘れたれ其思ひ出る
まゝ爰にあらはす始遠州掛川宿の百姓の扮にて濱松
庄兵衛とか呼べり人品骨柄いとよければ京師堂上方
に暫らく末の奉公をして堂上方の事粗委しく覺へ後
賊徒に交り器量あるまゝ首領と仰がれ近國の大名代
官地頭へ堂上方の拵へごとをして街を業とし後惡事
あらわれ公義より召捕の場を逃さり上方に行暫らく
影を隠すうち以前京都に奉公せしうち言かはしたる
女有當時浪華に居ると聞直に長堀に來る長堀富家の
娘奴の小万と異名をとる女にて格子の内より往來を
詠る前を庄兵衛^{通名日本左衛門と云}通り顔見合小万仕かたにて
しらせ門へ出て東堀人なき濱へ下りて絶て久しき對
面を悦び庄兵衛は筐の品を小万に渡しさがたき儀
有て遠方へゆけば今生の暇乞ひせん爲態々と下れり

とて袂を拂ふて別れ京都御所司屋敷へ名乗つて出る尤日本左衛門が人相書は諸所に廻りて紋所は丸の内に橘なるよし其節の所司名前早速に召捕るべきをさもなく今日は公儀繁多なれば明日來べしと歸されけり家來の面々何ゆへ御歸しなされしぞと問へば我と名乗出る程の曲者なれば子細あるまじなれど彼が英氣を抜く爲に返せしと云翌朝又來りて尋常に廻目を受梟首せられしと書たり寶曆十二年二の替り中の芝居にて作者竹田治藏秋葉權現廻船話と外題して日本駄右衛門に中村歌右衛門加賀屋歌七梅玉の父なり玉島幸兵衛濱松庄兵衛と二人に割たりに三樹大五郎初代逸風日本圓秋に中村四郎五郎其時の役人徳の山五郎徳島五平兵衛とあればなりに藤川八藏牙のお才是にらへ物にて東海道茶やの娘と云古き盜賊ありしとの事なり嵐小六小六玉の親女形の名人小六は難助と云娘方の比なり大入大當りをとりしとなり中入街ばに街ぞこないましたとの間は本文所司代屋敷へ名乗出し時の大膽不敵を含めて書し物と思わる八九十年の今に廢す時々此狂言は出る又楓紅葉話など増補したるも有扱も此中に奴の小万の名出たるは珍らしけれど案るに小万寛延元年に雜劇にせし年の冬より四五年京に居しと云によくかなへり又日本左衛門と云かはし暇乞ひ

に下りしとは誠にせよ餘人のしるべき事ならず後に左衛門の話によつて寫本には出したるなるべし是らの譯あるゆへ早く薙髮せしかとも思はるゝ也依て數ふれば秋葉權現の狂言出たる年は小万は卅四五才なるべし都て前の條小万が傳によく叶へりと云べし又一説に奴小万は柳里恭柳澤權太夫淇園とも云に畫を習ひ此妾となりしといへるは小万の寺友達におなじき女有て是も一癖ある女にて小万くと呼れたる女その比有しと云柳里恭に物學びせしは正慶尼の小万にて妾となりしは今一人の小万なるべし此小万の家は丸屋何某と云しとぞ扱も文化の始江戸狂言に絃着綿菊の嫁入と外題して奈河七五三助出入の湊の世界を東都に引直して黒船町の船宿忠右衛門淺草觀音前に黒船町獄門正兵衛本名は濱松庄兵衛松本幸四郎是をす鎌倉河岸米屋五郎八御堀はたに鎌倉がしと云有澤村源之助後奴小万瀬川菊之丞後仙女となる此狂言にはもとと遠州濱松の屋敷にて庄兵衛小万不義あらはれ追放となり小万は吉原へ流され女郎となりしが餘の客を嫌ひ奴と異名を受年明て忠右衛門の男氣をきゝ突かけに嫁入して身の上を頼む表むきは女房ふんにて黒船かくまふ獄門庄兵衛此内へ盜賊にはいり小万と顔を見合す

石川染大佛前妾宅へ小鮎五郎八二階にかくまれ居て口幕源五郎盜賊に入ると同じ黒船わけ入て獄門と五郎八は兄弟よりの詰合となる黒船わけ入て獄門と五郎八は兄弟となのり合ひ庄兵衛立役にかへると云狂言有是はかの江戸にて予が見たる寫本濱松英賊より案じたる狂言なりと思ふべし歌舞妓とても筋なき事は書れず各より所あるとしるべし

東海道茶屋娘の話

是は又いと古き事にていつの時代何國の者としるべからず舊より美しき名代の娘か又名に聞へたる女の盜賊にて有しか是も詳ならねど古き手鞠歌にのこれり肩と裾とは梅の折枝中は五條の反橋と諷ふは寛永南島變と云寫本^{天草一揆の書四}_{十卷ものなり}に天草天の四郎に言號の娘有て一揆滅亡の折此田舎染の振袖を取出して歎きしと有きされば寛永の比より諷ふ事と思わるゝに又其歌の續きに反橋とてちよつきりこつきり小女房をどこでうたした吾妻街道の茶屋の娘はにほんちよつきりこと討したと有は是もその比より諷ふ物か又後に反橋の歌についだる物か其程は不分明案るににほんちよつきりこと討したと有文句より東海道の茶屋の娘にてにほんちと云縁あれば竹田治藏日本左衛門

の世界によせて牙のお才は舊茶屋の娘にて玉島幸兵衛此女に三千兩の金子をつかひなくし勘當を受護摩の灰を業とすお才は又幸兵衛をもとの武士にさゝんが爲日本駄右衛門の手下となると仕ぐみし物か秋葉權現の割外題^{割外題脇外題の事は前編にくわしく出た}に東海道の茶や娘と書り後天明二年淨瑠璃に吾妻街道茶屋の娘と外題を出せり文化文政の比ちよんがれぶしに諷ふたる笠松峠の女盜賊夏見何某と云武士を谷川にて其身は脊に負れたる儘殺して金を掠しと云を狂言に仕組て牙のお才と呼びもとは東海道茶屋の娘なりとせしは秋葉權現の名をかりたる物なり何ぶん古く人口に膾炙して確としたる説を聞ず後考をまつ

灰屋紹益吉野の話

此傳はよく人のしる所にしていまだ淨瑠璃歌舞妓につかはざれども後々狂言に縁なきにしもあらざれば爰に出ず兩人が傳は曲亭子が雨談に出せば讀でしるべし灰屋紹益は智恵小路上立賣に住て豪富の息子なり六條の廓柳町林屋の肥前益子が禿林屋吉野太夫となり突出しの比より紹益なじみて夜を日といわす通ひけり吉野云我名を芳野と呼れながら吉野の花を見

ぬは勤の身の悲しさと紹益易き事なりとて和州吉野の櫻を一樹求めさせ吉野に送る吉野歡びて我獨見んも惜しとていと見事なる箱に植させ吉野が揚屋入には多人數是を昇もて次に吉野長柄さしかけさせて練り行物から廊中には是についくものなく全盛の名いよ／＼高し貴人高位にもしられて紹益とはいよ／＼深き中となりける紹益の父是を聞て吉野が身の代と思ふ計の金子をくれて勘當せり紹益も年若ければ苦にもせず吉野を根引して小川に庵を求めて夫婦住けり父一日他所へ行てかへるさ雨ふり出しければ軒下に逃入て晴間を待ち格子の内よりいとうるわしき女是を見てそこは吹降の雨にて身や濡り給はんこなたへ入て待たまへと云に嬉しく玄關へ通るに爐に釜をかけて閑雅の人の庵と見ゆ女こなたへと請じつゝ茶を立て出しぬその爪はづれより茶の手前まで所に見なれざればいと心置せられるうち雨も晴たれば一禮をのべて立かへり次の日親族の人來て話の次手きのふ雨舍りせしうちはいかなる人の住家やらん勘當せし盼紹益などあればかりの女なれば親がゆるして嫁ともいわんに遊君に魂奪はれ吳々の不孝者と子

を思ふ身の親心涙まぎらせ話にぞ親類の者其家を聞扱其様の女ならば令郎の嫁とてゆるさるゝかそれこそ子息の隠宅にて其女こそ吉野なれと告るにぞ父始てしりて其奇偶を感悟し遂に紹益が勘當をゆるし吉野も共に引とりて世間親族にも風聽してゐあはせしとぞ是らは實によき狂言の筋なれ共今是をすべき俳優なし李冠湖鹿鬼丸ならではその人品に合ふべきなしいと惜き筋なりけり扱も吉野は寛永八年六月廿二日行年纔十九歳にて歿せり紹益は和歌を詠て貞徳と友たり又蹴鞠茶事にてくわしく吉野哀悼の歌に都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山に移して後世事を妻子にゆだね小川の隠宅に籠つて茶事に遊び元祿四年十一月十二日八十一歳にて歿しぬ法號を古繼院紹益芳野の法號を本融院妙供と二行に彫付墓石は北野立本寺に有

景清重忠茶湯の話

扱或人の云此紹益が世事を捨て小川の隠家に籠つて閑を樂しむに一夜盜賊忍びいりて庭中にゐむ様子紹益しりて次の間に退りぞきいかゞすらんとためらふ所に盜賊は茶の數寄者にて臺子の飭茶室の様も見ま

ほしきまゝ忍び入たる者にて心靜に庭廻りを詠め待合よりにじり上り迄來て窺ひ見れば爐には熱の音して薰物の薰りそとして誰も見へねば我を忘れて手水をつかひにぢり上りより靜に通ひて客の間に着紹益次の間より窺へば人柄よき者にて進退茶事に馴たり獨服と思ひしによき友を得たりと紹益も客あしらひにて次の間より茶室に出て目禮のみにて詞を出さず茶を立て客に出せば客も辭せる氣色もなく飲む事皆禮にかなへりやゝ有て挨拶の贈答に及び扱も御身は何國の方にて今宵爰に來らせ給ふと間に客答へて拙者は名もなき盜賊なり兼て尊名を聞及び此よふも見たく思へど傳手なくてはたさゝりしが今宵ふと忍びこみ不思議と主のお手前にて日比の望叶ふたりと厚く禮をのべるに主もよき友を得し事よ毎度いらせられよと打くつろぎ談話に及び夜更るもしらず有しが又重ねてと約して路次の方へ出る紹益短檠の明りを燭に移して見送り出しが此盜賊は後にきけば大佛前に居たる石川五右衛門と云盜賊なりしとぞ此一奇談はよく人の云所なれども紹益は元祿四年八十一歳にて歿したれば生年は慶長十五年なるべし石川五右衛

門は文祿に釜熬の罪に果れば紹益が生年迄に十五六前なり是こそ實に附會の説にてもし石川が忍びこみしものならば古田織部とか織田有樂とかにて有べし又紹益の宅へ來し盜賊ならば餘人なるべく亦盜賊ならねど好る道紹介の人なく忍びいつて姓名をとられ戲れて盜賊なりといひしもはかるべからず紹益も五右衛門も茶事に名のあるゆへ年曆によらず附會の説をもふけしにぞあらん東都の古き狂言に惡七兵衛景清に中村仲藏俳名 秀鶴秩父庄司重忠に松本幸四郎俳名 錦紅にて是を此まゝ仕ぐみ景清盜賊に入て重忠と茶の湯の場其比大當りせしとて後又景清を食茶の湯の狂言を出せり近來海老藏七代目 團十郎浪華にて一兩度せしが舊江戸狂言ゆへ鎌倉の大佛供養とし七里が濱の非人小屋にて茶の湯の狂言なるを上方の地名に予が引直して少しく増補したり是は自笑其積の比の當世茶人形氣と云書より出たる趣向なり上京の或茶人の方にて二三人の客有て路次の切戸細目にあき有菰を冠りたる乞食通りかゝりて切戸よりそなく這入り庭廻りを詠待合の邊よりしきりに圍ひの方を延上りて見る様子を客見付て主に告る主も一奇人なれば彼今こそ乞食

なれ以前は相應のくらしにて茶事を好るならんといへば客も各好ものなればいか様爰へ呼いれ茶を飲せんはいかいそれよからんと庭に呼こむ乞食おづくと庭へ通り踏付石の向ふにうづくまる亭主の云茶事には貴賤の隔はなきから汝好まば一服飲せん乞食大に悦びて面桶を出して茶碗より是に移して飲んとす亭主も客も興に入面桶に移さんより直に飲べしとすゝむるにより一兩度辭退のうへ達てとの詞に茶盃取上飲事都て禮にかなへり棚の飭り付床の軸物など庭より詠て賞る詞にもいち／＼名を言ひ當我等も一會相催ふし各方にさし上たしと云に皆々ほとんど興に入催ふしあらば行んと云然らばいつ幾日吉田山にて催ふす間必其節と約束して乞食は歸りけり跡にて衆評まち／＼にて其約束の日主客連立吉田山に行ければ粟田焼の大土瓶の新きを三本の竹に釣り瓦を半ば地に埋めて風爐となし青竹の茶入に茶を入鳥の餌入を茶盃とし青竹の茶筌茶杓悉く新しきを飭り新の菰の三枚置しは是を敷との心なるべし見る程に／＼感心して扱乞食を尋ぬれども見へず扱は身を恥て爰に出ぬよのまづ土瓶の素湯もたぎりあればと庭の上に

銘々座し其潔白を感心して興に入たる其折節俄に一天搔曇り魔風發つて吹ある、何れも是はと騒ぐうち杉の梢にあり／＼と彼乞食は天狗と化し我は利体の靈なるぞや茶を飲むはそれにて足れり今時の數寄者共はるしれぬ古き道具を並べ干店商人に異ならずと當世茶人の癖を言立罵癡らせ一陣の魔風に姿は見へずなりにき此一話よりもうけしもの也又大久保政談とか云書に長崎の豪富の家にて香の會有乞食庭に入つて我も一品有とて面桶袋より一木を出して煮て歸る翌日長崎市中を順見司有て此香を嗅出し終に乞食を召出して調ぶる乞食は長曾我部の落胤とかにて東都へ送る大久保忠教是を捌くの一話も恐らくは此茶人形氣よりもふけたる話なるべし此乞食茶の湯の狂言も錦江は口跡あざやかに多辯の男にて重忠を至極世話の辭にて云秀鶴は時代のせりふに云兩人の取合ひいとよかりしと東都の雜劇好の老人ははなされけりさもあるべしと思はるゝ事なり

西澤文庫傳奇作書續編中の卷終

西澤文庫傳奇作書續編下の巻

目次

一 榮種御供狂言の話
凡十六ヶ條

- | | |
|--------------|--------|
| 一 狂言人名實説の話 | 元祿年間の事 |
| 一 英一蝶遠島の説 | 正徳年間の事 |
| 一 生島新五郎流罪の話 | 元祿年間の事 |
| 一 市川才牛横死の話 | 天保年間の事 |
| 一 江戸三芝居替地の説 | 元祿年間の事 |
| 一 芳澤春水名譽の説 | |
| 一 能に新工夫を用ひぬ話 | |
| 一 書に畫虚事有の話 | |
| 一 詩歌連俳を評する話 | |
| 一 狂言綺語を評する話 | |
| 一 淨瑠璃狂言穴の話 | |
| 一 古淨瑠璃名作の話 | |
| 一 歌舞妓狂言穴の話 | |
| 一 古名人役者に妙有る話 | |
| 一 同狐忠信思入異なる話 | |

西澤
文庫
傳奇作書續編下の巻

西澤綺語堂李叟著

狂言人名實説の語

お千代宵庚申菊野五大力お長右衛門桂川などの事跡は
前集に出して遺るは此編の上中の巻に出せり此餘に
も狂言にするのみを知つて其傳記をゑるさぬ物甚多
し所謂山崎與次兵衛 おもと 梅川
ふじや言妻 かめ松 傳兵衛 小いな 忠兵衛
と也爰に記せば實に際限なき物から附録に出すべし
亦かゝる浮たる物の外に河村瑞賢和田雷八など悪人
にあらぬ人を狂言によりては敵役謀叛人に仕組しも
の少からず木津の勘助渡守の源八と名よりもふけ
し狂言も多かり是もともに附録に委敷出所を正して
ゑるすべし爰に狂言にはあらねど劇場に縁ある奇談
を出す是ら人口に膾炙するのみにて正敷書に出ざれ
ば實説とは言難き事なれど又實説に遠からぬ事もあ
るべし

英一蝶遠島の説

寶晉齋其角が一蝶を船場に送り後鹽魚の中に笹の葉
の有しを得て信友の情を盡せし事は予が綺語花草に
のせたり天和貞享元祿の比狩野安信永の弟子に多賀
長湖と云者有て畫の道に執心厚く精身を入て上手の
名を得たり然共正風の畫にてはいかなる名人に成り
ても家元の上に立たたしと多年工夫をこらし一流を
案じ出し今世一蝶流と云畫を書初遙後英一蝶と云し
は此長湖が事なり此者元祿の初公聽の咎めにて遠流
になりしは常憲院様好色にふけらせ給ひ許多の美女
を寵愛し給ひおでんの方と云は中にも第一寵愛の上
臈なり吹上御庭の池水に小船を浮め公が棹さし給へ
ばおでん殿は船中に座し綾羅の袂を翻し小鼓を打此
御遊の平日成けるは貴賤とも是を知らぬ者はなかり
けりされば繪師多賀長湖その比百人上臈と云繪を書
て世に鳴らせり其畫面貴人高位の女臈より賤の女迄
いと麗しく姿繪を書けり其中におでんの方船にて鼓
打給ふ所公の棹さし給ふ所を書たるに此事誰公庭へ
告たりけん忽召捕られ獄舎の上終に遠島仰付られけ
りされ共此事御咎とはなく多賀長湖御制禁の殺生を

好み鳥を取魚を釣候科とぞ御書付にて仰渡されなり

とぞ長湖願て配所へ繪の具筆等持參の儀願ひ叶ひ配所にて英一蝶と改名し一子を設る是を鳥一蝶と云後年有章院様御代歸朝免許仰付られけりされば百人上臈の内おでんの御方逍遙の體至極出來よかりしゆへ御咎に逢し事不幸といへども其藝の業に依て刑せらるゝは本意にも近かるべしとさして愁ふる色もなかりしとや後其圖を書改て小舟に女の舞裝束にて羯鼓を打圖として是を世に淺妻舟とは呼ぶなり淺妻船の賛にあだし仇浪よせては歸る波あさづま船の淺からぬあしまたの夜は誰に契りをおかせて枕はづかし我床の山「今霄寢ぬる淺妻船の淺からぬ契りを誰にまたかはすらん後水尾院御製此一蝶が百人女臈の繪を本として其後京師西川祐信と云る浮世畫師春畫枕畫の達人百人女臈品定といふ大内の隠し事を畫又夫婦雙が岡と云枕畫を板にして雲の上人の姿をつがひ繪に圖しやんごとなき方々の枕席密通の體を模様して清冷殿のつまがくれ梨子壺の隠し妻萩の戸ぼその別路夜のおとゝの妻迎へと色々公聴にもれ聞へて是又嚴敷御咎にて板を削られ絶板となり西川も一蝶同様

になりしよし云り

生島新五郎流罪の話

正徳四年年正月十二日芝御靈屋へ從三位月光院様御代參として江島と云御年寄を遣はされけるに江島霽日増正寺役者中へ明日代參の節芝居を御振舞下されと申送りしに返答に芝居の儀は決して相成申間敷由斷る江島殊の外腹立し御吳服所後藤縫之助の手代治郎兵衛清助兩人を呼て明日木挽町山村長太夫芝居見物に候間二階棧敷五十間計り辨當百餘人前申付吳候様云けるによつて兩人早速木挽町松屋といへる茶屋へ詔らへ翌朝治郎兵衛清助は二階棧敷より座元長太夫方へ廊下傳ひに道を付させ棧敷には簾をおろさせ袴羽織にて待受座元長太夫役者生島新五郎作者中村清五郎袴羽織にて酒宴の相手に出ける江島は増正寺へ御代參に行方丈役者への賜り物金七十兩銀二貫五百匁其外吳服物品々有を少しにて賄ひ残りの金銀吳服物は芝居へもたせ代參に事よせ多くの女中を誘ひ出し増正寺を早々立木挽町へぞ行けり其節御年寄に肩を並ぶる面々此日同道せし衆中是新御中老役宮路五百石同役木曾路七百石表御使番梅山五百石廿八才御内御使番

吉川四百五十同役四百七十御用人およの四百八十同

石廿七歳

石廿四歳

石廿五歳

役四百五十およし御小姓衆おげん十人扶持同役お仙十人扶持

十四右女中を初として末々の女中供の諸士迄都合百

卅人ばかり不殘棧敷に入て彼役者を相手に酒宴を催

し狂言の物音も聞へぬ程にぞ見へける此江島は當年

卅一歳にて高六百石とり月光院様の御意に入なれば

心すゝまぬ人も江島が威勢に恐れ上下共に随ひける

とかや八つ時棧敷より廊下傳ひに長太夫が居宅の座

敷へ行女中皆々打混じて酒宴となる作者清五郎女房

お梅はもと祈禱者の娘にて先公方様御代御城へ召出

され御意に入御奉公勤けるゆへ江島とは至つて懇意

なるゆへ取持に出けるなり江島と新五郎は七年此か

たの馴染にて深き中の上新五郎が娘を水戸殿家中奥

山喜内と云者の娘にして喜内の兄奥山交竹院手引に

て江島が部屋子に致置ける此日も早七つ時にも成け

れば長太夫が座敷を立裏通山屋と云茶屋へ行役者野

郎茶屋の者共に増正寺より持參の反物金子迄残らず

花に出し餘り時刻移るがゆへ付來りたる御徒目付御

小人目付より御立候へと度々云ければ江島立腹して

漸木挽町を立平川御門より夜五つ時に入り月光院様

御前にても江島口にまかせて申ゆへ何事もなかりけるが翌日御徒目付御小人目付黒鐵同心中立合せ若年寄中迄一書を以て訴ける夫より御詮議となり二月二日御詮議相濟何れもお暇下され皆々上著御取上白無垢計はだしにて御城を追出され各宿へ御預となりけり江島一人は白無垢計はだし髪とり亂せしまゝ平川御門より飯田町江島が兄白井平右衛門方へ御預とぞ平右衛門座敷牢を拵入置たり此江島は元三河國荊谷村の土民の娘にて幼少の時關東へ賣られ吉原にて遊女なりしを白井平右衛門吉原にて馴染此女を受出し置しが江島奥方の思わくもいかゞ奉公に出しぐれと云に平右衛門も尤に思ひ紀伊中納言殿御簾中鶴姫君へ奉公させしに姫君御逝去ゆへ江島も浪人しそのゝち櫻田甲府様へ御奉公に差出せし所甲府様御本丸へ入御有三の丸様御供にて月光院様付とはなりたるなり扱外の女中衆は何れも五六百石の面々なれば召仕の女房達下女はしたに至る迄上下三百人の餘其日の内に皆々御城を追出され跡は残らず關所となり下女の分は當座に下され二月ばかり過て女房達の分は下されけるとなり二月三日より評定所にて御詮議と相

成り木挽町役者共不殘召呼れ生島新五郎中村清五郎座元長太夫手錠仰付られ江島に貰ひ候物殘らず書上候様仰渡され皆書付にて差上御詮議の上にて新五郎牢舎となりけり其時の狂言右衛門櫻と云外題にて丸橋忠彌が事を作り二月朔日より替りを出す其節新五郎の衣裳紺地の金入立波の模様紅裏付の小袖江島所望して御紋付縮緬の小袖と取かへ候に付入牢仰付られしなり長太夫座の團十郎勘彌座藤田花之丞堺町の野郎共葺屋町市むら竹之丞座にて瀧井半四郎召出され半四郎は手錠にて残りはお構ひなし十三日に御奥醫師交竹院喜内清五郎と對決有清五郎女房入牢後藤手代治郎兵衛清助下男七兵衛入牢江島は其日より揚り屋へ入ける清五郎女房嚴敷拷問にて白狀に及び終に責殺され江島も白狀に及び様子明白に相知れける其比三位様御大切の御道具二三品紛失に付若江島より役者共に吳候やとの御吟味有體に申ものは御構なし少しも偽り候者は牢舎手錠に成り段々御詮議相募り或は御免或は彌増の御詮議に逢ふ者有ける瀧井半四郎始手錠後々は入牢喜内事新五郎娘を自分の娘と偽り江島が部屋子に遣はせしは水戸殿家中喜内と

新五郎女房竹とは一腹一生の兄弟にて喜内の妹とも有べき者が新五郎女房となりしはさるお屋敷奥方に奉公中新五郎に心をかけ駆込て夫婦となり兄喜内交竹院共勘當の中なりしを清五郎喜内方へ立入すれば段々と詭言して勘當もゆり我姪なれば娘として江島が部屋子に出せしと也其上芝居吉原杯へ同道せし事顯れ喜内は水戸へ御引渡しとなり彼屋敷にて成敗有けるとぞ長太夫は棧敷より居宅へ通路を付女中衆を引込し科にて入牢になり新五郎清五郎半四郎長太夫不殘闕所仰付られ妻子は店受人の引取に成ける其うへに吉原の茶屋に御紋付の長持へ芝居衣裳をつめ江島吉原へ行候節は役者共めしよせ狂言致せし事迄顯れ雜司が谷の別當も此事にて江戸追放となり増上寺中徳水院と云出家も驅落せしとぞ此一件にかへりの者悉く入牢仰付られ三月四月御評定所にて落着仰渡されけるは俵島へ流罪江島猿しまと云三崎より海上四十里死罪江島是は奥向預り白井平右衛門利島へ流罪原田伊右衛門是は奥向預り請より海上御藏島御奥醫師奥山交竹院お竹が兄なり三島より海上御藏島御奥醫師奥山交竹院お竹が兄なり三島より海上江島と惡所へ同道の科同島越後御代官金九四郎兵衛改易御勘定西忠左衛門追放御

徒杉山平四郎皆々惡所へ死罪水戸家人奥山喜内お竹が兄なり水戸

にて計閉門吳服所後藤縫之助新島新御番豊島平八郎

江島が兄三崎江島より廿八里同島後藤手代清助追放後藤手代治郎兵衛

御免後藤下部七兵衛大島原田彦四郎御書院番原田伊右衛門養子父と同罪なり

三崎より海追放今井六之助今井六右衛門悻同金丸四郎兵衛悻又

三郎男三十郎親類預け白井平右衛門悻伊織男平七郎

遠慮豊島平八郎實子疋田吉十郎實父平八郎へも又伯母江上十八里

大島木挽町五丁長太夫三崎より海三宅島長太夫新五郎より

海上四神津島狂言作者清五郎上三十六里追放竹之丞半四郎

右三月十三日申渡されの後三位様より御たのみに付

江島は内藤駿河守へお預となり在所におしこめ綿服

にて朝夕一菜下女一人付置他出させまじき旨申渡し

有けるとなり四月朔日より堺町葺屋町木挽町三座と

も御赦免にて狂言相始向後棧敷に簾下げ候事堅く無

用衣裳は本綿紬絹迄着用と仰渡され四月四日島船ま

でもつかふに乗鹽留靈岸島永代大橋兩國と乗場々々

に一類暇乞に行もあり一かたならぬ群集にてぞ有け

ると也島より新五郎市川團十郎二代目方へ書狀参り

候中に此節鯉澤山にとれ候へど辛子なきゆへ何卒辛子を送り下されかしと申越其奥に釣鯉からしもなく

て泪哉と書たり栢庭のかへしに釣鯉さくも泪の辛子かなと言送りけるとなり正徳四年より今迄百卅七年となる昔語りなり

市川才牛横死の話

元祖市川團十郎は俳名を才牛と云市川家系は役者大全に見へ又かの家の藏板の書父の恩にもくわしく出たれども舞臺にて横死の事は人口に膾炙のみにて慥なる書に遺らず近世江都著聞集に僅に是をしるす尤其年月は家系に出る所とは相違せる所もあれど先實説に近ければ爰に出す元祿の比杉山半六と云役者才牛を恨て殺害せし舊を尋ねるに半六身持よからぬ男にて伯母と姦姙して我家に置く世間の者も是をしつて浮名高ければ才牛氣の毒に思ひ杉山を呼で屹度異見し一所に居ては世間の仇名留がたしと才牛の方に預かり暫しは不義の通路もきれしがいかなる惡縁にや表は切れし體にて密に文の取かはしなどせり才牛は物堅き性なればかの女を三味線ひき權次郎と云者へ衣服金など付て妻にくれけり渠が方にて一子を設け杉山が浮名も自ら人云止けるかくて年月立しかど杉山が行跡直らす一とせ市村の頭取となり詰囃子等

を抱ゆる節かの三味線ひき權次郎をも抱へ心安く渠が方へ行又密通に及けり其年堺町類焼して和泉町杉山が宅は残りければ焼出されたる彼女杉山が方へ來り思ふ儘不義を働けり後は忤も半六が方に引取り養育する事才牛は聞ども人面獸心の女なれば見限りてよせ付すされ共才牛は小兒を寵愛し大勢集めて菓子など與へ樂しみとする癖あれば居宅へは勿論樂屋へも來り遊ぶに銘々に菓子をくれかの半六が方に居る權次郎が忤も此中に交わり居たるに是一人には吳ず其方は親に貰ひ候へ親父は菓子を多く持居るぞと云しを其忤半六が頭取座にひかへし處へ行才牛様我に菓子は賜わらず親父に貰へと申給へど親權次郎殿には菓子は持給はずと述懐心に云ければ杉山聞て才牛は小兒へのわけ隔は何事ぞや親父とは權次郎にあらす我をさしての當言なるべし此間樂屋にて我惡事を人々に話で恥辱をとらする事の無念さよ生置ては後日のあざけり討て意恨をはらさんと本身の刀を持て其透間を待たりけり是元祿十七申年二月十九日星合十二段と云狂言一番目大詰甲賀三郎役素袍の儘にて樂屋へ入る所を後より寄添腰の脇差抜もちて脇壺を

一刀さし通す才牛手を取りおのれ男に似合ぬ卑怯者尋常に名乗かけて討はせで何ゆへかくはせしといふ聲も段々弱り手もゆるみけるを半六は終にとめをさしにける夫と見るより樂屋大に騒動し芝居かゝり大勢の者おり重なり杉山を取て押へ忽繩をかけ引すへたり此折から團十郎^{二代目}は才牛が甥にていまだ前髪名は九藏と云しが飛來つて杉山にむかい狂言の太刀にて伯父の敵思ひしれと二太刀三太刀打けるとかや尤狂言刀なれば疵付べき様はなけねど時に取ての勇氣なりと人々はめけるとぞ扱杉山を公儀へ差出し意恨の程を尋給へど唯恨有とのみにて強てお尋有時申けるは戈牛にあらざれば我心を不知我心にあらざれば戈牛に意趣ある事をしるべからずとて其後無言にて刑罰せられける御府内にて正月兒子の翫ぶ骨牌と云物に三光と云手を江戸にては團十郎と呼ぶとなり元祿に戈牛殺されて後は六三枚持し手を半六とて團十郎を崩させけり中興其事を止め二代團十郎元祖よりも勝れしとて骨牌を慰む者此事を止けるとなり一とせ二代目稻薙始の俳名三升元祖の追善をせし時塗顏の父は長柄や雉子の聲と晋子其角は詠て送れ

り是も今より百四十七年の昔なり

江戸三座芝居替地の説

天保十二丑年十月六日の夜堺町芝居樂屋より出火にて葺屋町芝居を始隣町六七町焼たり其節堺町の狂言蘆屋道滿大内鑑保名に薪水悪右衛門海老藏葛の葉狐二役榮三郎與勘平多見藏切雙蝶々長吉多見藏長五郎海老藏お關壯若にて六日目米屋場初日の夜也葺屋町市村座雙蝶々新作長吉羽左衛門長五郎歌右衛門大切六歌仙の所作事大入之所類焼普請願ひ御聞届なく元來此度の火事は甚少しの事なれど毎度芝居町に限り火事あるゆへ替地仰出され候となり十二月十八日三座御召出しの上仰渡の寫

堺町葺屋町木挽町三芝居狂言座并に操座同人抱役者座頭出方惣代料理茶屋惣代

此度市中風俗改候様にと御趣意有之候處近來役者共芝居近邊住居致候町家之者同様に立交り誠に三芝居とも狂言仕組甚猥りに相成り右に付市中へも風俗押移り近來別て野鄙に相成又々時々流行之事多くは芝居より起り候哉に付依之往古は兎も角も當時御城下市中に差置候ては御趣意にも相戻り候事に候一鉢役

者共儀は身分の差別も有之候處いつとなくその隔も無之様に相成候へば不取締之事に付此節堺町葺屋町兩狂言座并に操芝居其外右に携候町屋の上は不殘引拂被仰出候乍然二百年來居着之地相離候に付ては品々難澁之筋も可有之哉に付相應之御手當可被下候替地の儀は取調追て可及沙汰候木挽町狂言座の儀も追て類焼致候か普請大破に及び候節は是又引拂ひ申付候間兼て其旨可存權之助狂言座之義は來春興行相始候共狂言仕組并に役者共猥に素人え不立交候様に取締方之儀をも厚く可相心得申候右之通被仰渡奉畏候仍而如件

天保十二丑年十二月十八日

北御奉行所

前書當人
同町役人

同年大晦日一統御呼出しの上聖天町へ替地仰付られ御手當金として五千五百兩下し置るゝとなり然れども聖天町には小出信濃守殿同主税殿の屋敷地なれば是も御替地へ引移りの間卅日の内に鼠山と回向院の東空地へ移し二月朔日に堺町葺屋町の者共へ引渡し

賜ひける此土地は俗に淺草の姥が池とて往古孤家有し所とて地形甚低く一万八千坪とか有地形一丈計地上せざれば普請にもかゝる事出来難しとて元地より先地形普請にかゝり翌十三寅年七月に地名を猿若町と名付一丁目中村勘三郎二丁目市村羽左衛門三丁目河原崎權之助歌舞妓三座操座結城座 二軒共爰に移りけり河原崎は仰渡されの表なればやはり木挽町にて顔見世翌春狂言三月狂言とも興行せし處市川海老藏お預と相成り御老中水野越前守殿御差圖にて寅年六月二十二日申渡しの寫し左の通り也

深川島田町熊藏地借
十兵衛方同居同人父

歌舞妓役者 海老藏

其方儀家作之義は長押塗がまち等不相成雖并に道具之義も結構に致間敷と前々より町觸有之所其方家業體之儀は時之風俗に隨ひ専ら表向を飭り不申候ては最負も薄く道具類も右に准じ金高之品に無之候ては融通も不立候迎右町觸を背居宅長押造床かまちに致赤銅七々子釘隠し打付庭向へは御影石燈籠其外大石數多差置亦是同所土藏内へ不動之像を飭莊嚴向惣金箔彫物有之須彌壇朱塗之彫物惣金泥合天井に致或は小簞笥へ赤銅七々子に金丸桐の紋付小柄に鐵物に致

其外手込り候鐵物相用唐櫃并に額奈良細工木彫彩色之雛等追々買取右雛道具も島桐にて金砂子を置胡粉紺青にて瓢箪を菊桐五三之桐紋形に置名前不存町人より貰ひ受候迎右壇に猩々緋を敷座敷内へ相飭其上狂言に用候品も一通りにては見物之人氣に入申間敷と革製具足一領鐵にて甲無之具足一領何れも武用之品を所持致狂言に相用且又先代より持傳り候其珊瑚珠の根付緒へ付候高蒔繪の印籠等狂言之節相用又は銀無垢のちろり等所持致候所金子に差支右之内ちろりは所持致其餘之品は質入又は可賣拂と預置金子借受候後去丑の十月質素儉約之儀被仰出候に付不相濟後悔致居宅造作等取崩候場所も有之候得共右體身分をも不願奢侈僭上之至殊に先年より買置候共高さ一丈七尺之石燈籠一對深川永代寺境内に於て開帳有之候不動へ可致奉納と右境内へ差置候段旁不届に付觸に背候品并に居宅被崩候本品ども取上江戸十里四方追放申付候

右 十 兵 衛

其方儀父海老藏儀町觸相背居宅向長押塗がまちに致し道具類其外華美高價之品所持致し奢侈に及所業

に候を如何之儀と乍心付父之儀に候連差留も不致其儘に致置候段不届に付屹度呵り置

右家主 熊 藏

同 町 甚 右 衛 門

其方共之内熊藏地借十兵衛父海老藏儀町觸等を背居宅向長押造塗がまち等に致し道具類其外華美高價之品所持致候をも不存罷在候段畢竟平日心付方等閑故之儀兩人共不埒に付過料三貫文申付之

同町字右 衛門店 質屋六三郎

其方儀海老藏より質に取候雛道具は手を込候奢侈之品に有之處前々より町觸をも相背無判にて質取候段旁不埒に付右品取上過料十貫文申付之

岩代町 家主 質屋作七

其方儀武器之類は容易に質に取中間敷と先年觸置候所相背殊に身分不相應之品と乍心付海老藏より具足二領無判にて質に取月數相立菊治郎へ賣拂の段旁不埒に付過料十貫文申付之但菊治郎より請取代金錢可償候

神田平永町 源右衛門店

赤坂裏馬町二丁目忠兵衛店

古道具屋菊治郎 同 平兵衛

其方共儀武器之儀に付ては先年町觸も有之處篤と出所不相糺菊治郎は作七より具足二領無判にて買取所持致候段兩人共不埒に付右品取上菊治郎は過料拾貫文平兵衛は同五貫文申付之但し菊治郎は平兵衛へ相渡候代金錢同人へ可償作七え相渡候金錢同人え償申付候間可受取

右町役人組合名主

右之通被申渡海老藏は於數寄屋橋御門外追放被仰付候右寅年六月より海老藏儀は總州成田不動へ落着居候へども彼地にても噂高き者ゆへ上方へ相赴駿州の最員先に暫食客と成翌卯年紀伊國高野山には慕もあれば詣でんと伊勢路より伏見へさして登りし所大坂芝居興行人堀屋惣右衛門より大坂芝居へ出勤させ度願ひに依て海老藏大坂へ召れ江戸表へ伺ひ候上卯年十月大坂住宅となり角の芝居へ出勤となりけりそれより八ヶ年が間京攝の内にて興行致せし所嘉永二酉の六月八代目團十郎父海老藏に逢度願ひにて江戸表にて暇乞狂言を出し上坂し七月歸國せしが孝心の聞へ高く同年冬御赦免を蒙り同三年の春九ヶ年ぶりに江戸表へ歸國し三丁目芝居へ再び出勤の身と成り

しは業こそかはれ先に誌せし多賀長湖英一と同日の論なるべし

芳澤春水名譽の説

元祿の比歌舞妓役者若女形三ヶ津惣藝頭と呼ばれたる芳澤あやめ俳名此系圖も役者大全綱目等に出たれば改云す二代目あやめとなりしは芳崎咲之助を惣領にて立芭蕉が役山下又太郎元祖中村富十郎も此あやめが弱なり句に郭公啼や五尺の菖蒲艸と云も此春水に送りし句なりと云蕉風俳諧の傳授と云附會の説も有春水は歌舞妓者といへど元能の手をよく辨へ其比四座の人々の習ひ事とする祕事亂道成寺石橋も悉く習ひ覺へ扇子の手は他の及ぶ處にあらず故に二代目あやめ始の名咲之助又太郎富十郎何れも道成寺石橋のうつしをするに並々歌舞妓の藝とは格別に違ふ事なりとぞ近世著聞集に云故あやめ大坂にて海士の玉とりやつし舞をせし時地謠共うたひつれ春水扇子の手柄別なりと稱美する其手の中に直下と見れども底もなくと云段に至り扇子を上て顔をふり上伴の扇子を見るの振なり或人故春水に難じてあの場は海原を見やる體なり海上へこそ心を移すべきに扇子をふりあげ仰ぐは其情氣取り惡からんと申ければ春水答て申けるは凡舞の一手と申習ひは其舞

臺の飴に構わす海も山も花も雪も惣じて萬物を扇子を的に見る事なりたとへば地謠然れども此松わと諷ふ時は扇子を上て松にたとへ月は隈なくてり渡りと謠へば扇子へのみ氣をとるを舞の傳授と致事なりそれを扇へは心を使ひす月といへば空へ目をつかひ山といへば仰のき川といへば下を視く身振は皆々素人藝にて拙し眞實ほんまの事を一向知らざる者のする處なりそれ舞の扇は無にして有虚にして實陰にして陽なり陽中の陰又陰中の陽とて開くを陽の手疊むを陰の手取落したる扇を虚の扇取上拾ふ扇は實の手雪月花になぞらへ見る扇の手は有の扇と云てにはに持置す扇を無の扇と云なりされば天台大師智者大和尚の文中に風大虚に入ぬれば水を動して是をさとし月重山に隠れぬれば扇を上て是にたとふと申御句有法華比喻の大事と云有がたき佛説なり扇の手は此様な子細にて中／＼詞に盡難し何ぞしる事かたかるべしと物語しけるゆへ春水の大達人たる事を明らかに考べしその後中村慶子元祖名人がせし娘道成寺の折長唄の文句に月は残りて有明のと云時に扇を開て其扇を見たりに其節八丁堀の平井平右衛門御部屋御役者なり物語に扱も慶

子が扇の手は不思議なりと譽けるゆへ始めて子細を右平井に聞けり嵐和歌野も今の菊之丞も龜藏も其外月は残りて有明のと云時は皆あなた空を見たりしが獨慶子は格別なりと申されし其外本座の人々の咄けるはあやめ一流の扇子は奇妙なりと申さるゝ中〱御府内並に京大坂の歌舞妓役者に所作事師といふも

多く有といへども皆々歌舞妓扇子とて本手にあらず素人は面白しとはめても眞實ほんまの目からは偏に山猿の

烏帽子着たるが如し故春水二代あやめ俳名富士郎又

太郎が如きの地舞は古今に有まじと右平井平右衛門も稱美申けり是少しは眞實の功者と申べきかと出し

有此餘地狂言の役々によつて心得とすべき事をあやめ草と外題して舩ども門弟子へ遺せし書有然れば此比は振付と云もなく皆我ふりを拵扇の手にて我工

夫にてせし事なり中卷夕霧の條にもいへる如く遊女役者と一口にはいへどかゝる名譽の者となれば金持の町人にのみ付合べからずやごとなき高位にも召る

ゝ事有てよき事を聞居るなれば別てあやめは幼稚の比色子にて其比名譽の能役者太夫達にも最負となり本手も委しく習ひしなるべし今時三都の雜劇に振附

と稱する者有て唯婦女子に舞を教へて業とし邂逅歌舞妓に新しき所作事といへば此振付が三味線歌も出來たるを聞て所作らしき振をつけ扱役者に教ふる事なり依て本手の故實のとの論もなく皆々歌舞妓踊りなり唱歌も古きものゝ寄せたるのみ三味線の手もあれ是とよせ物振は所謂あて振にて野鄙なる事流弊の習ひ是非なし

能に新工夫を用ひぬ話

本行の能に限り新奇の工夫を以てする事を禁ずといへりさも有べき事なり歌舞妓などゝひとつに混ずべき事にあらねど梅臈主人が新齋夜語にも造りもふけしことなれど一語有爰に出すいつの比にか有けん四座の外に梅若太夫と云有若きより家業に志深く藝に精神加わり觀世に劣らぬ名人の聞へ有しに一とせ信州を領する侯家にて家督の嘉儀に能有梅若木賊を舞ひしに領分の百姓らにも見物をゆるされたるが其中より下手なる木賊の刈ふふかなと笑ふ者有能果て梅若其譏りし者を領主に願ふて呼出し嘲りを問ふ百姓答へて我は此信濃にて名におふ園原山の麓に生たち木賊を刈て年比業とすれば心ゆく見物なりと見侍り

しに木賊刈ふと鎌を右の手に持て左へ／＼と刈らせらるゝは餘り拙く尋常の草こそかくは刈れ木賊をかく刈る時は半より上へ裂て眞帆には刈れず鎌を逆手に持て左より右へ搔切こそ法なれと述ければ梅若今迄木賊刈の所作は師傳を得てなせども未誠の木賊を刈たることなし誠に老圃に問へとは此事なりと感じ一時の師にこそと物多くとらせ歸して後此家にては二鎌は昔の如く刈り後一鎌を逆手に刈る業を入たるとぞ此後南都薪の能舞に登り一夕西大寺迄用有て歸るさ夕月夜にたどるにも心を凝機位を考つゝ行先にいと老たる乞丐婆の杖にすがり行を跡に従ひ渠が容貌足の運び杖の突ぎま心をとめて躡行しが尼が辻にて渠は南の方へゆかんとするを呼とめ年老て嘸苦しくこそ物取せんと印籠の内より方金一顆取出し與へければ婆忝しと手に受しが直に返してかゝる貴き實より只一二の鵝眼を賜われと云梅若我一時の師なれば其恩を謝すなりと云に婆我殿の師たる事を覺へずと答ふ我は梅若と云能太夫なり今年薪の能に檜垣を勤るに付工夫する所汝が一年老屈りて杖つき行さまかの檜垣と云老女の能を舞んに感ずる所有ば是師に

あらずや謝物を受よといへば婆その謝物ならばいよ／＼以て請がたし殿の猿樂こそ覺束なければ今婆を見て老女の能の妙を得給ふとも鬼神の能は何を見て其玄微に至り給ふへき其御心よりは何事も枝葉に拘はりて謠曲の文章に時代違を作り牽合附會の俗説どもを胸わるく思して彼の是のと改めんの計も出来ぬべし連も是は慰事にて事實に用ゆべきものにも非ず白樂天を唐音にては諷われぬ物から只家傳の節墨譜を深く修練し世々の舞の手の優なるを慕ひ給ふには玄かざるべし習ひ學ぶべき師傳の書いくらも有べきを置て遠く外を需給ふべからず歌舞妓物まねする者こそ賤きさまを其儘に摸すをもて譽とすなれ貴人高位御慰にも成べき爲の能なれば卑き乞丐のさまを見寫しになさばさこそ見苦しかるべき我はさまこそ賤しけれ心は殿に恥べうと思われずと流るゝ如く述けるに梅若大に閉口し思はず地上に頭を低て稍涙を拂ひしが去にても如何なる人ぞと問まほしく仰見ればいづち行けん姿も見えず失ぬる事こそ不思議なれと有是は舊より作り物語なれども亂舞猿樂にも限らず諸藝共に通じて上卷淨瑠璃太夫の名言に云酒を飲て生

醉のせりふに當りをとれば大疵を受けて手負の場を語らずば其情通じ難しと云るも同じ日の論なるべし

書に畫虚事有の話

巨勢の金岡が畫る馬は夜な／＼出て萩の戸の萩を喰ひしなど名畫に精神入てふしぎを見する事と漢其例多し狩野探信が圖せし處の竹の繪は古今の出來なりといへども其葉皆陰形にして夜の竹の姿なりと云探信幼少の比父探幽が手本に竹を畫て渡しけるを數度清書して見するといへども父の氣に應せず大に呵りて以ての外不器用なり是にて繪といわるべきか其方分としては家元の家督は成るべからずと散々に罵りければ探信稚心に是を恥て筆を手持茫然として夜更る迄寢もやらず案じ煩ひ居たり其折ふし秋風冷やかに吹音信ける時しも庭前の竹戦ひで葉形あり／＼と障子に寫りければ始めて是を本として忽其姿を畫翌日父探幽に見せければ是でこそ畫といふべし精神悉く具り妙なり奇なり玄かし是は葉の色陰形にして夜の竹なりと云しとかや名人の上にはかゝるふしぎの見分よふこそあるらめ中興尾形光琳は此探信の竹とおなじく障子に寫る影を寫して光琳風とて一流を畫

始けるこそ名譽といふべし是も始より其風ばかり書にあらず諸流にわたり眞草行を篤と胸に納めての上の事也大江丸舊國の句に三日見て光琳常の百合を畫と詠しは爰なり曩に云英一蝶などは浮世繪とて所詮土佐狩野などの家元とひとつに混すべき物にあらぬは誰もよく知る所なり中興眞寫とて都ての畫を生寫しに畫始しは丸山應舉なり是又一流を立る程の名人なれば此畫を愛する者少からず或方より臥猪の畫を乞けれども應舉未嘗て野猪の臥たるを見ず矢脊より薪を運ぶ老婆に問ばたま／＼是を視ると云重ねて見ば我にゑらせと云に老婆日あらずして我家の後の藪に野猪臥し居れりとゑらす應舉俄に門人一兩輩をつれて矢脊に至れば猪は藪に臥したり應舉筆を採て寫しかへり清書なる比鞍馬より來る老人有話の序に臥猪のことを云翁山中にて常に見ると云にかの畫する所を見せるに翁熟視して是病猪なり凡野猪の藪中に眠るは毛髮憤起四足屈蟠おのづから勢ひ有以前病る猪を見しが此畫の如しと云應舉翁に臥猪の形容を聞てさきの畫をすて新に畫く四五日有て矢脊の老婆來てかの猪翌日藪中に死たりと云應舉是よりして生

寫しと云書を止めたりと云さも有べき事なり梅若太夫の話ともおなじく目前視る所の草花鳥獸は眞寫もならんが龍神鬼神など書には何を以て手本とせんや皆往古より書來る古圖によつて書く事なりかゝれば書虛事として古今名畫の上にも法則具わりたる事と云るべし

應舉若かりし時野馬の草をはむ圖を書けり或者難じて馬の草を喰ふには草に目を傷らんことをいとふて兩眼を閉る此馬草むらに鼻づらを入ながら兩眼見開き居るは盲馬なるべしと應舉是を聞て書を改たりと云又今にも東都淺草の觀世音の堂内に高嵩谷が畫たる賴政猪の早太鶴を退治の大繪馬有或人難じて嵩谷は古今の名人なれども鶴の尾に蛇の頭の方を書しは誤なりと云予思ふに嵩谷程の名譽の者心づかぬにはあらざるべし尾は蛇の如しとあれば蛇の頭を書す尾計書時は蛇か虻かわかるべからず所詮鶴といふ獸有といふも實説ならねば爰ぞ書をらごとを心にこめ見易からん様に頭の方を尾に書たるなるべしされば應舉が野馬の圖を書かへたるは見識嵩谷が鶴に劣り第二義ともいわんか猶識者の後評を待

詩歌連俳を評する話

漁獵を好む人の云を聞ば魚をとるより鳥を捕は面白く鳥を取るより鹿狩は又面白き物なりと云或儒の曰和歌より詩はおもしろく詩より文章は又面白しと又或俳諧師の曰詩は長刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懷劍なり心切に思ひ詰れば其利事早く始皇の胸先を刺に至る刀長くば其所に至りがたからんと皆己々が好みの道へ水をひくとやいわんされば惡堅き儒者の口にかけては周公孔子をのみ尊みて我朝の至寶と稱する源氏伊勢の物語を嬉亂にみちびくの書なれば若き男女には見すべからずなど云て佛法は世を惑はし民を誣るの法なりなど難じて其餘の事は有てもなくてもの様に云り見ぬ異國の事ばかり有難がる人に今時の雜劇を見せたらば何と評を付るやらん爰に捌けたる物は俳諧なり風俗文選のうち獲鱗の解の解は五老并許六の作なり其文を爰に出す

魯の哀公十四年西の狩に麟を得たり孔子大きに歎きたまひて春秋をとゞむ夫麟は何れの時出て孔子は見覺へたまふぞいといふかし鼠は愚にして火難の家をさけて命を保つ麟は四靈の隨一にして狩ある事をし

らずうたへ出たるも又いぶかし孔子自ら聖に高ぶ
りもしや牛馬の生れぞこなへるにてやありけむ是も
又いぶかし麟うせ道おこなわれざる物ならば道は麟
にのみありて聖人の上にはなき事にや猶又いぶかし
麟ほろぶれば聖人も共にうせ給ふ例にてもあるやた
とひ聖人うせ給ふ例有とも道はまさしく存せり是と
ても歎に足らず儒道貴しと思ふ者は麒麟を第一にた
ふとび次に聖人をあがむべきか箸折るれば親に離れ
櫛の齒虧れば子に別るゝ占とて童蒙のものはふかく
悲しめり箸おるゝ毎に親にもはなれず櫛木履虧る度
に子を失ふにてもなしされば仁義の占もあはぬため
しもありぬべし麟をすかぬ聖人もありや又聖人を好
ぬ麒麟もありや三皇五帝より以來孔子の外出たる聖
なし和國も神代より打つゝき當時百年枝をならさぬ
聖朝なるに麒麟出たる取沙汰もなし犬は戸口を守り
鶏は時を報ず麟出て人もおどさず鳳啼て旅客の夢を
破る能なし出ぬ方の聖人いよゝ目出たかりぬべし
見ぬ唐土の鳥もねじと徹書記があやまりたるはもし
出ぬ方をよみたるにや世間聖人をしらずして麒麟に
のみ目をつけて末の凡夫の不目利はかの一言のあや

まりにて聖人なしと思ふなるべし今此麟を解して見
るにとまり兼たる春秋のよき場所に出合せ舉句の趣
向と見こなしたらば何の麒麟に理屈あらむや云々
是らを稱じて俳諧と云なり世の人和歌連歌は雲上な
る詞を用ひ俳諧といへば鄙陋なる詞を遣ふと心得た
る有さにあらず詞花言葉を翫び俳諧も八雲の末なれ
ば一口に卑むべからず

狂言綺語を評する話

上卷音曲を擧たるうち狂言綺語のこと詳なり直に言
を言と云論難するを語といひ道理に卒くを綺語と云
堅き事を和らげ方便の爲に戯れ言をなして愚なる人
を善道にみちびく謀を狂言綺語と云なり今の世の人
芝居ごととて戯場の狂言道理に當らざる事ながら芳
野川の早瀬に兩岸より道具を流すなどのこち付を芝
居事なれば仕方なきと云是を混じてそこで狂言綺語
なりと批判をいわれし時の辻場と心得たる人有是は
雜劇事とて狂言綺語とは心甚違ひたる事と心得べし
狂言綺語とは戯場の事のみに限るべからず佛經にも
讚佛乘の因と説て廣きことなり戯場狂言に無理なる
仕組有事を皆芝居事とて畫空事と云に同じいわば一

幕の狂言に一晝夜の事をなし月に雲かゝれば眞の間となる暗を探り合ひ庭も座敷も隔なく座すなどは五六間の舞臺に道具を飾り廣き殿舎佛院深山幽谷も摸す物から所詮眞實の事はならずそれゝに法則有て是を一體に芝居ごとゝは云なり又始終に連續せざることを雜劇通言に穴と云有是は又一種別にて其穴をのみ見出す者を穴搜しとしてこれを是とする人まゝ有る物也穴多き狂言は淨瑠璃歌舞妓共に當り藝に有穴なくとも面白からぬ狂言は再び出す假名手本菅原杯は穴頗多けれども毎度興行の度に當りを取るにて思ひ合すべしされど淨瑠璃歌舞妓とも近世の狂言の事をいふにあらず古作の名狂言の事を評じて云なり戯場に限らず諸道諸藝ともに其道の事を委しくしらずして其穴を探り批評するは俗に惡口云と云者にてたとはい念佛無間禪天魔など逆佛家の事を唱へるも後世の評にして祖師元祖の事をいふにあらず後世流弊の者を評するなり其道の事を辨へずして批判を打輩は惡口いひとて論するは無益なるべし

淨瑠璃狂言穴の話

右に演る如く古く遺る當狂言には穴多しされども今

更是を改るによしなく故人の節墨譜を守り木偶にても昔を守り歌舞妓にても俳優のするも皆古への格をはずさずするを此道の習ひとする也譬は物草太郎といへば桃色の上下にいたら貝の紋を付曾我の兄弟の紋は蝶と衡を用ひ道成寺の清姫の帶は鱗形と仕來りたるを紋切形とて今更新奇の工夫有とて猥に改替ぬを此輩の法とするなり邂逅新奇に案て以後一變するもあれど故人へ對して失禮なるべし判官代輝國打裂羽織を着漁師鱧七半上下を着るなど道理には叶ふべけれどかの芝居事と云に考合さば新奇の思入はむだごとなるべし爰に近比の話なれど一二話有海老藏菅原をせし時松王丸にて首實檢の前に此首は贗首なるべしと誣問ふて後我子の首を見て實に菅秀才の首なりはて討ましたよく討たと云思入是は故人の誤りの穴を埋しにはあらず我のみの才覺にてする事なり實に穴をふさぐと云は道明寺の場にて始贗迎ひの來たる時後室覺壽は誠の迎ひなりと思へばこそ丞相を渡したれ輝國を呼かへして誠の丞相一間より出れば驚くも尤なり然れば先に木像と別るゝ時にも荊屋姫を連出て詞はかはさずとも見送るべき筈なり先に其

事なくて段切にのみ姫をつれ出る時は先に賈迎ひに渡したは木像なりと知りたると思わる依て予海老藏に是を云海老藏成程と思ひしにや先賈迎ひの時にも秘二人に叩きて苺屋姫にそつと見送らせ手にて仕かたして奥へ入たり是らは實に穴を埋る思入なれど見物に心づかねば誰が手柄とも云べからず當時の歌右衛門が又平手水鉢にかゝり是今生の名残の畫姿は苦に朽る共名は石魂にとゞまれとあつさ尺餘の御影石と云文句の内こなたより畫を書ば手水鉢の内へ道具方這入て向ふへ書事定例なり操にては向ふの畫像に紙張付有て是をまくるなり歌舞妓にては又平鼻を書ば道具方後ろを見かへりて向ふへ鼻をかく諸事又平の書だけに向ふへ書「墨もにじます兩方より一度に書たる如くなり」と云文句一ぱいに双方書終る事梅玉すら是をする今の歌右衛門か様なる事に至つて念を入るゝ癖有以前予に問ふて曰古筆の名畫向ふへ拔ると云は半身書たれば半身拔る物かと予答へて半書たるを半拔る事有まじ俗に云佛作つて眼ともあればいかなる名畫といへども未書さしたるはよも拔まじ全身書終つて後じつと見詰る此時魂具わつて向ふへ拔

るなるべしと云ばそふなくては叶わじ此度の手水鉢の仕かけは中より書とも我書く内は筆をとらせずぐつと見込む折一時に書すべしと誂らふいかなる早筆の者にては狭き所にかゝみ龜畫鈍畫なりとも一時に書く事甚かたく色々工夫の上形をほり針にて縫つけ刷毛にて摺つて間に合せたるが箇様な事數百人の見物しるべからず又平の狂言こそ見れ手水鉢名畫の拔よふは見物心にとめねば皆むだ事なり昔の役者はやはり操の如く張りたる紙をめぐらせしなり中興何によりず眞實物とて御厨子黒棚茶道具の類迄正眞の道具を遣ふ是皆藝人の衰へなるべし

古淨瑠璃名作の話

古淨瑠璃に名譽の作多き事は上卷東西の見立番附を見てもしるべしされど唯名高きものを先に出して外題を擧たるのみにて遙末に書たるにも世に行なはるる名狂言有又さもなき作と思ふも上座に出たるも多し又番附出板の後に出たる名譽の狂言も有書洩して落たる外題も少なからず其内豊竹座の關脇に出たる祇園祭禮信仰記は寶曆七年に出來て今より九十餘年昔の作中村阿契淺田一鳥兩人の作なり全體一部の趣

向を年曆前後に拘はらず思ひ切たる作と云べし三好松永の世界へ雪姫直信を取組山口九郎治郎改名して明智となるなど自由に仕組めり三の口乳母侍従の詞に此跡の大坂といふ在所で尋ねたれば岸野の里へもまあ一里とは今云鳶田邊りと見込て其比天下茶屋新家などは名に呼ぬものから岸の姫松は思ひよりは齋の住家を岸野の里と假名を呼び曾呂利を下人新作とつかひしなど脚色の働らきいと妙なり四の切金閣寺にても今纔に遺る瀧を見ては狂言にするはいと仰山にして物々しと笑ふ者有是を彼狂言綺語とは云なり今こそ水落すとも其比ならば水勢漲り落たるかもしるべからず又大膳が瀧のもとにて鉏を抜て雪姫に見する時の詞に河内の國慈眼寺山灌頂が瀧のもとにて老人を手にかけてしが扱は其方が親將監雪村に有けるかと有予以前より此瀧ある所を考がふるに慈眼寺山とは野崎觀音山の事にて灌頂が瀧などは名所舊跡とてもなく此三四里片脇に瀑布といはれ額田村長尾の瀧北には倉治村源氏が瀧より外なし源氏が瀧とは白旗を流したる如きゆへ然呼ぶと新らしき碑を建てしるせるは附會の説なり昔此倉治村に興元寺と云古寺

有荒廢して跡方もなくなりやうやく元寺のみを土人覺へて元寺の瀧と呼なるべし信仰記の作者此瀧に思ひよせて慈眼寺山灌頂が瀧と作りもふけて號しものならめ人物時代の前後を論せず舊記實錄に頓着せず善人を惡人とし惡人を又善人として別に一個の世界をもふけ勸善懲惡の深理を説くがゆへに狂言綺語とは云なり此狂言に限らず趣向のよきと作文のよきと二種有趣向もよく作文もよきは實に名狂言とて後世にも廢る事なしよき狂言ながら人のしらぬも多かりそれらは其時にあはざりしとしるべし享保十七年文耕堂と長谷川千四が作壇浦兜軍記は名譽の狂言なれど阿古屋琴責の場ばかり人知つて餘の狂言をしらざる人多し委しくは予が綺語文草四編祇園下河原の條にあれば爰に略す延享二年並木千柳竹田小出雲が作の軍法富士見西行など奇々妙作といふべし墨染櫻は古今集に岑雄が詠此春ばかり墨染にさけとあるを西行の歌とし義仲江口の里に遊び西行銀の猫を家來松並鞆負が子にやり春虫大盡となつて娘寫繪に出合ひ襖に畫し富士を見て軍法を語るなど一つとして仇なる場はなし是らを花實兼たる名狂言といふべし昔

よりすこしも捨る所なき物を平家法華經經節といへる諺有揃ふて屑のなきを云なり

歌舞妓狂言穴の話

歌舞妓狂言は淨瑠璃と違ひ興行度毎に役者もかはれば少し宛の増補有て確と板行に残らねば其時々に評するのみ然れど名高き狂言にて一二をいはゞ中巻にも云秋葉權現廻船話大序は京都屋敷逸當身一つに科を引受殿圓秋を本國へかへすに陸地を行ず海船にて乗ると云是難波へ下らせて大廻しに乗せるなるべし扱跡にて敵役を討捨切腹する五平遺書と首をもつて陸地を走り粟津の松原にて幸兵衛に合ひ遺書を渡して直に走れり此前に幸兵衛は駄右衛門に逢ふて別れ兄逸當が遺書を讀駄右衛門の跡を追ふて駄こむ祐明鐵炮を打が序の幕なり二つ日本國の屋形へ圓秋入部の悦びにて家中一統さゝめき合ふ中へ街の駄右衛門手廻し早く入り込み情をかけて暇乞をさせること餘程の時移れり今切腹といふ所へ駄付たる五平は一向の道下手と見へたりさなくば餘程戯談が過しと見へたり幸兵衛駄右衛門の跡を尋ね主人圓秋が家を大事に思はゞ遅くとも此幕切に駄附一方は切防ぐべき

筈なり何國へ這入り居しか甚不忠不義の男なり五平も又序二とは働らきたれど大井川宿屋の二幕の内は何國へ這入りおりしやらんとか様に一々難じる時は狂言は書れず穴といへば斯の通り多けれども見て面白き狂言なればこそ八九年の後今に少しも増補もせで用ふるなり又けいせい黄金鱸の序切は宇治の小倉堤なり夜明前と見へて齋藤龍興京都より本國美濃へ交代の行列出て駕の内より爰は何國と問ふ家來小倉堤なりと答ふ鶏笛吹によつて最早鶏明乗物やれと此人數這入る跡へ柿の木金助西國順禮の姿にて出る向坂甚内は東國道者赤蜻蛉の姿にて出て雙方國の訛りを言ひしが後には我を忘れて其身の望を語り互ひに落首の狂歌を取かへ又廻り合ふ時節も有ふと雙方へ別れ行稻村の中より龍興乞食の形りにて風ふかば沖つ白波のせりふを云兩人あやしみ小戻りして顔見合す心々の世渡りじやなと云是序幕なり是夜明とも日暮とも少しわかり兼ねたる狂言にて東國道者の出にあれば〴〵お月さまがつん出やゑやつたとせりふも有顔見合す時がんどふ提灯稻村の中より雙方へ突出すを見れば夜なり又交代の道筋東海道もあるに小倉堤は

來るも何とやらおかしき物なり扱二つ目幕の内諸國歌枕南宮左中將當城へ旅館なさること家老山形道閑出むかひ幕の内へ這入る幕明て今日殿龍興入部なりと出迎ふ殿歸國のよろこびに一家中へ土産をくるゝ都より院使監物入來り貫之自筆の古今集を持かへらんと云奥殿にとくより入込たる南宮左中將出て前幕西國順禮の詠たる狂歌を短冊に書てそれをもたせかへせと云院使又返歌をせんと東國道者の詠たる狂歌を其短冊の裏へ認め是をもたせて街をかへせと雙方よりいさかひ立かゝるを龍興中より兩人へ手裏劍を打兩人見覺へあれば驚乍ら打かへす龍興面桶を以て是を受とめ三人きつと見へになり「日外小倉の堤に於て」時は東雲面體も「空も臚の朝影」下是三人が黙りほごきに成り序切に出合ひし二人の道者と乞食再び爰にて逢ふとの仕組拔さしならぬ名狂言とはいふなり然れ共穴多き事甚しくまづ日外と云は餘程日數の立たるを云なり是は城州の小倉堤よりどふ廻つて歸國せしかは玄らねど美濃の岐阜迄は三日か四日路なるべし大名の龍興本國へ歸らぬ内に東國道者の甚内が公家となつて入込しは是も餘程よき手廻しな

り又時は東雲とも朝影ともいへば序幕はどふでも夜明ての狂言なり此餘大序は宇治の茶摘の場にて二つ目庭前櫻の盛りなり是らは此狂言に限らず間々ある事也口幕は一年前の狂言にて次幕一年の月日は立ど出る人數は皆去年の顔揃へなど又一人計老くろしくなりて外の役の輕き者はいつ迄も同じ容など有是らを皆雜劇事と唱へてさして難する事にあらずされば黃金鱸は序二ばかりにも此位の穴あれども人は是を咎めぬは見たるめよく面白き狂言なれば六七十年の今に廢らず行わるゝにて名狂言なる事を云るべし

古名人役者に妙ある話

往古の名人役者に妙ある事は役者七書に出たれば云ず爰に中興の事をいわば金門五山桐は並木五瓶初代ハの作にて是又歌舞妓の名狂言なり此序茶屋場へ盜賊五右衛門靈山國師となつて入込み千鳥の香爐を奪取筒井順慶を殺し向ふへ這入る折南無あみ豆腐と戯れて入るを本文とす嵐雛助後小六玉は至つて肥滿して女形は似合ぬと思ひ親小六より女形の家なれど立役になりたる程なれば肥太りて尻も見事なるがゆへに僧頭巾紫の衣を着たる儘にて此場には頭巾をとらず

二段目暮山門のおり大 花道中程にて衣のまゝぐつと尻を
百日を見せればなり 無あみ豆腐と根を盗賊と見せるが趣向にて書もすれ
仕手も珍らしければするなり折ふし奥にて石橋の獅
子どうでんと太鼓入にて囃子になる雛助尻をまくり
しまゝ此囃子に合せ向ふへ這入るなり大膽不敵なる
を思入にてせし事とぞ後片岡仁左衛門今の我此場
にて師匠六の通り尻はまくつたれどさまで見事な尻に
もあらず跡石橋の鳴物あれども其業の出来ぬ物から
南無あみどうふと云がいな尻引まくつて向ふへ駈こ
んだり評に曰あの五右衛門は街があらはれふかと尻
ひつたてゝ逆てかへつたと云り師匠はかうしたと知
りながらも其身に出来ぬ所作なれば批判せられても
是非なし其後歌右衛門梅玉坂三津秀角中兩座にて金門
出たりしが梅玉は鼠の衣にて後なむあみどうふの時
頭巾を脱捨衣の裾をまくり上げ兩肩へかけてぐつと
引ぢめる裏は黒天鵝毛にて裾は下に四天付の形りと
なる是は當時専ら流行引拔の裏にて引起しと云好な
り六法をふりまづゝと這入尤梅玉小男にして尻ま
くりまたり共瘦たる體にては當り有間敷と新工夫に

てする事なり禪僧ゆへに南無阿彌豆腐なれど盜賊の
容にては何とやら背けたる物なり三津五郎も又瘦地
の男なればいかゞすらんと見たりしが是は又工夫妙
なり紫の衣頭巾にてさしてかわる事なく後忍びをボ
ント當る忍びたぢゝと跡へよる折秀佳の頭巾を掴
むゆへ脱る下百日鬘にて秀佳ふと頭冷たる思入にて
頭を撫る頭巾脱てなきゆへ忍びを見て扱はといふこ
なしにて頭巾を引とりちよんと着ると忍びボンと返
ると一時なり懷より拂子を出してなむあみどうふ
ゝと輕くいふて向ふへ這入る見たる所淋しけれど
難なし都てかゝる役は二つ目金門糶上迄は五右衛門
の拵を見せまじき爲序は禪僧の姿にて見せたる物な
り嵐雛助は僧のまゝにて頭を見せず尻引めくつて盜
賊と見せる好近世は百日かづらを早く見せたがるを
習ひとして梅玉などの好は鼠の衣尤背けり秀佳の好
尤妙なり其後當時の歌右衛門手下の盜賊同宿伴僧の
形りにて六七人出て五右衛門と共に花道にかゝり皆
々なむあみどうふと同音にて云て一時に尻をまくる
下盜賊の思ひゝの形りとなる是らは何の好もなく
論外なるべし此狂言を近來は大かた山門ぎりにて大

佛餅屋桃山御殿はせまがちになれり餅屋場中納言となり冠装束にての出も雛助は京都芝居にてせし折は繼上下にてして當りを取しとぞ只十三里の道なれど皇都は公家衆の通行を毎度見來り浪華の者は公卿といへばいつも冠装束なりと思ふ者多しゆへに大坂にては譬へ背けたり共公家といへば冠装束にてし京都にては繼上下にす是芝居事とは格別郷に入ては郷に隨がふの場所なり桃山御殿の場片岡のせしを予幼き比見ていとおもしろかりし其拵は四天大小大百日に出て宿直の近習睡り居るを見て笑ひ乍上手へかゝる緞子張の御殿を引道具にて出る此内に久吉國藏の父先國藏脇息にかゝり睡り居る五右衛門忍び込み刀を抜んとする千鳥ぶへ久吉妹許行ばの歌を云内緞子張引拔五右衛門やゝなんとゝ高二重よりほんと飛下り屹となる近習目覺しきつと取巻いとおもしろければ歸つて幼心に感心して咄ければ亡父云雛助のせしは中々さやふの物ではなし其譯は五右衛門此場は打裂野袴忍び頭巾にて出て障子ひらく時久吉幸初菊川五郎風寒み衝なくなりと云ば雛助やゝなんとゝ高二重よりふうわりと飛下りつゝと下つて花道際へちよんと

座す尤影拍子木なりなしに居る事なり是忍術にて忍び入りしかど懷中にて千鳥の香爐啼て久吉の眼力にて忍術あらわれし思入にて始終懷をおさへし儘にて和らかに云しとなり片岡のは忍術の心なしあゝ衰へたるかなと歎息せられしゆへ幼心にも又名人の心は違ひしものと聞しより四十年の今にも忘れず爰に誌せり

同狐忠信思入異る話

義經千本櫻狐忠信の役は古今來役者の心々にていろ／＼にすれど今大物浦にて靜御前を義經に預かり鎧を貰ふ場より狐なりと見物にしらせん爲順切靜は向ふへ這入る忠信つゝひて行かけツカ／＼と戻り溜り水にて水鏡を見るテン／＼とらいじよを打一寸狐の思入有て氣をかへ忠信の見へになり向ふへ六法ふつて這入るは誰々も常となりてするなり眞の名人役者のする事ならず上手めかせし下手俳優の好てする事なり此場にて狐と見せる程の心入ゆへ道行にもやゝもすれば狐となりたがりて見にくし四の切御殿にても靜殘つて鼓を打ば花道の切幕をツイと明るゆへ此方へ見物の眼の行隙に本舞臺下座又は花道へせり上

る事とせり衣裳は各好にまかせ玉の模様長下などなり是にては先に誠の忠信を詠め見れば衣裳もかはつて有扱はと靜が心付しせりふに背けり夫より鼓にて折檻せられ跡じさりして大小を拔さし出す時手早く藁沓に竹をさしたる刀とかへる坏道外めきて惡き思入なり是にては時々靜に馬糞なども喰せしと思わる源九郎狐にあらで眷屬の野郎狐の所作なり中興嵐來芝^{二代目}三五郎は中々さ様の事なく先大物の場にすこしも狐の心を見せず道行も一通りにてをくればせなる忠信がと云出より幕切まで下座岩臺に腰かけ靜とゝ踊れり其餘誰々の道行にも口説文句ありて義經に恨みのたけを云名代につかはれ靜に胸もと持れなどする是らは若聲の見物見たらば靜と忠信は夫婦かとも思ふべし狐は通力自在なれば靜を犯さんもはかられずとの疑有よくゝ男女と主従の隔を考ふべし扱御殿にても來芝はやはり道行の衣裳源氏車の縫衣裳にて脊に道行の包を脊負ひ花道より鼓に聞入畜生足にてつかゝと出て御殿の下につくばふ靜とくと見ればけさ迄連立來たる忠信なり衣裳かはらねば誠の忠信

とは姿かはりしと云文句に合へり扱せつかんになりて上をぬけば狐の好衣裳となる延享四年始て竹田出雲並木千柳の作せし義經千本櫻にすこしも背ける事なし我才覺有共其作者の意に背かずよくするを名人上手とは云なり舊淨瑠璃に作せしは誠の忠信に靜を預け道行も靜は誠の忠信とのみ思ひ詰扱御殿にて忠信の姿かはりしを怪しみよくゝ思ひ出せばどふか違ふ所有がゆへに鼓を思出打は今門前迄連立來たる忠信なり扱こそと詮議すれば始て明す狐の正體初音の鼓は親狐の皮にて張しと語るが此狂言の趣向にて始て千本櫻を見る人も有べし見物に是迄狐としらさぬが出雲千柳の作意なれば生智惠の新工夫をするは僻言なるべし其上せりふに狐聲逆尻聲あやしく云を習ひとす然れば淨瑠璃にてもいとむづかしき場なり近頃組太夫^玉藍が葛の葉の子別れを聞しが幽靈に聞へし忠信多くは癪症病の聲になる物なり來芝盛んの比歌右衛門^{玉梅}もせしがいと不評にて落首に歌右衛門忠信ならば行もせふ錢を出して這入は來んゝと笑へり當時か様な心得もなく見臺又は三味線の胴より忠信出て鐵線の宙渡り輕業狂言とはなしたり嘸故作者

是らをかば歎すべし

榮種御供狂言の語

文政十一子年天滿宮の狂言予梅玉と共に著述せしが抑此狂言の舊は正徳三巳年近松門左衛門作天神記と云淨瑠璃狂言を六十五年後歌舞妓狂言に増補して安永六酉年中村阿契並木吾八後五瓶天滿宮榮種御供と外題を賦しけるより又増補せしものなり近來増補せし迄又五十二年に及り一部の趣向は榮種御供とは大に變りたれども彼笑ひ幕迄は御供の趣とおなじ是又笑ひ幕とて此道の好人はよく聞居る事にて幕切時平一人殘る迄狂言書たれど幕をゑめる工夫付す大内紫宸殿の前にて中通りの公家などが出て様子は聞た此通り注進と駈出すを時平がぼんと殺されもすまじ幕となるきつかけなきゆへどふか工夫をせうと云しまゝ總稽古となり時平に嵐雛助門の前年なり營相丞尾上菊五郎幸大梅向ふへ這入る跡時平獨舞臺となりのひとり舞臺と云は樂や通言にて獨ら舞臺長きせりふ有て道眞はいかひあほうじやなアハ、ハ、と笑ふて大笑ひをするを拍子にちよんくくと木を入れて見たる所昔よりか様な幕は決してなかりし故是のみ噂となり笑ひ幕と號たり爰に或國學

者一日此狂言を見て扱も俳優と云ものは埒もなき作り事のみをするかと思へば中々博識の者の作する物なり藤原左大臣時平公は笑疾と云癖有て俗に笑中風と云如きの病氣有て一時朝廷にて此疾發り詮方なく政事を菅公にゆだねて退きたまふ日比不和にて權を爭はるゝ敵手に斯の如きは實に止事を得ざればなりと確とせし記錄に有それをしつて笑ひ幕とはよく作したる物なりとて五瓶を先醒々々と尊敬せられしゆへ五瓶大きに迷惑したりしと亡父予幼き比の嘶に聞り是らは世に云まぐれ當りなれ共故人作者役者にはかゝる妙有菅原傳授手習鑑は延享三年竹田出雲並木千柳作にして是又古今の名狂言なり今迄百五神記は明和六丑年並木正三の作なり年なる予此世界にて趣向をたて十五六年以來待ども未世に出ず腹稿の儘に打捨あるが持腐りともならん事を惜しみ所謂狂言の筋書を爰に出す曲亭馬琴が著編里見八犬傳は數編重ねて出たれ共見てよき所は初編より四編五編迄なり是も先年予が歌舞妓に潤色せしが未見たらぬ所有依て世界を菅原と見立仕組の種は八犬傳を用ふるなり二幕目河内土師村覺壽の三年とか五年とか

の年回を宿禰太郎と云立役つとむ奴宅内は本名竹部源藏にて爰に奉公す宿禰の伯母に鶴壽と云敵役の女其夫土師兵衛娘龍田を兼て宿禰と見合さんと云しが欲心より宿禰を追出し三好清貫の方へ嫁入せんと計る右大辨希世序にて追放となり土師村へ來て寺子屋をし娘龍田の聲にならんと娘をくどく宿禰は菅家再興の爲天國の劔をもつて宇治に時平の別莊有是へ願ひに行んと暇を乞ふ兵衛夫婦天國の劔のほしさにさまゝとの工みをする娘龍田宿禰に別る事を悲しみ淵へ身を投んと書置を置いて這入宿禰是を助けんと淵へ飛こむ此内に希世天國の寶劔を摺かへる龍田は身をなげんとせしを宅内に助けられ無難なり兵衛夫婦は劔を摺かへませんが爲娘の死骸が見へぬと言立鶏を戸の上にのせて流しそりやこそ啼たはとつてんこと騒ぐおかしみ有と龍田助り凶事なき事しれて宿禰は劔に心付す宅内を連て宇治へ立を暮なり三幕目希世又にせ物を兵衛夫婦に渡して龍田を盗み出し逃る跡へ清貫輿をもたせて龍田を迎ひにおこせし所行方しれすいかつて兵衛夫婦をころす返し玉手山にて希世龍田を連のいていろく口説天國の寶劔を見

せる後の山影より紀の長谷雄有て伺ひ希世龍田を殺すゆへ長谷雄又希世を殺して龍田と兄弟の名乗りとなる宅内の源藏道迄送つてかへり道に長谷雄に出合ひ是丸塚山のだんまりの幕なり四幕目宇治平等院の別莊にて判官代輝國菅公に志を傾くるゆへ押込て春藤玄蕃是を責る宿禰寶劔を以て菅家再興の願ひに來る改し所にせ物なりそれよりめしとらんとす宿禰あれ出して芳流閣の屋根へ上る捕方につきて輝國に龍頭卷の衣裳をゆるして取にやる宿禰輝國閣の上にて組合ひ下に繋ぎし柴船へ落こむ繩きれて柴船川下へ流るゝ幕なり五幕目佐田村の川ばたにて四郎九郎祖父釣して居る前へ柴船流れくる中を見れば宿禰輝國なり扮梅王來つて三人を内へかへし船を流していなんとす妹智松王伺ひよつてだんまり小文吾房八の晝面合せ幕なり六幕目梅王内法性坊神主春彦大夫争ひ有て雙方松王梅王を頼み以前角力をとらせ松王まけて意恨となり此程は中絶の仲なり宿禰は金瘡の病臥輝國は藥を買ひに行跡へ鷲塚平馬宿禰の詮議に來て祖父四郎九郎を人質にとりて歸る梅王とつおいつ思案の中へ法性坊かへつて奥へ行跡へ松王春彦大夫來

て惡口を云て喧嘩仕かくれども梅王相手にせず兩人惡口云てかへる荒藤太と云角力の弟子來てすまぬ／＼と云を投出して追ひかへす松王の母千代嫁お春を籠にのせて去に來て嫁を置てかへる跡梅王妹春殘つて今夜は内に置事ならぬ出てゆけと云此中へ松王仕かけて來て兩人立廻りに成松王を一太刀きる切られて梅はとびの歌をいふ戸口より母千代下の句を云松王母者人よろこんで下されおりや身替になりましたとの愁ひにて松王の首宿禰の代りとなり血汐で宿禰の金瘡直る四郎九郎出て愁ひ荒藤太注進とかけ出すを輝國かへつて來て是をさへる荒藤太くわん眼にて段切まく七幕目室の津の茶や場にて白太夫と云全盛の揚屋入には白の牛に横乗りして禿大勢に綱をとらせ出る是本名櫻丸にて八犬傳の毛野の役と見立都て房總のまぎろしき地名を五畿内の地名に引直し名は菅原始茶種の御供振袖天神記の人名を借る事なり斯の通り手段を付腹稿する事十四五年に及べども未時節來らず此餘腹稿のもの數多なれ共役者の座組と時候に合ねば世に出ず此一部にのする如く實説をよく胸に納めて扱實説に遠ざかり別に一部の趣向を

立るを是なん綺語と云趣を聊説て此道の好人に示すものなり猶書もらせしを集めて附録三卷に演れば其戲墨を見て笑ひたまふべしと云

維時嘉永三庚戌年狂言綺語堂に冬籠して

西澤一鳳軒李更記

西澤文庫傳奇作書續編下の巻終

雜劇作者湖上笠翁先生肖像



西鄉楠亭寫

題笠翁先生肖像

芒鞋竹杖見天子龍艦
春湖賜御卮一曲懷仙
人不解聲々惟有沙鷗
知

祇園張新炳

西澤
文庫傳奇作書附錄上の卷

目次

- 一 唐士奇譚の寫
- 一 古淨瑠璃本の寫
- 一 諸流謠名所競の寫
能舞
- 一 謠曲作者目錄の事
- 一 同内百番の部
- 一 同外百番の部
- 一 同習十番の部
- 一 同獨吟八十五曲の部
- 一 同作者姓名附
- 一 復讐見立番附
- 一 武藝名譽一覽番附
- 一 男達見立角力番附
- 一 新大橋復讐新聞
- 一 同歌舞妓潤色の話
- 一 天王橋復仇の紀聞

- 一 同歌舞妓潤色の話
- 一 下谷浪人者爭論の話
- 一 荊萱桑門狂言の話

西澤傳奇作書附錄上の卷

西澤綺語堂李叟著

唐士奇譚の寫

李笠翁先生は清の康熙年中の人にして湖上に仕伊園老人と號す元より家富仕官を好まず天性其才人に勝れ文章一家の風をなす書を能くし畫を能くし又音律の絃歌に至るまで能くせずといふ事なし康熙皇帝是を召して官位を授んととの詔あれど辭して受けず老年に及んで閑暇ある時は詞曲傳奇を作りて樂しみとす先生の作の傳奇多き中に康熙二十六年の春北京百花坊の戲場にて千字文西湖柳といふ外題にて歌舞妓芝居をなせしを清朝第一の流行狂言とす唐にて芝居といふ事を演場とも戲場とも枸欄とも戲臺とも又小芝居を小枸欄ともいふ本邦にて宮芝居といふが如し但し人形芝居は傀儡棚と云舞臺の事を戲棚と云樂屋を戲房と云樂屋入口を鬼門口と云棧敷を山棚といふ又

官人などの坐す棧敷を青龍頭といひて欄干に龍虎の彫物青漆塗にして歷々の見物する棧敷なり尖棚といふは出棧敷の事也狂言といふ事を引戲とも演戲とも戲齣とも雜劇とも戲文とも云ふ身振するを介とも科とも云顔見世を艶段と云二の替を二艶段と云稽古は花穿役者の物まねするを口技といふ根本正本を院本とも餘段とも云一段二段を一齣二齣と云唄うたひを念と云幕引を啓科と云役者を戲子とも梨園子弟とも惣じてかうやうの者を俳優家と稱す抑唐の枸欄の始は漢魏六朝の頃東府と稱して行はれしは皆詩を謠ふて舞し事にて日本にていふ白拍子が朗詠などに合して舞ふに同じく唐の玄宗皇帝の時始めて傳奇院本として芝居狂言なるといへども未盛行はれず又宋の徽宗皇帝の時麴國の人來朝せしに各美麗に粧ふて面に紅粉を施したる體を其まゝ優人に命じて其顔に擬して舞せらる是を五花鬘弄の舞と稱して其時に行はる是を芝居狂言の始とす此時より民間に一種の枸欄戲子と云もの出來多くは漢楚の戰三國志など狂言に取組み世に行はるゝ事とはなりけり其後金の章宗皇帝の時董解元が西廂記といへる狂言を作る是唐の元稹

が會眞記に擬して作れる狂言にして古今芝居狂言の規範とす夫より後は皆西廂記のかたにて作れる狂言多し唐朝より以後代々流行狂言多しといへ共あらましを左に記す唐の世にはやりしは

演記長恨歌 烈女降黃龍 晉宣成道記 煬帝白花鈴

粉墻梨花院 女狀元春桃記

宋の世にはやりしは 三國一夜談 王子端捲簾記

四坐山偷酒牡丹香 花香千字文 三藏法師不抽關

金の世にはやりしは 西廂記 講家求記 水酒梅花

麴

元の世にはやりしは 琵琶記 水滸千字文 蘇武和

番曲

明の世にはやりしは 截紅閣浴室記 長慶春夢談

賞花燈 汴京十樣錦 范增霸王曲 楊大真戀鰲山

等なり扱作者といふも唐の世にては白樂天、元徴之

皆院本の作あり宋の世にては東坡先生秦少遊なども

作文あり元の世にては羅貫仲、施耐庵尤も作の上手

なり明の世に至つては李卓吾、祝允明、唐白虎、王世

懋、金聖歎、鍾伯敬など諸歴々皆戲文の作に巧みなり

扱笠翁が作の千字文西湖柳の頃の戲子の名は生たちやく

揚雲伍淨かたき 顧元山淨かたき 張天兒淨かたき 李三之淨かたき
王達兒浪士がた 王眞琬生かたき 劉秀卿浪士かたき 張胡兒かたき
李娥郎旦がた 武郎子生かたき 劉士卿淨かたき 張胡兒かたき
淨かたき 夏逸打渾がた 王金老小旦かたき 王紅連等なり
是に戲俗扮名目次の番附并に一枚看板の圖を出し其
院本を譯文して三冊の書あり實に本朝の芝居に少し
も異ならざるを記す其外題脇書は

試問池臺主當爲將相官

千里柳塘偃月刀

承恩不在貌教妾若爲客(容カ)

右唐士奇譚三冊は寛政二戊年正月上梓するを爰に略
出するものなり

古淨瑠璃本の寫

井筒屋源六戀寒晒享保七寅年七月六日より豊竹越前
少掾座にて世話淨瑠璃大當りせしとぞ嘉永三戌まで
百二十九年となる所謂一夜附狂言にて京五條御影堂
にて男女情死の次第を作りしものにて男の名を佐々
木源六といへば其頃町々を井筒屋源六とて菓子飴の
類を賣歩行しと同名なるゆゑ外題に付し物にて中の
卷伊勢山田御師の場合は後世伊勢音頭戀のねたば(寛

政中伊勢古市十人切)二卷目御師の場は是をはめたるものにて此下の巻に東がねの茂右衛門サアきたく又々齋藤太郎左衛門ちよつと逢たい事ぢやとの唱歌を諷ふ事あり此二つの歌はいと古き物とおもはる文化に中村歌右衛門(始芝翫後梅玉)の七化に座頭越後獅子の唱歌につかひしも又をかしからずや此餘の狂言の仕組いと珍らしければ此頃の古淨瑠璃三五部を類聚して當世榮花物語といふ書に出せば讀てしるべし永祿より享保の頃の詞其頃の衣裳の好み流行物など考へ合する好者達はかならず見べき草紙也

井筒屋源六戀寒晒 作者 西澤 田中 千柳風

皇月雨ふりし昔をけふとへば則けふが其むかし播磨の領主に宮づかへ御家に古き古柱佐々木源太兵衛と中一かまへかまへし門に幟をたて内は女中が棕まくはやいおそいとせりあひの菖蒲菰をあしにつく身につくしごと手につくは口につくかとなまめかし茶の間のまかなひ名さへおせりといふ女

諸流能舞謠名所競の寫

嘉永元戊申年開板松壽堂藏板と記せし見立番附あり奥に此は能の位又は口傳祕曲にかゝはらず只古作の面白さを撰て甲乙を記すとなん斷りたり是も作者道に因みあれば爰に略出す

次 第		御 免		不 同
近 江	筑 前	天 竺	筑 後	司 津
鸚 鵡	磯	石	柏	濃 國
小 町	野々宮	橋	崎	求 塚
肥 後	大 和	近 江	相 摸	津 國
檜 垣	采 女	梅 枝	望 月	千 手
勸 進	元	差 添	人	卒 都
紀 州	道 成	關 寺	小 町	近 江

[illegible]

つ 大 つ 信 さ
の の つ
國 和 國 濃 ま
武 吉 岩 飛 靱
野 物
文 靜 舟 雲 狂

やみ同近さ大み陸い近みさつさ大唐つ陸や同み長唐つ
まや が や やがのが の ま や の
とこ 江み和こ奥せ江こみ國み和土國奥と こ門土國
逆浮鐘惡鱗鷄朝刀大雷大調生龍三三梅錦野祇落礙咸松
源 龍 六 代會田の陽
銓舟引太形田顔 天電會我盛日山笑 戸守王葉潛宮虫

前同同同同同同
丹後九世戸
山しる經政
唐土鶴龜
みやこ信貫
唐土鍾尅
みやこ現在
みやこの關原與市

頭取信 澧木 賊
頭取山 城西行櫻
頭取陸 奥遊行櫻

前同同同同同同
尾張源太夫
唐土安宇
みやこ花月
唐土禪師曾我
みやこ舎羽
唐土合利甫

頭取山 城戀重荷
頭取津の國雨 月
頭取筑前綾 鼓

謠曲作者目錄の事

抑當流は觀阿彌に起りて世阿彌に成り音阿彌より傳へて三百年に越えたり然れば其間中絶する事あり又訛れる所も不少また世阿彌が頃能數甚多くして正すにいとまあらず依て能作書曲附書等を残して子孫に改正すべきを示せり今元章不肖なりといへども先祖の志を繼がざるに忍びず中絶するをおこし訛れるを正し又今になす所の能といへども古意に叶はざるは略き中絶せる能に及び未爲能も古意にあへるは加へ將に子孫童形の間に及ぶ秘事をしらしめんため且先祖みづから能を作れる例にならひ梅の能を作り加へ總て二百有十番とす其中一番の習ひなるものを分て十番とし其餘見聞に近きを内百番とし遠きものを外百番とし謠本を著せり然れども猶誤あらん事を

恐る子孫相繼て改正せば孝行是にしかじ

明和二乙酉四月五日

觀世左近秦元章

内百番の部

高砂	元清作	弓八幡	元清作
白髭	清次作	難波	元清作
追松	元清作	志賀	元清作
白樂天	元清作	養老	元清作
氷室	宮増作	加茂	氏信作
吳服	元清作	玉の井	信光作
右近	元清作	竹生島	氏信作
田村	元清作	通盛	井阿彌作
屋島	元清作	實盛	元清作
兼平	元清作	賴政	元清作

經政	元清作	朝長	元清作	葛城	元清作	遊行柳	信光作
清經	元清作	忠度	元清作	百萬	清次作	小督	氏信作
項羽	元清作	船辨慶	信光作	柏崎	江波左衛門作	安宅	信光作
軒場梅	元清作	佛原	元清作	三井寺	元清作	花月	元清作
夕顏	元清作	江口	氏信作	芦刈	氏信作	東岸居士	元清作
紫式部	氏信作	芭蕉	氏信作	角田川	元清作	自然居士	清次作
采女	元清作	楊貴妃	氏信作	櫻川	元清作	邯鄲	元清作
野々宮	元清作	半部	內藤左衛門作	天鼓	元清作	唐船	吉廣作
井筒	元清作	千手	氏信作	錦木	元清作	女郎花	龜阿彌作
玉葛	氏信作	熊野	內藤左衛門作	舟橋	元清作	鶉飼	清次作
浮舟	元清作	斑女	元清作	通小町	元清作	山姥	氏信作
二人靜	元清作	花筐	元清作	阿漕	元清作	殺生石	安清作
松風	清次作	雲雀山	元清作	善知鳥	元清作	安達原	氏清作
定家葛	元清作	梅枝	元清作	藤戶	元清作	葵上	氏清作
三輪	元清作	富士太鼓	元清作	大會	元清作	鐵輪	元清作
龍田	氏信作	卷絹	清次作	車僧	元清作	泉良	元清作
西王母	元清作	小鹽	氏信作	善男	竹田法印作	當麻	元清作
羽衣	元清作	雲林院	元清作	鞍馬天狗	宮増作	融	清次作
燕子花	元清作	西行櫻	氏信作	野守	元安作	猩々	元清作
誓願寺	元清作	六浦	安清作	春日龍神	元清作		

外百番の部

放生川	元清作	御裳澤川	元清作
大社	長俊作	松尾	清次作
寐覺	作者未詳	淡路	清次作
榎の島	長俊作	富士山	元清作
逆矛	宮増作	葛城鴨	元清作
嵐山	元安作	佐保山	元清作
繪馬	作者未詳	阿古屋松	元清作
磐船	作者未詳	東方朔	元安作
海藻川	作者未詳	蟻通	元清作
金札	元清作	鶴龜	作者未詳
敦盛	元清作	碓潛	作者未詳
五條忠度	作者未詳	巴	信光作
籠梅	元清作	吉野靜	清次作
生田敦盛	元安作	妓王	作者未詳
知章	元清作	冊子洗	清次作
空蟬	作者未詳	住吉	作者未詳
宮城野	作者未詳	大原御幸	元清作
三山	元清作	弄太鼓	元清作
佐用姬	元清作	鳥追船	金剛作

落葉	元清作	六月祓	安清作
藤	安清作	蟬丸	元清作
吉野天人	安清作	待羅物狂	福來作
牽牛花	小田切能登作	求塚	清次作
胡蝶	信光作	名取姫	元清作
雨月	氏信作	布留	元清作
道明寺	元清作	室君	作者未詳
輪藏	長俊作	接待	宮増作
枕慈童	作者未詳	景清	元清作
三笑	作者未詳	俊寛	元清作
丹後物狂	井阿彌作	鉢木	清次作
弱法師	元雅作	木曾	作者未詳
高野物狂	安清作	盛久	元雅作
檀風	元清作	七騎落	作者未詳
咸陽宮	作者未詳	藤榮	作者未詳
松虫	元清作	放下僧	氏信作
張良	信光作	橋辨慶	安清作
泰山府君	元清作	忠信	作者未詳
明王鏡	信光作	大佛供養	作者未詳
小鍛冶	元清作	土蜘蛛	作者未詳

鍾道

氏信作

羅城門

信光作

昭君

氏信作

紅葉狩

信光作

松山鏡

作者未詳

谷行

氏信作

染川

作者未詳

大江山

宮増作

昌俊

長信作

葛城天狗

長俊作

熊坂

氏信作

第六天

作者未詳

烏帽子折

宮増作

舍利

元清作

龍虎

信光作

檣天狗

作者未詳

國栖

元清作

蛇

信光作

合浦

作者未詳

絃上

金剛作

一角仙人

元安作

梅

元章作

習十番の部

卒都婆小町

清次作

道成寺

清次作

檜垣

元清作

戀重荷

元清作

砧

元清作

木賊

元清作

落葉

元清作

石橋

元雅作

關寺小町

元清作

鷺

元清作

右二百有十番は當流代々自筆の謠本書物等悉く見合
せ改正既成就依之正判書寫に加奥而已猶此外に

獨吟八十五曲の部

不盡

金村作

豐宴

家持作

敏馬浦

福麿作

芳野

赤人作

祭神

大伴坂上
那女作

好可來

憶良作

所聞文彌

能登作

深江石

憶良作

香菓

家持作

玉取

作者未詳

近江八景

作者未詳

兵揃

作者未詳

四季

作者未詳

鼓瀧

元清作

香椎

作者未詳

和國

作者未詳

眞方

元清作

蛙

作者未詳

重盛

作者未詳

一字題

作者未詳

經山寺

作者未詳

島巡

作者未詳

俱梨加羅落

作者未詳

上宮太子

作者未詳

反魂香

元清作

砥並山

宮増作

當願暮頭

作者未詳

笠取

作者未詳

美人摘

宮増作

妻戸

作者未詳

由良港

作者未詳

鳥羽殿

元清作

隱岐院

元清作

星

元清作

博多物狂

作者未詳

佐夜中山

作者未詳

更科

作者未詳

橫山

元清作

八雲

作者未詳

五輪碎

作者未詳

西國下

玉林作

東國下

玉林作

泊瀨六代

元清作

生田川

元清作

藥水

元清作

外濱風

元清作

法樂

氏信作

松竹

作者未詳

葛袴

作者未詳

上巳

作者未詳

照日宮

清次作

雪山

作者未詳

寂光院

元清作

端午

作者未詳

橋柱

元清作

自然物狂

清次作

賢女鏡

清次作

乞巧夕

作者未詳

三元

作者未詳

人日

作者未詳

桃花節

作者未詳

浦下部

作者未詳

三月盡

作者未詳

朱夏

作者未詳

口蒲節

作者未詳

飛火

元清作

夏祓

作者未詳

中秋節

作者未詳

羅騎節

作者未詳

青春

作者未詳

星夕

作者未詳

素秋

作者未詳

五三夕

作者未詳

陽數節

作者未詳

重陽

作者未詳

九月十三夜

作者未詳

九月盡

作者未詳

玄冬

作者未詳

初雪

作者未詳

歲暮

作者未詳

歌人意

冬信公作

更衣

作者未詳

勸進帳

信光作

起請文

長俊作

願書

作者未詳

都合八十五曲

今此類を蘭曲といふ抑蘭曲優曲閑曲といふは至れる上に此三つの姿ある事にて諸ふ人を外より稱美せる詞なり然るを俗に蘭曲を謠はんなどいふ事あるべからず故に獨吟の曲と題せり勸進帳起請文願書の三つを習ひの三つの讀物といふなり

謠曲作者の姓名附

結崎治郎秦清次

本氏平服部稚名觀世丸後三郎落髮號觀阿彌宗音應永十三丙戌五月十五日死五十二歲

結崎左衛門太夫秦元清

清次嫡男稚名藤若丸後三郎落髮號世阿彌宗全康正元乙亥七月二十二日死八十一歲

金春式部太夫秦氏信

元清聖若名彌三郎後禪竹元清聖若名彌三郎後禪竹

結崎十郎秦元雅

元清嫡男法名大圓長祿三己卯十二月九日死

金春十郎秦元安

法名桐林禪鳳

觀世小次郎秦長俊

觀世音阿彌七男法名大雅宗松永正十三丙信光嫡男天文十辛丑年死五十三歲月日未詳法名心祐

觀世彌次郎秦長俊

信光嫡男天文十辛丑年死五十三歲月日未詳法名心祐

外山又五郎吉廣

金剛彌五郎

宮増

日吉四郎次郎安清

後佐阿彌長祿二戊寅八月四日死七十六歲

大關	明曆	武道	白石	津山	前頭	寛永	正保	細川	備中	前	元祿	鶴岡	善右衛門	記
關脇	慶長	天下	茶屋	住吉	同	正保	同	岩井	血	同	寶曆	不動	利生	
小結	天正	毛谷	村六	助仇	同	同	同	西方	善之丞	同	文政	讃州	龜丸	
前頭	寛永	越中	サヲ	越仇	同	寛永	同	和州	孝子	同	文政	大坂	島ノ内	
同	正保	合法	辻	仇討	同	同	同	兩面	藤三郎	同	元祿	高田	岩井	
同	同	夏目	四郎	三郎	同	明曆	同	出羽	權八	同	天明	牛込	神樂	
同	正保	松前	屋五郎	兵衛	同	延寶	同	白井	形	同	正徳	筑前	福岡	
同	寛永	長崎	丸山	仇討	同	寛永	同	鏡山	仇	同	享保	伊豆	下田	
同	同	白井	本學	仇	同	正保	同	奥州	白石	同	明曆	豊後	松前	
同	同	源藤	左衛門	記	同	永祿	同	甲州	仇	同	享保	神田	須田	
同	同	岩井	實	記	同	貞享	同	江州	水口	同	天保	伏見	今町	

右東西に見立上の段は文字あらく末程文字細く此末に□石川民部仇文政王子奥渡とあり猶是にもれたるは貞享御堂前仇討□親子塚仇討安永小栗栖十兵衛文化栗津原仇討□上田慶二郎□永井源三郎など數多あるべし□年號不詳分此次に出せる見立番附三枚共東都にて求め歸りしが各講釋師の作せるものとおもはれ甚だ杜撰ながら各狂言著作道に因みあれば是に寫す元より東都にて名高きを擧げたる物なれば京攝の

耳に聞馴れぬ物多く京攝に名高きを書もらせるも又すくなからずされどもかばかりの人名を集るにも相應の見聞の力なくては集録する事難くかゝる板行も需るものあるがゆゑにこそ彫もすれ實に繁華の地なる事思ひやるべし

武藝名譽一覽番附

待浦意心軒

吉岡鬼一法眼

軍學
元祖

中納言匡房

山鹿甚五左衛門

尾鹿本半助

蘆塚中右衛門
乳坂兵部

方條安房守

火術張光堂松雪

此下肥後守

山本帶刀
毛利惣意

年寄

竹中半兵衛

山本勘助

宇佐呂駿河

差添

大石内藏助

勸源義經

進

楠正成

一刀 戸田一刀齋

鎗 法藏院爲清

一刀 石川郡藤齋

二刀 宮本武藏

關口 關口彌太郎

鎗 種田助六郎

一刀 伊東彌五郎

一傳 淺山一傳

射 輪左代八郎

鐵炮 井上新左衛門

眞影 上泉伊勢守

鎗 奧平傳藏

一刀 青木一刀齋

眞影 長沼七郎

軍學 原田外記

手裏劍 吉田初右衛門

兵學 時與左衛門

鎗 千々和五郎左衛門

弓 大宮内藏之丞

水練 源藤彌平太

軍學 大石齋人齋

同 岩淵兵左衛門

劍 鳥川太八衛

同 多宮源八郎

同 藤井勘兵衛

同 和久半太夫

同 戸川半平

火術 三宅林左衛門

劍 高木折右衛門

同 藤田水右衛門

軍 小幡勘兵衛

長刀 星合團四郎

同 加藤市左衛門

長刀 中津川祐半

鎗 林玄蕃

同 同平次郎

同 奧平主馬

劍 川田源吉

軍 大石賴母

劍 石井半次郎

同 同源次郎

同 熊谷三郎兵衛

同 大戸嘉兵衛

同 僧牧野兵衛

銃	八木宇五郎左衛門	劔	潮田主水	同	小林平八郎	同	飯沼勝五郎
鎗	安部白五郎	同	石井兵太夫	軍	丸毛何某	同	松波隼人
念銃	堀部安兵衛	同	荒川六右衛門	劔	河井又四郎	鎗	當麻三郎右衛門
柔	竹内加賀之助	鐵炮	橋本一巴	鎗	鳥居新左衛門	劔	村上庄右衛門

代々 鹿島神流

代々 香取神流

女武藝 朝小局

一俠客 幡隨院長兵衛

一刀	神古上天膳	一刀	關根彌次郎	劔	東軍又八	鎗	奧平隼人
鎗	多島運八郎	軍學	堀部彌兵衛	弓	松井民次郎	同	赤井小源太
卜傳	塚原卜傳	兵學	吉田忠左衛門	劔	同官兵衛	劔	東谷五郎兵衛
荒木	荒木又右衛門	長刀	穴澤賴母	同	塚口源太左衛門	同	輕部六郎右衛門
三流	太田忠兵衛	錄	金井半兵衛	同	北藤茂右衛門	同	大内十太夫
劔術	吉岡兼房	軍	柴田三郎兵衛	同	山添伊兵衛	同	林源次郎
棒業	阿部什四郎	同	楠不傳	同	廣瀬郷右衛門	鐵炮	鹿子木左京
弓術	日置彈正	水練	駒杵八兵衛	軍	安宅郷右衛門	劔	平野左衛門
無敵	佐々木巖流	劔	伊勢小京太	鎗	高松半平	同	大和田藤馬
射術	千野官左衛門	念流	大貫淺右衛門	同	櫻井甚左衛門	同	川俣三之助
鐵炮	稻富伊賀	同	相馬四郎太夫	弓	奧村八郎右衛門	同	桑名友之丞
劔	樋口十郎右衛門	劔	宇和島主水	同	石川兵助	同	同三七郎
同	鹿目井新十郎	同	井戸宇右衛門	同	白井權八	同	遠城治左衛門
鎗	圓橋秋彌	同	高倉長右衛門	同	白井本學	同	安藤彦八郎
八重垣	吉岡太郎左衛門	同	高木右馬之助	軍	上田藤雲才	同	福代源七郎
		同	欽名賴母	劔	清水一角	弓	櫻井甚助
							竹内玄丹

爲御覽行司喧嘩屋五郎右衛門市川才牛團十郎伊平とありて次に

大關	關脇	小結	前頭	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
幡隨院長兵衛	唐犬權兵衛	浮世戸平	半時九郎兵衛	溝野十郎右衛門	朝比奈藤兵衛	辨慶小左衛門	腕喜三郎	度々ノ伊兵衛	白柄十左衛門	甚三分	二見十左衛門	鎌田又八	鍾馗半兵衛	陀羅庄九郎	成田運平	小佛小兵衛	同	同	同
梅堀小五郎兵衛	和泉長太郎	兵藤平内兵衛	出來星勘兵衛	鬼子左平	唐犬十右衛門	同三右衛門	おひやり、庄左衛門	唐犬五郎治	居首勘兵衛	小川八郎兵衛	てくない庄五郎	唐犬五郎左衛門	平井軍八	寺西閑心	笹源五兵衛	笹八兵衛	目窪傳兵衛	同	同
前	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
笹友之助	笹伊兵衛	矢田權四郎	鏑屋源兵衛	かちの勘助	大屋五兵衛	きさい五兵衛	佛師庄左衛門	藥壺五郎右衛門	扇屋與平次	赤銅藤兵衛	こぶ市右衛門	かみこ市兵衛	矢倉八郎兵衛	前がみ三右衛門	風呂の五兵衛	きれの彌兵衛	首切れの彌平	みげん小左衛門	こもの十藏
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	利寶院
前	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
鏑屋兵左衛門	牛の五兵衛	鍵屋金十郎	達摩伊左衛門	火燧五郎左衛門	真木屋市十郎	油取六之助	兩がへ五郎兵衛	小腕利左衛門	みかん又兵衛	たればき平左衛門	竹馬三左衛門	あげ次郎左衛門	のでの喜三郎	こぶの長三	ひなや三五郎	金かん坂興三郎	ぼく岩	花川戸助六	前頭

雁金文七	無類	阿房惣左衛門	一寸德兵衛	勸進元	東金茂右衛門
雷庄五郎		合法利左衛門	團七九郎兵衛		
布袋市右衛門	元祖	死人小左衛門	釣舟三武	差添人	筑波茂右衛門
極印千右衛門		谷野武兵衛	不破伴左衛門		
安野平兵衛	珍人	今井吟吾	名古屋山三郎		
司行		司行			

[illegible]

新大橋復讐新聞

杏華園筆記の中に東都新大橋榎藏後にて寛政十年の十一月十二日敵討ありし其實説を扣へ置かれしを爰に出す十二日の朝深川六間堀さるこ橋の邊にて復讐ありと風聞す前原孫市下女（元神保の藩中に居しものなり）いふ様それは神保の家中にてあるべしといふ何ゆゑさいふやと問へば先年同家中山崎彦作といふ者をやみ討せし事あり數人徒黨とはいへども崎山平内頭取ゆゑ討たれし人の妻子附ねらひ候由聞傳ると答ふはたしてそれなりと翌十三日榎藏に詰居候者の話に承り候平内を親の敵と切付し者は年十七の娘なり助太刀せし者は此娘の繼母と智となり智は南塗物町權三郎店に住居せし仙龍といふ書家なり平内を附ねらひ候ため今年春六間堀森下町幡長山兆澤寺門前へ出張をせしとぞ其日朝平内通り候處を娘出向ひ親の敵なりと云ふ平内いや我一人にはあらず敵は大勢なりとあらそふ此問答手間取内娘先刀を抜き平内も抜合せ二太刀三太刀打あふ時母後より一太刀切平内驚きて駈出す娘遁さじと追ふ平内逃行戎屋といふ餅屋の裏に入兼て入魂の釣針師の家にかけ込（口後

町の様子かはり入魂の者はあらであらぬ者の家にてありしと）娘追付て切かくる平内いらつて拂ふ娘刀を打落されて表へ出て仙龍が脇差を取て又敵にむかふ時其邊藏普請ありて土こねし所ゆゑ泥にすべりて倒るゝ時平内刀を振り上げすでにかうよと見ゆる所を仙龍そばに有合ふさいとりを以て拂ふさいとり腮にあたり泥目口へ入りひるむ所を娘一太刀切るきられて逃る母出合ひて又切る敵縦横に奔走して榎藏の普請場へ逃入らんとする時竹を荷ひたる者にさゝへられて入る事を得ず娘又／＼切る切られて倒るゝ時母とゞめをさし立のく敵また起上りて逃出んとする時人々出あひて雙方共におさへけるなり（とゞめさしける時あやまりて肩のかたをさしけるとぞ）平内に殺されし彦作もとは賣卜者にて親方吉村市正と公事をして江戸構へになりし者なるが神保へ住込しなり寛政六年二月山崎彦作江戸拂の者を不吟味に召抱候に付神保左京差扣仰付けられしとなり山崎彦作賣卜せし時の名は渡邊左京といひしとぞ是より先當主幼年の砌平内親兵左衛門家老にて三千兩程私欲押領して言語同斷なり長子をば町與力となす今吟味方中

村八郎左衛門と勤役なりと云或は町屋敷を買或は田地をかひさまゝの奢などせしかば主人知行ひしと行つまり彦作働きて漸取つゝきける夫より追々私欲露顯して平内親兵左衛門遠慮いひ付らる此一味の者共漸々に身分にもかゝはるべき勢ひゆる徒黨して彦作を闇打にせし者平内の外に七人岸上主水鹿島藤兵衛奈良原將監川口嘉作山岸平角高橋七兵衛宮島治兵衛此中に平内頭取しと云彦作妻子をば下屋敷へ移し男子なきゆる扶助米をあたへくれ平内又親の遠慮させらるゝは私欲より事起りて人を殺せし次第故切腹すべきやなど取沙汰せしをさもあらで過さりしなり彦作妻は扶助をうけ候ては復讐の事遂がたしといとまこひて流浪し娘を養ひ育て夫の云付ゆる去年仙龍に嫁せしなり仙龍は東江門人書家を業とし京橋邊に住居し南塗師町權三郎店に住居せしと云ふ崎山兵左衛門(名保晃字は景陽號東橋)葛阪山人高峻の門人なりかつて葛阪山人書墨本にせし事あり序を予に求めし故書つかはせし事もありき本所一つ目辨財天の額は崎山兵左衛門が筆なり辨財天東橋山保(橋山崎山ナルベシ)晁謹書とあり崎山平内平日出る日は供

など多く連出るゆる打つ事あたはず其日は笛の稽古に出る日にて供少しゆるに其日をうかいひ當朝も屋敷の門番に今日は平内がいよゝ出る日なるやと聞し者ありしとぞ平内不敵の者にて劍術などよくしかつて殿の遠馬の供などして歩行にておくる事なかりしが翌日また遠方へ使者を勤めしとなん平内は下駄をはき居候娘は草鞋をはき居候肩を切り候節も平内脊高く娘の手届き兼候由なり娘は彦作が遺物の刀名は相州藤原正國(三尺餘)を風呂敷に包み手に持居候を見たる者有之由承り候同年十一月二十一日原井仙龍傷を病て同二十八九日頃死す妻追悼の歌いもとせのかたらひをなし程なう身まかりたる夫をこひてかすゝのたのめし事も終らぬに

はかなくなりし人ぞ戀しき
はる 女

名残をし野邊の草木となりし身に
はる 女

さそふ此世にや心のこさん
はる 女

寛政十年年十一月十二日深川元町月行司平次郎口書の寫

一今晝四つ時同所六間堀町中の橋邊より子細不知年齡二十五六歳に相見え候惣髪之男同三十歳許りに

相見え候侍體之者并に四十歳位に相見え候女十六七歳位に相見え候女都合四人拔身にて互に打合参り往來騒敷御座候間町内一統罷出制し取押へ右之者共名住所承合候得者相名乗敵討之由申立候間早速疵人共へは醫師を懸けおき五人組名主并申聞一同御訴申上候得者御檢使被下置候

南塗師町權三郎店

みき

同人娘

はる

深川森下町吉兵衛店
手跡指南致罷在候浪人

平井仙龍

右三人申口

一私共神保左京殿家來崎山平内へ手疵被負私共儀も手疵取候に付御檢使之上子細御尋に御座候みき申上候私夫渡邊左京と申神職にて八丁堀岡崎町忠兵衛店に罷在候處六年已前丑年八月中御寄合神保左京殿家來崎山兵左衛門并に同人忤同平内世話にて右屋敷へ勝手小役人に相住み山崎彦作に相改め妻娘共屋敷へ引移り相勤め罷在候處同九月中家老役被申付尤其節同役は右崎山兵左衛門并に同人忤平内儀は見習にて夫彦作と三人にて家老役相勤罷在候處同役兵左衛門并に同人忤平内儀年來不正之儀

有之町屋敷等も三ヶ所持致し其上金三千兩程不正之筋有之趣にて取調之義主人より同十月中被申付候に付段々取調候處町屋敷之儀は一ヶ所有之并に三千兩程之不正之筋之儀は千五百兩程の由取調主人へ申立候由之儀を遺恨に存候や同月廿三日夜九つ時頃主人用向之由にて小使中間呼に参り候間罷出候處傍輩共之内前書平内併に同人弟川口嘉作其外岸上主水鹿島藤兵衛奈良原將監山岸平角高橋七藏宮崎治兵衛右之七人にて夫彦作を及殺害候間私儀直に罷出右之通見受候間其時主人へ相願可申と奉存候處其砌より私共儀は宅番付委細之儀は追て被申付も可有之候間何れにも神妙に致し罷在候様に川口嘉作達て申聞候間見合罷在候處十日程過ぎ何れにも私共儀は御屋敷にて扶助被成下候間安堵致し罷在候様被申付候に付乍殘念屋敷内に罷在候處翌二月二十七日永之暇被下候に付知人深川六間堀嘉右衛門と申者方へ参り親子共世話に相成罷在候處同三月十一日より南塗師町權三郎店神職香取相模と申者方へ参り世話に相成居候處右相模儀萬端世話致候陰陽師平井仙龍と申者名前にて右店

借受罷在候尤はる義仙龍妻にも可遣約束にて未だ
盃等は不爲致候へ共常月九日娘召連右仙龍方へ逗
留に參り居候處今晝四つ時頃崎山平内往來を通候
を見受候間兼て遺恨を晴し可申と心懸罷在候間娘
義は仙龍刀を持私義は所持の脇差を持罷出右平内
へ夫之敵之由申候へば人違ひのよし申出候間
追駈け參り兩人にて切掛候へ者平内義も抜合互に
切合罷在候處跡より右仙龍義も罷越共に助太刀致
し呉れ存念相晴し可申と存候處町内より大勢罷出
制候間仕留不申殘念に奉存候此上右平内并に外七
人之者被召出御吟味奉願上候私共義町内騒し候段
奉恐入候何分御慈悲奉願上候

一はる申上候前書に母みき申上候通り相違無御座候
父彦作義先年平内其外之者共に殺害に逢ひ候段兼
て承り殘念に存し罷在候處今朝表を通り候を見受
頻りに殘念に相成り仙龍所持の刀を帶し罷出母共
に親の敵のよし乍申切懸候へば平内義も刀を抜私
共へ手疵被負申候義に御座候尤仙龍義も參り助太
刀致吳候得共其内町内より大勢罷出制候間打留不
申殘念に奉存候何分此上母共々御慈悲奉願上候

一仙龍申上候義は右みきはる世話に相成居候陰陽師
香取相摸と申者は山崎彦作義元渡邊左京と申神職
致候節弟子に有之彦作相果候後は弟子之義に付み
きはる兩人共參り世話に相成居候右相摸儀去春中
より病氣にて職分も不相成候よしにて私へ萬端相
頼候間引受世話致し罷在候處同九月中右相摸儀致
病死候間私儀則香取相摸と相改め陰陽師職分致罷
在候得共勝手に付遠藤正健と申者へ香取相摸と申
名前を職分とも相譲り相摸儀は本郷邊へ參り陰陽
師職致罷在候私儀は右吉兵衛店へ當七月中引移り
平井仙龍と相改め手跡指南致し罷在候儀に御座候
尤みき儀は其節より私名前にて右權三郎方店借受
差置候勿論追てはみき娘はる儀は私妻に貰ひ受候
趣約束は致しおき候へ共未だ盃は不致候處當月九
日にみき儀娘はるを召連れ私方へ逗留に參り居候
處今晝四つ時頃はる儀私所持の刀を持みき儀も所
持之脇差を持表へ駈出し候間何事に候哉と私儀入
湯に可參哉と脇差を帶し出懸り候間直に跡より追
駈參り見候へば侍體之者をみき儀夫の敵のよしは
る儀親の敵のよしにて切掛候處右侍體之者も刀を

抜き互に切合罷在みきはる危き様子に付不得止事
 帶し參り候脇差を抜き共に切合候節手疵受候儀に
 御座候尤委細之義は不奉存候へ共右始末に及候段
 奉恐入候何分御慈悲奉願上候

寄合神保左京家來家老役崎山平内口上

一私儀手疵被爲負候に付御檢使之上子細御尋に御座
 候今日四つ時頃用事有之屋敷を罷出六間堀下之橋
 を渡り河岸通りを罷通り候處同所中の橋際にて何
 者とも不知私後より肩先へ理不盡に切付候間驚き
 振かへり見候處先年相果候傍輩山崎彦作妻娘并に
 惣髮の男一人都合三人にて切懸候間私儀も刀を抜
 き互に打合候へ共手に餘り殊に場廣にて小楯に取
 可申所も無難防御座候間段々相しらべ引退き同所
 元町裏屋を小楯に取待居候間跡より惣髮體の男追
 かけ參り候間手疵被負候へば脇差を投付逃去候處
 みきはる儀引續き參り候間右之者へも手疵被負刀
 もぎ取申候へば右三人之者共も追々逃去り申候私
 儀も數ヶ所にて疵痛候間其場所へ倒れ町内の者に
 介抱に逢申候儀に御座候尤山崎彦作妻娘理不盡に
 及候儀は全く六年以前丑年十月中子細有之私并に

傍輩川口嘉作岸上主水鹿島藤兵衛奈良原將監山岸
 平角高橋七藏宮崎治兵衛右の者寄合彦作を殺害致
 し候儀有之其砌私共儀は主人より押込被申付何れ
 も日數相立被差免候彦作妻娘儀は翌寅年二月中永
 之暇被申付其後は見受不申候處此義は遺恨に存じ
 私へ手疵被負候儀と奉存候不慮なる儀に逢ひ數ヶ
 所手疵受迷惑仕候勿論三人之者共へも不得止事私
 手疵被負候儀に御座候何分此上御聞濟被成下候様
 奉願候

崎山平内疵所 年三十一

- 一左腕肘下横に三寸程切疵 壹ヶ所
- 一同方下貳寸程切疵 壹ヶ所
- 一同方手の平より腕へ掛け六寸程切疵 壹ヶ所
- 一右脉所を懸け横に貳寸程切疵 壹ヶ所
- 一右會左へ寄堅に三寸程切疵 壹ヶ所
- 一同方横に貳寸程切疵 壹ヶ所
- 一襟横に三寸程切疵 壹ヶ所
- 一同左の小指先少々疵 壹ヶ所

べ八ヶ所

平井仙龍疵所 年二十六

一右眼の下より腮へ掛け懸五寸程切疵

壹ヶ所

一右之人指ゆび堅貳寸程切疵

壹ヶ所

一左大指除け手の平二寸程切疵

壹ヶ所

ベ三ヶ所

みき疵所

年四十一

一左之肩堅に三寸程切疵

壹ヶ所

一右脉所堅に一寸五分程切疵

壹ヶ所

ベ貳ヶ所

はる疵所

年十七

一左の太指へ掛け堅に壹寸五分程切疵

壹ヶ所

一同方小指一寸程切疵

壹ヶ所

一右脉所横に一寸程切疵

壹ヶ所

一額除髪の内堅に二寸程切疵

壹ヶ所

一同方堅に五分程切疵

壹ヶ所

ベ六ヶ所

其節所持の品書

一みき拵付脇差

壹腰

一仙龍拵付刀

壹腰

一みき短刀

壹腰

一はる短刀

壹腰

銘出羽大條藤原國路長さ一尺三寸程

銘近江守藤原繼廣長さ三尺一寸程

銘助宗長さ七寸五分程

銘平安城能長裏に永祿三長さ九寸程

其節平内儀疵所痛候に付召れ不申尤疵養生之内主人方へ預け場所に於て引渡し遣す三人之者共は於御番所店請人に預け遣す尤店請人共より銘々口書差出し預り中平井仙龍も相果同年十二月二十八日戸田采女正殿御差圖に依て神保左京家來宮川嘉内を以てみきはる兩人を被召出申渡し之寫

寄合神保左京元家來山崎彦作後家にて

南塗師町權三郎店に罷在る

同人娘 はる みき

其方儀先年崎山平内外七人之者共彦作を致殺害候處右子細も不分明其節重立取計ひ候平内を敵と存込何卒討果し申度と存候へ共其節娘はるも幼年にて殊に平内も油斷無之様子に付差扣罷在候内はるも致成長候間彦作殺害に逢ひ候趣申聞せ俱に平内を可討果と六ヶ年以來心掛罷在候内當十一月十二日平井仙龍方へ兩人共逗留致時節を伺居候内仙龍宅前を平内一人罷通り候をはる見受け刀を持追駈出候に付みきも短刀を携へ罷出候處仙龍儀も助太刀致し吳候間俱に平内と打合ひ互に疵受既に平内

は無難相果候始末に相成候段父夫之敵平内を年來
心掛右及始末候儀共女の身分別而健氣なる致し方
に有之其上はる儀は未若年にて右體の勵致し父之
敵平内へ數ヶ所疵被負父母之憤を散じ候段別而孝
心奇特なる儀に付兩人共無構みき其方儀夫山崎彦
作不埒有之先年江戸拂に相成候處其後武家方へ奉
公住致し候を其分に致し連添候段夫の儀と申殊に
舊惡之儀に付咎不及沙汰候とて落着なしける
右は杏花園の筆記にあり正しき實説なるべし

同歌舞妓潤色の話

右復讐は寛政十年十一月十二日の事なるを早く浪
華に聞えてや翌十一未年角中南芝居二の替り狂言に
取組たり中の芝居は傀儡淺妻船といふ外題にて作者
は並木五瓶なり江戸より澤村宗十郎上り立にて美濃
庄九郎近江の源五郎の世界にて大かた狂言並びあれ
共小暮へ此敵討を街の拵事にて書入たり江州瀬田の
橋詰に糸太郎三右衛門(後叶珉子)親子の女茶店を出
し隣に賣ト者出店ありて玄柳と云ふ法印歌右衛門
(後梅玉此頃はまだ敵役なり)橋詰普請壁の道具ち
らかり有茶店親子共往來を見かけ傳内様ちやござり

ませぬか〜と始末尋ね居る所へ山崎傳内といふ浪
人にて雛助(小六玉悴小珉獅なり)深編笠を着て出
て糸太郎三右衛門親夫の敵と切てかゝる危き所へ歌
右衛門飛出て左官の採取にて支へ敵討となるを金作
武家の後室にて猪三郎の若黨を連是を見松影ての硯
といふ寶物入用に付此復讐を扱ひ金を與へて此敵討
を延す是元より言合せの街事にて傳内の本名近江源
五郎と云世話場の役なり正月二日より初日を出す角
の芝居は正月十三日より始め外題をけいせい會稽山
是は池上七九郎上田慶治郎とて古く寫本にもある敵
討へ此大橋の復讐を取組敵討二組を混じ合せ潤色せ
し物なり母親三樹徳次郎娘芳澤いろは大序有馬湯本
にて池上七九郎に淺尾爲十郎敵にて關三十郎の岡本
三木之進と云神職を欺し討にて(本文彦作の妻みき
を取て三木之進と云)此敵を討んため心を碎京北野
の天満宮に參る途中にて狼籍者に逢ひ難儀の所を寺
子屋師匠新柳に嵐吉三郎(本名上田慶治郎)大勢の手
習子を連れ天満宮へ參り見兼て生酔の惡者等を投付
る此手の内を見込に娘に弟子入をさせ助太刀を頼む
との作者は近松徳三なり仙龍を新柄として此狂言大

に當り今も時々出る事ありされども此大橋の敵討より古くありしと心得て其前後を知らぬ人もあるべしと爰に云ふなり口の番附に享和とあれど誤りなり敵討は寛政十年にて狂言となりしは翌十一未年なり今嘉永三戌年まで五十有三年となる昔がたりなり

天王橋復仇の紀聞

是も杏花園藏書の中にありしを見しゆゑ爰に出す口の番附の内には淺草天王橋仇討とありて文政と誤れり俗に藏前の仇討とはいふなり寛政十二申年十月九日淺草天王橋の北西側鈴木といへる休所の前にて敵討あり其人は仙臺侯の封内名取郡根岸村長町といへる所の商人善助が子貫藏と云者年は二十八才なり敵は札差伊勢屋幾次郎が手代喜兵衛とて年は四十二歳なり貫藏十五歳の夏父に別れ少年の事なれば宮城郡小泉村百姓長三郎が子長松と云ふものを其としの冬よりたのみて(看抱人といふよしなり)渡世しけるが長松酒を好み行跡よろしからざるにより八年前の二月母がいふやうはや看抱に及ばざれば勝手次第に何方へもかた付候へといひて四五日を経る程に或夜丑の刻ばかりに母のうなり聲聞えければ貫藏側によ

りて見しに右の耳より頬へかけて一刀切られたり其まぎれに長松逸出しかば其儘おひかけしかど折あしく暗夜なりければ行衛まらず成りし跡にて見れば金拾兩うせぬ是全く長松が盗み取りしものならん母をばとかく介抱せしかど其かひもなく事きたりなく〱愁訴えければ侯より檢使下されしとぞ是よりして長松が行衛を尋ねもとめけるに江戸にあると聞てことし三月當地に來り馬喰町に旅宿して兩國橋の邊に住居せる大越主税といへる劍術の師の口入にて和泉橋通りの御徒町に住る櫛淵彌兵衛が弟子となり劍術をはげみ江戸一見に事よせていたらぬくまなくさがし索めけるにけふしも淺草寺に詣て歸るさ此處にて敵長松に出逢ひしゆゑ頓に捕て奉行所に至り公裁をあふがんとて八年前に母を殺せし覺え有やと問ひければなにとばかりいらへて振放し逃けるゆゑせんかたなく討留しなり先ぬき打に打かくれば左の耳の上より頬まで筋違に七寸程切きられて振むく疊みかけて小鬢より月代へかけて五寸ばかり切込深手にて倒る是を見て貫藏は自身番所に入る長松今は喜兵衛と名を改めて今年八月十三日より來年三月まで給金

二兩のさだめて幾次郎が許へかゝへられし者なり
 櫛淵彌兵衛は一橋殿の徒にて神道一心流の達者なり
 貫藏是が内弟子になりて徳力と稱す刀は備中國爲家
 が作二尺七寸計りあり喜兵衛切られしは夕七つ時過
 にて茅町一丁目に住める長江玄意と云へる本道を兼
 たる外科をむかへて療治を加へしかど疵深くして治
 し難しといふ暮過る頃息絶えたり是其夜檢使の間ふ
 に付て彼等が申所なり十六日に予廩米賜はるとて伊
 勢屋嘉右衛門が許にて聞く所なり幾次郎は嘉右衛門
 が北隣にて家々三軒をへだてゝ意義解難し南の方なり其
 前を過れば見せ戸さしてあり鈴木の前にいたれば昨
 日の雨に土ぬれて血痕あざやかに見ゆ

弘 賢
 ますらをが手にとる太刀のつかの間に
 はかなくなりし跡を見しはや

(原本見しはや誤字なるへしとあり)

寛政十二年庚申十月九日七時半時敵討口書

下谷御徒町御徒佐々木忠三郎地借

一橋殿御徒劍術指南櫛淵彌兵衛内弟子

徳力 貫藏 二十八歳

淺草御藏前町札差

伊勢屋幾次郎召仕中働

長松事 喜 兵 衛 四十二歳

右貫藏儀松平陸奥守領分奥州名取郡仙臺領北方根
 岸村長町五右衛門借家善助忤にて父は十五歳之節
 病死十ヶ年已前寛政三亥年まで母と兩人にて小商
 賣致居候へ共手廻り不申候間母相談之上同國宮城
 郡小泉村杉の下百姓七三郎忤長松同年十一月中看
 抱人に頼相稼候處大酒にて身持不宜身上も難相續
 八年已前二月下旬長松へ母申渡し候は不如意に相
 成候間外へ稼付候様申聞差置候處四五日過同月二
 十四日之夜臥し罷在候へば八つ半過と覺しく母う
 なり聲致し候間驚き目覺見候處母を右之方耳より
 頬へ掛け切付長松儀は逝去り候駈付候へ共暗夜に
 て見失ひ母は相果候間右之段領主へ相届け檢使濟
 其後家内取調べ候へば賣溜金十兩紛失金取辻仕り
 候依之其節より敵討可申存念に候へ共在方之儀故
 相分り不申候處御當地へ參り居候よし承當三月下
 旬私儀も御當地へ罷出樂研堀埋地に罷在候劍術指
 南大越主税儀は知人に付便り參り右櫛淵彌兵衛方

へ申込内弟子に相成劍術指南請長松行衛諸所相尋罷在今日彌兵衛忤彌司馬へ相斷淺草觀音へ參詣仕罷歸り候途中今夕七時半時頃同所御藏前片町往還にて敵長松見當捕御役所へ召速可申と存候内振放し逃去り候様子に付拔打に仕止めは刺不申候へ共長松儀は相果申候

一長松事喜兵衛疵改

左り鬢に五分程突疵

壹ヶ所

同方鬢より頬にかけ七寸程切疵

壹ヶ所

同方月代より鬢に掛け五寸程切疵

壹ヶ所

一刀銘備中國柴郡住河野利兵衛尉爲家

長さ二尺六寸八分

右書面之外同所支配名主咄に間候は右貫藏儀喜兵衛を及殺害候上町役人を尋候に付行事罷越候處前書之始末粗申聞候間町法に付先帶刀可預由申聞候へば成程承知に候併し刀は師匠より借物にて拙者刀には無之旨申候に付即刻前書彌兵衛を呼に遣し候處忤彌司馬罷越成程此者は召仕には無之候へ共内弟子に相違無之夫故刀をも貸置候旨申聞候其後檢使に相越候由物語なり但喜兵衛夜五時頃まで存命に候へ共口書之間に合不申相果候由是も杏花園

の筆記にて正しき實説なり都て實説はどれも／＼かやうなる物にて面白をかしき條は作り物語り狂言としるべし

同歌舞妓潤色の話

此藏前の敵討を其當座江戸葺屋町市村座にて近松門喬狂言に取組敵討規厩的きまどと外題して藏前米屋の主を市川八百藏（後助高屋高助）にさせたり是は舊寛政三亥年三月浪華中の芝居にて近松德叟作にて敵討非人實録と云ふ狂言を出したる所芝居出火して北の新地へ引越し狂言其まゝにて敵討郡山染と外題替せし六つ目大坂福島米問屋の主大和屋五兵衛に雛助（小六玉）娘に國太郎敵に山村隣家浪人者に嵐三郎にて坂東甚六春藤治兵衛にて作せし場を其まゝ役割をかへて藏前札差いせや幾次郎方の敵討にはめたる物なり近來今の歌右衛門（翫雀）江戸にても札差の役をし今年浪華にて稻葉雙紙にきりはめ大津屋又兵衛の場は則是にて元は郡山染の世話場より役割のみいろいろと變化せしとしるべし

下谷浪人者爭論の話

江戸下谷にて或浪人蹲りて小便せしを侍二人話しな

がら爰を通り一人の侍浪人の刀に行當りしかどさらぬ體にて過行浪人思ふには此人終に見知らざれば意恨あるべき理なしとは自分の丁寧なりとて跡より走り

付唯今かゝる事候ひしが定めて御心のある事にはあらじ但しいかなる事もやと尋ければ誠にこまやかなの仰詞や只に御免あれと互に慇懃に禮を述て別れたり彼侍の連は一町計り過て相待つ所へ侍追付件の荒増を語れば連の侍以の外氣色をなしそれさまの事云せて聞しや何條討ちすてざるや汝は腰拔なりと散々に語りければ是は何事ぞや互に意恨のなき事なれば討果すべき謂れなしそれに我を腰拔と云ひしは堪忍なりがたしとて雙方抜合ひ火花を散らして討對ひ互ひに手を負ひし所へ以前の浪人町中の譟を聞きかけ付けて窺ひ見しに件の人血刀にすぎりありければこはいかなる故にやと近より事の要を問へばしかくと答ふそれ遁さじと追かけ詞を懸け造作もなく切伏首を引提立歸りは見給へとありければ斜ならずよこび慇ろに禮を盡し我は喧嘩の相手なれば切腹すべしと云へば浪人が曰く其元は某なり然らば互に刺違んと有しに町人打寄押留奉行所に罷出一々の事訴へ

しかば委しく聞得させ上へ御伺ひ有しにや是は喧嘩にはあらず死したる者は亂心なり何れも神妙の事なりと仰有て濟けるとなり

右は寛政二巳年出版の新著聞集の中の一話なり既に此書出版より十五年前享保二十年に豊竹座淨瑠璃に並木丈助作蒔萱桑門筑紫轅二の口狐川の渡し場にて旅人行違ひに浪人の旅指の柄に袖を引かけ折る龜相せし方訖て我刀を拔見する雙方共竹みつなり互ひに浪人のおばうちからし一腰まで賣しろなし人目ばかりの竹刀なれば打合ふ事もならずと笑ふて別れんとす時に加藤左衛門重氏供人大勢召連れ渡し舟の着を見合すうち敵役の家來此兩人を腰拔なりと笑ふゆゑ一旦別れし兩人又立歸りて重氏に刀をかり打果さんと云ふ重氏我家來をぼんと切て兩人に一腰づゝ刀を遣る兩人の旅人は是れ玉屋與次鬼柳一學にて此恩を報せんため四の切にて與次は妻子を御臺と石重丸の身代りに渡す一學大内方に仕へて捕手の役に來て賈物合點にて與次が妻子を引立歸る仕組あり狐渡しの場の仕組は前に云ふ著聞集に出たる一話を潤色せしものなり道理のかなふたる條は故人作者如才なく遣

ふたる事をしるべし

荊萱桑門狂言の話

世に荊萱坊は舊加藤左衛門重氏と云九州の大名發心したるなりと古より云ひ來れどしかとせし書に加藤重氏の姓名記せし物なしとも云委しくは予が綺語文草高野の卷に出せしこそ實説ならめ爰に又閑窓雜話の中に藤澤一遍上人の事跡ありよく似たる話なれば爰に出す一遍上人は伊豫の國の住人河野七郎通廣が次男なり家富榮えて國郡多隨して勇壯なりければ四國九州の間他に恥しめ思ふ事なし二人の妾ありて何れも容顏麗はしく心ざま優なりしかば寵愛尤も深かりし或る時二人の妾雙六盤を枕として頭さし合せ寐たりしに二人の髻忽ち小蛇となり鱗を立て喰合ひけるを見て刀を抜て中より打切りたり是より執心愛念の恐ろしき事を思ひしり輪廻業報因果の理を辨へ發心して家を出比叡山に登り受戒桑門の姿となり西山の善惠上人に逢ひて本願念佛の法聞を學び十一年を経て自智眞坊と名を付それより熊野に參詣し山また山を越て^{中略}普く念佛を弘通し相州藤澤に道場を構へ鎌倉を廻りて念佛を結縁し爰に名を止め修行者の

志おこたらず攝州兵庫の觀音谷に於て正念して遷化あり正應二年八月二十三日生年五十一歳なり弟子僧阿彌陀佛其遺教を守りて一遍上人時宗の流義末世に至るまで退轉なし云々かゝれば今世に云ふ荊萱の發心は一遍上人の事跡をかりし事明らけし又宇治加賀掾の頃の古淨瑠璃鳥羽の戀塚の院本を讀しに架蓑御前と源の渡の中に男子ありて成人の後父は南都東大寺に出家せるよし聞て都より奈良までの道行有て次に東大寺の場にて俊乗坊に出逢ひ今道心に尋逢たきよし告る時きのふ剃たも今道心をとつひ剃たも今道心といふせりふ有て一旦佛門に入りし身なれば親子の名乗もしかぬる内山の上より師の坊教誠の文句あり都て此筑紫轢の大切高野山の通りなり然れば享保に並木丈助が作せし折の鳥羽の戀塚の南都を高野山にはめたる物にて集て玉屋與次と云ふ宿屋の名まで書込たる狂言なり此後荊萱は加藤左衛門重氏の事に定まり歌舞妓にても九州荊萱園と云ふ狂言ありて與次をすべき役者なき仕組ゆゑにや與次の後家に富十郎（元祖名人慶子なり）にてせしもあり今紀の高野學文路の荊萱堂の後に千草前の石塚一基ありて縁起

の一枚摺をよめば筑紫縣の通りを書きたりかゝる作
り物語を定規として名所舊跡となるもをかしき物な
り蒔萱堂へ丈助の木像を納め祖とあがめてこそ能け
れと思はる此高野の玉屋與次芳野下市の惟盛彌助の
すしや伊吹山の麓芥屋久作伏見人形屋幸右衛門住吉
新家の新作皆淨瑠璃歌舞妓狂言より名高き名物とは
なれりける

西澤
文庫傳奇作書附錄中の卷

目次

- 一元文奇說銀の筭
- 一同續兩家落着の話
- 一歌舞妓潤色の話
- 一三十石燈始人名の話
- 一極彩色娘扇の話
- 一富士見月通者墳の話
- 一淀屋辰五郎の事跡
- 一持丸長者狂言の話
- 一心中情死人名録
- 一長崎丸山細見圖の話
- 一角舩取狂言人名録
- 一中興奇賊撰の話
- 一妹脊山婦女庭訓の話
- 一花相撲蝶々紋日の話
- 一東鑑御狩卷の話
- 一素人藝昌水練の話

一近來歌舞妓外題の話

西澤文庫傳奇作書附錄中の卷

西澤一鳳軒李叟著

元文奇說銀の筭

元文四未年浪華吉野屋町辰巳屋久左衛門養子乙之助手代新八後見同町木津屋吉兵衛を相手取江戸表へ出訴して江戸町奉行石河土佐守殿寺社奉行大岡越前守殿の御捌きとなり翌五申年落着までの事を銀の筭と外題せし寫本あり其あらましを爰に出す元辰巳屋久左衛門は攝州尼が崎の産にて蠟燭屋久兵衛と呼ばしが浪華へ來て辰巳屋久左衛門と改名し蠟燭炭油を商賣し段々繁昌して炭間屋となり忝久太郎二代目久左衛門となり娘一人あるゆる同町同商賣木津屋吉兵衛此間脱字久吉を養子掣とす是三代目の久左衛門にて家益々繁昌のうへ正徳元年九月初鮮人來朝の時久左衛門商賣の運に叶ひ買込おきたる炭を直賣して大金をもうけ是より大坂にて指折の身上とはなりけり出入

の仲士に牛の次郎兵衛といふ有て十貫目炭を十六俵壹人にて長堀伊達の屋敷へ一遍に持行し者もありけるされば三代目久左衛門に子五人あり惣領を平三郎(是四代目久左衛門となる)二人目は女子こごよ(白髮町の町人平野屋清左衛門へ嫁す)三男久八元服して茂兵衛四つ橋平右衛門町へ分家す四男庄八は木津屋吉兵衛に男子なく養子となり伯父病死の後木津屋吉兵衛となり末子富五郎部屋住にて辰巳屋に居りしが早く病死しけり三代目久左衛門法體して久鐵と呼ばび隱居せしが四代目久左衛門放埒にて新町の大藏太夫を受出し番頭手代等異見をすれば京へ行き金銀を湯水の如く遣ひければ久鐵勘當せんと云ひしより志を改め大藏にも暇を出しおてるといへる妾を入れ至極實體となり妾にお時雨じりゅうとて女子一人出來し後は始終多病となりける然るに三男木津屋吉兵衛は大坂廻舟年寄まで仰付られしかど首切難といふ腫物出來て金銀にあかせ療治したれども終に相果て跡を立つべき一子なければ二男茂兵衛兄なれども父の出所なれば家督を繼ぎ木津屋吉兵衛と改名す隱居久鐵は中風を煩ひ是も程なく死去しけり時に吉兵衛は平右衛門

町宅には手代共には入質を取らせ其身は炭商賣と兩家を司りお里といへる妾を平右衛門町屋敷におきて寵愛し綱次郎といふ男子をもうけおさとの親を隠居させ平生學問を好むがゆゑ高慢氣違のやうになりしを醫療手を盡しやう／＼少く快氣しけるが本家辰巳屋久左衛門は若きより姦亂放逸なれば長命の程心元なしと和泉佐野唐金與茂作忤乙之助を娘お時雨と後々娶はせ家相續させんと養子とす與茂作數十人の手代の中より新八といふ器量ある者を付けて送る久左衛門悦び新八を番頭格として乙之助の附人と定め幼少なれども乙之助養子の事を早速町内へ弘めしに其翌享保十九寅の夏久左衛門病死しけるゆゑ乙之助の名前となり木津屋吉兵衛は幼少の乙之助がためには伯父なれば後見となりしより學問高く元より烈しき氣性なれば自ら奢に長じ親久鐵菩提のためと號し新難波町欄（掛カ）屋敷の中へ見事なる閤堂を建て下を一面の敷瓦とし父久鐵が木像を本尊にする道の左右へ石燈籠八九十建つらね其壯觀耳目を驚すばかり其上名ある儒者僧俗を集め日々精進物とはいへども數百人を養ふ其物入幾何といふ事なし辰巳屋番頭共異

見をすれば大に怒り我孝心の道を以て慈悲善根を施すを妨るは不忠不孝なりと云ふ此事御役所へ聞へ吉兵衛御召にて本家に於て御ゆるしも受ず閤堂を建て僧俗を集る事御制法を背く段言語同斷なり急度御咎仰付らるゝ所なれど孝行なりとの心得違ひの儀故御慈悲を以て其分に差置るゝ條右の堂今日中に取拂申付る以後相愼めと御呵りを受吉兵衛殘念とは思へども閤堂を其日中に取崩しければ久鐵の木像置所にこまり金藏へ入置ければ久鐵は金の番人なりと興じける吉兵衛御しかりを受け閤堂を潰せしを無念におもひ町人の悲しさ仕方なし京堂上の家來となり何事を企る共役所より手出しはなるまじ其時今の無念を晴すべしと幸ひ烏丸大納言殿は代々御用を達す事なれば金銀を送り諸大夫と懇意に成り金銀にあかせ鳥居圖書と名を受け寶物と致度とて御裝束并に御裏様の裝束の古を拜領し夫を手本に新敷を二品共調へ歸宅し是より彌奢増長して元文元年の正月拜領の裝束を床に飾り新しく仕立たる冠裝束を其身は着し妾おさとにも女官の衣を着せ堂上の規式をし本家辰巳屋の金銀も自由に遣ひ前代未聞の奢誰知らぬ者もなく評

判とはなりぬ其上彌儒道神道に傾むき父久鐵兄久海が命日にも辰巳屋へ來り佛前へも魚肉を備へ家内の者にも喰ふべきよし指圖するに主人の命日なれば精進仕り度といへば吉兵衛立腹して善惡共詞を背かば暇を出すべしと云に是非なく食すれども乙之助附の

番頭新八は是を恐れず親の日に精進するを誤りとは存せず乙之助お時雨には堅く精進させけるを吉兵衛怒りて新八を早々佐野へ歸すべしとあるを番頭共段々挨拶して其日は其儘濟しかど是よりして吉兵衛は新八を憎み我辰巳屋の忤なれば辰巳屋木津屋兩家を納るとも誰か點の打手もなき筈新參の手代として我を侮りたる仕方不届なり金銀に事かゝね其態と辰巳屋の金を自由に遣ひ彼等に見せしめんと金子入用の由をいひ取出させ新町島の内にて末者藝者を集め金銀を蒔ちらしけれ共吉兵衛が上に立つべき一家もな

く誰有て諫る者なければ心の儘に振舞ひ乙之助お時雨も家來の如く阿り付け龜末なる體たらくなれば番頭新八は此儘にては終に辰巳屋退轉に及ぶべしと深く嘆き番頭をも手代等と相談し後見をあげさせんとすれども吉兵衛が威勢に恐れ相談相手もなければ力

及ばず新八一人命にかへて稻垣淡路守殿へ一通の訴狀に吉兵衛後見退き候様認め願出ける是元文四未年二月の事なり今嘉永三戌年まで百十二年となる昔がたりなり

同續兩家落着の語

淡路守殿御病氣にて家來馬場源四郎司り捌ける上常々吉兵衛と源四郎は茶花の友にて懇意の中なり公事功者の中田勘平といふ浪人をかたらひ吉兵衛より返答書をさし上對決と成りしかども吉兵衛方は勝公事となり新八は一人の願ひにて後見を退けんとする段不届なり殊に吉兵衛放埒と書上し事主の非を上て訴人同前なりと新八を呵り裁許相濟みけれど新八は獨り残り達ての願ひに源四郎裁許もどきの科人なりとて新八を牢舎させけり辰巳屋一家町内は新八が忠心を感じさまゝお詫申せしゆゑ一月計り過て出牢し辰巳屋へ歸りける吉兵衛早速新八に逢ひ我後見をそねみ理を非に申せし天命思ひしつたるか牢舎したる者先祖久鐵久海への穢なれば此家に差置く事ならず今日中に泉州へ歸るべしとあるに新八も吉兵衛が學問立に表を飾り内心は辰巳屋の身上を横領せんと

工みゆる此度も金銀のまいなひにて勝たる事を遠慮もなく云ひければ吉兵衛憤り強く叩出さんとありけるを新八云ふには木津屋吉兵衛は主人ならず乙之助殿お時雨どのこそ主人なれば久海より譲られし掛屋敷身上諸共佐野へ引越すべし我家來同前に叩出さんなどゝは慮外千萬なりとの理屈にさしもの吉兵衛も閉口し御役所へ訴へ是非を以て逐歸さんと云ふを兩家の番頭段々云ひなだめて中の島の上田三郎左衛門は吉兵衛と懇意なれば中人に入り新八に理を解きやうく泉州へ歸しける新八與茂作に委細を告げ所詮大坂にては埒明くまじ江戸表にて出訴せんと主人與茂作へ委しく申置き大坂へ來て辰巳屋一家番頭を集め江戸表へ行くべきよしを告るに同志の者八人あり是も共に行くべしと云へども先新八一人下りて其上の様子次第にて下るべしと元文四年六月上旬に新八江戸へ着淺草久保屋助右衛門方へ着し御町奉行石川土佐守殿へ出訴せしかども大坂にて一旦御裁許相濟たればと御取上なく八月に至り土佐守殿直に御申あるは辰巳屋乙之助下人新八とあれば後見吉兵衛も主人なり下人として主の訴人は曲事なり願書には辰巳

屋を追出され泉州へ歸りしとあれば主従の縁は切れしを辨へず不届至極の馬鹿者めとお呵りを受け新八始めて心付御前を退き願書を泉州佐野岡部美濃守殿領分唐金與茂作下人新八と書改め御評定所へ出訴に及び九月に御老中松平左近將監様より寺社奉行大岡越前殿にお指圖有り越前守殿お掛りとなり岸和田の城主岡部美濃守殿にも御聞合有て新八召出しの上お尋あり追て御沙汰有るべしと願書は留りければ新八旅宿より大坂へ書狀を認め送るがゆゑ同志の番頭八人十月下旬に江戸へ着八人口書差上御評議有て十二月二十日大坂吉野屋町木津屋吉兵衛年寄五人組お召にて六日の道中急御召と有ゆゑ吉兵衛甚驚き馬場源四郎方へ告ければ江戸南八丁堀鵜野長順といふ醫師へ頼みの狀を付け中田勘平よりは親類島田作太夫と云ふ浪人へ頼の狀を付け賄賂の用意金五千兩挾箱に入れ吉兵衛は通駕上下三十九人十二月二十六日出立して翌元文五申年正月三日江戸本石町壹丁目大黒屋小兵衛方へ着直に着届濟其後吉兵衛を御召有て近々對決申付ると不首尾の體なりければ彼作太夫を始め長順其外深川永福寺の住持智眼和尚弟子賢道茅場

町宿屋勘兵衛等は元より吉兵衛の近付なれば呼集め内々役人衆中へ賂ひを送るべしと皆々の奸智拵事に計られ五千兩の金を悉く蒔ちらし又もや大坂へ五千兩金子を送るべしと取寄せそれも皆掠め取られけり吉兵衛の留守中妾おさと手代治吉と密通し有金多く盗み出させければおさが父伊右衛門は是を苦にして首を釣り相果けるとぞ扱三月に至り吉兵衛新八兩人に對決仰付られ重ねて越前守殿お尋ねには吉兵衛事町家に於て堂上の規式をし公卿の裝束を着せしはいかにと吉兵衛は烏丸家より拜領して床に飾りしのみと答へけるにそも此事の始より京太坂にて聞合せ置たり其節京都にて新しき裝束を仕立させしはいかにと嚴敷お尋に閉口す是故吉兵衛は入牢となり夫より泉州唐金與茂作大坂辰巳屋乙之助別家一類挨拶人上田三郎左衛門もお尋にて常々吉兵衛方へ心安く出入して毎度金子を貰ひし輩まで残らず懸合にて御呼出し有ければ其町々騒動し大坂發足の者二百餘人かゝる大行なる公事は三都に珍らしく江戸本石町一丁目二丁目は悉く木津屋辰巳屋懸りの旅宿とは成りけり木津屋手代與助は吉兵衛義は烏丸殿の家來なれ

ば病身者なり何卒出牢の段願出るに此義は腰押なるべしと越前守殿仰出され宿屋勘兵衛鶴野長順の兩人召出され白狀のうへ入牢と相成り作太夫智眼賢道等も召出され拷問のうへ吉兵衛に彌御にくしみ強く大坂表稻垣家來馬場源四郎同三郎兵衛浪人上田勘平を急に召れければ勘平は木津屋入牢と聞くより腹切て死し稻垣殿馬場兩人を網乗物にて江戸表へ引かれ再應御吟味のうへ吉兵衛儀辰巳屋を横領せんと謀計を構へ官位裝束を取扱ひ堂上の家來と申一身を二名に用ひ金銀を猥に仕過分の奢上を恐れざる段不届に付死罪仰付けらるべきを御慈悲を以て三ヶの津御搆にて追放木津屋の家督綱次郎に仰付られ兩家手代共事なく上田三郎左衛門印子意義不通の判形持參せしを呵られ以後取扱無用馬場源四郎島田作太夫は打首馬場三郎兵衛似せ與力同人六人は江戸追放智眼賢道長順勘兵衛は大金を銜り取りし科にて江戸中引廻し獄門小池相摸殿出家をかたらひ町人より助力を受し科にて切腹稻垣殿は病中ながら家來の取計らひ存せざる段不調法と有て牢知小普請入乙之助お時雨は夫婦となり辰巳屋相續致すべし木津屋綱次郎喜三郎と改名し

て家督を繼ぎ木津屋へ出入し者悉く御呵りにて相濟唐金與茂作は其方より以後辰巳屋へは我儘の計らひあるまじく新八其外同志八人の手代共同志の咎めあるべき所忠義にめんじ差ゆるす乙之助のためには忠義の者共なれば随分不便を加ふべしと一件悉く相濟み大坂へ立歸り吉兵衛は天津高觀音にて借宅し手代共より合力を受けその後病氣にてひそかに木津屋へ歸り相果おさは放埒なるゆる剃髪させ天王寺巫子町へ庵室をしつらひ入置乙之助勝利を得しは偏に新八が忠義ゆる過分の別家をさせんと云へど利欲に拘らず泉州へ身退きて塾居同前に暮しけるは誠に町家に於て珍らしき忠臣と皆々譽めぬ者こそなかりけれ

同歌舞妓潤色の話

此年より三十九年後安永七戌年浪華角の戲場にて作者並木五瓶棹歌木津川八景と外題して盆替りに出す其時の番附は次に出す宇治屋七兵衛(木津屋吉兵衛事)腕次郎兵衛(仲士牛の次郎兵衛事)番頭勘助(番頭新八)炭屋後家お里(久左衛門妻おてるの事)な

どそれ〴〵に名前を替へ序幕より四つ目河口番所裁許の場までは此本文の通りにて手代勘助は侍となり木津勘助となり林三十郎は渡し守となり兩人役目替るより一つ狂言ながら先切狂言となるなり都の異より名を宇治屋と替へ其餘の人名は木津川安治川の地名に合せ木津の勘助林三十郎と拵へし名なり此時の看板に樋の口ありて此前に三十郎着流し一本指にて竹棹にて筏をさし傾城淺妻も着流しにて此筏に乗り居る樋の上堤に木津勘助肌脱にて刀を持あれの姿に立居る圖なり梅幸花桐珉獅三人の人形なり今木津勘助と云男達にても有し様に心得し人もあるべきが唯勘助島の開發人にて外にあらん様なし天滿天神祭お迎ひ舟に木津勘助の人形あるは此木津川八景の時の雛助の木偶看板を其儘に寫したるなり尤寶曆三酉年豊竹座淨瑠璃に雄結勘助島といふ狂言はあれども三十郎渡し勘助島と地名をよせて木津屋の一件を取組しが故に木津勘助と呼しは此時よりの事なりとゑるべし

安永七戌年七月二十九日より新狂言

角の芝居

座本 小川吉太郎

附り今此所にて出合の印は銀のかんざし打ぬいた紋は即ち丸にもつこう

勘助嶋

三十郎涉

棹歌本津川八景

新田 六反

井に後此堤にてうちあふかためは金拵の脇さし取組だ盆と正月

こしもと	さくらぎ	あらし新之助	かぶろ龜之丞	中山富三郎
同	ちどり	中山爲之助	こしもとま	中山萬藏
同	小よし	藤川きく松	勘助子勘	中村萬三郎
同	さらしな	あらし千太郎	船頭傳兵衛	坂東吉松
同	さえだ	あらしきの助	やりてす	中村傳九郎
たいこ持	一	尾上丑之助	やっこ半	中村仙助
同	喜	花桐伊三郎	同	中田善右衛門
手代	兵助	小じま和三郎	玉澤や女	中山三郎
かこの	又兵衛	大谷彦十郎	入方八兵衛	澤村五郎
たいこ持	喜	嵐權十郎	桂順	中山東藏
代官	小文次	山下四郎五郎	住吉や權	中村友十郎
宇治屋手代三	助	市山三津藏	入江圖	三村傳藏
早野彌藤次	助	中山乙五郎	入江圖	藤川十郎兵衛

千穂萬歲樂叶	狂言作者	同狂言作者	同狂言作者	狂言作者	林三十郎	腕の治郎兵衛	けいせい浅妻	仲居おつる	炭や後家お里	佐次助右衛門	手代與助	けいせい三浦	三十郎女房お浪	手代文六	三十郎娘お品	けいせいあふよ	仲居おみよ
	筒井半二	並木新藏	津打亭助	長谷村阿契	中村阿契	尾上菊五郎	藤川八藏	花桐豐松	花桐豐松	三桐豐松	三桐化人	藤川山吾	藤川山吾	桐山紋次郎	嵐松次郎	小川千菊	萩野三代藏

世話人	頭取	狂言作者	宇治屋七兵衛	同弟幸助	木津勘助	米屋作兵衛	同忤佐市	鹽田三左衛門	早瀬兵藏	堀江万右衛門	榊屋太右衛門	淺山源十郎	勘助女房お口	馬士の八	作兵衛女房お照	仲居おげん
中山百治郎	中山音五郎	並木五兵衛	小川吉太郎	小川吉太郎	嵐雛助	嵐雛助	尾上新七	尾上新七	柴崎林左衛門	柴崎林左衛門	柴崎林左衛門	中村十次郎	榊山四郎五郎	山中平十郎	山中平十郎	嵐雛次郎

三十石燈始人名の語

安永元辰年角の芝居二の替り狂言燈始の作者は並木正三にて是はさして實説に基き工みたる狂言ならず唯淀川筋にある地名をよせて平太の番所源八の渡と開發人の名より思ひ付て關口平太神道源八と武士の名に作りもうけて淀與三右衛門と云ふ捌き役の相手實惡の名に事かきて河村瑞軒は此川筋を浚ひし縁あれば敵役に遣ひしより婦女子は惡人のやうに思ふこそ瑞軒の不幸なるべけれ此人古今獨歩の才子にて始東武神田の產十右衛門と云ふ車力なりしが明暦三年江戸大火の時僅かの金を懷にし僕一人を雇ひ供に連れ夜を日に繼て信州の山路に至り材木多く持る家に行き材木を求んと咄のうち其家に小兒あり十右衛門懷中より小判一枚取出し火箸にて穴をあけ紙燃を通し輪にむすび小兒に與へしより亭主驚き並々の金持にはあらじと十右衛門のいふまゝに材木を送りけり十右衛門一々材木に焼印を打江戸へ歸りて價高く材木を賣り夥しく利を得是より家富榮え諸大名方へ立入して普請の請負をし他より價安く美麗にして無難作なる事皆十右衛門が才智より出る所にして後河村

瑞軒安治と呼けり或方へ召れし時官名はしきよし申ければ安き事なり兵部卿と名のるべし併し假名にて書くべしと仰せあり瑞軒かなにて書見ればひようぶぎやう則日雇奉行といふ事なりとて大笑ひして退きしとぞ晩年淀川筋土砂堀浚の請負となり土砂を殘らず川口浪除山に積世の人河村の功を賞して瑞軒山と云川の名に我名乘安治を呼て安治川と今に呼など世に勝れたる才子ゆゑ俗に瑞軒を山師の棟梁なりとも云ふものあれど水脈に委しきは角倉了意にもおさく劣らぬ人ながら芝居狂言にて謀反人にせられしは此人の不幸なるべし三十石狂言なつてより今戊年まで七十九年とは成りけり其後に此世界の人名を用ひ花燈淀川話けいせい戀燈夏粧淀川堤との増補狂言もありけり

極彩色娘扇の語

寶曆十辰年七月二十二日より始たる極彩色娘扇の淨瑠璃は竹本座にて二步堂と三好松洛の作にて朝比奈藤兵衛の疊と寺子屋兵助の盲人と兄弟因果の寄合は誠に古今の類なき作にて大當りせしとぞ此中にお夏清十郎を題とす是はいと古き心中物にて極彩色より

五十二年前寶永六丑年にお夏清十郎五十年忌歌念佛と云ふ近松作の淨瑠璃ありお夏は播州姫路但馬屋九左衛門の娘清十郎は手代なり然れば百年餘になる人名なり又男達喧嘩屋五郎右衛門は元祿年中五人男の頃有りし俠者なり是に朝比奈藤兵衛と云へる男達を書入しは思ひよらぬ事なり前に云ふ木津屋辰巳屋の先祖尼ヶ崎に住居の内青山侯(尼ヶ崎城主)の家老に朝比奈藤兵衛と云有り銀の弁にも有て然も大祿取の名なるを俠者として豊にまで作りしはいとをかしからずや上卷男達見立番附になき上方の事ゆる江戸の人はしらぬ筈なれど以前男達の多き折に此同名の俠者ありしか不知又是より十六ヶ年已前延享二丑年竹本座にて七月十六日より始し夏祭浪花鑒は並木千柳竹田出雲作にて此時より人形に帷子衣裳を着せ始しと云今まで百六年になる狂言なれど夏の頃はいつも興行の度に當りを取名狂言也此團七九郎兵衛一寸徳兵衛釣船みふと云る俠者の事跡何の書にも見當らず田島町に九郎兵衛の住たる家の跡ありと所の者のいへども淨瑠璃の文談より附會して云ふなるべし又釣舟の内は高津地下町又清七(本名玉崎磯之丞)手代

奉公する道具屋内は本町舅殺しは長町裏と現に町所淨瑠璃に出しあれば少しは形のありたる事明らけしお辰が焼鐵を當て面體を損ふは天和年間白翁和尚に法を受んと火攪を焼き面を焼爛したる丁然禪尼の行狀を書込しものなり無宿團七堺に住し折の名にして彼地を拂はれ大坂にて九郎兵衛と改名して魚賣をすれど以前の名と兩様に呼ばるゝものからそれを通り名とす前々の編に釋く岩井風呂の人殺佐助も元は堺の者なれば無宿團七の名をかり團七茂兵衛と名を附したる者なり

富士見月通者墳の話

天明三卯年角の芝居にて五月狂言に出せし富士見月は並木五瓶作にて以前博徒に名高き大工與兵衛惡馬の佐吉等を始新町槌屋の抱綾鶴太夫機關師竹田近江杯を取組たる世話狂言にて此綾鶴は誤つて借振の折放屁せしを其頃口の惡き客端唄に作り音は幾瀬の浮名にひくとの文句あり此狂言には幾瀬里次郎とか呼てやつし役にし合方は綾鶴太夫なり惣體の仕組夏祭によく似ていと面白き狂言なり元祿中五人男御仕置にあひし時阿波座讃岐屋町に道具屋與兵衛と云ふ

者その頃の喧嘩買に脇差をかし群集の場所にては其輩を後楯とせし科にて浪華の地を拂はれしと云與兵衛と此大工の與兵衛は別人なるべし又寶永四亥年四月に梅田にて心中せしおかめ與兵衛と云あり竹田出雲作にて卯月の紅葉と呼ぶ竹本座にて淨瑠璃とす是は久太郎町心齋橋角笠屋と云ふ道具屋の娘お龜(十五歳)養子聲與兵衛(二十一歳)なり又安永二巳年七月十六日朝蚤の心中とて有しを直に盆替りに角の芝居にておかめ與兵衛の名をかり七月二八曙と云ふ外題にてお龜に雛助(後立役小六玉)與兵衛に小川(元祖英子)是又古今大當りせしとぞ與兵衛は御堂前港屋の息子嫁は座摩の前鰻汁屋の娘にて至つて肥滿せし大女然も懷胎して七月なり男はひがいきなる優男にて蚤の夫婦の心中なりとて名高かりしを雛助小川の體に合せ難波鐵眼寺門前道行の跡心中の所雛助方より小川をはげませ刀を持そへさせ我胸へ突込せる小川恟々して後の高土手へ跡飛に飛上り南無あみだ〴〵と所體を捨てふるひながら拜む所誠にかうあるべし英子は古今の名人なりと其時の評判記にも載り古き見功者は後々まで覺え居て賞たる事聞おぼえり

故に與兵衛と云へば道具屋與兵衛と呼べども皆別人にして其時々仕組に名のみかりたる事をしつて一つに混する事なかれ

淀屋辰五郎の事跡

寶永口年酉五月上旬浪華北濱の町人淀屋辰五郎奢に長じて莫大の金銀を費せし科にて家内闕所となり辰五郎は城州八幡へ引退き古く持傳へたる寶を始め有金地面古證文まで残らず闕所仰付られし事は護國女太平記に委しく出たれば改めて云はす或書に實説なりとて有には淀屋辰五郎の家滅亡の起りは辰五郎遊里に通ひ世間の取沙汰をも憚からず家内の納りも僥略なりければ母是を愁ひて兼て親しき老醫あり此醫者利害を解き辰五郎を諫めければ合點行しか遊戲を止まり母大に悦び老醫に禮詞を述べ猶謝禮として家に持傳はる茶壺を送る此老醫茶事を好まず商人に賣り夫より諸所の手に渡りて流布する内公役人何某といふ者此壺の事を公聞に訴へ此壺先年公儀より御尋の茶壺也其時は手前に所持仕らずと偽りかくし置候段不届なりと御咎めあり其外彼是に依て辰五郎は追放せらる依て家滅却しけるしかし此壺ばかりにあら

ねども畢竟此壺御咎の第一となりし事時節の不幸なり辰五郎は後三郎右衛門と云元來八幡の侍なりと云々は實説に近かるべし彼忠臣藏夜討の年より第四ヶ年目なり又前に云ふ木津屋吉兵衛追放になりしは淀屋闕所より三十五ヶ年後の事なり何れも豪商の家柄滅亡するも奢侈僭上の咎なり彼近松平安堂が淀屋の事跡を書て金の冠着ぬばかりしやくは持病に有とかやと編りしは何と云ふ淨瑠璃に出せしや外題しれず淀鯉出世の瀧徳と云近松の作には江戸屋勝次郎茨木屋吾妻として癩は持病の文句見當らず近松翁死せしは享保九辰年なれば淀屋滅亡より二十年後なり又木津吉の滅亡は近松歿して十五ヶ年後なれども金の冠着ぬばかりと奢の文談は淀屋辰五郎の廓遊びには似ず木津吉が堂上の規式をせしにかなふと云ふべし察するに近松の文談を聞覚え後木津吉が其奢侈を行ひしか橋庵漫筆に近松の草稿を見て感せしと云穗積以貫（業は醫半二が父）は俳諧師半時庵淡々と共に木津屋吉兵衛が幫間なりと銀の筭に有り遙か後安永二已年七月北の newly 芝居にて近松半二（穗積以貫倅前編に委し）作時代話繪世話模様いろは藏三組盆は替外題難波丸

金鶏とも有て忠臣藏と柳澤と淀屋辰五郎を混じ合せたる狂言なり手代新兵衛と云へる世話立役は木津吉一件の折の新八より思ひよりて書入しものなり天明七未年盆替り角の芝居にて仇討寶永記と外題して此五月假名手本忠臣藏（江戸中村仲藏秀鶴上り出勤志賀山一流三番叟の祖）大當りせしゆゑ其後日狂言として寶えん祭りは見事な事よちと又此世のうさはらしと云はやり歌を元として付たる外題なり此中に淀屋與茂四郎倅三郎兵衛酒を飲家内土藏をこぼちあはれる場あり是は其頃岩城ます屋をこぼちたるを狂言に仕組み名は淀屋をかりたるものなり（近來岩木屋藤三郎と呼ぶなり）又寛政五丑年中の芝居にてけいせい楊柳櫻と外題して二の替りに出せしは彼女太平記を潤色して柳澤と聞せし物にて淀屋辰五郎は舊榮飛驒頭の落胤にて父の謀反を諫めんため態と放埒を盡し川口の新田へ拂はれ融の大臣の鹽竈を移し遊興す其跡を前内裏島（本名は前垂島）と號仕組にて是は専ら木津吉の奢を辰五郎に混じたる者なり果は本妻妾姫を三方に追せ八幡の領地へ拂はるゝを脚色めり是を淀屋辰五郎の狂言にては慥かなる仕組といふべ

し

持丸長者狂言の語

爰に享和の頃堂島裏町に住居する尼ヶ崎屋庄九郎と云ふ盜賊有て玉水町加島屋の土藏へ入て金子五千兩奪ひ取りし事あらはれ引廻しとなりし事ありそれを直に堀江市の側芝居にて持丸長者金斧かんとくと外題して淀屋新兵衛故主辰五郎のために淀屋の金藏へ盗みに這入る仕組にて芝居の看板に土藏の屋根を飭り新兵衛頼冠り尻からげにて番傘をさし黄金の鶏を抱へ居る所を出せり外題割書を土藏の白壁へ落書のやうに書きたり此實説とて予幼き頃その邊の人の話に聞儘爰に記す虚實はかり難しといへども近き事なり實説に遠からじとおもふ加島屋より藏屋敷への納金五千兩には宵日より燈明をあげ金藏に飭りありと出入の仲士が髪結床にての咄を聞て其夜ならでは盗み難き金なりと然も其夜大雨の只中庄九郎は傘をさし忍び入り獨りにて五千兩の金子を持出しとは大膽不敵のみならず力も相應にありしと聞えし元の屋根に歸りし所傘の邪魔なりと屋根より横堀の川中へ投込しが折ふし干汐時にて濱の石垣にとまりしもしらず盜賊

は歸りしが其夜加島屋主人は屋敷振舞有て島の内足代屋へ來り翌朝早く駕にて歸り駕舁は南へ歸りがけ濱に落ある傘を何心なく拾ひ駕に付て歸り足代屋長左衛門に傘を拾ひし事を咄してかへりぬとぞ足代屋の主はいつも駕の歸りを待受け夜前の禮に見舞旁行くを定例なれば玉水町へ行きし所前夜屋根越しに盜賊入て五千兩金子を奪取られし噂ありさるにても大雨に屋根をめぐり土藏へ忍び入し事を驚き屋根を吟味せし所金樋の内に金子一包落ち有りしゆゑ此所より入たるとの評議を聞き足代屋の主人今朝駕かきの傘を拾ひ歸りし事を告ぐるそれこそよき手掛りなりとて取寄せ見る所尼庄との印あるゆゑ役方より段々吟味の上尼ヶ崎まで尋ねし所彼地は傘も骨組等違ふよしにてそれより大坂を吟味の所堂島に尼庄といふ者あれども俠氣ある男にて中々盜賊などすべき人柄にあらず傘はいかにも尼庄の傘なれども借傘とて諸所の者に借す事ゆゑ確と證據とも成難し誰に聞てもあの人に限り盜賊との疑ひは氣の毒なりと有て役方さへ遠慮してむざとは吟味さへ得せざりしとなり其頃名うての濱の何某かれが宅へ行借傘の事なれば若

し誰にても借手の内心當りの者はあるまじくやと相談に行きしに誠に迷惑なりとの返答に詮方なく歸らんとせし時先づゆる／＼となされよと挨拶して手水に立けるが天命遁れがたき事にやありけん裏口より逃んとするを表に待受たる役人支へしかばいかにも盜賊は我なりと早く白狀に及び戸棚より金子を取出し手下同類とてもなく着物を着替ゆる／＼酒食の上召捕れしとの事誠に前後に類なき賊なりとて取沙汰よく入牢も僅かの日にて引廻しのうへ打首となりしとなり後に近付の者の噂に翌日風呂屋にて加島屋へ盜賊入し噂を尼庄も共々してありしが濱に傘の捨ありしが證據となり吟味最中なりと聞て其時尼庄はつとせしが顔色かはり其儘ついと歸りしが扱は其時始ておもひ當りしゆゑなるべしと又尼庄常々北の新地にて茶屋遊びの節馴染の藝子共いつにても暗三重の三絃をひけば直に頬冠り尻からげにてお頭首尾はコリヤシイと俄狂言を一藝のやうにせしが跡にて思へば盜賊持前なればさもあるべしなど取沙汰して賊ながらさせる惡事せし事を聞かねば惜しみしとぞ其頃京と大坂の狂歌問答に京より三千兩の藤田大助と云

へば大坂より五千兩の加島庄九郎と贈答の句ありけり此尼庄を淀屋新兵衛とせしより後々は淀屋の狂言と混するものも多かるべしと爰に演る者なり前に出せし復讐俠者の見立番附あるからは盜賊の名高き者を見立番附も出そうなる者なり熊坂長範袴垂保輔を東西の大關として勸進元は石川五右衛門なるべし中にも自來也は唐山の小説我來也より思ひもうけし作り物語なれば格外にして日本左衛門、稻葉小僧、柿本金助、曉星右衛門、玄海灘右衛門など小説稗史歌舞妓淨瑠璃に遺る名を拾ひ近くは此尼庄大助東都の鼠小僧などまで書集めなば實に濱の眞砂と共に盡る事あるまじ是に繼て番附に出すべき者は心中情死の見立なり是又三都の淨瑠璃歌舞妓に遺るもの少なからず元よりは是に位はあるまじく世に名高きを土産として名の高からぬを末の段とせば見るに興あらん是らはいらざる世話ともいふべけれど著作道の一癖なれば思ひ出るにまかせて次に出す笑ふべし／＼

心中情死人名錄

世に男女對死する事を心中とも情死とも云ひて多くは父母の戒に逢て己が非の改め難きを悔るか互志の

叶はざるより起る所にして戰國の砌には絶て聞かぬ事なり又此太平の御代となりても遠國邊鄙には聞ぬ事にて譬へたまゝ有とも其所のみの噂にて都會の地まで沙汰に及ばざるかはしらねども先人口に膾炙するは三都の者にかぎれり是を世上には鈍根なる男よ愚なる女よと彈指して笑ふ者もあれど凡そ眞實の情は死をもて驗とするより切なるはなし情死のもの志は殉死の者に似たり然れど大道を曉りて眞に仁義の眼を開かば何ぞかゝる不正の死を慄とせん故に天下には大道を示し給ひて殉死を禁ず況や男女の對死をや然るに其大道を明めずして只私情の向ふ所に切なる者天理を私欲に昏まし仁義を名利に害するに至る事實に過て實を失ひ正を欲して正を背き信を邪路に守る事憐むに堪たり是を譏る人は己が色に溺れざるを賢しとおもふべけれども其薄情より忠孝の道も文武の藝も至所需る事有るべからず云へば云はるゝとて人を譏り己が不實を顯す事恥をしらぬに似たり渡り奉公する者の殉死を嘲り遊女を欺て財を貪る人の對死を譏らんは五十歩を以て百歩を笑ふには非して百歩を以て五十歩を笑ふと云ふべし情死せるも又

契約の違ひしを怒り無理殺せるも實説を正さば種々あるべしまづ誰彼と浮名立たる人名を時日新古に拘はらず云はゞ枕久松山、彦三小吟、お俊傳兵衛、お夏清十郎、夕霧伊左衛門、三勝半七、お花半七、お初徳兵衛、お房徳兵衛、お万源五兵衛、おもと龜松、お三茂兵衛、お龜與兵衛、小万與作、お梅糸之助、揚卷助六、おきさ次郎兵衛、梅川忠兵衛、おさが嘉平次、お島市兵衛、吾妻與次兵衛、小女郎宗七、小春治兵衛、お千代半兵衛、お吉空月、お仲清七、お染久松、お七吉三、彌市お高、おらん源六、小紫權八、お染半九郎、小稻半兵衛、いろは新助、おその六三郎、梅川新七、おはん長右衛門、お駒才三郎、小糸佐七、小三金五郎、お賤文藏、お菊幸助、花扇甚三、小女郎新兵衛、お妻八郎兵衛、八橋治郎左衛門、小菊半兵衛、錦木口三、尾上猪太八、浦里時次郎、なんど實に枚舉すべからず猶委くは此程予が著述當世榮花物語に出す好者は是を見給ふべし

長崎丸山細見圖の語

俗に唐人殺と云ふ狂言は明和元申年朝鮮人來朝して東武より歸路浪華北の御堂を旅館とする事定例なりとぞ此時の通辭役人鈴木傳藏なる者道中にて正使五

齊官を恨む事有て御堂に於て切害して逃去八町目寺町正徳寺の住持は知音なりとて暫しかくまはれ居たれど御吟味厳しければ池田へ落けるを終に捕はれ九條島竹林寺にて御仕置になりしとぞ鈴木物語といへる寫本に出たり是を歌舞妓に潤色して長崎丸山細見圖とも舉禪廓大通とも外題を呼て狂言今に遺れり通辭香齊典藏正使の名代となり相良の家來鈴木傳七に討るゝとし清徳寺に匿はると仕組めり後漢人手管始と云ふ増補狂言あり寛政八辰年の春角の芝居にてけいせい花大湊と云る狂言は傳七中山典藏小六を殺し立退典藏跡にて西天草をくはへ蘇生する狂言なりしが餘り當らず日數僅かの興行にて止けり

角觥取狂言の人名

前編に云眞世話氣世話といふは心中情死男達の類なり其中に角觥取行司等あり是もすこしく爰に云はゞ秋津島國右衛門、鬼嶽洞右衛門、木村庄九郎、岩川次郎吉、鐵ヶ嶽陀々右衛門、雷電源八、八十島吉平、千羽川吉兵衛、白藤源太、明石志賀之助、仁王仁太夫、早川又兵衛、姥吉兵衛、八岩源五郎、初花傳七、斧川大助、本町丸綱五郎、半時九郎平、濡

髪長五郎、放駒長吉などは又數ふるに際限なかるべし世話狂言にても角力取と男達とは紛れ易く既に昔米萬石通にて見る時は濡髪は角力取なれど放駒は角力取にあらず大寶寺町米屋の倅にて所謂新町ぞめき東都にて云ふ地廻りの喧嘩買なり後雙蝶々曲輪日記には早素人角力のやうに仕組めり文化の始頃浪華日本橋詰宿屋にて其頃の上取荒馬に意恨有てかたやの角力取大勢込入しを荒馬の弟子九十六是を切殺せし喧嘩ありけり直に竹田芝居にて關取千兩幟の岩川鐵ヶ嶽の名を假りて狂言にせし事あり都て新奇の名を呼ばず昔より在來りたる名を借るがゆゑ稗史小説にも俠者の名を角力とし角力の名を侍と作するがゆゑ後々は混じて紛らはしくなるとしるべし昔の俠者に達の小六と云ふ者有て淨瑠璃にも關東小六東六法關東小六丹前姿など、外題あり六法丹前と云ふは江戸吉原舊御府内に有し頃丹後侯の屋敷前に浮世風呂とて湯屋あり爰に抱への女郎ありて此湯屋へ通ふが故丹前といふ又六法とは長大小を十文字にさし雙の手を振て歩行がゆゑ六法をふると云其頃の俠者は是を達とせしとて専ら呼たる名なれど今は廢りて

前に男達の番附にさへもれたり曲亭馬琴近頃俠客傳に館の小六の事跡とて南朝北朝の頃に引直して出せりかゝる浮たる人の名にも興廢有て丹波與作は伊達の與作と古く云も昔の俠客の名なるべし

中興奇賊撰の語

近來講釋にて専ら讀流行と見えて諸所に此外題を見る二十卷の寫本有て鶴本屋本之助燈籠竹源藏白銀屋與左衛門と三人の者心ざしを異にして後與左衛門は仕置にあひ本之助は敵を討れ源藏は立身すると作り物語や實に有し事にや其原はしらずといへども是を歌舞妓に仕組み角の芝居にて寛政六寅年冬當世奇族撰と外題して鶴本屋(小上)白銀屋(山村)源藏(新七)にて序切桃園に義を結ぶ畫面に准らへ此三人義を結ぶ場あり玄徳に珉獅張飛に山村關羽に芙蓉准らへの容となる所にて初日芙蓉金棒を青龍刀の様に持て見えとなる折誤て取落せしゆる當世奇服撰と惡口を云はれて僅かの日數にて狂言取置其後再びこの狂言出す其頃の名人役者寄合ても人氣に合はねば是非もなき物なり此世話場に菅笠賣戸田八と云ふ惡者小六弟の前髪三五郎隣の娘八百藏兩人駈落をせんと相談し

ながい場のぐるりを廻るを兄の惡者附歩行き兩人を殺し心中なりと見せて誠は若殿と姫君の身代とする場あり此場を近頃煙管のらうやに直して外の狂言にはめ度々するなり題に立し奇族撰は殘らず箇様な場が遺るとは是狂言の善惡によらず世にあふ合はぬと云場所なるべし。

妹青山婦女庭訓の語

明和八卯年正月竹本座にて近松半二が作妹青山の淨瑠璃は古今の當り狂言となり淨瑠璃歌舞妓共に年に一兩度づゝはせぬ事なく見るに飽かぬ狂言也此もと寛保三亥年竹本座にて竹田出雲作入鹿大臣皇都諍と云ふ淨瑠璃より出たるなり三の切大判事清澄の屋敷へ天智天皇の後采女の方預り有り清澄入鹿の疑ん事を恐れ膝行なりと作病す入鹿采女の首を討取れと鎌足を勅使に立る鎌足是非なく仕へ居れど天智帝の忠臣なれば贗首となり居る采女の首を見届るために入鹿の乳人阿茶の局と云ふ老女を横目にす此婆々疊なり是能狂言の三人騎を取組たる趣向にて鎌足清澄心中にて探りながら盲と蹠が討か討て見せうとの詰合の内局は疊ゆゑきよろりとして居て此局は見分の

役賈か眞か見届ると奥に入後清澄娘を身代りに討鎌足は賈旨ゆる若し眞の后を討しや身代りなりやと案じる時敵役の局も作り疊にて此姥は入鹿に乳を付たる折の娘にて入鹿とは乳兄弟局の實の娘ゆる身代合點で持歸る三の切なり姓名は是より妹春山の名を出したり又元文五申年九月豊竹座の淨瑠璃に爲永太郎兵衛作武烈天皇嬖と云ふあり大友狹手彦異國に行くべき勅を受け難波の津に汐待する松浦佐用姬は美人の聞えあれば入内さんと家老何某預つて是も舟にて港に船懸りす狹手彦とは元より云號なれば姫は狹手彦を慕ひ船より船へ石を投込此時の文句に何國よりかは水中に打込石は重けれど又あの石になり共なりたいと戀慕ふ場有て太體文談は此間を遣へり三の切妹春山の場のもと寛延四未年竹本座作者竹田外記役行者大峯櫻三の切矢春の場に倣へり大友皇子を入鹿大臣清見原天皇を天智天皇村國庄司が妻濱荻を太宰後室貞高千島之助を久我之助秦の連友足を大判事清澄娘初日を雛鳥と都て矢春の里を妹春山とし川向ひに分たる趣向にして右三つの狂言何れもおもしろき作意なれども皆妹春山の右に立つ事遠く外題さ

へ呼ぶ者なし是も世にあふあはぬ時節なるべし

花相撲蝶々紋日の話

享和年間浪華濱芝居作者に近松柳と云ふ者妹春山三の切を雙蝶々に案じかへて真中に淀川を隔とし上座を八幡下座を山崎とし八幡村は長五郎母と妹親子暮しの中へ長五郎人殺しの場所より落來る跡より爺親甘酒屋仁右衛門來て長五郎に元服させ河内へ落す山崎の方は長吉の乳母長吉を匿ひ居る姉お關來て是も長吉を落す場あり狂言の間へ向ふの堤を子役船頭にて三十石船を曳登る事有て見渡しは氣替りて大によけれど妹春山の如く兩向ひより詞かはす事なく狂言別々となり殘念なる仕組なり妹春山は雛鳥久我之助の色氣有ていかなる大川を隔つとも其情は通ふなり長吉長五郎は假に兄弟分といふ計りにて色氣なければ狂言堅づまり連續し難し畢竟二幕か廻り道具にてすべき所を飴り付にてするなれば詮なし此狂言の二幕目阿波座土橋立引の段は雙蝶々元狂言昔米萬石通の趣向より出て長吉長五郎橋の上にて立引となり雙方を詠めて親(長五郎父甘酒屋)と姉(長吉姉おせき)が來るゆる南無三邪魔が入たやり過して跡の

事と兩人橋杭を傳ひ下りて隠れ居る向ふより姉おせき上手より甘酒や仁右衛門荷をかたげ甘酒／＼と賣ながら出て橋の上にて顔見合せおせきは今仁右衛門の方へ行く所よい所でお目に掛つたと云ふに仁右衛門何用でござつたと是より橋の上にて話となるを橋杭に取付兩人じつと聞居るおせきは仁右衛門にむかひ弟長吉は年も行かぬ者なれば立引に依て長五郎の方より誤て呉れてもよからうと頼に行く所と云ふ仁右衛門我子の長五郎最負にて忤にはようあやまらすまい何ぼうこなたの弟でもあまりあやかし過ると長吉の不足をいひ出しもとは仁右衛門の忤にて兄を長五郎弟を長吉とて藁の上よりおせきの親搗米屋へ子にやつたに義理を思ふて可愛がり甘う育て下さるからあのやうな我儘者になりましたと泣悲しんでの昔語を兩人聞て扱は我々は兄弟で有たかと始てがてんゆき兩人おづ／＼橋の上へ出て誤る姉と爺も悔りして扱は様子を聞たかと云へば兄弟としらず諍ひし事を悔むゆゑ途中ながら甘酒屋にて盃事有て以後は兄弟せり合はせぬかと怠狀乞^{怠狀を}する何が扱誠の兄弟なればと云を姉と爺が云合せにて兄弟といふた

は嘘兩人に中直りさせんがため元より近付の事ゆゑ拵事にて兄弟分の盃をさせる仕組なり是は萬石通の小野屋膏藥を甘酒屋に直したる筋なり扱此狂言を先年江戸葺屋町芝居にて處々増補のうへ菜花蝶々色成穂と云ふ外題にて長五郎歌右衛門長吉羽左衛門おせき九藏仁右衛門三十郎にてさせ弘化元辰年盆浪華中の芝居にて長吉片市長五郎端寛おせき金作仁右衛門大友にてもさせしが何分色氣薄く和らかみ少なければ残念なり此兄弟なりと云ふ筋は江島屋其蹟八文字自笑雨作の略平家都遷と云ふあり此中に松王兒童病氣にて宿へ下り宇治の母の宅にて保養し快氣ゆゑ興正寺へ詣る同里に彌陀次郎と云ふ漁師の娘蓮葉此松王を見染め互に文を取かはしまだ一つ寐はせねど談合ははやできたり所に彌陀次郎は親の敵を討つ望みあり其敵は兵庫築島の人柱に取こめられ敵討つ事叶はず故に娘を白拍子にして清盛にさし上げ其手筋より敵を申受んと拵て娘に告る娘は松王に添んとおもふ心當違ひ忍びて松王が家に行き涙ながらに是を告る松王の母奥より松王を呼ぶゆゑあはてゝ巨燵の内へ蓮葉をかくす内母出て興正寺日參なれば早う參れ

と云ふゆる巨燧に心を残しながら外面に出る向ふより見知らぬ女房一人来て内へ入るゆる何やらんと外に伺ふ是蓮葉が母にて松王の母とは古き馴染の様子なり絶て久敷挨拶有て蓮葉を松王の嫁に貰はぬかと云に松王の母腹をたてそれでは此世から畜生道へ落すのか元松王は彌陀次郎より貰ひ子にて蓮葉とは兄弟なり其兄弟をしらず互ひに文を取かはしてわりなき中となつたかならぬか親々の身では淺猿しくそれで忍んで告に來しと親々の物語を戸口と巨燧に立聞兩人扱は兄なり妹なりしらぬ事とて妹春のかたらひあゝ淺猿し／＼ようマア枕をかさはさぬが互ひの身の仕合せと愛着戀慕のきづな切れあせおし拭ふ計りなり母と母とは涙を拂ひ歸りし跡に松王蓮葉顔見合すも耻かしく互ひに思ひ切たれば蓮葉は内へ歸り佛御前と名を呼びて清盛の伽に行き松王も全快したれば教經の傍小姓築島の人柱大勢の命にかはり彌陀次郎の敵も討佛は妓王妓女と共に嵯峨の庵に隠るゝまでを終とす此兄弟も僞りにて二人に輪廻を切らさんかため二人がかくれ居るとゑつて昔話をする作意奇なり妙なり彼蝶々も是に似たれど戀路ならねば情とゞ

かす親子の情に愁ひを聞さんには孫でなくては愁ひこたへず實に喜怒哀樂の四情に色情恩愛薄くてはならざるとゑるべし嗚呼穿てるかな自笑其磧の才是等を狂言の種と云ふべし

東鑑御狩卷の語

東鑑の淨瑠璃は豐竹座にて並木丈助作寛延元辰年月十五日より始る竹本座竹田出雲作の假名手本忠臣藏は寛延元辰年八月十四日より始め然れば同年にて一ヶ月東鑑の方始はやく何れをまねび何れを似せるといふ事なけれど御狩卷三の切鳴立澤朝比奈義秀住家の場と忠臣藏九つ目山科の場とは地名と役名こそかはれども一場の仕組狂言の趣向相同じとゑるべし先大星親子を一役として朝夷義秀なり曾我の母万戸と娘片貝を一役としてお石なり備前大藤内は加古川本藏妻の柳は戸奈瀬にて娘乙女の前は小浪なり大藤内の本名備前平四郎の流矢當り實父木曾義仲の敵は判官を抱留たる加古川本藏におなじ乙女は自害し小浪は死なぬのみの違ひにて心は皆おなじなり此頃の兩座(竹本豐竹)は前編にも演るごとく決して仕組の筋を隠し包て人に咄す事なければ互ひに始るまで

知らん筈なしされ共かやうに似たる事も數百番の淨瑠璃に又珍らしからずや小説稗史にも亦是に似たる事あり文化年間浪華芝居司馬叟が遺稿の長嘶櫛と云へるに吳服屋十兵衛木曾街道にて郷戸の龜四郎と云ふ盜賊に出逢ひさまぐと難儀して玉の挿櫛を證據に女に預くる小説出たり同年東都より曲亭馬琴作にて大岡仁政錄の内より抄出して青砥藤網摸稜案二編目蜚屋善吉護摩の灰鵜太郎に出逢ひ難儀に及び路銀を招婦お六に預け證據に古き櫛を受取る是信州お六櫛の起原なりと書きたる小説出版す是も云合すとなく符合したるなり又歌舞妓にて二軒三軒同じ狂言を出す事あり是は隣の芝居の狂言を聞て態と跡を追ふて張合に出す事なり昔は是も行儀よく浪華にては濱芝居に狂言の世界極る時は角中の大歌舞妓座へ斷り若し歌舞妓に同じ世界の催しの時は差支あると云へば濱芝居より世界を取かへしものなり角中兩座勿論互ひに問合せそちは足利世界ならば此方は源平とか雙方得心のうへ差合ぬやうにし又同じ世界同じ狂言にて人氣をよせんと合點にて張合ひし事も儘有りけり舉て云はゞ天明二寅の春大願成就殿下茶屋聚中連

歌茶屋譽文臺と同世界張合なり文化五辰の春角けいせい輝雙紙中けいせい品評林文化十四丑春角けいせい稚兒淵中兒淵花白波文政十亥春角けいせい遊山櫻中けいせい遊山櫻文政十二丑春角花雪歌清水中新薄雪物語と是皆同じ世界にて少しづ、の増補はあれども同じ物を合點にて見立となり人氣をよせんがためなり此外合替に忠臣藏やひらかな盛衰記など古淨瑠璃狂言或は切狂言心中物など張合に出せし事度々あり此澤山なる狂言の中に同じ狂言を出すも何とやら不自由のものなり或田舎の人忠臣藏五つ目定九郎與一兵衛の早替りを見て此大勢の役者のあるに殺す者も殺さるゝ者も獨りにて世話しきめをして早替りをせずとももの事なりとつぶやきしは金言なり同じ狂言を出すもそれとおなじけれども是も適には珍らしき心地ぞせらる

素人藝畠水練の話

淨瑠璃文談の中に謠また端唄などを書入し物幾等もあり云はゞ義仲勳功記三の切地藏經、娘景清三の切謠、壇浦兜軍記三の切琴路組、阿波鳴戸順禮歌大文字屋の題語、妹春門松の御文章伊勢物語の妹春川など

淨瑠璃を語る時我得手／＼の物有て眞を諷ふ時淨瑠璃と其曲はだ／＼に成りて甚聞憎きものなり是は淨瑠璃の謠淨瑠璃の端唄淨瑠璃の題語御文章とて別に眞の節を捨て氣を放れて稽古するものなりと故播磨の大掾子に咄されし事あり一藝に達する人は假初の物語りにも金玉の論を云はるゝ者なり歌舞妓にても同じ事なり少し茶を得たりとて舞臺にて手前を本式にすれば舞臺淋しく樂場より欠伸せらるべし似事をすれば能物としるべし前に云遊山櫻を兩座にてせし折角の芝居にて木村亦藏(關三十郎俳名は奇山)切腹の場にて法華の題語を遣ひ是もよく諷ふ者を尋ねし所町の軒付にてよく諷ふ者を抱へて樂屋にて諷はせし所妙音にて中々芝居の歌諷等の及ぶべき者にあらず日に何程の建錢と極め過分の給金を取らせ諷はせしが初日に其場となり諷はせるに音聲細く低くして舞臺前までも聲届かず首のみ振つて啞の如し張らんとする程聲しぶりと翌日より詮方なく湖出市十郎に諷はすれば音は題語の骨髓ならね共張聞えて正面疊棧敷まで聲通れり是播磨の名言に叶ひ芝居は芝居の題語ならでは聲届かずいか程節がよくとも聞えぬ時

は其詮なしまして素人の旦那藝などは巨燧に臥して水練の稽古するにおなじければいと詮なき業なるべし附て云役者身振聲色の連中とてよく夜分軒付に來り又酒席へも招かれて身振聲色をする輩あり昔の役者は皆口癖有て今に遺るあり云はハレやくたいもないとは訥子(澤村宗十郎)本にマア／＼とは英子(祖小川吉太郎)嗚呼つがもねいとは白猿(市川團十郎)代々の詞本にヤレ／＼は雷子(祖嵐三五郎)おだてない／＼は三笑(嵐三八)如此の口癖有り物のまねは癖をよく取て次に身振をよく似せ其上にて聲色を遣へば音聲は銘々にわがち有てさまで似たる聲にあらずともどこにか癖を取てよく似る物なり先づ團藏と云へば龜の如くして舌を頬の中へ入れて遣ひ片岡は少しうつむき首を振つて遣ひ鬼丸は顔を少し上めにし大友は向ふ齒を嚙出して遣ふなど其頃はよく似たるを見聞しが今時の役者に口癖なきはたしなみて云はぬ者か聲色にせる程の俳優もなきか昔の役者と見競て巧拙何とも辨じがたし

近來歌舞妓外題の論

前卷に演る大外題の事は一部の惣評にして猥りに付

べき事ならず既に古淨瑠璃にも不解有り享保十七子
六月作者近松門左衛門竹本座にて伊達染手綱とて上
中下物出る此外題付までは丹波與作と云ふ外題なり
既に忠臣藏七つ目に由良之助丹波與作が歌にと云は
外題をよんで江戸三界へ行んしての歌を諷ふなり是
戀女房の元狂言にて上の卷重の井三吉子別れの段中
の巻白子屋の段下の巻小万與作道行より錢かけ松の
場までなり此狂言古今珍らしき當りなりければ二十
年後同座にて是に跡先を繼足して吉田冠子三好松洛
兩人の作にて序は東山端の寮より下河原重の井與作
不義あらはるゝ場訴訟場より道成寺の張場沓かけ坂
の下まで前狂言をふやし子別れの場は十段目となり
十一段目別れの鐘の歌にあはせ江戸兵衛逸平立廻り
の場を大切として戀女房染分手綱と外題を賦しけり
是もおなじく當り淨瑠璃とは成りたれど戀女房と染
分手綱と連續せず伊達の與作は馬士なるゆゑ伊達染
手綱と付るは妙なり戀女房に染分とは解せず又妹脊
山婦女庭訓と云ふも重複にて妹脊山にて陰陽首尾し
たるを女庭訓と斷りしも何とやら叮嚀過たりされば
故名人の作者達にもかゝる外題あれば今時の外題に

誤りは有うちの事なるべけれど前々の編にも演るこ
とく一日の新狂言を作する事絶てなければ古き外題
を借て遣ふたる物にて新外題を付る時には上本と唱
へて草稿をまづ作者誰彼と書て公儀へ願ひ差障りの
なきや改めを乞ふて本下りての上興行する事定例な
りしに近來作者たる者なく上本なくとも納る事と見
え作者なくて役者狂言方と申合せて埒もなき外題を
付て看板に出す事とはなりけり嗚呼嘆かはしきかな
皆藝道の衰へより起るか拾遺に云江戸三座の外題の
ごとく五性の相剋にて付るが故近來江戸外題に後に
其儘付る外題なくけしからぬ諺言文字の外題多く付
假名なくては何とも讀兼る外題多し江戸役者浪華へ
來ても江戸の癖付て外題は何と付てもよいものと心
得しは情なし東都にて近來の外題を一々難論せしを
彼地の友よりおくられたれば爰に略して浪華の一二
を出す天保十一子年八月角の芝居にて青砥藤綱と筑
紫權六と書入たる狂言の外題に大湊戀の境當とせし
は何の世界か分らず境當と書て白波と讀せる事何の
心やらん天保十三寅年春角にてけいせい櫻城砦と
あるは古き外題にて大内尼子の世界なるを遊山櫻の

外題に心なく遣ひしはまだしも此角外題に朝山の木々に色増す櫻花谷間／＼の鴈雪は芝に降つむ銀世界と書たるは狂言の筋やら何のたはことやら分らず畢竟朝鮮征伐後の狂言なれば唐人の寢言とも云はんか嘉永元申年中の春けいせい曾我鎌倉鎌是は又論外なる外題の付ざまかな金扁に集ると書て大盡との付假名は論なし曾我と云へば鎌倉に及ばずけいせいと有るに大盡と書ずともしれたる事はよりは唯曾我のよせ物とすれば心よく聞えて難あるまじ二の替りにてけいせいと上に置きたくばけいせい曾我集にて事足るべし譯もなき文字を書並べ角外題割外題に何を書しか皆書ずとものことばかりにて是を外題とは云ふべからず當時こそ曾我の世界を歎ばねど以前淨瑠璃にて種々の作有て曾我の外題といへば根元曾我物語、元服曾我夜討曾我、小袖曾我、世繼曾我、本領曾我、團扇曾我は數日興行せしと有て、後百日曾我と呼たり本海道虎石、曾我五人兄弟、大磯虎稚物語、曾我扇八景、曾我虎石磨、曾我會稽山、工藤左衛門富士日記、江戸櫻愛敬曾我、富士日記菖蒲刀、傾城富士嶽、曾我三部經、富貴曾我、御前曾我姿富士、記錄曾我、

王筭鬚曾我錦几帳、赤澤山伊藤傳記、曾我昔見臺、東鑑御狩卷、けいせい扇富士、筆始いろは曾我、加増曾我、河津相撲意恨大曾我富士牧狩、蛭小島武勇問答、右大將鎌倉日記など舉て數ふべからず又大歌舞妓にも會稽富士侯、建久四年五月二十八日、三國一裾野紋日、荒事江戸畫曾我、粧倭畫曾我、八百屋萬誓曾我、大都會見取曾我などあり江戸は三座とも例年春毎に曾我をすれば色々の外題を賦す江戸の事は云はず京攝の歌舞妓淨瑠璃は表號にて一日の趣向をしらせるが外題也故に無學文盲の族が賦すべき者にあらず能く古外題を覺え居て附すべき者なりけいせいと置けば浪華の二の替り外題となると心得るは俳諧發句に初心の輩詞の終りにけりかなと付くれば句になるものと心得し輩と同日の論なり外題は文字數多き程狂言の大意をよく聞かせる者なり二の替りにけいせいと置けば跡に三字か多くて五字にて其世界をしらす者なれば餘程手際なる物なり陸玉川と三字にて仙臺をしらせ黃金鱸にて尾州を聞かせるを大外題とは云ふなり此九月中の外題花街模様劇の稻妻は又重複にて連續せず是を外題にせんとおもはい麗模様劇場稻妻

とすれば難なかるべし以前に伊達競阿國戲場と賦したるあり是は仙臺萩と累と混じたれば伊達は容を云て戲場は題なり花街模様と置く時は此中に廓あり扨下に歌舞妓と置ば廓と芝居と居所二つとなり劇の一字にて歌舞妓とは讀めず花街模様劇の稻妻とより詠べからず是を外題と思ふ心根こそ悲しけれ京顔見世に鬼一法眼三の口切と御所櫻三の切と一つに寄せ英傑三略卷との外題は何事ぞや別々に外題を書くべきこそ有體にてよけれ義經牛若の頃の狂言と堀川夜討の狂言と數年隔たりし事を誰有て此外題を付らるべき辨慶の事は外題に見えず其上かゝる古狂言の見取に狂言作者とするせし者多く何を作して名を出すや片腹いたし其上にも田舎より出たるか大作司と云ふあり何を以てかゝる名を出すや言語同斷の事也此頃來春の看板出たりと聞て外題を聞くに角は姫競二葉書雙紙とてもと濱芝居にて小栗横山を殘らず女形にしたる狂言の外題ゆゑ姫競とあるなり歌舞妓にて寛政六寅の秋角の芝居辰岡作洛陽菩薩池と云ふ狂言あり小栗^{二代目}横山^{淺尾}爲十郎太郎のあほう變じて謀反人になる仕組なりしを是へ書本小栗外傳を加へて故奈河

一泉書きたれども外題は古外題雙葉書雙紙と迺たるは公儀上本ならざる濱芝居にてせしゆゑなり昔はかく作法を守りたる物なるを若太夫に岩見重太郎と云ふ外題出しとの事は又法外なる事にて新外題甚いぶかしされ共右に云ふ如く歌舞妓にすら法に背くゆゑ濱芝居はいよく以て事しる者はなきと笑ひすてんより仕方なし扨も中の芝居に遊山櫻へ乳貰ひと愛護稚の關取を集し畫面にてけいせい清船諷とやら外題出しときくますすゝ惘れて予も暫し絶倒したり此加藤毒酒の狂言のもととは淨瑠璃にて萌生飛驒守朝清と作り名して世界を小田の幼君北畠の名君とし灘右衛門の本名を五斗兵衛四の切は佐々木高綱の場何か時代は取しめたる事もなく出して見たる者なりそれさへ外題を八陣守護城と賦しけり八陣は加藤に限らぬ事勿論なり唯肥後の本城を守護城と呼て云ば地口に聞せたる者なり遊山櫻も阿蘇が嶽を遊山ともちりて賦したるなり故人作者は遠慮有て深切に外題を付る事感すべし以前東都にて海老藏八陣の加藤閣の場にさまで狂言なきゆゑ狭間合戦の官兵衛になる趣向を予に詭へたり予直に筆を採て草稿なれり毒

酒の場にて鞠川玄蕃は雛衣に惚て抱付折腹帯をしめ居るゆゑ不義者也と云ふを春雄科をゆるして主計之助と夫婦とし仲立して毒酒を飲すと増補せり（鞠川は八平次雛衣は重の井主計は與作と戀女房に似たり）扱船の内は八陣の通り雛衣懷胎して居るか居ぬかと云ふ丈の違ひなり闇の場にては雛衣安産して母に子を育てさせ百日の物忌に父の傍に助抱の役千鳥冠者灘右衛門も入込すみ闇に道具かはつてより主計之助は犬清の役となり父の怒りに切腹す我強き朝清刀を振上る母と嫁是を支へる灘右衛門出て抱子をしつける朝清始て孫の顔を見て嗚呼いゝ子僧めだなアと官兵衛となり灘右衛門は久吉役となるに仕組めり此時の役割は加藤に海老藏五斗に團十郎八代目灘右衛門に多見藏冠者に薪水雛衣に榮三加藤妻に常世外題は守護瓢戯場八陣と賦し角外題に題目の旗印蛇目の楯板とせしを白猿の戯れに大（蛇）と誣こゝつけてはいかにと云たるが其時二ヶ町（堺町葺や町）焼失して惜むべし書餅とは成りけり然るに清の船諷は先年文政亥春遊山櫻にて焼たるゆゑ今度は清めてする心か清正の清に歌右衛門の歌の心にて賦せしか

しらねど船の場にて具足櫃に忍びの者居るゆゑ取て清めの船歌うたへ〜とて血汐の穢れを清めるためなりさなくば御座船は元より清めあるべし此狂言を見たる者こそ加藤の辭なりと思へども始ての者には解まじ詞によりて外題を付れば心底憎鞠川玄蕃、詠麗湖絶景なども外題になるべしと腹を抱へん此度アメリカの船の尊高く又浪華に清正公大神義と云ふ紛しき木像も有しにや所詮それらの汚名を清めの船歌にやあらんと道理を付て笑ひ捨たり嗚呼痴なるかな

西澤文庫傳奇作書附録中の卷終

四澤
文庫傳奇作書附錄下の卷

目次

- 一 雨夜三盃機嫌の寫
- 一 同跋牧童の辭の狂文
- 一 天河屋儀兵衛の實說
- 一 續赦免景清の草稿
- 一 伊勢と日向の物語の草稿
- 一 南北軍問答院本の話
- 一 泣男杉本佐兵衛の説
- 一 古代狂言人名の話
- 一 鹽賣長次郎の話
- 一 歌舞妓に名高き人名の話
- 一 響灘入船噺の笑話
- 一 彫物師左甚五郎の話
- 一 目貫後藤浮世又平の話
- 一 鍛冶正宗國俊の話
- 一 高野女人堂心中の話
- 一 島原の青葉薄情の話

西澤
文庫傳奇作書附錄下の卷

西澤綺語堂李翌著

雨夜三盃機嫌の寫

元祿六百年春出板の書雨夜の三盃機嫌三冊は作者垂蘿軒無轍其頃男色盛に行はれ此野郎界に遊び嵯峨山の麓へ追やられ弱隠居の身となる其友木笛庵瘦牛庵を訪て轍牛の書たる三都の女形に賛をなし肖像を畫きたる次に立役の賛をせし書有り是や水道一盃難波一盃白河一盃此三水を飲むが如しと三盃機嫌と題し梓にのぼすと瘦牛が序あり今まで百五十八年にもなる古き役者其の名を聞さへもをかしければ其目錄の名のみを爰に拾ふ者なり

水木龍之助 櫻山林之助 谷島主水
宮崎式部 岩井平次郎 玉川半太夫
澤村小傳次 山下才三郎 玉川三彌
音羽勝之丞 吉澤菖蒲 今村半之助

竹中正太夫 村上竹之丞 竹島林之丞
近松勘之助 袖崎政之助 中村數馬
袖崎色葉 市川團之丞 玉村艶之助
松本類之助 勝山與之丞 桂山式部
松島半彌 筒井專太郎 上村井筒
岸田小才次 露浪千壽 吉川一彌
玉村淺之丞 櫻若小山二 外山千之助
三津島藻鹽 袖崎歌流 坂田藤九郎
山村吉三郎 鈴木平七 藤田大次郎
小野川宇源太 松本兵藏 山中勘太郎
市川香織 萩野左馬之丞
右四十四人各畫あり賛あり是より立役は賛ばかりにて肖像なし

坂田藤十郎 山下半右衛門 市川團十郎
竹島幸左衛門 大和屋甚兵衛 宮島傳吉
鈴木平左衛門 荒木與次兵衛 西國兵五郎
村上平十郎 中村七三郎 斧山宇治右衛門
柴崎林左衛門 中村傳九郎 南北左部
小勘太郎 吉杉山勘左衛門 今嵐三右衛門
岩井半四郎 市村四郎次 竹中藤三郎

藤本平十郎 西村彌平次 三國彦作
 猿若三左衛門 仙臺彌五七 小佐川十右衛門
 村山平右衛門 永島礪右衛門 藤川武左衛門
 古今新左衛門 佐渡島傳八 音羽次郎三郎
 三原十太夫 山下又四郎 川島彦左衛門
 右三十六人は立役の名なり彼金五郎の端唄に坂田藤
 十郎杉山勘左玉川半太夫の名はあれど大約廢して今
 纔に遺れり

坂田藤十郎の賛

我朝藤十唐莊周、突出天方口自由、加白傾城買倒
 體、揃成格外彌爲遊

牧童（此書の跋にありをかしければ爰に出
 す）

無轍既鼻垂遊西山行吟廣澤顏色憔悴形容枯槁牧童見
 而問之曰此樣非色男大臣何故至於斯無轍曰父母皆堅
 我獨和一門皆下戸我獨上戸是以見潦倒牧童曰推人不
 凝滯於物能與世推移親達皆堅何不爲其作顏屈其腰一
 門皆醒何不語其樂而啜其分何故高灑深盡自追出爲無
 轍曰我知之新押者必乘三枚肩新揃者必芥數兩金安能
 以身之寬濶受一物之儉約者乎寧入此澤食於鯉鮒安能

以破落理請艶世智異見乎牧童莞爾而笑扣牛而去乃歌
 曰四條之水吞兮可以遣吾銀四條橋渡兮可以濯吾足遂
 去不復與言

天河屋儀兵衛の實説

忠臣藏より後に増補狂言の内天河屋入牢の仕組種々
 あり此實説亦穗精義内侍所（四十卷寫本）にも有て大
 坂三郷惣年寄天河屋利兵衛とて町人ながら古き家柄
 なり然るに大石に頼まれ彼夜討の道具を調へ江戸表
 へ出しけれども其鍵梯子職人に事かき内本町上之町
 加賀守藤原の神力丸市左衛門と云ふ者へ藏屋敷より
 の頼まれ物とて繪圖を渡して誂しを鍛冶市左衛門よ
 り町奉行太田和泉守殿へ届けしゆゑ利兵衛には不審
 かゝり細工は暫らく延引に及ぶべしと先利兵衛を召
 れ御尋ねに天河屋いかにもと答ふる事あたはず唯家
 内の用心にもと我工夫にて誂へ候なりと陳じけるゆ
 ゑ彌々疑ひかゝり元祿十五年二月の始頃入牢とな
 り家内御預けとなりしうへ種々の拷問にかゝりし事
 は義臣傳に委し元大坂三郷惣年寄の身分なれば諸所
 の屋敷へ出入用達もする家柄なれば是程の道具を誂
 へしとて左程強き御吟味もあるまじき事ながら此年

より七ヶ年前表町四丁目分銅屋借家に住し軍學兵術の師範を表とし内心には及びなき謀逆を企てし畑野藤右衛門といふ浪人鈴ヶ森にて磔となりたる者あり其徒なりとの御疑ひより後々は妻子まで入牢し種々珍らしき責苦にもかゝりけれど彼夜討の沙汰大坂まで聞えし上ならでは白狀せざりしとかや實に大石のよく人を見立たる事感ずべし其畑野藤右衛門の陰謀露顯せしは俵屋治右衛門糠屋傳兵衛の公事より起ると云ふ一話を爰に出す大坂阿波座納屋町の町人俵屋治右衛門と云ふ糠屋身上千貫目計の商人なり子二人あり惣領治郎助次は娘なり治右衛門召仕の下女に手を付け懷胎しけるゆゑ家内の手前を耻て攝州平の村桐木町に糠屋傳兵衛と云ふ者近郷の糠を買集て俵屋治右衛門方へ數年商ひ心易く出入しけるを治右衛門内分にて頼み産代を付け下女を傳兵衛方へ預けるに臨月に男子を産み母は産後に相果ける依て治右衛門出生の水子に養育代を付け傳兵衛に貰ひくれよと頼みしゆゑ傳兵衛に子もなく幸ひ養子として治郎吉と名を付け育てける其後俵屋方には惣領治郎助相果治右衛門も半年餘り過て病死しける故家督相續の

者なく後家の指圖にて娘の名前とし實體なる手代善右衛門代判して諸方を引受商賣せしに翌年娘も相果後家も續いて死しければ親類別家相談のうへ手代善右衛門數年の舊功あれば名を治右衛門と改め家督相續しける時に平野の糠屋傳兵衛思ひけるは俵屋の妻子残らず相果他人の物となれり治右衛門血筋といふは某が貰ひおきし治郎吉計なり是を申立て俵屋へ對談に及びけれ共治右衛門の存生中に聞かぬ事とて取合はず依て傳兵衛は治郎吉に俵屋の跡式を繼せんと願書を認め御奉行松平玄蕃頭殿へ願ひし所血脈なれば御裁判となり度々御吟味のうへ血脈ありながら差置手代を家督に立し事親類町内無念の様に思召れ治右衛門首尾あしく負公事と見えしゆゑ兼て聞及びし長町畑野藤左衛門前には藤右衛門とあり方へ行きて訴訟の事を頼みければ藤左衛門聞て此公事至つて六ヶ敷義なり然れども金銀に厭ひなくば勝利掌にあらんと云ふ治右衛門此公事に負る時は主家押領の沙汰に落ち人に面を合せがたし金銀は何程にてもお望に任すべしといふに畑野訴訟の案紙を認め此禮三百貫目なりと堅く約束しけるに三度對決に及び果して治右衛門勝利を

得約束通り畑野は三百貫目取けるとなり糖屋傳兵衛は公事に負け平野の住居も成難く無念に思ひ親子袖乞同前になり江戸へ下り町奉行川口攝津頭殿へ願ひに出ければ大坂にて御裁許相濟たる事ゆゑ再訴に及ばん事不届なりと御阿りを受ければ親子御仕置になりても毛頭御恨とは存せずと達て出訴に及びければ御評議の上俵屋治右衛門江戸表より御召となり對決數度の上兩方へ身上書をさし出す様仰付らる糠屋よりは俵屋の身上千貫目計とあり又治右衛門方よりは三百貫目と書上る七百貫目の相違なれば早速大坂町奉行永見甲斐守殿へ申來り俵屋身上御吟味の所古帳面には千貫目餘と見え新帳の表には三百貫目餘とあり銀代物都合四百貫目にも足らざる事申送る是に依て治右衛門召出され帳面と有金相違の御吟味となり拷問にかゝり治右衛門包みがたく大坂長町畑野藤左衛門を頼み訴狀を認め貰ひ禮銀として三百貫目遣はせし由白狀に及びければ早速大坂へ申來り畑野藤左衛門召捕られ網乗物にて江戸へ下り嚴しく御吟味にて藤左衛門元は松山の浪人にて軍學兵術の師範をし公事訴狀を書き賃銀を取て渡世とし彼三百貫目にて

武具馬具を拵へ兼て軍學に高慢し諸家の浪人を語らひ天下を一呑せん杯との工みにて由井丸橋等に似たる陰謀の由白狀に及ぶ依て鈴が森にて磔となり俵屋治右衛門は御公儀を僞り横道を搆へしと有て身上残らず關所となり三ヶ津拂ひ糠屋傳兵衛は理分を得といへ共金銀のつる切て空しく流浪しけるされば畑野ゆゑに武具馬具の細工人もあまた掛り合にて難儀しける當座なれば此以後町家より箇様の品誂へある時は内々にてしらすべしとの兼てお觸ありしゆゑ加賀守市左衛門後難を恐れ訴へしが利兵衛に御疑ひ掛りさまぐの拷問にあひしは時の不幸と謂つべし利兵衛は後京都に退隱して歿す墓は大將軍地藏院（俗に椿寺）中にあり法正院空譽士齋善士と塔婆に記せり是等を眞の任俠とも賞すべし近松半二作太平記忠臣講釋の九つ目牢屋の段役人を石堂右馬之丞藥師寺治郎左衛門とし鍛冶屋を堺宿屋町二（一カ）文字金房と呼び儀兵衛を拷問の所にて先達て云ふごとく新田義貞が家臣畑六郎左衛門が餘類の諸武士をかたらひ歩行との風聞當地にも其内縁ある由と云ひ師直鹽治の時代なれば畑野を畑六郎左衛門にしたるなど實に作

者の用心とは是等の事を云ふなり忠臣講釋の牢屋にて敵討を儀平夢見て寺岡の注進を聞き白狀するに仕組また泰平いろは行列大切牢屋の場は近藤源四郎假にさんびんの太助といへる小盗人となり入込て娑婆の嘶しをして聞かせよかしと牢屋の科人共取廻して聞たがるより鎌倉にて夜討を見たとの話をするより儀兵衛白狀に及ぶ誠はまだ本望は達せねども一日も早く儀兵衛を出牢させんと大星の指圖にて入込しと作せり故人名作者はかゝる事にもよく穿鑿足り感すべし

伊勢と日向の物語の草稿

去ぬる天保十三寅年三月木挽町河原崎座にて市川海老藏家の狂言十八番の内景清牢破の段一場出せしが其時計らず御咎を受け東都を拂はれ翌卯年冬まで諸所に漂流の身なりしを幸ひと浪華角の芝居へ出勤の願ひ叶ひ浪華の住人となり舞臺出勤八ヶ年去嘉永二酉の冬御赦免を蒙り再び江戸表へ歸り彼地にて出勤せしは全く悴三升(八代目團十郎)の孝心と云古き優家の長と呼べる家なればなり此御赦免の噂以前より江戸にて粗聞しに依り予弘化四年未の冬東都冬籠の

徒然に古き淨瑠璃を題として海老藏赦免の時勤めよかしと赦免景清と云ふ口切二段を書き草稿のまゝ三升到に呉れたり牢破の景清役にて謫せられたれば其裏を象り赦免景清とは賦したり牢破の景清の原は謠曲の春親を題とせし者にて青竹の牢屋體の内に鬢桶に腰かけ地髪を四方より紙燃にて釣手械足械にかへたるものなり是は又思ひもよらぬ仕組にて古風ながら珍らしからんと草稿のまゝ爰に出す所謂筋書にて役者は其時の座頭によれば記さず役名は畠山庄司治郎秩父重忠梅澤屋五郎兵衛(宿の主)飛脚庄六榛澤六郎本田治郎備前大藤内伊勢小京太(伊勢三郎の悴)同妻豊久野上總小市郎(景清の悴)同妻宮崎悪七兵衛景清此内景清親子は海老藏團十郎小京太は九藏の積りなり外の役名は其時の見合とするべし道具一面の旅籠屋の表のかゝり大儀宿梅澤屋線張觀音開の門口出女旅人を留居る上ルリ所とて往來の人を松が枝に並ぶや梅の花笠を笑ひながらも引とむる客大磯の脇本陣梅澤屋が門口に招婦女が泊らんせし鎌倉江の島御見物なら泊らしやんせ暮から道はとまります爰で泊て足休めお立の勝手のよい様に教へまするが花の

宿大赦参りの旅の衆とまらんせとぞ聲かくる國々の
 道者共幾組となく立よれば亭主五郎兵衛立出て主
 江の島かけて鎌倉御見物の御方ならお泊りが御勝手
 ヤア御一所にお泊りなされませ旅人ア、是々待てもら
 はう是から鎌倉へは二里餘りと聞たに爰に泊るが勝
 手とはどうした物ぢやないいオ、遠方のお方は御存
 知ないが御尤此度御先祖のお弔らひに付非常の大赦
 行はれ牢者科人を残らずお助なさるゝ頼朝様の御仁
 政大赦の時は罪有も罪なきも鶴が岡のお庭を踏めば
 武逆長久と申傳へ近國の人々夥しい鎌倉参り夜は足
 弱に怪我有ては大赦行はるゝ甲斐なしと申て鎌倉へ
 の這入口に御門が立て暮過よりお打なさるゝそれゆ
 る此大磯の宿中は常に増して泊人の繁昌今宵は爰
 に一宿して明朝お立がお勝手でござりませう旅人ハテ
 尊いおとむらひ大赦の噂聞てきましたそんならこち
 らは爰に泊らう旅人おいらの組も一所に泊らう御亭主
 早う八つ立に頼みますいなる程宜しうござります
 サアかうお出でなさりませ、打連れ奥へ伴ひ行く跡
 より來る夫婦づれ伊勢の小京太武盛は生國伊勢に引
 籠り親の敵の生死をば尋ね合して月重ね女房豊久野

諸共に表間近くさしかゝり伊勢小田原にて聞たる梅澤
 屋とは此家よな頼まうぞよいハイ、御用で
 ござりますい和殿は此家の御亭主よな某は勢州より
 鎌倉へ参る者承れば鎌倉に大赦行はるゝに付夜中に
 かしこへ入がたきよし奇麗なる奥の間で一宿頼たし
いハイ、奥の間と申ては最前丁度お前方と御同
 年な御夫婦連へ貸ましてござりますが此方にお斷申
 口の間とおかはりなされて下さる様おたのみ申して
 見ませうマア、是へお通りなされませそれ女子ど
 もすそぎをもて來いよ「主は奥へ走り行暫く有て奥
 の間に休息の夫婦連日向の國の住人下總小市郎景忠
 父の生死をはかり兼女房宮崎召連て爰に一宿したり
 しが亭主が頼聞入て上夫婦ともおかはり申サ、是へ
 「襖おし明け立出ればこなたの夫婦氣の毒顔い先達
 てお休息のお坐敷見れば貴公にもお刀携へ給ふお方
 へ近頃はは無體のお願ひ豊久それ、唯今夫が申さ
 るゝ通り女子連は互ひの事やはり其坐にござりませ
 上い是は御挨拶手前は夜の内に立まするゆゑ端近が
 へつて勝手宮私共は願のある身人様のお氣にかなふ
 は願成就の基上さうとも、御遠慮なしにいざ

／＼是へいと御意あるに御辭儀は不禮然らば御免下されう。然らば御免と入りかはる女同士は和らかに辭儀も會釋も笑ひ合ひ間のしきりも宵の間は襖も立す是や此一河の縁の二夫婦積る咄にいつとなくむつまじくこそ見えにけれ亭主は奥より立出ていて申伊勢のお侍さまお風呂おめしなされませい。マア此方よりは御兩所から上總イヤ此方はお先へ入りました其元お入なされませい。然らば何女共草臥休めにとく／＼入やれ。豊く左様ならお先へあなたがた御免なさりませ。解てはどくやか／＼へ帶夫の詞に隨ひて浴衣片手に入りにけり日向の侍つく／＼と打詠め。上總ノウお侍御夫婦中のむつまじさ傍から見てもよい物なア。いハレ當付たそりやお互ひ御自分は日向の國とござるが御内證のお詞には何かお願ひのある由是から何國へお越しでござるな。上總されば女が半分お咄し申たれば願ひの筋お咄し申さう元來手前の父は少し由緒ある侍某が五六歳の時科有て牢びたしとなられ母も相果成長の後父が生死の聞まほしく存じながら鎌倉武將の牢獄なれば心に任せず其内此女が縁にひかれ園許にのみをりし所お聞下され此度大赦行はれ多くの科

人御免あるよし拙者が父も存命ならばお助にあはんと存じ萬事を打捨筑紫の果より鎌倉へと心ざしてござります。語るに付て小京太は我も牢舎の其中に親の敵のあるものをとあやしみながらさあらぬ體。いハレそれはおめでたやシテ御親父の入牢は何年になります。上總サア拙者が六歳の時なれば今年が丁度二十ヶ年に罷りなります。聞て小京太胸ぎつくり牢舎と云ひ年數と云ひ扱はきやつが父こそ我敵惡七兵衛景清と悟れども色にも出ず。いハレ／＼中々の御事でござるよなう。詞すなほに云ひながら忽心隔てしは世に敷越の挨拶は是より嫌ふ始かや折から妻は風呂に上り。豊くサアこちらの人がいざお入りなされませ。いふに夫も座を立て胸に折込敵の枝葉目をのこしてぞあゆみ入る敵の子細しらざれば小市郎は氣も付ず宮崎もけん。いハレ小京太妻に打向ひ。上總最前御亭主の御挨拶に勢州の御方とやら承るはる／＼の御夫婦連いかなる事でござるな。いとやかに打とへば。豊くされば連合のをさない時父御は不意の死をなされ其事に付仇ある者の候ゆる其者の生死を尋ね恨申に下りますのでござります。それとは云はず淺はかに語

れば共に宮崎が宮それは深い思召お前も御夫婦こち
とも女夫親々舅の事ゆゑとは思ひ合たる御一宿でござりますなア^上、是々あなたも嘸お草臥此方も明日はとく立つ積り早く休まうゆるりとお休みなされませい「もうお休みと會釋して合の襖を立切りし伊勢や日向の旅宿り旅は物うき身の勞れ枕に夢をや結ぶうち伊勢の小京太武盛は風呂よりひそかに立戻り見れば妻ははや臥したり襖のひまよりさしのぞけば日向の國の夫婦共是も疲れに寢入りし様子打うなづいて勝手口^せ御亭主^{せい}はいハイ／＼御用でござりますか^せちと聞たい事がある是へ／＼「亭主をそつと呼まねきかたへによりし足音小聲小市郎はまだ寢入らねばそろりと起て襖に耳聞共しらす亭主五郎兵衛^亭ハイ／＼何事でござりますな^せア、密に／＼尋ぬる事餘の儀にあらず此度の大赦行はるゝに付牢びたしとて久しく年へし者ありや噂はなきか何と／＼^亭成程外の者は存じませぬが先年壇の浦での戦ひにも名の高い惡七兵衛景清と云ふ者二十年以前より今日までも土の牢に入ありしが今度の大赦に助るとして是のみ噂いたします^せ何惡七兵衛景清が存命とや「ハ

、ア有難しと喜ぶ體小市郎は猶爺親の無事を悦び手を合せあなたの空を伏拜み是天道のお蔭ぞと兩方無事をいさめども命救ふと殺すとは裏表なる襖ごし小市は猶も耳よすれば小京太は近^近、より^{せい}シテ鎌倉への堅めの門はいよ／＼明六つ前ならでは明ぬちやまで^亭いかに左様おあつらひの七つ立がよい時分もお休みなされませ「いひ捨奥へ走しり入る小京太跡に立直り心をいろの足ぶみに女房が枕につまずけばアイタ／＼オ、いたやのと目をさまし^の是は扱何うろ／＼夜の内にたつ者が今までなせにお寢ならぬサア／＼ちやつと休ましやんせいなア「引よせられて小京太もなよ竹なびく風情にて障子引立臥にけりこなたに獨り小市郎敵討ともしらばこそ我父上を尋ねしは何者やらん不思議やと小首を傾け手を組で思ひわづらふ折からに走り來るは飛脚の正六門口からすたき聲^正是五郎兵衛殿お宿にか五郎兵衛殿／＼「聞より亭主出迎ひ^亭オ、是は正六夜中にり、しいなり何處へ何の用でいかしやる^正六さればいのお上からの急御用で今から直に伊勢の國までいかねばならぬ内を出しなに火打を忘れたゆゑかりによりました

「聞もけはしき詞のする端近なれば小市郎立寄聞け
ばてい主の聲い、それは大儀な事幸ひ此に旅火
打是を持てゆかつしやれぢやがそりやマア何たる御
用ぢやなア正サア世には珍らしい事がある物今度の
大赦は皆科人残らずしらべて助かつたにソレ二十年
前から牢舎になりて居る悪七兵衛景清と云ふつはも
の伊勢の國の侍小京太といふ者のためには親の敵
勝負をするか丁簡するか小京太に逢ふまではたとへ
いかなる事あつても牢より外へは出すまいと是獨り
で埒が明かぬそれゆゑ伊勢まで小京太といふ男を呼
びに行く早飛脚随分無事でさらばぢやぞや亭オ、そ
れは御苦勞早く戻りや正皆にもよう云ふて下されや
「おさらばとかけゆく跡の門口をしめて亭主も入に
けり小市はハツと心付飛脚がいひし小京太とは必定
隣の相客ならん打はなさんとは思ひしが上イヤ／＼
もしも人違ひせば父を助くる妨ならんハテいかゞし
た物であらうな「心を碎き氣を削りとツつおいつに
思ひしが隣の客に足音を悟られじとや添臥の寢ての
思案とまどろめばすき間もれくる風につれ宿屋行燈
の灯もしめり跡はくらやみあやもなく旅の疲れや出

にけん二間の四人諸共に今を盛りの寢入花しばらく
時こそ移りけれ夜はふけてもう丑の時八つ立の道者
共大戸ひらいて打むれ出で旅ア、まだ夜は深いさう
なぞや旅然し是程がゆるりとしてよからう旅ソレ
／＼早い位にいて方々と見物しませう旅サア／＼皆
静に行ませうござれ／＼「皆々連れていそぎ行く跡
の大戸はやりばなし明には遠き夜嵐にひは／＼さつ
と笥に合し大戸はどふと打當るひゃきにびつくり二
間の女房共に驚き起上りそれともわかぬくらがりに
何事かはと胸騒ぎよく寢入りたる夫を起し宮オ、あ
んどの灯がしめつたか豊今の音はありや何ぞ宮是
小市郎殿豊是小京太殿兩起さんせ／＼「はや起き
たまへとゆり起し急に起せば雙方が一度にむつくり
むく起うつとりしたる有様宮ゆだんのならぬ旅の
空豊くちやつと目をさましやんせいなア「女心の諸
共に枕元なる二腰を夫にさしこみあなたもおしこみ
兩マア灯をともしてきませうわいなア「いひ合せた
るごとくにて二人は勝手へさぐりゆく猶くらやみに
小京太小市郎性根はいかに立上り途に迷ひしか寐は
れしかそこもしろさず入かはり宙を採り闇を蹴て正

體もなき折からに女房／＼は勝手よりともし火てらし手燭をば風にけさじとかゝげ出るあかりを見るより小京太が何思ひけん駈出すをすかさずとむる小市郎妻と妻とがさし出す手燭叩落して跡白浪夢か現か魂の飛が如くにと三重にて暮

續赦免景清の草稿

一面鶴ヶ岡段蔓の道具笹龍膽の紋付の幕東西に假屋口出這入床几を直し半澤六郎本田次郎上下にて赦免の帳を持打裂股立の侍大勢扣へ時の太鼓にて幕明「誹謗の罪も誅せざれば良臣來り集る習ひ御先祖の御弔ひ仁徳潤ふ大赦の庭右大將頼朝の仰を受け畠山の庄司次郎秩父重忠鶴が岡の段かつらに場所を構へ多くの牢者科人を助けゆるせる慈悲萬行民を惠の印かや檢非使の役目半澤成清本田近經赦免の姓名見あらため^{半澤}のう近經殿此度右幕下頼朝公御先祖の御弔とて此鶴が岡の社段に於て主君重忠に仰付けられ科人大赦行はれ據なき重罪人は殘し置き皆それ／＼おゆるしあるは有難い儀でござらぬか^{本田}半澤殿の仰の如く大赦御免の科人共殘らず助かり出たるが今一兩人殘の内廿年前より土のへ牢こめ置し惡七兵衛景清

かれは伊勢の三郎義盛が忤小京太が爲に親の敵と名乗此者に出合すば牢より出じと申に付伊勢飛脚を立つべき旨主人の仰貴殿計らひ申されしか^{半澤}澤夜前直様立たせたれ共伊勢と申せば遠方なればどうで當月中には事濟まい^{本田}景清一人にて跡々の一兩人も事濟まじ^兩ハテ氣の毒千萬な儀でござる「眉をひそむる折からに重門をおしひらき下司罷出^特牢に残りし惡七兵衛景清が忤日向の國の住人上總の小市郎と申者重忠公へ直訴申度旨願ひ候が如何計らひ申さんや「いふに兩人聞届け御前へかくと申上る檢非使の別當秩父の重忠兼て設けの御座の間に裝束正しく立出たまひ^{重忠}惡七兵衛景清が忤願ひとあれば父を迎ひに來りつらんかの伊勢の小京太とやらんは其身をねらふ敵と有て牢より出じと老氣をはる幸ひかな日向へ下りし景清が忤とあらば愛にひかれて助かる心もおこるべし其者是へ通してよからう「かくと傳へて出来る日向の國の住人上總小市郎景忠と申上たる若男大磯宿よりむく起に出し心は白洲の庭いぎつくらふて畏^いれながら某は廿年前牢合せし惡七兵衛景清が忤同名小市郎と申者此度大赦行はれ某が父も御助命

あるよし悦び迎ひに參上せり父をお助けあはざる願ひ奉る「詞工みにいひ上る重忠とくと聞し召し召し重忠汝忤といふによも僞はあるまじさりながら父景清が思ふ子細もあるなれば一應心腹を尋問ひ其後對面とげさすべし先々かしこに扣へてよからうい何分よろしく願ひ上奉る」かたへに扣へる折からに又も取次走り出侍伊勢の國の住人小京太武盛と申者御訴訟有て參上仕つてござりまする忠電ホ、割符を合すが如き小京太より訴訟とな是へ通せ侍畏つてござりまする「案内につれて出来る是も齡は若男おめる色なくあゆみより御前遙かに畏り上總某は伊勢の小京太武盛と申者此度牢に残りたる景清は父にて候三郎義盛が敵に紛れなし御上の罪科御免あらば由井が濱へ連參り尋常の勝負仕りたしあはれ此小京太に景清をたまはらばいか計の御厚恩有難く候はん」申上れば重忠も雙方一度の願ひゆゑしばらく工夫したまふ内以前の侍つかゝとあゆみ出で御前に向ひい多くの科人お助あり父景清計りをばおゆるしなきは大赦の妨はやゝ忤小市郎に下し置れませうならば廣大の御慈悲有難く候はんと「願へばあなたの侍が上總慈悲の道には隔なし親

の敵を討果さば則慈悲萬行景清は某へお渡しなされて下さりませう「すゝみ出ればこなたにもいイヤ忤の某へ上總イヤ敵の拙者めへ人下し置れば有難う存じまする」あらそひ願ふに重忠もあぐみ果させ給ひけり折こそあれ小京太が妻の豊くのかけ來り小市郎と名乗たる男の傍に走りよりの豊くノウ小京太殿推量に違はず此處へ來たまふは親の敵の景清を申受るお願私が爲にも舅の敵夫婦一所に討たんだ伊勢からはるゝ付またがひし自を見はなしたまふは胴欲でござんすわいなア「詞の違ひに重忠公各不思議と見る所に夫は妻を突飛しいヤアこな女は何のたはこと某は小京太でないぞ以前日向にて人と成りたる小市郎親景清を迎ひにこそ來たれ敵討とは何の事をこきりゝと立されい「目に角立て呵り付取ても付かぬ挨拶に女房豊くのぎよつとして豊くこはそも何のをたまふぞ現在敵を親といひ小京太といふ名をば小市郎とは何事でござんすぞへなア「いへどもきよろりと答へなく付はなければ顔打詠め豊くコリヤどうぞた事ぢやぞいなア「思案工夫の其内に又も來るは小市郎が女房宮崎小京太と名乗たる男の姿見るより

も門内へかけ入つて宮崎ノウ小市郎殿父御のお迎ひに
来るは一所の筈女房の此宮崎なせふり捨て來やしや
んしたエ、胴欲なお心ぢやなア「半分云はせずはつ
たとねめ付け上總ヤイ／＼こゝなうろたへ者今ぬかす
景清は某が親の敵我は伊勢の小京太武盛といふ者取
違ひたる馬鹿者め相手にならぬぞさつてをれ「云
ふに恠り女房宮崎宮崎てもけうとい小市郎殿いつの間
にやら名をかへて現在爺御を敵とはそりや何でゝご
さんすぞへなア「いぶかしそうに立よればこなたの
女房猶あやしく豊ノウそこなおかもじさま扱めん
ようなこちの夫も其通り小京太ぢやない小市郎ぢや
と連添ふ女房の私にさへけんもほろゝの挨拶は狐が
付たか氣が違ふたか只事ではござんせぬ心を付けて
ごらうじませ「互ひに夫に取すがり豊是小京太殿
女房の豊く野見まつてか宮崎是小市郎殿妻の宮崎見忘
れてか兩人性根を付て下さんせいなア「いへど夫は兩
人共振放して怒りの體豊てもめんような此有様
宮崎コリヤマアどうぞた事ぞへなア「どうした事と諸
共に驚を烏の夫婦中何を云ふてもあんがうのとりま
めもなき風情なり豊久野まばし思案顔豊ハア思ひ

出したノウ宮崎さまどうやらゆうべ一所に泊りし時
何かはまらぬ響に恐れ宮崎お前もこちらも夫をば急に
ゆすり呼起しそれより駈出し二人の衆豊互ひに詞
のてんでんはよう寢入たる其人を急に起せば魂が入
かはるとやら云ひ傳ふ宮崎おまへの夫とこちの人一度
に起した其魂もしや入違ひはせまいかいのう豊つ
かさま世に云ふれし事なれば有るまい事とも思はれ
ず物はためしぢや宮崎お前もわしも共に夫の魂に兩人詞
をかはして見るのが近道「心付くより兩人が互ひに
夫を入かはり宮崎ノウこなたの心は小市郎殿かいオ、
いかにも豊是こな様が小京太殿か上オ、いかにも
豊くいかにもなれどいかいせんいかに心は夫でも互
ひになれぬ顔かたち宮崎こつちの心がすまぬものうか
つに傍へもよられぬまぎ兩コリヤマア何んとせうぞ
いなア「顔打守り跡まざり二人が二人を見合せて又
立戻ればねめ付けて傍へもよせぬ其風情豊お前も
宮崎お前も兩コリヤマアどうぢや「こは何とせん悲しやと涙
の糸もむすばれてさばき兼たる計り也重忠委しく聞
し召し重天竺の離波多尊者は骸をぬきかへ唐土の華
陀が療治は心の臓を入かへたる例もあれば女が詞も

あるまじきにあらず又あやしくも不思議なり元牢舎の景清は平家方にて名高き兵又殺されたる伊勢の三郎義盛は義經公の家來にて以前大佛供養の頃景清を擒となし又三郎は義經の恨を報はんと魚の鱗を目にはめ我君を覘ひしゆる男山にて捕子とし兩人共君に敵たふ科人なれど主の恩を報せんための敵たいなれば忠心を感じたまひ幼少の忤共へは助命させ伊勢と日向へ追拂ひ二人を一つ牢舎させしが雙方劣らぬ強力にて須磨壇の浦の合戦の物語我君所望有し時兩人更に辭するの色なく互ひに戦ひの有様を力に任せてせし折から日頃は懇意の中なれども源平と立別れ武勇を争ふは武士の習ひはづみを討つて景清が打たるこぶしの強かりけん伊勢はあへなく相果たりむざんなれども定業にや伊勢は其儘生かへらず景清は此鎌倉へ召かへし土の牢屋につながせども此度の大赦を幸ひ助けんものとは思へども景清よろこぶけしきもなく昔にかはらず我を張て相手の伊勢が忤を呼べといふに是非なくけふのまぎそれ聞付て二人が願ひ何れを何れと分けがたし所詮景清を呼出してのうへ先此所にて對面させよ

半澤 畏つてござりまする「本田

半澤兩人に呟きたまへば打うなづきやがて御前を立にけり程もあらせず警固の役人前後左右を取巻て連て出たる召人は慈悲に弱らぬ丈夫の筋骨惡七兵衛景清と人も見えらぬ牢びたし助けとあるに隨ひて御前にこそ畏る

忠重

ヤア景清子細は本田半澤等に承り定て

とくと會得すべし汝二十年前よりの牢舎なれば敵の忤又我忤にも幼少の時別れ見覺えまじ夫ともに見し

大藤

いかにも子細承り得心

致し候へ共何れが忤何れが敵と拙者めも見分け難し

定めて彼等が申詞に偽りは候まじコリヤゝ忤迎ひ

に來る志孝心の程過分々々いざ同道して立歸れ「し

づゝ」と居直れば小市郎と名乗りし若者嬉しげに立

上りいハア、有難や忤や我孝心のといきしかいざ御

同道仕らん「云ひさま傍ににちりより刀すらりと拔

はなしい敵景清覺えたか「唯一刀に切倒しすかさず上

にのつかゝりといめをさせば各仰天敵と云ひしかた

上

への若者こはたばかられしか無念やな「刀引抜き

切掛るをわつしと受る間もあらせず透間を覘ふ互ひ

のはげみ二人の女房は氣をあせり寄付かたもなき所

に重忠怒りの聲はげしく

忠重

ヤア此所を何處と思ふぞ

雙方共にしづまらふぞ「しづまれやツとの御上意にはつと雙方扣へしが敵と云ひし若者はじだんだふんで聲をあげ^上チエ、残念や口をしや何をかくさん我こそは誠景清が忤の小事郎魂かはらず性根も亂れず親人をお迎ひにと大磯宿まで來たりし所敵小京太に出合すば牢より出じと宣ふよし飛脚が詞に聞しゆゑ俄の大事と女に包み小京太と名乗來て父を助けんとおもひしに油斷して眼前にやみくきやつが手に懸り御最期させしが無念やなア「齒嚙をなせばこなたの若者につこと笑ひ^{ハテ}天道は明らかな我こそ誠は伊勢の小京太その大磯で飛脚が詞は聞かねども何卒敵景清を討て亡父に手向んものと心ばかりはいそげどもよくく思ひ見れば大赦は人の命を助る作法敵討と云はゞよも御免あるまじと態と忤小事郎と僞り本望とげて満足やなア「いふに豊久野いさみ立^馳くオ、お手柄くそうした心と露しらすよしなき案じは鼻の先智恵まんくな我夫「あふぎ立ればあなたの女房夫の本心聞くにつけ落付ながら眼前に舅を討した無念さは胸にせまれど夫婦共上を恐れて扣へ居る本望遂げし小京太は重忠の御前に向ひ^せ私の宿

意を以て上の大赦を妨げる科のがれがたしいかやうとも御制法に行ひ下さるべし「覺悟の體に小事郎やがて御前に兩手をさげ^上子細は唯今お聞の通り此場で彼等と勝負をば仰付られ下されうならば有難う存じます「願へば重忠取上げ給はず^忠重汝が願ひは復讐叶はぬく小京太は親の敵を討たる事孝の道順の道大赦には構ひなし急ぎ古郷へ歸るべし「仰せは身にも冥加にもあまりてハツと浮立つ夫婦^{いせ豊}エ、有難う存じます「唯有難しと一禮し行んとするを小事郎反打かけて立ふさがり^上總ヤアお上におゆるし有とても某がゆるさぬ依怙最負あるお捌き場所の恐れももう構はぬいざこい小京太サア勝負く「いざこいやツと拔放す是非に及ばず小京太も運は天なりサアこいと月たんきれんの太刀捌き女くも身をかためすき間を覘ふ鶯の目鷹の目重忠も詮方つき^重重ヤアヤア半澤本田最前云ひ含めし科人にあれあの争ひをとめさせい^本半澤畏てござりまする「御錠と共に兩人が伴ひ出る勇氣の老人中に飛入左右へはたと當わくる又打かくる二人が刀老氣を張て弓手馬手しつかと柄を握り詰め留るにあらでこはいかに左右に持た

る刀を重ね己が首に引かけてエイト引たる弓手の肩
うんと引たる馬手の肩しゝむらかけてすつかと切り
左右へはなしどつかとふし各是はとてんどうの思
ひがけなき仕業なり重忠ふし議と詞をはげまし忠重
是々景清何故この最期汝が命を助けんとさまゝ心
を碎きしに無足にするかななんと「仰を聞くより
小京太かけよりゼイヤア景清は某が最前手に掛け申せ
しが今また此者を景清とは倉忽なる御一言「妻も驚
く其風情小市夫婦も共々に上景清と申者但しは二人
候や「ふしん立れば重忠公莞爾と笑ひを含ませ給ひ
忠愚や汝等最前敵と悴と入變り何れを何れとわかつた
ぬゆゑ以前調伏の科ある備前の大藤内を斷ざいの牢
合申付しが命助るといひ含め面體見しらぬを幸ひ景
清に仕立小京太に討したり是たばかるに似たれども
天下の科人討取りしは親の敵討たるに百倍の高名又
小市郎にはひそかに父景清を渡さんと思ひしにその
間も待たぬ若氣の狼籍はて残念至極やなア「最期を
悔む仁者の詞四人の者は一度にハツと計りに感じ入
る手負の景清起直り景清頼朝公の慈悲心を無に致せし
一通り又兩人が刀にて相果る子細憚ながら重忠殿に

も若者共もよつく聞け假にも最前汝等が敵悴と偽り
て來りしは偽ならずそれが則誠の事と計りでは合點
ゆくまじ元小京太が親伊勢の三郎義盛と某は同年に
て源平兩家と争ひなきうち兄弟の如く和睦じくい
かなる事にや諸共に四十二の二つの子をもうけし時
は其子に災難ありといへば妻にもかくし藁の上にて
汝等二人を取替たり四エ、エ、エイ景サ、驚は尤も
く其證據は此兩腰備前正常波の平互ひに刀を相添
へ養子とし共に災をのがれんと思ひしに災難はのが
れずして夫より源平鎬を削り戰果て二人共主君の恨
を散せんと頼朝公を付視ひ終に擒となりしかど二君
に仕へる所存もなく都に牢舎の折からに合戰の咄を
好まれ望む所と我々兩人仕方ばなしの物語に三郎は
我に殺され此鎌倉へ此身はひかれ土の牢にこめられ
て二十年の春秋は身のふけゆくを思はずして伊勢と
日向に人となる子供が年をかぞへしぞや「肉身わけ
し因果さは我長命はいのらずして小京太が手にかゝ
り景清敵討たる手柄者運に叶ひし侍と譽させたく云は
せたく助る命を助からず牢にいちばる我心「子ゆゑ
のやみとしらざるか景清又小市郎は健氣にも敵といひ

寄り助る所存孝行とも過分とも我子といへど根が他人冥加の程も恐ろしく汝が刀は右の肩小京太は左の肩實父養父の敵をば一度に本望遂げさせしぞかならず親を討たと思はず敵を討たと勇んでくれそちらが代りに嫁たちはせめて舅といふてくれ六十年來我を張りし矢竹心もけふの今一時に打れし景清が身のなる果を推量せよ「推量せよと雙方に引寄く」かたるにぞ宮崎はすがり付^{宮崎}養子とあつても我爲には舅御樣^{豊く}イヤ自が夫こそ眞實の親ともしらず討んと云ひし身の冥加「勿體なやと銘々が言譯涙兩人の夫々は諸共に不孝をゆるして給はれと四人一度に臥しまろび消入ばかり泣しづむは七里が濱の夕風に浪打上る計なり重忠深く感じたまひ誠や麒麟も老ぬれば鷺馬に劣ると平家の一門西海に沈みしより我君を敵と規ふ上總の景清忠義の程を感じたまひ御味方申せよと是まで度々すゝむれどもいつかな聞入る所存も見えねば二十年來牢びたしと相成りしが今日只今肉身の悴に逢ひて我とわがさんげの上に相果るも立通したる梓弓誠の武士はかく有たし伊勢と日向に追拂ひし二人の悴は今日の大赦に付てお構なし今より我

君に奉公せん心はなきや二人の心底いかに「いかに」と慈愛の詞二人もかたち改めて^いすりや親々の誤りにて二ヶ國へ捨られし咎めもあり^上我々兩人今日より頼朝公へ御召抱へ下されうとない願ふてもなき此身の仕合せ^上有難くお受申すでござります「喜びいさめば宮崎^{豊く}のあゝ有がたやとふし拜む景清慈悲心身にこたへ^景ア、有難や忝や二人の悴は惣追捕使頼朝公に奉公とや神か佛か重忠殿の御恩忘るなよ伊勢と日向に育ちしゆゑ國は隔てど心は隔てないでゝ生涯放れぬやう兄弟の縁を結ばん二人が持し其刀とくゝ是へ「いふに隨ひ兩腰を右と左にさし出せば其まゝ兩方取かはし^景小京太が刀は小市郎小市の刀は小京太とかう取かへて渡す心は最前女原が云ひし疑ひ今でもおもへば神の告コリヤ刀は武士の魂を入かゆれば一體分身兄弟同然「いせや日向の魂が入かはりしと末代の文句に残す我^景儼死だ跡でも中よくせよさらば」「死る今はも丈夫の景清重忠ふびんと立寄たまひ^重ホ、ウ勇ましき武勇の魂今相果る際となり二人が悴の身の面目その身の武勇あらはす爲め八島の浦の戦を物語て聞すべし」所

望く／＼と有ければ眠る眼をくわつと見開き景才、清オ、

面白く／＼かく戦國に生れし身は其合戦の物語所望と

あらば身の譽いで物語で聞せ申さん忤共も承り末世

の手にいたすべし「物語らんとどつかと座し景い、清い

で其頃は元暦元年船と陸との戦ひに我先かけんと

敵味方「はやり切れども深手のなやみ重忠始伊勢

上總嫁子くも立かり忠重思ひぞ出る壇の浦の其船

軍今ははやい閑府に歸る生死の上海山一度に震動し

て豊く船よりは時の聲崎宮陸には浪の楯忠重月に光るは兜

の星の影「水や空そら行くも又浪のたてとの打合ひ

さしちがふる船軍の掛引浮つしづむづせし程に清景

清心に思ふやう判官なればとて鬼神にてもあらず命

を捨てやすかりなと思ひ教經に最期の暇乞陸に上

れば源氏の兵「あますまじとてかけ向ふ景清是を見

て物々しやと夕日影に打物ひらめいて切て掛ればこ

らへずしてはむかひたる兵は四方へバツとぞ逝にけ

るのがさじと諸いさまふしやかた／＼よ源平互ひに

見るめも耻かし諸上一人をとめん事はあんの打物小

脇にかいこんで景何がしは平家の侍悪七兵衛景清と

謠「名乗かけく／＼手どりにせんとておふてゆく三尾

の谷がきたりける甲の鏝を取はづし／＼二三度迹の

びたれ共思ふ敵なればのがさじと飛かり甲を追取

エイヤとひく程に鏝は切れて此方にとまれば主はさ

きへ迹のびぬ遙に隔てゝ立歸り清景去るにても汝お

そろしや腕のつよさと云ひければ景清はみをのやが

首の骨こそ強けれと笑ふて左右へのきにける昔忘れ

ぬ物語「語る内にも血死期時はや目をねむるだんま

つま二人が嫁の介抱にもうお別れかとなき出せば

心亂るゝ小京太小市上總い逢始の崎宮逢納め清景秩父の

庄司重忠殿忠重悪七兵衛景清清景忤らさらば四人おさらば

「今ぞ往生安樂と落入る玉や伊勢日向入かはりたる

魂よばひ咄しを世々に殘しける

是弘化四未年の冬東都淺草綺語堂に於て一時の戯に

書たる草稿のまゝ爰に記し置く者なり

南北軍問答院本の話

我祖父西澤一風翁の作にて享保十巳年三月三日より

豊竹座の淨瑠璃にて今嘉永三戌年まで百二十六ヶ年

となれり

付り楠帶刀正行は智謀をつばさとして九重にはうつ日本のほうわ
 宇都宮公綱は武勇をうけいぜいの服にも時至つて色香うみ出
 す吉の櫻

南北軍問答

作者

西澤 一千 風柳

井に左兵衛督直義は奸曲をつばさとして九重にはうつかまくらの
 高武藤守師直は我慢をてんぐあかはたにまき込泣顔のまゆ作
 り仁智の六本杉

序詞孟子三子者の勇を論す。北宮黝は子夏に似れ
 り。孟施舍は曾子に似れり。二子の勇は血氣より出
 強きに似て實はよわく。曾子の勇は仁義にもとづ
 き柔なるに似てかへつてつよし。我日の本の天津
 君後醍醐天皇。北條高時入道の逆意をしづめ暫太
 平の代なつしも再び花の九重に色香争ふ梅櫻チロ
 シ春やむかしの春ならぬ楠判官正成延元元年の五
 月雨や。湊川の泡ときえ新田左中將義貞は北國の
 雪に武威を凍し。手を出す官軍もなかつしかは。位
 は光嚴院太上天皇

此軍問答四の切は赤坂城にて楠正行父正成の追善を
 營むに焼香の列は軍功に依て定むと思智早瀬等の女
 房を始め家中の女房揃の場にて女形多く出る狂言な
 り此中に泣男杉本佐兵衛シテの場なり佐兵衛本名は

大佛陸奥守の忤にて楠家は君父北條の敵なれば問者
 となつて入込居るいと珍らしき趣向にて世人しらざ
 る事残念なる狂言なり泣男は太平記等に有てよき筋
 なれど淨瑠璃歌舞妓に脚色しものなく漸やく歌舞妓
 に安永四未年顔見せに角の芝居にて潔楠斬にあり是
 は楠昔斬の宇都宮公綱と蘭奢待の妻鹿彌三郎を混じ
 て作し馬鹿と見せて後本心を明すよき役なり目計花
 野吉野山には泣坊主とて敵役に仕組めり此餘に泣男
 の脚色見えず此軍問答の杉本佐兵衛は實惡の役にて
 仕手の役なり淨瑠璃歌舞妓に滑稽役にて名高き物草
 太郎是は古き物語物にある名なり是を本名千の利休
 として十帖源氏に出せり次に謠曲の狂言に見物左衛
 門と云ふ道外役あり是も本名有て歌舞妓にては謀反
 人とせり小栗判官車街道の横山太郎或は太閤記の世
 界に曾呂利新左衛門等なり道外の儘にては役かろく
 よき役に成り難きゆゑ底を立役か謀反人と仕組む此
 道外がりの役を近來歌舞妓役者は好まず早く本心
 をあらはしたがりにて馬鹿にていく場も出る事を嫌ひ
 始より作り馬鹿を見えすく仕手甚多く皆藝道の拙き
 より發るなるべし濡事やつし役も是におなじ昔やつ

し役はいつまでも女に迷ひこなし和らかなればいつもやつし役のみをしても當りを取りれり坂田藤十郎の女郎買などの名譽は云ふに及ばず元祖小川吉太郎元祖嵐三五郎の頃までは座頭にてもやつし役ならば外の役をせず其後段々人氣さかしくなるに随ひびんとかな(梨園通言きつとせしやつし)流行事とはなりぬ今や惣びんとかな計りにて眞の濡事やつし役者を見ず世の流弊なれば是非なしといふべし

古代人名狂言の説

淨瑠璃歌舞妓の狂言に遣ふ人名にも種々の仕組に出るあり又事蹟ありとても狂言に遣はざる人あり所謂西行一休定家行成などを始あるは長明兼好近くは俳諧師芭蕉など狂言に遣ふ事少なし中にも西行は軍法富士見西行あり一休は一休漸あり爰に享保年間錦文流の作に西行法師墨染櫻と云ふあり此西行の役は佐藤則清として北面の優男入内ときまりし姫君に思はれ加茂の競馬の節不義あらはれ追放となり出家して西行と改め富士の根方への道行有て江口の君比丘尼と成り廻り合て口説の文句あり西行をやつし役にせし事いと珍らしき心地す又享保の末に田中千柳の作

にて本朝檀特山と云ふあり是は一休いまだ在俗の時の狂言にしてやはりやつし役なり仕組おなじく宗純親王と云敵役の王子の仰を受けて姫君に入内をすゝむる役目にたつ姫君一休に惚れて競馬の棧敷にて不義の汚名を受け遁世して一休となるもと宗純親王と一休と取替子にてといは親王亡び一休の名を宗純と名乗る此取かへ子は役行者大峰櫻に大友皇子と役の小角と取替子におなじき仕組にて都て墨染櫻の西行をはめて檀特山の一休とする三の切蜷川新左衛門敵討の場などは墨染櫻の儘なり元祿の末近松の作最明寺殿百人上臈と云あり是は北條時頼記の女鉢の木によく似て鎌倉着到の席に諸侯の女房達計りを具し時頼の御臺所出座あり經世は妻に馬の口綱をとらせ着到すると仕組めり又近松の作に兼好法師物見車といふあり是は鹽冶判官の妻顔世の前に高の師直戀慕して侍従といへる女を仲立に頼む侍従は兼好の弟子にて師直の手打にあひ兼好の菴室へ侍従爺親衛士の又五郎娘の最期を悲しみ告來るなどと徒然草の文を書入れたれど何れも世に行はれずまして赤人人丸など歌道に名高くても傳奇に遺らず書道には名高きなれ

ど反魂香に狩野元信信郷記に狩野尚信等遣ひ有ても浮世又平の方世人よくしりて狂言になるならざるありまして宗祖の名智識の事蹟などは狂言に有て堅づまりて其宗徒ならでは喜ばず戯場小説の作者の得意とする者は其傳奇詳かならざるもの年月時代のわからざる物を題として善人を惡人とし惡人を善人とし時代に古今の相違有ども道々の對する者を集めて狂言の種とはなせり思へばあやしき業なりかし

鹽賣長次郎の話

寶曆年間京師の町々へ鹽商人長次郎と云ふ曲者有て達なる胸前垂をして賣歩行しを堂上方のやんごとなき姫君此男を垣間見たまひ門前を賣聲のする度にお物見より透見し給ひ後々は門内へ呼込み鹽を求めさせ浮世噺などをさせ此者に懸想ありける體を見て鹽賣或夜忍び込み姫君を盗み出し二條新地とか六波羅とかに己が住家あるまゝ姫君を連歸りむさくろしき植生の小屋に入置き心の儘になぐさみける館にては姫君見えさせたまはねば密々に御吟味ある所やうく見當り段々の御理解にて姫君を歸せとあれども我を其館の主とせんには歸すべしなくては金錢に

拘はらず姫はいつかな歸さじとて傍若無人の挨拶に及びければ堂上家にも詮方盡き御所司より町奉行へお頼有て油斷をはかり終に曲者を召とらせられ無事に姫君を取かへし其曲者は梟首にかゝりしといふ一奇談有りけり明和四亥年の益角の芝居にて歌舞妓狂言に取組み則外題を大坂日記鹽長次郎と賦して其頃の立役藤川八藏鹽賣の役をしけり明和六丑年の冬竹本座淨瑠璃に近松半二作近江源氏先陣館に是を書込み鹽賣長藏本名三浦之助北條時姫の事に作れり是より後は鹽賣長藏は美男の立役のする事と心得れど實は梟木にかゝりしかどわかしの科人なり續編に云聚樂町梅澁賣の由兵衛とおなじき大惡人なり文政四巳年中の芝居にて二の替り狂言にけいせい廓島臺と賦して鹽の長藏に嵐橋三郎三好長慶に松本幸四郎足利時代に取組しが姫の役を岩井半四郎に見込書上しを杜若姫の役を斷りしゆゑ著を失ひさまで當りもなかりしいと残り多き事にて有りけり

歌舞妓に名高き人名の説

播州高砂の船頭德兵衛は一とせ漂流して天竺に行き年月立て無事に歸國し異名に天竺德兵衛と呼る是等

は歌舞妓作者の得意とすべき物にて謀反人とせうとも善惡心の儘に遣へる名なり既に天竺德兵衛聞書往來と外題して古く狂言口はなしけり大阪廻船問屋に桑名屋何某とて有り其船頭に海上乗の妙を得し徳藏

と云ふ者大晦日の夜は渡海の船を出さぬ習ひなるを尤も據ろなき急物にて船を沖に出す船にあやかし付て今宵をいつとおもふ又恐ろしきものはなきかと問ふ其答に大晦日合點なり世に恐ろしき物は世渡りなり其餘に恐るゝ物天地の間になしと云ふ海上のあやしみ此返答に消散せしとは古く人口に膾炙していつの世の人といふ事をしらず明和八卯年春中の芝居にて桑名屋徳藏入船噺と外題して並木正三作せしからは是より前の人なるべし際限なき大千世界なれば昔より漂着せし船頭も多かるべく海上乗の名譽の者も數多あるべきに此二人の名のみ高きは所謂其名の徳藏徳兵衛なるべし此餘船頭にて名高き者は豊太閤朝鮮征伐の御時肥前名護屋へ渡海の船頭與次兵衛おんどの瀬戸にて難風に逢ひ船を破りし誤りとて切腹す與次兵衛灘と異名は冠れども狂言にては遊山櫻に敵役に作せり元より拵へ事にはあれども逆櫓の船頭の

名に福島松より呼て松右衛門とはよく思ひよせたりといふべし矢口の渡の頓兵衛とはとんよく深きといふ心にて福内鬼外も名付けしなるべし爰に一笑話あり船頭の因みに出す

響灘入船噺の語

寛政三亥年の盆狂言角の芝居にて響灘入船噺と云ふ狂言あり船頭五太夫に淺尾爲十郎娘の智の爲に濕氣日和合點にて海上へ乗船し破船(渡海カ)させんと風雨を厭はず乗出す場は序切なり近來濃紅葉小倉色紙に島の小平治嵐吉三郎のせしは此狂言をはめたる物なり其時奥山(淺尾爲十郎)一體狂言の働き烈しく早切早立にも妙を得たる事自慢の心なれば若き折沖中にて難船したるも度々見及び又船に乗合せ難風に逢ひたる事も覚えあれば此五太夫役にて難風に逢ふたる重船頭の苦心をして見せんと道具にも詭有て船の段々波に當つて碎くる所をまのあたりにして見せしが餘り正寫しにて見物も心に小凄く覺え別して海上商賣の者は縁起惡しきとて一向見物に來ず其場すみし跡へは見物來る奥山は船頭の骨髓をして見するを自慢にて見物揃ひてからでなくては此幕を明けず後

後は評判高く見物まるで來す成りけりと云ふ是等は餘り疑り過て人の好嫌ひをしらざる所なり是に似たる話あり寛政五丑年角の春狂言勝武草奴道成礎に尼が崎武庫川などにて年々催はす花火狼烟を舞臺にして見せ花道戸屋の内へ筒を向け打こめば五色の絹など向ふ棧處の上にあらはれ出る趣向なり作者並木五瓶奇を好む癖ありて朝四つ時とも思ふ頃序切にて本銃炮の音二十三十も鳴らせば舞臺にてはいかなる事をするやらんと早く見物をよせる工にて有りしが子持の見物は音に恐れて泣子を抱へ逃て出るなど騒動せり是も一つ二つなれば我慢なれ共二十三十も響く事ゆゑ甚不評にて纔の興行にてけいせい陸玉川とかはりたり又此前年の二の替り中の芝居にて入間詞大名賢義序切は大友宗麟の養子殿大友市正澤村宗十郎江戸よりの歸り立にて本國へ初入部の狂言此時の行列は古今に珍らしき程の美を盡し惣座中表方は云ふに及ばず日々本行列の雇ひ其多く紀伊様の行列を學び花道舞臺明地もなく並び見せんと趣向にて乗馬に事かきいつもの芝居の馬にては恰好あしきとて馬屋にて毎日三疋を借り此行列に引出し所小道具の馬とは

かはり見えよければ日々乗馬を遣ひ居し所或日畜生の事なれば舞臺にて糞をしけりそりや馬が糞をせしよと笑ひ出せば棧敷場の人々皆同音に笑ひしゆゑ乗馬驚き刎出すそれにつれて乗替の馬も刎出し舞臺花道とも行列並びて馬をどこへも引出すべき所なく大に騒動して翌日より是に懲てやはり小道具の馬を遣ひしとなり是も五瓶が戯れより出て此不覺を取りし事云ひ出しては笑ひしと以前は假初にもがゝる滑稽の笑談あり

彫物師左甚五郎の話

淨瑠璃歌舞妓にも有て世に名高きは彫物師左甚五郎なり此人紀伊國根來東坂本の産にて彫工の名人なり天正年間根來の亂を避て城州伏見に移り皇都の寺院及聚樂桃山城内の欄間の彫物に名譽を遺し伏見にて歿す此門人に左宗心左勝政等あり飛驒の内匠とて古く呼るは一人の名にあらず飛驒の國にはよき内匠交代多かりしゆゑ然か呼來る名にして甚五郎は左利なれば左の異名をその儘に呼ぶものにて後人飛驒の内匠と左甚五郎とを混じて思ふも多かり何を見ても古き彫刻物を見れば甚五郎の作なりと云ふは其名高か

りければ時代の新古に拘はらず左の名を呼ぶは幸ひといふべし是等は狂言作者には誠に勝手よき名にていつの時代にも用ひてさし障なし當時専ら歌舞妓に物する九條の里にて傾城を見そめ丹精をこらしお山人形を彫るその人形働きて後主人の姫の身代りとなる狂言の元は彼鍛冶屋仁藏島原の全盛吉野太夫を見そめ戀病となる吉野是を聞憐みて仁藏を呼入れ煩惱をはらさせしとの一話は其碩自笑の頃の雙紙にまゝあり山崎與次兵衛壽門松の淨瑠璃にはなん與兵衛(難波屋與兵衛)藤屋吾妻に戀病ひと近松翁は作れり此鍛冶屋仁藏に思ひよせて甚五郎傾城を見そめ其姿を彫刻するに精神具はり働くと作り設けし者なり

目貫後藤浮世又平の話

目貫彫に名高き後藤祐乗の名をかり後藤又兵衛基次の事を三位重衡の後藤兵衛盛長と三つを混じて義經腰越狀の目貫師五斗兵衛を作り心は朱買臣身貧しく妻に罵られ後出世して其妻悔むとの事蹟を作りし物なり又大津繪の諷(祖カ)なりと云湯淺又兵衛世に浮世繪の鼻祖なりとて浮世又平を土佐の將監の弟子とし手水鉢に肖像を畫けば拔通りし妙を感じて土佐の

又平光興と改るなどは反魂香に近松翁の作せしより今物しらぬ婦女子などは實説なりと思ふ者も多かり小栗宗丹といへばけいせい花繪合といへる歌舞妓狂言に色惡方に作せしより惡人と心得長谷部雲谷といへば何の狂言にても敵役に遣はれり其人々の幸不幸なるべし

鍛冶正宗國俊の話

鍛冶に名高きは三條小鍛冶宗近なり彫工の甚五郎とおなじく何にても古き刀劍類を見れば小鍛冶宗近の作と云ふ所謂祇園の薙刀鉾の長刀又北越くさり山のくさはりは數年經れども打す宗近の作と云尤も謠曲にも小鍛冶有て名高きゆゑ然いふは理りなれ共鍛冶にも薙刀もくさりも鍛ふ事なるまじくと思はるゝに何を見ても宗近の作といふも又をかしからずや宗近の狂言は神勅嫁入小鍛冶と云有り刀鍛冶には古來名譽の人多けれども新薄雪物語の淨瑠璃に五郎兵衛正宗來國後團九郎と共に刀を鍛ひ團九郎湯加減を見んとて右の腕を切落され左計りにて後に打をてんば正宗と云ふ事を作り込みしより此三人は名高し是に似たる話は四代目河内守國助代々名鍛冶の家ながら幼く

して父國助におくれ奥義をしらず小林伊勢守國輝に鍛煉の術を學べども湯加減の一大事は秘傳なればゆるさず故に國輝に一人の娘あり貌醜陋なるを乞受て國助妻となし年月立て妻にかたるは汝をむかへて妻とする事かの湯加減の秘傳をしらんが爲と心底を明

かせしかば妻も鍛王の娘なれば道に切なるを感じ近日一刀を鍛煉して湯を渡さんとする時我病氣發せるよしを告げやらば取る物も取敢へず來るべし其跡を伺ひたまはゞ湯加減をしらん事必定なりと謀を極めて待所に何某より命せられ刀劍鍛煉の事有て國助も合槌に行やがて湯を渡さんとする時國助が小僕走り來て家室急病發し絶入したまへりと告しかば國輝大に驚き河内にも來れと云ひながら側にありし一桶の水を湯船にどうと入て走り出たり國助は謀破れ茫然たり國輝は國助が家に至り見れば娘は尋常の體なれば子細を問ふに國助も走り來たり夫婦詞を揃へてかの湯加減の事をかたり火急の期に臨んで業に切なる事を感じ其罪死に當れりと謝せしかば國輝も父祖以來の知音といひ髯舅の間柄惜むべきならねど古も是を窺ひ片臂を打落されたるもある物と深く秘した

れども重々の深意を見届けたれば相傳せしむべしとて委しく傳へけるより後國輝國助一雙の名劔を鍛ひ出せるとぞ是國助を國俊とし國輝を五郎兵衛正宗娘をおれんとしててんば正宗を團九郎と作り設けたる者なり

高野女人堂心中の話

寶永五子年竹本座の淨瑠璃に近松門左衛門作にて高野山心中万歳草と云ふあり紙屋宿雜賀屋與次右衛門の娘お梅と南谷吉祥院の小性成田糸之助との心中あり此道行に高野の名所々々を出してといは女人堂にて心中對死の所の文句にいと珍らしき文あり都て最期の場に及んではいつも南無あみだ佛とはいへど題目を唱へるも口拍子あしく大約が念佛なるにまして陀羅尼などは色氣すくなくて唱へる事なし此高野計りは念佛題目は唱へすいかゝあらんと見れば「夫婦親子一蓮のしめしの時刻のばされす只今ぞと脇差抜胸におしあておんあばきやべいろしやのまかもたらまにはんどましんばらはりたやウンと突こむ切先の肝に當ればのりかへりはりたやウンとくり通すあうん息もきえく」とのツつかへしつ苦しむ聲下此略

淨瑠璃今嘉永三戌年まで百四十三年となれど昔も是らは作者の穿とやいふべし

島原の青葉薄情の話

寛永年間六條柳の馬場より當時の島原へ廓の引けたる頃廓中に青葉と云へる女郎あり餘り繁昌もせず借金年々に嵩むを愁ひ座都何都いもとか云ふ盲人と契り心中をせんと謀る盲人も青葉が手管にのせられ或夜廓を拔出て榎木原より丹波路さして兩人とも落行しが途中にて青葉の心底かはりかゝる盲人と死ん事このましからずと云て今更變改もならずと何となく街道ならぬ山道へ連れ行情なくも盲人を獨り捨て置て其身は廓へ歸り何しらぬ體にて勤め居りしとぞ盲人はかゝる事とはしらざれば青葉くと呼かくれども答へなければ終夜尋ね迷ひとかくする内夜も明たれば里人に道を問ひからうじて廓に歸り青葉の事を聞くに勤居るとの事元より表むきに連立出たるにあらねば恨もいはれず其薄情を唱歌に述自ら手を付け絃諷ふたる青葉の唱歌なりとぞ「こは情なの仕業やなさのみ人にはつらからで悲しみの涙眼にさへぎりて西も東も白波のよるべ定めぬうたかたのいつそ浪とも消

もせでこがれこがるゝ身の行衛青葉くと呼べども濱のはまの松風音ばかり松風濱のはまの松風音ばかりそよと計りの便もがなと恨み嘆くぞあはれなると恨の唱歌明らかなり廓中に諷ひはやりしかば女聞づらくやありけん亡命して行方をしらずと此一話予幼き頃好人より聞けり依て梅玉に此事を話したり文政五年年の盆角の芝居にて戀女房染分手綱にて鶯坂左内竹村定之進座頭慶政お乳の人重の井比糖の八藏五役歌右衛門(梅玉)勤しが慶政役にていつもは虫の音を諷ふ所を青葉に諷ひかへたり其場の移り甚だよしと悦びける名人役者はかく聞く事くに捨ず用ふる所感すべき事にあらずや

西澤文庫傳奇作書附錄下の卷終

西澤文庫傳奇作書後集上の卷

目次

- 一 京攝戲場三番叟の圖
- 一 同脇狂言の事并に圖
- 一 東都三座脇狂言の事
- 一 中村座酒吞童子の文句
- 一 市村座七福神の文句
- 一 河原崎座甲子待の文句
- 一 中古江戸三座通詞の事
- 一 江戸狂言待た暫の事
- 一 當世榮花物語の序
- 一 同初編六編迄の目錄
- 一 傾城纏幕湯の筋書
- 一 續新齋夜話の一話
- 一 纏幕湯後齣脚色の話
- 一 豫州松山開城の一奇話
- 一 假名手本四齣裏の正本

大歌舞妓戯場
三番叟之圖

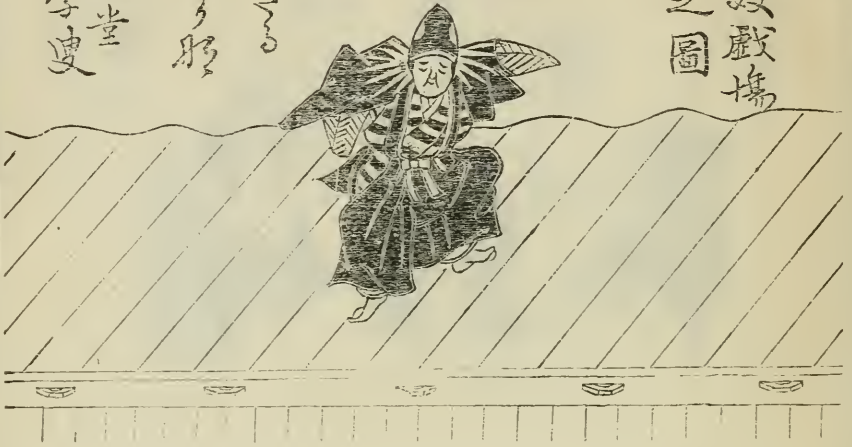
狂言の
種小

舟

珍菜々

待語堂

李史



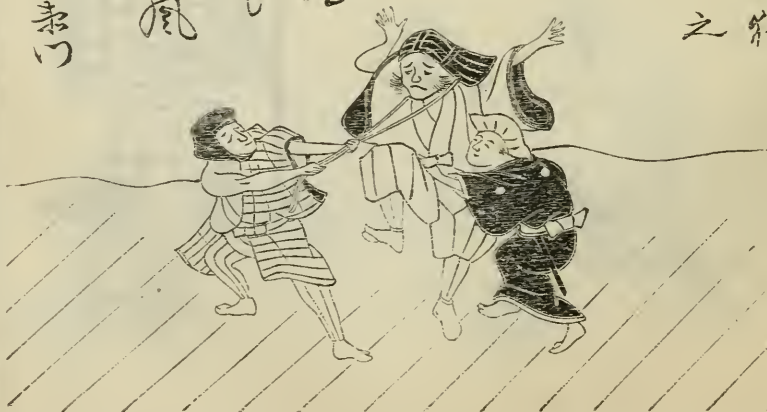
二の替り脇狂
言花盗人之
圖

抱いてもぬ
唇おし

春の風

大坂

吉左衛門



京横服狂言
炮烙賣之圖

あゝろくの

これぬ

日々

ふー

花の春

接尾

あゝろくの



中村登

照狂

言

酒

吞

童子

之圖

作り

獨活

舌赤

一てぞ

歩ひぬ

中むら

菜譜



森田屋脇狂言
甲子待之圖



正本の
花びらき
と
甲子待
森田屋脇

市村屋脇狂言
七福神
之圖



あうぎ
代小
その名
廣く
春の水
市村
屋脇

西澤傳奇作書後集上の卷

西澤綺語堂李叟著

京攝戲場脇狂言の事

毎朝明六つの矢倉太鼓を打切れば三番叟初る是に次て狂言の大序までの内に勤るを脇狂言と云ふ囃子鳴物は太鼓鉦甲太鼓のみにて二の替りには花盗人前に圖を出す通り盗人大盡酢口三人にて各無言仕方ばかりにて京師壬生地藏堂の狂言の通りなり次に炮録賣大名羯鼓賣三人圖は前の如く是は壬生狂言とは違ひ詞あり此餘地藏祭川渡寺子屋聲入米盗人^{未盗人カ}奴駕籠昇等京師千本閻魔堂の狂言の如く數番ありといへども今は二の替りの花盗人のみかはらず跡は大體炮録賣にてすませる事とはなりぬ

東都三座脇狂言の事

江戸三座は四季に變らず狂言は其家々にあり是も朝の三番叟を番立と唱へ續いて脇狂言なり中村座(勘

三郎舞鶴)酒吞童子市村座(羽左衛門家橘)七福神森田座(勘彌當時河原崎也)長者開甲子待其前に出る圖の如し是にも往昔は替り狂言ありて炮録聲竹生島壽大社那須與市馬揃壽二人猩々等あれども當時廢りて右圖に出せる三番のみ勤る事なり淨瑠璃歌の文句古雅なるゆゑ爰に出す

中村座酒吞童子の文句

貞光にて暫の役を勤めし時の句に暫くは碓井嶺の春寒し七代目白猿將門冠初雪と云ふ江戸昔狂言の第一番目の三建目に加藤兵衛重光市川團十郎中村座にて^{莊子の編語}の編語のつらね團十郎自作の文に曰く東雲南山に横たはれば西鳥時を出るとかや又北海に大魚あり此魚化して鳥と成る名付けて是を大鵬と呼ぶ水撃棧敷切落中の間引船風木戸チイタチよりのお目見えは云はずと御存知四年ぶり四國を廻つて猿若が花の顔見世今日霜月のく團十郎御所記^{一本化}に作るの言傳もまめで御無事で御取立立ば芍薬トすりや牡丹あるき姿はしんぞ鬼百合鬼若衆鬼振廻の献立には敵討のこくしやうに實惡の煮氷龜飯をくらひ酒を呑うでをもつて枕とす樂しみしんぞ新參者死生命あり富貴天

生むてつぱち此人にして向ふ見ず學て時々首を抜く
亦樂しからずや三舛にして立五十にして天幸を知る
とかやかきの素袍の禿より一度に(も)御げん中島の
牽手あまたな公家惡に今日といふけふでつくわして
お江戸一對のしやつゝらをならべ重光千万大慶に存
奉る祭は季氏泰山よりおもきは海老がゆづりのくま
素袍異本素き
なとありさきにあかつゝら一陽來復の御目見え
は八百八町おなじみの加藤兵衛の佐重光といふ肝癪
若衆とホ、敬白

召よする暫らく有て奥よりも大格子の織物に紅の袴
を着鐵棒杖に突あたりをにらんで立たりしは身の毛
もよだつばかりなりかたり聞んと申ける(此間せり
ふ)酒と聞しをよろこび先客僧たちこなたへと様の
上にぞせうじける合
セリフ童子盃取上て一つ受てはさ
らりとほし頼光にさしにける肴はなきかと有ければ
今切つたると思しくて股と腕とを板にのせ坐敷へこ
そは出しける某こしらへ申さんと腰より差添すらり
と抜しゝむら四五寸おし切て舌打してぞまゐられけ
合
セリフ童子も却て頼光を禮拜するこそ嬉しけれ
合
セリフ鐵棒を突はつたと白眼で立たりける合
セリフ誠し

やかにのたまへば合
セリフ殊さら持參の酒に酔たゞく
りことゝ思し召我等も御身の其姿うち見ては恐しげ
なれど別てつよい異本馴れてつ
ほひとありは山伏とうたいかなで
ゝ心付奥をさしてぞ三重

市村座七福神の文句

それいざなみいざなぎ夫婦寄合まんゝたるわだつ
みに天のさか鉾おろさせたまひ引あげたまふ其した
ゝりかたまりて一つの島を月よみ日よみ蛭子そさの
をもうけ給ふ蛭子と申は戎が事よ骨なし皮なしたあ
いなし三とせ足立給はねば手くるゝゝゝ來る船に
のせ奉りて青海原へ流し給へば海をゆすりにうけさ
せ給ひ西の宮の戎三郎いともかしこき釣針おろし萬
の魚をつり釣た姿はいよ扱しほらしやひけやひけ
ゝゝゝひくもの品々さまがきはすみ琵琶や琴鼓弓三味
線しのゝめ横雲そつこでひけ小車子供たちござれ寶
引しよゝゝと帆綱引かけ寶船ひいて來たいざや若衆
網ひくまいか沖に鷗のはつとゝゝ立たは三人ばり強
弓ひよつびきひやうりひよつと射落せば浮つ沈みつ
波にゆられて沖の方へひくこの水無月半祇園殿の祭
山鉾かざり渡り拍子で引で來た合拍子揃へて打や太

鼓の音もよき鳴かならぬか山田の鳴子く引ばかり
ころからりころりくからころくくやくつばみ
そろへて神の駿馬をひきつれくいさみいさむや千
代の御神樂令神の利生はつげの櫛く引て七五三繩
のながきえにしを

河原崎座甲子待の文句

甲子待に聲取りすました中にたつ人誰々なるぞ事も
愚かや戎三郎扱又料理は布袋福祿まぢ女郎には器量
自慢の辨才天十二の女郎が酌床盃おとりもちさせ給
へや金銀うらく異本から福徳そくく家藏まん
く億さい孫彦やしや子にかえつくひつつきさつさ
ゑいさつさゑいさつさゑいさつさ數の寶をく船に
車に不二の山ちやぞく富士はこく拍子揃へて手拍
子揃へて祭る今宵ぞ叶ふたり千秋萬歳末ぞ久しき

中古江戸三座通詞の事

木を入るとは(拍子木を打つ事)きれたとは(幕がし
まつたといふ事)きいたとは(見物のうけのよい事)
わつは詰とは(何事もよいと云ふ事)あらしやばと
は(始て役者になつた事)すかまたとは(間違ふた事)
おべつとは(つゝあしやうけいはくの事)樂屋落とは

(仲間ばかり分る事)首とは(縁切といふ事)性根があ
るとは(きが有といふ事)時代とは(古風なかくる
しき事)いたぐとは(物事しくじりし事)鳶子とは
(素人の子供の事)でんぼうとは(只見る見物の事)穴
とは(土間棧敷の明である事)丸とは(土間棧敷のか
りきりを云ふ)とんちきとは(役に立ぬたはけの事)
さしがねとは(我がかくれて人を遣ふ事)掌握とは
(人の物を掠める事)ゑへんとは(間拔の事)はねたと
は(馬鹿の事また打出しの事)櫻丸とは(身錢を遣ふ
事自腹を切るともいふ)鞘當とは(色の事にて不和な
る事)しめろとは(ぶちのめす事)矢ぶみとは(無心の
事)怨靈とは(催促の事)柳とは(女郎買の太鼓持の
事)つゝ込とは(人の中言いふ事)忍ばせるとは(くす
ねる事)しやうがとは(しわい事)右の外に數言あれ
ども通用せぬは略之


江戸狂言待た暫の事

市川家代々の藝にして顔見せに限り時々勤る事あり
といへども甚だ古風なる物にて當時の人氣にかなは
ぬ物ゆゑ大に廢れたり暫の素袍は柿色に三升の紋と
定む市村家橘はかちんの素袍にて紋は渦巻を三升到

此畫は鳥居流にしかみと云ふ畫なり團十郎代々
いつにても如此畫なり故に別に似顔を出さぬを
ならひとすと云ふ



豊國画

してとし嵐雛助は紋を  叶を角に改めた

り文化中江戸森田勘彌浪華へ來つて暫の役を勤めた
れども常に見付ぬ古風なる狂言ゆゑ不受なりしが是
らは江戸荒事師の勤る役にて江戸の風土に叶ひし者

なるべし七代目白猿碓井

當世榮花物語の序 附初編六編
迄の目録

伊物源語は倭語の妙を得たる書なれば我國の寶とす
是に次ては清女が枕の草紙赤染が榮花物語なり此書
始世繼物語とありて他の作物語と變り歷世の事實を
憚る所なくしるし衣装の色調度のかざり言語の様其
代の趣を盡したれば古の證とすべき事多し爰に元祿
より享保の頃竹本豊竹の淨瑠璃の中に近松門左衛門
西澤一風錦文流紀海音等が作せる文を見ればはかな
き世話の作物語とはいへども言語のさま調度の品衣
装の色まで其頃の男女の癡情趣を盡し其頃の一斑を
見るに足れり伊勢源氏枕の草紙杯はやん事なき方々
の弄物なれば其書も遺れど此淨瑠璃などは纔かに遺
り薄き綴り物のうへ細字に假名のみ多く讀に煩はし
く年々に破れ損じてしみの栖となる事を惜み佳本を
原として讀易きやう文字に直し文に聊も筆を加へず
世話の三段物六部を撰書集めて後に評を著し昔も今
も變らぬ男女の痴情をしらしめ勸善懲惡の端にもと
三卷の雙紙となし外題をおもふに癖物語鄙源氏など
はとくに呼て今枕草紙といへば浮きたる春畫とおも

へるもをかしく其事實に近からんとの意をもて當世榮花物語と號し追々に巻を繼て世に弘めん事を思ふのみ

維時嘉永四年亥春 浪華西澤一鳳軒李叟述

同初編より六編までの目錄

瀬川屋長五郎普米萬石通 紺屋總兵衛心中重井筒
越前屋牛七長町女腹切 甚阿彌おふさ戀の寒晒
刀筒屋お花月 小多屋源六戀の波枕
道具屋お花月 小多屋源六戀の波枕
嫁馬屋お花月 小多屋源六戀の波枕
手代清十郎歌念 佛
しるつやおたか梅田の心中
道具屋お花月 小多屋源六戀の波枕
道具屋お花月 小多屋源六戀の波枕
天満屋お花月 小多屋源六戀の波枕
平野屋お花月 小多屋源六戀の波枕
大經師お花月 小多屋源六戀の波枕
手代茂兵衛戀八卦柱唇
下女お花月 小多屋源六戀の波枕
小吉七戀の緋櫻
龜屋お花月 小多屋源六戀の波枕
油屋お花月 小多屋源六戀の波枕
柏屋お花月 小多屋源六戀の波枕
八碗や喜平次生玉の心中
茶碗や喜平次生玉の心中
嫁屋お花月 小多屋源六戀の波枕
井筒屋お花月 小多屋源六戀の波枕
藤木富之助男色加茂侍

山崎與次兵衛壽の門松 淺香妻お才重帷子
藤屋あづま二代紙衣 糸屋お久兵衛井
萬屋や揚卷六二 手代久兵衛井
稻野屋小ひな廓の色揚 女房小由兵衛野中の隠れ井
巴屋小ひな廓の色揚 女房小由兵衛野中の隠れ井
都合三十六部各上中下三段物六部を一編(三卷)として奥に本説の時日書加へ興行の月日作者の名をしるし六編目まで出せり猶是にもれたるを追々に七編より巻を繼て譬は頼風呂小三信濃屋おはん等を始め前に出たる名前にも増補のおもしろき物は再び出し後には三部の歌舞妓狂言宮蘭宮古路常盤津富本新内祭文等に残りし名を擧る時は心中情死の人名甚多し其内舊本の正しきを撰好人に備ふ

傾城縋幕湯の筋書

傾城戰國策と賦したれども外題かたく色氣少きにより戀女房の世界に寄せたれば縋の幕湯とは賦しけり但馬城崎の温泉を心にこめ手綱は但馬の似口なり有馬には幕湯ありて城崎に幕湯はなけれど所謂狂言綺語なれば唱へのよきを呼ぶなり殿を道之助家老を左京といふより由留木馬之助驚坂左内と呼ぶを趣向のもとして但馬丹波は隣國にて同じ但州なればなり丹波の國守由留木左衛門は養子にて若殿馬之助の姉

城崎御前の聲は當殿左衛門なり伯父敵高橋玄蕃の頭國を横領せんと鷲塚官太夫同弟八平次等とはかりて馬之助に放埒をすゝめなきものとせんと計り惡事を工む若殿は有馬の湯もとに遊んで島原の傾城を呼寄せ湯女交りに遊興しもと拵へたる短氣者にて伯父敵を始め佞臣共を討すて家國に心を掛くる者共の根を絶さんとの心なり古く用達の町人丹波屋與三兵衛忤與作親子共有馬へ響應方に付添ひ來て與作は若殿の放埒に遣ひ捨たる用金の科をあびて追放となり若殿は諫言する者を勘當し又は手討とするゆる國家老鷲坂左内若殿を預り歸るは序幕なり二つ目左内の屋敷に若殿と傾城預り有町人丹波屋與三兵衛若殿を日毎の見舞に來る以前若殿に勘當受たる伊達の與作と云ふ立役有て若殿の面體に似寄なるゆるまさかのとき身代りにならんと心の心にて左内の屋敷へ詫に來るこしもと重の井是に兼て惚れ居て左内は此二人を思ひ合たる中なれば夫婦としてけふ足利殿より若殿に切腹させよと使者來る故與作重の井を若殿と傾城の身代りに立よと謎々をかくる若殿は一間より立聞して身代りより我死んとの心なり暮六の時計にて左内は

鳥目なれど隠して見ゆるふりして檢使を出むかふ伯父高島玄蕃城崎御前入來り若殿に切腹させよと云ふ左内若殿に用意よくば是へと云て身代りの與作を呼出す誠の若殿奥より出て切腹する傾城も自害する姉君は誠の若殿故愁嘆伯父敵はよろこぶ左内は與作重の井の兩人と心得見えぬ眼を見える體に見せ只尋常に御最期を云ひ居る姉君をうではないと云はんとするを若殿は左内にしらすぬ様に姉に仕方する與作重の井は事おくれ身代りにも立す蔭より身をもむ八平次は序にて追放と成り官太夫は兄殿を城の崎の溫泉の中へ毒を入殿は毒氣に當り俄かに死去としらせに來る皆々驚く伯父敵はよろこんで跡目はさし詰おれじやと云ふ心にて切腹見届ければと官太夫を連れて跡にて御臺兄殿は湯にて死し弟殿は切腹どうしたらよからうと泣く左内は始めて若殿の最期を聞て大に驚き與作重の井殉死せんといふを兄殿の様子覺束なしと館へ走らせ跡にてあら嬉しやなアと鳥目も偽りにて本名名乗り當殿は伯父の手をかつて死せ若殿を忠義顔して腹切らせ日頃の本望なりと謀反人となる御臺若殿扱はと詰よるをあれ出して廣庭へ突出す

跡へ與三兵衛見付愁嘆若殿は切腹ながら與三兵衛を親人様と云もと丹波屋興作が誠の若殿にて馬之助と欲心にて取替おきし事あらはれ與三兵衛身の懺悔して腹切る興作重の井取てかへす御臺は伊達興作を新左衛門と改名させ追放の丹波屋興作は誠は由留木のお胤なれば行衛を捜せと云付る新左衛門若殿の在家を捜しに出る是二つ目なり三つ目四つ目は彼神谷轉といへる薦僧と成り居たる一話あり此こむ僧の實説はさして仕組となる筋にあらざれば安永年間の小説梅臚主人の作にしたる續新齋夜話の卷一農夫の信義公廳を感せしむと云ふ條を由留木の落胤丹波屋興作に綴りて脚色せり其本文

續新齋夜話の一話

武藏野の廣き御惠の風のふかに偃へて草葉數多に結ぶ軒端

の忍が岡近きあたりに泉屋某と云ふ酒肆あり棟高く住なしたる老店にて奴婢大勢扶持し貨財庫中に充ぬ一子得太郎は寛柔に長ひとなりて糶糶の術に疎く剩へ近年花街に入て多く金銀を費し侍りしかば父母大に怒りて家内を追出さんとせしを親屬どもやう／＼に宥め去るにても一旦若氣のあやまちなれば有るまじき

にもあらず以來をこそと得太郎へも教訓し遠からず婦を迎へてなど、世上一般の經濟に父母も一子の事と云深き罪ならねば怒も春永となりて兎角に迎婦の事を急ぎ得太郎も過を改め經紀(經書カ)に心を委ねしばらく實貞(體カ)に見えしが赤縄結び難くして三年計り過ぬ獨枕のつれ／＼又或夕紅塵を分けしに宴席の欣々たる紅閨の艶々たる腸にしみていつしか冷炭再び炎となり或時は酒を携へて龍山の花に遊び或時は船を浮べて墨水の月に戯れ放蕩先年に超過し亡失せし黃金忽ち二百斤におよび秘匿の一隅を空しくせしかば父母再び怒を發しこたびは親屬どもに肯はて終に久離して一家を放逐しぬ得太郎詮すべく元來一鷺の袖中に在るなければ只茫々然として路頭にイしが窮情の内に一策を思ひ出して梵論寺はんにじ走り入て身の上を語り托鉢せん事を訴しかば事務聞居けて兼て戲席にて玩しを幸ひに笠下には是を鳴して日毎に藩中を廻りぬ渠等が中にもさま／＼の掟ありてかゝる放蕩者は同郷にのみ長居する時は又禍を生ずるものなれば遠境修行すべしと先達を添へて京師に送りぬ旅中とても唯一管の音中に得る一握の雜穀をもて薪

にかへ鹽にかへ宿り需ればいと心うき旅衣馴にし故郷のみ慕しく先非を悔ゆる事切なれども落花枝に還らず流水源に回らぬ身の上たもとの露の零落はて漸にして京都に至りかの先達の計らひにて幽なる旅宿を取與へられ先達は浪華の地に所用ありと別れ出ぬ得太郎其宿より出て洛中を托鉢せんと市中縦横に廻りしかど爰は元より町の名だに綾や錦を立續きたる紫陌の地縷縷の袖の恥かしく何とやらん肩身すつけにて竹の音だに快からねば邊土の地こそ心やすく中々施物あらめと昨日は岡崎真如堂の邊を吹めぐりけふは太秦鳴瀧の在家をことなく修行し侍り夕かけて廣澤あたりの農家の門にイ吹よりしを繩すだれの内より六旬餘りの男出て修行者にこそ侍けれ今日は吉日なり進らすべきものはなければども此方へといへば辭するに及ばず内に入りしに漸夫婦自炊のやうなり茶などを與へ天蓋をも取てくつろぎ給へと云はるゝに然らばゆるさせ給へと蓋打置あやしの折敷に強飯盛てさし出さる圍爐裏にふすぶる一塊は老婆莫^レ怒飯飢無、笑指灰裏芋栗香と作れるもかくやと佗しく哀れなり御施に預りし御禮に一曲手向奉らんと竹取

出ししばし吹て早日も暮近くなり侍れば暇たまはらんといふを主の男暫らくと留め扱も旅僧は何國の人ぞと問ふに東都の産のよし荒増を語れば泉屋某殿の所縁やと問れて大に驚き夫は如何にして見知たまふ申に付て恥かしく侍れどもかやうの身分になりて猶も命の拾がたく斯く雲水の客と成りぬるゝ語ればあるじ大に嘆息し扱野老は往時泉屋の奴にして御父の大人には數年恩恵に預り君の三歳に成らせたまひし年まで奉公せしが故郷の親老衰し家業を繼ぐべき者なくなりて暇たまはり其折も深く恵に預りて爰許に歸りしが親も程なく失せ夫より打つゝ凶年に逢ひ今に幽なる煙を立侍れども大人の御恵みは束の間も忘れ奉らずけふ計らずもお顔を見奉りしが何とやらん大人の容貌におぼえたまふを夫とはかけてもおもひよらねど御面影のなつかしさにかく問奉る事のかくても朽ぬ三世の御縁にこそまづ〱我家にとゞまり給ひ心安く起居もしたまへ併しかゝる困窮の身なればゆるやかに養ひ奉る事は叶ひがたし日々托鉢に出給ひて助たまへと隔意なき辭に甚感じさらば兎も角もと爰に草鞋を解て日々近郷を修行し些の施物を

收けり一日主の云君以往の非を改めて故郷に歸り父母の勘氣を詫て家業を繼給ふ御志はなきやと有りしに得太郎夫こそ夙夜の願ひなれども再應命に背きし不孝と云ひ何一つ志を改めたるといふ證據なければたとへ貴丈の挨拶にても詮あるべしとも思はず尤もかくまで辛勞せる身に不孝の罪を思ひあたりぬれば以來柳花を見る眼なしと涙を流す主が云ふ君その志おはせば試に云はん君彼費失せし二百斤の金子を辨じて故郷に歸り先非を悔て詫給はゞ雙親の御怒解けざる事あるべからずと問ふいかさまもあらば勘氣もゆりぬべけれども天よりや降なん地よりや涌なん其驢年（うしどし）を待つべしと一笑すれば主色を正しうして若し誠に其數の圓金有て歸郷の本懐成就せんならば我一策ありいぶかり給ふなと云得太郎は主の我を慰むる志の老實なるを喜び厚く恩を謝しぬれども一顆の金銀だに目を重ねて入らざる門の何の計あつて斯くはいふよと心裏には肯ざりしに日を経て主得太郎を招き君の御運未盡す今日斯の如しと二顆の黄金を袖より出しかくある上は明日急ぎ關東へ旅立給へ御名残はおしけれどとくくと諫るに一向夢中の心地

しこは何とも不審なりかゝる貧家の内に何としてかくまでの黄金を需めたまへる事よと問ば夫はお物語の長く侍れば後日野夫江都に下つて御歸家の悦びを述ん後寛々語り奉らん善は急げとやらん申せば少しも早く下り給へと其夜は首途を祝ひ一壺の魯酒をぞ汲かはしける得太郎は餘りの嬉しさに終夜眠に就かず熟おもひ廻らずに去るにても貧窶人のいかにして得たる金なるや覺束なく是を受るも空恐しきやうなれ其人の志をもどかんもいかい也夫よりも少しも早く關東に下り彼者の鴻恩をも父母に訴へ其上にも我身の勘氣ゆりすば再び京師に持登り主に返して後いかなる淵へも身を投べしと所存を極め曉深く立出るにも主夫婦の日頃の恩恵といひ況してや莫大の黄金を投せられし仁慈の程満口に霜を含める心地して袖の涙ぞ萬分一の志を見せける斯くて旅中の要心に半は笠にかくし半は腰に巻て故郷に歸る道ながら父母の心のいぶかしければ錦にあらぬ旅衣日頃の恩を謝しかねて彼繩簾をのみ顧がちに遅々としてこそ別れけれ斯して逢坂山を越え大津の驛にかゝりしが路費なくてはと其所の交貨店に立寄り彼金を一片出して

方孔にかへんとせしを交貨店の副手^{てんた}其判金を見て甚だいぶかる體なれば若し怪しくば取替てんと又一片を出しければ是を取見て暫く思惟しけるが内に入て何やらん告ると見えしが忽ち三四人の力者出て來り盜賊遁さじと追取り卷きぬいかに僥忽と呼ばれども耳にも入れず直ちに縛して京師の廳官へ引行ぬ頼て京兆の前に曳出し交貨店の者申すは某の月某の夜我店へ盜賊入て判金百斤紛失せし事既に訴へ奉る所なり今日此者の懷中より出す處の二片の金我家の極印有て紛失の品に極れり公廳の糺明を願ふと言上すれば得太郎へ如何と公問有り得太郎は思ひも寄らぬ事なれば一言の返答もなく低頭して考ふるに是全く彼農夫が我を救はんため盜賊して得たる金と察せり是を陳すれば咎を恩人に蒙らしむべし迺ち我は是までの薄命なりと覺悟し今は何をか隠し奉るべき某月某夜渠が倉壁を穿て盜取たる所にて候曾て同類なく我に親戚なき者にて候へば速かに罪に行はるべしと款條明白なりしかば強て推問に及ばず獄中に囚はれ懷中の金は廳に預り置れぬ去るにても此上は死刑に行はれん事疑なし彼恩人の我が東行を果さる事を開

かば定めて恩を空しくせしを怒るべし是又黃泉の愁なり今又斯と告ばもし訴出て我を救ひ己を罪なはん事も計り難しかし我刑死の後にかゝる事ども告んにはと同じ獄中に居合せたる輕罪の人の此程に免れて歸るに因て傳言し我刑死せしと聞たまはしかゝの譯を廣澤の農家何某に具に語り給はれ厚恩の程は生々忘れ侍らずと慇懃に頼みやりぬ其後大津交貨店に脱拾し天蓋の内に又百金のあるを見出して急ぎ持參り訴ぬるに扱は是は他の家にて盜みたる金なるべしと獄中より引出され再び糺問を蒙れども元來盜まざる金なれば此款條に當惑し只洛中の家々にて盜み集めぬるとのみ云ひしかば京兆甚だあやしみ先回の百金をも盡く出して交貨店の人をして見せ給ふに彼が家の極印は六七十片に過す彼は故ある款條と見えたれば後日の糺明たるべしと又獄中に歸されぬかゝる折節誠の盜賊共の死刑に行はるゝ有りしをかの傳言を肯し者聞て今こそと廣澤にて何某が家と尋行て細々物語りしに主大に仰天し其金は我女子有て幼よりさる槐家に仕官させ置たるが貌も見苦しからねば恵み深かりしを強て御暇を乞て直に島原の娼家

へ賣渡し償金として得たる二百斤なるにいかにして盜賊の疑ひは受け給ひけん我貧窮の内に大金を得たるを怪しみ思したるは理ながら大きな齟齬なりしかし足下に語りて益なしと傳言の情を謝し頓て一通の訟書を捧げて廳前に斯くと告ぬ京兆固より彼金數の合ざると云ひ得太郎が欸狀の潔き却て疑なきにあらざれば未だ其罪を決せず猶外々の穿鑿を促されしに果して如此なりしかば亡八を呼寄せ尋問ありしに何の違ふ所あるべきや其金は天津の交貨店の息男父が函鎖を穿て花街の奢に遣ひ捨にしを盜賊の入たる體にもてなしたる事まで揭然と露顯に及びぬ元是彼農夫が一渾の信義より得太郎が先非を改ると云且恩人のために命を抛しも大に公廳を感せしめ江都の父母へも始末の意趣を達せられ得太郎斯く志を改る上は不孝の罪をなだめて家業を繼がしめ農夫が恩の厚きにめでゝかれが娘を島原より購身して得太郎に嫁せしめよ然る上は農夫夫婦も別に謝恩を待に及ぶまじかの購身の料は則此二百金を以て償ふべし交貨店の男は己が盜を人に託し既に過て罪なきを罪するに至らしむるの姦賊なれば死刑に行ふべしと一々微細

に命じ給ひしを得太郎遮つて願ひ奉るは交貨店の男若輩の一應親の寶を掠し事小子も同じ罪にして彼者は雙親まだ愛を斷ず然るを死刑に行はれん事甚見るに忍び侍らず且今公命を以て小子が歸家を免され侍れども我父母に對して些少の功なし願くはかの二百斤の半を小子に給はり恩人の志を告げて父母の怒を解くの品となさしめたまへ交貨店の夫妻には男が罪を金百斤にて贖はせたまひ彼は黃鸝の金をもて娼夫へ購身の料に宛させたまはらば有がたからんと滯泣して訴へしかば京兆も得太郎が理を盡す詞と云仁恕あるを稱し給ひ願の如く命せられしかば交貨店は多くの金を費すといへども豪富の愁とするに足らずして子の刑を免かれしをよろこび得太郎は窺窕たる婦を伴ひて舊里に歸りぬかくて後は心を正しくして家事を修め父母の後半生を安樂に在しめかの農夫へも寒暖暑冷を訪ふて睦しく世を渡りけるこそ愛度けれ

繯幕湯後齣脚色の話

此一話を題として得太郎を丹波屋與作當時零落して梵露寺慶政けいまさく本名は丹州由留木家の胤馬之助也廣澤の

農夫を伊勢街道横田村彦兵衛島原へ身を賣し娘を小万とし大津の兩替屋を白木屋佐治兵衛息男の名を義兵衛役人の名を本田彌惣左衛門と呼び悉く戀女房染分手綱の人名をかり三段目四段目に仕組み五齣目沓掛の場竹村定之進後家の老母遣りゐて奴僕逸平馬士を渡世として老母をはごくむ重の井由留木家再興に付道成寺の能を先例にまかせ勤むべき旨いひて鷺塚八平次序にて定之進の能の秘書を奪ひ取持居て當時馬士江戶兵衛と改め此場へ出て勤めようと云ふ奴逸平能の秘曲を覺え居て江戶兵衛と能の秘事を問答していひ勝ち貧家にて屋根漏り柱傾きたる能舞臺にて逸平道成寺を舞て重の井に江戶兵衛を討す場有て團圓六齣目まで腹稿なれり逸平世話場にて道成寺を舞ふは舊勝負草奴道成礎として先に市川團藏奴與次平にて勤め近來梅玉東都にて櫻管笠といふ外題にて勤めしかたを今の翫雀玉の手綱にさせしかど皆大序にかひ見所すくなしかゝる曲をするには狂言の奥に至て見せずんば佳境に入る事遠し依て今までの古き筋を捨て一部の趣向を新奇に巧み頗る穿多し抑戀女房の世界は世話時代を兼御家狂言にはよき世界の物な

り始近松平安堂丹波與作と外題して三段物に作りし上巻は丹波由留木家の玄關先にて調の姫東へ興入の用意の中へ馬士三吉道中雙六を振て通し馬に雇はれお乳の人重の井と親子の愁ひ中の巻は關の宿に與作馬士となつて招婦小万と艱難し三吉干糠の八藏を殺し科人となり下の巻小万を馬に乗せて道行の跡錢掛松にて與作小万と心中せんとするを鷺坂左内兩人を助け本知に歸ると作し後伊達染手綱と外題をかへたり此後戀女房染分手綱と呼て丹波與作の上の巻を十段目とし中の巻を十一段目大切とし重の井與作の不義あらはるゝといふ前狂言を増して書廣げたる物ゆゑ舊作丹波與作とは齟齬したる所も有けり先舊本に沓掛とあるは京師より丹波街道へゆく沓掛なり道中雙六の場は丹州の館の玄關先なるを戀女房には本陣宿とし沓掛を乳母在所と本文にあるを東海道に宛て關坂の下沓掛と作せり三吉の詞に乳母は鳥羽の祭の團子が咽につまつてと云ふは都の鳥羽なり伊勢街道沓掛の乳母都の鳥羽祭に行は道隔りて聞えず然れども戀女房の方世に行はれて丹波與作の淨瑠璃を憶し人少く底貸て母屋とられしとも云はんか舊本丹

波與作は其頃の當り淨瑠璃にして竹田出雲が作の忠臣藏茶屋場に由良之助のせりふにも丹波與作が歌に江戸三界へ行んとしてとは淨瑠璃の外題丹波與作をさして云ふなり今是を外題とおもふ人稀なるべし猶此外に與作の考評多けれど當世榮花物語四編目丹波與作の部に出せば好人見たまふべし此世界に増補數多ありて東海道戀關札驛路小室諷新坂道中雙六けいせい染分手綱けいせい玉手綱淨瑠璃にては伊達染手綱と云も待夜の小室節といふも丹波與作の替外題なり予が纏幕湯に此世界の穿を委しく演んとおもひながら近頃の事遠慮なきにしもあらずと腹稿のまゝ出すなりけり

豫州松山開城の一奇話

介石記に元祿年間赤穂開城の兩三年前伊豫の國松山の城主にいさゝか過ち有て開城申渡さるゝ事あり此時の城受取の役目は脇坂侯と赤穂の淺野侯なり長矩病氣に付家老大石内藏助主人の名代に行く城中に一家中籠城して防戦の用意まぢなりしを大石良雄理を解て速に城を受取りし事を記せり海老藏（七代目團十郎）此一話を忠臣藏裏表四段目の裏に仕組く

れよと予に托せり松山開城には大石請取の役にて云ひし事是我主家の事にて道理おなじければ近頃脚色してさせしが忠臣藏明渡しの場合は兎に角狂言少く實説によれば甚淋しく講釋を聞くがごとく鳴物囃子等もあしらひ方なく實に仕にくき場なり故名人役者種々工夫を凝らせすれ共明わたし幕切に至つてはいかんともし難き役なり海老藏もとより此役に色々工夫をこらし予松山開城を書入舞臺にかけて見たる所道理に背く事なく大によく諸見物も批評なく其後誰々も四段幕切は皆是を眞似する事とはなりけりされども予が書きたる正本と海老藏に一部書て與へし書のみにして他に此本の散在する事なく有るべき筈なし所謂盜本にてする事なれば其文句はいかなる事を云ふやらん覺束なし元來假名手本の世界にて予が増補ばかりも數十部あれば昔より淨瑠璃歌舞妓に珍らしき場のみを類聚して忠臣藏類聚大成四十七卷を著述して世に弘めんと思ひ草稿半にして果さず此裏表四段目の裏も類聚大成に出すべき物なれど奸盜本に言語の過ち有るを予が虚名を賣られん事を恐れ爰に出す是松山開城を種として脚色したるものなり

假名手本四齣裏の正本

口幕の時浪幕を舞臺前にひくと直におきのくらしいのの歌になり漁師腰簑にて三

四人網を引な師外へ出て漁何と皆の衆けふは天氣もよう

て此様に漁のきく事も珍らしい同それ同此國は鹽

治判官様の御領鹽といふては日本一同かういふ結構

の國にくらすはこちらの仕合せといふ物じや同此間

から御先祖の御法事毎年大山寺でのおつとめ同あれ

を仕舞ふたら國家老の大星さまも鎌倉へ行かしやる

のぢやそんな同思ひなしかゑらう網がおもいぞ此勢

ひに曳うぞや同よからう同ヨイ同と網を曳き

るヨイヤナ此なみ同奥深に浪幕舞臺一面に鹽屋の屋根礫

ばた打寄の書割後所返しになる仕かけ有り直に淨瑠

璃になる「堪忍の文字は貴賤の寶なれども時によつ

てはやむ事を鹽治判官高貞一たんの短慮にて鎌倉に

て御身の禍ひしらせを聞て國家老大星由良之助良金

はけふ鎌倉へ出立と共に見送る一家中鹽焼濱に立ど

まりト下内由良之助野袴ぶつき跡より十内久太夫勘六丹平各上

より由良内にて見送りの心跡より家來大勢鑑びつ鑑など持出て上手

倉より早うち到來致すといへども其後何の沙汰もな

ければ先づ安心久太貴殿とくにも御發足のお心なれ

ども御先祖の御法事も大切丹是も例年の格式なれば

打拾御立も心が六然し今日御法事も勤終れば嘸

御安心でござりませう仰の通り此程早打到着より

鎌倉表へ心はいそげど毎年御先祖の御法會殊に今年

は五十回忌御大切の御名代此儀も相濟したれば直様

發足晝夜を分たず旅行いたす内さぞかの地にもお待

兼立四人道中随分御機嫌よく各方にも御無事に「挨

拶とりくなる所へ漁師がどやくとまく外の漁師籠にこのしろを山

もりにしたなめ鹽ハイく私共は此浦の漁師御家老さ

いと御見受申して此肴がさし上たう存じます同此

通りのこのしろが今一網に上りましたが船に山もり

にして十三艘同此邊に限り今までは一疋も取れませ

ぬのに此様に取れるは珍らしい事同私共も心いはひ

又は冥加のために御家老さまへお目にかけます同お

納め下りませうならば皆ハく有難う存じます

ら此濱の漁師共が心ざし過分至極誠に見事なこの

しろ東國にては澤山とるゝ魚なれども西國にては珍

らしい皆さやう存じましておめに掛けます「大星つ

らく魚を見やりく此つなせをこのしろといふは昔

奥州に有徳に暮す老夫一人の娘をもつ國の領主其娘

のみめよきを聞き娶らんと云娘は外に密夫有て嫌ふが故老夫領主に言譯なく娘は病氣と欺り此つなせを棺桶に詰め野邊の煙となす領主此あらましを知つて詠みたる歌にみを奥の室の八島に立煙り誰が子の代につなせ焼くらん此邊には稀なる魚の日々に夥しく上るといふは十濱方の大漁は御閉門も御免あるべき立人吉さうでござりませうかつなせを子の代りに焼しより子の代といふ此城の上るといふは立人エ、アイヤ國恩をおもひ志の段過分「汀の方より遠見の者あわたいしく走り來て侍ハツ御家老さま是にござりまするか只今早打と相見え御城内へかき込ますやうにござりまする立人ヤ、すりや又もや鎌倉より早打とあらば對面のうへ發足なさん立人御歸城」城内さしてぞ引かへす跡につくり漁師共と皆々上手へ家來魚かと皆々上手へ家來魚かと持引かへしてはいる○さてはまた早打が來たゆゑ御家老さまは走つていなれた同しかし今御家老のはなしでこのしろとは子の代り同つなせを子のかはりに焼たゆゑこのしろ同此因縁もさつとわかつたサア皆ござれくと橋懸りへはいるチヨン向ふ遙か打拔の千疊敷橋懸り切幕の所鏡戸となり打寄の板は不殘疊

のへりにかはり鹽屋の屋根仕掛にて打返すと大衝立となる此陰に力彌後鉢卷上下の上を刳早打の形り氣絶の體是を速見藤右衛門千崎彌五郎富森助右衛門片岡源吾上下にて立かゝり介抱の體城の太鼓にて道具納る大星力彌殿藥湯などのまぜ呼ぶ内奥より山良之助付出て山良之助能所へ座上下に改め跡よりまく明きの四人の諸士につく力彌少し心付きて彌何れも此所は八御本國のお館でござるぞい力彌過急の早打子細は何と彌誠にお館オ、親人何れも今日の早打は殿様の御大事お家の大變でござりまするトるを皆々介抱するら御大事とはしてく様子は彌力先達の早打にお聞の通り十一日勅使御到着の始より十四日御勅答の時殿師直を刃傷に及び給ひ師直は其まゝ安堵殿には扇が谷のお上屋敷へ嚴しき閉門仰付られし所翌日御上使として石堂殿御入なされ私の宿意に依て殿中を騒がせし科と有て殿にはやみく御切腹仰付られてござりまするわいのう皆ヤアくく彌國郡は沒收鎌倉のお屋敷も即刻召上られ候へ共猶豫ならざる殿さまの御遺言かつはお筐の此短刀暫時も早く親人へ相渡せ委細は堀部安兵衛殿に言送らんと斧九太夫のお指圖ゆゑ何か捨置はせかへりましてござりまするト箱入の短刀白布にて腹にまきし

をとい速ム、すりや閉門のおゆるしもなく殿にはや
て渡す水

御切腹仰付られしとなア御切腹を^千崎尤も日

柄御場所も辨へず私の意恨にて師直を刃傷に及び給

ひし誤はあれど^森富さす敵の師直は安堵にて殿に切腹

仰付らるゝとは近頃以て依估の沙汰^片山國郡は元より

扇が谷の上屋敷まで即日召上らるゝとは餘りといへ

ば情なき^四御取計ひと^四人顔見合せ茫然と當惑のこなし^ゆ

力彌シテ御臺さま御家門方にはお咎めはなきや^力彌サ

ア其儀は私も心付かぬにはあらね其何を申すも過急

の事殊に九太夫殿が諸事おさしづゆる其まゝ出立仕

つてござりまするト^{由良之助つか}と打つ^四四人の諸士といめて^人

大星どのコリヤ御子息を何ゆるに^ゆ殿には御切腹國

郡は召上られ是に上こす大事が有うか左様な大切な

る國への早打此大役を勤めながら御臺さま御身の納

り御家門方の御事なせ聞たいして出府いたさぬ九太

夫が詞にしたがひ御大切を聞糺さず生づらさげて本

國へよくも歸りし大だはけ不忠者めが^力其儀は程な

く堀部安兵衛殿が^ゆ詞をかへすか立てうせうト^{きつ}

ふゆふ力彌是非なくしほく^片山由良之助殿御立腹は御尤

なれどもそこはまた御若年ゆる^森殊に鎌倉より此伯

者まで二百里餘りの行程と云ひ^千五日半に來たられ

しは中々若年の力彌どのには忠義の一心^水殿御切腹

と聞御當惑ゆるか存せぬと我々が御託申す^四人御了簡

下されい^ゆ各々方の御懇意添う存する殿の御大事を

告んとおもふ一念にて鎌倉より御國表へ五日半に參

りしとは世の常ならずあのまゝにさしおかば心ゆる

みて落命におよぶ唯今嚴しく呵りしは張をゆるまさ

ぬやうのためお家の浮沈御家中の安否いづれも退座

無用とふれさつしやい^水畏つてござりまする何れも

二度の早打來るまばは退座御無用でござるぞ^四人心得

ましてござりまするト^{幕明の四人下の鏡戸へはいる}諸士^{向ふより諸士一人走り出て}

番手の早打堀部安兵衛殿只今到着致されてござる

立^四人それ待兼し此所へ早く^ト諸士向ふへかけて

り堀部安兵衛早打の格にて上下の上をはれうしる鉢巻にて走り出

花道で^リンとのりかへる下座より元の^四四人の諸士出て藥湯を持出て

四人の立役に渡り立役^立堀部安兵衛殿^ト皆本國の御

城内でござるぞやト^{きつ}といふ安兵衛心付向ふを見ては^ト來て

安兵衛^{由良之助殿何れも}ト^なし^有て^{皆々}を見て^安御家老に

は御出席か何れも是へ^皆ハット^{かけ}きて^安先達のお

しらせは御閉門とばかり委しき事は申さず初度のし

閉して籠居の所石堂さま御上使として御上意の趣は私の宿意を以て御日柄御場所を辨へず執事高の師直へ刃傷に及び殿中を騒がせし科と有て國郡を召上られ殿には即刻御切腹相手師直はお咎なく手疵養生萬事の御手當本復次第出席の事檢使の横目は師直が肥近藥師寺治郎左衛門お下屋敷も明渡させ御本國の當城も受取有と直に發足今明日には當地に着せんまつた殿様御切腹の砌大星殿へ吳々との御遺言唯恨むらくは殿中にて加古川本藏に抱留られ師直を討もらせし殘念楠正成湊川の戰に人は最期の一念によつて生をひくと云ひしごとく生かはり死かはり恨を晴らさでおかうかと怒の御聲諸共に短刀を逆手に取直し弓手に突たて引まはし御無念とまる短刀は大星殿へ御筐我驚憤を晴すべしと吳々との御仰有て立派の御最期御心底おし量り五臟六腑を裂く思ひ涙ながらに御尊骸は御菩提所光明寺へ在鎌倉の一家中御供申て御葬式まつた御臺所は御家門縫殿さま御下屋敷松が岡の御別莊へ御移し申鎌倉屋敷の取捌は萬事九太夫殿の指圖にて一先彼地を離散なし城を枕に討死するか又亡君の御供に追腹殉死を致すとも追て本國に

はせさんじ大星殿の御下知を受ん先づさしあたるは今にもあれ當城受取のため藥師寺の來るは條をれまでに評定が肝心とサア此事を存するから善とも惡とも分らねど九太夫殿の指圖を幸ひ鎌倉表の混雜を餘所に見なして過急の早打御國鎌倉召上られ家もなければ主人もなし力とするは大星殿追腹殉死仕るか城を渡して離散するか生ての忠か死ての忠か二君に仕る心はなく一心極る評議は此座何れも大切の評議でござるぞかやう申せばおこがましいが新參者の某も古さんの各も忠義の文字に二つはないじぎに依ては親も捨義のために妻も捨る恩愛妹脊はさゝいな事忠臣義士といはるゝも武名を泥土に埋むるも大星殿の御發言臍をかたむる極意の程が承りたい彼地を立て只今までこらへし口惜なみだ何れも御免くだされいと愁のこなしにて落涙す此内由良之助始終思ひ入にて短刀をおしいたいさ又箱へ入れ茫然と手を挟き思案の體四人の立役是を聞居るうち色々と身をもみ無念のこなしにて速諸士の何れも我々四人大星殿へ密談の間暫時お次へおひかへ下されい四人心得ましたト皆々下座鏡千安兵衛殿には長途の御勞れサア暫らく御休息なされいと安兵衛を介抱して下座鏡千のめかけて片山由良之助殿只今安兵衛殿の仰せ一々御

聞取なされたでござらうな^千鎌倉詰の一家中さへ過急の大變心の轉動どうせ方角はござるまい^富其上斧九太夫殿とても老人の事なれば一朝一夕で歸國致さるゝ事でもあるまい^水速いかに左様その内只今にも當城受取の使者が參らば如何召さるゝ御所存ぢやな^山貴殿御先祖八幡六郎殿より代々御家老の御家柄なれば下知に付くは一統承知^千崎たとへいか程よい御思案でも是がのひては詮ない事申さば一家中が一期の浮沈^富森我々始め一家中末々の者に至るまで貴殿の心底承つて安心が致させたい^四人サア思召は如何でござるなト^雙方より顔を詠めつめかけてい^山是さ御家老由良之助殿おし黙つてござつては相分らぬ^千崎何となりとも御發言はござらぬか是さ御家老是は又どうした義でござる^富森我々は代々殿の御恩を蒙る者御遠慮には及びませぬ^水速いまだ御思案が付きませぬかハテ拵困つた義でござる^山此上は何れもまづあれへおこしなされい^三さやう致さう^ト組み中程へいて四人座な^山片各方あれ御覽なされい先刻より我々が評議御家老はまた御所存も有う^富森いかさま安兵衛殿は早打の勞れもあらうが我々が評議を餘所におしだまつて居ても

濟ぬ儀^水堀部氏御手前も是へござつて相互に力をそへ評議さつしやれてもよいでないか^千崎落付顔は其意を得ぬサア安兵衛殿是へ來しやつしやれ^山安イヤそれへは參るまい^四人とは又なせ^安何れ大星殿のお思召もござらう手前は御家老の御意を承り其下知に付く存念その評議にはお省き下さい^山何れもあのたは言をお聞なされたか色々に申て見るが評議ではござらぬか省て吳ろと落顔付^富森捨ておかつしやれ^山ありや轉動致し血迷ふてをる馬鹿者だ相手にさつしやるな^千崎此上に評議は無益城を枕に討死は覺悟の前大手先へ出張して城受取の藥師寺めを討取申さう^水速左様^山此方は必死の働き付添ふ奴ばら何千騎をるとも切て^山切死まづ軍神の血祭り^山片幸ひ臆病者の堀部安兵衛^富森血祭にぶつ放し一家中への見せしめ^四人はぞ屈竟と^舞舞臺へ戻る^安何に血祭りに此安兵衛を討ち果すとか切らばきれ突かば突け軍神の血祭りに討たれもせうがコリヤお手前達狂氣したのか無分別と云うか氣の毒千萬^山片さすが他家より養子の安兵衛^千崎勇も武もなき臆病者^富森譜代恩顧の我々にむかひ^水速狂氣したとは能々申た^四人いで此上は

ト四人刀のつかに手をかくる安

らヤレ待たれよかた

扱は城を枕に討死する御所存か人いかに我々が心

は金鐵たいてい胸ふハテたのもしい忠臣と思ひ

しに揃も揃た不忠不義不孝不仁の無道人大悪人とは

お身達の事だはトきつといふ是にて四人顔見合せ安兵衛の方

つめか森ヤア過言なり大星君のために命を捨る我々

を咄不忠不孝不義不仁とは何のたはこと千大悪人と

は法外千萬聞すてられぬ水速今一言いふて見よ生ては

おかぬ四ななんと反打きらまづ承らうは殿判官

さまばかり御主人にて御臺所は御主人にてござらぬ

か四入れた事御臺所も御主人さまら然らば各々方

大不忠者でござる人とはまたなせト反打せいら各

々當城に籠城なし城受取の御上使へ敵たふは足利殿

へ敵たふ同前は天下に對して逆賊ならずや然らば御

臺所は刑罪御家門方に至るまでいかなるお咎めあら

んもしれず手はおろさずと各々方の心より主人を殺

し奉るは是限りなき大不忠まつた鎌倉在番の衆は固

より城中に住む一家中親子兄弟縁者の輩幾千の數を

しらず御仕置となる時は子として親を殺す不孝城中

五百有餘の人々に討死さすは不仁ならずや類葉數多

の妻子眷族何國にかくれ忍ぶとも天下の御威光を以

て悉く大罪に行はるゝ時は是不義なり大惡不道人と

申たが此由良之助が誤りか人四ム、サそれはら誠の忠

臣孝子と云ふべきは當城は天下の御城速に明渡し時

節を待て御家門より御養子を願ひたとへ半知半所に

ても鹽冶の御家相立は是ぞ全き忠臣義士親兄弟の安

心は目前の孝養多くの人命を助くるは仁なり義也然

る時は仁義禮智信の五常に叶ひ美名を末世に傳ふべ

しサア拙者が所存はかくの通り上使到着の節すみや

かに開城あるか但し不忠不孝不義不仁天下へ對し逆

賊の汚名が取たいか人四サアそれはら城受取の御上使

へ敵對なさば冥途黄泉より亡君のおよるこびあるべ

きか人四サアら各命にかけがひがござるか

何れも方まだ了簡が若いトきつといふ四人段々理見

合せ居住をかへる内安兵衛下座にて安ハ、アお國家老

殿が只今の御理解安兵衛承知仕てござるトかなし四人

の立役銘々刀を提げ花道へつからといて中程にてすわり互に吐息

をつき仕方ない腹切らうといふこなしにてうなづきあい肩衣をばれ

肩をぬき素肌になつて腹切らうとする此内由良之助は安兵衛と力辯

を招きさしづする兩人ハツと奥へはいる花道の四人かくこして

水上使を引受け討死とは存ずれど今大星殿の仰にも

時

千御本城を明渡すを

生煩さげてのめ／＼と見てはをられず山かゝる時節に討手を引受一筋の矢も得射出ぬは生身の腰抜同前富鹽治の御家に耻をしつた武士はなきかと隣國まで物笑ひは亡君のお耻辱速一命をおしみ浪人となつて朽果んは武士たる身の耻の所崎元より我々二君に仕へて後榮を計らん所存は毛頭なし山討手來らざる内いさぎよく切腹なさば城を枕に討死同前森義によつて命は藁芥此場の殉死を望む所各心一致の上はおくれは致さぬ人今こそ切腹ト立身にかまへ腹へ突立らヤレ待れよ旁殉死とあらば承知致したが御一統にお心殘の儀はござらぬか速此期に及び何心がゝり千覺悟極めし我々が一命山一旦つがひし詞は金鐵富卑怯未練に生長らへる人所存はござらぬト直すな取拙者は敵師直を安穩に生置が死後の殘念人ヤア各々には此儀心残りにござらぬか四ムウ、ト思案してきつとなる人かたを入てつか／＼と本舞臺へ戻り由良之助の雙方より顔を詠める由良之助すこひそめきて各々命を全うし時節を伺ひ師直を討取て亡君の御墓に献じ其後切腹いたしなば亡君尊靈如何計りの御満足此場は無事に古例をたゞし作法を亂さず速に御本城を明渡しますイヤサ片手打の御沙汰とは申せども上へ對し

てお恨の筋はござらぬ唯一人でござるぞ昔が今に至るまでといまる所は各一心でござるぞ御承知御合點が參つたか御會得かム、手前に於ても千萬忝う存するト四人は聞届るこなし由良之助は承らまづ御代々御金藏に納めある御軍用金を配當仕り思ひ／＼に當地を離散し手前直さま鎌倉へ立越え縫殿様へお目通りを願ひ御臺さまお跡々の事どもお願ひ申くはしく御内談申上御思召を伺ひなば大體由良之助めが存じよりと恐ながら符合致す事も御座あらん中々の御才子様にござればお國勝手の拙者など逆も愚案の及ばぬ所でござるとくと御賢慮も伺ひし上ならでは容易に計らひませぬ最も御家門方には何の御沙汰も是なきよし是一个の安心直に手前は引返し都山科にするべござれば是に引籠りまする御苦勞ながら其節彼地にて御會合下されば各々方の御存意も承り手前が存寄も打明て御談じ申す各々方は御當家格別の御家柄ゆる御若年とは申せ共かくは御評議に及びまするぞ別て爰に一つの難事がござる今にもあれ城受取の御上使御發向の節若侍一統に御上使へ對し不禮慮外御座有ては相濟ませぬ其砌手前一人が高聲に申共中々以て行

届きませぬ各方には手寄く組下へ由良之助が下知
なりと有て御制し下されい此義偏に頼まするぞ何事
も委しき儀は山科にて再會のうへ心底打明し申談す
るでござらうまづそれまでは隱密くト各々を制する
幕明の四人の諸士をはじめ大部屋中通り紋中惣出にて上
下諸士のこしらへ花道際より戸屋までつきならび出て
今遠見致せし所城受取の役人見え早馬にて凡同勢
五百騎ばかり御城下へかけ付ましてござる丹
く由良之助殿の御評議はいかゞ相成ましたな山只
今由良之助殿の心底承りし所崎御軍用を配當して當
城を明渡さん評議一決すりや當城を明渡し思ひ
く離散となエ、奇怪至極我々には上使を引受
一合戦仕り物の見事に切腹致さん皆何れもござれト
勢ひくんで花道へ引返さうとする四人の立役千鳥に入替り
此中へおし分け入り雙方をとめる由良之助は本舞臺にて
レ静まられよ何れも由良之助が唯一言申出す儀がご
ざる立騒がすと各々方一同席に着つしやれト手をあげ
も皆やはり向ふを見つめかけ出す四人の立
役待つしやれくと捨せりふにてとめる眞情なしかた
く亡君御存生の節は愚味の拙者が申す事お聞濟あ
つたれどかく相互に浪々の身となればはや由良之助
が詞取用ひはないと見える是非がない亡君の御無念
御存意を達せんと思ひよりし儀もござれど手前が詞

用ひなくば各々方には御勝手になされい冥途にて尊
靈に申譯仕る御一統御介錯跡々よきに計らひめされ
刀に手なかけ切腹せうと諸ヤレはやまり召るな由切腹
トする手もとの諸士とめて皆ヤレはやまり召るな由切腹
といめ召さるゝは手前が詞用ひさつしやるか皆々で
も由切腹せうか諸士はやまり召るな由詞を用ひさつ
しやるか皆々も由切腹せうか皆々サアサア皆々サアく
くくかやうに各々方をとむるには良兼所存
がなくて申さんや待といふならサ、引うくト手
舞臺へもとれとする四人の立役ととめあて手ぐりに本舞臺
へくり戻し下手一ばいに戻る由良之助下座の諸士皆々にむかひ
御一統よく聞かれよ今にもあれ城受取の上使發向の
砌不禮が有ては相濟ませぬ亡君御死後の御耻辱と相
成りまするぞ此義第一に承知召れよ又城を枕に打死
と決心あらば各々方の一命は亡君尊靈現世に於ては
かく申す由良之助大言にはござれ共各々方の一命を
預りまするが手前に預けさつしやるか御不承知か遠
慮なく一身の外味方なければ御思召の通り答へさつ
しやれ又夫々に評議のうへ返答さつしやれかならず
遠慮さつしやるな四サア評議くト下人居ます是にて三
セ七組にも九組にも別れ小聲にて談合の思入にて四人の立役を合
く何か言聞かす事暫く有てやうく皆々得心のいたるこなしに
する四人由良之助にあひ
四由良之助殿一統承知仕つ

てござりまする^ゆすりや御一統御得心か^{皆ハ、アト}
つらりと^ゆ並^{エ、忝}いその志あるならば立騒ぐ所で
評議する^上に染る切先を打守り
亡君の御無念残る御切腹の短刀は由良之助へ
御筐恐れながら御無念の血肉は五臓六腑に守護し奉
りやがて時至りなば御筐の短刀にて^上拳を握り無
念の涙ハラ^{〳〵}切こそ末世に大星が忠臣義臣の
名を上げし根ざしはかくとしられけり^ト紫の帛紗に包
し出し愁のこなし^皆すりや敵師直を^ゆ是^トきつと^{おさへ}
皆々身をふるはし^いき納^{らハ、ア}忝い亡君の尊靈嘸や御悦び遊ばされ
めて^{んサ、何れも御席へ}〳〵^ト皆々行儀よく候るへ^{並ぶ此内奥}
る位牌六つ帛紗に包み又文庫に入し結構なる過去帳^{安ハツ}由良
之助殿の仰の通りお床飾萬端力^彌御書院廻りの掃除等
まで致しおきましてござりまする^ゆお床飾おかけ物
立花お表道具其外お持物おかざり付調ひたと^右
位牌を一つづい出した^いた^き四人の諸^ら御家の系圖は御臺
さ頭と力彌安兵衛に一つづい渡して^{右過去帳の文庫より結構なる}
帖を出して始よりくり出し見
て中程^ゆ御當日は賣切院さまばかりとおもひしに思
ひがけなく當君にも^ト庫へふくきぐち納めふたをして^ら御
先祖代々^皆我々も代々^皆晝夜詰たる館の内「けふを

限りとおもふにぞ名残りおしげに見返り^ト皆々
思入にて後ろ向にな^{むかふ}御上使^トふれこ^{皆々}
りあたりを詠める^ゆり^{言上るな宜}御上使^トは^{手をつくち}御上使^トは^{ヨシと木頭}
〳〵^ト數といめて^ら御上使^トは^{ヨシと木頭}
あられませう^ト本幕^{よろしく}

右正本は弘化三年彌生角の戲場にて増補裏表忠臣
藏二十二段續四段目の裏趣向は東都眼玉堂白猿作者
西澤一鳳軒李叟世に類本ありと雖も抜本又は寫しな
るゆる辭の長短語路の運び違失多かるべし今此本は
西澤綺語堂直正本を以て爰に出す者なり

西澤文庫
傳奇作書後集中の卷

目次

- 一 星野和佐矢數の話
- 一 最明寺諸國行脚の話
- 一 佐野治郎左衛門人殺の話
- 一 宮城野信夫敵討の話
- 一 山崎與次兵衛吾妻の話
- 一 富士淺間復讐の話
- 一 佐々木巖流敵討の話
- 一 嵐小六忤雛助へ教訓の話
- 一 三浦屋高尾最期の話
- 一 尾上岩藤草履打の話
- 一 妹脊山の鴛鴦景事の話
- 一 衣裳好み上手下手の話
- 一 謠曲望月復讐の話
- 一 復讐望月譚の草稿

西澤
文庫傳奇作書後集中の卷

西澤綺語堂李叟著

星野和佐矢數の語

尾州の藩中星野勘左衛門は寛文九酉年五月二日皇都蓮花王院の三十三間堂にて惣矢一萬五百四十二本の内八千九筋通矢にて弓の天下なりしが十九年後貞享四卯年四月二十七日紀州の藩中和佐大八郎惣矢一萬五十三本の内八千百三十三筋通箭にて弓の天下は和佐に定りしと云ふ是を歌舞妓狂言に大八郎を敵役とし勘左衛門を立役として坊州苗討松と云ふ外題にて潘谷のお寅茶屋山科の奴茶屋などを取組めり此もとは何とか外題覚えぬ十五卷の寫本（濃州大垣の家中に和田大八とか云ふ者の事を書て紀州の和佐大八郎とは別人なり）より出て其後けいせい倭莊子出來たり大和の助國花壇の花を愛して後蝶となり花壇に戯れしと云ふ艶道通鑑戀の部にある作り物語によりて

仕組み倭莊子と題せり是は矢數の狂言とは別物にて京岡崎に妹殺しありしを戲場にても早速に仕組建部涼帝（綾足とも云ふ片歌の祖なり）が作西山物語には大森彦七の末孫の事にして萬葉體の古言に書たる三冊の小説あり是岡崎の妹を殺せし語を書きたる物なり倭莊子は小槇助國の名に直して古狂言をはめたれども狂言一日に足らぬゆゑ苗討松に出たる和田雷八と越野勘左衛門を交へてやうやく一つ世界の物とせしなり以後是を題として増補するゆゑ矢數の狂言にはかならず小槇助國軍治兵衛等の役わり出て和田雷八を敵とし星野を立役とするは和佐氏のいかい迷惑なるべし

最明寺諸國行脚の語

寛元弘長の頃鎌倉の執權北條時頼入道最明寺道崇と呼て諸國行脚したまひしと云事普く人口に膾炙されどもたしかなる書に見えず是諸曲の鉢の木に作せしより藤榮曲謡なんど作りもうけて北條九代の内時頼を賢人と稱する事尤も古く云傳ふる所なり淨瑠璃にも北條時頼記最明寺殿百人以上膺とて元祿享保に西澤近松等が作せしも彼佐野源左衛門經世が事蹟をおもと

して出たり爰に天明四辰年三月二十四日に一奇事ありて意恨のもととは前年卯極月五日お鷹野の折にして佐野氏切腹は辰年の四月三日なり淺草門跡寺中神田山徳本寺に石碑ある事は誰もよくしる所なり其當座歌舞妓にて稻光田毎月と呼て曾我の世界とし又けいせい含筒條と外題して梶原と結城の世界として始めしかど未だ其境に至らず夫より第六ヶ年の後寛政元

酉年八月十五日より堀江此太夫座の淨瑠璃作者菅專助有職鎌倉山と外題を呼び佐野源左衛門經世三浦前司泰村の悴荒次郎義勝を刃傷にすと作り都て北條時頼記の役名を借りしは近來の淨瑠璃に珍らしき働なるべし尤も時頼記にも鷹狩の場ありて由解大助原田六郎の詰合あればそれに倣ふて三浦と佐野とし七つ目佐野の隠れ家に天逸坊をちよんがれ坊主につかひたるはよき書物といふべし天逸坊の一話は享保十三申年秋八月大岡侯のお捌にて落着せし事は又よく人のしる所なり佐野氏一件より五十六年前の事なれども此狂言に書入れたれば後には同時の事とおもふ者も多かるべし此鎌倉山にて田沼の世界定まりし後はけいせい佐野の船橋鎌倉比事青低錢などゝ歌舞妓にて

外題をよぶ事とはなりけり先狂言の佳否は二段にして世界人名をよく案じ付たるは作者の手柄にして前集に云ふ忠臣藏の狂言は夜討の年より四十七年目に漸く高野師直鹽治判官大星由良之助と世界人名定りたるに佐野は六ヶ年目に世界定まりし其すみやかなる事感すべし

佐野治郎左衛門人殺の話

元祿の頃江戸新吉原にて萬字屋の抱女郎八橋を切害しかの籠釣瓶の刀(水もたまらぬとはめたる謎なり)を以て廓中にて大勢の者をあやめ召捕られ死罪になりしと云佐野治郎左衛門は總州の郷士なり菊岡沾涼近世東都著聞集にも出し江戸にては歌舞妓に仕組青樓詞合鏡と外題して大通人と云紀文と混じて二番目物の世話狂言とせり紀文事は大盡舞の文句にもありて紀の國屋文左衛門とて東都の豪商なるが活達の聞え浪華の椀久に相似たり此紀文の外に植木屋文藏お賤女郎と情死せしを紀文お賤と取組佐野に八橋お賤に紀文と對にし佐野源左衛門鎌倉山を前狂言とし切狂言は源左衛門の別腹の弟治郎左衛門と作り花菖蒲佐野八橋とせしもあり何分八橋治郎左衛門も紀文も

江戸の事なれば京攝の耳には遠く狂言に呼ねば自らしらぬ人も多かるべし

宮城野信夫敵討の話

慶安年間陰謀を構へ梟首となりし由井丸橋等が事跡をしるせし書數本ありて何れも實説／＼とあれど皆推量の説のみなれば信するに足らず中にも寛慶太平録と云ふ書は慶安太平記鼠猫太平記などゝ違ひ珍らしき所ありて實説に近からんかとも思ふ條もあり此中には彼の宮城野信夫に助太刀をして復讐の事を載せず外に由井女敵討の助太刀せし事を記したり由井丸橋を淨瑠璃にて享保十四年尼御臺由井濱出と外題して泉の親衛に托して出したれども末世に行はれず慶安某の年より八十ヶ年後にさへかくの如し是より後歌舞妓にも廓習晝夜正説とてやうやく外題に小説と句はせ見れどもと謀逆の族なれば和らかみなく狂言になり兼たり寶曆九卯年太平記菊水の巻にて南北朝を世界にかり宇治の常説鞠瀬秋夜と誣つけしより漸此世界とは定りけり然れば慶安より百十年目に狂言とはなれどするどき計りにて和らぎなし安永九子年江戸にて恭太平記白石噺とて宮城野信夫の敵

討を題にせしより狂言に和らかみ有ていよく此世界とは定りぬ其後は歌舞妓に姉妹達大礎など作して白石噺の作者烏亭焉馬が作功なりけり今駿府兩替町北側に梅屋勘兵衛宅の跡ありといひ又府中上の口彌勒寺に姉妹の尼が由井の菩提のため建立せしといふ墳墓あり是も安永の白石噺後姉妹の尼が建立なりと唱ふるにやあらんかし

山崎與次兵衛吾妻の話

享保三戌年近松門左衛門作にて山崎與次兵衛壽門松と云ふ淨瑠璃に新町ふちや吾妻といふ傾城に身をうち與次兵衛狂人となる仕組ありかの枕久に似て同時の頃の人なるべけれど與次兵衛には證とすべき者なし是は全く淀屋辰五郎家屋敷關所となり城州八幡へ引籠りたれば其放蕩の事を寫して八幡山崎の對に見立與次兵衛と拵へなしたるなるべし新町の傾城も淀屋辰五郎が通ひしは茨木屋吾妻與次兵衛が馴染しは藤屋吾妻なり茨木屋幸齋奢侈の咎め請し事あれば藤屋とせしものか又與次兵衛の父を山崎淨閑と呼たり是山崎宗鑑によりて名づけしものか又難波屋與兵衛（俗に是を南與平と云ふ）吾妻を見そめ母より頼みて

吾妻と盃をし兄弟分となつて金を貰ひ江戸へ行き油商となりて立身する事あり是は宗鑑の句に宵ごとに都に出る油賣更てのみ見る山崎の月はよりおもひ設けて南與兵衛油商ひに利を得ると仕組し物なり歌舞妓狂言にけいせい黄金鱸と云ふは美濃國齋藤家の狂言にして先祖は庄九郎と云ふ油商人より立身せしと云ふ系圖をかたり家老に山形道閑と云ふあり是も山崎宗鑑を云ふか壽の門松には與次兵衛の嫁をお菊舅の名を梶田治部右衛門とて淀の郷士となし敵役は津の國服部の下人葉屋彦助と云此狂言より八年後享保十巳年に昔米萬石通とて西澤一風作濡髮長五郎放駒長吉の狂言出是より又二十五年後寛延二巳年壽門松萬石通を一つに作して雙蝶々曲輪日記と竹田出雲は作せり然らば山崎與次兵衛は壽の門松より三十三年目にして雙蝶々の濡事師役とはなりけり此時淨閑の名を與次兵衛として與次兵衛を與五郎と改め治部右衛門を橋本の郷士とし嫁をお照と改め難波屋與兵衛（一名南與平）を八幡の郷士南方十次兵衛の倅と改め狂言の筋は其まゝながら世界爰に一變して淀屋辰五郎が事跡とは誰も心付かぬやうには成りけり夫より

後は長吉長五郎の狂言といへばいつもやつし役は山崎與五郎をつかひ南與兵衛の役名は第二義となりけり芝屋勝助（司馬史）長嘶の内賣油郎と云唐山の小説を通俗して油と題し山崎の油商人傾城を見染一生の思ひ出に此君を抱寝せんと日々纔の錢を溜置後大盡の姿となりて青樓に遊ぶ一語を作す此名を油屋與兵衛と呼傾城を藤屋吾妻と呼ぶは舊壽の門松難與兵衛の事にしてかの宗鑑が職人歌合の油賣の狂歌より出たるものなり近松翁は都六條柳町の遊君芳野（後灰屋紹益の妻）太夫に惚たる鍛冶屋仁藏が一話と材木にて利を得たる河村十右衛門（河村瑞軒）の事を合せて壽門松の難與兵衛とせし考は追加に出すべし枕久の紋所は扇車なりとは自笑其蹟等が作の雙紙に出山崎與次兵衛の定紋は蛇の目なりと壽門松にあり淀屋辰五郎の定紋は未だ考へねばしらすといへども若しや蛇の目の紋にやあらん後人の考へを待つ

富士淺間復讐の語

信濃なる淺間嶽のもゆといへば富士の煙のかひやなからんとの古歌より思ひ設けて謠曲の富士太鼓を作せしより後に小説神史淨瑠璃歌舞妓にも種々と趣向

を付一かどの物とはなりけり舊より作り物語にて根なしごととは云へども是等はいつの時代と定めず其うへ舞樂伶人の雲上なる事なれば作者にはよき得意なるべし自笑其蹟等が雙紙に種々有て淨瑠璃には弱法師(高安の一子俊徳丸)と混じ合せ秀伶人吾妻雛形と外題して享保十八丑年に並木宗助作せり文化の始頃東都戯作者曲亭馬琴三國一夜物語として小説を出せしより今は専ら此世界になり歌舞妓にも是を潤色して復讐高音鼓また内百番富士太鼓と呼もあり馬琴の讀本に御座船の内にて淺間と富士が舞樂の問答は千路行者の作英雙紙か繁夜話の中に豊原の兼秋音を知り一語をはめたりかれは琴これは太鼓と變りたる計りなり因みに云小説は英繁の作者(十河六藏)に見所ありて京傳馬琴よりは遙に立仲たるものなり曲亭も毎度此小説を採たる文あり又弱法師の俊徳丸を攝津合法辻に加へ半二は作せり富士淺間住吉天王寺の樂人弱法師は西門にさまよひて日想觀を拜し合法辻はおなじ所の古跡なれば何れも荒凌山に縁あればおなじ世界に取組てよき見附物なるべし

佐々木巖流敵討の話

劍術に名高き佐々木巖流はいつの時代に有りしか其うへいつも敵役にせらるゝは不幸とやいはん淨瑠璃には延享に花筏巖流島安永に花柳會稽褐布染とて日本武者之助助太刀して敵討の仕組なり文化の始宮本無三四(劍術名譽の人書畫をよくす)の實父吉岡太郎右衛門の敵巖流を討と劍法の達人に名高きを作り設け二島英勇記と題せし稗史出たり是より舊の巖流島の狂言廢り二島英勇記に一變して近來段々是を増補し東都の講釋師劍法名譽の人名を集め數日に讀延し長々敷物語となしたりされ共狂言には成がたく色氣なくいつも劍術のするどき話のみなれば忠義水滸傳を讀ごとく心ばかり強くなりきんで聞くのみなれば講釋にはよく共喜怒哀樂の四情に通せず狂言には成がたし敵討巖流島共復讐二島英勇記ともよびて近來歌舞妓に毎度すれども舊演芝居狂言にして無三四一人は變らねども相手役一遍づゝ出合ひて後に出る事なく見所すくなし是等を演芝居狂言竹田狂言と唱へて好者家には嫌ふものなり

嵐小六忤雛助へ教訓の話

嵐雛助(始中村十藏小珉獅の事)寛政八九年の頃しき

りに評判よく見物より聲かゝり褒てかゝれば其身も嬉しくいよ／＼舞臺出精して肩をいからし樂屋に入りし時父小六(始雛助小六玉なり)呼で今見物の褒たるは誰を祝ひてはめたるぞと問ふに珉獅付の下男若旦那を褒てのぢやと(ぢやとは樂屋方言にはめるを云)いふ小六小珉獅をにらみ付て扱も／＼苦々しき事なり即座に褒る見物は濱芝居の見物なり門へ出れば直に忘れて仕舞ふ切見の見物のする事なり大歌舞妓の見物は一日の狂言を見歸つて一日の惣評をして誰渠は上手なりと感心して褒るが故に芝居藝中に褒るものにあらずそれをしらす聲さへ掛くれば嬉しがり見えを切らずともよき所にて見えをきりせりふの言はなしにも場當りよきを考へ褒るやうにするは下手役者濱芝居の十文役のする事なり大歌舞妓の古名人役者は誰言合すともなく仇褒をさせまい／＼と計り考へて大事に勤む去とは情なやうぬが仕やうの下主張^{げすは}ると見えたりたしなみおらうと大音にて言りこらせしとぞ實に其道に秀でし名人の詞には金玉の論あり感ずべし右に云ふ二島英勇記の狂言に心を付て見るべし二段目無三四凱陣してよりさせる役なき

により墻^{かかし}礎^{いしづ}花^{はな}大樹の中入來芝が拍手公成いろはの櫻子と傾城買の論嘘より出たる誠真より出たる嘘といふ間をはめてすれども(此誠の嘘と云ふ事は傾城禁短氣自笑其積合作の書にあり)實の濡事師ならねば狂言浮てしまらずそれより直に立廻り(金輪又は玉川の歌に合せ八人詰のたて)跡の出立はけいせい會稽山二段目加藤清正^{淺尾爲十郎}上田慶治郎^{嵐吉三郎}のはめ物なり三つ目備前一の宮の場にて白倉の娘系萩武者修行の無三四を見染直に白倉屋敷より風呂場となり命を捨て無三四を助くるとは狂言淺くしていはい仇惚する浮氣娘なり兼て大序にても見染めて一年と二年立事狂言ならでは情ふかゝるまじと思はる薄情の移り氣は當世のはやり物ゆゑ英勇記などは當時の人氣に叶ふかはしらねども但見たため計りよくて實少し是を濱芝居狂言と云又小六玉の忤に教訓するも大歌舞妓濱芝居の差別ある事を云ふなり今や古への大歌舞妓の役者なければ見物もなし賃子役者と賃子見物とが大歌舞妓の小屋に集り見せ見られつする事なればかく論するも無益ならんか世の流弊のなす所嘆ずべし／＼

三浦屋高尾最期の話

延寶の頃江戸新よし原に名高き女郎多かる中に三浦屋高尾は三股にて提切となりたればこそ意氣張強き美名を遺しけれ卑しき女郎と一口にいはい云へ其廓中に流を汲む輩は神とも佛とも崇むべし爰によく似たる一話あり梅臚主人の作せし新齋夜話に作りもうけし話ながら或る日大石良雄次男大三郎を連れ北野の聖廟に詣で繪馬堂にやすらひあれは繪馬を見するに大三郎王昭君の繪馬を指して其譯を問ふに良雄くはしくとき聞せ古人の詩にも昭君若贈黃金賂定是終身奉三君王と作せりと語る時後の方に口惜き詩の誦しやうかなといふて過る者あり老たる法師の御灯の油をさして本社の方へ行にぞありける良雄心に掛れば本社に至りかの老法師に逢ひ今昭君の詩を吟せしを御僧の聞咎め給へるはいと心にくし我等は田舎に育ち假名付本のみ讀習ひし事なれば都の人の耳には嘸をかしと思さん今の詩はいかによめるがよき事に侍ると問へば法師の云我等こそ遠き田舎の生れにて侍れば梁塵の雅聲などは夢にだに聞侍らずされどいさゝか手爾遠葉にて事の大意大に違ひ題の趣も作

者の心もかくる事あり愚案をいへば昭君が畫圖に寫されし時外の宮女の中にも昭君に劣らぬ美人いか計有けん今其名をだにしる人なし昭君獨千載に哀を殘し顔かたちのみか心の内の正しき事美しかりし事誠に天下の美人といふべし譬ひ外はおとらぬ貌ありとてもかの黃金贈りし心の醜さはいかで愛するに足るべきや諺にも人は一代名は末代といへる如く利慾を離れて名望をおもはんにはしかじされば江の相公も其心をふくめて昭君もし黃金の賂を贈りなば定て是身を終るまで君王に奉るのみならんと作り賂を贈らねばこそ末代に美名を殘しつれとの意を含ませて昭君が潔白を賛し給へるなるを足下の吟じ給ふやうにては昭君が清潔を過てる様に心得給ふやうに侍れば不圖難じ侍るなり凡今の世に仕ふる人を見侍るに其心得違ひあるも少なからず桀紂は天下に王たれども人は是を惡み夷齊首陽に餓たれども人は是を好す清盛の榮華ならんよりは正成が薄命なるぞ美しき僧の利の爲に法を説を賣僧といふていやしめ士の利のために仕るを商奉公といふて譏る名利兩ながら忘れてこそ道に近づくと云ふべけれと老法師の高論

に良雄は内に思ある身にしあれば感じ別れ重ねて尋ね侍りしかど其僧はいづち行けんしる人なしと書けり高尾は事こそ替れ喜は相同じからずや貴人におもはれ身の幸ひを喜ぶべきを兼ねて契りし浪士に操を立意氣地を立通せばこそ提切ともなれ其儘貴人に仕ふれば誰高尾ともいふものあるまじ廓の意氣地といふは則操なり操を守つて清潔の名をといむる是らを廓中の王昭君ともいはまほしき事なりかし

尾上岩藤草履打の話

或書に是は大久保家に有りし事なりとあれど天明二寅年江戸淨瑠璃加々見山舊錦繪と外題せしより加州の奥向にてありし事とはなれり諸侯お屋敷の大奥には是に限らず毎度あるべきとおもはる古くは鎌倉見聞志に局松島朝比奈義秀を思ひて北條朝時に嫁するを忌て自殺の時召使の婢女に書置を渡す所粗尾上のお初に狀箱を渡す内に似たり鏡山いざ立よりて見てゆかんと黒主の古歌ありて江州の事とし文字に加賀見山と書て聞せしものを東都歌舞妓三月狂言には年々歳々仕盡し其世界を北條にし足利にし色々増補すれども惣名を加々見山と唱ふるもをかしからず

や中にも金龍山婦女行列と云ふ外題あり是等は打出して東都の事と顯はし鏡山と始て外題に付し時の作者の苦心はむだと成りけり忠臣藏の世界にても浪華にて本國を伯州と唱へ法を崩さず江戸にては播州赤穂とあらはして唱へ兩國橋の泉岳寺のとあらはに唱へても咎めもなく仕來りしと見えたりされば東都は唯瀾達に土地廣きがゆゑ瑣細なる事は咎めず狂言に取しまりなく着物を重ね着して帶をしめず歩行におなじとは江戸狂言のよき惡口なり浪華は古くより狂言の作り方甚だ手澁くやゝもすれば狂言の穴を見出す輩多ければ淨瑠璃歌舞妓ともに作に骨の折たる所なりしも近來何事も江戸物といへば通ぢやとか意氣なとか褒て江戸狂言の帶解廣げなるを咎めもやらず見事とはなりけり三都名物も多き中に淨瑠璃歌舞妓の狂言は浪華第一の名物なり上手下手の位は浪華の相庭に極る所なり年々衰へ諸藝人はもとより見切者ともなくなりしは流弊の世是非なしといはんか

妹春山の鴛鴦景事の話

所作事景事に扇の手ありて故芳澤あやめ故中村富十郎妙を得たる事は前にも演たる如く能太夫より流儀

を傳はり我一流とする事勿論なり中にも蝶の道行とて倭莊子に小槇助國番ひの蝶戯れて花壇に遊ぶさま故來芝其答に始り今は扇を蝶と見て遣ふ事になりたり又鴛鴦の景事は大歌舞妓にはけいせい素袍裡に故來芝其答に始り中芝居にはけいせい妹春鴛鴦とて泉川桶藏芳澤吉松勤む是は謠曲能に鴛鴦の所作あり神泉苑の池の汀にて五位の位を賜りたるを歡びて舞ふなり此能には秘傳ありて前髪ある者ならでは勤めずと云ふ實にそれなるや不知歌舞妓の鴛鴦の所作番ひ蝶の所作は鴛鴦より趣向を取て所作を作せるものなり文化中に三ヶ津三番ひ鴛鴦の所作事を出しけり彦三大吉來芝友吉芝翫いろはと三組なり此時の見功者おし鳥にてはなくあひるの所作事なりと批評せしが其後は木兎か梟にてやあらん家鴨のうち今一組残らば歌舞妓もかくは衰へまじきを昔戀しとやいはん因みに云昔は能も手輕き事にて臨時に見物より所望の能を勤し事今の御乞におなじ當時は數十日前より番組を定め騒ぐより猩々の亂昔は太夫の心にて若切幕より扇を廣げて出せば囃子の役人心得て亂を打然らざれば常の猩々なりと是らも手輕く其道に達者な

るゆゑなり藝は下手になり事は重々しくなる事何の藝もおなじ

衣裳好み上手下手の話

安永五申年盆狂言に博多小女郎浪枕（近松門左衛門作）の淨瑠璃を題にする和訓水滸傳と外題して志摩の小平次異國へ漂着の一話を書加へ歌舞妓狂言になしけり其時の役割は小町屋惣七元祖小川吉太郎小女郎山科甚吉島黒屋の小平次中山文七黒屋の後平治毛利九右衛門二役淺尾爲十郎奥山なり此九右衛門役は海賊の頭なれば衣裳みな唐物ならでは寫り惡しとて着附羽織は白羅紗の對下着は唐更紗足袋は金唐草其餘提物に至るまで古渡りの唐物計りをつかふとて五十兩の用内（給金の外入用金を云）を奥山は取けり此頃は衣裳小道具とても甚質素なる者なりしを五十兩の用内を取りし事のゑ定めて美々敷衣裳ならんとおもひ初日に見れば着附羽織は白の紋羽足袋も木綿に摺込みし金革紛ひなり興行人より奥山へ約束の違ふ事をせめしかば奥山云大金を出すが故に噂をする噂高ければ見物おどされて紋羽も羅紗と見るさすれば羅紗を着ようと紋羽を着ようと奥山の徳分にて毛利九右

衛門が取るなり大金を出すゆゑ噂高く始より紋羽で
 すると有ては人氣よからず斯様な用内を取るは此役
 と此役者とに有と云ひしが羅紗金革と見物は見て取
 る古今の大當りを取りしとぞ近來御趣意後は止みた
 れ共其以前は銘々衣裳小裂までも金銀にあかせ善美
 を盡せども藝道の拙きを衣裳にて飭るのみにて着曠
 する事なかりし先瑞寛二代目は衣裳好み上手なるう
 へ着曠して何の時の衣裳かの時の衣裳を見物もよく
 見覺えし程なり既に青柳硯道風の役勤めし時洛東山
 狼唄窟の主人俳師大郎より官位に合ひし本装束を取寄舞
 臺に勝手よき様それを手本に仕立させ用ひたり釋迦
 如來轉法輪處の文字を書くにも四天王寺額の大掛物
 を特々床にかけ三五年前より隙ある時は書習ひ居た
 り狂言も故名人の仕來たりしをよく見覺へ居て工夫
 に渡り勤めしゆゑ小野の道風と云は此様なものにも
 あらんかとおもふ計りなりかやうな役は輕卒に勤む
 べき役にてはあらじかし當時けふ云ひ出して翌から
 始めんと芝居にもかゝるむづかしき役を勤むる藝人
 の心行計り強く所詮妙境には至らざること知るべし

謠曲望月復讐の話

内外二百番の謠曲の内故作者大約に取用ひ淨瑠璃歌
 舞妓稗史小説にも出し鉢の木富士太鼓の類ひ各其世
 界を定め仕はやせる物から見物にも皆馴染となり
 種々増補もする事になり望月などは能にても俗に
 近く見るにいと面白き物なれども絶て淨瑠璃歌舞妓
 の狂言に出ず予は兼て是を歌舞妓にせんとおもふ事
 久し以前半書きかけたる草稿あり小澤刑部友房をす
 べき俳優とては當時是なきものから打捨おきしが
 徒らに紙虱の栖とならん事を惜み草稿筋書のまゝ爰
 に出す石橋の所作を得たる役者は亭主の間を仕兼亭
 主の役をこなす者は石橋の業を得勤めず是らは花實
 兼たる名人役者ならではうかつに勤め難き役なりか
 し後世此役を勤むべき役者出なば愚の喜ぶ所なり尤
 も追善とか一世一代とか唱へて道具衣裳萬端再吟の
 上出すべき場なりやり附急稽古等にてはせぬ方餘程
 手柄といふべし

復讐望月譚の草稿

一面化粧やね軒に講札張詰たる宿屋のかゝり下手に
 見事なる門甲屋と印せし宿屋の印爰におじやれ四
 人仕出し旅人を呼て居る旅人の仕出し五六人留られ

居る體有在郷にて暮ひらく百お是おとまりぢやないかいな女三泊らんせ旅人いやく旅人おいらは武佐までゆかねばならぬ女むさ所か鏡までもよつ程ムんすぞへお守山で名代の甲屋はこゝでござんす小旅籠も安うて坐敷も奇麗でござんすぞへ百おまたお伽が入るなら私がゆくがどうぢやない旅人あゝなさけないいかに三上山の近所ぢやとて百足の妖物を伽とは御めん旅人ソレ〳〵あちらの三人の内が伽なら旅人おいらも一所に泊る氣ぢや百お是々あの衆達ぢやとてわしぢやとて味にかはりがあるかいな旅人いや味にかはりはなけれど貴さまはえならぬかざがする皆旅ほしか納屋へマ入つたやうなハ、ハ、ハ、旅人サ、ござれトわやいふて 何ぢや泊らにや泊らぬでよい事をわしを百足の化物ぢやの嗅がするのとあの赤とんぼめらが女お百殿もうよいわいの何ぼう此様にお客を引ても肝心の旦那様やお家さまのおるすコリヤどうした事であらうのお半されば此十日程已前からお家さまは坊さまを連てふつと出やしやんして今に行衛がしれぬよつて近所のお衆が毎晩〳〵かねや太鼓で尋ねさんしても小がしれぬと云ふて現在女房や

我子の事近所のお衆に苦勞をかけるも氣の毒なといふて旦那さまはきのふから尋ねに出て是も今に戻つて見えす百おめんようなこちのお家さまは拔參りさしやる年でもなし一體わしとは違ふて器量よし今度の家出はてつきり狐が見入て旦那さまに化て毎晩〳〵稻村の陰で狐にだかれて寝て居やしやんすか女何のマアそんな事があらう百おさうでなけりや叡山の天狗が鼻をじまんで女房にして居るか女三あれまだあほらしい事計りホ、ハ、ハ、笑ふ此時橋掛りにて百姓かへせ〳〵おちかを歸せよし松かへせ親子をかへせ〳〵大勢はやお茶なと上つて下さりませ七サア皆んすお半あゝお茶なと上つて下さりませ七サア皆の衆一やすみませうト腰をかけ半さうして何ぞ手掛りでも小万しれましてムんすか七いやしれぬ〳〵氣の毒はお内儀といひちつさまでのう皆の衆八サア息子のよし松計りなら迷子の子ぢやが母親も一所にしれぬからはこりや迷子の親子ぢや何ぼ尋ねてもしれぬとはもつけない物ぢや吉サアそれでおいちも氣の毒さに随分と精出して夕べ彦根の町から日野長濱まで尋ねたがしれぬ七あゝ嘸才兵衛殿も氣がもめ

うが皆才兵衛殿は内に居られるかの小女イエ旦那さ

まもゆふべから尋ねに出てゝござんす吉さうであ

らう内儀や息子の事内にじつとして居られうぞおい

らなら氣違ひになれどいふても以前が武士の果ハミ

今は宿屋の亭主でも以前は歴々かういふ騒動にもあ

はてず落付た物ぢや皆さうでござるわいの在郷にな

り亭主才兵衛羽織一本差にて若君の子や着ながオ兵是は思ひ

しかへ帯旅なりの北の方を連れ立出て花道にて衛

掛けない所で御親子様御對面を仕りましてござりま

する北のそなたに逢ふたは主従奇縁の盡ぬしるし此

子のため自らが喜び何かの様子をとつくりと衛兵

何を申すも爰は往還あれに見えますが私が宅むさう

はござりますれどマア御二方共にト本舞臺へ来て

置きす女四ヤア旦那さまお百本に才兵衛殿才こりや

皆近所のお衆此間女房忤が行衛がしれぬゆゑ思はぬ

御苦勞に預ります七何の苦勞はいとひませぬが何ば

う尋ねてもお内儀や息子殿の行衛が今にしれいで

お百ア、氣の毒にござるわいのオサア私もあなた方

のお心ざしが忝なさせめてはと存じまして昨日か

ら大津の方を心ざして尋ねに出ましたが女房の事は

何共存ませぬが道々も餘所の子供が遊んで居ると忤

めが事を思ひ出しイヤ二人の事はとんと思ひわ

すれて幸ひの事ができましたお百才兵衛殿幸ひな事

とは女皆旦那さま何でござんすへオサアそちらも喜

べ近所のお衆にも御苦勞を掛けずもつけの幸ひな事

ぢや皆なんぢやもつけ幸ひぢやオその様子只今お目

に掛けませうト北の方にオハテ何であらうと私次第

に成てマアお通りなされませト北の方と若君を皆お百

是此女中や此子はオ此才兵衛が女房忤皆ヤアオサア

出船あれば入船と行衛のしれぬ女房忤それを尋ねに

出た道でふつと相談して儲て戻つた是此女房忤お百

ハア、そんなら此女中や此子をオ早速私が女房忤に

しませうと連て歸つたは何とよい手まはしではござ

りませんか七成程行衛のしれぬ女房子を尋ねに出て

直に女房子を連て戻つたは本に出船あれば入船ぢや

小女申旦那さまいかに行衛がしれぬとてあんまりさ

つきやくなお手廻し今にもお家さまが歸らしやんし

た其時は皆それ〱大事あるまいかのオ何のかまふ

事皆のお衆聞て下され女房のお近は現在の男に暇

も乞はず忤を連れて家出をしたは皆オ、したはオ狐

狸の所爲か但しは不義問男か皆何のまわオマア其詮

議は二段にして歸せ戻せの迷子ぢやのと近所のお衆にまで思はぬ苦勞をかけまするは皆オ、掛るはオ時にけふで十日計りも行衛のしれぬ女房子どうなつたやら向ふもしれぬ事に幾日も掛つては居られぬ事又お前方に事をかゝすといひこちの身の上はめつきやくの基でござります皆成程尤ぢやオそこで似合なあの女房忤連て戻つて改めて持替るは今物怪の幸ひぢやあるまいかむさいかにも〳〵幸ひなる事ぢやこりや持かへたがよからう吉ヤそれでおいらも晩から尋ねに行くを助かるといふものオサアそこで兩だめに持つ女房子何と皆の衆聞えましたか皆オ、聞えた〳〵オ此上は女子供わいらも随分氣を付てせん女房お近どうせんにおもふてくれよ牛アイ〳〵さういふ事なら申お家さま女皆おたのみ申ますぞへ百申新米のお家さまへ北のヤアおなせ物をいはしやんせぬぞいな北のサア何といふてよからうやらオアレア皆の衆見て下されまだうひ〳〵しいよつて恥かしがつて挨拶も出ぬぢや七籙そりや道理ぢや恥かしい筈ぢや見れば見る程あたま付と云ひ衣裳付百ても結構な形ぢやが申旦那さま百女一體此女中はオ白拍子ぢ

や皆何ぢや白拍子ぢやオサア野上の宿の白拍子年が明けての身の片付そこで我等が女房に呼迎へて候七籙ウ百おヨウ皆聞えたオ此上はあの形もかへさせて宿屋の鳴小女髪は私がゆひ直して上げうわいな北のそこは宜しう頼みまする若君母さま早う都へおのばりなさらぬかいのう方北のイヤ〳〵都へ上るに及びませぬ此上はあの刑部にオア、是ぎやう〳〵御忌参りなら正月に都の智恩院へはおれが連れて參つてソレ大工が忘れた傘を見せるはいのう女房ども北是そなたも母次第になつておとなしうして居や、若それでもわしはと〳〵様のオ爺さまといふはおれぢやぞエ、是なじみがなによつて無理もない小アレ見やしやんせ内のよし松さんと違ふておとなしいぢやないかいな七籙時に才兵衛殿が新らしいお内儀をもたれたら下地の内儀を尋ねるにも及ばぬ百晩からかへせもやめにせうわいのオさうして下さりませ今までは段々お世話でござりましたむさおいらもしんどいめを助つたは物怪の幸ひ吉ソレ〳〵いんでやすむも〳〵つけの幸ひ七籙幸ひ盡しの祝ひ事は追ての事オ成程祝言の時お前方も呼ませうむさそりや忝ない時に今迄か

へせ／＼と尋ねあるいた此太鼓かね^吉ず素手でいぬ

るもどうやら張合がないぢやないか^七サアそこはお

れが思ひ付才兵衛殿は物怪幸ひ女房子替へた／＼

百お近をかへたよし松をかへた／＼ト^{太鼓鉦にて皆々ハ}やして下手へ這入

る^半申旦那さま何はなく共晩の御祝言の拵をしま

せうかいなアオオ、よう氣が付たおれはいふても花

聾の事なれば構はぬ程にわいらよいやうに拵てくれ

／＼^{女皆}そんならお家さま^オハテ女房共に挨拶はい

らぬ早う／＼^{女皆}アイ／＼ト^{奥へ這}オそれ島臺も飴

つて難煮もがてんかト^{奥口伺ひ相方になり}御主人の

北の方白菊さま若殿花若君^北以前の家來小澤刑部友

房^{オハア}、恐れ多い拙者が其名乗も御主人安田の庄

司友治公^{よちはる}の一字をたまはり大恩を蒙りし身も御不興

によつて今町人と成て賤しい宿屋は仕れど何卒元の

主従と歸參の義を平日の大願所に今朝瀬田の橋詰に

て不思議に御對面申せし御親子さま途中の事ゆゑま

だ様子は承りませぬが心元なう存じまするして事の

子細はどうでござりまする^北友房そなたに様子を語

るも無念なやら悲しいやら今更涙が先立つ計りぢや

わいのう^{オイヤ}／＼申北の御方左様に御愁嘆あつて

は事の様子が相しれませぬたとへいかやうの儀で

ござりませう共拙者が對面申上憚りながらお氣遣

ひはござりませぬ何故御親子上方へさまよひお上り

なされしぞ其様子早う仰聞られませう是はしたりや

はり御愁嘆誰ござらう甲斐信濃の御主安田の庄司友

治公の北の方ではござりませぬか^北サアその我夫友

治公には人手に掛りて相果なされたわいのう^{オヤ}、

何と仰せられますな^北口をしや我夫には過つる葉月

名におふ姉捨山の月御遊覽の歸るさ長柄の鍵をもつ

て乗物ごしに突通され急所の深手にやみ／＼と御最

期をとげ遊ばしたわいのう^{オエ}、／＼^北そのう

へ家に傳はる司馬法の一巻まで奪取られたわひのう

オナニすりや大江の匡房公より傳はりし兵家の奥儀

をしるせし司馬法の一巻を奪ひ取らんため^{チュエ}、

若母様早う都へのぼつてとゝさまの敵が討たい刑部

討たしてくれいやい^オ若君様には健氣なお詞然らば

北の方には敵を討ん其ために^北此子を連れて上洛の

道にてそなたに對面とげしは神佛のお引合せ^オ君父

の仇には俱に天を戴かずと申せば^北どうぞ親子の力

となつて^オ御不興の拙者なれど^北以前のよしみ^オ古

主の敵北かならず共にオお頼みなくても討たにや叶

はぬ二君に仕へぬ拙者がたましひ何卒御不興のおわ

びを申今一度御主人とお目見えとげんと思ひしに武

運の拙き御主人の御不幸してその敵は何者名苗字と

くと御存じでござりまするか北サア我夫の御最期に

御無念の血汐をもつて肌着の袖に印し給ひし敵の姓

名ト懷中より白絹
を出して見せる

オ流石は御主人御最期の場所に天晴

の御賢慮何敵望月左衛門秋仲を討取て修羅の妄執を

晴すべきものなり安田庄司友治すりや敵といふは北

望月左衛門秋仲都在番とあるゆゑオお氣遣ひなさる

な敵の名苗字しれし上はお家の重寶奪ひかへし拙者

が助太刀北夫の敵此子のためには親の仇オ御主人へ

の修羅の忘執北サ一時も早うオ心はやるは お道理な

れど敵望月は名におふ大名うかつに向ふは事の破れ

是には手立がござりませうト手を組みじつと思案する向ふ
より間屋場役人袴羽織にて關札

な役サアござれト甲屋はきつい仕合せぢや役△
さうでござる共才兵衛殿トオ、仲間衆けた、

まししい何事でござる役人はめでたいは、愛な内へ大

名衆のお着ぢやしかも都在番のお大名ぢや役随分と

丁寧にせにやならぬ其代り旅籠代は擲取ぢや役△とん

と錢もうけの晝になつて來たぞやオ是々こちの内へ

大名のおつきかな役サアどういふ事やら本陣をさし

置て甲屋がさし宿ぢやオアノ都在番の御大名がこち

の内をさし宿で役追付お着ぢや此關札を表へ立てお

くぞやオどれ其關札を役何ぢやおいらはエ、よまぬ

字だトさし出望月左衛門宿北ヤアオもしお喜びな

されまし望月左衛門が私方へのさし宿北思ひがけな

う此家へ來るもオ時節到來北天の恵みかオ御主人の

お引合せかエ、忝い役オ、悦びは道理ぢやおいらは

迎ひに行ねばならぬ座敷も奇麗に掃除しておかしや

れ役△此宿札はかう立ておくぢや役本においらもあ

やかりたい役サア、ござれ、ト三人しかく有て
橋がしりへ這入る北

の方若君懷劍を出北サア花若用意がよくば日頃の本

望とげさすぞ若嬉しうござる北サア友房約束の通り

オ敵望月を討せます北サア一刻も早うオハテ一途

にはやるはお道理なれど我家へ來る望月は袋の鼠網

の魚せいては事を仕損する何事も拙者に任せマアそ

のお姿も改めオ、憚りながら女房忤が着物なりと

きト押入をひらき
北そんなら是をオ旅籠屋の女房忤と心
をゆるます一つの手立北成程尤もオちやつとお召か

へなされませうト所知入に成り向ふより先挾箱行列の人数しづかに出て来る内北の方若君に才兵衛手傳ひ世話なりを着かへさす行列立派に筆傘立笠の人数出て次に女房おちか衣裳襦にて子役吉松上下大小にて連出て花道能所にてとまり近皆々様御大儀でござんしたもう爰がわたしが内
 しかし辛氣な事にはおまへ方も今宵は一所にとめま
 したいが大勢の泊人では内にも方角があるまいよつ
 て侍イヤ／＼拙者共は先達て下宿は申付てござりま
 するかそんならお前方は外に宿をかつて置いて下さん
 したかへ侍御意の通りでござりまするかそれはマア
 氣のきいた事そんならちやつとそこへいて休ん
 で下さんせ役皆ハウかしこまつてござりまするト兩人を殘し
 行列花道へ引返へしてちいかい御苦勞をかけました其
 かはり爺さまにわしがいふて知行をましてもらふて
 あげうぞへ本に大名の娘といふものはたいいてい氣の
 はる物ではないぞイヤ是坊ちやつと此様子をこちの
 人にいふて喜ばさうサア／＼わが身もおじやト子役の
 すつと内へ這此内北の方若君きつとなるを才兵衛とい手めながらおちか子役見て悔りしてヤアそちや女
 房おちか忤よし松かこちの人やう／＼今戻りました
 松よしと様おそかつたかや北ヤアそんならあの女中
 と子供は才此間から行衛のしれぬ私が女房忤でござ
 りまする北ハテナアか是はなアこちの人終に見なれ

ぬあの女中と子達はどなたぢやへオサア此二人はか
 さうして見ればありやたしかオ、やつぱりさうぢや
 よし松わしが着物を着てこちの内に居るからはオイ
 ヤ大事ない者ぢやかエ、オサアマアあの形よりはが
 てんのゆかぬ結構なわれが形といひ坊主がなり殊に
 今の供廻りの大勢におぐらして戻つたはかイ、エイ
 なア私よりはあの女中はへオハテありや下女ぢやか
 何ぢやオオ、下女ぢやサアしかもけふ置た留女子着
 がへがなさにそれであの着物をおれが出してかし
 てやつたも是からは道者の下り上り大名の參勤交代
 で此街道もいそがしい夫で置た下女あの又ちつさは
 丁稚ぢやが何としたかちどうぢややらがてんのゆかぬ
 わしが留主の間にあんな美くしいマア下女なら下女
 にしてわしは爰の御家さまじやぞオ、慮外ながら才
 兵殿の女房ぢや下女の女子衆何ぢややらぞへ／＼
 として宿屋に奉公しそふなふうとは見えぬマア一體
 今迄そなたはどこに居やつた北サア自らはか何ぢや
 自らぢやア、そんならこぶやに奉公して居やつたの
 北かそんな事はしらぬわいのうちしらぬわいのうとは
 横柄なそうして名は何といふぞオハテわれ何のため

にあの女子に吟味するのぢやちイヤ吟味せにやならぬわいのうおまへはだまつて居やしやんせサアわが身の名は北ハテ白菊といふわいのうち何ぢや白ぢくぢやアオコリヤくあれはお菊ぢやナサア是までどつこへも奉公にゆかず元より勤めた事もないお菊すりや白ぢやなしらなのお菊ぢやによつてそこで白菊ハテつのお菊といへばよいにちエ、とつとどきくと辛氣な事ではあるぞよし是と、様ぼんは侍になつたは見て下されト大小をひオオ、けうといけちくあつばれのお侍ぢやがコリヤお近此様子はサアどうぢや早ういへか是お前もそれ見てはあんまり腹は立まいがな本にこんなめでたい事はござんせぬわいなオサア其目出たい様子はかサア其様子はなオその様子はちあの女子は下女に違ひないかへオ何にぬかすサア早う云はぬかコリヤ皆爺様のお蔭ぢやわいなアオ何親の蔭とはかサア聞て下さんせソレお前にも兼々はなした通りちいさい時に別れて名も顔もしらぬわたしがとゝさまこちやお前にそふて居るゆへ親があるとも思はずにうかくと暮して居たが此間坊を連て草津の八幡さまへ連て參つた所が姥が餅屋で隣

に腰かけて居た侍衆がふと此子に提させて置た守りの裂を見て委細をいはずに親子共に乗物にのせどこともしれず昇てゆく本にこわいやら恐ろしいやらコリヤマアどうなる事ぢと氣が氣でなかつたが聞かしやんせ乗物を出た所は都室町の結構なお屋敷でれつきとした殿様が出やさんして守りの裂に見覚え有と段々と様子を問はれ思ひもよらぬ親子の名乗びつくりせまいものか本に産の親の慈悲といふ者は忝い有難い物でござんす爺さまの云はしやんすには現在血を分けた娘親子の名乗するからはもう宿屋などはさしておかれぬ孫諸共立身さしてやるといふて直に是見て下さんせ此子もわしも此形殊にお前の身の上けつくわたしはしらね共爺様はようしつて居やしやんすぞへオ何此才兵衛の身上をやかサア爺さまのいはしやんすにはコリヤそちが連添夫才兵衛は安田家とやらの浪人小澤刑部友房とて由緒ある侍ぢやて、オすりや安田家の浪人といふ事までかようしつて居やしやんしてお前に頼まにやならぬ子細もあり追付いてお前にあふて賀舅の名乗もしたうへ元の侍にしてやるといふてぢやわいなオそりやマア耳よりな

はなし幸ひこちらから折入て頼まにやならぬ子細も
 有なア申^北成程さういふ大身なれば後立にオこちら
 も大名舅も大名まさかの時は^オ是お前は何をあの女
 子にいはしやんすぞいなア^オイヤサ客あしらひをと
 つくりとをしよふと思ふて^オイヤエゝゝそんな事は旅
 籠屋の女房の役男のいひ付る物ぢやござんせぬ^オマ
 アそれは格別女房共今度ふしぎに廻り逢ふたそちが
 眞實の親父といへばおれが爲にも現在の舅其舅殿の
 名はマア何といふぞ^オ爺様は慮外ながら甲斐信濃兩
 國の殿様望月左衛門秋仲と云ふお大名^オヤアゝゝ
 〳〵〳〵すりやそちが親といふはアノ望月左衛門秋
 仲^ト大胸りにて北の方と^チ何とけうといと様を持つが
 顔^ト見合せ兩人思ひ入^カ何とけうといと様を持つが
 な北舅は親^ト舅は子といへばどうも爰にはサア若おじ
 や^ト若君の手を^オ是まつた何國へござるぞ北^トイヤそち
 や^ト引て立上るな^オ是まつた何國へござるぞ北^トイヤそち
 には^ト舅の縁があれば^オサアその縁があれば猶いな
 されぬ女房共^北エ、イ心々に^オソレ一旦いひかはし
 た約束の詞を反古にして今出てゆかうとは尤なれ
 どあれあの表の關札に心が付かぬかどうで今宵イヤ
 サ今宵祝言の盃をせねばなるまいがな^北それでもど
 うやら^オハテ友にちからイヤ友白髪まで添ふといふ

たは僞りか^北サアそれは^カこちの人そりや何をい
 ふのぢやぞいなア^オイヤ此お菊は下女といふたが誠
 はおれか女房ぢや^カエ、^ト大胸り北の方も胸り^オハテ扱
 下女となり女房となるも皆望みを達せうためサア女
 夫となるは其身の本望であらうがな^ト北の方へ頼にてお
 い^カにあつて^カそりやこゝろゝ亂騒ぎだてつきりわし
 がこんな事であらうと思ふた是こちの人イヤお前は
 〳〵^カをふりはなして^オエ、見苦しい何をするのぢや
 か^カ何とせうぞいの現在わたしといふ女房のあるのに
 あれあの女子づらをあたすばやいようも〳〵内へ引
 こんでおかんしたなア〳〵一體マアお前はお前とも
 思ふがあなたなめたあつかましいあの女子づらがよう
 マアわしをふみ付けたなよい〳〵いつそわしが追出
 して^ト北の方へ^カいらふとする^オ兵^ト北事おくれては何
 角の妨どうで此所へ来るはぢやう途中に待受さうぢ
 や^ト若君の手を取て出^オ今駈出すは事の破れを好む心
 や^カふとする^オを引とめ^オ今駈出すは事の破れを好む心
 か^北サアそれは^カエ、あたいやらしいかまはんすな
 ト引わくる^オ兵^ト北の方を上^オ女房去た^カエ、^オおちか
 手へ突やり女房を下へ引まはし^オ女房去た^カエ、^オおちか
 我には縁切れてひまやつたぞ^カエ、^オそんならあの
 女子と添ふばかりに^オオ、去た程にこまごと言はず

ときり／＼と出てゆけ^ちがいやでござんす^{オヤア}ちサ
ア私も今までのおちかちやござんせぬぞへアイ慮外
ながら望月左衛門秋仲と云れつきとしたお大名の爺
さまがござんすからは侍の娘侍の娘といふ物はその
やうにかかるはづみに男に去れる物ぢやござんせぬそ
れにマアあほらしいかにあだ美しいお内儀さまが
出来たと云て私にはまた何の科どういふ誤りがあつ
て去らしやんすサアその譯を聞ませうか^{オサア}其譯
はオ、さうぢや嗅い^ちかエ、^{オサア}嗅い／＼もう古く
さいぢやに依て我を去て爰に居る此新しい女房を持
つのぢやが何とした^かちさう云はしやんすからはお前
もくさい／＼わいな^アオ何ぢやおれが嗅いそりや何
が^{サア}くさい／＼水くさい^{オヤア}僅か十日程内
に居ぬ間にちやんとあの様に女房子まで拵へて科も
ない私を去るといはしやんすは何と水嗅いぢやござ
んせぬか^オハテ飽た女房を去るのは男のこうけぢや
か何ぼ男のこうけでもわたしには是此よし松と云ふ
子まであるぞへ^オオ、其坊主めも縁切て追出す一所
に連て行おれ^つつきやる^松か、さまこわいわいの
う^トにおち^かち^オ、道理ぢや／＼可愛さうに何を此子

がしつた事現在血をわけた我子にも思ひかへエ、是
も皆あの女子めゆ^ト北の方の^オコリヤお菊はおれ
が大事の女房指ささす事もならぬとつと、出てうせ
おらぬ^かか^チ夫程までに^ト身なだへて^松か、さま堪
忍ぢやわいのう^ト取^北思ひ廻せばどうでも血筋兎
に角此家を^ト立上る^オ是誰が何と云はうが大事な
現在の女房子にも見かへる今宵の祝言それを立破つ
て出ていては一もとらず新枕はもとより三々九度の
盃すんで四海浪も目出たう打ナア納める迄はめつた
に身動きはなるまい／＼^北サアそれは^オハテ追付抱
て寝る程に是じつとして待ちやいの^ト下におく^近ち
そうぢや^トゆかふとする^松か、さまどこへいかしや
るぞいのう^か所詮わしがどのやうに云たとてあの様
にのぼり詰ていやしやんすこちの人は是からは爺様を
頼んで望月左衛門といふ大名の威光でもとの女夫に
してもらふわいのう^松そんなら坊もゆかう^チイヤ
／＼わが身は爰に居やわしがつい一走り^ト又ゆかふと
き^松い^トやぢや／＼^付てなく^かエ、因果なそなた
までが邪魔するかいやいとんと下に居て^チ才兵衛殿こ
な様はのう^トきつと^オ兵衛が顔を見る^オたとへ大名で有うが公家

を親にもとうが縁は別物いかうでもつい立でもさつ
たといふからは金輪際さりこくるのぢやぞかさう云
はしやんすとわたしも意地もうゝ金輪際去られま
いがどうさしやんすオさうぬかしやいつそおのれを
ト幕をとる北 是まつた此争ひも自らが此家に居ね
ばオイヤ祝言するまでは滅多に動かけまいがな北サ
アそれはかエ、ゝゝあた腹の立つト煙草盆 オヤうぬ
投打さらすなちオ、何をせうやらしれぬぞト又はり箱
て来て オさうすりやおのれト幕ふり上る北の方とめるお近
投付る 奥よりお百お半 女四 ヤアお家様か是がお家さん所かト
小女郎小万出て 人 是は何となんす女三 マアゝゝお待なさ
人取さへ 耶 是は何となんす女三 マアゝゝお待なさ
れませちイヤきかぬゝオ あれあの通りなれば百旦
那さんも待たしやんせさつきの言付晩の拵へ祝言の
料理は出来ましたぞへかヤアそんならそちらまでが
取持でどうでも祝言するのかいや人女四 マアゝゝお
待なされいなアかイヤゝゝはなしやはなしやト身な
北 此體をじつと見てはオハテ氣兼に及ばぬ幸ひ祝
言の料理出来たとあれば奥へいて盃を北それじやと
いふてオハテ大事の前の小事じやがやトきつと云ふ北の
ふこなしにて若君の手をとる オ構はずと奥へおじやといふ
おちかおこづくな突はなして

にト歌になりオ兵衛若君北 かアレゝゝあれを見てはどう
にの方を連て奥へ這入る トトヤかふとする女 かし、さま堪忍ぢやゝト百是坊
も形皆々とする 松 よし、おさま堪忍ぢやゝト百是坊
さんが泣てぢやわいなアト小女郎 お道理なれどマアお氣
を皆しづめ成されませいなアかイヤ放しやゝトみあ
ふ四最前のわざすての衣裳をほうり付る白絹ち かののれおめ
らほら女形皆々コリヤ叶はぬとにげて這入る よし是唄さまい
ゝゝと祝言をさううかトトヤかうとする 松 是唄さまい
のうトト引とめるおちかきつ かエ、とかく此子がトじつとし
白絹と衣裳 ちこりや何ぢやあたいたいやらしい此絹に血
を見て取上 かこりや何ぢやあたいたいやらしい此絹に血
で書てあるは大かた二世までもかはらぬと云ふ起
請であらうエ、憎てらしいト奥をきつと ち何ぢや敵
は望月左衛門秋仲討取て修羅の忘執をはらすべき者
なり安田庄司友治敵は望月左衛門秋仲討れたは安田
庄司友治こりや夫の古主ム、そんならそれで此子や
わしをト奥を見又絹を見 か成程さうぢや 胴慾とおも
ふたはかへつて情ホ、ホイトとんと下にい 向ふ望月左
衛門様のお着ト呼ばおちか向 かヤアとゝ様が是かゝ
さまト取付くき ちさうぢや ト奥へ行かかけるトヨシ、化
粧屋根引上見事なる破風付の欄間おりる正面三間の
二重少し上手へよせて兩方落間下手青竹けつかい付
能の橋懸りと見ゆる廊下を前へ突出す所々に若松の

實木正面屋體より下手へ續け大襖能舞臺と見せる模様都て本陣宿を能舞臺と見ゆる好み二重橋懸り共にすツと前へ突出す留の木にて所知入やむ靜に序の舞になる橋懸りより綴帳をあげさせ望月左衛門素袍立烏帽子にて長上下の近習二人付出て上手に並ぶ次に鹽灘仙右衛門狂言方拵にて望月の刀をさし出し出る下座切幕の所より神主齋宮烏帽子装束にて仕丁二人に獅子頭入たる唐櫃を荷はせ出て橋懸りの下に座す仙右衛門主人には今朝都室町の館をお出駕有て當守山の宿にお泊り遠路の旅行嘸かしお草臥にござりませう望何さ當近江の國守山の宿には本陣あれどもちと思ふ子細有て甲屋とやらんへ旅宿申付たが中々存じたよりはよい住居ぢやわへ仙御意でござります夫に付け此度室町殿へ願ひに出し上諏訪の神主御射山齋宮當宿迄お供申御挨拶に罷出ましてござります望オ、上諏訪の神職みさやま齋宮大儀齋ハツ此度室町殿へ出訴致したは信州甲斐の境に絶所の谷間凡四五十間餘り谷の深さは底しれず是迄橋杭を組立大勢の人夫を掛け成就仕懸けて碎くる事兩三度夫故此御工夫を願ひし處幸ひ望月秋仲公には此度甲信

兩國を賜り御入部ゆる萬事御工夫を持て橋普請成就の儀を願はんため御供仕つてござります望此度甲斐信濃の兩國を安堵の御教書を賜り入部の某我領分の事おろかが有うか橋の工夫も付置たれば追付普請成就させん甲信兩國の百姓共は仕合せ者だ此望月が國の守となれば堯舜の世も同前戸立ずに寢ても盜賊にあふ氣遣ひない追付甲斐信濃に麒麟や鳳凰が出て遊ぶてあらう樂んで待たがよい齋其儀に付橋成就の節は渡り初の奉幣獅子の謠曲亂舞を相催せとの神託を蒙り則裝束獅子頭其此の如く持參仕てござりますト唐櫃より獅子頭取出し見せる望オ、よいてや／＼谷間に橋の工夫は元より渡り始の獅子の亂舞も相勤むる者も此方にあるれば氣遣ひ致すな齋然らば拙者は一日も早く歸國仕りたう存じます望オ、聞届けた仙獅子頭裝束の唐櫃は家來共に渡しておきやれ齋ハツ畏てござりますト仕丁に唐櫃もたせ仙先程より此家の亭主めがお目見えも致さぬ憎くい奴いかに此家の亭主はいづくに居る是へ出ませいオハア、トのつとになるオ兵衛橋懸り綴なをせ若君の子役に持せ長柄の鈔子ハツハツ甲屋の亭主めでなもちつて出て能可にて下に居てオハツハツ甲屋の亭主めでござります仙誰有ふ今空飛鳥も落る御主人の御威

勢望月左衛門秋仲公のお宿を致すは願ふてもなき其方が仕合せじやぞよ^オ左様存候間御禮の爲に龜酒を持たせて参り候然るべき様に御申候へ^仙お聞あられましたか^望何さま一献くもふ酌を致せ^仙かしこまつて候^ト仙右衛門酌す^望此家の亭主其方に指さうか^オアノ私に^望オ、ゆるすサ、一つ^オ有難う存じまするトにじりより^仙お盃頂戴とは匹夫に似合はぬ果報者盃をいたしく^仙お銚子をさし出す才兵^オそれお酌^ト若君望月の方を見て衛取て若君にもたせ^へて酌なます^ト仙右衛門若君に目を付け^仙コリヤ^ト亭主わつばめは何やつぢや^オヘイコリヤ放下師でござりまする^仙何放下師とは^オ此宿に住居致す親子の放下師母親は八撥をうち又此倅は此青竹一名を玉すだれとも申すを遣ひまする故おれき^トのお着にはいつも御前へ召されて御機嫌を取りまするが親子の者の業でござります望亭主がもてなしとあらば夫を肴に所望いたせ^仙其青竹とやらを始めい^ト然らば御意にまかしまして^ト盃を三寶のうへにかへす^ト仙右衛門酌して望月取上^オサアて^ト花若きつとなり行かうとそる^ト才兵衛程よく留て御大身の御前ぢや随分心を付けて此青竹を遣ふた^ト若エ、打たいなア^オオ、うたふてほしくば聞覺えて居る青竹の小歌は是^ト目顔にておさへる鳴^オおも

しろの花の都やサンヤ物の始めは天の浮橋是も神代のをしへ草ぬれてとるのは粟の穂にひくや鳴子のサンヤノ^トさつと生たや花手桶又取直せばあまの岩船金蘭緞子綾や錦の帆を十分に風をたもつや柳の梢サンヤ^トと^ト諷ふうち花若青竹を遣ひながら望月のかたへ行かうとする^ト才兵衛宜しくさいへる^ト仙左衛門目を付け居て仙ヤイ^ト先程より見る所何共あやしきわつばめが振舞御主人御油断あられまするな^オイヤ何も胡論な者ではござりませぬ次には女が八撥を打まする仙サア其の討つと云ふが主人の禁物まづ其わつばめをト立上^望コリヤ^ト仙右衛門何をざわ^ト其稚き者の母が八撥を打ではないか^仙サア討といふのがあやしうござれば^望ナニそれ式亭主其者はへ通し候へオハツ御所望なるぞ急いで是へ^ト橋懸り緞^北ハア、^トつこな付撥を持ち出るよしの龍田の花紅葉更しなこしちの月雪の歌になり北の方か^トの舞にいたり間々は望月の方へゆかうとする^ト才兵衛よろしくとめる望月は大きく見えて居る仙右衛門は始終目を付け油断せぬこなしる^ト此内三役よろしく有て舞なさむ仙最前より親子の者が立振舞主人をねらふ結構よな^オイヤ中々左様ではござりませぬぞ^望成程仙右衛門があやしむも道理安田の庄司友治が妻子ありと聞たるが年頃と云ひ似よりの者共^仙ぢやに依てめんぱくいたさん^トつか^ト北の方花若の方へ行か^オイヤ此者共

は元より放下師左様の者ではござらねど安田の庄司の妻子には何科あつて其様に望庄司友治は姨捨山にて何者共しれずやみ討となり不覺の最期を遂げしゆゑ所領は殘らず沒收にて従類をたやせよと嚴命受けし某なれど見のがしおくは武士の情仙それを有難いとも思はず反つて主人を恨む馬鹿者望たとへ彼等が恨むとも此方に何も恐るゝ覺えはないてや北覺えないとは卑怯の一言オ是々放下師の親子お大名の御前立騒いで無禮千萬ひかへませうぞト兩人を頗に望仙右衛門氣遣ひするな此家の亭主も唯の者ではないてさ仙サアそれ故彼等が力と成て望何のく賀舅の中鹿略が有うか仙すりや此家の亭主は望身共が賀それゆゑ宿を申付た仙扱は此程召寄せられし御息女の望いかにも幼少にて別れ此頃不思議に名乗り合ふたる娘の賀先刻より名乗らぬも心あつてさオ拙者も先刻聞と恠り併し舅はお大名賀は宿屋も似合はぬ縁組望イヤ今こそ宿屋の主なれど以前は小澤刑部友房といふ侍オ妻子もしらぬ我本名をどうして又御存じぢやな望天眼通を得て居る某凡そ世界の事に身共がしらぬ事はない刑部嘸討たからうなオ何をな望そちの

古主安田庄司友治が敵をオエ、望姨捨山にて鬭討となりし庄司友治はそちが古主無念にあらう口惜からう其敵が討たからうと云ふ事さ北云ふにや及ぶはいとすゝなきつオ所を何とも存せぬてな望ヤアオサア友治公が討れさつしやつたと云てさのみ無念口惜しいとも存せぬなせと申せ以前勘當を受けたれば主従の因は切れ古風な侍堅氣をいはふより今は此通り宿屋の亭主とかく欲徳にかゝる方がマア當世でござりませうかい望友房そちや中々の粹ぢやわへ仙なぞと申てめつたに油斷はなりませぬオハテ何とござりませうやら望何と刑部其方とは賀舅のよしみもあれば共に活計歡樂の身に取立て呉れうが身共頼みたい子細がある何と頼まれて呉れうかオ縁組むからは逆れぬ中改つたお頼みとは望外でもない安田の庄司友治が所領たる甲信兩國を某に賜り則安堵の御教書をもつて此度の歸國しかるに甲信兩國の堺に通路叶はぬ絶所有て是まで橋を架さんとすれど急流に橋杭立たず足場碎けて成就せず是をすみやかに掛くる工夫そちや能く存じて居ようがなオイヤ存じませぬ絶所の谷間へ橋を架す工夫なぞとそのやうな智慧があれば

宿屋商賣は致しませぬ。^望イヤ／＼偽るな此事計りは其方より外に存じた者はない事身共よく存じて居るわい。^オ是は迷惑何しに其様な工夫をば。^望しらぬか。^オ存せぬが有様。^望ハテ深う包むなア刑部絶所の谷間に橋をかくるは年まだ若き婦人と其骨肉の男子とを人柱にたて墓目の口傳を以て成就させる兵家の秘密是を能く存じたる者は其方一人存せぬといふ事はよもあるまい其上普請成就して渡り始には獅子の亂舞を催せよと諏訪神託元より謠曲亂舞に堪能の其方此儀を勤め呉るに於ては甲州の郡内の庄をあたへる所存名を取うより徳を取るが當世と只今も申たでないか。望舅の間柄此外に望みもあらば聞て得さそう何と望みを叶へて呉る心はないか。^オ成程何をいふも欲徳づく殊に甲州郡内の庄を下さるとあらば絶所に橋をかくる工夫親子二人の人柱を立墓目の口傳もあら方は存じてをるアツと云ふてお受申まいものでもなければ俗眼に通せぬ秘文の梵字をしるせし一書を所持せねば事成就は受合はれぬ。^望其義ならば氣遣ひ無用秘文の梵字をしるせし一書は身共が所持して罷りある才すりやアノこなた様が。^望我手にあれども讀下らず

唯いたづらに此ごとく肌身放さず所持する某。^ト懷より包みし一卷を。^オオ、それこそ大江の匡房公より傳はる出して見せる。^オ兵家の秘書司馬法の一巻。^北あの一卷を所持するからは。^若いよ／＼敵にきはまる望月。^ト兩人きつとなる望月ち望月こそおのれとあらはす本名。^仙いでまつ一二つに。^ト北と若君へかゝる才兵衛さ。^オその一卷を所持あるからは敵へながらきつと留り。^オはいよ／＼。^望イヤ身共はしらぬ覚えはないぞ。^オそれは又どうしてこなたが。^望授つたオヤア。^望庄司の敵は身共は知らぬ此一卷は善光寺にて通夜の折から夢の告で如來の手から授つたさすれば阿彌陀が敵であらう。^北エ、をがくづもいはいいはる、若日頃の無念父の敵。^仙何をこしやくな。^トかゝるを才兵衛仙右衛門を突のけ北。^ト何をやアコリヤ親子の者を。^オ常殺したは舅へ面晴し。^望才すりやいよ／＼身共が頼を秘文の一書があるからは橋を渡して立身の足代。^仙及むかひ立する親子の奴は。^オ年ども似合の人ばしら。^ト北の方と若君に。^望それでは是から夜が寝よいて仙。^{ハテ}味い手つがひだなア。^望いで此上は成就の手はじめ。^オ獅子の亂舞を御覽に入れう。^仙それを肴に改め一献。^オいで獅子頭をかつぎ参らん。^仙オ、サちつとも早く。^オ然らば舅殿。^ト兩人の繩を
取り引立る

望持すべき物は望だアト歌になり才兵衛は北の方と若君を引立橋懸りへ這入る望月跡を見て立上る仙右衛門近習二人手傳ひ上手鏡戸をあけて這入る跡すぐにはたかふとして下手より北の方若君走り出て繩なとき懷劍を以て上手へゆへ一寸立廻り有てあやうく下座へおふてはいる後見紅白の牡丹付の臺をもち出て能所へ直し這入る能程に正面の鏡戸と見せたる襖を残らず引取る奥深にまた能舞臺の書割になる此前に褥を敷き望月左衛門此上に酒宴の體仙右衛門近習二人銚子を持ちひかへ居る雛子方本行の形にて橋懸より靜かに出てゆるりと拵有てテン／＼と太鼓にかゝり地謡にて「しゝとらでんは時をしる雨むら雲や奏すらんあまりに秘曲のおもしろさに猶々めぐる盃の酔をすゝめばいといなほねぶりも来るばかりなりト此内本行望月獅子の形にて才兵衛出てよろしく獅子の曲納る望月仙右衛門も眠り出す所を才兵衛獅子頭を取りすてあいつする北の方若君出て望月を兩人切る才兵衛は仙右衛門を切すてゐるはやし近習はにげこむオホ、ウお出かしなされた北若此年月の恨みのする今こそはるれ望月左衛門覺えたかトばた／＼にてお近よ近よ扱は討れさしやんしたかいなアト泣落す内才兵衛望月望月出しあオ是こそ尋ぬる司馬法の一巻北チエ、忝い才敵は亡びてめでたし／＼かくて本望遂げぬれば

／＼かの本領に立歸り子孫に傳へ今の世に其名かくれぬ御事は弓矢のいはれなりけり／＼

ト話にて才兵衛よろしく舞納む

目出度打出し幕此復讐望月譚一段物は以前文政七八年頃小澤刑部友房に歌右衛門梅玉望月左衛門秋仲に鰻十郎初代甲屋女房お近に三光後に松江富十郎安田の北の方白菊に國太郎始錦等と見こみて草稿なりしも追々故人となり徒らに打捨おきしが此頃ふと文庫より取出し爰に誌す者なり

西澤文庫傳奇作書後集中の卷終

西澤文庫傳奇作書後集下の卷

目次

- 一 那須與市宗高の話
- 一 扇的西海硯の草稿
- 一 同後段那須野狐退治の場
- 一 中興世話早見年代記
- 一 堀田稻葉安宅丸の話
- 一 下總佐倉宗吾の話
- 一 齋藤吾櫻花日記の草稿

西澤
文庫傳奇作書後集下の巻

西澤綺語堂李叟著

那須與市宗高の話

源平盛衰記平家物語東鑑等に與市と云ふ名甚多し眞田與市淺利與市關原與市那須與市等也抑與市と云ふ名は總領を太郎と呼て二男を二郎三男を三郎と段々十人目の十郎までに及びて第十一人目に當るを餘一郎と昔しは付けしものといへ共確と定めがたきか此うち那須の與市宗高は下野國那須の住人にて西海の戰に扇の的を射て武名最も高し淨瑠璃に那須與市小櫻威と云ふあれど善光寺如來を信向して五十嵐文次に預けられし身の明り立ち本知に歸るのみにてさまざまで狂言なし後並木宗助那須與市西海硯と題して化生屋敷にて狐の面をかづき育君の手にかゝり愁の場を三の切に仕組めり其頃は太に行はれし狂言なれども當時の人情にかなはぬと見え淨瑠璃に語るさへ稀

々なりけり是に化生屋敷を與市申受けしと計にてさせる仕組なきにより予兼て趣向をもうけ平家の女臈玉虫鎌倉の明屋敷に隠れ住妖怪の人を威すといひふらせる與市宗高妖怪を退治せんと荒屋敷に來て正體を見顯はし玉虫を助け見通す後西海の戰ひの時扇の的を射て弓勢の譽を顯はさんと約束の場を二の切と仕組み又宗高の塔今山城深草の東大龜谷に在て西國へ出陣の時堂前の幡をかりて簾となし譽をあらはし後即成就院とて一字を建ると寺記に見えたり是等を思ひ合せて西海硯を増補なし三の切を仕組一部の讀本淨瑠璃に筆を建たれども半にて捨たるが三の切の草稿を見出せしまゝ扇的西海硯と題して爰に出す猶與市宗高の事蹟は予が綺語文章四編目深草即成就院の條に出せば好人是を見給ふべし

扇的西海硯の草稿

薪伐る鎌倉山の星月夜綺羅を磨ける其中に那須の與市宗高は武門の春に扇が谷さしもに人の恐れたる化生屋敷を申受弓矢の德に居納て新たに繕ふ普請の結構その身は西國合戰の加勢願ひに登城の留守心なき秘婢一つ所に寄こぞり

必

春の何と皆の衆此お屋敷はも

と化生屋敷の妖物やしきのとおぢ恐れた地面をばこちの殿様宗高様が墓目とやらのお徳にてあやかしをお拂ひなされし御褒美とあつて御拜領^夏の直に御普請の出来次第松葉が谷から此お屋敷へお移りの當座はもし妖物は出はせまいかと氣味悪うおもふて居たれど今では奥さま始め召仕のこちらまでが化生やしき^秋それ／＼殿様には鎌倉中の譽め者其うへ此度西國の平家とやらを攻めに行軍の御加勢にお出ましなさる、お願ひの御登城^冬又御兄弟の若殿様には銘々お乳の人が付添八幡さまへ御參詣はんにそれはさうと春のどのや小夏どののは此お家に長う御奉行なさんすゆゑ委しい事を知つてゝ有う若殿様は慥かに忤ぢやないかいのう^春サア其忤ゆゑお二人共寸分違はぬ様にお育てなされ兄御様のお乳の人には御家老の刑部様の娘御お菊殿お附人には御臺さまの兄御五十嵐小文次さま^夏御次男の小次郎様にはお蘭殿と云ふお乳の人お附人には刑部様と何でも對に拵て育るとお達者なといふ様ぢやわいのう^秋成程それで様子が分つたが刑部様は小次郎様方お蘭殿は小太郎さまと最負／＼でいつともなう親子御の中でもすれる様子^冬

夫にお蘭殿は口やかましいお人と云ひ本に笑止な物ぢやわいのう「よればかはらぬ取沙汰も皆下々の習ひかや呼とはなしに表の方若殿のお歸りとしらせの聲に姉其^夏そりやこそ二人の若殿一時にお歸りなされた^春噂すれば影がさすと呵られぬ内御出迎ひ申さうわいのう」そしらぬ顔に出迎へば程なく惣領那須の小太郎跡に附添ふお乳の人お蘭と呼で端手ならず年も三十に三つか四つ取りなりしやんと襦に武家の育の片簪こなたは次男小次郎とて年は元より形かたち兄小太郎に寸分もかはらぬ出だち誰目にも忤と見えて附添ふはまけぬ姿の乳母お蘭和子を自慢の鼻高く雙方家來打連てしづ／＼と座に着けばおらんは皆に會釋して^春オ、皆さまお出迎ひ御苦勞若殿様にもけふの御歩行嘸御草臥でござりませう^{小太}イヤ／＼わしが草臥より心掛りは父上の御登城もうお歸りなされたかや^夏イエまだお下り遊ばされませぬ^{西國}の平家を攻ん御加勢の御評議^{小次郎}父上にも其お願ひで隙取うして母様はいづくにぞ^皆今奥にお休み遊ばします^菊オ、それは重疊の儀和子様には御武運長久祈のため鶴が岡の八幡様へ御參詣ようおひろひ遊

ばしたな聞そんなら兄御様は鶴が岡へ御參詣か此又
和子はたくましい星合寺の馬場先へ弓箭の御稽古に
お出でなさりましたわいのう小太オ、小次郎殿はよ
い心掛星合寺の本尊は弦かけの觀世音弓箭取る身は
銘々に信するにしくはない小次サア私も常々刑部が
咄にも利生を祈る稽古の的場と存じて今日参りまし
た菊オ、それはマアようこそお越誠に此度西國表平
家の大敵須磨の都に籠りしを義經様の軍配にて只一
戦に勝利有たも弓箭を守る弦かけの觀音様の御利益
此上にも御佛の力信するにしくはござりませぬ聞ア
、是々お菊どの觀音の力をかつて軍に勝とはちと廻
り遠いぢやござんせぬか早いためしは今度の軍に鎌
倉中のお侍達終に普門品一卷讀だやうなお人もなけ
ねどさしも手ひどい平家の大敵四國とやらへ追落し
たは皆我君頼朝様の御勝軍けれう佛と思へばこそ稽
古がてらの御參詣觀音位の御利生でかつまい軍に勝
つたやうで人が聞ても不外聞ハア、聞えたお前は和
子様をお連れ申て鶴が岡へ参らしやんしたゆゑ兎角
神佛を祈るがよいと云はしやんすのか詞の艶いふも
程があるこちらの和子そんなまどろ喫ひお氣ぢやな

いエ、たしなんだがよいわいのう上強い自慢に我
ひとり高慢顔を聞流しよらすさわらず柳に受け菊ホ
、コリヤいな事がお蘭殿の虫にさわつた御機嫌を損
じたは私がいひ下手堪忍して下さんせ成程神佛の力
を頼めば武士の身の不外聞一分のすたるといふ事弓
箭八幡私は今までしらなんだ是を思へば古への坂の
上の田村丸とやらは鈴鹿の鬼神を随へられしも清水
の觀音の御利生を蒙り嘸外聞を失はしやんして後悔
でござりませうホ、ハテ笑止な事ではある程にの
上、笑止な事やと打笑ふこなたはひよんな事いふて
ぎつちり詰つたふくれ顔小次郎上段の間の床を指さ
し小次申々兄上あれに飜つた日丸の陣扇きのふ父上
にも母様にも申上て置たれば此小次郎が貰ひますぞ
や小太サアあの扇は父上が大事にせよと常々の言付
ほしくば一本分う程に好たを取て大事に持ちや「兄
は兄だけしとやかに云聞かすれば弟は懷育ちの氣儘
者小次イエ、陰陽揃ふた陣扇どちらが一本足らい
でもならぬもの一本なればほしくはないサア二本共
私が貰ふ小太そりやそなたが欲どしい一本あれば事
はすむてふど二人が分けて取り又ほしい折には貸し

て遣ります小次郎イヤ／＼侍の子が貰ひ掛け貰はずに

得おくまい小次郎それ共成らぬと云はつしやりや兄上でも

用捨はない小次郎オ、やらぬと云へばどうするぞ小次郎オ

、力づくでも貰うて見せう小次郎太さういやる小次郎と猶やら

ぬ小次郎言ひつものつたる中違へせりあふ兄弟付々の乳

母諸共に引わけて菊は又せり合ひ遊ばすかおとま

しい破おしづまり成されませいなア上取さゆれども

子供の癖いつかな静まる氣色もなしお蘭は以前の出

過にこり素知らぬ顔に只まぢ／＼傍に見兼て兄の乳

母菊マア／＼お待ち被成いなアエ、こなお子は御無

理計り勿體ない兄御様にむしやぶり付てどうした事

おたしなみなされいなア上つかふど聲の破れ茶碗

はちわりましの弟の乳母むつと下地に針持つ挨拶

蘭ア、是々お菊殿御主はかはらぬ小次郎様けん／＼

云ふて貰ふまい又しても／＼兄さま／＼と惣領風

に身を入れて晩稻の和子を吹ちらして下さんすなエ

上「苦い詞にぐら／＼の返答菊オ、惣領風がいやならば

養君にわんばくを云はせぬやうに育ちやいの上ぶ

つけり云へば燃木に油蘭オ、置てたもそなたの口か

らわんばくとは舌長な慮外であらう弟子とはいふも

の、おなじ月日の御誕生なりやどちらを兄とも弟共
別にかはつた事もなしもしや兄御のない時は御次男
でもお世繼け侮どつて蹴つまづき惣領育てた高い鼻
へし折られぬ用心しやあんまり鼻が高いとの天狗が
妬んでつまむぞやア、笑止な事ではある程にの
上口に任せて出放題云はれて居ぬ兄の乳母小次郎オ、さ
ういやるので奥より口天狗は扱置そなたの心小太郎
様がないならば小次郎さまに此家を繼せたいと思ふ
欲心折々お威しにおしやるやらうた、寢のおそはれ
枕刀にお手かけられおひんなる事があつても御結構
でおうようで見通し給ふを有難い冥加ないとおもや
いのう仇どんくさい事いやる上と安閑と聞ては居ぬエ
、あた／＼あほうらしい上是ぞと覺えない事もさ
もあるやうに云ひふせればこなたもまけず憎て口蘭
ア、ちいさい時は虫驚きとてまゝある事それを妬む
といやるならこつちのお子も威おどしに來やるか御結構で
も大ようでもそなたが育たお子計り餘り結構過ると
のあの字とはの字の異名が付く自慢せずともおきや
いのうくそりやそなたがいやらいでも御兄弟共お主
の事どちらをどうと云ひはせぬ是こな様は丁度その

お子には三人目のお乳母殿五つのお年から育た事なりやどういやつても馴染が浅い私はそも奥さまがお産なされた其日から片時放さぬ大事の和子結構づくめにいふたが無理か蘭そりや結構な事でござんす譬へ五つが七つからでも育て上げたはこつちの手柄現在お前の父御ていの刑部さまでも此お子計りは兄御より遙か器用で發明で一口に云はれぬと褒てござるに何にもしらす我身最負きハテ身最負とはそつちの事刑部殿と親子ちやとてお主に仕へりや私事忠義の道にはかへられぬんこつちもおなじ忠義でござんす我得手勝手にいひ並べるのはお免しちやくきハテいはいでもかいの弓も引方んそつちがいふゆるこつちも云ふのちや姉ハテもうようござんすわいなア上やつつ返しつ乳母とうば互にまけぬ争ひは何國もおなじ事やらん小太郎始小次郎もとゝめ兼たる折からに駒の井御前立出で給ひ駒の二人共はしたないコリヤ何事小太ヤア母上様きく御臺さま皆しづまらしやんせいなア上制す詞に是非なくも静まる二人を近う寄せ駒銘々子供を大切におもふての小いさかひ悪うは思はぬ去りながら人毎に此屋敷を妖怪屋敷と云ひなら

はし誰も住人のなかりしを我夫與市殿申受て納り弓箭の徳を褒らるゝ其子供等が寢覺にもおそはれるのおびへるのと沙汰あつては第一は家の疵殊に夫は西國へ加勢の願ひ兄小文次殿の取次にて吉左右侍つも心のいたみ其譯しつたそなた衆がよしない争ひ不遠慮な以後をきつとたしなんだがよからうぞや上呵りながらも子をおもふ心に惚れし風情なりきく段々の不調法御免なされて下さりませう上折からとつかは次の間より主人に先達立歸るは御臺の兄たる五十嵐小文次相家老宍戸刑部加勢の願ひゆりしゆゑ心をいさみ打通り小文次御臺所是にござりまするか駒オ、小文次殿にも刑部にも吉左右を待兼ました小文ハツ兼て主君の念願通り加勢の願ひ相叶ひ今宵諸軍諸共出陣せよとの御上意刑部御臺およろこび遊ばせ殿には歸りに松葉が谷の尼公へ御暇乞にお立寄小文我々は此趣しらせのために先へ歸宅仕りました駒オ、夫は兩人共御大儀御大儀母様にも嘸およろこび夫の譽此上が有うかそれ女子共には門出を祝ふ熨斗毘布軍にかちん打鮑祝儀の料理用意しや皆畏りましてござりまする上俄かにざゝめく館の内姉共は

奥にいる小文次威儀を改めて小某事は御臺駒の井とは兄弟なれども元より譜代の家老なれば此度の出陣にも供に附添ふそれに付二人ある子息の内何れぞ一人連行たき主人の心底利此度の戦ひは源平及金をならす嘶この軍以後の心得にもなる事と主人の仰せ夫ゆゑ御臺所への御相談小何れぞ獨とある仰兄小太郎殿を召連らるゝか判但し御舍弟小次郎殿を御同道なするゝ心か御臺の御所存小承りたう存じまする上様子ありげに伺へば駒の井も途方にくれ駒されば自らへの御相談とは我夫の思召どういふ心かしらねども軍は時の運といひ討死の程も覺束なし是非一人は國に残さねば家相續の心當り去りながら何れを残し何れを遣つてよからふやらハテどうがな上二人を始め付々の心の程をはかり兼思案の内より兄の乳母きアイヤ／＼御臺さま始め何れもさまの思召もござりませうが同じ年どの御兄弟とは申すものゝ小太郎さまが常々おつしやつてござる事もござりますればお聞なされて上の事に遊ばしませなアそれ和子さまそれ申ちやつと兼々おつしやる事お願ひなされたがようござりまする上袖を引また素振りでしらせ耳へ吹

こむ氣の張弓さし心得て母の前おし直つて手をつかへ小太惣領は家繼ぐ役跡に残さん御評議かは存じませねどもし此度の軍にゆかねば弟さへ供するに兄が腰が抜けたりと人のそしりも恥かしゝ小次郎は弟の事跡に残して私をお供に連れてたまはる様偏に願ひ上げまする上詞もいまだ終らぬ内はや負けぬ氣な弟の乳母小次郎に目交して手先で切合馬乗の仕方をしてし願へよとしらせに小次郎おとなしく小次郎申母様父上がどちらぞとは定めて私とのおさしづならん今お詞が違ふては常のお教が嘘となる是非に私を今度のお供にのう乳母らそれ／＼今も今とて惣領ちやのお世繼ちやのと育た人の廣言いやといはれぬお留守の役わんぱくでもわるさでも私がいはぬ其内にようお願ひなされた流石この乳母が育てたお子程あるオ、おでかしなされた上褒そやして諸共に是非にお供と願ひいるこらへ兼て兄の乳母小太郎おしのけずつと出き申御臺さま一時半時でも先へお宿りなされたりやこそ御惣領とお定めなされたを兄御をさしおき小次郎さまをお供にとは憚りながら御思案違ひ但し子達に依怙最負でも遊ばしての儀でござり

まするかな^上我親ながら刑部がまへ詞するどに遠慮なくたくしかければ^駒ア、是乳母子供がためには内縁ある小文次殿さへ批判なきを慮外であらうとサア呵るではないよう聞や、兄弟共に大がらには見ゆれどもまだやうくとしよわの十四連合が日比から射藝の道は教へおけども小文次殿刑部も何と思やるぞ小さればサ討物取ての戦ひは手の内のかたまらぬと申せば兄弟共に同じ事さすれば何れと申て頼にならず^刑夫故にこそ御主人が篤と評議を取極め何れぞ一人定めおけよと呉々の仰とはいへ最負とおもふも氣の毒小文次殿の心底は^小さあればかう致したらどうか^刑どうでござるな小イヤくそれも戦場一人残しておきたいとの仰も尤^駒よい分別のあるべき事^三ハテどうがな^上三人が又も思案にとつおいつ暫く有て駒の井御前^駒誠にあやうい軍場へ是非にと望む二人が心底どちらをどちらと定めがたし此上は鬨なりとも引かせたうへ天利に任せて軍の供何と此思案はどうあらうの小何様コリヤ御臺がよい御思案雙方依怙なき此計らひ是に増したる儀はあるまじのう刑部殿^刑オ、したりく夫にこそ屈竟の儀がござ

る是々この陰陽の軍扇を矢竹に挟み東西の庭に立わかれ射る矢の的と定めおきお二人の内何れでも射當てたるを^小供に連られもし射損じたるを跡に残さん^駒是で雙方依怙なき道理^駒オ、それこそは敵に射かつ軍の門出によい前表^小幸ひ主君のお歸りまでに奥庭にて勝負を催しあづちの稽古を見るも同前^刑射るも慰み見るも樂しみ^駒ソレ小太郎小次郎二人の乳母も合點か^小太願ふてもなき扇の^駒的^小時^小に取ての曠の勝負^小太きつと射當て見せませう^小オ、いさまし^小和子さま伯父御せの小文次様がお仕込の手練をあらはすは今此時^小そりやこつちもおなじ事刑部さまの教を受け大人も及ばぬ和子の強弓かならずお負けなさるな^小ホ、ウ譬刑部さまの教を受けいかなる弓箭のお上手でも小太郎さまのお勝とは目に見えずいて有るわいの^小うんてもあつ皮なおきく殿けふの勝負はこつちが勝のお^小や^小アノこな様^小が^小ん^小アノおまへが^小かたしやんすか^小んかたして見せう^小まけすおとらず角芽立つ中を隔て小文次刑部^小是は^小文^小は^小姦しい靜まり召れ^刑其争ひより勝負が肝心^駒たとへ射損じ残るともかならず恨とおもやんな^小いで雙方其奥にて

用意小次畏りましたらんどちやそれまでに私らもく奥へ参つて其々に刑イヤ／＼娘其方にちと申聞す子細もあればきアノ私に刑いかにも胸そんなら刑部刑御臺さま小文次殿小太サア母上様小次乳母もこいよんサアお供申ませう小まづ入らせられませう上勇む兄弟付々を乗しづめつゝ駒の井は打連れ奥へ入にける跡には家老お乳の人親子の中も付々の育君には敵と敵鎬を削る胸の中いひ出す詞も物に角き申父上私に用とは何の御用銘々的場の用意に氣がせくちやつといふて下さりませ上いらつて掛れどこなたは落付刑ハテいら／＼と世話しいやつ其方ばかりいらつても雙方一度に射術の試み此方にも用意が出来ねば詮ない事何も其やうにいそぐ事はないイヤそれに付て娘其方を召連當那須のお家に有付たは御兄弟の若殿の生た年思ひ出せば早十五年よもや忘れも致すまいハテ光陰は矢の如しちやてなく爺さまにはもと京家の武士私はまだ十六の年ゆる有て御浪人噂さまはお果なされ親子二人が鎌倉へ來た當座私がよしない不埒を仕出し其先の人の名もしらず顔もしらねど種をやとしるべの方に預けられ身二つになるその

内に爺様には幸ひと此那須のお家に御奉行刑其時當家の奥方にも御懷胎娘のそちも同じ臨月主人の奥方といひ獨の娘雙方共に恙なう安産のあれかしと願ひし甲斐にあれあのごとお家には玉のやうなる男子の二子き其御誕生の日もかへず私も念なふやゝを産み其夜は惱みに氣を失ひあくる日聞けば産れたやゝは男子ながらはやくさの病にて産れて直に死別れかへつて此身は惱みもなうひだつたを幸ひに刑主君の若君は存なれば乳母がなくては叶はぬと娘のそちに乳のあるを幸ひ惣領の小太郎殿へお乳の人き十四年のけふが日まで親は御次男の小次郎さま附私はまだ惣領の小太郎さまの乳人役今那須のお家でも大勢の御家來衆にもてはやさるゝ身の大慶是もみなお主さまの御恩と寝た間も籠畧におもはぬ此身刑すりや忠義に心を碎くちやまでき男女子の品こそかはれあなたは小次郎さまの附人ゆる育君を大切になさるが忠義の道此身は育た小太郎さま大事に掛けいでなりませうかいなア刑ハテういやつ出かしたなア女ながらも忠義を忘れぬ志此刑部も聞て安堵さりながら其方が産落した忤其節に死すとおつて此祖父がともかふ

も育て上げてをつたらば何ぼうそちが忠義にこり主君大事とおもふても親子の愛情はまた格別忠義的にも狂ふであらうのくホ、是はまた爺様の改つたおつしやりやう譬へ我子があの時に生ながらて居やうが夫といへば名もしらず顔さへしらぬ中といひ世間の人にも面ぶせ殊に主人に仕へるからだもし誰子と問れた時何と答へん詞もなしおもへば死だが物怪の幸ひ何の未練を残しませうぞ刑ム、すりやあの時の孫が生ながらてをつた所がきなまなか我子が生て居ては御主人へ不忠にならうもしれず死すは不通にやる心死で呉れたが互ひの身のため今では年月育た和子さま兎略にせぬが此身の冥加それをまたことくしう何とおもふて問はしやんすへ刑イヤサ其事を尋ねたはそちが忠義にこりかたまり育君を大事にかくるは娘ながらも此刑部感心はするものゝもしや今にもそちが忤此刑部が獨りの孫無事に生長いたしをつたりや嘸其方も嬉しからうがもしや忠義の切先もなまりはせぬかとためして見たのさくホ、てもマア色々の事をいはしやんす譬へその子が爰へ今生のばはつて出やつても親子の輪廻に引されて一旦盡し

た忠義の道忘れる様な女ではござんせぬ刑オ、さう有う我子の事さへ思はぬからは兎角育君の小太郎殿大事おなじ主人のお胤でも御次男の事は苦になるまい此又刑部も育君小次郎殿にけふのかけ物の見事に勝して見せう其時そちにおくれを取りむごい親ぢやと恨むなよくそりやおつしやらすとも互ひの事こちにもおくれを取らさぬ用心譬へおまへが恨ましやんしても親子の中は私事忠義の道にはかへられぬこつちに勝して見せませう刑アノ見事そちがやくアイおんでもない事刑此あらそひもく武門の意地刑とはいへ孫のくエ、刑イヤサ的場の用意言付おきやれくさやうならば刑部さま刑お乳の人早くくお先へ参ります上互ひにそれとおれそれも行儀崩さぬ武家育矢竹心に兄の乳母爺には心奥の間へ用意にこそは入りにける跡見送つて父刑部何か心の一思案刑ム、あの心底ではかの事を今更どうもかうかと親の口からあからさまにはなされず今まで仕込みし此一條ハテ何とがな上胸に手を當て工夫の只中奥よりそつと弟の乳母伺ひ寄てひそく聲ん申刑部さま刑オ、乳母して的場の用意はんアイ何も角も拵す

み是からが勝負の一段しかし案じらるゝは大事の和子軍のお供は跡目の定め此勝負に射まけては今まで高い此鼻がへしやげる計りか和子の外聞殊にお前の娘御ちやが小太郎様のおうば殿にこなされるのが口おしい御家來なれど伯父御の師範兄御を相手の射合はこわ物こつちばかり勝つ工夫はござりませぬか刑部さ刑身共とても其工夫をしておる所オ、幸ひくゝよい計略上お蘭を近付け耳に口聞たび毎に小踊りしてんすりや曲り矢を小太郎殿に刑ア、是靜かに合點から心得ました刑ちつとも早く上しめし合して兩人は奥と口へぞトオグリにて道具庭先紋付の幕張りし射場になる上別れ入る程なく奥に御臺の聲駒雙方共に用意がよくば射術の試み早うく小太ハア、上ハツといらへて一間より小太郎小次郎りゝし氣に乳母くも附近ひ雙方に控ゆれば御臺を始め小文次刑部指圖に隨ひ姉共かの陰陽の日の丸の扇各竹にゆひそへて家來は心得弓と箭を二人が前にさし置たり是ぞ矢島に高名の扇の的の前表を爰にしらすも花やかなり何れをひけと思はぬ親の心の氣配り目配り小文次刑部も片づを吞み乳母くゝは息をつめ差出す四手の手もふるひ風に木の

葉の散るごとく小太郎は西の方東は弟小次郎が射向の袖のしほらしく引かためたる一筋勝負矢聲を掛けて一時に切て放せばあやまたず東は射當西の方兄は射はづす心の騒ぎ弟の乳母は飛上りんあたりくゝ「悦びの聲を聞くにも兄の乳母扇を捨てゝどうと伏し無念涙に暮れ居たる刑部は勇の聲をあげ刑ホ、ウお出かしなされた育君小次郎様には軍のお供に極りましたぞ文小太郎殿の射はづせしも家を繼ぐべき御瑞相神佛の加護頼もしく駒オ、勝も負るも軍の習ひかならず意恨に思やんな上詞に千貫百貫の鷹を放する軍だち刑いでくゝ和子には尼公の御隠居とがみが原まで出陣あれ文小此小文次は鎧親出陣の儀式御親子餞別のお盃申上駒其内我夫にも御歸藩なされう出かしやつた小次郎とは云ふものゝかわいや小太郎上心の内を思ひやり態と勇みの聲はげまし駒サア皆もこなたへ皆まづお入あらませう上こなたへ來たれと引連れていさむ弟につく乳母としほるゝ兄のお乳の人よそに見なして五十嵐も鼻打かみて紛らかし文いざ刑部殿刑まづくゝ上ともなひ一間へ入にける跡に小太郎打しほれ涙に暮れし有様を乳母は思

ひにくれながら態と詞のはり強くき是申和子さま大功を立んと思ふ者は小事にかゝはらぬとやら何をくどく思召軍に立ずばあゝまゝよまんまの皮でおすましなされくしくと思召との又ぎくくが出まするぞやエ、氣の細い何ぞいのううしかる内にもお道理と胸に涙をこぼし居る小太郎思案極めても面へ見せず目をおし拭ひ小太郎オ、いやれば本にさうかいのう去りながら父上には最前からまだお歸りなされぬか今一應とゝさまへお願ひ申してたもらぬかそれが本の念ばらししいふ顔つれく打守りくオ、おいとしや夫程にまでお心残りなオ、御尤ちやお道理ちや成ると成らずと殿様のお歸り次第この乳毎が願ふて見ませう其お返事をいふまでは此庭先にござつてはお風をめすサアくいつものお間へござつて是此刀などかならず手に取て下さります一筋なお生れゆゑ短氣な心が出ようかとそればかりが氣掛りな上サアくこちへと抱かへ袴の塵を打拂ひ落散る弓矢を拾ひあげ案じる涙はくとしはれて奥へ入相ト小太郎おきく居流れにて
靜かにもとの道具へ戻る

後段那須野狐退治の場

上鐘につれ立つ夜嵐は無常の風と身にしみていとい思ひに小太郎は涙ながらに硯箱書置品ぞ哀れなる小太郎獅子は我子を谷へ捨その勢ひを見るとかや父も我子をためせども其甲斐もなう射はづせし不覺は此身の未熟から上さぞや詮なくおぼされん面目なさと口おし小太郎腹切て相果るはせめては恥をしつたかと思し召下さるべし上おなごりおしいは母さま小太郎お頼み申すは乳母が事不便を加へて下さりませ上繰返し書ては目をすり袖絞り小太郎よく武運に盡果たか上わつとばかりに聲をあげ我と我身をつ打付て消入る計に泣居たり時しも強く吹風の音につれたる襖戸障子ぐはたくざはくと一時に騒ぎ出しは風にはあらず化生屋敷と人毎に云ひしに違はず家鳴震動心魂に徹する響きは物すぎ愁にしむむ小太郎が勢ひふくんですつくと立小太郎ア、ラ不思議や兼て妖怪有とは聞けど是まで障礙なさゝりしが心氣疲れし弱みを見こみ性根を奪ふと覺えたり憎さも憎し冥途の供いで引つれてゐて呉れん上窺ひよつたる心の不敵案に違はず一間の障子はつしと蹴破り飛出る化生はとしふる野干の眼は日月利劔を

引提げ怒りの齒をかみくヤアぬしある館としりながらうぬが弓矢の高慢にて望んで受たる主を始め家内の奴原取殺しほむらをやすめんアラ嬉しや上はつたとにらみし有様は身の毛もよだつ計なり其時小太郎ちつとも騒がす南無八幡大菩薩と心中に祈念し小太刀を抜て討かくればひらりと外すを付入てぐつと突こみ一ゑぐりゑぐればかつばと伏す所を乗かゝつて聲はりあげ小太ヤアゝゝ化生の物を小太郎が組とめたり突とめたり明しゝゝ上をりあへやツと呼はるこゑスハ事こそと御臺小文次刑部も共に走り出見ればあやしき化生の姿こはゝゝ不思議と銘々が引立見ればかづきし面落てあらはす乳母の顔刑ヤ、こりや娘小誠文に乳人駒お菊かいのう上人々是はと興さめて呆れ果たるばかりなり驚く内にも小太郎は乳人にひしとすがり付小太のう情ない何ゆゑにおそろしき姿となり我手には掛りしぞ子細を語つて聞しやいのう上いふさへもおろゝゝ涙手負は其まゝ抱き上げきオ、健氣によう遊ばしたお出かしなさつた是でこそ我育たお子程ある悲しい事はござりませぬぞや泣て苦にして下さりますな申奥さま御惣領を云ひ立

軍のお供を願へども十四やそこらで腕かたまらず弟御連にも同前とはおめがねが違ひませう是見たまへ右の腕より左の肩胸骨かけての働きはあつばれゆゝしきお手の内是を見こみに軍のお供連れましていて下さりませ大事の一矢を射損じて面目ないと突つめたお心の程いとしほく恥を清めてあげましたくあざとい智恵の古狐化生屋敷といふを幸ひ鍵切折て劔となし手遊びの面引かづき畜生道を此世からまねんで死るも和子の爲なすのゝ原の狐共那須のお家の野干とも云ひならはして十五に足らぬ小腕にて變化の物をしとめしと觸れ流し言ひふらし手柄と末世に云はしてたべ上死る今はの際までも思ひに暮れし有様を聞くに刑部は胸に釘實に斷りと小文次も詞を出さず扣へ居る御臺はワツと泣叫駒のう淺ましやいとおしや其身は四足の數に入り畜生道の苦を受けても手柄にさせんとおもふ厚恩小太郎かならず忘りやんな尤も刑部が娘と云ひ親子諸共家來なれど世の譬にも云ふ通り乳母は他人とおもひしに手沙に掛ければ夫程にいとしかわいゝ物かいのう不便の最期を見る事ぢややなア上くどき立ゝゝ嘆きにつれて小文次

も涙の外の挨拶は袂をしぼる計り也刑部は始終詞な
くさしうつむいて居たりしがこたへ兼ねかつつと寄
り傍に落ちる小太郎が刀を取るより早く我腹へがば
ど突立れば人々はと驚に又驚を重ねつゝ顔見合せ
て茫然たりおきくは苦しき息繼あへず是爺さま何
故にお前までが此様子上様子聞かしてくと問は
るゝ度に苦しさの刑部は涙吞込刑オ、とはずと
も語らねば娘は元より御臺五十嵐嘸此刑部が切腹を
不思議にも思はつしやらう是なる娘が忠義心我身を
死しても育君にひけを取らさぬ心の程通れともけな
げとも夫とは替り此刑部不忠のさむげに此切腹駒何
是なるおきくが忠義を感じ文小切腹の上さんげとは
き深い様子がござんせう人三サ、なんとく刑サ、此
事を物語るには人々の前といひ我子ながらも娘の手
前おめゝゝ生きては居られぬしぎ今日の只今まで主
君御夫婦の目をたばかりし悪事の報さんげのために
此自殺ア、思ひ出せば十五年已前我當家に仕へし頃
御臺所の産み給ひし仔の内惣領の小太郎殿は達者に
て今一人の御次男は生れ落ると早瘡にて産聲あげし
計りにて跡は忽御落命駒ヤアゝゝすりや其時の二子

の一人は死やつたか文小それに又あの小次郎殿は刑サ
ア人として始より悪人といふはなく其時ふつとおも
ふには世の諺にも二子の内もし一人が相果れば残る
一人も育てぬものと聞に付とやせんかくやとおもふ
うちしるべに預けおきたる娘も其日身二つになりし
と密かにしらせの一書を見るより思ひ付たる心の目
算京都より親子連當地へ下り仕官の當座主人大事と
おもふに付娘の産し子の親は何國の誰とも相分らず
父のゆるさぬ徒ら孫表立て育てもならず是ぞ幸ひ和
子の死骸と其孫を取かへて御兄弟共御無難と當座を
欺り置く時は主人の喜び孫めの仕合南方よしと馳歸
り娘に出生の男子は相果てしと言聞かせ今日の只今
主人の和子とかしづきし御次男の小次郎殿こそコッ
ヤ娘そちが産だる忤ちやわいやい上始てあかす仔
の素性聞くに御臺も小文次も餘りの事に興さめてあ
きれ果たる計りなりおきくはかなしさやるかたなく
きヤアゝゝゝそんなら我子と和子とを取かへおき
現在産の親子さへしらぬお前が心底は善か悪か様子
があらふ駒取かへおきしは忠義ときこえ其後長の年
月を現在の娘にさへ包み隠す心底は文小主君に云へす

ば某に咄も有うに根深く工む惡心か^三人サ、様子は何とく不審はれねば雙方より詰よる中に手負の刑部いた手を屈せずどつかと座し^刑サ、夫故にこそ此切腹ア、情なや世の人情始は忠義とおもひしも月日の立つに隨ふて段々募る我慾心たつた獨りの初孫め爺の素性はしらね共日にまし夜に増し不便さ増り主人は元より我娘も此事をしらぬを幸ひ二人の和子に乳を上んと主君へ申して娘を呼寄せお乳をくゝめて見し所どうした縁か惣領の和子に娘はお乳をあげ我肉身小次郎殿には餘の乳母取て是も養育兎角浮世の事とは思ふやうにならぬも因縁其内娘は育君大事く一圖に思ひ小次郎殿の乳母は元より附添の某まで親子の中にも隔してうかつに心をゆるさぬ様子さほどにおもふ我娘に取かへ置たと云ひ出されずけふやいはんか翌やいはうと思ひながら送る年月積りつもつてけふの今主君は西國へ軍の加勢此お供には何れぞ一人召連んと主人の仰聞くと其まゝ心の惡念何卒弟小次郎殿に首尾よく跡目も取らせたし殊には末世の龜鑑にも殘さす程の高名もさせたいが腹一ぱい又乳母のお蘭こそ惡人梶原が身寄の者上べ

は忠義と見すれども那須のお家に仇するもの我意を立んと惡事の腰おし孫子に迷ふ某に何かと惡事をすゝむるゆる幸ひ彼に申付け曲りし一矢を入しれず小太郎殿にあて行ひ我孫の小次郎には狂はぬ矢をば持たせしゆゑ扇の的には射かつ筈それから起つて娘には妖怪變化と姿をかへても和子の手柄に身を殺しお供を願ふけなげの最期むざんな死をさせたるも元はと云へば娘にもしらさぬやうに取かへし孫に家督を繼さんと祖父の惡事の報い來て今此果を各のお目に掛るがせめての言譯かくの通りでござるわいのう^上包みかくせし身のさんげ扱はとばかり主従は呆れて詞なかりけり小太郎怒の聲をあげ^{小太郎}扱こそくそちが肉身の孫を軍に立さんため我には態とまがり矢持たせ不覺を取らせしにつくい奴切腹とはまだしもい以小太郎が恨の及とは云ひながら親はおや乳母はさうした工みとしらす我を大事と育てしうへ身を捨てゝまで某に忠義を立る志おもへば是も不便の有様母さまコリヤマア何と致しませう^上胸の怒も義理故に及もなまる曇り聲御臺はあるにもあらぬおもひ^胸オ、其悔は尤もなれども長の年月

我子ぢやと偽りおふせし刑部が悪心憎さも憎し小次郎も共に此座へ呼出して科糺さんとはおもへども是とても刑部が工み露ちり程もしらぬ事殊には乳母が肉身の悴とあれば乳兄弟文小主君の心は存せねどいかなる重き罪科も懺悔には滅すと聞く今刑部が切腹せしうへは乳母が深き忠義にめんじ小次郎が科をなだめ改めて家來の數に加へ長く忠義を盡さすやう此小文次が受合しぞ上安堵しやれと五十嵐が詞に刑部は有がた涙お乳は中々義理さがしくおもき頭を打ふつてき其お志はありがたけれど化生野干の姿となつても育君のお手にかゝるは忠義の道是まで受けし御恩報じなまなか今は我子の命此乳母ゆゑにお助あるは情の罪科和子の敵何ぼうでも始から死だ我子に相違はないハテ生なりと殺しなりとなされた上お家の掟を立るが道ことの起りは此乳母がよしない若氣の徒らから子をもうけたるばかりに爺さまの慾心もおこるといふもの彼是きくも冥途の迷ひ皆さまおさらばなむあみだぶつ上おもひ立たる忠義心いつかなたゆむけしきなく懷劍取て引廻す其手をおさへて御臺小文次マアく待てと引といひ立よりながら

小太郎もとめてよいやら悪いやらいつか果てしも泣入る折から遠音に聞ゆる貝鐘は早西國へ出陣の人數を揃へる時刻ぞと人々驚く其隙に一間の内より聲高く宗ヤアく刑部親子とも那須の與市宗高が申聞す子細ありマアくまで上聲かけ出る宗高が甲冑姿に采配打ふりしづく出る優美の出立跡に附添ふ家の子郎等刑部はハツとうづくまり乳母は苦しき息ながら御臺小太郎小文次も共に姿を打守り駒ヤアあなたは我夫いつの間に小今鳴響く時の聲小太郎扱は最早御出陣か刑始終の様子をお聞あつてき最期をおといひ遊ばすは皆いかゞの子細でござりまするな宗ホ、ウ我兼てより刑部が心底合點ゆかずとおもふゆゑ態と母尼公の屋敷へ立寄時刻を移す體にもてなし裏道より立歸り様子委しく聞取たり去るにても恩愛に引かされ穴戸刑部が悪心は取も直さずそれ其弓もとは直なる竹なれど娘と孫が弦を張り慾に曲りて身を果たす又乳母おきくは主思ひ矢竹心の一筋に親ならぬ身の親よりも深き思ひに身を捨つる云はゞ忠でも義でもなく眞實底から大切が餘つて死る不便さに今はの際の兩人に我心底も云ひ聞さんため出陣の時刻と

云ひ世話しき中に呼とゞめしぞかならずはやまる事なかれ^上。さすが源氏のものゝふにも弓箭は並び那須の宗高物に動せぬ其振舞さもゆかしくぞ見えにける^利すりや取替子の事兼て君には御存じとや^胸それに又今日までしらぬ體にてお過し有たは^文深き御賢慮有ての義かな^宗いかにも是なる小太郎が誕生の折からおもひも寄らぬ存の出生惣領は小文次に預け次男は新參の刑部に預け兩人共に乳母を取り育つる内刑部に預けし次男の顔よくゝ見れば母には似ず兄小太郎が乳母たるおきくの面體によく似たれば合點ゆかすと思ふゆゑ物によそへて様々と附々の者をためして見るにそれなるおきくは忠義一圖刑部は始終に次男を世にたて惣領をなきものにせんと計る様子扱は刑部が我孫を取かへをきしに相違なし此事とくよりたいさんとは思へども云はゞ忤の乳兄弟と育置しも我情然るに先程より此場の様子聞くや否物のためしは親と子の血合せをして證據を見んと小次郎が腕を引某も又かひなを突き二人が血汐を合せし所思ひも寄らず一つに寄りしは誠の親子ならずして血汐のよらん等もなしそれゆゑ今は汝等を呼とゞめし

も此子細そもアノ小次郎を身に宿せしおきくが夫といふは何者今はにせまる親子の者委しく語つて此世の思ひ出迷ひをはらせサゝなんと^上何とくんと尋ねられ今更何と返答もおきくはおもなき其風情刑部は痛手も打忘れ^刑有難き殿のおしめし我孫の小次郎と殿の血汐が一つに寄りしはいかにしても合點がゆかぬコリヤゝ娘そちが身籠りし其様子かくなる上は包むに及ばぬ委しう語つてお聞せ申せ^上早う早うといらだつ爺親娘は息をつぎあへす^エ、此事はけふが日迄言はず語らず濟せしが今はのさんげも罪障消滅恥かしながら聞てたべ思ひ出せば十五年前爺さまには瀧口のお侍傍輩の讒言にて御浪人その内私は深草の庵室に叡山横川の大徳たる恵心僧都の説法ありて正眞の阿彌陀佛の姿を拜んで刻み給ふと都の人々通夜あれば私も共にお通夜の内つひとろゝとまどろむ間に明りは消えて眞のやみ隣に是も通夜のお人どうやらしたが縁のはし勿體ない事ながら其くらがりの忍び路に多くの人の入込なれば後のしるしと其お人は此香包を渡し置かれは(彼是カ)する間に群集に紛れ夜明けてさがせどお顔も見とめず是非も

なく／＼我内へ歸る其日が吾妻へ旅立爺さま諸共有付のため此鎌倉へ心ざす内たつた一度の其夜の契りおなかに宿して此成行香の包に一首の和歌鎌倉とあるを便りはる／＼尋ぬる甲斐もなう夫には行あはず我子は死だとおもふたゆゑいつそ夫子に逢はぬがまし此身は一生尼同前再び殿御を持ぬ身に乳母の役が相應とお主大事和子大事とおもふより外心も移さず暮し／＼たけふの今なまなか我子は生残り爺様のさんげといひ思へば此身は因果者恥かしい情ない我身の上でござりまするわいなア^上身のなり果のかなしやとどうと打ふし泣さけぶ始終の話に宗高は思はず膝をはたと打ち^宗ハ、ア奇妙／＼不思議としれし小次郎が素性コリヤおきく其方が深草の庵室にて忍び合し男より後の筐と送つたる香包に一首の和歌とあるからはもしや搔くもりなどか音せぬ郭公鎌倉山に道やまどへるとはしるしなきや^キエイ／＼／＼あなたはそれをどうして御存じ^宗しらいでならうか其夜の男といふはかくいふ那須の興市宗高なるわい^皆エイ／＼エイ^キすりや其夜の殿御といふは宗高さまであつたかホ、ホイ^宗オ、我其頃は父諸共左馬頭

義朝の手に随ひ都にありしが叡嶽横川に居給ひし惠心僧都の説法ありと聞しより深草の小庵へ一夜の通夜をなせし折からふと若氣の移り氣より通夜の女と契りをこめ後の筐と自筆にて實方中將の和歌をしるせし香包を彼女に渡しおきしが扱は其夜の女は小太郎が乳人にて小次郎と入かへ置し刑部が孫は廻り廻つて我肉身の悴にて有りしよな^上コレハ／＼と感じ入る年月過し物語り扱はと皆々疑ひの晴るに付て恥かしきおきくは元より刑部が仰天餘りの事に詞も出ず互ひに顔を見合せて溜息ついたる計りなり折から庭の小影より窺ひ聞たる乳母おらん小踊りして走り出で^んヤア聞た／＼もと此蘭は梶原様の家來番場の忠太がおめかけさま乳のあるを幸ひに乳母となつて入こみしも御主人に意恨ある那須の家をなき物にせん工みサア此上は小太郎兄弟始として皆の奴原を打取て手柄にする覺悟しや^上懷劍引拔我慢のおらん宗高目がけて切かゝる刑部は居ながらさゝゆる内エイと放せし矢聲と共にお蘭はワツと息絶えたり何れも是はと見かへる内次の間より弟小次郎小櫻威に身をかため弓箭携へあらはれ出^{小次}郎最前から委しい

嘶し一間の内から聞ましたが父上と血合せしてやつ
 ぱり誠の親子とは分りながらも何故と疑ふてばかり
 をりましたが扱は兄小太郎殿の乳人といふたは實の
 母家來刑部は祖父さままで有たかしらぬ事とは云ひ乍
 ら此身を世繼にせんために祖父さまの惡心も元はと
 云へば此お蘭めさつきに曲りし一矢にて兄上に不覺
 を取らした其報い我矢に掛けて此通り惡事の報い覺
 えたか^上刀すらりと拔放しおらんを直にとゝめの
 刀さしも苦しきお乳親子オ、健氣やと云ひたさも早
 引息の斷末魔見るにたへ兼ね人々もワツと計りに泣
 しむ共にあはれの小文次は立上つて小太郎引立
 小文次郎殿には産の親又小太郎殿には乳母ならぬ
 云は^上其身の守り神父御の仰を待たず其弟御に先越
 されずいそいで出陣の用意用意^小心得ました父上御
 めん^上いさみに詞なき捨て、一間の内へ駆入たり
 駒オ、潔よし^い是々何れも目出たい子供が初陣に
 嘆きはかならず無用^い宗ホ、ウいしくも制された
 りそれ二人の忤が馬ひけやいて^内ハア、^上ハツと引
 出す栗毛の駒小次郎ふわと打誇り^{小次郎}父上
 常々からの仰の通り國を出る時親を捨軍の場所には

其身さへ忘るゝは武士の習ひ始めて聞た此身の素性
 誠の母や祖父様に別るゝは悲しけれどそこを泣ぬが
 兵ものとやら婆さまの御隠居祇上が原までお先へ參
 る父に越たる先陣ぞや^上呼はり駒を乗廻すそのけ
 なげさを見る母も祖父も今はよろこび顔小文次は
 いさみを付け^小文天晴候小次郎殿いそいで先陣いたさ
 れよ^上下知に隨ひ手綱かいぐり一鞭當て乗出す所
 小次郎待た^上お、い^上と聲を掛け兄小
 太郎も緋威の鎧にひしと身をかため金覆輪の筋甲猪
 首に着なし月毛の駒に打跨り廣庭に駆來り^小太ヤア
 〱小次郎御隠居尼公のお屋敷祇上が原まではより
 二里半三里に近き道の法馬の腹帯がゆるんでは鞍か
 へされんあやうし^上しめ直されよと呼はるに
 ぞ實に尤と乘ながら小ゆすりしてしめ直す其間に小
 太郎あふりぼつ立眞一文字に駆通り^小御免候へ弟
 殿是は最前一矢の勝負射まけし返報に去んぬる頃宇
 治川にて梶原を出しぬきし佐々木殿の謀事ちよつと
 學んで候ぞや^上につこと笑ひて乗すゑたり今はの
 乳母は起上り^小オ、其智謀がもう手柄^利未來の土産
 にする本望^宗刑部親子は冥途へ出陣我又親子が菩提

のため深草の小庵を修造して佛前の幡を乞受け笠印となし即成就院と末世に呼さん心残さず成佛せよ刑エ、忝い上なむあみだ佛と引く息のよわるにつけて此世の別れハツと氣も落小太郎が駒引かへせば弟がはや乗出すいさみの駒先取られじと涙の手綱くりかけくくり戻し色香あらそふ兒櫻駒其姥ざくら散りゆけば小胸に涙の糸櫻小太もつれあふたる兄弟が宗駒のいなゝき轡音上あぶみにあふり手綱にむち打引立引立引廻し虎の尾をふむ軍場へ花をちらして宗いそげ小太ハツ上かけり行三重幕

右は天保三壬辰年の著作にして其節の役割は那須與市宗高實川額十郎乳母おきく坂東壽太郎穴戸刑部中村歌右衛門駒の井御前嵐璃光五十嵐小文次中村歌七乳母おらんに大谷友衛門那須小太郎中村芝翫小次郎中村梅花の心當に脚色しも其まゝにて打捨置しが追々役者は故人と也二十ヶ年の内役割のうちの俳優一人も残らず残るものは草稿と予計りなりと笑ひながら爰に記るせり都て立役よりする女形の藝には皆すこしづゝの曲ある役ならでは勤めぬ者なり所謂戀女戻重の井子別段の安達が原の袖萩祭文花上野のお辻志渡の

段 和田合戦の板額市若先代萩の政岡殿等にて皆一つの癖をつらまへて女形を勤むる者なり今女形拂底の世なれば良もすれば真女形戲場方言に若の勤むる役を立役よりする事あれども譬はゞ矢口の渡のお船大内鑑の葛の葉などは若女形より勤めずは其情通じ兼れど近來は立役よりする事とはなりけり右に云ふ曲者の役は往古より立役より仕來り今真女形の勤ては何とやら物たらはぬやうに思ふも當世の人氣なれば是非なし此西海硯の乳母などはいまだ歌舞妓にて仕たる事なし本文西海硯は享保中の狂言なれば脚色たらずあつさりとしたる狂言なれば斯書廣げずば當時の狂言とは成り兼ねるなり

中興世話早見年代記

寛永元年より寛政十一年まで百七十六ヶ年が間の世話事を見易からんがため爰に出す寛政十二年より後五十年餘りは近き事ゆゑ略す

寛永 子 三 山崎宗鑑 受す 矢代家 對決 落着す 松前屋五郎兵衛 落着 巳
江戸中村勘三郎 座始る 北村季吟 落着す 伊賀越敵討 江戸市村座始る 石川丈山 受す

午 八 宇都宮 騷動 日本橋にて馬 切狼籍 申 伊賀越敵討 江戸市村座始る 戌 石川丈山 受す

七 午 六 天草一揆亡 寅 瀧本松花堂 受す 卯 辰 巳

五 子 四 正保 申 酉 戌 巳

四 午 三 細井廣澤 受す 寅 卯 辰 巳

三 子 二 由井正雪 死罪 丸橋忠彌 卯 辰 巳

二 午 一 承應 辰 巳

慶安 子 宮城野信夫 仇討 丑 寅 卯 辰 巳

明暦 未 申 酉 戌 巳

林道春 受す 未 申 酉 戌 巳

午 申 酉 戌 巳

林道春 受す 未 申 酉 戌 巳

午 申 酉 戌 巳

午 申 酉 戌 巳

午 申 酉 戌 巳

③ 森田勘彌座始子

寛文 丑
去年姫路にて
お夏清十郎心中

②

寅

③ さつみ源五兵衛
お萬心中 卯

④ 京大佛木とか辰

⑤

巳

⑥ 午

⑦ 未

⑧ 京六條吉の太申

⑨ 星野勘左衛門矢數酉

⑩ 戌

⑪ 累怨靈解脫す亥

⑫ 奥平家敵討子

延寶 丑
隠元禪師寂す

⑫ 碗久歿す寅

寅

⑬ 高尾三股にて死す卯

⑭ 辰

⑮ 伊達原田對決巳

⑯ 扇屋夕霧歿す午

⑰ 平井權八死罪未

⑱

申

天和 酉
安宅丸一件堀田稻葉刃傷

⑲ 八百屋於七火罪戌

⑳ 西山宗因歿す山崎闇齋亥

貞享 子
於三茂兵衛召捕らる

① 御堂前敵討丑

②

寅

④ 和佐大八通し矢卯

元祿 辰

② 梅野由兵衛死罪巳

③ 姫路にて於夏清十郎心中(寛文元と重複)午

④ 灰屋紹益歿す未

⑤ 佐野次郎左衛門吉原にて人殺 申

⑥ 井原西鶴歿す芭蕉翁 酉

⑦ 畑野藤左衛門死罪 戌

⑧ 三勝半七千日寺心中 亥

<p>九 子 岡本一抱子歿す</p>	<p>十 寅 京にて於花半七心中</p>	<p>十一 辰 淺野吉良刃傷 龜山敵討</p>
<p>十二 午 義士夜討 五人男死罪 小三金五郎 於初德兵衛心中</p>	<p>十三 申 河村端軒歿す 於房德兵衛心中 淀屋辰五郎 關所</p>	<p>十四 戌 梅田心中 服部嵐雪歿す 於龜興兵衛心中 榎本其角歿す</p>
<p>十五 子 高野女人堂 おむめ心中 揚卷助六 千日にて心中</p>	<p>十六 寅 今宮かけ鯛 小か入平兵衛心中 お染久松心中 梅川忠兵衛捕らる</p>	<p>十七 辰 崇禪寺馬場敵討 小松屋宗七死す</p>
<p>十八 午 貝原篤信歿す 奥女中江島流罪 竹本筑後掾 森川許六歿す</p>	<p>十九 申 去年國性爺淨瑠璃始る 小西來山歿す 長吉長五郎死罪</p>	<p>二十 亥 祐天上人寂す 白かれや與左衛門 つる木や木之助死罪</p>
<p>二十一 子 小春治兵衛 心中</p>	<p>二十二 寅 お千代半兵衛心中 池西言水歿す</p>	<p>二十三 巳 新井白石歿す</p>
<p>二十四 未 白木屋おくま死罪</p>	<p>二十五 酉 京御影堂心中</p>	<p>二十六 亥 近松門左衛門 英一蝶歿す</p>
<p>二十五 未 天一坊死罪 徂徠先生歿す</p>	<p>二十六 酉 交趾より大象 な獻す</p>	<p>二十七 亥 西澤一風歿す</p>

<p>子</p>	<p>丑</p>	<p>寅</p>	<p>卯</p>	<p>辰</p>	<p>巳</p>
<p>伊丹鬼貫歿す</p>	<p>未</p>	<p>申</p>	<p>酉</p>	<p>戌</p>	<p>亥</p>
<p>延享 子</p>	<p>丑</p>	<p>寅</p>	<p>卯</p>	<p>辰</p>	<p>巳</p>
<p>觀世太夫一代能興行</p>	<p>未</p>	<p>申</p>	<p>酉</p>	<p>戌</p>	<p>亥</p>
<p>子</p>	<p>丑</p>	<p>寅</p>	<p>卯</p>	<p>辰</p>	<p>巳</p>
<p>午</p>	<p>未</p>	<p>申</p>	<p>酉</p>	<p>戌</p>	<p>亥</p>
<p>お半長右衛門桂川心中</p>	<p>お半長右衛門桂川心中</p>	<p>お半長右衛門桂川心中</p>	<p>おしゆん傳兵衛心中</p>	<p>北の新地五人切</p>	<p>大安寺堤非人仇討</p>
<p>木づや吉兵衛追放</p>	<p>江島屋其噴歿す</p>	<p>紀海音歿す</p>	<p>かしく死罪</p>	<p>おその六三郎心中</p>	<p>梅川新七心中</p>
<p>八文字舎白笑歿す</p>	<p>日本左衛門死罪</p>	<p>忠臣藏淨瑠璃始る</p>	<p>菊岡沾涼歿す</p>	<p>二代目芳澤あやめ歿す</p>	<p>半時庵淡々藤川平九郎歿す</p>
<p>寶曆</p>	<p>柳里恭歿す</p>	<p>鹽賣長次郎召捕らる</p>	<p>根津四郎右衛門歿す</p>	<p>鈴木傳藏唐人殺し</p>	<p>明和</p>
<p>竹田出雲掾没す</p>	<p>明和</p>	<p>鈴木傳藏唐人殺し</p>	<p>明和</p>	<p>鈴木傳藏唐人殺し</p>	<p>明和</p>
<p>午</p>	<p>未</p>	<p>申</p>	<p>酉</p>	<p>戌</p>	<p>亥</p>

五 子 六 丑 七 寅 八 卯 安永 辰 二 巳
岩井ぶろ人殺 去年加茂眞淵 殺す
四文錢通用

三 午 四 未 五 申 六 酉 七 戌 八 亥
京大丸馬切 加賀千代殺す
伊勢御影參 烏石葛辰殺す

九 子 天明 丑 二 寅 三 卯 四 辰 五 巳
黒谷文七一世 横井也 有殺す
淺岡山焼る 佐野田沼又傷 尾上菊五郎殺す
四幡小僧召捕 與謝蕪村殺す

六 午 七 未 八 申 寛政 酉 二 戌 三 亥
中村富士郎殺す 近松半二殺す 京都大火
寛政 西 肥前島原焼る

四 子 五 丑 六 寅 七 卯 八 辰 九 巳

小金原鹿狩

十 午 十一 未
京大佛焼る 江戸新大橋敵討 明年藏前敵討

堀田稻葉安宅丸の語

元祿中淺野吉良殿中にて刃傷の年より二十一ヶ年以前天和元酉年十二月十五日殿中にて刃傷ありけり大老堀田筑後守殿を若年寄稻葉石見守殿刃傷に及ばれ雙方相討になりしと云ふ一奇話は淨瑠璃歌舞妓の狂言に綴りなばおもしろき筋なれども其仕組なければ人口に傳ふる事稀にて赤穂又は佐野の刃傷の如く世に取沙汰をせぬ話なり或書にて讀み東都にて講釋に聞しまゝ爰に記す今東都大橋の東御船藏の側に安宅といふ地名残れりこは文祿の頃豊臣朝鮮征伐の砌安宅丸と號し御座船金銀珠玉を鑲め善美を盡し作られしあり元和以後東國に移し豆州下田の湊に置れしを後々東都へ御取寄せ有て御船藏に入置れしゆゑ其船の名を以て安宅と呼ぶなり爰に天下御政事御役向も多き中に大老職といふは誠に重き御役柄にて酒井讃岐守殿勤められ次に酒井雅樂頭殿次に堀田筑後守殿^{上州安中城主}御大老御勤めの頃お船藏邊の水中にて夜陰に至れば物悲しき聲にて伊豆へいのうゝと叫聲聞ゆ依て此聲を聞しもの段々噂をして全く安宅丸の泣聲にやあらんと市中専ら此噂さのみなり公儀

より其聲のする所を聞とめんと夜更に小船に乗り或ひは川岸ばたに夜を明し聲ある方を聞とむれば水中に自然と聲ありて姿を見とむる事かく諸役人一統の評議となりけり時に大老堀田侯の曰く昔三井園城寺の鐘を叡山法師奪取て歸れば其鐘自と三井寺へいのうとの音聲を發し近くば妙國寺の蘇鉢も音を出せしと聞ば安宅丸にも精有て其聲を發するなるべし彼是と評議せんより此船を破却なし飭の金具等は公儀の物とすれば子細あるべからずと申出され衆議是に一決して彼大船を破却し取片付ければ何のたゝりもなく事濟みける元和年中此安宅丸を伊豆より江都へ引きたる時船重くして動かす此時中村勘三郎音頭を取て候者と呼ぶ芝居をゆるされたるなり其頃の御老中稻葉美濃守殿^{相州小田原城主}此御分家若年寄稻葉石見守殿或日本所中屋敷へ歸路一人の醉狂人乗物先に立塞り狼籍に及ぶ家來用人等もてあまし繩付にして中屋敷へ連歸るやゝ時移り其者醉も少し覺めたりければ始めて心付き見れば繩かゝり居たる事なれば大に驚きこはいづくにて何故此身を繩付にせしぞと問ふ番人本所稻葉石見侯の屋敷なりと云ふ其者彌驚き醉に乘じて前後は覺えねど扱は伊豆へいのうゝの惡事露顯

せしか嗚呼恐るべしと誰が問はぬ獨り言を吐き嘆息しける近習是を聞咎め主人石見守に此事を告る石見侯も兼て安宅丸一條に付堀田侯の所爲合點ゆかずとおもはれければ密に其者を目通りに引する御尋有ければ始は彼是陳こけれ共詮方なく白狀しけるは此者産は上州安中にて吉右衛門と云者水練を得たるがゆゑ堀田侯へ心易く出入し水中に沈み一日一夜居たり其勞れぬ事取得に頼まれお船藏の水中にて伊豆へいのうくと毎夜叫びしは此吉右衛門なり又船を破却して一步通りは公儀へ上り九歩は堀田侯へ私欲せんが爲なり我には其褒美として江戸川々の船役仰付けられ過分の役徳を賜るとまで皆白狀に及びければ石見侯は先其曲者を屋敷中の籠屋へ打こみ番を附け世間に此沙汰せざるやうにし扱堀田侯に日頃怪敷と思ふ惡事の箇條書をして堀田行狀記と外題を付け本家稻葉美濃守殿へ委細を告げ天下のため祿を捨て一命を擲ちて私の宿意のやうにもてなし十二月十五日殿中にて刃傷に及ばれしとなり是古今比類なき忠心より出る所にして表立て此吟味となれば天下の騒ぎ時の將軍家へ對してもかゝる不忠の人に大老職

を仰付けられし過を咎るに當りて不敬なりと扱こそ私の宿意にもてなされたるなりされば後々淺野佐野の人々は私の意恨なり是はいさゝか意恨なけれど天下の爲に一命をはたし家斷絶するを心得ての意趣なれば言外の餘情いか計りか深からん然れば其座の人々にも何の故といふ事をしらす大老を切害に及びしゆゑ我もと石見侯にかゝり其日の詰衆のために石見侯は討れて何れを善とも惡とも分らぬなりに雙方死したれば事濟しけり石見侯の家臣に夏目茶右衛門と云ふ忠臣あつて死骸下され引取る時おもしろき問答あり是ら講釋にては眞事噓言取交へ云ふ事なれば狂言に作らばいかなる脚色せんともまゝなるべけれど前々の戲編にも演る如く筋よきは狂言に成り難しと故人作者の見殘しなるべし

下總佐倉宗吾の語

是も地藏通夜物語とか云ふ書にありて今現に下總國佐倉領將門山宗吾明神の社とて遺り東都にて講釋に講じ流行せる話なり年號は聞忘れたれども近き頃のこととおもはる佐倉の城主堀田相摸守殿の領内に宗五郎とてもとは由ある百姓なり年々堀田侯より年貢の

取立厳しく領分の百姓困窮に及ぶゆゑ手立に盡き數十ヶ村申合せ愁訴に及びもし聞入なき時は一揆を企て年比つれなき地頭代官を始め領主の屋敷まで狼籍に及ぼんと一決するを宗五郎はまだ老年と云ふにもあらねど常々正直なるうへ才覺もある者ゆゑ隣村の者等此宗五郎を頭とあがめいさゝか詞をもどく者なし宗五郎も一揆徒黨をさせまじと色々利害をとき諭し取りしづむれども多人數の飢窮にせまる事なれば是非なく年老の者共四五輩を撰み江戸堀田原相摸守殿屋敷へ愁訴し聞届けあらばよし萬一聞届なき時は自分等の望に任せ一揆を發すとも支へ申すまじと能々申聞せ江戸屋敷へ趣きけり若手の百姓此返事を聞んため數百の徒黨半は國に残り半は左右を聞んと下總より江戸までの道一町毎に二人程づゝ待受て國への返事を告んとす國には道場寺院等に集り竹鍵を持ち簑笠にて返答次第恨を晴さんとぞ待かけたり然るに江戸堀田原の屋敷にて頭取たる五人の者召捕れ既に牢舎ともなるべき所家老何某^{姓名は忘}領主の弟なれども家老役となる堀田侯に諫言して五人の牢舎を救ひ屋敷内に今宵はといめ明朝取捌き得させんと

有るに宗吾は兼々淺草觀音を信仰なれば事なく此度の一件濟むやうにと獨り忍びて淺草へ通夜に籠り残り四人は屋敷へといまるかの情ある家老は退出すると残り四人をひしゝと繩かけ牢舎となしけり門外に様子を聞かんと付來るもの屋敷内の様子を聞けば彌々重き牢舎ときゝ宗五郎も共に手討にもなりしと心得國の方へ注進に歸ると待もうけたる百姓共善惡の合詞を申合せ返事を待ゐる事なれば取上なき趣を大音にて呼繼ぎ十里餘の道を三時が程に佐倉領に聞えければ今こそ出あへと道場寺院の釣鐘半鐘を打立て惣勢がゝりに荒出し日頃つらかりし地頭代官をとくく家をこぼち佐倉の城内へ狼籍に及ぶ此趣江戸表へ注進しければ江戸より一揆の者共を一々召捕に來るなど古今未曾有の大騒動となりけるは是非もなき事共なり宗五郎かゝる事とは夢にもしらす其夜は觀音堂に通夜し翌朝堀田原へ歸らんとせし道にて噂を聞けば早夜前一揆起り江戸屋敷より一揆ども盡く召捕に行やら行徳船橋の街道筋往來も自由にならぬ程の大騒動なりと聞くより宗吾はこは夢かや現かやと驚きながら老分の四人はいかゞなりしや其程も

聞たく手拭にて面體を包み堀田原近邊にて聞合す所一揆の頭分は江戸屋敷に禁獄にて惣棟梁の者夜前逃去りしを今日召捕らんとめ街道筋にて旅人残らず吟味のよし噂取々なるゆゑ宗吾も今は詮方なくお尋ね者の科人なれば姿をかへ江戸近邊をさまよひ段々國の噂を聞くに數百人の一揆は皆村方へおもき預けとなり棟梁宗吾の配符廻り人相書を以て御詮議のよし聞えければ今更宗吾も思案に盡き所詮將軍家お成の折直訴して數百人の命にかはり科を引受んものと覺悟しながら夫婦の中に三人の子あり妻子は如何相成りしやら其程を案じられ或夜雪降も厭はず我村里へ忍び歸り我家ながらうかつにも得入らず外面に立聞く折内には女房三人の子供を寐させ居る體三人の子供此爺さまはどこへ行かしやつたもう歸られそうな物みやげを待つと頑是なき詞に母は愁ひもだへて土産を持って戻る程ならかくまで辛苦はせぬ物と涙ながらに添乳して寝さすを見届け戸口を明けて入る宗吾の影を見るより女房は外へ突出し領分は素より別して我家のほとりには吟味役人鵜の目鷹の目もと江戸へ出訴の折から聞届あればよし若し願ひの叶はぬ時

は諸人にかはつて死んものと妻子へ心の暇乞して出たる心はや忘れ給ひしか今更おめ／＼妻子にひかされて縄目の恥にかゝる所存かエ、臍甲斐なやと勵まされて元より我は其覺悟なれどいつ幾日ならでは將軍家のお成はなし其内一度暇乞にと立歸りしといふも仕方と呟きて涙ながらに立出る子は三人共起上り爺さまのうと取付くを母は引分け呵り付け宗吾は其まゝ、驅出す此愁の間は講釋にて第五日目位の性根場なり歸りに渡場あり雪にて川は埋れしを手ざしにさへて渡らんとするを役人に見付けられ誠に危き折渡し守治右衛門といふ善人は是を助けて役人をさへ船を向ふへ突遣られ命から／＼其場をのがれ歳の暮上野御佛參の折から宵の口より上野黒門の前に三枚橋といふあり此橋の裏にかき付かき付解しがたし隠れ居て將軍お興の前に飛出て直訴に及びしを御供廻りに支へられしが半死半生ながら終に將軍家の御聞に達し御老中へお預けとなり願の如く棟梁一人の命にかへ數百人徒黨の科を身に引受け其身は礫と科落着しけり爰に哀をといめしは宗吾の從類を絶せよと領主の命にて三人の悴女房まで宗吾と共に場所へ引出し打首と

なるを隣村に宗吾の妻が爲に一人の伯父坊あり出家の願ひにて子供の命をもらひに出れど聞届なきゆゑ伯父坊主あたりの池に身を投じ宗吾夫婦子供三人伯父坊と以上六人の命を下總國佐倉領に捨數ヶ村の一揆の百姓残らずゆるされにけり此後伯父の靈崇りをなし佐倉の領内に種々の怪しき事多かりしとなり一揆の百姓命の親の宗吾なればとて則爰は相馬將門の舊地なれば將門山と唱へ宗吾大明神と一つの祠を立て神と崇めて祭りしより伯父の靈も出ぬやうになり當時江戸近國より公事訴訟に出る者は先此社に祈誓をかける時はいかなる入組みむづかしき訴訟にても速に上に達すると有て詣人多く年々歳々この社美麗となり今は一と廉の宮地とはなりけるとぞ予この一話を聞かため講釋師何某を呼で未明より讀切らせ聞し所其筋のみを講ずるに夜九つまでに讀切けり此餘宗吾始他國より來り伯父に便り百姓宗五郎方へ養子となり兩親を見送り我二代の宗五郎となる話堀田相摸侯の先祖より當主までの傳又宗五郎の死後堀田家成行の事など種々の話あれども一揆にかゝはらぬ事は大方忘れたり是を狂言に仕組よと或人予以勸

めしかど東都にてはよく人のしりたる事なれど京攝にては餘り耳遠き話なれば東都歌舞妓狂言に書んものとあらかた腹稿をしつゝ其儘に捨おきたり重ねて彼地に遊ばい書くべしと腹稿を爰に出す同じ堀田侯の名にしあれば安宅丸を一番目上方にていふ前狂言なり宗吾を二番目上方にて云ふ切狂言なりと見込み世界はおなじ續狂言なり看官其心にて讀たまへかしと云ふ

齋藤吾櫻花日記の草稿

世界は鎌倉星月夜の人名にて木曾の公達清水の冠者義高頼朝の息女大姫の智となり七里が濱にて大磯の傾城を呼よせ放埒の序幕なり爰に長井別當實盛の忤齋藤吾は今武門を通れ秩父在の長井村に百姓となり名を隠して藤吾と呼び父の遺言を守つて餘所ながら冠者義高の力となり居る然るに袂の浦に義經奥州より蝦夷へ落んため羽州佐竹の一黨に言付渡海の大船を作らせ有り名を佐竹丸と呼び善美を盡し拵へたる船も義經滅して後鎌倉へ取寄せ袂の浦の御船藏にこめあり此海にて夜に入り蝦夷へいのうゝと此船のうなる聲すと聞清水の冠者若氣の放埒により梶原平次稻毛三郎等にすゝめられ此船を賣拂ひ大磯の太夫

新造等を身受する事あり道具かはつて鎌倉の營中にて此船の詮議とよる御臺政子の方の前にて平次と稻毛は科を冠者義高にぬり付け義高罪となる所へ梶原源太父平藏所勞に付本國一の宮に在て父にかはり別當職を預り居る至極實體なる立役にて是を捌き稻毛と弟平次が悪事を見あらはし義高の科を言譯して比企の能員に預け此場を取捌く政子の方も共に大姫を比企の能員に預くる是序幕なり次幕に結城七郎朝光滑川の屋敷へ歸りがけ船番所の忠太酒の上あしく乗物に行當り惡口を云ふ家來の銘々反打を乗物の戸を明け結城七郎家來の庵相を詫て名を聞くに袂の浦の船番役人番場の忠太をしらぬかと梶原風を吹かせて惡口いふ結城わざと家來を呵り屋敷へ連歸つて馳走すべしとなま酔の忠太を連歸る道具かはつて結城の屋敷に成り友光種々の馳走をして忠太を酒責にする忠太大に酔てかう酒で責付らるゝは偕は蝦夷へいのうゝの一件が露顯したかと云ふそれより娼婢いろくたらしして白狀させる忠太景季の謀反をかたり義高に科をぬり付け佐竹丸は皆梶原が押領その泣聲は則鼻が水中より船の聲色をつかひしなりと問ず語り

に惡事の段々をいふ娼皆々奥にむかひ殿さまお聞きあられましたかと云ふ襖を開き結城朝光出て忠太をぼんと切る娼共を立せ忠太の家老夏目主膳を呼寄せ梶原行狀記といふ書を書き主從暇乞の内は桃の井と本藏の如く此行狀記を秩父の重忠に渡せと言付る早幕にて引かへし殿中となる結城朝光梶原を殺し乗かゝつて腹を切る重忠彼行狀記を懷中して出て迤れ忠心と云ふをいゝや私の意恨にて討たりと云ひなすばたゝにて東西より梶原平次夏目主膳死骸を請取にくる朝光落入る重忠心に感じるを一番目大詰の幕なり二番目比企の判官能員義高大姫を預り物入多きと云ひ立領内の百姓をしひたぐるゆる百姓一揆を催して比企の館をこぼたんと云ふを藤吾比企の館には義高が居る事ゆる一揆をとゝめ皆々にかはり願ひ其返事次第にせよと云ひながら比企の屋敷へ訴訟にゆく能員の家來の敵役此願ひ叶はぬと云ふ所へ千葉之助常胤冠者義高を見舞にける比企能員齋藤吾が大勢になりかはつて來たからはそちや一揆の惣大將かとなじり藤吾の額をわり討すてんとする千葉之助是を拯ふて藤吾を救ふ藤吾此まゝでは歸られぬゆる鎌倉

長谷寺へ通夜して和睦なるやうと參る千葉之助も歸る跡にて比企義員家來にさゝやき預りの科人冠者を云ひ立百姓共へ課役をかけしを藤吾はしつて愁訴にうせたきやつめを討とれば百姓共は何千あつても氣遣ひなしと家來に齋藤吾を殺しに遣る返して並木松原にて百姓一揆藤吾の返事を待たむる所へ敵役の家來來て見とがめ棟梁の藤吾は最早討取たと偽りおどす百姓藤吾が討たれたと聞てあれ出し家來を一々竹鎧にて突伏せ比企の屋敷へ行く屋敷になる爰へ大勢の一揆出て屋敷をこぼちあれまはる大ばた／＼にてかへし鎌倉長谷寺夜の體にて藤吾右の一揆を夢に見た心にて堂の内よりつか／＼と出て大勢をしづめる獨言をいふてふと心づきあたりを見まはし爰ははせの觀音堂そんなら今のは夢であつたかア、嬉しやどうぞ正夢でなくばよいかと胸撫おろすを幕次藤藤吾世話場藤吾はお尋の身の上女房と子供三人泣悲しみ居る所へ伯父阿靜坊安念見舞に來て愁ひ中へ冠者大姫落足にて爰へ迎來る比企の家來詮議に來る安念坊と女房はかくまふた覺えはないと云ふ證據は是ちやと渡し守治衛門を引立馬士船橋の鉢兵衛出て爰の

内へ迎込んだとくり上になる千葉常胤鷹狩の形にて出て取捌いて情をかけ皆々を引立歸る伯父安念坊村界まで送つてゆく跡淨瑠璃になり藤吾暇乞に歸る子役取付き本文の如く夫婦の愁ひ有て／＼振切出ようとする鉢兵衛伺ひ居て藤吾にかゝる治右衛門支へる段切幕次は鶴が岡段かづら三枚橋將軍頼家公御供には秩父重忠輿にて御社參右の橋の下より藤吾古上下を着て出供廻りに支へられ鬢は亂れ着物上下も破れ繩にかゝる比企の能員出て反打を重忠出て將軍にかはり取捌く能員は女房子供三人を繩付にて引出さず安念坊命乞に出る能員こばむ千葉之助は義高大姫に姿をかへさせ家來のごとく連れ出て將軍の嚴命を傳へて藤吾の死罪に極り數百人の百姓をお助と云ふ藤吾よろこんで女房子に覺悟せよとの愁ひ有て水盃を重忠の情にてさせ三人の子供にかはつて安念坊能員に手を負はせ腹切る藤吾は松の梢にくゝられ重忠鎧にて突く千葉之助は冠者と大姫を藤吾に見せる藤吾苦しみの中には是を見てにつこりと笑ふて落入る女房子役泣落す時まで趣向は付置たり凡狂言の筋を立るには先づかやうに見込書事なり原條さへ立置時は仕

組に掛り枝葉のをかしみ人数のさしくりは其時の筆
拍子によつて幾らにもおもしろおかしく書るものと
しるべし鎌倉時代に取ては梶原家滅亡の時は清水義
高滅して五六ヶ年も後の事なれど是を引出して齋藤
吾をつかひ安念坊は十ヶ年も後の人名なれど此世界
と定むる時は年號月日に少々の前後あれどそれに拘
はらず名高き人の名と馴染ある名を遣ふ事肝要なり
とするべし所謂狂言綺語の拔道あれば實說本文をよ
く胸に納め扱著作にかゝる時は些にても實說本文に
近からぬやうに書くべきなり實說本文といへども作
文にて講釋などは其時々聽人に讀かゆる物なれば
確と正説とは云ひがたくなまなか本文實説にからま
れては狂言となりても片詰り堅く淋しく取とめし所
なく一日一部の趣向に體を失ふ事あり都て世話時代
にかゝはらず狂言著述は本文をよく心得構へて實説
に遠ざかるべし著作道第一の心得なり

西澤
文庫 皇都午睡初編上の卷

目次

- 一 表題の起原、枕を碎く
- 一 秀句の渉守
- 一 似口行燈
- 一 川柳點
- 一 折句
- 一 尻附跡附
- 一 雜俳の品目、札の立見
- 一 鶴助の發句
- 一 何に附
- 一 考へ物
- 一 字謎
- 一 前句附
- 一 戲場の落首
- 一 金毘羅樽
- 一 字にて畫を書く
- 一 俗言の齟齬
- 一 東都の地口
- 一 浪華の口合、畫口合
- 一 冠附
- 一 もちり笠
- 一 粘頭續尾(山科の跡附)
- 一 二字段々
- 一 物は付
- 一 何曾々々
- 一 古代の謎
- 一 字謎の發句、犬の足跡
- 一 落首
- 一 所俳諧
- 一 畫に似たる文字
- 一 古代の看板

- 一 畫噺
- 一 鈍畫
- 一 講釋
- 一 玉川三吾
- 一 幼童の遊戲
- 一 俄茶番
- 一 所作奉
- 一 十夜童謠
- 一 地藏の勸化
- 一 遠國の唱歌
- 一 手鞠唄
- 一 置錢壹銖(大盡舞)
- 一 おつこち
- 一 四谷鳶阿波座鴉
- 一 いろは譬
- 一 寺子屋庵室
- 一 茶佳否記(餞會)
- 一 祭將棋
- 一 佛像雙六
- 一 早口そゝり
- 一 宛字讀
- 一 落噺
- 一 浮世物まね
- 一 大人遊
- 一 鳥指
- 一 拳
- 一 童謠ふれ／＼小雪
- 一 橋の下の菖蒲
- 一 木遣音頭
- 一 鞠のかげ聲
- 一 十二月萬歲
- 一 鑄懸駱駝
- 一 胡麻摺
- 一 天王雛子天滿巫子
- 一 弄の名を異にす
- 一 投壺投扇興
- 一 圍碁將棋
- 一 むべ山骨牌
- 一 道中雙六
- 一 竹田機關

- | | |
|-----------|-------------|
| 一 大道具 | 一 輕業放下師 |
| 一 細工見世物 | 一 猿狂言、馬藝、力持 |
| 一 座敷影畫 | 一 おどけ開帳 |
| 一 子守歌 | 一 順禮歌 |
| 一 潮來節 | 一 伊勢音頭 |
| 一 馬士唄 | 一 船歌船頭歌 |
| 一 臼挽田植歌 | 一 豊後ぶし |
| 一 淨瑠璃節 | 一 ちよんがれ節 |
| 一 娘道成寺 | 一 歌景圖 |
| 一 雪の唱歌 | 一 青葉の解 |
| 一 謠曲を唱歌にす | 一 綾鶴 |
| 一 鉤簾の戸 | |

西澤
文庫 皇都午睡上の卷

西澤綺語堂李叟著

表題の起原、枕を碎く

或片鄙の相應に暮せる人すこし學問の志はあれど師と頼む人もなく彼の經典餘師と云る書籍を買ひて論語を大半讀頃京より來る旅人に逢ひ四方山の話に及ぶ京の旅人は年も若くさまで身を持し體とも見へぬに何かと物語をすれば贈答速かなれば鄙人深く感じ足下の如く博識なるは年頃の學問も容易ならじと云京人打笑て我等生れてより書物といふもの一冊も見侍らず兎角田舎の學問より京の晝寢と社存じ候とそこゝにして去る鄙人國に居て學問せんより京へ往て其晝寢社せん物と多分の路用もて獨京に登つて三條の宿に着日毎に祇園下河原あるひは加茂糺の茶店に晝寢すれどもさせる博識にもならず睡には枕にもよるべしと邯鄲枕を求てすれどもさまで能もなけれ

ば括り枕塗枕香爐枕箱枕歌種枕船形枕張枕と枕のあらん限りをして晝寢をすれど能寢入てたまゝには國の事のみ夢に見て詮方盡手枕ひち枕をして睡れども驗しなければ半年餘りの京登りもむだごとなりと見限りて歸路の路銀をきらさぬうちにと今迄求めし枕の分を打碎きて捨我田舎へ歸りしとある昔話をおもひ出皇都の午睡と題して今迄三都にて晝寢朝寢宵惑に聞たる種々の話に虚實を撰まず我僻案も打交へ書集る事になん是や宰予が晝寢ならで日本人の寢言とも笑はゞ笑へと東都淺草に三とせが間假寢せし枕石山人が戯言也

俗言の齟齬

行水と沐浴とを唱へ違へ浴湯は湯を浴ると書ばさまで忌はしき詞にもあらず死行人に湯水をかけ棺桶へ入るなれば行水をもいまはしとも云ん丁灯と行燈を混じたる行燈は往來を通行の時とす丁灯は居所に置べき也提灯挑灯の文字は後に書たる物と聞けり牛馬の止動も止はとゞまれと云詞なるを畜生の悲しさには是を聞て動動はうごけと云詞なるに是を聞て止る聲と烟管の名を取違へ烟管は煙草を吞む具なる

ゆへ是をのみと云鑿は金具にて木をせる物ゆへ木せると云とは滑稽者の云出せる詞なるべし

秀句の渡守

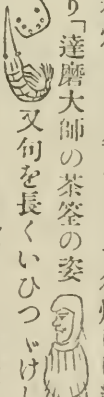
今云口合と云ものは往昔秀句と云て謠曲の狂言記にも秀句の渡し守と云あり旅人船渡しを渡るに賃錢なきを歎く一人是に無錢にて渡る工夫を教ゆ其渡し守は秀句を好めば薩摩の守也といふべし心はと尋たらばたゞのり也と申せよとて別る旅人教の如く渡し船に乗り薩摩の守と云船守船を川中にとめて心を問ふに忠度の詞を忘れて彼是云延す中船向ふの岸に着く旅人心は青なりといふて逃る船守やるまいぞくと追ふて入る是則口合のもとにして秀句とはいふなり

東都の地口

東都にて口合を地口と云近世出たる三養雜記に地口は土地の口合と云事にて假令ば地酒地卵など云類ひにて地とは江戸をさしていへる詞也とはあたらす是似口にて似かゝりたる詞を云がゆへなり扱似口口合に種々のわから有三養雜記に出たるは天神の姿にて口をおさへたる繪に「だまりの天神船の團子三串書る天神」に「團子十五三五今十五は四文錢にて商ふがゆへに四つざ

しなれど以前五つざしにて五文に賣りし頃なれば百年跡の口詞也クチヤウ

似口行燈

又地口行燈とて初午にともす行燈には繪を半もたせたるなり「達磨大師の茶室の姿」又句を長くいひつゞけしは「精靈のまこと」棚經の坊さま見ればみそ萩露が垂る女郎の誠角あれば晦日「君が射姿的場で見ればふだん尺二を射に月が出る」君が寝姿窓から見れば「小田原提灯細くかたばみんなさる」君が寝姿窓から見れば「小田原提灯細くかたばみんなさる」今川了俊愚息仲秋になど也又通例の地口と云は「繪馬あげ願ほどき」胡麻あげ梅は見てさへ醋とや申す夢に見てさへ「雪見に出たる三谷船」富士二「年の若ひのに白髪が見える白帆が見える」玄關に席を改て口上を聴林間に酒を燈「銅の鰐渡邊」檢校喧嘩杖が澤山天上天「娘は琴より三昧のこと」鞍はもとよ是らは江戸の似口也尊

浪華の口合、書口合

京攝にての口合を書口合とて下に繪を書上に文句有て安永天明頃の草紙に有「ほの暗に戸を明て」此浦船に帆を上て振袖の娘羽子板を持て門松立し門の戸を明ける圖な

り此書にて句の餘情をきかせるは先畫賛の心なり繪に勘平簑笠にて火繩の火をかす曾我の五郎朝戻りの姿にて煙草の火をかるを書「時宗勘平馴染にもあらずに時に范藝なき地獄閻王の前にて牛頭馬頭仙人の目をかけ居る圖「仙人かけ目なし現銀かけ直なし鞍馬天狗牛若に誤り居る圖「鼻杉の根に付にけり著にけり是らは畫にてきかせる句ゆへ畫口合と云も佳なり又畫なくとも能きけるあり「赤き櫓の紅屋との淺きたくみ本堂

涼しさ團扇捨本藏苦しさ袖萩勘當になり悲し某佐々木

わ「反橋はだしになりかゝり題同天神質屋へ自身に御座る天神七代地神五代などなり近世段々巧になり同字を嫌ふと見へて口調一變したり金壹朱と銀壹朱と吹替の頃

「金で見馴て又銀で死んで生れ仙臺高雄を目に懸て現在母御

を手にて又死んで「垣の外の四斗檜柿の本杯は古風になり「あんすより

梅が安ひあんじるよ杯は愈古風となれり

似口に似て異なるは語路なり語路は自然と語勢の通ひて夫と聞ゆるを云「九月朔日命はおし鯨は喰だし命は惜し

「お染久松廣ひ様で遠州濱松は廣又一種異なる有「氣がもめの吉祥寺「堪忍信濃の善光寺「有がたい

屋の貞柳さん「そふは左邊堂の不動さん「あつと頂戴鏡立「噓を築地の御門跡「恐入屋の鬼子母神杯なり是を口合の源ともいふべし

川柳點

東都の川柳柳浪華の冠附笠附は其土地に附たる物にて他國の人の眞似るべきもあらぬ業なり川柳のうがちは世人の能しる所なれども一二をいはゞ「拜領の頭巾梶原縫縮め「由解村へ勅使より先山師たち「惣樂佐渡から出るがいつちきゞ「其手代その下女晝はものいはず「その當座晝も簞笥の銃が鳴るなど寔に人情をよくうがちたる物なり今此口調を古しとて廢り近世は「蜻蛉の出臍駿河の富士の山「誰が廣くしたと女房理窟云「關取を女房ばかり小さがり杯變れり時々冠附の流行あつて是も古くなりけん

浪花の笠附も寛政より文化の頃は流行に随ひ月々に句集出たりしが近頃は甚廢りしと見へ句集も出版ならず人口に膾炙する句も盡たりと見へたり

折句

以前はやりし折句は端唄の唱歌に讀込あれば今にも

廢らず「薨の盛りはにくし迎ひ駕^{アサム}折」餘處でとく
 帶ともしらず終て居る^{ヨチク}是らは其頃の折句なり
 浪と云題にて「芥子の花さわらば落^{ノ折}ん下心^{ノ折}」き
 ぬ^ノと云題にて皆嘘の突仕舞なり寒山寺^{ミツカ}
 様に有しものなり口調今時の様に鄙陋に無^{ノ折}へ發句
 かとも心得るもの有り「薨は思案の外の誘ふ水或は
 又「山吹や傾城に子は有ながらと作せる端唄は俳諧
 の發句より出たり「傾城の晝寝ぬ程に思ひ詰と云ひ
 出すはケヒヲの句より出せるとしるべし

もぢり笠

一種もぢり笠と云物有中の詞を上下に讀入てきかす
 なり「御祖師様^{有難}ありがたかりし瓜の皮^{百性はおのが}
 綿^集わたに風すもふ好^蟻あぶり餅こがしや^堅かとなる^{小野}摩耶^{釋迦}
 夫人などなり

尻附跡附

又江戸にては尻取附廻しと云京攝にては跡附と云有
 句の下^上の詞を次の句の上に置事なり^{江戸}「六じやの口
 をのがれたる」たるは道連世は情^{上略}なさけの四郎高綱
 で「つなでかく繩十文字^{下上}」稻荷の鳥居に猿の尻
 のしり^略くと上下で「下の關までおへせ」お關

が弟は長古で「長古^ノあばくにつむりてん^ノ」天
 々天満の裸巫子「みこが戻るか住吉参り参り下向
 足休め」すめの判官盛久は「久松そこにか冷かろた
 かるは船頭の松右衛門」ゑもん繕ひ正座する「するが
 に淺間富士の山^下略などなり

粘頭續尾(山科の跡附)

今浪華稻荷祭禮に御輿太鼓を昇掛聲となるは「近江
 に石山秋の月」月に村雲花に風「風の便りを田舎から
 「唐をか^ノせし淡路島」島の財布に四五十兩「十郎五
 郎は曾我の事^下是ら安永頃^畧に忠臣藏山科の文句のみ
 にて跡附書たる板行を見し事有暗記ながら爰に現わ
 す「扱山科の住所^心所おなじき女どし^星どしをさした
 る大星が「星^{ホシ}がる所は山々の「山とはづせば直に居間
 「今はの本歳眼を開き「ひらき見ればこはいかに「い
 かにも底意は奥庭の「庭に雪つむ奥座敷^{屋敷}「坐敷の案内
 いち^一に「いち^{一口}立聞奥と口^口と口のんで跡を明
 明ていはれぬ謎詞「詞の鹽茶汲むお石「石をむかひ
 に片男波^{小浪}お浪はすぐれて器量人「りよふじん嚴敷師
 直が^{物セリ}師直どふれと下女の淋りんきすなとおつしや

つた「しやつた切たと言はなし」はなしきめでたきその中に「中に泣母泣娘」娘は父の御ほん藏「本藏苦しさ打忘れ」忘れぬ忠義の武士と武士「武士ある女の不義同前」せん石違ふを合點で「がてんで力彌が手にかゝる」かゝる親子の縁深き「ふかき契りの新枕是唐山に粘頭續尾の戲と同じ趣なり

都て此種類甚多くて其時々流行し世に流布せる板行にも遺らず詩歌連俳に心を碎くも右に云句どもに心を盡すも同じ隙を費すなれば其當座にて云捨るはいと惜きものなり此惣名を只雜俳と云是にもそれ／＼の點者有て業とする者少からず然れども其句者はもとより點者の名後世に傳わらずいと本意なし

雜俳の品目、札の立見

爰に雜俳の點者程あやしき業はあるまじ世上の流行を能くしりて昨日はどこに店開きありけふは彼所に喧嘩ありしなど委く知らざれば句者は銘々新奇を吐人のしらぬ珍説を吐て持來るゆへ其流行を知らざれば判者とはなり難し先年盡口合集に札の立見とて四天王寺再建其外開帳の建札橋詰に立たるを往來群集して見居る圖を書り點者飛驒の内匠なりと思ひ取天

王寺再建等を思ひ合せて秀逸とせり句者は鮒のさしみの口合にて案じたる物を點者深く考とりて思わぬ手柄をとれりと云

二字段々

東都に一字附二字段々として今にも流行するいはゞ尻取跡付の類にして藏主との二字あるは前に二字有て藏王と地主權現の心なるべし是を親子と付たり折節泉岳寺に開帳始る處にて時節といふ點者よく聞て秀逸とはなしけり又七夕との二字に借伊と付るは夕霧伊左衛門七を借る狐泪に孕拔とは女を振んで子を孕泪金にて扱ふと聞り又夏中のよせに西行に傾盃と付る是は日は西に傾き盃にて行水すると聞く拔井に秋葉是は東海道荒井を抜て秋葉廻りをする事よく聞たり又點者云山を抜く子葉の句と井の端の秋色の句とも聞けるなど前の二字を的として附る中に誠に流行を盡し和漢の故事を云とすれば思ひもよらぬ食物の名高きを入又高名の藝者の名を出す是を聽聽ぬとて句者より點者をたしなめる事有點者は机を放すやいな東都の市中を駈廻り新奇の雜談珍説を聞歩行となり戲場遊里は森羅萬象の難説早く聞ふる物ゆ

へ點者かならず此兩處に來つて遊ぶと云

鶴助の發句

○文政中に俳諧の師宗月夜庵三津人ミツジンと云有其身膝行イゼリの疾あれども流行をよく知りて御靈の芝居にて中村鶴助當時中村歌右衛門成駒屋露雀の事なり七化九化の所作事をして大入せし頃の句に「田植るや鶴助が事云ひ合ふてと詠しが當時三都の俳優の長となるをよく流行に云當たるとしるべし

物は付

又一種物は附と云有東都にて以前はやりしと云「見へそふで見へぬ物は富士山より駿河町と有り

何に付

又もぢりの一體に奥様のお寢間へいつかそろ／＼と這かけてくる薺の花と云有是浪華では何といふ物といふ物と類せり昔の流行歌に「娘したがる母親までもさせて見たがる縹子の帯「長もあれば短かひもあるはお侍の腰の物は何といふより歌となりたり」「われたもありわれぬのもある物なアに「茶碗屋の店など、云いは謎の類なり

何曾々々

謎々はいと古きよりもてあてぶ物と見へて徒然草などにも見へ近くは文化中東都より謎とき坊主來つて即席に謎を解大に流行し事有其頃人口に膾炙せしは「虎屋饅頭とかけて天王寺「心は五十で十「誰にても抱れる男の子とかけて芳野の花「心はひと見せん坊抔有しも今は掛盡し解盡したりけん絶て佳謎を聞ず

考へ物

考へ物とて紙きれに題と詞を書て配り跡より心を解て錢を集る事はやれり是も一通りの事にては早く心のしれる物から遠掛たるを善とし名高き考をいはば錢五百文にて長尺の木綿一疋大丈夫「是を武者の名一つの考「六せうの半貫爲よし「子守女「是を大名の名三つの考「もり毛利にはあきた「海老藏の心「魚の名三つの考「勢かれ鰈にあひたひ是ら謎々より一變したるなり

古代の謎

往古の何曾々々は今とすこしく異なり「こばたひつくりかへして七月半を「たばこ盆「雀が利を持たながら目を抜れされども子をば羽の下に有を「硯ぼこ「あさ

つてはあたご参りを「たまご是らを上古の謎々と云

字謎

又字謎と云有「三人は日を踏一人は日を戴き日月相並んで袖を貫く是「春日大明神也又「有_レ節不_レ于_レ竹三星繞_二月宮_一」人居_二日下_一」弗_下與_二衆人_一同_二是節_一の竹冠を除けば則即の字也「星の如く三點して下に半月を置ば心といふ字也」日下と書て下に「一」の人と字を置ば是の字也「弗と人と同すれば佛の字也」即心是佛の四字を大覺禪師の字謎の詩也

字謎の發句、犬の足跡

又淫の一字の贅月と風躲になつて相撲かな是らは字謎の發句なるべし

又是に似て異なるは雪鋪滿地雞犬踏成竹葉梅華といへる絶對の句より出して「初雪や犬の足跡梅の花と云句はなれり五元集に雞去畫竹葉犬走生梅華と云聯句によれりと云是らを呼でこそ眞の雜俳とも云べし今時冠附などの鄙俚なる物に混する事なかるべし

前句附

以前流行し前句附は誰も知たる句なれど「切たくも有切度もなしと云題に「盗人をとらへて見れば我子也といふ句を附る」己^ウが^マ使ひに己れが行けり杯も前句附なり是其頃の一體にして俳諧連歌の附句にあらず或人宗祇に云「一つある物三つに見へけり」たぐひなき小袖の襟のほころびてと祇答ふ又「二つ有物四つに見へけり」月と日と入江の水に影さして祇答ふ又五つある物ひとつ見へけり「月にさすそのゆびばかりあらはれてと祇の付られたり其外安倍貞任が衣の袖梶原景季が鞠子川は上の句を詠うち直に下の句を詠は二人にて一首となれり和歌にあらず連歌と云ふにあらず贈答の一首はいはば前句附の原ともいはんか

落首

爰に又作者の名を呼ぬものは落首なり落首とは多くは人の惡口を讀たる物ゆへ句者の名をかゝす譬は我詠出たりとも人傳に聽たるふりにて云又昔は我手跡をかへて幼童の手跡にて書るさまして市中の街に落し置がゆへ是を落首とも言よしそれは天下の政事をなじり公役の私を誹謗せる物ゆへ姓名をしるさぬ

も尤なれどもいはゞ戯場の評判など卑賤の事を落首するには何の遠慮あらん打出して作者の名も書くべきに其事なきは善事は賞じ悪事はいはぬが善と思ふが故に遠慮なるべし近く憶えし一二を出す或大儒の供部屋より失火せし時焼跡へ張たる落首に「大學も孟子譯なきしだらにて珍事中庸論語同斷又賣藥屋の店出しに夜分墨黒に書て貼しと聞しは」「五龍圓ろくしゆの壁で質置て八朱のあひで内は九へまひはらは其商賣敵などの族の詠なるべし

戯場の落首

戯場には毎度ある事にて文政中瑞寛芝翫の兩座最負／＼の落首替り度毎に木戸へ貼し事有り思ひ出る儘爰に記す角瑞寛達大木戸始金花山と云看板を出して改る中出し物は尻から兀る金花山人がたらいで達の大木戸中芝翫二谷熊谷熊谷が夏の道風に當られてあたま丸め角瑞寛小野道風て京へ御隠居中瑞寛薄雪角瑞寛大膳仙臺錢角があるゆへ通用せん中瑞寛熊坂長範に四翫まけたる歌右衛門中の餘りを平井權八芝翫伊賀越長範に四翫まけたる歌右衛門界宿院堀江出され非人になつて角にうろ／＼中瑞寛小倉色紙角色紙角

はまけ／＼など最負／＼の争ひ喧かりしも三十年の昔となりて道頓堀の繁昌も其頃果をとりこせしにやあらん近世は此落首立べき兩座の賑ひは稀になりけり

所俳諧

前に云冠附を始時々はやり物の惣名を江南にては所俳諧と云て他國の耳には通せぬ心なり是に各高手有て點を定る予幼き頃しれた物盡しと云を聞し事有「井戸堀は段々天に遠くなる此餘に一二句もきゝたれど外は忘れたり又角の芝居の横手西側に地藏尊有て其實前に奉納の額に書日合書有しを思ひ出す詞の題菅原詞にて凡廿句計り有て句者の名もしるしありしが其頃毎年失火して地藏尊さへ所がへせしか今は見へず此額の中におかしと思ふは今に忘れず書は勘平を母財布にて打擲の圖に「勘平死ぬのじや母氣強のじや何で死ぬのじや權羽と記せり是掃問の第一其餘は誰々の住家と思ひ出しぬれば今は又後の世の昔となるべしとなつかしき物也

金毘羅樽

其頃又一種の金毘羅樽と云ものはやりしこは東都の柳樽の口調にて淨瑠璃歌舞妓の穴搜を云也忠臣藏と夏祭とは其頃番附に板行して今稀に遺る子が著述の傳奇作書殘編に出す見べし都て樂屋内にて月並に編集して外題二つ宛三ヶ年ばかりに數十題集り一小冊となり亡父より珍藏せしが或友に貸たるを友失ふたり惜めども甲斐なし其内おかしきと思ふを爰に出す

ひらがな盛衰記「義盛は其翌出陣病氣する」景高は吞ぬ樂禮たんとする「駒若は樋口が跡の假名前、一谷嫩軍記」江南の梅より先に山櫻「敦盛の馬いつの間か逸て去ぬ、義經千本櫻」梶原は歌人と聞くにはめ句する「靜をば萬歳の娘かと人は云ひ、雙蝶々」長吉は異見の後もやはりのら「時折はなまけでお早呵らるゝ、伊賀越乗掛合羽」其後は雪隠に苦を病む武助「和田の三語らにや巳之助拍子ぬけ、菅原」其頃は廿五日に休みなし「口蜘蛛で時平の大臣還御也」龍田の前焦付したり玉子酒など當狂言は大約言盡し果は三國志を題とし「孔明を鼻紙代で先抱へ」孔明周論一文摺かと手を開き「戯れに關羽胡弓を髭で摺」赤壁に今度解船町が出来「黃巾の賊梃花の直が上りなど有しが此中に

樂屋の通言あまた有て病氣する鼻紙代はめ句する坏は他所の人に通せず樂屋の穴搜にして所俳諧最第一なるもの也

書に似たる文字

昔より何人の作り始しともしれず文字にて自然と其容形になる物有筆鼎筆白などを始古篆の文字に鳳龍の容に書有り多く兒童の弄にのみなれり數種ありて文字と畫を交へたるも有文字計りも有畫計りも有先文字には圓横井傳内口田中十内是らは先に云字謎の類なり



是を三山通る
兒のさかづき

善心起
佛止悟

是を
如此

心を止一心に悟れば佛心に同是は野馬臺詩に類して和歌の回文輪回體ともいふべし錢の容を書中央の孔を口と見て吾唯足知といへるも共に浮屠氏の書る也

字にて畫を書く

「梅と云字の刻たる所へ梅の花を四五輪書人丸と文字にて書人丸の肖像と見へ」山水天狗のへ「のしこし山」花と云字に山岡頭巾を着せ花盗人とす「へまむし入道は古き物にや山の井に」繪に似たる顔や

夜半の月雛や立圃の句有り正保の頃也又葉室大納言の自書自賛として「世の中を樂にへまむしよ入道あればある儘なけりや其ぶんへ」
 へば後世のものとはいわれじ

古代の看板

糊屋の看板に丸き曲物を張りて有と印たるはりが細ひといふ謎なるよし煙草屋の看板にも予幼き頃はと印たる物そこ爰に有しが今は絶て見ずたばこ假名一字に一畫をへて三字に通わすかなにはひなど一字を直に二字に渡る書法あり草行の文字にも此類多く有事也

書 噺

文化の始山東京傳奇妙圖繪と云小冊を出す是には人丸の文字にて人丸の容を書梅の文字のはねたる所枝となり梅花をあしらひマシ入道などを始に書て禿とかなにて書て禿の容としおいらんとかなにて傾城の容を書り其後文化六七十年頃亡父書噺と云事始たり一二をいはば鴻池の主其頃伴名鷺江と云がかやうな鬚にて來り向ふより辰巳屋の主「かやうな鬚して行合喧嘩となる真中へ加島屋の主「かやうな鬚

にて分入挨拶に及び丸ふと云乍ら〇と書そへ元の如くに納つた」是を書噺の起原として社連を組銘々新奇の書噺を巧出し月に兩三度の會有て書噺當時の梅と題して三編まで出版せり此中に朝早く内を出て本海道をすつと住吉へ參つたが歸りは阿倍野街道を戻つたら云乍書て足がふといた所がこふ障子がしまつて明す庭にはこふいふ塀は有又こちらから忍び込ふとすればこふしまつて有とふこふこふと書き終る是ら一時の戯れとは云ながらいとおかしき遊戲ならずや

宛字讀

假名にてとと書てへちまと讀すちへちへとちとの間也是字謎の類也中興角紙取の名にいと一字書てかな頭京と書て假名どめ九十六と書て一字九十六讀すよし上總の九十九里村の文字を白里村と書一を足せば百となるゆへ白を九十九と讀すよし皆字謎なり近江國小六月村は子育村の書損を改めず書來るよし

鈍 畫

字直しとは多く片假名の一字を題として是に書をへて畫となすの遊戲なり又一種鈍畫と呼以前は燥頭巾（イロイロ）柱の向ふに箒を釣（ツル）天狗の廁（トイ）這入し杯にて有しを其後段々巧となりぬ隨分解し難きを畫は點者はそれをよく見出す事となりぬ醉吸の三聖（サカサ）是を淨藏貴所なりと上座に撰むなどよくうがちたる物なり祖中村慶子（俳名富十郎）釣鐘岬の嫉妬娘にて書たる（イロイロ）い十（イロ）藤（フヂ）は字直し畫直しに通ひて字謎の一種異なるべし

落 噺

世に落し咄といへる事は古きより有と見へ曾呂利新左衛門井の上新左衛門など頓作の咄有て多くは秀句謎々の類にて狂言記又醒睡笑などより出る寛文延寶の頃の落しはなしの冊子兩三部も見たる事有近くは天明頃の板行に三都の落し話の佳なる物を集めて舊觀雜話と題して序は坂東岩子（俳名道外坂東岩五郎）書て三都の咄を三冊にしたる物有其後追々新作出來て東都にて櫻川慈悲成無樂可樂が三題咄とて即席にて來客より得たる題の趣をはなす浪華にては松田彌七辻講釋の如

く市中の軒にて高き臺の上に乘前に臺を置いて拍子木を鳴らして聽聞の願をはづさせ桂文治は別に咄小屋を建て日々新奇を咄出して一派を立たり後に道具鳴物を入此道の名譽と賞す文治作の咄を冊子とし數種出版せり中にも臍の宿替名高し別に薄物の經本に著せし道具太平記蚤虱人間體道中記大開好色合戰などを出せり此好色合戰は甚鄙陋也といへども以前聞し事有て其文のおかしき所を思ひ出て爰に書つく（好色合戰の一章故ありて削る）

講 釋

講釋師といへば古くは志道軒の辻講釋よく人口に膾炙せり京攝には吉田一方名高く近くは吉田天山老人也是を講釋の師とも云べし其後三都に誰彼と云もあれど天山に及ぶべからず今や豆藏講釋とて戲場の狂言身振聲色に類して咄家に異ならず諸藝とも昔より衰へるは流弊の習ひ是非なし

浮世物まね

又輕口物真似とて姓もなき馬鹿口をたゝき頤をはづさせ戲場俳優の物真似をするを東都にて豆藏聲色と云浪華にて忠七の身ぶり物まねと云豆藏忠七は小屋

主座元の名也寛政文化中に吾妻清七と云者身振物ま

ねに妙を得て野郎帽子を當て芳澤いろは俳名江帽子を

脱で淺尾爲十郎俳名奥山などをまねるに其者爰に顯れ出

しかと怪しむばかりよく似たり昔唐土函谷關にて孟

嘗君の客鶏の聲をつかひ關の戸を開きしといへば今

浮世物まねとて牛馬鶏犬諸鳥のまねをする事と漢共

に古き事と思わる

玉川三吾

亦清七と同じ頃三絃胡弓の曲キョクに妙を得たる玉川三

吾と云官人は竹の皮にて胡弓を摺一挺の三味線にて

二挺三挺の連絃ときかせ放屁の音などをひくに妙を

得たり此者歿して後かゝる曲を聞ず

大人遊

文化中出版の草紙に大人遊と題して松好齋の畫にて

座敷の遊戯のみ舉し書有「棒捻」枕引「正直聖天様ど

こらがよかる」疊の縁踏んだり縁ふみすなどを始「白

鬚明神御鬚の掃除「蛇の尾とろ或は紙のこよりにて

目鼻口を拵へめんない術をさせて眉毛耳などとして一

つゝに渡す爰と推量にて



か様に置を是とす

る戯也

幼童の遊戯

多くは鳴物停止の折の慰みにして遊戯數種有浪華に

て幼童のつらまへごくらくと云を東都にて鬼ごつこと

云浪華の白眼ごくらは江戸にてにらめくらくと云ふ浪

華にて座敷遊戯に宇治は茶所と云は人数に合せ椀の

かさ或は小皿等の中へ酒茶菓子煙草など座中にある

物を書て中に一枚書ぬを入是に當る物は我思ふ勝手

に遊ぶ休の印也各前にふせて扱三絃に合せ宇治は茶

所茶は宴縁カ所娘やりたアヤ智ほしやと諷ひ乍ら

座中車座に成つて廻して各前に廻りし器をあける酒

の字に當りしは吞煙草に當りしは吞又追々に右の通

廻す事也

鳥指

鳥さしと云遊戯よく似たり酒席にて骨牌の札に殿さ

ま用人鳥指と三枚の外は鶴雁鴨雉子など鳥盡しの繪

札人数にあわせ裏むけてよく札を切配る也殿の札に

當りたる人殿の札を出して用人と呼用人札持し者前

へ出して何の御用と問ふ殿けふは鳥をとらして遊ぶ

と思ふ鳥さしを呼べ用人鳥さしと呼鳥指の札の者ハ

ツと答て札を向ふへ出す用人鳥さしに殿の御意をの

べ殿の好の鳥を云付る鳥指雉子とか鶴とか仰の物を
其座中に持居る者をさすさし違る時は罰酒一盃吞又
外の者に云當らぬ時は又一盃吞三盃吞ても得あてぬ
時は改て札蒔直す也廊中居續などにはかゝる遊戯な
ど仕盡して遅日を暮すをいと興あり

俄茶番

浪華の俄と云遊戯は原謠曲の狂言より一變したる物
と思わる東都には茶番と云て俄に相似たれ共又異也
口上茶番は何にまれ我當りし題に合せ地口口合にて
落す茶番狂言と云は京攝の俄に落しのなきを云いわ
ば豆藏めきて素人狂言をする也上方の如く流し俄の
類を江戸吉原の俄とは云也京攝の俄にも數種有て文
化中には袖岡繁辨連湯桶草履吉など老練の輩有て夏
祭の頃は二人三人宛の仕組俄有て祭禮の日には所望
に任せ店先にて仕又座敷へも往てせしもの也素人の
俄は多く流し俄とて異なる姿して物賣の聲又は流行
唄の口合もちり等にて落せしもの也其頃は五十才以
上の者色黒く或は老人大男の随分色氣のなき人を俄
男など賞たるもの也近來村上淀川本虎などいへる老
練の輩新作の俄をなせしより連を結び俄師と呼びし

より素人俄黑人俄と二流にわがち今や三喜新蝶南
玉^{ギョウ}などほとんど歌舞妓役者の心となり給金いか程
と定め芝居の小屋にて道具鳴物を入場棧敷にて見す
る事とはなりぬ是暫間牽頭とおなじく忠七豆藏の類
とはなりけり嗚呼浪華の名物も廢りたり文化中に俄
選といへる雙紙二編有て天保中それに倣つて俄天狗
と云書も出版に及べり

拳

拳は原長崎へ來泊人のもて來し物にや此道に達人多
く文化中に浪華の義浪名高^{コシヤ}松好齋畫を交て拳會圖
繪二冊を著す拳會には士俵を餉り手に拳繩をはめ角
觔に倣ひ名乗りをあげ五人拾ひ十人ひらひ杯云有虎
拳孤拳虫拳など出來れば其後拳のかゝりに種々の所
作をし打や囃せや太鼓に鼓に大鼓ヒヤリテンノヽチ
リンカノヽ^{コロリン}大名公家お上人に山伏はヽち
ノヽ座頭の坊屋根屋に大工に疊差船頭馬方四つ手駕
頼ませよノヽそこでセイ跡狐拳になる也

所作拳

又菊々猴々豆々と云拳も有近頃東都にてはやりしは
ジャン拳也酒は拳酒色品^{シヤン}は蛙^{ヒト}とひよこ蛇ぬらノヽ

ジャンジャカジャンカ 婆様に和藤内が呵られて虎はハッ／＼
 ナめくでサア 來なせへ跡は狐拳也是より色々の趣
 向をつけといは三國拳とて天照大神孔子釋迦有たれ
 どはやらす予此上は樽次底深が酒戰の時の盃を思ひ
 出蜂龍蟹の拳より趣向あるまじくと思ふ蜂はさす龍
 は吞蟹は肴を挟むと是に甲乙を附たらばおかしから
 ん

童謠ふれ／＼小雪

童謠俗謳は古く傳ふる物なれば字音の轉ずる事多く
 言誤る事多し徒然艸に鳥羽の院幼くおわしませし時
 雪のふる日仰られしふれ／＼こゆきたんばのこゆき
 と云は米の粉をふるふに似たれば粉雪を云たんばと
 はたまれ粉雪かきや木の股にとうたふを聞語れるよ
 し

十夜童謠

俗謳と云は京師に例年十月六日より十五日迄十夜と
 て淨土宗の寺に法會有洛中町々の子供鉦を叩き夜毎
 に門々へ來て米を乞ふて曰なむあみだ／＼おうづる
 てんまの人あみだ地獄は遠からず毎年よねんもほか
 になししいちの盃劔の山おうさてこうさて其時涙の暮

六つ觀音勢至は蓮のれんげに打乗給ひなまいだと謳
 ふを何か譯もなき事と聞居しが南無阿彌陀と申する
 間の人は彌陀地獄は遠からず愛念餘念は外にもなし
 道も嶮岨劔の山追立々々其時涙に暮六つ觀音勢至は
 跏趺の蓮華に打乗給へと云べきを兒童の言誤り也と
 佛足を組て端座するを跏趺といふとぞ俗に藏六かく
 と云事也

橋の下の菖蒲

鎌倉賴朝時代に俗間の謠歌也ときけるは橋の下の菖
 蒲は折どもおられず刈ども刈られず伊藤殿土肥殿土
 肥が娘梶原源八助殿太郎殿是蒲の御曹子の御連枝な
 れど弱きにも強にも何の用に立給はぬを菖蒲の折ど
 もおられずと云伊藤殿より下は大名權柄の人にても
 てあつかひしと云心也とぞ予幼年の頃浪華にも此童
 謠を専ら諷ひし事有其時の文に木杭隠し九年母橋の
 下の菖蒲刈ども刈れぬたい殿同鯛の虫は輕業味噌ち
 つくり酒ちつくり吞でもお腹はたちやぬなやと云し
 が何の事を云しにやと思へば鎌倉時代の童謠の遺
 し也

地藏の勸化

國々にての童謡いと多きもの也其内に國々の説方言等言誤りて愈他國のものには解すべからず京攝と東都には其物は異にしてやゝ似たることまゝ有浪華に七月廿四日には子供持遊びの地藏尊と鉦を土にて製したるを丸盆にのせ地藏の勸化米ちとたんせと近隣の門々にたち米を乞ふ東都にて二月初午に土細工の狐を小さき書馬にのせ稻荷様に十二銅をおあげと子供口々に云て門々に立賽錢をとらす時には珍重と云とらせぬ内には貧乏やアイと高聲に云て歸る春秋と時候はかわれど大約相同じ

木遣音頭

音頭掛聲木遣りの類も種々ある物也上方にて物を運ぶ掛聲にゑいさやちよふさと云京建仁寺の榮西長老鴨川より今の陀羅尼の名鐘を寺中へ運ぶ時榮西や長主と云しより發る又京の大佛造營の時大石を運ぶに勢州路より大津迄引來る折の音頭に松坂越へたやつさと云しより遣ると云船歌馬士歌小室節の類いち／＼數ふるに際限なかるべし

遠國の唱歌

中にも一種おかしきは浪華の七夕より八朔迄童女の

一連に並びておんぐくといへる物を諷ひ市中を歩行いつの頃より始まりしと云事を不知是童謡に類して歌數種有一二をいわば遠國アングラなは、なは、や遠國なさヨイ／＼船は出て行帆かけて走る茶屋の娘は出て招くハリヤ／＼船は出て行帆かけて走る茶屋の娘は出て招くリヤ／＼船は出て行帆かけて走る茶屋の娘は出て招くもアリヤ／＼サア／＼よいヤサ杯思へば音頭より出たる童謡なるべし一置てまわりやコチャ市立ぬ天満なりやこそ市立まする二置てまわりやコチャ庭はかぬ丁稚なりやこそ庭掃まする三置てまわりやコチャ三味彈ぬ藝子なりやこそ三味ひきまする四置てまわりやコチャ鍬よりぬとしよりなりやこそ鍬よりまする五置てまわりやコチャ碁はうたぬ能衆なりやこそ碁を打まする六置て廻りやコチャ船はおさぬ船頭なりやこそ船をおしまする七置て廻りやこちや質置ぬ貧乏なりやこそ質置きまする八置てまわりやコチャ鉦わらぬ龜相なりやこそ鉦破まする下さあてさて／＼扱横堀の饅飴屋の子が心中をしたともふし母様男は誰じや男若ひ者米屋の手代下扱も艶しや螢の虫は草の小影に身を焦すハツヤリヤあさよひやさなど此類數種有

中にも京師は又是と同じふして異なるは男子のみにて竹螺を吹拍子木を首にかけうかその面大きな丸面をあたまりりかむ大勢謠ひ連歩行事なり其文句にも數種有益の十四日に廿日鼠へさへて元服させて髪結て牡丹餅賣にやつたれば牡丹もちや賣ずと晝寢して猫にとられてひんよいよほ又昆布屋の唄が一枚紙惜んで昆布で開ふいてひりつくや／＼など謠ふ又浪華にて童謠にお月様いくつ十三一つそりやまだ若ひこんど京へ登つてと謠ふを東都にてお月様いくつ十三七つと云何れが是なりや不知

鞠のかけ聲

東都にて羽根突折一子に二子三わたし嫁子いつやの武藏七重の薬師九つ十を浪花にては一や二や三つに四つやと云手鞠を突にヒトころ二ころ三ころ四ころ五ころ六ころ七ころ八ころ九ころ十ころ十で豆腐屋のお内儀が三つ子を産しやつて一人の子は本綿屋へやつてモメン／＼／＼ヨまひとりの子は茶屋へやつて茶／＼／＼ヨまひとりの子は紙屋へやつて紙半帖もろて爺御に半枚母御に半枚跡に半枚遺つていろはと書て左義長へあげてとんだの道で喧嘩が有てわけ

／＼／＼ヨと謠ひながら手鞠をつくなり又ハリヤータシ反ハリヤ二反と突有是は蹴鞠のヤリアの掛聲より出るものならん

手鞠唄

十二月手鞠唄の唱歌は鄙陋なるものなれどこは天和貞享の頃浪華新町の廓中繁昌の節太夫天神に行儀驍方を教ふる師の作せしものとて紋日名寄にて一ケ年の年中行事を集めしもの也百七十年の今に廢らず行わるゝもの也三絃に弦唄ふも正月より四五月迄にすへは唄ふもの稀也じつと手に手を七五三の内とて嗚呼よい彌生は指で惡晒落憎とフツリもゝの節句卯月々々も後にや廣く釋迦も御誕生道鏡増りの幟棹立通を失ふ萩月又とりかゝる二度めの彼岸などよく此長々しき文句を色文句によせての作は手際なる物なり

十二月萬歳

京に京土産とも十二月萬歳とも云物有是は色文句ならず唯年行事のみにて初春の壽祝ふ松飾表にさら／＼新袴モウ大黒屋徳右衛門年始の御禮忝ひ禮者の外はストントン／＼手鞠や拍子と諷ひ出しちよど三

百六十豆の數皆禮者の事こそ目出たれと終る迄いと興ある物なり

置錢一鉢(大盡舞)

抑廓の始りはと諷ひ出す東都の大盡舞は近來流布隨筆に委しければいわず此三つの歌は三都の風儀をしるに足るおもしろき物也此餘時々流行のはやり歌も佳作の物は後々迄遺るあれども多くは其節うたふのみにて廢る物也是も其時々の人情を述はやり詞有て幼稚の時はやりし歌などフト歌へば昔慕しき物も有ておかしき物也流行詞は其當座のみにして後々は何の事を云しにや解せぬ物多し予幼年の頃より段々變化せしは置錢といふ事也誰々を相思ふと云男女の中を置錢と云しが多くは幼童の辭にて是をいわるゝと赤面したる物なりしを段々人氣賢しく相なりて今時十歳未滿の小童たりとも恥るけしきなくなりたり置錢は幼童の遊戲に六度穴打などに錢をもつて錢を打時我はうたずと錢を置人^{オキ}に打せて勝敗を論するの詞也又沖に漂船のごとく戀の心の切なるをかけて沖船ならんとも云り

鑄懸駱駝

前老夫婦土瓶燒鍋の鑄懸とて市中を歩行職人有しを見て男女連立歩行を土瓶の鑄懸と異名を附天竺より渡りし獸牝牡の駱駝を見しより男女の連立を駱駝と呼變たり天保年間江南の妓家にて我思ふ戀路の話を云時は聽貨受貨を取る金一鉢の定にて是のたまりし時芝居行或は食悦などにす是を市中へ移つて男女の色を一鉢ノゝと異名せり

おつこち

又ツコチとも云東都の方言に都ての物を落たる事をおつこちたと云是口説落した又口説落されたと古くいへる詞にて出家などの墮落せしを坊主落と云嵯峨野の女郎花に遍生の我落にきと人に語るな是落たと云詞の往昔よりとなへ來る證とすべき物也あの女には落たあの男には落たと云心よりツコチと變名せり遠國他邦の人の耳にはさぞ解すべからず

胡麻摺

上手を云とは口上手に云事にして油を云ともいへり東都にてはヲベツカを云と云近來是さへ胡麻すると云此名義委敷予が綺語文章に出たれば見べし流行詞はいと多くして中ノ際限なかるべし昔の詞にいふ

てもおくれな小夜嵐何ぞいふてか幽に聞へる中興は
やりしはそんならそふ猫にやん^{チヤカ}よふいわれた
事じや何ぞと至つて近きは抄子じや熱^{アツ}くなどいか
なる事より言出しか解らず此道の識者に問ふべし

四谷鳶阿波座鴉

東都の俗四谷鳶と云浪華の阿波座鴉と云能對句なる
べし奴僕の藤卷柄に手をかけ白眼いる空に初鰹を搔
たる鳶の圖有是四ッ谷鳶にして阿波座鴉は錢もゝた
ずと新町へうせて買^{／＼}と啼との俗諺より發るぞ
めきひやかしの異名なるべし松本五粒^{俳優祖松本幸四郎}幡隨
院長兵衛のせりふに藪鳶は京育阿波座鴉は難波潟吉
原雀を羽がひに附と連ね詞に云たるは何の心もなく
三都の枕辭に冠したるならめ大聲は俚耳に入らず論
高ければ俗に通せずと聖賢の辭のむづかしきも詩歌
連俳の雅言の通じがたきも一度戲場の俳優のせりふ
にいわせ淨瑠璃端唄の文句に入て耳に觸るゝ時はい
つか聞馴言馴て何の事とも辨へずかたこと交りにも
云もの也君子危うきに近よらず其罪を憎んで其人を
憎まず前車のくつがへるを見て後車のいましめを説
或は哀別離苦の會者定離の唱ふ事を思へば戲場も道

をしらせるの近徑也

天王囃子天滿巫子

爰に賤しき業なるものなれど古書^{浮世也}に遺りて今姿
を見ぬものは東都に天狗の面を頭に戴き扇にて小さ
き板行をちらし居る圖有是天王様は囃すがお好と云
物貰ひにて浪華に裸身に茜木綿の前垂をして女のぼ
て鬘を着^{テン}天滿のお神樂堂からお巫子が参りま
したとて物貰ひの有しも卅年此方見へすなりぬ近來
或好者家古書の懸想文の姿に出立正月元旦の朝夜深
きより出てけそう文^{／＼}と賣步行しが買者は一人も
なく古雅なる見付ぬ容に犬にはへつかれ五疋七疋に
取まかれて困じ果て逃歸ると聞しがさも有べし奇は
好むべからず異なる容はなすべからず

いろは譬

古き諺の中より撰出し幼童弄の骨牌に書を摺いろは
譬と云物有是に數言有ていわば石の上にも三年否々
三盃また三盃鰯の頭も信心がら石原を樂鑑一寸先は
闇の夜などあれば一組^{／＼}に違ふたる有東都の譬又
異也針の穴から天覗くを江戸にては霞のすいより
天象を見る 惣領甚六^{大前髪ゆびなくはへし畫是江戸道外役者なり浪華にて云十五の誕くり}京

の夢大坂の夢など云譬也幼童の弄にさへ出す程の事なれば常々譬にも云事也

弄の名を異にす

言語は勿論此餘幼童の弄にも呼名の變りし有上にてせし貝と云貝を江戸では金砂子^{キンシャゴ}上にてむくろじ取と云を掠取^{カドリ}小手鞠七つを取るを上にて勘彌手鞠^{カンミテマリ}もと江勘彌所作にて江戸にては手玉取^{テマリトリ}縮緬の小裂にて二寸計の袋と^{ユミヤギツツ}りしゆへ也江戸にては羽根を突を二人にて突をおよばね又やりはご突ばねと云纔に幼童の弄物にさへ名の異なる事しるべし

寺子屋庵室

東都にて手跡の師へ幼童の手習に行始いろはを習ふはかわらず跡かな文章江戸往來か^{キナ}ねめと云は遙に後に習わす婦童には都路として江戸より京迄五十三次の名所々々を書し者を學ばす京攝にての京名所を習わすにかへたり上方手習の師匠男子には九々の割聲或は小謠女子には百人一首女大學等をよませども東都にはよませず男女とも幼童を育てるには甚やりばなしなる所なり

附て云和州奈良にて手習の師の家をあじちと云愚考

にあじちは是庵室の略語にて三都にて寺屋お寺と云も同じ唱へなるべし高野の麓學文路も是に似たる名義ならん歌

投壺投扇興

漢土より渡りし投壺といへる弄



此圖の如き

の壺へ箸の如の竹をほふり附壺の内へ立つ上に乗るに各名有て高手下手の遊戲有我朝の投扇興は是より出たるなるべし文化中大に流行して今稀に遺る源氏の卷々の名に准らへ五十四帖の香の圖に思ひよりしにや風流なる遊び也予以前ふと是を五十三次に轉じて譬は



直に扇のもたれし時は原とか吉原とか富士の容と見夢の浮橋は瀬田か矢矧と見立て草津とか岡崎と呼扇のそれて山越殘念といふべきを亡命殘念といはんと戯れし事有可笑

茶佳否記餞會

大内の鷄合は鬪鷄鬪草は草合菖蒲合菊合とてやん事なき方の翫弄にて草簞筒といへるに入て鬪す事也鬪茶は近來煎茶の流行せし折専ら弄て鬪香の式に倣ひ花月の式茶佳否記などせしが果は新奇を巧てき茶を止め土俵の内へ茶盆を仕こみ天地人と三枚の札に

て行司雙方へ茶をつぎ唐團（トウダン）を上て表徳（ヒョウトク）を呼び茶組は正面の壁に張有左右の人は願に揮を耳より懸吞（ケンツウ）より早く三枚の札の内是と思ふを出す行司勝の方へ團を上負の方は跡へひく勝者は五人びらい十人びらいにも及ぶ是も古しとて餒嘗（ガウショウ）會と云事を思ひ付たりいわば虎屋駿河屋東雲堂（トウウンドウ）後丹（ゴトニ）錢屋（ゼンヤ）など菓子に名高き家の餒を求め懸目何程に水何程と定煮て吸物椀に盛嘗（ショウ）分て一二三四の式に當る當日の床には菊咲や露を家内の嘗る程と書し月居の軸物を懸杯して戯れしが長くしては飽易く一兩度に止たりきあゝ痴なるかな腹のみ張ていと苦しき戯れなりかし

圍碁將碁

碁碁書畫は貴人の翫弄なれば卑賤の者のすべきにあらねど中にも碁は本因坊碁は大橋とて家元有て賤しき者を此業に達する時段を免され姓名も記さるものも摩迦羅大々將碁大將碁は名のみ聞ていまださしたるを見ず中將碁すらさす人少なく唯世上にもてはやすは小將碁也是を幼童にもたせば指方いくらも有て何の書にも遺らず十六武藏は別に盤あれども先王詰（サキノウヂ）はさみ將碁駒の山崩（ヤマクズレ）都詰（トウヂ）三挺並（サンテイナリ）三枚飛廻り將碁

は道中雙六に倣ひし物か三挺の駒をふつて賽にかへたり（碁）立は十（碁）横は五（碁）逆立は廿表は一裏は無十二詰（ツツ）とは十二枚の駒にて王を圍ひ外に餘りし駒は採つて圍ひの内に打也駒讀五挺並など種々の手段有されども勝負にかゝれば深くは枊蒲（カキヤウ）難打に似かゝりて野鄙なるべし

祭將碁

俗に浪華には祭將碁とてさせる高手にあらぬどし此勝敗に食事忘れ少しく勝の手あらわるゝ時は高聲に鼻唄一口淨璃瑠など出るを最上の樂みなるべし是に限り地口合（ヂクチアヒ）云ありお手はと問れ銀桂町の夜店角銀一步銀桂船子に力を合せ中飛（ナカビ）のうめ仇なはし歩のちらし書おも白し頭も白し尾長鳥また待の綱かなどゝ現になつて云もの也此道を好ぬ人の口には親の死目にも得あうまひと譏らるも此道の失なるべし

むべ山骨牌

歌輕多は續松と云て貝覆（イフ）令（サマ）とおなじく古く上々女龍方の弄物也むべ山骨牌を見立繪に書たるは何人の作かしらねども中々卑俗のせし物にては非ざるべし忍ぶる事のよはりもぞするの書に石川五右衛門忍

術の圖を書人こそしらねかわくまもなしに下女くる
巻にて井の水を汲圖われても末にあわんとぞ思ふお
千代半兵衛の中に八百屋の婆立いる圖などそれく
俗に近く婦女子の目に附易き様に書き古き骨牌に詠
曲の次第をフシ付にて書畫には仕手の姿を畫し有古
きはやり歌の文句を文字に書合せて畫し物も見たる
事有唐山の水滸傳百八人を畫し物草にて製せし札三
枚計煙草入に製せしを先年長崎の俳友より見せし事
有珍敷物也

佛像雙六

雙六も古き弄物にして今廢りたりとはいへど時代の
蒔繪したる盤所々にあるを見ても以前流行せし事思
ふべし公卿補任官位昇進雙六有佛像地獄極樂雙六有
共に廻り飛と混じたる有此佛像雙六の中に餓鬼道の
苦しみを書て血の池劍の山を廻りといは極樂淨土に
入て蓮臺に乗佛となるを上りとす此中に泊りといふ
べき所に永沈とて爰に當れば長く沈むとの意にて止
りはたの者は賽をふつて極樂へ行ど永沈は其儘落る
事を云未來永々奈落に沈むと云心にて此雙六に限り
永沈と云詞有りて佛書經文に見へぬ語なるを淨瑠璃

の文句にわしやよふちに逆ふたわいのとどふと臥
す軍法富士見西行江口の里寫畫の愁などは雙六の詞なるを佛語と思ひ
誤る物也

道中雙六

今幼童のもてあそぶは東海道五十三驛或は都名所な
ど也廻り雙六の中に飛トビ所有て東海道には大井川川留
とて一順廻る内見合有京名所には島原出口の柳桶伏
有泊りと同じ道中雙六は享保年間伊達染手綱近松門左衛門
作戀女房の原女本自然生三吉雙六をする條あればいと古きよ
りの弄也としるべし

早口そゝり

世に早口そゝりと云は洒落淨瑠璃の新關シヅメにて小田原
外郎賣の長ナガとせし文を早口に辯じる事也端唄に
言興寺とて有は此早口そゝりを集し物也先一二をい
わば天王寺の塔々念佛十申トウたら佛になるといな是を
息なしに十遍いふ也客一人に柿一つ客二人に柿二つ
是を又息なしに客十人に柿十を迄云法性寺の入道前
の關白太政大臣さん法性寺の入道前の關白太政大臣
めといふとお腹を立なさるよつて今から法性寺の入
道前の關白太政大臣さんと申ませふなア法性寺の入

道前の關白太政大臣さんと是も息繼ずに云事也孫兵衛後家くく是を合せて三孫兵衛後家ひつへき長へき干はじかみなた豆摘蓼粒山椒野撫子野石竹菊桐くく三菊桐是を合せて六菊桐向ふの長押の長薙刀は誰が長押の長薙刀ぞ兵部が屏風を刑部にかわけて刑部が持すは刑部が坊主の屏風にしよ殿様の長袴若殿様の長袴武具馬具三武具馬具是を合せて六武具馬具のら如來くく三のら如來六のら如來是を合せて十二野等如來まだそれを合せて廿四のら如來蛙ひよこくく三ひよこくく合せてひよこくく六ひよこくく向ふの溝から鰍ちよつとによりりと書續れば實に際限なかるべしハテたわいもない

竹田機關

機關は竹田近江の戲場にて例年春毎に見せ阿蘭陀人來朝の時は見物させる事なり其頃の機關と云は唐兒の人形に筆をもたせ氈の上に紙を置ば口上に隨ひ福壽などの文字を書或は大きな力士の裸木偶に階子差の曲持をさす又は鼓を改見せて箱に入宙に真紅の紐にて釣口上にまかせ天鼓の謠に合せ箱の中にて打などにて有し此機關の前藝として子供の役者に狂言

をさせる是を竹田狂言とは呼たる也

大道具

卅年此かた機關一變して小さき木偶イモ載たる臺有少し間を置いて岩山に樹木など飾りたる臺を居て淨瑠璃又は唄にあはせ木偶の働き有て樹木折て橋となる木偶此上を傳ひて岩臺に移り放れ業を見せる事を専らとし其臺碎て檀尼鉢の類ひ又は神社の飭り附となる是らを前藝として次は嚴島的回廊又は高野山の名所或は都の名所廻りとか號けて糶上せり下大道具を見せしも今は難波新地横堀新築地等にて見世物小家をかけ見する事にはなりけり

輕業放下師

輕業は多く宮寺の境内にて放下師の輩往來に錢を乞ひ仕たる物也獨樂廻しなども手妻にても今は小屋を建高小屋物とて歌舞妓所作事等に似せて見世物の第一とはなれり子が幼年の頃は見世物といへは駝鳥猿猴猿人魚の干物海龜杯を云たりしが近世駱駝の後は見世物の名は細工物に混せり

細工見世物

文政の始天王寺外にて一田庄七籠細工にて涅槃像を

イデヤ

見世物とせしより羽二重細工具細工瀬戸物細工など大きな細工ものを見せしより果は梅細工菊細工と四季の草木を細工ものになしけり予が幼年の頃は難波の躑躅野田の藤浦江の杜若三番の萩菊は高津の綿鐵天満の大源など四時の花を相觀せしも今は見世物に位を奪われて風流日々に衰へたり

猿狂言、馬藝、力持

以前馬藝とて野村柳吉女の馬橘宮丸等馬に乗て道成寺松風此兵衛などの所作を難波新地夕納涼にて見せたるが是も今は廢りて近世樋口矢多丸にて一變したり

猿の狂言女と熊の角力など古風となり葛籠ツブラ拔ヌケを始め隣の小屋に壺拔釜拔の看板を出泥と清水の吹分を見すれば棒吞刀吞を始める齒ふしと號て楊枝の先に數十貫の重石を付て嚙上れば眼力とて兩眼をむき出して十貫の錢をかける山雀に歌骨牌をとらせる様にはなりたり

木村與五郎土橋久太郎とて數百貫の重石を曲持して米の俵を足に履腹持中ためとて種々の曲持して關角觥にまけず威を張りしもいつの間にか廢り田舎の八

幡天王の社前に貫目を彫たる石のみ遺れり

座敷影畫

昔より廢らぬ物は座敷遊びに用ゆる影畫なり硝子の畫板を逆にはめて人物花鳥の働らき近江八景宮島金閣寺天神祭りなど古風にて品よき弄び也是も近來鳴物囃子を入寫畫と呼て四ッ谷怪談などをす甚下卑たり座敷手妻座敷影畫など古風なる所を愛すべきもの也

おどけ開帳

文化中一心寺にて嵯峨清涼寺の出開帳有て寶物の内牛の華曼エトキの會說僧に吞龍と云辨者出て大に群集せりそれより吞龍墮落せしがおどけ開帳と號てわけもなき細工物にて佛像の作り物して阿坊陀羅經アホダラケウとてながく自作經文を唱ふ昔の志道軒に倣ふかわしらね共果は滑稽噺家に混じて道樂懺悔の願人坊に類す惜ひかな

子守歌

年々歳々流行に移り替るは世の習ひなれども古風を失なわぬ物は幼童の子守歌也「寐んくころゝん寐んころや寐たらかゝ様へつれて行起たらおかめに

とつてかまそ杯諷ひよふには國々の訛も出ぬれども
唄の唱歌はかわらず「大坂道頓堀竹田の芝居錢は安
ても面白ひ」「お市こけてこひ菜種の中でサ菜種折ら
ぬよふにこけてこひ」「わしがちいさいときやお龜と
いふたがサ今は七村の庄屋の嫁とかく古風なれば聞
よし平の忠盛白河法皇より懷胎の后を下され出生せ
し清盛なれば幼稚の時院の子」と云て育しとは誠
しからず思へども天神七代地神五代にも子守歌はな
くて叶わじ

順禮歌

世に西國卅三所の觀音を廻るに順禮歌とて詠歌と唱
ふ物卅三首何人の作ともしれず文雅ある人は是を拙
と笑へども歌のよしあしにかゝわらず古へより諷ひ
來りて一文不通の人もおなじ節にて諷ふを聞ば經文
を唱ふるこゝろ也畿内近國を廻るを西國と呼ぶは東
國の人の詞にして第二番紀三井寺の歌にふるさとを
遙々爰に紀三井寺花の都も近くなるらんとは關東の
人の詠なるべしと云人もあり秩父坂東の外にも詠歌
といふ物あれども順禮の唄わぬからは順禮歌は西國
卅三所に限るべしとへ歌は連續せずとも順禮歌は

古風の諷ひ物と悟れば間違あらじ

潮來節

角力取節といへば「おゝせおせ」下の關迄はと諷
ひ新潟ぶしといへば新潟出た時や泪で出たが今はに
がたの風もいや潮來ぶしと聞ときはいかなる古風な
る唄もやと予鹿島香取を遊歴の時潮來に遊びてもと
歌を聞に「大きな陽臺の質流れいくら待ても受手が
ないヤットセヨイ」此唱歌也と聞て愛想盡たり

伊勢音頭

伊勢街道の音頭といへば大坂出てから早玉遣笠を買
なら深江が名所深江菅笠は古き名物にして萬葉に古
歌有り予が著述緒語
文章に出ず奈良より青越山田松坂津棕本窪田
關より大津迄宿々驛々に音頭あれども委く諷ふ者な
しよふ「伊勢の豐久野錢懸松トヨクノ略坂はてる」
鈴鹿は曇る略下など人口に唱へり

馬士歌

馬士歌は負りやナアエまける程ナアエ長持や輕ひ
「富士のナアエ白雪ア旭で解けるナエ、娘ナア島田
は寐てとけるナエ、そふだか」是を才領歌とも云
木曾街道の馬士が諷ふは小諸節又追分節とも云又諷

船歌
船頭歌

曰挽田植歌

豐後節

淨瑠璃節

西澤文庫皇都午睡初編上の巻

ちよんが節

娘道成寺

五百五

唱歌に添削ならじとしるべし

歌系圖

歌景圖として京攝の檢校達調端唄の作者は誰々と表
 徳をあらわせし書有中にも大石浮赤穂浪人内蔵助雅名晋其角元祿
 人柳里恭柳澤橋太等の作せし物數多あり今時無學の人
 の諷ふ物から語路の違ひ手爾葉の誤りを論せず彈も
 し諷ひもする物から譯なき事を諷ふさぞ作調の故人
 達今彈所謳ふ所を聞ば歎すべし悲むべし

雪の唱歌

近世北船場にて歌三絃に大關とか關脇とか云る、妙
 手の者九州地へ遊歴し糸竹を好める人の座敷へ請招
 せられ主の好を聞くに雪を望まる戀する人は罪深く
 と喰じければ主大に感じてそれさへ聞ばよし追浪華
 に名を得たる人也と雪のみ彈て數金を惠まれたりと
 道々の好人もある物也遠國片鄙の人なりとて侮るべ
 からず戀しき人は科ありとも迷ふ身からは見ゆべか
 らず待宵後朝トモヨをかこつは戀の情也惡する人は罪深か
 りさればとて袖をかざして夫じやといふてとは實に
 なりて興ならず片敷袖を褻と見しとの心にて謠ふべ
 し紫女清女が古き物語のみやび詞を婦女子に謠わす

物から齟齬のみにて聽もうるさし

青葉の解

青葉と云唱歌は六條の廓の比何都ナニイデとて盲人有て日々
 廓中へ出稽古に行勾當になるべき官金なくて苦しむ
 何某の抱へ女青葉太夫も年々親方に借財のみ多くな
 る歎きの餘り此盲人と密に契り共に死なんと廓を抜
 け出檉木原カシギより丹波地さして走りしが女道にて心更
 りいかに勤の身の苦しきとて名もなき盲人と情死せ
 ん事好ましからず夜明ぬうちに歸るにしかじと情な
 くも盲人を捨て廓へ歸れり盲人かゝる事と露しらね
 ば夜終山中にて青葉ユスガと呼ども答へず良て夜明け
 れば往來の人に道を尋ね京に歸り密に青葉が事を問
 へばかわらず廓に居ると聞怒りに堪兼しかど盲人の
 詮方なく其薄情を演て作れる歌也こは情なの仕業や
 なさのみ人にはつらからで悲しみの洩まなこにさへ
 ざりて青葉アヲハと呼べども濱の濱の松風中略聲ばかり
 そよとばかりの便もがなと恨歎くぞ哀れなる此歌廓
 中にはやりて青葉は大に迷惑し其行方をしらすと云
 へり

謠曲を唱歌にす

端唄は謠曲より出しもの數多有海士八島鐵輪放下僧
葵の上虫の音は松虫より出し西行櫻石橋邯鄲の類ひ
皆謠曲の文を潤色せしもの也道成寺は語りを一直せ
しもの也東都山田檢校は琴唄に熊野を其儘に調ぶと
聞兼てこの琴曲を聞たく思ふのみにて今に縁なくい
と遣り惜し

綾鶴

綾鶴といへる唱歌は新町槌屋の綾鶴といへる太夫放
庇せる事を諷ひ物に作られ音は幾世の浮世に響くと
賦せり鳥邊山と時雨の松は心中道行の文のみにて情
死せしにあらず依て祝儀の席にも弾けり是にも席に
よりて嫌忌ありて新艘船廬の酒席に八島を弾かず袖
香爐はもと追善に作せし歌ゆへ彈初又は婚姻振舞の
席にては彈ずともあるべきものなれ

鉤簾の戸

鉤簾フスの戸の唱歌に萍に思案の外の誘ふ水戀が浮世か
浮世が戀か下此諷ひ出しの文句は由平ユウヘイの發句なり
此後乙由の發句に萍やけふは向ふの岸に咲くと云は
馴染重ねし遊女と中を裂れ田舎の親類に預けられし
うちも女の事のみ案じて一年ばかりの年月を送る親

もとより迎ひ來つてながくの勘氣をゆるされ歸宅
のよろこびに親類ともに芝居見物に行棧敷に居て向
ふの棧敷を見れば死ね死なふと言かわせし女客の膝
にもたれ餘所の見る目も耻す千痴の體乙由は遠目に
是を見て賣女の薄情を憎めども今更かへらず人の心
の飛鳥川をかこち色情のあさましきを悟り此句を扇
子に書て向ふ棧敷の女がもとへもたせやりしかば女
鐵面皮なる身にもさすが耻かしくや有けん棧敷を迂
り出たるとなり鉤簾の戸の唱歌其比の口調にしてな
れりと云

西澤
文庫
皇都午睡初編上の卷終

西澤文庫皇都午睡初編中の巻

目次

- 一 萬歳の唱歌
- 一 女達磨の畫讃
- 一 正五九月
- 一 孫の手竹奴
- 一 粹と通と程の解
- 一 文七元結
- 一 八百屋お七
- 一 三井の家系
- 一 鼓烏帽子装束
- 一 三十六町一里
- 一 伏見の里の考
- 一 抱丁刀
- 一 兵庫の燕
- 一 二月堂の茶釜賣
- 一 飲酒の十徳夏日七快
- 一 七艸薺を囃す詞
- 一 男色影間
- 一 松蟲鈴蟲
- 一 金岸の發句
- 一 曾呂利の畫讃
- 一 懸鈎引墨
- 一 妓王妓女
- 一 假面打の作名
- 一 扇子の指方
- 一 鯉鮒の地名
- 一 飢落月の客
- 一 燈袋
- 一 定家家隆
- 一 遊女町の銜
- 一 宵柏ノ貫賊に逢

- 一 鷹匠
- 一 向島の狸囃子
- 一 蝶番
- 一 折助亡六
- 一 水尾盡
- 一 宗鑑の物數寄
- 一 金春の太鼓
- 一 小人の閑居
- 一 瓢輕者
- 一 醫者の看板
- 一 杜鵑の蘇生
- 一 木曾の猿酒
- 一 鴉の草莖
- 一 蛸と鱈に灸をすへる
- 一 熊野の大樹
- 一 閑間の御遊
- 一 六憎
- 一 謠曲の發明
- 一 曾我兄第六代御前
- 一 慶庵肝煎
- 一 太平の腹鼓
- 一 山科のノ貫
- 一 陶淵明の菊
- 一 文寶の石
- 一 無藝の大食
- 一 竊香
- 一 宗禪の笛
- 一 隱居一枚起請
- 一 木端の火
- 一 煮染
- 一 雀の隼人
- 一 飛驒の篠魚
- 一 鵜鰯
- 一 鯖の酢
- 一 北野の連歌
- 一 茶人への諷諫
- 一 飴磨の搗染
- 一 太郎餘一郎
- 一 猪口太郎
- 一 四方田四方八面

一 上米列る

一 日披露^{ヒビラ}

一 燈臺元暗

一 富士の裾野

一 日想觀

一 大雅堂霞樵

一 天明京大火

一 七里けつばい（反物産物）

一 手枕の歌

一 板倉の明斷

一 梓巫子

一 安徳帝忌

一 兜軍記

一 辻能狼籍

西澤皇都午睡初編中の巻

西澤綺語堂李叟著

萬歳の唱歌

萬歳は正月十四日男踏歌^{ヲツカ}十六日を女踏歌として大内にて節會有殿上地下の輩催馬樂をうたひ舞かなづるより發り末の代に千秋萬歳といひて餘風遺れり今江戸にては參河萬歳京攝には大和萬歳とて早春に來れり唱歌は無住國師の作のよし云へり

七艸薺を囃す詞

正月七日七種の若菜を囃すは都鄙ともにする業なり六日の夜七種を敲くはやし詞に七草薺唐土の鳥と日本^ノの鳥と渡らぬ先に七草薺と云つゝ七度敲は四十九敲なり是は七曜九曜廿八宿五星と合せて四十九の星を祀なりと有職の人申されしとぞ

女達磨の書讀

何九年苦界十年花衣と云祇空の句ある女達磨と云書は英一蝶書始しと云こは新吉原中近江屋の抱に半太

夫と云遊女有しが後に大傳馬町の商人へ縁付たり其家に朋友集りて物語の序に達磨の九年面壁の事言出けるにかの半太夫聞て九年の面壁の座禪は何程のことかは浮女の身の上こそ紋日もの日の心遣ひに晝夜店をはること面壁にかわる事なし達磨は九年我々が苦界は十年なれば達磨よりも悟道したりとて笑ひけるとぞ此語を一蝶が聞てやがて半身の達磨を傾城の顔に繪きたるが世上にはやり女達磨の源なりとぞ市川栢庭が書讀にそもさんは是こなさんは誰と前書して九年母も粹よりいであまみかなといふ句をよみたりしとぞ

男色影間

男色はもと天理にそむける邪淫にて在家出家の分なく皆いましむべし大明律に云以陰莖放入人之糞門者杖一百此刑の放とは無理にと云事無理業をすれば杖一百との義若衆は男色を賣も相對なれば杖に不及か中富郎^{祖慶子}富十郎と云男色暫時を金千疋の價を以て春宵^{ヲシ}を壓たり暫時に千疋を臭淵に投る者必杖一千と淡々は云り^{佛諸師}近世迄東都にて霞町京に宮川町浪華坂町に有て若衆野郎^{半時庵}新部子^{シンベ}世外子^{セグワイ}影間杯多名有成長に

及びては俳優の若女形となる娘方の内を新部子又制外子とも云也いまだ舞臺に出ぬを影間といふ他國を飛めぐるを飛子トビゴとは呼ぶよし

正五九月

正五九月を三齋月三長月一切諸佛神通月三神變月共いひてもと佛家の詞には正五九月を何事にも忌て屠殺を禁するを今世俗祝ひ月と心得たるは僻事なるべし

松蟲鈴蟲

松蟲の鳴聲を知呂林古呂林といひ鈴蟲の鳴聲は鈴を振る如く里々林里々林と云世俗蟲の名を取違へ松蟲を鈴蟲と云鈴蟲を松蟲と呼ならんと云り松蟲の音は松風の凜々と響にちんちろりと鳴は鈴蟲なり法師のふる鈴の音に似たればなり

孫の手竹奴

痒を抓の具を孫の手といへど麻姑の手とて麻姑と云仙人の手の爪は鳥の爪の如くなれば皆痒を抓によしと云又一名を木童子モウジと云夏日間具に用る抱籠を竹婦人とも竹奴ヤツコとも云的對と云べし

金岸の發句

彼岸と云はもと佛語にて到彼岸と云事も春秋分の名とし唇に書くわへる事とはなりぬ晋子其角石摺の句帖に金の岸カキとうたひ侍れど金岸の二字諸經になしさらでは渡るかの岸と諷ふ時はこがねども彼岸に至るなるべしと前書して渡し船武士はたゞ乗る彼岸哉此帖の跋に元祿十丁丑年重九應山其尾需而溫飽醉裏漫投毫晋其角と有俳諧師の墨帖珍らしければ爰に出せり

粹と通と程の解

遊里にすいと云は推量する心にて粹と書萬事に委敷人と云義なり東都にて通と云も萬事に通達する義なり近世又程と呼ぶ有り程が能ひ程を賣るなど云出せり粹通とおなじ所より云出せしならん

曾呂利の書讀

曾呂利新左衛門自書讀と云もの世事百談に縮寫せり上々様へあげる書シヨか様に書で京みやげ祇園會やせんきまち／＼ひくの山ぞろりと有珍らしければ爰に出す

文七元結

文七元結とて東都にて専ら用ひるは彼浪華の五雁金

の使士雁金文七を賞じて強きを云ふと思ふに文七はもと元結に製す杉原紙の印の名にして至つて古くより云よし隠し賣女を地獄と云は清左衛門と云者始しゆへ箱根の地獄清左衛門に思ひよせ地獄と云ちよき船は船頭の長吉を約語せし事は予が綺語文章に委しければ爰に略す

懸鉤引墨

詩歌連俳に點を加へ又回文の書面にも點を懸る是を點と云は當らず懸鉤ケンコウとも引墨ヒキボシともいへり懸鉤とはそのかたち翠簾の鉤の如く「」すべしと也又引墨とはベタ書狀の封じめに書をいふとぞ

八百屋お七

八百屋お七は湯島の天満宮へ松竹梅の額を自書て奉納したりと世に云傳ふれど實は谷中感應寺の祖師堂に常在靈鷲山法華最第一と云額をお七が十一歳の時書て延寶四年辰春二月と落款せしを傳へ訛れり扱罪を得し事は十六歳の事にて天和二年戊二月也葬所も駒込吉祥寺といへど實は小石川指谷町南縁山圓乗寺といふ天台宗の寺もお七が法名は秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石碑に彫あり天和笑委集と云書に

お七が事詳に記せり

妓王妓女

城州嵯峨往生院の開山妓王妓女は江州野洲郡永原村の北中北村の出所にて惠那エナ九郎時長の娘也妓王法尼の往生は建久元年七月十五日と中北村の妓王堂に印せり盛衰記によれば妓王妓女が通世は治承四年にて妓王廿一歳妓女十九歳トゲ閉四十七ホトケ佛十七と有然れば建久元年は妓王卅一歳也妓女廿九閉五十七佛廿七になるべし往生院にある四人の木像は古作とは見へず中興三譽利貞比丘尼寶永年中に彫刻させしものなるべし

三井の家系

三井越後守源高安は越後守高次の男にて伊勢の國安濃郡一色村に住し高安に男子四人有長子三郎助高時次男治郎兵衛某三男傳藏某四男則兵衛高俊也高俊の長男三郎左衛門俊貞京に出て賈に服し三條室町に住す四男八郎兵衛高利も亦京に出て新町角に住す高利に男子十三人女子五人有勢州松坂及京江戸に三井と呼越後屋八郎右衛門とあるは此高利にて世産を治る術に妙を得たるなるべし然るに越後の回國松坂にて

廢家^{アブラヤ}に宿し庭の三つの井戸より金銀錢の精出て往事を告る回國是より三井と呼越後屋と名乗るを鼻祖とするなどは後人出る儘の説をもふけし事にて論ずるに足らずとしるべし

假面打の作名

假面工に日光彌勒夜叉と云は承平元年に翁次を山城の

住人文藏と云に長元四年に歿す次を大和竹田住小牛清光に永徳二年に歿す

次を越前大野住赤鶴吉成法名は一透平安城四條住龍

右衛門志重政年應永十九年に歿す次を越中日本宗忠永見と計

も稱せり次に和泉貝塚住越智吉舟次に鎌倉住德若忠政と云寛正二年に歿す次に三光法師僧のち叡山に移り住是出目助

左衛門が父也とかや日光より三光迄を十作と云又實

云又越前一乗住福來政友曆應四年に歿す平安城住増阿彌久次

文明十一年德若春若は忠政の甥にて鎌倉に住す文龜元年

大和住人石翁兵衛享祿四年實來千種と此六人を六作

と稱す出目助左衛門は大永七年亥に産れ元和二年九十歳にて歿す其五代を洞

雲ウシヤスミカ隆八代を洞白ドウハクに正徳五年九代を洞水トウスミミタカ滿喬十代を洞

雲滿志と云今は十四五代にも當れるよし

鼓烏帽子裝束

鼓の胴の名所



經筒

乳ぶくら「如孤といふ

と云なり

烏帽子の前へ靡たるは平禮ヘイレイうしろへなびきたるは梨

子打シウチと云裝束の袖にひだをとるを搔カクといふ也古き物

語の書に袖搔合せとあるは是を云也

扇子の指方

扇子を隨身するには常には手に持也懷中の時は柄の方を懷中へさし入る也右の方の腰にさすを笛指と云

後へ指を矢筈指と云左の腰にさすはなき事なりと或有職の人申されしとぞ

三十六町一里

三十六町一里

三十六町一里

三十六町を一里とする事は鯉の鱗尾頭かけて三十六

枚有鯉は里なれば是にかたどりて三十六町を一里と

するとは附會の説也天に廿八宿有地に三十六禽有地

靈の數を表として三十六町を一里とするにや又周易

に一三五七九を天の陽數とし二四六八十を地の陰數

とす六は地數の最中なれば地數に用ゆ六尺を一間とし六間を一段とし六十間を一町とし六々の數三十六

町を一里とす

鯉鮒の地名

川魚に鯉鮒といへば鯉は司にして三都に表し駿府甲

府の府中の符を書て鮎に當るかこは予が杜撰の癖考
 かもしらねど是につゞきて津と文字を書所は繁華の
 稱なるべし攝津安濃津^{州勢}大津^{州江}皆入津の賑ひを賞す
 草津^{上州}などは入津の地ならねど旅人の往來多きを
 賞す沼津^{河金}なども是につゞ識者にたゝすべし

伏見の里の考

城州の伏見は平安城を遙に伏拜の和訓にして大和菅
 原伏見が岡もならの都の頃帝都の方を拜せし所也難
 波の伏見の里は今の三津寺八幡の邊にて高臺の帝都
 を伏拜し所也と云り中仙道の伏見は伊勢兩宮の遙拜
 所か八幡のふし拜みなど古書に見へたるも此類な
 るべし

額落月の客

禁中にて月水のある女を手なしと云とぞ御調度に手
 をふるゝ事ならざれば手有てもなき如くなればかく
 いふにや世俗に手桶番と云も穢れを洗ひ通しにする
 と云心か御客と云は須磨の俚言にて月の御客と云謎
 なるよし因に云徒然草に出たる御産の時旣^{コシヤクト}落しと云
 は御胞衣の滞りし時の咒と有も腰氣^{コシヤクト}落しと云事也東
 都にて手なしを猿猴坊とはいかなる所より呼ぶか其

謂をしらず

庖丁刀

丁の字をよぼろと訓じて下部の者の事の事也仕丁使丁の
 類也火丁と云は一隊の飯をかしぐ者也俗に飯焚と云
 又庖厨の下部を庖丁と云其者の料理に用ゆる刀を庖
 丁刀と云俗に庖丁とのみ云り又料理する事をもいに
 しへより庖丁と云は古き物語の書にも見へたり

燧袋

燧袋は三角に縫もの也三角は火の形也火打は旅行に
 は必らず持行又餞にも送りし物也神事火を改るによ
 りて穢れたる火なりとも燧を用ひ火を打かけて清淨
 にする専用の物也又紙服^{カミ}に火打と云物を付燧袋の形
 は三角なる物ゆへ其形容を摹せしなるべし

兵庫の蕪

慈鎮和尚蕪を貰ひにやられたる折の狂歌に武士の
 射るやひやうづの蕪菜をよつびきしめて十五束たべ
 扱ひやうづの蕪とは兵庫は土佐の地名にて蕪菜の佳
 なる所のよしヒヤウズは矢の辭也はつしと立はたと
 當るへいふつと射るなど皆箭の詞なり

定家家隆

或人話の序に定家^{サダメノエノスクタ}家隆^{カヲリウ}と云ものなくて定家^{サダメノエノスクタ}家隆^{カヲリウ}とのみ稱するは何のゆへぞと問尤らしき老人の答に古人を崇るにはあらわに名を稱せず夫ゆへ訓を除て音を用といへり然らば何とて人丸^{ジンクワリノシヤクジン}赤人^{セキジン}とは稱せざるやといへば老人答るに詞なかりし迹跡にて一座腹をかかへぬ

二月堂の茶筌賣

奈良の二月堂にて昔は青竹にて庵末なる茶筌を賣り老若男女詣たる印として求かへり是をもて茶を立客をもてなすこと南都の風なりしを今は此茶筌絶てなし青竹の茶筌の庵なるに茶を立て老を養ふことならわせとせしを今は價貴き器にて茶をして心を勞し壽を縮る人少からず昔の人今の人と懸隔ある事かくの如し

遊女町の街

遊女町をくつわと云は文字に亡八と書て所謂孝悌忠信禮義廉耻の道を亡ふよりの名也と説あれど又一説に昔吉原の淺草に移されぬ前は今の傳馬町に廓を構へ丸く堀をほり其中に十文字に街をつけ是を娼家となし廻りに茶屋を置しと也中の通りを十文字にわけ

しゆへ街町^{クワマチ}の稱是より出ると此説の方近からん歟
飲酒の十徳夏日七快

飲酒の十徳は禮を正し勞をいとひ憂を忘れ鬱をひらき氣を廻らし病をさけ毒を解し人と親しみ縁を結び人壽を延ぶ又夏日の七快とは湯浴して髪を梳る掃除して打水したる枕の紙を新にしたる雨晴て月の出たる水を隔て燈火の寫る淺き流れに魚の浮みたる月のさし入たる共に柳里恭の詞なりおもしろき文也

宵柏ノ貫賊に逢

牡丹花宵柏は西山に居られし時百金を賊に奪われ^{ヘキ}貫^{ウツ}は山科の草庵にて茶器を賣たる錢七十貫を盜人に取られたり盜賊は金銀と衣服を奪ふ物なれば在俗の人は格別にして世を捨たる佗人華美の衣類と金銀は儲ふべからず家の調度もなるだけは庵なるをよしとす是賊を防がん第一の用意なるべし

鷹匠

昔鷹匠とて公家衆禁野片野邊に出らるゝ園^{ソノ}とは參議正三位基氏卿の流を云坊門とは權大納言宗通卿の流を云楊梅^{ヤマモ}とは太宰大貳季行卿の流也但園の基氏卿は弓馬に達し鷹犬好み其妙を得て此流を持明院と云鷹

犬の故實を記して十卷書と云秦下毛兩家は隨身の鷹匠也此藝は百濟の酒君より傳はり文安四年の頃波多野豐後守尙政と云御所の鷹飼口訣を記し一色内藏助親行に傳ふ又蒙求臂鷹往來の作者松田左馬助元藤法宗是は下毛野武氏の弟子也と云又百濟の米光由光の藝を傳へしは出羽守源齊賴無雙の鷹飼にて其藝武家に傳わり信濃國諏訪の贅鷹下野國宇都宮の贅鷹等の徒皆此齊賴の流を相承す彌津神平が流は諏訪の贅鷹の派にて彌津左衛門尉道直の子を神平貞直其神平宗直其神平宗道其神平敦宗其神平宗光人云酒君の流と米光由光の流と彌津の家に一統し相承すと云宗光十五代美濃守信直入道して松此弟子に屋代越中守吉田多右衛門家元熱田の鷹飼伊藤清六小笠原某羽根田某横澤某荒井豐前守平野道伯等皆新得發明する所有て各一家をなす是鷹飼流派の大概なり

太平の腹鼓

狐は奸智有て疑ひ多き故に彼が邪にひがめる性を忌て人愛せず狸は癡鈍にして暗愚なれば人も憎ます予先年東都新場に寓居の頃夜陰に及びさも面白く太鼓を打音一二町脇にて聞へり戲場町^{葦屋町界}迄は八町有

て鳴物聞ふべからず又浪華の如く市中にて鳴物囃子をなす如きを彼地は禁せる物から影間茶屋^{八丁堀に有}ににて茶番狂言にて有かと思ふに每晚〳〵深更に及び聞ふるゆへ或日溪齋英泉^{書工茅場町植木店に住む}方にて此話に及ぶ英泉云是狸囃子とて九鬼丹波守屋敷^{新場中の橋東話の屋敷}にて狸の囃す也屋敷の内にて聞てもやはり一二丁脇にて聞ふる也と太平の民は鼓腹すと古語にもいへば狸囃子は則腹鼓にて目出度例にや

向島の狸囃子

此後六ヶ年目に又東都へ行淺草に住ふ戲場は薄暮に果して^{江戸にて芝居の果る}深更に太鼓聞ふる様なし吉原十町餘の道^{芝居町三町}に中々聞ふる筈なし其上川を隔て^{隅田川也}東に聞ゆ向島は小梅牛島寺島等にて萬西^{葛飾郡に東}有て云也の百姓なれば太鼓の囃子深更にあらん様なしと怪しみ乍ら其音を友として寝る事とはなりぬ是やはり狸囃子也と云又此近在に廿五座とか唱へて田舎の神事祭禮には社頭に家體を組古雅なる假面を着て壬生狂言に似たる事をす其稽古を在々の若き者晴雨を論せず夜に至ればさらへるを向ふ島の狸囃子と唱ふとぞ八丁堀は市中なれば眞の狸の業也向ふ島は


百姓の囃せるならんと思ひぬ土地に住ものは怪しむ事なし

山科のノ貫

山科の隠士ノ貫は利休と茶道を爭ひ利休が媚ありて貴人に寵せられ諸多き事を常に怒り利休人の盛なるを知て其衰ふる所をしらず情欲は限りあり知れば身を全うし知らざれば禍を招けり蓮胤は蝸牛にひとしく家を洛中に曳我は蟹に似て他のほれる穴に宿せり暫しの生涯を名利の爲に苦しむべきやとノ貫世を終るの年自書たる短冊を買得て灰となし風雅は身とともに終るとて歿しぬ無量居士と號す

蝶番

葉は雙びて離れぬ物に用ふ蝶は雙び飛ぶ蝶は雙び行ツカ襪も左右の手を通し蝶蝶も左右を打合すもの也蝶蝶は大約一つは打す



上下に二つ打てば蝶番ひと成りて一つうつおりは鏢と計呼事ならん

陶淵明の菊

陶淵明は菊を翫ぶ祖の様に思ふは非なるべし菊を東籬の下に採とあれば摘採て藥用食用に充られしにて桓景が重陽に高きに登りて吞む酒に漬す類ひ成べし

元稹が衆華の中に偏に菊を愛するにあらず此花開きて後更に花なしといへるもことに賞するにあらぬを云り菊は花の隱逸なる物と茂叔のいへるも唯叢中に交て見ゆるを哀と思ふなるべし今世の如く根を分ち一莖數十の金に代るは繁華の重疊せるもの也花も隱逸ならねば翫ぶ人も隱者ならず和名にはからよもぎといひ又翁草とも異名する也

折助亡六

東都にて武家に仕ふる僕を折助と云は折助と呼ぶ者ありての通稱なるべし椿の花に詫助の名あるが如し又一名ガエンと云は寒の冬も裕一點にて苦にならぬは火燭にもゆるが如しと云心にやグワエンを詰てガエンと云は東都の俗語也京攝にて是をモウロクと云はも仁義禮智忠孝の六を亡といふ心にて亡六ならんとも云又一説に城外へ用に出て暮六つ迄に歸らずば門の出入かなわねばもう六つが鳴つたかゝと耳を立るゆへもう六也といへるは少しく滑稽者の助言なるべし

文寶の石

湖上李笠翁李漁の語に机邊の翫物文寶の類ひを清煩惱

といへり清の字下し得て面白しと閑田子蒿蹊は申されしと也

水尾盡

和歌に詠するみをつくし常につを濁りくを清て唱ふるは非也是は水尾串といふ事なればつは助字成べしさらばつを清みくを濁てみをつぐしと呼を音便ならんと云り

無藝の大食

世に言行に飾ある者を見えをすると譏れども見えは先禮の端も見へなきは不禮なる物也人は自負するをもて吾人ともに勤るは自負も亦道具也自負にも見えにも差別あるべし或人大酒を好東坡は竹なければ人をして俗ならしむるといへども我は劉伯倫李太白に倣ひて一生此世を過さんと思へりとて只酒飲事を一藝と自慢して外に何の能もなし能なし男が大酒したりとも何もおもしろき人とはすべからず劉伯倫李太白は唐士にして天下を治べき程の器量ある人なれども倣人上に有て賢者を退くる世なれば用ひられざるを知り自避て其國を去る時を憂ふる心より歎息しそを忘んとて飲酒なれば天下の酒客ともいふべし只

酒好にて大酒する族は生酔の糟喰ひなり大酒大食は多く無藝の人に有り慎しむべし

宗鑑の物數寄

古田織部山崎宗鑑が宅へ茶の湯に行れ暮に及迄語られ打くつろぎ寝轉びなどせられしまゝ御裾へ小袖にてもかけ上よといひしまゝ召遣ひの者廣蓋に小袖をのせて織部殿にきせかけしにとめ木の香すぐれて匂ひしを織部殿申さるゝには宗鑑の物すき是にてしれたり香はよき木程稀なる故いかにも少なく大切に聞にてこそ其譽も有此よき木をか様に澤山にくゆらせては香の意に叶わずといはれしと也

竊香

或貴人常に坊主共に空炷の伽羅をわらせらるゝ時四角に割て削屑は坊主共が配當しける事常也或時新參の小姓に此木をわれよと仰られければ御用始とて次に出四角に割て四面の削屑微塵も散さず割たる木の側に乘せて御前へ出しければ御機嫌損じていつも坊主共が割て出すとはかわり蘆芥の如くむさくろしき仕方也坊主共割直せとある坊主例の如く削屑を配當して美しき所ばかりを差上げれば是こそと仰有て暫

思惟して伽の人を召かばかりにも違ふ物歟と尋給ひければ伽醫者申けるは坊主衆は屑を包置て次々の御用になすべき致方ならん御新參は律義眞法に屑まで差出し候事お次御用の心いまだ到らざる也と申に笑わせ給ひ新參を召て坊主共は屑を盗むにぞあらん古人も竊香と書置侍れ責るに不及我はあほう也と御機嫌共に宜しかりけると也

金春の太鼓

金春三郎左衛門は太鼓の上手なりしが右の目あしかりしゆへ出端見にくし夫ゆへ自然と橋掛りの方へ顔曲りしと也其弟子真似て皆顔曲て打觀世新九郎生れ付やみ癖やみ是も顔曲る也門人同じく曲て打幸清次郎かけ聲甚あし、鼓は上手也弟子共鼓を似せる事叶わず聲のあしきをまねる人々笑へば流儀也と答ふ西施が鑿を倣ふ物也近來歌舞妓俳優に此徒甚多かりし

宗禪の笛

尾州のお抱へ笛に名を得たる森田庄兵衛後宗禪と云尾州にて御客の節松風の囃子有し時シテは喜多七太夫太鼓葛の一郎兵衛小鼓幸五郎治郎各支度出來ける時庄兵衛見へず御座敷より早く始よと度々仰下されけれ

ども庄兵衛見へず諸所尋ける時程過てふら／＼と出來れり皆々せり立いか／＼といはるれども少しも動せず二便滯れは業ならず頻りに腹もちあしくなりし故隠所へ行しなり只今腹くつろぎ過たり是にてもまだ笛は吹れず今少またれよと云元來庄兵衛は不足の質ゆへ各彌せきたち御催促度々にて上の御機嫌甚あしく辨もなき男かなとて呵りけれど猶々騒がず各も其せきにては氣たかまりて必定松風の位には至るまじ今少し心を落し付て出たまへ尾張様の御機嫌に違へば御出入止らるゝ計り藝者の一藝を仕損ずるは一世のみならず末代迄の瑕疵也とて烟草盆引よせけるに各あきれながらも尤也とて感じけると也此松風殊の外出來にて尾州侯にも委細聽し召庄兵衛に御褒美有しと也

小人の閑居

小人閑居して不善をなすとあれども小人ならずとも閑居して不善をなす者すくなからずされば獨居の閑を樂しむ事はかたし大約は據なく隠居する輩世間に多く自得して世塵を避思ひ捨て身を遁るゝ者は稀にして隠居しながら物を貪り世路に執着するは隠居に

似て隠居にあらず隱宅に標札せる杯予是を顯居と呼べり世に顯れ居れば云也諸事古語に反して貞男兩女にまみへすとて女房のみを貴しとする人もあれば眞の隠居は予のみにて世間有來りの隠居は皆顯居なるべし山端の念佛堂の庵主正念坊の行水は淇園が雲萍雜誌に見へたれば此人の書たる一枚起請と辭世を出す

隱居一枚起請

隱居一枚起請「もろこし我朝のもろ／＼の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず又學問して道の心を悟りて致す隱遁にもあらず唯不用の者の爲にも世の妨となるまじとさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりとて隱居するより外別の子細はさむらはす但し肝心の世渡りと申ことの候へども皆衣食住の内に籠り候也此外に欲深きことを存せば諸人の憐にもはづれ候べし假令薦をかぶり糟糠を嘗人の軒端に臥せるとも食ては寐食ては遊ぶ君が代の有難を忘れれば身は安樂になりたりとも生た甲斐もあるまじく候穴かしこ「辭世」來て見ても來て見ても皆同じこと爰らでちよつと死で見よふか

瓢輕者

東都の俗言に物にこざり戯るゝ使者を瓢輕者と云豐太閣の出陣とさへ云ば千生瓢箪の指物を一番に持つくゆへ滑稽者流は云浪華にても馬鹿口を敲く者を又ひやうはくをいわしやると不通の老婆など云是瓢泊とて矢張瓢輕と同種か但し漂泊の身は輕きゆへ輕口とて口の輕きと身の輕きをかけて云かとも思へり

木端の火

物の役に立ぬを河童の尻と江戸では云へりかつばは河童の略語にして京攝にて河太郎也此尻を聞し者も見し者もあるまじ是木端の火にして煮焚する程の間にもなるまじ俗に木端石と云は誤也木端は木のきり端にして時頼記の淨瑠璃にも炭の折か木の端かと云様な此坊主と有木の端則木端の事也

醫者の看板

今京攝にて醫者といへば僕に紺看板を着せ家々の印或は苗字の一字を染上る物を着す此始りは慶安中に由井の正雪門弟の輩途中にて駕にあへば他行なりとて早く知るゝ様にと由井の由の字を看板に染こませたと也東都には武家多く駕に乗る者も多きがゆへ

此事有今時雨三軒の病家を見舞藪醫者僕に印付たる看板を着する事笑に堪たり

煮染

食物の内煮染といへるは醬油にて煮さへすればにしめと心得たるは僻言のよし去る料理家に聞り松魚のだしをよく煮出して酒又醬油を化し煮べき品を分量して其汁を其品に煮付れば染る也是を煮染といふて十種あらば十遍に煮る先の餘り汁にて次の物を焚時は鯉酒醬油の味ひ先の物に染て澆水にて煎るが如し

杜鵑の蘇生

信州高遠の者冬日薪を伐に山へ行切たる節木の中に郭公の死したるを見出し是は藥種にもなるべき物と持返り箱に入置しが其後忘れて翌年三月の末頃にかの箱をひらきしに件の郭公飛出て去りけり古歌に奥山の朽木に籠る郭公夏を待てや子には鳴らんとあれば秋より春迄は朽木の中に隠れ居るにや冥途の鳥と云ば再び蘇りしかもしるべからず

雀の隼人

高野山に時鳥の歸り後れたるが木の節穴などにかいまり居てやゝ寒くなる時は得動かず餌食ももとより

得せぬを雀がつどひて餌をあたへ來る年の夏に及ぶ迄養ふいと不思議なる事にて是を雀ほいと云ほいは乞食の事にて雀の爲の食客と云事也とぞ

木曾の猿酒

岐蘇の猿酒は以前信州の俳友より到來して吞たるがこは深山の本の股節穴などの中へ猿秋の木の實を拾ひ取運び置たる雨露の雫に熟し腐るを山賤見出して持返り麻の袋へ入絞りし物にて黒く濃して味澆みに甘きを兼ていかさま仙藥ともいふべき物也

飛驒の篠魚

飛驒の高山の名物篠魚ササナと云魚は三尺餘りの笹の節に生じる魚にて初夏の頃谷川に落る其味鱸の如く美味也と聞未魚とならざる内を篠の儘一枚持返り予に見せたる人有ササナか様なる容にて二尺七八寸もある笹の中程の節に三寸計の笄タケコ付有自然と魚の刻



たる形有てよみ鰯程の大きさ也笹の先には早鱗見へて尾先あらわれたり溪川を少し隔て高みに生ずと云り又外に此書を摸寫して狂歌一首をそへ何翁とか落款せし摺物に暗記ながら慥「高山の谷間に生る篠魚こそさゝを進る肴にぞなる」七十何歳とか書有は高

山の人也予考ふるに雪中に谷川も降り埋もれし頃魚此笹の笋へ子を産付置しが翌春雪解して谷川は低く流れ笹は遙の岡に有篠の子や、成長に及んで魚も共に成長して初夏に笋自然と落る時谷川に勿入て竹の皮を脱で遊ぶならんと思へり非情の笹の節に有情の魚の産するも珍らしからずや愛すべき物なり

鵲の艸莖

鵲の草莖百舌鳥の早熱は度々見し事有鵲は虫けらを取て餌とすれば冬虫類の地中に入ては不自由なれば秋の末種々の虫を爪にかけて木の先に刺置冬の餌に當るを云予河州暗嶺の麓にて見しは蛙を梅の枝に貫きし也難波大黒庵の庭に有しは大なる蚰蜒にて實鳥類迎も賢しき物也「草莖はいつとりに來る梅の花」と奇淵叟の句は其時の喩にて有し

鵲鮮

鵲鮮は鵲と云鳥沖にて浮みゐる魚を爪にかけ海岸の巖に生たる藻を搔分て埋み置を海士の子藻の影より是を取食する也藻の上より取る時は重ねず漬る事なし下より取る時はしけ日和の食料にとてかいやが上にも漬置物也とて海邊の者に聞たり

蛸と蟹に灸をすへる

九州地へ下る者の數日大船に乗て風待汐待の徒然に絶兼播州路にて三里の灸を居る次手求ある蛸の頭へ灸を大きくすへたるが熱に苦しみてや船中をかけ廻り這廻りして兩足と覺しきを頭へ上て搔落せしを見て興に入又下の關にてかさみといへる蟹を求め甲へ灸をすへたれば苦しみ横這に這廻り泡を吹身を峙て鉄にて泡を切て甲の灸を消せしと聞しが無用の事ながら其物々に難を避る法あり萬物の長たる者常々それの難を避る心構へなくては有べからず

鯖の鮓

京師にては祇園會には鯖の鮓を漬て客に出すまた鯖の鮓には鹽加減第一也加減は米壹升に鹽目四文目のわりに入れ飯に焚て至極能加減なりしを今にては鹽目五文目入ても水嗅くて加減あし、諸人幸ひ好になりしか又鹽のきゝの薄く成りしかと云に是全く左にあらず近世一統奢の境なれば前々の如く辛き鹽の下鯖は用ざるゆへ也と京師の料理に心ある人の話にてしりたり

熊野の大樹

寛政六年の春紀州熊野の深山より卅里奥山へ御用木見立に行て榎の木の大木を見出しぬ是まで折に來る者もあれど唯山とのみ思ひしが此度大木なる事を見出し則人夫の杣人等其大さを積り大守へ上覽に奉りぬ一榎の木一株百廿抱へ六十丈なり高さ三百廿四五間百九十五丈餘枝三本に別れ南の方の枝凡八十二廻り丈にして四十一丈也宿り木一杉長さ七間半二本有一椎長五間二尺七本有一檜長五間半十二本有一黃楊長四間半九本有一松長さ四間半七本有一柳長さ四間半六本あり一竹十八本有一南天長さ二間半七本有右紀州表より書狀にて申來る寫し書餘り珍敷ければ話の種共なるべき事ゆへ爰に出す

北野の連歌

北野の神前祈禱の連歌有し時かくなるものかさすらへの果との前句に此神のかへり北野に跡たれてと此付句を執筆書とむると同じく社頭震動して暫くやまざりつるは神も納受し玉ふにやと皆感じ申たるよし或人連歌の席に句を出しけしからず慢じたる顔付を見て脇より生天神々と云て膝を突ければ餘りなつかれぞ社壇がゆるぐといわれしゆへ一座腹をかへ

しとぞ

閑間の御遊

昔は貴人にしゝまの御遊と云事有人々つどひ給ひて種々と談話の中にひと度は無答にて戯れ給ふを云也とぞしゝまはしづまる間と云事を略し音便の詞にして閑を守る也壺矢五寸乃至一尺を度として物いふ時は鐘を打ならす今此わざ絶てなしとかや我々の難談にても互ひに語り聞などせる内燈火の消たる如く話のきるゝ事ありやゝ暫く無言にして興盡る事也貴人のしゝまの御遊はかゝる事のあるまじき爲の用意と思わる後考をまつのみ

茶人への諷諫

利休居士が詞に貴き價の器物を愛するは心利欲に走るが故也缺たる摺鉢にても時の間に合ふを茶道の本意とすといへりされば茶道を好む者の他の手前をも辨へなく我習ひたる義のみ心得是こそ我流になくて叶わぬ品也と無益の器を高料に求め飾置は古道具店にもひとしくうるさき限り也數寄咄といふ物にも主人家居と道具に自負し客に云けるは我數寄屋の内によろしからざる物あらば詞に隨ひ省べし遠慮なく云

給われとありければ客は諂なき人にて家と云器といひ行届ざる所なければ唯此内に其元一人なからまじかば風流雅境是に過たることはあらじと云りいとおもしろき諷諫なり

六憎

六憎とて憎むべき物六つあり金持て高ぶる程憎きはなく書を見ずして物識顔する程憎きはなく人に物をやりて恩にさせる程憎きはなく吝きほど憎きはなく欲深き程憎きはなく人をそぬむ程憎きはなし

飴磨の搗染

飴磨の搗染は播州飴磨郡飴磨の津細江町に紺屋多く昔より相續の家も有べけれど染法悉く傳へたる家はなきよし搗染は唯幾度も藍に染て白にて搗唯厚く染たる成べし仍て白にて搗をかつと云餅を搗飯と云にて知るべし濃き藍染の事也

諸曲の發明

奥州にみてぐらと云武家有彼館にて能に鐵輪をしかり恐しや御幣と云を行當り俄に直し恐しや勝に三十番神おわしますとは淺猿しき神の居所やと笑ひぬ又或人三輪の謳にある夜の睦言に御身いかなる故に

よりとは作意もなき作りやうかな惣じて理のつまぬ文章やたい或夜の六つ時に御身いかなる上に乘と直したらばよからふとは作者いかい迷惑なるべし

太郎餘一郎

昔は第一の惣領子を太郎次を次郎と云夫より三郎四郎より十郎まで名付十一人目は餘一郎十二人目は餘二郎と次第に名付る也とぞ十は成數なれば十郎よりあまると云意なるべし盛衰記に金子十郎家忠の弟金子與一郎那須十郎資隆の弟那須與一也餘を與に作るは假借也平惟茂を餘五將軍と云も十五郎也源義經は第八子なるを九郎判官といへるは八郎爲朝の成行よからざれば八郎を忌て九郎としたると云り

曾我兄弟六代御前

曾我の十郎は十男にあらず父河津に死別れ伊藤九郎祐清の弟として十郎祐成と呼び弟の五郎は北條を烏帽子親と頼み四郎義時を兄として五郎時宗也平家の六代御前は平貞盛忠盛清盛重盛維盛と第六代目に當るがゆへ然いふとぞ

猪口太郎

昔噺の桃太郎金太郎は惣領にて狂言の鈍太郎惡太郎

も是におなじ沼太郎川火太郎は其品によつて號し物が雲に丹波太郎あるが故に霧太郎を天狗の名に冠らしめたり東都の料理家に葛西太郎と呼砂糖漬に太郎梅と付しは梅は兄にて太郎とはしれたり是惣領は甘ひと云心より號なるべし卅年前何にでも太郎くと呼て猪口太郎などと呼びしが重猪口の三つ或は五つ重の大なるものを然よびしなるべし

慶庵肝煎

肝煎口入する者を東都にて慶庵と云遊女の肝煎を女衞と云慶庵と云は江戸木挽町にて大和慶庵と云醫師也同じ比伊達三郎兵衛は長谷川助右衛門と云浪人と三人申合せ男女婚姻の媒酌などして世を渡りせげんと云は女衞の轉訛にて衞はうると讀り三人共寛文中に惡事有て江戸を追ひ放されしと云其頃よりして人の世話するものを慶庵と云肝煎とは古き詞にて胸上之炎焦心中之肝是らよりいふ事ならん

四方田四方八面

明智光秀の臣に四方田但馬頭は四方田但馬頭と讀江州に四方田と云地名あるよし又四方山の物語りに及ぶと云も山にあらず八面と書て八方を八面と讀り

四方八面の物語をするなど書べし

上米刳る

物の運上をとるをうはまへをとるうはまへを刳ると云は上米取とて口米をとる如く百石積たる船にて一俵をとり三俵積たる駄荷にても幾升をとると云が如く住吉神領として調進せしより云事也とぞ

七里けつばい

俗語に忌嫌ふ事を七里けつばいよせ付ぬと云は高野弘法大師行狀記に七里結界と有るを轉訛せし詞なるべし

商賣往來は京師の手習師匠の作にして商賣盡とも外題を置べきを庭訓往來などを做ひて文通の往來ならぬに呼び來りしと物しる人は譏き其上端物龜物の字は衣の字にて衣通姫と書衣の字也織上たる儘の物を反物と云裂たる物を衣物と云よし附て云召使の者に時の衣服を給するを仕着とも四季施とも書り四季着の約語なれば四季着と書をよしと云へり

日披露

近世戲場の俳優又は淨瑠璃の會などの引手進物の目錄を送る書附をびらと云ビラは披露の約語ラウを詰

て披露とは云也いつ幾日より始ると云をひいらと云は日披露と云事なるべし

手枕の歌

濃州岐阜の片邊にて人々或草庵につどひ連歌などし侍り庵主は六十もやゝ過るばかりの尼なりしがいみじく行ひすまして誠に塵を出し心の流石に敷島の道はひとつの癖と恵心僧都のよみおき給ひしごとく捨かねてやさしき人なりし連歌も満備して因に古歌などの物語しける中に一人の若輩の宗匠に問は雪ふれば木毎に花ぞ咲にけるいづれを梅と分て折らましといへる歌は梅といふ字を分て木毎にと巧みによまれたるよし申す人侍るはさこそといへば宗匠頭をうちふりて否々左は心得給ふな成程或説その事いひ出し侍れども鑿説にて歌はさやうに入おがによむものにあらずむべ山風を嵐と云らんとよめる山風は嵐の字にかよひ又春のよの夢計なる手枕にかひなくたゝんとよめるは手枕に腕をいひかけたるなど一首の上の自然の逸興にて是を求めてよめるには非ずと語れば満座いづれも服膺の體に見へ侍りしかくて人々わかれ歸らんとせし折ふし雨ふりいでゝ蓑笠合羽や

うの物もてるは先へ出一人二人は雨の具なくてイミ侍るを主の尼見てまづく留りて晴間を待給へ宿したまわんととも古稀の老尼が浮名もあるまじ苦の衣は唯ひとへかさねばうとし二人ねんなど戯るゝまゝ立どまりて又火桶かきまさぐり膝うちくつろげて語るに尼せが云先にそなたの間はせられし木毎に花の歌につきて宗匠の物語さこそとも思ひ侍れどかひなくたゝんの歌は千載集の詞書にもかひなをみすの下よりさし入たると有て且その歌の返しに忠家卿もいかゝかひなくとよみ給へばかひなをいひかけたるものと尼は思ひ侍れ夫につきて尼が物語の侍る雨水晴間待給ふ内語り侍らん申につけて恥かしながら且は懺悔のため且は出離の縁の善知識を尊む事に候へばはゝかりもあるまじ尼が出生は丹波の國の民の女なりしが十歳許の頃凶年相續し上疫癘流行し父母うちかさねみまかり伯母なるが許に養れ侍るに此伯母婿情なきものにてつゐに都の人商人にわたしやり島原といふ傾城町に賣て小髻となりつかへし始めは父母の事のみおもひ出古郷の戀しかりしばかりなりしが稚き心は愚なるものにて日毎に媚になれ花やかなる

人の出入たちふるまひも羨敷いつしか芝蘭の室ならぬ姪亂の室に入て其香に染ぬるぞ淺ましき後には客をおくりむかへ僞て悦び僞て怨むるもはづかしと心に心付ざりし一夜を限りに去て再び來らざるも多き中に年をかさねてわすれず訪はれぬるも嬉しかりし或下京邊より通ひ來て是も一とせ許も馴たりし人の唐の文字よく書る有しに一日妾が扇の白くしてさうくしかりぬる一筆書て給われといひしを辭するやうもなくさらく」と書てたまわりぬ固女のよむべき文字ならねば何といふ事とたづねしかば一雙玉手千人枕半點朱唇萬客嘗といふ詩のよしいかなる事の心ぞと問しに是はぬしのごとき遊女を作れる詩なり一雙の玉手とは一對といふ心にて左右の手のうつくしく玉をのべたるごとき腕も夜ごとにかわる口びるも張郎が妻と成李郎が妾となる身の萬客來つて嘗るとは作りて世に淺猿きものは傾城なれば是を憐て作れる詩也と語らるゝに初て心付身のほどの宿世おもわれ侍れど今更色にも出しと酒汲かわし物語などして夜ふかく客人は歸ぬるにつくく思ひつゝくればたまたま人と生れながら士農工商の妻ともならで禮儀

廉恥を忘るゝ屬と成事よと胸うちふさがりて目もあわすいかにしてか此苦界を出て人倫に立入べきとゝざまかうざまと思ひめぐらせど女の思慮の白地に考得べき事かわかくて其日は引かづきありしが夕かけて客人の來りぬるとて案内するまゝ今日は心地あしく髪だにも梳らずなど云しかどあながちに名をさして對面せんといひこし給へる客人にて從へるとの家主もあながちにいさむればしづくに出行ぬ是までしれる人にもあらずしかも田舎人のふつゝかに見へ侍るいと興なくそくゝに酒宴も過て閨に入しに枕のほとりに彼の扇の有つるを客人のひらき見たるに又胸つぶれて顔も紅葉する心地なれば奪んとせしをいなみて此筆の蹟こそいとうるわしけれ徵明が骨法を傳へし詩の心もあわれ深きをこそ書けれ誰が筆なるなどめでたりし翌朝はとく別れ侍しに夕方何心なくかの扇を開しにいと美き手にて

手枕にかすともなにかつらからん

おしむかいなき假の此身を

と書添侍る誰がしわざかと思ふに夜べの客人の外にすべきものもなし去にても初の詩の心を引たがへて

四大假合の此身をすてゝこそ浮むせもあれとおしへたるも尊く遊女となれるは宿世の縁身を盡しなばおのづから道にも叶ふにやさらば今より假の此身を惜

燈臺元暗

るに雨もやみて道たどゝしかりし夕闇も月待出し
かば人々は又かさねてを契りてかへりぬとぞ

まずして心は生死の外に出離せんと思ひつきぬ去にても此歌よめる人の心の尊くやさしかりけん如何なる人にや尋ねたく思ひけれどあやにくと其後はよすがなくて二年許過るに或夕暮案内しておとゝしのいつゝ一たびまみへたるばかりのよすがは今更云出し難くやと有しに嬉しく頓てむかへそれらの事をも語いでゝ其後は折々忘れずとぶらはれぬればわれも此人をこそ終のよすがと頼む心なりしまゝそのうち長へ約束の年月の過ぬれば伴われて此國加納と云所へ移り侍りて初て荆棘林を遁れて一農の妻と成ぬ彼主顧る心有りて情ふかくおしへ給わり二十年許先におくれ侍りて後かゝる身とはなりて爰に世をふるなり去にても古へ人の情のほど夫妻のむつみのみならずかくまで身を助け給わりぬるも尊く將詩を書く人もいかなる宿世の善知識にやかゝる事には導引給ひぬらんと忝なく忘がたく侍れば旦暮に回向して現世ならば安隱後世は無上菩提といふらひ侍るなりと語

享保の頃室鳩巢翁は江都駿河臺に住て老後痿痺の疾ありて起居も心に叶わねば日夜衾枕をのみ親しみ日頃問來る門弟子に仁義の道を講せらるゝ中に世俗の諺に燈臺もと暗しと云は世に何事にてもあれ外にはかくれなき事を其もとにて聞ば却て分明ならぬ様のこと云ならし孟子の道在邇而求諸遠といふ意にもかなひ申べきかと座客のひとりがいひければ又ひとり近代日本にていはゞ織田信長關東關西の諸國迄手のばし討したがへられしかども手元に暗ふして明智に殺されしは燈臺もとくらきに候わすやと倭漢の故事をひめて云けるを翁聞てすべて比喩の語は義理のとおりやうにて色々に申さるゝ物にて候此諺も各の中さるゝは燈臺もと暗しをあしきかたにたとへらるゝに翁は又此諺をよろしき方に取なして韓退之が短檠の歌に長檠八尺空自長短檠二尺便且光と作れるごとく燭臺も長きは燭のもと暗く短かきは燭のもとあかるし夜中に書をよみ字を寫すやうの事には手もとを

明らかにして其用をかなふる故に短を貴ぶにて候得ども一二尺の手燭にては此座上にてもくまぐさのくらきを照しぬる事は難かるべししかればもとをあかるくしては遠きをてらし難く遠きをてらすは必もとくらきものとするべし翁關尹子を見侍りしに吾道は處^{アル}暗が如しよく明中の事を區畫すといへり關尹子は關令尹喜が書也尹喜は老子の弟子にて道德經五千言も此人の爲にあらはせると也譬は吾身くらがり居て明りを見れば明りの事残りなく見ゆる也吾身あかりに居て暗を見ては一せつ見へぬ物ぞかしされば暗に居て明りを見るやうに己が智をふかくひそめ養て暗より明らかなるを生ずるやうにすればそれこそ眞の明といふべけれども己が材智にはこり聰明を盡して唯手もとのあかるきを專にせば但手もとの事のみ見へて下手の碁をうつが如し末の手は見へざる程に毎々是非をあやまる事も多かるべし

板倉の明斷

近き頃故板倉周防守京師に留主たりし時訴訟をきかれしに己が材智のはやぎ^{ホテ}り聲色の動なば我もそれに氣乗し彼もそれに氣奪はれ兩造の辭を口せず雙方の

情を盡さる事あらんとて必障子を隔て態と手づから茶をひきなどし唯心のちらぬやうにして聴れしと也さすが近代の名人とはいひながらおのづから聖人の心にもかなへりそれゆへ曲直理を盡し聽斷神に通じ人々畏服せざるはなし周防守ある時京の在家を通られしに或家に幼少の子出て遊びしがあれ周防こそ通らるれといひしを周防守馬上にて聞とがめて我不肖といへど上の御代官としてこゝにあれば京中村閭に住する者男女老弱をいはず我をかくおしくだしていふ事あるべからずしかるに此家の兒輩かくいふは常に家人の我を恨みてかくいふを聞馴し故なるべし是は定めて子細あるべしとて其家主の名を聞せて通られしが翌日其家主を召よせて汝先年何にても訴訟したる事やある今尋ぬるは少しもきづかひなる事にてはなし有し様に申べしといはれしが始は何かと辭退しけるが再三問れて此上はかくさず申上候それの年某の月の事にて候父の配分の事に就て一類の者と争ひ候て訴へ候しが某者無實の事を申かけ候へども證人を多くこしらへ候て申出候故御聽斷の上相手の勝に定り候其次第かやう／＼とくはしく語るを下役

人に命じて其年にあたりし簿案をくらせけるにすこしもたがひなかりしかば其上にていよ／＼尋ねきはめて是はたしかに某が聴あやまりたる也いと残念なれどもはや年久しき事なれば今更すべきやうなし其配分の程某償て我過を謝すべしとて自分の金銀を出して其者へとうせられしとぞ周防守己が威勢をつのらず己が過失をかくさず我は常に晦に處て明を銜はず我は常に愚に處て智を先だてす其心公にして私なし誠に古今に有がたき明智といふべし今是等をもて此諺を考るに燭臺は長くしてもとの暗にて其明おのづから遠きに及ぶ君子の道は闇然として日の明らかなるが如し若短うしてもとあかるければ其明わづかに近うしてやみぬ小人の道は的然として日をほろぶるがごとし此理をしめして明かなるものは必もとをくらうすといふ心にて燈臺もとくらしといふにもあらむかし

富士の裾野

又爰に其意とは同じからねど一語有昔憲廟の御時或士人の好學ありけり其人按察使に命ぜられて畿内の郡縣を巡りしが首途に臨て學問の師に贈言を乞しに

其師此度道中にて富士山の下を通り給ん時よく裾野を見て行れ候へあれ程の山はあれ程の裾野なくてはたもつべからず都て山は上より土下りて下の肥厚なるにてこそ持候へ若上に嵩ありて下細く上大きにして下小さくば忽に崩れつべし此度上の御爲をおぼさば只下を厚うするやうに御こゝろへ候へ此外に申べき事は候わずと云しとなん是易の剝卦の意にていへるなるべし剝の卦上は艮にす艮は山なり下を坤にす坤は地なり是地上に山ある象なり山は高く上に位すれ其地は下に附て放れず是山は地を基本とする也人の上たる人上を剝落して下を厚うすれば邦安うして山の地上に安置するがごとしもし下を剝落して上にませば山在地上の象にそむく程にやがて危かるべしとなり

梓巫子

天王寺のはやし町は梓巫子のすめる處にして二季の彼岸には在所の人のこゝに來りてなき人の口を寄るとて梓の弓に其鬼神をまねき往事を泣く殊に二季の彼岸にひとしほあわれに覺ゆかしこのはやし町にすめる巫子の名の昔めきておかしければ書つく橘屋小

女郎、隱居藤、黒格子の元家、栴檀の木の姉、藪の内の
龜、舛屋女郎、藤屋の小女郎、黒格子の方、黒格子の
嫁、此餘にもあまたある中に黒格子殊に名高し

日想觀

津の國天王寺の西の海つゝきを那古^{ナゴ}の浦と云也春の
入日は武庫の山の北に沈み冬至の短き頃の日は淡路
島の頭に入給へり又二季の彼岸の中目といふには落
日天王寺の大鳥居の中心にかゝりて須磨明石の中間
に入也是を日想觀の大事と申て昔後白川の上皇と圓
光大師とともに此岸の落日を拜給ひし御跡を源空庵
と申せしが今の一心寺也と申傳ふ又壬生の二位も此
の邊りに庵を結び名古の浦の入日を見て七首の和歌
を詠給ひし跡家隆塚とて遺れり慈鎮和尚天王寺の別
當になり給ひし頃とかやいゝつたへたり

安徳帝忌

物の名も所によりてかわりけり難波の蘆も伊勢の濱
萩と或人賣用に付享和年中長州に下り數日滯留しけ
るが都て上方と替りし事多き中にもまづ年頭より中
元せつ句の禮勤るに錢一二文宛紙に封じて上書に金
百疋と我姓名を記し是を家毎に置いて廻るに先方も又

かくの如く同前也禮式は固より節振舞法事髮置夷講
の類何にても先より招かるゝ時はいつにても上下を
着て行又其禮に行のも上下也開帳參り杯にても七分
通りは上下着たる有也扱又赤間が關あたりは女に位
有て俗に爺唄^{オカ}と云様子也先目上の内儀より同輩の妻
女迄をおがうさんと云目下を姉^{アネ}さんと云おがうさん
はお后さまといふ事とぞ是往昔元暦の戰に平家打負
西海の波に漂ひ此八島の沖にて安徳天皇を始二位の
尼公公卿官女達に至る迄入水有しかども相殘れる官
女は此赤間にさまよひ世を渡る業も知らざれば人
に雇われ或は身を賣て世を渡りしかど流石賤しき漁
師等に操を穢さん事を耻いとふ官女は鹽或は漁船に
釣する鮮魚貰ひ是を緋の袴を着乍ら天窓にいたゞき
賣ありきて營とせしかどもいつしか仕馴ぬ業にはか
ゝしからで如何して世を渡らんと途方に暮ていけ
るを邊りの寡暮しの漁師是を見てかゝる乏しき仕業
にて乞食せんこと今日前也それよりは我々が宅へ來
ていか様其身を過し給へとせちに乞ふて伴ひかへり
御客やら妻やらにして敬ひける是によつてお后さま
くといひしより今も内室をお后様といひならはせ

になりしとぞ扱今に赤間が關の遊女は其頃身を賣りし官女より始りし也依て毎年三月廿四日には安德帝の正當忌日なれば家毎に遊女爰をはれと粧ひ襦袢姿にて阿彌陀寺に參り遊女毎に焼香を捻りて歸りぬ此日年中の大紋日にてあみだ寺は安德帝其外入水の公家達の陵石塔ある寺也文化五年の夏祇園の練物に新屋小鶴と云藝子破れたる裾の緋の袴を履鹽を折敷に入れ頭にいたゞきし體なりしが是かの官女に立立し也

大雅堂霞樵

大雅堂はもと嘉左衛門とて貨殖家也其業を惡み避て畫工となり池野秋平と云又霞樵とも云其質雅にして聊も利にわしらず書もまめやかに殊に象得たり一日書林の許にて年頃望みし一書を見る恍然としてその價を問に價最貴し大雅云我にたくわへなし故に望を空しうす希は是が爲に今より移て金を積ん積て後此價に足りなば我にたびけん去乍賣物の事ならば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我に知らせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望人もあるまじ若あらばその由告申べしと約してそれより大雅は日頃に替り俄に物事を約にして年を経て望の通り金

子溜已に價調ぬれば彼書林方へ走り行年頃の望み足りぬとて價を出し其書を我にたまへと云書林大に當惑して實も先年足下へ約せし事唯今存出せり其書は其後望人有て賣遣はしぬ其時足下に約せし事を忘却して告す罪多く今更如何ともする事あたはずと悲愧す大雅案に相違して愀然として申けるは我かく迄貧しき中にて金子拵しは此書の爲なり既に價調て望を果ざるは天也苟も此金を他用につかわん様なし不如祇園の地に住からは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金子を残らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱じ倍此人の書畫を世に翫ぶ惣じて常の風俗中華の唐人に似たり月明らかなる夜近江の守山を過るとて宇野氏が家を深更に敲く主人是を聞て時四更に及で勵しく門を敲は唯ならず自分起て立出見れば大雅也いかにや深更の夜行をと問大雅答て近江のそこへ罷りて月夜の面白さにうかれて夜行せり餘り清明なれば我獨り詠んも無下也足下を訪ひて夜とともに月を賞せんが爲也とて主客内に入て酒を酌興じ明せしと宇野氏が物語也齡耳順に滿す歿す其妻玉蘭女も夫の雅にならつて風流也寡婦の後

も扇面を書て鬻て世を渡れり是も今は歿したりとぞ

兜軍記

享保十七年九月竹本座淨瑠璃文耕堂長谷川千四作壇浦兜軍記二の口菊水下河原の講釋場關原甚内と假名して阿古屋の兄井場の十藏タツシ一幸母を養んが爲講師をして其日を送る面體格好惡七兵衛景清によく似たるが故榛澤六郎組子をもつて召捕畫姿にあらためるに景清にあらすよつて榛澤詫て繩手とき母を孝養の爲辻講釋の業をすと聞て感じ殊に人立の商賣を妨げしを氣の毒に思ひ金子を母に恵むと出す十藏是をいなみて景清に似たるは此身の不幸也何此金子を受んやとて受ず榛澤は是非にとある其時十藏折角の御志無足にならじけふ縁日とて清水觀音の賽錢箱菊水の辻に有母の無病息才を祈りの爲奉納せんとて榛澤の見る前にて右の金子を賽錢箱へ打込む脚色有是則大雅の書を求めん爲の金子を祇園の社へ奉納せし一話よりなる物也大雅は祇園の社地へ出し店して書畫を認井場の十藏は菊水の河原にて辻講釋を業とすと仕組あり都て此兜軍記は此頃の名譽の狂言にして一場毎に佳境有今三の口琴責のみを淨瑠璃歌舞妓とも

に用ゐて名狂言なる事をしらずいと惜しむべき事也

天明京大火

天明八戊申年正月晦日京都大火は平安城開けて未曾聞の大變也抑平安城は桓武天皇延暦十三年より天明八年に至曆數九百九十五年其間に禁裏炎上數度に及び保元平治壽永元曆承久元弘建武明德應仁永祿元龜等洛の兵火にも京中燒亡の事なし就中應仁の亂は前後百十餘年諸國の武士京師に出花洛の荒廢此時なれ共兵火の爲に京洛皆焦土となりし事を不聞其證には洛内の老樹亂を避て存在せる物多し而して御當家御治世後二百年の間に百有餘年前下京タイウメ燒とやらん餘程の火事なりと聞傳ふれども年久敷事ゆへ當時是をしる人なし其後三月廿日燒失をだに慥に覺たる人なし本ノマ、意通ツ難シ近くは八十一年以前寶永五子年三月八日の大火こそ古今稀有の事に申傳へたり其時禁裏炎上町數四百貳拾九町燒たり又五十九年以前西陣燒は町數百貳拾三町也今茲天明八年の大火は京洛中十にして九つの餘燒畢の正月晦日曉洛東橡の辻子より燒出て翌二月朔日卯の下剋迄晝夜十三時の

間に東西凡十八町南北凡一里二三町焼町數凡千五百六十町長延にして四拾四里餘也猶焼出しより始終并に心得咄等は萬民千代の礎初午詣などゝて草紙に有ば略之今嘉永三まで六十三年になる也

辻能狼籍

元祿年間京町奉行に改のうつし京都町數千八百四拾七町千四百五十町は地子御免残りは年貢地也家數四萬五千八百七十七軒と有其後百年を経る間に新地追々建續當時は凡京町數千軒爰に京都大火の前日正月廿八日和泉式部誠心院寺内にて堀井專助辻能を致居けるに邯鄲の能半過樂も終る頃帶刀の壯士四五人つかゝと這入て舞臺へ上る見物こわいかにと見る所に能太夫共に舞或は着座の大臣の冠を落し理不盡狼籍甚しゆへに太夫其外役人も半途に樂屋へ逃入れば作り物臺杯を踏碎きワツと叫び笑ひて何地ともなく去りぬ是何の所意たる事をしらす女童足弱の類は悉く逃去ぬれども壯者は去にてもいかなる事と始終を見んと皆舉りて見物しけるに如此是に依て其日の能はそれぎりにて相止めとて則東洞院六角下る町の某見て歸り是を語る大變なくば色々評判すべき事なれども其又翌日大變故に

其段にてはなし誰か是を評する者なし怪異の事なりかしと幽遠雜話に出たり

西澤
文庫 皇都午睡初編下の巻

目次

- | | |
|----------|-----------|
| 一 白氏文集 | 一 紹益吉野を悼 |
| 一 淡々の示教 | 一 輕卒者の連歌 |
| 一 十千十二支 | 一 金烏玉兔 |
| 一 定頼の和歌 | 一 和泉式部 |
| 一 大佛餅屋 | 一 江島屋其磧 |
| 一 市中は中を行 | 一 道路は左を行 |
| 一 毛拔鮓 | 一 一噌の笛 |
| 一 赤良の狂歌 | 一 藤公の笑疾 |
| 一 百翁の茶會 | 一 富士と達磨の畫 |
| 一 長生殿の繪 | 一 月見の松 |
| 一 餛飩豆腐 | 一 李白仲鷹を悼 |
| 一 支考の俳言 | 一 年中の雨 |
| 一 蕉雨の發句 | 一 行脚に句を買ふ |
| 一 無名の短策 | 一 光次 |

- | | |
|----------|-----------|
| 一 内科外科 | 一 基俊歌を盜まる |
| 一 よしにせよ | 一 商人の學問立 |
| 一 短文の書狀 | 一 國姓爺弟 |
| 一 自鳴鐘 | 一 大男小男 |
| 一 兼良の元服 | 一 夜詰の太鼓 |
| 一 不出門行の詩 | 一 義孝の連歌 |
| 一 鼈塚三所に有 | 一 徂徠の戯言 |
| 一 磯の浪 | 一 下谷の爭論 |
| 一 狐川の名義 | 一 潘谷橋姬の考 |
| 一 そこにべ殿 | 一 名月は俳諧の題 |
| 一 辻能の道成寺 | 一 泊船寺住持 |
| 一 古今傳授 | 一 大佛の御首 |
| 一 七瀬川の秀句 | 一 蘆邊殿の婢女 |
| 一 故人の句を詠 | 一 青砥の續松 |
| 一 山伏の德政 | 一 三船の才 |
| 一 難波次郎 | 一 重衡盛長 |
| 一 岡雨の歌 | 一 六德牒記 |
| 一 内舍人老黨 | 一 蕨風の子 |
| 一 馬の詠たる歌 | 一 かにんの四字 |
| 一 糸平内兵衛 | 一 馬術に雅なし |

一羯摩乗親の面

一雅人の傑

一南方鐻

一竹田近江

一春日野の蟲

一鶯白魚

一賴政の亡魂

一於菊蟲

一鹿の時立

一猿蟹を嫌ふ

一置鼓

一水引

一鳥貝

一放鳥の試み

一はなじろ

一和歌に師なし

一南面の障子

一差合くり

一二萬堂西鶴

一三句の涉り

一記録表紙

一餓鬼つばた

一兄弟の争ひ

一佛は佛師

一運慶の口傳

一鷄懶ハルマシの文

一長範の詠

一日本に象を涉

一清人發句を譯

一師直の歌を譯

一兼好を評す

一勢語源語の評

一解脫上人

一西行の歌

一幽齋の狂歌

一信西豆

一普賢像

一楊貴妃櫻

一利休織部の詫

百六ヶ條

西澤
文庫 皇都午睡初編下の巻

西澤綺語堂李叟著

白氏文集

嵯峨天皇河陽館に御幸有て御製の詩句を參議篁に示し給ふ閉閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船所存申べきよし勅あるけるに篁が曰聖作いみじく遊され候但願くば遙に望の遙の字をかへて空望と改させ給はいますく絶唱と申べく候わんと申されけるに帝愕然として驚かせ給ひ汝もとより此兩句を知れるやと仰られければ篁謹て聖作の一聯臣いかであらかじめ存じ候わんと答奉る帝重ねてのたまふは此二句は白樂天が句にてもとは空望とありしを汝が才を試みんが爲假に遙望とかへて示せしなり實に汝は白樂天と詩情相同じきもの也とて大に賞美したまへりとぞ此時白氏文集纔に一部渡りて官庫にあるのみにて世人いまだ見る事を得ざりければ篁もとよりしらるべきやうなかりしとぞ

紹益吉野を悼む

灰屋紹益は智惠小路上立賣に住て和歌をたしみて貞徳と友たり亦蹴鞠茶事に委敷折には召れて高貴の席にも出ける事有とぞ若き時六條の廓に遊びよし野を根引せし時父の不興を受暫く下京に應求めて夫婦住けり父一日他へ行し歸るさ雨降出ければ路傍の家に走り入て晴間を待此内には爐に釜を懸て閑雅の人の廬と見ゆ主の留主と思しくて女房のいと麗しきが此方へと請じつゝ薄茶を立て出しぬ其褖はづれより茶の手前迄所に見馴ざればいと心おきせられ一禮をのべ雨も止たれば立歸りて次の日しかくのよし人に語ればそれこそ令郎紹益の妾なれ其家は子息の隱宅よと告父はじめてしりて其奇偶を感悟し遂に紹益が勘氣をゆるし吉野を引とりてめあはせしとぞ程遠からぬ下京に其子忍び居ををしらざるは其頃豪富なりし事しるべしと云り吉野は寛永八年六月二十二日に歿す本融院妙供と法號す此時紹益哀悼の歌は都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山に移して紹益が菩提寺は内野新地立本寺也紹益は八十一歳にして歿し元祿四年十一月十二日古繼院紹益と法名す是

をもて數ふれば吉野が歿年は紹益が二十歳の夏也然れば吉野紹益が婦となり程なく十七八歳にて身まかりし物なるべし紹益が玉を失へるの恨前の歌を吟じてもしるべし吉野カントウと蟹の盃の事は人口に膾炙して世に名高し

淡々の示教

俳諧師淡々^庵門人富天に贈る示教に詩は鎚薙刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は相口也並べて短刀は利遠く見をとりするや然れども一機よく胸を定め候へば時に望て至て功有爲氏が館にて口公を弑し荆軻は始皇の膝近く寄たり此時鎚長刀脇差ならば側へよる事なるまじ短刀を圖に卷たればこそ一念存分はなしたり此時秦王の佩たる劔の長きよりたうちに拔事あたわす夏無且が藥囊なくば則終るべし長きとて頼まれず恐るべからず能つらぬき心を定め候得ば藝道何ぞ何をと云事なし唯見性たしかに其的を指べしあらく用ひ候へば俳諧は卑俗に落る事はやし嗜て高きに心を置ば神代の教へ倭朝の道はとゞむべき也されば中興俳道の祖花咲社^{ハナサキシャ}の貞徳季吟芭蕉翁其角引下て陋老富天道統たり時今清得舍此秋押花を以て業を行ふ點格^{ジコンセイトクシヤフアホウウクワ}

並に家説の舊例式新古式本式及褒貶の繪摺物三つ物撰集笠着古式の會等普く教候上は能愼み克守り遠慮可有之候他門もとより正統有べし不知候へば不論候凡餘る程は教候なれば日々執行の外は有間敷也序跋并撰集三章の雪月花おもしろく候不才の病老文章も書忘れたり句は一句「稻の穂の如し蘆の穂水かみ座の句初尾花と置たく覺ゆれども若々しからんと扣候竿秋へ几領を譲り候時は唯夜の花雨の蘆と中侍りし此蘆の穂は蘆の芽の穂となりたると祝し候や鶯の人來く」といとはず怠らず一道の清曉梅咲冬春夏の實秋の紅葉のもみ出るがごとく東てかゝやき榮へたまへ半時庵ふ^苺

輕卒者の連歌

或人連歌一順の月次などはやらすを浦山しく思ひ我もちと稽古せんと思ひ立宗匠する人にむかひ大體一句の仕立はいかなる心持にて工夫致し候わんやと尋ねるにされば此道を學んと思はいいと深くも崩れよらぬ和歌の浦なれば詞短くきりたくば心をまがふ物哀れに華奢風流につく様に有べしと云彼人聞と同じく早合點參りて候一句申さん「首際や二季の彼岸に

茶香杵と云たりして心はと問れされば水をわたるに
首既に及ぶは深ければ也物の哀は二季の彼岸華奢風
流なるは茶と香つくやうには餅つきねと云れて宗
匠返答なくて腹をかゝへぬ

十千十二支

甲乙丙丁戊己庚辛壬癸を十千と唱へて子丑寅卯辰巳
午未申酉戌亥を十二支と呼ぶは當れり婦女子は十二
のえと云り五性にエト二つ宛有て十千を云也兄弟
にて木の兄木の弟とて兄弟也十二支は別にして十の
エトにて十二支をいふにはあらずとしるべし

金鳥玉兔

月の中に兔を書日の中に鶉を畫本金水火東西南北にて土と黃
は中央也北は子の方にて南は午也東は卯にして西は
酉也日月を東西に象りて月に東方卯の影移り日に西
方酉の影移るを畫しものなり是にて金鳥玉兔のわけ
も明白也手ちかきことなれども是をいへる人なかり
しを百人祿といふ書に出たるより人しる事を得たり

定頼の和歌

權中納言定頼歌に巧みに能書の聞え有し人也一條院
大假川へ行幸有ける時定頼父の公任卿とともに帝の

供奉として各歌よみて奉らるゝに公任卿の心に定頼
よき歌をよまれかしと念じ居られしに講師次第に歌
をよみ上る定頼の歌を公任耳をとめて聞ければ水
もなく見へ渡るかな大井川とよみ上げれば餘りに手
簡なる事を云出されたると思ひて公任卿顔色かはり
けるに岑の紅葉は雨とふれども詠終りければ公任卿
思はずうちゑまれたりとぞ

和泉式部

和泉式部播磨書寫山の性空上人に贈りたる歌拾遺集
に入たりくらきよりくらき道にぞ入ぬべきはるかに
てらせ山の端の月是は法華經に従冥入冥永不聞佛名
といふ文あり其心を詠たるにて世に名高き歌也式部
の本名を辨内侍と云り

大佛餅屋

京にて大佛餅流行し爰彼所にて商ふ中に四條畷に此
饅頭を鬻げる近江上味ジヤウミと云者有或時店先へ乞食來り
て饅頭を十ばかり賣りて給われと云に主人出來て非
人には商ひせずと云乞食の云るは我等逆も同じ人也
錢をもて買ふに商ひ物をいかで賣ざるや此理りを聞
べしとて罵りけれ共主人は聊挨拶もなく居たりけ

るが言る事の餘り烈しければ主人店先へ出さらば其譯申聞すべし下に居れとて乞食に向ひ汝等ごとき乞食に賣れぬと云其子細は乞食の身分としてか様な菓子を食べんと思ふは不所存也無益なれども耳あらば聞置べしとて乞食が冠たる手拭を取らせ我商へる饅頭は尋常の製にあらず上品に造りて高貴の方へも奉る菓子也乞食の分際にて食べき品にあらず汝若吾家の菓子を食たくば人並々の者となりて後に求めに來るべし汝諸人の憐みを蒙り僅に露命を繋ぐ身を以て錢有は連上菓子を食事のあるべきや世を恐れざる不屈奴速に行べし須臾も店先を塞べがらすといたく叱りて追立ければ乞食は頭を抱て逃去りぬと此商人一見識有人也

江島屋其磧

予が著述の傳奇作書に出せし江島屋其磧は八文字屋自笑が代作をせし市郎右衛門と云書林なるが始四條御旅町にて大佛餅齋て業とすとあれば前に云近江上味の氣象高き所相似たり江島屋其磧の菓子店近江上味にてはあるまじくや噉と御旅町と書誤りし歟とも思へり其磧自笑と絶交して忤に書林をさせ自作の冊

子を多く板せしに不幸にして賣れず其磧が才自笑に増れども其名自笑が右に出る事あたはず幸不幸は是非なし

市中は中を行

路の堅横交りて曲る所は真中を行べし然らざれば曲る角にて人に行當り牛馬又は荷など持たる者に出會思わぬあやまちをす是互に向ふが見へざれば也幾二三歩をいとひて馬卒販夫の類ひは必曲る所を行物也こなたより心すべし

道路は左を行

路を行人互に左によりて行は常の禮也斯すれば牛馬口付の者も其付たる方に當ればあやまちなし薩州にては夏は自日の照方へ行日陰を人に譲る冬は是に反すとぞ路を譲るの禮至れりといふべし宮寺の開帳に參詣道下向道と分たるは滯らせず怪我あやまちなきよふの計らひ也

毛拔鮓

東都の鮓といへば皆握り鮓のみにして京攝の如く切鮓なし家體店上方にて云の製は格別安宅の鮓安宅御舟藏の地名兩國與兵衛等の製は念の入たる物也龜河岸松五郎鮓也

に笹巻餅とて一宛笹の葉に巻て賣家有此名を毛拔餅と呼ぶ上方者の口に合へば毎度求めながら毛拔餅とは魚の骨をよく抜たる故呼ぶかと思ひしによく考見ればよふ喰ふとの謎なるべしと悟りぬ

一噌の笛

故一噌又六或諸侯方にて能有し時融を吹しに俄に雷動しければ盤渉を改めて黃鐘に吹たり人々如何の事と云しに雷の調子盤渉調なる故吹かへると也道によつて賢し

赤良の狂歌

江戸數寄屋橋邊の或武家を恨みて其人の形を藁人形にて拵へ眼に大なる釘を打て其門に捨しを「のろふとて眼に大釘を打とも耳でなければきく筈はなし」と四方の赤良祝ひ直しければ其後耳へ打て捨しかば「大釘を耳へ打たら耳潰れ聾になれば猶きかぬなれ」と詠けり扱其後又骸中へ惣釘にて打しを捨しかば「身うち皆釘を打とも何のきかふ糠に縁ある藁人形じやと赤良が句にてそののちは捨すなりけり

藤公の笑疾

藤公時平笑疾あり一時朝廷にして此疾發りいかにも

すべからず其日の政事は菅公にゆだねて退き給ふとなん不和にて權を爭わるゝ敵手にあひて如此はさこそ止事得ざるべし五雜俎に陸子龍有笑疾古今一人のみといへるも同じかなたにても珍らしきなるべし唯世に笑中風哭中風といへる物有て是ら實におかしきにあらず悲しきにあらず内より催して詮かたなき也藤公も子龍も此甚しき物歟天神記と云淨瑠璃を増補して天満宮榮種御供の狂言の時菅公尾上菊五郎流罪となり時平叶難助獨り紫宸殿に残り玄老の道眞へなも諷るに手なしはれ心地よいと笑ふを幕にしたるは此時平の笑疾を脚色したる物也今に笑ひ幕と云作者並木十助並木五瓶の師也シヨウジ歌舞妓狂言にも書見だけの力はある物也

百翁の茶會

ヒキヤクワウ飛喜百翁が利休を招きし時西瓜に砂糖をかけて出しかれば利休砂糖のなき所を食て歸り門人にむかい百翁は人に饗應する事を辨へす我等に西瓜を出せしが砂糖をかけて出せり西瓜は西瓜の味みを持し物を似氣なき振舞なりとて笑ひ侍りき

富士と達磨の畫

ある人洪園に畫を學ばん事を乞て僕畫を學ばんと思

ひ立しは他の物を書く事を求めずたい富士と達磨と
のみを書きたしそれも上手とならん事を求めず富士
はいかにも富士と見へ達磨はいかにも達磨と見ゆる
様に畫たしと云り此詞尋常に聞ゆれどもいとおもし
ろし何藝によらず此所をよく辨へぬる時は過不及あ
るべからず

長生殿の繪

白石先生陸奥洞巖老人へ長生殿不老門の書を望れし
書翰のうちに長生殿裏春秋富不老門前日月遲は本朝
の人の句にて候間畫の景色も本朝の如く有度物に候
昔本朝大内裏圖のやうに東叡山の文珠樓門のごとく
中に門ばかり候て左右に扉もなく候中門には格子も
有之扉も左右に候か地取繪様のあら増如此なる望に
候四時をこめ候へば春の方は春の諸木遲速を撰ばず
秋の方は下より梢を見せ何れも雲やりの上下に見へ
候様春には來燕秋には來鴈前に白鶴三つ計但し雖二
つばかりも候わんか書様は眞草行御交へ細密に賑や
かなる所もさらりと仕候所も可有之候其段御筆意に
任せ置候彩色も同じくは輕き方に可有之候歟俗に入
俗を脱し候望に候額字の事板はいかにもひれは上の

方隠し度候泥金可然候か春秋富日月遲は上の方四字
づつ隠れ候心得に候下はつまりて上の明候がおもし
ろく可有之候か雪船の明朝にて霽れ候富士三保の圖
中天に富士をいかにも根張廣く雲頂より出候體にて
殊外引下候て足柄箱根前は三保西は薩埵清見等の山
々浦々を殊の外小さく書れ候それにて富士の三國に
蟠り候體を其儘に見て奇代の物に候意匠の程感じ入
候事に候不老門の圖雲やりか隈どりにて中を書切候
て殿も門もさのみ大からずして大なる心を含ませ度
右の如くに存寄の圖御目に懸候本朝の鴟吻シフをくつが
たと讀來り候心得ぬことに存候に彼大内裏の繪に今
の鯨と申ものとは以の外に違ひ候て沓の形にて候さ
ればこそクツガタとは申と存候只今は制法を存候も
のも是なく候不及是非に事に候か右は要文を摘書畫
は筆とる人のみならず書する人の心ばへも雅俗わか
れて耻かしき物也

月見の松

いつの頃にか有けむ殿下の君立入の去る畫工を召
御襖に須磨の風景を畫書べしと也即つかふまつりて
參らせしに能出來たり但月見の松今二本足らでやと

仰あり彼王は須磨の近き邊りに産れし者なればいか
でか此處の事あやまりぬべきと思へども心濟難く其
後國に歸り須磨に至り月見の松を數ふるに十一本有
我書て奉りしは九本也不思議にも恐入て御内の衆に
伺ひしかども只打笑ひて語られず年を経て又承りし
にいつの頃にか忍びの御遊ありてよく思召こめられ
し事と密に承りて驚入しと即其書工の物語なりしと
也

餛飩豆腐

豆腐は太閤秀吉公朝鮮征伐の時生捕し朝鮮人の教へ
し物也唐土にて淮南王製し初しゆへ淮南王と云キラ
ズを雪花菜といふとぞ其砌は豆腐に紅葉の形を付て
紅葉
かうようならでは遣わぬと云しよし今は◇やら

やら思ひ／＼に付て定る事なし餛飩豆腐を細く切に
は刃物を左りへ／＼と切て行くべし常の通り右へ切
ては豆腐刃物に付碎くる也猶々細くせんと思ふ時は
心太の如く突出す也尤湯を熱立し置其湯の中にて突
出すかよしと云り

李白仲磨を悼

遣唐使の事をよつの船と歌にはよめり阿倍朝臣安磨

を大使とし藤原宇合を副使として唐へつかわされけ
る此時下道の眞備後に吉備大臣と云安倍の仲磨を留學生とし
て遣わさる仲磨は唐朝の風をよろこびて唐に残り此
後藤原清河を大使として大伴古磨と吉備公とを副使
としてつかわされし時仲磨に命じて今度の遣唐使を
接待せしめられたり清河日本へ歸らるゝ時仲磨も歸
朝せんとて玄宗帝に暇を乞て歸られんとしたる時平
生交を結びたる詩人文人に書殘されたる仲磨の詩有
文苑英華唐詩品彙にのせたり明州と云海邊にて海上
の月をみてあまの原の歌をよまれ明州を出船せられ
たるにはからず海上にて難風にあひ安南國に漂着し
ければ清河と共に再び唐朝に入られぬ此時仲磨日本
歸朝の海上にて難風にあひ溺れ死したりと唐土に風
聞有ければ李白は哭して詩を作りし也其詩は日本晁
卿辭帝都片帆百里繞蓬壺明月不歸沈碧海白雲秋色滿
蒼梧晁卿とは仲磨唐にて改名して朝衡と云ける朝の
字と晁の字と其音通する故なるべし

支考の俳言

俳師支考の云月雪花郭公は君にもあらず父にもあら
ず我等が爲の慰もの也糞とも云味噌とも云人參附子

ともあがめて四季に心易き出入の者ともいふべし賞てよき時はほめおかしき時は譏ても遊ぶべし心に止めざれば氣一物の人也とて月花も腹は立ぬ物也とぞ

年中の雨

信貴の毘沙門堂に四季連歌の句合有其中に五月雨中の雨降盡しと云句有何某の大納言聞し召れて何者の申たるにか此句の主を尋ぬべしとありける時高橋某その者を問ひければ彼あたりなる村長の申たる句也としれ消息して京へ出るならば參るべしとの事ゆへかの村長わざ／＼京へ行御館へ上りしに逢ひて物語せんとて一間に通じ給へば風流の面白雲の上迄聞へけんこと社いと有難けれと云に大納言も四方の話有て扱尋給ふは年中の雨といへる趣向のおもしろく覺ゆるからに其句意を聞度侍れば逢申たりいかなる故事や有てかく申せしぞと有ければ村長答へて云やう別に故事と申も候わす只五月雨のきのふも降りふもふり續て翌も又斯降くらしなば一年の雨も降り盡しぬべきと思われ申たるより外所存なく候と申ければ面白く覺ゆる也とて入給ひぬ村長が歸りし後高橋出て尋ね參らせければ大納言の仰にさりとては麿

が思ひしとは違へり五月雨には四時の如く雨のさま色々に降りけるゆへ春雨の淋しきにくらべ夏の夕立にたぐへ秋の雨の物凄きにかち冬の雨の寒きにも譬へたり此事古き物語りにもあればそれをしりたる句にやとゆかしく尋ね侍れどもさはなくて只雨の降り盡すのみ作りし事故卑怯とは思ひ侍りぬと仰られし

蕉雨の發句

予が俳友信州の蕉雨以前四季の句書をこせし中に五月雨や時雨村雨春の雨と云句あり此殿の古き物語とあるは清女が枕の草紙にやあらん俳師鬼貫の云未熟の人の俳諧は春雨のと五文字を云出し時春雨先に出候といへば秋さめのと付かへ侍らんと云社うたてけれ春の月はくれ初るより朧立て物たゝぬけしき夏の月は灯を遠く置て詠め深し秋の月は窓に軒に海に川に野に山に詠有冬の月はひとむらの雲の雨こぼし行隙をてらしていそがし春の雨は物籠りて寂し夕立は氣晴て涼し秋の雨は衾にて淋し冬の雨は底より淋し鶯の聞郭公は待侘るこそ詮なるべけれ四季折々の草木ひとつ／＼辨ふべしと有蕉雨の句は則是なり大納

言の話は古く蕉雨は近世の人なれば是非なけれど此句を彼大納言殿に見せたらば嘸かし褒美あらんものをいとのかりおし

行脚に句を買ふ

予が幼き頃俳友の一老人有暮三と云てさ迄聞へたる句もなき人なれど癖物にておかしき人也俳諧行脚一人來て暮三の方に宿り日毎に諸々の詞宗家を訪ひ一日俳席の通題に五月雨の佳句詠出一座の評よかりければ歸りて主人に語る其句は降中に降出す音や五月雨主人大に感じ古人五月雨の句數多あれどもかふも打付に詠たる句なし此句を我に賣よといへども行脚はかゝる句を詠出ん爲の修行者なれば賣らじと云折節更衣の時節なれど旅の身なれば古着の儘にて容甚見苦し此句を我に賣て新に衣を更よと一圓金にて求め扱摺物をすらせ是にさる行脚より求たる句にと前書して降中にの句を社友に配り此摺物のちらばりし先だけは我句也他所では自身詠たる句なれば自由に書給へと云しもおかしからずや是ら風流の上の滑稽なるべし

無名の短策

源俊賴朝臣は歌をよむに容易はよまず心を入れて案じられ物に感ずる事ありてよき歌の出來たる時は是を書付置てさと思ふ時出して人にも示されたり又人のいまだ讀ぬ新奇の事をよみ出たる人也俊賴常にいなるゝには和歌を判する者十徳を備ふるにあらざれば能わざる也いはゆる徳望門地明辨強記の類也と云り徳望とは人にめざれ仰がるゝ也門地は家柄なり明辨はあきらかにわかつ事強記は物覺へのつよき事也或時法性寺殿にて會有けるに俊賴參られたり兼昌講師にて歌よみあぐるに俊賴の歌に名を書れざりければしばし見合せて打しはぶきなどして御名はいかにとしのびやかにいひけるを只よみ給へと云れければ讀上げる其歌は「うの花はみなしらがともみゆるかな賤が垣根もとよりにけり」と書たるを兼昌しきりにうなづき感じけりやがて此歌の中に我名をよみ入られたればわざと名は書れざりしと也

光次

小判壹歩判に光次の字有五世後藤德乗が名乗也四郎兵衛家は世々大判座也德乗在京の節御用あるよしにて江戸へ召れしに病氣と申立名代に家來永井庄右衛

門をさし下す此時初て小判を吹候様にとの事也庄右衛門下りて御用承り候まゝ直に庄右衛門を願候て小判座に取立後藤の名字を譲り後藤庄三郎と成今以て相續也德乘初て承り候こと故光次の字を設け今に其儘にふく也

内科外科

醫師に内科外科有科はしなをわかつて内外を別にして療治する也然れども内外元ひとつ也互にしらずんば有べからず

基俊歌を盗まる

藤原の基俊は生得文才ありて和歌をよくし又兼て詩をよくせられたれど人にはこりて當世を見下しとかくに人を批難することを好まれければそれに付てそしりを得らるゝ事多かりし或時人々和歌を詠じけるに基俊傍によりて深く歌を案じ入て我しらず聲にあらわしてめざましき迄ちる紅葉かなと吟せられたるを其座に有ける顯仲入道是をもれ聞てかたわらに居たる右馬助何某が歌出来かねて歎くにさゝやきていはく早く此上の句をよみそへて出されよと教へられければ右馬助よろこびておしへのごとく上の句をよ

みそへて我歌としてさし出したり扱一座みなよみ果て披露の時右馬助もと下臈たるにより先此歌を講じければ基俊聞て大に興さめたるけしきなるを顯仲はゑゑみて聞居られたり扱次々に講じて上座の基俊の歌を講ずるに彼右馬助と同じ下の句なりければ顯仲わざとしらぬ顔にて會釋して右馬助はよく思ひよられたり歌仙たる基俊ぬしと同じ下の句なる事今日の名譽也と申されければ基俊は我歌を盗み聞れたると思はずしていよ／＼不請フシヤウのけしきなりし是も基俊兼て人々に中あしかりけるゆへあざむかれたる也

よしにせよ

物を無用といふ詞のかわりよしにせよと云はあら鹽も戸ざしもよしや駿河なる清見が關は三保の松原此歌にて心得ぬべし三保の松原の面白きけしきを詠めぬば關に及ばず行すとも清見が關はよしにせよとよめり

商人の學問立

江戸に材木商賣の伏見屋才治郎と云者有常々學問シヤウガクだてせられしある時手代に物云付るとて深川松丸シヤウガク太長短下直調と云しを手代は聞馴ぬ詞にて心得ざりし

を汝文官なりとて大に呵りしとかやかばかりの心のへ材木屋仲間及び隣家の人とも不和にて有しと也

短文の書狀

さる強氣の武士京に居て知音の僧へ遣したる書狀に送り進する十八本松茸恐惶謹言又國への文に一筆啓上火の用心子供泣すな馬肥せしと書おくられし武夫の實情あり只入用の專計かぞへたる是らも俳諧にとりて疊之上たる働ならずやと大江丸舊國は申されし也

國姓爺弟

長崎紙屋町田中七左衛門と云者は大明の鄭一官が子國姓爺が爲には弟錦舎が爲には伯父也父母ともに異朝にて韃靼人に殺されしにより渡海の訴狀奉りて來朝せしは延寶七年八月の事なり

自鳴鐘

ある人時刻を知らん爲にとて自鳴鐘を求めんとするを其妻是を止めて云けるは自鳴鐘の爲にかへりて時を失ふこと多らん止給へといへばさあらば庭鳥を飼べしと云に其妻又止めて云けるは時刻は人の上にある沙の満干も是とおなじかるべし自鳴鐘を便りとす

るは勤に怠る者の致す事也と夫を諫め終に鶏をも飼すなりにき

大男小男

イシリキウシゲウ

南部信濃侯國方より石力雲藏とて丈七尺五寸杉臺右衛門とて長三尺一寸ある男を珍らしとて連給ひし雲藏が右の袖口より臺右衛門匂入て左の方へ拔出し誠に過不及の違ひ也在江戸の中邸にて人々に見せたまひしと也

兼良の元服

一條攝政兼良公十二歳にて御元服有し時虚空に何ともしれず怪しき聲有て猿のかしらに烏帽子着せけりと聞へしかば頓て縁の方に走り出させ給ひて元服は未の時に傾てと附させたまへるとなん此公の御顔のかゝり猿に似させたまへる故なりとかや幼き時よりかゝる俊才ゆへにこそ著し給ふ書籍世に多く傳へり

夜詰の大鼓

牧野長岡侯に仕へし吉田助六は大倉流の大鼓をよく打數年泊り番の節革をよくほうじさめぬ様に帛紗に包み夜具の内に入れし也或夜君侯夜詰の節ふと謠を諷ひ給ひ夜が更ずば助六が一調を聴べきがもはや九

つにもなるべし今より革など取よせ候は遅くなるべし残念也とのたまひしゆへ御所望に御座候は仕るべきよし申上ければ急には革出来まじきかとありけるまゝ當番の節は急なる御用もはかり難かりしゆへ常に持參仕ると申て早速取出し打けるが一段よく出来しとて褒美なりける其後又所望有けるが一度は御用相立申候事故夫よりは泊り番ごとに持參不仕候と申ければ是も尤也所望のたびに間にあわばけつく珍らしかるまじとて彌賞美せられしよし此助六は和歌も心がけし者なれば常に雅なる咄しも有しと也

不出門行の詩

菅原道真公の右大臣の官職を停て太宰權帥に左遷せられかの地にも不出門行と云詩を作りて何方へも立出たまわす都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲此一聯は白樂天が遺愛寺鐘歇枕聽香爐峯雪撥看と作りしにもまさりぬべしと昔の博士どもは賞じあへりとぞ

義孝の連歌

藤原義孝は謙德公の三男にて或年一條院の御前にて人々連歌しけるに秋は只夕間暮こそたいならねと云句の出来たりけるを人々聲々に詠じてたび／＼にな

りけれど是に付る人もなかりけるに義孝の少將十二歳なりけるが萩の上風萩の下露と付られければ人々驚て賞歎しあへり中務といふ歌よみの女房上東門院へ申上ければいとこまかなる下の句にて殊に有がたく聞ゆるは人丸赤人又昔のめでたかりし人々の再び生れたるならんと仰ありしよし中務もわたくしに申そへける萩のはに風をとづるゝゆふべには萩の下露置ぞましける此事を聞傳へて其頃は天下にやさしきわざ也と申あへりけるとぞ此義孝はのちに痘瘡の病にて失たまひ賀縁阿闍梨と申僧の夢に義孝昔製蓬萊宮裏月今遊極樂界中風とぞ誦したまひけると也此義孝の御子は能書の名高き侍従大納言行成卿也

臧塚三所に

筑前國濱男と云所に耳塚有神功皇后三韓を討たまひし時其國人の臧を埋給ひし所是本朝臧塚の始にして此後源の義家朝臣奥州の戦ひに打勝河内國に臧塚を築き耳納寺を建らる是第二度也豊臣公京大佛に耳塚を築かれしは第三度也耳塚は左氏傳所謂京觀也と云り

徂徠の臧言

正五九月に寺より祈禱の札とて持來れば徂徠先生其儘いたゞきて居間に張られしと也門人何とて札をはり給ふと問へば是も寺の役にて精を入れしもの也龐略にせんやと云れしと也

礮の浪

光源院殿京都四條の道場陣を取御座有し時夜九つの太鼓を寢惚七つの時打けり公方より御使ありて番の僧を召す定て折檻に及びなんと震ふて參りければ様子御尋ね有するにさん候深く睡り入目覺仰天仕ての故とありの儘申上げれば案の外御機嫌よくて「此寺の時のたいこは礮の浪おきしたびにぞ打といふなると狂歌を下されしと也

三條三光院殿十六歳の御時禁中にて懷舊と云題出たりつるに幼稚の御身には古今の難題なれば何とも讀にくしとあれども一座皆面白き顔にみなし誰題を取かへよさんと云人なかりしに程近き我昔さへ戀しきに老はいかなるなみだなるらんと遊ばされしと也

下谷の爭論

江都下谷にて或浪人蹲りて小便せしを侍二人話し乍爰を通り一人の侍浪人の刃に行當りしかどさらぬ體

にて過行浪人思ふには此人見しらざれば意恨あるべき理なしとは自分の丁簡なりとて跡より走り付只今かゝる事候ひしが定て御心のある事にはあらじ但しかなる事もやと尋ねければ誠にこまやかなる仰詞や只に御免あれと互に慇懃に禮を述て別れけりかの連は一町計り過て相待所へ侍追付件の荒増を語れば連人以の外氣色をなしそれさまの事云せて聞しや何條討捨ざるや汝は腰の抜しとて散々に罵りければ是は何事ぞや互ひに意恨のなき事なれば討果すべき謂なし夫に我を腰拔と云しは堪忍なりがたしとて雙方抜合ひ火花をちらして討戦ひ互ひに手を負し所へ浪人町中の譟を聞駈つけて窺ひ見しに件の人血刀にすがり有ければこわいかなる故にやと近より事の要を問へばしかんと答ふそれ遁さじと追かけ詞をかけ造作もなく切伏首を引提立歸り是見給へと有ければ斜ならずよるこび懇に禮を盡し我は喧嘩の相手なれば切腹すべしといへば浪人が曰そのもとは某也然らば互ひに刺違んと有しに町人打より押留奉行所に罷出一々の事訴へしかば委敷聞得させ上へ御伺有しにや是は喧嘩にはあらず亂心也何れも神妙の事也と

仰有て濟けり

狐川の名義

右は新著聞集の中の一話也此書寛延二巳年出版然れば百年餘跡の話也新著聞集出版より十五年前享保廿年に蒔萱桑門筑紫轅作者並木丈助の淨瑠璃狂言二の口狐川の渡し場にて玉屋與治鬼柳一角との口論を加藤重氏が扱ふて一腰づ、刀を遣る場は此一話を潤色せしもの也此狐川の名義は古くより有て不解予が綺語文章に往古木津川一名泉川の流八幡の上に流れて木津根川とも云爰にある渡しゆへ木津根渡しとも呼やらんと例の癖考を記せしが如何あらん

潘谷橋姫の考

癖考の因に京の潘谷は苦集滅道と古名を呼び俗に澁谷タニともいへど蟬麿の詠是や此行も歸るも別れてはしるもしらぬも逢坂の關とあるしるもしらぬもは潘谷の地名を讀込みしにやあらん又宇治橋三の間の水汲場所にて川上へ建出せしは往古橋姫宮此橋上に有て宮の舊地也と云愚考委しく文章に出せしが故人の説にもれしは如何是も予が淺見にやあらん尋べし

そこにべ殿

備前の國岡山にそこにべと云魚有餘國には稀なるよし大守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城におわしける時彼魚を送らるゝ隆景近習の侍に仰夜中に備前そこにべが來し程に家老の衆に今朝ふるまふべき由申せとあれば彼者まわりて備前より夜前そこにべ殿御越にて候今朝振舞あり出仕あれとぞ申ける各慇懃に出立參らるゝに客とてはなく出たる膳部を見ればそこにべの汁なり右の様子を申されて大笑ひありし也

名月は俳諧の題

去る止事なき御方の説に名月の文字史記月令爾雅などにも見あたらず又源氏須磨の巻にこよひは八月十五夜にても有夕顔の巻に八月十五夜月のあきらか成とあり詩歌の題にも八月十五夜とあり邂逅明月とかけるは只月の清光なるを詠ず按るに八月十五夜を名月といへる事俳諧の家より云始て本邦の俗稱となれるならひか良夜とはいつにても月のよき夜といふ事也たゞし中秋の十五夜は動のとれぬ良夜なるべし今更是を改がほなるもいかゞ心にこめてあるべしと仰られしと也

辻能の道成寺

能太夫橋本何某友人と二人古堀井專助が辻能を見物せらる其日は道成寺なりしを見ていかにも感心の體有しかば友の曰辻能はよく能に似たる事をして間を合す物とこそ承れいかにかく迄はめ給ふやと云橋本の答にさら／＼左様なる事にはあらず專助が道成寺始て見申せしが感心いふばかりなし今の世にて口利く太夫のうちに是程道成寺をこなすべき人あるまじく覺ゆる也其體はともあれ一體が我ものになり濟してゐる也外のものをするとかわる事なし故にくつろき有て面白し道成寺の場數專助はどつとめし者あらじ誰にてもあれすは道成寺なりと心の改まらぬ者あらじ是くつろぎを失ふ所なるべしと申されしと也書畫をしたゝむるにも詩歌連俳にても其序に出で心あらたまらずくつろぎ有たきものなり

泊船寺住持

江戸品川泊船寺住持延寶七年十一月廿四日の夢に高僧來らせ汝は來年二月廿四日に身まかる也其心得あれとて詩を賦し示したまふ六十四年混世塵夢中不覺養殘身不來不去是何者二月花開南谷春翌朝より此事

を口癖の様に云れて明る庚申の年の元日の發句に見じ聞じいわぬがましじや申の年と云戯れて二月中旬より違例の心地にてさのみ惱む氣もなく廿四日に六十四才にて正念に臨終せられし此人は常に大酒を好み佛道に愚に見へければ他の嘲りも多かりしかど心中にいかなる目出度事ありしやと人々慚愧しけり

古今傳授

將軍家光公の中院通村卿を召て古今傳授ありたきよし仰られしかど此義は公家の秘する所にて容易に武家に渡し難き道也思召とまらせたまへとて傳へおはさゞりしかば御心よからで三年歸洛御ゆるしなかりしに「行方に身をば誘はで夜な／＼の袖に露とふむさしの、月と詠じたまへるを聞召ていと貴みうつくしみ給ひて都に歸したまへるとかや

大佛の御首

京百万遍回祿して後其地を東河原に移されし時釋迦の像大佛なれば御身を取放ち御首を車にて牽けるに日野大納言殿折しも格子より顔さし出し見給ひ只今釋迦の首を引はいかなる咎めされしぞと仰られしに

其儘顔格子に取付て離れざれば大に驚きさま／＼訖言したまひて漸々離れし忽日蓮宗を改め百万遍の中養春院の檀那となりたまひし釋迦堂は則大納言殿より建立したまひしと也

七瀬川の秀句

西行法師修行の時津の國七瀬川にて麥粉を喰ふとしてしきりにむせられけるを馬上より侍の見つけ「此川はな／＼せの河ときくものをお僧をみればむせわたるかな時に西行の返歌此川を七瀬の川ときく物を召たる馬はやせわたるかなと笑ひて別れし

蘆邊殿の婢女

新古今に道のべに清水流るゝ柳陰しばしとてこそ立どまりつれとは下野國の蘆野と云所にて西行の詠たる歌とて今も柳有りて古跡と云いつの頃か蘆野殿へ京より女の宮仕に参りて三とせ計勤て都へかへる時御餞どもいと興ありて其方の名をけふよりつれと替よと仰ありければ女とりあへずしばしとてこそと存候に御恵にひかれて三とせは立どまりつれと申上げるとぞ心あるそだちの女なりけり

故人の句を詠

古き歌を折よく誦し出たらむはあらたによめるよりも風情ありとや淀のあたりの杜宇宗盛の宇治の奉納など手柄有てきこゆと承る近頃尾張の人の妻の七とせまで腰たゝで有しが終に身まかりし時「麥喰し雁と思へど別れかなと野水が句をつぶやさしいと哀にして野水が作せるよりも情あつかりけると鳴海の蝶羅が物語也常に風流の心なき人も物の善惡に感じて思わす秀逸の句あり遠江の國に或人の子をうしなひて其一年の廻り來りし頃「去年迄呵つた瓜も手向けり千万の哀を含ませ出したり

青砥の續松

北野通夜物語に昔青砥左衛門夜に入て出仕しけるにいつも燧袋に入て持たる錢十文誤つて滑川へ落したりけるをよし扱もあれかしとてこそ過行べかりしを其邊の人家へ人を走らせ錢五十文持せやりて續松を十抱買ふて是を燃しつゝ川を浚て終に十文の錢を求め得たりけるが十文の錢は只今求めずば水底に沈て長く失ぬべし五十文の錢は商人の手に渡りて永く失す彼と我との差別があるべき彼此六十文の錢を失はず豈天下の利にあらずやと云しとぞ五十文の錢を

費して十文の錢を求るは小利大損と俗は云べけれど道理においてすべき所を考てする事なれば拔群の見識なくてはなるまじき事也商人と我と何の差別があるべきと云るは楚人得之といふよりも其識量かさ大なる事也其言行世に傳らざるこそ遺恨なれ

山伏の徳政

將軍天下を治め給ふ此御代に賢臣義士多き中に京都の所司代として訟を聽理非を決斷せらるゝに富貴の人とてもへつらふ色なく貧賤の者とてもくだせる體なし然る間上下萬民裁許を悦んで奇なる哉妙なるかなと讃嘆する人街に滿り一滴舌上に通じて大海の鹽味をしないとあれば其金語の端を云に餘は知ぬべきや然る時越後にて山伏宿をかりぬ其節國主の迎ひに宿の主も罷出るに彼山伏のさしたる刀拵と云作りと云世にすぐれたる物なるを借りて行末宿に歸らざる間に一國徳政の札立けり去程に亭主歸りても刀をかへす事なし山伏堪へ兼しきりに乞ふ宿の主返事に其元の刀借りたる所實正也され其徳政の札立たる上は此刀も流れたる也さらゝ歸すまじきと云出入になれければ雙方江戸へ參り大相國の御前の沙汰になれり

其砌京の所司代下向あり御前に侍られしが此裁許いかにと御鉦あるを謹で造作もなき儀と存候幸ひ札の上にて亭主が借りたる刀を流し候はゞ又山伏がかりたる家をも皆山伏がに仕べきもの也と申上られしかば大相國御感甚かりしとぞ當意即妙の下知なるかな以正理之藥治訴訟之病挑憲法之燈照愁歎之闇といふ金言もよそならず

三船の才

大納言經信は博學多藝にして殊に和歌をよくせられしかば藤原公任と並びて世に稱せらる白河院大堰川に行幸ありける日詩歌管絃の三の船をうかべて其道々の人を分てのせられけるに經信卿遲參の間主上の御けしき殊の外あしかりけるがしばし待れて參られたり此經信卿は詩も歌も管絃も三事ながら兼まなびたる人にて河の汀にひざまづきて何れの船なりともよせ候へといはれたるは時にとりていみじかりけりかくいわんとてわざと遅く參られたるなるべし扱管絃の船に乗て詩と歌とを献せられたり三船にのると云しは此事也先に大納言公任も三船にのられたる事有ければ此兩人を三船の才人といひ傳へたり

難波次郎

平氏の士難波次郎が母は小松殿の乳人に仕へて嚴直大慈二つながら全く歳六十にして故郷攝州難波に歸り住家極て貧しかりしが次郎常に母に仕ること恭謹にして農業のいとま薪を負て市に鬻身に被袴なしといへども母には滋味を盡せり後平家に仕へて邸を洛中に賜わり母を迎ふるに母行ずして云老嫗歳既に六十に餘れり世に在の日少し汝今官に仕へ身を立家を起すの時至れり獨の老嫗の爲に心ひかれて奉公に懈らば忠を盡し名をなすの妨なるべし吾飲食だに足らば都へ出て榮耀にはこるの志なしとて迎への輩を洛に歸して自害して果たり次郎悲歎に堪ずして暫の暇を乞ひ故郷に歸り老母の亡跡を弔らひ洛に立歸りて清水寺に供養の塔を營みいよゝ忠勤をはげみ相國に仕へりと云り此事平家物語盛衰記などに見へずかゝる忠孝を擧ずしてさせる功もなき人のやうにしるし傳へたるこそ恨なれ無道の君に仕へたれば至孝誠忠二つながら埋もれたるはいと口惜き事ならずや

重衡盛長

平家盛りの比本三位重衡參内の折から帝より扇の地

を賜わりける時郭公を一羽書たるを折らせられしにあやまちて鳥を切はなち尾のみ残りたるへ歌よめと仰有ける時さ月やみくらはし山の杜宇姿を人に見する物かはとよみたり又後藤兵衛尉盛長に平氏歿落の時重衡逢給ひて我馬を射られたり汝が馬を貸せよとありけるを盛長いなみて今我敵と戦ふの時也逆のび給ふには歩にても有なん是は雨夜の傘なり貸參らせんとて走り行て戦へりとぞ

閏雨の歌

柳里恭が影法師の文に汝吾産れし時より吾側に在て暫し間も離るゝ事なしといへども我親にもあらず子にもあらず主にも召使にもあらず妻にもあらず乳人にもあらず只朝夕吾なすことのみして更に他の業をなさず悦ぶ事なく怒事なく憐む事なく樂む事なし思ふに目しゐたる者を友とすれば是を見せんとするに煩らひ耳しゐたる者を友とすれば是を聞せんとするに煩ひ啞を友とすれば是をさとせんとするに煩ふ汝今吾有なるによりて汝が無を守るとも吾又汝が無によりて吾有を守る所をしらすもゝ汝は吾影なるかはた又人の影なるかと問へば返したる歌とて我

影を我ぞと思ふ世の人にもいふ口はまたぬ影法師

六徳牒記

六徳牒記に云綾羅錦繡もて夜の物を造り薄ものすいしに蚊のわづらわしきを避るは定紋に片意地はりて紙子に淺瀬を渡る事をしらざるなるべし土焼の火鉢ひとつは道具買も遺念なく紙もて作れる蚊帳一張紙屑かふ者の眸をうながすはともあれ盗人をして心を動さしむる事なかるべし薄紙一重に世塵をさけ濕をのぞきて寐冷せず風を入れるゝ時は水濱にあるよりも涼しく書を見る時は螢雪の窓よりも明しゐぎたなき姿を人に見せぬ計り夏候が妓衣の巧にもまされり晝は丸めて屏風の後へ投込み折目を正す世話もなし秋去冬來れば被りて霜雪のはげしきをも凌げば一物にして六用あり彼太宗が歌舞のからうたにはよらねど我是に名を與へて六徳の牒とよび道こそなけれど驚きたる山の奥にも思ひ入らず只此うちに延臥してやがて出じとは思ひそみけり

内舍人老黨

内舍人は人數多くて紛るゝが故に其姓を付て源内藤内平内善内伴内と云也天野藤内は藤原氏の内舍人也

紀内行景は紀氏の内舍人也伊賀平内左衛門は平氏にて内舍人と左衛門尉を兼帶したる人也今世源内平内などゝ呼名につくは僻言也老黨若黨といふ名目は昔武士の黨紀清雨の類の者の中に然るべき者を老黨と云其次を若黨と云は此餘風なりとしるべし

厥風の子

東都にて冬日の暖きを辻番の布子と云前句附に辻番の布子は西へ入給ふと有浪華にて小春頃に幼童の詞にヲ、寒小寒猿のべ、借つて着猿の甚兵衛とも云甚兵衛の事なり甚兵衛は始織の事なり人名なるべし辻番の布子と品こそかわれ對句なるべし又寒風の吹もいとわで幼童の足袋もはかで朝の間に門に出て用水の水を割雪を固めて兎を拵るなワラベどを見て厥風の子と云是童風の子の訛にて風の子とは夫婦の間の子なれば也といへり

馬の詠たる歌

少し假名を讀人の友に云けるは此程徒然草を見て遊ぶが面白ふ候よとありしかば其座に居たる者差出て搆へて口當りよしと思ふて多く參るなつれゝ草のあへ物も過れば毒じやと申せしよし様な差出者古今の序を聽はづりて昔は花になく鶯水に栖蛙を始馬

など迄歌をば詠たれば人倫たる身をうけながら五文字七文字のわかちさへしらぬは残念なる事やと歎くをあらやさしの心ばへや去ながら馬の讀たる歌とはいまだ聞かず聞たしといへば世の中にさらぬ別のなくもがなちよもと祈る人の子の爲是こそ馬の詠たる歌也否それは業平の歌にてはなきか念もなひ湯屋の謠にそも此歌と申は長岡に住給ふ老馬のよめる歌也と云たり

かんにんの四字

或人文盲なる者を意見して世の交りは他の事はいらす唯堪忍の二字をよく守るべしといへば文盲人は頭を傾けかんにんとは四字にて侍らずや御許には思し違なるべしかんにんと四字にて侍ると指をもて數へながらいへば意見せし人云愚昧の人かな堪忍とはたえしのぶと讀て二字也といへば又頭を傾けてたえしのぶならば又一字ふえたり五字となり侍るべし何と仰有とも我等は四字と思侍れば四字にてかんにんは致し侍る也と云るに其人又云汝が如き愚昧の文盲は實に論難し人に似て蟲同様也己が儘にすべしと大にいきどほりければ文盲人笑つて何とも仰あるべし我

等のかんにんの四字を知り侍れば惡口せられても少しも腹立侍らざる也とて笑ひ居しとぞ其智には及ぶべく其愚には及べからず

業平内兵衛

淺草觀音の寺内に糸の平内兵衛の石像有てよく入口に贈炙すれ共いつの頃の士何國の藩中と體に書しものもなし内藤山城守の家中家富馬も二疋迄は繫しと也剛質にて力業を好み件の石像を存生の内に作らせ死後に印となすべしとて庭に居置しと也歷々の侍なれども石像拙なれば其跡卑し雅を學ばざる人の失知べし又品川東海寺澤庵和尚の石碑の邊りに丸き石いくらもちまろばしあり道に轉び出などせしまゝ自往來の足にかゝり石に銘なければ他所の者しらすといへど寺には別に帳有て南より何番目は某印北より何番目は某の印と詳に圖せる由也

馬術に雅なし

昔より馬術に達したる人に學問ある人は稀なる由八條家に故實遣りたれども今傳ふる人なし大坪流の馬書も俗なる事多く詞古からず雲霞集には雅なる事少しく有「さなみ」みさご鳥「遠山の月」櫻かげなどは馬

騎の口からは出まじき詞也近年に至りて「^{ハナ}刎ざり」もろあたり「放し刎など云は全く當時の馬乗り詞也馬の目所も」山合「小松原あつかふ目所甚詞卑し馬乗の内にも少文字の讀る者は馬は餘り上手」沙汰なし夫より末になりては只世間並の馬騎とはなれりとぞ

羯摩乗親の面

羯摩乗親は極て面打の上手なりけれども一年に一つは打す性酒を好みて酔て舞ふ事を樂しむ老母の曰米の櫃蜘蛛の巣をかけたり勤めて打べきにやとせめければ乗親驚てさあらば今日よりして懈らず打べしとて籠けるが四五日を経て面を打て誂へたるかたへ持行料を持歸りて母に渡しければ母悦びてかく多くの金を得しは面いくつ打たるやと問に面は八つ打たれども心に叶わざるが七面あれば皆家に残せりとて取出し見せたり鬼女の假面なりければ見るさへ恐しとて傍に置けり其夜盜人入て親子臥たるを伺ふを見て母かの鬼面を顔に覆ひて眼の穴より見ながらやよ盜人の入たるぞ乗親起よと云けるを盜人見てあとさけび驚何國ともなく逃失ぬとぞ

雅人の傑

遊樂は費なることに有費を省ば樂なし慰みは無益なる物に有無益をいとふ時は慰みなし面白きは危き所に有危きを避れば面白き事なし長生は勞と食とに有勞せずして食に過不及なければ命天然を終る事を得べし調度と人身と同じ多く遣へば損じ遣わざるも又損せりされば養生は過不及なきを守るべし病は不養生に有て世に氣を屈託するもの常に病なきにあらず右は柳澤淇園の詞なり里恭は文學武術を始人の師たるに足る藝十六に及び中にも書は長ず近世崎人傳に悉しく出たれば云す此人に對する人二人有彦根の森川許六是又俳諧に達し書を善す次で尾陽の横井也有なり此人畫はならねども狂文には妙を得たり此三士ともなす事は違へども大約氣象の同じき所有近世雅人の三傑と云べし

南方鐺

尾州名古屋の毛拔師の銘に南方と云あり諸葛亮孔明出師の表に深く不毛の地に入て今南方を定むと有て不毛といふより昔近衛殿下より下されし名なりと云其角の附句に毛拔にも名を給ふ君が世と有夏祭浪華鑑住吉の場の淨瑠璃の文談に其間に拔さいた髪拔ふ

と床の床机に上足打煙艸入から出す簞もなんぼうふときせんさく也と有るも此南方鍋の事也

竹田近江

近松門左衛門國姓爺合戦といへる淨瑠璃を作して大當せし跡を猶面白き趣向もがたと枕を割て工夫に渡る其時の芝居主竹田近江云には作者の心にはさこそ存せらるべきかかく大當りの跡は大體すらくとしたる事をなして置るべし國姓爺にて餘程の徳分あれば一二年不當りしたりとも我等式が給る程は澤山也其間は古き物にても出し候内には自然と能狂言も出候わん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらむ時は我業は盡果申さん只天然にまかされよと申たるは一道に秀たる者の詞諸道に通せり感ずべし

春日野の蟲

南都の人松虫鈴虫を捉ふるに挑灯を携へて叢中に夜行けば其光によつて飛來ると云は昔の事にて當時蟲を捉ふ者は竹を二本持晝行て薄を押分れば蟲其驚て飛出るを捉ふ又飴を持行て捉ふとも中にも點智者は薄を根ごしに吾庭に植ゆ都てかゝる蟲は薄の中に卵を残せばことしの卵來る年の秋に至りてかへりて聲

をなす吾庭にて生じたるをとりて籠にこめて賣ればいと安し春日野にて蟲も捉り薄も根こせば聲格別によきと云り

鶯白魚

東叡山の宮江戸の鶯には訛有とて京都の鶯數千羽を取寄て上野の山に放されしを年々卵をのこし今に上野の鶯は訛らぬよし鶯塚の名も是より呼桑名の城主白魚の種を品川に取寄られしより今白魚は東都第一の名物とはなりけり往古は嵐山へ芳野の櫻を移し植させ奈良の都の八重櫻を取寄せらる杯皆風雅の道を盡せり何れも優なる事にぞありけり

頼政の亡魂

螢と云虫は腐草化して螢となるとあれど年々卵を草の莖に残すを翌年初夏の頃自然とかへり飛かふよし故に石山は早く宇治は遅しと云萍或は藻にとまりて流るゝゆへなりと兎道にて扇の芝邊に飛かふを頼政の亡魂と云は俚言にして茅根化して螢となるを誤りしものなりとぞ

お菊蟲

駿河の町に蚊蜻蛉と云蟲彌生半に飛廻り往來の鼻口

へもはいらんばかり也是今川義元の亡魂也と里人は
いへども風土によつて生ずるか是も茅根化して蛟蜻
蛉となるにやあらんお菊蟲とて女の後手に括られし
姿の蟲生ずるも其土地の風土に生ずる也播州皿屋鋪
とて狂言にはすれど實は東都番町の事にて小畑孫市
の室姪妬深く神妙のお菊を井戸へ落し入て殺す其
靈崇りをなす故甲州の知行所に菊寺とて一字を建
ると新著聞集にあれ共青山の邸にての事なり故に
狂言に青山鐵山お菊を殺すとも云り何れが實なるや
不知

鹿の時立

南都春日野の鹿よく寢入居るもむくと起立て誰追わ
ねども駆廻り戯るゆへ傍の鹿共に狂ふ是を鹿の時立
とて春日明神鹿に乘移り遊戲し給ふ事と土人は云り
雪の朝に駆廻る犬の如し猫鼠にも時々合手なきに戯
狂ふ事まゝ有金魚腹を摺つて游ば三尾五尾是を追ふ
も皆故あるなるべし

猿蟹を嫌ふ

昔話に猿が島へ蟹の敵討に行事を綴る東都にては桃太郎なり猿は
蟹を嫌ふ事甚しと聞り藝州宮島の回廊にて猿徒らを

するを幼童ソレ蟹じや〜と云ばあわてふためきて
回廊の上に駆登り鹿の通るを見ては鹿の脊へ飛乗山
清水小流れ等の蟹の居るふなる所は鹿の脊にて越る
と云思ふに磯端の小蟹は鳥類の羽虫人間の蚤虱に應
じて嫌ふなるべし

置鼓

置鼓に四季有「子の日」「桃花」「あやめ」「七夕」「菊重等也
花重と云置鼓は月見小左衛門御城の御能務むる宵の
夢に嚴島辨才天枕上に立せ給ひ置鼓を一通り夢裡に
習ひ奉ると見て夜は明にけり感じて一手も忘れず翌
日打ければ御機嫌斜ならず何と云置鼓ぞ尋參れと御
上意ありし時昨夜夢中に辨天より習ひ候とは申上が
たく花重と申候と樂屋への上使に答へ奉りけるとぞ
此置鼓の留に「ハハハ」と三つ重ぬるより花重ねと
當意に申上侍るよし是によつて幸の家には今に嚴島
辨才天を尊む此一名紅葉重ねとも云よし亂舞は必風
雅なくては叶わす謠の文段わからずしては舞も謠ふ
も打も囃すも形の心づかいならんか

水引

秋草の中に水引草と云物は細く物を括る水引と云物

に似たれば呼ぶ也色に赤有白有しまらしき草也扱水引と云は何によりて名を附しかと思へば素麵の名を切麵とも又水引餅とも云よし然らば素麵の形に似たればなり

鳥貝

鳥貝はカイツブリ鳩に化するがゆへに鳥貝也とも云又衛の化したる貝なれば鳥貝也ともいへど其味鳥肉の如き嚙しむる所有ゆへ云か併し月令に雀化して蛤となるとあればまんざら縁なき名ともいふべからず

放鳥の試み

放鳥の試といふは學生をこゝろみるに池の中島などにて詩文章を作らせる事也人に談合せまじき爲也うつば物語に季房試の題を賜りてひとり船に乘られて出たりと有是放れ鳥のこゝろみ也

はなじろ

古き軍物語にはなじろに付合たるとあるは敵味方思ひもよらず出合て互ひに恟りして臆したる事を云にやはなじろは臆したる事也臆すれば鼻の白くなる也源氏物語におくしがちにはなじろめたる人多かりしと見へたり

和歌に師なし

文武の道もろゝの藝能に至りても師となる程の人は其藝術をあまねく弟子に傳へんとすれども弟子の修行うすければ其道を受得ざる也されば物の上手下手になるは全く師のする事にあらず弟子の力にて上手にもなる事也假令孔門の三千も聖人の弟子なれば皆賢人君子ともなるべきに纔に七十士中にも顔子九哲の如きは皆弟子の力なり或云京極中納言殿の和歌に師匠なしと宣ひけるよし此事よろづの事に渡るべきにや

南面の障子

權中納言定家卿は五條三位俊成卿の子にて我家にて歌をよまるゝに必南面の障子をひらかせて遠く外を望み衣を整へ正しく座してよまれたり此事を人に申されけるは常々心を清く正しくしてよみならわざれば高貴の御前にてよむ時心あはたしくしてよみあやまる事ありと申されしとぞ又申されけるは歌よまんと思ふ時には先白樂天が故郷有母秋風淚旅館無人暮雨魂と作れる詩の句と又蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中といふ句などを吟じて歌をよむ時は其歌も自

心深ししらべも高くよまる也とのたまへりとぞ

差合くり

晋其角常にいはれしは「好氣根稽古のみつにくらぶれば好こそ物の上手なりけれ將基の師大橋宗桂もつね々此歌を誦し申されし俳諧に差合くりといはれむよりまづ句者といはれよ句集なりてさし合は自由なるべしとは尤の事也たとへば非常の時鳴物音曲今日より御免とあるを待兼て出さんはよからず一兩日もさし置て扱可ならむ句者は此處につまりて外のものを作さむさしあひくりは六句め宛に松の句を出さめ笑ふべし

二萬堂西鶴

井原西鶴は浮世物の作者にして俳諧は西山宗因の門人也淨琉璃作者近松門左衛門俳諧は西鶴にならへりと云西鶴住吉にて二萬三千句を吐て夫より二萬堂といへり住吉大矢數は貞享元年子六月五日也此時の矢見は其角也とあれども此年其角十六才也

三句の涉り

活々舊室曰俳諧一卷の變化は起承轉の三つ又見聞志の三つを旨にとりて其場の働きにあるべしや昔太平

記にいへる楠判官正成が討手として六波羅より須田高橋數萬騎にてせめ下りしを正成方寸の謀にて散々に追散らし其跡へ宇都宮纔五百騎にて迎ひしかば楠はやく天王寺を逃て公綱に勝をとらせ扱近邊の山々浦々にて篝火を焚疑がわせ又骨折らずに追かへしたり是程面白き三句のわたりはあらじと語り申されたり

記錄表紙

記錄の書とは大納言を大系言中將を中井應永を元永元和を元牙嵯峨を曲曲醍醐を首首と書を云也釋家にも讀誦を言言璽珞を玉玉菩薩を并と書類を云我戲場にてもムリ升ムんせいなアなど書て通字とせり記錄とは古く正しき名義なれどもわざと佐川田昌俊が製ならんかと俳諧して「日に當る喜六表紙屋水仙花と予が戯れしも卅年の昔也

餓鬼つばた

松江雉舟が犬子集に三條殿山崎宗鑑を召れ庭の杜若けふ翌と咲り思ふ程折とるべしと御許ある鑑何の心なく有がたしとて池の傍りに望み花を折公「宗鑑がすがたを見よや餓鬼つばたと仰らるゝ宗長やがて

「呑むとすれど夏の澤水といまだ詞もひかぬうち」くちなはに追れていづちかへるらんと鑑つかふまつりければ殊の外めで笑わせられ數の賜物ありしとぞ又支考が章平をつれて芳野山にあそび「歌書よりも軍書に悲し吉野山と申せしも貞徳紅梅千句に「公家は哀ふ元享のすえ正章」歌書よりも尺書シヤクシヨを專にもてあそび可頼此附句を一つにして句となせり何れも風流の戯れ事今世の人の句を盗むなどの心とは同日の論にあらじ古書は常によく見て覺悟すべしとぞ

兄弟の争ひ

伊勢二兄が浦に百姓兄弟山をあらそひて九鬼長門侯に訴へ侍りしにいかに下々なればとて兄弟づからかゝる非道なる公事をするふとゞき也仕方あるべしとて年經しかど埒明たまわす其間に雙方より賄を運ぶ事數をしらずある時兄が方より物もち來りしを長門侯彼が聞様に此公事にて我は大なる徳付たり只いつ迄も濟すまじごと宣ひしを彼者物越に聞て立歸り弟を呼び汝山に望あらば取べし殿の心かくこそあれ然らば争ひて何の益かあらんと云弟實もと思ひ其事止侍りし

佛は佛師

洛陽本満寺の日蓮の像は靈驗ことにあらたにて同宗の輩崇敬淺からずある時像すこし損じたまふて佛師を呼しに佛師が曰此像を日蓮の像に改めよとの事に侍ふやと問ば住持は留主にて弟子僧數多寄合よあひも文盲なる佛師の云事かな忝くも此尊影は北山芹生しんせいの里の土中に久しく法華經讀誦の御聲ありしかば此寺の開山聲をしるべに堀たまへば有難や大聖人の尊像にておわせししらざるをしり顔になせる大惡人やと散々さんざんに言りければ佛師かたくてそれは各の僻事にて候是はまぎれもなき元三大師の影也と互に口論となり法師ども佛師が頭をわり内證にて事納めがたく所司代牧野佐渡侯にしかゝの事訴へしに佛師が申ところ證據有やと宣へば佛師がいわく影の御首を破りて見たまひ良源とか慈恵とか記しあるべし若日蓮とあらば某が首刎たまへと申せば又住持にいかにと問せたまへば一言の返答なかりしゆへ其方より醫師をかけ疵養生せさせよ職人の事なれば其日數を積り手間代急度わたされよと捌き給ひしまゝ内證より詫言し白銀廿枚送られしとや

運慶の口傳

佛師運慶が口傳に佛を作るには耳鼻をば先大きくすべし若耳鼻を十分能程に削ば後に小さく見ゆる時に大きくしたくても叶わす又口と目をば成丈小さくすべし若口を十分よき程にあくれば後に大きく見ゆる時小さくしたくても叶わすされば耳鼻は大きにし口目を小さくするを第一の口傳とするとぞ是はもと韓非子に出て宋の蘇頌が云し事也此木偶人を作る心得は何事にもわたるべしと駿臺雜話に出たり

鴟鵂の文

或人鴟鵂ミヅツを畜てそれを囿にして鳥を捕けるに同じく殺生をする友達のもとよりみづくをかりに越けるが其文に鴟鵂を略してづくと書て其末にづくとはみづくの事にて候みづくと書候へば文字數多くこと長に成候故にづくと書候とながくと斷けり夫ならば始よりみづくと書かし文字を縮めんとて多くの文字をそへ詞を短くせんとて却て長くなる事は片腹痛し

長範の詠

高野西谷ニシダニに入て熊坂長範蓮社の寶を奪ふの夜數多の

盜賊を召連たり長範いかい思ひけん樹下岩上に休みて御山の靈妙の光を感じけるが寺に入て黄金を捧奉りて四面を拜し誓ひて永々賊徒此御山に入るまじ歿後の供養などしめやかに頼み鐵槌を借りて向ふ齒二枚缺て生前死後の思ひ出唯今得たりと筆走らせて則「たかの山峯の嵐ははげしくもこのはは殘れ後のかたみに強盜長範と書けるとぞ交るも悟るもいましめも和歌にてぞすむ國なりける

日本に象を涉

南掌國十四年毎に象四隻を例貢す乾隆二十八年使を遣して大象一小象三つを進むと秋坪新語にみゆ乾隆二十八年は此方の寶曆十三年癸未也廣南大泥國より日本へ象の渡りしは享保十四年己酉なり大坂を通り京より江戸に行寛保の始迄江戸に育しとなり始渡りし頃は七尺計なりしが後は一丈五六尺に及びしと也

清人發句を譯

○東都俳諧師雪中庵蓼太が句に「さみだれやある夜ひそかに松の月といえるを清人程劔南が賞てこしけるを爰に出す撒密他列耶阿兒要披促革尼麼子那次吉

雪中庵蓼太蓼太先生者隱君子也都人士岐爲侍從之流
 亞矣乙未春於崎陽客館得俳諧歌一章言是先生所著僕
 不能讀其國字故就譯士某得解則興在景中意在言外大
 非俗品可知蓋僕亦有所感也因賦一絕寫其意傲襲之誦
 所不辭也長夏草堂寂連宵聽雨眠何時懸月色松影落庭
 前乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劔南句のうへ
 はとまれかくまれ俳諧の道唐土に聞へたるは雪中庵
 譽なるべし是安永四年乙未也是も七十餘年の昔とは
 なりけり

師直の歌を譯

○高師直鹽冶判官の妻に貽る「かへすさへ手にやふ
 れけんと思ふにぞ我文ながら打もおかれずといふ歌
 を徂徠譯して我思美人貽之書美人不見棄庭除吾拾吾
 書歸十襲心謂美人手所觸と譯せり

兼好を評す

室鳩巢兼好を評じて太平記に高師直が爲に艶書を書
 し事を云其後伊賀守橘成忠が招きに仍て伊賀國に赴
 成忠が姫に通せし事園太曆に載たれば世に詔らひ色
 にふけり隱逸を好み名利をいとふといへども隱者の
 操ある人にあらずされど徒然に載る所佛法のさた

好色の事を除て風景をのべ人情をかたり理趣ある事
 をするせり中にも難念をいまして我心に主あらま
 じかばそこばくの事は入來らじと云懈怠をいまして
 て道を學する人夕には朝ある事を思わす朝には夕あ
 る事を思わす只今の一念の上におゐてたゞちにすゝ
 むべしといひ貝を覆ふ譬を引て萬の事外にむきて求
 むべからずたゞ爰もとを正しくして前程をとふ事勿
 れと云松下の禪尼のあかり障子を張れし事を引て世
 を治る道儉約をもとゝする事を云高名の木登りが云
 し事を引てあやまちは危き程はなくして安き所にな
 りてある事を云何れも簡要の旨にて聖賢の教にも叶
 ひぬべしと云り

勢語源語の評

儒道の人の口にかけては伊勢源氏の物語は淫亂を導
 く媒なれば年弱なる男女には禁じて見せまじき物也
 然るに薦紳家に源氏物語を我國の寶といへるは倭語
 の妙を得たるに心酔しての事なるべし是に註釋して
 毛詩に淫奔の詩を舉勸懲を示す如く人の戒世の教と
 するは俗にいふ杓子定木なるべし二南は修身齊家の
 本也雅頌は論道述徳の辭也國風はもとより里巷の

男女各言情の詩なれば正も邪もあれども其邪と云も媒妁によらずして淫奔すると云計也何れか后妃を盗み繼母寡嫂に淫する様のある伊勢源氏の如く邪淫の事云盡すにはあらず正を見ては自勸て邪を見ては自ら懲すぞかし伊勢源氏はいはゞ長恨歌西廂記などの品にて其冗長にして醜惡ある物也然るに聖人垂教の書に比して云は誠に氷炭薰蕕をひとしふするなるべしといへり

解脫上人

山の端にさそはゞいらん我も只憂世の空に秋の夜の月解脫上人の世に隨へば望あるに似たり俗にそむけば狂人の如しあなうの世の中や一身何れの處にかかくさんとかゝれしを右の歌に引合せて衣の袖を絞りにきとぞ

西行の歌

普光院殿の御詠に「面影はうつすもやさしとにかくに命は筆も及ざりけり」憂事も嬉しき事も過ぬればその時程は思わざりけり「すて果て身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれと西行はよめり

幽齋の狂歌

青海苔を煎豆に付たる菓子を太閤の御前へ出せしを幽齋公にむかわせ給ひ何とく御意ありし時「君が代は千代に八千代をさゝれ石のいわほとなりてこのむす豆と申されければ興に入らせられしとぞ

信西豆

今新製豆とて京の町に賣るはもと上京信西シヤウシの辻の尼寺にのみ製して大根菜の千葉を粉にして鹽を加し煎豆にまぶして信西豆と云が原ぞと予が綺語文章にくわしく出せども幽齋公の狂歌の因みに爰にしるせる物なり是鑿説にはあらざるべし

普賢像

同書千本閻魔堂の前に咲く櫻を普賢像と云は色白く花形世の常の花より大きなゆへ普賢菩薩の乗給へる象の鼻に比して普賢像と呼しと云又一説には閻魔堂の次に普賢堂有し頃堂前に生ひし櫻樹なれば普賢堂とも云とは鹽尻に京の部に出せり此櫻翠ひらくと見る時月の奉行所へ一枝送るを奉行所より牢屋鋪へ遣わす牢前に生て科人共に見せて春をしらせる是を

牢屋の花見と云此盛りの内を閤魔堂にて壬生の如きの狂言をする事例なりと都はすべて風雅なる事あり

楊貴妃櫻

東山東漸寺に泰山苻君と云櫻は櫻町中納言殿泰山苻君へ祈誓をかけられしゆへ號奈良の猿澤池の邊楊貴妃櫻は興福寺の玄宗と云僧の寵愛せしより號ると云都て物の名を付るにも昔はいと風流也今時付る名は雅ならず唱いとむづかし

利休織部の詫

「何となく人にことばをかけ茶碗おしぬぐひつゝ茶をものませよまた」花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや利休はわびの本意にて此歌を常に吟じ心かくる友に迎ひては構へて忘失せさせなん「契りありやしらぬ深山のふしくぬ木友となりぬる閨の埋火是は夢庵の歌にてあれども古田織部冬の夜つれづれに吟せられしと也

西澤
文庫 皇都午睡二編上の巻

目次

- 一心太
- 一 盆踊
- 一 造り物
- 一 煙草入
- 一 神佛の興廢
- 一 空鐵炮(葛城の奇談)
- 一 復讐の次第
- 一 魁の笋
- 一 通人の子
- 一 鱈の鼻
- 一 蜃氣樓
- 一 古き俄
- 一 清姫
- 一 雪の五輪
- 一 砂持
- 一 安らひ花よ
- 一 かん／＼踊
- 一 瀬戸物細工
- 一 繪馬の繪
- 一 出開帳
- 一 石川の洪水
- 一 泉岳寺
- 一 皿の争ひ
- 一 八坂の塔
- 一 蜆の夢
- 一 檢校
- 一 國姓爺
- 一 新町橋
- 一 鼻黒
- 一 若江の碑

- 一 御影参り
- 一 倉治の瀧
- 一 高野の玉川
- 一 朱買臣
- 一 經聲人を感じしむ
- 一 妓家の星合
- 一 琵琶に落涙
- 一 來山が門松
- 一 釣狐の意見
- 一 馬の餞
- 一 高麗王の惡瘡
- 一 鼠喰の具足
- 一 雙魚扁鵲の文
- 一 懷劍の發句
- 一 猫の飼やう
- 一 永井正宗
- 一 古き文に有味
- 一 應舉の畫
- 一 一蝶魚を鬻ぐ
- 一 遊女黃鳥を放す
- 一 韓信を題せる歌
- 一 戲場の和歌
- 一 猴に似た顔
- 一 狐戯るゝの詩
- 一 箔の小袖
- 一 平語小曲
- 一 雪中庵五世
- 一 一句の新しみ
- 一 淀川の抱鯉
- 一 經信の和歌
- 一 白龍網にかゝる
- 一 匡房の強記
- 一 孕句
- 一 流行詞は卑し
- 一 永井の肩衝
- 一 音曲の譽詞
- 一 領巾振山
- 一 臥猪の眞寫
- 一 鸚鵡籠を放る
- 一 臨寫摹寫

一天龍川

一煙管筒の銘

一行素夢常清

西澤
文庫 皇都午睡二編上の巻

西澤綺語堂李叟著

心太

曩に皇都午睡三卷に三百條の話を著はし其餘れるものを爰に拾ひてまた三卷とす是やまた寐の夢なるべし晋子其角の句に殺された夢は誠か蚤の跡とはよく自在に讀をふせたり予幼き頃此句を轉じて松島の夢は誠か心太と戯れし事有角の句は夢に劔難にあひ驚覺れば蚤にせられし跡を云予は松島の絶景を感じ居れば起されて冷やかなる心太の出來しと持來るさまを云り一句の仕立同じけれど趣向は變れり是等を皇都の午睡と云べし附て云心太は今上製の物をスイトンと云下品なるをトロテンと云是心太にて心太也水太もおなじ心なるべし

安らひ花よ

京師紫野今宮の花鎮祭にやすらひ花と踊り諷ふは人

皆しれる事也是古くよりありと見へ寂蓮法師俊賴の弟子に定長と云建仁二年七月二十日今社社士ミヤの家にてやすらひ花を詠せし歌有「高雄山あはれなりけるつとめかなやすらひ花と鼓打なり又今踊の謠ふ歌に」やすらぎたるやすしやたるや安らひ花や花咲たるややすらひ花や富草の花や安らひ花や富をせはみくらの山に安らい花や此藤をなまへ安らひ花や此藤とならぬのせきと安らい花やいはしめ給へ安らい花やいはしとて千代振神の安らい花やみよとのにせんや安らい花やさけなへこなへやうにまろもいはれや安らい花やさけなへこなへやすらひ花やひくまなもあらかおなじくかへし歌「さなこをたび候とりたりなるや彌生によひにきてねなましかけやとりたらまじやたりたましや今あらそはんねなまじ物をいまをよひ出てあなうしたくこひ」と諷へり

盆踊

年々初秋には盆踊りとして諸國の在に七夕より八朔まで幾日／＼と日を定め牛頭天王とか八幡宮とか或は道場の庭とかにて篝を焚男女老若を撰ます踊りを催す中にも十五日十六日を大踊と呼ていと賑はしき物

にて有りし都會の城下津々浦々にも有て各其國の音頭有て踊り振も又異なるべし京大坂にも昔は町踊とて有けれども天明の頃より此方は止て漸芝居にて年々盆替りには水狂言とて場の中へ水船を仕込み角力男達の狂言に水試合をして大切は大踊りとして子役は黒緞の腰卷羽織手拭を吉原かつぎにして千代の始の一踊り躍はありやゝ黒羽(織カ)踊りが所望じやが合點かと音頭の内につらりと並びチサ、サがつてんじやと踊り始めといは渡したと云て這入る是より女形立役と種々の仕組踊雀踊など有て是もとゝは大踊とて惣座中思ひゝの容にて踊りし物也今は此事なく市中に組踊と呼び舞の稽古屋の連中など呼るゝ者たまゝ催有といへども衣裳引拔好みの揃となるなど歌舞妓の所作事に類せり遊所にも邂逅有といへども是におなじ皆古風廢りて踊はいつしかなくなりたり寺習屋の七夕に婦女子の踊りのみ遣れるとしるべし

かんく踊り

勢州古市の女郎屋の踊りは彼地の名物なれば御師の方にて太々講中の人等とはかならず古市の踊を見ねば

歸國の土産にならずといへり博多踊は小女郎の狂言にのみ見ていまだ彼地に遊ばねばいはず潮來踊りには予が綺語文章に出して古市の下品なるもの也山城の北嵯峨の盆踊りはおちやめのとの端唄に遣りて葛籠帽子とて手拭を冠る名のよし近くは文政に長崎のかんく踊とて唐人の姿して大きな蛇をつかひ唐音めきたるおかしき歌にて踊りたるが踊りのふり覺易く仕易きゆへ大に流布せり其後天保山の川浚砂持等には踊りのさま掛聲も一變してゴノ或はテッまけなよ抔と云出せり皇都に此ふり移りて下のおかたにおまけなへチヨイトなどかけ聲迄京師は物やわらか也と笑ふ者も多かり

造り物

祭禮開帳の折種々奉納寄進の物何にまれ造り物として飾も古き物と見へたり近世は奉納寄進の物は只竹馬地車に乗て運び作り物は別種と成りけり始は素人の小細工好など程よき物を集めて作り物をせしならん近來は形を思ひつけば人物の顔手足は大約木偶となり大江何某柳何某と人形師に誂らへ見世物の看板に類せりかゝる作り物を飾り見せ其神佛はいかゝ思

ひ給ふやらんいぶかしき限りなり笑ふべし

瀬戸物細工

作り物に名を得たるは浪華西横堀の地藏會に磁器店多く陶器瀬戸物一式にて作るに人物鳥獸生るが如し是古くより異形の瀬戸物來る時作り物の爲にとて仲間中へ買取たくわへ置と也又か様なる物のほしきと思ふ物は兼て竈元へ誂ちへ焼せ置事也と聞りさればこそ鎧兜など錦出金欄手の鉢皿の類にて拵るを見れば其物々にあはせ拵あるゆへさ迄奇とはいふべからず一頃又大きな物を置すへて作り物とする事はやり或は土藏を三番叟の面箱とし帆綱の太きを紐にかけ下の銃は車の輪をつかふなど又大江橋の欄干を杉皮にてまき籠細工の葱帽子をつけ伊勢の宇治橋とし堂島の濱手にお杉お玉を雇ひ島の内大丸の屋根に富士山を拵らへるなど何れも仰山なる事を好めり皆細工物にして作り物とはいふべからずまして役者の似顔の人形など雇ひたるは見世物めきていと見苦し東都吉原の燈籠猿若町芝居顔見世の飾物は兩側の屋根に種々の造り物をす是らは土地賑ひの爲に人を呼物なれば神佛の正遷宮開帳などとは別の沙汰にて飾

る人形又戲場によれる事なりとも差合あるまじく覺ゆるなり

煙草入

予以前より見たる造り物の中に手輕く出來よかりしは青物一式にて夕立雷をせしを見たり南瓜を雷の顔とし帶を鼻と角にし口は南瓜をくり抜たるが上下の齒と見ゆるは種を其儘に見たるなり小芋を親齒禪は眞桑の皮に茄子の皮を交寅の皮の斑と見てつなぎ太鼓は小西瓜を跡先切てすいきにてつなぎ太鼓の撥は割頭を兩手にもたせ十八さゝげの雨をふらせ有しが其容より振のよき是も大江何某などの細工にやあらん又一種夜着を疊みて煙草入とし對鉾のかな物は吉原枕を二つ並べ茶吞茶碗二つを鳩目とし鹿の子の細帶を紐に拔出し火入の底を抜緒へにして座鋪たばこぼんの上下をはづし雀形の張たる屏風片々を煙管筒に見て斜に立かけ煙草盆は筒の金物にはめたる也閨の道式一種にて誠に無雜作なる作也是らを眞の作り物ともいふべし

繪馬の繪

神社佛閣へ繪馬を納るはもと神には神馬を獻せしが

年に一二度の神事ならでは乗らぬ馬なれば數疋有ても益なかるべし馬の繪を畫かせ或は木にて彫たる馬も奉納せしより繪馬と呼ぶよし近來遍額軌範とか云る書に出たる如く洛東清水和州初瀬藝州宮島などには古き額數多ありて其世々の容を見るには是にまさるはなし然し是好者家又は畫師などには其道を學ぶ便ともなるべし尤清水寺に掛たる田村丸鈴鹿の鬼神退治などは其寺の來由を知らせ靈驗等をしらせるなれば有べき筈也其神佛にも拘はらぬ武者繪などは願主の心いかゞあらん覺束なし筆道に名高き弘法大師へ書の額は上らずして菅神へ大字眞行草の額を納る又は弓箭神ならぬ所へ射術柔術劍法の額を掛るもあり中にも熊坂長範袴垂安輔など強盜の惡人の繪などまゝ有畫師は願主の好によつて畫けども奉納せる人はいかなる心にか有けんいぶかし

神佛の興廢

神佛にも興廢ありて何々の尊と敬む神は諸人近附なきやらして誰も參らず只通用のよきは八幡宮天滿宮つゝいて多きは牛頭天王稻荷の社也佛も釋迦と阿彌陀はかはらねど勢至普賢は流行にをくれたり近來樂

師はをくれの部にて觀音はますく盛ん也只金毘羅と妙見菩薩に人氣塊り諸神諸菩薩は足元へも近よられず此二體は當時の花方なるべし

出開帳

餘國はしらず浪華には彌生の頃諸所の神佛出開帳の時はず手寄の旅宿へつき開帳の場所を構へいつ幾日には場所へ移るその道筋は前々日より披露有て寶物靈佛の類ひを人夫にもたせ講中世話方前後に警固し神主別當の人々は乗物にのり靜に行列して跡をさへと稱す大阪市中の講中世話方より其組の挑灯或は猩々緋緋羅紗の幟をもたせ堂島難喉場十二濱市場鞆の世話方なくば湯豆腐に辛子なく毛のある所に毛なき心地して甚淋し十三反十五反の廣き大幟の曲差には肩車に乗りて差淨明の肩に立たる一來法師の威勢をふるへり小さき籠の長き柄をつけ散物くんと賽錢を乞ひ鉦を敲きて詠歌をとなへ齡七句に及べる老婆の伊達なる衣裳を脱かけて雙の手に扇をもち詠歌念佛に合せて遊戯する有是なん躍婆と云歡喜踊躍の念佛に倣ひ佛縁に導く方便かはしらねども乞食物貰ひの輩にひとしく相應に身をもてる人ならば其子孫子

の類よごしなるべし此出開帳の來る時はさも賑はしき物なるに開帳果て歸國の時終に諸人の送るを聞ず世俗に始有て終なしとは此事をいふなるべし此近年開帳迎ひの賑はしきを絶て見ず年々馬鹿の減るなるべし

空鐵炮(葛城の奇談)

爰に亦さも有るふなる虚言を云事を鐵炮也と云は空鐵炮と云ならん夫より又焔焔嗅し其大砲を放すとも云り又一種嘘らしき事を聞ときは又例の出し物ならめなど云此詞何より出るか分らず以前出し物話とて真らしき咄口にて仕舞は落嘶となる事はやれり一二を爰に出す河内國葛城山の麓に古き三面の石碑有中央に梅園中將殿と鑄左に愛宿主税右に船頭與次とか鑄て文字も苔に埋もれ誰訪べくもなき墓碑一基有土人に此謂を聞たる所梅園殿とて堂上方の子息諸國歌枕の望有て愛宿主税といへる郎黨を連先都を立て大和路より芳野葛城を視巡り河内路へ赴きし所此土地の絶景中將殿の心になほ山寺に數日滯留せられしかど行衛遙けき旅なれば爰を立出和泉より便船して四國九國も見ん物と船出せしが阿波の鳴戸沖にて海

賊に出合ひ主税にもたせたる旅用の百金を賊首奪はんとす主税は渡さじと爭ふ隙に賊其中將殿を手込にする船子は見兼て是を支へ天間デンマとか云小船の内へ中將殿を乗る間もけはしき浪にゆり上られ友綱きれて大船小船左右へひらき行衛も知れず成にけり主税は賊首と只二人金の財布を奪合ながら海の深みへ沈みしが生死もしれぬ身の行衛爰に又播州網干邊に住與次と云る船頭放蕩ぶらゐの惡者ありしが一度難風に合ひ既に洋中にて死べかりしを金毘羅權現に祈誓をかけ辛ふじて助かりしより生れ代りし如く善心となり或日小船に睡りて夢に主税の靈あらはれ足下の善心を見こみ頼あり我は梅園殿の家來にて去年鳴戸沖にて海賊の爲めに百金の財布を奪合賊と共に海中に沈み此世を去れり然れども其金は波に漂ひ沙にゆられて此浦の彼所にとゞまる主君は小船に流されて今に存命河州葛城山の麓に閑居し我尋ね來るを待るゝ何卒海底の金子を取上主君に手渡し首尾能歸洛させてたべと忠義の魂魄あり／＼と與次が夢に告げるにぞ與次夢さめて彼所に水入し潮に朽たる財布を取上數へ見れば百金ありかの中將に手渡しせんと直に河

内に尋行人里遠き山寺にて梅園殿にめぐり合ひ夢にしらせし主税の頼み委敷告て百金を渡す期になり欲心生じ此金の半をわけて主君に渡し残る半は足下の世話代納め呉よと頼みにせひなく爰迄尋來つたりいざ百金を分取にと金の包みに手をかくるを中將聞て暫しととめ遠路の所尋來て家來が託せし其金を渡し賜る志先以て祝着せりさりながら此金子は歌枕の路用にとて勿體なくも主上より恵み賜るものなれば私には進じがたし一旦之を天子へさし上首尾能歸洛せし時は五十金はさら／＼いとはず百金も得さすべし苦勞序に都迄送り届けて給かしと頼むもきかずあざ笑ひ己なればこそ幽靈に頼まれもすれ渡しもすれ百兩ながらしてやろとは位倒れの安公家殿そふ味よふは釣られまひ半分わけが氣にいらすば元の深みへ沈めて呉ふ海から取て持てゆけと傍若無人の喧嘩腰中將あはて押とめ腹立の段最もなれど此金子のなき時はいつの世にか歸洛せん何卒情に此金をと財布に手をかけ引戻せば生れ付たる強惡者エ、彼是と面倒なむごいめ見せざ成まひと刀に手をかけ切らんとす中將ハツと飛しさりやれ聊爾すな先まてと留ても

留らぬ非道の惡者一旦拔た此乃物納めたとてどふで科人ゆるしはせぬと突掛る中將今は詮方なく遁れんだけはと逃出す何國迄もと追行與次葛城山の半腹迄轉つまろびつ逃行を遁さじ物と追掛る船頭が追ふて公家が山へ登るとは此ときより云始しとぞ

石川の洪水

文化の末頃珍らしき洪水にて河州は半水に流され人家はもとより牛馬まで大和川に流れ落大方ならぬ騒の頃河州石川村に一人の農夫あり又六と呼正直なる事天性の産れ付にやあらん人は佛の亦六と稱す其壁隣りに一個の惡漢農業はすこしもせず亦彦道と殺生のみに世を送る土右衛門と云有幸ひ此石河村はさせる水損もなけれど隣村は水につかり跡の騒ぎ大方ならずかゝる折にも惡者の彼土右衛門は時を得て日毎に石河大和川に行て水上より流れよる器財のむき熊手にかけて拾ひとり賣代なしでは酒食にかへ思はざる此洪水にて一もと手に取付して獨り笑して川ばたに待居る内に川上より新らしき木地長持になひの棒を付しまゝ流れ來たり水練得たる土右衛門は熊手を搔込腰ぎりに流れへ這入りててふど引よせ靜に堤

へ引上つゝ見れば長持に錠おりたり定めて中には絹
夜具か衣類のむきを詰たるなるべし我家へ運んで改
めん片棒持す者がなと見ゆる向ふへ隣の又六堤の上
を通るを呼かけ又六どこへと尋ねれば向ひの唄衆が
癪氣がつゝぱり薬買ふてと頼まれて求めて今が歸り
かけと云に得たり。土右衛門が片棒かゝす早速の嘘
是此長持はれが伯母貴の大事の品物そちが内へ預
けたと頼みにせひなく持ていにしな難儀を助ける佛
の又六片棒頼むとのせられてそりや幸ひと歸りみち
かいていなふと肩を入れ土右衛門が内へ昇込んで癪
の薬がひま取たと向ひの内へと走り行跡に笑坪の土
右衛門が錠叩きあけ蓋とれば長持の底に蒲團を敷七
十餘歳の老母一人長病にやつれ苦痛の體外には七り
ん藥鍋茶碗と尿瓶も打返りあたらず蒲團も濕付て得な
らぬ臭氣紛々たり土右衛門大に業をにやし此長持の
重さでは一廉の金目じやと又六めを賞そやし持て歸
つた甲斐もない死損ひの糞婆めうん／＼うめいて居
るからはどうで生てはゑいをるまいむだ骨折らせた
其代り往生させて呉ふぞと熊手片手に獨りごと壁の
崩れの隣りから覗いて恟り又六がヤレ待しやれと飛

で入り熊手引とり分入りて扱は又だましたの伯母貴
の所の長持と聞て爰まで運んだが見れば病人の此婆
様たゝき殺そふと云こなたの惡心病氣で死ねば常業
なれど敲殺せばこなたは科人ヤレ滅ぼうなと震ひ聲
土右衛門はゑせ笑何こんなひんこめを殺したとて下
手人所か婆々めが悦び殺し助也よひ死句邪魔さらさ
ずとそこのけと云に又六あきれ果爰迄片棒昇たをれ
手走り受るはしれた事婆様はこちへ連ていぬをれが
貰ふた下されと云をつきほに土右衛門は夫程はしか
持ていぬ尿瓶も婆に付物じやと壁の穴よりほりやれ
ば病苦の老婆を肩にかけ佛の慈悲者又六がよふ／＼
つれて我家に寢させ肉身の母の如く日々助抱のおろ
そかならねば兩三日經て病人は少し病苦も忘れけん
又六に素姓も告高安の近郷五ヶ村ばかりの庄屋の母
十三ヶ年が間の長病も紛や嫁子孫共まで餘り大事に
かけ過し醫療に驗なくばかり所に今度の洪水も病苦
に人事を辨へねばいつ長持へ入れしかしらずどふし
て爰へ來し事ぞ終に相見ぬ此母を眞實の親の様に介
抱給はる實心の肝にしみしか十餘年覺へぬ母の快さ
爰はまづ何國にてこなたの御名は何と申すぞ此紛や

孫子共は水に流されて何國にぞと過こし方の物語聞て又六小膝を叩き扱は高安の近郷某の母子よな此所へ來られし始はかよふと云聞せ又高安郷は大方流れて今に住所も定らぬよし聞ども夫にこそ仕様ありて屋根板二三束求かへり何村何某の老母は石河村又六が方に居るよし書て水上へ行折には是を數十枚づゝ流しけり洪水の騒も少し静りければ高安の何某母の行衛を案じながら水損の場所を見あるく所に屋根板に蚯蚓書ながら又六が住居に母のましますよしするせしを流れよるに知りて何某大によるこび家内親族打揃ひ駕籠を釣らせ迎ひに來て互に命の恙なきを悦び其上十餘年の病氣もをこたり全快の歡びとて又六へ百金の謝禮を送るに又六決して是を受す何某の云此金子を受るは後世の人の爲也と云又六何が故と問何某云兎角欲の世の中なれば以後のかたりぐさともなりて老母の介抱し百金を得たりといはい人皆是を眞似るべしと理解にまかせ又六は然らば是にて橋なき所に橋をかけ供養にせんとよふ受る何某は母を駕にのせ厚く禮を述て歸りけり壁隣の土右衛門は是を聞又六が内へ來てあの婆は元洪水に流され

來しを拾ひ取しは我等也然れば百金の金主は我なりすみやかに渡せとはたる又六云其時我なくばあの老母を殺すならん今日歡びの裏をかへして老母の敵として足下を討ん我に惡心なきゆへ十餘年の病苦を助かり理を解て百金を送れり何ぞ足下に渡さんやと此争ひに及びしかば一村の者庄屋年寄集りて此評議まぢなりしを庄屋の曰元老婆は水上より流れ來たるなり然れば此百金の財布を大和川の落川へ投込べし何れなりとも水練を得たる者飛入て取上べしと皆々打連大和川へ行に水嵩は漸減りたる様見ゆれど水聲喧しく四方山の物流れ來る事高きより谷底へ材木などを落すが如し淵には渦卷漲る水勢いとも危ふき水中へ庄屋は件の財布を打込土右衛門もとより水練を得たれば素裸に成つて水中へ飛入たり亦六は水音に驚き只忙然と詠居るを庄屋懷より百金を出し是こそ汝が金なり今打込みし財布には程よき小石を拾ふて入たり此水勢は土右衛門がいか程水練得たる共搜取る事難かるべし此間に早くと又六に金を持せて歸しければ一村の者をぎ立庄屋の才智を感じける去程に土右衛門は浮つ沈みつ渦卷中へ入よと見へしが彼

財布を取上て口にくはへ頭を漸顯はせてこなたの岸へ泳ぎ來るさま皆々呆れて扱も我慢の土右衛門も一ぱい喰ふてあの財布の石の入りしを金ぞと心得かづき上たる大馬鹿と口々そしれど漲る水音間遙に隔たれば聞べき様なく拔手を切泳ぎ來る内水上より三間ばかりの藁屋根屑家土右衛門の方へ流れ來る皆は手を打天罪(罰カ)にてあの屑家にて鼻でも打とて土右衛門の死ねかしと其財布は金ならず石を大事にくわへておるはいかいたわけと聲々に言る内に伴の藁家土右衛門が脊にどふと乗るそりやこそ今に死をらふとどよめく聲の聞へてや土右衛門は頭をあげ屑家負ふたがおかしいか

復讐の次第

此頃國はどこそこにて敵討が有たとの事取引先より委敷記せし此書面姓名まで書ありとて半切に書有を出す其書にいはく

今井 何 某
野村 何 某
花むらさき

此今井と云は家中一番の美男にて同役野村何某と遊處に通ふ和田見益は牽頭醫者にて水口屋は茶屋なり花紫は廓一番の全盛な

しづはた
和田見益
水口屋喜兵衛
宇源太
惣九郎
駄八

るが今井と深き中となり野村はしづはたと云相方はあれど花紫に惚て蔭より口説ど手にいらぬを憤り戀の敵と醫師と亭主に相談して駄八惣九郎と云惡者を駕舁に出立せ今井の若黨宇源太主人の供に付來るを酒に酔せ夜深

く屋鋪に用有とて花紫とよく寝入たる今井を駕に乗せ野村は途中に待伏して駄八惣九郎等と謀つて終に今井を討果せり宇源太は主人早歸れりと聞て駈戻れば主人今井は道にて死たりこは口惜と足ずりして屋敷へかへりか様々と委細を語り其夜の人數の名を記し今井の後室と舍弟に見する舍弟何某追取刀にて敵を討んと駈出すを後室暫しと押とめ有まい事にはあらねども心を靜めて此書付の字頭ばかりを讀で見やと女ながらも武士の母たしなめられて宇源太が見せたる書面の頭字を讀ば今野花しは水宇惣駄とか様な事をさも實らしく云て落す是を出し物語りと云り此餘に漸もあれ共略しおもひ出る儘右に出せり

泉岳寺

東都無樂が三題嘶と云を聞しが見物に何なり共題に
なる物を乞ふ見物所持の品を出す其品をもつて即席
に作して話す事なり此後謎解坊主此即席をす今はよ
し此どいづつ坊などみな即席を興とす右三題嘶の題
に江戸三芝居の狂言と題を出したる時の芝居の狂言
忠臣藏に廿四孝今一軒の狂言は忘れたり忠臣藏は彼
泉岳寺へ詣て義士の石碑を見て今に芝居にでもして
諸人の賞するは全く大石始四十七士の忠義故也と念
頭に拜み居る内其碑震動していと物凄き體なりけれ
ば扱は忠士の靈爰にあらはれ出るかと恐しく思はず
逃出し江戸の方へ足早に歸る道にて思ふ様よしなき
石碑を見て忠義をはめたるがゆへに一山の内のみ荒
れて震動したりヤレ恐しとつぶやく向ふへ友達來た
り何國へ行れしと問に泉岳寺へ詣し事を語り震動し
たる事を云友人笑ふて今珍敷地震ゆりたり扱は寺中
にて地震にあひしを靈魂出ると思ひしならんたはけ
た人よと笑はれて扱はと心付ながらイヤ我見たるは
地震にあらず石碑の影より亡靈のあらはれ出しに相
違はなし四十餘の墓碑が一時に聲を發して義士く
と鳴出したと落せり

魁の筍

廿四孝の外題を見て近所の友の物識りに廿四孝とは
何の事をせし物ぞと問に友云唐土に廿四人の孝行者
をすぐつて出す其内に郭巨孟宗など尤名高しそれを
日本に引直して慈悲藏横藏などにせし物也とかたり
聞す此者に一人の老母あり今迄は身持あしく親の事
も苦にならざりしがふと此話を聞てより老年の母孝
行にせでは叶はじと心づき内へ歸りて詞を改め母親
の機嫌を問ふ母はいつも持あつかふいたづら者に似
合す詞も甚丁寧なればいと不審も晴やらず紛は母
に何ぞ食物を御好あれ直に求めてさし上ふと云母は
さのみ食好みもせねばふと思ひ出しまだ寒中にはな
らね共冬の筍よかるべしと四日市の青物やへ駆行小
さき筍の魁を買ひ歸つて直に煮て出し是は孝行の仕
始めなればいざ召上れと進めけるにぞ母親大によろ
こびて少し喰ひ初物を喰ば七十五日命延はると聞ば
残りの分はそなたたべやれといはるにぞ息子然らば
お相伴と茶漬の菜に喰ければその味き事咽を飛口ま
ら發して立上り母の残りの筍は只二きれか三切れ也
中々是では堪えられずまそつと買て思入食せんソフ

レと駈出す息子を呼とめ先には母への孝行に求たる
ゆへ有もせふ四日市へ駈出して孟宗もうそふはおじや
るまひ

皿の争ひ

前編の咄の部に云舊觀雜話の序は坂東岩子ガシの作せる
咄にて行燈の上皿下皿とせり合昔より同じ皿に生れ
ながら我下皿にのみなりいるは口惜しちと上下とか
はるべしといへば上皿大に迷惑して上皿には受なく
下皿には受の輪有是生れ付たる役目なれば今更替る
事出来まじと云所詮下では濟まじと御奉行所行燈美
濃紙殿へ訴へければ燈心衆を左右にしたがへ上皿下
皿が言分を聞てヤア申様が暗ひ／＼まつと忝しく搔
立て參れ此一話を序にかへ次に三都の噺を集めたり
覺居る分をこゝに出す

通人の子

江戸淺草藏前の豪富の主人吉原のをいらんを根引し
て妻とせしが懐胎して十月に及び安産せし小兒を見
れば本田鬻の大盡姿着物羽織に至る迄其頃はやりし
好の仕立金拵への小脇差煙草入から紙入まで誠に美
盡し善盡し當世仕立の大通人盥の湯を浴もせでずつ

と表へ駈出すゆへ番頭跡より付てゆけば北へさして
足早に行るゝゆへ扱は觀音様への申子なれば御參詣
かと思ふに違ひ馬道より田町へかゝり土手の方へ急
がるゝゆへ何ぼう親が通人でも今産れるやいな吉原
へ駈出すとは呆れた物じやと言ながら番頭は袂をひ
かへ若旦那おまへはどこへお越じやなと尋ねに産子
はふりかへりおぎやア扇屋／＼

八坂の塔

京の者夜岡崎邊の畑に隠れ鴈鴨の下りるを捕らへ我
腰帶へ首を通し凡十羽も取りしと思へば鴈鴨一度に
羽敲して中空さして飛でゆくあれ／＼ともがけど
も羽風に連て段々と遙の空へ飛るゝひあいさこりや
たまらじと一羽とり二羽三羽とつて放すにぞ帶はゆ
るんで追／＼飛ぶ何でも平地へ下りたく思ひ兩手を
かけて何やら持ヤン嬉しやと氣のゆるみに鳥はのこ
らず飛去たり命限りとらへし物よく／＼見れば九輪
にて下は反ある瓦屋根去にても何國なるぞと氣をし
づめ月明りによく／＼見れば八坂の塔の五重目の屋
根の九輪に取付居れり轉び落ては粉に碎けんされば
とて下るに道なし助け舟／＼と聲の限り泣わめけば

よふく近所の人集り人間の降る嵐でもなしどこから散て來た物と問ふにも答よふにも數丈隔てし塔の上下かれ是いふ内夜も明れば何分人を助る工夫中にも智恵者案じ出し萬年坂の艾屋の艾の限り地に敷て是でたらぬと穂口やの火口も共に地へ敷て此上へ飛下りよと差圖に上よりふし拜み穂口の上へ飛ければ體には恙なくふうわり落てたすかりしが兩の眼より火が出しゆへ火口へ移つて焼死けり

鯨の鯨

浪華の北船場の豪商の丁稚二人魚は夜寝る物か寝ぬかとのせり合ひに一人は夜中泉水の金魚を見よ泳ぎ居るを見る時は寝ぬと云一人は又番頭殿がよふ寝る物じや鯨のよふな鯨を搔るといわるれば魚はねる物に極まつたと互に争ふを奥の間より秘藏娘のいと様が聞つけこりや寝る方が勝ならん床の間にかけてある懸物にさへ蛤が夢見て居る

蜆の夢

此話を出入の牽頭醫者が聞付ていとの判斷感じいると主人にむかひ蜆氣樓の講釋よりいつそ今から安治川か尻なし沖へ見にゆかふと船に酒肴を取乘て夫婦

娘に醫者妙手代丁稚も打乘て傳法邊にて船をとめよくく見れば虹の如く葛屋につよく葉塀の内より見越の梅の盛り在所げしきの蜆氣樓は前代未聞とふねより出て堀出し見たら蜆であつた

蜆氣樓

とてもなら眞の蜆氣樓を見たき物と尻なし沖へ船を廻させ暫く見合す其内に烟りの如く金殿樓閣硝子細工の龍宮模様ありく立昇るにぞ是こそ誠のしん氣樓といふ間もあらず一時にばたくと崩れ出し微塵に散つたはこはいかに地震ではあるまひかと干潟を堀れば道理で蛤があくびして居たと是にて一つの嘶に三つの落し有此餘にも有たれど忘れたり

檢校

桂文治の落し嘶は臍の宿替と云書あれば爰に略すその後道具入の咄あれども多くは所作と道具を用ふれば事長くてくどき所あり此道具入の前に一つ二つ素咄をしたる中におかしきと思ふ分を爰に出す

或檢校の妻弟子の何都とか云座頭と密通して檢校の前も憚らず見苦しき事多かれど盲目なればしらす近所の事觸の老婆檢校を呼こみて是を告る檢校も兼て

子とは夢にもしらすおなじ盲人とは言ひながら餘所の女夫は睦まじいなアと此嘶などは情深くして實有今時鄙陋の下がゝりの咄とは混すべからず

古き俄

それとは推量しながら盲目の悲しさ詮方なく虫を殺し適片目にも明らかなれば安穩に置べきかと天王寺の庚申堂へ祈誓をかけ七日が内井の端にて水を浴庚申堂へと参りけり三日目ばかりに妻はしり彼座頭をつれて跡よりシ行主堂前にひざまつき一心不亂と願ふ跡より必聞て給玉ふなと夫の祈誓をもどきつゝ念じて先へ歸りけるかくて檢校一七ケ目の満願に又參詣の後より妻と座頭は跡付て天王寺へとこそ歩行ゆく檢校堂前に拜居ればあた面倒と前なる茶店の奥をかり携へ來たる酒肴さへへ開くもさし向ひ檢校はかく共しらず念じをれば實青面金剛の利益にや兩眼ともに始て開きあたりもしかと見へければ檢校大に呆れ果ヤア扱は庚申の靈驗にて兩眼立どころに開きしかあら有難たや忝なやと天へも上る心地して堂のあたりを打詠かくあらんとは兼てより思ふに増たる御堂の尊さはがかの紅絹猿か向ふに高きは天王寺の塔なるかと餘りの嬉しさにゆる／＼と爰等見物して歸らん物とまづ茶店へ腰打かけ煙草吞つゝ霞簀より奥の間をさし覗けば現在我女房と弟子の座頭が痴話の體生れて此方盲目の闇地を拂ふけふの今女房や弟

前編にも演たる俄と云も文化に俄選天保に俄天狗といふ書出たれどもそれにもれたる物を爰に云文句を覺へ落しを忘れたる有落しをしりて文句を覺へぬも有只趣向の佳なる物をしるせり屋根葺釘をくわへ鐵槌にて屋根の漏を葺かへゐる淨瑠璃にて天滿に年ふる千早振ると紙治の茶屋場をかたると紙治の拵にて屋根の上へ來る屋根や恟りして盜人かと怪しむ爰は定て河庄で有ふちよと覗かしてくれと天窓デシマドよりあのマア瘦た顔はいの文句になる屋根やどふして屋根から出て來たのじやサア連て飛なら梅田か北野ア、爰からどふして飛れる物かなど有て紙治窓から覗き侍客の姿を見て腹を立る屋根屋異見するといはいかなる天窓デシマドが見入しぞ錢もなき世の馬鹿じやなアといふ落し也

國姓爺

或は國姓爺樓門の道具置淨瑠璃有と唐人の肴屋出て

よごいと云妻の女房樓門に駈上りの上るりにて上へ
錦祥女出て肴や何がある日本より客人有上そふな物
があるかと問ふ肴や冢の切賣鯿のよひのもござりま
す是置ませふかと立かゝるをヤレ冢と鐵炮放すなよ
など有て錦祥女云日外味ひ肴と白い細ふ切た物をく
た事があるが何であらふそりや日本の肴鯛と云魚と
麵類をひとつに焚て鯛麵と云がそれでござりませふ
ヲ、それがたべたい有まいかどふしてそれがござり
ませふ三千餘里向ふ迄取にやらねば喰われませぬヤ
レ情なや三千餘里のあなたとや此世の鯛麵思ひたへ
杯也落し覺へす

清 姫

又日高川渡し場へ女鬘着てヲイ船頭さん／＼と呼ぶ
船頭欠伸仕ながら苦船より出て何じやと云今爰へ肴
やはこぬか其肴賣は今の先渡ししたそりや片眼かヘヲ
、がんちの生節賣じやその生ぶし賣のがんちに逢
ひたいのじや早ふ船を出しておくれ是からむかふへ
渡しても逢れまい今頃は日高屋でどふちやうじ汁で
一ぱいので居る時分じやそふしてお前何の用じや
サアわしが小用する間風呂敷包をあの肴やに持ても

らふたら其儘で迹をつた取かへさねば置ぬサア船を
イヤもう日はくれる水は高し向ひがはへは出されぬ
船が出せすば泳ひでなりとゆかにやならぬ蛇はおろ
か蚯蚓に成ても渡らにや置ぬおまへ蚯蚓になるかゑ
らい器用な姫じや器用姫じやなアそうして金でも包
みに入て有たかアイ鏡袋に三步二朱入れてあるもう
二朱たしや雨になる蛇でも蛇にでもなつて渡らにや
聞ぬ此落も忘れたれば略す

新町橋

新町橋の飴りつけ橋詰烟草やの親仁の腎虚の體にて
烟草をほどき玉にしているエイ／＼の歌になり五郎
八黒頭巾にて出て扱も／＼今夜に限り黒船は頼母子
の顔よせとて内にいす獄門にあふて川の起請を取歸
さねばならぬとふと烟草やを見てちよと店先をかり
まするサア／＼お安い御用あなたは鎌倉やの若旦那
じやござりませんかちとお烟草の御用を仰付下され
ませヲ、よし／＼店の者らの烟草はおぬしの所のを
かはせるかはりちと頼まれてはたもらぬか此通り手
足がなへておりますれど勤まる用ならサア何でもな
い事じや聞てたも跡月晦日の晩に獄門の正兵衛とい

ふ男にをれが深ふ言かはして居る姫の起請をとられたそれを今夜とりかへすには黒船を頼んだれどるすで間に合ぬゆへこなた黒船の姿になつて立引して起請を取返してもらわふと思ふてア、めつそふもない茶釜組の親仁分いつも私の店へ來てもこふれ烟草屋なぞといかつい人どふしてあの男と立引がサアそこで是じやと懷より投頭巾と尺八を出してこれをこふ着てこふすると黒船じやと見へるそこでせりふはわしが教へるハテそれでも體がそふ自由にはなりませぬハテこふすればよいと二本杖を兩の袖へくゝり附木偶の姿にし我も頭巾を廻し袖をくゝり人形遣ひの姿となつて腎虛親仁を立ておしへてこふれ若ひの一寸待てもらをふかいとせりふをいふては杖にてつかふ覺へぬのをいろ／＼おしへて若旦那こりや何となされますハテ是が腎虛つわひじやとの落にて有けり

雪の五輪

山科雪の五輪と云外題の俄は其頃評よかりし影にて淨溜璃人の心の奥深きより直にとなせお石のつめ合へとび去つた切たの文句の時ばた／＼にてお石一間より出る力彌茶を汲出て母をなだめるせりふの合に

は奥にて上るりほしがる所は山々の時お石おこつてハイこちの息子にも方々から貰ひ手がござんすと立かゝるを力彌おさへてマア親人に何かの相談をなされませイヤ相談の出來ぬは折あしく夫由良之助は他行と始からるすつかふたよつて仕方がないといふ内小浪のさわりになる力彌聞て折角あの様に思ふている物などある内なさぬ中の娘故をよそにしたかと思われての文句を聞てモシ母人小浪はとなせ役の實の娘じやござりませんかヲ、ありやまゝ母で本間の母親は三角赤飯と云ふ醫者の娘で有たそふなモシこちの内で殺させては跡の迷惑イヤそりや如才ない小浪御寮を殺すに及ばぬ祝言さそふと云わいのヘエ、してどふなさるな髯引手が所望じやと云たれば定めて浪のひらとか何とかの名作を出そふそこで浪人と侮つてかよふな引手は望にないして／＼何が御所望ぢやといふた時にはこなたの夫本藏殿の白髪首がもらひたいそりや母人御無理じや鎌倉にいらるゝ本藏殿の首が今云て今間にはあふまい殊に赤紙付で急飛脚にも出されまいハテマアそふいふて見ねばわからぬとせりふの内奥にて鶴の巢籠の文句になるアレ／＼

もふ御無用といはねばならぬ其跡が直に謠じや力彌そなた諷ふてたもイエ私は一向存ませぬ劍術の稽古で謠などとはついに諷ふた事はござりませぬエ、千秋萬歳のとツイ一口諷へばよいじやそれでも私はエ、婚禮式の事をしらぬと云は謠ゐてい子じやのふと落しなり都て九段目の穴搜にて大體俄はかよふな作り方を是とせり今時の俄とは異にして是を坐敷にわかとは云けり

鼻 黒

文化の始つかたに玉造稻荷正遷宮に付砂持有尤男女入交て運ぶ物から賑はしき事甚しく氏地ならぬ船場上町島の内迄も砂持の人數出て其中にて若き男婦女子に轉合などせし者の鼻の先へ何者の仕業ともしれず墨を付あり砂持せぬ者は鼻黒じやと掛聲をして運ぶ事也餘り群集仕過して市中の男女晝は何しらぬ顔なれど夜になれば現になりて砂持に出るゆへ御公儀よりさし留とはなりけり其後夜深く大勢の人聲にておもしろく鉦太鼓にて囃し立門を通る銘々起出て門に出て見れば早一二町行過たる體也若き者其は跡より駈付見届んとすれば數丁かけ廻るのみにて終に其

囃子を見ず是なん狐の宮上りとか前編に云東都の狸囃子の類なるべし

砂 持

文政中朝日神明宮の砂持に素裸に越中褌を大道へ引するばかりにして駒下駄を履頭へ好みの行燈を冠り灯をともし數十人連立砂持の掛聲して市中を夜深る迄踊り歩行事はやれり砂は持すして頭の行燈の灯を消ざる様に踊るを是とせり是や輕の大臣が燈臺鬼の故事より出たる物か後は是も火の用心あしきとて禁止となりけり中におかしきは朝夷三郎が姿になり紅隈の御酒の口を頭にさし甚平羽織を着て砂持をして朝夷甚平の砂持じやと云歩行しも有けり白中シロナカと號して行燈は茶やの掛行燈生洲宿屋の行燈通ひ船の行燈とある限りをこしらへ褌駒下駄と三品揃へて其料さへ持參の者は其徒に入るゝ催主有しが禁止の時咎を蒙り長く預となりし者も有けり

若江の碑

天保の始頃河州若江村木村重成の墓へ參り何か幸ひを得たりと云て參詣の輩多く有しが後には群集する事夥しく法會開帳に殊ならず鎧兜武者と出だち雜兵

陣笠にて數十人竹螺を吹鉦太鼓にて參詣などせしかば近在の百姓は田をあらされ制すれども止まらず是も禁止となりて參詣の輩いち／＼名所家名書とめられ預となるあり暫らくの内にて後はよふ／＼參詣人も絶へたり惣體浪華の人氣は根のなき草の如く何事によらず騒がしくこぞり安く飽安き人氣にしてこの稻荷かしこの占ひ又大師の夢想なりとてこぞりて群集すること一ヶ月を過す

御影參り

伊勢參宮御影年は六十一ヶ年目なりと云ふれしが明和六丑年より廻り年に當れりとて文政十二丑年の春誰云となく拔まいり／＼と云出始阿波の國の參宮大坂へ來るより段々と拔出し近國近在は云に及ばず浪華市中一町内の人別半は參れり道中群集して宿もな／＼難澁なる事甚しと聞り尤御公儀より道中筋へはそれ／＼の人歩を出され至つて幼少の者又は老人の輩は送り届給はるなど有諸所より御影施行とて旅の具食物の類ひ或は湯髪月代の施行は道中筋數多出たれど伊勢路にては宿を貸者なし商人百姓の家に迄泊人にてつまり大約は野宿する輩多くな／＼泊りたる

者も夜中に朝飯くはせて宿を立すなど混雜夥し浪華の拔參宮は五月の末よふ／＼に納りたれど遠國田舎は翌寅年の春になりても絶へざりけり一説には御祓の札を鳩にく／＼りつけ放す時には空にて羽叩きして落す是を御祓のふりしと云せ未其時候ならざるに御影年とせし拵らへ事なりとも云しが然りや虚實はしるべからず

韓信を題せる歌

俊賴朝臣の「世中は憂身にそへる影なれやといふ歌を鏡の傀儡クグツどもが諷ひたるをいたり／＼にけりなと喜れしを又永縁僧正が夫をうらやみて琵琶法師どもに物をとらせてかたらひ我詠たるいつも初音の心地こそすれといふ歌を爰被所にて諷はせけることあれ是の書にも出て俊賴朝臣の自然に思ひかけぬ者其の諷ひしは時にとりての面目なりけん寛政中扇矢數四十七本といへる狂言に由良之助と安兵衛が開城の場にて韓信の故事を引所にて「末終に海となるべき谷水もしばしこのはの下くゝるなりと韓信を題せる歌をいはせしかば人皆是を小澤蘆庵の歌なりとするもしらぬも人口にふれけり俊賴朝臣のためしをひかば

蘆庵には嘸面目ならんが此うたは蘆庵にあらず伏見中書島の隱士學舟が歌にて誰か蘆庵に語りしかば四句然らずとて直したるをいかに聞ひがめけん蘆庵也と云ふらせし也我人以前自作の淨瑠璃端唄を忘れ果たる頃餘所にて諷はるゝはいと嬉しき物にて永縁ならねど呼とめて物とらせたき心地せらるゝ事也

倉治の瀧

詩歌連俳とも故人の名譽の句どもを評するは其道々に遊ぶ人のみにて一文不通の者にまで覺へ和歌やら俳諧の發句やら何人の作ともしらず耳に馴させるは淨瑠璃歌舞妓端唄等に入たる句也勿論手爾葉語路の誤りはあれど俗耳に通じ易く名所舊跡等にてもちつけ合點にて故人作者のはめたるも後にはそれを誠と心得相應に物も讀たると思ふ人まで是を呼もの少からず予が著したる綺語文章にもいふたる須磨の若木の櫻四天王寺の額などの如く物しる人も今更とがめず聞く事にはなりぬ寶曆中中村阿契が作の祇園祭禮信仰記三の口乳母侍従がせりふに大坂と云在所にて聞たれば岸野の里へはもふ一里と天下茶屋村は其頃いまだ呼ぬ名なれば岸の姫松をさして岸野の里

ともふけし物也此愁ひの内にもすくへど露のたまきわると云文有たまきわるとは魂極ると書て萬葉集にも出たる古言なり淨瑠璃に遊べる輩何事か辨ふべからず又四の切金閣寺の場にて松永大膳雪姫に龍の畫を望む時河内國慈眼寺の瀧のもとにて老人を手にかけしがとのせりふ有慈眼寺は今の野崎の觀音にて瀑布はなく倉治村に瀧有是を一名源氏の瀧と土俗は呼べり白幡を流したらんと云より源氏の瀧と呼ぶと傍なる碑面にあれどもより所なき鑿說にて爰にもと與元寺と云寺有しが荒廢して跡方もなくなりしよしは河内誌に有り此與の字を失して元寺の瀧といふなるべし信仰記の作者は是を慈眼寺の瀧と思ひしより然脚色し物なるべし寶曆七年より今迄九十餘年となれば野崎に瀧あらば其跡なりとも遺るべし是ら皆心得たる鑿說を源としてそれより案じかへる物なれば齟齬せる事多しとしるべし

戲場の和歌

雲井にまがふ沖つ白浪と云を宜山骨牌に石川五右衛門公家の容に出たつを書くより木下蔭と云淨瑠璃につかひ大宮人はいかい見るらんと宗任の歌を安達

原の淨瑠璃に兄貞任のにせ勅使としりて梅の花とは
見つれどもとかけたるなどこぢつけながら脚色とは
是を言也和田合戦の四の切に荏柄の女房綱手の歎き
を實朝の聞て海士の小船の詠歌成り竹取物語の三の
切大江助千里入唐して父吳道子に逢ひ月見ればちゝ
に物こそこの歌をよむなど皆俳言ながら博識の人に聞
せて願をはづさせんとするの戯れ也強て文盲人に是
を本説にせよとはあらじかし

高野の玉川

此前編に演る如く端唄の袖香爐は或人の追善に作せ
し歌なれば今戲場にてもいはば腹切又は身代の時に
こそつかふべけれさもなき色繪通言にて立役女
形色情の事を云
ど唱はせるは笑ふに堪たり高野大師の玉川の歌は秋
成が雨月物語と云作物にも論じたる如く和歌一首の
中に毒と云事見へず又玉と號する物は何にまれ二な
き佳品ならでは冠らすべからず毒ある清水に玉川と
はいふべからず是も原は戲場傳奇に演たるを聞ひが
めて云にやあらん「ちればこそいと櫻はめでたけ
れといへば腹切よとの謎となり身を捨てこそ浮む瀬
もあれとの歌は覺悟きわめし時のせりふと皆戲場よ

り世にしらるゝ歌とはなりけり

猿に似た顔

前編に云し豆藏輕口の詞に儕が顔は猿に似たりとい
へば其者腹を立る中へ一人わけ入腹立の段尤なりそ
ちの顔が猿に似たるにはあらず猿の顔がそちに似た
る也と聞てそふ云るゝ時は腹立すと暫思案してやは
り同じ事也といかる道外をするは宋の拾遺錄に出た
る何尙子顏延之の故事より出せし事と思はる宋の何
尙之といふ者と顏延之といふ者少より馴親て無二の
朋友なり共に其容貌醜し何尙之常に顏延之を猿と呼
ぶ顏延之も又何尙之を猿と呼ぶ或時二人連立西起と
云所に遊ぶ顏延之既に行路人に問て曰吾二人何れか
猿に似たると其人何尙子を指ていはくあれ程猿に似
たるはなしと云顏延之大に悦て然らば吾はいかにあ
ると問その人答て曰君は乃眞の猿也と云尙之延之と
もに轉倒て大に笑ひけると此語をひいて戯るゝ也諸
葛謹の顔を馬に似たると吳の孫權の戲言せしも豐太
閤を猴に似又犬に似たりとて猿面冠者犬面冠者と異
名を呼しも同日の論なるべし

朱買臣

義經腰越狀の淨瑠璃を予が傳奇作書にくわしく著せしが五斗は後藤祐乘の鑄工に妙を得しを借事實は太公望と朱買臣を潤色せし物なり覆水もとへ歸らぬ古事の如く朱買臣字は翁子初貧乏にして薪を樵て賣常に書を誦妻其業に疎なるを責て暇をとり他に夫を求て住り買臣は獨身に成て路を行々歌ふ妻後の夫と家に在て買臣が飢疲れ凍て衣の薄きを憐む後に買臣學問至りて會稽の太守となり駟馬の車に乗り高蓋を擎て吳郡の界に入る故の妻と夫道の掃除を致し砂を蒔水を洒ぐ買臣車を留て夫妻を後車に乗て會稽に連往て家の園に置食を給して養ふ妻耻悔て一日計り有て自ら縊死せり目貫師五斗兵衛は是より出たる作意也

狐戯るゝの詩

故事談に出たる堀河右府自注頭辨四條中納言定頼に經を習ふ其ころ上東門院に好色の女房有小式部内侍堀河の右府四條中納言と共に此女を愛す或時右府先に此女房の局へ入ておはしける時納言又彼局を伺ふの所既に會合のよしをしり納言方便品をよみて歸る女其聲を聞て感するに堪へず右府に背きて泣ば右府も亦枕をぬらし給ひぬ扱右府竊に思ふによろづ定頼に劣るべか

らざるに安からぬ事とて忽心を發して八軸を覺悟し給ふと有淫風の甚しき哉錦繡綺語花鳥の情を通ずるのみならず金口の寶典をもてすら女を誑惑する媒に用ゆ此頃の官女といふ者大方遊女の如く成しさま其世の書記を見てもしらる江村北海が蟲の諫といふ著述に玉階草生じて奔々の鶉を藏し上苑菊開きて緩々の狐戯るといへるはさる事也然れど定頼卿の經聲の妙をいわん爲か御堂殿車の内にて譬喻品を誦し給ひし時「門の外法の車の聲聞ばと和泉式部の詠しも其聲の麗はしかりし故なるべし」

經聲人を感せしむ

義經記に牛若と辨慶と清水の寶前にて經をよむに牛若の甲の聲辨慶が乙の聲に參詣の人々感じたりし旨を見てもしらるゝ經聲の人を感動せしむる事此の如きは呂律に叶ふ故にや當地榮宗の經聲明風の唐音にて節を付て唱ふる所はよく人を感せしむ是を歌唱のごとしとて誦る人もあれど本朝のいにしへも讀やうの習ひありける事明風に譲らざるべし蛙鳴のごときを聞馴て昔を考へぬ人の謗りはうけがたかるべしと蒿蹊は申されし也

宿の小袖

鯛屋貞柳が詞に狂歌は宿の小袖に繩の帶仕たらんやうに有べしと云ふ亦雪中庵蓼太が云は俳諧は物の模様だてなる中に淋しみを聞せたらんこそよからめたとへば故園十郎が顔は赤く隈どりながら紙子着て樂屋に居たらむ様に有べしと是貞柳が教とおなじ又云俳諧も年よりては詞を伊達に遣ふ様に心がくべしさなくては物古びて靜なる句も出ぬやうになる物なりされば妓家の長と言ひし中村富十郎^度が心がけを心の師として我はする也と雪中庵のいわれしよし

妓家の星合

大江丸舊國或妓家にて星合の夜「七夕の今宵大ぼし力彌かなと詠たるを其頃の俳友此句は餘りけやけくいかゞと評じけるに舊國の云東武雪中庵の附句に「おれも是から醫者になる筈と云前句に雪中」ひそく矢間千崎堀小寺と附られしが其席にて魚紋連丈など諫て云おもしろき句ながら浮世めき候まゝ間神崎などゝあらたむにやと蓼笑つて夫にては近き代の遠慮もあり實にはまりてもいかゞ也都て和朝の弄び源氏伊勢物語など上古の人あながちに尋ぬべから

す其作者只詞花言葉を翫ぶべきのみと戸部尙書の奥書あり是らを云にあらねど俳事も八雲の末なれば主税とあらんには風流なし七夕のあふぼしとついでて力彌と洒落たる宗因の風致を思ふ計りひとへせに數千の句を云捨る内の我なぐさみ也我にはゆるせとありし一つの癖と大様に見なし給はれかしと申されし事あり

平語小曲

平語小曲に云琵琶は生佛平家を歌ふて一時に鳴慶長元和の頃前田檢校此技に巧也高樞訪月に相傳へて八世に及ぶと云寛政庚申の春上梓して二卷有節の名目節の象を爰に出す詢素聲怒詢拾下音サ
強下^{ハミダグ}怒下^{トモ云}中音^{二ノ聲}中ユリ長下^{四ツゲ}初重中音^{二ノ聲}半下^{トモ云}初重歌^{下歌}重初重三重^甲上^{一ノ聲}折聲^引下^ケリ
二ノ聲^{ミキゴユ}走^{サシゴエ}三重^{サシゴエ}指聲^{強聲}聲拾^突居右強中音^{讀物}下音^口
中ユリ^{ツキスエ}聲^{クライチウ}走^{オン}三重^{コヒ}指聲^{強聲}聲拾^突居右強中音^{讀物}下音^口
突居位中音^{散位}詢運以上(中略)鱈魚^{スエキ}烽火^キ大塔
建立嚴島御幸月見廻文實盛最期宇佐行幸生暖^キ横笛志
渡合戰平大納被流我身榮花阿古屋の松少將都還鶴五
節沙汰祇園女御聖主臨幸太宰府落樋口被斬藤戸内侍
所都入紺搔祇王卒都婆流蹉跎嚴島還御文覺強行喘涸^{アラギヤウ}

聲青山沙汰忠度最期征夷將軍院宣戒文逆櫓泊瀬六代
祝言紅葉の切以上卅六種也

琵琶に落涙

相州小田原北條の幕下佐野の城主天德寺豪健の勇將
なりしが或時琵琶法師を招て平家を語らせ聞けるに
いまだ語らぬ先に法師に云けるは某は只哀れる事
を聞たし其心得にて語り候へといへば法師心得候と
て佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに天德
寺哀れがりて雨雫と泣今一回聞度と云ば那須與市宗
高が扇の的をかたりけるに天德寺落涙數行に及び後
日に家臣の輩に過し日の平家はいかゝ聞つると問ふ
に家臣共面白き事にて候但し我々共ひとつ心得ぬ事
こそ候前後二曲ともに勇烈なる事にて哀なる方は少
しも候はぬに君には御感涙に咽ばれて候いかゝの事
と今に不審に存候といへば天德寺今迄は各を頼もし
く思ひ候しが今の一言にて扱く力を落して候先佐
々木が先陣をよく合點して見られよ頼朝舍弟の蒲冠
者にも賜わらず寵臣の梶原にもたまわらぬ生唆を高
綱に賜はるにあらずやされば其甲斐もなく此馬にて
宇治川を先陣せずして人に先を越されなば必討死し

て再び歸るまじきと頼朝に暇乞して出ける其志を察
して見られよ又那須の與市も大勢の中より撰ばれて
只一騎陣頭に出しより馬を海中に乘入て的に向ふて
至る迄源平兩家鳴をしづめて是を見物するにもし射
損じなば味方の名折たるべし馬上にて腹搔て海に入
らんと覺悟したる心を察してみられ候へ武士の道程
哀れる物は候はず某は毎に戰場に臨ては高綱宗高
が心にて鎗を取候ゆへ右の平家を聞時も兩人の心を
思ひやりて落涙に絶ざりし然るに各には哀になかり
しと申さるゝに付て思ふに各の武邊は只一旦の勇氣
に任せて眞實より出るにはなきにやと思われ候夫に
ては頼もしからずこそ候へと云しかば諸臣皆迷惑し
て辭なかりしとぞ

雪中庵五世

初雪中庵嵐雪服部は句を吟するに訛りては語路の運び
あしく連衆にも聽へ兼て口惜しとて都に登り後々は
少しも訛らずして執筆へ句を渡されしとぞ此二世史
登三世蓼太四世完來五世對山元録年中より今に連綿
として東都深川に有

來山が門松

世に小西來山今宮十萬堂が「門松やめいどの道の一里塚と

いふ句を禁忌也」と云いかに新しき事をいはむとて風雅の罪人也と云人もあり是は來山がすみたる家の裏屋に住居せし者大晦日に身まかりける山が隣は家主にて不斷は庭を通せしかど元日なれば翌こそと申裏の男はやもめにて遠き親類の取賄たれば早く葬りて仕舞たき心なるを山聞て氣の毒がり我は世を遁れたる風人なればかまひなしと許して元日の夕方我家より野送りを出しやりての詠なるよしそれを罪人といふも又道を重んずるの謂にて殊勝とも云べけれど物は其時の様を能く考ていふべし來山翁が事跡は近世畸人傳にも出て御奉行の名さへしらすと牢中にてさへ詠ほどの畸人なれば歳旦とて何の遠慮かあらん

句の新しみ

都て句の新らしみと云は古より別に奇を求むる物にあらずある娘の子のいと寒かりしに友どちらの咄に風も寒ひかして懷へ這入ると云が新らしみ也去は寒さは動かぬ所肌に通るは本情也懷に入ると云が新らしき也予が淀川の渡し場にて乗合の百姓と船頭の話に卅石も是から涼しふてよけれど蚊の乗るには困

るとの詞を聞人船に乗れば蚊も乗ると云は新らしみ也とて句には作りぬ

釣狐の異見

城州宇治黃檗山萬福禪寺は隱元和尚の開基なれば見物せんものと或西國の城主交代の節木幡より駕をまげて立寄給ひしに前にも參じ給ふ諸侯有て袴を取居緇衣に袈裟をかけ如意を持行道の僧中に交り經文を誦し給ふ有様を見て驚き肝をつぶし厚鬢に衣をかけて武士の有まじき容也と大笑し歸國有て後御國の黃檗派の和尚を招待あり各の宗旨には唐にて武士が三衣をかけて出家の眞似をする者もありやとかの黃檗にての事を語り見兼候事也と申されける和尚云こなた様には常に狂言をお好のよししかも御上手と承り候左様にて候哉と問いかにもと仰有ければ然れば狂言の大事は釣狐と承り候畜生足は習ひ事のよし日外被成て見物の諸人感じ入今に其噂いたし候全く君は暫らく畜生の心になり正に狐にならずは勤がたしかの貴人も暫らく行道の中は釋迦の教を熟得して佛の心裡に叶ひ給ふなるべし然らば野狐の魂を似せんよりは行道の方増るべきか形より先其法其道を改め心

裡をよせ候事大事也と答られければ城主則佛道を感
じ大寺建立ありけると也嗚呼賢しき哉此禪僧

淀川の抱鯉

淀川にて鯉を取るに漁夫水中に入て鯉と並び居て脇
へかひこみて浮み出るを抱鯉と云人を諫るの道も是
に同じ始にあしき事としりつゝ共に交はり居てよき
所にて善に趣かする事肝要なるべし人を異見するに
も大約の人は其者の非なる事を舉て異見するが故に
容れざるなり先其人の功を舉て是を賞美しかゝる功
をなしながらいかでか宜しからざる事に趣くやあた
ら功を失へりなど、善道に導びかば人かならずその
理に伏すべしと云り

馬の餞

餞の字は説文に去を送ると云酒食を以て送る事とも
註す詩經には道祖神を祭りて側にて飲とも註せり然
るに此字を馬のはなむけとよむは去を送るにはあへ
ど食に従ふ字義と詞とは大に異也馬の鼻むけとは旅
立人の乗れる馬の鼻づらをこなたへしばし引むけて
如此はやく歸り給へと祝ふ意也とは道理面白く覺ゆ
いづれ旅行をおくるなれば酒食をもておくるにもち

ひ來れり

經信の和歌

經信八條わたりに住れたる頃九月ばかりに月あかゝ
りける夜空を詠めて居られしに碓の音のほのかに聞
へければ「からごろもうつ音きけば月きよみまだね
ぬ人を空にしるかなといふ歌を吟せられけるに前栽
のかたに北斗星前横旅雁南樓月下擣寒衣といふ白樂
天が詩をまことに面白き聲して高らかに詠するもの
あり誰ばかりの人にてかくめでたき聲したらんと覺
へて驚て見やられたるに其丈一丈あまりもあらんと
覺へて髮のさかさまに生たる物に有けり是は朱雀門
の鬼などにや有けんかの鬼はすきものにて此詩歌と
もに公任卿の朗詠集に入られたれば其歌を吟せられ
しに感じて其詩をうたひたるなるべし

高麗王の惡瘡

經信かく風流なるうへ事を決斷するに甚すみやかな
りしとぞ承暦四年高麗王惡瘡をやめるよしにて日本
の名醫丹波の雅忠を給はらんと乞申たり雅忠は後漢
靈帝の裔にして正四位下主税頭丹波守たり高麗國王
雅忠が醫術のすぐれたる事を聞及び此度王則貞と云

商人に書を言傳て太宰府に達す其書中に奉聖旨訪問貴國といふ文有ければ其文言禮を失ふを以て其贈物をかへさんやいかいなど陣の座の定に及びてさまぐ評議有けるに大納言經信卿其座へ遅く參られけるが高麗王惡瘡をやみて死なん事日本の爲苦しからぬ事に侍りといはれたる一言に事定まり雅忠をつかはすべからずといふ事に成たり

白龍網にかゝる

又或所に野干を神體としたる社の有けるに其社のほとりにて狐を射たる者あり此射たる者の罪ありなしの事を陣の座にて評議有諸卿さまぐに論ぜられける中にて經信卿白龍も魚服すれば豫且が密網にかゝれりとばかり申されけり是はいみじき神なりとも狐の容にて走り出たらんを射るに何の科かあらんと云心也こは唐土の故事にて龍が魚のすがたになりて波に戯れて浮び出たりけるに豫且と云者の網を引けるにかゝりて悲しきめを見て大海にかへり龍王に訴へければ龍王いはく汝何とて魚の姿とはなりけるぞさればこそ網にはかゝりたれ今より後さる事をすまじき也と云り經信此故事を以て決斷せられたる故彼狐

を射たる者罪を免れたり

鼠喰の具足

平安城にて質に具足を置請むとする時にみれば鼠が糸を喰たり請主難儀に思ひ色々理をいふを歎きさらば利息なりともすこしは免されよと詫けるに質屋更に聞ず剩鼠を一つ殺して是が藏に居て具足を喰ふたる科人なりしかる間成敗して候ともたせつかはす質置口惜き事に存じ所司代へ罷出初中後を具に申ければ多賀豊後下知せられけるやう扱は鼠は盗人也盗人の居たる家なる間闕所せよやとて家財悉く取質置に下されけるとぞ

匡房の強記

權中納言匡房はいとけなき時より人にやゝれて才智あり四歳にして書をよみならひ八歳にて史記漢書をよみ通し十一歳にて詩を作られたり其頃關白賴通公宇治の平等院を建給はんとて權大納言源師房卿とゝもに宇治に往て造營の地形の事などしめしあはさるゝに四足の大門を北面に建る例いにしへに有ける事にやと師房に問たまひけるに師房其例を覺悟せられざりければ大江成衡が子江冠者いまだ無官にて侍へ

ど下官が車の後にのせて参り侍り彼若者はよく故事を覺へ居候まゝ誠に召出して問侍らんとて匡房に此よし申されければ匡房謹で答られけるは天竺には那蘭陀寺戒賢論師の住所震且には西明寺圓淵法師の道場日本には六波羅寺空也上人の建立何れも寺門北に向ひ候と申されければ頼通公大に其強記を歎賞せられたり

雙魚扁鵲の文

此匡房後三條帝白河帝堀河帝三朝につかへて官位昇進せられけるにかの高麗の返牒をかゝしめられける其文の中に雙魚難達鳳池之浪扁鵲豈入鷄林之雲といふ句有此句を人々聞傳へてめでのゝしりける此雙魚と云は唐土にて魚の形に文を封する事有故書翰を雙魚と云也鳳池とは禁中の御池の事也もろこしの名醫の名扁鵲鷄林は高麗の別名也

孕句

世に孕句と云る有趣向うかびながらも句を惜みて其場をまつ今の世の懷劔辨當などいへるさもしき心とは同じ日に語るべからずむかし源の順楊貴妃歸唐帝思李婦人去漢皇情と兼てたしなみ侍りしが對雨窓

月といふ題を得て此句を出せり津守の國基がうす墨にかく玉章と見ゆるかなの歌もおなじ伏柴の加賀白川の能因なども皆此類ひ也ばせを翁も浮世の果は皆小町也といふ句を久しく心にかけて品かはりたる戀をしてといふに出せりと雪中庵史登の話也風雪の二世藝太の師也

懷劔の發句

淡々曰詩は薙刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懷劔也こゝろ切に思ひつむれば其利事早く始皇の胸先を刺にいたる双長くば其所に至りがたからむか昔戀といふ題を玉はり「夏瘦と問はれて袖のなみだ哉」といひけむも即懷劔のきれ味也と

流行詞は卑し

雪中庵云句振は我生れの儘にして修行有たしつくるへるはいやみなり土地によらずして句に都ぶり有鄙ぶりあり高雄といふ遊女の或田舎人に異見しけるはそこには田舎にて歴々の御方也此程は江戸衆のはやり詞など似せ玉ふがいやみなり能男と金つかふ人とはやり詞に傾城は倦て居れば只ありのまゝなるが可愛也其有の儘なる人に愚なるはなき物也ゆめゝにせ給ふなと申せしとなりかゝるあそびものゝうちに

も名高きは心の置所格別也しからば風雅もおなじといわれし

猫の飼やう

淡々猫を飼けるに我喰ける飯野菜などを我器にて分ちかはし膳の脇にてくわせけり門人の曰先生餘りなる不行跡の飼せられやうかな猫の癖あしく成候はんと談笑て曰さればとよ初め二三疋の猫は随分と行儀に飼つけ首玉なども奇麗に諸事召使の女共の取計たりしが何國へか盜まれて十日と内の用にたゝす必竟美しく飼たつるゆへ人もほしがる也依て此猫は飼始しよりかくあしく育たる故一二度は盜まれたれども行儀あしきゆへ追かへされしとみゆ何れもよく御考候へ猫は所詮鼠の書物を荒すを防の役が專一也と見る時は餘事に構わす唯鼠の役といふ所が眼の付所也俳諧も又かくの如し爰が眼字それが其題の專といふ事を見定めたしとありし

永井の肩衝

永井善左衛門は後に道教と號數度戰場へ出て高名あれども軍功にはこらぬ男也越前を暇取浪人にて上州深谷に閑居の砌旗本の士より瀬戸の茶入をもらひ秘

藏せしに召使の女落して打破ぬ道教大に腹を立叱りければ彼女迷惑して我鏡臺の内よりふしの粉を入置たる壺を取出し其代りにあたふ道教是を取て役には立ずして是にて了簡して取らせんとて秘藏もせず捨置たるを或時小堀遠江守ふと此壺を見て手を打て稱美したり是唐物の肩衝に極り則永井肩衝と銘じ後には公方の御道具と成りけるとぞ

永井正宗

又道教は板倉伊賀守と懇意ゆへ將軍御上洛の砌直々御詫言申上御旗本に歸參させんと内意に任せ深谷を立て上京す道にて浪人と連になり尾州名古屋親類方へ立寄る間荷物と浪人に頼み先へ宮迄つかはす内彼浪人已が刀と道教が差替の刀と差替駈落す道教宮に來て大に驚くといへども詮方なしかの浪人が残し置たる錆刀を尻付に入て京着し板倉方へ落付勝重物語に將軍家御上洛に牢拂申付るによりためし候刀脇差數十腰及を付させ候と也道教是を聞て道中の次第をかたり彼浪人が刀も次手にためし見んとて及を付させ見るに錆て分明ならねどねたばを合すに常の刀にあらず研屋が云此刀の刃味幾腰の中にも類ひはなく

候と云扱ためし者の中にふじみ有て不通に切れず彼刀にて切るに水もたまらず大切物也と譽る仍て錆を磨し見るに刀の出来常體ならず中心を彈落し見れば正宗と銘顯わる本阿彌一目見て押戴き正宗の出来物也と申に付是も公方へ上り永井正宗と呼べり

音曲の譽詞

音曲などを譽るにやうくと云は洋々の字なるべし論語に洋々乎盈耳哉とあり孔子の樂をほめ云ひし詞なり

古き文に有味

平家物語は古き詞ありて耳遠きやうなれども幾返り見ても飽ず太平記は文勢はなやかに聞ゆれども數返見にくし況やそれより後の物語は二返とは見られず何にても面白きは古き文也

領巾振山

九州松浦のひれふる山は佐用姫が領巾を振て夫大友狹手彦が乗たる舟をまねきたる山也と云り領巾は女のかしらの飾にするものなり今の世にはありとも聞へずといへり

應舉の畫

圓山應舉主若かりしとき野馬の草をはむところを圖せり一老翁見て難じて云是盲馬也舉云其故甚麼翁云それ馬の草をくらわんとするや必先其目を閉是草に目を傷らんことをいとへば也此馬叢中に鼻づらをいれながらその兩眼を見ひらきてあり是盲馬にあらずして何ぞや舉深く其説を感じて畫改めしと也

臥猪の眞寫

或人應舉に臥猪の畫を乞ふ舉いまだ昔野猪の臥たるを見ず心に是を思ふ矢脊に老婆有薪を負て常に舉が家に來る應舉婆に問て曰爾野猪の臥たるを見たるか婆云山中邂逅是を視る舉云汝重ねて是を見ば早く吾に知らせよ篤く賞すべし婆諾して一月計り有て京に走り來て老婆が家のうしろなる竹簾の中に野猪臥居るよしを告舉が云爾先歸れ必しも驚すべからずと云て俄頃に酒食を携へ一兩輩の門人を將て矢脊に至れば野猪は竹中に臥たり舉則筆を採て是を寫し婆に謝して其夜家に歸り後是を清畫して工描既に調ふ時に舉が家に鞍馬より來る一老翁有舉臥猪の事を思ふが故に野猪の臥たる所を見たるかと問翁云山中常に是を視る舉畫する所の臥猪を示して此畫如何翁熟視す

る事良久しくして云此畫善といへども臥猪にあらず
是病猪也舉驚きてその故を問翁云凡野猪の叢中に眠
るや毛髮憤起四足屈幅自ら勢ひあり僕山中にして病
猪を見たる事有實に此畫の如し舉始て曉りて翁に臥
猪の形容を問翁是を説事はなはだ詳也爰におゐて
舉さきの畫を捨て更に臥猪を圖す工夫専ら翁が口傳
により四五日有て矢春の老婆來りぬ舉さきに見た
りし野猪の事をとへば婆云あやしむべし彼野猪其翌
朝竹中に死たり舉是を聞いていよく翁が卓見を感じ
再び其音づれを待に一句ばかりを経て翁來りぬ舉後
に圖する所の畫幅を開きて是を見せしむ翁驚歎して
云是真の臥猪也と舉よろこびあつく翁に謝す其畫尤
奇絶にして今猶京師某の家に秘藏すと舉が畫に心を
もちゐし事斯の如し

一 蝶魚を鬻ぐ

五无集の中にしまむろに茶を申こそ時雨かなといへ
る句はいかなる事にやと雪中庵にて夜話のせつ門人
の尋けるに蓼太の曰此事先師史登の物語りに聞しは
昔初代の英一蝶は其角なかよし然るに蝶故有て公の
罪を蒙り伊豆の島に流るるに友人彼是別れをおし

船場まで送りて信友の情をなす一蝶申けるはかゝる
身の再び相見む事かたし是迄の御懇情いつの世にか
は忘れ申さん我かの島の事を聞に大約の人魚をとり
日に干乾かして江戸の便にひさぐと承る我も又さこ
そあらめ然らば魚の腮に木の葉やうの物をすこし宛
入置べし若さやふの物の入たる干魚あらば蝶がなせ
る物よと思ひ給へかしといひて別れたり人々其舟影
の見ゆるまで見送り其角はいと胸塞りて立もさら
でありし其後一とせばかり有て其角が僕日本橋の魚
の店にて乾魚の有しを調べかへりかてぐさになさむ
とたわゝなる魚を火に炙りけるにむろといへる干魚
の中に笹の葉の様の何ともしれがたきが一枚出たり
残る魚共にも各同じやうに有しゆへ扱々島のやつら
はをかきし事をなす物かなと笑ふを其角ふと寐耳に
入りやをら起上り蝶が云し事を思ひ出し此乾魚は何
方の嶋より参りし物かと其鬻げる問屋へ人走らせて
尋けるに大かたは八丈大島より渡し申よしを申角
爰に於て蝶がいひし詞を思ひ望友の情しきりに動き
蝶が親しかりし友どちを集茶を入此干魚を出し是こ
そ蝶が申のこせし笹なれいまだ長らへかゝる業をな

しけるよと皆くそなたの方に向て遙に信友の情今更涙といめ兼たりしとぞ角が句も此時の事也と聞へし

鸚鵡籠を放る

應永の始頃細川右馬頭頼之は篤實の君子なれば政事の餘暇には禪味を甘んじ嵯峨の天龍寺蕉賢道人を師として玄を談じ幽を問しむ一日法要の商量事終り寒暖の贈答過て頼之申出らるゝは柳營の御繁榮日に増て一天下徳風に假す如くめでたけれ其上當世子義持君漸十歳にならせ給ふが才智世に超え器量ある舉止に見へさせ給へば誠に末頼母しく侍ると語られければ師も眉の霜を拂ひ欣然として夫こそ海内の大幸なれば諸世子君にいかゞの才智と問はれしかば頼之謹て膝を屈しされば候聞し召過し春高麗國より舶來せしとて鸚鵡と云鳥を九州より下官に得させけるが此鳥は自餘の鳥とは異にしてよく人語をなし且鳥獸の啼音をも真似侍るよし鸚鵡能言ども飛禽を離れずと禮記にも見え唐詩にも見及べど生たるを見る事なかりし物なれば御幼稚の御慰にもと世子君へ奉りしかば殊の外に愛思しめし架に繋ぎて飼せ給ひしに或朝い

かがしたりけん其足皮の切れたるをしらで侍臣達の遣戸をやり薙揚などせしかば彼鳥容易飛で出ぬアハと追出たれども行衛だに見送らず世子君の御秘藏と云日本の地に二羽となき名鳥を逃したる咎輕からねば當役の者は既に自害に及ばんとせしを年老暫しと宥め譬へ死だりとて鳥の歸るべきにあらず唯公旨に任せてよとて恐れく世子君に其事具に啓せしかば良有て彼鳥千里の蒼海をわたつて唐土へ歸るべきかと仰出さる近習の年老否渠さ程の飛行成候は、舶來をまたずこゝらへも飛來り候はんに其事なれば彼方へも飛去候はずやと存奉ると啓しければ誠にしかり渠が小き翅にて波濤をば越がたかるべしさあらば日本に留りなん日本國は我御國なれば逃出たりとて惜むにたらず其逃したらん者さこそ恐入て居つらめ速出て見參せよとの御誼に當人は蘇生の思ひをなし扈從近習の人々もその寛仁を感じ奉りぬ末頼母しき賢慮頼之等が知命を過る齡にても及び難くこそ侍れと涙を流し語られければ道人微笑して苟に志學にも滿させ給はぬ御心より其逃しつる人の患ひを察し給ひ異國へ歸るかかへらざるかと尋給ひし御心遣ひは

深く感じ侍りぬ但し執權の其事を褒給ひて御身もかくは及ばじとの御辭は過差なるやうに聞え侍る千里の蒼海を越て歸らんやいなやと問せ給ふ時若異國へ歸るに決定せば彼逃したる人を罪なはれんやさあらば人間をもて禽鳥にかへ給ふべきや此國に居たらば惜からず異國に歸らば惜とある御心も弘きやうにて弘からぬ御心也御幼稚の御丁寧にはさこそあらめ國政をとる御心には未可ならず珍禽奇獸國に育はず外典の内にも見えなれば唯逃したらん苦しからずと宣はんは最猶尊く侍るべし御慰にとて獻せられたるはなを劣りたるやうに思ひ侍る併是は樹下石上の浮屠氏の丁寧にて利世安民の家には用ひ難かるべきかしらねど兼て佛世不二の道理に御接心も候へば底意を残さず申侍ると宣ふにぞ頼之は垢染の程を慚愧して黙々として居られける

遊女黃鳥を放す

道人斯て宣く今の話につきて思ひ出せし一話有貧道若かりしころ諸國遍散して攝泉の沙界を通り侍りしに遠里小野の茶店に休らふ時其前を愛度粧ひし女興に人々多く付副て通るを其邊より皆々出て見送り口

口にめでのゝしる茶店の主語て此與此所の乳守に但馬といへる遊所の人に幸せられて今伴はれぬるにて侍ると云まゝに誠に前世の善因のなす所なるべしと答しに主の云さにこそは有べけれど夫は三世丁達の身ならねばしるべからず此女などは善果の靚面に至る人にて此但馬西國筋の豪富の人を客として折々通はせけるに家裏に黃鳥とやらむ唐土の鶯とやらん珍らかに美しくしき鳥一番もて來て贈りぬ但馬悦び一日二日座右に置いて詠めしが何とか思ひけん籠の戸を開きて飛せやりぬ其翌日彼客來り此體を見て大に驚きいかにあやまちて逃しけるぞと問しに但馬打笑ひて此程給はりし時は美敷珍らかなる鳥なれば目離せず見侍しが日を累て愛するまゝ鳥の心に成て思ひ侍るに外よりこそ美敷珍らかに思ひて愛れどもをのが心には愛せられんより野山を廣み翔りありかん事を思ふべし我身の上も人より見たらば綾羅にまつはれ琴瑟を弄び暮していかに計樂しからんやうなれども我身となりては苦しき世渡りなるを此身として此鳥を籠に入て愛ん事餘りとは情なき事也と思ひし儘に自ら逃しやりぬる也君の御志を仇にするに似たれども君

の賜りたるも自らが心を慰めよとの賜ものなれば飼て心よからざるより放て憚らんこそ御志に叶ふべしと思ひ君に窺ふにも及ばずかくの如しと語るに彼客大に仰天し彼鳥は近來初て渡りたる鳥にして價百金に及ぶ物なるを我なればこそ惜ます饋りたるを立處に逃したるは懼敷心の女也と去て再び來らざりけるよし然るに此事遠近に聞へ客人も繁かりしが近頃攝州の國士深く是を感じ今日しも價身して宿の妻となし給ふ也陰德陽報眼前なる物をと覺侍ると語るに貧道も衣の袖を沾して陶淵明が月に對して白鵬を放てりしは賢者の上なれば驚に足らず賤しき遊女の身としてかく思ひよれるを五柳先生に勝れる物かと覺侍れば其人の後影を遙に拜して過行侍りし是らを思へばさきの御物語は第二義に落たるやうに覺へ侍るまま不圖貶し奉りぬるは憚多きをゆるさせ給へと宣ふに賴之は頭を低て合掌するより外はなかりしとかや

臨寫摹寫

輟耕錄に臨寫は紙を傍に置いて觀て是を學ぶ摹寫は薄紙をもて本書に覆ひて筆を用ゆといへるを譯文筆跡に取違へて書れたりと或人見出せりさしもの徂徠氏

なれどもかへりて大家の空覺へ成べし且豪傑人を詰くもまゝある例にて此老琵琶を轉倒して琵琶とつかひて韻にかなはしめられたる詩有と或人のいへりき

天龍川

橘經亮の語に遠江の天龍河をあめなかのわたしと西行發心記に見ゆ龍の梵語那可と云故也さるを海道記に鴨長明と云あまみつ空の中河とあるは誤れりとなん

行素夢常清

留青廣集といふ書に行素夢常清と出ればげに行ひのやうによりて夢をなすべければ夢もまた吾心にとへば恥かしき物也

煙管筒の銘

或人煙管筒に物書てよと乞ふに黃蘗の隱元烟草を惡み給ふ偈に曰一管の狼烟吞復恰如炎口鬼神身當年鹿苑有此草不說五辛說六年と座禪看經の勤を空しくせるを惡み給ふならん二百年來もはら人の嗜む物となりて一たび吸ては忘れ難き故相思草ともいへり又何人の一聯かはしらねど烟草の箱に書付たるを見しに手拈姑娜千年草口吐蓬萊五色雲ともあれば「此草の

なき世なりせば講釋師遊女も閨につきなかるまじと
例の戯れを書いて與へぬ嗚呼癡なるかな笑ふべし

西澤
文庫
皇都午睡二編上の卷終

西澤文庫皇都午睡二編中の卷

目次

- 一 茶臼山
- 一 雪花の争ひ
- 一 香盆
- 一 平家を評す
- 一 去來の反古
- 一 望月曇晴あり
- 一 秋田の詠
- 一 香阿彌の蒔繪
- 一 かまへ太刀
- 一 室の八島
- 一 菜種の御供
- 一 急流の心得
- 一 住吉の奇瑞
- 一 東海道の算用
- 一 廣江寺の鐘
- 一 飛梅
- 一 似雲聞書
- 一 阿閼寺
- 一 熊野の謠曲
- 一 釋智藏
- 一 絶景に句無
- 一 けふの櫻
- 一 夜曆を見る
- 一 室の名所
- 一 繪島の石
- 一 花扇
- 一 粟田祭
- 一 慶安の塵劫記
- 一 粟津の冠者
- 一 頭痛の占ひ

- 一 漂流の話
- 一 二島物語
- 一 初午の句合
- 一 西施が顰
- 一 小納言
- 一 一河の流
- 一 初中後の子の日
- 一 扇を鳴らす
- 一 仁義を買ふ
- 一 湛空の和歌
- 一 水車
- 一 兎波上を走る
- 一 流水を枕にす
- 一 老の接木
- 一 草庵集
- 一 千代能が歌
- 一 味噌臭し
- 一 連歌の一直
- 一 戸津川の湯
- 一 三輪の山もと
- 一 無人島
- 一 影の膳
- 一 俳諧に學問いらす
- 一 鷹狩の始
- 一 天王寺の額
- 一 燕子花を夏に定
- 一 反魂香
- 一 十寸穂の薄
- 一 空公行狀の碑
- 一 泥中に尾を曳く龜
- 一 常任法師
- 一 鵝は墨を費す
- 一 門に鳳の字を書
- 一 肘笠袖笠
- 一 畫空言
- 一 釋迦の法孫
- 一 母子の訴へ
- 一 如是院の米
- 一 座頭の茶挽
- 一 藍染川

一 煙草一錢

一 妻敵討

一 儒士の孝行

一 金の臺子

一 聖人賢人

一 龜田窮樂

西澤
文庫
皇都午睡二編中の巻

西澤綺語堂李叟著

茶白山

慶長十九年の冬將軍家大坂の城へよせさせ給ふ時日本六十餘州の軍兵一騎ものこらず出陣ある本陣は天王寺の茶白山にて有しを何者やらん書て張りける「大將はみなもとうちの茶白山引まはされぬものゝふぞなき

飛梅

三百年前筑紫宰府の天神の飛梅天火に焼て再び花さかずこはそも淺ましき事也と人皆涙を流し知るも知らぬもあつまり思ひくの短冊をつけ参らする中に權校坊とて勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ「天をさへかけりし梅の根につかば土よりもなど花のひらけぬと短冊を木の枝に結びて足をひかれければ即緑の色めきわたり花咲春にかへりし事よ人々

感に堪てかの師門を神とも佛とも手を合て拜せしとかや

雪花の争ひ

比叡山にて北谷の兒は雪に過たる物やあらんと愛せられ又南谷の兒は花に増れる詠やあらんと興せられ後にはいさかひになり花をばあしく言ひちらし雪をばいな物にいひ遣わし雪の方よりは花を褒る狼籍の類をよせて勝んと云又花の方よりは雪を譽る虚氣者を只はたいて退よと互ひにいかれる心しげし山の騷殊の外なりし西三條逍遙院殿傳へ聞し召れ態々山に御登有雪にめでられしも理り有「花ならばさかぬ梢も有べきに何にたとへん雪の曙花に心を染られしも尤ゆへ有「雪ならばいく度袖をはらはまし花の吹雪の志賀の山越自今以後勝劣を争はず中を直りて勤學あれと靜めてこそお歸りありけれ

似雲聞書

似雲法師の聞書に鞍馬に詣る次手市原野の相しれる庵を訪しに折ふし雨氣色なれば主傘を出し是持行給へとあるを未雨のふり出ざるにはかへつて邪魔なりといなみければ扱も悪しき心がけかなひとり旅の

よき道連と思し給へといへりしは身にしみて覺へしと書れき

香盆

近年出板の畸人傳にあらはす所の今西行雲と云は生國伊勢の人にて洛南嵯峨に住せり其ころ京師に何某といふ風雅人此さがの閑なるを愛して爰に來りて住居し茶の湯連歌に日を送りぬ或日京都の古道具屋にて香盆を金二歩に買古代の器なれば秘藏しやがて茶會を催して兩三人の朋友并に今西行も招かれしが扱飯酒相濟中立後爐の炭繼かへ掃除調ひしらせの半鐘ににじり上りして先床の方丈より爐邊に至り銘々彼秘藏の香盆を取上底迄も打返し見けるにいかゞしけん西行誤つて香盆を火中へ取落しけり是はと驚早速取上けれど炎盛んの中なれば餘程焦たり是に依て西行はもとより主秘藏の器物ゆへ今日始て自慢氣にて出しける所斯の仕合ゆへ甚悦びざる面色あらわれ一座しらけて西行何共氣の毒に思ひけれど詮方なく段々斷をのべ暇告けれど主不肯の挨拶ゆへすごとごと立出しが去にても斯秘藏せられし器を損じたる事返すぐも本意なく思ひ煩ひつゝ歩計出行しが

ふと浮出し事有にぞ立展り主に向ひて扱々怪我とは申ながら危忽いたし氣の毒に存候ゆへ御斷の種にもやと一首いたしたり「もしは焼伊勢男の海士のしわざとてふたみの浦に煙立けりと云主聞て俄に機嫌直り扱々面白き御歌忝候迎もの事に御自筆にて書たまわらば忝しと云西行もよろこび卽座に筆をとり書けり主此歌を金粉にして猶々秘藏せられしが後主病死せられ茶を好む世繼あらざれば茶器残らず賣拂ひしが伯父なる人かの香盆を所望せられ金十兩に買とられしが今はいづこに有といふ事をしらす

阿閼寺アシュク

光明皇后貴賤をいわず千人に施浴し御自垢穢を洗淨し給へりし終りに癩疾の者到りしを猶いとほさきぐの如く扱ひ給ひしかば忽阿閼アシュク如來と現れましといふ事傳記に見へ今もなら坂に阿閼寺の名残をとめ癩疾の者長屋を建て住り彼故事によりてや施浴の勸進するよしの札も見ゆその奇瑞の虚實は論せず凡善を修するも功德を行ふも其人の相應あるべし皇后の善は皇后の善有此后の御所爲甚しからずや御女孝謙天皇の道鏡を寵したまひしも畢竟閨門の法度

正しからざるに基する也

平家を評す

平家の一門に不和なる事なく況や一門の衆を殺す事なく家人一人も源氏へ降参の者なし盛衰記平家物語には關東の世の者ゆへに分外平家をばあしざまに申たるにて愚管抄續世繼等を見ても清盛は殊勝なる所はある人にて老後耄のいたす所是非に及ばずと白石は評せり平族は互に相妬相忌こと聞へず西海の沈没に及ぶまで功を爭ひ身を遁るゝ所爲なし頼朝の家風義朝其父を弑せしを基本にして親族の末迄相討て其系他人の手を借ずして亡ぶるには似ず世の諺に源氏の友喰ひといふは卽是なりといへり

熊野の謠曲

謠曲ははかなき物にて事實詩文章を引けるに誤り多きは論するに足らねどたまゝ又思ふべきことあり熊野といふ曲に熊野といふ女内府宗盛公に仕へしが故郷遠江の國池田の宿の母老病により暇をこへども許されず此度は哀なる文を送りて讀聞せるに宗盛左様に心弱き身にまかせては叶ふまじと強て清水の花見に召供せられしが清水にて歌を詠たるに感じて暇

をたびける時熊野が詞にかくて都に御供せば又もや御意のかはるべきたい此儘にお暇といへり此前後の文句にて内府の心ばへをしるべしもと此熊野の一條は平家物語に重衡のとははれて東に下り給ふ道此熊野が許に宿り給ひしに付て此女もと都に登り宗盛に仕へし時「いかにせん都の春もをしけれどといふ歌よみしとて其ゆへをしるせる所に出たるを取て此謠曲を作り出て宗盛公の趣をよく考て作りしなるべし熊野は音に云は誤也熊野と呼べし

去來の反古

落柿舎去來が書きたる反古に書ては消し又改めなとして定かに讀がたしといへども漢文にて平家の士盛久のことを論じて既に刑せらるゝに臨て觀世音の加護により刀折たれば命助かり頼朝卿の賞にあづかりしを誇りて不忠者といふ事義仲寺の文庫に納めしが盛久といふ人平語又盛衰記にも見へず只謠曲にのみ出たる事にて本據なけれどもしある人ならば觀世音の利益はさもあれ自助命を喜び頼朝の前に出て酒宴に預かり立まふべきかは上總五郎兵衛が身をやつし頼朝をねらひしに天地懸隔は勿論にて義經の妾靜

女が右大將の前にて詮方なく舞謳ひし時も昔を今になすよしもがなの古歌又よしの山峯のしら雪踏分て入にし人の跡を戀しきと自の詠歌をうたひて大將を恐れず梶原源太がひそかに戀慕せしを忿り判官さかりにおわします世ならば汝達に言をまかはさんやと罵りしに比ておもへばいと悲しき振舞なり慈愛を蒙る觀世音にむかひてもはづかしからずやとの論はおもしろく覺ゆ

釋智藏

懷風藻に釋智藏淡海帝の世唐國に遣學す師本朝に向ふ同伴陸に登りて經書を曝す師も又襟を開風に對して曰我も又經典の奧儀を曝涼と衆嘲笑て妖言とす試業に臨んで座に昇敷演す辭義凌遠音詞雅麗論じて蜂起すと雖應對流るゝ如し皆屈服し驚駭せざるといふ事なし帝是を嘉して僧正に拜す時に歲七十三西土の郝隆が七月七日に仰臥て腹中の書を曝すといへる故事は人よく知りてこなたの智藏におきて事等しといへども隠れたるが惜くて記すとあり

望月曇晴あり

閑田子云大典長老對馬國にあられし時仲秋の月曇晴

京と異なりし旨を語られしを六如上人葛原詩話に記されしが享和三亥の仲秋京師は十四夜曇望夜は雨降十六日は朝小雨ふりたれど漸々晴十六夜の月清明也然るに河内國石川郡山田の人十四五の雨は同じく十六夜は初更過て晴たりと云又但馬豐岡の便には十四五六とも雨ふり十七夜始て空晴たりと云て「三よさ迄寐て立待の月夜かなと句を送れり對馬は地方遙に隔り朝鮮に隣たればさもあるべし河内但馬は空にては纔の間もあらじと思ふにかく計りの違ひあり翌文化元子年仲秋望日晝雨降薄暮より晴月明らかなりしを江戸橋千蔭よりの文に空曇夜更て少し晴しよしと暮るよりさやに都の望の月吾妻の空や汐曇りせしと云をこせり

絶景に句無

新井白石仙臺の洞岩翁に贈られし書翰に中秋月を賞し來人當年三十年一夕も缺ず訪らひ候を悦び候人に酒後和韻もなり兼情字の韻一句を書ちらしつかはし候千里郊外中秋色三十年來故舊情と一聯のまゝにてあと先もなく目出度來年足し候はんと一興に備へ候と有中秋の賞一聯に情盡て止めて來年足さんとある

はいとおもしろし詩人も歌人も情意なきに強て詠ば
よき句も出來ず月にむかひ花に遊び酒など汲時に御
作いかになど問ふ人は僻也凡美景に向ひ勝地に至る
時強て其趣をよみ出んとすべからず其氣色を意にし
めおけば題に望みて思ひ合してよきこといづるも
のなりと或卿の仰ありしとぞ

秋田の詠

川北自然齋の云儀同三位實陰公の詠秋田の題に「あ
さ露に袖はまかせて小山田に遅稻干すべき日影をぞ
まつとあるは實に畫の如し我嵯峨の庵室より望むに
秋のあした霧をわけ露を凌ぎて姥も家婦も打群てき
のふ刈とりし稻を捌あるは煙草くゆらしなどして日
のさし昇るを待付て掛干趣き全く此御詠の如しよく
實景を見とゞめ給ひし物と感ずと語られし

けふの櫻

洛の諸九松島行脚の折剛力を案内の爲に連ける元次
郎と云七十五歳になる親仁風景のおもしろさにめで
てやありけむ「命こそ寶の山の松島やかく不風流
の者だにも時に感じて自然とうかび詠出したるなり
又奥州の二本松に俳諧するもの共櫻のもとに酒く

みかわし遊び居ける中へ百姓の出で酒飲せ給へと乞
ふ發句致し申されなば振舞んと戯れしに此者しばら
く案じて「きのふより翌よりけふの櫻かなと云出さ
れて興さめ人々は是につゞくほつ句も出ざりけりと
ぞ

香阿彌の蒔繪

香阿彌勘右衛門と云蒔繪師堂上始大名衆へも御膝近
く參る者にて人情の高低しらずと云事なく町人には
至極の高情者と世人取はやし我も淺からぬ到り者と
朝夕誇りける去大名御在國の時御自慢の御物好にて
常にお氣に入の勘右衛門に硯篋を仰付られ模様花鳥
の匂ひ蒔繪の中に遠近の山川御詠通出來差上ければ
御機嫌斜ならず勘右衛門を召出され其方古今の名人
と世に譽るる程有感心の至りと御稱美有ければ外
聞淺からぬ御意有難くと座を退ひて御家臣にむかひ
唯今の御誕生々世々有がたく竊に袖に露滴りしめや
かに存奉り候私儀も常々御家の事は毛頭疎かに存奉
らず殊に文華の殿様他の御家とは格別に志を嗜奉り
て此度の御用も神以て利益にかゝわり不申隨分御道
具になり候様にと一筆くゝに魂を込候也と御一陣へ

申候時殿御顔色甚損じ奥へ入らせ給ひ御家臣を御召有て唯今勘右衛門が其方へ申たる一言奇怪至極唯今より出入をとむべし領分へも入るべからずと駈と申渡すべしとの御意御家臣畏り奉候さりながらいかいの事を申上候やらんと問ひ奉れば其方心得ぬとは不埒也寧盗臣を置べきや硯箱はいか計の價にて申付けろぞ役人共より聞取其上の價に一倍遣はすべし黄金の多少をいとわす必ず一倍勘右衛門に遣すべしさなくば折角工夫に渡りたる物好捨り道具にならず渠は大名を廻りて益を貪りてこそ渡世共云べし其上妙手なれば用る方にも重寶たるべし御家の此度の細工には神以て利益に拘はらぬと誓を立ていひ侍るに益なきに偽はあるまじ何ぞ渠等が無益の細工を誂らへ側に置事きたなく見るに心むさくて遣ふに時なし此度の硯箱にて三年ばかりも他の事なくて渡世致候など申てこそ某が物好も興あるべし慰みて心よからん利欲の外と云道具は道具にならず推參の一言是に仍て出入をとめよと申付るとぞ仰付られける勘右衛門すぐく京へ歸り心をつめり魂を刺計りの思ひなれども是非なく出頭の醫者へ行て此時町人の高情は

何の役に立ぬ事皆下卑たる中にて云勝思ひ勝なり生得筋目ほど恥かしき物はなしかくばかりの赤面と思ふ赤面と云もまだ懲ずして我を我と思ふからぞ額に汗も流る也何分御出入留りては内外不立と頼けり三年ばかり經て醫の執なしにて御赦免を得てもとの如く勘右衛門御出入申けるとぞ

夜曆を見る

夜曆を見る事を忌人有り中古物忌ひ多かりし代にも此説はなかりしが榮花物語に東三條兼家公一條天皇の東宮に立せ給ふにつきて圓融帝の内勅にて祈などせさせ給ふ所に「女御殿に物さゝめき申させ給ひておほんとなぶらめしよせて曆御覽じて所々に御祈りの使ども立騒とあり

かまへ太刀

北越甲斐總州邊にて風神太刀を持と云より構へ太刀と唱る風を俗鎌鼬と云此風の筋にあたる者は刃をもて裂たるごとく疵つく早く治せざれば死に及ぶ此事京攝にはなき事也と思ひしに京にて或家の下婢庭にて倒れたり介抱して正氣に復して後見れば頬のわたり刀もて切たる如く疵付しとなん是則かまへだち也

下總のある寺の小僧此風に當りて惱みしに古暦を霜にして付しかば忽治したると也此邊にては窓明り障子なども暦にて張れば此風入らずと云り

室の名所

室は紀の國室の浦は播磨室生は大和室山は伊勢室野は備後室積は周防俊賴朝臣の歌に筑前竈山を詠合されしかど船行の順路にて竈を過てとあれば疑なし證空上人の遊女を見給ふも爰也室戸は土佐にて法性の室戸ときけどいふ弘法大師の歌あれば證空上人の事に混する人もあらん土佐に室津といふ所有と土佐日記に見ゆ是は又別なるべし

室の八島

室の八島に立煙は古歌にも詠て下野國に小島の如く八ありて其廻りは低く池の如し今は水なし島の大さ何れも方二間計り杉少し宛生たり此島の廻りの池より水氣烟の如く立昇るを賞じける也今は水なきゆへ烟もたえずと具原翁の日光紀行に記さる是一所の名にあらず島と號る所八村俱に都賀郡にて鯉が島高島萩島大川島卒島曲島沖島仲島等也とぞ

繪島の石

淡路國繪島に出る石白くして人物花鳥恰も彫るが如し自然の物なり古人も此石を見出して繪島と號しにやあらん名によりて石の生すべきにはあらず昔より繪島と號る故を云ねばいと珍らにて記す

榮種の御供

北野天滿宮二月廿五日の神供を榮種の御供といふは誤にて梅の御供也其故は平なる桶へ飯を高盛にして神前階上の八脚机の下へ供じ其机の上に香立と稱じて小土器に白き紙をめぐらし三杵の米を滿てそれに梅の小枝をさして奉る或は花はちりてなき年にあひ葉を生じ實を結びても同じく折て挿敷は左四十二右三十三是男女の厄の年の數に准ふいつより初りいかなる故ともしられず是西京の神人より奉ると即神人の黨の話也

花扇

年毎七月七日の朝陽明家より内へ奉らせたまふ花扇といふ物あり御使は匂ひといへる婢者にて勾當の内侍の御許へ御文あり長橋へもて參れるさまいと興ありて衣被着ごめ高き足駄をはき雨降らねども大傘をさしかけさせ自ら文箱を携へ下部二人従ひてひとり

此大率一人は花扇をもつ此下部も又助と何とかや此日の名は昔より定めりとぞ内にては小御所のおまへの御池にうかべて二星の御手向になし給ふとなんいつの頃より始りしといふ事定かならぬよしなり

急流の心得

河水溢るゝ時表は順行し底は逆流す河を渡る人心得べきこと也魚鳥は風に逆ひ水に逆ひて毛も鱗も順になる故に必逆風に飛び逆水に行く又満水には大石も水上へ行もの也そのゆへは水波は砂を穿て石は動ざるものゆへ砂の穿たる所へ落返り段々上へ行也人の心づかぬことにて心得べきことと皆川淇園の話也

粟田祭

粟田祭は例年九月十五日なるが天明六年は國恤^{俗に御停}止と云鳴物^をの時にて霜月に延引せり此祭式に知恩院裏門前の上白川の流水に掛し獨木橋を重き劔鋒をさして渡る事あり其夕霜深く置て只さへ細き橋の見るも危きをいかゝと人々思へるにその河涯に住る明田^{トキタ}利右衛門と云る猿樂の笛師心を得て木屑を敷せしかば障なく渡たり假初のことなれど時に取つての働を人々感じけり

徒然草に鎌倉にて中書王の御鞠ありし時地の溫りたれば木屑を敷たりしを人の褒ければ乾き砂やなかりけんと嘲けりしこと見へたれど此橋上は鋸屑ならでは用をなさず彼に増ること遠しと評せりとかや

住吉の奇瑞

後徳大寺左大臣實定公和歌に堪能の人にて道因法師人々をすゝめて住吉社に於て歌合せられし時此大臣大納言にておはせしが社頭の月といふ題にてよみたまひし歌「ふりにける松ものいはいとひてまし昔もかくや住の江の月其歌合の判者は俊成卿なりしが殊に此歌を感心せられ外の人々も褒のゝしりたる事なりしに其頃徳大寺家の知行所筑紫の瀬高庄より貢米を都へつみのはれる舟津の國に入らんとしけるに俄に難風吹出て既に其船くつがへらんとするに船人ども兎角防けれども今はかうよと見へたる時何國よりもしらず一人の老翁出來てかの舟を甲斐々しく漕直せしかば大風高浪もさはらずして恙なく浮びければ船人共歡び怪みて翁は何國の人にてかく危ふかりし船を救ひ給わりしぞといへば翁の曰殿の松ものいはいとよみ給ひし御歌の面白さに此あたりに住翁

が參りたるよし申せと云て何國ともなく失けるぞふしぎ也住吉明神彼歌をめで給ひ現れ給ふ也とぞ

慶安の塵劫記

慶安二年京寺町通林長右衛門開板の塵劫記は纔に一小冊なれども當嘉永戊戌年迄二百有二年になり珍らしき算法有ば爰に出す跋に自是以前に有塵劫記は我思のまめならざれば或はたらず或はしげきも有故に其違缺をたゞして今又新篇塵劫記と是を名付て板にひらく然れ共此書にも失ありなん自今以後世に行て算法の指南をなさん物可合符節者也としるせり

東海道の算用

京より江戸まで百廿里の間に錢一文並びに並べては何程有ぞと問合二萬千六百貫文一里には百八十貫文一間には八十文宛並ぶ也江戸より京までの間に金一步を一つ並びに並べては何程あるぞと問一步の數合三千零六十三萬二千七百廿八但一步の長さ五分半にして右一步樹にはかりては何程あるぞと問答曰四十二石八升二合二勺京より江戸まで百廿里の間に芥一粒並びに並ぶる時は何程入ぞと問けし數六億七千三百九十二萬粒是を樹にはかれば一石六斗八升四合

八勺也但一寸にけし四十粒宛並ぶつもり也一升には四百萬粒入つもり也芥子一億といふは長さ十七里廿九丁一間三尺五寸に並ぶ也江戸より京迄百廿里の間に一間に一人宛立つつもりにしては人數何程あるぞと問答曰二十五萬九千二百人金子の一步を拵一升到何程入るぞといふ時答曰六千八百四步入但一步に付長さ五分半廣三分半厚さ五厘のつもり也右一升の重但一つに付一匁一分七厘五毛のつもり也七貫九百九十四匁右銀につもり一つを十六匁がへにしては銀百八貫八百六十四匁金一步一升を箱にのべては何程四方になるぞと問答曰八十二間三尺一寸六分一厘四方になる也下略是より錢算鼠算日本國男女の數など新奇無量の物を集たり今時算法の書には見及ばぬ所也金一步の大きき重を見ても其代の事を知るに足れり珍らしければ爰に出し置もの也

粟津の冠者

古事談に園城寺の鐘は龍宮の鐘也昔粟津の冠者と云勇者有一堂を建んと鐵を求めん爲出雲に下る大風俄に發彼舟に入しかば乗船の輩泣叫びたる所へ小船一艘小童梶を取つて來り冠者一人のれといふ心得ねど

乗移れば風浪忽に止む元船は爰に待べしと有て小船は海底に入ると思ふ間に龍宮に至る龍王出て從類多く敵の爲に亡び我も又害せらるべし依て迎へ申也一矢射てたべど乞ふ冠者樓に昇つて待所に大蛇許多の眷屬を卒て出來るを鏑矢にて口に射入れ舌の根射切て喉の下に射出す龍王深く歡びて冠者が一堂を作る爲鐘に鑄べき鐵を乞ふ事をしつて龍宮寺に釣所の鐘をおろして是をあたふ冠者粟津にかへり廣江寺を建鐘を掲る年移り變り件の寺破壊の後纔に法師一人鐘の主たりしが鎮守府將軍清衡砂金千兩を三井寺の僧千人に施す三綱某五十人の分を乞集め五十兩をもて廣江寺の鐘を買ぬ廣江寺は天台の末寺なれば後日に此事を漏聞て件の鐘主の法師を搦め湖に沈め今園城寺に釣所の鐘是也と有り

廣江寺の鐘

紀州名草山紀三井寺の緣起も是に似よりて故事談に出たるも昔の作物語なるべきを潤色して田原藤太秀郷勢田の橋龍宮の乙姫に遇ひ托みによりて三上山の蜈蚣を退治せりと云種々の寶物をたしてとれども盡ぬ米俵有ゆへ俵藤太といふなどの説をもふけしは甚

拙なし出雲の海にて龍宮に至りしと云はよし有勢田の橋より龍宮に赴くとは海と湖を混じて道理當らず叡山法師鐘を奪取に來て谷間にすてしも廣江寺の鐘ならば奪歸す道理もあり何者が潤色せしか藤太秀郷は此説によつて名高し大きな仕合せなるべし

頭痛の占ひ

故事談に花山院頭風を病せ給ひさまゝ醫療をましませど驗なし阿部の晴明占て君前生にては止事なき行者にておはせしが大峯某の宿にて入滅あり前世の行徳によりて天子には生れ給へ共前生の髑髏巖の間に落はさまり雨風に動き今生かく痛ましめ給ふ也御首を取出して廣き所へ置れ候はゞ癒給はんかとあるに人をやりて見せしめ給ふに違はざりしかば彼首を取出して御頭風永く癒させ給ふと記せり今世に傳ふ後白河法皇前生蓮華坊と云熊野山伏にて谷へ落て命を殞せり後柳の樹生出其頭を貫き風に動く毎に御頭を病せ給ふ故に其髑髏を埋め其柳をもて三十三間堂の棟木にし蓮華王院と云緣起は花山法皇の典故なるべし

漂流の話

寶曆八寅年冬泉州波有手村直船頭佐市郎船五人乗にて紀州有田にて蜜柑を積江戸へ廻し十二月廿五日明舟にて江戸川口浦賀御改を受同廿九日同所出船晦日伊豆下田湊へ入津し寶曆九卯正月五日同國子浦へ入船同十一日出船十二日遠州貝塚前にて南風になり掛り居て十三日の夜出風にて走る處十四日暮六つ時紀州熊野九鬼島を見付しかど殊の外沖立地方へ寄兼いろくくに働けどもけしからぬ風波にて同十五日朝より西風になり伊勢路へ流され同日暮六時參州大山を卅里程も沖へ出大風にて地方へ寄る事叶わず諸神へ祈誓をかけ伊豆地へ走り同十六日朝富士山遙に見へれども地方へより兼最早身命は此沖へすてしと覺悟し天命次第何方へ寄るべしと巽沖へ流され船中へ波もありこみ帆持がたく其上山は一圓見る事なく渺々たる海上にて十七日十八日と兩日流され暮方巽風になり地方へ寄せる積りにて走らす處十九日夜中走り廿日明方より大風にて沖へ流され廿一日晝時始て島を見付しゆへ船中の者ちからを得帆を少々持走らせ何國の島と考ても大風にて數日沖に居る事なれば何と云島やら方角もしれず船中水きれしゆへ水を求た

く風間へ走り寄ても元船はより兼はし船をおろし島へ行んとせしに島より頻りにこへをかけ招くを見しに人やら鬼やら髪は女のごとく髭は胸まで届き眞黒なる恐しき者兩人招くゆへ聞及びし鬼界が島にやあらん俊寛僧都の幽靈かさもあらば一人ならんに二人居るは不思議也其うへ鬼界が島は西のはづれ長崎の沖東の方に有べき筈なしと皆々評議しながら水のほしさに恐れもなさず船を漕よせ磯近くなれば右の者海へ飛こみ船をめあてにおよぎつくこなたよりもしきりに押切漕よせれば彼兩人船に取付其元は泉州波有手村佐市郎にてはなきやと云に心覺へあれば早速船へ助け乗せ子細を問へば六年以前寶曆四戌年十二月行衛なしになりし泉州相作村鍋や五郎兵衛船五人乗の内紀州海士郡加茂谷下津浦藤八と云水主今一人は讃州鹽飽領の西島北の濱幸助と云者もとより心易くせし中なれば島の様子を聞く所一向何島ともしれず無人島にて同廿六日の朝島へ水を取に行同日七つ時元船に歸り日和次第地方へ歸り度佛神へ祈りしに巽風となり帆拵へする内沖の方より大勢はし船に取乗是も難風に逢ひしよしにて船を漕よせ乗移り此

人数を尋ねれば松平土佐守殿御手船にて十八人乗元船は乗はなしはし船にて來りしよし皆々打乗り色々働らき伊豆の國子浦湊へ同廿六日に着改吟味はある所三百石計積船にて泉州波有手村直船頭佐市郎楫取徳兵衛水主與一郎同又次郎右四人乗也外にかしき三之助は船中にて病死なり助り歸り候藤八幸助兩人の物語哀れともはかなしとも譬へがたなき話の次第代官所へ届の寫し事長ければ略してあら増を記す

無人島

泉州箱作り浦直船頭五郎兵衛同水主文右衛門備前久四郎紀州下津浦藤八讃州鹽飽幸助右五人乗にて寶曆四戌年十二月十二日紀州有田郡箕島浦にて商人荷物蜜柑積入尾州名古屋へ行積り出船し尾州勢田浦にて越年翌亥年正月七日出船同日志州濱島浦へ入津同十日朝出船の所大風にて同日八つ時安乗沖へ乗掛し所大風波にて雙方より浪打ちみ地方へ寄兼せひなく沖へ流され船中詮方なく神佛へ祈願をかくれど折々大風波にて帆柱有ては凌ぎがたく同十一日帆柱切折同十五日迄様々と憂目に逢ひ再び故郷へ歸る事も不定にて茫然として悲しみ居たるに十五日の朝ふと島を

見付船中蘇生たる心地して假柱帆繕らひ段々走りよせ同夜九つ時かの島近くなりたれ共磯際嶮岨にて元船より兼るゆへ乗り放しはし船にて島へ上らんとせしが磯ばたにてはし船を浪に反り倒され五人共海へ落入命からず島へかけ上れ共夜中なれば方角も分り兼皆々濡身ながら一所により夜の明るを待兼しによふく夜も明け元船を尋ねれど早跡方もなく風波の難は遁れても便りとなすべき元船を失ひ手計にて足なき如く盲目の杖を失ひしよりも悲しく力落れど詮方なくもし人家にても有べくやと山をめぐれど元來無人島なれば只草木生茂しばかり廻りは凡二里餘りの高山にて菜蕘の木と蘆荳のみにて諸木とては一切なく嶮岨なる岩山にて峯より始終烟り立登り中程迄も登る事成り難く元船はし船共翌日迄遙の沖に浪にゆられ形は少し見へしが大浪にて碎け後は粉もなくなり心細さ見る度に肝をひやし最早故郷へ歸る望は絶食物とては何もなく磯にて具を拾ひ又山にて菜蕘を取喰ひ水甚不自由なれば方々尋ね少し計りの谷水遙山の上にあるを見出しかけ登り夫を銘々手にて掬ひ吞朝夕を送るのみ南面は平地にてあなたの空よと

詠めやり故郷のみなつかしく親妻子の事を思ひ生死の程も聞へねば嘸案じ煩はんものとおもひながら食事のせつろしさに取紛れ火の氣はなし差當る難儀に故郷の事を忘るゝ計り或日文右衛門磯へ貝を取に行日暮ても歸らず尋ねても見へねば扱は浪にとられしか又は妻子を慕ひ身や投しかと皆さがせ共見へず無人島に住者五人いか程故郷を隔候かしらず心細く互ひに親共子とも思ひ合一人を千人とも萬人とも思ふにかいなき此成行何れも肝にこたへ聲を上て泣ばかり詮方なく破船の板を集めて岩間へ雨露のしのぎを拵へ茱萸も取盡し食物もなくなりしが二月の末と覺しき頃鴻の様なる鳥羽は白く足短き鳥此島へ下りしを幸ひ色々工夫し捕へ此鳥を船釘にて裂喰此卵大さ瓜の如きを食ひしところ逆上ければ以後は卵はくはす六月頃と覺しき頃磯なれば泣々山へ葬り七月頃五郎兵衛故郷の事を云出し不快の體三人の者さま／＼看病に及べども藥はもとより湯を吞す事さへならねば次第に弱り顔色土の如く瘦おとろへ此島の土となる事前世の業因ならん皆の衆は身を全ふして

再び故郷へ立歸り親兄弟妻子にも逢給へもし我等が故郷へ便りあらば此詞を篋ともなしたべと頼み置終に息たへ果たれば三人は取亂し泣々是も葬れり又八月頃水主久四郎儀も五郎兵衛死後煩らひ出し故郷の事のみ言出し次第弱りに相果しかば都合三人死し殘る二人は我身の上と思へばいと心細く最早兩人より外なけねば山へ行も磯へゆくも連立片時も放れし事もなく亥の年中に三人死しかの鬼界が島へ流されし俊寛の昔も嘸となげきしが此三人は五十餘になり精氣も弱く殘る二人は年若なれば何卒存命一度は親達にも逢見ばやと互に力を付合心樂しみに憂年月を送りけるが茱萸は春秋兩度ならではなく白羽鳥も四月頃より八月頃までは何方へ行か島へは戻らず其内は穴鳥あなどりと勝手に呼びたる鳥をとり食事とする鳩程の大さにて鳴聲は生れ子の如く岩穴に住鳥にて此島に鳥多く宿るゆへ鳥夜明に鳴時は此鳥穴へ隠れ候をとつて食ふ事也又岩山へ登るには足痛み難儀に及び始は衣類を引さき足へまけどもつゝかす五郎兵衛生前に考萱の芽出しをよく打繩になへばよき繩になりしゆへわらちを造り履物には事もかゝず及物は船釘を

つかひ扱三年目の正月頃廻舟一艘難風に遇しと見へ、
帆柱も折たる船漂ひ來る天のあたへと聲をかけ招け
ば此船も島へよりたきかいろ／＼働漕寄れども大風
にて吹飛し又沖の方へ流され影もかたちも見へずな
り神佛にも見放されしかと濱邊に兩人泣倒れしが心
を取直し覺悟を極七日計り食事もせず斷食すれども
死もやらず只せつなき事ばかりゆへさすが故郷の親
の事を思ひ命こそ物種此上は運に任せ便船の事を念
じ一六の月と思へば濱邊にて汐こりを搔東を拜み今
一度母に逢せたび給へと信神をこらし晝夜海の面を
詠めやり暮すより他事なく其後八月頃食事に困り白
鳥もこねば穴鳥を尋ねに行草萱生茂りたるを搔わけ
／＼這入たる所岩を切開凡十疊敷程も有べき穴を開
き船板にて堅くしつらひ向ふに戸棚と覺しき物持佛
等も有是はふしぎと段々改見るに古戸棚の内に茶碗
と貳升鍋一つ有糲も少々あれど虫入にて性もなくな
り五升鍋の内に五合糲に火打石共有炭殻も少々出
候ゆへ直さま火を打色々才覺して燃し付五升鍋に
て湯を沸し四年ぶりにて湯を吞是ぞ誠に天のあたへ
と悦び限りなく是迄火の氣はなけねど暖氣なる島に

て寒中と覺しき頃が八月位の時候にて雪は降らず殊
の外暑く此島へ鶯多く來るゆへ春をしり去寅の八月
此岩穴を見付てより是に住居雨露を凌食物煮焼出來
れども鹽醬油なけねば潮にて煮て喰ひ生鳥を食から
は遙に結構とよろこび油じみたる土器有て火を燈し
たる體なれば色／＼工夫をし貳升鍋にて白鳥の油を
取綿をひねり火をともし持佛へも備へそこら見廻し
候へば外の穴に輪切れたる桶を見出し葛にて輪を入
桶手桶等も出來候へど人間の住家にてはあるまじ全
く此者らの如く吹流されし者の住居と思はれ極月頃
鳥類なく不自由の所磯へ尺許の伊勢海老三つ刎上り
しに付取て食是日頃信じ奉る大神宮のあたへかと有
がたく其味今に忘れ兼しよし其後正月も參るべく食
物の手當に菜蕒を取しが北の方は取盡し南の方へ行
しに至極の船着なれば何卒爰へ船がな來れかしと兩
人信願をこめ山へ登り菜蕒をとつて歸りかけし所南
の沖の遙向ふに大船と覺しく段々島近く來るに付船
と見さだめ兩人は天へも上る心地して祈誓しあの船
無難に此所へ吹寄たまへと大神宮を伏拜み暫らく目
を閉ひらき見れば船は間近く來る嬉しさ夢ではな

きやと我を忘れ大ごえを出して招きし處此船も島へ志す體なればいよゝ力を得磯邊へ下り待たれ共先年も船來れど吹飛されし事有乗遅れてはいつの世にかは故郷へはなんと兩人申合す隙もなく其儘飛込浸

付聲をかけ船へ乗移りしが兩人の異形に恐れいかなる者と詞をかけられ人々を見るに六年以前蜜柑を積一所に江戸へ行候泉州の左市郎なれば名乗合何れも落付島の様子を物語り年月を問ふ所極月廿一日と思ふ所卯の正月廿一日にて日數卅日の覺へ違ひ也丸四年行衛しれずなりて都合六年とはなりけり此船に吞水なきゆへ兩人案内して岩穴に貯へたる水にて粥を焚六年ふりにて食たるに其味甘露の如く一口二口は通りしが跡は咽へ通らず全く九五ヶ年の間米は一せつ食せぬゆへと思はる夫より船へ水を汲入翌廿二日帆を拵へる所へ松平土佐守殿手船千石積は破損に付はし船にて十八人乗組巽風に帆を引上皆々一統相働凡二百里程走れども山も見へず皆々唐へも行様に覺へ口々いへども左市が乾風にて來れば巽風にて歸る筈也と行々伊豆の子浦へ廿六日着船して船中の一統蘇りたる心地何にたとへん方もなし右の島に白鳥

の油三升程残したれど餘り嬉しさに取忘れしよし左市郎は右の島の干たるを二羽持かへりて人々に見せけると也

二島物語

正月廿六日より子浦にて御吟味中六十日ばかり逗留の内此噂諸所にてせしゆへ駿州の者一人藤八幸助に逢に來り話には右島の穴に先年其者の伯父遠州より千石船にて十八人乗難風に逢ひ其島へ船共打上られ岩の上にて破船に及び詮方なく船板にて圍ひ岩穴を切擴け諸道具を運び右の穴にて廿一年暮し候内穀一俵流れより夫を種として植弘め田地少々拵へ正月に植れば四五月頃米になり後には米も澤山にて菜菔鳥抔は食はず十八人のうち十五人は病死して三人残り居たる所廿一年目に大坂の富藏と云船頭難風に逢ひ島より助け歸りし也此伯父は殊の外老人ゆへ其島にて歸る事不定なれば島にて定に入候よし右の跡は是なきやと尋ねに兩人其節は心付ねども右の仁の詞にて思ひ合せば定に入たる體の塚もあり右岩穴に書物多く張付あれども兩人とも無筆にて少しよみ書する五郎兵衛は先に死し後に岩穴を見付しゆへ讀事を

得ず駿州の者其書付には重ねて來たる者の爲に島中に暮し方菜菔白鳥穴鳥等磯の貝を食物とする事油は白鳥にて取る事その外委細に書付有れ共無筆にては是非なき事也島にて入定せし者の甥は我也十八人岩穴に住しは大御所様御時代のよし八丈が島へも行二島物語と云寫本になり右本の内白羽鳥を此者共あほふ鳥と異名を付候由伊豆より八丈島へ三百里八丈より右島へ又三百里伊豆相摸の境より巽の方の沖に當り人語離れし孤島也との話に付不思議はよふく晴れたるが去にても右十八人の者廿一年が間島にくらし十五人死して三人残るを思へば五人乗の内兩人生残り九四ヶ年の島住居にて此度左市郎に助けられしは命冥加なる事なりとよろこび合しこそ道理なるべし

影の膳

兩人御吟味相すみ兩人別れて藤八は故郷紀州海士郡加茂谷下津浦へ五月三日の夜歸り親子對面の上母の悦び行衛なしになりたる忤六ヶ年ぶりにて拾ひしと限りなき歡び涙に三四日は傍も離れず詠居しとぞ藤八も又優曇華増りのよろこびにて島の話をし内三

年目の日に當りある夜夢に何方もしれず殊の外馳走になり目覺ても腹大きく幸助へ此儀を話せば幸助も同じ夢見て其朝は食事もせず有しが此度母の話に三年目に泣々三回忌の弔らひをし僧を呼び供養せしがかの島へ届き候かと互ひに話して悦びたり

御代官森久次郎殿屋敷へ召れ一宿して六ヶ年の物語を書寫させ膳にすわりたる一尺計の鰯の焼物は頭より食飯は常體の一口程を十口程に喰給仕の者等ぬれば久敷米を食せぬゆへ大口にはたべがたく島に居候内は病氣はなし少々の事有ても藥はなし湯さへ吞ぬ仕合せなれば苦にもならず朝夕岩山を駆廻り漫々たる海上を詠めてもし便船もやと眼を配り身内少しも休まる間なく髪月代をせふとも思はず金銀のかしかりはなく色欲の道は絶へ明暮戸締りの苦もなし寒氣は暖ゆへ凌よく暑氣は難澁食事にをわれ何をくへば當らふとの心遣ひもなく見付次第に食雨の降る日は風浪を誘ひ難儀なれば貯へ置たる物を食折々けふは幾日とくりて草臥にころりと臥し誠に鬼ともいふべき姿にて此島には化物もなく天狗もなしよくの放れ島なれば天狗化物も我々が姿のすさまじき

ゆへ來ぬ物か然し又所の心になり候へば心も替るべきか思ひ出すも恐しく悲しく又嬉しく何國いかなる人の憂目も咄には聞傳へたれ共我と我身の命ある事又ふしぎに存候と此一書は亡兄鳳堂寫し置たるをくだくしき所は文を略し荒増を出して一話に備るもの也

初午の句合

活々坊の云一座の宗匠は軍中の大將軍商家の番頭の心持にして一座作にはこる時はしづめ一席閑なれば又引立て句をなすべしひとせ初午奉納の書馬に連衆作に作をあらそひし跡へ櫻川が「初午やゆらり」と人通りとかく云出しかば格別きらびやかに出来ばへせし是死活のあしらひ也此一句ばかり聞たる人の何事もなき句也など評じたらんもの其場の差略有り是をおもへば發句ばかり書傳へていにしへ人の句を評せむは覺束なき事ならんかし

俳諧に學問いらす

達二曰俳諧は只物の本情にまかせて木のよろしきに遊ぶ也古式につながられ其粕を舐るまじきやたとへば八卦には離坤兌乾坎艮震巽とあるを易には乾兌離

震巽坎艮坤といへばおなじ文字にて走る也走て善も悪きも其時に望ての事なるべし古人の格式は初心の人の爲中品已上の俳諧は吾知りて吾するなれば一字一點の學問も入るべからず學問は階子也はやく登りていらぬとはしるべし下品の内走り過て階子ふみはづしたらんもいとあやうし

西施の顰

吳越春秋に西施は周の末越國の諸暨こしきといふ地の女にて絶世の美人也越王勾踐の臣下范蠡が計にて西施を吳王夫差に献夫差その好色に惑て遂に國を傾くるに至るされば西施常に心を病て其眉を顰む其里の醜女ども常に夫の我を外にして西施を譽るを妬ていかなる容貌ぞとひそかに窺見て夫の好所は是なりとそれより心を押へ眉を顰て夫に近付ける程に彌醜して夫はもとより其里人は驚て門戸を閉て外に出ず是天怪の所爲なめりと魂を消けると云り莊子が寓言に棒心とて世の人の徳の本をも知らずして威儀を飾人を欺にたとへたり

鷹狩の始

仁德帝の時秋九月依網の長倉の阿泔古異鳥を捕へて

帝に獻じて曰臣毎に網を張鳥を捕ふに未嘗て此鳥の類ひを得ず故に是を獻ずと帝百濟國の酒の君を召て鳥を示しての給ふ是何の鳥ぞ酒の君對て曰此鳥多く百濟に有馴てよく人に従ふことを得たり又捷く飛て諸鳥を掠百濟の俗此鳥を號て俱知と云今の世の鷹是也乃酒の君に授て養馴しむいまた幾時ならずして韋纏に鈴を着て和泉國百舌野の御狩に居出て數多の雉を捕しむ此月甫て鷹井部を定らる故に其所を鷹井村と云とぞ

小納言

草廬云大納言中納言といへば少納言も小なるべき歟と思ひしに明和七寅年夏大旱にて諸國水涸たる時大和高市郡の一向宗の寺に井を堀て墓誌を取出したりそれに小納言伊奈卿とあり然れば昔は小と書たるべし少字も去聲にて讀めば小の意になれりとぞ

天王寺の額

三井寺寺門の記に天王寺の額は慶耀己講勅を奉じて書と見ゆ慶耀は慶邐と云人の弟子慶邐は祭主輔親の息にて歌仙也と同じく草廬の話なるよししかれば世に道風の筆といふ空海也といふも皆誤なるべし

一河の流

一河の流を汲み一樹の蔭に宿ると云事古文類語四の卷に隋の張郎子が詩に汲流一川接彌深屏雨一樹思殊親とあるが出所也鵜飼信興が珍書考の説も是に同じ

燕子花を夏に定

古歌の題集に燕子花を春の末に出し牡丹を首夏の物とすれど今見る所しからずいつも牡丹は春の末にして杜若は四月に咲出萬葉集に橘に郭公をよみ合せし歌の終に天平十六年四月五日に大伴家持卿の詠あり「かきつばた衣にすりつけますら雄のきそひがりする月は來にけりきそひがりば藥クスリ癪ガリとおなじく五月五日なれど萬葉には卯月と五月との程に藥がりつかふる時にとあれば四月五日にあへり今時俳諧者流は杜若を夏とするは連歌の式によるか正に見る所に隨ふが理ありといふべし

初中後の子の日

早春初子の日はつこは小松曳の歌世々の集に有て誰もしりたる事也中の子乙の子を人餘り不知後拾遺集雜四馬内侍の歌詞書も有「けふ中の子とはしらずやとて友達ともだちの許なりける人松を結びておこせて侍りければよ

める「誰をけふまつとはいはんかく計忘るゝ中のねたげなるよに又おと子といふはうつば物語菊の宴の巻に」「かくて後の宮の賀正月二十七日に出くるおと子になんつかうまつれりとあり

反魂香

漢の武帝の時李延年といふ者音律を得て善歌ふ常に侍して君恩を蒙る或時帝の前にて起て舞ふ歌に曰北方に佳人あり絶世にして獨立す一願れば人の城を傾け再び願れば人の國を傾く寧知らず傾城と傾國と佳人再得がたしとうたふ武帝歎じての給ふ今善世に豈此の如きの人ありやと平陽公主の言李延年在妹也と武帝の召て見給ふに實に當時類なき美麗にしてしかも善舞曲をなせり是に於て恩寵を得て李夫人と稱せらる親族みな祿を賜りて宮にすゝむ然ども李夫人早く卒しぬ武帝憐て其形を畫に寫して甘泉宮に置給へり方士李少翁と云者よく其神を致といひて九華帳の内に燈燭を照らし酒肉を陳ね反魂香を薰て夜密に武帝に見せしむ煙の中に李夫人の容髣髴として見る武帝いよゝ思ひ悲て詩を爲て曰是邪非邪立て望ば偏に何そ姍々として其來ること遅きとの樂府に命絲竹

に合せて歌はしめて思ひを慰め給へりとぞ
扇を鳴らす

信實朝臣の今物語に薩摩守忠度某の局によりて扇をたかくつかひけるを内より草葉にすだく虫の音よと云たればつかひ止たりといふ事見ゆ此歌はうつばの藤原君の巻に「三のみこの御前ちかき松の木に蟬の聲高く鳴折にかく聞へたまふ」「かしがまし草葉にかゝる虫の音よわれだにものはいはでこそ思へ今物語にはすだくとかはれるのみ平家盛の頃はうつば物語あまねく行れて其歌などもそらに覺へたる人ありければこそ纔に二三句をいふより忠度もさとり給ひけめ

十寸穗の薄

長明の無名抄にますほのすゝきまそをの薄まそこの薄といふこと出てます穂は十寸穗にて其穂の一尺許ある也まそをば眞麻也まそはますはう也と見ゆ此まそを蘇芳也といふことそは書誤にてさ也すはうも印本に誤てすわうと書りすはうにてすはの約なれば眞すはう色のむね明白也

仁義を買ふ

戰國の馮煖は才智人に勝れたれど貧乏にて自身のすぎはひ成がたく孟嘗君の食客也素より落魄たる者なれば朋輩も慢て常に庵菜なる食をあたへけりある時馮煖柱に寄添ふて劍を彈じて歌を諷ふて曰長鋏歸來乎食に魚なしと云嘗君是を聞て器量ある者なればかゝる事をも云ならめと客人に具ふる如きの膳部を云付て食せたり頃ありて又長鋏歸來乎出るに車なしと諷ふ朋輩是を聞て奢たる事を云者かなとて笑あへり嘗君は彼才ある者なるべしと思ひ車を與へ乘らしめたり又しばらく有て諺けるは長鋏歸來乎以て家を納る事なしと云聞者興をさまし餘りなる事をいふ者哉此者は貪欲にて足ことを知らぬと惡みけり嘗君は是をも咎めず其母の家に衣食を運せて乏しきことなく養ひたり其後嘗君薛といふ所の民に貸置たる金銀を取收べしと馮煖にあまたの券契を持せて遣したり馮煖出さまに此債共を取聚て歸る時何にても買求る物はなきやと問ふ嘗君の曰何にても我家に寡物あらば買來るべしと云馮煖薛に行て債の者共を呼集め此度嘗君よりの仰にて今迄の債を汝らに賜るぞと券契を悉く焼捨たり民共惡き夢の覺たる思ひをなして悦び

あへり斯て馮煖國に歸りて何にても寡ものを買へとの仰にて君の宮中を窺見るに七珍萬寶いづれにつけても乏きことなし只寡ものは仁義のみなりよつて券を燒すて仁義を大分に買て歸り侍ると云嘗君心に入らねども道理にせまりて物をもいはずなりたり其後嘗君齊王より薛の地を賜りて入部したりければ薛の男女老若は街に踞て喜び合事限りなし嘗君此ありさまを見て馮煖にむかひ云けるは其方以前に仁義を買たる驗をば今こそ見つれとて感じけると也

空公行狀の碑

嵯峨の二尊院に空公行狀の碑あり今其碑前に圓光大師御廟前と記せし石燈籠左右に二基を建たれば全く法然上人の塔となれり然るを先年ある人ひそかに此石を紙に摺寫せるを見しにいかにもおぼろげなれど湛の字にて源にはあらず源空は此寺を作りて後やがて師湛空を請じて開山とすれば此塔湛空なるべき事明らけし何者かかく文字を書損せしめ強て法然上人の塔とせるや凡尊貴又德者の墓を謬り傳ふる愚昧の土人の話は論にたらず爰に師弟の碑を紛らはすは點智の浮圖氏の所爲にして誠ににくむべし古佛寺の縁

起なども甚だあやぶむべきもの多し其趣意人に信せしめんとしてかへりて嘲りをまねくもの歎くべし

湛空の和歌

湛空上人はさして歌人の名はなけれど古今著聞集に出たる歌などいとしき有湛空上人嵯峨二尊院にて涅槃會を行れる時人々五十二種の供物を備へけるに花の上に立て歌をよみて付けるに西晋法師水瓶に櫻を立て送るとて「如月の中のいつかはよはの月入にしあとの闇ぞかなしき返し湛空上人「やみぢをばみだの光にまかせつゝ春の半の月は入にき又一首を添られける「會をてらす光りのもとを尋れば勢至ばさちのいたゞきの瓶今の世腕をこきて歌よみだてをせる僧衆のよき歌よまんとかまへぬるに似ず折にふれて其思ひを述られて歌ざまの殊勝に調へるは其心術によるべし凡一宗を興し末世を化度せる程の徳ある人一向に詩歌のいできぬは少かるべし

泥中に尾を曳く龜

莊子莊は氏名は周字は子休楚國蒙縣の人なり楚王莊子が徳を聞て贈物を遣し使者を立て國の宰相に用んとしてめされたり莊子は濮水の邊に釣をたれて居たり

しが何となく使者に向ひて楚國に神龜あり已に三歳也今此龜を錦に包み笥に入れて廟堂に藏るに此龜死して其骨を留て貰るゝがよからんや又生て泥中に尾を曳て遊ぶがよからめと云莊子が曰吾もさのごとし官中に遊ぶがよからめと云莊子が曰吾もさのごとし官に上りて壽を縮めんより釣をたれて命を延るぞとて使の者を歸しけり又或時莊子魚の水上に浮み豊に泳を見て是こそ魚の樂なれといふを恵子と云友聞て汝は魚にもあらずして魚の樂をいかにして知るやといひければ莊子こたへて汝は又我にもあらずして魚の樂を知りたるやらん我が胸中をいかにして知るらんといひけり

水車

良峯の安世は淳和帝の御弟にて廣才達藝の人也天長六年に勅を奉り諸國の民に教へて水車を作らしめ農畊の資とせらる是和朝におゐて水車の權輿とぞ

常在法師

成源僧正は連歌を好む癖ありて其坊中の者共皆たしなみければ中間法師チウケンの常在と云あやしの者まで心ありけり法性寺の花の盛に件の常在法師糸櫻の許にイ

み侍りけるを若き女房四五人花見て侍りけるが此法師を見てあれも人並に花見んとて有にやなんと嘲りつぶやき坊此花を一枝折てたびてんやといへりければ此法師うち案じて「山がつはおりこそしらね櫻花さけば春かと思ふばかりぞと云かけたりければ笑ひつる女房どもいらふることなくあきれてぞたてりける

兎波上を走る

博物志に兎は望月にして孕み口中より子を吐といへり八月十五日夜月明らかなる水面を走りて感じて孕む此夜月闇ければ來年兎少也と云又一説に兎は雄の垂を舐りて孕み五月を経て口より子を生ずともいへり

鶯は墨を費す

晋の王羲之字は逸少能書の名有常に鶯を愛す爰に山陰に道人あり其許に多くの鶯有義之是を買求んといふ道人の曰老子の著す所の黃庭經を書寫して我にあたへられば鶯を贈んと云義之即寫して是をあたへ鶯を得て籠に入て歸りたると也杜詩に鶯は義之の墨を費すとあるは是也

流水を枕とす

孫楚は材藝世に秀たる上辯舌殊に能足れり四十餘歳に及べども立身せざれば世を捨て隱居せん事を欲し王濟と云者に向ひて我は當に石に枕し流に漱んといはんとして誤て石に漱ぎ流に枕せんと云へり王濟聞とがめて流は枕にすべからず石は漱べからずと云孫楚が曰流に枕するは世塵に濁りたる耳を洗んと欲す石に漱は不淨の食に染たる齒を礪んと欲すと誠にやさしき答也と晋書にいへり今流石と書て流石と讀すは是也

門に鳳の字を書

世說新語に晋の呂安字は仲悌七賢の中の嵇康と親しみ深く互に路を隔て遠しとせず交りしが或時嵇康の留守に來れり兄の嵇喜家に有て強て内に入れよといへど嵇康他行にては面白からずと立歸る時其門に鳳の字を書して去れり嵇喜是を見て鳳は三百六十禽の長なれば我を重んじて歸りたるならんと悦び後に心を尋ぬれば呂安が心は嵇康や我に比ぶれば嵇喜が材智の拙き事凡鳥の如にて相手に不足也と鳳の字は凡鳥の中に鳥を書たる字なればなり

老の接木

寛永の頃將軍家谷中の邊に御鷹狩有し時御かちにて爰かしこ御過がてに御覽まし／＼けるが何某院とて眞言寺有覺へず渡御有しに折ふし其時の住僧は早八旬に及んで庭に出てみつわぐみつゝ手づから接木して居けるが御供の人々をくれ奉りて御側に二人三人付奉りしを中々やん事なき御事をば思ひよらねばその儘背き居たりしを坊主何事するぞと仰られしを老僧心にあやしと思ひていとはしたなく接木するよと御いらへ申せしかば御笑ひ有て老僧が年にて今接木したり共其木の大きななる迄の命もしれがたし夫に左様に心を盡す事不用なるぞと上意ありしかば老僧御身は誰なればかく心なき事を聞ゆる物かなよく思ふて見給へ今此木ども接て置なば後住の代に至りて何れも大きななりぬべし然らば林も茂り寺も黒みなんと我は寺の爲を思ふてする事也あながちに我一代に限るべき事かはといひしを聞き召て老僧が申こそ實も理なれとて御感有けり其程に御供の人々追／＼來りつゝ御紋の御物ども多くつどひしかば老僧それに心得て大きに恐れて奥へ逃入しを御召出しありて

物など賜りけるとなん

肘笠袖笠

顯昭の袖中抄にひちがさの條有六帖に「妹が門行過かねつひちがさの雨もふらなんあまがくれせん是は萬葉集に「妹が門行過かねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせんとあるをやわらげたる歌也と云々こは和らげたるにはあらで誤たる成べし又催馬樂に「妹が門せなが門行過かねてやわがゆかばひちがさの雨もふらなんしでの田長雨舎り笠やどりやどりとまからんしでの田をさ又源氏物語須磨に「風いみじく吹出て空かきくれぬ御稜もしはてす立騒たりひち笠雨とふりていとあはたいしければ皆歸りたまひなんとするに笠も取あへずと云々萬葉の歌を六帖に誤てより催馬樂も本の出所を考へず六帖により源氏物語もまた催馬樂によりて文を成しと覺ゆひち笠雨といふ物あるべからずと斷られしは追の顯昭也綺語抄俊賴の無名抄童蒙抄共に俄に降る雨をいふと引れたる俄にてひちを笠にするといふ也袖をかづくといふとあるも詞に付て説をなしたるにて肘を笠といふこと心得ぬ事也赤裸にて行人なりとも肘を笠にはなる

べからず袖笠こそことわりなれ凡今の歌よみもいにしへによらず中世已後の説を宗とする人多し顯昭後契沖の復古なかりせば古學は埋れ果なん世の人顯昭の詠歌のなきをあなどり其説に據ある事を考へず聲にのみ吼るはいかにぞや

草庵集

探幽の畫はうはべ軽くしてしかも千斤の力有學ぶ人は其力を得ることあたはず只うはべの輕きと形をのみ寫すゆへに見るにたらず頓阿の草庵集もまさに然り今草庵集に倣ひて歌をよむ人美しきことは美しくぐて力なきもの多し頓阿は然らず思ひ至らぬ限なく心をめぐらして扱爰をと思ふ骨をやすくと軽くついで物ゆえ味へば限りなき風味出る也正に吾が題を得て思ひ得がたき時に當り此集を見るに誠にかうこそと思ふ常によみ流しては何とも心のとまらぬことにあたりて初て感服せらるゝは其趣意の行届たるゆへ也と蒿蹊申されし

畫空言

伊勢國多氣國司村親卿の撰多氣窓螢といふ書の中に昔東の京に俊明といふ繪かき有久我殿めでたきもの

に思して當家へ送られき北多氣の別莊に繪書せけるに安藝守清盛勸請の八幡の社の體詞も及ばず書出しぬ是は度會延直が書たる繪の寫なり然るに彼八幡は東向なるに海を後にあてゝ書たれば西向けるやう也いかゞと難じけるにされば繪空ごとゝはかゝるになんすべて繪圖と申にはまさまに書ども唯かく事は必引違へたる例也と申せしをかしき哉かゝる世のことに才賢こきをもて此國にとゞまり三十貫の所みそのにてたびぬ故殿の御時の事也と此頃唯生寫しといふこと行はるゝは古義にあらざるにや近來大森宗雲といふ人も只畫を書がよしされど書がたければ心の及ぶ限り畫に近く眞に遠ざかるべしと其門人に示しけると也古風を知る人といふべしや

千代能が歌

如大尼と云は夢想國師の弟子にて世に傳ふる「しづのめがいたいく桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらずとよみし人也此初五字或は千代能がとも傳ふ是は如大尼の俗たりし時の名也實は自らがといへり夢想の筆記に出たりとその宗徒かたられぬ是にて穩なり

釋迦の法孫

元亨釋書の著者虎關禪師は其父微官なりしかば小僧の時官家の童子達と群遊ぶのついで其父の微官なるを恥かしめんとて各其系譜をいひて此溝をこゆべしと云り皆大中納言の息なりしかば也虎關心得て大聖釋迦佛の法孫師鍊と高らかに呼はりて一番に飛越たれば皆いふことなくて止みしとぞ

味噌臭し

近來黄檗竺庵和尚嵯峨桂州和尚に語りて曰唐山に在し時は平生獨參を服用す虚弱の故也しかるに本邦へ來ては味噌汁を喫するが爲に獨參に及ずと味噌の効を稱揚し給ひしと也彼土には味噌なし長崎へ來る唐人が日本人はみそ臭しといふよし又彼地へ漂流せし者居留りて味噌を造り商ひて大に富たりといふ話も聞し也實に珍らしく味も一美なればさもありけんかし

母子の訴へ

京にて銀子三拾貫目持たる者命終る時妻に向ひ我先腹の男子六歳也十五迄は育て十五にならば銀子五百目渡し何國へも商ひに遣はすべし殘る銀子は皆その

方の儘にせよと遺言して書物を渡しぬ彼子既に十五になる時右の後家銀を五百目子にやり何國へも出よと云子さりととも難儀なる旨所司代へ申上る母と子を呼出し委細にいわせ聞て其町の年寄共に彼親の行跡はとあれば一同に世に越たる律義者又才覺も有公儀の御用を調べ町の重寶にて御座候へと所司代後家に問給ふ其銀子は元の如くありや中々あり扱は汝が夫日本一の思案者なりしぞかし其故は人の親として子に物の惜しからんや女房にとらするといはずば銀子を皆つかひすつべしと工夫の上にて云置たる也然る間後家にとらすると云し三十貫目をば子にやるべし子に遣はすと云ひし五百目をば後家に渡しそれを以て寺參の香花にあてそちは一圓子に打かゝり心の儘に馳走せられ安々と世をおくれもし子があしらひあしく氣にあはぬ事あらばこちへ知らせよ曲事に行なはんと下知有つれば聞者皆涙を流さぬはなかりき斯て座を立んとするに件の親の從弟たる老人とて書物を一通持て出所司代へ捧て云定めて一度は子と後家と出入あらん事疑なし是を上て申せ後家に云渡したるは始の日付也そちへ書置は日付後也と申せり今仰

出さるゝ御下知を謹んで承らん爲罷出たり親が存知たりし心底と御批判の趣少しも違はずと手を合せ禮して感じ下りたりとぞ

連歌の一直

連歌の席にて一句云出したるに執筆船が近ひ／＼と云けるをとくと思案して「船でなし中くりあけた木に乗りてと一直しければ一座顔見合せ笑ひ暫しは堪ざりしとぞ

如是院の米

細川幽齋公の姉御前に宮河殿とかやいふて建仁寺の内如是院といふにおはせし事あり長岡越中守殿より大津にて米を百石參らすよしの文を見たまひて其返事に「御普請の役にもたぬ此尼が百の石をばいかでひくべきとありければに理り也と則車にて送り給ひしとぞ

戸津川の湯

前の宮河殿子息雄長老頭痛の治ると聞戸津川へ湯治し給ひし時音づれとて人をつかはし給ふたよりに「御養生の湯入の心しづかなれやとつかはとして上りたまひぞ

座頭の茶挽

大名の扶持受る座頭有茶を挽せられしが吞で見給へば殊の外あらし大に機嫌そこねしに「あらくとも我とがのをとおぼすなよ茶磨に目なしひき手にもなし

三輪の山もと

泉州堺に山本雅樂とて小鼓の上手有幽閑法印政所なりし時能ありかの雅樂を招きそちは三輪をうたれよ三輪の山もとゝあるなればと言下に忝なや殊によみて見ればうたなりと申せしはしほらしく聞へけり

藍染川

旅人在所の者に此河をば何とか云藍染川とこたふさらは是を染てたべとて手拭をさし出す則受取て水に入ひろげ渡す何とも色はつかぬのいや水色にそまり候はと云し

煙草一錢

煙草のひろまりしは色々の書に記して見へたり予が父弱年の頃高麗橋にて唐人の装束したる商人竹のきせるにて一服一錢宛にて人にのませたるよし常に語りぬと八水隨筆に見へ又荻原泉阿彌の話に園殿下向

の節殿中へ金入のたば粉入もたれしが甚賤しく見へしよし左も有べきか近き頃は大名も更紗杯袋にして持りのまで叶わぬものならば奉書などに包たるが貴人は雅なるべき也

金の臺子

勢州阿野侯に金の臺子有世に珍寶とす或時此釜の蓋失たり色々詮議すれ共不出不得止事君侯に告奉る然らば別に補へとなり其時細工人を集めて云付しが多くの金にすれば其物入多し銅にて作り金を着する時は格別心安し其段又君侯に申す侯是をゆるさず元の如く無垢にすべし此以後失間敷物にあらず其時金にあらずんば今迄金の器といはれし事僞になる然れば末代什器に瑕を付るものなりと宣ふ群臣感じて千金を出して其器を補ひしと也

妻敵討

北尾貞齋物語にむかし松平伊豆守殿仙臺陸奥守殿へ浪人一人御頼にて三百石に呼出されし也此者何を藝術ありやと伊豆守殿へ尋られしに伊豆守殿御答に家柄拙からぬ者にて相應の御用は可成にも相務可申候へども藝は申立候様なる事御座なく候然しながら長

く召つかはれ候ても妻敵打の御暇など願候やうなる者にては無之候よし仰遣はされし由一段かはりたる御答のよし家中にて沙汰しけるとなり

聖人賢人

天野丈右衛門孟子を講じその上にて門人へ各も随分學問を精出し聖人迄はなりがたき事なれば何卒賢人になられよ予なども此年迄いまだ君子にも至らず併一生には君子迄には至るべし各は弱年の人々なれば出精次第にて賢人にならるべしといはれければ各拜謝して歸りしと也

儒士の孝行

或儒士其母に仕へて孝を盡すと思へ共猶母の意覺束なしいかにおもひ給らんしらまほしとものへ行まねして床下に隠れて伺ひしに婢とゝもに物語らひて今は某は何國迄行つらんけふは一日物堅からず心長閑也といへりしを聞て始て心付是より仕へのやうを改めしと也萬につきて此心得有べき事也

龜田窮樂

龜田窮樂は京の鍛冶職也業に倦て是を去り市中の隱者となり書を善くすといへども龜墨龜筆を持てあた

り合に書がゆへ嬰兒の書習ひの如しされども筆畫の自在なる事は云べからず彼書は何れを見ても大方麗

紙薄墨なり常に酒を好みて門生謝物を送れば悦びず酒を贈れば大に喜んで是を受ける寒暖の服も垢付破れて門生より取賄自今は都て家事を知らず門生の贈れる謝物を封の儘に溜置て際々に上り口へ並べ置掛取共來りて封を切夫々に秤にて掛取歸る米代とてもしか也封銀盡たる跡へ來る人には最早なし重ねては早く來給へと斷る商人共皆合點して聊滞る事なし常に門生或はしるべの人來れば手づから酒瓶を携出て冷酒にて饗ず器あるに任せてむさき事類ひなし煙草盆の引出しより埃まぶれの袖子はしを出し机上にて自分割み客へ出す來る人いふせくも是を肴にして酒を飲或所へ祭に呼れ行店先にて快く酒を酌かはし居けるを乞食門に立て浦山しげに詠め居たり窮樂是を見て我前にある盃をかの乞食にさす乞食いなみ憚りて酒を面桶へ受んとすさにては盃事にあらず此盃にてのむべしと云ば乞食此上はとく盃を戴ひて彼はおさへ杯して餘念なし返盃の時乞食盃洗はんとするを止めて其儘それにて自分快く飲で次へ廻す列座の客大にあ

ぐみ困りしとかや斯生涯安々樂しみて終りぬ隱君子といわんも恥ざるべし

西澤
文庫
皇都午睡二編中の卷終

西澤文庫皇都午睡二編下の巻

目次

一 奢侈の咎	一 木賊荊
一 薪の能	一 堀池權兵衛
一 狐瓜を喰ふ	一 逆木柱
一 佐川田昌俊(苔の清水、筑間祭)	一 念佛無間
一 一枚起請	一 故人の句に似
一 名人と功者	一 良雄の放蕩
一 松柏の節を顯す	一 赤穂順從錄
一 渡邊庄太夫	一 介石記の一話
一 芝泉雜記	一 追悼の詩
一 復讐の落首	一 義士筐の扇
一 昭君の額	一 渡邊綱の贊
一 碁打の言	一 筆道の論
一 九念而壁	一 妓女勝山
一 宰予晝寢	一 香の物
一 守武眞筆の極	

一 比叡の山ぶみ	一 小野の於通
一 座禪に妄想	一 鹿笛
一 松茸山	一 丸山權太左衛門
一 此木戸の錠	一 大廻し三段切
一 松の雪	一 了然禪尼
一 乞食女の歌	一 蛙の聲を止む
一 しやのく衣	一 木村重成
一 池上意三	一 金毘羅の神馬
一 應聲蟲	一 金蘭齋
一 四つ子を産	一 異形の觀場
一 十一屋の妻	一 梅心の辭世
一 非人の詠歌	一 五字の題目
一 豎題横題	一 熊澤の和歌
一 曾呂利の狂歌	一 滑稽頓作
一 信綱三仁政	一 井上の談諧(玉の簪)
一 角紙の句	一 世を覆ふ句
一 我に飽	一 俳席の心得
一 句より心を聞け	一 尊氏の和歌
一 鎌倉の初鯉	一 明慧上人
一 秦時の無欲	一 畠山重忠

一 藤房遁世

一 正成韓信を評す

西澤
文庫皇都午睡二編下の巻

西澤綺語堂李叟著

奢侈の咎

元祿の頃京に中村某なる者奢侈に過て官の御咎を蒙り捉はれて東へ下る時大津にて宿りたる夜近き山に鹿の鳴をきゝて「寐ながらは是も奢りか鹿の聲過奢者の罪を得て懲たる心ばへあはれ也亦其後浪華の巽何某といふ者同じく過奢にて召捕れ東へ趣く道にて「笑ふものわらはれてみよ花の旅といふ句をしたり誠に笑ふもの此まねは及ぶべからねど己が罪を省みざる志大におとれりとある人併せて評せしは理りに覺へしが此巽何某は事果て後京にすみて導引をせしが病人の按腹する間物陰にて妾に箏を弾しむ按腹は心を静めてなすべければといへりとぞ是は唐土にて蘇合樂を吹間に煉る藥を蘇合圓といへる故事より思ひよれるよし生涯過奢の意止ざりしとぞ

木賊苧

中興梅若太夫と聞へしは四座の外にはあれど觀金に名を爭ひ猿樂に精神を加えける名譽なりしが或時信州を領し給ふ侯家にて家督の嘉儀に能有て一門衆家中は申に及ばず領分の民に迄許して見せしめ給ふ其日梅若は木賊刈舞ふべきよし上手の面白き事を舞ふなれば第一の壯觀と貴賤息を凝して見物するにいざ／＼木賊刈ふよと鎌もて其模様をなす時かの見物のうちより何者やらん下手なる木賊の刈様かなと云て高らかに笑ひぬ席の奉行鳴高しと制し領知方の役人はいとゞけいめいし誰が云しとも知ざりき翌日大守それ／＼の役人に命せられしは昨日能を譏たる事梅若太夫へ對し甚失禮也嚴に詮議せば其者も知るべけれど元來下賤の者なれば場所をも辨へぬ也咎を行なはんも家督祝儀の故障なればと定式の謝禮の使者へ口上を添へ領分の百姓等舊例にて見物申付候事なれば田舎ものゝ無骨にて失禮の詞奇怪の至に候努々心に留られ候はでと慇懃に演られければ梅若愼んで謝義を拜答し儲かの能を譏り候者は御威光を以て御穿鑿下されさし越給り候様唯今參上の上相願べき存念の處御使者を幸に啓し奉る也と申せしかば使者其旨

を復命す大守も止事を得ず下司に命有ければ陳ずる様もなく某郡某村何某と云老百姓と詳に尋出し急ぎ梅若が許へ人を副て送りぬ彼老百姓は思慮もなく云出ぬる事歟となりいかなる憂目や見ると色を失ひ胸轟かしぬ頓て太夫出て昨日木賊刈を嘲りしは汝にこそと云に唯恐入て頭を地に付返答もせず太夫大に憫何の恐るゝ事やある我師傳を得て所作をなすといへども未誠の木賊を刈らず下手也と見し事謂有べしいかに刈が上手ぞと問しかば彼者初て心地つき扱も思ひもよらぬ仰事かな我は信濃の民にて名にあふ園原山の麓に生立若きより木賊を刈て業とし侍べるがこたび守の殿の御祝義に召れて御能とやらん拜み奉れども仰の忝きにいかなる事かと見侍れば身に舊く仕馴たる木賊刈の舞になんある扱は心ゆく見物也と見侍りしに木賊刈ふと鎌を右の手に持て左へ〜と刈らせらるゝは餘りに拙なき御事にこそ尋常の草こそかくはかれ木賊をかく刈ときは皆半より上は裂上て眞帆にはかれぬ也鎌を逆手に持て左より右へ搔切やうに刈候こそ木賊の刈やうなれと思ふが何心なく申出し事の恐多さよと猶懇々述ければ梅若大に感じ誠

にかの老圃に問へとは此事也一時の師にこそとて酒肴をもてなし物とらせなどし附副し人にも厚謝詞を述て歸しぬ夫よりして渠が家にては二鎌は昔の如く刈後の一鎌を逆手に刈る業を入れるところを傳へぬ

薪の能

梅若太夫其後南都薪の能舞に登りて一夕西大寺まで用有まゝ行て歸る道夜に入夕月夜のはのかながらたどり〜も其業に心を凝機位を考行先に年いと老たる乞巧姿の杖にすがりてたどり行に頓て追付ぬ梅若歩を靜めて跡より從ひ渠が容貌足の運び杖の突さま心をとめて見とめ二三町行しが尼が辻にて渠は南の方へ行んとしければしばしと呼とめ年老て嘸苦しくこそ物とらせんとて印籠の内より方金一顆取出して與へければ婆忝しと手に請しがいやとよ是は返し奉るべし我等が屬にてかゝる貴き寶もちては罪うる事に侍る殿にもいかに豊なりとて程もなき事ぞ只一二の鵝目たうべよと云しにいやとよ然らず汝我に於て一時の師なれば其思を謝する也と云に婆頭を振我殿の師たる事を覺へずと答ふ左にあらば語り聞すべし我は梅若といふ能太夫也今年薪の能に檜垣

をつとむる筈にて旦暮其事のみ工夫する所汝が年老
屈りて杖つき行さまかの檜垣の老女の能を舞んに感
ずる所有汝はしらすとも我に得る事有は師に非や速
に謝物を請よと聞へければ婆いよ／＼頭打振その謝
物ならばいよ／＼請難し殿の猿樂覺束なかれ今婆が
有さまにて工夫なしたまひ老女の能の妙は得給ふと
もさあらば鬼神の能は何を見て其玄微に至りたもふ
べき其御心よりは何事も枝葉にかゝはりて謠曲の文
章に時代違を作り牽強附會の俗説どもを胸わるく思
して彼の是のと改めんの計も出来ぬべし連も是は慰
事にて事實に用ゆべき物にも非ず白樂天を唐音にて
は諷はれぬ物から只家傳の節墨譜を深く修練し世々
の舞の手の優なるを慕ひ給ふにはしかざるべし習ひ
學べき師傳の書いくらも有べきを置いて遠く外を需め
給ふべからず歌舞妓物眞似する者こそ賤さまを其儘
に摸すをもて譽とすなれ貴人高位の慰に成べき爲の
能なれば卑き乞丐のさまを見寫しになさばさこそ見
苦しかるべし我はさまこそ賤しけれ心は殿に耻べう
も候はずと流るゝ如く述けるに梅若大に閉口し思は
ず地上に頭を低て良涙を拂しが去にても如何なる人

ぞと問まほしく仰て見ればいつち行けん姿も見へず
失ぬる事こそ不思議なれ

堀池權兵衛

先年或人京寺町を北へ上る時一老人袴をつけ杖を突
て先へ行なるさま様體見ごとに寛にして威ある貴人
かと思へば隨侍の者なしされども平常の人とはかつ
て思はれずふしぎにも追付て面を見んとせしが下御
靈の社地へ入てぬかづくさまいよ／＼唯ならずさて
傍より窺ひ面を舉しを見しが能太夫にて其頃名人の
聞へ高き堀池權兵衛にて有しと也塘雨の筆記に觀世
太夫が切幕をきりて出し所を見しに其氣満て一身の
固すこしも透間なく容易立向ひがたく思はず聲をか
けて褒しと柳生但馬守殿仰られしとかけるも同日の
談也此伎は體を守り煉る事なれば名譽の人に置ては
自然に勇にも見ゆるはさること也茶事を罷ぶ人蹴鞠
を弄ぶ人も又氣を納め體を固ることゝかや書をよく
するも亦然るべきか氣より體、體より腕に及ぶべ
し

狐瓜を食ふ

東都の御瓜畠狐來りて瓜を取喰ひければ吏大に迷惑

し吉川惟足に祈りて給はれとたのみしに惟足夫程の事にも及ばじとて何やらん書付て與へられしを其畠に建置しかば其夜よりとらざりしと是は「おのが名の作りを喰ふ狐かなといふ發句なりしとぞ此句は宗祇法師の句なり」と以前よみたる書に有けり

逆木柱

京三條繩手の伊勢屋と云元結を商ふ者の家の造作せしより病者多く出きしかば卜者をたのみて筮させしに是は逆木柱の祟也といふ然れども其柱たやすく取かへがたかりしかば祈禱せんやと云あへる時或人吾祝ふべしとて「伊勢屋とは元ゆい一の家なればさかき柱も何か苦しきといへりしに不思議と是よりことなくなりしとぞ商賣の元結に榊まで取合せしは面白し

塘雨云逆木柱といふことは元來巫祝のいふことにて新に家造する時など木を逆につかふことはかつてなし古家の建直しに本末の知れがたき木あれば世に安部晴明の判といふ五行卒かく木に書て用る法也是本末始終なきよしの咒術也と古き工匠の説とかや

佐川田昌俊（苔の清水、筑間祭）

城州淀の城士佐川田昌俊は和歌の癖有て常に近衛三藐院殿を慕ひ奉り公も渠が風流を憐み玉ふ或時昌俊土産の一尾を奉るとて「折よくはまいらせたまへ二つ文字牛の角もじ奉る也とよみて添たれば公より魚の名のそれにはあらで翌のひるちと二つもじ牛の角文字と御返し給りけるも並々ならぬ御願なるべし一年待花の題にて「芳野山花さく頃の朝な、心にかゝる峯の白雲とよみしは古に耻ざる秀逸也とて口々に誦し筆ごとに寫し洛陽是が爲に紙の價を貴くすると云計也高く雲の上迄聞え寂感有て辱くも宸筆に其歌を扇の端に遊ばされたるを更衣達に給りしが淀の城主に縁有し女官の申請て送られたるを城主も悦び畏り給ひ昌俊を呼出てかゝる冥加なる事の侍れば汝が家の實にせよとて賜りぬるを昌俊頂戴して涙を流し言語をもて申べき限りにあらずと頓て其席を退きしが私宅にも歸らず出行てその跡を聞しぬ城主をはじめ職々の役者親類知音に至る迄野山を分て索しかども終に在家をしらず和歌に執せるものなれば功成名遂て退の本意にて通世ばしせし物なるべきと是に付ても風雅の名近國に響て賞歎せしとぞ聞へし此

遙に後或僧吉野の山踏せんと六田山口より分登り發
心門をばいつしか跡に見なし御船山藏王堂を拜し猿
の尾鷲の尾の名も珍らしく椿山躑躅の岡の時に逢た
る所々も見廻りぬ彼眞位上人の汲給ひし苔清水は是
にやなど尋る傍にかたちばかり結びたる草の庵あり
しばし疲をも休めんと立寄れば主は七句ばかりの老
翁の頭は花の雪を欺きたるが出合てこなたへと呼入
ぬ浮世に遠き此山の奥と云殊に此清水の下に住給ふ
御心のうちさこそ濁なき事と感じければいやとよさ
にも侍らね共草木は人のさがをいはねばと住つきぬ
る也など何くれと語りあひ春ながら山は寒しと詠し
に違はずと眞柴折くべて共に手さし伸て心置なき桑
門同士の草鞋のまゝながら此山の昔物語に哀多く花
に名高き事共云人麿が目に雪と見し古より代々の言
葉の花さへ數々なる近年佐川田某が朝な／＼なん
花の色香を増ぬるよし都鄙もてはやし侍りしが客僧
には何とか思ひ給ふらん此歌は定家卿の小倉山しぐ
るゝ頃の朝な／＼を花によみ替たるに非や尤歌の等
類とならぬとは都にはまだ青葉にて見しかども紅葉
散しく白河の關と賴政卿の詠るは能因が霞とともに

立出でとよみし等類に非るよし俊恵法師も背ひ歌合
の判者も其沙汰なくて勝に成けるとかや佐川田氏の
歌も心にかゝる峯の白雲とよめるわたり全く等類は
まぬがれたるとは見へ侍れど古人の糟粕を免れざる
べし然るに近世豪傑の歌人なく唯範摹にたがへずよ
み出るを專要とし殊に定家卿をもて古今獨歩の先達
と尊信するより彼時雨るゝ頃の歌の體を摹せるを威
く感じて歌主の氣骨を賞美せず剽天聽に達して歎感
の上はかけても譏べき事に非ざれども和泉式部がく
らきより闇き道にぞ入ぬべしとよみしは巧なれども
經文の詞を其儘につけたれば企も及ぶべしひまこ
そなけれ蘆の八重ぶきとよみしこそ盡く腹心よりよ
み出たれば遙に増るべからむと古人は評し侍りぬれ
是しかしながら歌道の衰微にして我人歎くべき事な
るを是を事とし給ふ人々の輕忽にし給ふのみならず
只和歌の事は堂上の家にあらざれば玄微に至りがた
しと傲給ひ地下を賤んずる事は何ぞや夫堂上地下と
は其もと職掌に依てわかるゝ所也中古以前百官その
實ある世には其職殿上に侍すべき侍從内記などは高
官に非れども必昇殿式部以下七省卿の如きは高官と

いへども故有て免されざれば昇殿せず昇るもの貴に
あらず昇らざるもの必しも卑に非ず譬ば當時武家の
奥向の役人との差別の如きのみ然るに末世に至つて
昇殿せる人の子は追々昇殿す是を堂上の家とし昇殿
せざる人の子はいつ迄も昇殿せずして是を地下の家
とし其堂上より地下をみる事我臣僕の如くするより
和歌の風も賤んずる事人丸赤人を何者と思ひ躬恒忠
岑が官をしらざるや又和歌は上品なる藝ゆへ無位無
官の人の野卑なる肺肝よりは出がたしといはい花に
鳴鶯水にすむ蛙の聲をきけはいきといけるものい
づれか歌をよまざりけると書る貫之が詞も妄語なる
べし翁が嘗て思ふは佐川田氏かの吉野山の歌骨髓の
詠には非るべし然るに叡感をかたじけなふして是に
隋ひ奉れば道の衰を顯わすそれをことわらんとすれ
ば勅に背く爰を思ひ歎て國に跡をくらませしものな
らんと語るうち鐘の御嶽のならん入相の聲聞ゆるに
驚て又こそと契りて歸りぬ後都にて人にかたるに佐
川田昌俊こそ吉野の奥に庵結びて住と人の云なれも
し自ら餘所事のやうに語出たる身の上にやありけん
其後尋ねんよすがなくて絶ぬる事こそ遺恨なれと聞

へしも又人傳のものがたり也鳥醉の曰俳諧の附句は
次の句主の爲によきやうに心がくべしたとはいは鞠の
あしらい成べし猶さしあひ去嫌の多き物ありかの近
江の筑間祭などいふ季は夏にして神祇也戀也名所也
地名也句に依ては人倫俤などのさしあひ有むざと遣
ふまじき季也と申されしは尤なる事也

一枚起請

書林何某煩らひて心地死すべく覺しに菩提所の和尚
を請じ末期の安心を進むるあらましにて懇ろに後生
の大事を述べられけり何某むつかしき男にて有ければ
おもき枕をあげ様々のおしめし有難く存候也ひとつ
御尋ね申度事の候は皆死候跡にて野送りの節御引導
と申事有定て能所へ參る事を御教下さるゝ事にて候
半んが折角仰聞られても其時は息たへ耳もなし生た
る人のみ承り候あわれお情には只今仰下されたしと
願ふ和尚すつくとたちて佛前にありける法然上人の
一枚起請をとりよみ聞せ是有難き所へゆく道中記也
と申さる病人大に悟り扱々結構なる道中記にてこそ
候へ有難しゝと息の限り念佛往生をとげゝるこ
そ是書林に對して題のうごかぬ所なるべし

念佛無間

河州の家中望月與市郎は代々日蓮宗にて殊に母は堅固の信者也江戸谷中に歸依の上人より末期におよび候時決定往生の一句傳へ申べしと常に云れしゆへ臨終の時上人を招きければ上人の曰それ一句といふは念佛を眞實心に申たまへ大切の念佛を淨土宗は疎略に申ゆへ念佛無間とはいふ也決定して申せば往生は疑ひなしとすゝめられし時病人子息をよび我此年まで日蓮宗のつとめを誠と思ひし悔しさよ今既に死門に望んで俄に彌陀如來をたのむとも何條御惠あらん自らこそかくはありとも汝らは早く淨土宗になれ上人も今はいらす疾歸り給へ情なくたぶらかされし悲しさよとさんぐに云れて早々歸りし跡にて深川靈巖寺の和尚を招待しければ一念十念佛來迎の御勸化にて一向に念佛し正念に往生を遂られしと也與市郎早速宗旨を改侍りければ河州にて傍輩八人ともに淨智寺といふ淨土宗の旦那となりしと也

名人と功者

良能曰初心の修行はいかにも無分別につよきと思ふ程の句をする人上手名人の場へも至るべし初からお

となしく姿情調ひ侍る人は功者と云中途にて終るべしと細川公の耳底記にもしるさせ給へり都ての藝能みなかく有べし

故人の句に似

舊國曰發句を案するに心にうかび我に珍らしく認見るに思はず故人の趣向におなじ様なる句の出る物也是兼て聞感じ心裏にのこれる者か又は案其境に行合ふ物か故人の句に髣髴たる有皆好の道よりいづる物にして初心惡功の入たる人の他の趣向を盗みて一二字を入かゆる事などは混すべからずとは古雪中庵の詞にて我近頃「後してや月の面も痠女八重が句に似たり飯蛸や朝紫のほとしほり巴人が句に似たり水鳥の頭並べて旭布舟が句に似たりかな句なり猶去秋句「ばた餅や小豆のかたに秋の風と案じて我もおかしく人も珍らしと申ぬ其後ふと江戸の春來が東風流といへる集中に附合の句「ばたもちはあづきのかたに秋の風と有しに驚句帳を脱したり故人の句に作者の違へるもまゝあり斯様の事にや有けむかし然れども常々に俳書を見て人の句をひらふ者と故人今人の句に同案の句をなすものとは一概に心得べからず人こそしるらめ我句の事を云にはあら

す世情のあらまし述るもの也

松柏の節を顯す

ある人曰赤穂の政務は大野氏上席にして時を得て萬をはからひし程に民其聚斂に堪ず然るに事起りて城を除せらるゝに及びしかば民大に喜び餅など搗て賑はひしに大石氏出て事を謀り近來不時に借とられし金銀など皆それ〴〵に返辨せられしかば大に驚きて此城中に斯様なはからひする人もありしにやと面を改めしとかや是迄大石氏は一向用ひられず一とせの間には六七度もさしひかへなどの罪を蒙りしと也凡世に人なきにはあらず用ひる人なければ千里の駿馬も櫪に伏て終るを大石氏は雪霜の艱にあひて松柏の節を顯はせる成べし

良雄の放蕩

良雄在京中の所行は人皆爪弾をする計にて或智ある人も復讐の後すら評して彼は餘りに人に誹謗せられて其言譯に事を發せし也とさへ言ひしと也かく計ならずは敵方に油斷すべしや諂ひによりてます〴〵其謀の深かりしを感ず又或人云山鹿甚五左衛門久治官の疑ひを蒙る事ありて赤穂に蟄してありしかば良雄

是に付て儒學軍學をも學びしと也さもあらんかし

渡邊庄太夫

良雄或日伏見撞木町遊所にて酩酊に及び歸りがけ箱屋町の溝の端にて酔倒れ前後もしらず打臥たり此日細川越中侯の家中に渡邊庄太夫と云人主人越中侯公退に依て伏見の驛に御着の旨を京都所司代へ御届の爲參られ歸るさ夜に入二更の頃此箱屋町を通られかの良雄を見られしに人體よき者ながら町中に打轉がり傍も其身も反吐だらけとなり前後もしらず打臥たるに惘果詠居たるに饅飽屋來しゆへいかなる者ぞと問ふにうどん賣答て此侍は山科の御隱居にて撞木町の御歸りと見へ候則内藏之助殿と申庄太夫良雄が面へ唾吐かけて云其方事は赤穂の執權職として大録を戴き乍主人の生害刺へ我國斷絶に及ぶ事いかゞ心得おるや此方事は細川家にて渡邊庄太夫六百石頂戴し數ならぬ小身者といへども恩義に置ては片時も忘るゝ事なし夫に何ぞや復讐の心もなくかく放蕩に遊所にふけり亂酒酩酊に及び大道に打臥居る事言語斷斷の人畜と罵り〴〵歸りぬ扱同年十二月十四日赤穂の義士良雄を始四十六士吉良の館へ打入本望遂し後右

の四十六士を四家の大名へお預け仰付られ中にも細川家は大家たるに依て内藏之助を始十七人お預也則姓名の書付を御老中より渡さる越中侯畏り早々下城有て家來中召集られ甚もつて御稱談有て後用人渡邊庄太夫に仰付らるゝは此度預る所の義士は實に忠臣の鏡たる勇士なれば我家の面目也去によつて其方受取に參り候はゞ表向は格別受取候はゞ随分大切に敬ひ籠略有べからずと吳々仰付られ姓名書を渡さる依て庄太夫是を請取披見するにその筆頭は大石内藏之助と有庄太夫はつと吐息つきながら畏り奉り次へ立しが其儘屋敷へ立歸り切腹して相果しと也評に曰渡邊切腹の事主人の祿を戴きながら主人の用にも立ずして相果る事如何也と答て曰細川は代々の名家なれば渡邊氏などは九牛が一毛にてとにかく主家の名を穢すまじとの爲也と云々内藏之助は腰より下の短かき人にて祇園の社下河原邊毎度通られし時赤穂の家老々々と人皆ゆびさして笑ひしと也

赤穂順從錄

右良雄復讐の書は數書有て渡邊の一事は遠幽雜記に見る所也予東都にて茅場町藥師の當主より古き書

卷の寫しをかり一見せし事有復讐のせつ芝表へ引とりの圖菱川師宣とか英一蝶とかの書しを寫せし物と見へ至て古風なる物にて有し所々破れたる所もありし亦赤穂順從錄とて廿五卷の寫本細川家にての聞書をよせし物とて見しが内侍所四十卷とは余程珍らしき事有て萱野三平は大津にて切腹し主税切腹の刻限薄暮に至つて死骸を改めず葬りと云など他の書に見及ばぬ所也

芝泉雜記

亦芝泉雜記と外題せる合卷の古寫本一冊花笠文京持來りて見しに泉岳寺の當主隣寺の住持と碁を圍み居し所へ復讐引とり住持驚きて用に立す碁の朋友左仲姓氏忘れといへる浪人と隣寺是も名忘れたりの住持との計らひにて寺中へ引とり門をかためて粥を焚て饗すなど有跡は其席にて左仲が手柄働の次第を聞書にせし物なり其文甚麗にしていかにも聞書と思はるゝ所もまゝ有けり

介石記の一話

亦一書介石記といへる五冊の寫本を見たり此中を讀うち思わす涙を落したる一話を爰に出す暗記なれば

委細を云ず良雄始十七人の者細川侯に預られし其も
てなし甚嚴重にして朝飯後風呂に入れ肌の帶手拭は
毎日十七宛出る湯より上れば晝飯其後酒始り日々料
理山海の珍味を賜る碁盤將碁盤など出て近習同朋相
手に出詩歌連俳などに樂しむ輩には料紙硯など結構
なるを出す良雄深く辭して何にまれ望の物は銘々乞
ふ時に賜り餘計の費は達て辭退に及ぶ程なく其年も
暮て大晦日の夜に至る夜陰に至つて除夜の湯もすめ
ばやがて廣蓋に上着下着縹白絆紋付の上下足袋ま
で揃へて十七人の銘々に出し一陽來復の時なれば目
出度新年を迎ふる様大守より此品を出さるゝ各々新
に着かへ候へと有時良雄太守の厚き情を感じ是を辭
せず近習に問て曰太守は今どの間に御座有て我々が
間よりどの方角に當り候ぞや近習答て今宵は彼所に
御座あれば此方角としめす良雄椽先に出て手水に清
め太守の方にひれふして廣蓋を捧げ厚く禮をのぶる
事太守に向ふて云が如し是を見て十六人の輩いち
／＼手水に手を清め良雄のなせる如く一禮をのべ靜
に新衣を着かへて春を迎ふる所をよみて嗚呼誠の義
士なるかなと思わす兩眼に涙浮みて暫く止ず是其實

情に感じ落涙せしなり何事のおわしますかわと圓位
法師の伊勢宮に詣て感涙せしも皆是情に感じて詠る
也此書に文も飾らず有のまゝにしるせるを讀に涙を
催すは情に通するゆへ也かへす／＼も此一話は年月
立ても忘れず又もや涙を催しながら爰に出す事しか
り

復讐の落首

淺野遺臣本所の屋舖へ討入しは元祿十五年極月十四
日の夜也十五日の朝本意を達し芝泉岳寺へ引取ける
が御公儀にても十五十六十七日は御清なれば言上も
なかりつるが十八日に聞しめされて筋目よくいひ付
よとの上意なりしとかや武家はいふに及ばず寺院在
家ともおしなべて吉良殿の好みある者迄も扱々氣味
よき事しけるぞや誠に武士の爲によき氣付など思ひ
／＼の評議評定此人の行すへかくこそあらまほしけ
れと唇をかへさぬはなかりけり落首「あいたいとい
ふと其儘取にけりを取上なき巳の年の首午の年の春
の仰出しに金銀の公事沙汰去る巳の年迄の事は御取
上なきまゝ相對してとるべしと有ければ夫によそへ
けり又「憚りておきに甲斐ある大石は細川水のとま

りなるらん句のうちに隱岐甲斐細川水野をよみ入て
御預けの大名衆へ下さるゝ事もありなんとかや誠に
心ふかし又八景に作りて少將の夜の頸佐平の落涙遠
方の批判泉岳寺の番僧など口ずさみ或は本所實盛と
題して謠其外さまゞ口にまかせし狂句ども陌に喧
くして皆おかしけれど事繁ければ爰にもらしつ翌年
二月四日切腹仰付られ追善の詩歌數多の中

追悼の詩

儒林林家某氏去歲季冬故少府監赤穂城主淺野長矩舊
臣大石内藏之助等四十六人異體同志報讐趨義今茲仲
春初四日官裁不令各處死刑其志雖遂其性不全天平命
乎將時運乎難堪哀情收淚而作

關門突入蔑荆卿

易水風寒壯士情

炭啞形衰追豫讓

薤歌淚滴挽田橫

精誠貫日死何悔

義氣拔山生太輕

四十六人齊伏刃

上天無意佐忠貞

亦句頭に大石良雄忠節名士といふ八字を冠案して四

十六人の義臣等を追悼す叢林沙門亡名

大事一謀如響應

石堅盟會烈夫心

良籌運帳勝千里

雄力拔山擲萬尋

忠仰君恩曾撫劍

節臨自殺也彈琴

名碑洲六何當朽

士女口傳遺恨深

號を句頭に冠案して淺野遺臣等を挽する韻をつぐ

大勳煌々新臣道

石針豈刺鐵石心

良讓在懷爲殿最

雄雌鳴書勇追尋

忠宣伏劍不顧己

節應辭明預破琴

名翼四飛無處隱

士材盡與又窮深

此義臣等先君におくれしより此かた野に明し武府に
集り故郷に散じ心をつくし身を碎きし百千の謀いひ
もつきじ

昭君の額

大石良雄は都山科の邊に蟄居して「ものゝふのうき
みのはての置所されどもてらす秋の夜の月など詠せ
しも日數へて冬も半の頃次男大三郎が八才許なるを
伴ひて洛中の寺社など見廻り今宵は紫野のあたりに
知人侍れば宿してなど思へば心閑に申の刻過る頃北
野に至り神前に額突拵繪馬堂にゑて佐々木梶原が川
渡し時致義秀が草摺引など指さして大三郎に見せし
め古への兵はかくこそ勇て世に名を知らるゝなど教
へ聞へけるに黙頭てかたへの繪馬を指さしあの唐の

女の琵琶を抱きて馬に乗り泣しめるはいかなる人ぞと問しかば是は唐土の王昭君と云し美人なりといへばそれは何ゆへかく馬にのり泣ながら何國へ行と問まゝに是は昔漢の帝へ單于といふ國の王使を遣して帝には三千の后を具し給ふよし其内を一人給らば好を結び長く貢を奉り命に背くまじと申せしに彼國は兵強き所なれば其詞仇とならば天下の亂となるべきまゝ頓て夫に事極りぬ扱三千の后の内つどゝ帝も見覺へ給わす何れを何れと撰びがたければ畫工に仰て各その顔容を書寫させ中に就て醜からんを彼國へ遣わされんとの詔なりければ是を聞て後宮の后達我もゝと彼畫工に贈物して賄賂ける中に昭君といへるは容貌衆に勝れたりければ虎を畫て狗に類する筆にても劣るべきならねば其姿を憑て賄賂をおくらざりしに人の心は昔も今も變らず黃金多からざれば交り深からぬ習ひにて昭君が顔ばせをいと醜く書寫せり帝其繪どもを御覽するに論するにも及ばず昭君に極りぬかくて帝昭君を召て見給ふに國色勝れたりしかば取替んと思しかど信を外國に失わん事を慎み給ひ終に昭君を彼國につかわされけりと也昭君はもと

より琵琶の妙手なりしかば都の裏に抱き行馬上にも調べける其樂を王昭君と號て今聞人まで涙を流す事となれりされば詩にも昭君若贈黃金賂定是終身奉君王と作れりと語る時後の方に嘆びたる聲して口惜き詩の誦しやうかなといふて過るをいかなる人かと呖れば老たる宮法師の御灯の油をさして本社の方へ行にぞ有けるいといぶかく昔或人此社へ詣て東行南行雲渺々二月三月日遅々たりと誦せしかば内陣より妙なる御聲してとさまにゆきかうさまにゆき雲はるゝ如月彌生日うらゝとこそ吟すべきにと宣ひしとぞ若や其たぐひに神の告玉へるにやと心にかゝれば徐に行て本社に至り宮守る僧の宿直所をさし覗けば夕暮近く參詣も絶へ外の宮司なども歸りてかの老法師のみ桐火桶まさぐりゐたるに幸と立寄て爰なる童のいとふ勞れ侍る暫くいこはせ給へといへば易き事とて茶などあたへらゝも嬉しく此御社の尊きありさまなどいひて扱今昭君の詩を吟せしを御僧の聞咎め給へるいと心にくし誠に朗詠集は古は音樂に合せて諷ひ今も猶雲の上には郢曲の遊びもおはしますよし我等などは田舎にて唯假名の本よみ習へる事

なれば都の人の御耳に左こそおかしと思しめしけん
さるにても深き習ひは遙なることなれ今の詩はいか
によめるがよき事に侍ると問へば思わすなる事聞答
させ給ふて汗漿の至りにこそ侍れ我等こそ猶遠き田
舎の生れにて侍れば梁塵の雅聲などは夢にだに聞侍
らず只道理をもて案するにいさゝかの手にはにても
事の意大に違ひて題の趣も作者の意もかくれ侍らん
愚が思ひ侍るには昭君が畫圖に寫されし時外の宮女
の中にも昭君に劣らぬ美人いか計か有けんは今其名
をだに知る人なし昭君獨千歳に哀を残し邊風吹斷秋
心緒隴水流添夜淚行ありさまを今更見る心地して顔
かたちのみか心のうちの正しく美かりし事誠に天下
の美人といふべし譬ひ外に劣らぬ貌ありとてもかの
黄金を贈りし心の醜さはいかで愛するに足べきや諺
にも人は一代名は末代といへる如く利慾を離て名望
を思はんにはしかじされば江相公も其心を含めて昭
君もし黄金の賂を贈りなば定て是身を終るまで君王
に奉るのみならんと作り賂を贈らねばこそかく末代
に美名をのこしつれとの意を含ませて昭君が潔白を
賛し給へるなるを足下の吟じ給ふやうにては昭君が

清潔を過てるやうに心得給ふやうに侍れば不圖難じ
侍るなり凡今の代に仕ふる人を見侍るに其心得違あ
るも少なからず我才覺の及ばざる事は恥らで天下の
大官に昇らん事を好み彼方此方の畫工をたのみて美
しく彩色公卿の門に伺候し形勢の途に奔走して僥倖
に勢ひを得て武夫前に呵し従者途に塞がるをもて賢
しめでたしと思へども道の心より見れば晏子が御者
の顔付の淺猿く見をとりすれ桀紂は天下に王たれど
も人は是を惡み夷齊は首陽に餓たれども人は是を好んず
清盛の榮花ならんよりは正成が薄命なるぞ美しき僧
の利の爲に法を説を賣僧と云て卑しめ士の利の爲に
仕るを商奉公と云て譏る名利ふたつながら忘れてこ
そ道に近づくともいふべけれ至人は名もなく徳もな
し猶可不可一條の道を得ば何ぞ是らを論するの勞を
待んやと云しに良雄内に思ひある身にしあれば其心
に貶する如く覺へて涙袖にせきあへず感じたりし
がかくて夕梵近く響くに驚きて暇乞して出ぬ余りに
なつかしく貴さに重ねて尋侍りしかば其僧はいづち
行けんしる人なしとかや

昔義士有其妻の持たる扇として骨をとり掛物にして秘藏せしを見侍るに夫の手跡にて「つゝめども絶へぬ思ひになりにつくり問す語りのせまほしきかな其頃の日々かくも有べき事切なる心を感じ侍ると半時庵淡は述けり

碁打の言

碁を得たる人云碁は三つ置せて打にはいかやうに術を盡しても三百番の外なし二つ置ては六千番有先互先は數つもりがたし方量なし四つからは不論の事也と云し人有又碁聖の云如此の論はなき事也無下の事ども也とも申されし

渡邊綱の賛

又淡々が頼光綱にむかひ金札を渡す繪の賛に「綱立て綱が噂の雨夜かなとは晋子春雨の句也此繪はいまだ二條大宮へ打出ざる俤「島原へ寄なと笑ふ山かづら頼光ホ、唉アハ

九念面壁

爰に哀れをといめしは達磨大師にておわします九年面壁として尊者名僧和漢相とも背けたる像を念じける愚案淡々大悟の祖九年の間壁にむかひて尻を腐らし悟

りたるは至て不器用也思ふに九念面壁ならん三念一念即情頓話禪一二三と念じて二念にもとるは桑華の恒情なり教の要主也一機九念にして向ふ所は壁にても窓にても岩にても栢樹にても海も山も吹風も其時の心的也されば二祖の的を得て數年嗜みたる箭を放されたり又蘆葉の像とて蘆の葉に乗たる達磨目痛き物也柳葉蘆葉孤舟の一名也川上の觀念誠に見性成佛異國の虛名ならん澤庵も蘆葉の讚に至所信難しとは尊者の心裏をよく識りたるならん古賢禪師海印光にも達磨を責けり有難き事也

筆道の論

蒼頡に文字を教へたる鷄今飛來らば一字も讀事あたはず別れの邪魔をして飛去るべし手跡も先祖は惡筆也追々手練の文字細工積り／＼て風情日に増より和漢相とも筆の自由を感じ墨色を稱じて其道に日を空しくせる者は眉を顰めて能書と呼也風雅の思ひ深からぬ人の手跡は額にも掛物にもつきなき物也自慢をいひ散らして聞苦しく淺まし因以謝肇衛畫は書べしなどいへり清輔も其趣兼好も手など拙なからずはしり書ところ書弄びたりといへば傍人云半時庵無筆同

前の事にて筆道話し無用の事と笑ふ予云非也雲溪先生は能書の名有人なりしが予が書たる物を見て天下の名筆は淡々也文字一行の俤誰か及ばんそのうへ一字々々を離見れば少も文字の道理なしもとより學ばざるものかくも有べし謝肇衡是を見ば其悦ぶべしと大笑ひ有けり長夜腹淋しく厨飯ありやと問ふ僕云有り何ぞ榮有るかと問ふ有と云何ぞと問ふ九年母三つ有と云此者鶏にだもおとれりと又大笑

宰予晝寢

宰予晝寢子曰朽木不可雕也略下よしや晝寢たればとてさほどに呵り散したもふはいか々と若學者の顔赤めて云席に居合せとかく日本の道理に通じて我國の事よく／＼學び給へ詰る所源氏のてにをはを能吞込候へば皆わかる成べし宰予晝いねたり／＼／＼と日々の事に讀くだけば夫子の不機嫌皆わかりてあきらか也末摘花の發端に夕がほの事を書出して思へども猶あかざりしとはとかくあかざりし／＼と何遍もくり返してよむ心也猶の字心をとむべし我國の事を埒明すして遠き國ばかり尊み教るもいかの事ながら是又人の國を人々領するが如し源氏は金瓶梅の如し

とは一圓に源氏の道理分明ならざる也「やを万神も哀れと思ふらんをかせるつみのそれとなければ須磨の卷源氏の歌也此歌にて此物語の大切な事は明らか也推ては日本の事は中々濟かね候物也又韓退之云宰予晝寢奢侈を憎むの語ならん晝と晝と混雜の事か

妓女勝山

昔武陽に勝山と云妓有萬人肝を締め朱唇を窺ふもとより黄金用盡せども心を撓めず酒家の一夫に生涯いふ儘にしたがひ傳く或時夫狐にか佛にか誘われて逐電しけり亂るゝ髪も袖も袂も齒に咬齒に裂みちのくの方にやあらんと茨に身をさかれてよふ／＼「秋風もはや吹絶て冬の夜の霜ぞ寒けきしら川の關とよみてもと／＼切拂ひ山林深く入けるに忍の里人かた／＼思ひとりて頻りに招じければ「來て歸る道しなければ山里に墨染衣いく代ふるとも又「糸竹の昔を今に引かへて嵐のみ聞く深山邊の里歌の風情はともかくにも眞の心葉を重ねたるきやうさくうへならんと感ずべし

守武眞筆の極

守武眞筆の奥書六波羅密寺の邊りに與治兵衛といふ
輩有常に古人の筆の癖を覺へ世に埋るゝ古人の譽を
あらわす事間に髪を入ず人にて老を稱す守武の小色
紙に句々書ならべたるを愛して寶ともてなす予是を
望めば春宵一刻々と笑ふ時有て今角倉の文庫にと
いまり正木のかづら俳諧の道の守たけき武士の心も
和らぐべき一物なりけりと半時庵誌之

香の物

から漬と物を贈りたる人のもとへ淡々の送る文のう
つしからの物といふ事いかなる名ぞと世に稀に論じ
ける事有あらゝならず或は糠に漬る物ゆへ糠の物
と云又は大根を持て神に供すによつて神の物とこそ
神々と云訓をかりたる成べしと皆たがへり禁中臺盤
所へ女房の局よりおかうを參らせよと呼時味噌を調
じ侍る事上古今更也みそに漬たるをかうのものと云
也香の字を下す事文字を用るの餘情香はすべて清淨
の心なるべし薰風あながち南より匂ひ來る事なけれ
ども此類皆以て雅の要とする所ならん其かうに漬た
るにあらずで糖に鹽を加へて大根を漬て家々民ぐさの
朝夕の事とはなりぬ其中に群を出たる物あり稱して

から漬と云西域にあらずもろこしにあらずいかなる
からぞ世のさまかゝやき榮して調度の俤眞菜野菜も
到て風情のこまやかなりけり頻の日歌月と云人より
かうの物を得たり其味いひがたし若此蘿蔔は筑紫何
某の押領使が朝々好みたる土おほねにやあらんかし
さあらば夜盜の來りけるともおぢおのゝく事もあら
じや日をそへて乾けるは此うへの歎きなるべし

比叡の山ぶみ

春日空しからざるは皇都の人の心かりけり二人連に
て叡山へ參る者蹴上の知音の者の方へ立寄けふは大
師へ詣候又歸りに立よるべしと云捨て去りけるが暮過
歸りに彼所へ一人立寄一人は跡におくれたり扱々今
日は益もなき事に山坂をかけり候先は用意の割子も
いつしか高觀音にてたべ切湖の風こそ生臭く胸悪く
叡山へ登り暮兼々必といひ約束の捨坊主が所へ行着
けるに甚腹淋しく何成ともあたへられよといひけれ
ば菜飯に田樂こそし侍りけれと同宿米を洗ひ一人の
男は豆腐を厚く薄く長く四角におかしき物にきりち
やゝくりて焼ぬも焼たるも山折敷に打入強く荒々
敷菜の切たるめしをむくつけなる鉢へ入て突出し生

木の枝を折て箸にしていざ／＼心まかせにまいれとて何やら名もしれぬ草々を引て醬油打かけ出してきよろりとして住持は佛と打つぶやき侍る扱々懲果候叡山殿かな跡より連が立寄候はゞさきへ立歸り腹を早くなをすとして飛で歸りしとお申たべと云ちらし立歸りける跡へ一人の男立寄けふは近年の樂しみ覺たる事あらば歌にてもよみたき事ばかり拙き身をこそ自ら慙候へ常々大津へ掛取に往來の時は左右の山も心にとゞめず木草も目にわたり候わす今日叡山參りと改て出立より常にむさく嗅く息どしかりし車牛の響も昔めき崩れかゝりし軒端のかづら山の霞伊勢戻りの一ふし耳にとゞまり俄に走井の水鏡心はづかしさ頻りにまして獨打笑高觀音にこりめしとり出し湖の春風空と水と一つになりて吹こす花の匂ひイヤハヤしばらく貴人の心になりぬ大師の御恵み先覺へ侍りて扱叡山に上り約せしお寺へ立寄ければ何の待もふけもあらずあら／＼しき茶飯に不加減の田樂春草の芽のある限りひたし物にして強も進めもするにはあらでお住持は香盤の烟り絶さじと御佛につかへ申給ふ世に離れたる趣き給物の不加減却て世間寺の重

味馳走には増て殊勝さいはんかたなし誠に王城の守護山と承り傳へ候にたがひなし有難く覺候又々暇あらば遠からず登山致たしさらば／＼と云捨出けるとぞ兩人の風雅のあるとなきとの違ひめ是非の論なき事也何藝に付ても上手下手の心的意箭各々斯の如し予例の老のひがみの心出來て兩度芳野の花へは參りしかども馬上にて坂を登りたしと思ひたちて六田よりいかにも瘦たる馬を借りて行李のもの引つけ見おろし見あげ恙なく藏王堂に至り「芳野山世界の花は飲くらひと眞實の風情世人を罵詈して下りぬ其後老友の方に一夜咄し侍る折ふし人々見し所の風色を語り出て吾もよし野の趣申出れば俳諧の詞宗といふ者其席に有て某も初て去年の春罷りけるもとより花はおもしろけれども茶屋もなく喰物もなく扱々不自由也と眞顔にて申出けり此人叡山にも料理茶やあれかしとおもわるべし依て發句は申出さずなりにきと淡々の風話なりけらし

小野の於通

喜藤太といへる絹布商人有其頃小野のお通に仕へしちよといへる有於通は此時美濃につかへて渠は京よ

り召具したる者にて粧よろし筆のさま拙なからず猶
藤太を思ひぬ武門の厳しく目かちなるにつけて「浦
山し人目なき野の蟋蟀なくも心のまゝならぬ身とは
詠けるを聞て於通便なく思ひ女に合せければたやす
からず悦び洛外におかしく住けるが不幸の男にてと
につけ貧しくかくにつけ乏しかりければ常に夫婦の
口たたかひのつゝのりて離別せんなど罵りけることの
お通に聞へければ猶憂を知りて便をして稻の上五
つ永樂一貫取添へちよが方へ章こまかに認めたる歌
」とにかくに折ふしごとのたがひめをうらぶる中ぞ
契りなりけると世のたすけより人の心の和らぐなら
ひなれば又ことなく業にとり付續きしに其秋を過さ
ず藤太は身まかりて女はいたく歎果して物狂ひとな
り極めて五條の橋の邊にさまよひ月のある夜あらぬ
夜もかの文を見ながら髪もさばき恐しげにしてうら
ぶる中ぞ契りなりけるとよみて泣入けるを文ひろげ
のちよとぞ呼わたりぬいつしか終る所知る人なし

座禪に妄想

六如上人曰座禪看經など心を静めんとする時かへつ
てさまゝの妄想思慮うかぶもの也是は即一分の散

亂鹿動の心しづまるによりて也と日の明らかにさす
所に塵埃のたつが見ゆるにたとふべし常にも塵埃は
たてども見へぬ也日の光をまちてことさらにたつに
はあらずと閑田子は云り

鹿 笛

近江八幡に佃房といへる俳諧師鹿笛をもてり形凸か
くの如し惣體木にて造る底は皮にて張黒漆にて塗れ
り吹時は左右の中指にて此底をしごくやうにすれば
自由に音を出す是は信樂の獵師幸助と云者の與へし
といへり此幸助此笛を吹事上手にて妻鹿の音を吹ば
真にせまりて寄來らざる鹿稀也されども若思ふがご
とく寄來らざる時は子鹿の音を吹には必よると語れ
りとぞ悲しむべし其態によりて親しく其情はしれど
も憐む事をしらず百舌鳥が衆鳥の聲をまねびて其友
かと思はせて執喰ふたぐひ成べし

松茸山

今の世松茸を守とて厳しく鐵砲を打猪鹿をおどしう
ち殺しもすもとより田の稻をあらすは追はでは叶わ
ずされば猪鹿田に下りては追れ山に入ては追れ住所
もなく食もなし松茸などは彼等に應じたる食なるを

今世民の利を貪る事甚し領主もまた假初の物にも運上の利を射るゆへに上下唯分寸の事にも眼を光らして探りもとむ其禍鳥獸に及ぶといへりしは耳に留りぬ

丸山權太左衛門

丸山權太左衛門が角力の高名はいふも更也全體心やさしく風流にして雪中二世史登の門に入俳諧の發句をなすある時連中の望にて我手のひらを墨にて紙に押形となし其かたわらへ「ひとつかみいぎ參らせむ年の豆葉が身の丈六尺三寸七歩手のひら長さ七寸九歩あればよき祝の句也荒々敷業の者ながらかく風流なりしもいとやさしかりけるとぞ

此木戸の錠

大江丸云手爾波とゝのわざれば天地の神に叶わす我人ともに受^ホする處有べし彼伊勢の團友讃岐の浦にて「なまことともならで果けり平家蟹との初案したゝめいまだ心行ぬ事のあればこそ其夜の夢にあまたの蟹にせめらるゝと見しかば再案「生海鼠ともならでさすがに平家也と是景清の謠にも叶ひたる手には自然と備わり句ぶ日も格別也と我心中に腹せしかば心神

ともに納る其夜はいさゝかの夢にも見ざりしとか又其角が「此木戸や錠のさゝれて冬の月^下是は平家物語のうちに此木戸は錠のさゝれて候ぞこなたへ^下「酢をさせば閻浮にかへるなまこかなとよまれし

大廻し三段切

細川玄旨法印の我も大廻し三段ぎれの仕よふは習たれどもいまだせぬ程にもはや一期すまじき也人のしらぬ事つよくしたがるは紛らかしの下手の事也「さればこそ花に思ひし野分かな紹巴が一段はめて掛かやふの發句は重ねて御無用也さあれば人がしたがうてあしき也と耳底記に書給へり孔明が櫓の琴義經の鴨越それらは無據なき事にやあらめ今時たまゝも^下の覺へたる人の三段切素秋などゝ好でいたさるゝは氣の毒也と魚紋^{ギコ}のはなしにてありし

松の雪

伊勢の國何氏の娘に犬といへる者有本性やさしくて和歌を好めり後の朝の戀といへるに題して「きぬくゝのわかれの程の思ひでゝいまだにつらき鳥の聲かな十三歳の齡元祿十年正月に身まかりけるがいとよく後世の營をも悟りてある僧を招き我亡名を松雪

と賜われさりし頃松の雪といへる題にて歌よみ侍りけるとて「漣や志賀の濱松いつよりも今一しほの雪の曙死出路の糧に十念を授け得させたまへと懇ろに念佛し」もろともに朽なば朽よ永らへて残るもつらし仇しうき名のとよみて終りしと也程へて後此娘かゝる艶才のありし事いかなる便ありてか大内にきこしめされあまたの詠の中に五首とめさせけるとかや松の雪といへる題を案じわづらいて死せる人の再び來れるにやと人々云あへり

了然禪尼

了然禪尼は都の人にて大内に仕へ侍りしが婚姻の事人の媒しけるに子三四人も産なば暇たまわれと契約して嫁し行けり三十餘歳の時迄男女三人設け夫よりしかゝゝの事を云ひ終に髪を剃衣を染臨濟黃葉の諸禪林に入り參道隙なく務けり天和元年の冬編參の爲にとて江戸に下り井上大和守殿の屋敷にありし白翁和尚に見へ法を受んと乞しかど顔容美きには人口恐れ有と宣ひしかば頓て立歸り火掬を焼額より兩の頬に至るまで焼爛し和尚に參りしかば其懇志を深く感じ大法のこりなく附受有る時詩歌を賦して呈しけり

昔遊宮裡燒蘭麝 今入禪林燎面皮

四序流行更無跡 不知誰是箇中移

歌に「いける世に捨てたく身やうからまし終の薪と思はざりせば爛れたる疵頓て癒て少しも痕付ざりしも又奇特の事也江戸近き落合といふ所に自ら精舎を建立し一乘院と號し尼衆集め法を説しと也

乞食女の歌

寛文十二年四月上旬に洛東三條橋の下に廿歳餘りの乞食の女自害してけりかたわらに書殘せる一首有「ながらへは有つる程のうき世ぞと思へば殘る言の葉もなしとありし事都に隠れなき事にて有難くも天上の御沙汰に迄及びて或貴き御方合せさせたまひて「言の葉は長し短し身の程を思へばぬるゝ袖の白露「なきと詫る其言の葉の殘るさへ聞に泪の袖にあまれるさりとも和歌の徳いふも更也と聞人ごとに泪せきあへず侍りき

蛙の聲を止む

大坂谷町筋八丁目願生寺超譽は隨分の念佛の導師なりし此寺もとは草庵にて纔に三間四面の藁葺の一字計なりしを今は佛殿方丈庫裡迄悉く成辨してけり修

營の始に根なき松を二莖門境に植もし寺門繁榮せば此松成長すべしと自祝せられしに果して鬱茂して今大木となれり又鹽町に閑居の庵を占給ひしに庭の池の中に蛙群鳴て喧しかりければ十念を授て停止せられしに生涯の内は曾て鳴ざりし元祿九年八月十七日七十二歳にて豫め滅後の葬式を營み前十一日より安養の聖像の數に入し事を覺へて貴く念佛して終りぬ

しやのく衣

泉州堺の眞言宗の僧常に酒をたしみて暫しも酔の醒る事なくて只戯れごとのみにて世をおくられし然れども泊然といさぎよくて祈禱今ぞかりければ人々崇みし此僧身まかりて後遺封を開き見るに寺と書籍とは甥の僧におくる金三百兩は草履取に得さす出家の財寶は禍の基也衣服はそれくゝに與へよ辭世に「世の中はしやのく衣つゝてんくゝてぐる坊主に殘る松風

木村重成

大坂の城今を限りに見へし所に木村長門守風呂に入髪を洗ひて伽羅をたかせられし時江口の曲舞紅花の

春のあしたを謠ひ餘念なく小鼓を打れしとぞ其次の日花やかなる討死せられし印を大將軍家康公御覽有て涙を流させ給ひ此若者討死を極め髪に香をとめ乍月代を剃ざりしと仰られしとかや其時髪をすき香を焼き女は江戸にて木原意連といへる外科の伯母にてありし老後まで常にかたられし

池上意三

池上意三大儒の譽れ世に聞へ十六歳にて水戸黃門公へ召出され和漢の萬卷に眼を曝しいと美じき人にておはしき去る佛縁の有けるにや或時延命地藏經を拜見して忽世の無常を悟り菩提心強く發りて大守へお暇乞ひ世になきものになし曾節と名を改め形を桑門にかへてけり都方に上りて童の風車を弄を見て「舞ば舞ふ舞はねばまはぬ風車是や我身の行衛なるらんと讀てけり風車軒と申けりそのうち勝尾寺二階堂に籠られしが九日目に及び思ひよりし事有て火定に入るべしとて薪あまた積せ我中より香烟を出すを合圖に火をかけよと約束し辭世の詞とて「世の塵をはらひてのぼる勝尾山法の爲には又かへりこんと讀て入りぬ暫しが程念佛誦經の聲聞へしが人々烟を見て火

をかけしに山々谷々に充々參詣の輩同音に念佛し漸
事靜りて各々寄て見しに左の手に香爐を捧げ右の手
に念珠をもたれし行儀すこしも亂れずおはせしと也

金毘羅の神馬

謝肇衛名利を好むは丈夫の事鬼神を好む子の事丈夫
にして鬼神を信するは丈夫の氣を失ふといへり凡理
學家は云に及ばず少し文字をよみ書を手ならず人は
神佛の妙を嘲りて婦女子の口實とする事珍らしから
ず然るにまさに閑田が視る所廿年前讃州金毘羅に詣
し時常の神馬の外に駒一疋馬屋の外に繋がりいかに
と思ひし折から詣でし人語らく此近き某の村に馬の
難産に苦しめるを其主此御社へ祈請し平らかに産し
め給はゞ其駒は奉るべしと誓ひしがやがてやすく産
れし後いとよき駒なれば惜む心出來て猶豫せし間此
駒自ら走りて此頃爰に來れり速に置べき屋なければ
かくの如しといへり

應聲蟲

塘雨云元文三年の頃四條坊門油小路の東に觀場の催
を業とする者有奥丹後の山里に農人の妻五十歳計に
て應聲虫の病あるよしを聞傳へて觀場に出さんやと

語らひしに行て二三日逗留せしがいかにも腹中に人
聲有て病人の聲に應じて其詞の如くいふ事分明に聞
ゆ其夫の物語に先年霜月に引連て六條詣せしに茶所
にて休ふあいだ腹中にて物を言ひしかば諸人怪しみ
とやかくとふことのうるさく耻かしく覺へて其夜た
いちに歸へりしといへり

金蘭齋

近世畸人傳に出たる金蘭齋と云老莊者は腹中より聲
に應じて物いふと覺へたりされども是は只自ら覺ゆ
るのみにて他人きかず暫の間にて止みたりと馬杉亭
安といふ老人の話成し由自のみ聞は氣病にてもあり
けんかし

四つ子を産

備後神石郡袖邊町油屋久兵衛といふ者の妻四子を産
り三子は男一子は女也四人目に産れしは髮黒く生齒
悉く生じ頭に角二本有しかば恐しくて捨やりしに少
も泣事なかりしかく四子を産る事は和漢ともにたぐ
ひある事とかや

異形の觀場

延寶六年に泉州堺の夷島に面三つ手足六つある赤子

捨置たりしを大坂道頓堀觀場師諸人に見せ侍べりしかゝる異形の者にしへも折には有しかや今年まで百七十三年になる道頓堀の見世物は思へば古き物にあらずや

十一屋の妻

大坂手島町十一屋宗佐といふ者の妻若き頃より書典を好み佛法を信仰し本性やさしくて慈愛ことに深かりし延寶八年四月十五日高野山に詣けるに前百日潔齋して道伴ひし尼を女人堂に残し置自らは兼て齒を白くし股引脚半鉢卷までもし二尺餘の大脇差を横たへ奥院檀上谷々院々残りなく順禮し恙なく下向せしと也天和二年に時疫を煩らひ既に臨終も遠からず見へし時此世の暇乞とて洗米御酒清らかに調へ日本國の神祇に備へ奉りて純一に稱名し往生をとげけると也

梅心の辭世

阿州德島に梅心とて俳諧など嗜し人有八十二歳になりし迄心身まめやかに有しが貞享四年六月九日にかたわらなる懷紙に「世は夢と見しまも夏の一夜かな」となふれば心涼しや南無あみだと二句書のこし

て一向に念佛しておわりぬ

非人の詠歌

元祿の始の頃都の非人歌よみけるとなん「ぬるまのみ人にかわらぬ身なれども浮世にかへす曉のかね」「さむしろにおく露の身はきへやらで夜半の嵐の吹かひもなし誠の非人にやいぶかし

五字の題目

洛陽龍本寺日進上人御宸筆の題目を八條殿によつて願ひ奉られしに忝も仙洞後水尾の院妙法蓮華經の五字御宸筆染させたまへり日進重ねて南無の二字を添させてと願ひ奉りしとありければ五字の宸筆めしかへさせたまひて寸々にきらせ御前の火鉢にてやかせ給ひぬ五字の頭に南無の二字を置たる事いづれの經に證文あるや奏問申せと詔ありければ祖師日蓮始て此字を加えられしと勅答ありしかば此事かなはじとて止にき

豎題横題

昔水無瀬の上皇の仰に春夏の姿はふとく大きに秋冬の歌は細くからびて詠むべしと勅ありし我俳諧も是に倣ひ奉りて四季のはつくも其心をもて詠せむこそ

本情にかなひ侍らむかしと淡々は申されけり

熊澤の和歌

熊澤先生始て藤樹先生にま見へられし時熊澤氏「みな人のまゐる社に神はなし心の内に神ぞましますといはれしを藤樹返しに「ちはやぶる神の社は月なれや参る心のうちにうつろふさすがの藤樹先生なり尊むべし是は藤樹の末孫中江久風といふ人の物がたり也とぞ

曾呂利の狂歌

曾呂利新左衛門は堺の町人にて豊臣秀吉公のお氣に入狂歌をよくし御伽衆と成ける或時秀吉公諸士を集め何にても大きな狂歌をよめと仰らるゝ時に福島左衛門仕りけるは「兩國にはびこる梅の枝に啼て天地も響く鶯の聲秀吉公御機嫌の體なりしが曾呂利一人是は甚だちいさき狂歌也と云に清正然らば某上もなき大なるをよみ候とて「須彌山に腰打かけて大空をぐつと呑ども咽にさはらずと詠けるに是こそ誠に大なる歌とて秀吉公始皆々感賞しけるに曾呂利まだくちいさいと云清正すこしいかりて然らば是より大なるをよみ候へと云曾呂利心得候とて「須彌山を

咽にさわらずのむ奴を眉毛のさきで突こかしけり満座臍を抱へて笑ひけるが秀吉公重ねて仰に此度は随分世話しく聞敷狂歌をよめとあるに曾呂利畏り奉り「俄雨薪はぬるゝ雨はもる我子めがせがむ瘡のかゆさよ秀吉公殊の外興じ給ひ何にても望みあらば申べし叶へとらせんとあるに曾呂利有難く存奉る然らば江州三井寺の石階の下より上迄五十一段御座候此下の段にて米壹粒を倍增に上まで下され候はゞ有難と申上る秀吉公笑わせ給ひ扱々ちいさき事を申かな望に任すべしとあれば曾呂利有難き段申上勘定人に算盤もたせ右一粒の米を倍增にして段々五十一段目迄置上見るに廣大の石敷と成りしかば秀吉公笑わせ給ひ此石高を汝に渡さば日本の諸侯の知行三年の間斷いわでは渡しがたしとて困り給ふとなり日本大名惣人數二百五十餘人知行高凡千八百六拾万石餘と云ふ

滑稽頓作

豊公ある時諸臣にむかわせ給ひて世に恐ろしき物は何ならむと仰ある君こそ恐しき物の頂上にて候と一同に申上たるに曾呂利が云御前様ほど恐しからぬ物

はなし手柄をすれば御褒美有あしき行ひあれば罪をお糺し遊さるゝ善も悪きも我心にあれば君は恐しき物に是なしたゞ世に恐しき物といふは無分別者にといめたりと申上ければ公大に笑わせられ諸士もアツと口を閉たりしと也唐土の東方朔我朝にては杉本其後は曾呂利井上氏あつばれの俳諧なりとあり

信綱三仁政

寛文の頃かとは松平故伊豆守信綱執政の時千年以來金銭を尊てかく成たる風俗の後に出て京の大佛を鑄て錢とし天下を利益せられしこそ先にも跡にも聞ざる事なれ其卓識誠に古今に傑出すともいふべし重衡鎌倉に囚れし時父命によりて奈良の大佛を焼し事を大きな罪惡とて自恐れて頼朝の前にも陳謝し京師にて法然に邂逅しても此事を云出して深く悔しは罪障懺悔の爲とこそ思はれけめその愚暗是非もなき事也其後松永彈正が再び奈良の大佛を焼しを猛惡の信長さへ是を大罪と思わるればこそ松永が主君三好義長を弑し光源院殿を殺し奉りし大逆罪に並べて人のならぬ事を三つしたるとて彈正を耻しめられしぞかし嗚呼佛法の人心を蠱惑する事何ぞ爰に至るや御

當家創業以後文明日に開けしゆへ伊豆守程の人も出るぞかし信綱善政多き中に天下の殉死を禁じ諸國の人質をやめ大佛を錢に鑄られし此三つをば世に大器量の事と賞するも宜也殉死を禁せられしは永く後世の害を除き人質を止られしは普く諸國の患を救ひ大佛を錢に鑄られしは大に古今の惑をとく天下後世に於て大功徳ありといふべし重衡などをしてきかしめばほとんど驚死にも至りつべしと鳩巢は申されし

井上の談諧(玉の簪)

されば信綱の平易にて無造作なりしは世に類ひなき事にて有けり其頃井上新左衛門と云人は執政府の從事たりしが素直に文飾なきをもて伊豆守の爲に愛せらるる新左衛門常に談諧を好みて其爲人東方朔に似たりある時何方より鱈を獻上しけるを御前に披露するると伊豆守見届られしに鱈に塵つきてありしかば伊豆守氣色損じて取次し人を呵られしを新左衛門傍に有しがいや鱈には塵ある筈にて候と云を伊豆守いかにととへば三番叟にちりやたらりと申候わすやといふ時に伊豆守聞て笑ひつゝ氣色なをりて兎角物に念

の入らぬ故にて候何事も念をいるゝにしくはなしと云れしを新左衛門各様には御念入候がよく候我等如き輕き者は餘り念をいれ候へば却てあし事もある物にて候と云を伊豆守何が念をいれてあしきやうあるべきといはれければ其事に候昔唐の玄宗方士に命じて楊貴妃の有家を尋られしが方士蓬萊宮に到て貴妃にあひし程に歸りて此由を奏聞せんとて其證を乞しかば玉の簪を給わりけり然るを餘り念過て是は世にたぐひ有べき物なりとて重ねて玄宗貴妃との密語を聞て還り報じければ一旦首尾はよかりしが玄宗方士を疑ひそめられしより思わるゝは此密語は貴妃と我ふたりより外他人しるべき事にあらず然るを方士しりてかく云は兼て貴妃に通じたるにやと終に方士を誅し給ひしと也前の玉の簪ばかりにて能候をあまり念を入たるゆへにかくのごとしといひければ又新左が例のさゝろごとをいふとて一座興に入てやみける此後天草の事出来て信綱命を奉じて行れしが不日に賊皆誅に伏して江戸へ歸着せられしに旅装のまゝ直に登城有しかば折ふし在城の面々殘らず迎勞しけり新左衛門も衆中に有けるを信綱早く見付てそこに語

ることこそあれ今御前より罷りてとて御前へ出られやゝしばらく有て御前より退かれ衆中にて云れしは此度天草にて諸侯一度に賊壘へ向ふべしと約束定りて扱押よする時は某が本陣にて鐘を撞べし夫を合圖に諸手の衆集るべしと云合て僉議の間日を経けるが某思ふには今夜にても賊方の者か又は馬鹿もの忍び入て鐘を撞て我衆を誤る事もあらむかと撞木を取よせて我側に置けるが又思ふには必撞木にも限るべからず鐵炮やうの物にても撞まじきにもあらずと鐘を地へおろさせ菰にて巻て置せたり然る所賊徒戰て思ひよらず俄に手合せ有ければさらば鐘を撞べしといふに上へ釣上菰をとく程に終に間に合すしてたゞかりに懸りて攻潰しけり其時かのいつぞや申されし方士蓬萊宮の物語はか様の事にこそと足下の事を思ひ出せしと話されし也是戯れに近き物語なれども信綱理にさとく人の言をすてず夫に只今馬よりおり御前へ出て天草の首尾を申上らるゝ折ふし常人ならば中々思ひもつけじたとひ思ひ付とも此節は扱やむべき事なるを只常の氣色にて稠人廣座の中共いはず我あやまちたりし事も有の儘に語られしにぞ伊豆守の

心公にして器量の大なるもしられける世に古今の良相とするもげに理りと覺ゆるぞかし

角觥の句

享保改元の頃は浪華の俳諧いと盛んなりし鬼貫才磨野坡員九淡々祇空芳室布門昭麿白羽法策海音矩州瓢水來山など也其後俳諧にて能人情を盡すものは蓼太蕪村の兩叟殊に妙有角力の句にても「大内の砂を土産やすまふ取蓼太是はかい古へ名かみの成衡さつまの氏長がたぐひにて田舎の家づとに守りのかわりに取歸るさまこけても砂といふおかしみを含めたり又

「負ふしきすもふを寢物語かへ夜半妻にあひての情思ひ廻らすべし」白梅や北野の茶屋にすまひより夜半すもふの祖野見の宿禰も菅神の御先祖なればひとしほ道の信心もこもれる也是らの力にて風月花鳥の情をいひかなへたらむ道に手だれの程を思ふべし鳥虫のうへばかり凡にさつしやりて句作したらむは大方人形の笛吹やうならんとさる人はいへり

世を覆ふ句

世に秀逸の句あり貞實の是はく又貞柳のにくまれでの狂歌などは物しらぬ作者をもしらぬ者までいひ

もてはやす也誠に世をおほふものなるべし是に次では淡々の口癖の芳野も春の暮毎には必いひ出す也是らこそ道に入たる本意なれかゝる一句も願わしき事にこそと鳴見の蝶羅はかたられし

我に飽

許六の曰皆人發句を案するに趣向より入たるものは格別の句は求めがたし案より思ひよせたらむこそ能句はいづらめ又數多句を吐てきのふの我に飽者俳諧の上手也とは尤の事也

俳席の心得

白翁の咄に少しにても我より上手の人の有場席にては發句にても附句にても早く打出して指南をうくべし我より劣りたる人の中にしては一段しづめて大事に案すべし又他國他門へ行てはあく迄も案入べし師の前上手の前にては案じるは無益也早く教を受べしいろくの心得徳ある事どもを聞事有と是俳諧にのぞむ第一の心得ならむ

句より心を聞け

周竹云發句に聞へがたき有らば其心をとふべし句のおもてより心のよき趣向あるもの也ばせを翁の門人

に初心の人有夕涼の句をいろ／＼に案たれどよからず翁曰いざまづくつろぎたまへ我も臥なむと宣ふ然らばおゆるしじたらしくおれば涼しく候と翁の云今の詞則發句也「じだらくに居れば涼しき夕哉」宗次有次又去來の「俤の愚にゆかし魂祭翁其心を問ふに祭る時は神在すが如しとやらん玉祭の奥なつかしく覺候と申翁云しからば其心すぐによろし「玉棚のおくなつかしや親の顔と直し七文字なつかしやとして下をけやけく親の顔としてよろしかるべしと都て其思ふ所直に句になる所をしらず深く思ひしづみかへつて心重く詞しふる也と教給ひしと承る世上大方かくのごとし早く心を打出して師に教をうけるがよしと申されたり

尊氏の和歌

白牛曰ばせを翁の日はつれなくもの句は昔尊氏の歌とて「すまよりも明石のかたにあか／＼と日はつれなくも秋風ぞふく此歌を兼ておかしと耳底にとめひとせ北國行脚の時北枝を尋ねて秋の風秋の山の推敲に枝が器をはかりたまひし是は何れの集に有歌やしらず

鎌倉の初鯉

連丈の曰人情をはくには其人をあく迄もうつし得ざればいかゞ也といひし何れ作力の入る物也「初松魚重衡みやり給ひけり」初鯉宗盛むづとまゐりけむはつかつを高時食はで死したりける始は三位中將の狩野の助が饗應を仇にせられざるみやび中の句は八島の大臣のおろかにして人前を恥ざるさま末の一句は鎌倉の入道の田樂法師にもてなさゝる恨を遣せり「俳諧に古人なし魚に初鯉共に舊國の句也

明慧上人

鎌倉治世の後に至て北條泰時こそ漢の内魏唐の姚宋にも恥しからぬ人にて吾國にはあまり比類なかるべし此人梅尾の明慧上人にあふて某不肖の身をもて重任に當り群下に臨み侍るいかゞして衆を治め争をやめ侍るべしと問われしに明慧只無欲に成給へといはれしを泰時かさねて某獨り無欲に成候共群下何とて無欲に成候べきといはれけるに明慧下に目を付ずして御身先無欲に成て見給へといはれしを泰時深く信じて父義時死去の時所領財寶大かた諸弟に配分して其身は僅にたるばかりとられけるを二位の尼泰時に

自分のとられやう餘りすくなき事といはれしに某は家督をうけ候へば何の乏しき事もなく候只弟其のゆたかなるやうにとこそ思ひ候へといはれしかば二位の尼も感涙に及ばれしが其後年を逐て親族肅穆し鎌倉の武臣も感服しけり明慧浮屠なれども孔子の季康子にのたまひし苟子之不欲雖賞之不竊といふにかなへり泰時の明慧の一言を信用して鎌倉よく治まりしにて聖人の詞誣べからざる事をするべし明慧もたいうどにはあらざりけらし

泰時の無欲

儲泰時家督以後日毎に勤て公廳へ出てひねもす寢々として庶務を治められしに群長を待事恭謹にして争を分ち訟を聽るゝ事明恕なりし事東鑑を見てしるべし泰時或時訟をきかれしに雙方對決しけるが半に成て一方の相手忽理に服して只今迄己が申所をよしと思て候へばこそ争訟に及び候へども今日始て手前の非を覺悟いたして候此上はもはや一言申にも及ばずとて止め泰時感じて此争は汝が負也理非によりて決斷すべし但某今迄多くの訴を聞しか共即座に汝がごとく理に服するものを見ず是を賞せずして何をか賞

すべきとて別に恩賞を行はれしが後は争訟もやうやく稀に成て訴訟も閑になりしとぞ

泰時の公明にして正しき事此一事にてもしられたり其孫謀のよき後嗣に及て時頼時宗何れも遺訓を守り成法に依て善政を勤られしかば四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし北條氏皇朝の倍臣をもて天下の權を執て數代の安きを得たるは泰時の功といふべし世に時頼を泰時より賢明なるやうに稱じぬるは早く高位を脱離して浮屠に歸し微行を好み下情を察せられしを奇特の事とこそいふらめ併しそれは道理をしらぬ人のいふ事也其身宗廟社稷の重きを承て自佛寺に逃れ微行を樂とする事やあるべき君德を穢し治體を失へり人主の法とすべからず是にて見れば其治規模近小にして遠大に味かりけらし中々泰時に及ぶべき人にあらず

畠山重忠

其外鎌倉の人物を考るに上下ともにすべて取にたる人なかるべし幕下に數多の人材群集すといへども血氣勇悍の人迄にて何れも粗暴無識也其中に獨畠山重忠は勇力世にすぐれ古今の壯士といふばかりにても

なく志操潔白にして極めて正直の人也和田と並稱するは其倫に非ず梶原が讒にあひし時誓文をもて陳謝せよといひしを重忠一生僞をいねば今更誓文に及びきやうなしとてうけざりしかども頼朝も疑ひをのこさず梶原も怒を加へず是にてもとより忠信の上下に感孚する事をしるべし其上己が善に伐らず人の功を蔽はすおのづから寛厚長者の氣象なん有けり當時諸將の中に求るに少しき似たる人もなし不幸にして三浦と同じく前後北條が爲に殺さるこそいと口惜き事なれ其最期もさすがは他より一きは潔よく見へしぞかし爰に至て時政義時が悪天道にさかひ人望に背く其罪誅しても餘り有もし泰時なかりせば北條家の滅びん事高時が時を待まじ獨田樂入道をのみ罪すべからず

藤房遁世

建武中の人物にては縉紳家に藤原藤房鎔鈴家に楠正成もとより輿論の歸する所也其人品をいはゞ藤房は公卿輔弼の臣たり正成は將帥禦侮の臣たり其材の大小をいはゞ正成の材藤房の及ぶ所に非ず藤房龍馬の諫は直言極諫朝廷を聳動す誠に朝陽の鳳鳴といふべ

し然れども正成恢復の功とは並論じがたし其上藤房は一諫の後國を去り世を遁れしが正成は其身國難に死するのみにあらず忠義代々家に傳へ天下あらはる當時誰か正成に比する人あるべき楠家の遺書とて流布する書あれど後人の僞作にして其爲人委しき事はしれねど其しるき事は騷亂の始一城をもて天下を引受て始終少しも挫屈せざるにて其材量のたくましきを思ひはかるべし殊に仰慕すべきは天下一盛一衰の間名將勇士といへども時勢に附て反側を常とし朝夕をたもたざる中に獨楠家のみ子孫累葉かたく遺訓を守り一門闔族心を一にして力を戮せ各身をもて國に報ひ三代の間一人も二心ある事を聞ず古今比類なかるべし正成德澤深厚にしてながく人心を結ぶ事なからんにはいかでかくのごとくなるべき

正成韓信を評す

然るに世の尙論する人推尊で諸葛孔明に比するは兩人何れも兵略をつとめ興復を謀り父子國事に死するも同じければ也されど孔明は臥龍也道德を懷抱し功名を遺外し草廬にて一生を終らんとせしにはからざるに蜀の先主の三顧に遇て不得已して出て仕へしが

一朝關趙が上に立て君臣魚水の如く成りしされば其出處伊尹呂望に近しとなん古人も論ず正成はもと功名料中の人也後醍醐帝笠置臨幸の時近國の名士を徵れし間正成も召に應じて參じけり是其出處孔明とは大きに異なる上恢復の後も尊氏義貞の下に列して專に任用せらるゝ事をさかず孔明をもて擬せば恐らくは其倫にあらじ其兵を用るも孔明は正大にして奇計を用ず節制の兵といふべし正成が敵を料り兵を用るは韓信に似たり韓信楚に寄食する時より既に項王の制し易をしり正成河内に家居する時より既に鎌倉の弱易をしるより韓信高祖を見て盛に項王の勇を稱して其勇は恐るゝにたらざる事をいひ正成後醍醐帝に謁して盛に鎌倉の強を稱して其強きは特にたらざる事を云其後兩人共に多くは籌策を用て勝を取し事掌握にあるが如し韓信は囊沙背水敵を破り正成は鉤屏木偶敵を鑿にするを見べし兩人の兵を用ふること一轍に出ざるかは何れも摧堅拉銳といへど韓信が材は敏速に長じてよく攻いまだ其守るを聞ず正成が材は持重にたへてよく守るいまだ其攻を見ず韓信に城を守らしめばよく正成が如くならんか正成に敵を攻

しめばよく韓信が如くならんか古人も攻守勢殊也といへばいかゝあるべき然れど韓信が兵は利欲の私にいでゝ一身の爲にし正成が兵は忠義の公にいでゝ國家の爲にす其底績の心おのづから同じからず昔河内の人の語りしは金剛山のほとりに南北の明神と號する祠有其中座を正成とす左右は孫子吳子也正成常に我天下に武功を立る事は孫吳の影なりといひしにより是を附祭するとぞ是にて今に正成が遺愛の民にある事をしるべし但正成かくのごとく絶倫の材をもて聖賢の道を學びずして孫吳が術のみ崇びしは遺恨と云べし湊川にて自殺するとして弟正季と最期の一念を語る事甚陋し

西澤
文庫 皇都午睡三編上の巻

目次

- 一 冬籠
- 一 名聞は罪深し
- 一 大野氏の女
- 一 源語の發明
- 一 神道の受
- 一 欲は身の毒
- 一 作魔地を失ふ
- 一 火替の神事
- 一 武運の稽古
- 一 羊肝牛干
- 一 氏神正一位
- 一 淺葱萌葱
- 一 辨慶太鼓持
- 一 悴餓鬼
- 一 看板の謎

- 一 鐘撞の階子
- 一 賊の母歌を詠む
- 一 嵯峨の山住
- 一 嵯峨の奥
- 一 橋の下
- 一 鼠大根
- 一 下手のなき世
- 一 天下の俳諧
- 一 宇治丸
- 一 氣違法齋
- 一 七子の彫物
- 一 ひやかし逃助
- 一 角兵衛獅子
- 一 戎紙神在餅
- 一 代神樂

- 一 月待日待代待
- 一 瓦葺
- 一 愛子の庄司
- 一 雷除桑原
- 一 鐵火味噌
- 一 蓮葉女
- 一 桃鬼灯
- 一 箱入娘
- 一 鞆韃蛄蛤返し
- 一 惣嫁の出火
- 一 友衛貝盡
- 一 秀吉門破
- 一 鎗中村
- 一 時平公の墳
- 一 位牌の和歌
- 一 穢多の訴
- 一 弓に蜻蛉を付る
- 一 惠心僧都
- 一 元政魚料理
- 一 宗祇の發句
- 一 盃の銘
- 一 七黨八平氏八庄司
- 一 我國のかな附
- 一 めりやす莫大小
- 一 自墮落者
- 一 鶉の目鷹の目
- 一 蝸牛
- 一 蚊の喰ぬ呪ひ
- 一 道具と牛
- 一 小倉色紙
- 一 有樂翁の茶
- 一 泣涕微笑
- 一 石川丈山
- 一 雪花圖說
- 一 鯉の差身
- 一 狐草履を送る
- 一 九郎佛
- 一 道明法師
- 一 火の見矢倉
- 一 幽靈の濡文

一 疲病神馬に乗

一 村井軍兵衛

一 日本左衛門

一 淀屋辰五郎

一 國造の烏帽子

一 鷹の尾筒

西澤 皇都午睡三編上の巻

西澤綺語堂李叟著

冬 籠

嘉永庚戌の初秋皇都午睡と題して三百有餘條の話を書しが「ひや／＼と壁を踏へて晝寝かなと朱樹士朗叟が残暑をきかせし句に感じ第二編目二百二拾五條を著一皆人の晝寝の種と桃青翁が詠たる月の秋も過けり古き狂歌に「朝寝してまた晝寝して宵寝して其間／＼は居睡りぞするとあれば寢通しにするが如し傾城の晝寝ぬ程に思ひつめとも折句にあれば迎もの晝寝つひでに宰予が晝寝に倣ひ又第三編目二百二十五條を著はしまた見たらずば四編五編と輯をつぎて綺語堂の冬籠爐邊に机を引よせてまた寢の夢を結ばんと思ふ若うなさるゝ事あらば起したまへ

鐘撞の階子

立春の和歌には多く霞の立そむるを云或は氷の解る

を詠ものなるべし尤年内立春の題なれども年の内に春は來にけりの詠は其頃の歌仙達もいまだ詠出ぬ新らしみならずや我俳諧にも「鐘撞の今年へ下りる階子哉句者の名不覺はよく詠得たりといふべし文化中江戸四方の狂歌連より出たる五十人一首に此鐘撞の句を狂歌に詠て有るを見しが狂歌にてはさして働なし發句十七言によくも心を詠こみたるを感ずる也江戸八朶園蓼松が出せし俳諧畸人傳に此句者の表德を見しが忘れたり是に次で豐後の葵亭の句に「名月の翌は少き鴉かな予此句を感じ態／＼文通して短策一葉乞求め今に珍藏せり夜終清光に啼あかし茜さす東雲に至れど朝の如く啼群れぬ心を翌はすくなきと僅一句に述たる働き鐘撞明六つを鳴らして階子を下りれば一陽に來復せし心を述此二句とも誠に不易流行を兼古今の名句とも賞すべしかゝる名句生涯に遺したきもの也

名聞は罪深し

或學匠の話に名聞を好むこと甚しき僧は女犯肉食よりも遙に罪深し女犯肉食は罪其身に止る名聞の罪は他に及ぶ昔ある相者人に語りて我息天死相あり某日

月必死すべしといへり然るに其朝に及びて常に變る事なければ彼話を聞たる者相の眞なきを嘲りしに一夜とみに死したり爰に於て又實に相の疑ふべからざるを驚きしが能たづぬれば己が説の違へるを恥て竊に其子を殺害したると也吾命にもかへて悲しと思ふべき子を殺しても其術の名聞を思へるを説給へる佛の教誡なりとかや

賊の母歌を詠む

或者貧しくて母親を養ひがたきにつき盜をして捉へられし時其母悲しびてよめる「てらしませ神と君との恵にて親ゆへ闇に迷ふ我子を此歌官に聞えて死罪を免かれ追放されしとかや近き年頃のことゝかたる人ありき

大野氏の女

赤穂の難に不義にして逃走りし大野某が女東備梶浦某に嫁し居けるが此出奔の後何となく住居の裏の空地に隠居を營ける元來祿の分限よりも貧しかりけるにいまだ齡も老に及ばず無益の事なりと其妻諫けれども思ふよし有とて不肯扱良雄を始四十餘士復讐の事遂て日を経ず此わたりへも其人數の名を録して賣

ありきし中に大野氏は見へず是迄はもし一旦謀とありて奔り此復讐を催しぬるにや共疑ひ思へりしに似たる名も見へねば其女も心地あしくかき籠て打臥けるに家主あらためていふべきことありと下婢をもて云越しければあやしみながら頭をかゝげなどして出來るを常に似ず席を改めて是迄貧しき世をとかく扱ひ給ひし心盡しいはん方なしさるに父國老の長に有ながら國難に臨て逃走りつひに復讐の人數にも見へず不義甚しきこといふべからず其方には罪なければどもかゝる人の女に伴なはん事は士の道にあらず恥べしさればけふより縁をきるべししかはあれど返すべき家なければ兼てかゝる事もやと造り置し裏の亭にて生涯を送らるべし三人の子あれば彼等が供養せんは其道也吾は再び對面せじと先より召使し婢を添てかしこに籠しめ白老婆一人によろづまかなわせてこゝと女を近づけず人勸めて妻をも使ひたまへといへどもきかずもとの妻其身に罪あるにあらず義によりて遠ざけし也されば彼に妬ませては自も心よからずとて一生鰥にて果されしたまゝ庭際を緩歩せらるゝを彼妻窺ひて言はかはさずとも見かはしとんと障

子など聞けばやがて走りいりぬ妻も後は慎みて避ける
とぞ此節操安きに似てかたきこと成べし

嵯峨の山住

三條西内大臣實澄公は逍遙稱名二公の名譽を繼給ひ、
倭歌の名世に高く文才の聞へ並びなかりし源氏物語
は代々の貴翫にして天下の至寶なりと雲上竹園に於
て枕事とし給はざるはなし本文幽玄にして意味深長
なれば列世の先達各註釋をなし隠れたるを顯わし微
なるを明にし給へり三條西家も代々是に御心を寄ら
れ和漢の事跡文書を涉獵まし／＼實澄公の御説は孟
津抄にするされ三條公は細流抄を述給ふ當内府君も
數年御玩味のうへ父祖御二代の鈔の外に猶發明を得
給ひて其名雲井をとゝろかしぬ晩年に官を辭し入道
まし／＼嵯峨の寂寞を甘んじ給ひ小倉山大井川の邊
へたび／＼行通ひ天龍臨川の蘭若に遊び野宮桂院の
昔を尋ね給ひぬ一日中院町をよぎり爲家卿の古墳時
雨亭の舊跡など一見まし／＼一の鳥居より南におれ
て落合といふあたりへ分入らんとし給ひしが山路峻
して容易登りがたかりければ折ふし傍の山間にかた
ちばかりむすびたる草の庵のあるに立寄やすらひ給

へばあるじ七十許の男にてさながら法師とも見へず
あやしき鶉衣着て居たりしが公の入來り給ふを見て
も敢て驚くけしきもなく脚折たる几に何やらんやれ
たるふみのせて見て居たるを更はいかなる文よみ侍
ると尋ね給ふに光源氏物語なりと答へければかゝる
山の奥に通住てかの物語見る心のうもの尊さよなみ
／＼のしばふる人にはあらじと思して縁に尻うちか
けさせ給ひさるにてもやさしき和主の心かなおのれ
など若かりしより彼物語を學びて牛に汗する文ども
を參へ考へ侍るにつけていと心深き事侍り更に見侍
るは本文計にてさこそ趣を得がたくこそと宣へばさ
ればとよ年月をかさねて見侍れども喃喃として讀下
す事だにはかどり侍らす此頃都に三條西内府君など
は新たに抄解を加へて雲の上にも講じ給ふよしその
人々の從者に成とも逢まみへて尋たき事のみ多けれ
ど塞る病有て麓にだにも下り侍らねば都の傳は思ひ
切ぬる唯おのれが心に反覆玩味して人一たび是をよ
くすおのれ是を百たびせばなどかその意に通せざら
んと思ふのみと答へければ公は我才名の山林までに
及びしを悦び且翁が志の深きを感じ我こそは三條西

實澄が致仕せるなれ斯相逢も宿世の縁にこそと仰ありければ彼翁大に驚き急ぎ座をニギリ蹴下り遙に跪て今までの無禮死罪を免がれずと平臥するを從者に仰せて助け上させ給ひ我今官を辭し桑門の身となり山林の閑を味ふいさゝかも敬する事なかれさるにても汝が貧ふして源語を樂しむ志を感ず我おもふ人だにあらば東なる夷の里もむつまじきと聞ものをはかしくしき本もなくば追て貸てんなど仰あれば涙を流して恩を謝し倍もかゝる御恵に逢奉るも千歳の一遇老の命は雨の晴まも待がたし近頃恐れながら日頃うたがひ思ふ事一二問奉りたきと申せば夫こそ尤の事なれ行先いそぐべき處もなくおなじ山路のたのしみなれば此所にて休息ながら物語もせんと簀子の上にのぼり給へば翁は圍爐裏にむかひ清瀧の流れを釜に入小倉の松を折くべて梅山の茶を煎じて參らすれば湘水を汲て楚竹を焚にもまされりと公一入に感じ思しめし都の奢侈に惑ひてかゝる深山の奥の庵寛の水のときよりも尋ざりぬぞ恨なると歎息數聲に及ばせ給ふ

源語の發明

かくて翁が申やうはかの物語の發端にいづれの御時

とかゝれたるはいかなる故にや公答曰これは伊勢集にいづれの御時にかありけん大御息所おわしますと書出せる筆法にて延喜の御時と書べきをおほめかく書出たるものなり翁又問紅葉賀の卷におそろしくもかたじけなくもうれしくもあわれにもと書るはいかなる事ぞ公答曰是等は和文にめづらしき筆法にて式部が妙手のなす所家父既に賞美せり悲兮憫兮赫兮噴兮といへる毛詩の語勢にも似たると宣ふ又問式部石山寺に通夜して中秋の夜水月を觀じて物語の趣向うかみしをわすれぬ内にと佛前の般若經を本尊に申請て須磨明石の卷を書けるよし此事いかゞ公答云河海抄の序に既にかく見へて古くいひつたへたる事なれども古書にいまだ見當らず翁快々として悦びざる色を顯し山住のあさましさは都の人になすかざる事多しとひとりごちければ公の宣ふ我聊汝をすかせる事汝何をもて不滿の色をあらわすと問給へば翁が云君は實澄公にてはおわせじ翁が詞に乗じ某と名乗て戯れ給へるならんもし左なくんば一樹の蔭の情をたれて今少こまやかなる事をもかたりきかせ給へ今宣ふ所は河海花鳥にも古く記して我等も稚き時人の許

にて見し事ありて覺へ侍る高家三代の考勘のうちさ
ぞかし珍敷發明やおわすらんといへば公大に當惑ま
し／＼父祖三代の抄物數條の説少なきにあらざれど
も今問所の三箇條においては此外の發明なし汝また
所存ありやとのたまへば翁が云それにたがふ事おわ
さずば翁が頑なるかうがへを少しく述侍るべしいづ
れの御時にと書るは長恨歌の發句に唐の玄宗の事を
漢皇重色と書るより出る物ならん元來桐壺は長恨歌
を俤にたてゝ書る卷なれば桐壺帝を玄宗に比し更衣
を楊貴妃に准せる延喜とも桐壺の御門ともかゝでい
づれの御時と書たる此意なくて叶まじ紅葉賀の卷に
おそろしくもかたじけなくもなど書る悉今個分の筆
法とばかりのたまひては筆法はすめども文意はあき
らかならず是は源氏の御心のうちにみづからの御身
のうへのおそろしく御門の御事をかたじけなく冷泉
院の生れ給へるをうれしく藤壺の御心を思しやれば
あはれなるをかく色々に思ひ給ふもの字四つにてあ
るべし賢慮いかゞならんといふに公大に閉口まし
／＼先賢いまだ發せざる所誠に珍説といふべし般若
の裏へ書る事に附ても又私説ありやと問ひ給へば然

り此事古く云傳へたりといへども一通り肯ひがたし
式部草紙書べき立願に參籠しながら料紙の用意なか
りしは疵忽といふべし思ふに釋迦一代の藏經華嚴の
大乘は聾聵のごとくにて聽衆の耳に入らず阿含方等
に至りて小乗乳酢の經を説給ひ衆生の機やゝゝの
ひて小乗を誡とおもひ有相の法に着せる時般若露汰
の經を説かれて色即是空なりと今まで着せし有相有
色は皆空なりと宣へりされば今まで有しを空と説る
が般若經なるに源氏物語は寓言にして夢の浮橋のた
とへのごとくもとなき所にかかわたして事を説たれ
ば空即是色の法味にて般若のうらをかへして書初し
なるべしや是又賢慮いかゞと問に公いよ／＼閉口し
給ひしが渠がごとき賤夫に詰られて我のみが父祖の
名を汚さん事口惜と思しめしければ汝が考へ得る所
力を用ゆるに似たり去ながらさやうの鑿説は緝紳家
には用ひぬ事なり只穩なる一わたりに心得ぬるぞよ
きとのたまへば翁微笑て云公今更過をかざり給ふな
堂上家に鑿説を嫌ひ給ふと宣へどもそれは中古亂世
に道衰へ上代の事の明らかならざるより云出せる事
にして久堅のあめあらがねの土とのみつゝくものと

心得よと定家卿已來教來るもたゞ歌などによむ時はそれを瓢形なりと争はんもよしなけれど古書を註釋せんには少しも義理をよく辨じ作者の意をかくさぬやうにせん事專一なるべし兼良公の秘訣に子のこの餅の三つが一に左傳の絳縣の答を引かれたる何とて是を鑿説とは捨てたまわざる公三代の抄物もなき以前だに源氏はよまれし上はことごとく無用の鑿説とやいふべき唯村老野翁に閉口をおしみて大道をあやまり給ふ事なかれ匹夫をも志を奪はざるは聖人の道なり此物語のうへは姑く捨て天下の政だに諫の鼓を置批難の木を立て下民の詞を取用ひ給へるところ承りし今天下武家に歸して只文學にのみ慕り給ふ身なればこそかく下情を蔽ひ給ふとも其害少からん若大臣天下の刑罰を行ひ給ひてかく威勢につのり給わば君を出して桀紂たらしめ給わんとはかかる所なくのべければ公は面に汗してすべり出給へりとぞ

嵯峨の奥

入道前内府實澄公春服既成の頃はひ花鳥の色音もゆかしく思ひて心置給わぬ近習の臣三人四人具せられ西の郊外に出給ひ大澤廣澤の池を臨み名こそ瀧の

舊蹟も尋ねまほしくいづれの緒よりとよみしも松ものいはいとひこましなど戯れつゝそこなく分行給ふに過し頃圖らず立より源語の間答に及び給ひし隱者が事おぼし出てさるにても一見識の面白く殊に世を語はぬ氣象の忘れがたければけふもいざ立寄て問ばやと風龜の尾の花に背けてかの山道を攀給ふに頓て其庵に至り給ひぬ從者をも走らせず柴の扉押明て入給へば主は例の脚折たる机によりてしばし午睡し侍りしを高らかに咳かせ給ふを驚て見上たるに忘るべくもあらぬ溫良の御顔ばせなれば急ぎ机を押やりふつゝかなる足にてまろび出ぬ公莞爾と笑わせ給ひ「山里にひとり詠むる心こそ花の有代もしづかならん」と宣へば日頃音せぬ人のとふらんとよめるも花なさけなるを先々こなたへと入奉り所に付たる木の實など參らせて何くれと語り給ひ公元來賤を輕んぜず翁も尊きを忘れて心の底を包み得ずはてはかの物語の事に及びて翁が云揚名の介ねの子の餅とのゐ物の袋を三箇の秘事とし侍る事何れの世よりの事にや甚不審全く式部が胸中に設たる事には非ず案ずるに後人解し難き事を考得るに高ぶり多く人のしら

ん事を惜みて我一人の才力に倣らん爲なるべし古今傳授など云事も貫之躬恒が腹心にはあらず古の事を後世に傳へんには書に増る事有べからず夫に書外に傳有と云事肯ひがたし且明白の大道に隠し包むべき事有べきともおもへず聖人の道五帝三王より周公孔子に及び今此國に傳えて一毫の秘説なし佛家に顯密と分れて眞言秘密の法あり是恐らくは竺土の妖術にして實に世を惑はし民の誣の法なるべし吾神道に神秘と稱じて同じく唯授一人門外不出と珍重する事又怪しきの甚しきもの也神道は日本の大道也上一人より下兆民まで知らん事こそ有まほしけれ押て支那天竺に及ずとも惜む事有んや案するに神道と稱するもの其權輿慥ならず先我國を神國と云事日本紀より文德實錄まで五部の書に見へず漸三代實錄に至て初てしかいへりさればそれより先に神道と云る事些に一ニヶ所に見へたれども神國の道と云事にはあらずして只大道の神にして測べからざるの稱也然れば今の神道と云事は全く凡常の建立なれば老佛の異端よりも其見解狭少にして巫覡の小道に比すべきものならんさればこそ儒佛莊老の道は遠く吾國にわたりて信

するものあれども我神道は他の國はさておき日域にさへ絶々に成行事全く楊墨が屬なるべし然れども其狭少にして海外まで信すべからざる事をば兼て作者も心得たるにや面授口決と辭を殘しくまゝの覺束なき所をば神秘々傳と隱して奥深く思わするの謀なるべし是明白の論にして異論有べからずといへども吾國に生るゝもの其國を譏るに似たれば心あるものも皆覆て顯さぬ也夫をよき事として神學者流の強慾者是に謝物の數を極め何の傳は白銀何枚何の傳は黃金幾回とよき價を求めて傳へぬる事うらめやうらめや恨めしき道の末と成行も初め秘傳と定めし故なるべし夫に倣ふにや何事にも秘傳と云事有を思ふに軍旅の法及刀鎗の術などは互に勝負存亡を争ふものなれば人にしらせすこなたのみ知る事を尊ぶも有べし是既に六韜の六經に劣り王道の霸道に増れる所也中に就藥に祕法ある事更に信じ難し醫は仁術にして人の危難を救ふ藥なれば一人も多く知らしめて此藥にて天下此病をして人を損せしめざらん事こそ有まほしきを家法家傳と秘するは鬻ぐものを少くして我一家に價を納ん事を思ふ恪情にて何ぞ仁者の心を論ず

べき是又淺猿き事ならずや併公の尊意を伺ひ教誨を仰ぐと聞えしかば

神道の受

公點頭ましゝ翁が申處的論と云べし然れども經學にのみ泥て國學に疎也故に巫覡の末術を見て神學の本道を窺ふに似たり且醫家の秘藥眞言の密法の事我も疑ひなきに非して曾てさる老宿に問し事有其人の云秘藥と云は人の肝を入膽を入及び胞衣等を入る藥は猥に傳る時は己がために人を害するに至るべし人中黃人中白其餘穢惡の物を加ふる藥は病人是をしればいなむ心有かゝる配劑を秘藥と云て深く其劑を隠す今參蒼黃甘のみの藥を秘するは法に悋慚なるにして名利を貪るなり喪命墮胎藥をして惡惡の人に傳ふれば世間に大害有りこれらを秘法と云て又隱す眞言家には有驗の法を修す法に依て爰に利有てかしこに害の有り増てや朝敵佛敵などをば調伏の法有此法をもて惡惡の人に傳る時は己に害ある人を調伏し己に利ある事をば他の害を厭わす行ふに至らん然らば師たるもの能門人の篤實を照して授くべき事なれば是全く秘するをもて道理とすべし刀鎗の術なども奥

意は必勝の位なれば是又龐濶の人物に傳へば世に害有べし軍旅の法は尤翁が申ごとくならん扱神秘と云事は吾國の大道也夫をいかにと云に唐土は德を以德に讓と極て一天下の人皆帝王と成の國也日本は神代人皇血肉を傳て君は萬世の君臣は末代の臣也然れば天子の事は天子限ギリの神秘にして他人の窺ふべき事に非ず攝關の事は五家の神秘三公の事は清花槐家限ギリの神秘にして是又他の窺ふべきに非ず征夷將軍は清和源氏家傳の神秘にして他姓の窺ふべき事に非りしを鎌倉將軍衰廢の頃北條家執權として補任を行ひしよりいつとなく人心をして權勢いたれば誰人も天下を掌握する事と覺へ夫より而下列國の群雄競ひ起て天下を爭に及べりと雖織田豐臣の如きも終に青幕を捲けざるにてしるべしかくのごとくに掟たる國風なれば其社は其社の神秘此宮は此宮の神秘として他へ洩さず他を窺はぬを道とし夫に倣て百工百職も己々が家風を守るをもて神秘とする事恒の産ありて恒の心あるの教にして上下咸く其業を守りて爭わす天下萬々世安穩泰平の道ならずや然ども翁だに此趣は未知らざれば世俗知る人少く雲上月卿の家には各其職掌

をこそ秘傳すべきに誤を傳えて是は歌道の家これは
鞠道の家と技藝の上を珍重する事衰世の有様にて識
者の嘲を恥ざる事にこそと宣へば翁大に感服し何か
包まん今迄は堯舜の道のみ尊くて吾國の渠に及ばざ
らん事の恨めしかりき今圖ざるに山棲へ珠履を忝ふ
し尊貌を拜するのみならず始て君子國の正道を聞事
を得て所謂天の八重雲を科戸の風の吹拂ひて蒼天を
仰ぐ心地し侍ると聞ゆれば公も歎喜の御顔ばせにぞ
見へ給ふ爰に所がら赤鳥早く西山に没しぬれば又か
さねてを契りをきてぞ出給ひける

橋の下

北野隨念寺に寓居せる空心と云尼師疾病なる時生姜
を需められしに若き尼生姜の皮をもさらずと與へたれ
ば堯爾として橋の下くと獨言して噛れたり是は古
徳の垂戒に他の病を介抱する人は菩薩に供養する思
ひして懇ろに看待すべし病人は橋下に臥る乞丐の病
る思ひになりて意に叶はぬ事も忿恨を發すべからず
とあるを此尼師思はれたる也とぞありがたき志にこ
そ侍り

欲は身の毒

鳥獸を殺すのあしきはしりて人の意を惱ましめある
ひは其業を妨げ奪ふやうの術をなすことのあしきを
しらぬ人もあり世に念佛者にて欲深しなどいふ人も
有學者にも私の逞しき人も有道をもて私し人をあざ
むくは天刑をいかん

鼠大根

江南の橋江北にうつせば枳となるは土地を替れば尤
さるべきことにして又假染にも他の氣にふるゝによ
りて氣味を變ずることあり此頃近江伊吹山の蘿蔔を
得たり象圓く根の末細き尾のごとくなれば鼠大根と
俗稱す此物屎尿の力を借す自然生にして辛辣比類な
く調味を好む人は大に賞翫す然るに船をもて他方に
おくれれば氣味大に減ず陸路にては元のまゝ也と云り
是水氣に觸る故なるべし

作魔地を失ふ

良能云人のよき句したらむに驚き我も負まじと思ふ
心是即作魔也その日は其人に手柄をさせて遊ぶべし
未來記にいへるかやうの時我もくとあらそふ心い
できたらむ己が俳諧の地まで失ふべしとかく承りな
がら餘人はしらす大江丸此慢心度々出て修行の地を

うしなひし事數度也後悔跡にかへらずよつてざんげして書置く也とあり

下手のなき世

信夫云何の道にても四十年計前かどに名人上手功者下手とわかり下手は下手なりに樂しみ年をつみて功者となり上手といはれ天然と名人の場へも至りし事也今は此下手に成ている者なくなりてむりおしに上手といふものになるゆへ名人といふものも出來ぬ様になりしと語られしも早廿餘年の昔がたり也此下手になりてゐたる人こそ風流最上の人ならむに左様の人のなき世こそ恨なれ

火替の神事

夏の季寄に住吉の御祓火替と有て此火がへといふ事いまだ句にもむすばずや見あたらず是はとし毎の六月晦日住吉の神輿を堺の津大小路の南なる宿院一名越名へ移し奉り夜に入てまた御本所へ還御なし奉る和泉の氏子堺の町人手毎に松明ともしつれて七堂の濱といふ所を廻り大和橋の北なる御輿の居石に休め奉る津の國の氏子住よしの郷民各挑灯をかゝげ迎奉り御こしを受取昇上奉れば和泉の方の松明一度に打消

して闇を躍りかへるなり此祭を遙拜して紀の國和泉路淡路兵庫の湊西の宮尼ヶ崎の浦々に漁どる者其の限りは磯邊に出て提灯を照らし篝火を焚つゝけ祭まいらすに和泉の方の火の光りの消るを期として各還御を拜し己々が濱邊の光りども消して家に入とかやされば此火の光りをせんぐりに目あてとし程遠き浦々島々迄もかくの如く祭るとか然れば境遠き道はかりがたき廣大なる御はらひ也是を住吉火がへの神事と申奉る也和泉の人どもの家々にかへる時ははや夜半なれば秋のうつる折から誠に夏越しの正しき事はに増るはあらじとぞ思われける「火を替るさかひの町や秋の風舊國

天下の俳諧

天和貞享には談林元祿の頃は正風寶永には其角が洒落正徳に不角が化調享保に沾州が比喩長水の五色墨乙由が伊勢風元文に淡々が浪華ぶり湖十が浮世などゝ流行すれど一人の俳諧にあらずして天下の俳諧なりと雪中庵蓼太は申されしと也

武運の稽古

駿河臺の鳩巢先醒の庵へ或日若侍衆武藝の場より歸

るさに來て例の文談に及べり翁云よう武藝は各の家業といふべければ常に稽古有べき事也但武藝と武運と何れが重き事と思ひ給へる翁は武藝より武運は重き事と思ひ侍る其故はいかに武藝に達したる人也とも武運盡なば何の詮かあらん長湫の合戦に森武藏守は打物取て鬼武藏といはれけれどもかけ出るとひとしく銃丸にあたりて即時に果ぬれば武藝も武勇も用ゆべきやうなく侍る然れば武運ありての武藝ならずや各武藝の稽古あらば先武運の稽古し給へかしさて武藝の稽古はそれ／＼の師に問給はゞ委しかるべし武運の稽古におゐては藝術の師のしる事にては侍らずそれは翁などこそと語りのこしけるに翁の仰事には候へども武運の稽古と申事こそうけられ候わねもし稽古にて及ぶ事ならば誰か稽古せざるべきといへば翁頭打振ていや武運に稽古こそ侍れさらば承らむといへば翁各思案して見給へ運は何國より出る事にて侍る天より出るにあらずやされば世話にも運は天にありと申候とかく運をば天に祈るより外はなかるべし天の心に叶わんとならば天の好める事は何事ぞ惡める事は何事ぞと尋ぬべし翁つら／＼天の好惡を

案じ見るに天は仁を好て甚不仁を惡む信を好て甚不信を惡む其いはれを云に天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に古より今に至るまで年々人物を生じ／＼てやむる事なし秋冬肅殺の氣行わるゝといへども果して肅殺するには非ず生氣を固うして根へ歸せしめ春を待えて又發生せんとなり易に生々之謂易といひ天地之大德星といふは此事也天に有て物を生ずるは人に在ては人を愛するなり各是をもて見給はゞ天の仁を好て不仁をにくむといふ事疑ひなかるべし又信を好む事をいはゞ日月星辰の行度萬古を経ても一日の如し日月の食を見給へ遙に大空の外なる事を爰もとにて推歩するに分秒迄もたがはず是に(過たる力)體なる事あるべきや天下の至信といふべし然れば人は外の事はしばらくさしおく只仁にして信にだにあらばおのづから天心に叶ふべし天心叶わねどか擁護なかるべきさりとてしばらく仁を行なひ假に信を守りて其驗あるべきとにはあらず是は平生にある事なり常に仁を好て人を損なわず常に仁を篤うして人を欺かずかくしつゝ歳月を積なば其誠天にこたへてはからざるに自然の冥助もありなんされば戰場にて

もおのづから禍機に觸す矢石にもあたらざるべし翁が武運の稽古といふは是を申にてこそ侍れ老人の僻言と聞給ふべからずとあるに座中よりひとり翁にいひけるは武運の稽古と申事あたらしき事承りて感服し侍る今より此稽古忘れおこたるまじきにて候但世には仁にして信ある人に禍あるも有不仁不信なる人に福あるも有顔回は大賢なれ其貧窮にして天し盜跖は大盜なれども富厚にして壽し翁のいへる武運の稽古も爰に至て少し疑はしうこそ候へ是はいかゞ心得侍べきにか候翁それ善をすれば福あり惡をすれば禍あるは是正理の前にて必定の事也それに幸あり不幸あるは時の仕合にて不定なる事也聖人は只正理を説給ふにて侍る不定の事をばいかで説給ふべき譬へば身に病なく長命ならんと思はゞ常に酒色を禁め養生するに有主君の氣にあひ立身せんとおもはゞ職事を懈すしてよく奉公するに有然るに養生よくても夭死する人有養生あしくても長命なる人有さればとて養生しても益なし養生せずしても害なしとはいふべきやよく奉公しても不幸にて立身せざる人有奉公よくせずしても幸にて立身する人有さればとて能奉公し

ても益なし奉公よくせずしても害なしとはいふべからず若養生しても益なしといひて日夜酒色を恣にせばやがて病死に至るべし奉公しても益なしといひて度々職事に懈らばやがて黜罰せらるべし然れば養生は長命を得るの道奉公は立身を得るの道たるは是不易の理といふべし只歎かわしきは世俗の有様也專に身を利して人をそねみ偏に智を恃て詐り飾る自らは世を渡るよき計とこそ思ふらめど終には天に見捨られぬべし人として天に見捨られなごいかでよき事のあるべき翁若き時より世に時めく士大夫の邸宅を過て見るに三つ葉四葉に作り並べたるに歳々に諸寺諸山より捧げすゝめける武運長久の牌を門に釘せぬはなし然るに其家或は刑戮せられ或は子孫斷絶して武運長久の牌は其儘門に有ながら主うせ家滅びて跡方もなく成行もあまた有是皆武運の稽古なき故にこそとおしはからるれ日頃稽古なくして祈禱厭勝の力にて武運を守らむと思ふ事愚なる限り也とあるに若士の人々も感服して歸りけるとぞ

宇治丸

宇治丸と云は鱈鮮にて價金百疋の由人々云傳へたり

中は左様の價にては是なき事とぞ近年大坂中の島の
何某と云富貴なる人出入の翫間を召連れ京都へ登り
數日逗留の内或日宇治見物に行しにかの翫間が旦那
宇治丸立とはいかゝと云にいかさま來たこそ幸ひ
よきに計らへと有に心得候とて菊屋とやらん料理屋
へ至り尋ければ亭主出宇治丸御所望に候やと云にい
かにも所望也と云に然らば奥へお通り下さるべしと
座敷へ伴ひ扱家内の様子甚混雜の體にてやがて亭主
上下を着し座敷へ出先以て大慶の段有難き旨一禮を
のべそれより盃出取肴鉢もの類あれは出せども鱸は
かつてあらざればいかゝと思ひながらやゝ久しく待
しに漸細き鱸二本焼て出したりされどもつゝいて持
出る體もなげねば今少し澤山に出し候へといへば畏
り候とて又餘程ひま入りて三本焼て出しぬ是にて茶
漬など喰ひ酒も納めて拂の書付取らんといへば亭主
御心持次第下さるべしと申に夫にては如何なれば是
非直段聞せ候へと再三尋しかど兎角御心持次第と申
ゆへかの翫間亭主を片隅へ呼び内分にて尋ねけるに
是迄斯様な格もあらんに心持といふは大體いか程
なりやと亭主云是迄の格を申さば金廿兩又卅兩申受

候至つて過分なる心持に申受候は五拾兩も御座候と
いふに驚き夫は何故左様に高直にやと問ふにいかに
も高直なる譯申さんと裏の小屋へ連行見せけるに大
半切桶に鱸數杯有亭主ゆびざして云斯の如く宇治中
の鱸を丸で買取申候去により宇治丸と申傳へ候此内
にて纔三五本目利仕料理致し差上申候殘りの鱸は此
宇治川へ殘らず放生致し候也右の様子に候へば施主
の御方所望被成候事甚稀候得ば私祖父の代に兩度親
の代に一度御座候まゝにて私の代にては今日が初に
候元より此儀に付口錢世話錢申受候儀は曾て是なく
候只私の身に取つて外聞に候へばいか程にても御心
持次第つかわさるべしとぞ申にぞ據なく亭主を京都
の宿へ連歸り數十金の金子を渡ししかへされしと也

羊肝牛干

羊羹は羊の羹と書ども羊肝にて求肥は干牛ヒギウの容に似
たるゆへ轉語したる也故に求肥と書松風と云菓子
表に罌粟をふり裏は模様なき故浦淋しと云心にて松
風と名付し由春日野と付しは予が綺語文章にもしる
し置しが物の名を付るはこゝろすべきにこそ有べし

氣違法齋

氣違ひよほうさいよと云詞は法界を言誤れるかと思ふにさにあらで元和年間常陸國に法齋と云る貴き僧有て太鼓鉦の拍子を揃へ躍念佛を催ふして勸進を乞ふ是を法齋念佛とて古き畫にも見へたり寛永のころ狂人の法師の躍念佛をまねて獨り町々小路を走る幼童集りて氣ちがひよほうさいよと言はやせりとぞ

氏神正一位

世俗に我生土神ウツナナを我氏神と心得たるは誤なるべし氏神とは源氏に八幡平家に平野藤氏に春日などを云産すな神とは別なり神社に位階を授るは尊卑をわかつ爲にはあらず正五位には田十二町正四位には田廿四町を奉らるゝ也正一位には田八十町の神領を寄附する也今稻荷といへば一步の田もなく正一位と唱ふるこそいとおかしからずや

七子の彫物

絹に七子織有金具にも七子とて細點に彫しを云其紋の魚胎に似たるをもて名付しなるべし魚を古語に魚ナといへば魚子ナノコと云

淺葱萌葱

紫の朱を奪ふとは今の江戸紫を云にあらず昔の紫は

今の蘇枋に似たるゆへ云淺黄は黄色の淺きにあらず葱の色を葱ギと云て根葱ネギ、刈葱カリギ、分葱ワタギ又葱帽子ギボウシとも書り然らば淺葱萌葱なる事明らけし

ひやかし逃助

吉原へ見物のみに行を素見と云俗にひやかしと云昔山谷に漉返しナグハシの紙を製する者紙の種を水に漬置その冷くる迄に行く廓の賑ひを見物しけるより出たる詞なるよし京攝に無錢にて戯場を見物するを青田アヲタと云油虫とは別に意あるにあらず逃助テウスケとは逃はナグのがれ助はたすかると訓札錢場錢共に逃れ助と云心なるべし

辨慶太鼓持

遊所戯場等へ無錢にて供するを江戸にてランブ、ヲブサルなど云是負れ行の心にて人に負るをおんぶと云御側さらすの機嫌取を辨慶と云は旦那を判官と云より號牽頭幫間を太鼓持と云は紀州の和歌祭に雜賀囃子に重き鉦太鼓を二人宛して持行いかなる力量あつても兩方はもてず鉦をもつ者は太鼓をもたず太鼓もつ者は鉦をえもたぬと云謎々より名付しと云嗚呼ゆえあるかな

角兵衛獅子

京攝にて越後獅子と云を東都にて角兵衛獅子と云武藏の國氷川神社に古き獅子頭有角に菊の紋付て銘に御免天下一角兵衛作之と彫有といへば角兵衛は古代の獅々頭の名工と見へたり

忤餓鬼

我子を忤といふ詞は瘦枯ヤセガシの略語にて人を卑め詈詞也餓鬼といへるも是に同じ今は貴賤とも我子を稱する詞となれるは謙辭なり文字には忤と書今俗に舛又忤と書吾を慙慙枯槁と謙辭也と云夜豆加禮とてもとは奴僕の稱也今自稱して僕とも吾ともいふは我子を忤といふに同じ不佞野拙など皆謙辭の心ばへ也

・我紙神在餅

紙の隅の裁遣したる俗にゑびす紙と云りこは十月には諸神出雲の大社に集り給ふゆへ此月を神無月と云惠比須講は此月にするゆへ此神ばかりは出雲へ行給わねば神の立遣り紙の裁残りとを兼てゑびす紙とは云とかや出雲の國にては神在月とて家毎に餅を搗小豆と共に煮るよし是を神在餅と云京攝にては善哉餅と唱ふ誠は箭祭餅とて武家にては呼よし予戯れに云江戸にては汁粉と云も我の名にて我自刊我本戎の名に似寄とあり比

留兒餅と唱へなば神在餅のよき對句なるべしと可笑

看板の謎

鏡の銘に天下一と鑄るは鑄手の自賞なるべし體酒の看板に三國一とは體酒は一夜酒ともいへば孝靈年間駿河の富士は一夜の内に顯せしと云心にて三國一と云なるべし饅頭を賣る店に刎馬の看板を出せしとはあらうましと云昔の謎なるべし浪華に虎屋饅頭名高かければ猿屋とも猫屋とも付たるなるべし或人虎屋の向ひにて饅頭屋をせんに虎にまけぬ名を付吳と云虎屋に負ぬ名ならば國姓屋饅頭こそよからんとは寶曆ごろの洒落なるよし紙屋の門に笹と湯入の謎なしらせ湯屋の入口に矢を出おくは弓射と湯入の謎なるよし白粉屋の出箱に凸の形あるは中高な顔には白粉のよく移るを云昆布屋の看板に富士山は水からの謎なるよし山椒を昆布に巻て見す辛との説は予が綺語文章に出せり今燒芋の行燈に八里半は九里に近き味ひをのべ十三里と書は九里四里味ひと云よし生焼を十里と云は五里五里じやと云よき惡口なり

代神樂

太々神樂といふことは代神樂にて講中の人々に代り

て神樂を奏するがゆへ代神樂なるべし代大神樂と書べき也一萬度の祓とて幣串を講中へ配るに串を入る箱を御はらひと唱ふるさへおかしきに千度一萬度と云は佛家の經卷を誦す數を唱へて施主へ送る此卷數に倣て千度一萬度の祓などとして幣串を祭主へ配る笑に絶たり

月待日待代待

已待西の待

十一月西の日に
驚大明神に詣

月待日待庚申待廿三夜待廿

六夜待などの待は俟の義にあらずまちはまつりの句語にして祭祀の義也子待は子祭已待は已祭なりと云り代まちはも代祭と云事にて代參代垢離などの意なり祈念する人に代て祭の稱なるべし

盃の銘

東都にて大盃の銘を武藏野と云りこは酒盃大者曰武藏野言は野見不盡之意也酒の多くて飲盡されぬを武藏野の廣くて野見盡されぬと云謎語なるよし聞けり

瓦葺

寺を瓦葺と云は往古貴人は皆檜皮葺を用ひ賤民は板屋茅葺などなれば和歌にも板屋もる月茅が軒端などよめり只寺院は壯麗を専らとすれば瓦葺に造りしな

るべし蕉翁の吉野の發句に瓦葺もの先ふたつは是を詠せり

七黨八平氏八庄司

武藏の七黨とは私市丹兒玉金子村山海老名須貝をいへり又坂東の八平氏とは平山稻毛長井榛澤榛谷都筑足立豐島等也紀伊の國熊野の八庄司と云は玉置湯淺秋津芋瀬眞砂山本日出湯川等をいへり

愛子の庄司

道成寺の謠曲安珍清姫が事は古き書卷物にも有て謠曲に清姫が父をまなごの庄司に作れりまなごは氏にあらず實は眞砂なれども娘をふかく寵愛すると云心にて愛子の庄司と異名に呼かへしなるべし庄司娘を寵愛の餘りと文句にも見へて明らけし

我國のかな附

漢字には日月と書て我國の詞には月日と讀風雨と書て雨風と讀山海を海山風波波風晝夜を夜晝夫婦を女夫東西を西東南北を北南と文字に反してかなを附たり

雷除桑原

桑原といふ所は昔菅家のしろし召たる所也延喜の霹

蘆その後度々雷の落たりしに此桑原には一度も落す雷の災なかりしとかやゆへに京中の兒女子雷の鳴時は桑原々と云て咒しけると也

めりやす莫大小

手覆ひにめりやすと名付る物は一名莫大小と云て手のふとき細きによらず身にあふとの心也扱めりやすと云ふは原戯場の樂屋にて三味線の名目にして調子のめりやすきと云事を下略して名付ると云其三味の手長き有短き有かの手覆のめりやすは此三味線の手より名付しと知るべしめりやすは三味線の名にて唄の名にはあらず長き唄を長唄と云短き唄を女里家壽唄と云へり

鐵火味噌

金とさへ云ば鐵火も握り兼ねと云心にてか袁彦道の黨に素驛の者を鐵火博奕又鐵火打とも呼よし東都にて味噌の中へ種々の加藥の入しを鐵火味噌と云は京擣にて諸味の中へ大根など切込しを泥坊漬ドロボウヅケと號るに同じ芝鰯の身を煮て細末し鮎の上に乗たるを鐵火鮓と云は身を崩しと云謎なるべし

自墮落者

東都にて泥坊と云は盜賊の異名にして京擣にて泥坊と云は放蕩者の異名とせり銅脈とは雁金グセキの名に呼び道落者とは京擣の泥坊に類す是自墮落者と同じく放蕩人の異名なるべし極銅とは極道落者の略語と思わる俗諺に仕事幽靈飯辨慶其癖夏瘦寒ぼそりなどいへる輩を云なるべし

蓮葉女

婦女子のおとなしからぬを蓮葉女と云事は西鶴が一代男に書有て長唄娘道成寺の文句に吾妻育ははすはな者じやへと故慶子俳優長中村富十郎が己を謙退の詞也此頃東都にては都育と諷ふ此名は浪華の宿屋にて客馳走の爲置たる女の名のよしにて今も竹の皮のなき田舎にては諸品を蓮の葉にて包裏にて括る下品なるを云也御傳馬とは列るより號奴と云は爺鼻又は金平娘などに類し術妻とは色を賣る女を云なるべし發才とは賞たる詞なるを發才女郎とは卑賤の女の名と思ふは誤りなるべし

鵜の目鷹の目

目廉を付て人を見るを諺に鵜の目鷹の目と云二鳥は目の疾物ゆへ譬にいへると思ひしに硫黃に鵜の目鷹

の目と云有て上品なる物を云と也硫黄の色の黄なる彼の鳥の目の色に似たるゆへなるべし

桃鬼灯

京攝の南蠻黍を東都にてとうもろこしと云是に限らず都ての物名を異にする物甚多し中にも夏中金魚の餌とする物江戸にてぼうふらと云京攝に云子^{ゴウリ}子^{ゴウリ}にあらず言^{コト}の棒^{ボウ}ふりに似たるゆへ云カ いわば上方に桃鬼灯^{モウキテウ}といへる虫に似たり此桃鬼灯の名義解らず桃の如く甘み有て鬼灯の如く苦み有て云か金魚ならねば味わかるまじく只色の薄赤きゆへ桃鬼灯と呼か識者の考をまつ

蝸牛

蝸牛を京攝にてはかたつむりで、虫俗にデン／＼虫東都にては是をまい／＼つぶれめい／＼つぶれと云はいかなる心にて呼やらんいぶかし

箱入娘

今俗間に深窓に養ひかしづく娘を箱入娘と云は彌生雛祭の時婦女子の弄ぶ娘の木偶は箱に入あれば夫を云にやと思ひしに竹取物語に竹取の翁赫夜姫を竹の中に得て美しき事限りなくいと稚ければ箱に入れて

養ふと云より箱入娘といふよし古き詞也

蚊の喰ぬ咒ひ

世俗に正月寶引などの戯れをなして蚊の咒と云は譯なき事也實に蚊の咒と云は幼女のもてあそぶ羽子板にて羽根を突を云也ゆへいかにと間に秋の始蜻蛉といふ虫出て蚊を好食ふ也羽根は木蓮子を羽根に付羽子板にて突上れば落る時蜻蛉の容有是蚊を恐しめん爲也寶引雙六^{道中}など蚊の喰ぬ咒といふべからず

鞦韆蜻蛉返り

蜻蛉返りとは逆さまに落て下にて直になる事にて羽根羽子板にて突時突れて下に落る折則蜻蛉返りす又上巳の日大内にて鞦韆とて行なわる式には色／＼あやぶ(どか)りたる物を高き木の上より釣下す事を云是を鞦韆とも云世俗ぶらんこに釣下すなど云此事を云也

道具と牛

すべての器財を道具と云は佛語にて俗には器財を具足と云しを今道具とのみ云は佛語になづめるなるべしと或人いへり又家の棟木を牛と云は汗牛充棟と云事より誤り來りしなるべし

惣嫁の出火

寛政四子年五月十六日夜子の刻より同十七日酉の刻迄火元大坂七郎右衛門町二丁目鹽屋彌兵衛濱納屋より出火の寫町數八十九町家數二千百十八軒竈壹萬五百四十二軒納屋百九十七ヶ所土藏百八十三ヶ所穴藏六十二ヶ所橋九ヶ所宮三ヶ所道場九ヶ所寺二十九ヶ所藏屋數十五ヶ所北組惣會所一ヶ所銅座一ヶ所俵物會所一ヶ所西與力四軒東與力九軒東同心衆四十七軒御弓同心十軒御破損手代十軒川崎村家數四十一軒竈百九十一軒寺一ヶ所北野村家數百十軒竈二百三十一軒寺一ヶ所曾根崎村家數四十一軒竈二百十六軒船場東西五百三十五間南北五十九間四尺天滿東西五百三十四間南北五百五十一間四尺死人^{女一人}男二人^{男二人}て三人也是辻君惣嫁の遺恨にて附火せし也と聞へし

小倉色紙

關白秀吉公小倉の色紙を集めて愛せらるゝに付新に數寄屋を建千の利休を招き給ふ相伴二三人有て四月下旬の事なれば風爐の茶の湯也各曉方に伺公す短檠に燈火となく有明の月床を照らす床の掛物を見れば郭公啼いる方を詠むれば唯有明の月ぞ残れると云ふ

小倉の色紙のかけ物也諸人其作意を感じあへりとぞ

友衛貝盡

世に貝程數品ある物はなし昔は金銀の如く重寶せしよし右は友千鳥と外題して尾陽藩中庵原米室の兩氏同國野間の内海溫泉に遊びし紀行の中に海濱にて見たる貝の寫し也此餘いろゝの名所など書にも書有ておかしき書也

有樂翁の茶

大坂にて織田有樂老或二三人を茶に呼給ひしに貴人の茶なれば外人とは違ひ其上石燈籠の火をも見るべしとて未明より案内を申されければ歷々の人出て申けるは早々より御出有樂分て忝く存じらるべし老人の事に候へばいまだふせり爐に火をも入ず候先是へ御入候て御休なさるべしとて路次を明中路次の脇に小座敷のありけるに入て休息しけるに石燈籠の火幽に残る松風の音のみして曉方の事なれば物淋しく又は凄く思ふ折節人のうがひする聲障子のあなたに聞へければあやしく思ひ居るに琵琶を調べ平家の小原御幸を語りける異なる上手なればいと面白く感に絶聽聞するに明ゆく空も名殘おしく夜も明ければ今一

句所望せばやとさゝやき居ける折節路次の潜を明て有樂よろこび出早々の御出忝なし老體の朝寐御免候へ嘸夜寒におわしつらんいざ御入候へとて何れも座入有けると也

彼平家語りけるは高山か小寺か兩人の内なるべし

秀吉門破

織田公勢州淺香の城を攻給ふ城主大宮忍竹嫡子大之丞同九兵衛防戰す寄手の先手には木下藤吉郎也大宮大之丞は無雙の弓勢ゆへ散々に射る箭藤吉郎が左の股に當るされ共藤吉郎是を事ともせずいよく進んで惣門を打破る信長公是を褒美して門を破る事朝比奈三郎にひととして其諱を返して義秀を秀義とぞのたまひけるされども義の字は公方義昭公を憚りて義を吉と改むる

泣涕微笑

治承元年五月十六日内府重盛の亭へ能登守教經彌平兵衛宗清惡七兵衛景清來りて夜話す三人云法皇御謀反の色有て大納言鹿が谷に來りて會合し給ふ由油斷有べからずと云小松殿宣ふは此兩條必ず推量しけるは疑ひより起るといふと有しかば景清中は關東に頼

朝有近頃は關東の武士背く事有御思慮有て然るべしと云内府宣ふは汝が詞理に當れり只恐るゝは關東尊むべきは法皇也と宣ふ景清は涕泣し宗清は微笑してけり小松殿教經に向ひ宣ふは兩人の涕泣微笑の心を尋ね給ふ教經申けるは他の自(耳カ)目あり天の四智有と閉口す内府公又微笑していりぬ

鎗中村

中比攝津國半國の主松山新助と云人度を手柄を顯わしける其家老に中村新兵衛といふ者時の人毎に鎗中村といふ異名を付たり此者羽織は猩々緋兜は唐冠也何れの合戰にも敵味方是を見付てすわや例の猩々緋よ唐冠よとて未だ戰ずして敵兵敗北す其後或人強て所望しければ中村彼二品を與へける斯て或時の合戰に中村勢を寄手攻ければ中村を敵知らずして終に中村討死す是中村武具と勇を照合て敵を屈すしかし萬夫不當の勇者なれども武具等にはかゝわるべからず

石川丈山

大坂の夏御陣に石川嘉右衛門重之拔驅して惣門の前にて城方の勇士佐々十右衛門并に其家臣を打とる其功有といへども拔がけの科ゆるしがたきによつて幕

府公より御勘氣を蒙るよつて剃髮して丈山と號して都靈山に蟄居して歌を詠すわたらじな蟬の小川は淺くとも老のなみよる影も恥かしとよみけり始め嘉右衛門駿府を出る時に清見寺説心和尙に暇乞せしに和尚申さるゝは戰場は幸ひに居士の願ふ所也と挨拶也嘉右衛門返答には此度簾本に三人も手をふさぐ者あらば一人は某なるべしと廣言せしが果して詞の如し

時平公の墳

左大臣時平死去の前耳より蛇出てイツ／＼と物云て又耳に入追付て死去也其後墳の邊りに出るゆへ種々供物を調へてすかせども退かず鳴弦をするに地中に関の聲を作るゆへ又名香を焼んとすれば地中より陰霧起つて火消る供物を備ゆれば是を服す最前は三寸ばかりに有つるが備へ物を喰ひし後は一丈餘りに成ていよ／＼墳の邊に居るゆへ時平の嫡子中納言敦忠墳の上に一の社を建此内へ納んとすれども入らず先考の魂鬼穢れしと嚴敷戸ざして置れぬ今の世に墳の上に卯塔を建る事はより始りし

位牌の和歌

北條時頼諸國の守護地頭の邪曲を考へんが爲に諸國

行脚し給ふ時攝州難波に至り給ふ時一宿し給ふ其主は尼にて其先頼朝公より忠勤せし難波六郎左衛門の末にて難波六郎兵衛と云しが早世して嗣子なく所領は小舅瓜生權之頭に押領せられ身の便なく賤の伏屋の住居をなす時頼公憐み給ひ其庵の佛壇の内に有し位牌の裏に一首を書與ふ其歌「難波瀉汐干に遠き月影のまたもとの江に澄ざらめやは其後行脚の節鎌倉に歸り給ひて彼位牌を取寄瓜生が世帯を沒收し尼の本領をそへて給わりぬ凡時頼公諸國を廻り給ふ間三ヶ年非道の者をしるして歸り各決斷の上夫々に賞罰を加へられしと也

鯉の差身

或人招請せられて行しに鯉の差身を出すかの客賞味して云亭主の饗應至つて深切也此鯉は淀の鯉なりと思ふ遠路の珍物一入かたじけなしと云亭主客をもふけて何の馳走なし是一種の馳走也しかし客早く淀の鯉の味知る事不思議也と云客の曰淀の鯉に一つの替り有外の鯉は煎酒に入て賞味するに煎酒濁る也淀の鯉は幾度入ても濁る事なしと答ふ諸人其博識を感ず評に曰鯉を籠に入早瀬川に一夜置て調味すれば泥を

はひて清く成ゆへ煎酒濁る事なしと爰をもつて發明せり淀川早瀬なるゆへ其流に住うちに魚泥を貯わへざるゆへに其汁濁らずといふ

穢多の訴

武州在にて百姓の數年飼たる牛死す主人彼牛土葬にせんとす日頃主人と心易き者の云此牛連も土中へ埋るものならば革をはいで埋め給ふべしとすむ主人同心して彼牛の革をはいで其肉を土に埋む其後江戸の穢多頭長吏團左衛門此事を聞て畜類の皮をはぐは我組下の職也彼在の者我手下に付べしと使をもつて云渡す在所中大に迷惑していろくと詫さまんと扱へども聞入すして既に公儀へ訴へ團左衛門云私先祖より持傳へ候頼朝公よりの御教書に書有趣革をはぐ事全私手下に付申候事に候間早々右の村手下に付候様御取計らひ下され度よしを願ふ此事小笠原佐渡守畏つてさ候はゞ某心の儘に裁斷仕度と有御老中成程其許心の儘に致被申べしと也佐渡守夫より團左衛門と彼百姓を私宅へ召寄せられ段々聞届其上にて百姓によく聞け其法をしらぬとて團左衛門が頼朝公の掟をもつて法を立るゆへ其法は破られずさあれば團

左衛門が手下に付べしと有團左衛門大によろこび百姓は迷惑す佐渡守重ねて申渡さるゝは彼百姓は元來權現様へ御奉公申上たる筋目なれば外人と替り有百姓を團左衛門が方へ引取事は罷ならず團左衛門が一黨を彼百姓村の並びへ引越させ申べしかくの如くすれば頼朝公の掟も立權現様に御奉公申たる筋目も立なれば其通りに心得べしと申渡されける團左衛門大に迷惑して先達て申上候御願ひに少く間違の品も御座候間此度之儀は御免遊され下され彼願ひ御下げ下され候様にと御詫申に付其通り事濟しとなり

狐草履を送る

狐火とて遠方より見るに青き火もへて消る事有或人の云我宅の野邊に度々ある事ゆへ考て見るに狐頭を上て息を吹度毎に火出る畢竟此光りにて藁を取と見へて時々蛙の啼聲すると忽止てしばらくして又光り出ると又一人の云は我豫州に有し時我方へ出入する百姓ある夜廁に行其邊狐甚だ多くして火をともし一つの狐廁の外へ來し折彼百姓急に廁の内より出る狐おどろきて逃歸ると何か物を落す百姓是を取てよく見るに骨の様なる物也不思議に思ひ箱に入て置し

に其夜狐來りて戸外に云やう先程我落したる物を其許ひらい給へり早く歸し給われ其許に有て益なき物我方になくて叶わざる物也と云百姓云われ物を拾ひたれ共何なるや不知あれはいかなる物ぞと問ふ狐の云あれは火を燈す物也早く返し下されよとしきりに頼むゆへ百姓出してつかわしぬ狐悦びて歸り其後返報と見て時々草履を五六足宛椽の上に置て有扱々奇特なる事かなといふて過しが同村の者草履鞋を作り賣る者有しが此狐の話を聞て彼百姓の方へ來り云様我らが作る所の草履折々四五足つゝ紛失せり尤人の盜むべき所にもあらずあやしみ思ひしが扱は狐が取其許へ進ずると見へたり我作る所の草履持參せりくらべ見るべしとて見くらべしに少しも違ひなく同じ作り草履也其時大笑ひせしと物語也

弓に蜻蛉を付る

人皇廿二代雄略天皇和州に皇居し給ひし頃御狩の時鹿を射給わんとて矢引つがひ給ふに蛇來りて右の御肘に食付痛み甚しく既に矢を止んとし給ふ時蜻蛉飛來りて彼蛇をくわへて去る是によつて恙なく鹿を射とめ給ふ其時天皇みことのりに宜ふは今日蜻蛉の功

により鹿を得たり彼賞する爲に武具の紋にとんぼを付べしと勅ありしより今に至つて弓道具にとんぼを付る事故實のよしなり

九郎佛

東照宮若き御時より日課の御念佛御けだひなく御具足の下へは必五條の袈裟をかけ給ひしとなり世の愚人か様の事を聞懦弱の事に沙汰せりとなり然れど神君の御深意には此度の御在陣も必死と思し召又其次の御出陣も必死と思し召なり是必死の戦ひより強はなし暗將の知る所にあらず御守本尊の阿彌陀如來有黒佛と號す香煙と染て黒きゆへ黒佛とのみ世人思えり左にあらす古へ義經の守本尊にて信仰有し故九郎佛と申也或時御酒宴に勞れ給ひて御寢所に臥給ふに九郎佛枕上に立せ給ひ汝何とて今日我前へ來らざるや早々來るべしもし遅々せば災難有べしと也則御目覺早々御持佛堂に入らせ給ふとて御寢所を出させ給ふにいまだ御寢間の敷居を越させ給わらざるに御床の下より刃を以て御寢所を突上る扱こそとて御家臣に命じて椽の下を捜さしめ給ふに果して一人をからめ捕て見るに小四郎とい

ふ者也此者御傍に召仕れし者也いかなる事にて斯の如きぞと尋ねさせ給ふに元來武田方の者にて君を討奉らん爲に僞つて仕へ奉り近付候得どもかくまで御運強くわたらせ給ふに付て武田の徹運の程口惜く存候とて落涙す神君感じさせ給ひて古への豫讓にもおとらぬ忠臣也あたらしを害せんもいかい也歸し申べしと仰られ青銅壹貫文下されて甲州へ返し給ふ彼九郎佛は江戸増上寺に有と云々

惠心僧都

源信僧都博學殊勝の名高く禁庭にめされて僧都に任せらる源信法力の高きを悦びて老母のかたへ文を認め任官の名譽を告らる嚙母の悦び給ふべしと推せられしに老母殊の外此事を恨み歌を詠て送られける「後の世を法の橋とも頼みしに世渡る僧となるぞ悲しき源信此歌に感じて富貴を願わす唯貧窮ならではばだい心も怠たると語り佛像を作るにも此尊體の佛力によつて信心の人貧乏ならしめんと念す故に源信の作佛を所持して念する人は貧賤也とかや源信は世に云惠心僧都の事也

道明法師

昔比叡山の碩學道明法師禁中に來りて御祈禱をなす御簾の隙より和泉式部見染てしきりに戀慕の氣生じて道明方へ行其事を通じて密通し式部歌を詠す「出てはせ今宵計の月影にふか／＼ぬらす戀の袂を道明法師返歌に「出すとも情のあらば影さして心をてらす有明の月其夜は終夜契り翌日夜法華經を讀誦す片隅に怪敷人座して法華經を聽聞す道明あやしみ何者と問ふ彼者いふやう我は北野天神也和僧は法華經の權者也よつて法華讀誦の時は諸神影向ありて聽聞あるゆへ我々如きの末座の神は近付がたし過し夜和僧和泉式部と契りて身穢れしゆへ今宵諸神影向なし幸ひ今宵は我近付て法華經を思ふ儘に聽聞すと也是より道明淺猿しく思ふて好色の念を斷しと也

元政魚料理

深草の元政上人は日蓮宗を尊んで等(爲カ)學にして殊勝の人也元來井伊家に仕へしと也詩をよくし歌を好み老母に仕ゆる事至つて孝心也老人の召仕ひし女ならでは取扱ひあしかるべしとて自目利して抱ゆべしとて随分美なる女の若きをかゝる又老母の身養生の爲とて魚を調へて自料理して老母にやしなふ然れ

ども自今の行狀弟子中への法式はいかにも嚴密にして猥なる事なし去によつてさしも口さがなき京都なれども一人も元政を誹謗なりとそしる者なし元政老年の後中風を病時の人中症院と唱ふ元來佛を作る事上手也中風のゝちは常に手ふるひけれども佛をばよく作らる小刀を持て木にあつる迄は手ふるひけれども木を取て小刀をあてる時はふるひ止みしと云然るに紀州頼宣公の御母公養珠院殿法華經を御信仰ゆへ和歌山へ御まねき有て御對面有其時は御前にても中風ゆへとて安座御免有しと也元政辭世に「鷺の峯にてるてふ月の影の間にかりにあらわれかりに隠るゝ

火の見矢倉

大久保七兵衛殿火の見矢倉は外の火の見より甚だ高し或夜番人の首引拔て有其後彼火の見をば臺は殘し矢倉より上は打折ぬそれより外々の並にすると云綱吉公御代に何にても火の見矢倉の上にて怪敷事あらば書付て言上すべしと仰出されたりよつていろゝの怪敷事を書付て上るに付段々怪敷事ありしと也其後怪敷事は申上るに及ばずと又々仰出されて後は不思議の事もすくなくなりしよし番人の機によつて生

するなるべし

宗祇の發句

或人の云藤原の義孝の歌に「君が爲おしからざりし命さへながくもがなと思ひけるかな此歌の心は逢ざる前は君が爲には大切なる命にてもおしまぬ心なりしが逢ふてはいよゝ思ひ深くなりしゆへ命さへあらば又逢ふ事も有べしなれば始おしまざりし命さへ今はかへつて命長かれと祈る心に替りしと也命さへといふ此さへの字此歌の眼字也おしからぬ物がおしくなりしといふて外の事はいはねども其内にこもる宗祇がほつくに「限りさへ似たる花なき櫻かな是もさへの字大切の文字也外の花はしほみ又は色替り落花などして見る所なれ其櫻ばかりは日數の限りありてちる所の奇麗に見事なるとても外の花の似よる事ならずましてや盛りの頃は外の花に増りて一しは見事なる事いふに及ばず其筈也ちる時さへ餘花の及ばぬ物をといふ心也然れば此さへの字にて初中後の見事さをおひおゝせたる發句にて妙なる事義孝の歌に同じかるべし

幽靈の濡文

大坂にて或町人の女房死して翌晩より彼女房の幽霊持佛の前にあらはる家内恐れ騒ぐ事夥しく是によつて檀那寺へ行て此事を頼み何卒御手段を以て此後出止候やうなし給われと云住持是を聞て今夜我行てためすべしと約束し其夜彼家にゆき家内の人々を遠ざけ只一人持佛の間に座す案の如く暮過より幽霊出て忽然としてイむ僧其様子を見るに彼幽霊持佛の天井を見詰め外を見ずしばらくして消失せり僧思ふよふ扱は此天井に心の残る事有と推量して密に天井の板をばづし見ればかなぶみ多く有是は女房存在の内不義をし密夫より來りたる文也扱は此事人に見付られては汚名世に聞へん事を恥臨終に心にかゝりたると見へたりと思ひ一々細かに切さきて納めさあらぬ顔にて座せし所へ出仰の通り幽霊顯れ出しゆへ重ねて出ざる様致し候まゝ御安堵あれといひ歸りたり果して夫より出ざりしと也

疫病神馬に乗る

中頃伊勢に住ける馬士夕暮に馬を曳て我家に歸る時に一人怪敷男來りて其馬をかせといふ馬士いふは此馬は今朝より遣ひ宿に歸りて休息させんと思ふ也と

彼男がいふ我を乗ては少しも馬に勞れなしせひ借るべしといふ其景色何とやらん物凄く覺へければ辭しがたく馬を貸すあやしき男大に悦びて馬に打乗りて行彼男語つて曰我は疫病の神也此せつ疫神方々へ廻りて疫氣を人の家にうつしてなやます奸佞邪惡の人を先とす其方の家へも行んと思へど馬を借りたる報恩に此度其方の姓名を消べし今宵より鎌田村七兵衛が方へ赴也鎌田村の入口まで馬に乗り形は搔消ごとく失にけり馬士恐ろしく早々歸り翌日何となく鎌田村七兵衛方へ見廻りに行て問ひければ七兵衛女房がいふ前夜より夫七兵衛大熱病を煩らひ前後不覺の體にて候といふ馬士内に入て様子を伺ふにきのふの怪敷男七兵衛が傍に居他人には見へず馬士計りの目に見ゆる扱疫神七兵衛が口到手を入て臍をだん／＼と引出し井戸ばたに持行水を汲んで洗ふ事數遍也其後又はらわたを七兵衛が口より出し疫神團扇を持て七兵衛をあはぐ馬士をふと見て早く歸れと仕方するゆへ馬士は早々歸る其後七兵衛は病死せり其外家内大に煩らひ又は病死し世上以の外疫病はやり人多く死すに馬士の家内のみは安穩也しとかや

淀屋辰五郎

淀屋辰五郎の家滅亡の起りは辰五郎遊里通ひ世の取沙汰をも憚らず家内の納も兎畧なりければ母是を愁ひ兼て親しき老醫有利害を解辰五郎を諫めければ合點行しか遊戯を止むる母大に悦び老醫に禮詞をのべ猶禮謝として家に持傳わる茶壺を送る此老醫茶事を好まず商人に賣る夫より諸所の手に渡りて流布する内公役人何某といふ者此壺の事公聞に訴へ此壺先年公儀より御尋の茶壺也其時は手前所持仕らずと僞り隠し置候段不届と御咎あり其外彼是によつて辰五郎は追放せらるよつて家めつきやくしけるしかし此壺ばかりにあらね共畢竟此壺御咎の第一となりし事時節の不幸也辰五郎は後三郎右衛門と云元來八幡の侍也

村井軍兵衛

村井軍兵衛は江戸にて朋輩を打殺し首尾よく立退御旗本何某に匿れ居たり五月頃芝居を見物に行しに瓜を商ふ者六人軍兵衛を取かこみ討んとす是前に討し朋輩の一族仇を報わんとて姿を變じ待掛たる也軍兵衛六人を合手にして五人を斬伏一人酒桶の影に隠れ

居るを酒桶ともに切殺したり此刀は備前祐定の刀也此節切先少し折たれども至極の業物ゆへ軍兵衛秘藏して後年迄も先の折たる儘差料にする由兩度の働を旗本衆より紀君頼宣卿へ申上る其上軍兵衛劔術功者と沙汰有によつて紀君軍兵衛を二百石遣わされて大番に召出さる或時南龍院公御前へ軍兵衛を召さる軍兵衛畏つて出御尋の答は御手廻りの面々を御除下さるべしとて公と兩吟にて申上るは私儀劔術手練仕らずしかし心は誰にも勝氣にて御座候夫故か人に負申さず候か様の儀は人の承り候ては氣にて勝者と存候て武家にてても武藝の稽古油斷になり候間兩吟にて申上候といひよし

國造の烏帽子

肥後國阿蘇の宮神主は國造といふ國造の職を受けるより其職を退ぞくまでは外の人には言語をまじへず對面もせず只下人又は下手の社人に事を談ずるのみ也諸人は國造の神前へ出らるゝを見る計也然るに氏子一人用事に付京都へ赴に此者いふ様いつも國造殿の神前へ出らるゝを見れば元たる烏帽子を着て出らるゝ體甚氣の毒なる事いはんかたなし此度よき序な

れば是を持行修覆させんとて國造の家司に告て烏帽子を修覆させんと乞ふ國造の家司此事を神職に告る國造満悦して奇特千萬也とて錢別として銀壹貫目を彼男に送る彼男思ふ様影しき錢別也此銀にては烏帽子何百も買べきにと思ひながら返すも不禮と受納して旅立扱京に着して用事を達し其後烏帽子やへ行て國造の烏帽子を出し修覆せん事を談ず烏帽子屋是をよく見ていふ扱此烏帽子は餘人の烏帽子にあらず是を着する人は肥後國阿曾の宮の神主計也と彼男横手を打て扱々よく知つたり其通也といふ扱亭主我いまだ烏帽子を見ずしかし家の傳授の一つにして書物の内に圖法有と云彼男いよく修覆を頼むべし料はいか程と問亭主がいふ是はつくろひをなすも新しく折たつるも同じ直段也其價拾四貫目と云彼男肝を消しかにして折とても大概程の知れたる物也夫ならば天子將軍の御冠はいか程の價なりや亭主いふ尤上々の御冠烏帽子は外の割には下直也又是を折立るは我々一人にて七日の間に仕立るゆへ何の雜作もなししかるに是にばくだいの料を取るはいわれの有事に候我々此烏帽子を折事は限りにて一代所業をやむるゆ

へ外の家職人となる也ゆへに拾四貫目を外の商ひの元手銀となす故也と云此詞を聞て國造の大層なる錢別の心を得たり扱拾四貫目の銀子に當惑して先一度古郷に歸り一家中へ相談しよふと銀子を調へ又々京都へ登り烏帽子を折らせて事濟けるとぞ

日本左衛門

延享三年丙寅の冬日本左衛門といふ者人相書を以て御尋有ける此者本名は濱島庄兵衛といふて盜賊の張本也いろ／＼と御吟味あれども出ず然るに梶井の宮御門跡に仕ゆる中村左膳と云新參者有又中村順助刊我本中村吟助と有りといふ者有と訴へて云日本左衛門事は中村左膳よく存申べし元來左膳は濱島が同類にて候と云是によりて早速官夫(府力)より中村をめし圍ひへ入置て拷問に及べり中村が云成程前かたは濱島と我厚く交りし也其後中絶して梶井御門跡に仕ふるゆへかつて濱島が行衛をしらずと斷れども役人決してゆるさずやはり其儘圍ひに入置けり然るに京町奉行所へ美服を着し金拵の大小をさして出る者有役所は判斷も濟て役人銘々宅へ歸りし跡にて残りし小役人其者の訴へを聞に彼男云やう某は御たづねの濱島庄兵衛

異名は日本左衛門と申者にて候と云是を聞て役所以の外騒立取逃さぬ様に用意す濱島いふやう何れも何やら騒がしき様に相見へ候是は定て某を取逃さぬ御用心と存候かならず御心遣ひ被成まじく候逃んと思はゞ斯様に名乗て出候わす品により自身出る仕合に候へばゆめ／＼逃走る事は候はず且又改て盜賊の御吟味にも及ばず其ゆへはいかにも某事盜賊の大將を致せり然れ共世人難儀に及びしよふの儀はいたさすまづ金子三千兩より下の物を盗みたる事は御座なく手下の者に下知してとらせ候是迄身を隠し候へ共此頃承り候へば中村左膳に某が有家を御尋のよし彼は前方は入魂に致し候得共近來は某が行衛は曾て存候まじさあらば某ゆへ罪なき左膳難儀に及び候段聞捨がたく終には露顯する身に候得ば名乗出御仕置を相待候といふ是によつて濱島を揚り屋へ入れ其後江戸へ送られけり牢輿にも乗せず駕の戸ひらき御紋付の長持を跡に持せ夜に入ば御紋付の提灯を出し旅宿にては上下着用の者膳の給仕など出させたり其後數日をへて遠州見附の町放れにて濱島以下四人獄門にかける濱島は初中後緞子縹子の類ひ着用しけると也

鷹の尾筒

將軍吉宗公より岡部美濃守に御鷹拜領仰付られ家中何某御鷹を拜見して扱て／＼尾筒の見事なる事と云一座の面々云馬は尾筒とも云べし鷹を尾筒といふは珍敷詞と笑ふ其後は彼人さへ見れば云出して笑ふ後々は異名にして尾筒殿といふ彼何某は口おしく思へ共詮かたなしと打過ける其後在所岸和田へ歸りても尾筒の沙汰止す何某私宅へ歸りて愁ひたる色あるゆへ家室是を見て何を愁ひ給ふと問ふ何某かの尾筒の事をいひ誠に面目なしと語る内室の云笑ひ給ふ人々の文盲也絲鎖和尚の鷹首の内に「はし鷹の尾筒の上に置露は萬の鳥の涙なるらんとよみ給へば尾筒といふべき事也と云何某大に悦びて彼歌をいひ出して前日の恥辱を清めしと也

西澤
文庫
皇都午睡三編上の卷終

皇都午睡三編中の巻

目次

- 一 北山壽庵
- 一 蠻名
- 一 江口泊
- 一 南畝の辭世
- 一 饅頭の名
- 一 往古の七種
- 一 貝原の書籍
- 一 武林の八介
- 一 法性寺の執行
- 一 對句頓語
- 一 善光寺の號
- 一 山家の秋月
- 一 蝙蝠
- 一 婦女の強氣
- 一 要樞は蝕す
- 一 鶴の考
- 一 陣兵羽織
- 一 牛の懸物
- 一 正通の詩
- 一 漏刻の博士
- 一 大守三介
- 一 月卿雲客
- 一 瀧口帶刀
- 一 長谷雄の句
- 一 歌の病
- 一 鍛曳
- 一 東の家土產
- 一 俠者は昔の事

- 一 名物に濃味無
- 一 八瀬や小原女
- 一 古着市
- 一 金相場
- 一 地面持
- 一 左官仕事
- 一 毎日法會
- 一 京の人別
- 一 引越蕎麥
- 一 河岸の船宿
- 一 四季の物賣
- 一 厠便所
- 一 食物の異名
- 一 婦人の情
- 一 言葉の變
- 一 屋號不呼
- 一 樽代節句錢
- 一 土藏造
- 一 橋數少し
- 一 昔の人數
- 一 茶店中宿
- 一 三都の商人
- 一 辻駕籠
- 一 湯錢
- 一 雜具の名
- 一 諸品の變名

西澤
文庫 皇都午睡三編中の卷

西澤綺語堂李更著

北山壽庵

北山壽庵は廣學淳實也諸國を廻りし北國にて津浪有其所に丁海といふ禪僧有諸人浪の來るを恐れてふるひわなとけり丁海は是天命也とて座禪をなす其内に高浪打來つて大海に打入又砂の上に死骸打上る扱浪靜まりて諸人集り是を療治する諸醫良藥を用ゆれども其驗なし時に壽庵に療治をたのむ壽庵其死骸の傍に行脉を見て退けり諸人何れも藥を用ひ給われと云壽庵云斯の如く天命をしつて死する人何ぞ藥を用ひ蘇生する事を願わんや是天命に背く也といふ是によつて諸人其高論を感ず是よりして壽庵名を諸人にしるる其後壽庵紀君賴宣卿に仕ふ若山の諸士を療治するに霜月頃一人の士煩ふ諸醫時疫也と云壽庵是を食滯也とて平胃散を用ひ四五貼用ひて後黒き物を瀉す

壽庵其黒糞を考へ見てもしおばこ菜は食せざるや此時病人手を拍て當四月頃おばこを食せり夫より以後何とやらん腹合あしく覺へ候得共久しき事ゆへ夫とは心付す候と云壽庵是正しく四月に食せしおばこの滯りし也とていよく四味の平胃散を用ひて病氣次第に平癒せし也又石田何某久しく煩らひ腰立す諸醫手を盡せども治せず壽庵に見する壽庵脉を見て疝氣也三和散を用ゆべしといふ石田申は只今迄疝氣と諸人見立られ三和散を用ひたれど其驗なし三和散ならば無用と云其時壽庵大ひに笑ふて足下は鐵炮の妙手にて人々に其術を教へらるゝと聞に其心得にては鐵炮の理にもくらかるべしと云石田いかれる色にて其意趣を問壽庵申されしは鐵炮を打におなじ筒同じ藥同じ間數にて足下の鐵炮はよくあたり弟子衆の打鐵炮はあたらず是は手練の業によりて彼と我との間數道具の釣合の覺悟による所也藥も又斯のごとく同じ病ひ同じ藥にても其調合の人の少しの匕加減によつて病的の中するとはづるゝ事は療治の功と不功による也何れの醫師の調合も一同と極むが則是におなじ同じ鐵炮同じ藥にて打とも上手はよくあたり下手

は當りがたし是に同じかるべし爰を以て鐵炮の理も拙からんと察すと云其時石田殆んど心服して壽庵が三和散を服する事四十日程にして病は根を斷忽平癒しけるとぞ

要樞は蝕す

高貴の人は日々美食に飽て安逸に住するがゆへ多くは種々の病有て短命也農を業とする百姓は平日飽食をなして日々耕作に身體を働かしむる故に無病長壽の者多し爰を以て流水腐らす要樞蝕すとは古人も云り此意を五色墨の蓮之といふ者の句に精出せば氷の間もなし水車とは申き

蟹名

都て蟹國の名にイギリスエウロツバ杯と云又商人の持るゾンカラスボウトルなど奇妙稱呼なり往年平賀源内が持る平日の道具へさま／＼の蟹名を戯れに名付たる中にも風流の蚊拂ひを製たりくる／＼と振廻せば蚊悉く取れる器也是を號てマアストカアトルと呼たりしは面白き蟹名也とて其頃評判せしが其後萬年糊とて紙にて糊を包み隅の穴より押出して遣ふに蟹名をオストデル又泣上戸をエフトホユル又物覺

のわるき人をスポントワースルなど號し者有みな源内にもとづくなるべし

鶴の考

賴政の射たりし惟鳥を鶴といふ是に種々の説あれども屋越の墓目を修せられしならん屋越の墓目と云は天地四隅を射る也四隅の形容を表じて丑寅未申辰巳戌亥を取て頭は猿胴は虎尾は蛇扱亥の形なきゆへに猪の早太といへる郎等の名を入たる物と思わると理齋隨筆に有おもしろき考也

江口泊

西行法師心を雲水にひとしくして國々をあまねく廻り暮つかたに津の國江口の青樓に一夜をあかさんと乞ければ若き遊君出て此所の掟なれば獨旅はとめざるよしを申侍りけるに「世の中をいとふまでこそかたからめ假の宿りを借む君かなと詠れしかば彼遊君返しに「世をいとふ人としきけば假の宿に心とむなと思ふばかりぞと聞えてやがて留けるとかや予以前此事を思ひ出て「西行も江口の君をひやかして一夜を和歌の二首泊りせりと戯れし事有此頃は賤の女などもいとやさしき事どもにこそ

陣兵羽織

世に甚兵衛羽織とて袖のなき羽織今云殿中羽織と同じき物甚平と云者が製し始たるかとも思ひ居しが是は陣兵羽織にて大將軍は陣羽織を着せらるれど雜兵など寒氣の頃は綿入の袖なし羽織なりと着ざれば堪がたかるべし其時の着用にて陣兵羽織なるべしと例の僻案を出せり又勘六とて麻の着物に綿を入しは寒六とて暑寒を兼ねる心より號しといへども是は簡略の云誤りにもあらんかといよ／＼僻案を増しけり戲場の衣裳に雜兵の着物は木綿に金の摺込を着する是を彼黨の通言に銀蠅と云いかにも銀蠅の色合よく名付し物といへども是も陣兵軍兵の二つ内を横訛りて銀蠅ともいふならんと思わる

南畝の辭世

蜀山人杏華園南畝寢惚太田覃字子桓通稱直次郎後改七左衛門といふ人々知る所也死して白山本念寺に葬すかねて先生自ら戒名を杏華園心逸日休居士と考へ置しと也文政六癸未年四月六日死す此本念寺に北山山本信有先生の墓有此寺に蜀山人かつて北山先生を悼し自筆の詩歌有詩は略「我もまたおしつけ行て苦

のした長夜すがら語りあかさん又辭世は「時鳥鳴つるかた身初松魚春と夏との入相の鐘北山南畝兩先生の名の對せるも亦おかしからずや

牛の懸物

或人云今より卅年も跡のことにて東海道水口宿本陣の主好者にて貴人の宿り給ふ床の間に並々の軸ものはかけられずと畫絹大幅の無地の懸物に相應の表装して懸置たり或時紀伊公爰に宿らせ給ひ床のかけ物白ければ自ら筆をとらせられ牛の畫を畫御落款遊ばれける其後水野出羽侯京攝御巡見の折宿らるゝに付此かけ物を見て何の畫ぞと亭主を呼て御尋有即牛の畫なるよしを申す出羽侯賛すべしとて牛の畫を書れたそふなと書て自分の姓名を書けり此後薩州の太守泊りの時又かけ置しを御覽じて又賛を添られたり其賛は牛の畫を書れたそふなと書れたそふなと有是は又能書の聞へある方なれば亭主大に秘藏して是三君にて事足れり此上は書れては實にならずと今並々の諸侯方の宿には此軸ものはかけずと云實にそれなりやしらすといへ共聞し儘に爰にしるす

饅頭の名

東鑑に將軍家より十字を給ふといふ事有諸道の博士に御尋有けれ共知らざるよしを申す鎌倉の僧に御尋有ければ饅頭の事也と申す饅頭を四つに割に刀を入る故に十字と云とぞ

正通の詩

楠正通關東下向の時近江の湖を眺て一句を得たり蒼波路遠雲千里と此對句を賦せんと按じ頗ふ趣向うかばず道すがら意を碎き箱根山に至りし時に正通が娘歌を詠じて「道遠く雲井見るべき深山路にまたとも聞ぬ鳥の一聲正通是を聞て忽對句を得て曰白霧山深鳥一聲と右のこと十訓抄著聞集江淡抄等に見へたり嵯峨の釋迦を取來りし齋然といふ僧入宋して此句を我作とて鳥一聲を虫一聲雲千里を霞千里と直して見せければ宋人曰甚可也惜らくは虫を鳥とし霞を雲とせられはいよく可ならんと云しとぞ

往古の七種

正月七日の七種は稻麥豆粟小豆黍小麥此七種を以奉る事也夫故に七種と書てななくさと訓ずる也宇多天皇の御時改て芹薺鼠麴草一名母繁佛の座田平一名松青蘿子草菊根子草右七草を用ひられし也古は上の子の日に奉りし

所七つの字に依て七日を用る事とはなりしとぞ

漏刻の博士

漏刻の博士季親は周易博士にて其道世に覺有ければ風月の方にはことなる聞へ無りけり或時文亭の聯句の座にのぞみ沈淪したるを宗徒の儒者有けるが是を見て侮りけるにや閉口後來客と上の句を云たりければ含陰先達儒と季親付たりければ座にがりて詞なかりしとぞ

貝原の書籍

天正の頃より今に至りて段々文明になり鴻儒の人々多く出て著述の書數多ある中に貝原先生白石先生の著したる書籍ほど益多きはなし高遠の事は暫らくさし置て我々が今日身の爲心得になる事共多し書の頭書を標註と云又頭書のある所を上方と云何れも唐本に有唐の今世の印行の雜書に首書を標註とは云はずして鼈頭と云俗説也正證としがたし不可用又留別寄別我他所へ行時詩を人に贈るを留別と云人は留り我は行時也詩を留て別るゝ也人の他へ行時我より人に送るを寄別と云人は行我は留る時也我より人に寄て別るゝ也又日光の當るを陽の影あたらぬ所を陰の陰

と云誰も知る所なれど手近き事もよく心得になる様
しるせり

大守三介

任官して國名を付く内に常陸上野上總は大國たるゆ
へ此三國に限りては親王家のみ任せられ親王は都に
居ます事なれば任國に介を置給ふ俗是を稱じて三介
と云て常陸介上總介とは名乗る也守となゆる事叶わ
ずされば此三國をば大守と稱す今おしなべて他國の
諸侯を某の大守などゝしるすはあたらざる事とぞ

武林の八介

武林の八介といふは下總に千葉介上總に上總介相摸
に三浦介伊豆に狩野介出羽に秋田城之介加賀に富樫
介遠江に井伊介讃岐に大内介是を云也

月卿雲客

月卿といふは公卿をさす雲客といふは殿上人をさす
是は則天子に仕奉るよりいへる也宮中を雲井とも云
扱公卿といへるは攝政關白左右の大臣内大臣也卿と
いへるは三位以上の人を云也雲客と云は四位以下の
殿上人を云是は昇殿をば許されたれ共いまだ三位に
至らぬ四五位たる人を云とぞ右職原の書にみえた

り

法性寺の執行

東山法性寺の執行俊寛僧都とあるはすべて寺務別當
共に一寺の統領也されども所によりて名付ることか
はる也高野山にては檢校といひ山門にては座主とい
ひ東寺にては長者と云勸修寺又三井寺にては長吏と
云法性寺には執行といふ是異名同義也何れもその寺
の長也

瀧口帶刀

北面の侍とあるは院中警衛の士也禁中にはなし是は
人皇七十二代白河院の御時院中に武勇すぐれたる者
を差置る禁中には瀧口といひ院中には北面と云東宮
には帶刀といふ字を異にして義は同じき也又西面と
いへるありし是は八十二代後鳥羽院に始る近世は絶
たりと北面にも上下有今院中守護し奉る者位は四位
までに至るといへり

對句頓語

五百羅漢渡川則是一千影源君美丈六彌陀越山纔見八
丈光伯憐後素庭前月白石奪紅日下霞霞樓當時以名對と
する也駒引錢白石虫嚙米霍樓青葉紅葉白石細根大根芝岱

と對し又山猫鬼儡と云によき對有やと尋られしに海鼠と答られしはよき頓語也或人夢と思とは何とかわから侍るべきと言しに鳴鳳卿の答へに晝は思ふ夜は夢と面白き對話なるべし

長谷雄の句

俗に云知つたぶりを云男俳諧の附句に「そもさんか淺草寺の十夜鉦といへる句をなして點を取に點者申越けるはそもさんかは禪也淺草寺は天台也十夜鉦は淨土也御句いかゝと非言せられしと也かゝる人いくらも有て以前予がしる者に一文不通の癖に發句合に加り故人の句集より出して其儘にいるゝ點者も故人の句ともしらずに扱事有て相應に手柄有其者友に對して我古き句集より句を出すに其角嵐雪らは上手と見へていつも拔れと下手はばせをといふ人也此人の句を出してついで扱たるがないと大笑ひをさせしばせををにぐらすはせをと云其角をそのかどと云男なればさも有べし

善光寺の號

信濃の善光寺には七月十四日十五日十六日の間に犀川より必龍燈上る西の方山際樹木の梢を傳ひゝて

御堂の南西の破風にかゝると也御堂は八つ棟造りにて鐘木造りともいふ也四方に破風あり南北廿五間東西十三間也此寺に四つの寺號有て南面をば南命山無量寺東の方を定額山善光寺西の方は不捨山淨土寺北の方を北嶺山雲上寺といふとぞ世人善光寺のみ覺へて外の寺號はしらざる者多しとぞ

歌の病

「さかざらんものとはなしに櫻花おもかげにのみまたき立らむ是は延喜十三年亭子院の歌合にてらんの字二つ有との事にて病に定らるゝあふまでとせめて命の惜ければ戀こそ人の命なりけり是は長元八年三十講の歌合の歌なりけれど命の詞二つあれ共沙汰なく勝にけり同詞の病なれ共歌がらよくなりぬれば聞とがめざるにや人の有様も是らにて心得べし平生の行ひよければ少しのあやまちは人とがめす

山家の秋月

十訓抄に遍照寺にて山家秋月といふ事を人々詠ける其中に範長朝臣若き藏人の時「住人もなき山里の秋の夜は月の光りも淋しかりけり件の草案共を正二位權中納言定頼取て父の公任卿の出家して居給ひける

北山長谷といふ所へ遣したりければ範長の歌を深く感ぜられ彼歌のはしに範長誰人哉和歌得其體を自筆に書付られたり範長喜びに堪ずして其草案を乞取て錦の袋に入れて寶物としられけると也

鑢 曳

八島の戦ひに惡七兵衛景清三尾谷十郎家清が兜の鑢を無手と摺て曳や／＼と引合たりしが終に鉢付の板より鑢を引切たりと古へは甲の鉢に折釘の如きものを打てそれに鑢をかけはづしにしたるもの也景清が引切りしも此折釘を引切しなるべし糸にておどしたるは中々切る事あるべからずと也

蝙蝠

扇は昔蝙蝠を見て初て製す蝙蝠をかはほり蚊喰鳥カクヒともいふ近江國にては蚊鳥共いふとぞ衣笠内大臣の歌に「日くるれば軒にとびかふかはほりのあふぎの風も涼しかりけるかはほりは蚊を屠るといふ意にて號とも徂徠翁は廁守也と井守屋守と同じとぞ

東の家土産

或人冬籠の徒然を慰めよと吾妻の家土産と題せし雙紙を二冊貸くれけり早速巨燧によりかゝり是を見る

に文化十三子年三月中旬より旅立して伊勢路より東都に赴き歸路に日光より善光寺岐蘇街道を経て水無月の初に歸路したる安心齋五福と云る人の紀行にして名所古跡は書圖道中記に書盡しあれば珍らしからねど關東と京攝との詞の變り唱への違ふ事を筆まめに書て婦女子の爲に示されしなるべし僅の滯留によくも思ひ出て書たるものと感心せりされども其端書にも斷り有て中々廣き彼地の事悉く盡す事あたはず又日々夜々に移り替る流行あれば只其頃目前見當りし所を述ると有不佞は再度の東行に以上五ヶ年彼地に居れば何事によらず始のうちは珍敷書付置んとも思ひしかど後には彼土地の詞になれてさまで控置程の事もなく捨置しが今此書を見れば文化十三子年より卅五年になれば其唱への違ふも多く又見殘し書落したるも少なからずさればとてか様な俗言を何の書に書傳ふる事もなければ世間しらすの婦女子にはよき土産なるべし予は又五ヶ年の内見來り聞來る事の多ければ綺語文草十二卷の内に三都の事をあらかた出し此皇都午睡にも思ひ出す儘書付置ども此五福子の吾妻の家土産より當時に移りかわりし事又も

れたるをしるして未彼地に遊ばぬ若人達又世間見すの婦子にも讀せ笑草にもなれかしと別に巻を分ちて三都異言と題し有のまゝに書かけしが是も皇都午睡の内ならめと此巻に書込侍りぬ是より末下の巻終り迄三都の詞の變りを述る物也天地の流行は日々夜々に變る習ひいわんや繁華の東都なれば四五年も立ば又此文と唱への變る事もあるべし後々同志の方はに繼て書入らるゝ時は彼地に遊ぶ人の一助ともなるべし

婦女の強氣

扱第一東都の婦人は京攝より見れば遙に威勢強く中分以下の暮しを見るに京攝に云爺唄におなじく亭主より女房がた一段上位にて女に勢ひを附たる土地なりお屋鋪方は格別市中にも男八九分にしてよふやく女は一二分也それゆへ自と女強く女の子を産ば器量よければ勿論醜女には何なりと藝を付屋鋪へ奉公に出すがゆへ小娘の内より氣ばかりつよく自然と女は少きがゆへ女房に威勢奪はれ亭主は多く誤りがち也一體を云にあらず先々は多ひと云也扱此内へ奉公に来る下女などは地の者は珍らしく五里十里

の近在より來て江戸見習ふ物なれば我身分も顧ず自然と大ふうな事のみを云て憎まれるやつ也先世間をしらぬ女は世界に土地といへば江戸ばかりと心得中にも愚のはなはだしきは京攝の者に物を云にお前の在にこふいふ物が有ますか抔云者有其時又京攝の藝なし猿江戸見てこねば男でないと當なしに駈出し道中も喰ふや喰すに難儀してよふゝすこしの近付に逢判じてもらひ半季奉公する輩是を聞とまつ黒になつて腹を立お前の在とは何事勿體なくも攝州大坂何町何丁目とか又山城の國平安城何條何の辻上の所など云てもあつちにはちよつともこたへず京も大坂も一所と心得長崎者も四國の者も惣一體に上方者と一口にいわれるれば是に合點の行様には蘇秦張儀が辯を以てもいつかなゝ通すべからず又聞てからが眞實に受ぬ筈伊賀や大和の山椒賣迄が京とか大坂とかにて掛屋鋪の何が所もある大金持の若旦那色狂ひにて勘氣をうけこふした身の上になつたのと空鐵炮ばかり放すがゆへ百人に一人本間ものが有ても贗物の方へ巻込まれて云甲斐はなかるべし中分以下の下女下男の争ひは大かた是なり男のぼせ上つて鼻血をたら

し争ひに云かつても仕舞は主人のおかみ様が出て夫程能い上方には居なくして江戸で半季渡りの奉公をせなくてももの事さネエといはれてはどふ有ても負公事なるべし

俠者は昔の事

次に云は江戸は俠氣の強き土地にて人に物を頼まれ世話を仕出せば命にかけても世話を仕拔ゆへ江戸ッ子といふて幡隨長兵衛そのけじやといふは遙昔の事にてかならず嘘にもその様な人が有ふとは思わぬがよし大坂でも昔は有たか浪華男と云てあたまに血の多き者が有たと見へて薄情なものを京詞をいふ者じやといひたるが段々と世がひらけていにかけて門口へ出るを送り出て御時分じや御茶漬上つてお出被成とは大坂でも江戸でも一統に云様になつたればあながち京詞とはいふべからず然れども夫一事に拘わらず薄情に口先ばかりで上手を云はどふしても本家根元だけで京の人が上手也江戸は土地も廣ければ尋ねたらありもせふが當時はやらぬと見へて一向見當らず其替り詞戦ひもせず人をこなしてかゝる事もなくなつたり舊は上方野郎の毛齊六のと糞おろしに惡

口をいふたが江戸子の氣性を見せるには相應に錢が入事なれば天保已來此惡口とんとはやらす誰云合すとなしに上方衆は物言ひが艶しいなどゝ譽てかゝつて何ぞ奢らせるさんだん中々利口な物とはなりけりかういふ事は人しれず京都へ祝儀持て習ひに來る者が有かもしれぬ扱江戸子は甚だすくなくものに二親共に江戸産れの中に出來たは眞の江戸子なれどそふいふ者はかへつて遠國又は在所へ引籠り二親の内何れぞ江戸の者なれば相手は皆他國の者也然れば大方が斑といふ者にて江戸子一步斑三步残り六歩は皆他國在郷ものゝ寄合の中に江戸へ出會して出生せしなればやはり田舎子也それが生長するとおらア江戸子だゝといふからはイヤハヤ何とも詞なし

名物に濃味無

又有三都に限らず見物して歸つて其土地の事を咄しげに都だけある諸事に不自由なく結構な土地じやと譽る人は其地に福有な親類が有てその家より諸所に案内しられたか又は路用澤山に餘る計もち案内したる者をめしつれ日にも費にも構わす實に保養見物に往たる人也當なしの駈落我栖んだ土地にさへ不義

理だらけに世間せまぐせふ事なしに古ひ近付の居るをあてに道中切つめたやうな路用にて氣拔がてらに駆出して川支に路用を切らし荷物(持力)したり野宿したりしてよふ／＼向ふへ往た所其お人は何年先に死で跡は粉もない抔と聞てそれから難行苦行苦の行抄ふつて命から／＼歸り扱もどこそこの國は聞た程にもないせふもない所じや見る物とては何にもないまた喰物かもみなひ抔と能く利口顔にいふやつ也遠國の山中へ往たらば蒔く程金錢が有ても不自由な物があれども三都に限つて錢金さへ出せば着物喰ひ物遊び事何一つ出来ぬと云事はなしそれになんといふは懷に有べきものがないゆへ也又錢金に不自在なくとも廣ひ三都五日や十日の滯留して土地の案内もしらずに兼て噂に聞及んだ名物の行燈をめあてに喰てかへり喰物評判を人中でするは僻言の最上なるべし名にうてた名物にあまり好味な物はないと心得たまふべし先景がよいとか安いとかいつても出来合せであるか此三つを名物とはいふ也錢安な喰物でも腹の減つてある折は咽を飛ばかり味く腹の大きな時はいかな高直な評判高き喰物にても味よからず又商ふ

家にも年中日々の事なれば出来加減のよき日不加減の日もあるべし邂逅一度試みてそれを定規とはなるべからずまして懷中乏しく飲ず喰ずにいかなる絶景も目につかず命から／＼歸りし物其土地の善惡云べからずあしくいふと我恥を振舞ふにあたるべし予三都を衣食住の三つに見立て綺語文草に著せしが衣は京を一として二に江戸三に大坂也食は江戸一にて二は大坂三に京也住は一大坂に二京三江戸なるべし委敷評は文草を見べし

婦人の情

家づとに浪華の蘆も伊勢の濱萩と所かわれば自ら生るゝ人の氣魚鳥の味さへかわれば増て況や物の名や言葉の齟齬する事は天地自然の斷にこそ有らめ唯かわらぬ物は人間五常の道男女の色鹽と鶏卵の味ひなるべし三都を始め何國の遠國にても男の形りと風俗容儀はかわらねど婦人は國所により又は士農工商によりて物いひ髪かみの結よふ衣服の好み風俗萬端大同小異の違ひあり違わぬ所は物事に行届かぬと偏執つよく互ひに人の非を上て蔭にて嘲り笑ふ事は何國の浦にても變らず同じ世に住女なれば諺に云不身持の儒

者が醫者の不養生譏るに同じく是紺やの白袴にて猿の尻笑ひといふ類ひなるべし

九州長崎邊の婦人は五六十歳まで眉毛も剃らず又關東の女は上方の男の如く立ながら小便するなどの事を京大坂の女に噂すれば腹筋をよる事なれ共そは東路と筑紫湯千里の道を隔つれば左も有べし纔京と大坂と一夜の船の隔あるにさへ大坂の溫ひは京で暖ひ京のきつひは大坂のゑらひ買ふて來るは調へて來る江戸にては買つて來る上方の借つて來るは江戸で借りて來る大坂の大きひは京でいつかい江戸で恐ろしい大坂でどゑらひは京で仰山江戸では大騒大坂のそふじやさかひは京のそじやけんど江戸ではそうだによつて大坂のこつちへおこしや京で爰へ來しや京でどこあたりといふを大坂では向ふなぞといふが如く又御所方の女中は豆腐屋へ行にも被に惣縫の小袖或は暑中にもあつ綿を戴き江戸お屋鋪方の女中は葵づとひねりづとにて寒中でも頭はむき出し猶又町家の内儀を大坂にてはお家さん京では名を呼び江戸にては御上様上方の御寮人と云を江戸では御新造都て關東にては人の名を呼にさんと刎る事なく様といふ

也三都の隔なれば其筈にてもあらんか毎日夜の都へ入込て華奢風流の都人を相手に見習ふて居る京の田舎の片ほとり八瀬や小原女の形り姿裙は膝切に脛高くかゝげて脚絆を足の向ふにて合せ足半^{アシナカ}とか呼て足の半よりなき藁草履をはき年のゆかぬ小娘の時分から馬を牽牛を追ひ首には臺輪を置て柴黒木或は惣いりやんせんかいなアなどと賣歩行さまいと艶しくもあれど又年とりし女は長階子打盤横槌の類ひ又は酒樽醬油樽種々の荒物を買ふて歸り二十貫目餘の重きを苦なしに戴くさまを見れば興覺る心地せらるゝ又物言ひも自らその荒き質に準らひて和御寮行かよノウ旦那殿よノウなどゝ巽上りの音聲にてさもぶこつ也又男を八瀬の外良^グと唱へて皆惣髪にて髻も結わず^{モトバ}髻をくゝりて卷立公卿方の冠下同前にて齒は鐵漿を黒々と染恰も公家の姿にして業は百姓山がつを兼山に入て樵をなし柴を荷ひ内に居て飯を焚世帯をし女は日々京の町へ稼に出るゆへ此地の婦人が他を譏るに男一人得養わぬ女が何になる物かなどいふよし都て女は外を働き男は内を治る土地の習わし也亭主は皆若狹の和泉のと國名を付名跡を我子に譲り六

七十歳になれば漸に元服して何右衛門何兵衛と名付る也とぞ角力取にあらず醫者にあらず琉球人の下官に髣髴女は八瀬小原のみにあらで高雄の近在に梅が畑と唱へる邊よりも出て皆々頭に帽子を當たり木綿にいろゝの縫有て是には各深き由緒有事のよし傳へ聞り

八瀬や小原女

家づとに五福といふ人以前叡山より下りて鞍馬山へ廻りて京への歸るさ此八瀬村にて駕籠を借りたる事を記せり古今珍らしく今に思ひ出しては獨笑を催すと有てまづ八瀬村下り口の坂本と云茶屋にて駕籠を頼みしに此邊の者は終に駕籠など昇たる事なしと斷を漸頼みて若者兩人を雇ひ隣家にて古き打上かごを借り持來りたるが其駕籠の棒乗物の如く兩端を同じ程に出し扱杖といへば檜の丸太作りにて先程太く中山坂を唯一肩にて飛が如くに行り杖を立肩をかへるといふ事なし肩をかへざるはいかにといふに右に云丸太の杖を以て右の肩より駕籠の棒をくじき持て一二町づゝ柴を荷ひたる如くにして左りの肩を休める

事ゆへ何里往ても肩をかへず杖を立す行がゆへその早き事早打駕籠同前也兩掛持も供人も息なしには困り入たるよし京より纔二三里の里にても斯まで物事の違ふよしを書り是は京に限るべからすいかなる遠國にても道中筋は御大名の通行あるがゆへ馬駕籠の便利はよけれど三都とも二三里片脇へ行ば誰しも是には困る物也予小田原より熱海迄駕籠にて行しに駕籠の價最高し箱根八里の打こしより倍も取なり道は七里なれど道中筋は替駕籠有て箱根にても四里いて戻るときは駕籠昇に便利よきゆへ價少し安くても行き熱海などの入込みは替駕籠なければ七里行て七里歸るに甚難所なれば二日がけになれば價高く取也其時駕籠昇幸ひにて向ふより浦賀御奉行伊豆の下田伊東熱海など巡見の歸りに出合ひ吉濱の樵柚人等役にとられ駕籠を昇來れり此所道のふりわけなれば駕籠をかへり今迄は小田原の駕籠にてよく昇ども人は甚あしく吉濱の樵は朴訥にて形こそ賤しけれども誠によき者ら也扱駕籠を昇は甚下手にて乗心はあしけれどもかの八瀬の駕籠の如く峻しき山路海ばたの岩の上などを飛越へる事自由也日々重き薪柴のたぐひを持

山坂なれたるゆへ也馬にても東海道中仙道は自由也一時木曾の宮の腰にて雨催ふして風烈しければ心せき茶屋にて馬を拵へさせし所馬雌にて馬方も十七八の女也簑笠にていれば男やら女やらわかるべからず茶屋の店より馬に乗る所世話する者も女也藪原の驛を過て鳥井峠の絶頂まで三里の餘の道を日の七つ時より追ふて行還りは又藪原にて荷物にても附て歸り夜四つにもなるべし纔三百文位の錢をもふけんとして十七八の女一人雨風を事ともせず行事也三都の女はいかなる果報の有事やらん我身に埒の明ぬ事はいわす人の蔭ごとのみいひ立罵るは勿體なき事ならん此世にて極樂世界へ生れたる同前のくらしなれば死しては地獄の釜の底敷ならんと思ひやるべし

言葉の變

江戸は日本國の人の寄場にて言葉も田舎在郷の訛りをよせて拵らへたる物ゆへ江戸言葉と云事は甚だすくなし其内關東八州の男女多きがゆへそれを皆取合せたる詞にて世俗に是を江戸詞とは云也古風を守り町嚀に云詞もあり大體京攝の言葉をつめて短くいふがならはせの風儀とはなりけり京都にても上京と下

京と少し宛の言葉も變り有大坂にても三郷にて大同小異あれば是は又四國九州中國の寄場なれば安治川邊の者は西國の詞に馴れ上町玉造の者は大和伊賀伊勢の詞に移り堺の者は紀州和泉路の詞に通じ天滿の者は丹波丹後の言葉も交るべし遠國他境の人の開語のわかり兼ねるは各々生れた所の國言葉にて諸方の人を相手にする都會の者が其國言葉に付合ふて云を説りとは云也笑ふべき事にはあらず凡三都の者程訛る者はなし能々心を付て聞べし江戸にて濱側を川岸と云略語勿論也大坂にて川岸とも云是も略語にて少し變りたる也京に町と呼ぶ所多くて町と唱ふる所すくなし江戸は町と云方多くて町と呼ぶはすくなし大坂は町と町と相半なるべし江戸にて町並よき所にいわば駿河町白銀町大傳馬町石町小田原町瀬戸物町本船町伊勢町堺町葺屋町尾張町木挽町などとして丁と呼かた多し室町田町田原町中興出來し猿若町など町と呼ぶ所も少なからねど町といふより丁といふ方開語に走るゆへ丁と云方多しとしるべし京にて駄屋町お旅町宮川町先斗町とよん所なきを丁と呼び跡は町と呼ぶ方多きとしるべし大坂は半分づゝ取合せたれば

改いはず扱江戸にて日本橋と走る大坂にては日本橋ニッポンバシと町嚙に云江戸は短かく詰て云を是とする所なれば日本橋通りと云をまだ略して通りと計にて通用させ通り二町目三町目杯と呼來れり諸事かよふに詰て云土地なるゆへ京攝者の愚癡なる言葉に根から葉からどふもかふもなる物じやない腹が立てゝ忌々敷ふ怪體糞ケタイクソが悪ふて腹わたが煮くり返つてなぞと長く詞をつゝけて云ば直に口まねをして笑わるゝ事也十返舎が膝栗毛などにも京談と唱へてむりむたいに長くいわせて京攝者の氣の長さを誣れり講釋嘶仕ボツシ我刊本などにも皆是をいひ出して笑ひを取れり誰しも始のうちは所量負國量負にてあの様にむりに云ずとも本囃家の事也とも思ふが習ふより馴るとやら後々は成程言葉の延る所あれば早く埒のあく分別にて附合ふとなしに詰て走る也され共世間一統の通用は仕難し氣障りなる事を氣障キザと詰雨合羽を桐油トウと略しぶらり提灯を只ぶらと計云さればとて略して詰るばかりにてもなし京大坂より町嚙に云事もあり尤流行詞は日々夜々に變化して何國にても所限りにて仕舞ふ事なれど大坂では鰻をうと計云京にては長と唱ふ大坂にて

泥龜ヌルを丸と計いへば川千鳥と洒落るもあれど江戸の俗は御町嚙に鰻泥龜と唱へりニル鶏トリを柏カハなどゝ決していわず猪鹿の肉を京攝にてろくと云山鯨と變名すれど江戸にてはもゝんぢい又もゝんがアと云文華日にひらけて牡丹紅葉など呼ぶ事とはなりぬ此類甚多し思ひ出るに任せ追々云べし

舌着市

江戸の町幅廣き事大坂の堺筋三つ四つも寄たる程也狭き所が京の三條四條通り程有別して日本橋通りは諸侯方の行違ひ牛馬車力共彌が上に通行すれども往來こずみ滞る事なく通るにて廣き事推量すべし扱魚市場は小田原町新場の二ヶ所有て大坂雜喉場の仰山なるもの江戸橋を中に置て兩所に別れり是を河岸の魚と云江戸橋の詰に御魚屋オナサヤと唱へて御本丸西の丸其外諸大名屋鋪方へ持運ふ會所有此二ヶ所の魚市は江戸市中のまん中にて南には芝に生魚市有北には千住に川魚市深川より貝のむき身を賣り出す事夥し青物市鹽物干物類の市は中央に日本橋南詰に立て其餘方角にわかつて所々に有富永町には毎朝古手の市有て大道へ兩側より蕚を敷古手類を仕わけて引擴げ買手

は江戸中の古手屋にて素人も中に交れり又古着古小裂解ものゝ類を竹馬にくゝり付町々を荷ひ賣するもの數多有都て江戸にては古手と云わず古着と云着類の外に古き物を古手とはいへど古着とばかり唱ふるは江戸の方が尤なるべし

屋號不呼

江戸にて問屋を問屋と云商人店を店といふ吳服店藥種店など諸事店といふ借家もおなじく店と云借家人を店子と云裏借家を裏店と家主を店主家主を大屋町年寄と會所はなし惣年寄を名主と云大屋の寄所を番屋と云下役を番太郎と呼て荒物糊焼芋の類を賣らせ辻番家の番をさせる事也御公儀へ差上る諸書付人別帳にも何町何屋何兵衛支配借家何屋何兵衛坪と上方の如く家號を記さず唯何町何兵衛店何兵衛と計にて筆數のすくなき事を是とす苗字を唱ふる町人も多くあれど公儀には通らずよく由緒ある家ならば(ではカ)苗字を呼事はなしそれゆへ家名やら苗字やら通り名やらわからぬ面白き呼名まゝ有り上方の料理屋の通り名の如し畢竟は上へ通らぬ事ゆへ出たらめの付次第なるべし

金相場

金は通用六十目と定て相場はなし錢の相場も四日市にて夜分錢小賣屋寄合云合せる計にて大きな高下はなし一文目といへば百八文也金一兩六貫五百文二朱八百十二文にてとりやりすれば甚だすみやかなるもの也何によらず買物をして勘定をととへば何兩何歩に錢何百何十文といふゆへ小細の算用なくて世話なし也丁銀小玉は町家の女子供は終に見しらぬ物が多く秤は掛目の物を賣る内より外になし二文の渡し船の所には小錢二文づゝ向ふに並べ有四文錢一文出して向ふの二文つりに取る湯錢を以前十文の折も錢取場に二文づゝ小錢並べ有けり近來當百錢出來てより宮寺の門前に並びいる乞食或ひは坊主など只錢百文つなぎ合せて蕙の上に出示あり小錢四文錢遣ひ切らせし人に兩替する事也自由なる事夥し是ら都會の證據なるべし

樽代節句錢

江戸は勿論五里七里脇の城下に疊一間と云は五尺八寸なり半間は二尺九寸也京攝の如く京間といひて六尺三寸の疊は曾てなし猶裏店は五尺間もあり裏家

は大かた一方口にて誠に箱を横に並べたるが如し裏店行抜の路次は昔はとなかりし所前方目黒行人坂より出火して江戸御府内大方焼て焼死したる者多かりしゆへ御公儀より御下知有て今は抜ろうじ澤山にあれど何れも其路次の狭き事漸々に身を横にして通る位中々上方の如く緩やかなる事なし扱裏表とも借家の分には宿替變宅を江戸にて引越と云上方にて家を借時印を入れるを彼地にては樽代と唱へ家の大小によれども裏借家にて金一步表屋にては小さき家にも二歩三步は樽代に出す事也最上がたの式と云にあらず變宅度毎に流れて仕舞ふ事なり中にも繁昌な町柄には樽代三兩五兩もとらるゝなり上方の格にて腰かけがわりに一二月借らふと云ても樽代におされて毎度宿替は出来ぬ事也火事に焼出されし者は先樽代を第一番に入て假宅をする事也上方の町内月別町入用とて借家人にとるを江戸にては節句錢とて家相應に大屋より集る事ならわせ也近頃御趣意後此樽代を御政道有しかど矢張舊の如し何身分相應に金錢の手放せず寐た間も用意をしておかねばならぬ土地なり

地面持

五福子曰江戸にても場所がらにはよるべけれど日本橋邊にて予が知己なる川井何某の居宅の屋鋪は表口五間裏行十間夫も右に云狭一間也それに建家はさつぱり別にして地面計の沾券が七千兩なるよし是も今といふて望時には中々八九千兩にても得がたきよし右らの地面を借手より建家して住居する事也右川井何某の地面に表家裏店とも四五軒有て人数凡五六千人住居する是らを以ても江戸の繁昌なる事思ひしらるゝと也上方の抱屋敷持の如く江戸にては地面持といひて遠方諸國よりも多く持居て其町内には家主の名代有大坂にての支配人家守の如し建家は皆住居人が地面をかりて建て住なり又地面をかり家を建て人に貸して居るも有是を店主と云此振合ゆへ人の身上をいふに家持の掛屋敷持のとはいわず地面持の大地面幾らあるなど云也借家に故障出来しても又火難等の愁も家持の損にして地面持の難儀にはならず然るに井戸ばかりは地主よりのまかなひ也所々によりておかしき仕來りもある物也

土藏造

町並家建の様子は、大坂とは大に替りたり大抵は京都に類して一軒／＼別建也尤端町場末には長家續きの家もあれどよき場所には町々十に七八軒程は居宅店共皆土藏作り也其仕様の丈夫なる事表口は裏白の引戸を惣銅にて包み一二の書付して何枚も引戸の合せ目には雌雄の深凹凸にして目塗土を澤山用意し裏口の方は常の觀音開也二階も表化粧窓の所を大窓の兩開四枚開などに立派に仕立たる物から宛がら土藏に住心地にて何とやら鬱陶敷もの也是も馴ればさ迄苦にもせぬよし併し暑中は暑さ甚しく思わるゝ也橋筋通り筋の中の往來を中通りと云京都の間の町と云に同じ狭き家は通り庭の内少なく往來門口より履物を脱して表の間に置奥へ通るなどいわば芝居の世話場門口の體也年々歳々御觸出し有が故通り筋合通りは大方瓦葺とはなれど端々は叩屋根多く風除の爲細き竹にて屋根板の散らぬ様に伏て手頃な石瓦の割を置たり中位の場所は表側のみ瓦葺にて裏手は瓦葺たるは珍らしまして場末は瓦一寸もふかず也然し予先年下りて再度の下りに見れば僅四五年之内に瓦葺餘程ふへたり追々開けて後々は京大坂同様になるべし

左官仕事

大名小路諸侯方のお上屋舗は勿論所々の中屋敷下屋敷迄立派なる事夥しくそれ／＼の好みはまづ防火の爲大かた土藏作りしつくひ仕立多し大名方にて我劣らじと善美を盡したれば見事筆紙に盡しがたし神社佛閣にも惣土藏造りの伽藍有御柱象鼻計にても左官の手間雜費何程の事ならんやと思わる全體町家の家居にもとかく石灰細工多く瓦葺も一枚々々厚しくひにて堅横に閉棟は勿論のし重ねにて鬼板鬼瓦又は軒別の境目の家根仕切と云ものは上方には曾てなく尾州名古屋邊より適々に見受て京都にては専ら有物なるが仕切の軒瓦を鬼板の如く大きにして色々の模様を付しつくひ仕立にして甚だ立派なる物也元來京都の作事は火早き場所なるゆへにや近來出來の普請ほど猶々左官仕立の作事多し譬へば大工手間百人かゝれば左官手間三百人もかゝると思わる上方にて江戸黒と云本磨の黒塗又彩色入の繪壁など尤奇麗なる事也左官もおのづから數に馴て上手に塗れり土藏多き事町家裏々に有うへ河岸は大方土藏にて建續きたりしかし上方の如く大土藏は稀にして凡二三間

口の小藏にて何れも襖を往來の方へ向けひしと並べ建たり往來の正面と裏手川の方とに家號又は店印定紋などをしつゝいにて置上に立派にあやどる兎角表を立派にするは武家方の風儀自然と移るならんか都て建家普請に壁はすくなく板の方多し壁土の直段高直にて座敷廻りの壁にても上方の如く下塗中塗上塗などと歩あつくなれば高直なるゆへ大體上の分中塗にて勝手廻りは壁下地泥にて薄く塗れば直に板を張る也則は勿論上方の様に壁塗なく皆板圍ひ也京攝濱納屋の惣廁の如し勝手の流元の下しつゝいは稀にて皆板を敷水はけよき様こゝばいを付たり錢湯上方の風呂やの上り場尤板計にて敷詰し也よつて火事の節は悉く焼て壁土薄きがゆへ皆燃る事也壁土の價貴きゆへ自然と板圍ひ多く焼易きとしるべし

橋數少し

江戸繪圖にてもしらるゝ海に添ふ所は南東なれど東は深川本所と並びて遙東へ突出たる土地ゆへよふやく南の方一方なれどもかな川崎品川高繩と東南は皆海にて芝より先江戸の川口にして築地御濱御殿永代橋の邊は大坂安治川口に似たり深川より東木場の

邊は大坂の堀々に同じ永代より川上にかゝれば新大橋兩國橋遙か隔てゝ東橋と大川にかゝる橋四つ也間々には渡し船有江戸を過て川上には千住大橋有爰より今土の邊迄を墨田川と云夫より宮戸川と云川下永代にて海に入る也此川大よふ南北に貫ぬき昔は西は武藏東は下總にて有しが今は東西とも武藏の國にて東に中川戸根川と云大川二流有其戸根川限りに武總の國境となれり故に深川本所に橋は甚だ多しなれども大きな橋はすくなし江戸前大川より西手御城より東手有て橋相應に多しされども土地の廣き割には川すくなく橋もすくなし又大坂ほど橋數多き所も他國には珍らしかるべし

毎日法會

元來江戸は日本國中の集會の大都會なれば人數は多き筈也尤大通り所々廣小路などは往來人にてつまり有て田舎もの始めて此地の人通りを見ては年に一度とか二度とかの大法會でもござるのかと尋るもおかし江戸最負の土地自慢するものゝ口にかけては仰山なる上にまた嵩をかけて兩國橋上には年中朝より暮まで鎧百筋と馬百疋に往來千人宛は絶る事なしとい

へり是も餘り仰山過れど先日本橋兩岸通り南北へ四
五丁程宛四日市京橋邊兩國橋兩岸淺草見附より觀音
前下谷より上野廣小路市ヶ谷御門より四ッ谷新宿高
繩大木戸邊などの往來群集の中に物賣店は大道のま
んな中に並び大名の通行女中達の乗物廻り駄荷付の牛
馬辻駕籠の行返り車力牛曳を始として士農工商男女
老若のざはく通る物から少し物を見んと思わば
連の者にははぐれる也年中晴雨を論せず此位の繁昌
なれば京の御忌詣東寺の御影供初午の稻荷詣大坂二
季の彼岸參今宮の十日戎或ひは諸所の開帳などの如
くの人群集毎日斯の如くなればまして祭禮などの紋
日の群集思ひやるべし然し日の内の賑ひに事かへ夜
は甚だ淋しくて尤夜市夜店なども有所も晝の一割も
人出ず尤十月朔日より二月晦日まで辻々の木戸^{上方}にて
の門しまりて潜りより出入すれば淋しき事又思ひや
るべし火事有て大火となれば木戸くを開く<sup>八百屋
お七狂</sup>
言に淺草觀音の境内明六つの門明より暮六つの門し
まり迄は一萬人の人絶すと云實に往來の人群集計り
見に下りてもよき見物なるべし

昔の人数

五福子の紀行に寛政三亥年五月御勘定奉行より江戸
宗旨人別書のうつしを借りて出し有江戸町數千六百
七十八町家數十萬八千軒人數五十三萬五千七百十人
外に出家二萬六千九十八人山伏三千八十一人禰宜九百
人此外に吉原廓中八千九百四十人右惣人數合せて五
十七萬四千七百二十一人右の外に武家方人數二億三
萬八千三百九十人惣都合して二億零六十一萬三千百
十一人右は宗旨御帳面表體に在江戸の人の別也此外に
當座く日本國より諸大名方お屋鋪へ到着の人々
並に業用見物に市中へ入込む滯留の人數は中々大造
にして其數計知りがたかるべし然らば先右の體にし
れたる二億零六十一萬三千百十一人日々食料の費一
日分玄米一升づゝとして此米高二十萬六千三百十一
石一斗一升也此代金一石壹兩にして二十萬六千三十
一兩餘となれば中々にも能く思ひ見れば仰山なる事
にあらずやとしるせり

京の人数

元祿年間京町奉行所の寫しを予先年より寫し置所京
都町數千八百四十七町<sup>此内千四百五十町は地家數四萬五
千八百七十七軒とあれば其後百餘年を経る間に新地</sup>
子御免残り年貢地也

追々建續既に天明八年の大焼の頃凡京町數二千有餘と見へたり其頃の發句に若水や京中くまん八千軒と有右天明八年より此かた六十三年になれば又々町數家數も増減あるべし江戸の人別帳は寛政三年なれば今年まで六十年になれり是又町數家數いか程ふへたるやらん計り難し

京都より大坂は人數多く大坂より江戸は各別に人數多き繁昌なる所ゆへ諸事人の心の我難なると騷々敷は理の當然也とするべし皇都に長袖と職人多く大坂は商人多く江戸は武家のみ多し夫故京都は風儀神妙にして和らかに華奢なるを本體として男子にも婦女の風儀有大坂は唯我難にて花やかに陽氣なる事を好み任侠の氣風有東都は表向立派を好み氣情強きと思へば根もなく又心も解易き處有て其土地拮据く人多ければ自と墮弱なる所も有人國記には武州の人氣は活達にして強氣也譬へば敗軍にも屈せず再戰に大功を立んと志有としるべし

茶店中宿

京攝に目馴ぬ物は江戸の市中の商人店と並び居る茶店也大坂にていはゞ高麗橋にも本町筋にも茶店有が

如し堺筋松屋町筋といふ様なる通り筋には一町に五軒も七軒も有其さま表の間は落間多く床几腰掛に繪莚を敷中央に朱塗の竈に眞鍮の鑪子をかけ環は渦卷にして三尺計も高く卷あげ暖簾軒釣の提灯には信樂壽鉢菊など通り名を紅にてしるし娘女房は奇麗に拵らへ客毎に始は素湯に香煎を入出て次にお煮花とて相應の茶を汲出て客あしらいは世事よく誠に馴たる物也神社佛院の門前などならば京攝にも有て珍らしくもあらねど町の只中に數軒あれば珍らしき也爰に又四季とも得意有て馴染の茶店へいて客も休む事也譬はゞ大坂にて天満のはづれに住人堺の町に近付有何か用事有ていついつかに逢ふべき事有何れ一方より行時は其日に歸る事ならざれば雙方より約束して今宮で逢ふとか日本橋にて逢わふかと云おり誰それの茶屋は信樂とか山吹とかにて待ているべしとて尋來る也雙方爰にて咄合をして料理屋へ行とかして別れて歸る中宿なれば狀通にても此茶店へ出し置時は早速に届ゆへ便利よく馴染の内に長く待居ても退屈なし増て若ひ者等遊山杯に行相談事には屈竟の寄場也御趣意前には諸々手寄の遊所へ行に此店にて駕

にのり歸りにも又駕にて爰へつくするに用事あれば
此家迄言ひ置有など誠に自在と云べし五福子はらの
譯をしらねば只茶を飲せる計と心得られしやふしぎ
そふに書たり

引越蕎麥

京攝にて餛飩蕎麥を商ふ家は餛飩の方を題とせるに
や餛飩屋と云東都は蕎麥を題とするゆへ悉くそばや
と云也扱加役ものにて唱へ大に違ひのつべいしつ
ぼく杯とは唱へずてんぶらそば鴨南蠻霞花卷などと
呼て數種有それを只詔らへれば皆蕎麥題也餛飩を好
まば餛飩にて南蠻とかてんぶらとか詔らへぬ時は蕎
麥屋といへば皆そばにする事也蕎麥に二種有カケモ
リと有カケはぶつ掛モリは小青樓に猪口にだしをつ
ぎ出す也食物の咄に餛飩蕎麥を始に出すは野鄙なる
事なれど旅する者は先安直なる事より喰ひ始る物故
第一番に是をのする前に云宿替引越しの節上方の宿
茶として附木を配る事なく江戸は悉く蕎麥を配る事也
蕎麥屋もよく心得て附合は何軒大家は^家主どころこと
皆配りて後其代いくらくと取に來る誠に無難作也
奉公人の親判をもて來る是も蕎麥にて濟也こちより

親元へ判取にやる是にも蕎麥也目出度につけ悲しみに
付皆蕎麥にて仕來りとはなりけり是ら馴てはおか
しからね其始の内は獨笑する事也

三都の商人

扱立延たる貨食屋には京攝の如く女給仕に出て是を
仲居と呼す女子衆也今御趣意後はなくなりたれども
女郎屋の掛引する女を輕子と云也町々の仲衆を江戸
にては車方を車力といひ荷を運ぶ者も輕子と云扱
も此上料理屋は格別中より下の料理屋煮賣屋居酒屋
蕎麥屋芝居茶屋惣一統に女をつかわず皆荒男の
若ひ者が運ぶ事也見た目は女氣なけねば我難の様
なれ共其男皆物いひは甚だ諱しく叮嚀也中にも芝居茶
屋の土間の^{上方}場棧敷へ案内或ひは食物を持通ふも皆男
子の役にて大坂のお茶子などゝ違ひて氣轉よく利て
便利甚よろし此餘商人にても物いひ叮嚀にしてすこ
しの物を賣るにもぶせふなる詞は遣わす夫といふが
武家大臣方輕き形りにて出らるゝゆへ朝夕是に相手
馴しと思はる京都にては都て女の商人多くいわば直
段何程と聞て半直段に付ても怒る事今なく少しお買
なされてとある故少し付上る夫では夫では賣れませ

ぬもふ少し／＼と今もまける様に云てとゞの仕舞は始の言直よりすこし引て賣る事も買手後には根にまけて高く買ふ也是皆土地の風儀にて物事明らかに氣長風也大坂はまた一流有て氣短く直段の付よふ違へば直にそんな直ならばこつちへ買ます餘所にあるか尋ねてござれ杯といらぬお世話にほん／＼と云ふを土地の風儀とせり又買ふ者もそふすげなくほん／＼云ふ所は代呂物が能ひか直段が安ひか口錢薄ければあの様に口立派に云と心得得心して買ふて歸る諸事の掛合斯の如し依て一口商ひとて是を大坂のならわせとする江戸の商人とくらぶれば大坂の商人と物いひつかふど存在なり餘り町寧にいふ者は懸直有と云るなど三都によつて皆それ／＼癖あれば土地に馴る迄はおかしき様な物也

河岸の船宿

江戸町内河岸濱に船着とて大坂の茶船屋の如きいと多く濱がわより半町計内町にも有前に云茶店と同じく床几腰かけ出し有て入口に家號の行燈を出し棚に煙草盆火繩箱を並らべ客來てどこ迄と云ば言下にさあ御出なされと船宿女房或は娘など煙草盆に火

を入船迄案内する船直に出すさやうなら御機嫌よくと見送る其手都合のよき事感心なるもの也御趣意前諸々の遊所へ行には皆此船宿より案内する事にて馴染の大事の客となれば船宿の亭主又は女房同船して向ふにての掛引勘定向船宿よりして入用て客衆より船宿へとる事も船中の酒肴も船宿より言ひ付て乗せ行誠に自由なる事なりしに今此儀なく只船計りの事とはなりぬ船に大坂とは唱へ違ふは先大坂の紅梅など呼はなし何市丸大御座などは何人乗り屋形船と云小船にては屋根船にたり三挺網船釣船猪牙小船と有船は何にて行先はどこといへば船賃いくらと家々にて定り有此猪牙船の異名は綺語文章江戸の部にも記せしが享保の頃長吉と云船頭よくさしたるゆへ長吉船名代となり其略語也猪の牙の如きなるゆへ猪牙と云とは湯桶讀にて後に拵らへたる字なるべし

辻駕籠

江戸通り筋の木戸々々大坂の門也見附々々に辻駕籠とて駕籠に尻かけ往來を見かけ次第駕籠へ／＼旦那かごへと呼び居る駕籠屋と云も一町に五軒と七軒はなき所なき所なし門口に駕籠と行燈に記し是又船宿とお

ななく何時でも直に出る也其餘辻々に右云如く出張するを辻駕籠とは云也道中の雲助にはあらずいわば江戸裏店より出る駕籠舁也川端近くへ用有ば船にて行とも山の手在所道には駕籠の便利よければ老人病人など駕籠借らんと思ふ時勝手よろし又直段は大體極り有て道中の雲助の如き餘り餘計にむさぼる事なし辻駕籠の得意とする者は遊所通ひ也四里四方ある江戸の地に遊所なく深川本所根津谷中麻布赤坂など遊所諸所に有けれども當時禁止となりていよゝゝ不自由なれば南に品川宿西に内藤新宿板橋北に吉原千住と此五ヶ所也何れも日本橋より二里半三里に餘る道なれば行計にも隙なれば纔の隙に駕籠にて駈行歸りにも又其地より駕籠にて駈戻るゆへ辻駕籠大に流行るなるべし駕籠賃の相對も京攝の如く直切小切するにも及ばず四文錢何本とか南鐐とか埒早く乗ると直に駈出す事誠に宙を走るが如し人立多き四つ辻にてもエイハアと掛聲して腰をひねり肩には茶吞茶碗に水一杯入て乗せ行とも溢るゝ事もあらじと思ふ計りに駈行也是又能練れたるもの也駕籠舁寒中にも肌をぬぎ入墨見事にして手を盡したる武者繪杯あり

物々として駕籠舁などに入墨有は勇ましく見よき物也間には駕籠の垂を嵐ありとも見附ゝにては手早く垂を上て走れり吉原大門口品川入口新宿入口には夜明前より駕へゝと聲をかけ數十人控へり是は右に云江戸へ歸りをのせる也又町駕籠には垂駕のみにあらずあんぼつ引戸なぞとて大小望の如く有船駕籠是程に自由なる所他國には有べからず

四季の賣物

江都市中店並びの様子は間口一ぱいに代呂物を飾り大坂白粉屋が書林の如く白紙の箱をわくに掘て店先の往來へ出し賣物の品と我名所を記し何商賣の小賣屋にても本家根元問屋などゝ書たりたとへばきせる問屋藥種問屋日本一家江戸本店正銘正本家などゝ書様皆仰山也先煙草屋などは名葉いろゝ有れ共國分館二種をおもとして賣也小賣も刻みしまゝをわけて目をかけ賣京攝の如く捌たるを玉崩れ有とて別に賣れり酒は貧乏樽とて安き樽に入れ樽代共にいくらとて賣日毎に賣得意は德利也菓子屋は大方折の方多く饅頭羊羹にても折入の方多し鮎にても折入也蠟燭の概賣は格別いか程餘計買ふ共一挺々々紙にて卷有

四の五のといわず何ぼの蠟燭何挺と云が如し佛事等勤る内へ油一升とか二升とか油小樽に入て遣ひ物とする是調法にて京攝には珍らしかるべし鯉節など進物にするに箱入の方多し正月注進の内元日より七日迄扇箱買わふ〜と呼で年玉扇并に臺を買歩行ものいと多く吉原芝居町などへは蠟燭の流れ買わふ〜其云歩行有四月の初蚊屋や蒨黃の蚊帳とて大小母衣蚊屋の竹ども賣歩行此賣聲は別に聲よき者を雇ふて賣ると云初夏には簾蔭襖を賣歩行五月雨頃は竹どゆふを割て掛る計にせしを一間計より三間迄を何本もかたげて賣歩行誠に自由なる事いわん方なし酢賣麴賣を始京攝にて賣歩行ぬ物を悉く賣る事所のならわせにて妙也中にも自由のよきは朝々齒磨楊枝を賣物一軒〜お早ふ〜と挨拶して廻る一日も楊枝齒磨さるゝと云事なし是に皆野師の我利本是賣者とあり廻り場得意場有とぞ是らの事いち〜記さんには實に際限なかるべしされど認るうち思ひ出せる分は追ひ〜に解べし

錢湯

自由の足る中に自由なると江戸に限つて直の安き物

は湯と爰月代也外に安き物といへば下肴鯛こわな、鰯、老蛤、馬鹿、淺鯛身むき燒芋此外は一切高直也尤物によるべけれど大坂にて諸品を買ふ割には京都は一割より一割半高く江戸は又京都より一割半二割も高し大坂と江戸にて三割四割は高直なりとしるべし都て江都は武藏野の果にて廣々たる平地の上海近きゆへにや常に風強く土和らかにして泥埃り立所也京攝の如く往來へ打水せんに水不自由なるゆへ市中のどぶ上方の溝也の水を打故香甚だしく乾けば風にて吹散らす故男女共冬は別して縮緬の頬冠りをせし上手拭にて口の邊りを括れり京攝の如く丸綿帽子櫛出し煉の上ケ帽子頬冠り綿は至て稀也故に日毎に湯へ入らねば叶わぬ様にする也其風呂を内にて沸す家屋敷方奥向は格別町家の大家にても風呂場ある住居はいと珍らしき事也旅籠屋にも風呂は沸さず客は錢湯へ行事にして町家豪商の内儀娘たり共殘らず錢湯へ行をならわせとして聊恥る事なし湯屋は大體一町に二軒宛は丈夫に有京攝の如く扇湯櫻湯大和湯なぞとは呼す町名を上につて湯と呼也いわば檜物町の湯とか葺屋町の湯とか扱湯屋の門口に男湯女湯と並び有て此二つの入口をば入し

所の真中に内の方をむき錢取場有爰一所にて男女湯とも兼帶の番也齒磨楊枝膏藥の類錢取場にて取次あり此傍に二階へ上る大段階子有二階は男湯のみにて高欄付二階より往來を見おろす座敷には隔なく碁將碁の關屋^{刊我本席}に似たり中央に二階番頭素湯を釜にたぎらせ客の顔を見れば煎花を拵へもち來る前に菓子羊羹鮮など重に入有爪取鉢杯傍に置有贅澤者はずつと這入て二階へ行二階に着物脱入る戸棚有是へ脱湯代と手拭を持階子を下りて錢を置入湯して二階へ上つてゆるりと骸を乾かす茶を持來る菓子を喰茶をのみ爪など取てゆるりとして着物を着る前にいふ茶店にて休まんより遙安上りにてゆるりとす近邊の若もの勤番の侍衆杯は此二階にて遊び碁將碁盤有て溫泉湯治場の如し又家内大勢の内は男女共幾人と定てふせたるも有未明より夜五つ迄上り湯とて汲出し次第湯は湯舟に沸有風呂は中狹く底深く腰かけなし此湯熱くして骸しめす計也外へ出て洗ふがゆへ中は暗くて晝にても顔は見へぬくらひなり扱爰に三助と呼びて脊を流す男有晦日／＼に祝儀を錢取番へやれば其客來ると拍子木を打勝手より來て留桶とて此客

等計につかふ飯櫃なる大桶に溢るゝ計湯を汲平生の小桶二つにも湯を汲て置事也客は風呂より出て此桶の所にて洗ふ内三助脊を流しに來るたま／＼行者は小桶より遣わす事なし幼子などつれ行近所の衆は此大桶の中へ子供を入置て親は小桶にて洗ふも有湯上に又もとの如く湯を汲んで出し有是らを思へば上方の湯は上り湯は夕方ならではなくいぢましく思わる尤下にも二階にも其邊のよせとて漸講釋見世物の類の番附を張どこで切たのはつたの火事芝居の噂を聞ふなら錢湯に増事なし朔日節句紋日にはおひねりとして十二文紙に包んで持行也桃湯とて桃の葉を湯に焚て入る此日もはやり(やはりカ)おひねり也右云如きなれば豪商の内たりとも家内にて風呂を焚す第一火の用心の爲二には勘定也風呂場焚湯殿を江戸間一坪半も塞がれば此店ちん一間に一步にては上らず桶釜の損じ薪炭高直なれば皆々錢湯へゆくとするべし又江戸前髪結床は別に安ひと云は只叮嚀也首筋耳の穴鼻の穴迄細き剃刀にて自在に剃る也毛剃叮嚀に漉て渡す床主又剃刀にて清剃して漉事凡四五遍にてあかもふけもなき迄漉夫より油^{上方の}鬘^{鬘付也}を附て又漉てよ

り結ふなれば京攝の存在なる髪月代とは雲泥の相違也哀れ京攝もこふ有たき物なりかし

副便所

扱も彼地の潔ぎよき事は船と駕籠潔白なる事は湯と髪月代に限る也よき事をのみ云ばかりにては興ならず京攝もの困るものは雪隠と小便所也男すら迷惑なるに京攝者の婦人は嚙々困るべし雪隠に板圍ひ多くもと下に壺をふせし所はなく大方船板にて拵らへし箱也上り段低く戸は肘壺を打しはなく其上廁へ這入り居る者外よりよく見へる計裙の方少し隠るゝ計也小便所別に有所もあれど大體廁と兼帶也辻々に小便所稀にあれ共只はぢきの板計にて地内へしみこますなれば其邊に散亂して嗅氣甚し百姓下屎は取にくれども小便は取に來らずそれゆへ自然と垂流し也故に男子は往來の透を見て格子先あるひは裏口とおぼしき所などへする事也それも^{鳥居を書きあり}此所へ小便無用の張札有ではづみし折は甚迷惑する事也犬猫のなきがら幾日立ども取捨る事なし小便と犬猫の骸は京攝の如く用に立ぬと聞けり犬は下看の腸を喰ひ廁へ入て糞をくらへば其皮用に立ぬと云が左様なる譯

あるか猫とり犬ひらひと云賊有との噂を聞ず下屎は大屋へ先金をかけて取る事と見へ大屋の息子で糞喰らへ杯惡口の時に聞り下がりの話次手に江戸では河太郎と云を河童^{カワコ}といふ河童の略也物の用に立ぬ者を河童の屁のよふな男だと誣る是は木端の火にて京攝のこけら木屑の火は用にたゝぬ事を誤つてかつばのへと云也とぞ上方の消炭殻消燃を焚落し切炭を佐倉炭此至つて駄ものを駱駝炭と云也割木は惣名に薪と云なり扱も小便を寵愛するは京の事也矢倉小原など遠方へ持かへるは樽詰にし日々茶でせう蕪でせうなぞと野菜の物と替て直切小切する惡口は十返舎が膝栗毛に書たれば世間に名高し大坂にても適々往來の小便桶へ婦人の小便する事老婆幼稚の者は人目も恥ねど若き女の小便するふりは餘り見るべき姿にあらず江戸は下女に至る迄も小便たごなけねばよん所なくかはしらねど皆廁へ行ゆへ是だけは東都の女の方勝公事也京にても浪華にても藝子閨婦が送り迎ひの下男下女を待せて往來で小便せぬは餘程色氣を含みしゆへ也老若といわす往來の小便所に女は遠慮あるべき事也上州信州在の女は立はだかつて腰を突出

してするがおかしくて泊りし宿にてそれをいゝ出し笑へば此邊でしやがんで上方にてつ小使する事也と縁付が遅ひとて嫌らへりと云所々にて種々の忌嫌らひありと思へば臍にお煎花が沸けり以後下がゝりの嘸しなし穴かしこゝ

雑具の名

座敷廻りの道具をいわば京都第一にして諸品器用に立派なる事也箆笥佛壇戸棚の類ひ戸障子襖に至る迄善盡し美盡して割には價も安けれど都て手薄く不斷澤山につかふには爲あしかるべし膳碗折敷手道具の類も是におなじ尤上つがたに有昔道具は格別の事也大坂は見たため不束にして手丈夫なるを愛せり江都は又火早き土地ゆへか諸道具は其日ゝの用を辨じる計にて飾りの道具は見たくてもなき位也是も諸大名奥向は格別の沙汰也中道具にても上つがたよりの拂ひ物など出ればよきは至つてのよきもの下は至つての匱末なる物にて中にも荒道具の類極々匱相なる物多し相應の暮しの商人には袖箆笥一つあらば極上也跡は脊負ひ葛籠を人数程あればよきと見へたり故に佛壇金屏風重箆笥などに美を盡す事を好まず男女

ともちいさき持もの鏡袋煙草入などを金に飽して持て寵愛す拵勝手廻りの雑具は誠に匱相也竈は多く黒塗にて三つべついが大家の分也通例は二つべついに大和風呂走り本を流しもとと云水壺は水瓶とて價高きゆへ船板にて製したる箱に水を湛る是にて大勢の客來をする人と人物は有合と世の諺に違わす夫にても濟もの也尤茶棚の庭戸棚のと並べ立たる住居なし是は中位の暮しかたの内の評也かるがゆへに空地に植木泉水など絶てなく家建詰たれば也場末端々に至りては空地植込もなきにはあらねど御府内繁昌の所柄は大かたが是也まづ思ひ出るにまかせ物の名の違ひし事をいわば上方のいかきをざる切藁をたはし飯櫃をおはち飯臺を膳箱齊とふを飯だい片手桶をざるぼ壺を瓶土瓶を土瓶と濁つていふ蓮木を摺子木神折敷を組入桶の輪を桶のたがなどゝ道具は道具言語食物と部わけのしたき物なれど數多き事ゆへ遊所芝居の事は次の巻に出して此所は諸事混雜して思ひ出るまゝにしるせば重なるも有跡より思ひ出書もあり其心にて讀み給ふべし

食物の異名

江戸近國にて茶粥と餅茶チヤを食する者なく尤製法さへ
 もしらぬ位也粥といへば白粥也正月十五日の小豆粥
 には餅を入れず砂糖を皿に入れて出すアケ閑入して喰ふ事
 也正月の雜煎は菜を入れてすまし也餅に小餅なく切餅
 也お餅をおそなへ油揚を胡麻揚飛龍白ヒキヤウを雁もどき味
 噌赤白とあれども朝々食する味噌汁は中味噌也是を
 おみおつけすまはしはおしたじ味噌にても金山寺の類
 ひを茸物醬油を下地蕪シタを株水菜クラを糸菜すいきを芋殻
 實蜆シシをふり蜆南瓜を唐茄子茄子田樂を鳴焼生節をな
 まりふし太刀魚を太刀の魚隠見豆を藤豆名古屋鰻を
 鹽さいふぐさいらをさんまはつのみをまぐろきわだ
 び下き中し刻牛房を削り牛房煎付肴を煮付焚合物カキアハセを味煮
 ごろ煎を煮ころばし同肴を泥龜煮菓子碗の類を碗盛
 夏は是を茶碗盛柿を樽拔熟柿をさわし柿揚物を天麩
 羅又金ぶら善哉を汁粉白玉餅ス也の入たを田舎汁粉薄皮
 餅を今坂餅數の子の水に漬たるを冷かし鰯をひらめ
 摺身をはんべん魚の田樂を魚田アタラシヤカラ鮮魚アタラシヤカラを無鹽座禪
 豆を煮豆鍋焼を諸事鍋と計り加役鍋鮓鰯鍋白魚鍋鴨
 鍋と云類ひ也合せ酒を割酒

諸品の變名

又小賣するを樽割番傘を大黒傘下駄を足駄履物直し
 を雪踏直し又でい／＼とも云中風をよい／＼ひがら
 めをすがめちんばをびつこがんちをめつかち手なべ
 をてんば明旨を明しい出齒を反齒月役を猿猴坊男根
 をちんばこ陰門をおまんこ置錢を色惚たをおつこち
 糸様をお嬢様お家様をお上様男の子を坊様姥をば
 ア御寮人を御新造貧乏人のきたな口に娘を尼男子を
 餓鬼女子をめろのがきおてんばめらふあまつちよな
 どゝも云也按摩をもみ療治奉公人口入を慶庵肝煎を
 世街隠賣女白ゆもじと云を地獄是も文章に記しあれ
 ど舊清左衛門と云ものは是を始たるゆへ地獄清左衛門
 と云は箱根熱海に清左衛門と云湯有東都には此名通
 り惣嫁をば地獄と云也上方にて十五の涎くりと云を
 江都にて惣領甚六と云それより取て半道役者の名に
 付たる也口入の慶庵も始めし折の人名也下女の通り
 名をお三どんといふ是は上方で宵から睡るお清どん
 の類也下男にお科と云も惣名也信濃より出る奉公人
 なるゆへ然呼ぶ惣嫁を夜鷹屋敷者の下男を折助とも
 火怨とも云大坂にて毫碌と云類也老毫をもふろくし
 たと云子を抱寐さすにだれかした／＼と云所を誰が

よヲ／＼人の(子をカ)愛するにもア、いゝ坊様だネ
エおとゝ様にもおかゝ様にもよく似ていさつせる事
はいのうなぞと口上手をいふやつ也此追従をおべつ
かと云しが近世胡麻すると流行詞に變名をしけり委
くは文章に出たりまた合點ではめそやしておだてる
事をおひやると云子が産れると聞進物をするいまだ
名を聞ぬゆへ御出生様と書て送る是は大坂にては餘
りかゝぬ事にて江戸の方正しゝと云べし子を春に負
ふ事をおんぶしてあげませふと云負れるをおぶさる
と云芝居遊所へ引つきにて只ゆく事をおんぶとも云
ぞめきをひやかしと云尻からげを尻端折と云走るを
駈る中分以下の我母でも餘所の老母にてもお袋と云
中老が女を姉御親類内の子供をあのことと云むか
ふからも伯父様と云幼稚の者はちやんと云わるさを
徒らほたへるをしやれる灸すへるを赤團子をすよふ
かと子供を威す男女とも子供の内を小僧／＼といふ
給金取は其事なけれど年季の奉公人は正月七月十六
日には一日養父入に歸らす惡口に年季野郎と云足の
きびすを屈所ぞげの立しをとげが立たと紫蘇をちそ
と云せく事を大急暇の入る事をお間がござります意

地穢なきをあたじけない氣のちいさいをけちな界性
のないをいくぢがない見られぬ風俗をみちめなさま
見ろ追付取付喰付などもおつつくとつつくつつく
宜しふは宜しくよふなりましたはよくなりましきたき
つふはきつく括るはしばる結ぶはいわへる述懐を述
懷觀音を觀音怪談をかいだん李冠(をカ)りかん喧嘩
をけんか順氣のよしあしを陽氣がよい惡ひと云火事
をかじ樂鐘をやかん菓子をかじ一貫をいかん芝居を
しばやすばくをすばく強ひ事をおつかないあぶなき
をけんのかん膽の太ひを度胸がよいいら／＼するをせ
つかち何ぼをいくら大きいは強氣替つた事をおつな
事夜前を昨晩滅相なを飛んだ事仰山を結構な家の附
物を難作盗人を泥坊知つた顔をするを生聞暇の入る
をおつくうなあほうをべら坊鯉節をおかゝ細いと云
をこまかい太ひを荒ひ味ないはまづい**是は／＼**をお
や／＼馬鹿者をとんちき無益をむだ落るをおつこち
る仕方のなき物を難作物又困り物一向をいつそ丸で
をつぶ荷なふをかつぐ春負て行をしよつて行おふご
を天秤棒つしをたば鬚をまげ髪先を刷毛先風をたこ
登すを上る濕病を瘡つ搔碎をこわすつづぶれるをこわ

れる私をわつちヲ、すかんをいやだ(ねカ)エ行過者を高懷ものあばずれするなをふぎけなアんな歸るをけへる這入をへゑるそちがと云を手前がそふせいをそふしろきつふはきつく也行をあゆむそふでないと云をどふして／＼何にと上方に引ばるを走つてナニ／＼賢を利口頼とをさつぱり頃合を恰好下直に付たを安上り初めてをお初によい暮しをいひお住居な瓜を丸瓜なるをどやぐこそばいをこそぐつたい辛氣なをじれたい身をもがくをじれるあどないをあどけないしどのなきをしだらがなないも／＼ほうづきをほうぶらせ、具を金砂子むくろじをむくかんや刊我本、む手鞠取を手玉取る手鞠唄を鞠唄手製のおこしを豆煎舞の師匠を踊の師匠端唄を上方唄又めりやす倒者をどんだくれすめをしらぬ酒の酔をすぶ六すこし酔しを生酔久しい物じやをお株をいふと云もお前はいつもそんな事すると云をばお前に限る都て上方にて夫々憚りお世話様御面倒様などを有難ふと計にて濟す也お暇申ますと云をハイさやうならと計りよしにしませふをよしましよよしてくんねへよしにせいをよせへ／＼嚴敷を素敵乞食にマア往ておくれを無よと

計葬禮を弔らひ石塔場を卵塔婆色着を施主地べたを地下蒸を吹す門を城戸竹箒を竹ぼうき雷を雷様格氣を甚助妬むをそねむ法界格氣を岡燒餅みすばらしきをそぼろ甲斐なきをやるせがなひ鉢山を箱植犬猫を畜生少しをちよつびり舐つて見いを嘗て見い女を食の三味線引て來るを女太夫巫子をいち子京攝の猿など呼役人を岡つ曳影書を寫し書怪談をおばけ嘶仕を嘶家忠七を豆藏又おで子とも云淨瑠璃を義太夫江戸出來の道行を淨瑠璃一文もないと云を四文もない一文錢を小錢四文錢を大錢百文錢を當百頼母子を無盡好な物にて錢遣ふを道樂いわば女道樂着物道樂と云也かく書つゝくれば實に千言萬句際限もなければども是にもれたるは次の巻に著はすべし是を東都の者に讀聞しなばヲヤ／＼あの人も奇特な人だなアかう知れたる事を書ずともこの事だと笑ふべし

西澤
文庫 皇都午睡三編下の卷

目次

- | | |
|---------|--------------|
| 一流行言葉 | 一婦人の髪 |
| 一戯場の方言 | 一貨食店の名 |
| 一京攝の古遊所 | 一深川の古遊所 |
| 一吉原遊び | 一品川宿 |
| 一内藤新宿 | 一板橋千住 |
| 一廻し床 | 一通と野暮、持る持ぬの論 |
| 一遊所の惣評 | 一訛の惣評 |

西澤文庫皇都午睡三編下の巻

西澤綺語堂李叟著

流行言葉

絹木綿の文庫を四つ手といひ脚半をはき家の附物を造作と唱へ二焚食をおちやと呼ぶなど悉く呼名の違ふ筈前に云如く東都の人の口にかくれば京も大坂もひとつ國の様に心得る其京と大坂との言語いか程か違ひ物の唱も違はゞ三十石の乗合に毎度此論を聞くこと也され共京の者の物靜にそろゝと大坂を誣る大坂者は頭に血多く口やかましく大音にてのゝしる故先大坂が言ひ勝た様也江戸とても貴き人々には聊も言葉は替りたる事なき物也いはゞ文通書狀に書送るに江戸なればとて訛りを入れて書送事あるまじそれにて通る所を見れば前巻に演るは皆中より下賤の言葉也確としたる書籍に記さずしるさゞれども事をかゝす尤貴人方にも言の延縮云ひ放しなどに

は各國の詞を持生れ給ふなれば少しの事は有うちなれ三都と詞をわけて云時には江戸計は耳立て聞え京大坂とはさまで替りたる詞もなし是も詞の延縮引か放すかといふ計の違ひなるべし少しいはゞ京の淺瓜は大坂の白瓜、かぼちやを南京、でかいをどら、い、出來物刊我本をでんば、目疣目ぼこを目ばつこ、辻子ツシを小路、あんばいよしを田樂、おつかきを十能、道の上る下るを東へ行とか南へ入とか、せんどを何べんも、いつかいを大きい、くじたくさんをおこしたおこさぬ、ちろりをたんぼ、此餘澤山にあるべけれど五音の清濁呂律の運びの違ひにていふ程の詞通せずして年老の人に聞ねばしれぬといふ程は絶てなし門々を商人の賣歩行聲などは其所ゝにて賣る物なれば其地の者さへ何を賣るやらんと見届てしる事也京にて蜆を賣る聲にめエゝと賣氷魚ヒカ鮓などは大坂になければ適に上京などしたる者解すべからず皇都の人大坂へ下らば物賣聲は嘸解せぬ者多からん江戸上製菓子屋に京都御菓子と印せる所多くして京大坂は長崎御菓子と印せば長崎にては又京都菓子と云大坂には煙草入きせるは大方江戸產物といへば江戸にては何かの

物を下り／＼とて皆大坂の物と呼で賣る然れば都會の地は名前をかる事御互ひ也是より京と大坂と別にわけず江戸人の思ふ如く一つ國の如くにして上方の事を云べし大坂に流行詞絶ずして追々に詞變れり京攝ともに舊より文花ひらけたる土地なれども近來ますます／＼開けたり言語に錢金はいらぬと心得都ての詞を豪情に云也いは誰それを調伏して誰々聞て大逆鱗などと洒落の言葉に天子將軍家に云ひ賜ふ詞を遣ふ其上醫者の諸生の詞を聞はづり専ら漢語をつかひのぼすはの腰が痛むのと素人らしくいわいで逆上の氣味じやの疝の業か殊の外腰痛するのと大路次操り此太夫が聞てあきれそふ也漢語遣ひ荒くなりて安ふ落つた者は先生也直しを見ても垣外がけを見ても是先生／＼と云ば本間の先生は穢多や垣外と同格にいられる事也そこで易者などが負ぬ氣になつて我内から貼札するに何々大先生と我手にて書て出す大だけ官位昇進の心なるべし所詮斯ふ言葉が高ふなつたれば三都のいきすぎ者に茗荷飯を十年も續けて喰さねばもとへは戻らぬ也子供でも賢ひ子じやといへば嬉しうなく才子じやと聞と嬉しがる時節とはなりけり

不仕合な男が斯ふ薄命では叶わぬ日夜歎息の外なしじや杯といはれてからは此方より何とも挨拶の仕よふもなくなれりそふ若手の調口が高ひから老人の物しらずが夫に付合ふて片言を多く遣ひ血に交はれば赤ふなるけふは暑寒の御見舞に參りましたの御朱印後は世の中がめつきりつまりました杯ととてもない鄙言をいひ出す馬鹿ながらにも老人の事ゆるそりやこふじやといはれはせず道風の朗詠集也と笑ふて仕舞ふより仕方なし爰に又よひ事もあり江戸に似合はぬおまんま、おみおつけ、おつかさん、おとつさんと何事によらずおの字を付る京は素より何にでもおの字を付てお米がお釜になどと乞食が若衆を口説よふな詞つきに聞へるが是も古きより叮嚀に云なれば甚宜し大坂は古淨瑠璃の子供のせりふにもとゝさまの名は阿波の十郎兵衛かゝさんの名はお弓と申ますと云程なれば我らが子供の時分は専らとゝさん唄さんにて有しがいつの程にかおかあさんおとつさんと官位昇進しけりそれも身を持た下人大勢つかふて暮す内は舊からおとつさんおかあさんといひしが是も前に云先生と同格で裏住の子がそふいへば乞食の子

迄がおとつ様おかあ様になつたるは何と口が高ふな
つたではないか役者に親方と云は座頭一人太夫とい
ふは立女形一人にて有しを今は惣座中親方と太夫様
になつたり錢拂ひの中女形中通り迄親方となれば今
に稻荷町の親方も出来そふな物也旦那といふも呼ん
で貰ふてとんと嬉しうない時節也諸事が下から上つ
て来る物ばかりにて上の手に舊からいる者はさりと
は迷惑せらるべし扱も流行詞は又一種別にて觸書も
廻らねど銘々いはねばならぬよふに云がおかしき物
也ゑらい抄子じやは至つて新物也以前の南京じやな
アと同意なるべし何じやいふているはおゆるしじや
なアちと氣じやなア一朱／＼駱駝づれでよふいわれ
た事じやちやかぼんそんならそうかよふなはやり詞
は多く色里芝居より弘まる事也中にも大熱くなどと
はどこから出るやら是もとは病人のたわことより出
たるなるべし扱もはやり詞といへば昔からないでも
なくいふてもおくれぬ小夜あらししよんがいなア松
坂こへたエなども其昔のはやり詞なるべし子守歌勸
進の詠歌などにも我ら子供の時分に聞たがふしが替
りて諷ひかたに大同小異有念佛題目和讃にも人々の

唱へ方によりてか年々すこし宛かわるやうに聞へり
中にも片腹いたきは市中の相應なお内儀やお家様と
か呼れる人が芝居の樂屋詞や遊所の下女が云ひはや
らす詞を聞なれてわからぬなりに云改らるゝは情な
し少し爰にのするば(ばカ)ん／＼と云をどん／＼と
云金棒ひくといふをじやりひく駈落したをどろ／＼
くわすだまつているをだんまり向ふのわからぬ事を
黒幕、相談にならぬ事を咄にならぬ、うぬが手にあわ
ぬ者を人が惡ひ、内證のかひ物を用内、聞賃を役代な
んど素人の若手合がいふをよひ事に心得役者か芝居
者の女房氣取になつていはるゝはさりととは受られぬ
物也町は町らしく昔の詞にいふ通り古風にいひたき
物也其身ばかりにあらず亭主の顔が詠らるゝ娘子供
がそれを手本にいひならふと(はカ)さりととは下策な
る物也さればとておやま買して藝子立座頭物よんで
上菓子たべてなども餘り古風なれば能程に有たき事
也けふも旦那の散財じや位はよかるべしかかよふ申
せばハテいらぬお世話ゑらい抄子じやと云るべし

婦人の髪

扱江戸男髪の風は特に流行有て一概にはいわれねど

武家にはいろ／＼かわつたる古風な髪も有町人は大方銀杏計上方の如く丸髷二つ折などは見當らず上方にても今のんこと云髷珍らしく江戸に本田は屋敷方に適々見受る計也女髪は將軍家の奥女中の風儀は別段の事にて他家にて其風を寫す事は御法度のよし御三家始め御大名方にても其屋敷／＼にて異容あればあれはどの屋敷は何れの屋敷の女中也と彼地にては委しき人は見ても知るゝと也町方女の髪は齡の高下に拘わらず大方丸髷とて勝山のちいさく根低く押へつけたる様也髷も上は小さくまつ直に横へ張出したる也髷附を多く附ずさんぐりと捌がち也月に三度計髪を洗ふをならわせとする也筭も短かきをさし大坂の如く四角に厚きは用ひず簪なども短くして薄手にて甚だ質素也常に多く櫛をさゝす他行にても髷甲の厚櫛を用ひず御趣意前にても朝鮮の櫛かんざしなりしが當時は粉塗の木櫛専ら也上方の如く白粉べた／＼と塗事なく至つて薄く目立ぬをよしとす元來女は男めきたる氣性有所の故なるべし惣體あたまのかけ物髷く／＼り筭さし込の類は幼年の間計にて十二三以上の娘子は見受ず他出にも帽子冠り物を着ずむき

出し也大坂の丸綿帽子の如く見物所にて後より目障りにならでよし途中にては黒ちりめん一重の頬冠りのまゝ着る也町家婦人薄化粧したるもあれど大かたはせぬがち也京江戸御所方屋敷方には老女に至る迄粧ひはすれど京江戸とも一體化粧は薄き方也大坂ほど化粧する所は他國にては珍らし見物所にて野邊鏡取出して自慢らしくせらるゝは實に見苦しき物也三都の遊所にてても大坂は全體拵はで過る也京江戸は目立ぬ様にするを風儀とせり江戸の女は右いふ如く質素なる故器量よき者はそれでもよけれど不器量の上にあたまがじみなると若い女か婆々様か少しくらき所にては取違へるよう也

女用の煙管煙草入扇紙袋履物に至る迄大方男持のすこし小さきを用ふる也煙草入は腰にさして扇は帶の後にさしはき物は草履をはかず女雪踏鼻緒は以前は天鵝絨にて有たれど今は革鼻緒眞田打等也子供の髪を早く置事此地に限れり三才の盆刺より先合髷を置男女ともに同じ此がつそう(のカ)中を又剃○あたまの皿に斯様に置も有扶持(取カ)となる前表を祝する也とぞまた前髪の所も三ヶ月形りに殘すあり唐

子作りは絶てなし扱着物は縫上げして半振袖にして袖口八掛等に赤き裂きしを付す花色蒔ぎ樺色等の絹を模様なしに大人も同前の仕立多しそれにかわりて十三四位の娘子の他所行には緋縮緬板縮等のぼつちをはかせあたかも男鬘前髪仕立にして尻高くからげさせ後の帯に挟む又女の惣名をたばと云男より云詞也十三四より廿頃迄を新造と云廿より卅二三才迄を中年増と云夫より上を年増と唱へ極年をお袋とも婆々アとも云也女の帯の結び様堅に結びて帯の兩端を上下へ引出し尤も強くしめる也抱へ帯は丸で本帯の下にて結ぶ故外からは見へぬ也上方の如く本帯の次に見へる様に結ばす内にては大方が一つ結びに引通したるまゝ也帯をするとはいはす帯をしめると云也平生の着物は譬へ綿服にても四五寸計も裾を長く引すらせ着て居る故近所隣へ一寸其儘にて出る時には袂をかい取して出る是則お上様の印にて下女はつい丈に着てゐる也上方にては端々の遊女が近所歩行するに似たり扱裾長に着た上へ前垂を放さず前垂を前掛と云ひ木綿立に二巾にて丈を疊へ一二寸もかゝる位細長き裂にて近所歩行にたぐり上て帯に挟む也他出にも模様

ものゝ小袖は珍らしく縞物多く跡は無地也三四月頃一つ着又は袷頃に他出すれば薄綿にして重ね着にて出る帯に上方の様にしんを入れず鯨帯と云て晝夜帯多し扱縞物染色の好等は年々歳々流行物有て確とした事は記されず以前予が彼地へ行し頃は大名縞大はやりにて男女共に夏冬をいはず着はやらせしが上方にても四五十年前大に流行しよし大名に緋の入りしを田沼縞と云たるよし此大名縞は予が當推量かもしらねど白の筋を鎗と見て大名の供先鏈幾筋も並びしかと思わるがいかにあらん上方にても以前より流行物を思へば松坂縞より郡山すりはがし染色にても路考茶鴨寛茶伊豫染或は鶯色紋付とはやり茶色(裏カ)がやんで刊我本鶯色蠶納戸茶裏が止て花色裏になるかと思へば羽織の製の長いがお醫者計りに残つて跡は残らず短ふなる八つふじの模様がうせると廠がたが流行など誰いひ合すとなく是が移り替る都會の流行と云也上方は此廿年計り綿結城はやつて餘の縞は皆廢りたり此綿結城は不易の都也今寶山縞じやの女帯に金花棧のと云てはどここの店にも餘計にあるまじ況んや東都の流行移る事の早き替る事のすみやかさ再度の下りには

大名縞は一寸もはやらずまして御趣意此方何かにさ
つぱりと改まつて能い物は高直ゆへそふ行渡らず不
斷着にいてはい男女を云ず綿結城夏は銚子縮少し上
物でめいせん色はかわいろ刊我本牌色とあり併し本書原本
頭書に棹色にあらず草色なりとあり
襟でも裏でも合羽でも草色ならぬものはなし萌黄
に黒みの掛つた色也又どんな色に替るか此六七年跡
まで立横縞がはやつたと見へ辨慶の物を着ぬと江戸
ッ子らしいない杯といふて流行らせる人氣也扱も我
等男のしらぬ事乍ら都ての物のかわりしを少しく爰
に出す上方にて云八掛を裾廻し人形袖を八つ口、前
垂を前掛根子谷袖チコヤを二子、唐奥縞トウオウクを唐棧、川越にて織
る奥縞を川唐、横郎子木綿を棧留、八王寺衿袖口にす
るを黒八丈、生平をさいて湯具を揮、裾除を仕掛
刊我本八王子を黒八丹前を搔卷どてらとも江戸腹當を具
大裾除は蹴出とあり
足腹當杯中々いろく覺へべくもあらず書盡す事あ
たわす跡はよきにさつして其風儀の違ふをしるべ
し

戲場の方言

扱も芝居事をいへば是は又我等の業體なれば委敷記
せば中々二冊や三冊には書たるべからずまづ荒増を

申べし表のかゝり小屋根なしにすつと上迄立のぼせ
に二階口あたりへかけはづしにて看板を毎朝あげて
夕方はおろす也當時猿若町の姿にていへば南北に並
び南のはし一町目中村勘三郎座北へ二町目市村羽左
衛門座三町目北の端河原崎權之助座也是は三軒共西
側にて東側一町目に薩摩座二町目に結城座と二軒淨
瑠璃芝居也大坂の稻荷座摩ぐらゐの小屋也扱本芝居
三軒共南のはしにて木戸口有其隣一間半勘定場表面
に有そこを仕切場と唱へ隣に這入口有其次は矢筈格
子の戸をはめ何枚も有内間中計這入る門有此前へ高
き床几を置上に土間番とは上方にて云木戸也是がサ
アごらふじませくなどといへ共上方のよふに木戸
札など賣る事なし此前に看板見てゐる者を引こんで
旦那ごらふじませぬかといふて勧る者を河童と云な
せかつぱといへば人を引すり込といふ謎也近頃の川
柳に姥が池が埋まつて河童が出とは是をいひしもの
也扱木戸口を直に行ば藝裏棧敷の通り道也刊我本に藝
裏棧敷の後
通道也
とあり此故に一筋樂屋へ通る道有上方の様に奈落な
ければ役者出這入は是を行が故棧敷の後とは二筋に
なりある也此取合板にて肩より上あらし格子連子に

して有花道は戸やより筋違に二間計有てそれより本舞臺へまづ直に花道を付たる物也舞臺と云は上方は略にて江戸の方本舞臺也なせといへば雙方にて場二軒並び宛内らへ引込で本舞臺は能舞臺の如く向ふへ突出し有上にて少し引こめて能舞臺の通りの破風筋り有幕は此向ふへ突出したるだけ引が故に西方棧敷からは幕の内よく見へる也扱舊地にては芝居北側に有たれば藝表の方^{大坂にて}是東也藝裏^{大坂にて}是西也其例を以て今三軒とも東場棧敷を上とする也西棧敷場ども大坂の東同前也爰に又役者ひいきの客などは好んで藝裏西の下棧敷へ行と其後を役者が通つてかの連子から挨拶して行などすれば裏表に花道ある様な利窟で餘計見られると云金太郎也樂屋裏にも向ひ兩隣皆茶屋也樂屋口三軒共北のはしに有是は這入ると直に板間にて履物ならず舞臺の方へ行は北に有り樂屋口に稻荷物とて若立役^{上方にて}居れり風呂場次に囃子町とて囃子方つらりと並び次に作者部屋に狂言方居る一段高みに頭取部屋有此次衣裳部屋是より舞臺の方へ廻つて小道具部屋棧敷の後通り道筋也頭取部屋の前に假階子有て中二階には女形ばかり也三

階へ上る立役敵役大部屋にて西方に圍ふて座頭書出し役者別部屋に扣へる其餘は皆大部屋にてしきる事なし故に上方の様にのろ／＼と素人見物に行事ならざる也其三階の舞臺の方に隔の板有そこより内へ這入れば惣竹の上へ段をのせ舞臺の上より向ふ棧敷の上迄天井はり有是を惣名日覆と云也雪をふらせ又櫻をちらし月の出這入り等は此日覆の上よりつかへばどんな上へ行ふとまゝ也又舞臺の下大せりと花道中程一人せりだけは奈落あり樂屋一方口にて穴倉の如し戸屋の方へゆけず地低ふして水涌て長雨の當座など困る事有三座太夫元を旦那と稱して京攝の座元とは違ひ至極尊敬する事也年八には大公儀へ拜禮に出て顔見せと正月元日仕初とには翁を勤る事例格也一町目三町目には間に役者ならねば銀主計る役也二町目は役者なれば帳元興行人也兩町は帳元あれども京攝にての大勘定の上格也次に大札と云役有大坂にての頭の上格也跡の手代を當番と云木戸とは格違へど東西棧敷番土間番火繩木戸藝者と云もの有て替り毎看板出しの日には木戸口の高みに上つて役者の聲色をかけ合或は一人にてもする事也看板出しの日櫓下

と唱へ繪入番附を町々へ賣歩行扱初日二日目あたり
は一向入なし三日目より評判よき狂言ならば入多
なる月々晦日と十四日が上方の節季なれば六節季と
も常と同じく芝居は節季休と云事なしはやる狂言は
いつ迄もする事也扱舞臺せまく樂屋も下は甚だせま
し舞臺橋掛りはなし今よふ横に成つて通る位の
出這入り口出來たり此後口は囃子方の居所也ゆへに
囃子を下座と云道具立は正面三間の間にて兩方は一
間宛程よりなし遠見打拔の道具などはなしたまふ
拵らへても甚だ龜末の物にして少し道具張込し折は
大道具大仕かけ扱と仰山に書出す事也扱も狂言によ
りて藝表^{當時}北^坊十あたりの下棧敷より出口を拵らへ花
道へずつと板を渡して役者は通つて本花道へ來て
本舞臺へ來る也鏡山女行列の出などは也戸屋花道を
揚幕と云大坂の棧敷前の出孫と云場を高土間とも高
場とも云場は總體深くしてへきり^{仕切}は見物の肩
のあたりに有此へきり甚だ廣し此下行扱也狂言は三
座とも夜の内に七福神、大江山、甲子待などとして上方
花盗人、炮烙割のよふな事をして一切^{刊我本やうなるを}
^{な稻荷町若い衆計}りにて次に中通り計にて稽古修行の爲にする一べん

一べん書狂言にて一場有其次に入枚の役者又仕こみ
の狂言有て此幕切だんまりにて始めて能い役者が出
る也朝五つ半四つ時也それより四建目五建目と段々
に有てもし切狂言あれば前狂言大詰として跡二番目
と云也此中に所作事あれば是を淨瑠璃と云大坂の淨
瑠璃狂言を義太夫狂言と云也十月晦日前には表町裏
町の茶屋共惣一統二階へ飴り物とていろ／＼の人形
を飴りて大坂にて近世はやる砂持正遷宮の折の造り
物同様に種々さま／＼の飾り物有釣枝毛氈暖簾等に
て飴り立甚だ賑わし霜月朔日茶屋より町々の得意先
へ鳴の身と切餅を折に詰配り役者の内では朔日來る
人毎に鳴雜煮をくはせる事定例也町方より此飴り物
を見に來て群集する也年中の内冬は陰氣なるゆへ是
ばかりは御公儀より御免にて夜に入ても灯を上させ
賑わしく群集させる也此餘囃子鳴物等京攝と呼ごへ
違ふ事數多有といへども今迄訓蒙圖會等に委しけれ
ば爰に略す御趣意前には宮地芝居と唱へ湯島天神社
内市ヶ谷八幡社内芝の神明社地等に田舎座の狂言有
たれども皆々御さしとめて大歌舞妓は此三座淨瑠
璃座は二座より外になし五福子の紀行に日比此廣き

繁昌の大江戸の地には芝居は十軒もなければ行當るまじと書有素人丁簡には尤なる事也今芝口の人や四ツ谷赤坂あたりの人芝居を見よふと思へば三四里の道を行日暮に果て又三四里歸る事扱々大儀なる物也以前舊地の頃は雨降りには芝居誠によく入たれど當時は俄雨は障りにならねど二三日も降りつく雨と見れば遠方の見物大儀なるゆへ誠によく入て有る芝居にても入落る天氣さへよければ又もとの如く大入となる町方にて堺町葺屋町なぞとは呼ばず勘三とか市村とか河原崎とか呼で評判をする也狂言初りにも果にも櫓の上にてトテ／＼と太鼓敲く事は絶てなしトテ／＼太鼓をかんから太鼓とて輕業なぞでなくては敲かず芝居舞臺にて大太鼓をどん／＼と敲く事也角力にて門々へ敲き廻る事一頃京大坂の富興行しらしに來る通り也此太鼓に甚だむづかしき因縁有て御城の時を打外に大太鼓打事は芝居三軒と角力とばかり也とぞ扱果るといわず劄ると云也見物のほめごゑは京攝とはさつぱり違ふなりイヨ成駒やア、成田やア、有難いぞ、高麗やア、大和やア、親仁の儘だせ、ヤンヤ／＼上方役者を先所馴る迄は下りイ／＼と云

てほめる也別に名をいわず二町目の下り三町目の下りと云ふよふな心也常に門々を飴をうるを下り／＼と云て賣歩行紋には◎皆渦を書有上方役者は飴とおなじ皆下り／＼と云也上方の割子辨當を幕の内と云上方にて三つ鉢女夫肴を三つ物二つ物乃至五つ物杯と云唄三味せんのゆるし物と取ちがへそふ也聞馴る迄はおかしき事幾分も有て獨笑する也

貨食店の名

扱も料理屋といへば是又年々歳々流行あれば確と定規には云かたけれどもまづ荒増を申べし評判の鳥越八百善と云る料理屋は以前は客の誂らへによりて好きな事が出來たれど當時は内で客をせず精進料理の仕出し屋となりけり町にて三十人五十人の法事佛事あれど誂らへると朱黒青漆とか膳碗家具の類迄殘らず取揃へ引菓子に至る迄揃へて送り膳の提箱も向ふより持來て勝手混雜なく誠に便利よろし諸道具は火早き所ゆへ内に有共遣わす皆誂へる事也因に云京攝とかわつた事は百回忌五十回忌などは馴染の人なきゆへ上方のよふに張込す死んだ當座の方馳走也茶の子にても一周忌より三回忌は輕く七年十三年を段々

先程心易くして當座を叮嚀に勤成丈け張込む所也火

早き所ゆへ近所の付合にても三年七年のたつ時は變り易きなるべし是らは上方より江戸の方能き差略也

と思ふ也扱當時料理に名高きは深川八幡前平清是は極贅澤也八幡社地に二軒茶屋向ふ島に大七武藏屋平

岩昔は葛井太小梅に小倉庵今戸に金波樓大七出店川口お直とて橋場に柳屋尾花屋深川仲町名代の女郎屋也爰に移甲子屋千束に

田川屋駐春亭兩國柳橋に梅川萬八是は書畫會舞の席玄治店に

杉坂坂東三津五郎役者を引き是也爰らを上の方として中分の繁昌な

る料理屋頗る多し少しいは青物町讚岐屋下谷の

濱田屋同町鍋屋王子の海老屋、扇屋、雜司谷に茗荷屋

淺草に萬年屋、鱈屋で極々上は筋違見付外深川屋、駒

形の中村屋、鳥越の重箱うなぎ、淺草に奴鱈、水戸橋

鱈屋、南で狐鰻、靈岸じまの大黒屋、尾張町鈴木、親仁

橋の大和田、人形町の和田、深川の荒井鰻など也茶漬

屋で通りの山吹宇治の里笹岡兩國にて五色、淡雪、蓬

萊淺草菊屋など中々書出したらば際限なし此餘蕎麥

屋居酒屋など始め名代の鮓やてんぶら屋など數へ

る時は一町内に半分の餘は喰物屋なり予が三都の見

立に食の第一に見立しが中々食物是程に自在なる所

は見ぬ唐土にもあるまじく思はるゝ也

京攝の古遊所

扱遊所といへば各若き折は絶へずうぬが遊びに行所が面白く馴染もおほく段々近付の顔がふへいわばうぬが相方に一度や二度あわすとも遊んで歸らるゝ所にして價の高き程餘計面白いてもいはれぬもの也先手近く大坂にていへば御趣意前迄は實に遊所が多過る也いかに我等の様な能樂人にても悉く遊所廻りは出來べからず一に新町九軒にて太夫天神と有ても其餘に店附女郎送り込より下は阿波座吉原塀の側と直段の高下有二に島の内道頓堀是又女郎は伯人古名は風呂屋の垢摺女藝子の古名は茶立女と呼て廊中には女郎の方を買はやらせ藝子はいは座持也島の内は藝子の方を買はやらせて伯人は二段に下る此島の内と位を爭ふは北の新地也是は又島の内程にははでにはなけねども堂島中の島を引受れば客の種も違ひしつくりと遊ぶ場所也次に堀江是はまた一風立て氣性も外々の遊所より異なる所有て女郎にても金猫銀猫二座の一本付などて深き口授有次に坂町は女郎よくて藝子はさまで名高くもなく是は又藝者と若衆を

おもとせし所次は難波新地是は又廣き場所にて小茶屋多く其わりには置屋はたゞ五六軒にて以前は繁昌の所なりけり爰に又藝子のよき種有て官位昇進すれば坂町を飛こして島の内へも出される藝子多かりし是に續きて北の新屋敷生玉馬場先天満靈府是らを位の順なるべし扱名に呼ぶ物の終に遊んだ事もなければ遊所女郎屋のある場所といつば右にもれたるは勝曼尼寺、のど町、上鹽町、眞田山、神主前、新宅、梅がえ、(刊我本、こつぱり下原綱笠茶屋、羅漢前、大根畑、羅城門新堀びんしよ)堀江六町目、藥師裏、いろは裏、新川、溝の側、坂町裏、南新屋敷、髭剃、高津新地、築地など遊所ならぬ所もなく濱側には辻君有市中には白ゆもじとて隱賣女あり石町には町藝子などざつと書出しても此位の遊所あれば市中の若ひ者に濕病しつびやうの多かりし筈也今悉く御禁止となり新町曾根崎幸町九郎右衛門町難波新地五ヶ所とはなつたれど五ヶ所が繁昌するかと見れば迄にもなく市中の色事がはづんで密男や下女はらますが多ひかと思へば程にもなきからは腎水の不作にて沸かぬがたしなみが能ふなつたか小遣ひ金が不自由なか何れ此内に相違あるまじ

京都にても其通り第一位の島原はもとから今の位の繁昌さにて二に祇園新地といへど此又遊所が幾所にわかれてあるやら中々廣大もなき物也川東と稱して極上代物を取扱ふ所は祇園町、富永町、末吉町、東石垣等を云ふ也宮川町、西石垣、先斗町有東に膳所裏繩手に螢二條新地、檀王下、(刊我本檀王の下に八軒とあり)下河原、安井前、五條坂、六波羅裏、橋下と數ふれば川より東は山手へかけて寺と宮と遊所とにて詰つてある也西では内野新地、五番町、壬生などとて所々に色町有て河原には惣嫁小屋有伏見に墨染、撞木町、中書島、大津に四の宮、柴屋町、八町の根婦迄數ふるに際限なく道中宿驛は格別洛中洛外の遊所止つて春夏は蛙の聲をき、秋冬は狐火のもゆるを見る島原廊中一ヶ所にきめたるは中々誰やらの業じや云てばやけども其道の商賣往來にのらぬ者の親や親方の金取出させてもふける者こそ詰らぬかしらねど子を持た下人大勢つかふ人らにはいか程の安心やら夫を有難ひ事じやと悦ぶものゝないと云は誠にめふがしらすとも云べし商賣の不景氣は遊所が有てもなふても賣れぬ物は賣ぬ也

あながち遊所の滅つたからではなし物しらぬ人は世が不景氣なから火事さへゆかぬとはけしからぬ言ぐさ先で繁昌するかしらねどふけい氣な所で度々火事に出あふたら夫こそ宿なしの物貰らひとなるべし世の中の小言をいはず我商賣をじつと守つていれば遅ひか早ひか繁昌の世の中となるべし

深川の古遊所

江戸の地は前にも演る如く三都の内にも人数第一に多き所なれば御趣意前にも御政道嚴しく御府内に限つて遊所は一ヶ所もなく錢湯さへ男女とわけて猥がはしき事を禁じて吉原の廓ももと今の高砂町、浪花町あたりに有たるを當時の處へ替地仰付られてからもふ二百年にもなる事今に大門通りと云は前かた吉原の大門の有た筋の古名残れり我等先年始めて下りし時はまだ遊所が方々に有て一遍通りは遊んで置ねば普く人情を察する事かたし忤とよい加減な理窟を付て遊んで見しが其年の暮に皆取拂ひ仰付られて今は跡方もなくなりましたりそこで思へばア、よい時に遊んで置た事じや今一遍行とふてもいかれぬ事じやと自慢らしく云も馬鹿也親の死目にあふたのとは違ふ

往てもよし往ずとも濟事也さり乍ら其時往かぬからとて金が延てあるかといへばどちらみち其時分からの金はなし見ただけ遊んだだけが徳なるべし當時遺つてある吉原、品川、新宿、千住、板橋の外に深川に數ヶ所有けり極上が仲町、大新地、小新地、石場、裾繼お旅町、辨天、常盤町、松井町、安い所があひる、網打場、本所鐘つき堂、八町堀、影間茶屋、麻布市兵衛町、赤坂麥飯、根津谷中、湯島の影間、淺草堂前などとして御府内をはづれると有たるも上方の様に數百軒有所はなし一所に十軒か二十軒迄也其かはりに女郎屋の外に案内をする茶屋有り女郎屋が十軒あれば茶屋は卅軒も有道理也前に云船宿よりつれて行客も有女郎屋といへば何れも屋體大きく奉公人の二三十人宛はある也茶屋は何れも夫婦下女とかにて四五人ぐらし也是ゆへ上方の格とはころりつと違ふ事也先遊ばんと思ふ時は此茶屋へ行どこにいゝ女郎がある云事を聞てそこへ案内させる事也三人連の内一人外の女郎屋になじみあればわかれてそこへ案内させて泊り翌かへりがけに茶屋にて出合ひ連立て歸る也又仲町は女郎より藝者遊びをおもとする所にして藝者

の置屋を見番といふ子供藝者を羽織と云是は二人一組として藝者一人の料にて二人來る也羽織とは腰より下は賣らぬといふ謎也地前にて出るをでへしと云仕替に出すを鞍がへと云町の牽頭を野翳間タイコと云翳間を男藝者と云仲町に限る通言は中興中本と唱へる書に委しければ略す粹書も中興のは佳作稀也京傳の作仕掛文庫、二筋道、虎の巻、粹好傳の頃の作おもしろく實に其地に遊ぶが如し爲永春水、鼻山人等の作は一向見所なし中にも八幡鐘は此地のきぬくに遣ひ京の建仁寺の陀羅尼、大坂北の新地の寒山寺鐘に同じ

吉原の遊び

吉原は東都第一の廓今さら云までにも及ばねど昔繁昌せし地なるべし諺に吉原は女郎千人客一萬人と積りし所のよしさすれば客十人に女郎一人なるべし今は中々五人づゝにも當るべからずされども舊そふいふ割なれば女郎一人に客一人宛にて毎日一年内續けばよけれどそふ絶ず客人の來るにもあらず亦廓中五丁町なれども御府内の地の割なれば八町計は丈夫に有矢張通り筋は三筋にわかり先日本堤は山谷より曲

つて八町有是は古へ千住川のきれこまぬ様用意に築し土手なるゆへ日本國中の大小名に仰付られ築たるゆへ日本堤と云よし淺草の方より行には馬道より田町にかゝり山谷より四丁目大門口へも四丁位中央にて日本堤へ出る事也此田町は兩側茶屋也爰より廓中へ案内させて行客あり又山谷は今戸橋迄一町の間を堀と云船宿也船にて爰へ來て船宿よりも廓内の案内をさせる客あり日本堤を直に行は千束金杉根岸の方へ行道也山谷より八丁目に左の方へ下りる是を衣紋坂と云也時に右手に高札場あつて武家たりとも鎗ならず馬駕籠ならず扨制札有是より大門口迄の茶屋を五十軒と唱へる同じく案内する茶屋也爰を七曲りとも云道すこし曲り有て大門口を入る正面仲の町とて往來廣く兩側皆茶屋計也店をおろし繪莚敷物敷つめ二階表座鋪には高欄手摺付にて往來を見おろし下より廣き段階子をかけ大體茶屋は間口二間半三間也仲の町突當に秋葉常燈明高燈籠有是より雙方へ道有兩方の筋へ行仲の町より江戸町一丁目二丁目又京町すみ町など呼て揚屋町女郎屋軒並びに有是も廣き筋にて大道まん中に溝有此上へ見事成る用水桶覆に揚屋

の名を印して是を天水桶と云店つき女郎を見るには右側を先にとか左側を先にか見廻る也扱仲の町の兩方の筋を西河岸又伏見町とて是は安女郎屋町也夫も雙方とも内側計にて外側は高堀此外大溝にて廊外也口は大門口一方よりなし女郎駈落等をさせぬ仕方也廻あらばしらず大門口より外出る所いつかななし扱も女郎は高下を論せず近所遊びには出す事をせず年中部屋か店の間より他行ならず籠の鳥かや恨めしきとは是也廊中紋日は細見の圖にも有てよく人のしる處なれば深くはいわす年の暮門松飾は仲の町軒毎に有て雪など積れば山の如し誠に仙境へ入ると思ふ心地す揚屋の門々にもりつばに門松を建る也二月廿日過より仲の町大道まん中へ下より少し土手を築上櫻の樹植て花盛り頃誠に麗わし盆は燈籠とて仲の町茶屋家々好の燈籠人形造り物又見事也續いて俄として女藝者男藝者種々の所作踊り等を仲の町茶屋の門をして廻りて妙也代神樂二度の月見戎講などは揚屋にて家々にするなれば仲の町さしての事なし此紋日くは勿論晴雨を論せず夕方には客有内もなき内も茶屋の女房娘など店先に出て待受る客來れば二階へ

上て男藝者女藝者來つて表二階に客つかへれば下の表にて騒ぐ仲の町張りのおいらんと云は皆お職の飛切にて新造禿を隨がへ向ふに箱燈灯を一對もたせ好みの襦ウヂカケにて仲の町へ練り出す先に右側を通れば後には左側を通る中にて茶屋の亭主女房など挨拶に出てちとおかけなどいへば此店に腰をかけ往來の方を流しめに見て長ききせるにて煙草のむ客衆の來た來ぬの噂は付そいの新造よりいわせるのみにて詞數甚だ少なしおいらん買始ての人は此時お顔を拜み置て茶屋より揚屋へいひ込む也扱此仲の町ばりに出るおいらんは家々に五人も十人も有る物ではなく多く三四人跡は二人一人といふ位にて此次を晝三とは云也晝夜三步と云心なるべし然し一概にはいへず晝貳步で夜も貳步有晝壹步貳朱で夜貳步もありそれは細見の口に於こんな事書てある處に印し有直が違ふとて直切られもせず扱仲の町へ出られぬ分は店をはると云て晝店夕店とて姿を吟じて店の格子の内につらりと並ぶ事也此時店清セウカキ攪とて新造禿がチャンラくく三味線をひくとは芝居ではすれども是も古風なりとてか今では餘りひかせる内もなき也扱仲の町

ばりの客は其時見定め其次の女郎を見立に行は茶屋男に提灯もたせ家別に覗ひて格子先より面像を見届て氣に入た女郎ある内へ上る事也此餘田町、山谷、五十軒より案内させて行も是に同じされ共それはお職のおいらん買の客はすくなし先茶屋といへば仲の町からでないと聞た所の名が悪し極上の遊びは茶屋よりおいらん方へ尋にやるよろしひ何時でもと返事が有と其席の藝者男女とも茶屋女房付添ひずつと其揚屋へ行御客様だといつて大段階子を上り先見附の大座敷へ通し又改て酒宴になる所へ揚屋の内に又家付の藝者有それが出て客人の俳名とか表徳とかを仲の町の藝者よりよく聞取て何なりと一寸突出しの歌謡ふておかしくもないに追従笑などして少しく座敷になりかける所へ彼おいらん其間へ來て客人の隣へ座して酒事になる時移れば仲の町の藝者は引取跡あつさり飲んで聞へ廻るとなるとおいらんの座敷へ案内する各々部屋は二間宛有て仰山な夜具敷有り向ふは床の間、違ひ棚、重簾笥、立琴、雙六盤などを飴衣桁に晝の襦をかけ有次の間に岩永火鉢に眞鍮の茶瓶素湯ちん／＼と沸有ずつと體の埋るゝ計の重ね夜具の上

へ上る上着を脱せ帶をとる杯は皆新造がする也紙入、提物、扇子の類ひ羽織もたゝんで違ひ棚へちよんとすへる酔過たれば袖の梅など諸事粹書と印の文句の通りおいらんは手水へでもいたか見へす寢た顔して聞いていると次の間にて最前の肴るいを戸棚の小鉢重鉢の類へ入ておはちにおまんま取らせ置てもし客の咳拂ひ杯が聞へるとこふしておけばお客がのちにお茶漬の時勝手がいひと聞へる様に云て又よその間へでも持ていて喰ふやつ也翌朝早く仲の町へかへつて朝腹直しにて飲で返るも有たゝうつて一日仲の町で遊んで晩に又出かける事も有藝者は翌朝どふなさつたか昨晩はなぞと出て來る直にひつ付蛸也祝儀／＼におつたをされて重き紙入も忽輕くなる也夫より早くかへつて又出直すがよし二回目はまだゆるされるが三度目は惣花とて其揚屋々々に格式有て茶屋の亭主か女房に相談の上馴染金を出す也そふなると誰々の客人也と極印つきになる事也そふする内に其揚屋の内に買ふて見たいと思ふ女郎有ても買われず仕方なしに我佛と念じ奉つて今迄のおいらんを買通す也外の揚屋の女郎になじみ先の馴染のおいらん方へ御

不沙汰になるを新造でも聞出すと向ふから大門口に張番などして朝かへらふとするをとつかまへられ連てかへられ悪くすると荒事をくわされ甚だ外聞を失ふやつ也是は極上の部也中は茶屋から案内せられ二度目は茶屋なしに直に女郎屋へ行格子から一寸物いふてマア這入れで這入ると揚屋の男是は入らつしやれませと二階へ上る茶屋は都て二朱に付百文とか二百文とかの世話代を揚屋より取茶屋なしに行と揚屋の男のもふけとなるゆへゑらくちよん／＼といふて世話をやくやつ也其かわりに酒事すんで聞へ廻る時へいお勤をといふて勘定を取にくる書付を見れば滅法界に酒が入たか女郎代には付掛は出来ぬが酒肴は書て來次第なれば飛だ目にあつたと思ひ乍らも拂ふやつ也是中位の所是が下は甚だ多くして西河岸なんどは貳朱店ゆへ物いひはしたなく座敷／＼騒がしく一時／＼に時でござい／＼と拍子木を打廻るゆへ其度毎には女郎親方の前へ判取に行といふ言立にて餘計させては跡を煩らふゆへ傍輩の部屋へ寢に行やつ也是を田舎客がおこつて番の男を呼つけなまりちらけて女郎の不足を云其いひ草爰の内は旅籠やかそれ

にしては枕が二つあるがどふした物だ一人寢なら勤をかへせ脇の女郎屋へ行のと遠いからねぢかけるも構わず女郎は外でよく寢ていて起されてエ、いめいめしい摺子木やらうだとばやき乍ら出て來て客の顔詠めて此客人は何だな何もそんなにどなる事はありませぬわな來よふが遅くなつたはわつちがわるかつたこらへておくれよ杯といはれると海鼠に藁で直にぐにや／＼となる男笑つてさやうなら御ゆるりとして行跡は寂寞として物音聞へず是らがまだ下の上也女郎が客をふるといふは遙昔の事にて中々ふる事はなし然し爰に論有ふるといふは□□で降るの也□□計が勤めではなし雙方惚あふて咄のもてる時にはあながち□□計でなし女房きどりにもなつて合ふべし邪魔なすかぬ客だと思へば物敷いはすと早ふ□□てしまひ跡からだをそむけてよく寢るかそれも寢ささぬ時には右田舎客のよふにほつておいて脇へ行やつ也紋日物日にこそよく賣る女郎は廻し座敷とて女郎一人に客二人はとれども今時は中々そふ客が大勢ないから我床の内をはずすのは廻し座敷にて他の客にはさら／＼なし朋輩の部屋へ寢に行也紋日物

日は仕方なしこちはふらてん我自刊本に買ふ向ふには正月は誰益は誰と不斷馴染たまひの客有て往も行ずとも約束通りの金をとられている客あればとうてさしつかへる事有其時女郎が上手じやと始から打出して乃至あちらの馴染の客は御屋敷だから早く歸らつしやるから其跡で直にくるから待て居ておくれよどふも間が悪くてなどと初會から色氣取になつていはれると夫でもおらいやだけへるなどともいはれずいて來さつしいよしない苦勞をさせるなアチャランと歌になる時の立役氣取になる物也そふ立こかしにする女郎などは古狸のこつ長也下のぶんは深く其道をしらざれど咄にも毎度さく癡情は推量にも書る物也宵にお勤といふ折に出すのは邪魔だ翌の事と延して女郎をゑじめて立ふりさせたりそれが出來ぬと友達内へ手紙を書いて無心にやりそれヤウコシチも埒明ぬ時は奴質とて物置納屋へほりこまれといは始末やとて其人を引とつて身のまわりはいで取り價にかへて算用する廊中に長屋と云ひ三ヶ月長屋何長屋とて百宛にて夜鷹小屋同前の細き路次の片側に並び有所へ這入る由當時なけねど淺草堂前鐘撞堂綱打場麻布などは同じき所の

由是を鐵炮店と云也扨此廊中の名物といつば竹村の菓子、堅卷煎餅、最中、双葉屋の羊羹、山屋豆腐、甘露梅と云は京攝の太郎梅也仲の町茶屋家々にて手製にして客先へ配る也男藝者は大體常盤津、富本、清元を語る故何太夫とて太夫名也長き羽織を着て頗横柄也一寸當ぶりにて權兵衛が種蒔位を舞ひ狂歌發句の地口位を云て花をせしめる也女藝者各酒を能く飲む事長鯨の百川を吸ふが如しよつて鯨者と近頃けいしやの中本にはこち付たりおいらんはおいらなれど京傳は老亂ライランとこち付予は於の字を不用より於アイラン不用とこち付たり我自刊本おいらんはおいらにて新造しんぞうよりおいらが所の太夫様といふ心にて新町の太夫をばあんた天神をまんたといふにおなじ心なりとあに地廻りとは廊中の若い者の頭にて喧嘩等を一番に分入る也上方のぞめきを冷かしと云是も鳥越に昔紙漉の職人大勢住て紙種を水に漬濕る内を廊へいて店付をぞめき來る内紙が冷けると云通語なるよし文草にも記置たり都て北里廊中に限る辭甚多しごんすは新町のなまし也是又いと澤あれど諸書に委しければ略す元來吉原女郎は諸國より抱集しとは云物の越後者至て多し其國々の訛りを消んが爲吉原育里訛りとて一家の口調を立し物也今岡場所所外々の遊へ鞍がへ

に出るも有故其詞をつかふが故客の輩もつい夫をまねて廓詞やら我利本吉原詞やら混じる事とはなりけり予

は別に馴染の女郎このもしからず只揚屋の容體座敷の様子など見て置ねば著述の爲に不自由なる故同じ揚屋へ二三度も行し事あれはと揚屋をかへて遊び見しが先一二をいはい岡本、岡田屋、玉屋彦太郎、尾張屋、久喜、万字杯也是は何れも大店とて當時盛んの女郎多し何れも座敷の建方に大同小異あるのみにて差て變りし事なし久喜、万字杯は亭主甚濶達を好むと見え大座敷より次の座敷へ大廊下を架し仰山にはでなる普請也お職のおいらん京都より抱へ入れしもの甚だ多し日々の雑費入用などを思へば芝居一軒位の人數掛りて夥しき暮し也客も餘程なけねば勘定あふまじと思わる扱も此五軒杯は芝居役者などは決して客にせずそれと見れば茶屋へ斷りかへす事也夫故町人とか郷士とかに化て行事也役者など彼地へ着まだ人のしらぬ内にちよつと化ていて試みをするは出来れど舞臺へ出るとさつぱりと相手にならぬ也客の最負にて酒事には誘はれて仲の町茶屋へは行女郎屋亭主又は女房役者を最負にする者夫は勝手と云ていは

ば亭主の間にいて咄して遊ぶ事也心易くても我利本屋へ行事ありまた揚屋の亭主女房らの最負役者は勝手と女郎

の間へは通す事なし是に付ては種々無量の話もあれど書出せば實に際限なし深川の有し時分は當時の通人と稱(すか)る人は仲町のみを愛して吉原を野暮などいつて能々遠國の客などを連行常に深川遊びの方はづみしを深川なくなりてより廓中へ行ふより外仕方なき故通も不通も吉原計と成りぬ大坂にて新町を遙亂國と云て島の内を粹がつて遊び所とせしと同日の論にて有し也今芝居は近邊へ移り芝居町三手八吉原五なれば皆濟拾六町なればひとつ廓にすむが如し昔吉原も御府内に有て芝居も御府内に有し頃は芝居へ行ふか吉原へ行ふかと云ふ心にて思案橋とていまだに古名遺りし橋も有大坂の東堀の思案橋は何の思案をせし所やら名儀わからすといふかし吉原の古圖杯みれば六法丹前とて古風な姿を畫し有頃専ら流行し成べし丹前とは丹後俟の屋敷前に湯屋有て浮世風呂など呼で湯女とか垢摺女とかを連て遊ぶ事ありしゆゑ丹後前と云を略して丹前と云六法ふるとは肩の行の短かひ着物に兩手をふり大小長刀を十字

にさす故四本脇へ出る兩手を入れて六法となるとは京傳種彦あたりの書物に出たるが確とそふかとも定め難き説なれどマアそこら成べし廓の者をクワッと云は仁義禮智忠信孝悌の八を亡なせし族とて亡八とも云又能くとは大坂新町開發人木村又次郎豐太閣より瓢箪の馬印と馬の轡を拜領せしゆへとも云が近來八水隨筆とて享保前に大坂御城番に見へしお人の隨筆には舊吉原の頃は地形を丸く取つて真中に町を十文字に取り揚屋町として廻りに茶屋を住せし故④かやふな形ちにて有し故轡也とあるが是も尤とも思はる都て物事に正しき物は何の書にもひかへあれどか様の事は覺へても覺へずとももの事ゆへ書し物なく後人色々の考へを付て書事ゆへ道理に當つたるをよしとしてそれにする事也

品川宿

品川宿は東海道の咽喉なれば又陽氣なる事此上なし高繩より茶屋有て案内茶屋也品川宿の中央に小橋有夫より上は女郎錢店橋より下は大店也女郎屋は何れも大きく濱側の方は豫先より品川沖を見晴らし遙向ふに上總房州の遠山見へて夜は白魚を取篝火ちらつき漁

船に網有釣あり夏は納涼によく絶景也女郎は十文目にて難用は別也先茶屋より白丁とて白の大徳利を提て女郎屋へ案内して藝者を呼女郎屋に藝者有臺の物有也大臺小臺と有を取酒宴始る内女郎出て向ふへ並ぶおりやあの子身共はあの女なぞと見立すみ酒事一寸有て次へ出改て酒宴の席につき部屋も隨分吉原にまけねば夜具も北里及べからず我自刊本部屋も隨分吉原にまけねど夜具は北里に及ぶべからずとあり先吉原はおいらんの見識高きは勿論なれど中位の女迄が上を見習ひ少し見識ばる氣味合有品川新宿始外々には其見識なけねば早く馴染遠慮有間敷初心な者も早くこなしてかゝる氣味合あれば下策にして賑やか也爰も役者藝者は照らして客にする事なし女郎屋頗る多し中にも土藏相摸、大湊屋坏名高し岡側の家は後に御殿山をひかへ濱側は裏に海をひかへ往來は奥州出羽より江戸を過て京西國へ赴く旅人下る人は九州西國中國幾内の國々より行旅人共參宮金びら大山參り富士詣鎌倉大磯の遊歴やら箱根の湯治參勤交代の大小名貴賤を論せず通行すれば賑敷事此上なし表の間は板敷にて玄關構へ片店は勘定場にて泊り衆の大名旗本衆の名札を張中庭泉水廊下を架

し琴三味線の音など聞へ道中女郎屋の冠たるべし
名物は鮮魚をおもとし品川海苔柳鰯白魚貝のむき身
の類

内藤新宿

次に内藤新宿と言は大城のま西に當つて甲府及び青
梅街道の咽喉なれば是又賑敷事限りなし女郎宿屋も
家居廣く茶屋も甚だ多けれど舊内藤侯の屋鋪地にて
内藤新宿と呼山手にて田舎街道なれば百姓の通行多
く適に奇麗なる往來は堀の内詣の通るのみ裏手は多
く藪か畑か崖地にして閑靜也客は武家出家多くして
表構へは品川に同じ直も上は十文目にて錢店六百文
四百文
と交りて住り引手茶屋が酒肴を取よせ遊ぶ事也品川
にも爰にも大店には風呂場仰山に建て錢湯の如く
客に入らせる上方には餘り無かた也次に板橋宿は
又中仙道木曾街道の咽喉なれど品川とは一口にい
れず至極陰氣也女郎屋も餘程下品にして皆錢店に
道中筋女郎屋と同じ

板橋千住

次に千住は奥州街道咽喉にして板橋よりは宿も廣く
家居遙に奇麗也大千住小千住とて大橋を中に置て南

北に分り小千住の方を掃部宿共云ふ此傍に小塚原と
て仕置成敗場有ゆへ土俗こつかつばらとも云女郎錢
店六百
四百也江戸のま北なる故淺草邊の者らは吉原の安

女郎を買わんより此千住の方よいなど、唱へて繁昌
する也一體の女郎に何も變りし事はなけね共岡場所
宿場の女郎共は殺伐にして賤しき事限りなし都て錢
店の所は暑中蚊帳を垂る時節は薄綿の夜着是をかい
まきとて敷物は比翼ござとて細き寐ござを二枚つづ
きとして縁をつけ敷す冷氣に赴けば蚊帳を取置夜具
と替る事也爰らに又贅澤有て定めの外に百文増にて
夜具の上をきせる也大坂卅石の如し一笑に堪たり予
が文章にも書しかど一笑話なれば爰にもしるす吉原
の女郎客衆へ手紙を送るも仲の町花盛りとか燈籠俄
などの事を書いて賑わしければそれ見物がてらにちと
／＼おこしなどと書おくるを常とす千住の女郎に文
送る程の事もあるまじければ馴染の客へ送る文に菜
種も今を盛りにてよきハツケヒナゴロ磔火炙もおわしまし候まゝ
ちと／＼御入らせと書送るならんと惡口をいへりさ
もあるべし去んぬる未の三四月頃にて有しが岩井杜
若故人となり其弔ひに押上の御寺へ葬式有て予も馴

染の人故送りしが帳場は三座の作者狂言方の受取ゆへ此人數跡にて吾妻の森に名代の鯨のすつぽん煮を賣る家有そこにて酒を始て皆々酩酊の上予にいづこぞ奢らせんと附隨ふ者凡十一人我ともに十二人も兼て此千住あたりの遊びも滑稽ならんと思ふ上多人數なれば吉原にては中々安上りに上るべからず錢店の遊びは天窓からしれてあれば先千住行と相談極り中にも年がらや天窓役ゆへ鶴屋南北頭取と成り向島より橋場の渡し迄に鬨をこしらへ十二人の者にひかせ誰一誰二と番定り扱一の鬨を引たる者は女郎屋にて十二人よしあしを論せず並ばせて一の鬨の者一番に此女と思ふを取選り取らする事也二より段々／＼相方定める此内あの女をと思ひても末の鬨に引當つた物は選り屑を取る事也内談にて取かゆる事をゆるさずと言渡すと皆々一統に妙也とよろこび扱宿場より取よせる酒は惡酒にして高料也と頭ぶんよりいひ出し酒屋へより五升とか七升とか樽に詰させ外に肴を誂らへ溪齋英泉子畫師也故人となるの親類と聞しゆへ若竹といへる女郎屋へ行藝者一組呼で酒を始向ふへ十二人の女郎並ばせ一の鬨の者より段々に女郎を定させ我隣

り／＼へ並ばせて酒宴となり肴には何なりと一藝をさせる事にて戯れしが古今滑稽の司也と其時の者は後に迄是をいひ出しては笑ひしがか様な惡ふざけの遊びにはこふいふ場所は妙也吉原にては見識有て何か女郎の方より故障を云出し出ぬ者有り色氣をはなれ様子をせずば見ためが奇麗かきたなきかにて遊戯滑稽は多かりし江戸近くには右の五ヶ所より遊所女郎屋といふ物絶てなく淺草より三里東北に松戸と云有又四里東に船橋と云有何れも田舎の宿場にしてどこかむさくろしく東海道品川宿の上の宿に川崎と云有それを入て遊所八景といふ戲書を江戸にてせしが誰にかあたへて覺へねば爰に略す以前深川中町新地小新地辨天スラフツ繼根津谷中等へも遊びに行しが本の土地よりかわりしのみにてさせる珍説と思ふ事なく只上方とは茶屋揚屋の變りの有て女郎は内に置すへ客の方から二階へ上て呉るか呉ぬかといふが習ひにて上方のよふにちと呼んでくれのあなた方は土地におなじもたんと有ふがお事かけの節はなど／＼せりふ打事は絶てなく裏表の相違なるべし

廻し床

或京攝の人予に難じて曰右の遊所の話にては紋日物
日にても常々でも客二人と三人さし支へし時は廻し
床とて現に脇外の客と寐に行をきよろりと閨屋に只
一人寐てまじくじくと待てゐるは馬鹿くしき物
ならずや予答へて京攝の如く花と號して切賣をせね
ばさもあるべき事也上方の女郎を呼にやると今一寸
餘所へ花に往てじやといへば客あるにあらずや尤な
じみの客には座敷計といふもあれど先十人が九人は
客に往かば逢ふべし然らば一晝夜かけて五軒へ花に
往かば五人に逢ふべし江戸の方客にあふ事廻し有と
ても數十人の廻し床なく二人せいさへ三人なるべし
數すくなくなれば其情深かるべしと又難じてさるか
らに逢ふ時呼て買ふ他の客と寐る間の花は買す答へ
て夫こそ客の薄情ならずや江戸の方濶達にて心廣と
いふべし扱其廻し床も前に云ふ如く實に客あるやら
ないやらわかりし事なく先友達と三人連れにて揚屋
へ行く隣座敷とか向ひ座敷とか近くに銘々の間を構
へて聞居れば其客深切らしく世辭よく是は爲になる
客で有ふとかどこか好きな所が有れば中々そはくと
出歩行す初會よりしみくと咄しのもてる物也同じ

つれにても其相方の女に好れぬと不奉公してよそへ
寐に行冷たいふとんに獨まじくちするからこりや廻
し床へ這入ていやアがるといろくと氣が廻り廊下
をばたくと上草履の音が聞へるとうせたなと思ひ
狸寐入して待て居ると外の間の女郎にて此間の女郎
來る共客寐入りしと思へば起そふより朋輩の方へ寐
に行などする也

通と野暮、持る持ぬの論

翌日三人返りがけに直に評判する事にておまへは夕
アもてたネといへば先□□□□ひでも夜とも咄しご
へしてひとつに寐てゐた物がもてたると獨り捨置れ
たはふられた様な物也そこで先の女郎が朋友の手前
を飭り述懷をいふとふられたと思はれ(るカ)から
もていでももてた顔をする是江戸者女郎買に行人の
習ひ也是は見へ坊と云てまけおしみを云なりさする
時には何がな女の氣にいる様な咄しをして御機嫌を
とるにしくはなし手水にも行ずげら／＼笑ふて聞居
るこふした翌日はもてなんだ朋友にさもこのもしく
思わるゝといふだけが徳也その上ア、夕べの女は嬉
しがり上つておらア寐かけるとこそぐつて起したり

何か咄しを仕かけて一寸も寐させぬからけふは睡くつてならねへなど、受させるやつ也難じる人又曰そふいふ意味深長なる事も有べしされどもおれは上方の方が面白ひ江戸の事は聞てもとんと好もしくなひと答へて誰しもそふした物なれど郷に入ては郷に隨がへにて彼地に馴て見ると廻し床有と思へば猶々意氣張有ておもしろく一寸も狂言を透さず幕なし狂言を見せる格でさまゝあやなし外の客の間へやらぬさんだん頗る面白み有て大かた是にて身上を叩き上る事としるべし何分若盛りには一遍は疑る事も有べし物の哀は是よりぞしるとあれば捨られぬ物なれど跡先を辨へ段々と年がよるとんとおもしろふなく此女に惚られふとも通人粹人じやとほめてほしうもなく勤をひかせて女房にせふとも思ふ望なく本によん所なき附合で女郎藝者を合手に遊んでいと茶屋場で敵討の望のない由良之助が遊んでいるよふで正味といへば金を大小つかふだけが損也錦城が書れし梧窓漫筆の中に女郎買遊所狂ひをする人は金銀の冥加に盡る計でない物事が自由過るゆへ果報を取越し後流浪をする也と其譯は酒といへば酒此肴はいか

ぬこふいふ物といへば肴を取かへ此女よりあの女など、注文に應じて歸りには泥草履でもちよんと直してくれるから畢竟場所こそかわれ將軍様とも同じ身持ゆへ奢侈僭上とて物の十分過るを天より惜み給ふゆへとぞさも有べき事學力の有人の考は又妙也秋成が辯物語には京攝にて金持の粹な息子藝子や女郎に腹賣て程のよい事揃へをして可愛がられるつもり所其藝子や女郎衆が役者が好でその方へはけしからぬ心底を盡すと聞出しおれが是程にして遊ばすのに役者を身にしておれを皮するとは心得ぬ鬢附屋じやの李冠のといひ男な役者は死んで今の役者らから見るとおれの方がよつ程よい男じやのになアと段々深ふ聞合せたら其息子より役者の方が金を餘計つかふよつてじやと書てあるが是らは試に動かぬ穴にてその役者さへ今は中々部錢貸や大法師よりも勘定高ひ時節若ひかたゝ能々慎んで必ず程がよひおかたじやの粹なおかたじやのいわれ給ふな昔はよいお人じやが不仕合な誰それはいまゝしい憎てらしいやつじやが仕合よふて金を持っているといひしが今はいまゝしい憎てらしいと人に憎まれてゐる者にねつ

から金がない人多き時節それによいお人じや結構なと云れては流浪してくへぬ筈と心得給へ嘘ではなし

訛の惣評

此餘に東海道岐蘇路を始め三都の近國近在の事を言
出せば中々おかしき事詞の違ひ諸品の物の唱への替
る事夥しくあれども此書は三都の事を一寸舉て云て
見たるのみなれば何事も略していはず上方の詞の古
き惡口に「大根とはねべき文字は刎もせず刎す共よ
きごぼう牛房ゴンボウともいへば上方にても云誤る事は甚多
し江戸の人がそうしてからこふしてからと云を聞て
は京攝者は口まねをして笑ふがこつちの者にいはす
とよつてと云そふしたよつてこふしたよつてと云也
よつてとからとはどちらが古ひ詞じやと問はれると
からの方が古言也文屋の康秀の歌にも吹からに秋の
草木のしほるればと有吹よつてとはマアいはぬから
はからの方道理に叶ふといふべしさり乍ら江戸は土
地ひらけてより新らしきゆへ諸國の田舎詞計を集め
しゆへ賤しと有て上野の宮様は前方京より鶯を取よ
せ上野の山へ數千羽放し給ふ京の訛りのない鶯の種
が今に残つて代々上野の鶯は妙音じやとも云ひ又雪

中庵嵐雪は俳諧の席にて人の句のとり渡しに訛りが
有ては口惜いと京大坂へ三四年も詞直しに來られた
ともいふ増て中興淨瑠璃の宮戸太夫は江戸産なれど
上方で詞直して常の詞にも江戸の訛りは一寸もない
と感心させる名人も有然らばどう云ても詞は京攝が
能いに相違なく江戸詞は悪いのではない江戸でも貴
人高位は勿論眞の江戸産れの身を持た人は詞に餘計
のかわりめはなき物也我等長らく彼地に居たれど終
にそらつかふた事なし京攝にいる折も同じ詞にて贈
答しけりまして芝居の正本など書にも江戸詞には書
ぬ也それでも通るから也予が知る聾の畫人浪華の豪
富の供をして身延か江戸日光あたりを見物して歸國
せしが一寸も訛なし聞ぬからはいはぬ筈也是程正直
なるはなし五福子の書に曰日本を人間の體にたとへ
ていはゞ五幾内は胸腹にして四境へよく通じ安く又
何れの地の詞風儀にても移り易し江戸へいつても長
崎へいても一二月かの地にいればいつしか移り染
る他國の人は然らず幼年より京大坂へ出て居る人に
ても國訛り出て直りがたし然らば江戸より東は頭の
如く紀州と越路は兩手に屬し中國四國九州は腰より

脚共譬はいいかにとある最なる説也予又先年浪華の
 或大醫に戯れて難問しけるには京師は四神相應の地
 にして王城の地なれど時々地震大雷の災あり東武は
 繁榮都會の地なれど常に風強く出火の災あるはいか
 にと大醫答へて京の地震江戸の失火人間の體にてい
 はゝ脈處也と大笑ひせしが五福子の譬へによく似合
 ふたりける戯事を述るもふと吾妻の家づと云書を
 見るより思ひ付て俗々たる事乍ら文を飾らず有のま
 ゝに筆に任せて婦女子の夜話の一笑共成れかしと書
 記す事になん

黒川眞道 校訂
 水谷不倒

西澤文庫
 皇都午睡三編下の巻終

明治三十九年四月二十日印刷

明治三十九年四月二十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者
本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所
東京活版株式會社

大正二

音成寺

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5038